



日本随筆大成

第二期 巻六

日本随筆大成第二期巻六

収載書目

梅翁漫筆 著者不詳
櫻の林 岩政信比古
浮世絵類考 山東京傳
笈埃随筆 百井塘雨
玲瓏随筆 釋澤庵
十八大通 三升屋二三治
本朝世事談綺 菊岡沾涼

宮内省御用掛 文學博士 關根正直先生

東京帝國大學史料編纂官 文學博士 和田英松先生

宮内省圖書寮編修官 田邊勝哉先生

監修

日本隨筆大成

第二期第六卷目次

梅翁隨筆……（一）
櫻の林……（一一七）
新增補浮世繪類考……（一五五）
附戲作者略傳
笈埃隨筆……（二九五）
玲瓏隨筆……（五六九）
十八大通……（六八五）
本朝世事談綺……（七〇一）

日本隨筆大成第二期第六卷

凡例

本集には、梅翁隨筆、櫻の林、新增補浮世繪類考、筱埃隨筆、玲瓏隨筆、十八大通、本朝世事談綺の七種を收む。

梅翁隨筆　八卷　著者不詳

本書は、主として著者が見聞せる寛政年間江戸に於ける巷談途說を記し、併せて諸國の異事をも擧げたり。その內容は、卷一、祿位保ち難き事、九州山童の事以下十九條、卷二、堀之內下谷兩祖師の事、切捨切損ぜし事以下十條、卷三、霧島山逆鉾の事、枸杞忍冬功能の事以下十七條、卷四、目黑在狂人の事、小佛峠怪異の事以下十九條、卷五、二條御金藏盜賊の事、加賀にて天狗を捕へし事以下九條、卷六、深川にて女敵打の事、寶の箱を授りし事以下十三條、卷七、蝦夷地開闢の事、三人島并安南漂流人の事以下六條、卷八、桑名領山海の事、白晝に飛物の事以下十二條あり。所收本は無窮會神習文庫藏本に據れり。

櫻の林　二卷　千家尊澄

この書は、尊澄と、その師岩政信比古との問答を筆錄せるものにて、問は草書、答は片假字にて書き分けたり。合せて二十八卷ありし中より、拔萃して二卷となしたるものなり。一の卷には出雲大神の御

事、初山踏、その他文學、史學に關する條項等合せて十五條あり。安政二年市岡和雄の序、撰者の自序、出川道年の跋あり。書肆は見返に名兒屋書肆萬卷堂製本と記せり。二の卷には出雲國安來鄕、神社を尊み奉る事、天神壽詞を祭主ならぬ人の奏したる事等十四條あり。安政三年植松有園の序、西村淸臣の跋あり。書名は、卷一の末なる吉川景明の附記に、「さくらの林と名づけ給ひたるよしは、十一ノ卷に翁よりうけたまはれる條々をかきあつめて、櫻の林とものしたるを、なほおむかしき名のあらんにはきかまほしうなむ。そも〳〵故梅舍大人よりをしへみちびき給へりしことゞもをかいしるして、梅の名殘香、續梅の名殘香など名づけたるによりて、翁の櫻處の號をしるべにて、さくらのはやしよろしからむとて、こゝろしらびにぞ「ヨロシク候ハム」とあるにつきてものし給ひたりとぞ」と見えたり。

撰者尊澄は、千家尊孫の男なり。松壺と號す。明治二年出雲大社御杖代兼國造職を襲ぎ、從五位下に敍せらる。尋で神祇官の命により出雲大社の神事を掌り當職の上班に位す。四年十二月華族に列し、更に從五位に敍せらる。十一年(二五三八)八月歸幽す。年七十九。國學を末族千家俊信に學び、俊信死後は、その高弟岩政信比古、又は本居內遠の指敎を受く、著書は本書の外、歌神考、神壽詞後々釋、松壺文集、松壺歌集等あり。就中日本書紀に關する質疑應答は十數卷の多きに達すといふ。因に記す、岩政信比古は櫻處と號し、周防國玖珂郡新庄村の人にて、吉川家の臣なり。著書はとゆけの御靈、本末歌の解、物語詞林、まなびの費、てらつゝき、古事記傳異考等あり。

新增補浮世繪類考　二卷　笹屋邦敎等

岩佐又兵衞、菱川師宣等を始めとし、松川半山に至る百二十一人の浮世繪師の略傳、畫作を記す。その初に系譜、肖像を掲げ、附錄に大津繪佛像の說を記述せり。もと浮世繪類考は、笹屋邦敎の編にして、式亭三馬の補記あり、尋で寛政十二年更に邦敎自ら追加して附錄とす。これ本書の始なり。次に享

和二年、山東京傳これに追考を附し、三馬又補記を加ふ。その後天保四年の冬、根岸の隱士無名翁、以上の三部を輯めて一部となし、洩れたるを加へ、續浮世繪類考と題す。次は弘化元年齋藤月岑再び補ひて、增補浮世繪類考と改題す。慶應元年に至り、龍田舍秋錦更に脫漏を補ひ、體裁を改め、新增補浮世繪類考と題して刊行す。本書即ち是なり。

附錄戲作者略傳幷肖像は、安政三年十二月下旬、江都日本橋邊外西街道人の序に云、是の小傳は、或人に借りえし戲作者撰集の中より鈔出せる也、（中略）且題號の名目は不相應とし、私に略傳と改むるとなむ」とありて、山東京傳、式亭三馬、曲亭馬琴、十返舍一九、柳亭種彥以下百餘人の略傳を記せり。著者蘆屋邦教は、其の姓を知らず。通稱を新七郎といふ。江戶本銀町一丁目に住し縫箔を業とす。その他の事蹟詳かならず。

山東京傳の略傳は、第一期卷八所收「骨董集」の下に記述せり。

式亭三馬は、名は久德、字は泰輔、通稱は西宮太助、式亭三馬はその戲號なり。外に本町庵、遊戲堂、洒落齋等の號あり。江戶四日市の書肆にて旁戲作を業とす。その著作は滑稽に長ず、又洒落本數種あり。文政五年（二四八二）閏正月歿す、年四十八。

隱士無名翁は、溪齋英泉と號す。本書に詳なり。

齋藤月岑は俗稱市左衞門、名は幸成、號を松濤軒といふ。世々神田雉子町の名主たり。維新の後、その中年寄となり、晚年に東京府の雇員となる。最も稗史野乘を好み、纂述する所多し。武江年表、聲曲類纂、東都歲時記等最も著名なり。又江戶名所圖會は祖父及父の業を繼ぎて刊行す。明治十一年（二五三八）三月歿す、年七十五、淺草法善寺に葬る。

笈埃隨筆　十二卷

百井塘雨

本書は、著者が安永の初年より天明の末年まで、身を六部の姿に窶し、笈を負ひて諸國を遍歷し、（その足跡の印せざる處僅に六七ヶ國に過ぎずといふ）、到る處の勝地絶景、或は奇談珍說方言等まで、巨細に記したる漫遊記なり。未だ曾て刊行せられざる珍籍にして、かの有名なる橘南谿の東西遊記もこれに據る所多しといふ。所收本は無窮會神習文庫本に據り、帝國圖書館本（この書八冊にして、文化元年鄭然寺大淳行徹顧嘯月菴宗賢の序あり、本文中後人の補記あり）を參照して增訂せり。

著者曉雨は、京師室町の豪商なり。通稱を左右二といふ。博く和漢の書に通じ、文才に富み、又和歌を能くす。遊歷を事とし、一生を風雅に送れり。寛政八年の春、醍醐の花見に行き、家に歸りし夜、頓に歿す。

玲瓏隨筆　四卷　釋澤菴

本書內題には、澤菴和尚玲瓏隨筆とあり。その說く所も、と佛教の見地より出づといへども、必ずしも佛に偏せず、老莊諸儒の書をも採用し、人の利害得失を論じ、懇篤親切に教訓したる隨筆なり。大德寺大綱の序あり。奥附に安政六己未年初冬新鐫とあり。書肆は京都三條通堺町出雲寺文治郎、江戸日本橋通一丁目須原屋茂兵衛外三名、大阪今津屋辰三郎外四名なり。

著者澤菴は　武藏品川東海寺の開山なり。名は宗彭、澤菴はその字なり。俗姓は平氏、天正元年十二月朔日但馬出石村に生る。十歲邑の唱念寺に入りて樂譽上人の侍童となる。十四歲勝福寺に入りて禪を希先西堂に受け、戒法を授かり、名を秀喜と呼ぶ。その後、大德寺に至り、園鑑國師に見え、諱を改めて宗彭といふ。慶長十二年三十五歲にして、大德寺の第一座となる、八月和泉の南宗寺に住す。元和五年將軍秀忠、京都所司代に命じて正隱の大德寺視篆の東照公制法に反するを責む。澤菴之を聞て京に赴き、諸老に代りて古法先規を錄して幕府に呈す。寛永六年二月、命により玉室、月江と共に江戸に出

て、訊問を受く、寺法を執りて動かず。爲に羽州上ノ山に貶せらる。九年赦を蒙り江戸に歸り、神田廣德寺に寓す。十一年命によりて大德寺に歸る。十四年江戸に赴き、十五年幕府地を武州品川に相して東海寺を創開す。明年幕府澤菴を請じて第一世となす。晩年東海寺中に春雨菴を建て之に隱居し、春翁また暮翁と號す。正保二年（二三〇五）十二月十一日衆の強請により遺偈として夢の字一字を書し、筆を投じて寂す。壽七十三。東海寺の後に葬る。詠歌大概音義、大燈國師年譜、理氣差別論等の著あり。

十八大通　一卷　　三升屋二三治

本書は、一名を御藏前馬鹿物語と稱す。正德年間より、寛延、寶暦、明和、安永、天明、享和、文化、文政、天保年間に亘り、大口屋曉雨を始め、江戸にて驕奢を極めたる十八大通の事を記したるものなり。弘化三年成る。帝國圖書館藏本に據る。續燕石十種にも收めたり。

著者二三治は、江戸の人なり、別號を環齋閑人と稱す。歿年を詳にせず。

本朝世事談綺　五卷（三冊）　　菊岡沾涼

この書表題には、近代世事談とあり。今内題に據りて揭ぐ。内容は卷之一衣服、飲食、卷之二生植、器用、卷之三言語、卷之四歳時、文房、卷之五人事、雜事等に分ち、永享、文明頃もしくは天正、慶長以來の事物に就いて、その起源因由を記せり。書名は、後序に「近き世の事を談じて綺をなす、其まゝに題號とす」と見ゆ。享保癸丑冬至日浪花松永陳德の序並に著者の後序あり。奥附には享保十九甲寅正月排行、天保七丙申九月求版、青林江戸小傳馬町三丁目丁字屋平兵衞、大阪心齋橋筋博勞町河内屋茂兵衞とあり、溫知叢書第三卷に收めたり。

著者沾涼は、名は房行、通稱を藤兵衞（一に藤右衞門に作る）といふ。伊賀上野の產、その地名菅岡を

以て族とす。江戸に來り、神田鍛冶町に寓居す。初め芳賀一晶の門に入りて俳諧を學び、南仙叟と號し、次に崔下菴と改めしが、その後内藤露沾の門に入りて沾涼と更む。諷詠の餘暇、和漢の群籍を究め著書多し、その主なるものは、本書の外に、俳諧綾錦、俳諧故事談、日光名跡志、日本行程記、諸國里人談、本朝俗諺志、江戸砂子、その他十數種あり。延享四年(二四〇七)十月二十四日歿す。年六十。淺草誓願寺に葬る。

梅翁隨筆

梅翁随筆目録

巻之壹

一祿位保ち難き事　七
一牝鷄晨をつぐる事　八
一山東京傳が事　一〇
一薩養茶屋運上之事　一一
一木朝珖珊瑚珠の事　一二
一上州おさき狐の事　一三
一流行落書の事　一四
一眞宿師御仕置の事　一六
一本郷菊坂敵打の事　一七
一鱘を仕留し事　一九
一森本吉左衛門御仕置の事　二〇

巻之二

一塁の内、下谷南祖師の事　二一
一岡部五左衛門家來喧嘩の事　二三
一日下部の侍さそひ出さるゝ事　二五
一和泉屋が母横難の事　二六
一金銀出入濟方の事　二八
一九州山童の事　七
一見付天神靈驗之事　八
一狸、下女を犯す事　一〇
一化もの芝居見物之事　一一
一坂邊能登守捌の事　一二
一京都郭公の事　一三
一本所追落しの事　一五
一所司代與力同心の事　一六
一大八車小荷駄馬往來の事　一七
一椙田稻荷利生の事　一八
一切捨切損ぜし事　一九
一雷除撞り玉の事　二二
一蜷川屋敷怪ある事　二四
一妖怪物語幷夜女に化し事　二六
一仕事師の女房密夫の事　二七

一駿府第六天小屋の事　二九

卷之三

一霧島山逆鉾の事　三六
一午年大火の事　三八
一材木屋思はず隱居せし事　三九
一無理心中の事　四一
一阿蘭陀人參府の事　四三
一京極家生駒家金毘羅の事　四四
一品川沖へ鯨寄し事　四五
一奇特者召出さるゝ事　四六
一感應寺富再興之事　四八
一塙宗悅中間の事　五〇

卷之四

一目黑在狂人の事　五二
一聖堂御造營の事　五四
一京都大佛炎上の事　五六
一男女體を變ずる事　五七
一人を抱へて怪有し事　五九
一道二物語の事　六〇
一龜崎大鮑の事　六一

一今はむかしの事　二九
一枸杞、忍冬功能の事　三八
一松平田宮方へ狐付來りし事　三九
一奥州淺川一揆の事　四一
一戸田筋御鹿狩の事　四二
一小兒前生を語りし事　四四
一野ぶすまをとらへし事　四五
一薩州ノシロユ村の事　四六
一仙女傳の事　四七
一瀧の口にて打果す事　四九
一小佛峠怪異の事　五三
一病犬に喰れし妙藥の事　五五
一傳通院蝮蝎の事　五七
一盗賊の覺悟いさぎよき事　五八
一傘張長者屋敷の事　五九
一寛永の頃道中賃錢の事　六一
一出羽の影波の事　六二

一大槌小槌の事 六二
一潮の滿干高下ある事 六二
一賣女制禁の事 六三
一御小納戸御吟味の事 六三
一權七といふあだ名の事 六四
一御堀端へ竹をうゑる事 六四
一箱根の關守情ある事 六五

卷の五

一二條御金藏盜賊の事 六八
一加賀にて天狗を捕へし事 六九
一篠崎きつねの事 七〇
一別世界へ分入し事 七一
一青山火事の事 七二
一町々木戸にて往來を改る事 七二
一公家衆御馳走入用減じ方の事 七三
一星多く飛ぶ事 七三
一角力、芝居盛衰の事 七四
一鰒いましめの事 七七
一鎮後根張地藏の事 七九

卷の六

一深川にて女敵打の事 八〇
一寶の箱を授りし事 八四
一信州にごり川の事附武州年とらず川の事 八五
一浦島物語の事 八六
一水領豐前人數高の事 八八
一奉公人の事 八九
一緣物の事 九〇
一大師緣日朝參の事 九二
一吉田在鄕商の事 九二
一駒留石の事 九〇
一吾妻森稻の葉の事 九二
一九段坂星霜士手の事 九二
一鎮市といふ乞食の事 九一
一見付宿泥濘廣小路の事 九一

卷之七

一蝦夷地開闢の事　九四
一三人島并安南漂流人の事　九五
一星野久庵大幸の事　九九
一元日立春の事　九九
一草臥ぬくすりの事　一〇〇
一三圍稲荷開帳の事　一〇一
一天狗六兵衞が事　一〇二
一大坂番場辻番人盗賊の事　一〇三

卷之八

一桑名領山海の事　一〇五
一白晝に飛物の事　一〇五
一聖堂講釋の事　一〇六
一遠州鞍形石の事　一〇六
一飛驒の平湯の事　一〇七
一日本諸宗寺數の事　一〇八
一缺陷世界といふ事　一〇九
一淺草天王町敵討の事　一一〇
一女人富士まうでの事　一一一
一御夢想を蒙りし事　一一二
一懐中へ石入し事　一一三
一虎薬師薬袋の事　一一三
一長壽の事　一一三
一學問藝術の事　一一四

梅翁隨筆　巻之一

著者不詳

○祿位保ち難き事

一君と祿と位を得るはかたき事なり。されども得る事のかたきより、保ちて失はざる事は、尤もかたし。祿位を得る事は、幸ひしても得る人あり。祿位を得てうしなはざる事とてなければ成がたし。幸有て得れども、德なくして失ふひと多し。ゆへに財祿ある人は、德行をつゝしみて、其德位を一生たもつやうにこゝろ懸べき事なり。賢才有ても不幸にて、一生祿位を得ざるあり。是世の人その賢愚なるをしらざるゆへにて、我恥にはあらず。祿位をたもつ事能はざるは大に恥なりと知べし。

○九州山童の事

一九州西南の深山に、俗にいふ山童といふものあり。薩摩にも山の守といふ所などにおほし。これをたのみて大木を運ぶ人の先に立行事をきらへり。先遣ひて後に飯をあとふ。はじめにあとふれば食し終り逸去なり。鹽氣あるものを嫌ふなり。飯を與へてつかへば、日々に來り手傳ひて、大に杣人の手助りとなる。もし此かたよりうち、又ころさんとおもへば、ふしぎにしりて祟をなし、其人發狂し、あるひは大病にのぞみ、あるひは其家俄に出火などし、種々の災害を起せり。此故に人みなおそれて手さす事なし。このものたゞ九州の邊界にのみ有て、他國にある事をきかず。あるひは冬は山にありて山童といふ。夏は川に有て川童といふ。しからば川童と同物なるやいぶかし。尤九州の河童は其祟をなす事大にして、他國と違へり。河狗ともいふ。又九州には狼なきが如し。たま／＼有といへども、其業弱にして犬にかみころさるゝなり。人の愁をなすほどの事なし。總じて諸獸みなよわし。たゞおそるゝは河童なり。四國の地には天狗おほく、別して伊勢は多し。高山に天狗あらずといふ事なし。か

ゝるたぐひも風土により、強弱多少有としられけり。

○牝鶏晨をつぐる事

一深川高橋の邊に、眞壁左織とかやいふ御旗本あり。天明二年の秋の事なりしが、鶏の雛出生し、その内に黒の牝いつとなくさし毛出來て、次第に羽色かはるに付て、とさか大きく成、後は美しきあぶら雞と成たり。不祥の事なりと申傳へしゆへ、深川八幡宮へ納めけるとかや。また半藏御門外に伊奈貴三郎といふ人有。寛政八年の頃、御番衆の方にて買ひし牝鶏、牡の時を告る度毎に、同じく聲を出しけるに、後には次第に聲の高く成けるとかや。牝の牡にかはる事も折々ある事にやあらん。牝鶏の晨するは家の亂るゝ兆なりと申傳ふれば、何事の前表にやあらん。災を除る事は德を治るにしくはなしと、兩家ともに深く陰德をほどこしけるに、眞壁氏は子息御役人となり、伊奈の總領は部屋住より御番入仰付られける。しかれば是を吉瑞といはん。されど非常變事は吉慶の瑞相にあらず。各身をつゝしみて德を治めしゆへに、禍ひ反して福と成たるべし。是を以て思ふに、妖怪の異變なきには、厚く仁に志して、よく陰德を施しなば、子孫繁昌ならん事は、少しも疑ふべき事にあらず。たゞ德のおさまらざるをおもふべし。

○見付天神靈驗の事

一東海道見付宿、江戸よりの入口に當驛の產神天滿宮への道あり。八月十日祭禮なり。其時夜七つ時に神輿をわたす。甚火を禁ず。燈はいふに及ばず、火鉢竈へも水をかけて、少しの火の氣を殘さず。また此時聲を出せば災ありとて、小兒は勿論、犬の類までも皆隣村等へつかはし、息をころして神輿のわたるをまつ。神輿の供をすれば災難をのがるゝといふて、氏子の面々はいふにおよばず。近郷の人々も多く出るなり。尤穢れをおそれ、供に出るものどもは、八月二日より別火して、六日に家の搩をはらひ、七日に濱へ出、潮を浴てより、散髮と成て髻をこよりにて結び、その印して不淨の者と物語

する事も禁ず。神輿の供には、麻上下羽織はかまにて出るもあり。または病人、その外心願有て裸にて出るもあり。又願ひをかけたるにもあらねど、輕きものは裸にて出るも多し。是はみな腰のまわりへ藁を卷きたる計なり。裸供の人毎年五六百人より少きはなし。此輩宵より社地へ集り居て、二十人づゝ拜殿へ上り、神輿の前にて代る〳〵に踊るなり。是拍子を強くふむを專一とす。神輿は六人にて持出る。最初持出す時は、甚重くして動しがたき程なり。皆代る〳〵踊るうちに輕く成、こゝろ安く昇出すなり。宿の中ほどに御旅所あり。夜中此處にて神輿をわたす。其時は足にまかせて急き行くを古實とす。神輿に色々の類の鈴多く付、其音甚高し。されば其音にて神輿のわたりし事を察し、家々にて燈を付る事なり。靈驗あらた成ゆへ、近郷の者一同に信心して、近頃此祭禮の供に出る人多し。翌十一日晝過、宿中を神輿わたる。本社へ歸る此時火を消むるにおよばず、男女うち交りて見物する事にて、いさゝかも其咎なし。夜中に神輿出る時は、宿の東西の入口へは繩を張、往來の人を留め、供に出るの外は、かたく門戶を閉て蟄居す。おしへにしたがはざるものは災にあふ事目前也。社領は五十石、齋藤主馬といへり。寛政のはじめ十日の夜、肥州の早追通し駕にて來る。宿役人ども繩ばりの外へ出迎ひて、當祭禮の仕來りにて往來を制する事を申述ければ、肥州の役人いひけるは、そのいはれも有べしいへども、我等急御用承りての旅行、私の事にあらず。當驛にて遲滯の事、追ての申譯に立がたし。たとひ災難をうくるとも止むべきにあらず。其上邊鄙の神主ども、愚癡文盲の妄語をはき出し、神威をかりて百姓をくるはす事多し。此事をかねて聞及居る事なり。是等も定てそのたぐひにてこそあらめ。是非々々通るべしと申ゆへ、則人足驛立驅行けるが、宿の中程まで行し處、駕の棒二つに折れ、駕も微塵にくだけたり。その身は別條なしといへども駕はなし。且は神の祟を恐れければ、本陣へ入、彼の修夜申付て、翌日の晝時過、當驛を出立せしが、彼もの肥州へ參着の後、金の幣を二本當社へ納めたり。則今本社の内にあり。又此天神へ七月十三日通夜すれば、十五歲以下のものども、

なしの根をきると申傳へし。本社はいふにおよばず。社内の樹の下かげまでも、近郷の少年明所もなしに參籠す。雨露にうたれ、土氣にふれても、虚弱のものも何のさわりもなし。その後は誠にむしを煩ふ事なし。このよし次第に聞傳へて、近年別して通夜する少年多くなりて、遠境よりも參詣おびたゞしくなりしとぞ。

○山東京傳が事

一此頃山東京傳といふて、當世本草双紙などの作をなして名高し。此もの二三年前より、京橋へ煙草入店を出しけるが、寛政七卯年五月二十四日芝愛宕の縁日に、山内にて安賣の引札口上を、書と文字とを交ぜて認め、はんじものにして配りたるが、大に世に行はれて、そのすり物に包みて煙草入を商ひし故、すり物を見んとて、京傳がたばこ入を遠方よりも買にやりて大に繁昌せしなり。其後よりも、いろいろ書にて繪解したる草紙など數多出たり。京傳が口上書、此作の要なり。いにしへより芳月書と書く事あり。全く夫より思ひ付なるべし。或としの暮に京傳が、

來年は〳〵とて歳暮哉

○狸、下女を犯す事

一小倉侯の神田明神下の中屋敷に、女隱居すみ給ふ。其附の下女の名は卯の、八月頃より行衞知れず。いかゞいたせしにやと過る處に、同年十一月のはじめ、長局の椽の下より手を出して、貝殼にて水をすくひのむものあり。皆々あれはとたち出れば、奥深く逃込ける。化生のものにこそあらめとて、役人へ届ければ、則人を入れてさがしみるに、椽の下の隅にかくれ居たるものを引出し見れば、八月失し下女なり。髮はみだれ痩おとろへて居たり。其仔細を尋るに、若衆三人に仕はれ、日々おもしろき事のみなり。其中に壹人はむつかしくて苦しき事も有し。食事は代る〳〵いろ〳〵のものを持來りて、毎日好味ばかり食し、何ひとつ不足なる事なしといふ。一體ふぬけと成て、言葉もさだかならなら

す。やう〳〵右の趣を聞とりしなり。されば早速宿へしらせ申べしとて、當人をも遣はしけるが、程なく死けるとぞ。宿は神田邊にて小酒をあきなふ者の娘なり。狸此屋しきには多し。まれに是等の事あるよし申者ありし。此女を見出せし後おもひ合すれば、八月已來神佛へ備へし品、または仕廻置たる喰ものなど、自然と紛失せし事有しが、是をぬすみて女にくわせ置けるにやあらんといひあへり。扨此事を見聞し女ども、また見込るゝ事もあらんかと、大かた暇をねがひけるとぞ。其後日々祈禱など種々執行あれども、化ものゝ出たるといふにもあらねば、そのしるし見ゆべき事もあらず。たゞ心ならずとぞ。

○葭簀茶屋運上の事

一江戸中所々の道端に出せるよし簀はりの茶見世、これ迄は運上にも及ばざりしが、此度一々吟味して、一日五文宛の運上納むるやう申渡されける。凡江戸中にて二萬八千軒にあまり、九千にも近しとぞ。この度の運上を出すに付て、灯をとぼす事をゆるされたり。此運上壹人にてわづかづゝの事なれども、凡毎年壹萬兩程の御益なりとぞ。

○化もの芝居見物の事

一寛政八辰年の春、中村濱野陰といふ芝居役者、道成寺の所作事、古今稀なり。大あたりにてしるも知らぬも見物に行きけるなり。しかるに本所割下水に住す服部市郎左衛門、五六人にてむかし目をかけし茶屋へ行、御時節がらにはゞかり、打絶て見物に來らずといへども　此度の大評判を聞、あまり見まほしくおもひ罷越たり　いつもの如く料理いたしくれよと申付て見物し、歸りもゆる〳〵酒宴し、ひらめのあんかけ、ことの外口に叶ひたりとて三枚まで出させたり。今日の入用は例の通り宿もとへ取に參るべしと申歸りけり。其後茶屋より屋敷にまゐりたるに、市郎左衛門は七年已前死去のよしをうけ給り、大におどろきける。實におもひ合すは、大ひらめ三枚ながら、頭も骨も少しものこさずきれい

に食たりしこそたゞ事ならず。服部が屋しきの事は、かねて沙汰ある事なれば、是もやはり猫またにても有けん。三兩あまりのもの喰つぶされ、全く茶屋の損となりたるとぞ。

○本朝玳瑁珊瑚珠の事

一玳瑁、肥州島原薩隅州藥島水の南海にあり。その龜わずかに尺餘にして、大なるはなし。故に甲薄く櫛につくりがたし。たゞ手箱などのかざりに用るのみなり。さんごじゆも紀州熊野の海中より出る。是も小さくして緒じめなどの玉につくりがたし。故に本朝に出るをしらぬ人多きなり。唐紙は薩摩にて製する。是は甚見事なり。將來よりはるか勝れたり。しかれ共價高直にしてうりかひに勝手よろしからずとて多く作らず。

○坂邊能登守捌の事

一坂邊能登守江戸町奉行仰付られてより大坂町中へ申付たるごとく、町々家毎に用水桶を軒口へ出させて、火事の時の備へとす。其桶へ町々の名を記させたり。是までは江戸にて生育たるものも、其所の小名をしらぬもの多し。捌は念入過たといふて、其末廣がり、科人多く出來たりとて、一同の評判よろしからず、其上諸入用諸運上坂部よりおこりし事多く、辰八月末八月（本ノマヽ）ある二日、此年のうちに、よし原、品川、新宿、板橋、千住等の遊所屋にて、出家をとらへたる事數百人、其內申譯立難くして、日本橋にて晒せし法宗の住持三十人は遠島となり、所化六十壹人は寺法の通り取計ふべき旨申わたし、其宗々の觸頭へ引わたしける。辰八月十三日板倉周防守殿宅にて此段申渡ける。爰に神田元誓願寺邊の紺屋張場のとなり米屋にて、今度明地へ土藏を建ける。しかれども大成藏にて、張場日陰と成るゆへ、今少し引下て建くれるやう、紺屋よりたのみけれども、米屋いさゝかも承引せず。段々取懸り出來せり。その上紺屋にて難儀するを、春屋どもわらひければ、紺屋の手間取ども安からぬ事におもひ、商賣のさゝわりにも成るすじなれば、願ひ出でしかるべしと申ゆへ、亭主捨置かたく申出け

る。坂部米屋を呼で尋るに、自分の地面にて御座候へば、藏を建るに外よりかれ是申す筋は有まじきよし申答へける。よつと紺屋の願ひは取上がたし。商賣のさゝわりならば家業改むべし。今金魚屋などしかるべしと申渡され、紺屋いろ〳〵と申せしかども承引なければ、めいわくながら歸りて此よしを申ける。或人のいふ、此御捌おもしろしとて、頓て金魚屋をはじめ、米やへ斷、隣の土藏の根際より穴を掘り、水を絶間なく入ければ、忽ちとなりの土藏片下りに成て、持つべきやうなければ、一二間引下げ、普請仕直しける。依て紺屋のはり場のさしつかへなく事濟たりしとかや。

○上州おさき狐の事

一上州におさきといふ獸、(本ノマヽ)人に取付居るなり。この家の血すじを引たるものは、いかにすれどもはなるゝ事なし。此の血筋を切屋ものといふ。緣組など殊に吟味する也。此血筋にあらずとも、その家の道具を外の家へ入れば、則おさき付添來るなり。食を毎日あたふれば害なく、怠る時は差別なく喰盡し、若いかりをはつする時はいろ〳〵の仇をなし、果はその人の腹内へ入て、終に喰ころすといふ。されば傳へてその筋を嫌ひ恐るゝ事甚し。しかるにその血筋の者にても、江戶へ出れば忽ちおさきはなれて、少しも付添したがふ事能はず。關八州の司たる王子稻荷有ゆへなりとて、上野にてはいひ傳ふといへり。

○京都郭公の事

一今京洛中には郭公まれなり。市中にては聞事なきとし多し。夫ゆへに洛西櫻木原、沓かけの里、逢坂の里、此邊りへほとゝぎすを聞にとて都の人出るなり。此處壹里計山重りて林樹繁茂し、常に霧深き幽谷なり。丹波の龜山への道にて、是までわざに聞に行なり。是ばかりにても、今洛中にほとゝぎす少きをおもひやるべし。然るに時鳥名をも雲井に上る哉、と連歌ありしころは、皇都多く啼けるにや。

○流行落書の事

一此頃江戸のはやりもの
小額こして拍子染
大胴亂に白茶柄
京桟留に薄色足袋
諸藝の見分むだ騒
免許目録金次第
昨日の立身今日不首尾
御番御免で小普請入
撫付天窓の御役人
惣拜借に年賦沙汰
當時の立身緣次第
無緣でならぬは御番入
今では御趣意に取締
中から下に錢はなし
掛金溜る御奉公
隱居風聞聽違
草臥足の廻り衆
能なし小普請息子株
內に碁將棊酒もあり

長大小にあじろ笠
麻看板に藁草履
御既糸に麻材織
軍學皆傳惣免許
武藝の先生御役替
替りの早い御役人
剃下奴の御小納戸
天狗咄に棄捐さた
役人四時差控
往古の役替金次第
緣有空氣は御　納戸
明和諸向は御儉約
唱へは替れど金の事
大町人と御役替
賢者も貧では不評判
江戸中見廻勤仕並
帳面張札辻番所
俳諧十種香花の會
植木唐鳥軍書講

いづれも手弁で六限り
又は四時御役人
舊惡すゝぎの古免許
應對定日惣稽勤
出家浪人儒者揚り屋
後世古法醫師問答
詩會會讀むだ咄し
奥儒御吟味惣體に
高低有のは植付場
有は殘らず長屋住
町家は裏迄數寄屋風
引なし札付古道具
千社の額札みな石摺
扨又町内減じ方
家賃年賦は矢の如し
切みせ運上二割まし
大みせ殘らず再廻り
家主番屋木戸の番
味噌醬油みな高直
後世やぼだひかとひやうかなし

連中不レ殘若隱居
再勤望は加らず
近所のむす子へむりおしへ
お蔭で武藝の御世話役
朱子學古學いぢり台
戲夜著述犬おどし
聖堂御吟味十五以下
明地は殘らず惣的場
燒後の門に屋根はなし
大名旗本假玄關
安うり引札せり呉服
團扇繪盡し判じもの
七色茶漬に手打そは
七分の積金藏が建
四文の運上五文宛
田舍許みせ大當り
地主迷惑道ぶしん
店賃帳面火の廻り
安うてこまる米相場

此落書は、文の有人の作にも有ねば、これらは見所もなしといへども、うつり行世のかたり傳ふ便りなきにしもあらず。よりて其意を爰に記しぬ。牛込の太田直次郎が戯れ歌に、

世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶといふて身をせむるなり

曲りても杓子はものをすくふなりすぐなやうでも潰す摺子木

孫の手のかゆき所へとゞきかねあしのうらまでかきさがすなり

○本手追落しの事

一卯七月頃より、本所邊騷々敷く、往來のものを剝取よし風聞有。然るに小普請小栗茂十郎方に居し無宿仙藏といふもの、奉行所へめしとられしより、仔細あらざれば追落し、頭取小普請大場幸次郎、是は部屋住より召出され、近頃まで御番衆なりしが、家督後引込しもの也。茂十郎弟小栗半藏張本たるに依て斬罪、松浦佐市郎、竹田菊之丞、小栗茂十郎は、其咎に依て遠島改易追放等仰付られ、其外一件のものども、辰六月二十三日奉行所におゐて、夫々申渡されけるとなり。

○藏宿師御仕置の事

一小普請組駒之丞養父佐野十左衞門、大御番頭彌左衞門總領中尾宇右衞門等申合て、極貧なる御切米の面々へ、高利の金を貸遣はし、返濟の節に至りて、其者共ら藏宿へ相越、手代を呼出し、無體に用金を出させ、元利は己が方へ引落し、掛金はそのものへ遣はしける。若札差手代十分に金を出さず中斷る時は、不法の事のみ多し。果は馬上にのせてせめ打擲する事度々なり。世上に藏宿師と稱して、後には此ものより金をば借るといへども、是へたのみて藏宿より金を借され、半分は禮金として遣す類も多し。其上十左衞門、宇右衞門に手先のものども大勢有て、手わけし藏宿より借倒事數度におよびければ、札さしども願ひ出けるによつて、御吟味有て十左衞門、宇右衞門追放、一件のめん〳〵夫々に辰七月二十三日奉行所におゐて申渡され、藏宿師の名目は絕たり。

○所司代與力同心之事

一京都所司代與力同心、昔は所司代のかはる度毎に、家を改て退、新役上京して又元の如くに勤仕する事なり。牧野河內守所司代の節、無益の事也とて、以來は其まゝ居置居る事に極りたるより、今の如き御譜代席也と高ぶるなり。此譯あるにより、そも河內守家筋丹後田島より參覲往來の節々、所司代與力并同心ども總代として壹人づゝ、田邊公の壬生屋敷にて、晝の時機嫌を聞に出る事なり。

○本鄉菊坂敵打の事

一本鄉菊坂の蕎麥屋、妾を娘分にして同町の湯屋へ緣付しが、其後も密通するよし、たれとなく沙汰しければ、町內の若ものども、湯屋に離緣すべきよしなどにいひけれども、我こゝろにあやしとおもふ事もなければ、其まゝにて月日を送りしが、元來湯屋取締なきものなりけるが、近頃よからぬ遊びにこゝろうつりて、其身をもち崩し、株を賣て外へ引越、あきなひをはじめけれども、仕なれぬ事ゆへ、利なくして終に其金をもうしなひ、くらし兼けるゆへ、そば屋世話をして、また同町の裏屋へ置、少しづゝ心付もいたしける。されど取續出來兼るゆへ、夫婦相談のうへ離緣して、湯屋は田舍へ引込、女はそば屋へ引取しが、內に置ては家內によからぬとおもひ、外へつかはし置けるに、是は二三年已前の事なり。扨此度彼湯屋江戶へ出、本鄉へ來り、古鄉なれば友だちかたにて酒宴して、過し事どもかたり出しけるが、我女房は離別とすると、其まゝそばやのかこひものとなりし事を聞、全體かくなすべきために緣をきらせしなり。皆そばやのこゝろより出たるよし申もの有けり。されは腹ごゝろに甚いかり、此まゝ捨置ては、我男たちがたしと、寬政十巳年五月十六日の暮過る、此日雨ふりて少しやみければ、たゝみたる傘の中へぬき身の脇さしを入れかくし、來りて見れば、折ふし男どもも見えず。亭主大釜の下に自身火を焚居ける所へしのびより、うしろより手拭にて口を割て押たふし、上へ乘て背中より脇さしを突通しける。こゑを上る事もならずして思ひのまゝに仕とめたり。此

時女房十六七の悴に灸をすへて居たりしが、何か物音する故、悴障子のやぶれよりのぞき見るに、刀を持て父を突居る體なればおどり出で、有合せたる蕎麥切庖丁にて敵の眉間へしたゝかに切付たり。敵は下より亭主の切けるよとおもひ、夫より脇ざしを拔取て、やたら切に二十四五箇所切る內に、悴は庖丁にて敵をきつたり。時に庖丁の柄ぬけて飛びたるを見て、敵ははじめて悴が助け來るをしりて、火におどろき拔身を携てにげ出す。女房こゑを上げて人ごろし／＼とよばけるゆゑ、下男はじめ近隣の人々おひ／＼に馳集りたり。悴は柄のぬけたる庖丁を拾ひとり、いづかた迄もと追かけ出るを、みな／＼かげより抱きとめ、敵は刄ものを持たり。その所へそのまゝにてゆきむかひては、本望遂がたし。疵付たる上はいかやうに逃るとも、即時に尋出し敵を取て遣すべしと、漸とゞめたり。さて此おもむき辻番へ出ければ、奉行所にても悴が志を感じ給ひけるとぞ聞へける。扨敵は菊坂を逃下りて、辻番所の手まへにてたふれける。番所のものの仔細を問ふに、遺恨ありてそば屋を殺害せし事、すこしもつゝまず申故、奉行所へさし出しければ、牢へいれられける。庖丁疵とは申ながら、孝子の念力にて切りたるゆへにや有けん。程なくこの疵にて死たるとかや。

○大八車小荷駄馬往來之事

一大八車、牛車、小荷駄馬、近頃みだりに成たるゆへ、御書付出て觸下し給ふ。却て小荷駄馬は貳疋きり續引、夫より十間程づゝも間をおき貳疋づゝ引樣にとの事なり。しかるにその如くせば、四谷通りの如く馬多くては、凡六時に大木戶邊へ來る馬、橫町々々より出る馬とたがひに禮讓謙退して、前書の如く間を置き步行時は、暮におよぶ頃、漸く四谷御門邊へ參るべきなり。其跡より追々引來る馬は、新宿、追分、淀橋、高井戶向寄々々に遲滯するとも、溜り居るべき所もなき程成べし。斯の如く滯らば、江戶中の掃除支へて、人々難儀に及ぶべしと申もの有けり。されども其差支もなきは、面々の勝手にはよき事なり。去ながら御書付を用ひず心得に牽にはあらずや。御觸の事をかたく守る心なく、

三日法度など申、御觸の事をかたく守心なく、三日法度など申習はす事はいかゞならん。都て御書付は、下の情を知て守りやすきやうに仰出され、有かたき事なりとある人の申よしを、翁咄しながら歎息せしを、若き人々はおかしき事におもひ居るなり。

○鰐を仕留し事

一志摩國鳥羽より二里ほど辰巳の方にあたり、浦村といふ所あり。當所富士權現の境内は、風景無双の所なりといへども、海道筋ならねば、其名さへしるもの多からず。若此邊に遊ぶ人あらば尋行て、其絶景を詠むべし。此村のものに淺六といふもの有。大坂に所用有て行、江戸廻舟の便船にて歸るとて、熊野浦へかゝりし時、海中に船すわりて、いかにすれども少しも動かず。是は鰐の見入たる成べし。銘々一品づゝ海へなげ入、鰐の其品をのみたるもの入水すれば、殘るものどもつゝがなく着船すべしとて、銘々投入こゝろみるに、淺六が投たる品をのみければ、是非なく海中へ飛入ける。去ながら此まゝにて死んもあまり本意なければとて、脇ざしを拔持て入けるを鰐一口に呑ける時、腹の中にて切先の當りし所を幸ひ、力にまかせて切破れば、難なく鰐の横腹を切拔ける。鰐は此疵にて死したり。淺六もはじめのまれたる時、鰐の牙歯刄の如くなるにて、所々破れければ手足動かずして、是も海中に死しけるとなり。

○椙田稲荷利生の事

一麻布笄橋に杉田五郎三郎とて、此ころは松平下野守組大御番なり。此稲荷靈驗あらたにして、まのあたり諸願成就する事、勝て計ふべからず。殊に此邊に住ける婆々利生を蒙る事有て、近頃引越居ける。されど其頃まではいまだ知るなし。寛政八年の辰の秋のころ、歴々の奥方と見えて、鋲打の乘ものにて供廻も有、人品よろしき侍五六人つれたるが、杉田かたへ來り、靈夢を蒙りて、婆々の祈禱をたのみに參りたりと申込たり。此方にては祈禱などゝいふ事は、ぞんじも寄らぬ事と斷りいふといへど

も、とかく靈夢の事なれば、いかやうにても可レ然たのむよし申さるゝゆへ、是非なく稲荷を拜ませ、腹をさすりて遣しけるに、其日より煩ひ格別こゝろよく、日を究て稲荷へ參詣せしに、全快有て御禮の奉納有。此時分より廣まりて參詣多く、望のものへは洗米遣すのみにて、外に祈禱などする事なし。信心の輩參詣すれば、婆々いなりへ伺ひて申聞するに、各申所違ふ事なし。御小姓組河野鐵三郎三男などは癡疾のものなりしが、此いなりを信じて全快せしかば、信仰のあまり、後は引越居るも同前にて、此いなりへ世話人の如くに成居たる。巳のとしにいたりて、いよ〳〵參詣群集し、番付を以て婆々をたのみ、洗米を貰ふ事と成。又大家よりは婆々を呼び寄せたのむゆへ、後には在宿稀になりければ、日を究めていなりの伺ひをなしにけり。去ほどに在宿日なれば、夥しく人集りて、婆々壹人にて廻りかねけるゆへ、爲方なく貳百人かぎりて、その日は斷りける。しかるに遠方より來るもの度々番外に成、むだあしする事多かりければ、其事より或日けんくわ出來て、是より無縁の人參詣する事を禁じられけるより利生のさたする人もなきが如くになりにけり。

〇森本吉左衛門御仕置之事

一御目付支配森本吉左衛門といふもの下谷に住り。三兩の持參金の子をもらひけるが、何卒殺て又外よりもらはゞやとおもひ、色々毒なるもの多くくわせけれども、此子生得すぐれて健成ゆへにや煩ひもせず。女房きん殊に惡みて、平日のとり扱ひ、近處にて見聞しものは、此子のために涙をながしける。しかるに巳の七月十日、此子をとらへ夫婦して蒲團につゝみ跡先を括り、五月の粽餅の如くにして、圍爐裏へ打込、夫婦連にて觀音へ參りける。天運の盡たる故にや。圍爐裏の火うつりありしが、ふとんへうつり燒出たり。此燒るを見付て、往來の人しらせ、近所打寄り集り戸をおし放しはひりて見るに、件の有さまなり。子へはいまだ火うつらねど息つまりてや死居たり。平日無慈悲の取扱ひは、近所存ぜし事なり。あまりの仕かたやと打寄り噂する所へ、こゝろなく夫婦連れにて戻りけれ

ば、押込め置て、此段支配へとゞけける。よつて吉左衛門は死罪、女房きんには遠島仰付られけるとなり。

梅翁隨筆 卷之二

○堀の內、下谷兩祖師の事

一下谷長遠寺の祖師は、近頃までは參詣する人もなかりし。寛政七卯年六月、此邊の人にて說法の時、長遠寺の祖師の由來を述ぶ。しかれども書物に寄て說のみ。其寺をば講師も知ずと有ける。所は下谷なりと聞しより、聽衆は祖師を尋ね拜まんとて、連中手分して、日蓮宗の寺每に由來を問ひけるに、六月十五日漸此寺へ尋ねあたれり。長遠寺とのみ覺居て、ちやうをん寺とよむ事は、門前町にても聞しらず。和尙に逢て由來を尋るに、說法にて聞所のごとく、しかるに此祖師を出し置時は、住持にたゝると申傳へて、入寺の時拜するの外は、錠をおろして開く事なし。當住は番町邊の御籏本青木氏の庶子也。右の手叶はざる故に出家して、此寺に居たりけるが、博學實行の上人なり。人々の信仰あつき心ざしを感じて、假令われらいか成美德に逢とても、望を叶へん事素より願ふ所なり。少しも恐るべきにあらずとて、厨子を開きて、連中に拜せしむ。是祖師大に流行する起源なり。夫より人々つたへ聞て參詣するに、靈驗日々にあらたかにして、我おとらじと群をなして繁昌の地となれり。世の人今堀の內(本ノマヽ)とゝなへて是あり。俄に繁昌なるをたとへし成べし。因に曰、堀の內妙法寺といふは、そのむかしは微々たる寺にて、草庵に彷彿たり。四谷新宿再び驛舍と成て、情も深きことのはな、花の顏ばせ咲初し頃より、妙法寺の張御符世に名だかく、是より御堂あらたに建立して、金銀をちりばめたる厨子に入りし祖師となりたり。其以前は厨子も几帳もなくて、祖師の像あらはに出居たりしが、いつとなく奧ふかくなりて、百疋の初穗を納めざれば拜する事なり難しとて、貧賤の爺婆歎くにより、寛政七年卯の夏開帳ある。是堀の內の祖師開帳のはじめなり。いよ／＼人々信仰にするにより

て、山門を建立し、堀の内道十八丁敷石をならべんと、講中すでに取拂、入口二三町は石を敷しが障る事有しとぞ、その石を掘捨し。山門を建る事も寺格による事なればとて、仁王を入るゝ事能はずして、山門崩れ次第に取拂ふべきよしにて、先其まゝに建置事を命ぜられたり。祖師の利生は彌増にあらたにして、繁昌の地となれり。元は碑文谷の法華寺に安置の本尊にして、法華寺は日蓮上人の遺跡にて、いはれある寺也。中古譯ありて改宗して天台宗となる。其節此祖師を妙法寺へ送れり。法華寺の祖師堂は今彌陀堂となれり。其節の仁王門今現にのこれり。仁王尊は安阿彌の作にて、此前ことの外參詣群集し靈驗ありしが、今は寂閑の地となれり。扨今堀の内のはんじよう料理茶屋軒を並べて賑ひける。雜司が谷鬼子母神はいつとなく寂しく成て、大なる茶屋どもゝつぶれて、堀のうちへ引移れり。神も佛も一たびは榮へ、一度は衰ふる世の理りをしらしめんための御方便なりとぞ。いよ〱信仰せざる人のなしとかや。

○切捨切損ぜし事

一本所にて隣の中間犬を殺したるを憤りて、其中間を貰ひ度よし申遣したり。色々わびをなせども承引せず。此よし中間うけ給はり參り度よししきりに願ふ。隣よりは是非〱もらひ度よし再三に及ぶ。兩方ともに申つのりとりあつかひ兼て、詮かたなく〱て中間を遣したり。隣の主人成敗すべしとて庭へ呼入、椽よりおりんとする透を見て、中間飛かゝり刀を奪ひ胸腹を突通し、足にまかせてにげ行ける。側に居ける家來、先づ主人を引起し介抱しけれども、深手ゆへつゐに死たり。此段親類中へ告ければ、内々にて取はからひ、跡目ねがひの相談なり。其中に隣より中間の仕置承り度よし度々のさゐそくに頼りけるとなり。

○岡部五左衞門家來喧嘩の事

一御小納戸岡部五左衞門登城之節、赤坂にて小出信濃守行逢しが、供のものさわりたるよしにて、小出

の手廻不知せずして、五左衞門が家來を打擲し、剩へ鑓を奪んとしける。夫までは又左衞門馬をひかへ居たりしが、鑓をとられては相濟ず。既に近年牛込御門外にて、水野左門町人に鑓を奪はれたりしを、心得違て後日の證據にせんために預け歸りし始末不束のゆへにや。御小納戸御免に成たり。的例ある事故に、五左衞門小出の供頭へ申ことはり、相手のものども切捨にせんと申せし故、小出の家來共分入て引分たり。此段五左衞門申達らるために、即刻登城して御小納戸頭取へ申届ければ、先方へ今一應申遣したる上、御屆さし出すべきよしにて、早々小出かたへ懸合けるに、留守居よりの答に、此かたには右體の義覺なきよし申越しけるゆへ、相手なき樣に成たり。五左衞門あと先なき事を申出たるやうになりければ、無レ據御吟味申立ける。依て信州家來其日供に出たるものども、合羽籠持までへ一人ものこらず奉行所へ呼出したり。相手もあら〳〵分りたれども、一通の尋の上、殘らず同道人へ預け歸さる。あまり大勢なる預け人にて、末々にいたりては番人よりも預り人の方多かりける。其翌日又呼出しにて、相手のもの五六人牢舍して、其外はゆるされけるとなり。

○雷除握り玉の事

一巳年雷度々にて、しかも一ツ二ツつよくなる時は、きわめて落るなり。鳴日として落ずといふ事なし。七月六日八時過より大雷大雨にて、七時過には雨やみて空晴たり。少しの內なりといへども、牛込わら店光照寺、三番町松野孫太夫、田安坂下鍋島伊豫守、麴町八丁目伊勢屋八郎兵衞方へも落たり。これ等はその證明らかなる所なり。其外市谷、小石川、小日向、駒込邊など、所々へ落たりといふ。此日番所邊より王子すじへ乘廻しに出、大塚波ぎわ不動の邊へ歸りし時、護國寺の境內へかみなり落しやうすなり。そのひゞき至てつよく、頭の上におちかゝりたるがごとし。それにおどろき馬は飛ともなく走るともなくして、かたはらなる古道具屋のみせへかけあがり、かざり置たる諸道具皿鉢類みぢんに踏くだきけり。此內にては雷の落たりとこゝろ得て、耳をふたぎうつぶしに成て居ける。

横目にすかし見れば、いまだ見世に駈まわり居るやうす故、猶平伏してくわばら／＼といふて居る。乘人は拍子よく鴨居を滑りしと見えて、其まゝ乘り居たるゆへ、一さんにのり出し、鞭をうつてその場をはづし歸りける。後にそのさたを聞に、家内のいふ。我かたへ雷落、そのさまを見るに、さながら馬のごとし。兼て聞およぶ繪などにて見たる形にはあらず。諸道具も多く損じたれど、怪我のなきを佛神の御助也とよろこびけると也。其後も度々つよく雷有し。その頃より雷除玉といふもの大に流行て、麻布長坂にうるを正眞也とて、みな／＼所持したり。これを掌中に握り居れば、雷そのあたりへ落ることなく、またなる時格別遠く聞えてこらへよしなど申ふらし、兒女抔尊びけり。

○日下部の侍さそひ出さるゝ事

一麹町三丁目谷日下部權左衛門の侍、巳七月下旬部屋に休み居けるに、夜中名を呼て戸を嚴敷敲くものあり。何人なるやと尋れば、その答はせで、しきりに呼ゆへ、そこきみあしく出もやらず、物をもいはず居ければ、其後音もせず寢入らんとする時、また來りて戸をたゝく事故。いよ／＼息をころして居ければ、此度はすつとはいりたり。見れば大の山臥なり。近寄所を物をもいはず、脇ざしにて稍ながら拂ひければ、其まゝ出さりぬ。又もや來ると怖しく、夜のあくるを待かねたり。夜明て後侍輩どもへ此よし咄しければ、大にうなされたるなるべしと、みな／＼笑ひぬ。其夕かた此侍座敷の戸を〆に行てより行衛しれず。不審におもひ近邊尋ねければども見えず。早速宿へ申遣し、欠落せしかとも推量すれども、衣類も常の儘なれば、いよ／＼不審にぞんじ居たり。四五日過てかのものゝ在所より、國もとへ歸りたるよし申越ゆへ、子細を尋るに、主人かたにて座敷の戸を建、夫より十露盤を置くとおぼへたるまゝにて、其後の事は覺へず、相州鎌倉在の山中に捨られ居たるを、其所のものゝ世話にて、在所へかへりたるよしなり。大御番七番組をつとめける石川源之丞は、麻布白銀町に住て、その娘十三歳の時の頃まで、四五年も以前の事なるべし、或日庭へ出たるが、そのまゝにて行方

しれず。所々尋けるに、翌朝木挽町よりしらせたるゆへ、人を遣し家來の娘分にして連來りける。其様子を聞に、何ものともしれぬものに同道して、いろ〳〵のおもしろき事ども見物せしと也。木挽町のものに問ふに、芝居の茶屋の庭に居たるゆへ、いかなる事にて爰に居るぞと尋しかども、答もわかりかねしゆへ、先休ませ置、正體になりてのち宿所をたづねて、源之丞かたへしらせたりしと也。

○蜷川屋敷怪有の事

寄合蒔田權佐、小川町屋敷召上られ、御用御取次西丸御側衆蜷川相模守へ下され、蒔田へは二合半坂にて屋敷下されけれども、間口狹くして長屋建がたければ、小日向御旗本屋敷五兵衞と相對替せり。則今住宅の屋敷なり。其時まで池と沼とも付ぬ濕地多かりしを、蒔田の屋敷となりてより、彩敷土を入れて、今の如く築上たり。扨蜷川相州小川町屋しきへ引移りしより、所々へ祈禱を申聞、また宅にも神巫山伏など出入して、讀經の聲絶る間なし。是は頃來怪しき事多きによりて也。などさたしつるに、相模守家來蒔田かたへ來りて、屋敷付にて何ぞ變りたる事はなきや。取扱ひかたにても有事ならば、内々承り度よしを申ける。しかれども蒔田家數代小川町に住しけれども、少しも變りたる事なければ、此よしを答へけると也。家主によりて怪しきこともあるものにや。世間に風說するごとく、相州の屋しきに怪有事は相違なき趣きなりと咄せしよし、蒔田の親類松平長門守の家來阿部和吉といふもの、直にうけ給はりたりと咄せしなり。

○和泉屋が母横體の事

淺草御藏前焰魔堂の隣に、いづみ屋淸兵衞といふ札さしあり。その母八十歲餘成しが、奥のはなれ家にて隱居して、下女一人めし仕ひける。夜中人殺し〳〵と呼ける聲しけるにぞ、ゑんま堂の和尙聞付て、本家へしらせしによりて、淸兵衞はじめ手代ども早々駈付けるに、戶をかたく〆置しゆへ、蹴はなして入て見れば、下女は火をうち付て居たり。隱居いかにと問に、何も變り給ふことなく。今よ

く寢入居給ふといふ。されども其體不審なれば、奥へ入て見るに、隱居は血にそみ居たるゆへ、大におどろき尋れば、夜中枕もとにて人音するゆへ咎めぬれば、たちまち夜着の上へまたがり、小刀をもつて突んとするゆへ、聲を上げれば薪を以て打擲す。老年の事なればいかんともすべきやうなし。迚も是迄の命とあきらめ、觀音を念じけるに、表のかたに人音せし程にたち退ぬといふ。早々醫師を呼て見するに、わづかの疵にて場所も能ゆへ、氣遣ふ事にあらず。されど老人の驚きし跡なれば、大につかれ出て、夫にて變あらんははかりがたしと、本道外科どもゆだんなく療治しけり。彼女は皆々馳付し節のがれ出んとせしを捕へ置、奉行所へ訴へたれば入牢せり。是迄一ト所に半年と奉公せし事なく、その先々にて皆盜み事にていとま出たり。此隱居のかたへも一月ばかり以前に置けるが、甚發明なるものとて、奥のものも表のものも譽ぬはなく、老母のこゝろに叶ひてめし仕ひける。巳九月廿一日より日本橋にてさらされたり。當年二十三歳にて、中肉色しろく、髮も長く、眼中すゞ敷、鼻すじ通りたる女なり。是等を外面如菩薩内心如夜叉とやいふべき。いづみ屋の老母危き難をのがれしは、是觀音の佛力にてこそおはすらめ。一たび御名をとなふるものは、すくひたまはずといふことなし。ましてや多年の信心を抽んでしものをや。ねひくわん音力時悉石殺害のおしへは、いかで空しからんや。いづみ屋にては、ます／＼觀音を信心しけるとかや。

○妖怪物語幷夜女に化し事

一本多氏の後室圓晴院といふ人、わかき頃六番町三年坂中程におはせし時の事なりしが、化物屋しきにて、色々あやしき事どももあり。夜更行燈のもとに並ゐて仕事などするに、側なる女の貞たちまち長くなり、又ことの外短くなり、或は恐ろしき顏になりて消失る事あり。座敷にて火のもゆるはめづらしからず。ある女わづらひて休み居けるが、其女むらさき色の足袋をはきて掃除せしかば、甚あやしく思ひながら、女の休みたる所へ行て見れば、矢張打ふして居けるゆへ立戻りければ、さうじ仕たる女

は見えず。かやうの事ども多くして、家内難儀するゆへ、加賀屋敷へ引移られしとの咄なり。是は我等度々承りし事ゆへ、こゝに記しぬ。是にて思ひ出せし事あり。明和九年目黒行人坂の火事とて、江戸中大半燒失せし大火事あり。其夜牛込若宮八幡宮の脇に住す加藤又兵衞が中間、市谷左内坂を通りしに、きれいなる女泣居たるに逢けり。やうすを尋るに燒出され行べきかたもなしといふ。しからば我かたへ來り一夜をあかし、しれる人の行衞を尋ね給ふべしといふ。やすらかに得心してつれ立來りけり。ひとり男のことなれば、さし障る心遣ひなしと、中間こゝろに大いに悦び、ともなひて部屋に入、圍爐裏の火を澤山にさしくべて、こゝろ及ぶだけ馳走しけるが、覺へず少し居眠り目覺しみれば、彼女も居眠ゐたりしが、口もとに長き毛の見ゆる如く成りしゆへ、目をうちひらききつと見れば、いつか古狸となれり。大睾丸を廣げて火にあぶり居るゆへ、己たぬきめよく化したり、打殺して汁の實にせんと打かゝれば、狸初て驚き窓より飛出逃去たりとかや。又兵衞今はやしき替して、一色喜間多の屋敷と成る。

○金銀出入濟方の事

一金銀出入濟方數年の事にて、元利夥しくなりたる向も多く、分限におうぜず、莫大の事なれば、裁許さし支あるを以て、寛政九丁巳年まで借用分金銀は、奉行所にて取上なし。九月より以後の分は嚴密に裁許すべきよしを、此年定められたり。

○仕事師の女房密夫の事

一神田に仕事師親分あり。皆々彼が方へ寄合て仕事に出る中に、壹人辨當箱を失ひ、誰か隱せしなるべしと尋れども知れざるにより、心不平なれど、相手しれねば爲かたなく、獨り腹立居たりし。今日は休むべしとて、近所の酒屋へ行て酒をのみ居たり。其側にて辨當をつかひ居るものあり。能みればまがうかたなき我辨當箱なるゆへ、彼者をとらへ尋るに、親の勘氣を蒙りよるべなきものにて、昨日より

食せずうゑたりしが、計らずかしにて捨ひしまゝ持來り食する也と申ける故、不便におもひ、今喰殘しの飯を我喰べきにも非すとみなあたへける。俄に思ひ出せし用事出來て、我内に歸るに戸〆りて留守の如し。兎角して入ければ、女房は密夫を引入れて置ければ、夫の歸りしを見て大に狼狽たり。此體をみつけ、おのれ不義者遁しはせじと聲高によばゝり騷ぐを聞付、近所のものどもかけ集り取扱ふ所へ、以前の酒屋より、たゞ今急に來るべしといひ越す。何用あると問へば、最前辨當遣りし男頓死せしゆへ訴へ出る所也。辨當箱の主なれば一寸來り口を合せよとの事也。此かたは密夫をとらへ混亂の中、あちには死人あるとて呼に來る、大とり込と成にける。いづれにもふしんなる事なれば、此こと明白に訴へ出けるにより、密夫は入牢しけり。此もの共の悪心にて、辨當へ毒を入れしか。又はあまり飢たる上食せし故の事なるやしらず。双方一時のさわぎにて町内の騷動いふばかりなしと也。

○駿府第六天小屋の事

一駿河の御城内に第六天の社あり。靈驗あらたなる事は、今にかはりなし。其社の前の小屋を俗に第六天小屋といひ來れり。此小屋内にて足を第六天の社のかたへ出せば、忽ち向を前後に引替らる。年中の事なれば引向らるゝ事度々也。此社の側に胡桃の大木あり。毎年おびたゞしく實なりけれども、手を付ることもゆるさず。もし取喰ひなどする時は、即時に大熱發し、その事を口ばしる故、わび事して漸ゆるさるゝなり。如レ此顯然たる祟有けること、今も變りなく、人々恐れ尊む事なり。在番に有し人々も、目前にみな知りたる事にて、めづらしからずといへども、今より後に生るゝ者は、聞知らぬ事と成りなんと爰に記しぬ。

○今はむかしの事

一目前に見聞したる事も、十年過二十年三十年を經て、世上どもにうつりゆく事すくなからず。また今の時をもむかしとて忍ぶる事あるべきなり。

一寶暦の頃までは、人に大的稽古するを見るに、日置道雪、雪落、吉田竹林、其外もみな〳〵その流儀々々の射方にて、問ずして何流ならんといふ事は大體しるゝなり。右のひと〳〵帶佩稽古する輩は、小笠原家の指南にしたがひ、引分ては銘々の射かた、少しも混雜する事なり。しかるに明和の頃より、小笠原縫殿助弓術師範として、小笠原の射方をおしへたり。其門弟ならぬものなし。されば帶佩稽古する面々は、自然とその風うつりけるにや。小笠原流の射前のごとく似寄てより、其後は帶佩稽古せぬ人までも、皆小笠原流の射方に類す。今にては何流々々の名目はありながら、其流儀を仕がたき輩多く成りたり。その師へ對していかに面目なき事にはあらずや。武術は諸士の家業たる中にも、殿元たる弓術すらかくの如し。その餘の藝術も推量すべし。其起りはおのれ器量なく、只世上の心に合せてほまれをとらんと思ふより、斯は成行たるなるべし。しからば免許皆傳印可を受たりとも、人おどしのみにて、その道の心得覺束なくぞおぼゆると、老翁の獨歎きしもことわりぞかし。

一天明年中のころ迄は、射込の稽古する大的場甚少し。高田馬場、柳原の外にて弓稽古の定たる日はなかりし也。其頃迄は穴八幡の脇より煙草のみながら、高田へ往來せし也。御番方の受取場、南御番は本鄕櫻の馬場、三河台、新御番は小石川犬走り、大御番は加賀屋敷と三河台、小十人はかゞ屋しきと犬走り、小普請は外柳原と溜池に請取場有て、定日稽古有といへども、出る人多からず。寛政より諸向今の場所に替れり。射込稽古場は所々に出來たり。

一疱瘡の事、寶暦の頃迄は四五年あるひは六七年に一度も流行て、世間に一流に煩ひ、その間には疱瘡を煩ふ小兒を見ずありしが、その後いつとなく年々絕ず疱瘡人あり。はしかは二十餘年に一度流行、皆煩ふ事なりし。是とても後には疱瘡のごとく、年々絕ず煩ふ事にもなりなん。はうさう二三十年前までは、大坂市中に煩ふものなく、河內在鄕のもの煩ふをのみ療治せしが、近年は市中にても疱瘡を煩ふ事と成たり。谷村昌元といふ醫師の申せしなり。

一白鼠といふもの、明和の初上方より流行出したり。夫はおの／＼眼赤かりしが、其後眼黒き白鼠出来て、夫より變じて藤色鼠、ぶち鼠、熊鼠、南京などあり、色々種類ふへたり。

一あさ蘭のさんまといふ魚、明和の頃迄は澤山にうらず。喰ふものも多からず。しかるに安永改元のころ、安くて長きはさんまなりと壁書せしが、其頃より大に流行出して、下々の者好みてくらふ事と成たり。寛政にいたりて、中人以上にも好人有ごとく成たり。此ころまた下賤の食物として、御籏もとの家にてくわぬ人多し。是も後々は屋敷向へも出べし。

一凧巾をあぐる事、正月を待て上るゆへ、親類よりも年玉におくり越せり。春は陽にして空をながめ、秋は陰にして地をみるの道理にて、こまを廻して遊ぶなり。しかるに寛政の頃に至て、臘月所々にて凧を揚る。夫もはじめのほどは、誠に小兒の持遊びの類成しが、いつとなく雲井遙にのぼせて、春の氣色に異ならず。

一菓子類を荷ひ商ふこと、水飴、煎餅などの外には持来る事なかりしが、今は其數ふへて、干菓子はもちろん、まんぢう、ようかん、外良餅、いろ／＼の菓子類をうりありく事となれり。

一貸座敷、煮賣店、水茶屋、寺社門前地などにて稀にありしが、今は十數倍も其數ふへたり。

一野老賣買となりて好人多く有て、茶菓子に用ひ、客人にも出せし事也。われらなどは幼少の頃は、輕きもの、上菓に寄々買ひたり。籠にて奇麗にあみて、心安く提られ候やう拵へ商ひしが、近頃は正月草餅の外には見たる事なし。夫ゆへ今の小兒は、野老を見ても喰ものとは思はぬ程に成たり。其頃何首烏をも人々好て喰たり。今は多く見えず。肉桂を菓子の如く喰ふ事も、寛政の頃二三年はやりしが、程なくやみたり。幼少の内は白雪糖、鹽煎餅のみ皆食せしが、今は鹽せんべいといふものは、菓子やにても賣らず。月見樽岸には花子をこしらへてうり、七月色紙短冊をたちてあきなふも、近きころのはじまりなり。

一其頃まで鮫鞘の脇ざしも略儀なりとて、麻上下を着する時は用ふる人なかりし。今は小さ刀のさやにもいたし、大紋の節も帶するなり。木柄の脇ざしも、御番所へ帶する人なかりし。寛政のころより世に行はれて、人々用ひたれども、重き御役人などは、殿中へは帶せず。久世丹後守御勘定奉行の節より帶刀し、引續て番頭仰付られたる後を用ひける。のしめ麻上下の時も木柄なり。是より御番衆はゞかる所なく用ひて廣く行れたり。

一この頃替りたるは女の髮なり。寶暦の頃までは、女は日々に髮を結たる事にて有し。其節髱ざしといふもの出來たるが、程なく止て燈籠鬢といふ髮の風はやりてより、びんさしといふものなくてはならぬ要用の道具となる。此頃より持髮にする女もありて、日髮ゆふものと半分交りくらゐなり。近來にいたりて、張ぬきにて髱入といふもの仕初めてより、油を澤山に付て幾日も持髮にするより、女髮結といふもの出來たり。今は朝鮮の櫛笄も以前より有しかど、びんさしの時行し頃より、世に普く行はるゝ也。今は水櫛といふは名のみにて、水を付るものなし。油を付るのみなり。

一櫻張といふきせるは、明和のはじめ、京二條櫻や長左衞門といふもの、張出せしより、世上一統に流行して、十人が九人はみな櫻ばりを持たりしが、天明の頃、出世張といふきせるはやり出せり。

一明和の頃までは、御役人の供廻り、銘々衣類にて、貸かんばんは着せるも交りてありしゆへ、御番衆の供は、貸かんばんを着せる人いたつてまれなり。めい〳〵の衣類にては見苦しとて、西御番よりはじまりて、今は大かたかしかんばんに成たり。其はじめ貸かんばんを着するくらゐにては、奇麗なるものを着せて、男ぶりをも吟味し、立派をこのむ心よりはじまりし事なり。今はあらひはりし切織たるかしかんばんを着するは、最初の趣意とは大にちがへり。其頃までは中間多くは赤合羽を着たり。今のごとく手廻りは、黑の桐油を着するは一統、かしかんばん流行し時の事なり。供まわり木綿合羽を着する事も稀なりしが、今は一統の事と成て、持ねばならぬ素道具の內へ入しは、明和の後の事なり。

一二三千石以上の御役人は、五十以下のものも、皆駕斷して牽馬なりしが、寛政の頃より馬勤流行して、水戸殿御上下の節、御乘馬にて日傘をさゝせ給ふ。是は進物番の役なり。義公の御先格をあはせたまふとぞ聞へし。諸役人も十人が九人は、みな馬勤なりしが、夫も一と盛りにて、次第に駕籠の人多く見ゆる也。

一初午二月稻荷祭とて、民家も町家も太皷を打はやすも、寶曆の頃より遊興の元となり。そのはじめ三味せん小皷の拍子を合せ、祇園ばやしなどせしも、いつか荷ひやたひ万度をこしらへ、屋敷內祭りを渡すとて大勢集り、またはおどりを催し、人形をつかひ、夫よりして素人狂言して色々取組、戯場をうつし舞遊ぶ。此狂言といふものは、言語を覺へ、身ぶりをならひ、衣裳をこしらへ、數日骨折稽古して、午祭り一日の興とのみせんは、あまり本意なしとて、後は常の遊びをせり。是より能はやしはすたりて、素人狂言長歌三絃下かた師となり、踊をしてとをるより益時行て、出會祝儀の席へ招かずといふことなし。下かたといふは、笛、太皷、大づゝみ、小皷、四拍子を長うたの三味せんに合せ、亂舞の心を崩して是を學ぶ。此時より亂舞を本業ととなへて習ふ人まれなり。其時合には緋毛せんを敷並べて、堂々然としてはやしたり。船遊びには究めて此催をせずといふ事なし。

一此頃は專ら長唄はやり、いづれの家にても三絃の音せずといふ事なし。されば皆長唄をうたひしが、天明の中ごろより、淨瑠理はやり出して、長うたは次第にすたりて、後常盤津、富士本世にあまねく行れんとせし頃、寛政の御とがめ御時節となり、御役不相應、家中不取締、身持ふらちの輩、止々御咎めありしより、三みせんは乞食の外彈ぜぬる人なきがごとし。稻荷祭りも太皷を出し、幼年の者あつまりてうちまぜての事なれば、夜通しのはやしなどはたえてなし。世上も靜かなり。以前のごときは前々の遊興に心うつりて、他事なければ火事有といへども、見付る人もなく、其所の人々半鐘を打てしらすれども、太皷の音に紛れて聞付る人もなく、こゝろ儘にやけ廣がり、後やう〳〵しるといへ

ども、最早大火と成て人力には及びがたし。されば其頃に初午の日、或は前夜は年々のごとく大火事ありしも、稲荷祭りの名目をかりて、おのれ〳〵が遊興のたねとせしは、神慮もいかゞおはすらんと覺束なし。

御老中、若年寄仰付らるゝ時は、元帝鑑の間、柳の間席の家にて、長柄傘の袋を懸ず。見出しにて持せられ、先挾箱の家格も跡へ下らるゝ事、定式のごとく成しが、白川公御補佐の時より、銘々家格にまかせ改らるゝ事なし。大御番頭其後も袋入の立傘は持せざりしが、市橋下總守大番たりし時より、是も家格次第の事となり、御側衆の簑箱を持する事は、大岡出雲守、高井兵部少輔の頃よりはじまれり。夫まで大御番頭より仰付られたる御側衆は、是迄持來のまゝにて、簑箱持を外役より仰付られたるは、新規に持する事は曾てなかりし。猶今の御鎗奉行對箱の御役より仰付られたる人は、やはり對箱をもたせ、片箱にて勤る御役より仰付られたるは片箱にて勤るがごとし。是も後々は、みな對箱を持する事と成ぬべし。

一本所龜井戸の臥龍梅は、江戸砂子にも出て、みな人のしる所の名木なり。明和の頃までは、古木朽のこり、枝下りては土中へ入、又枝上りては土に入、これ龍の臥たるかたのごときゆへに名付る所也。其梅は一株にて、傍に若木なりとて十四五本ほどもあり。わづかの地面にうゑ置しなり。その頃はひがしの方も、裏のかたも、雜木小竹など心のまゝに生ひ茂り、落葉のまゝ朽腐て、箒など用ひし所もあらざりしが、今は東も北も此處の地面となりて、おびたゞしく梅をうゑふやし、目のおよぶかぎりは、梅のはやしと成たるは、此頃のことなり。しかれば名にしおふ臥龍梅、今は跡かたもなし。今生垣ゆひし内家の向にのみ梅樹多し。その頃は家作もまことの百姓家なりしが、いつとなく貸座敷の奇麗なる住居となれり。寛政半の頃、梅の木百千倍に及ぶ。今もなを植添るを見れば、此末いやましの梅樹と成べし。

一隅田川のつゝみに櫻の並木を植しも、此頃のことなり。むかしは此堤高からず。さればみめぐりいなりの石の鳥居は、笠木堤の上へ出たりしが、三股中洲の新地とりはらひに成し時、其土を以て堤を高くして築上たり。さるほどに今も此邊を畫くには、堤の上より鳥井の見ゆる畫有。これにて思ひはかるべし。しかはあれど、其角が發句せし頃は、いかゞ有けんしるべからず。後の人の今をおもふ事も、今むかしを見るがごとく成べしと、おもふまゝ書しるしぬ。

梅翁隨筆 卷之三

○霧島山逆鉾之事

一霧島山は諾册の二神跡をたれ給ふ由來にして、頂に逆鉾あり。麓に美敷宮居あり。爰にて案內をたのみ、夜の間より登る。南方の山なれば、奇樹異草の類多く、斯のごとき所五十町、上り盡せば、それより上は樹木さらになし。只芝の如き草生多し。其前にいたれば薩日隅州一望の中に入て、美山は波濤のごとく、大海は青疊を敷たるがごとし。其原ばかりの所を又五十町のぼれば、それより上は草もなく、只栗石などの燒石ばかりなり。爰に至てます／＼急嶮なり。此邊へ上るにしたがひ、天地の氣やゝ變じ、不時に下の方よりあめそゝぎ、あるひは風横さまに吹卷來る、夫より拾丁登りて御鉾廻りといふ所に至る。此處は上らず。たゞ平に行といへども、左右は谷にて、劔の上に至るがごとし。足の踏所わづかに馬の背ほどなれば、馬の背越ともとなふるなり。足をはこべば栗のごときの燒石、左右の谷へなだれ落る。其行所せばきをしるべし。扨右の方は万仭の谷にて、底は雲にて眼およばず。左の谷はふかき事三四町、あるひは五町ばかりにて、谷々まで猛火もえあがる。此所は何となく震動す。又なまぐさきえもいはれぬ氣吹來り、あるひは墨のごとくなる雲渦卷來り、足もとより虹立のぼり、又天地とも金色になる事もあり。又硫黃焔硝の氣あり。折節一陣のかぜ吹來ることあり。此時は先達おしへて急にうつぶしに倒れふさしむ。左せざれば風のために身をとられ、猛火の中へ落さるゝなり。折節は風にとられるものあり。ゆへに此山にては、人の失はることも多しといふ。暫時にして風止空晴る事も有。須臾の變動定る事なく、登山の人此處まではいたれども、馬の背越を通り得ずして下山する人多し。此處は八丁が間を千辛万苦して走り拔れば、夫より眞直に上る所あり。爰に至れ

ば天氣また常のごとし。是より拾町程ものぼりて絶頂にいたれり。わづかの地面に天の逆鉾あり。全體は唐金のごとく見ゆれども、青く錆てしれがたし。長サ壹丈計、太サ大竹のごとくにして、逆様に地中に立、石中に入たる先は、何ほどとも知るべからず。只絶頂に此鉾一本のみ。外に堂宇一ツもなし。神代の舊物なりや知らず。爰三五百年位のものとは見えず。此絶頂に徘徊するに、天氣晴明にして四方眼の及ぶかぎり見えわたりて心地よし。夫より下りて、元の馬の背越にいたれば、初のごとく天氣晦冥怪異甚し。夫を下りては天氣晴明なり。元來急嶮なる山なれば、下りは百五十町甚速にして暫時に下る事なり。宮居より左右にわかれて、西の峯、東の峯といふ。のぼる所は東の峯なり。東西只二峯なれば、上りかけて絶頂にいたるまで、只一筋に登るなり。富士山などの登りに似たり。他の高山は多くは登る内にまた下る所もあり。斯東西二峯對し聳へたるゆへ、高千穗の嶽といふ。神書に記せる山にはあらず。此霧島山なる事、種々の慥なる證據あり。此山に登るものは自ら知るべし。白石先生をはじめ諸先達たちは、世俗の稱せる所を舊跡といはれしは、自から其地に遊ばざるゆへ、眞跡を知らざるなり。此山麓の廻り三十六里、大なる池あり。五六十有。中にも大波の池は、まわり三里もありて湖水のごとし。又野馬といふもの、形馬のごとく髮ながくして、地を引、怖敷すがたの獸なれど、人に害する事はなし。溫泉涌所數十町の所、水晶は馬の瀬越あたりの谷底に輝きて、はるかに鏡のごとく、又月の出る如く見ゆ。その大なるをおもひやるべし。しかれども急嶮の地にて行がたく、ことに神變不思議おほき邊りなれば、砂一粒といへども、山神の祟りに屬るとてとる人なし。都て天下の高山は、役の行者小角、越の泰澄などの開山多きに、きり島山のみ佛者の手を付ず、伊諾伊冉の開山と云べきや。まことに珍ら敷山なり。此山に仙人有。その名を雲居官藏といふ。元は薩州の家士にて、平瀨甚兵衛といふもの成が、いさゝか不平の事有て、世の中をのがれて此山の奥に入れり。數十年を經て此ことを聞、甥の得能武左衛門はる／＼と霧島山に尋入、數日にしてめぐり逢て、

其形をみるに、木の葉の衣髮髯生茂り、人間のやうにも見えず。武左衞門近よりて、今一度世にかへり給はるべしとすゝめしかども、請ひく色なし。近頃は仙術も成就して、雲居官藏とあらためたり。餘所ながらも世の人に相見するは、我通の妨げなれば、此後は尋ね來ることなかれといひ捨て走り去れり。既に百餘年に及ぶといへり。又球磨の人吉より十里ばかり奥、たゞ木といふ所に、吉村專兵衞といふ百姓、六十計の時家名不如意にして、世の中うとましく、風と仙術に志し山奥に入り、飲食は木の實などをなし、只寒氣に堪兼て、冬にいたれば里に出て綿入多貰ふ。一年に一夜も衣類のために里へ出る。近頃は仙術も成就せしにや、衣類もなくて住せり。山に入て後凡四十餘年といへり。又京白河の山中に白幽先生といふもの有しが、今は若州の山中へ移り入といふ。天下にはなを種々の異人多かるべし。

○枸杞忍冬功能の事

一夫枸杞は功能多し。中にも虛勞を去、精氣を補ひ、心痛腎病澄中を治し、腎をうるほし、肺を潤す。又忍冬は虛を補ひ、風を療し、壽をます功大なりとす。しかるに庸人は取得安き事をあへてせず、求めがたきくすりを尋ね、遠きを貴び近きを賤しむるは、庸人の情なりけるかへりみおもはざるべけんや。

○午年大火之事

一寬政十戊午年大小

金銀濟方滯共向後可レ爲ニ相對ニ

金銀は大へん也と思へ共、へん濟なきは小こともなし。

又大小

七九六十四　正小の勘定違ひ

◯松平田宮方へ狐付來りし事

一午二月御目付松平田宮當番の留守へ、暮過麻上下着たる侍來り、用人に逢申けるは、某事は四谷稲荷の留守居にて、此節吹上御番に相詰候ゆへ、私留守仕罷在候處、神木へ釘を打れ候に付、此段申届度候へども、無官ゆへ吹上へ入事相成がたく、御屋敷の御勸請は三河稲荷と申候。吹上へ御越候間、此段相願、いなりへ罷通候間、此段御たのみ申上候由を云て、懷中より書付を出す。用人受取ひらき見れば、

松のこずゑは百とせ千とせ
平らかなるとりさばき
田子のうらなる四海なみ
宮の子孫か王子のすへ數
殿をたのめば末頼もしや

右の書付を出して、しきりに稲荷に參詣いたし度よし願ふ。その體本心とは見えず。田宮は留守といひ、夜中の事也。承引がたきよしを申ければ、左候はゞ御目障りにならざる樣に罷越し申べし。尙承知さへ下されば宜敷とて、其儘うつぶしに伏て正體なし。暫有て起あがり、御蔭にて用事を濟へ候へば、御暇申よしにて立上るを、用人留置宿所を相尋るに、四谷に住陸尺の弟なりと申す。其段田宮泊所へ御門番にて申遣し、いかゞ取計ふべきやと伺ひければ、則親類へ引わたし押込置く樣申渡されけると差圖せしを、その夜泊り合せ取次せし坊主衆咄しにて承りし正説なり。此もの四谷邊の稲荷の神木へ釘を打、狐に取付れしなり。

◯村木屋思はず隱居せし事

一深川の村木問屋大和廻りせんとて、雇ひのもの壹人召つれて、午の春半過るころ旅立けるが、金澤よ

り鎌倉江のしまを廻り、箱根へかゝりし時、その體いやしからぬ男、眞裸にて石に腰をかけ居たり。不審におもひ其よしを問ふに、江戸芝邊のものなるが、刻限をとりちがへ、いまだ夜深きに此所へ來りしに、大の男四五人とり巻て、荷物衣類殘りなく奪ひとられたり。湯治に參るものにて候へども、かやうの難に逢、いかゞ致さんと途方にくれ罷在といふ。材木や是を聞、旅は相互の事、某は大和廻りと志す、旅も後世を願ふがためなれば、人の災難を救ふも善根のはしともならんとて、衣類幷に金子を遣し、是にて湯治をもしられよといひければ、かの男まことにおもひ計らざる御恩、この上や有るべきと歡び、姓名宿所をも尋しゆへ、金をつゝみたる帋へ書付遣しければ、此御禮は江戸にてこそ申べけれと別て、かの男は温泉場へゆきしが、その夜頓死せり。死體をあらためけるに、懷中に宿所姓名書付ある故、頓て江戸深川へ此段申つかわしける。家内にはおもひ寄らぬ事なれば、愁傷いふばかりなし。早速手代を湯治場へ遣し樣子を尋るに假埋にしたり。死體は日數重り面體かわりたり。衣類は主人の品にまがひなし。供につれたる雇ひのものゝ事尋るに、供人はなしといふ。是は逃もやしつらんと料簡して、我主人に違ひなしときはめて死體を葬りけり。頓て形見の衣類を持て深川へ歸り。此よしを申せば、せめてもとたのみし事も甲斐なくて、家内のなげきいはん方なし。さらでだに夫婦のわかれはかなしきに、是はましてやおもひもよらぬ愁ひにかゝり、俄に無常を身に觀じ、世をいとふ心ふかく、尼に成て後世をたのまばやと申けるを、一族より合、子供は七歳のむすめをかしらとして、男子はいまだ幼少なり。このまゝにては相續しがたし、幸ひ重手代は實體なるものなれば、是を後家入として後見させ、子供成長の後家督を續する事、家繁昌のもとひなりとて、女房にも納得させ、町内のひろめもなしける。斯て亭主は大和めぐりよりよき序なりとて、四國中國の邊までも見物して、百日あまりを經て深川へ歸りける所に、おもひもよらぬ事出來て、手代の妻となり、町内の弘めも濟ければ、是も因緣なるべしとて、それより直に隱居して別宅にくらしけるとなり。

○奥州淺川一揆の事

一柳原式部大輔領分奥州に五萬石あり。淺川と云所に陣屋あり。諸役人住宅せり。しかるに今度運上の事に付て、百姓ども徒黨し、午六月廿四日勢揃へして、同廿五日淺川瀬の大庄屋十二三軒最初にうち崩し、それより淺川の陣屋へ押寄亂入せんとせし頃は、路次の百姓次第に加はり、凡四五千人ばかりときの聲を上ておし來る。このよし淺川へ聞へければ、陣代をはじめ一家中、今日をかぎりとおもひきわめ、しづまりかへつてまちける所へ、百姓どもおめきさけんでかゝりければ、近々と引寄て、扉をさつと開きて、ひとしく鑓先を揃へ突出ければ、眞先にすゝむ一揆ども、二十三人を突倒し、その外手負多く出來ければ、あなどりにくゝやおもひけん。諸崩して引退く。此かたは無勢の事なれば長追せず、輕く人數を引あげゝるゆへ、ものわかれと成て、一揆は八幡山といふ家に屯して足を休め、また押來らんとするよし聞えける。柳原宗徒の家士は越後高田城に有て、この淺川には陣代の外は郡奉行代官をはじめとして、皆勘定かたの支配のもの共ばかりなれば、人數も多からず。重々の戰ひ難儀なるべしと評議して、近隣のことなれば、白川と棚倉とへ加勢をたのみ遣しければ、時刻を移さず兩公より加勢の人數を出され、八幡山へおし寄せて、先から鐵炮を打ておどしけれども、一揆どもいよ／＼さかんにして、少しも恐るゝけしきなく、次第に此かたへむかひ押出しけるゆへ、物頭下知して玉を込て打ければ、數百人群りあつまり居たる中へ放せしことなれば、一放に五七人手負死人出來るを見て、人を楯にせんと騷動する所へ押かゝりけるゆへ、暫時に追崩しける。斯て後領內へ觸出し家々に歸るものは良農なり。一所にあつまり居るものは惡徒なれば、是をしるしに殺害すべし。此節みだりに他行すべからず。願ひ事あらば面々が家に居て、惣代を以て訴へ出べし。理非によつて裁許すべき由をふれけるゆへ、早速領內しづまりけり。柳原家小川町の屋しきへは、二月十三日此事聞えけるゆへ、即日大目付已下出立す。翌朝家士三百人武器を長持へ入下りけると也。去々辰年十二月下旬

勢州津領分百姓一揆して、其邊燒はらひ、しばらくは騷動しける故、津の家中ゆき向ひ切崩しける。此度よりも日數かゝり、家士も少く手負有し事なれども、他家よりの加勢なくして、領內切にて事濟たるゆへ、江戶にては風說も少なかりしと也。

○無理心中の事

一、御匕醫師橘宗仙院の悴、いつの頃よりかよし原京町の大海老屋內きさがたといふ遊女になじみて、家業をもうち忘れて、夜となく晝となく通ひける。親のなげき世のそしりもかへり見ず、身持放埒ゆへ、こらしめの爲に押込置けるが、午の二月その所を忍び出て、象潟がかたへゆき、今はかゝる身と成ぬれば、此世にて逢見ん事もかなひがたし。いまや心中して後世にて永く契るべしと申ける。象潟は外にふかく申かはせし男あるゆへ、よきほどにあしらひて中むねにしたがはざりしをふかく憤りけるにや。寢入りたるを見すまし、口へ手拭を入て聲をとめ、用意せし大小刀にてさし殺し、其身もやがて自害しける。うなり聲に人々集り、此よしを宗仙院へ申越、訴へ出んと申けるを、左ありては外聞いかゞなりとて、死たる遊女を千金を與へて受出し、內々にて死體を片付けるとかや。

○戶田筋御鹿がりの事

一、午三月十五日戶田筋へ御成、御鹿がりありて、鹿多く御手に入たる跡にて、圍み置たる二歲の猪を追出しける。持まうけたる事なれば、大勢にて追取卷、何の苦もなく突留てけり。御覽の間もなく、あまり本意なき事なれば、此次はさし圖をまちて突かゝるべきよし、御目付ふれ廻し、備を立て待たる所へ、三さゐの猪を追出したり。駈廻る勢ひたけく見えてけるを、突留べしと御目付の下知によつて、御番衆すゝみ出突けるが、目當はづれて耳のわき少しばかり疵付たり。夫よりいよ〳〵勢ひ强くなりて駈廻りしが、西丸の御目付山木若狹守、今日助にて御供に出けるが、猪べた〳〵と山木へすり付たり。其時は猪勢ひはなくて、もたれかゝりて身をはなれず、のがれがたく色々身をもむ拍子に、

足を踏そんじ、山木はたふれて見えしが、則引かけて二三間ほどなげ出し、又追來りてかけんとするゆへ、若狹守詮方なくむづと組て上になり下に成りする所を、御番衆はしり寄て、猪の尻の邊を突ければ、山木をふり放し走り出たる拍子に、鐺を持ながら二三間引出されけり。猪は一さんに飛出し、せこをやぶりて逃失ける。山木左の手をいため股の邊を一尺計り疵付られたれども、牙にて引かけたるゆへ疵は淺し。されども血多く出たり。やう／＼其場を引とりたりとかや。かねては四歳の猪をおひ出すべき沙汰成りしが、先づ是にて止けると聞えし。

○阿蘭陀人參府の事

一阿蘭陀人參府せし時は、御三家まわりはいたせども、御三卿方へはまゐる事なし。御見物なされ度思めし候へども、先例なき事なればとて、參ることは仰下さるゝ事なし。たゞ殿中にて御覽のかた然るべきよしにて、午三月十五日阿蘭陀人登城の時、御兩卿にも御上り有ける、とてもの事に側にて御覽有べしとて、右衞門督殿、民部卿殿、御小納戸衆の中に入まじりたまひ、殿上の間へ來り玉ひぬ。カピタン不快なりとて休居たるを呼出したり。御兩卿は左右の脇に立せ給ふ處へ、カピタンを呼出しければ、左右の端にて御目見のごとく拜禮しけり。扇へ文字を書せたまひければ、三本したゝめて、病氣ゆへ其餘は御免あるべしとの事ゆへ、その意にまかせければ、初のごとく御兩卿の前にて拜伏して勝手へ入りたるを見て、皆々舌をふるひけり。たとひ御內覽の事を通辭うけ給はり、傳へて申聞せたりとも、いづれのかたへ御入りといふ事は知まじきなり。まして御しのびゆへ、御兩卿方へ二度迄御前にて平伏せしは、切支丹の法術にてしりたるやいぶかし。

一紅毛の虫眼鏡にて見るに、一滴の水針の先につけてみれば、清淨の水中に異類異形の種々の虫ありて、いまだ世界に見ざる所の生類多し。又鹽をみれば六角なるもの殘りたる也。あぶらは丸きものゝ集りたるなり。酒は麻のはの形のごとく、酢はおびたゞしく虫あり、水は三角なるものゝかたまりた

るものなり。この眼がねなくて、諸人も信ずまじきなり。トンカラスにて日輪を見れば、火もえ立て中に、菊座のごときものあり。月は水のごとくして穴あり。又紅毛には高垣を越しうら隣をみるめがねあり。闇夜に遠方をみるめがねも有といへり。

○小兒前生を語りし事

一上總國望陀郡戸崎村に佐兵衞といふ百姓の悴、五歳の時その父母にかたりけるは、我は相模國矢部村六右衞門といふものゝ子なりしが、七歳の時馬にふまれて死たりといふ。誠しからぬ事には思ひしかども、成長の後咄し聞せんと書付置しが、其後相模國より出たる回國のものを一宿させし時、ふと此ことを咄せしに、此もの矢部村近き邊りのものにて、六右衞門も相しれり。其子の馬にふまれて死たるといふ事も聞及びしよし申。矢部村は三浦郡の內なりとかや。これを聞て、扨は實事にて、父母はじめて驚しとぞ。かく前生の事をおぼえ知てしらする事もあるものにやいぶかし。

○京極家生駒家金毘羅の事

一京極長門守虎の御門外の屋敷內に有る金毘羅、近年しきりに參詣の人多くなりて、毎月十日の緣日には、いつも通行成がたきほどのぐんじゆ也。かくては喧嘩口論のあらんかと、京極家の家來は心をいたむること毎度なるゆへ、近ごろねがひて、上野宮樣の持と成、若不慮の事ありとも、上野より寺社奉行へ申出、萬端引うけて取計ひ、京極家には屆にも及ばざる事となりたり。是よりして御初穗の半を上野へおさむるなり。又下谷御徒町生駒家の屋しきにも金毘羅の社あり。先祖雅樂頭一政以後、讃岐の國主たる家筋なれば、此金毘羅こそ根元なれ。京極の勸請は萬治年中以後の事也とこそ言出すもの有てより、我先にと拜禮をねがふといへども、かねて出入の者の外、他の參詣をゆるす事なし。人々本意なき事におもひしなり。これも近來上野持となりてより、今は參詣のものを入るゝによりて、緣日毎に諸人出て市をなせり。

○野ぶすまをとらへし事

一年四月鎌倉河岸邊へあやしきもの出るよしいひけるが、打殺すものもなくありし。松下町の薪河岸にて、猫をとり血をすふ所を、薦の者に伊兵衛といふが走り寄、打殺したるに寄て、人々あつまりてみるに、面體鼬のごとく、つまりしやくみ、眼は兎のごとく、左右翅のごとくにして羽にあらず。其先に爪あり。手の指四本、足のゆび五本、竪横壹尺二三寸、尻尾その外毛色、香ひとも、栗色のごとく也。町内にてしるものなければ、手習ひ素讀謡等をも少々おしふる浪人に尋ければ、大に驚きたる體なりしが、しばらく見ていふやう、此もの深山にはありてめづらしとするにたらず。いはゆる野ぶすま是なり。しかれども深山幽谷に住べきもの丶、今繁華の地に生ずる事、是氣候の變のなす所にして、世の給（本ノマヽ）息にあづかれり。政事を執る人のもつとも心を用ふべき所なり。早々訴へ出る方宜しかるべしと申ける。其子細はしらねども、手習師匠のかく申事ゆへ、則西御番所へ申出ける。村上肥後守勤役の時なり。江戸にはめづらしきもの也とて、取置て人々にも見せたり。後に聞けば、今度日光御作事に付參りし者の、内にとらへて歸府せしが、其うちに取にがしたり。餌にうへて此邊へ出けると也。

○品川沖へ鯨寄し事

一年五月朔日夜中より雨降風強く吹たり。夜の明るにつれて、品川沖を見れば、見馴ぬもの浮つ沈みつする。みな〳〵立出よく〳〵みれば鯨なり。漁師たがひにしらせ合て、船を乗出しけれ共、道具をもたねばすべきやうなし。されども先迯すまじきために、沖のかたへ網を入れて道をさまたげ、舟をならべ聲をあげておひけるゆへ、鯨は天王洲のうちへ入けれども、狭き所なれ、又引返して沖のかたへむかふゆへ、人々ちからを合せて追かへす。かくする事三度なり。されば其沖の方は心（マヽ）いよ〳〵、船多く清ならべて、波を打たて丶聲を上て追立ける故、鯨は出る事叶はずして、洲の内へ入り、大にはねて

洲を越んとしたる拍子に、あさき所へはね上り、進退自由ならずして、尾鰭ばかり動かしける所を、漁夫ども漕よせ打ころしたり。此よしを聞傳へて、見物の貴賤蟻のごとし。濱邊より二三町を隔たれば、船をかり切て行もあり、乘合船もあれど、價ひ高き事いふばかりなし。されどはる〴〵品川迄至りて、間ぢかく見ざらんも其詮なければ、價ひの高下を論ぜず、おの〳〵せり合て船を借るゆへ、賈に七さとの潤眼前たり。同二日當所の御代官大貫次左衛門手代見分として罷越に付、それよりは見物をゆるさず。同三日濱御成の節上覽濟て、くぢらは所のものに下されけり。背通り九間壹尺。高さ六尺ほどゝ記したり。猶くわしくは繪圖にあり。

○薩州ノシロユ村の事

一薩州鹿兒島の城下より七里西の方に、ノシロユといふ所あり。一郷みな高麗人なり。往古彼國の一郷の男女老若囚籠として歸り、爰に住せしむ。今に子孫は朝鮮のまゝの衣服言語なり。庄屋の名をシンホウチュンといふ。申侔屯と書なり。日本へわたりてより長壽續て、間四代、短きは八代にもおよぶ。最早二百年に越たり。いつしか此國の言ばをもるつうせり。此時半分は陶師にて高麗燒を造る。上品は賣買する事國禁にてゆるさず。大守より實の朝鮮ものなりとて諸方へ送らるなり。常の衣類下着は日本の衣類のごとし。鳥を追ひ田をたがやす。此國の田とはおもわれず。朝鮮の通詞は此村のもの勤るとかや。

○奇特者召出さるゝ事

一大阪御代官青木楠五郎引負多出來て、御勘定立がたく、依レ之先達而遠島仰付られたり。惣領鄉助父の咎によつて中追放と成。されどもいまだ幼年たるゆへ、拾五歲まで親類へあづけ置るゝ段申わたされける處。父の介抱いたし度旨願ふに付、楠五郎出帆の時同船して配所へわたりしが、父死去の後歸府せし處、付添介抱等行とゞきたるによつて、中追放御免ありけり。鄉助母は土井重次郎厄介となり

である故、其方へまゐり、猶母への仕へかた宜しく、彼是奇特の儀に付、午五月三日新規召出され、百俵下されたり。又同年七月十日これも新規めし出され、二百俵下されある、加藤源次郎事を尋るに、鈴木清兵衛柔術の高弟にして、當時起倒流の達人なり。清兵衛死去の後、同門のめい〳〵皆源太郎が柔術のすぐれたるに心服して、門弟となりしかば、諸人名はじめ其外よりおくる謝禮、ことの外に多くして、數百金を集めしかば、本所三ツ目加藤高左衛門厄介にて有ながら、男女の家來御旗本なみにめし仕ひ居たり。父は太郎左衛門とて七百石を領し、中奥御番を勤しが、家中不取締なるによつて斷絶しけり。そのころ源太郎は幼少にて有しを、分知たるゆへに與左衛門かたへ引取て養育せし也。當源太郎悴源藏は六尺有餘の大男にして、力量人に勝れたり。元來柔術は幼少より修錬して無双の勇士なり。源太郎數年藝術出精たる事御聽に達し、此度家を起したりとぞ。彼は孝をもつてし、是は武術を抽んでしによれり。その道異なりといへども、ともにたえたるを繼、すたれたるを興す事、世に有がたき人々なりと美歎なり。

○仙女傳之事

一筑前國遠賀郡の浦人共、伊萬里のやきものを船に積て奧州へ商ひに下りけるが、山道に踏まよひ、行ほどに谷川にて、三十歳ばかりの女房の洗濯して居たるを見て道を尋るに、此所は深山にて里へ通ふ道遠し。やがて日もくれぬべし。いたはしきよしといふ。其詞にすがりて色々に賴み、一夜の宿をかりけり。此女は生國は筑前國芦の浦といふ所のものなりと申けるゆへ、此ごろに來り住居するよしを問ふに、女若かりし時、病にふして食もすゝまず瘦衰へけるゆへ、我子共螺貝に似たる貝をひろひ取てすゝめしに、その味ひ甘く美なる事たとふべきものなし。夫より食事出て、其肉をこと〳〵くくひ盡しけるころ、頓て病も愈て、その後身體もとよりもすこやかになり、それよりしてはやまひといふ事もなく、幾年を重ぬれども老衰のかたちもなく、我ながらいと怪敷思ふに、子も孫も、またその孫も、

幾代となく死替れども、その身はおもかげかわらず。あまりにつれもなくおもひて、國々をめぐらんと思ひ、古郷を出て、今絲有て此處に住するなり。我わかきころ壽永の亂に、安德帝都を落給ひて、西海に漂泊し、刑部どのと申をたのみ給て、山鹿の東なる山奥に假りの皇居を構へおわしませし頃は、みづからもものなど供御に備へしなり。此おもへば幾とし月か過しけん。むかし語りなり。わが身國を出し時、螺貝の売は命の親なれば、記念とも見よかしと申のこせしが、今も傳はりてやあらん。旅人のもし彼所にいたり給はん事もあらば、尋ねたまへかしと申ける。此商人めづらしくも又怖しき事におもひつゝ、國にかへりて此よしを咄けれ共、まことに聞人もなくて、狐狸にばかされたるならんと申すに。我も又うたがはしく思ひて、其まゝに打過ける所に、寛政九年丁巳筑前國遠賀郡庄の浦の代官坂田新五郎、此はなしを傳へ聞て、庄の浦の庄屋儀平に申付て、其螺貝の事を尋るに、同村の百姓傳治と申ものゝ家に、長壽貝とて持つたへたり。此貝の肉を食せし女、今に遠國存命いたし居るよし、老若くちぐ〱に申傳ふる處なり。また此家に惡病人ある事なく、代々八十歳九十歳の長壽をたもてり。よつてはやりやまひある時は、此貝を出して村中をもち廻れば、人々病難をのがるとて、今にそのごとく仕來れりとて、今の貝を持來れり。長壽貝といふ名のめでたければとて、筑前侯より一橋へ御覽に入れられしにより、御本丸へも上りぬ。其長壽にあやからんがために、貝の中へ入たる酒を、女中衆より宿々へさし越けるをば、みな人のしろところなり。此頃までは螺貝をばくらふ人なければ、商人なども持來る事なくて、生たる貝をば見たる人少なし。此長壽貝のまだ世に高くして、後は榮螺とおなじく荷ひ商ふ品となれり。

○感應寺富再興の事

一谷中感應寺の前住は、日光御門主御學問の師として、博學多才並ぶ人なきゆへに、寺格もよろしきをもつて、此寺に住職させ給ふといへども、いにしへ譯ありて日蓮宗より改宗の寺なれば、檀家なき寺

なり。この故に取續きのためとして、前々より富興行の事御免有しを、寛政の御時節にいたりて、奉行所よりさし留たり。此事を御門主なげきおぼしめして、重ねて御ねがひあるによりて、午五月富興行の儀御ゆるしを得たり。しかるに住持は去年死去せり。本意をとげずといへども、此僧の德をもつて末ながく堂塔修覆の助力たる事、死後のほまれといふべし。境内に半枯たる櫻の木ありしが、此時はじめて芽を出し、五月下旬にいたりて春の如く花咲たり。佛力應護のしるしにて、枯たる木々も花咲とて、見物の貴賤袖をつらねて群集せり。

○龍の口にて打果す事

一午五月十五日夕七ツ時過、龍の口御參詣定小屋まへ、小倉公の辻番所見張場にて、十六七の侍と二十有餘の侍と、何事の譯にてか有けん。元來の意趣と見えて切結びたり。最初は場合も遠くして、たがひに切先いまだ壹尺ばかりもはなれ、又漸切先のあたり合ふごとくなりしが、次第にすゝみ寄て戰ふたり。いかにも年若のさふらひよわく見えて、とてもかなふまじき體なりしが、案のごとく肩のあたりを餘ほど切られしが、夫よりわかき男の氣張、たちまち強くなりて、ふみ込〳〵進みよりて、年かさの男の胸のあたりを突たり。その時また若き方も腕のしたのあたりをきられたり。夫より切むすぶ事良久しけれども、勝負付ずうち合ふ内に、兩人ともに手疵によりてつかれたるが、太刀筋みだれて日當外るゝゆへ、其後はかすり疵のみにて、さのみ手を負はざりしが、わかき男踏込て打太刀を打外し、我とたふれければ、年かさの男拜み打にせんと、太刀をふりあげし拍子にころびて、それなりに腰のぬけたるかや。とく立上る事ならず。其内に若き男漸く起上りて、敵の咽の邊りを突通し立上りしが、その儘たふれて働き得ず、貳人ともに熊本公の家士成よしにて役人來りける。その內に貳人ともに死けるとなり。御徒目付檢使に來り、小倉公の辻番人をよび出し、いかにして取しづめざるやと尋けるに、答へていふ樣、兩人共武士にて、即貳人とも手負たれば、その儘さし置候事家風なり。もし

壹人を切殺し迯去んなどいたす時は、とらへ置候心得なりと速に申述ければ、無滞相濟けると也。

〇塙宗悦中間の事

一年四月日光御門主御登山に付、寄合醫師塙宗悦は例のごとく御供して日光へ參りけるに、宗悦が中間こゝちあしきとてやすみ居ける。その翌朝小便に出たる處、四方霧ふかくふりて、尺寸の間も見分がたくありしに、何ごゝろなくしばらく立たる內、次第に晴行霧の間に見わたせばありし所にあらず。いかにも道幅廣く、兩側軒をならべて、そのさま旅籠やの家作りのごとく、又荷物付たる馬行ちがひ、旅人體のもの往來して、さながら街道筋に彷彿たり。心得ぬ事におもひ、夢にやあらん。現にやあらんと、只茫然として立居たる所へ、侍體の人きたりて、何のために此所へ居るやと問ふゆへ、答ふるにありし趣を咄し、夢現を分兼たるよしを申ければ、侍莞爾として云は、熊谷宿とて木曾へも北國へも通ふ街道なりといふ。日光への道のりをとふに廿餘里也といふ。江戶へは十六里也と、こゝにおゐて大におどろき、そもいかゞして是まで來りしにや。去にても是より日光へゆかんも、江戶へ歸らんにも、遠路を隔てたるに、今少しのたくはへもあらざれば、いかゞともすべきやうなし。進退こゝにきわまれりと當惑なしける時に、侍いふやう、某骨柳(ママ)を持り。汝この荷を持て供をせば、旅の用をば助んといふ。その行所は江戶のよしなれば、先是にて少し力を得て、兎も角も仰はそむくまじ。しかるべきやうにと賴みければ、側の家にともなひ行、酒食など世話して、夫よりつれ立いでぬ。おもひ寄らぬ變にあひしまぎれに、不快もうち忘れて三宿ばかりも來りしと思ふ時、侍のいふ樣、某はこれよりわかるゝなり。汝もこゝろざす方へ參るべし。是は千住の宿なりとて別れぬ。今朝熊谷を出てやう〳〵五六里あまりも參りつらんと思ふに、はや千住の宿なりと申せしにぞ心得ぬことにおもひながら、そこらを見廻すに、大橋のてい宿のやうす見知たる所なれば、これより道をいそぎ、暮ごろに已が請人の所へ行、しか〴〵のよし申ければ、請人不審して先休ませ置、翌朝また子細を尋るに、き

のふ申せし言葉に少しもちがひなければ、扨は實事ならんとて、彼者同道して塙宗悦が宅へ行、右の次第を申けるに、先其者あづけ置よし申付ける。其後日光より書狀來り、彼方にて行方しれざるよし申越ける。其日を考ふるに、一日のうちに江戸へきたりぬ。是たゞごとにあらずとて、また請人をよびて尋るに、その後受人方をも立出て、かのもの行がたしれず成りぬと申けるとなり。

梅翁隨筆 卷之四

○目黑在狂人の事

一目黑在の百姓鳥の死たるを捨に行て、夜四時頃かへりけるに、長き大小をさしたる侍に行逢けり。百姓ども手に〳〵棒を持居たるを見て、此侍大におどろきたる體にて、二三間飛しさり、手早く股立を取て高聲に呼はりけるは、汝等ひとを見違ひたるや。頃日物騷なりとさたある此みちを、獨にて通る某覺へなくてやあるべき。望あらば刀の切あぢふるまふべし。いのちおしくば立されと、はつたと白眼て申ける。百姓どもロ々に、わたくしども全くさやうのものにあらず。此邊の百姓なりと申けれども合點せず。左ないひそ。油斷大敵なり。さきんずる時は人を制すといふまゝに、氷のごとき刀をぬきはなすと見えしが、電光のごとくにて、即時に三人まで切倒しける。殘るものどもおもひもよらぬ事なれば、わつといふて逃出す。此さむらひ猶その邊りを徘徊して、また三人を切殺しぬ。夜明けれどもいまだ立去らず居ければ、親兄弟をころされしもの共、所の人を餘多もよふして敵を討んと追取まく。其内一人進み出、鳶口を以て打たふさんとしけるを、飛越て眞二ッに打ころす。殘る百姓ども階子取にせんとすゝみけるを、切ぬけて走り行ければ、早拍木子にてしらせ合、前後の道を取きれば、のがれ難くやおもひけん。竹藪の中へ入腹切て死たり。此もの小川町さるがくてうの伊東播磨守長寛の家來にて、劍術師範するもの也。此日に新田へ參詣せしが、その途中より亂心せしなるべし。人多く切りたる刀は、粟田口康綱にてならびなきわざものなり。しかれども此刀鍛冶康綱のちに亂心せし故にや。此作の刀を帶せしもの亂心して、人をあやめる事ありと申傳へしが、今更かくの如し。作により善惡も有事にや。近き頃より相劍の術おこなはれて、大人君子も是を用ふるにより、小人は專要

の事とこゝろ得にもありて、重代の刀劍を疎にするは、大成惑ひなるべし。しかれども凡高位に昇り富貴する人は、相劍ゑらびする心なしとこゝろ得ども、その人のさし料は、きはめて吉相の劍なり、此事におゐては千萬人に壹人もたがふ事なしと、相劍先生の大言する所なり。吉劍を得て俄に運をひらく小輩もまた少なからん。是を見れば吉劍の德ある事、その證據ゆへなるがごとし。されども運のひらく時節にいたるによりて、吉劍も來り集るやしるべからず。劍をもとむる事なしといへども、資格をこえ、不時に昇進する人多からずとせず。是らは何といわんや。

一相劍の術に似寄たる家相の道あり。是も近來世に流行せり。方位によりて釁の數あり。又疊かずの積りに相生相剋の次第有り。陽をむかへて陰を背くの類より、種々の制度あり。此教へにしたがひ、家作せしより吉事のみつゞく有。火災をのがるゝあり。世のたすけ多しと高ぶるなり。しかれども是を守るに志しを正しくし、行跡をつゝしみ、慈悲のこゝろを專一とせざる時は、却て禍ありとおしふるゆへ、その說廣くして窮る所なし。家作の繪圖を見て、その人の幸ひと不幸を判斷するに多くちがふ事なしといへり。また鏡の相を見て、其持主の吉凶をいふ事も、此頃よりはじまり、その法大槪人相の趣に變る事なし。

○小佛峠怪異の事

一肥前國島原領堂津村の百姓與右衛門といふもの、所用ありて江戸へ出けるが、甲州巨摩郡龍王村の名ぬし傳右衛門に相談すべき事出來て、江戸を旅立て武州小佛峠を越て、晝過のころなりしが、一里あまり行つらんとおもひし時、俄に日暮て道も見えず。前後樹木生茂りて家なければ、是非なく夜の道を行に、神さびたる社ありける。爰に一宿せばやと思ひやすみ居たり。次第に夜も更、森々として物凄き折から、年のころ二十四五にも有らんと思ふ女の、賤しからぬが步行來り、與右衛門が側ちかく立廻る事數度なり。かゝる山中に女の只壹人來るべき處にあらず。必定化生のものゝ我を取喰んとす

る成べしと思ひける故、ちかくよりし時に一打にせんとするに、五體すくみて動き得ず。こは口惜き事かなと色々すれども足もとも動かず。詮かたなく居るに、女少し遠ざかれば我身も自由なり。又近よる時は初のごとく動きがたし。かくする内に漸近々と寄り來る故、今は我身喰るゝなるべし。あまり口おしき事に思ひければ、女の帶を口にて確とくわへければ、この女忽ちおそろしき顏と成て喰んとする時、身體自由に成て脇ざしを拔て切はらへば、彼姿はきえうせていづちへ行けん知れず成にける。扨おもひけるは、此神もしや人をいとひ給ふ事もあらんかと、夫より此所を出て夜の道を急ぎぬ。其後は怪敷ものにも出合ずして、甲斐へいたりぬとなり。

○聖堂御造營の事

一年のとしより聖堂御普請はじまりて、御仕法改まり、御目見以上以下の惣領厄介御教育あらんがため、學問所その外所々に御取立あり。寄宿いたしてなりとも、通ひてなりとも、勝手次第に修行さしつかへなきやうにとの御趣意にて、間數多く相成に付て、湯島本郷邊の武家町家御用地に上り、此時より本郷通り曲りて通る道筋となれり。大成殿御建立によりて、所々人歩多く集りけるにや。普請に本郷より出る仕事少とも五六人連にてまゐりける。道に板〆緋縮緬の大振袖の下着にしごき帶をして、その上に八丈島の小袖をかいどりのごとく着たる十七八計の娘、垢付たる木綿ものゝ所々破れてわたの出たるを着たる五十頃の親仁、手を引て來るに行逢しに、かの娘此もの共を見て、たすけよかしと涙を流していふ。容色すぐれてつまはづれ尋常にして、誠にいやしからざる體なれば、そのよしを尋ぬるに、親仁のこゝろ得ぬ挨拶なれば、仕事師の親分いづれその姿にては見ぐるし。我方へ來り支度すべしとて、無理に我かたへともなひかへり、先娘によごれし足を洗はせけるに、仕付ぬ體にて、しかも手拭を土邊へなげすてるゆへ、いかにとゝへば下をぬぐひて不淨也といふ。其體空氣とは見へね共、身形りじだらくにして、帶をもひとりにてはしめ兼るやうすなり。此娘を親分預るべしと

いへども、親仁同心せず。既に高聲に成て打よたゝけよといふを、家主聞付て中へわけ入て、親仁を家主方へ預け、かの女のやうすを問ふに、名をさへ知らぬゆへ、勾引たるべしと、大勢立かゝり申に、親仁言句も出ず早々逃うせけり。夫より娘に宿所親の名など問ふに、兎角泣居てものをもいはず。その夕かた人品よき町人來りて、彼娘は出入屋しきの人なれば貰ひうけ度よし申せども、最初の親仁かたよりの遣しものならんとて取合ず。しかるに其夜重立し役人ともいふべき侍きたりて、われら屋敷の奥を勤る女、此方に居るよし受取に參りたりといふ。其體しかるべき人品なれば、則娘に引合せしに、彼娘此さむらいを見てはじめて安堵せしやうすにて、もの語する體、主從のごとくなり。此侍は濱町の去屋敷の家來なれば、則わたし遣はしければ、何かの禮として樽代五十金おくりけると也。或人のはなしに、此侯は亂舞をこのみて、度々能はやし有て、下谷よりまゐる笛吹の美少年ありしが、いかゞの譯にや姫君としのび逢けるが、近ごろ折あしくて見えがたきを歎き、れんぼのあまり腰もとを連て出奔し、道に迷ひて有しとなり。此屋しき奥向と表との境に竹藪あり。篠竹あつくしげりて路次たへたるが如しといへども、是を潜り出れば、直に表へ出るゆへ、此處より若侍ども通ひて、奥の女中と密通する事數年なり。役人どもはしらずや有けん。覺束なし。今度姫君も是より忍び出て、美少年のものを尋ねかねて、かの親仁にとらへられし成べし。

○病犬に喰れし妙藥の事

一本所石原に傳助といふ陸尺あり。此もの九歳の時、病犬に出合のがれがたき所へ、町内の人參り合、病犬を追ひはらひしかば、其内に手の先を喰れ、疵はすこしき故血は留りたり。されど見る内におびたゞしくはれて、いたみつよくこらへがたしと、此邊に菅野梅翁といふ隱者ありしが、家傳の妙藥なりとてつけたるが、早速いたみ和らぎ快く成たり。その時に同樣にくわれたる十四五歳の友だちあり。醫師にかゝり療治せしが、これも疵は少しの事なれば、當分愈けれど、三十日程過て大熱發しくるし

み死たり。伊助は全く妙藥にて生延たるゆへ、その藥法を傳授して、病犬にくわれし人に與ふるに、壹人もいえずといふ事なし。此くすり血留にあらず。血おさまりし時付るなり。其法、

黄ばくの粉壹匁　　薄荷壹匁　　輕粉はうや六分

右三味、玉子の白み計にてとき、はれたる所へぬれば、毒氣ある內は速に乾きて落るゆへ、何べんもぬるとかや。はうやは水銀を製法したる粉にて、いづかたにも有ものなり。三味價貴きものにあらず。それゆへ富人は曾てうたがひを生じて信用せざるとおもふべし。

○京都大佛炎上の事

一年七月朔日の夜四時頃、京都雷鳴て一ツ二ツ强く聞えて即止ぬ。その夜深更におよんで、大佛殿の屋根より火もえ出したる故に、人々はせ集り龍吐水にて水をかけしに、一旦は消留めたるがごとく成しが、又もえあがりたる時は、火勢甚だ盛んなり。高き所にてはあり、人力におよびがたく、終に殘らず燒失す。腹籠りの大黑計やう〳〵として持出たり。人々多く集りけれども、火を消べきやうもなければ、せめては何品なりとも助んとするに、廣大のしななれば、一ツとして人力には及びがたく、みな〳〵爲方なく、同音に南無阿彌陀佛〳〵とゝなへ居る。さながら釋尊入滅の時もかくやとおもひやられたり。おしむべき中にも惜むべきは、この佛の座形肉合、いか成人の心にても、其時の出來にあらざれば、兼て佛師どもの斯のごとくには決して出來ざるなりとて、則佛師ども兼ての鑑としてありし大佛なり。近來安房國にても、自然山の巖山、佛體に似たるより、大巖をそのまゝ彫刻して、大佛とせん事をおもひ立て、建立助力として萬人講をおこしたり。願主は京師の產なり。勸請狀へ左右の手に墨を塗押たる、その掌の筋、立像のえびす大黑のごとく、顯然と見ゆるも奇特の壹ツにて、ともに世話する人多くて、思ひしよりも金銀あつまりければ、最早大佛大半成就せしに、京の大佛は此時にあたりて燒失す。これしかしながら、佛法東漸のしるしにて、此後數百年にいたらば、蝦夷地の末

までも佛法さかんならん。右の安房のいは山の大佛、是ほどの建立する事を、公邊へ願ひもさし出さず。いか成心得にて取懸りしや。其後御吟味と相成、不屆千萬たるよし御咎めあり。佛像は切崩し、屹度仰渡され、さしもの功勞、水のあわときえて跡かたもなくなりけるは、是非もなき事にこそ。

○傳通院蝮蝎の事

一午六月朔日夕七ツ時ごろより、俄に雨強くふり出し、風ありて暮前には雨止みたり。少しの內なりといへども、その雨の强き事、近頃かくのごとき降はなし。軒よりおつる雫にて、土を四五寸ほどもほりし也。されば所々の下水あふれ出て、往還通路成がたし。此雨駒込小石川邊別して風もはげしく、傳通院境內の松の大木、中より捻切てはるか脇へ落たり。前々より此境內に蝮蝎住て、四斗樽ほどなるが、此松に住むよしを、誰となくいひならはしけるが、今日天上せしにや、其後蝮蝎出る事なしといふ。

○男女體を變ずる事

一尾州愛智郡米津村の百姓喜右衞門が娘そのといふもの、午四月初旬の頃より、しきりに陰門痛み、日に增て張出しければども、女の事故深くつゝみて、人にも語らず居たりしが、五月に至り、陰門次第に變じて陽根睪丸ともに全く備りたり。よつて其よしを兩親に申ければ、大に驚きて醫者を呼、是を尋るに、尤變生男子といふ事相違なき事なれば、則名を久七郞と名付たり。當年二十二歲なりとかや。此地の代官水野權平此よし承り、役人をつかはし見屆させけるに、容顏筋骨髮乳等却て男體なりければ、水野權平より飛脚を以て市谷御館へ早々注進いたしける。其書狀の寫しなりとてもてはやし、此ごろいづかたにても此沙汰のみなり。あるひは尾州米野木村百姓喜右衞門小兒出生せしところ、男女の體わかり兼、先八代と名を付て置しが、成長にしたがひ容體氣質男子にて、ことに農業に精出しけるゆへ、八代吉と名をあらためしが、是を承り違へたる成べしといへり。左もあらんかし。世中亂れて

民手足を置に所なき時節にて、かゝる異變もあらん。今や聖化普ねく四海に溢れて、人々その業をたのしむ折からもつて、かやうの事有べき。さればいにしへなき事にしもあらず。和漢そのためしすくなからず。明應年中、越後の人出家して、丹後國大野原といふ所にて學問いたし、三年の後古郷へかへらんと旅立して、江州高島郡技村までいたりしが、折しも霖雨降り續きて道たえければ、爰に逗留したるに、或夜の夢に、自分化して女と成と見て目覺ける。果して陰莖縮り陰戸となり。音聲容儀女となりけるは十八歲の時也。目鼻立すぐれて愛敬多かりければ、家主娌して妻として子を生りとかや。又異國にも漢の哀帝建平年中に、男化して女と成、嫁して子をうめり。又大明の隆慶二年李良といふもの妻を持けるが、貧にして取續きがたく、帶を出して日雇に出ける所、二月九日より陰莖大いに痛み、續て四月に至り腎囊覺えず退縮て腹に入、變じて陰戸と成、五月より經水行て女の粧ひにかわる事なし。時にとし二十八歲といへり。又むかしの惠帝元康年中、周世亭といふものゝむすめは八歲にして化して男と成。十七八歲にいたりて氣象男體ともに成る。しかれ共陰道少く弱くして子なし。此類ひ史傳にのする處數輩あれば、往昔よりなき事にしもあらざるなり。

○盜賊の覺悟いさぎよき事

一曲淵甲斐守御勘定奉行たりし時、盜賊を吟味せしに、出生より以後今日連(マヽ)の事所々へ盜賊に入、財寶をうばひ取たる子細、少しもつゝみかくす事なく、明白に演說して、此上は一日もはやく御仕置に行れんことを願ふたり。何ゆへに盜賊をなしゝと尋ねしに、彼ものゝ云く、凡人として一度は死せずといふ事なし。病て死する時は數日のくるしみいふべきやうもなかるべし。死罪は即時に死する故、くるしみといふとも、すこしの內なり。又とらへらるゝ迄は金銀を心のまゝに遣ひ捨、乏しくなればまたぬすみ出すゆへ、盡る事なければおしむ心もなし。萬福長者といふとも、盜賊ほどおしげなく金銀を遣ふ事はなるべからずと覺悟せしゆへ、盜賊を業とせしよし申けるとなり。町奉行勤役以來、多く

の科人を取あつかひたりと申されしとぞ。

○人を抱えて怪有し事

一午三月土手四番町御天主番の頭春田半十郎、宿にて飯を食んとせし時、忽然として膳次第にあがり天井へつきたるゆへ、大に仰天しておもはず箸を捨て飛しさり見るに、又段々下りてはじめ居し時のごとく、側へよりて見るに、少しも替りたる事もなし。夫よりして煙草盆、火鉢、行燈、その外諸道具類、米櫃、石臼のごときもの、時としては地をはなれてまひあがる。其しな大小輕重の差別なし。いか成ゆへといふ事をしらず。修驗者、陰陽師などに問へば、佛神のたゝりなりといひ、または狸の所爲ならんといふ。かれらが申すにまかせ、いろ〳〵祈禱すれどもその驗なし。若は家の亡ぶるといふ前表なるやと大に心をいためける處に、或人のいわく、これは定めて目黑在より人を抱へし成べし。此所の鎭守、氏子を他郷へ出す事をおしみて、その村のものを置時は、かならず此災ひあり。家來を吟味し、もしその所のものあらば、急ぎ暇を遣すべしとおしへける。當春かゝへたる男女をたゞすに、その邊のものといひ出るものなければ、爲方なく壹人宛暇を出し、三四人も出しければ、頓て怪異も止たり。しかるに同年の九月、三番町新御番桑原善兵衞、戸田三藏方にも同樣の怪しきことあり しゆへ、其頃かゝえし人を出しければ、是もしづまりけり。是にて思ひ合すれば、御小納戸福村理太夫屋敷にて、四五年以前怪事ども多く有しと申せしが、やはり此類成べし。しかれ共不審なるは、此村の氏子に他郷へ出るをおしみて、昔しより此類あるべきを、此年聞傳へし事もなくて、近年このごとくなるは、いかなる理りにやあらんといぶかし。

○傘張長者屋敷の事

一武州稻毛に傘はり長者の屋しき跡といふあり。先祖傘をはりて渡世しけるゆへ、かく呼來るとかや。ある夏の夜、庭にてすゞみ居る所へ、西のかたより夥敷鳴音して飛來る光りものあり。しかも地をは

なるゝこと漸二三間が程にて、此者の前を過行所を、竹にてはらひけるに、竿の先少しあたりし樣子にて光りちり落て、光物はその儘飛さりぬ。翌朝其邊にて錢八文拾ひたりし。夫よりおもひよらず利德有事のみ引續て、家富榮へ子孫繁昌しけるが、盛んなるものは衰ふる世のことはりのがるべからず。此錢紛失せしより不幸のことのみ重りて、奴婢さん〴〵になり行、今は屋敷跡のみ人口に殘れりとぞ。

○道二物語の事

一下谷長者町道二宅にて、一六日講釋ありて、老若男女の聽聞多し。廿五日は小供への講釋にて大人は聞事をゆるさず。尤茶たば粉を出せども、いさゝか謝禮をとる事なし。連中より寄進するによりてなり。道二といふもの、寛政のはじめの頃より世に名高く聞えて、大名高家へも召出され、信ずる人少なからず。その申所朱子學と佛道と相半するとて、愚夫愚婦承りて耳へ入りやすきゆへ、益ある事多し。その咄す所、たとへば牛馬にはおとりたる人多し。夫牛馬は每日同じ道を往來し、懈怠なく勤るといへども、路金も貰はず。年よりたりとて樂にもならず。重荷を擔ひ肩をやぶり血流るれども、やすむ事なく、極暑甚寒の時節といへども、主人の仰にしたがひて勤むる也といひ、或人聞ていふ。牛馬とても給金なしとはいふべからず。五兩十兩、その餘も金を出して貰ひたるものなれば、是すなはち給金ならずや。道二のいわく、代の金は出せども、其金を牛馬の物とせず、その金は世話人に遣して人を育むなり。されども我身を賣て人を養ひ、買主へは死るまで骨打奉公するものは牛馬なり。人には牛馬にもおとりたるもの多し。平日よく〳〵心を用ひて、牛馬におとるまじと精出すべき事也といふ。又云、凡人魂といふものは、曾てなきもの也。然るに芝居狂言などにて、ヒイドロ〳〵にて火の玉をつりあげ、ゆうれいの出るを幼少より見なれ聞なれたる心より、陽氣發する光り物を見て、たれか人魂と申出せし空言を、今にては皆眞實に心得るなり。先人魂を見たりといふ人、十人に一人か二

人、百人に十人か十五人には過ず。しかるに江戸中にて、日々千人生れ千人死すといふなり。此人毎に人だま飛出るものならば、夜毎に人だま行逢ひて、目鼻もあぶなき程成べし。其上見ぬといふ人は、曾て有まじきなり。人だまといふものを見れば、春暖のころより暑氣の時分なり。嚴寒の時にはみる人なし。しかれども人は暑寒の差別なく、命數盡れば死する事勿論なり。此一事ばかりにても、人だまといふはなき事と思ひはかるべしといへり。一六の日に講釋する所、大むね此たぐひ也。神のおしへをまもる事能はず、聖賢の道を辨へず、佛道をしんぜざるものには益なきにはあらずとて、やごとなきかたにも捨させたまはずとぞ。

○寛永の頃道中賃錢の事

一寛永元丑年八月廿七日、道中定番の內、江戸より品川まで上下の荷物一駄に付錢三拾四文、板橋まで三拾九文、歸り馬の駄ちん同前の事。但し人足は馬の半分たるべき事と、右の通り定めありし。且右同日出たる御書付、錢うり壹兩に付四貫文、御定の上は勿論、壹分に壹貫文たるべき事と有しなり。その頃は人馬賃錢、右のごとく少々の事なれども、是にて雇はれしものも不足なく、世をわたりしなり。しかれば其節諸色下直なる上に寄て(本ノマヽ)、質素ゆへ人々あまりありと見えたり。

○鴨崎大鮑之事

一寛文五乙巳年五月、安房國鴨崎といふ所の海上夜毎に光あり。蜑等不審におもひ、ある夜四五人申合せ、海底に入てその光りを見るに、凡七八十丁餘りの大鮑ありしと也。めづらしきものなればとて、人々にも告しらせし程に、此邊の海人ども皆見たりといふ。かほどまで大い成あわび有ものにや。都て鮑多くあつまりたる節は、海上時によりて光る事有もの也といへり。

○出羽の影波の事

一武藏野に有といふ逃水の事は、夫木集に俊頼のうたあり。世の普くしる事にしてめづらしからず。陸

奥出羽の邊りにても、春夏晴天のころ、野中に行人をはるかに見れば、大成波おこり水玉を飛すが如し。大海を越るにさも似たり。近くよてり見れば、たゞ白砂の道にて、いさゝか水の氣なし。所の人は是を影波と申ならはしけり。是もにげ水のたぐひ成べし。

○大槌小槌の事

一甲寅より癸亥まで十日の間を大槌といふ也。間日甲子より己巳まで六日なり。庚申より丁丑迄八日小槌なり。間日戊寅より癸未まで六日あり。甲申より癸巳まで十日大槌なり。間日戊申より癸丑迄六日なりといへり。右大槌小槌のうちに生るゝ人は、運弱きゆへに祭りてよし。すべて金類の名を付れば、其障りをのがるゝよしいひ傳へり。間日の內に出生の子は果報ありといへり。

○汐の滿干高下ある事

一薩州櫻島、安永年中大燒以後、海水五六尺所により壹丈も高く成て、鹿兒島の城下の下町筑町邊は、十五六日の汐滿には、近年は潮溢れありて、庭の內へも汐滿來れり。此ごろは町中高下駄にても歩行成がたし。大隅加治木邊は汐に堪兼て引移たる所もあるよしといふ。かの大變の後七ツの新島を出現せし、里人は櫻嶋燒て土砂多くふき出しぬれば、薩隅二國の地は低くなりたるゆへに、潮高く上りて來るともいへり。これもあまり廣大の說なり。いづれ此海ばかりのうしほ高く成たるは奇異の事なり。潮の滿干は天地の呼吸なりといへり。しかれば北海はさし引二三人の間なり。南海は滿干多し。ことに藝州の嚴島、備後三原、攝津住吉、伊勢安濃津などは、汐の引事二三丈におよぶなり。又安房上總の沖遠く出れば、潮たゞ東へ落て、船も夫より東へ落されず。歸る事なしといふ。また唐瓊海の潮は十五日前は東へ落、十五日後は西へ流るゝ、只一ヶ月に東西へながるゝのみにて、晝夜のさし引なしといへり。

○隱賣女制禁の事

一隱賣女の事は元來制禁なりといへ共、いつとなく江戸中所々數百ヶ所に出來て、悉くはかぞへ盡しがたし。是等の遊所ある所を岡場所と云。うき川竹のながれ同じからぬゆへとかや。牛込の内にも赤城明神、市谷八幡、愛敬いなりなどは、とし久敷賣女有て、江戸にては勿論、諸國までもしる所なり。其外の宮寺門前境内に賣女なきは稀なり。ころび藝者といふあり。料理茶屋貸座敷いづかたへも呼寄て、酒宴の相手とす。後には琴三味せんの調子も知らぬ藝者あり。また地獄といふあり。そのはじめ情を商ふものならぬを地者といふによりて、其地者を極密内々にて呼しゆへ、この名起れり。其外色々の種類ありて、その品異なりといへども、皆色を以て世をわたるものにて、所謂かくし賣女なり。しかるに寛政の御時節に至りて、此制禁嚴重にして、少しも色を商ふに類したるものを置時は、忽ち地面上地と成は勿論の事なり、家作をも崩しとりて、ながく揚地とするゆへに、地主家ぬし少しも油斷せずとも吟味つよく、暫時の間に江戸中の隱女屋一軒も殘らず根を絶たり。夫より町に住て色を賣事あたはざるゆへ、女商人と成り提重へ菓子を入て、屋しきの部屋々々、辻番所に入來り情を商ふ事と成。此女を提重と異名して大に流行せしが、けんくわ口論を引出すもと成ゆへに、所々にて制し、門內へ女商人を入る事をゆるさず。されど頗多かりしも、年月を經て所々にあやしき町家出來て、提重は自然と沙汰もうすらぎしなり。移り行よの中さまぐ\變化せり。

○御小納戸御吟味の事

一御小納戸御吟味あるは、先年齡に定りありて、十五六歳より三十歳迄とか。十七歳以上三十四五歳までとか。是を限りて御沙汰あれば、斯支配の宅へ同役集りて、その組の向々并部屋住のものまでも面會して、同役評議の上にて書上れば、その者共もし年寄にて吟味あり。其節は家督も部屋住も、諸向殘らず一日の內に吟味有事ゆへ、凡千人にちかき人數なり。是等の内より撰び出して、御側御用人の宅にて吟味の節は、はるかに減じて二百人にも足らず。三度目は御用取次御側衆の宅にて吟味するに、

又減じて五六十人なり。其內にて然るべき人物なりとて、親類書をさし出すべきよし命ぜらるゝもの三四十人ありて、扨御小納戸は二三十人ほども仰付らるゝ事、いつもかくの如くありしが、寛政の頃よりは第一年齢のかぎりなく、兼て諸向より相應の人を書上置て、其內を貳三十人づゝも、若年寄にて御逢あり、又御側衆へも相越なり。兩三度御吟味に出て、御小納戸へ出るもあり、吹上御庭にて御側衆吟味といふ初りしは、寛政八辰年よりの事也。

○權七といふあだ名の事

一近ごろのはやり詞に、不分なる事をいふ人をば權七也といふ。其詞起源なきにしもあらず。深川八幡町の肴うり權七といふもの有。其女房仕立やと密通し、或夜例のごとく密夫來り居し時、權七歸りたり。あまり油斷して仕方なく押入の內へかくし置、赤飯のありしを遣し置たり。權七は餘りに音さわがしきに心付て、そこ爰見廻し、彼の押入を明ければ、密夫は女房の胡麻鹽を吳ると心得て、菓子盆を出す所を引出し、大おろしの庖丁にて則切殺しければ、女房覺悟して、迚も此世で添れぬ惡緣、せめては同じ露と消て、未來はながく契るべしと、西に向ひて手を合すれど、亭主いかゞおもひけん切兼居たる。その內に相長屋のものども寄あつまりて、最早密夫を殺せし上は、內證には濟がたく、女房をも手にかけて訴へ出べしとすゝめける時、權七頭をふりて今一緒に殺されて、未來にて添たいとは、かれらが望の事なれば、左樣には成がたしとて、權七さらに得心せず。されど男ばかり殺して女房を生し置は如何なりと人々申けるを、何と思案いたしけん。其場より權七逐電して行がたしれずなりけり。是よりして愚かなるものゝ事を權七とあだ名付し事とはなりぬ。

○御堀端へ竹をうゑる事

一寛政三亥年の夏、四谷より牛込御門まで御堀の土手へ竹をうゑたり。これより土手へ上りてさうぢする事をも禁じたり。近頃次第に竹を植て大に繁茂し、丑年の春初てむく鳥多くとまり、夜中さえづる

事夥し。斯のごとく茂りたれば、盗賊かくれ住けるも有ければ、其年の冬、我に竹をきりすかしてより、年々冬毎に切事とは成れり。

○箱根の關守情ある事

一寛政のはじめ、朝大に雨ふりて程なく晴天となり、春色いと長閑にして、浪人體の者十二三歳と十歳ばかりの男子弐人連て、箱根を越して休み居ける所に、雲助來り金五兩合力すべしといふ。侍は思ひも寄らぬ事なれば、不埒なるよし答へければ、しからば汝が伴ひし子壹人、女子を男の姿に似せて關を越しゝ事訴べしと云。此侍大におどろき、身貧しければ持合せ少なし。金壹兩遣すべしといへども、雲助は得心せずして、つひに訴に行けるまゝ、侍は進退こゝに極りて、いかんともすべき樣なき所に、百姓體成旅人來り、此よしを聞、ひそかに我連れたる男子と、侍の子と衣類を替置ける。其所へ雲助に案内させ役人來り、侍の子を改るに二人共男子に相違なければ、虎口の祀をのがれ、百姓の子と待てわかれ行けり。此百姓體のものは土地の人なるが、内々役人の下知によつて斯く計らひけると也。此浪人運つよく役人の情にあひ必死の祀をのがれたり。

梅翁隨筆　卷之五

〇二條御金藏盜賊之事

二條御城中二丸御金藏の方板塀損じ有。その樣はなはだ怪敷見えける故、寬政九丁巳年十月廿九日、御番頭堀田內藏頭、遠藤備前守、御殿番三輪市十郎立合、御金藏見分ある所、二千兩入の御金藏ふたつ紛失せり。內に百兩包二ツ御藏の內に取落し置しゆへ、此旨所司代堀田大藏大輔へ申達しける。よつて同晦日町奉行三浦伊勢守も見分に罷越し吟味せり。此日より三輪市十郎は同心めしつれ、二丸御臺所へ勤番いたし、在番の西組御番衆家來下々まで色々吟味するといへども、是ぞとおもふものもなく、依て所司代の下知として、町奉行人數大勢召連來て、東西御番衆與力同心壹人も殘らず、二丸御番所の外の廣場へ呼出し、其留守へ亂入して、小屋々々改むべしと、兩番頭へ達すといへども、此儀においては番衆承引無之といへども、所司代の差圖として人數召つれ來りし所、無下に相止べきにあらず。兩組の與力同心の小屋は、御金藏へも程ちかく、其方より忍び入たる樣になればとて、遠藤備前守與力同心の小屋を吟味せんとて、天井を崩しねだをはなし、諸道具の錠前を打放しあらためれども疑敷ものなく、たゞ與力の具足櫃には、島原、祇園町の遊女の文多く出たるばかりにて、手懸りの種に成ものなし。されば十二月廿二日所司代與力外廓を廻りし時、巽の御櫓近き石落しの下の方、石垣の間にあやしきもの、日影に移りて見えければ、此段申達するによつて、早速御堀へ船を入させこれを見れば、紛失の御金のうち也とて、所司代へさし出す。是より其下通りの御堀をさらへけるに、四五兩二三兩程宛すくひ上るといへども、盜賊をしる事難し。午四月交代すみ、其後所司代堀田大藏大輔病氣とて退役有しも、實は與力同心の小屋々々やさがしいたさせ、既に御番衆の小屋迄改んと差圖有

しは、以の外の誤なりとぞ沙汰しあへり。此としも暮て明れば未の年三月晦日、京町奉行松平信濃守組の者、右の御金盗賊をとらへたるに依て、その子細をたづぬるに、新町筋三條へ近ごろ引移りたる御堀内御用職人かざり師藤田大助といふものあり。もとは他國より來て、甚貧しく暮して、按摩などとりて世を渡りけるが、いかゞしてか多くの貯へ出來て、金錢自由に遣ひしより、先の藤田大助が甥分に成て、御用職人の株を讓り受たり。その頃迄は金も持し樣子成しが、程なく貧窮のありさま也。然るに去午年の秋のころより旅商ひに出しが、又は金多く出來て、奥州白川にて遊女を受出しつれ來りて妾とし、京にても妾をかゝへて別宅に居住させしむ。夫に准じて何事も奢侈つよく、是迄御池通りにかすかなる住居なりしか、新町通り三條にてやしきをかひ、家作り新規に普請して引移り、何壹ツ不足なきやうすなり。されば俄に金持と成たる事を、近隣にてもいぶかしくおもひ取沙汰せしを、松平信濃守組のもの承り出して、當未三月晦日大助をめし取り、家財吟味しける。皆新吹の小判にて、極印のなき御用意金なるを、炬燵のすごつの下に隱し置ければ、大助陳ずるにことばなく白狀しけり。御金を盗とりし次第を尋るに、たらいにのりて御堀を越、石垣をつたひ上りて、石落しより忍び入、金子を取て着物につゝみ、紐を付て石落しより先さげ置、紐の先を持て石垣を下り、たらひにて御堀を越て後、御金をたぐり寄、取上て逃去し。其金三千兩なり。其頃御詮議強きにより、椽の下へうめ置、其程を過して御城内交代も濟て後、贋極印を打て奥州へ持下り、貳三兩づつ糸を買て荷物につくり、仙臺の城下にて半分を賣はらひ金をかへ、其金にて京都にて屋敷を買ひふしんをし、妾をかゝへ女郎をうけ出し遣ひすてしが、また丹後へ行て縮緬を買あつめて、大坂へ持行うり拂て金を替て遣ひたるよし申に依て、猶舊惡を尋るに、勢州津の用金三百兩程盗みとりし事有。御用職人の株を買しは、其金の手まわりし時の事なり。品もの其外小盗をせし事はなきよし申けるとや。此大助に能似たる盗賊の事を聞し事有るゆへ、序に是をしるす。大坂堂島米屋岡右衛門といふもの、元は堺の農

人町のものなりしが、大酒にして博奕を好み、色情に深く、身もち取所なければ、總に親族に見はなされ、紀州にくだり和歌山の家中へ小ものに仕て、御金藏へしのび入、金貳千兩箱三ツ盜み出し、箱は外堀近き所へ埋み置、一箱をば打破、家居近き松の根え生込み、五包はおのれが部屋の椽の下へ埋め、のこり五包も人しれず隱おき、かくて御金藏の盜賊詮議嚴重なりといへども、誰しる人もなければ、程なく其事もしづまりし也。其後いとまを乞ひて、彼家を立出る時、五包を懷中して大坂へ登りけるが、次第に持重みして難儀の上、且道中にて心付かとおもひ、岸和田にて石地藏の後ろへ三包をうづめ、二包をば懷中して仕よし迄來りしに、猶人目をはゞかりて、まつ原のうちへ埋め置、三四十兩持て大坂へ入り、堂島に友だちのありけるを尋て、爰に落付て、先試みにとたんを初めしに、思ひの外大利を得て、夫より家を持、仕よし岸和田に埋置し金を密に取來り、米商ひをはじめて暫くほどを過て紀州へ下り、「外堀へ埋置ける貳千兩を馬荷三疋の中につゝくり込み、大坂へかへりとたんをして金の出し入して、金をまぎらせしゆへ、心づく人もなし。年をへて樂々と暮せしが、にはかに下りにて大に利をうしなひし故、また紀州へ下り、まつの根にうめ置し千兩を掘出し、前のごとく荷物につくり、以前おのれが仕し部屋の椽の下に埋し五百兩も、此序に取て歸らばやとおもひ付しより、ある夜密にしのび入たり。夜中犬の吼るはかならず盜賊の入たるのみにはあらねども、人來りて内をさぐり伺ふ事も有。犬の吼るは常の事なりとて、見廻らざる時は災の起る端なり。また夜中もの音あるは、鼠なりとて打捨おかんは、ことの起りあるべしといへり。此家の主人もの音の耳に入しかば、ゆだんせずして立出ける所、金を掘出し懷中して急ぎ逃去んとして轉びしに、石にて腰の骨をしたゝかにうちければ、痛みつよくて立上る事ならず。終にとらへられたり。主人よく〳〵見れば、以前めし仕ひし小者也。家内を改るに紛失の品はなしといへども、懷中の金五百兩を見とがめて、内々に濟しがたく、則奉行所へ訴へけり。吟味せし所、先年御金藏の盜賊たる事あらはれて、御仕置になりけるとか

や。いかに智謀をめぐらすとも、天道に背きし行ひあれば、つひにのがるゝ處なく、おはりを能する事は叶ふまじ。よく／＼かんがへおもふべし。欲心をはなれて理にしたがふはかたき事といへども、おのれが身のほどを考へ、せめて欲にはかぎりなきものと心得さとりて、たゞ／＼心をみがくべき事ぞかし。

○加賀にて天狗を捕へし事

一加州金澤の城下に堺屋長兵衞といふて數代の豪家あり。彌生半の頃、まだ見ぬかたのはなを尋んとて、手代小ものめしつれて、かなたこなたとながめけるに、ある社の松の森の方より羽音高く聞えける故、あふぎ見れば天狗なり。あなおそろしやとおもふ間もなく、この者の居たる所へ飛來るにぞ、今ひき裂るゝやらんと、生たる心地もなくひれふしけるに、天狗のいわく、其方にたのみ度子細あり。別儀に非ず。今度京都より仲ケ間下向に付、饗應の入用多き所、折ふしくり合せあしくさしつかへたり。明後日晝過までに金子三千兩此所へ持參して用立べしといふ。長兵衞いなといはゞ、いかなるうきめにや逢んと思ひて、かしこまり候よし答へければ、早速承知過分なり。しからばいよ／＼明後日此處にて相待べし。もし約束違ふことあらば、其方は申に及ばず、一家のものども八裂にして、家藏ともに燒はらふべし。覺悟いたして取計べしといひ捨て、社壇のかたへ行にける。長兵衞命をひろひし心地して、早々我家に歸り、手代どもへ此よしをはなしけるに、或は申に任すべしといふもあり。又は大金を出す事しかるべからずといふもありて、評議まち／＼なりけるに、重手代のいわく、たとひ三千兩出したりとも、身だいの障りに成ほどの事にあらず。もし約束をちがへて家藏を燒はらはれては、もの入も莫大ならん。其上一家のめん／＼の身の上に障る事あらば、金銀に替べきにあらず。三千兩にて災を轉じて、永く商賣繁昌の守護とせんかたしかるべしと申けるゆへ、亭主元來其心なれば、大に安堵し、此相談に一決したり。されば此沙汰奉行所へ聞えて、其天狗といふものこそあ

やしけれ。やうす見屆けからめ取べしと用意有ける。扨その日になりければ、長兵衞は麻上下を着し、三千金を下人に荷はせ、社の前につみ置、はるか下つて待ければ、忽然と羽音高くして天狗六人舞さがり、善哉々々、なんぢ約束のごとく持參の段滿足せり。金子は追々返濟すべし。此返禮には商ひ繁昌壽命長久うたがふ事なかれと、高らかに申きかせ、彼金を一箱づゝ二人持して、社のうしろのかたへ入ければ、長兵衞は安堵して、早々我家へ歸りける。かくて奉行所より遣し置たる捕手のものども、物蔭に此體をみて、奇異のおもひをなしけるが、天狗の行方を見るに、谷のかたへ持行ける。一箱宛にて考みるに、まことの天狗ならば三千兩や五千兩くらひの金は、引つかんで飛去るべきに、一箱を二人持して谷のかたへ持行事こそこゝろへね。此うへは天狗を生捕にせんとて、兼ての相圖なれば、螺貝をふき立るとひとしく、四方より大勢寄あつまり、谷のかたへ探し入、六人ながら天狗を鳥の如く生捕にして、奉行所へ引來れり。吟味するに鳥の羽、獸の皮にて身をつゝみこしらへたるものにて、實の天狗にてはあらず。されば飛下ることは傘を持て下るなれば自由なれども、飛上る事とては曾てならずとなり。扨是をば加賀國にて天狗を生捕たるはなしは末代、紙代は四文、評判々々と午の八月江戸中をうり步行しは、此事をいふ成べし。

○篠崎きつねの事

一小松川の先に篠崎村といふ所に至りて、いたづらなるきつねすみて、人をたぶらかす事毎度なり。此村より中山の東へ鹽肴を商ふものあり。午八月廿七日早朝、例のごとく魚を荷ひて出けるが、道に四疋とも白き大狐いう〳〵と晝寐して居たるを、日ごろ魚をとられにくしとおもひ居ければ、近々としのび寄り、大聲を出しおどしければ、狐は大にうろたえて一さんにゝげ行けるを、心よく見やりて行けるに、さしも快晴なりし天氣、俄にかわりて雨ふり出して次第につよくなり、衣類もひたぬれて難儀なれば、いつも休みける野中の家を心ざしいそぎける内に、早入相の鐘ほそく聞えて黃昏にいたり

し頃、やう／＼として行着けるに、此家の女房死して、今は棺桶を荷ひ出す所なり。亭主いふやう、留守をしながらゆるりと休み給へと云捨て出行ける。只壹人のこりゐて、火の傍により、ぬれたる着ものをあぶり居る所、一陣の風ふき來りて、かの女房の幽靈忽然とあらはれ出たり。氣味あしき事いふ計りなく、一心に念佛を念ずるより外はなし。しかるにゆうれい次第に側ぢかく來ると見えしが、飛かゝつて此男の腕をしたゝか喰付たり。にげ出べき透間もなければ、命をかぎり防ぎ働きけれ共、その霧のごとく姿はみゆれども、手にこたへなければ、詮かた盡てすでに喰殺されんとしける。此時篠崎村の百姓農業に出て、かの方をみれば、同村の肴うり川除堤を上りつ下りつ、種々無量に成て、身をもみ血だらけになりてさわぎ居るゆへ、例の狐に化されたる成べしとて、押すくめて天窓より水をあぶせければ、是にてはじめて正氣と成。今のありさまをかたりけり。只雨にぬれたるをいとひて、先へ急ぐのみにこゝろを奪はれ、朝早く宿を出たるに、忽ち日の暮ける事にも心付ず。扨々怖敷目にあひしと、早速小豆飯を焚、油あげを添て狐の晝寐せし處へ持ゆき、さし置てわび事して、以後をつゝしみけるとなり。誠にふるき咄しに語り傳へしごとき古格成事なり。これは目前にたしかにみたるとて、此村のものはなしける也。尤此日雨はふらねども、降ごとくの術をなし、夫よりばかし入たるなり。腕を喰つかれたるはまことにて、しばらくは其いたみに難儀したるとぞ。

○別世界へ分入し事

一信濃國松本領の獵人、山ふかくわけ入て鹿を追ひける所に、山上より石のころび落るを除んとて、是をふみ損じ、何丈とも知れぬ谷底へ落入たり。されど仕合と、さのみ身もいたまざれば、もとの所へ上らんと仰ぎ見れば、屛風を建たるごとき岩なれば、すべきやうなく谷底をまわり行道を尋ねて、山をこえ谷に入り、五六里ばかりにして田畑をみかけたれば、人ざと近しと力を得て尋行ば、谷間少しうち開けたる所に人家五六軒あり。此家に入りければ、老翁壹人火を焚居たりしが、大に驚きたるさう

すにて、何ゆへありて此處へ來れりと問ふ。則しか〳〵のよしを噺し、ことの外空腹なれば一飯を乞ひける。扨これより松本への道を問に、みち筋なしと云。此人々は小笠原大膳大夫長時の一族なるか、武田信玄のために家亡びし後、此處へ引籠り、子孫今に相續せり。世の外の住居にて、何國へも通路なし。此谷中に堀井ありて、僅に人々の用足ばかりは有けり。他所のもの若しまよひ來れば、打殺して歸さゞる習はしなり。人のしらぬ內に早速逃去るべしと、老人のおしへけるゆへ、夫より足をはかりに駈出しける。遙にへだてゝ谷を越て見れば、跡より若男五六人、此かたへ追ひ來るごとく見えけるゆへ、いよ〳〵心も空にゝげさり、山を登り谷を行、道なき所をわけ過て、三日目の行がたに、（マヽ）飛驒國檜皮といふ所へ出て、それより松本へ歸りけるとなり。誠に隱れさと共いふべき處なり。遠州秋葉山よりも楢のゝ方山奥に、京丸村といふあり。家數五六軒あり。名主を源左衞門とて、京家公家の末なりしとて、緋威のよろひ錦の直垂を所持せり。往古亂をのがれて、此山中にかくれし子孫なりといふ。今は此處へ通路出來たり。むかしは此類多かりしなるべし。

○青山火事の事

一午七月廿六日夜四時過、青山邊五十人町より出火して、西北の風つよくなしといへども、此頃久しく雨ふらざりしゆへにや。大通りを新屋敷迄燒て、曉八ツ時過にいたり火鎭りたり。しかるに其曉赤坂紀州屋しき內より出火なり。西北の內長屋三棟やけたり。此時重き御役人の內登城おそき方ありて御咎にあひたり。夫よりして御番方の寄場へ出る事も甚むつかしくなりしが、程なく又已前のごとくなれり。

○町々木戶にて往來を改る事

一天明七丁未年五月、飢饉にて江戶中騷敷、其年より町家一町々々に木戶をかまへ、四時より門をたて人をあらため、拍子木をもつて人をおくれるなり。壹人通れば拍子木壹ツうち、貳人は二ツと、人數

に合せて打、隣町へ告知らせける事也。拍子木の聞えて人來らざる時は、兩方より出て町内をあらたむるゆへに、一ト所に足を留る事能はず。是より世上もの靜になりて、下町邊は年々に大火事ありしも、その後は火災すくなになりたるは、全く木戸々々のしまりにて、往來を改る故なるべし。町家のうらやに井戸有て、路次口に井の印をはり置事は、村上肥後守町奉行勤役の節よりおこれり。又天明の飢饉に、米屋ども大利を得たりしより、申合せて俄に米の値段を上げ、また俄に引下げする事、年の内に三度も五度も有て、手の裏をかへすがごとくにして、其度々大しんだいなる問屋利潤を多く得て、中より已下の米屋は續きかねて店を仕廻ふものあり。その日暮しの町人ども難儀する事いふ計なし。明て御圍米といふ事は始りて、米高からんとする時は、御拂米に出て、下値なる時は御買上ありて直段を上るやうにす。いはゆる平準なり。是より大てい直段定りて、月々に高下ある事なく、凡百俵に付三十四五兩を下直とし、四十五六兩を高直としてうりかひする事とはなりぬ。

○公家衆御馳走入用減じ方の事

一公家衆下向に付、御馳走方の大名よりさし出す諸道具を、皆長持へ入持登るのみならず、和歌幷に手跡の門人、其外にも少しの手筋あるもの共は、皆傳奏屋敷へ入込て、御馳走の料理を心のまゝに打喰ふ事と成て、其入用年々に增り、諸家の難儀たるによりて、寛政に御改正あり。立合の役人を定られ、無用の人を入る事なし。又屋敷へ出たる品々、一々是を改めて受取置、相濟たる上にて入札として賣はらひ、其餘の金を御馳走懸り、大名よりさし出す事となりしより、もの入過半に減じたり。御普請御手傳も無益の費多きゆへ、此時より御修復出來の後、分限に應じ相應の御手傳仰付らるゝゆへ、心遣ひも少く入用も減じたり。

○星多く飛ぶ事

一午十月廿九日の初夜過る頃より星多く飛て、夜半にいたりては雪のふるが如し。しかれども凡一二三間

にみゆる程までは下りて皆消けるゆへ、地迄落積りたるは多くもなし。十月は小ゆへに、朔日の夜明頃にいたり見えずなりぬ。又十一月三日の夜にも、星飛事前のごとくなれども多からず。吉凶の驗いかにとも定めがたしといへども、凡天變は君子の恐るゝ處にして、人々つゝしむべき事成べし。ある人申けるは、天は廣大なれば、飛物その外天變ありとも、異國の事にや。本朝の事にや分りがたしと申せども、いさゝか道理有に似たれども、大なる謬說なり。凡飛ものは甚低事にて、地氣に寄て移り見ゆるものなれば、其國の凶としるべし。地氣常のごとく成は、飛ものみゆる事なし。雨を催す時も、その國にて見れば、月日に雨傘懸るごとし。是かならず諸國共に見ゆる事にてはなし。其土地の氣に寄てあらはるゝもの也。飛物のたぐひ是に同じとぞ。しかるに臘月にいたりて關東疫病流行せしは、地氣のしからしむる處にてあらん。

○角力、芝居盛衰の事

一明和のころより谷風といふ角力取世に名高く、關東方の大關と成。其頃是に及ぶものなしと、又九州方に小野川といふあり。江州大津産にて、久留米のかゝえなり。一體は谷風に對すべきにあらず。谷川とはねを取る時は、たちまち土俵の外へはね出さるゝゆへ、谷風一生此手をとらず。又長く揉合ふ時は、小野川ちからつかれて、必押出さるゝ故、行司其程を見はからひて引分とし、勝負を決する事なし。しかれば此時に當りて、谷風に對して、是程の間も相手になるものなければとて、小野川を九州がたの大關と定めて、勸進元の花とせり。小野川身の重さ三十五貫目、しかも其祕妙手ありし。少しの透もある時は、谷風といへども勝手あり。寛政のはじめより兩人の角力盛りにて、見物群集し、曉七半時より相撲場に居所なきほど充滿して、皆夜の明るを待居たり。寛政三亥年六月十一日吹上の御庭にて相撲上覽あり。詰合の布衣以上役人をはじめとして見物仰付られて、御番方は當番のうちより二日代りに見物す。此日谷風と小野川取組有り。勿論谷風勝て弓をもたせて歸りたり。其後また

上覽ありし。此時もおなじ取くみなりしが、小野川とてもかなひがたくやおもひけん。場所までは出しかども、俄煩ひにて御斷申上たり。其頃牛頭の勢ひなるに、如何して斯は臆しけるにやと、其故をたづねければ、外にての相撲とちがひ、上覽の節は引分ケといふ事は曾て成がたし。いつ迄も勝負の分るまでとり結ぶゆへ、かくは御斷申上しよし中聲も有しなり。谷風は剛强大力にて、相撲の妙術を得たるのみならず。又勸進角力の上手なり。若ものゝ日の出贔負多く、評判高き者と取組時は、先しばらく押合て、その者の器量一ぱいに祕術を盡させ、下を引立たすけゝるゆへ、其内には自然と面白き妙手も出て、感心多きこと故、貴賤かんじて見物せり。谷風は幼名與四郎と云。父は彌右衛門とて賤しき百姓なり。寛延三庚午年八月八日奥州宮城郡霞目村にて生る。十九歳にて角力に出て秀の山といふ。のちに伊達關と改め、二十七歳の時谷風と改め、梶之助源守胤と云。寛政元酉年十一月十九日横綱免許あり。本朝角力の司行司追風より出す所なり。同七乙卯年正月九日四十六歳にして死す。東漸寺に葬るといへり。是より關東方の大關は雷電といふ。雲州の抱えにて、無双の大力、三拾八貫目有と云。日の出のすまふなり。小野川は是にも勝事能はず。後は雷電との取組も、其日にいたりていつも斷るゆへ、次第に小野川の評判あしく成、雷電につり合べき相手なきゆへ、相撲の見物も多からず。其後は上覽の御さたもなく次第におとろへたり。また戲場には木場の五粒、王子路考、中むら仲藏などいふ役者あり。作者は櫻田治助名高かりし。下町邊年々の火災に世上もしづかならず。芝居小屋も度々類燒にて不繁昌なりしかば、座本名代も替りて、桐長桐部傳內、河原崎權之助などいふ者も、寛政十午年の顏みせに、三芝居とも元のごとく、中村勘三郎、市村卯左衛門、森田勘彌座本なり。木挽町にも操芝居、吹屋町河岸に子供など出來て、いづれも繁昌時を得たり。此顏みせより六代目市川團十郎年若なれども、數代の名家にて贔負多かりしかば、中村座の座頭らと成。仍て隱居白猿は座着口上に出る。大當りに付狂歌白猿一首といふ本出たり。是は座付の口上之內、毎日白猿狂歌一

首づゝいだせしをしるせし本なり。其狂歌は取に足らずといへども、一二を爰にしるしぬ。

悴團十郎廿一歲にて座がしらに成し有難さに、

そろばんの親玉子だま目ぱち〳〵しめて三七二十市川

牛島をもう出まじとこもりしにひき出されたるはなのかほ見せ

鼻たかき人とや我をうはさせんあきはの山のちかくに遊べば

三升より養老酒を五合おくりければ、

三升を六つにはかりし六代目五合づゝにぞあたるかほ見せ

極月朔日の寒に入、

今日最期かん念佛の聲きけばはるになるのもしばらく〳〵

いてつよき勘三はひいき厚氷われぬさじきで入はめり〳〵

口上は枯木にはなのさかゐ町むかし〳〵のぢゞいなれども　四方眞顏

舞臺では見まい聞まいと思ひけりいふまいとおもふきみが口上　錢屋金狩

毛の三本たらぬ芝居も白猿できのぼりのするほどの大入　雪　面

口上に引出されたる牛じまやひともよだれをたらしてぞ聞　面箱黑記

團十郎は年わかなれども贔負多く、古今未曾有の稀有なりと評判彌高く、未の春あげまきの助六の役は、元祖栢延以來の大出來大あたりと沙汰しけるが、不幸短命にして、同年五月六日に死たり。天我を亡ぼせりと白猿が歎き大かたならずと聞えし。此白猿も祖父の跡にて狂歌を好みけれども、誠に狂言芝居の狂歌也。前方芝居を止て隅田の庵に隱居せし時、

うへつがたならば紅裏めすところに我はぬぎけるもみうら衣裳

身のうへをかへり見ますのえびならばこしをかゞめて鬚のびるなり

おしまるゝ時ちればこそよの中のはなもはなゝり鼻もはなゝり

世に所謂えびす歌といふは、是に異なり。ゆへにいさゝかその大たいを記しぬ。

十六はさゝげのはなのひめうりをきうりするとはすいかぶすいか

釜のした焚つけられて移り氣なもゆるおもひをうらめしとする

曉にひとりこがるゝやきめしはよひにむすびしちぎり成らん

宵はつき夜中はとほし曉はこぬか／＼とふるひこそすれ

ほんの子をもたぬはうしの身にしあればそばこをもつてまうし入候

にへかえる音は身もよもあられ釜かけしむかしはちん／＼の中

首ながく嘴ながくあしながくよはひもながくよくそろひ鶴

聟入てやがて數の子まつまへやおつとせい出せにしんよろこぶ

表家は氣もはりまがた高砂やうらはすみよし尉と姥なり

欠落やたを行さきはほとゝぎす御損かけたと聞て血を吐く

旅人は日もくれ竹のむらすゞめとまりてはたち／＼

世中にかほどうるさきものはなしふんぶといふて身をせむるなり

としを經て黑髮山にちら／＼とまじりておつる瀧のしら糸

○鰒いましめの事

一田汝成が河豚を喰ふ說に云、美にして毒あり。庖治謹まざればよく立所にひとを殺す。豈人として鰒に殉て以て父母の遺骸をないがしろにすべけんやといへり。寺島良安が云暫時の口味に泥んで身命を睹にするは、衒媱をする者の心持其趣一なりと、此事尤也とすべし。然ば其事を持て後に毒ある事を知らんや。鰒の毒の事は、世に知る所也といへり。甚守りがたく、やゝもすれば毒に中りて命を失ふ

ものあり。愼み恐るべき事成べし。四番組大番小笠原近江守組本間十右衛門といふ人、若年の頃騎射人なり。午の十一月末加賀屋敷にて射的せし歸りに、四谷御門外御小姓組石川甲斐守組河原新五郎方へ五人連にて立寄、鰒汁を催し、心安き中なれば、鍋ともに座敷へ出し、大火鉢へ懸置て心儘に手盛して喰し。酒もおもふまゝのみて、人々奥に入ける處に、十右衛門俄に煩ひ出し、血を吐く事五七升ばかり、大にくるしみ即死す。又體たちまち紫色に變じけるおそろしけれ。一座の面々、爲方なく付添て、十右衛門宅へおくり行、始末一々演説したり。家内此有さまを見て仰天し、敵うつべき譯にもあらざれば、兎角の言葉もなき内、こそ／＼とたち歸り、十二月十三日跡目願ひ濟て、同月廿七日物領正之助へ跡目相違なく下されたり。此頃これも大御番中坊河内守組小林平右衛門加賀屋敷に住せり。組々の勤年數にて、惣領傳次郎は去る九月晦日京極備前守宅にて、若年寄衆御逢濟ければ、御番入を今や／＼と待居たる所に、十一月十八日平右衛門病死して、是も十二月廿七日跡目相違なく下し置れて、平右衛門病體は王子稻荷へ參詣し、鍵屋といふ料理屋にて、鰒汁を澤山に喰たるが、即中りて何の苦もなく死したりしを、駕籠に乘て歸りけるとぞ。此外にも當冬鰒汁に中り滿座のこらず死し、或は其中に一兩人死たるなど專ら沙汰せし也。輕きものはかぞふるにたらず。鰒に毒有て中るといふ事は、老少口々にいひ傳へてしれぬ事なれども、好みてくらふ人多し。されども中らぬ人も多し。近來は料理の製法よろしき故なりといふものあり。當午の秋より鰒のために命を失ひし人多し。されば季候の變にて毒に淺深有事と見えたり。此後も今年のごとき季候も有べし。河豚は必喰ふまじきものなり。爰に近頃まで中間勤しもの、瘡毒を煩ひ出し、手足働かず、後は腰もぬけて、番町の辻番にかゝり居たるが、此節鰒の中かといふ事を聞、かくてながらへあらんよりは、是を喰ふて死ばやと思ひ、すゞを澤山に入て喰ひし處、案のごとく夜半頃よりくるしみ出し、眞黑にかたまりたる血をはき出す事限りなし。扨こそ是にて死すべしとおもふ内、翌朝までも血をはきしが、夫より血も留り

て死もせで、其跡何の替りたる事もなし。五七日過ければ、さしもに掻亂れたる瘡毒拭ひ取たるごとく直りて、全く快氣せり。是は鰒にあたりて惡血をはき出せしゆへに、平愈せしもの成べし。良醫の許にも藥ならぬ品なしとは此たぐひにも有べし。

○越後根張地藏の事

一越後國梅崎は富家軒をならべ、此邊りにての繁花の地なり。今は白川領となれり。此宿往來の中に根張地藏とて、土中より肩計出、錫杖をもちたる手先少し出たるあり。いにしへより是を掘出さんとするに大雷大雨し、或は祟り、又掘出せし土、一夜の中に落て穴埋もれ、終に分り得る事なきゆへに、根張地藏といふなり。

梅翁隨筆 卷之六

○深川にて女敵打の事

一深川猿子橋に女の敵打あり。其濫觴を尋るに、此女の父は元松平和泉守の家來なりしが、不埒の事あるによつて、他家奉公も構はれ、永の暇申付られける。世をわたるべき爲、陰陽師の門に入り渡邊左京と名乘り、中橋邊へ出て辻八卦を置、また人相も五官十二宮骨格の善惡など少々覺えし事有により、水鏡集、言諺解、神相全編、迂遠の說を師として、爲に和漢の相違差別あることをわきまふべきにはあらねども、是等の書をちからとして、妻子を養ひ寒を凌ぐために、俄におもひ立し業なれば、見極めの傳授有事にはあらねども、一體頓智能辨多才成が幸にして、時行出し、贔負多く次第に富饒になりしより、世話するものありて、八丁堀の稻荷神主となしたりける。名も齋藤大和と改め、彌家富みさかえけり。金銀自由成により土御門家へ手入して、江戸の觸頭となりぬ。抑觸頭は、江戸中所々へ出る八卦、人相、手の筋等をみるやからより、一ヶ月に百文づゝ土御門運上金を出す事也。此外又御門下職札取し面々より、一ヶ月に金百疋さし出し、其内三歩一は觸頭の役料にする定めなるゆへ、いよ／＼金銀多く集りて、何壹ツ不足なき身と成しより、又々持病おこり、奢侈つよく日夜に增長し、相撲見物、芝居、船遊び、遊女通ひ等に數百金をつひやし、思ひの外に內證不足し、爲方なく江戸中運上、の名前を隱し、土御門へはやう／＼半ばをおさめける。後此事あらはれて神職をとゞめられ、又々よるべなき身となれり。爰に本所森下町に神保左京とて六千石の寄合あり。其家老を崎山兵左衛門といふ。代々三百石にて由緒ある家筋なり。此もの遊興を好みけるゆへ、風斗大和と心安く成て、出會の時も有し。此者口入にて左京の方勝手役人に住込けり。此時又姓名を改て山崎彥作といふ。然るに此とし

左京知行所不作にて五穀實のらず。勝手の賄ひ、家中の手當、すべき樣なければ、役人ども金子才覺の外他事なし。兎角金子引合所々間違て皆々心をいためける所に、彥作神主たりし時信仰のものに富家の町人有けるに談じて、金子を出さする樣に約束とゝのひけれ共、彥作を日當として金子出す事なれば、彥作を家老とし、勝手懸り申付られずしては、返金の程も覺束なきやうにいふによりて、則彥作を取立て兵左衞門と並べて、勝手向取締の事司るべきとの事にて、家老と成金子調達して差支なく事濟たり。是より入用向の事改る所に、只今まで一切兵左衞門が引受たる諸入用甚だ費え多きゆへ、彥作が改正にては、やう〳〵半分の入用にて事濟ける。上の費は下のうるほひにて有なれば、彥作をにくむ人多し。其上今までの勝手役人をば追々に改替てたゞしける。其事の末より兵左衞門が身の上と成て引負のはし顯れぬ。左京此よしを聞て、兵左衞門が數年の私欲內々にて改め申聞べしとの事にて、入用向を吟味するに、凡四五百兩餘の事に見えたり。其外の者共少々づゝ引負なきはなし。此段兵左衞門はじめその黨のものども承引し、とてものがれぬ事と思ひ、兵左衞門惣領平內密語して云、彥作を殺害し、其口を消して後難をのがるべしと、同類七人申合せて、ある夜にはかに殿の御召也と申あざむき、何ごゝろなく來る所を、崎山平內待ぶせし、手鑓をもつて胸のあたりを突通したる處に、一味の面々取卷て切ころし、夫より血刀を下げて、主人の居間へ行、左京を取卷申けるは、山崎彥作邪智ふかく、御譜代たる我々どもを讒言して、咎なきに役儀取上暇を出し、御家を騷がせんとの惡逆輕からず。よつて臣等申合せて、只今彥作を殺害いたせし也。願くば君かれがいつわりを眞とし給ふ事なかるべしと申て、彥作をあしざまにいひなしける。その中虛實明らかならねども、今更是をたゞさんとするとも、彥作死たるうへはせんかたなし。又一家中徒黨せし事なれば、この上は穩便の取計ひ方しかるべしとおもひ、左京の手討にいたせし旨に届もさし出しければ、何事なく公邊も濟たり。されども構ひのものを召抱たる事、不吟味の事なりとて差控仰付られて、是にて一件相濟、

彦作後家娘も手當金を遣して、屋敷を引拂はせけり。主人手うちのよしなれば、妻子もぜひなくあきらめて退去せり。親類は殘らず義絶ゆへ、神職のころ世話いたし申遣したるもの中橋邊にあれば、夫へ先落つきける。左京方にては、崎山平内今度の一件發端人の事なれば、是また暇遣しけるが、内々は知行處へ遣し置ける。一兩年過て父の勤功もあればとて歸參をゆるされ、當時用人を申付られける。彦作が後家娘は、中橋の神道者かたに居しが、その者の病死したる時、その者の弟子に平井專良といふもの年若なれども、かひ〴〵しき生れにて、師の病中付添世話いたし居しが、此もの店受と成て、後家娘は中橋塗師町棧次郎店に借家を借り、專良は神道者のぞみなければ、深川猿子橋へうつり、手習指南をして世をわたりける。かくて崎山平内今は神保家へ歸參しける。彦作實はかれが爲に死して殺され損となりしよしを聞出し、後家娘はふかくうらみける。折を得て敵をうつべしと申合せけり。專良も助太刀すべしといふにより、兩人大に力を得て、首尾よく敵を打おほせなば、娘を遣し夫婦とすべしと、後家もゆるして、是より敵討のこゝろ懸しきりなり。かくとはしらぬ崎山平内所用ありて、此處を通りける折ふし、彦作が後家娘、專良がゝたへまゐりて見合ければ、娘甚せき切てものをもいわず、彦作がかたみの刀をたづさえてかけ出すゆへ、母も懷劍を取出し、引續ひて追ひかけ出たり。時に寛政十戊午年十一月十二日四時ごろ、寄合神保左京家來崎山平内、深川猿子橋を何ごゝろなくうち渡り、大橋のかたへ行かゝる處を、彦作が娘はる一番に追付て、父の敵覺えたかといひもあへず、平内がうしろより二ツになれと切付しを、平内は身をかわし外しければ、切先はづれに肩より背中へかけ八寸計切付しかども、疵淺ければ事ともせず。元來二刀流免許の劍術者なれば、早速拔合せ兩刀をもつて切はらひたり。平内は三十歳究竟の壯士にて、しかも武術に鍛錬せり。此かたは十七歳の娘にて、打太刀筋も定らず、切捨ん事はたやすかるべきを、平内は父の敵と呼ばれしに身おくれして、透もあらば引はづして逃さらんとのみこゝろがけゝる。その内に母みきもかけ付たり。年四十

六歳懐劍を拔てたちむかへば、娘はる是にちからを得て踏こみ〳〵切懸るを、兩刀をもつてきりはらひ請流し、次第々々に引て行。此時平井專良は洗湯より戻りかゝり、みき・はる兩人の女、平内とこゝを最期と切むすぶを見て、近々とはしり寄、專良來れり力と成べきなれば、こゝろ强く働くべしと聲をかけゝれば、兩人いよ〳〵勢ひを增し切込を、平内は專良を尻目にかけて切合ふたり。此時まで平内何とぞして此場をにげのびんとのみ振舞けるが、專良が助け來りしより、今はのがれぬ所と覺悟せしにや。進退するどく切合ゆへ、娘も手負、平内も疵を受たり。しかれども平内は袷じゆばんに小袖貳ツ、白鳥の毛にて織たる胴着を着し、とろめんの羽折りを着たりけるゆへ、白鳥の胴着に請て切付る疵は深からず。扨此處は一方は町家にて、北側は籾藏なり。御普請最中にて、壁土をこね置し上へ、娘はるはふみかけしが、大にすべりてたふれし處、平内透さず踏こみて、拜みうちにと振上る所を、專良たまらずつと寄、側に有ける左官のさゐとり棒にて、取あへず平内をなぐりければ、平内ころびながら切はらひたる太刀先に、專良が腰の下を切られて覺えずたるむ處、其間に平内立あがりし所を又棒にて打ければ、持たる刀うち落され、今はかなはじとやおもひけん。逸足出して逃けるが、道すぢは往來の人ゆきかゝり立止り、見物東西にみち〳〵てのがれ出べきかたもなければ、えびす屋といふくわし屋の有けるが、此家の脇の路次へかけ入、裏傳ひに逃延んとす。專良はじめ町内のものども引續て追行けり。此路次ゆきどまりにて逃出べき道すぢなく、平内狼狽する處を、大勢かけ寄り無二無三にぐる〳〵卷にしける。娘も引續て追來りとゞめをさゝんとしけるを、町内人捕へしを殺害せば、所の難儀にや成べしと母の申せしによりて、その儘にて早速うつたへ出るに付、町奉行小田切土佐守役所にて一通り尋のうへ、後家娘幷專良は町内のものへ預け、崎山は主人左京かたへ預遣し、疵養生いたし候上にて吟味とげらるゝと也。しかるに專良疵少なけれども咽へかゝりけるによりて、同月末死去いたし、平内も十二月のはじめ死去せしなり。孝子の太刀先天運盡る身に受たる故成べしと

中あへり。双方死去の上は、御詮儀屆がたし。且親夫のかたき平内、右の疵にて死たればうらみの殘るべき事にもあらずとて、兩人の女町預けをゆるされて、滯なく相すみけり。かゝる女の細腕にて、安々と敵を打し事、誠に天の加護なるべし。此事のおこりは、神保左京最初のとりはからひ方屈かざるによりて也。去ながら程すぎたる事ゆへ、御糺明もなくして、未二月四日さし控被仰付たるばかりにて事濟たり。まことに莫大の御慈悲なりけり。

○寶の箱を授りし事

一此ごろの事のよし、麻布邊に遠藤内記といふ欲ふかき神道者あり。祈禱をたのまれて行けるが、其内のやうすを見るに、宮殿樓閣甍をならべ、畫にて見たる唐土の宮殿のごとく、終に見馴ぬ家造りなり。爰に狂亂せしものありしを、只ひと祈りにて忽ち正氣と成しかば、主人ふかく感悅して、一つの箱を携へて授けて云、此品微少也といへども、隨ぶん大切にもちなして崇敬し置べし。長壽にして富貴こゝろのまゝ成べし。かならず箱のふたをひらく事なかれと、かたくいましめて渡しけり。斯て我家へ歸りて見れば、大勢の居る樣子いか成事やと尋るに、歷々より御符貰ひ、あるひはおもひがけなき所より、謝禮として金銀卷もの山のごとくあつまりたり。跡よりも引續いて持來る。家内のものども餘りの事ゆへ、御こゝろ覺有りやと尋るに、今日よりは日々かくのごとく有べきなり。此事いさゝか不審におもふべけれども、段々譯ある事也。なんぢらはさて〳〵仕合ものなり。某がかげをもつて安樂の身となるべしなど、髮をなでゝ大言して微笑し受納しけるが、後には家内のうちに置あまり、次第に夜もふけ、みな〳〵草臥ければ、跡より來る使は、先明日來らるべしと斷りをいひかへして、種々の寶をつみ上たる中に、家内一緒に臥たりける。夜あけて彼集りたる物をみれば、眞の寶はひとつもなく、古菰、莚、鐵、瓦、木竹の切はし馬の沓をはじめとして、種々無量の穢れたるものども山のごとく積かせねたる。その中に臥居たり。此事外聞惡しければとて、包みかくし掃溜を持出し捨るやう

に見せたり。去ながらあまりおびたゞしき事ゆへ、近隣の人々不審して聞出しけるとぞ。此事識しからぬ事といへ共、又是より先にも、是に類せし事を見聞し事ありき。寶暦のころ、表二番町に大岡吉之助といふ大御番あり。今新御番を勤る大岡吉太郎が祖父なるべし。吉之助は寶暦二年部屋住御番衆なり。又春田彦四郎といふは、其頃政八郎といふて淺草千束村に住居せり。兩人ともよし原の花に心とまりて、たえ間なく行通ひし頃成しが、或朝彦四郎かたへ吉之助來れり。例の如く後朝ならんとすぐに居間へ通しけるに、吉之助衣類大小は勿論、面も手足も泥に染み、茫然として入來るゆへ、彦四郎大に驚き、いかゞせしや。先その姿は何事ぞと尋れど、其答はせで、扨々夜分程おもしろき遊びはなかりし。同道なさで殘り多し。是は跡の事にして、ゆる／＼と咄すべし。甚空腹なり。何もなくて宜。茶漬をたまはれといふ。され共常ならぬ形相ゆへ、喧嘩にてもせしや。又はいたみ處はなきやと尋れ共、先々飯を出し給へ。跡にて昨夜の遊興山々咄すべし。其たのしみいはん方なしといふ。其容目のうちなど常ならず、先々のぞみにまかせ飯を出しければ、息をもつかず六七杯のむやうに喰ひおわる。やがて箸を置かと見えしが、そのまゝたふれて正體もなく寐入たり。いかさま狐狸に化されたるにもあらんと察しければ、夜着などかけて置けるに、晝過れども目も覺さず。ゆり起しければ、やう／＼正氣に成たる體ゆへ、衣類大小などの事を申せしかば、大にいぶかしく思ひながら、昨夜馴染の方へ行て、種々の遊興を盡せしかば忘れず面白かりし。夫が夢か。今が夢か。さらに分兼るよしを申ける。此事をばその頃の組番は、皆々くわしく聞たる事成しとかや。

○信州にごり川の事附武州年とらず川の事

一木曾路鹽多奈宿のこなた塚原といふところの往來に、三四尺計の溝川あり。是を濁川といふ。川の源は淺間山よりながるゝとぞ。此川月の初め十五日は水すみ、下十五日は濁りて、毎月違ふ事なしといへり。又武藏國入間郡藤澤村、四谷海道中野より八里計先に、年とらず川といふあり。青梅のちかき

あたり川巾凡二間ばかり、清水常にみなぎりながるゝなり。此處土地たかくして、井戸を掘る事たやすからねば、此川水をくみとりて、村中遣ひ水とせり。しかるに除夜にはきわめて水かれて川原となれり。誠に水一滴もなし。此日朝より水次第々々にへりて、暮がたはから堀のごとくかゝる事年々かはる事なし。立春の日より水次第にながれ出て元のごとし。夫ゆへに此川を年とらず川とはいへり。

○清朝物語の事

一唐土にて祭祀のある三ツあり。いはゆる孔子、關帝、天后也。春秋に祭るなり。關帝とは、三國の時の關羽の事なり。武運の守護神なりとて、武官の面々は勿論、諸民敬ひ貴ぶ。五月十三日死去の日にも大祭あり。天后と云は、專ら海上の守護神なりとて、國々にて祭る。宋の大祖建隆元庚申年三月、福建興化府湄川にて生る。父は林氏、宋朝の刺史たり。致仕の後天后を生む。幼少より智惠賢德人にこえ、十六歳の時、道士より道をさづかり修行して、二十八歳の時、重陽白晝に神と變じ、湄州の高山より昇天して、世々神靈感應いちじるし。信仰祈誓するに、そのしるしあらずといふことなし。代々の帝王封贈して、清の康熙廿三甲子年、天后と封贈ある。まつりは三月廿二日誕生日ごとに勅使湄州へいたり、京師の廟へは天子みづから參詣ある。三侯九卿その禮をおこなひたまふといふなり。清朝にては客をよぶに亭主獻立をこのむことなし。一體料理に一定の獻立あり。六椀、八椀、十椀、十二椀なり。六椀の菜には何の品、口取は何々幾品、八椀は菜は何々といふ定式の色品さだまりあるゆへ、只今度の客には幾椀菜の料理を出すべしと申付るのみなり。都て客を招にみな酒肴ばかりにて、飯をいだすといふ事更になし。酒宴おはり後、酒の少きもの飯を喫するもあれど甚稀なり。日本にて蕎麥ぶるまひに呼れて、跡にて飯を喰ふ事を憚るが如し。ふるまひには酒を專らとするなり。最初より本膳のごとく飯を盛て出す事なしといへり。清朝年始には、在京の官人は朝服を着し參內し、文官は東側に列し、武官は西側に列して、萬歲をとなへ跪、九叩頭の禮をおこなひ拜賀す。京外の官代は元

朝に朝服を着し、其處に安置の今上皇帝の龍牌に詣でゝ拜賀す。龍牌といふは木にてこしらへ、天子萬歲萬々歲と書のせたる位牌のやうなるものなり。寺院毎に佛前に安置する也。外に殿閣一寺の構はなし。官人は都て七日迄は朝服を着す。官人庶人ともに、元朝には、衣類あらため天地を拜し、次に宗廟の神を拜し兩親を拜す。奴僕は主人を拜す。羽織を着することをゆるさず。元日書物は赤紙へ吉利の文字を書す。元日用多きものは除夜に認るもあり。元日はとしのはじめなれば、ふかくつゝしみて精進する事多し。年始に來る人、空腹の人へは鍋料理鉢のものをこしらへ置て出す。口取の品鉢へ入て幾鉢も茶に出す。

一七日は人のはじめてうまれたるゆへ、人日と唱るよしにて、浙江の人は身體を秤に懸る人多し。江南邊にては立夏の日に懸る。これを秤人といふ。

一正月十三日より十八日まで六日の間を燈夜と唱へ、家々門前堂上樓上などへも種々の飾りとうろうをともし、酒宴をまうけ、家によりては糸竹等を催すもあり。諸衛門兼ては庶人猥に出入する事を禁ずれども、十五日上元の夜もとうろうの見物のために出入を許す。是を放夜と云。

一二月十九日觀音の誕生日故、香爐をたづさへ寺院に參詣多し。

一正月二月三月の間、小兒紙鳶をあぐる。上巳にも家々薺花を門戸の左右、其外竈庫上抔へもさし置て、蟻を制すといふ。

一三月淸明の日、家々柳の枝を門戶にさしはさみ、虫を生ぜずといふ。

一立夏寒露前後に、凉帽暖帽のばうし替りあり。幾月幾日といふ事は、每月かはれども定れる日限なし。又衣類を寒暖にしたがひ勝手次第着用する事にて、更衣といふ時節はなし。足袋年中共に用るなり。

一五月朔日より五日まで、八月十五日より廿五日まで、十二月十五日頃より晦日までの夜まで、此三度

かけうり、金銀かし借り、諸勘定を立るなり。

一端午には家々粽をこしらへ、又硫黄菖蒲根を細末にし、少し宛酒に入て、午の時にいたり、是を呑、菖蒲、艾の葉を花生に入、門戸にも赤紙に包みさし置なり。

一五月朔日より六日まで江湖ある地は、數艘の船を浮め競ひ渡し、船の早きを爭ふなり。

一七月七日菓子くだもの七品、針七本、又色のきぬいと七すぢを七星に供へ、夜半にいたり幼女ども拜禮し、備へたる針にいとを通す。

一七月十二日先祖の亡靈をむかへ、茶酒魚肉その外果もの野菜を供へ、十五日迄日々改め祭る。

一八月十五日には月宮の誕生といふて、果もの類を備へ、酒食をまうけ、家内うち寄り明月を賞し、また朋友あつまりて、看月會とて酒宴をもよふす。八月十五日夜雨降れば、來年の正月元日晴天なり。十五日晴天なれば元日雨天なりといふ。また雲秋の月を掩へば、雨上元の燈をうつといひ傳ふ。

一九月九日重陽にて、朋友などいざなひ酒食を携へ山上にのぼり、詩をつくり糸竹をもてあそび終日遊宴する也。

一十一月四日孔子の聖誕故に、堂上に聖像をまつり、香燭を供し禮拜す。

一十一月冬至には、在京在外の番人、年始のごとく朝服して拜賀す。貴賤ともに團子をつくり喫し、家々に酒宴を設け祝ふ。

一十二月九日頃より吉日をゑらみ煤拂ひする。定日ある家は吉日をゑらばず。

一十二月十五日頃より正月半迄、花火を毎夜燈す。花火は常にも放せども、これは邪氣を拂ふこゝろなり。

一除夜には家内打寄酒宴をなし、主人より銀錢等を家族のこらず奴婢にもおくる。これを分限といふ。白紙につゝみ小さき赤紙を、此かたの熨斗のごとくして付る。除夜は人によりて歳をまもりて寐ざる

もあるなり。

同夜萬年糧と唱へ米洗ひ、籠二ツに米と飯とを盛、上に松柏の枝をさし、橘子菱を置、元日より三日まで内室にかざり置。是は家に餘糧有て食に乏しからざるを表する意也といへり。此方の喰つみに似たれども、客へ出すことはなしとぞ。

○本朝農商人數高の事

一寶暦六丙子年人別改帳人數高帳を、去る御役所にて仕立たる下帳をはからず見る事を得たり。其節人數都合貳千五百九拾壹萬七千八百人、内男六百八拾參萬八千六百五拾四人、女貳千貳百九萬百七拾六人なり。日本國中の惣高貳千五百七拾萬六千八百九拾五名餘、但し松前對馬は此外なり。禁裏の御領貳萬石、本院新院五千石ヅヽ、但し御入用多時は、公儀より御合力ありしなり。女中衆切米九百石、金貳千兩、攝家親王公家衆門跡比丘尼御所都合百七拾三人、知行高凡八萬貳千貳百貳拾九石九斗也。諸大名は貳百六拾貳人、知行高千七百六拾貳萬千六百六拾五石、内宗對馬守肥前田代壹萬石は入高にかくよしゝるして有し也。

○奉公人の事

一寶暦の頃も、男奉公人は時節下りても、今と多く違ふ事なし。女の奉公人は三月六日、七日のころ、いくたりともなく連來るを、其中にて樣子もしれたる相應のものをば留置て、飯に付る。夕方になれば翌日呼で仕事をさせ、又は呼出し、側にてつかひ試みし上にて、請狀をする事定式なり。飯たき女は田舍よりおびたゞ敷つれ來りて、我がちに奉公をのぞむゆへに、この方より尋ることはなし。いつ共なく飯焚女少なくなりて、所々をたのみて、やう／＼抱える事となる。夫につれて女奉公人前のごとくたらず、三五日も宿にて休息し、夫より目見に出る。此かたにてはめし仕ふ人に困り居るゆへ、來日を幸ひに相談して、とくと見ずしてあわせ召かゝえることゝなりたるは、近年の事なりとぞ。

○砂糖の事

一、砂糖日本にて植れども、黑ざとうのみ出來て、白ざとうを製する事法くわしからず。近ごろよりその法を傳授して作るものありといへども多からず。昔く持渡りを通用せし所に、寛政七、八年の頃、長崎將來の砂糖少なく、此頃までは一斤三四匁位せしを、寛政九年十年のころは直段次第にあがりて、一斤拾匁の前後にて賣買せり。これより諸國ともに砂糖を多く植る事となりたり。庚申のとし紀州より白砂糖おびたゞしく出て、是より價ひ下直と成。此ころ近江戸に生れたるものが砂糖の葉を見たる人はすくなし。

○大師緣日朝參の事

一、天明の末まで、上野大師の緣日には、朝參り多くして、曉七ツ時より門をひらきて、年わかき男女山內へ入て、おのがさま〴〵わかれ〳〵に參りしを、しかるべからざる事なりとて、寛政のはじめやめられて、夜明て山內へ入る事となりしかば、朝參りむかしのごとく群集せず。淺草觀音通夜は、男女入交りてむかしより侍りなければ、今も參詣多しと聞ゆるも、觀世音の利生日々あらた成ゆへなるべし。

○吉田在稻荷の事

一、三州よし田の在に豐川といふ所あり。爰に平八いなりとて、近來はやりの神あり。靈驗もつともあらたにして、其利生はかるべからず。國中はいふに及ばず、遠州、信州の邊まで、ことの外信仰厚くして、參詣のもの多し。ことさらに落しもの紛失ものゝ類は、利生眼前に明らかにして、盜賊など逃去ことあたはず。おのづから立戾るなりとて、信心の輩多く、本社も近來あらたに建立せり。當時流行の神なり。

○駒留石の事

一庚申の五月、本所駒留石を夜中に掘出して見えず。大川へ打込し様子なれば、松平伯耆守より人夫を出して、川中をさがし求めさせて、やう〳〵ひろひ上げし。その石をば屋敷のいなりの側におさめ置て、同じ形の石を元の處へすえ置て、今駒留石とゝなへて往來にあり。

○吾妻森楠の葉の事

一本所吾妻の森の楠の葉を煎じて用ふれば、積一通りには奇妙の靈藥なりといふことを、人々傳へ聞て望者多き故に、住僧今はその葉を能ほどにつゝみわけて、十二銅宛にて賣出せり。この頃よりの事なり。此藥末々功能あらんか。流行にてやむべきやしるべからず。

○九段坂御堀端土手の事

一田安九段坂御堀の方に、以前は土手なし。夫故新見長門守御小姓にて登之助といふころ、馬とゝもに御堀へ落たりしなり。庚申のとし道造りありて、土手を築せたり。御茶の水川ばたの土手も、此時に出來たり。

○鶴市といふ乞食の事

一鶴市といふ乞食、三芝居の役者聲いろを似せるに妙を得たり。江戸中はんくわの地へ出るに、いづかたにても見物おびたゞしといへり。就中暑氣の內は、大橋中洲の新地へ出る時は、間口五六十間、奥行三四間にもかまへ、三方棧敷を懸るに、見物居あまりて出入すべき道もなきほどの事なりといへり。其いたす事とては、鶴市壹人右に立左へ請て、立まわり役者かけ合のせりふ身ぶりを似せるに、恍然として容貌かわり、その役者たゞ今いづるごとく奇妙いふにたえたりとぞ。相手といふは、もの陰にて音曲の拍子するのみなり。壹人藝にてかくのごとく大入をとる事は、昔よりきゝも及ばず。日々莫大の金銀を得る事は、いかなる役者もおよぶまじ。天明洪水の後、中洲新地とり拂ひて、もとの如く三股となれり。此頃よりの世の風俗あらたまりて、鶴市が事はいかゞ成けんやさたする人もなし

といふ。

○見付宿泥龜屋が事

東海道見付宿に、瘤がすつぽんとて街道に其名高し。そのはじめ天明の末に、此もの菰を着て來りしが、此邊に泥龜多く居れども、むかしより誰喰ふ人もなければ、毒ありなどとて捨置しよりおもひ立て、煮燒に製し、松原へ持出て煮うりせし所、旅人の心にかなひ、日々に賣増ける。され共もとより乞食の風來ものゆへ、土地のまじはりもなかりしに、此宿中ほどに橋あり。其かたわらにとし久しき豆腐屋有けるが、亭主死して後家ぐらしなるが、未進のこりてその地を質に入て、やう／＼勘定を立、後家はうら屋へ引籠り、ほそきけぶりを立かねしを、此男妻、とし質入の地面をとり戻して、家作修理して泥龜を商ひける。これ店うりのはじめなり。其頃まで此邊りの人喰ふものとはせず。さるによつて取人もなければ、泥龜多く居て、稻のわか芽をくひ損じなどして害も多かりしかば、いづ方で取ても咎る人なく、心のまゝに仕込てうり出しけり。されども今は家をもち旅客多く入來りいとまなければ、乞食どもに申付て買取ける。はじめは八銅十二銅くらゐにて、無類の大泥龜をもち來りけるを、夫を料理して九州四國の藩中施行の人へうりけるゆへ、大利を得てたちまち金銀おふくたまりしゆへ、寛政の半には六七間間口の地所を買て家を建、奴婢をかゝえて繁昌なる立場茶屋となれり。此やうすを見て、近所のものども、おい／＼泥龜の商ひをはじめて、寛政の末には五六軒も出來て商ふゆへ、今は此邊のすつぽん取つくして、乞食ども遠方をまわりて取けるゆへ、その價ひ貴くして、最初のごとくならず。先年豆腐屋の後家、菰かぶりにだまされて女房と成たりとて、みなわらひものにせしが、今は男女の下人をめしつかひてあがめらるゝも因縁なるべし。此泥龜や腮より咽へかけて大瘤あり。一たい丈たかく中肉にて、面體恰好本多彈正殿に見まがふばかりの男なり。このものゝ煮燒、その風味かくべつとて、瘤がすつぽんとて、人々賞翫することとなり。今にいたるまで東海道

にてどろがめ商ふは見付宿計なり。此外の宿々も泥龜多くある所は、其處にてうりはじめなば、この新分限に類すべし。定めてのち／＼は宿々にてうることゝなるべき也。しかれども道中山嵐の氣におかさるゝ身などは、これらのものをくらふべき事にはあらざるべし。

梅翁隨筆　卷之七

○蝦夷地開闢之事

一蝦夷地此來季候かはり、麥稗等みのり多きより、植つけいたす程ならば、五穀成就すべしとの事にて、御普請方御勘定など、追々見分として相越、其序鮭、昆布、數の子の類を交易しに、困窮の夷どもへ食物をあたへ、病るものには藥を施し、三綱五常の道を敎示させたまはんとの事なりとぞ。代る〴〵遣はされける。のころは輕き者のみにて、取締行屆かざる事ありて、或は交易のみを心として敎育をわすれ、小利を先として田畑開發の筋おろそか成しかば、これらの事を糺されんが爲に、戊午のとしには、御目付渡邊久藏、御使番大河內善兵衞、御勘定吟味役三橋藤右衞門をはじめとして、その支配のものどもをめしつれわたりて、所々見分す。翌年は御書院番頭松平信濃守を遣はさる。三橋藤右衞門は此以後も年々相越けり。しかるに此年六月の末より、蝦夷浦川の邊りに大熊出て、家々に入り食物を探しくらひ、夷どもを害し難儀に及ぶよし訴へ出るによつて、その熊を退治すべしとて、御徒目付細見權十郎、御小人目付西村常藏を遣す。津輕よりの附人足輕三人をめし連れて、七月三日イカン臺に泊り、夫より浦川の邊り一丈あまり草高き所をわけ入、尋もとむれども見當らず。五日に一里餘山奥に入て、右熊を見つけしゆへ、蝦夷人シロテ毒矢を二筋射付たり。熊大にいかりて此かたへ飛かゝる處を、常藏が小もの鎗にて突ければ熊は逃去たり。六日熊のにげさりし道筋より尋ね入、三里ばかり奥へ入たる所、一向に道なく、山の中段に熊笹たゞ一丈あまりに生茂る場所にて熊を見出しけれ共、足場あしくて取逃したるによつて、細見、西むら二手にわかれ、猶山奥へ入たる處、細見へ付たる足輕熊を遠く見かけたるにより、夫より一手と成付入て、凡一里半計にて柳の下に水溜りあり。其側に熊の居た

るを見て、細見權十郎眞先にすゝむ所に、熊は一さんに飛かゝるを、權十郎刀にて突たる處へ、西村はしり寄れば、熊は細見を捨て西むらに飛付を、脇より口へかけて切下たり。足輕は鐵炮をうつに、またも西むらへとび懸るを切はらひ、細見もまた切付、足輕も家來も追取卷、切懸々々熊を仕留めたり。熊の丈九尺六七寸、足平幅六七寸、毛短きかたなり。右の熊の肉を料理して酒宴をもよふし、骨折たる蝦夷人どもへ、當座の褒美をつかはしける。その品々、

淺黃木綿一反ヅ、　シロテ　イカリヒリ

湯茶碗一ツ、　シロテ　サイタッソ

錢二百文　シラタカラン

古あつし一ツ　シロテ

右の通り遣しけるとぞ。

〇三人島并安南漂流人の事

一寬政九年丁巳九月、八丈島より御役船にて送りかへされたる漂流人の始末を尋るに、土佐國香郡赤岡村松屋儀七直乘船頭水主ども五人乘組、領主臺所米百石同國田の浦へ陸揚し、船頭儀七は上陸して、送り手形を持て役所へ相越けるなり。田の浦といふは荒濱にて、船つなぎ置がたきゆへ、同國のていの浦へ廻し置べしと、船頭儀七申付置たるにより、空船にてていの浦へ廻らんと、天明五年乙巳正月晦日東風に田の浦を出帆して、やほかり口まで走りのぼりける所、西風と成はね崎迄乘出しけり。風あらく吹き楫をいため、凡二十里計沖のかたへ吹出され、翌二月朔日朝より北風に替り波たかく外艫拂ければ、船たもちがたきゆへ、帆柱を切、乘組のものども髮をはらひ、諸神へ立願し、數日漂ひながれ行、方角もしらず、風にまかせたり。同月十二日波かぜやわらぎ、晝四時頃幽に島山の見えけれども、いづくといふことをしらず。その島をこゝろざし、潮風にしたがひ少しづゝあしらいて走りし

が、十三日夜明をまつて碇をおろし、島へあがりて人家ありや出水有やと尋ねまはれども人家もなし。其内に南風強く吹出しけるゆへ、いそぎて初め上りし所へ行て見れば、本船碇綱すり切、岸にて破損し、艀も破船したるゆへ、夫食もなく、火道具もなければ、せんかたなく磯邊の貝を拾ひ合ひ、またこの島へしろき鳥おびたゞしくつくゆへ、其鳥をとりてこれらを夫食とし、飢をしのぐといへども、生貝生鳥をくらひ出、水なきゆへ天水を溜置なれば、折々水をのみ切て渇る事度々也。それゆへ次第に勞れて、四人のりにて漂着せしものも、翌年迄に三人死去せり。其病體は日にましやせおとろへ、次第につかれ死すること、三人ともに同前なり。水主長平といふものばかり一人は、生ながらへて今日を幾日といふことをしらず。ぼうぜんとくらし居たる所へ、後ろの山より下り來るものあり。不審なる事におもひながら、此かたよりも歩みよりて見れば、日本の人なり。そのよしを尋れば、これは大坂小堀江龜次郎船十一人のりくみて、奥州荒濱へ御城米つみうけとして參らんがために、天明七年丁未七月八日、相州三崎浦出帆して、九十九里灘をはしりける處、犬ぼうの鼻にて、同九日の曉ごろより、北風強く吹出し、波風あらく沖へ吹出され、又西風になり、楫をいため檣をきり、東西南北吹まはされて、六十日計りもたゞよひ水ぎれに成ける。飯米五俵つみ入れしも、殘りなく成たるゆへ、粥に焚て食したる所に、翌年正月朔日かと覺えし。島山見かけたるゆへ、力を得ていづれにも取つくべしとこゝろざし、島ちかくなりければ、元船はのり捨て艀に乘て寄りたる所、いたつて荒磯にて、やう／＼取付けれども、波風あらく、其所にて元船も艀も破船して、鍋釜火うち道具少し取上、乘組十一人上陸せしといへども、食物なきゆへ先貝をひろひ食せしが、水もなければ出水の方をたづね、又山へのぼりて食物になるべきものやある尋んと、薄に似たる草の五六尺ほどにも延生茂りて、道もなきけんそを傳ひ、やう／＼山上にのぼりて、彼方の磯邊を見わたせば、人のすがた見ゆるにちからを得て、岩角にとりつき難所を經て下り見れば、面色青ぐろく、目の内赤く、唇黒く、齒ばかり

白きが、瘦おとろへて、地合もしれぬものを着し居たるに逢ひたり。長平もありし事どもを物がたりして、十二人岩穴に住居して、魚鳥の肉を喰ひ居ける。此時より長平は火だねを得て、久々にて煮やきせしものを食せり。かくて二三年もありける所、ある日天氣ことに麗かなりければ、例のごとく磯邊へ下りて貝をひろひけり。風もなき長閑なる海原を見わたせば、空はひとつに雲のなみけぶりの波のはれまより、鹿のごときもの見えければ、あれはいかにといふて近付まゝに、よく〳〵見れば、漂流の船と見えてながれ寄ゆへ、皆々濱邊におり立て待ければ、岸ちかくなりて頓て艀にのり替、此島にのりつけ、艀を繋て上らんとすれども、荒磯ゆへに心にまかせず。なみにもまれて既に破船の體なれば、此外よりもはしり寄て、艀の手道具荷物など手つだひて取上げつかわし、漂流の次第を尋るに、此もの共は、薩州志布浦中山三右衛門船六人乘くみ、寛政元酉年十一月廿八日、日向の國細島出帆して、薩州へ歸帆せんとこゝろざしたる所、同夜日向なだにて難風にあひ吹放されて、東西をもわきまへず漂流し、其後浪風しづまりたれども、檣はきり方角迚もしらず。何國をあてといふ事もなく、風にまかせて流るゝ内、飯米きれ水盡て、十日計は潮に咽をうるほし居たる所に、翌年庚戌の正月廿九日と覺ゆ。島山を見出しけるゆへ、ちからを得て元船へいかりをおろしけれども、此處海底ふかくして碇も立ざるゆへ、元船はのり捨艀にて取付たりといふ。夫より三艀乘のものども、一同に住居ける。去ながら穀類は勿論、水さへなきゆへ、難儀して又魚鳥の肉のみ食しけるゆへ、次第におとろへて、大坂船にて二人、薩州船にて二人、丑年のころまでに四人病死して、十四人のこりけるが、此島に住居してありては、いつ國もとへの便り聞く事もなく〳〵、自然と朽果るより外はあるまじきなり。何とぞ其あげ置し小道具を種として小舟取立、いのちを神力にまかせて、この島をのり出し、たとひ本國へかへる事かなはずとも、いかなる國にもせよ。五穀出水あらん地方をこゝろ懸べしと、おの〳〵評議一決して、大坂船の水主長兵衛鍛冶のとなりにて、少し見聞潮馴たるゆへ、工夫して不足の道具をう

ち立、夫より小舟取立に懸り、寄木寄せがね等を拾ひ合せ、次第に仕立ける儘、凡三年あまりもかゝりて、小船一艘出來上りしかば、出帆せばやと談じ、いづれ本國は西北のかたとおもへども、磁石なければ方角も知らず。日の出をもつて方角をさぐり、南風とおもふ時を待て、十四人の者どものり組、夫食のためにこしらへ置し鳥魚等の干物を三俵積入、風にまかせて晝夜ともなく走りければ、只渺々たる海ばらにて、めにさわる物もなし。日々風もよきほどに吹ける。五日目ほどに島山を見懸しゆへ、その方へとこゝろざし上りし所、翌日晝前着船して尋れば、伊豆國青ケ島にて日和待し、當島より水先のもの三人添へられて十六人乘組、八月の朝五ツ時出帆して、同日八ツ半時頃八丈島へ着船し、九月四日に、八丈島服部源五郎預り御役船の御代官三河口太忠方へおくり歸されたるとかや。今は食に有つくといへども、長平がごとき火食せず、又穀を食せず、水なき島に數年を經て、おもひ寄らず追々漂着人ありて、そのちからによりて歸國せし事は、實に天運なるべし。又寛政六甲寅年九月廿七日、奥州石の卷の者十六人のり組出帆せしが、難風に逢ひ漂流して、同年十一月廿一日、安南國の虎國西村小村といふに着、それより王城へ送られたり。此頃瓜茄子西瓜竹の子野菜るい多し。北極地を出る事十五六度にて、至て暖國なり。時に安南の景興五十五年ばかりなり。錢十二文つかはせば、五合入ほどの鉢にて米を山盛にして二はい賣也。錢は太祖廣天元年に鑄る處にして、則順天元寶なり。百八十文を一本と云。百文繫ぎといふはなし。安南人はちからよはし。米五六斗入の俵を二三人にて荷ひ行なり。或日漂流人この俵を曲持して見せければ、見物群集して押分けられぬほどの人なり。鬪取の相撲の如くに評判せり。逗留のうち六人死たり。永長寺といふ寺に葬る。その途中の町にて、線香燒香菓子類をもち出ておくり、棺を拜し涙をながしけること、いたつて深切に愛情ふかし。かくて四月廿五日可馬巷へおくりとゞけらるべきよし申わたされければ、皆々安堵して、用心に灸治を仕ければ、近隣のひと〴〵聞つたへて來り集り、はるか向ふにて顏をしかめ見物せり。灸治といふ事は、此

國にて曾て知らず。艾は藥種に用るゆへに製法し置なり。安南の內西山國といふは、艮にあたりて百里あまり一萬戶餘の大島なり。去年四月より反逆せしとて、此ころ討手をむけらるゝ。兵船三百餘艘にて出帆すといへり。四月晦日漂流人ども、安南より送られて、六百里ばかりはしりて、五月七日可馬巷へ着、七月十七日可馬巷を出帆して、同廿一日廣東へ着。海上三百五十里といふ。廣東の城下は方三里あり。時に清朝乾隆六十年なり。此處の米は安南よりはよし。されども日本米とははるかにおとれり。當所までは漂流人十人にて來りしが一人死し、八月十三日川舟にて送りける。是より九人にて出帆せり。二日めにコンサイといふ處を通る。其跡先三里ばかり、兩川端蜜柑のはやしなり。此處を過れば、みな白鳥にて黑き烏は一羽もなし。十二三日めにジツコンの川口へ入。此處潮の滿干には一丈五六尺計も水かさまさり、つなみのごとくうち來る。毎日斯のごとし。當時の塔四十丈計あり。清朝第一とす。十二月三日浙江省寧波府台浦へ着城する。二方は外城大河を帶、一方は海へ築出し、一方は平地なり。台浦にはじめて寒氣を覺えたり。是より商船に送られて長崎まで歸りしとぞ。

○星野久庵大幸の事

一頃日の事也しが、月次の御禮として、安藝守登城ありし處、小便所にて脇ざしを鞘ながらおとされたり。しかるにはや御禮席へ廻らるべき時に差かゝりし事なれば、付そひ來りし坊主衆星野久庵、とりあへず自分の脇ざしをまゐらせて、滯なく御禮も事濟ければ、彼脇ざしを取上て、久庵早速霞が關の屋敷へ持參せし所、居間へ通されて其脇ざしをたまはり、二十人扶持を遣すべしとなり。是より度々屋敷へ出べし、夫に付ては居宅遠方にて便りあしかるべし。永田町へ引越べしとて、引料として三百金をたまひけり。依て此頃久庵本鄉より宅地を替たり。

○元日立春の事

一寛政十一己未年正月朔日立春なり。舊冬晦日節分にて、元日の立春はめで度世のためしなりと、世に

申傳ふる所なり。左もあらん事ぞかし。しかし大三十日の混雜は例年に倍して、夜通しにも用事あまりたるが多かりしとぞ。御射場初めは、十一日前夜より雨にて御延引あり。十六日に成し處、片矢あたりの者四人あり。射禮忘却のものなどもありて、前代未聞の大不出來なりと風說す。元日は庚申なるゆへ、大事多しなど申けり。とし明てより雨雪といへども多からず。十四日の暮ごろ少しの內雪交りて雨ふりしより後は、日々晴天にて風暖か成も、廿三日より風烈しく成て、土砂を吹上、天色朦々として日も陰り勝なり。如ㇾ此にして廿五日にいたり、晝過本所永倉町より出火して、鐘突堂も燒失せり。風は猶おだやかならず。西北の風靜ならず。廿六日夜に入て、雜司ケ谷より出火ありて、其烟り先丸の內へなびきしゆへ、遠火たりといへども、世上さうどうす。廿七日夜四ツ時築地門跡の寺中より出火して、十三軒燒失し、夜明に至て火しづまりぬ。廿八日夜五ツ時過、神田三河町より出火、鎌倉河岸通り類燒し、曉に至りて火鎭たり。此時より神田橋外御用地と成ぬ。往來道筋格別にひろくなれり。同廿九日暮過築地龜島町より出火して、南八丁堀の邊のこらず類燒せり。此外に一軒二軒やけ程の火事は、日々五六度も有て、夜を安く寢かねる程なりしが、二月朔日朝より雪靜にふり出し、終日ふり通し、夜に入て霰交りに小雨ふりて、世中いと長閑に靜なり。同十日朝より小雨ふり、晝後より又雪まじり、夕かたにいたりて、大さ一二寸ぐらゐもある大雪ふり、近來にめづら敷雪なり。少しの內ゆへ多くはつもらざりし。

〇草臥ぬくすりの事

一勤仕のいとまなきもの、たまく遠道する時は、足のうらいたみ、あるひは豆をふみ出し難儀するもの也。夫を助る妙藥を虎走散と云。

生半夏　　辰砂　　黃柏　　犬山椒　　楊梅皮

右の五味、當分細末にして、燒酎にても膠にても、鷄卵にても、右三色の內にて解き、足の裏、指の

股、すべていたむべき處へよく〳〵ぬり置時は、豆の出來るといふ事なくして、心やすく數里の道を往來出來るなり。足へ豆をふみ出せしには、鬼ぐるみの皮を黒焼にして、糊にまぜはれば、一夜の内にいたみ去り、翌日歩行するに少しも愁ひなし。是等のくすりは覺え居て、人の助となる事多ければ爰にしるす。

○三圍稻荷開帳の事

一未の二月中旬より、三めぐりいなりの開帳あり。此神は駿河町三井越後屋東都へはじめてくだりし時に、此神へ立願して今繁昌の家と成しにより、代々信仰する事、爾餘の類にあらず。されば社の修復別當の手當も、殘る方なく三井勸請の社のごとし。しかれば此度開帳に付ても、世話役として手代ども日々に參り取持する事も、此いわれ有るによりての事也。此度三めぐりの開帳群集する事夥しく、堤に人餘りて押落され、怪我する人日々に多し。寛政のはじめより、所々の開帳場へは、武家體の人出る事稀なりしが、此度は歴々の家内も參詣多きと見えて、鋲打の乘もの、或はやかた舟に幕をうち、堤の下に懸りたるも少なからず。夫より以下の人々はいふに及ばず。隅田堤の櫻さかりの頃に成ては、あまり込合て、堤の上には足をとむる事成がたき程のぐんじゆなり。うりものとては堤へはさらに出られぬ程なり。扨騎射の稽古歸り十四騎のり連て來り、此邊の茶屋へ入て酒宴を催しけるが、口論を仕出し、次第に聲高になりしかば、連の人々大に迷惑して、しのびて爰に來りしに、かく口論に及ぶ事いかゞなりと、いろ〳〵制しけれども、更に聞入べき體なく、いよ〳〵雜言の募りて、はやこと起らんと見えしかば、今は詮方なくや有けん。皆々馬を引寄てうち乘、拾鞭打て走らせしかば、三巡りのつゝみ一ぱいにおし來り參詣の人々、開くべき道なければ、たがひにおし合ひ、土手のかたへ左右に人なだれをうつて轉び落、人にいとふまれ、或は馬に蹴られて、怪我する人多し。此事かくれなければ、先生より吟味ありて、當春の御庭射手三人まで引替られたり。又繋ぎ置し纜船へ亂

入して、法外の事有しも、例の隱密かくし目付などいふもの聞糺し、兩御番衆のよし屆たり。其外にてもよろしからざる事ども、見聞に及び次第に申立しに仍て、御老中かたより出たるよしの御內糺あり。番頭にても、其以前を聞及び引籠らせけるゆへ、やう〳〵申なして、御咎沙汰に及ばずして事濟たり。故に其姓名をもらしぬ。此時の組支配にて、みめぐりの開帳へ參詣せしもの丶月日を聞糺して書しるせり。是等の事はいまだ聞及ばざること也。

〇天狗六兵衞が事

一難波島屋町に河內屋六兵衞といふ島屋あり。とし若けれども、才發なる生質にて、しかも身持正しく、家業に精出し、中より上のくらしなり、十八九歲のころ行方しれず成ぬ。父母は先達て死し、叔父一人別家いたし居けるが、大になげきかなしみて、祈らぬ神佛もなし。年を經てもおこたりなきにやあらん。三年の後歸り來れり。又立出る事もやと、側を放さず人を付置しが、消るが如くまた迯出て行方知れず成にけり。叔父いよ〳〵愁ひなげきて、金毘羅をふかく信仰しけるゆへにや。六年過てたちもどりぬ。其時おそろしき羽おと聞えしが、出てみれば六兵衞立居たるゆへ、且悅び且驚き、又もや迯んと守居けるに、五六日が程は、只ものをもいわず寐通して、いかに起しても正體なし。着せし衣類は六年已前のまゝにて、少し垢つきたるのみにて、破れ損ぜし所もなく、かくて六七日過れば、以前にかわる事もなし。さればとて病氣の體もさらになし。しかるに一家內の事、町內の事などにて、のがれがたき相談ある時は、此事末々かやう〳〵成行べし。又其事はかくならんなどいふ事、きわめて申通りに成行ける。それ故に町內にては、天狗六兵衞とあだ名しける。扨未前に事をしりて、手當する事多けれども、夫を人に咄す事もなく、問尋れども知らずとのみ答へたり。しかるに此もの女犯をつゝしみて妻を持ず。いかにすゝむれども承引せず。此體にては末々如何あらんと人々申けるが、庚申の正月十七日に年禮の殘りを廻るとて宿を出しが、其後また行方しれずといへり。此六兵衞

に似寄りし事有。伊奈攝津守が家斷絶して浪人せしものゝ忰に、野井新太郎とて、麴町貝坂塚田多門方に寄宿せし書生あり。久々煩て父かたにて養生し、少し快きゆへ寄宿せんと宿を出しが、夫より行がたしらず。されども其事もしらず。多門かたに居るとのみ思ひける。四五日過て塚田方にも居らぬよしを聞、夫より所々を尋ける。その頃名高き易者下谷廣德寺前の後左郡太かたへ參りて判斷をたのみける所、葛西の邊を尋ぬべしとの事にて、彼地にて問ふに、きのふまでは其形ちの人、此あたりにて度々見懸しが、氣違の如く也といへども、人のさわりにもならねば、そのまゝに捨置しが、そのものは立ながら書をよみて歩行しなりといふ。夫よりいよ／＼此邊を尋ねしかど見あたらずとなり。

○大坂番場辻番人盗賊の事

一大坂番場の邊辻番八市兵衞といふもの有。丈ケ高く肉ふとく、辯舌よく、人愛ある男也ければ、かくてあらんよりはと、惜き事におもふ人々も多くて世話せしかども、外に業せんには苦勞もまた多しなんどいふて、年久しく此處に居れり。然るに申の二月めしとられ、獄門に行はれぬるを聞て、不便におもふ輩も多し。いかなれば斯は成ぬるとたづぬるに、數年盗賊追はぎをせし事度々なりしが、今度露顯せし事あり。去し頃例のごとく追はぎせんとて、深江の在へ出て往來を待し處に、ならの方より來る女あり。衣類を剝取んと近くよりて見れば、容顏うるはしく風俗よき女にてありければ、忽ちこゝろうつりて、ことばをやはらげ道づれと成り、先を尋るに、もとは河内のものにて出奔し、大坂に心當のもの有を尋ね行よし申にぞ、しからばこよひは我等かたにとまり、明朝先へ參るべしとたのもしげにいひ拵へてともなひ歸りぬ。此女行先とてもたしかならねば、市兵衞が念ごろに申にしたがひ、かの辻番所にしのび居しが、長く居ては人めもある事なれば、久しくは置がたく、玉造の與力にて下女を尋ぬるよしを聞、幸ひ事也とて奉公に出したり。此與力堂島の濱屋しきより嫁をもらひしが、彼下女がさしたる櫛かうがい衣類は、其嫁がさとにて盗賊のために失ひし品ゆへ、内々その出所

をくわしくたづねけるに、かの辻番人にこと〴〵くもらひしよしを申けるより事おこり、天滿の與力に一類ありければ、いさゐにはなしければ、さるを付置て見しが、次第に共はしあらはれ出てめしとられ、だん〳〵に吟味せし處、終には舊惡までもしれしゆへ、今度御仕置となりしとぞ。道にそむきたる行ひある時は、天の罪を蒙るが故、終には其罪あらはれずといふ事なし。これらの事を能々あぢはひて、其身をつゝしむべき事なり。

梅翁隨筆　卷之八

○桑名領山海の事

一勢州桑名は南に海をうけて、春長閑なる時は、しほを吹と申傳へて、海中よりほそく氣立のぼりて、次第に上ほど廣く、すゑはかすみの如し。しかれども蜃氣樓などのごとく、その氣の中より樓閣竹木の類みゆる事にはあらず。しかれども此氣立のぼる下には蛤多しとぞ。山の方は山遠く、十里十五里をへだてゝ、江濃のさかいまで山ふかし。此國境まで桑名領ゆへ、みだりに山中の材木をきり出す事を斷るために、番所十一ケ所あり。是にあしがるを三十日代りに遣はして守らする也。山ちかき百姓より賦人を出して小づかひとす。いづれの番所も、山奥にて人絶たる所なり。しかるに時々猿數多群來る事あり。人かげをみたる時は、取まきて行道をふさぎ難儀する事あり。先づその時にかならず大輪に鬮みて、次第々々に近より廻りて出べきやうなし。此用心に先づ小石を多く拾ひて、兼て兩袂へ入置、近寄りたる時は、右の石を礫にうち付る。猿もおなじく石をうつ眞似をすれども、猿のかたへは石を打つくる故、是におそれて輪を崩すなり。其時のがれ出る也。もし最初に石を用心せず。時に臨んで拾ふ時は、猿も同じく石をひろひてうつ故防ぎがたしといへり。是等の事は聞おくべき事也。火繩をもちて往來すれば、其災なし。又山中に狼多し。夜中におびたゞしく通る事あり。潮をのまんとの爲に海邊へ出といふ。此方より手だしせざれば、人にかまふ事なしと云り。若山中にして猛獸に出合し時は、芝に火をかけ燒立れば害をのがるゝと也。

○白晝に飛物の事

一己未の十月十四日天氣快晴にて風もなく、誠に小春空にて、霞るごとくにて、左ながら二三月頃にこ

となる物、いくらといふ事なく引つゞき飛行、落んとして又上りて行多し。其中に一ツ二ツ地に落たるを取て見るに、全く蜘蛛の巣のごときもの、先は丸くかたまりたらず。此日大坂にて、淀川の方より天王寺の方へ、蜘蛛の巣のごときもの、先は丸くかたまりた日晝頃より飛はじめて、晝過るころことに多く飛て、八ツ時頃にいたりてやみぬ。何ゆへといふ事をしらず。翌日も天氣きのふのごとく快晴なり。風は少々あり、きのふみぬ人も多ければ、朝とくよりくれがたまで心がけ居たれども、いさゝかの飛ものもなし。これらの事は、いか成ゆへならんといぶかし。

○聖堂講釋の事

一昌平坂聖堂御再建あり。學問所御普請出來に付、寛政十二庚申年の元より、御家人のともがら、學問修行のこゝろざしあるものどもは、勝手次第入學すべし。毎月四九の日講釋あり。四の日は御役人以下の御番衆まで、九の日は小普請部屋住のもの出席なり。部屋住厄介のもの修行のこゝろざしふかく、寄宿の願出せば、則願ひかなひ、引越稽古する事あり。近來もの事手おもになり、何事も手數かゝり、風俗よろしからざるゆへ、差支なきやうに取計ふべしとの御事なりと聞えし。供づれ等の事もなるたけ省略して出る事とはなれり。

○遠州鞍形石の事

一遠州灘にて船乘人のおそるゝなる鞍形石といへるは、相良浦の沖にあり。海中へ出はりたる事一里餘、陸よりこれまでおびたゞしくかくれ石有て、敷詰たるがごとし。三月節供には汐よくひきて、石ども皆あらはれ出るゆへ、その石をつたひてあしをぬらさずして行てみるに、鞍形石は至て大なり。その石の五六間ばかり手前に、しほ深き所ありて、側へよりがたし。里人はくらかた大明神とうやまひて參詣する也。その道にあらはれ出たる石ども、悉くあわびつき居るを、參詣の人々是を取て與を

もよふす。石に付たる鮑は、いかに引放すともちからにては取得がたし。貝の脊を一ツ打て、其拍子に手ばやく引はなせば、心安く取得るなり。汐干は三月せつく、また十五日によく干るなり。遠近より出る人おびたゞし。往來のみち筋は押わけ難きほどの事なれども、海へ出れば、此みち一めんに石あらわれ出て、みな／＼心のまゝに傳ひ行つゝ鮑をとる。人毎に六ツ七ツは得ずといふ事なし。三四寸の鮑はなはだ多し。七八寸の大あわびはとる人稀なり。榮螺はあまり多くあるゆへ珍らしからず。さればとる物とも見えず。一體此所より常に鮑を取て商ひとす。江戸まわりの大船、此鞍形石にのりかけ破船たび／＼なり。されば是を除んがために、出崎に常燈明あり。此邊人氣至てあしく、時としては燈明の所を替て海路を迷はせ、破損させ荷物を取事あり。常に難風有て、大船の損ぜん事をのぞめり。破船ある時は、大利を得るといへども、奢強き風俗にて、分限知らずつかひ捨るゆへに、此邊は豪家とては絶てなし。みな／＼その日をやう／＼おくるのみなり。

一飛驒の平湯の事

一飛驒の高山より奥の方十里ばかり隔てゝ、平湯といふ山里あり。深谷の奥なれど、此所は少し打ひらゐて家數も多し。相應の百姓もあり。人跡稀なるゆへ、詞もかたくなにてわかり難き事多し。替りたる風俗どもある中に、婚姻の式をある人のものがたりし事あり。中より以上の婚禮には、此日の花着とて京染したる木綿ふり袖の衣裳もやうを着し、帶もかくるゝほどの綿ぼうしをかぶり、一類ども同道して、歩行にて聟の方へ行。親類は門口まで來りて、是より緣女一人をおし入るゝなり。女の情にて入かぬるをみな／＼よりて無理に門内へ入る。此時聟は麻上下を着し、門より見ゆる座敷にたゞ一人着座せり。緣女は内に入て聟の側へ上りて、ヲノサタヨリニキタヨモウシといひながら、ひつたりと抱付。時に聟トサフルマイソヒヤァラハヒヤアレといふて、おくりの一類に向て、皆の衆はソカヲへマハランシヤレといひ捨て、緣女の手を取て奥へつれ行床入する。其内に送りの人は座敷へ上り、此方の

親類とし る人になる。夫より聟は緣女の手を引て座敷へ出れば、御祝儀相濟日出度しとて、双方の親類悅の酒宴ある。夫婦のさかづきも、此ときうち込にあるなり。酒盛おはりてみな〳〵かへらぬ内は、緣女丸わたを取る事なし。

○日本諸宗寺數の事

一攝州天王寺は聖德太子の建立にして、佛法最初の寺たる事は、あまねく世の人のしるところなり。今度諸堂修復助力として、日本國中の諸宗の寺院に寄進の事あり。この節寺數左にしるす。

一禪　宗	一萬百ケ寺
一黃檗宗	九千百ケ寺
一眞言宗	一萬千百ケ寺
一法相宗	五千三百二十ケ寺
一天台宗	千八百二十ケ寺
一淨土宗	十四萬二十ケ寺
一遊行宗	六萬四千六十ケ寺
一大念佛宗	千五百十ケ寺
一西本願寺	四萬五千十ケ寺
一東本願寺	八萬八千五百五十四ケ寺
一高田門跡	七千五百二十ケ寺
一日蓮宗	八萬三千二十ケ寺

右寺數惣〆四十六萬九千九百三十四ケ寺、當庚申正月より一ケ月錢三文ヅヽ、七年之間天王寺へ差出すべき段、寺社奉行より諸宗寺々へ申渡されける。

此錢
一ケ月一萬三千九百十二貫五百文
一ケ年十六萬六千九百五十貫文
此錢五貫替にして
金三千三萬三百九十兩也
右之金十七年合して
五十六萬七千六百三十兩丁錢二十八文也

○缺陥世界といふ事

一大體貧といひ儉といふ。おのづから是賢德、またこれ美稱せり。切に是を以て惚とすべからず。若よく是をしらばうれひなかるべし。世に生れたる人、物の心子(本ノマヽ)によりして以來、愁ひならすあり。我こゝろの如くならざるは定れる所なり。小兒の叫號も、みな其こゝろに不平あり。幼少より壯年にいたり老衰に及ぶまでの、意のごとく成は甚少し。然れどもその意のごとくならぬ所、自らうれひ慮る所の事、人々異なるのみ。それゆへに缺陥世界といふとかや。當時坊主衆の內にて、大名の出入多くもちて、內福なりと呼るゝもの多き中にも、糀町元山王の石井永庵、備前町の闕林寺どもにまさるものなし。出入のふち所々より貰ひ、出入をせざる大名とては更になし。一ケ年に納る處凡八九百兩より千兩程にいたる。一通の文通を月日書役二人、筆を置間なし。されば其身閑散事は誠に寸暇を得ず。夜も安く寐る時なく、彼方此方の出入場を廻る事なり。行先にても取扱ひ輕からず、酒の肴のと饗應るなれども、或は不好物成をもまげて喰ひ、心に應ぜぬ酒をも過し、其座の首尾よろしからん事をのみ第一とする事なれば、心のやすきひまもなし。たま〳〵に少しのひまあれば、靜座して心氣をやしなひ、早々臥て此頃の草臥を休るのみなり。されば家作こゝろのごとく修理して、古今の器物多くあつまり、

山海の名產、魚鳥の肉、日々に到來して、朽腐にいたるといへども、我家に有て賞翫するの閑暇ある事なし。斯のごとくして世を經るをたのしみとせんか。苦しみとせんか。永庵は六十歳を越て、一人の悴病死し、林雪は悴が放湯たぐひなく、是が爲に心勞たえ間なしとかや。是樂を樂むものゝこゝろと、その利を利とするとの違、爰にいたれり。されども兩人は、此みちの傑出にして、ひと〴〵うらやむ所なり。

○淺草天王町敵討の事

一庚申の十月十日、淺草天王町にて親の敵うちありしと取さたす。その由來をたづぬるに、仙臺領名取郡北方根岸村長町五右衞門借家善助悴にて、當時一橋殿御徒劍術指南をなす櫛淵彌兵衞内弟子德力貫藏といふものなり。當申廿一歳なり。父には幼年にわかれ、母と兩人商ひをなしくらしけるが、行とゞきがたきに付、同國宮城郡小泉村杉の下百姓長三郎悴長松といふ者を、介抱人にたのみ入置て商賣いたせしが、長松大酒にてつかひ込み多く、勝手のためにならざるによりて、母と相談して長松をいづかたへなりとも參るべしと申聞、尤相應のかたあり。四五日過て、二月廿五日の夜、母を害し長松は迯失たり。此時貫藏は母のうなり聲を聞付目をさまし、此體を見て追かけ出しかども、闇夜にてゆきがたを見うしなひ、立もどりて母の介抱せしかども、その手疵にて母は死たり。そのうへ賣溜金十兩盜み取られたり。此段訴へ出るによりて、國中ぎんみ有といへども行方しれず。貫藏それより國を出、敵のゆく衞を尋ねまわり、江戸へ出ていよ〳〵行衞をしらんため、彌兵衞が內弟子と成、劍術修行し、今日淺草のくわん音へ參詣し、歸りに天王町にて敵長松に行合ひたり。奉行所へめし連出んとせしかども、返答もせずふり放しにげ出すゆへ、やむ事を得ず一刀拔つけたり。則手疵負はせければ、兩人とも奉行所へ呼出されたり。長松は貫藏が母を切害してより國もとを出奔してのち、所々流浪し、近ごろ當所の藏宿へ奉公にすみ込み、喜兵衞と改名し、今日入湯よりのもどりがけ、貫藏に行逢

たるなり。手疵おひて即死にはあらねども、その疵にて相果たり。扨貫藏事は、その筋へ敵討ねがひもせず。苗字を名のり帶刀せし事、屆かざるいたしかたなりといへども、孝心より出し過失なれば、深き御咎もなし。その師範櫛淵彌兵衞徒勤の身分として、貫藏に帶刀させし事、不束のいたりなりとて、御咎ありしと聞えたり。翌年七月にいたり糺し相濟、貫藏儀は師範櫛淵へ下されかまひなく相濟ける。後仙臺太守より貫藏を貰ひうけられて、花を咲せて古郷へかへされけるとなり。

○女人富士まうでの事

一庚申の事は、往古より女人富士山へ登る事を免許する事成よし、前々より江戸中にも所々札を建しらせしゆへに、今年の六月諸國の婦人富士まうでせしかば、道中の驛々は常よりも群集して、街道筋は家毎に旅客の宿らぬ内もなし。しかるに外の女は登山しても、今年はいさゝか障りなし。遊女屋の母女房などの類まゐる時は、麓にて狂氣し、あるひは身骨いたみ、または大雷風雨の天變ありて參詣すること叶はざるとなり。

○御夢想を蒙りし事

一御先手水野筑前守といふは千石を領して、築地に住居せり。近頃夢に日光の神託を蒙れり。その方事、今まで先手頭をつとめ居るべきものにあらず。全く年寄どもの等閑なれば、神慮のおもむき申達すべきとの事なり。夢さめて筑前守有がたき事におもひしが、申出んもいかゞあらんと案じ煩ひしに、それより引續て三日まで同じ夢の御告あり。ことさら三日目には、其方事神慮にかなひしに、いまだ申出ざる事、何といふ心ぞや。もし此まゝに捨置ものならば、たちまち神罰を蒙るべし。其時後悔すべからずと承はる。此上はとておもひ定めて、申九月御用番なれば、京極備中守かたへまゐり、用人をもつて此ことを申入ける。此日御用向多ければとて、直にも申通ぜざりけり。此事は先事甲州勤番のもの、是に似たりし靈夢をかふむりたりとて申出たりし時、頭支配もとゞめければども、更に承引

せずして、終に申出ければ、何の御咎もなくて改易になりしとぞ。是等の事もあるゆへ、用人も主人に申事なかりしに、四五日の後、筑前守來りて御挨拶いかにといふ。備中守追て此かたより申達すべきなりとて歸されぬ。しかるに筑前守、後また神託をかうむれり。此度の事、年よりどもへ申せとの神慮なるに、備前守へ申したるゆへ、今以遲滯におよぶ。早々年寄どもへ申達すべしとの御事なれば、筑前守今はこらへかねて、松平伊豆守殿へ參りて、最初よりの次第演說せり。是によつて伊豆守殿より御沙汰ありければ、備前守殿もそのまゝには成がたく、市岡丹後守を呼れて、筑前守全く老衰いたせし故なるべしとて、早々引こもらせ置べきよしを申語らるゝとぞ聞えし。

○懷中へ石入し事

一大目付伊藤河内守退出せられし時、俄に懷中おもく覺えしかば、改め見るに、餘ほどの石入たり。不思議におもひし折しも、土御門の門弟參り合せて、此事を評斷し、おもき火災の御愼みなりと申ける。是は申十一月の事なり。しかるに四五日の後、高田の脇源兵衛村抱屋敷すこしものこらず燒失せり。全く此前表ならめとて、又々易者に尋るに、火難いまだ退かず。尤御用心あるべしと申けるが、奥向椽の下より燃出て、疊までやけたりしゆへ、やう／＼とめたり。長屋にもおびたゞしく烟出し有ければ、早速に鎭まりし故、内々にて事濟しが、なをも火災のきがたしと、易者の申ゆへ、すべて災ひは油斷に起る事なれば、用心きびしく夜廻りの手當きびしきゆへ、あたりの人も大に安堵しけるとぞ。

○虎藥師藥袋の事

一番所に田澤久左衛門とて、千石ぢかき御旗本あり。人として溫和慈愛にして慮りふかし。抽て用れば大にする事あるべし。人しらず。しかるを慍らず。君子の資賢ありとさたする人なり。一體内福にして子孫おほく、何ひとつ不足なきくらしなり。しかるに孫女生得藥ぎらひにて、すこしも呑ことなし。

仕かたなさに粉藥として水飴へ入て、きなこに入交、むすびにつけ、又汁の中へ加ふるの類、種々手をかへ品をかへ、手段をつくしてすゝむれども、藥入たるをばたちまち知りて口へ入るゝ事なきゆへ、せんかた盡たり。誠にこれを知る事、神のごとし。やはり是も持病のむしのわざにて、其匂ひ高く覺ゆるなるべし。夫ゆへに不快の時も藥を用ひ、養生すべき道を失ひて、うれひおもひけるが、糀町九丁目常仙寺虎藥師より出る藥ぶくろをかりて、夫にてくすりを煎じ用れば奇妙なりと、御醫師小川玄孝が家內おしへけるゆへ、酉正月廿四日かの藥袋をかりて煎じければ、其藥は盃に一ツ程ものみたり。夫より次第に藥好となりしといへり。此小兒に限らず、此類甚多し。これ此事を理を以ては解しがたし。

○長壽の事

一下谷廣小路にとし久しく住居する町醫師佐原一雲といふものあり。會津芦名家の嫡流なれども、その血脈はしるべからず。むかしより此處に住て、近邊の人々は、祖父、も曾祖父も相しれず。生年をものがたりする事をきらへば、いかに心安き人も、たしかにはしる人なし。されども祖父父の出會せしはなしを考へ、時として若年の時の事を申を以て、年歷を考るに、寬永のころに生れしなるべしと申あへり。見かけは七八十の老齡と見ゆるのみにて、格別替りし容貌にもあらず。しかるに牛込神樂坂に片桐長兵衞といふ御旗本あり。その長兵衞が祖父は、紀州より御供せしもの也。丑年なればとて、苗字を替て下條長兵衞と申せし。生島幽軒といふ御旗本の隱居、享保十年己巳八十の賀を祝ひて、老人七人集會す。その客は榊原越中守家士志賀隨翁俗名金五郎百六十七歲、醫師小林勘齋百三十六歲、松平肥後守家士佐治宗見百七歲、御旗本隱居石寺宗壽俗名權右衞門九十七歲、醫師谷口一雲九十三歲、御旗本下條長兵衞八十三歲、浪人岡本半之丞八十三歲、宴會せしとて、其節の書面、今片桐長兵衞かたにのこれり。しかるに其中に出たる谷口一雲といふは、則今の佐原一雲が事なり。此者一人其集會中よ

り殘りて、寛政十二年庚申年十二月死す。享保年中尙齒會の書記によりて、其年齡を考るに、凡百六十八歲成べし。稀にはすぐれて命ながきもの有なればこそ、昔がたりにつたへしかども、今の世にかくも長壽なるはたぐひなかるべし。

○學問藝術の事

一今の世に儒者と稱せられて、人にさへ孝悌忠信の道を敎ふる者の中に、不忠不孝なるものあるは、いかにと尋しに、野翁云、凡武士の武藝に達したるは、人にしかるべき道をしらするにてあれど、武功なき者あり。無藝なれ共武功ある人多し。劍術の師の無手のものにきられたるもあり。學問の道も是におなじ。智仁勇は文武の德たり。禮樂弓馬書數は文武の藝なり。生れ付勇剛なる人は、武藝をしらされども勝負に利あるものなり。然ればとて文武の藝すまじき道理なければ、いにしへの人は、其身に道を行ふ事全からぬ者にても、文才に器用なるものには、學問させて廣く、また道を敎へて、人民の愁ひを解き、風俗をうるはしくす。其身に勇氣少き人にも、武藝に器用成ものにて、普く兵法を敎へて筋骨をすこやかにし、能をとげしむる事は、武威をつよくせんとなり。是君としては人を捨ず、廣く益をとるの道なり。學力なくして孝行忠臣なるは氣質の美なり。道を知らざる勇士は血氣の勇ともいへり。人の德を達し才に長ずる事は、文武にしくはなし。しかれども博學にして不孝不忠の人は、文の末々を知りて本に達せず。武術も又かくの如し。先天の物を生ずる事、二つながら全き事少なし。四足のものは羽なく角あるものは牙なし。形あるものは必かくる所あり。大かた文才器用なるものは德行に薄く、德行厚き人は文才に拙き事あり。智德明なるものは行ひ欠安く、行ひ篤實なるものは智にたらざる所あり。君子はその善をとつてまもらんことを求めず。小人の短き所を顯して其美を覆へり。却て世に才もなく德もなき人多し。才あらば稱すべし、德あらば好すべしとぞ、むかし名有る人のはなせしを聞し事あり。是によりて思ふに、今の御世ぞ學問武術その一藝に達しぬれば、かならず

其能を捨させ給はぬこそ有がたけれと野翁申せし。されば寛政十三年の間、殊さらに風俗厚く、四海波しづかにして、國富民さかえ、人々その業をたのしみ、家々食を餘せり。鳳凰も出よ、長閑き酉の春とは、今の時なるべし。斯て二月十三日と申に享和と改りぬ。勅命をたまはつて日野大納言資持卿年の名をほどこす君のみことのりうけてやはらぐ國のみたから

此哥のごとく、太平長久萬民豐ならんことを祝し筆をおさめぬ。

梅翁隨筆 終

櫻の林

櫻の林序

ある日、三栗の中村守手ぬし、吾がりとひきて、花ぐはし櫻の林のひと枝、折もて見せたまへるを、みもてゆくに、こはよに名だかき松壺の尊澄君と、櫻處の信比古翁とのとひこたへの書にて、げにおうの海なみ〳〵ならぬとひも、岩國山のいはれたるこたへも、とり〴〵おもしろく、みあかぬふかき色香になむありける。そも〳〵萬の木の中にしも松はめでたく櫻はうるはしく、もはらよにもてはやさるゝも、この二木をおきてなにかはある。いま、かの君と翁との御名にさへおひたるは、さるゆゑよしあるらむかし。なほおくふかき林には、百枝千枝たちさかえて、つき〴〵咲いでむとか。そはいよゝよの人みなのあふぎつゝ、あなうるはしの花よ。あなめでたの木ぶりよと、めであへむものならしと、おのれ數ならぬ栶園のまなびやにてかくはしるしつ。

安政二年といふとしの彌生のころ

尾張の殿人　市岡和雄

とり凡ていふことども

一此書は、周防國玖珂郡新庄村なる櫻處岩政信比古翁の、天保二年の八月十八日、我師建玉大人の百日に、御靈拜みにはる／＼と、こゝにものせし時、何くれとことゝへるより、やがて師とあふぎて、年毎の春秋にふみかよはしてもことゝひ、はたこゝにも三度ばかりまねきて學問せし時々に、をしへみちびきたるを、かきあつめたる也。

一翁をこゝにまねきたるは、天保八年五月師の君の七めぐりの祭の時、同九年四月ばかりことさらにまねき、同十四年五月例の十三回の時などなり。

一このふみはしも、廿巻あまり八巻うちつもれる中より、ぬき出て一巻となしたるは、出川の道年なり。

一問答のをり／＼は、天保の頃なるも、嘉永の頃のもまじれるなり。そは、道年がこゝろのまに／＼ぬきいでたればなり。

一さくらの林としもいふ名のゆゑよしは、十一ノ巻に出たるを、此巻のしりへに景明がいへるがごとし。

一問は草書、答は片假字にてわかちおけり。こは、本つふみのまゝなり。

一源氏の物語の問答は、別に櫻處抄とものしたれば、このふみの中にはいれず。そは、またおひつぎて板にゑらせてむかし。

安政二年といふとしの三月ばかり

出雲宿禰眞澄君
松壺あろじ

櫻の林目次

巻之一

出雲大神の御事　一三一
初山踏　一三一
豐臣家　一三一
書紀の漢土に渡りしといふ事　一三一
徂徠が著したりといふ國學答問　一三三
長谷紅葉見日記の中ひとつふたつ　一三三
紀ノ宗直が事　一三四
延久の記錄所　一三五
いにしへ海賊多かりし事　一三七
江關筆談の中　一三八
又　一三八
梧窓謾筆につきてくさ〴〵の論らひ　一三八
拔丸狐丸猿猴丸などいふ太刀の事　一三一
土師ノ姓を菅原秋篠大枝と改られし事　一三三
神鄉は天皇の服の御沙汰もなかりし事　一三五

巻之二

出雲國安來鄉　一三八
神ノ社を尊み奉る事　一三八
天神壽詞を祭主ならぬ人の奏したる事　一三九
昔は主上と太子と御別殿なりし事　一三九
伯耆國汗入郡宮內村の高杉明神の祭の事附周防國熊毛郡石城神社及出雲國赤塚村の赤人の社の事　一三九
駁以呂波問辨といふ奸書の內ひとつふたつ　一四一
まどふなよの詞　一四一
旣焚子退朝日云云の是非の事　一四四
鈴屋翁誦經の事　一四七
天竺國は文字のつかひざまつたなき事　一四八
あやしきことども　一四九
大毗盧遮那佛　一五〇
天浮橋の考　一五一
惟喬親王の御歌の事　一五二

櫻の林 卷之一

岩政信比古著

○出雲大神の御事

出雲大神宮は天皇の御元祖にて、則神代の天皇にましませば、俗にいふ仙洞御所にあたらせたまへりと、中村守臣がいへりき。この説さることゝうべなはるゝを、高論いかに明辨をこそ。

邇々藝命天降マサヾル以前ハ、天日栖宮ゾ顯露ノ朝ナル事勿論ナリ。建玉大人ノ仰ニ、出雲大神宮御遷宮ノ御時、大神ノ御裝束ヲ調ジテ奉ルニ、仙洞御所ノ御裝束ノ如ク調ジ奉ル也トノ玉ヒキ。サコソアルペキ事ナレ。

○初山踏

皇朝學せんには、鈴屋翁の初山ぶみによりて學ぶべきにかぎれる事にや。されど彼ふみにもいはれたる如く、その學ぶ人のこゝろ〳〵にまかせて、何くれの典をみるかたもよろしきにか。

彼書ニモ唯一筋ニ定メテハ云ハレズ。其學ブ人ノ心々ニ云々ト云ハレタレバ、イカヤウニモアルベキ事ナレドモ、ソレガ中ニ、ニ印ヨリホヘトチリワヨツラノ印、コレラノ所ハ、イヅレノ道ヨリ學ブトモ動クマジキ也。其中ニモ、ニホニ印ノ所ノ意ニタガヒテハ、皇朝學トハ云ハレズ。此印等ノ所ハ堅ク守ラセ玉フベキ事ナリ。

○豐臣家

嚶々筆話の初篇に、秀吉太閤は御落胤のよし。貞德が戴恩記、季竹軒の天正記などを引て論らひ、秀頼大臣は名古屋山三郎が子なるよし、鹽尻に詳なりといへり。豐太閤の事は、ひとゝせ御宦慶記といふ書

を、翁のこゝに持來て見せられしを寫させおきたれば、御落胤なるよしはしられたるを、秀頼大臣の事はいとめづらかなることなり。かの鹽尻の説は校しきにや。

秀吉公ノ御落胤ナル事ハ、貞德ノ書ニアルノミナラズ。先年見セ參ラセツル信比古ガ所持ル御宦慶記ハ、天正十六年五月ニ記シタル書ヲ、同年八月ニ寫セル本ニテ、當時モノシタレバ甚正シキ記ナリ。其書ニ、尋ニ其素生一。祖父祖母侍ニ禁闈一。萩中納言ト申哉。今之大政所殿二一歳秋。依ニ或人之讒言一被レ所ニ遠流一。尾州飛保村雲ト云所ニトニ謫居一送ニ春秋一矣。又老者物語村雲在所而都人有ニ一首詠一。讀人不レ知也。ながめやる都の月にむら雲のかゝるすまゐもうき世なりけり。彼中納言歌哉。大政所殿幼年有ニ上洛一。禁中傍宮仕シ給事兩三年。有ニ下國一無レ程一子誕生。今ノ殿下是也。從ニ孩子ニ奇怪之事多之如何。非ニ王氏一者爭カ得ニ此俊傑一乎トアリ。秀頼公ノ事ハ未承リ及バヌ事也。鹽尻ノ説ニ委シキ譯侍ルベシ。世ノ説ニ、秀次公ハ三位法印三吉一路ガ子ナリト云ヘリ。一路ハ北政所殿ノ姉妹ノ夫ニテ、秀次公ハ政所殿ノ甥ナリ。サル緣ヲモチテ三位法印ニモナリツラム。名古屋山三郎ハ出雲大神宮ノ巫女佐渡島ノ御國ト云フ女ヲ語ラヒテ、京四條河原ニテ歌舞妓芝居ト云フ事ヲ始メタリト云ヒ傳ヘタリ。カヽル賤シキ人ノ子ヲ、秀吉公養子ニ爲シ玉フベキニ非ズ。但此山三郎ト云フ者、入道シテ三位法印一路ニ成タルカハ知ラズ。何ニモアレ珍ラシキ説ナリ。據アル事ナルベシ。

〇書紀の漢土に渡りしといふ事

群書一覽一の卷に云、又或人云、日本紀の異國にわたりたるといふ説あり。これは越前の山本閑齋、神代卷の講説を勢州の出口延佳にきゝて、その聞書を神代卷講述抄と名づけて板行したり。彼書の中に、日本紀は異國へもわたりしにや。近古の唐本にみえたりとかゝれたり。これは明の謝肇淛が五雜俎に、昔の長壽の人をあつめ書たるところに、日本紀武內三百歳と書たり。これは日本の紀の武內といふことなるを、五雜俎の點者あやまりて、日本紀の武內と訓點せしを、延佳のつたへられしより、神代紀講釋の

時此說を述られしと見えたり云々。此說いかゞあらむ。明論をこそ。

武內宿禰ハ紀氏ノ祖ナレドモ、打マカセテ子孫ノ氏ヲ以テ紀武內ト申ベキ由ナシ。書紀ノ彼國ニ渡ルマジキニモアラズ。サレドモ書紀ノ內ニ三百歲ト云フ文字ハ見エズ。景行天皇廿五年北陸東國ヲ巡察セシメ玉ヒシヨリ、仁德天皇五十年茨田堤ニ雁子ウミシ時歌ヨミ玉ヒシ迄ハ二百六十八年也。景行天皇十四年御誕生トスレバ二百七十九歲ナリ。其後ノ事ハ書紀ニ見エザレドモ、長壽ノ事トハ見エタリ。サル事マデ考ヘテ、五雜俎ニ記スマジキニモアラズ。

〇徂徠が著したりといふ國學答問

徂徠が國學答問とかいふ書、はた辨翼〔割註〕これは異人のあらはしたるよし、大寂菴が序に見えたり。此書の事次にいふべし。」この答問の書荻生があらはしたるものとは見えず。こたび二冊ともにおくりまゐらするを例の明辨をなん。

此書僞書ナルベシ。徂徠カバカリニ皇朝ノ事ヲ知レラバ、政談トイフ書ノ如キ馬鹿ハ書クマジク、南留部志ト云フ書ナドニモ、皇朝ニ對シ奉リテハ狼藉千萬ノ論アリ。サヤウノ書ヲカキハスマジキナリ。此書ハ徂徠ガ罪ヲオホハムトシテカケル物ナラムヲ、返リテ彼ガ罪ヲ重クスルニ至ルベシ。此書ホド皇朝ノ道ヲ知リナガラ、政談ヤ、南留部志ノ如キ、狼藉ナル事ヲ書キ出スハ、世ニ比類ナキ大惡人也。」又辨翼はよくかきたりげなるをいかに、

此書オモシロク出來タリ。唯孝悌ノ二ツニトヾマルト云ヘル一言、マコトノ道ト違ヘリ。道ハ忠信ノ二ツニトヾマル事ヲ知レバ論ハナキナリ。十三經ヲ學ブヲ入ラザル事トセル論甚オモシロシ。〇佛道ヲイヘル論皆オモシロシ。

〇長谷紅葉見日記の中ひとつふたつ

伊勢ノ國人岡山正興が寬政十年の十月紀行の長谷紅葉見日記の中に、「煙草をのむよしあり。俗文にはあ

らじか。菅笠日記には、「煙をふくと見えたり。

俗文ナレドモアナガチトガムベキ事ニモ侍ラズ。

大御輪寺云々、三輪の若宮と申す神も、おなじ堂のうちにおはしますとある若宮は、いかなる神にますにか。

知候ハズ。大田田根子ノ命ノ社ナドニハ侍ラジカ。

もとこし道を少しかへりたる所より東の方にあたりて、飛鳥路村といふ村はるかにみゆ。この里人ぞ、かの陶山小見山に此山のあないをしてやかせけるよし、そのゆゑによりて、今に笠置の里人とは中あしくて、えんなどもむすばずとなん。さるを近き頃いかなりけん。縁をむすびしものありけるに、ほどなくあやしき病をうけしにけるとぞ。このあないの翁かたりける。げにさもあらむかし。」尊澄云、陶山小見山が焼しといふは、笠置の皇居なり。かしこくも天皇の皇居を焼奉りし狂夫（クナタブレ）らをあないせしゆゑ、今の世にいたりてもさる禍にあへるはうべなる事になむ。

此事或俗書ニテモ見侍リツ。今ニサル験シノアルコソタフトク侍レ。

天武天皇のこの山に御狩をさせ給ひし時、御笠をぬぎおかせたまひしといふ、まろき大きなる石あり。」實にさることのありしにや。

天武天皇御蒙塵ノ間ノ御事ヲ申傳ヘタル事、山城、大和、伊賀、近江、伊勢ナドニイクラモアリ。事々シクハ受ラレズ。

○紀ノ宗直が事

百練抄の問答の事どもは、いと多くあるを、いさゝかぬき出でむ。四巻云、寛弘六年十月五日。皇居一條院焼亡。主上御ニ職曹司ニ。延喜天暦二代ノ御記及累代ノ御物等焼亡。但神鏡奉ニ取出ニ了。と見えたるを、こよなき御記録のありけむに、いみじううられたき御事になむ。

皇居一條院トハ、禁裡炎上ノ後ニ一條院ヲ假ノ皇居ト爲玉ヘル、其モ亦燒タルナリ。職曹司ハ內裡ノ內ニアリ。古代ハ出火ノ時、殊外アワテ恐レテ寶物ヲモ多ク燒失シト見エタリ。因ニ云、高橋釆女正、紀宗直、天明六年丙午八十餘ニテ死去ノ前、子宗茂ニ遺言スラク、此京ハ必近キ年燒亡スベシ。若サル事アラムニハ、私家ヲバ棄置テ禁中ニ參ジ、云々ノ所ニ記錄ノ箱アリ。是ヲ持出ヨ。是ダニ在ラバ私宅ハ丸燒ストモ、高橋ガ家ハ立ツベシト云ハレシトゾ。果シテ天明八年正月晦日大火也。此時遺戒ノ如ク家ヲバ構ハズ參內シテ見レバ、旣上樣ハ賀茂ヘ御移リ遊サレ、內ハ明屋ニナレリケルヲ、彼記錄ハ取殘シテアリケリ。サレバコソト思ヒテ取出テ、サテ私宅ニ歸リテ見レバ跡方モナク燒失タリケリ。大ナル書庫ニ盈タリシ珍書等モ皆燒ニケリ。サレドモ此人ノハ岡崎ニ別業アリシカバ、別人ノヤウニ惘惑モセズ。其別業ニ遷リ居ラレケルニ、其別業ノ藏ヲ開キテ見レバ、京ニ在リシ程ノ珍書ハ皆自寫シテ藏メ置レケルトナリ。コレニヨリテ彼家バカリ善書ノ多キ家ハ無シトナリ。今モアワテ、寶物ヲ燒失フ事ハ同ジ事ナリケリ。彼禁裡ノ記錄ハ何方ノナリケム聞侍ラズ。猶ヨク尋ネサセ玉フベシ。彼宗茂其ヲ取出テ何程ノ功ニナリケム。其モ聞侍ラズ。〔割註〕尊澄云、カノ天明ノ回祿ノ事ハ、近キ頃板ニヱリタル遺文集覽ノ卷ノ末ニ、其文詞アマタ出タリ。其餘世俗ノ書ニ詳ニ見エタリ。○又云、彼禁裡ノ御記錄ノ事、宗茂ガ取出シ、功ノ事ナドハ、雲井の月ニ詳ニ擧タレバ託テ見ルベシ。○尊澄云、此後翁より又いひおこせたる中に、宗直の岡崎の別莊に、靈元法皇の密に御幸ありし事、この宗直の事につきてくさぐさの事あれども、詞いと長ければ、つぎ／＼の卷にうつしいでてむかし。

○延久の記錄所

同書延久元年己酉二月の條に、廿三日可レ停ニ止寬德以後新ニ立庄園一。縱雖ニ彼年以往立一。劵不ニ分明一。於ニ國務ニ有レ妨者。同停ニ止之由宣下。閏二月十一日始置ニ記錄所一。庄園劵契所定ニ寄人等一。〔割註〕於ニ太政官ノ朝所ニ始行レ之。」後三條院天皇の記錄所をおかせ給ひし事は、玉勝間（六）からあゐ卷に、愚管抄をひき

たるに、叉高倚が松の落葉(四ノ巻)にもいへるを、はやく見たりしに、この天皇はかしこき御さえさんおはしましける。御世のみじかゝりしぞくちをしき御事なりし。例の高論をきかまほしうなむ。○庄園トハ公卿ノ公領ノ內ヲ取リテ私領トシ玉フナリ。當時藤氏ノ勢强カリシ故、攝籙ノ臣恣ニ莊園ヲ卜玉ヒシナリ。カクテハ公領次第ニ減少シテ國用不足スル故ニ、後三條院憤リ思召テ止メ玉ヒシ也。○記錄所ハ太政官ヲ除テ別ニ官ヲ立テ、主上出御ナリテ御親訴訟ヲ聽玉ヒシナリ。コレ後三條院藤氏ノ驕ヲ惡マセ玉ヒテ立玉ヘルナリ○百寮訓要抄ニ云記錄は禁中にて諸人の訴訟を判斷せらるゝ所なり。後三條院延久に殊に興行ありて、天下の政道を直されし時、才人をえらびて寄人におかれしなり。上卿辨寄人など、皆政務にたへなる器量をえらびて補せらるゝ事なり。○此時ノ關白ハ宇治殿ナリ。(賴道公)父道長公ヨリ引ツゞキテ驕慢甚シカリシカドモ、此記錄所イデキテヨリ朝政ヲカマハズ。宇治ノ別業ニ引籠リ閑居シ玉ヒシトナリ。○榮花物語煙の後の卷に、後冷泉院の末の世には、宇治殿に入居させたまひて、世の定もせさせたまはず。東宮と御中あしうおはしましければ、其ほどの御事どもゝ、かきにくうわづらはしくてえつくらざるなめりとぞ人申しゝ。東宮とは後三條院の御事なり。同松のしづえの卷に、後冷泉院は何事もたゞ殿に(宇治殿)まかせ申させたまへりき。後の世にこそ宇治にもこもり居させたまひて、よもしらじ物なども奏せじとて、世をすてたるやうにおはしましゝか、されど除目あらむとては、先何事も申させ給ひそうせさせたまはねど、彼殿の人に受領にても、たゞのつかさにても、よき所はなさせたまひき。同じ關白と申せど、廿より八十までせさせたまひ、世の人なびき申しおぢ聞えさせたることわりなり。この內のみかど、御心いとすぐよかに、世中のみだれたらむ事を直させたまはむとおぼしめし、制などもきびしく、末の世のみかどにはあまりてめでたくおはしますと申しけり。人にしたがはせたまふべくもおはしまさず。御ざえなどいみじくおはします。後朱雀院をすぐよかにおはしますと思ひ申しゝに、これはこよなくまさり奉らせ給へり。世人おぢ申たることわりなり云々。○カクメデタクオ

ハシマシヽヲ、御世長カラデ延久五年ニハオリヰサセ玉ヒ、程ナクカクレオハシマシヽハ、云フカヒナキ事ナリヤ。此帝長クオハシマサマシカバ、世ノ政モヤウヤク直リユキテマシヲ、ツギ〳〵アシクナリテ、ツヒニ亂世トナリシハ、歎キテモ餘リアル事ナリ。若ハ呪咀毒藥ナドニアタラセ玉ヒシニハアラヌニヤ。恐ルベシ〳〵。〇大入道殿、御堂殿、宇治殿、此御三代殊ニ驕慢ニシテ、君ヲ蔑シ奢ヲ極メラレシ事、甚數カ數事ナレドモ、此事ノ起リ根深ク源遠シ。其源始ハ鎌足公入鹿ヲ誅シ玉ヒシハ好ケレドモ、其後朝政ヲ變改シ玉フ事甚シク、續テ不比等公ノ御女皇后ニソナハリ玉ヒ、其後押勝ノ亂逆、基經公ノ暴政、時平公ノ讒佞、九條右府ノ我慢等、大化ノ改革以後大カタ引ツヾキタリ。其ヲ後三條院ノオサヘサセ玉ヒシハ善ケレドモ、其災ハツヒニ治ラズシテ、藤氏ノ權、平氏、源氏、北條氏、足利ニウツリテ大亂逆トナレリ。其本ハ大化ノ御改政ニ、物毎唐様ニナラヒテ、皇朝ノ古風ヲ失ヒ、皇威ノオトロヘサセラレシヨリ起リシナリ。サレバ鎌足公モ、當時ノ忠臣ニシテ永世ノ不忠臣トモ申スベキ哉。〔割註〕尊澄公、此論イトオモシロシ。鈴屋翁ヲ始メ、平田篤胤、伴信友等ノ著書ニモカヽル事ノ論アリ。合セ見ルベシ。尊澄ガ考ヘモ別ニアリ。ソハ鶴ノ羽衣ニ辨ヘリ。

〇いにしへ海賊多かりし事

いにしへはめでたく治れるやうに見えても、今の世の如くにはあらざりけむ。かの土佐日記にも、海賊のよせくるよし折々見え、はた源氏の物語にも、玉かつらの君の筑紫よりのぼらるゝ時の條にも見えたれば、すべてそのかみ海賊のおほかりけむことしらるゝなりかし。

然リ。朝廷ノ武勇衰ヘ、諸國ノ國司モ武勇ナク、文ニテ治ムトセシヨリ治リ惡ク、盜賊海賊モ多カリシナリ。今カヽル事ノ少キハ、武威ノ盛ナルガ故ナリ。トカク世ハ武威ナラデハ治ル物ナラズ。大化、白雉以後、唐様風ノ文ニテ治メムトシ玉ヘリシガ、皇運ノ衰ヘサセ玉フベキ大過也。頼朝卿以後ハ武家ノ威盛ナリシカドモ、爭亂ノ暇ナカリシ故ニ、海賊國賊モマス〳〵盛ナリシヲ、元和昇平以後ハ、今

ノ如ク靜謐ナルハ、マス〳〵武威ノ盛ナル故也。

〇江關筆談の中

正德二年朝鮮の使節なる我が、江戸にいたりし時、新井君美のかの使と筆談せし坐間筆語といふ書の末にあげたる江關筆談の中、〔割註〕これもかの問答の書なり。」いさゝかこゝにぬきいでなむ。白石曰。本邦出雲州有二大神廟一。俗謂二之大社一。嘗聞。神庫所レ藏竹簡添書。蓋古文尙書云。この竹簡の皇國に參わたるべきよしなければ、吾仕へまつる大神宮の神庫にはなきを、何よりひき出ていへるにかいぶかし。如レ仰竹簡ノ皇國ニマヰクベキヨシナシ。ソハ後漢ノ代ヨリ紙ト云フ物イデキテ、竹簡ハ止ニシヲ、唐我書ノ皇朝ニマヰキソメシハ、明宮ノ御代ノ中ニテ、唐ハ西晉ト云ヒシ世也。後漢ノ和帝ガ代ヨリ二百年後レタリ。タトヒ其頃マデ竹簡モ殘リアリトモ、寶祕シテ皇朝ヘ渡スベキ理ナシ。此ハ唯白石先生ノマケヌ氣デ、出雲宮ニアリト云ヒヌケラレタルナルベシ。皇朝ニ竹簡ナシトテ恥ニモナラヌ事ヲ、我意ニハ是ナキ事ヲアカズ思ヒテ、如是云ハレタルナラム。殊ニ明宮ノ御世ニハ、尙書ハイマダ來ラズ。論語千字文ノミ也。五經ノワタリコシハ繼體天皇七年也。夫以前尙書ハアルベカラズ。

〇又

平泉曰、或人傳。熊野山徐福廟有二科斗之書一。古文厄二于火一。而不レ傳云。此言信否。平泉は正使の號也。そも〳〵熊野山に徐福が廟のありとは、例のひがことにて、後人の附會也かし。」コレモヲコノモノ、云ヒ出タリケムヲ、韓人ツタヘ聞テ問タルナリ。徐福ガ事ハ云フニモ足ラヌ空言也。徐福ハ秦ノ亂ヲ避テ海島ニ止リテ不レ歸人ナリ。ソレヲ皇朝熊野ニ來タリナド云フハ牽强附會也。

〇梧窓謾筆につきてくさ〴〵の論らひ

梧窓謾筆〔割註〕此書の問答あまたあれども、いさゝか物しつ。つぎ〳〵の卷にまた〳〵ものせんかし。」初篇上卷に云、左傳ニ大德百世祀レ之トアリ。孟子ニ始作レ俑者。其無レ後乎。又云、不孝有レ三。無

レ後僞レ大。文言ニ積善之家必有ニ餘慶一。積不善之家必有ニ餘殃一。近時物茂卿ノ學、其淺薄疎謬ハ論ズルニ足ラズ。茂卿ハ子ナシ。姪ノ道濟ヲ嗣トス。又無レ子。他姪ノ子ヲ養嗣トシテ血脉斷絶セリ。其高足弟子太宰純モ子ナシ。他人ノ子ヲ養テ嗣トス。定保是也。嗜レ酒至愚至陋ノ者ナリ。吾友井上貫流ノ家ニ寄寓シテ此ニ終ル。終身世ニ所謂宿ナシ也。服元喬ガ子ハ夭死シテ別ニ子ナク。此又仲英ヲ養ヒ子トス。一時名高ノ三先生、皆子孫斷滅ノ人ナリ。其學ノ天ニ背ケル驗明白ナリ。畏ニ天命一モノハ、彼三人ノ書ハ几案ノ前ニ近クルモ天ニ畏レアリ。然ルニ子孫斷滅セル天ノ罪人ヲ奉崇シテ、其學ヲ悦ブハ何等ノ愚昧ゾヤ。

この論を富永芳久見ていへるやう、子孫斷滅ノ人ハ、古今天下ニ計ルニイトマアラズ。何ゾコノ三人ノミナラムヤ。子孫永久ハ人力ノ及ブ所ニアラズ。サルヲ學事ニカケテ論ゼルハ抱腹ニタヘタリ。儒教ノ婦ノ七去ニ無レ子ハ去ト云フ事アレドモ、三不去ノ教モアレバ、儒道ニテアナガチ子ナキヲ責ガタシト云フベシ。又思慮多則心火上炎。心火炎則腎水下涸。心腎不レ交人理絶矣。故文人多無レ子ナド、我書ニモ云ヘリ。此三人文人ニテ、思慮ニ氣力ヲ盡シタル人ナルヲヤ。サテ又コヽニ仁齋ガ事ヲ云ハザルハイカニ。仁齋ハ子孫連綿シテ教道ノ御稱アリキ。錦城ガ尊信スル孟子ヲソシリ、始メハ仁齋ナルヲヤ。今朱學、徂徠學、是非取捨ワキガタケレド、儒道ヨリ云フ時ハ、孔子ヲ見タル事、孟子以下程朱ヲソシル事、茂卿、純バカリ心ヨキハアルマジクオボユ。サレバ皇朝學ヨリ云フトキハ、几邊ニモ彼徒ノ書ハオクマジクトモ云フベケレド、儒門ノ徒ノカク子孫ノ絶滅ヲノミ云ヒテ、學問ノ當非ヲ云ハズ。天ノ罪人ナド云ヘルハアルマジキ事ナリ。儒道ニテハ近代ノ人トコソオボユレ。己ッサルカタノ事ハサラニ學ビヌ。道ナガラ人ノ云ヘルヲウベナヒ、カツハ孟子以下ヲ辯ゼル事ヨリ、イサヽカソノ筋信ズル事侍リ。信ズルト云フハ儒ノ中ニテハ信ズル人ト云事也。

此芳久が論は、錦城がいひすごしたるをとがめたるなり。實は茂卿、純は國賊ともいふべき我學者也。ゆ

め／＼かれらが書はみることなかれ。

芳久ガ論皆實ニサル事ナリ。〇徂徠、太宰ガ唐戎ノ目ウツシニ、皇朝ヲタヤスク申シヽ事、ニクムニモ餘リアリ。此一事ニテ、彼ガ書ハ几邊ニモオクマジキ事ナリ。薩摩ニハ宗門改ノ御條目ニ、耶蘇宗門一向宗幷徂徠學ニテモ無二御座一候ト書ク。ヨシゲニサモアリヌべキ事ナリ。〇南郭ハ少シ日本魂アル男ニテ、太宰ガ皇朝ノ御事ヲタヤスク申シヽヲ異見セシ事モアルヨシナリ。然レドモ末ノ絶タルヲイカヾ申サム。〇大德百世祀レ之云々。左傳ノ詞其道ニ背ケリ。皇朝ニハ、邇々藝尊ヲ始メ奉リ。御代々々ノ御陵、悉ク陵戶ヲ付テ置玉ヒシヲヤ。然ルヲ中世唐戎ニ習ヒテ、十陵八墓ヲ定メ玉ヒシハ、既ニ唐戎流ノ御不孝ノシワザナリ。サテツヒニ衰ヘサセ玉ヒテ、御陵ノアリカモ定カナラヌヤウニナレルモ、儒者流ノ罪也。〇天罰ニテ子孫絶タルヲ云ハムニ、其論區々ナルべシ。恐（カシコ）クハアレド皇統ノ御上ニテ申サムニ、先仁德天皇ノ御筋、武烈天皇ニテ絶サセ玉ヒツ。武烈帝ノ暴惡ニマシ／＼シ罪ナラバ、外ニ仁德帝ノ御筋モアリテ繼ガセ玉フべキニ、彼御筋、地ヲ拂テ絶サセ玉ヒシハイカニ彼帝始メテ儒教ヲ學ビ玉ヒ。漢風ヲマネ玉ヒシ御事ハ、聖帝考ニ云ヘルガ如クナレバ、其罪ニアラズヤ。

欽明天皇ノ御世ニ佛法參來テ容レ玉ヒシカド、此帝ハ萬世ノ皇祖ニオハシマスハイカニ。容シ玉ヒシノミニテ、深ク用ヒ玉ハザリシ。ゲニヤ敏達御世短カリシハ、佛ヲ燒キ寺ヲ毀チ玉ヒシ祟ナラムカ。サレドモ萬世ノ皇祖ニオハシマスハ目出タシ。此帝不レ信二佛法一而愛二文史一トアレバ、ソレヨキ御事ニヤ侍リケム。用明天皇ノ御末上宮皇子ノ御子ノミナラズ、拂レ地殘ラセ玉ハズ。〔割註〕但當麻公トテ姓氏錄ニアリ。」先朝ニ停メ玉ヒシ佛法ヲ又興シ玉ヒシ御罪サモアルべシ。上宮太子ノ御末絶サセ玉ヒ、殊ニ云ハムスべモナク悲シキ御亡ビザマ、ナドカ佛法ヲ昌ニ興シ玉ヒシ御罪ナラザラム。コハサモアリヌべキ御事ナリ。天智天皇ノ萬世ノ皇祖ニオハシマスハイカニ。此帝大ニ漢風ヲ興シ給ヒ、皇朝ノ古風ヲ失ハセ

玉ヒシカド、又外ニヨキ事モオハシマシヽニヤ。孝徳天皇ノ御末ノ亡ビ玉ヒシハサモアリヌベシ。漢流ヲ興シ玉ヒシハ、専ラ天智天皇鎌足大臣ノ御シワザトハ見エナガラ、此天皇ノ御世ニアタリテ、其事ヲ興シ玉ヒシカバ、其罪ハ此天皇ニ歸スルニヤ。〔割註〕尊澄云、天智天皇鎌足公などの、専ら漢學びを興し玉ひしことは、歴朝詔詞解に論らひあり。鎌足公の血統のことは、松の藤靡に見えたり。」天武天皇ノ皇統ノ絶サセ玉ヒシハイカニ。此帝古事記撰定ノ基ヲ開カセ玉ヒメデタキ御事ナルヲ、稱徳天皇ニ至リテ絶サセ玉ヒシハ、聖武天皇甚シク佛法ニ迷ヒ玉ヒシ御罪ナラムカ。文武天皇唐技ヲ慕ハセ玉ヒテ、朝廷ノ儀式ヲ唐風ニ變ジ玉ヒ、始テ孔子ヲ奠リ玉ヒシ御罪ナラムカ。此二ツノ御罪ナルベシ。天武帝ノ御末皇統ハ絶玉ヘドモ、清原姓アリテ今ニ傳ハレルハヨシ。サレドモワヅカニ儒流ニテアラセラルヽハ詮ナキ御事也。清和天皇ノ皇統ハタエ玉ヘドモ、庶流ノ源氏今ニ盛ナルハ目出タシ。冷泉院、後一條院、後宇多院、後圓融院、近クハ中御門院御末ツヾカセ玉ハズ。イカナル故ニカ悉ク論ジガタシ。臣下ニ至テハ倚々トシテ論ニ遑アラズ。畢竟ハ神ノ御所爲ナレバ、人理ヲ以テトカクハ申シガタキ御事ニ侍ラム。○又云、後宇多院ハ皇位御一統ノ御大願ナドニヤ。伊勢大神宮ニ法樂舍ヲ立サセ玉ヒテ、専ラ眞言法ニテ祈ラセ玉ヒシカド、却テ大御神ノ大御心ニ逆ラハセ玉ヒシ。ゲニヤ此御末ノ南朝ハ、御利運ナガラツヒニマケサモ玉ヒシニハアラズヤ。秀頼公御開運ノ祈ッニ、淀殿、出雲大神宮ニ鰐口ヲ奉リ玉ヒシノミナラズ、所々ノ寺院ニ御寄附オビタヾシキ事ナリケレド、遂ニ亡ビ玉ヒシモ同ロノ論ナラム哉。○上件佛ヲ尊シ人ハ血脈タユルナルベシ。多クハ此一事ニテタユル家多カルベシ。

○拔丸狐丸猿猴丸などいふ太刀の事

採用なりがたき書なれども、武家評林の文机のかたへにて、風のさと吹たるに、二ひら三ひら開きたるをみれば、十五巻の十五のひらなり。三河守平頼盛の郁芳門にての軍の條なるに、拔丸といふ名高き太刀の事見えたり。其文に、

コノ熊手切タル太刀ハ、拔丸トテ名高キ寶也。昔刑部卿忠盛池殿ニ晝寐シテオハシケルニ、池ヨリ大蛇上リテ忠盛ヲ呑ムトス。此太刀枕ノ上ニ立タリケルガ、自ラスルリト拔テ蛇ニ懸リケレバ　蛇恐テ池ニ沉ム。太刀モ鞘ニ返リシカバ、蛇又出テ呑ムトス。太刀又拔テ大蛇ヲ追テ池ノ汀ニ立テケリ。忠盛是ヨリ拔丸トハ附ラレケリ。當腹ノ愛子ニ依テ、頼盛是ヲ相傳テ持玉フ。依レ是清盛トハ不快也ケルト聞エシ、伯耆國大原眞守ガ作ト云ヘリ。」この拔丸の太刀の事につきて思ひ出たることのあれば、こゝにしるしてむ。はやく書き出つる千家奇事談といふものに、おのが家にもてる狐丸といふ太刀の奇靈をあげつるなり。そも〳〵そのゆゑよし、こゝにいさゝかいはむ。この太刀は十三代の祖尊能國造の、廣間にて晝寐せられたるに、目さめて見られたれば、かたはらに白狐をつらぬきてありしとぞ。さるゆゑをもて狐丸とは名づけられつるよしなり。こはおのれいとけなきときに、祖父尊之宿禰、はた禰宜吉岡陳善などの物語にきゝつるになん。こはわがものにてたがへる事はなきを、かの拔丸のゆゑよしはまさしきことにか。いかゞあらん。實事ならんには奇事談に引出たくこそ。

眞僞今ニシテ知リ叵(ガタ)シ。然レドモ古ク云ヒ傳ヘタル事ナレバ、例ニ引タマハムハ宜シカルベシ。似タル事ハイクツモアルモノナリ。吾周防國玖珂郡由宇郷ノ内中倉村ノ百姓ノ家ニ、猿猴丸ト云フ脇指アリ。彼(カレ)ガ先祖酒ニヱヒテ家ニ歸ル路、由宇川ノ邊ニ倒レ臥シタリシニ、醉サメテ家ニ歸リ伏シ、翌朝(ツトメテ)見レバ脇指ノサヤノミアリテ身ナシ。驚キテ彼川邊ニユキテ覓シカバ、川太郎ヲサシツラヌキテアリケルトナリ。其刀ノ作未詳也。靈劍ニテハ有ケリ。スベテ刀ニハ靈アル物ナリ。ソハ鍛冶ノ魂ノコモレルナルベシ。村正ノ刀ノ血ヲ見ザレバ鞘ニ入(ヲサマ)ラズト云フハ、亂世ノ心ニテ、人ヲヨク切リグニスレバヨシト思ヒテウチシナラム。吉光ノ刀ノ、某ノ君ノ御腹ヲ召サレムトセシニタヽザリシハ、此刀持ツ主人ノ守リニナレト思ヒテ打シナラム。サテ劍相ニ吉凶ノアルモノナレバ、其道ニカシコキ人ニヨク見セテ指料ナドハ定ムベキ事ナリ。或諸侯ノ御指料ヲ定メ玉ハムトシテ、相州正宗ト浪平行安トヲ川ノ瀬ニ立テ、川

上ヨリ紙ヲ多ク流サセ給ヒケルニ、行安ニアタリタルハ皆切レテ流レ、正宗ニハカヽリテ切レザリケレバ、行安ト定メラレタルニ、正宗ノ刀夢ニ見エテ、我ハ不用ノ物ハ切ラズ、君ノ御守ニハ慥ニナリ侍ルベシト申ケルニヨリテ、改テ正宗ニ定メ玉ヒケリト云フ話モアリ。サモアルベキ事ナリ。

○土師姓を菅原秋篠大枝と改られし事

續紀卅七巻に、延暦元年五月癸卯。少内記正八位上土師宿禰安人等言。臣等遠祖野見宿禰。造作物象。以代殉人。垂裕後昆。生民頼之。而其子孫動預凶儀。尋念祖業。意不在茲。是以土師宿禰古人等。前年因居地名。改姓菅原。當時安人任在遠國。不及預例。望請。土師之字改爲秋篠。詔許之。於是安人兄弟男女六人賜姓秋篠。同卅九巻。同九年十二月壬辰朔。詔曰。春秋之義祖以子貴。此則云々。宜朕外祖父高野朝臣外祖母土師宿禰並追贈正一位。其改土師氏爲大枝朝臣。夫先秩九族。事彰常典。自近及遠。義存曩籍。亦宜菅原眞仲。土師菅麻呂等同爲大枝朝臣矣。辛酉。勅外從五位下菅原宿禰道長。秋篠宿禰安人等。并賜姓朝臣。又正六位上土師宿禰諸士等賜姓大枝朝臣。其土師氏惣有四腹。中宮母家者云々。同巻、十年九月丁丑。近衛將監正六位下出雲臣祖人言。臣等本系。出自天穂日命。其天穂日命十四世孫曰野見宿禰。野見宿禰之後土師氏人等。或爲宿禰。或賜朝臣。臣等同爲一祖之後。獨漏均養之仁。伏望。與彼宿禰之族。同預改姓之例。於是賜姓宿禰。などみえたるを、延暦元年五月の條は、殉人の土作の事を忌て姓を改めんと願ひしは、一わたりはさることなれども、かくては遠ッ祖の功もつぎ／＼には廢れぬべし。九年十二月の條は、ひたすら土師の姓を、朝廷にも臣にも忌たまひしと見えたるは、いかなるよしなりけん。十年九月の條も、土師を忌ての事なり。そも／＼かく度々姓を改めむと乞つるは、世くだちゆくまに／＼、漢意の盛りになれるによりてなり。いと／＼くちをしきことなるをや。

延暦元年ノ條ハ、土師姓ノ勤功ヲ廢ルヤウニハ、其姓カラ願ヒテ爲タルナリ。其願ハ延暦十六年四月

ニ、太政官符出テ、土師姓ノ人ノ望ミノ通リニ、凶儀ニ預ル事ヲ永ク停メラレタリ。此事、古事記傳廿五ノ卷。〔割註〕六十八葉ヨリ七十一葉迄。」ニ、委ク記サレタリ。コレ其氏人ドモノ外ノ諸姓ハ、皆吉事ニテ仕奉ルニ、吾姓バカリハ凶儀ニテ仕奉ルコトヲ恥テ願ヘルナリ。サレドモ御代々々ノ天皇モ、果ハ皆崩ジ玉ヘバ、以後トテモヤハリ一度ハ崩ジ玉フベキ事ナレバ、凶儀ヲ知ル臣下モナクテハ濟ヌ事ナリ。然ルヲ　持統天皇ヨリ火葬ト云フ事始リテ、〔割註〕尊澄云、此火葬てふ事は、いみじうなげかしき事にて、神もいたく惡ませたまへるを、禍津日の神のあらびにて、きたなき天竺意の盛なるまに〳〵、天皇すら世々さるかたになし奉るは、いともゆゝしき御事になん。さるを皇神たちの御守りふかくまし〳〵て、つひに火葬の業をなし奉らざるやうになりつるは、いとも〳〵よろこばしき事なりけり。そは篤胤が古史徵一の卷(二百八十四丁)に、山陵志を引て、後光明院天皇の崩御る時に、魚賣の八兵衛といふものゝ功にて、此御時より火葬を止められしといへり。いと〳〵めでたき御事になん思ひたまふる。」葬送ノ禮ヲモ昔ノ通リニハ爲玉ハズナリタルニツキテ、土人姓ノ人ノ昔ノ通リデハナク、佛道沙汰マジリテ、土師姓バカリノ自由ニモナラヌヤウニナリ、土師姓ノ威勢モ衰ヘツベシ。サテ其時代カラハ、諸家ノ格式トモニ皆昔ノ通リデハナク、色々ナリカハリタリ。既ニ中臣氏モ神祭ヲ本體ノ姓ナリシガ、大織冠ヨリ變ジテ御政務ノ方ガ本體ニナリ、意美麿卿ノ家ハ中臣氏ヲモ改メ玉ハネドモ、家柄衰ヘテ、清麻呂公ヨリ後ハ大臣ニ昇リ玉ハズ成ニタリ。ソレガ地下ニナリテ、祭祀ノ職、祭主ノ官モヒキクナリ、ツヒニ神祇道ノ衰ヘトナレリ。是ト同ク凶儀ノ方モ、昔ハ土師姓ノ自由ニセシ事モ、當時代ニハ僧ノ自由ニスルヤウニナリシカバ、土師氏モ其職ニ居ル事ヲ慙ニ思ヒタルナリ。コトニ吉事ニ仕奉ラネバ、イヨ〳〵人情ニソムケル事故ニ、此延曆十六年ノ願ヒヲモ出シヽナラム。公儀ニモ凶儀ニ預ル事ヲ永ク停メ玉ハズトモ、其方ヲバカケナリニ土師氏ノ家職ナレバサセオキ玉ヒ、サテ吉事ニモ預ルヤウナ仕方モアルベキ事ナリ。ソハタトヘバ天皇崩御ノ時ハ、土師氏ノ惣本家ガ出テツトメ、諸臣ノ葬ニハ末

家ノ人々デモスムヤウニ爲オキ玉ハヾ、凶儀ニ預ラヌ人ハ吉事ニモ出ラル丶ヤウニナリヌベシ。然ルヲサヤウノ御ハカラヒモナク、永ク停メ玉ヘルハ、葬送ノ事ハ僧ガスルニテスンダ事ナリト思シ召シ、ナリ。ソレヨリ土師氏ヲ名乘ルヲモ憖ルヤウニナレルナリ。萬葉集十六巻ニ、造馬(コマツクル)土師志斐麻呂ト云フ歌ハ、コレモ土師氏ヲ憖シメタル歌ナリ。サル故ニ改姓ヲ願ヒシナリ。菅原、秋篠、大枝、ミナ大和國ノ地名ナリ。是土師姓ノ領地ノ地名ナリ。其故ニ菅原ニ居シ人ハ菅原ノ姓ニナリ。秋篠ニスム人ハ秋篠ノ姓ニ改リ、大枝ニ住シ人ハ大枝氏ニナレルナリ。歌ニ

菅原ヤ伏見ノ里云々。秋篠ヤ外山ノ里ヤシグレラム。

トヨメル則此所ナリ。

此モ畢竟佛道ガ邪魔ヲシテ、先皇ノ爲オキ玉ヘル事ヲクヅシタルニ當ルナリ。昔僧ヲ尊ミ玉フ事ノ半分ホド、土師姓ヲモ尊ミ玉ハヾ、其家ノ仕來ノ事ヲ憖テセヌ樣ニモナリハスマジキヲ。僧ヲバムシヤウニ尊キ物ニシ玉ヒ、俗人ヲバ餘リニイヤシミ玉ヒケルガワロキナリ。〇又云、土師氏ノ多クアル中ニ、自然ト血脉タユル家アラバ、其家ヲ葬式ヲシル家ニシ玉ヒ、公ヨリモ尊ミ玉ハヾ、此家葬式ヲスル樣ニナリヌベシ。僧ト云フ者ニハマカセ玉ハヌガヨロシカルベシ。

〇神鄕は天皇の服の御沙汰もなかりし事

同紀、同八年十二月乙未。皇太后崩丙申云々。天皇服二錫紵一。避二正殿一御二西廂一。率二皇太子及群臣一。擧レ哀。百官及畿内以二三十日一爲二服期一。諸國三日。並率二所部百姓一擧レ哀。但神鄕者不レ在二此限一。

こは　桓武天皇の大御代にて、何事も天皇の大御心のまゝなるにすら、諸國の服はわづかに三日なり。そも〳〵そのかみまでは、さすがに神を尊みたまひしと見えて。御服のことも神領は常ざまにかはらぬよしなるは、いともめでたき御事になむ。

然り今モ天皇ノ崩御ノ時ノ諒闇ハ、ワヅカノ日數也。

櫻の林後文

師のもとにふみかよはしてことゝへるに、こたへをみのあるばかりこゝろゆくものは世にあらず。かしこのふみは、角さはふ岩國の花ぢはし櫻處の大人の御もとに、我師松壺君の天保二年といひしとしの秋より、佐々木定寧翁をしてふみかよはしつゝことゝひ給へるに、淺茅原つばらに大人のこたへたまひしをぢ〳〵。はたこゝにも二度三たび花すゝきまねき給ひて、ものまなびし給ひたるに、をしへみちびき給へるなどにて、名におへる櫻の林の三十枝にちかくおひしげれるを、都賀の木のつぎ〳〵に五十枝百枝と立さかえゆかむは、いともよろこばしきことになむ。そも〳〵去年の冬、松壺の君の御舘にまうのぼりたれば、千書八千ぶみとうで給へる中に、このふみを見侍りしかば、いかでとく世にほどこらして、いぎたなき學びのまどの目ざまし草になしてむと、こひのみまつりしに、まづ周防の國にとひこゝろみてこそとのたまふに、御まへをおりて例ものするところにいでゝ、學びの兄なる白石ぬしに議りて、かの三十枝の中より一枝を打とりて、みどりふかむる柳井の里に堅石たる岩政大人の御もとに、しか〴〵のよしを聞えて、こたびさくら木にほはしたるを、おひすがひて二枝三枝をもものせむかし。

安政二とせといふとしの三月ばかり

出川道年しるす

これのさくらのはやしといへるは、出雲宿禰尊澄君の松壺の園に、あらたまの年月經て、しみゝに生立たりしを、たはやすく人のゆきかよひみるべき所にしあらねば、しるひとまれなりとなむ。さるをいにし年、一えだよぢ折て、世にあまねくしめしたれば、其木立の直くたゞしく、その色香のたぐひなくうるはしきことをめであへりとぞ。かゝればおなじくはほづゑもしづゑも、つき〴〵にをりもていでなむと、こたびまたかくはものせらるゝになむ。そも〳〵このはやしの花には、上つ世よりはじめて、中今の世のよにめづらかなるにほひおほくこもりて、かたえよりみもて行まに〳〵、あく事なくあなめでたとみゆめれば、なほこのほづゑしづゑ、こと〴〵にみはやさむと、ねぎもとむる人おほかりぬべくこそ。もとこの林の生立そめしゆゑよしは、先つとしの一枝にくはしくいはれたれば、そをみてしるべくなむ。

尾張國植松有園しるす

安政三年神無月ばかり

櫻の林 卷之二

○出雲國安來郷

東鑑四卷に、元暦二年正月廿二日丙午。以二出雲國安東郷一。先日令レ寄二附于鴨社神領一給訖。而可レ爲二冬季御神樂料所一之旨被二仰遣一。廣元施二行之一。とあり。安東は安來の事なるべし。東と來とよく似たればなり。そも〳〵此御神領の事につきて思ひ出たる事あり。今も彼郷ちかきわたりに某といふものありて、古き證文を所持りとぞ。神主ならねども、先祖は神主ぶりの名なり。その證文といふものは、加茂大神を此郷にいつき祭りしゆゑよしのふみなり。此はひとゝせ坪内昌成がうつして見せたるをおのれもてるなり。

按ズルニ、安東ハ誤リニテハナク、暫安來郷ヲ東西二郷ニセシ事アリシニハアラザルカ。大東、大西、出東、出西、意東、意西ナドノ例モアレバナリ。來ヲ誤テ東ト書ルモアルマジキ事ニハアラズ。

○神ノ社を尊み奉る事

同四十卷、建長二年七月廿二日都鄙神社廢陵事。殊可レ有二興行一之由及二御沙汰一。於二勅願所事一者。追可レ被レ任二奏聞一。先至二關東御分所々一者。任下被二定置一之旨上。可レ抽二修理之功一。若又及二大破一者。不日可レ令二言上一。隨二其左右一可レ有二御沙汰一之由。所レ被二仰出一也。是當世別當神主等。只貪二佛物神領一。輙無二興隆之志一之旨。度々評定之時。凝二群議一如レ此云々。此條めでたき事なり。今の世にもことなる大神を始め奉り。里々の氏神をも、宮柱の御おとろへあらむにはとて、改めつくらまほしき事なりかし。世に佛閣をつくるといへば、賤しきものまでも黄白ををしまず出すめり。いとたげかしき禍津日のあらびなり。玉勝間に、治れる御代のしるしにとあるごとく、いかで〳〵千木高く神の社を見るよしもがなと、

明くれおもふあまりに、ふでのついでにいさゝかしるしおくになむ。

然リシカリ。

○天神壽詞を祭主ならぬ人の奏したる事

百練抄十四巻に、貞永元年十一月廿一日庚辰。神祇權大副隆繼朝臣奏ニ天神壽詞一。祭主隆通朝臣輕服之間。隆繼奉ニ仕此役一。未曾有事也云々。こは台記に載せられたる中臣ノ壽詞と同じかるべし。

同ジ壽詞ニ侍リ。○ツイデニ申ス。神代文字ナカリシ世ニハ、古事モ皆口傳ナリ。其口傳ハ專ラ中臣氏ノ任ナリ。ソレヲ其事々ニヨリテ宣ルガ中臣ノ職也。延喜式ニ、祝詞ヲ載セラレタルモ、文字出來シ故ニノリタル也。神代ニハ唯中臣氏ノ家ノ口傳ノミ也。又忌部ノ家ニハ諸ノ幣物ノ員數ナド、コレモソラニ覺エ居テ、其祭々ニ供奉リシ也。萬ノ事皆然ナリキ。今ノ世ニ至リテモ、家ノ口傳ト云フ事アルハ、文字ナカリシ世ノ風ノ殘レル也。文字アレバ口傳ハイラヌ事ナリ。

○昔は主上と太子と御別殿なりし事

同書十五巻、寛元々年七月十七日。可レ被レ定ニ立太子雜事一之所幷御所事可レ爲ニ内裏一哉否事上云々。此時は太子も御別殿と見えたり。今の世は太子にも内裏に主上と御同居なり。尤里内裏の時は少狹によりて、御別居の事もあるにや。

太子御別居昔ノ風也。今御同居ナルハ里内裏ノ時ノナゴリナリ。

○伯耆國汗入郡宮内村の高杉明神の祭の事

附周防國熊毛郡石城神社及出雲國赤塚村の赤人の社の事

田蓑日記のかきざまのよからぬよしは、ひとゝせつばらにさとされしによりてあきらめつるを、聞もらしたることのあれば、こたび左にぬきいでてなむ。

(七丁ウ)上萬村今津村淀江ノ宿をすぐ。此所より一里ばかり南の方大山のふもとに加和良山といふあり、

孝靈山ともいへり。孝靈天皇のおはしましゝ所なりといひ、日野郡宮内村樂々福明神は、孝靈天皇の御陵なりといひ、汗入郡宮内村高杉明神は、孝靈天皇名細姫玖邇阿禮姫蠅伊呂杼を祭りて、此祭をいはなりうちといひて、あらそひのわざしけり。いはなりうちは後妻打をよこなまれるなりと、里人のいひ傳へたりといへり。大倭根子日子賦斗邇命此國にくだりましゝ事物に見えず。御陵は大和國片岡馬坂上にありと、古事記に見えたれば、里人の説等信じがたし。加和良山といふは、孝靈の文字音を訛りて呼るならんか。孝靈は高産靈の高靈にて、高産靈神の靈の鎭り坐るを、後に孝靈天皇と誤れるならんか。うはなりねたみのあらそひのわざも、神代の故事なりしを、孝靈天皇の御代の時の事にひきつけて誤れるならむか。考へまほしき事ども也。

此考始ハヨロシケレドモ、産靈神ナラムトイヘルハ附會也。加和良ハ甲ナルベシ。他國ニモ鎧ガ嶽、甲山ナドイフモアレバ、サル類ハアルベシ。カワラヲ孝靈ト書クハコジツケ也。孝靈トコジツケタルニヨリテ、祭神ノ御名ヲモ、彼后等ヲ引出ツベシ。此天皇ノ陵ハ大和國ニアレバ、マギレナキ事ナリ。諸國ニ名モ傳ハラヌ古墓ヲ、某天皇ノ御陵ゾナド云フ類モ、マヽアル事ナリ。是天皇ノ御ナラデハ、山陵ハナキ物ト心得タルカ。ソレマデモナク、不意ニコジツケタル物カ。イヅレニマレ論ズルニ足ラズ。神代ノウハナリネタミハサモアルベシ。信比古ガ里ノ西二里ニ、石城山石城神社アリ。式内熊毛郡ノ内ナリ。此社ノ祭禮九月九日昧爽ニ、廿一丁山下ノ宿院ニ神輿ニテ行幸アリ。此時山上ノ仁王門ヲ出玉フ時、輿ノ鈴ノ音ヲ止メ、供奉ノ人無言ナリ。其仁王門ノ傍ニウハナリノ杜トイフ杜アリテ小社アリ。其社ノ前ニ一人平伏シ居テ、神輿ノワタリ玉フ間、マダデゴザルマダデゴザルト云フ也。サテ行過玉ヘバ、御ヌカリ御損御ヌカリ御損トイヒテ立ノク也。此中上ル人モ家定マリテアリ。此ウハナリノ森ハ石城神御本后ナリ。神ノ宿院ナル後妻ノ所ニ行玉フヲネタミ玉フ故ニ、マダデゴザルマダデゴザルト云テ、本后ヲ誑キ奉ル所作ナリトゾ。サレバ前妻ノ杜トカ、後妻ネタミノ杜トカ云フベ

キヲ後妻ノ社ト云フハ鄙俗ノ誤ナリ。カヽル事モアレバ、伯耆國ナルモ是ニ似タル神代ノ古事アリケムヲ、事實ヲ失ヒテ孝靈天皇云々ト云フナルベシ。又信比古ガ里ノ南一里半ニ、般若寺ト云フ寺アリ。此寺ノ緣起ニ用明天皇豐後國眞野ノ長者ガ娘般若姫ヲ戀ヒサセ玉ヒテ、密ビテ草刈童ニ爲リテ下リ玉ヒ、彼姫ト契リ玉ヒテカヘラセ玉ヒ、彼姫ヲ召上ゲ玉フ時、大島ノ鳴戸ニテ風波ノ難ニ船ノツガヘリ。龍神ニトラレタリ。其屍ノ打上ゲタルヲ葬リ、般若寺ト云フ寺ヲ建テ、遺勅ニヨリテ、崩御ノ後、用明天皇ヲモ此寺ニ葬奉ルト云テ、小キ古墓二ツ並ビテアリ。山陵ノ狀ニアラズ。上ニ五輪ノ石塔アリテ中古ノ物也。カヽル妄傳ハイヅクニモアルモノ也。スデニ御地赤塚村ニハ山部ノ赤人ノ塚トテアルモ、〔割註〕松壺あろじ云、此塚といふものは、赤人の社とて一間四方の社なり。昔は冢なりしを後に社を建し也。」御祖先ノ御墳ニコソアラメ。赤塚ト云フ地名ニヨリテ、赤人ノ冢ト云フハ妄說也。〔割註〕松壺云、赤塚村てふ村名のゆゑよしは、禰宜坪内昌成がいひけらく、おのれいと若きほどに、彼村の年老たるものゝいひつるは、昔よりいひ傳へ來たるは、いとふるき世のことなるが、此村にて井を掘つるに、おもほえず棺を掘出たり。さるに朱のいと多くありつとぞ。さるよしをもて赤塚てふ名はものしけむと、かの昌成がいへりき。こはまことゝいつはりはしらねど、ものがたりをきゝつるまに〳〵こゝにあげつ。」

〔〕駁以呂波問辨といふ奸書の內ひとつふたつ

駁以呂波問辨といふ書は、見るもうるさくいみじき奸書なれども、ひとゝせ一わたり見しことのありつるに、抱腹のことゞもなれば論らふにもたらねど、筆のついでにいさゝかぬきいでて高論をきかんとす。〔〕〔四丁オ〕畢竟日本ハ唐ノ新田場同前ナル云々などいへるは、いかなる馬鹿ものにか。

此書ノ作者ハ、僧ナガラ徂徠流ノ學者ナリ。徂徠流ニハカヽル大馬鹿物至テ多シ。可レ惡ノ甚シキ事也。

○同書（六丁オ）伊勢大神宮ニ、近キ頃マデ三譲ノ額アリト云傳ル也とは、何をもていへるにか。此妖書の末に出たる金杵摧駁（廿五丁ウ）に、天下古今ノ大妄説ナリと辨論したるごとく論らふにもたらぬ妄説なり。

妄説取ルニ足ラズ。タトヘバ嚴島祓殿ノ正面ニ虚靈ト書ケル額アリ。コレモ外ノ繪馬同様ニ、寄附人アリテカケタル物ナレドモ、正面ニアレバ誠ノ額ノヤウニ見ユル也。三女神ヲ虚靈ト云フハ、垂加流ノ妄説ナルヲ、額ニモノシタルハ馬鹿物ナガラ、後ニハ證據ニモナリヌベキナリ。歎カシキ事ナリ。

○同書（八丁オ）備中國庭瀬ノ少林寺ニ、往古ヨリ天照皇ノ尊像アルヨシ云々。又近年浪華ニ云々、これも例の妄説なり。佛像を大御神の尊像と申掠めたる物なるべし。かつ北野の沙山の正法寺の像も佛像なるを、しひて大伯の像とこの妄僧が妄作せるなるべし。

コレラ一向取ルニ不レ足事也。タトヒアリトモ中古ノ妄作取ルニタラズ。

○まどふなよの詞

花ぐはし櫻戸ノ翁より、おのがをしへ子の中にても、こゝろざしいみじからむ人々にさづけてよと、二十葉のたにざくにみづからしるしておこせたる歌、及（マタ）その註釋（ユエヨシ）。

まどふなよくがもうみがもおしなべて都にかよふ道はあるものを、

岩政信比古云、陸ハ海内ニタトヘ、うみがハ船路ニテ、海外萬國ニタトヘタリ。海路ノ事ヲうみがトイフ事ハ、古事記日本武尊ノ后ノ御歌ニアリ。おしなへてトハ海内ハ申ニ及バズ、海外諸國モ船路ハ一（ヒト）ツヾキナリ。都にかよふハ道ト云フモノハ、人ノ足跡ノツキタル所ハ、皆京マデ一（ヒト）ツヾキ也。イカナル片田舍ノ山里ニテモ、道ハ皆大道ト一ツヾキ也。又深山ノ山フトコロニ城ヲカマヘ居ル盗賊ノ家ニテモ、里へ出ル路ハアル也。人放レタル高山ノ嶺ニ寺ヲタテ、居ル僧法師モ、食ヲ求ル路ハ里ヘカヨハズバアルベカラズ。サレバ盗賊モ僧法師モ、皆京ニ通フ道ノ下ニアル也。コノ歌ニテハ天下ニ雙

ナキ皇道ニタトヘタル也。ソハ人ノ世ヲ渡ル事、戎ニテモ道トイフ。所謂佛道儒道ノ類ナリ。其マネニ皇朝ニモ奈良ノ朝ノ頃ヨリ、世の中の道ナドト歌ニモヨムヤウニナレル也。マコトニ此世ヲ渡ルサマハ、路ヲ行クニ似タル事ナリ。君ニ仕ヘ奉ルヨリ始メテ、農桑ノ道、大工ノ木ノ道ナドイヒ、末々ノ事ニ至リテモ、茶ノ道、香ノ道ナドモイフ也。此道々ヲアシキ方ヘユカヌヤウニ、ヨキ方ヘヨキ方ヘトユクガ人ノ持方也。其中ニ一大事ハ君ニツカヘマツル道ナリ。君ニ仕ヘ奉ルトハ、輦轂ノ下ニアルバカリニハアラズ。蝦夷松前ノ果カラ長崎薩摩ノキハミマデ、ドコニ居テモ上ヲ恐レウヤマフハ、皆大君ニヨク仕ヘマツル也。サレバカノ山フトコロニカクレスム盗賊モ、身ノ行ハアシケレド、晝ハ出ズシテ夜々出テ害ヲナスハ、猶上ヲ恐ルヽガ故也。是彼等ガ道ヲ守ル也。彼等上ヲ恐ルヽ事ナク、晝モ出テ悪事ヲスルヤウニナレバ、山フトコロニコモリモセズ、里ニ居テ悪事ヲシ、白晝ニ盗賊ヲナス、是亂世也。亂世ト云フハ、大名ト大名トガ國ヲ爭フ事バカリデナク、世界ノ人ガ貴モ賤モ僧モ俗モナク、ミナガラ盗賊ニナレル也。可レ恐可レ恐。又海外ノ諸國モ、皆皇朝ニ臣伏シテ朝貢スベキ者ドモ也。世界ニ君ト申スハ吾大君ノ外ハナケレバ、〔割註〕松壺云、嚶々筆話初編に、(十三丁オ細書)東平云、一天四海の大君は、後堀川天皇なん云々といへる實にさる事也。」戎天竺ハ論ニ及バズ。アフリカモアメリカモ皆臣伏シ來ルベキ國ナリ。然ルヲ今モ琉球、朝鮮、於蘭陀ナドハ臣伏シ來レドモ、唐戎、天竺、其外ハ臣伏スベキ道ヲ知ラズ。或ハ隣好ト思ヒ、或ハ通商ト思フモアリ。コレ皆マコトノ道ヲ知ラヌ故也。仰冀ハ海外諸戎蠻一モ不レ殘、皇朝ニ臣伏シ來ルヤウニ爲タキ事也。ソハタヾコノマコトノ道ヲヲシヘ喩スヨリ外ナシ。コレヲ喩スモトハ皇朝學ヲスルヨリ先ハナシ。然ルニ今海内諸國スラ、此道理ヲ知ラヌ人モアリテ、世ハ佛法デ治マルト謂フ僧モアリ、世ハ儒道デ治マルト謂フ儒者モアリ、太平ノ化ニ浴シナガラ、下ニハ不臣ノ心ヲイダク者モアルベク、下賤ノ者モ農工ノ業別ナク、心ハ皆商人心ニナリテ、唯金ヲ設ル事計リヲ心掛ケ、天下ノ食トナル米麥ヲ作リ出ス事ヲ怠

り、公儀ニ仕奉ル心モナク、天下ノ爲ニナル心モナキ者多キ也。是皆道ハ都にかよふ道ナル事ヲ知ラズシテ、オノレオノレガ獨々、世ヲ渡ルノミノ私ノ道ト思フ誤カラ也。カヤウノ道ヲ知ラヌ人ニ、海内海外トモニ此大道ヲ迷ヒテ、小道トスル事ナカレト敎ヘタルガ、初句ノまとふなよナリ。末々ノ事ハ少々ノ違ヒアリトモ、唯此公儀ヲ恐レ敬フ事、一ツダニ違ヒナクバ天下ハイツモ太平ナルベシ。

この詞よ、風調趣向のおかしからずといふめる人もあるべけれど、皇朝の大道をよめるなれば、そのよしあしは論らふべきことにはあらずなん。そも〳〵近き年ごろ、中風の病にいたづきて筆とることも心にまかせざるを、かつ〴〵ものせりとてかきておこせたる此翁よ。忠情なる學士にて、師とたのまむにはこれこそなんなきえらびにはもるまじかりけれ。かゝればおのれ年ひさしく學問つるゆかりありて、かゝる歌をも註釋をもおこせたるになん。上のくだりのことゞもは、都賀の木のつぎ〳〵に、かの短册を有志弟子にあたへんとて、おもふよしをいさゝむら竹いさゝかしるしつ。時は嘉永二年といふとしののちの卯月廿七日の日。

○廐焚子退朝曰云々の是非の事

王勝間にも論らひのある、論語なる廐焚子退朝曰云々の條を。或儒者にこはいかに孔丘がいみじきあやまちにはあらずやと問試みたるに、一とぢの答書おこせたるを見れば、公廐私廐の事をくだ〳〵しく論らひて、孔丘が馬を問はざる失をおほはむと、不否の二字の事を長々しく附會るは、いと〳〵をかしうなむ。このひとゝぢおくりまゐらするを例の高論をこそ。

陸德明曰、夫子ノ家廐ナリ。朱子之ニ從フ。王弼曰、公廐ナリ。二說異同將タ何クニカ適從セン。禮雜記曰。廐焚孔子拜鄕人爲火來者。此レニ據レバ宜シク私廐トナスベキニ似タリ。然レドモ禮記、原ト漢儒ノ纂輯、固ヨリ醇疵一ナラザルモノ故ニ、讀者必其同異ヲ參攷シ、得失ヲ考證シ、而後ニ諸ヲ論孟學庸、詩書易春秋ニ質シ、斷然トシテ以テ疑義無キモノ、乃チ以テ夫子ノ眞言眞行トナスベキノ

ミ、是ヲ以テコレ等ノ言、未ダ以テ私廐ノ明徵、公家異同ノ斷案トスルニ足ラズ。止ムコト無キカ。請ノ試ニ其說ヲ考究セン。案ルニ曲禮子貢問、及ビ家語井ニ此語ヲ載セテ、國廐焚ニ作ル。鹽鐵論亦明ラカニ魯廐焚ト言フ。是ニ因テ之ヲ見レバ、則王氏公廐ノ說極メテ確據有リトス。且人ヲ貴ビ畜ヲ賤シムノ講、其理固ヨリ當サニ然ルベキ也トハイヘドモ、若果シテ私廐ナラバ、則馬亦自家ノ畜フ所、豈遂ニ問ハザルノ理アランヤ。益以テ陸說ノ是ニ非ルヲ覺ユ。大田公幹曰、釋文一讀不字ヲ以テ句トス。韓文公筆解之ニ從ヒ、不ヲ讀テ否ノ義トス。而シテ李濟翁資暇錄、李涪刊誤皆韓說ノ非ヲ辨ズ。然レドモ濟翁否字ヲ以テ對者ノ辭トス。則又マスマス奇僻ナリ。予謂ヘラク、夫子ノ意ヲ知ルモノ、唯孟子ノミ。故ニ曰、廐有ニ肥馬一。民有ニ飢色一。北齊後主ノ馬赤彪儀同ナルモノアリ。北漢劉旻ガ黄騮三品料ニ食ムモノアリ。然リ而シテ其民凍餒シテ之ヲ知ラズ、離散シテ之ヲ問ハザルニ至ル。然ラバ則記者不問馬ノ一句、凛乎トシテ庸君ノ頭腦ニ砭スルニ似タリ。此說理アリ。蓋王弼ノ說ニ本ヅク。王弼曰、孔子時ニ魯ノ司寇タリ、公朝ヨリ歸リテ火所ニ之キ玉フ。馬ヲ問ヒ玉ハザルモノハ、時俗馬ヲ重ンズルノ弊ヲ矯メ玉ハントナリ。蓋孔孟ノ言類ムネ多ク藥石ニ等シ。故ニ同ジク仁ヲ說キ、等シク孝ヲ語リ玉フニ、語人ニ因テ異ニ、說時ニ據テ變ズ。未ダ嘗テ濟然トシテ畫一ナラズ。之ヲ要スルニ以テ攻ム可クシテ攻メ、以テ補フ可クシテ補ヒ、以テ溫ム可クシテ溫メ、以テ涼ヤス可クシテ涼ス。亦何ゾ良醫ノ藥石ヲ用フルニ異ナラン。人苟シクモ氣血和調、起居其時ヲ得、飲食其宜ヲ失ハザレバ、則亦何ゾ藥石ヲ取ラン。然レドモ或ハ不幸ニタビ疾ニ係ルトキハ、則夫ノ尋常平和ノ味、未ダ以テ其疾痛疴癢ヲ療スルニ足ラズ。是ニ於テカ溫涼攻補適クトシテ偏倚ニ非ルハナキモノ、則其偏倚ヲ矯ムユヱン。故ニ曰君子ノ中庸ヤ、君子ニシテ時ニ中ス。故ニ曰、子莫ハ中ヲ執レリ、中ヲ執テ權無キハ、猶一ヲ執ルガ如シ。故ニ曰、孔子ハ聖ノ時ナルモノナリト豈信ナラズヤ。故ニ王氏時俗馬ヲ重ンズルノ弊ヲ矯ルノ說、井ニ大田氏凛乎トシテ、庸君ノ頭腦ニ砭スルニ似タルノ講、實ニ本章ノ要領

ヲ得ルニ似タリ。但退朝曰ヲ以テ、夫子直ニ火所ニ之キテ問ヒ玉フノコトヽス。故ニ邢氏曰、孔子ノ家廐ナリ、退朝二字ヲ以テ之ヲ知ルト、亦退朝二字ヲ謬解スルニ坐スルノミ。曰然ラバ則退朝ノ義イカン。曰退朝曰トハ、夫子公朝ヨリ私家ニ退キ玉ヒテ、國廐ノ火災アリシコトヲウハサシノ玉ヒシコトヲコソイフナレ。是等文義原ト自ラ平平易易、亦甚難澁ニシテ解釋シ易カラザルニ非ズ。然リ而シテ、如今學者ノ通病、往々タヾ平地ニ風波ヲ起ス。何ゾ其レ思ハザルノ甚シキヤ。經ニ曰道ハ近キニアリ。人之ヲ遠キニ求ムト。大ニ然リ。大ニ然リ。又案ルニ伊藤蘐曰、家語ニ據ルニ、此時孔子魯ノ司寇タリ。司寇ハ則大司空ノ屬太夫、大司空ハ四民ヲ治ルコトヲ主ル。小司寇之ニ屬スレバ則亦四民ヲ主ルノ官タリ。公廐火災ニヨリ、四民奔走力ヲ盡シテ火ヲ救フ。孔子其或ハ人ヲ傷ランコトヲ恐レ玉フ故ニ、朝ヨリ退テ特ニコレヲ問ヒ玉フモノナリ。其馬ヲ問ヒ玉ハザルモノハ、路馬重シトイヘドモ、馬ハ則司馬ノ主ドル所、己レガ職ノ與カルコトヲ得ル所ニ非ズ。故ニ敢テ其職ヲ干カシテ之ヲ問ヒ玉ハザルナリ。夫ノ漢ノ丙少卿牛ヲ問テ人ヲ問ハザルガ如キ、亦善ク孔子ヲ學ブモノナリ。此說亦未ダ退朝ノ義ヲ得タリトセズ。然レドモ亦以テ其馬ヲ問ハザルノ餘義ヲ得ルニ似タリ、故ニ贅ス。

松壺君ノ問ヒ玉フハ、「カヘリテ孔丘ガ不情ヲアラハセリ。不問馬ノ三字ヲ削リテヨロシ。」トアル。丘ガ不人情ヲコソ問ヒ玉ヒケレ、彼廐ガ公廐カ、私廐カノコトヲ問ヒハ爲玉ハズ。然ルヲ禮記ハ、漢儒ノ纂輯ヨナド何クレトヤカマシク云ヘルハ、問ニ答フル事ノ得失ヲ誤レリ。此語論語ニアル上ハ、禮記ニ何トアラウガ、家語ニ何トアラウガ、論ニ及バザル事ナリ。唯孔丘ガ一言、馬ノ事ヲ問ハザル失ハ、イカニ助ケムトストモ敝フ事ヲ得ジ。不ヲ否ニシテモ、否ヲ不ニシテモ、孔丘ガ問馬ノ問ヲ失セル事ハ一ツ事ナリ。馬ヲ重ンズル弊ヲ矯ントシテ、イカニ馬ヲ重ゼザルニモセヨ。馬屋ノ燒ケタルニ馬ニケガハナカリシカト一言問タランガ、人ニケガナシトイハンジヤマニハナルマジキ事ナリ。

伊藤蘐曰、家語ニ據ルニ、此時魯ノ司寇タリ云々。火災ニヨリ四民奔走シテ火ヲ救フ。孔丘司寇ニテ

四民ヲ治ムル事ヲ主ル役ナルニヨリテ、其人ヲ傷ラム事ヲ恐ルヽ故ニ、コレヲ問ヒ、馬ヲ問ハザルハ、己ガ預ラザル事ユヱニ問ハザル也。

サル小事ヲナゾ論語ニノセム。論語ニハ不レ問レ馬ヲ、孔子ノ心アリテ問ハザル事ヲ珍シク思ヒテ書キタルナリ。カヽル事ニ一言ヲ出スニモ、心ヲ用フル事ノ愚ナルヲ、鈴ノ屋大人ハ笑ヒ玉ヒ、儒者ドモハコレヲ助ケテ、孔子ヲカバフ心ノ拙キ事ヲ思フベキ也。

丙吉字ハ少卿ガ、牛ノ喘ヲ問ヒシ事、蒙求ニ丙吉牛喘ト題シテノセテアリ。玉勝間萩ノ下葉巻(十九丁)ニ此事笑ヒテアリ。是奴モ孔丘ニ劣ラヌ大馬鹿物ナリ。

唐人ハサヽイノ事ニモ、是ヲカウ云ヒテハ人ガ是ト云ハムカ、非ト云ハムカ。是ヲカウ云ヒテハ人ガ愚ナリト思ハムカ賢也ト思ハムカト、瑣碎ナル事ニモ理屈ヲ云ヒテ、手間ヲ費ス事多シ。サル故ニ學ハ出來テモ功ハ少キナリ。勞シテ功ナキ學也。玉勝間ニ、周公、孔丘、孟軻ガ事ヲソシリ玉フ事多キニテ、漢學ノ益ナク、害多キ事ヲ知リ玉フベキ也。

○鈴屋翁誦經の事

弟子なる白石元重云、遠江ノ國人八木美穗はよき古學者なるに、金光明最勝王經を誦讀せるなり。いかなればと尋ね侍りしかば、本居宣長先生も阿彌陀經を讀誦ありしといへりとぞ。松壺云、鈴屋翁は宇比山踏に云へりしごとく、何ごとも先祖の掟をみづからはよく守りたるゆゑに、誦經もせしなるべし。はた翁の誦經の事を、近來妖僧何とか云ふものゝ神佛一致論といふものに論破せり。高論きかまほしうなむ。

金光明最勝王經ヲヨメバ、金ガヨクタマルト云ヒテ、ヨム人アル者也。カノ八木美穗ト云フ人モ、其願ニテヨムナラム。信比古モ若キ時七八年バカリモ、一月ニ二返ヅヽヨミ侍リキ。其頃ハ家内豐ナリキ。是ヲヤメテヨリ貧ニナリキ。何故ニ廢シテヤメシゾト人モ問ヒケルニ、信比古答云フ。此經ヲヨ

ミテ金ヲ得テモ、佛法ヲ供養シテ殘ス事ナカレト彼經ニアリ。サテハ子孫ヲ養フ用ニモタヽズ、榮耀榮花ヲスル爲ニモナラヌ故ニ、廢シテヨマヌ也ト申シキ。歴朝詔詞解ニ、此經ノ功徳(クドク)益ニタヽヌ事委クアリ。鈴屋大人先祖ノ仕來リニテヨミ玉ヒケルハ阿彌陀經ニテ、建玉大人モ見聞タリトノ玉ヒキ。大人ノ曾祖父ヨリ父マデ三代、共ニ諡號何譽何大德トアリ。此譽號大德號ヲ諡ルノハ、淨土宗ニテ五重相傳トイフ事ヲ受ネバ號(ナヅク)ル事不レ成ナリ。此ニテ本居家代々淨土宗信仰ニテ、阿彌陀經ヲヨマレケムハサモアルベシト思ハル。五重相傳ノ内カ其外カ知ラネドモ、淨土宗ニハ圓頓戒トイフ事ヲモ、俗人ヘモ授ルヨシ也。

○天竺國は文字のつかひざまつたなき事

玉勝間つら〳〵椿ノ卷に云々、これらのこと天竺國のなべてのならひにもあるべけれど云々。天竺は文字の學問は皇國よりつたなきにや。

他國ノ文字ヲ取テ學文スルニ、皇朝バカリ巧者ナル國ハ、天下ニハアラジカシ。御國ニ文字ナキニ、唐戎ノ文字ヲ假リテ、其ニテ皇國ノ語ヲ自由自在ニカキ、カナタノ語ヲ用ヒテモ、自在ニツカヒ音ヲ假リテモ自由ニツカフ。唐國ニ天竺語ヲウツサントテ對譯ト云フ事アレドモ、天竺語ヲ譯(ウツ)ス事正シカラズ。天竺ノ音韻ヲウツス事自在ナラズ。梵音ヲウツス事モ、唐ヨリモ皇朝正シキ也。梵語ヲ譯シヽ事ハ、唐ニテ六朝隋唐ノ世ナリ。其頃ノ唐國ノ音韻、唐國ニハ傳ハラズシテ皇朝ニ傳ハレリ。所謂漢音呉音是ナリ。唐ノ宋ノ世ノ音モ唐ニハ傳ハラズ、皇朝ニ傳ハレリ。所謂唐音是ナリ。明ノ世ノ音モ少々ハ皇朝ニ傳ハレリ。字彙ニ見エタリ。清ノ世ノ音モ、長崎ヘ清人ノ來ルニヨリテ聞事ヲ得。唐國ニハ假字(カナ)ト云フ者ナキ故ニ、昔ノ音韻ヲカキトムル事能ハズ。故ニ古ノ音韻ハ日月ニ從テ消失テユク也。皇朝ニハ假字ト云フ自在ナル物ガアル故ニ、唐國古今ノ音韻ヲモ、天竺西洋(オランダ)ノ語ヲモ聞次第ニカキトメラルヽ也。人ノカシコキ事モ、愚ナル事モ、此文字ノ巧拙ニテ知ルベシ。

○天竺ニ唐語ヲ譯セル事ヲ聞カズ。唐ノ隋ノ世ニ道邃ト云フ僧、法華ノ註ニ三大部ト云フ物ヲ作リ、ソレヲ梵語ニ譯シテ天竺ヘ渡シヽカバ、竺人見テ大ニ感ゼシトイフ事アリ。是天竺人ヨリハ唐人ノカシコケレバ、唐人ナガラ梵語ニ譯シテ天竺ヘ渡シヽ也。天竺人ノオロカナル程、コレニテモ知ラレタリ。

○皇朝人ノ巧ナル事ハ、梵語ヲモ梵音ヲモ譯シ、唐音ヲモ唐語ヲモ譯シテ、カナタノ書ヲ自由自在ニヨメドモ、唐人ガ和音ヲ譯シ、和語ヲ譯セル事ヲ聞カズ。是ニテ唐人ヨリモ皇朝人ノ巧ナルホドヲ知ルベシ。

○西洋人モ其國ニ文字アリテ、物ヲ自由自在ニカキ、其文字ヲ皇朝人ニモ教ヘテカヽシムルニ、皇朝人ソレヲ習ヒテカケバ、漢字ヨリモ自在ナル由ナリ。サレバ西洋人ノカシコキ事、唐人ニ勝レリトキク。唐ハ文字ノ數アマリ多キ故ニ、其ヲ習フニ手間ガカヽル故ニ、人ノカシコクナル間ナシトゾ。其文字ヲ習フ故ニ、皇朝人モカシコクナル間ナシトイヘリ。アハレ大御國ニモ始ヨリ漢字ヲ知ラズシテ、假字ノ如キ文字ヲ皇朝ニテ作リタラバ却テ自在ナラマシヲ。

○あやしきことゞも

岩政翁の許に、周防國に、天保十三年の秋佐々惟詮がたよりにつけて、例の問書をおくりたるに、奥のかたにかきておこせたるをぢ〳〵、

ツイデニ怪シキ事ナレバ申侍ラム。本國熊毛郡島田村ノ百姓兼清重五郎蔭正ト云者、大平翁ノ門人ニテ大分出精仕リ、少々著書モアル由也。此人二三年前ニ死ナリテ、其墓ニ樒七本率都婆ナド人幷ニ立タルヲ、夜ノ間ニ抜テ投棄テアリ、立ナホシテオケバ、又夜ノ間ニ投棄テアリ。カクシテ七日ニアタル夜、母ト妻トノ夢ニ見エテ、彼二品ハウルサケレバ勿立置ソト云ヒケルヲ、翌日母モ妻モ墓ニマウデテ生ル人ニ云フ如ク云ヒケルヤウ、七本率都婆モ樒モ世ノ習ハシナレバ、取撤テハ人聞アシカリナ

ム。樒ハ今ヨリ撤ベシ。榊ニ改ムベシ。七本率都婆ハ四十九日ガ間ハ忍テ玉ヘ。其後ハ除侍ラムト斷リケレバ、其夜ヨリハ投棄ズナリケルトナム。此ハ防府ノ鈴木高鞆ガ彼母妻ヨリ直ニ聞ケル由ニテ語リ侍リツ。

○又本國大島郡安下庄ニ新宮ノ御崎ト云所アリ。ソコニ御岬靈神トテ松ノ森アリ。是ハ昔難船ノ船人ヲ浦ノ人ノ殺シテ物ヲ取リケルヲ、其船人ノ靈祟リヲナシケル故、神ニ祝ヒコメタルナリトゾ。然ルヲ近キ世ニナリテ、快念寺ト云フ淨土宗ノ僧奪ヒ取テ、今ハ佛事ニテ祭ルトナリ。然アリテ後ハ、彼靈時々荒レテ人ヲ取殺シ、或ハ人ヲ誑ス事、今ニ絶エズト。其所ノ神主長尾主計語レリ。又此人ノ話ニ、此庄ノ氏神八幡宮ノ境内ニ産社トテ森アリ。此社ノ祭神大多麻琉別神ト云ヒ傳ヘタリ。コレモ珍ラシキ事也。

松壺云、靈魂の人を守りし事あやしきわざなどのありしこと、平田篤胤が玉多須喜に論ひめり。合せ見るべし。

○大毗盧遮那佛

三代實錄の尋問の中に見えたる一こと、五卷(四丁ウ)東大寺大毗盧遮那佛の事、本居翁の詔詞解にあら〱解あれども委しからず。つばらに明說をきかむ。

詔詞解ニハ云々、此二ツ共ニナベテ佛ノ上ニイフ事也云々。タヾ大キナル佛像ヲイヘリト聞エタリ云々トアリ。是ニテ大佛ヲルシヤナト云フ故ハ聞エタリ。又ルシヤナトビルシヤナト異ナル故モ、詔詞解ニイヘルガ如シ。但信比古ガ所見ハ少シ異ナル事アリ。華嚴部ノ經ニテハ盧遮那佛ト云フハ、釋迦ノ本源ノ佛也。釋迦ハルシヤナ佛ノ化現也。娑婆三千世界ト云ヒテ、(割註)娑婆世界ハ釋迦ノ佛土也。娑婆トハ此世界ノ事ナリ。」百億ノ世界アリ。其百億世界ノ內、一世界一世界ニ各須彌山ト云フ高山中央ニアリ。日月モ一世界一世界別々ニアル也。是ヲ百億須彌、百億日月ト云フ。ルシヤナ佛ハ此

百億世界ヲ一佛土トシテアル根本佛也。此佛ノ百億ノ光明ニ、百億ノ化佛アリ。是釋迦也。其百億ノ釋迦ガ、百億ノ世界ヘ一佛ヅヽ出ル也。東大寺ハ華嚴宗ニテ、此ルシヤナ佛ヲ本尊大佛ニ造リタル也。今モ彼大佛ノ光明ノ先ニ、化佛トテ十六體ノ小佛アルナリ。是カノ百億ノ釋迦ニ表シタル也。サテ又毘盧遮那佛ト云フハ、大日如來トテ眞言宗ノ佛也。聖武皇帝ノ御代ニハ、眞言宗ハ未渡リ來ズ、大日ノ事ハ知リ玉ハネバ、東大寺ノ大佛ハビルシヤナニテハアラズ。華嚴宗ノ佛ルシヤナ佛也。然ルヲ文德實錄、此書等ニ大ビルシヤナトアルハ、此御時代ハ眞言宗流行ノ頃ナレバ、彼大佛ヲモ眞言僧ドモガ、大日トシテ大ビルシヤナト唱ヘタルニテモアルベシ。大日ハルシヤ佛モ、彌陀モ、藥師モ、何モ一切諸佛ノ惣根本ノ佛ニテ、一切諸佛ハ此大ビルシヤナ佛ノ法界智ノ內ニ包マレテアル。皆大日ノ枝葉トシタルモノ也。

○天浮橋の考

三大考の問書の答註の內に、○沼川姬ノ詞ノ事モアタリ障リナキヤウニ、今一層フカク委ク高ク考ヘ見タキ事ナレド、中庸モ建玉大人モ共考ヘナカリシ也。」との敎諭いとうれしうなん。さるを先生の明辨つばらにきかまほしうなむ。

天浮橋ハ地ニ近キ所ハ地ノ如クナルベク、天ニ近キ所ハ日ノ如クナルガ、相接シテツヾキ居ルモノニテ、今モ日ニコソ見エネ、アルラムモ知ラズ、キレタノツヾイテ居ルノト論ズルハ、幽顯ノ理ヲウマクサトラヌ故ナリ。

○神ハ申ニ及バズ、天狗道ニテサヘ、幽事ニツケルニハ人ノ立テタル小キ社ニテモ數神數狗ガ入リテモ隙シトゾ。佛經ニモ此事アリ。維摩ガ室ハ一丈方ナリキ。ソレニ八萬四千ノ高座ヲ東方阿閦佛ヨリカリテ、一丈四方ノ室ノ內ニスヱケルニ、猶アキ間アリシトイフ事、維摩經ニアリ。佛說ハ魔事ナレドモ、魔界モ幽ニ屬スルモノナレバ、サル事ナシトハ云ハレズ。

○天浮橋ノ事モ是等ニ准ジテ知ルベシ。

○惟喬親王の御歌の事

例の問書もかきをへたれば、封じてむとおもふをりしも、ふと古今集を見たるに思ひ得たることのあれば、こゝにしるしてむ。○古今集春ノ下に、僧正遍昭によみておくりける。惟喬のみこ。

さくら花ちらばちらなんちらずとも古さと人の來ても見なくに

此歌の註大方の抄に解きもらせりと思はるゝ事のあれば、おほけなけれど論らひてむ。〔割註〕こゝに大かたの註抄といへるは、餘材抄、打聞、遠鏡、季吟抄、古今正義、同鄙詞など也。」そも〳〵此歌は、表にはたゞ遍昭が事をふるさと人とはいはれたれども、下情にはふかく述懐の意をふくまれたる也。さるは此親王は文德天皇の第一の皇子なれども、后腹ならねば皇位にも立ち玉はざりしかば、つひに世を遁れたまひて、〔割註〕皇位に立ち玉はざりしことは、識者の論あればくだ〳〵しくてもらせり。」小野に住みたまひたるを思ひ奉れば、かの故郷人は顯には遍昭が事なれども、隱にはかねて心にかけたまふ公卿たちをさしてのたまへるなるべし。はた在中將のごとく問はるゝ人は稀なりし事、かの物語を見ても知らるかし。〔割註〕近き頃この物語のゆゑよしは、嚶々筆話に諸平が論らひたる、はた櫻の林にも岩政翁の論らひあるを、そはつぎ〳〵の卷にものせむかし。」さて古今集に、此歌を撰入ありしは、紀ノ大夫の深く思ひ謀りての心しらひなりけんかし。

コレモオモシロキ御考ナリ。

櫻の林　終

跋

此ひともとは、ひと日、君の御まへにさぶらひつゝ、はやましげ山、今を盛りに咲みてる櫻木を、山口だにわけまよへるおのゝじゝのえらぶべきにあらねば、根こじにこじて、御學のまどに移し植たれば、今少しおかしからむ花の枝を折てこそとのたまふ物から、わがためには、こよなくゑみのまゆひらけたるこゝちせられて、御前をおりつ。

安政三年七月

西村清臣

浮世絵類考


曲亭馬琴肖像
月耕縮寫

新增補浮世繪類考

一浮世繪類考は、笹屋邦教、〔割註〕稱新七郎、本銀町壹丁目に住して縫箔屋を業とす。」山東京傳の編にして、式亭三馬の書入あり。

一同附錄は、寛政十二庚申年邦教の編にして、三馬書入あり。

一同追考は、享和二壬戌年京傳の編にして、三馬書入あり。

以上三部の寫本、大田蜀山先生の藏本にして、文政の始め先生の書入あり。

一續浮世繪類考は、天保四癸巳冬根岸の隱士無名翁の編とあり。按るに、浮世繪師溪齋英泉の輯なり。左に誌せる三部を一つとなし、洩たるを集めて二卷とせしなり。

一弘化元甲辰白雲堂月岑子、此書を再び補ひて、增補浮世繪類考と題し、そが上に猶補ひ正されしは、頭書等にこまかに書加へあれども、又洩れたる事なきにしもあらず。卷中混亂して見るに煩しきが故、今其系譜を卷の始に出し、洩れたるを少く補ひて、新增補浮世繪類考と題す。且月岑子の編には、無名翁の序文、土佐家の系譜を誌すといへども、長文にして且拙し。故にこれを闕く。然りといへども、未だ全しとするに足らす。尙識者の後考を俟つのみ。

慶應戊辰春　　龍田舍秋錦識

新增補浮世繪類考目錄

菱川氏系譜	一六三	菱川師宣	一六四	英氏系譜	一六五
英一蝶	一六七	菊川氏系譜	一六五	堤氏系譜	一七〇
鳥山氏系譜	一七〇	北尾氏系譜	一七一	宮川氏系譜	一七一
歌川氏系譜	一七三	鳥居氏系譜	一七六	岩佐又兵衛	一七七
雛屋立甫	一七八	石川流宣	一七九	西川祐信	一七九
西川祐尹	一八〇	橘守國	一八〇	門人國雄	一八一
吉田半兵衛	一八二	月岡雪鼎	一八二	下河邊拾水	一八二
蒔繪師源三郎	一八三	野々村治兵衛	一八三	長谷川春長	一八三
懐月堂	一八三	珉江橘姓	一八三	川枝豐信	一八四
阿りう	一八四	長谷川光信	一八四	小松屋百龜	一八四
西村重長	一八四	鈴木春信	一八四	近藤清春	一八五
湖龍齋	一八五	石川豐信	一八六	奥村政信	一八六
奥村利信	一八七	奥村政房	一八七	富川房信	一八七
一筆齋文調	一八七	寫樂	一八七	春潮	一八八
珠雀齋	一八八	歌舞伎堂艶鏡	一八八	細田榮之	一八八
春川榮山	一八八	春川五七	一八八	泉守一	一八八
泉山松月	一八九	堤等琳	一八九	菊川英山	一八九
溪齋英泉	一九〇	鳥山石燕	一九二	戀川春町	一九二

喜多川歌麿 一九二
北尾政演 一九四
宮川長春 一九五
勝川春英 一九六
葛飾爲一 一九七
蹄齋北馬 二〇一
重　山 二〇二
柳　文朝 二〇三
田中益信 二〇三
山本義信 二〇四
歌川豐廣 二〇五
歌川豐國 二〇六
歌川國長 二一二
歌川國直 二一三
鳥居清長 二一四
石田玉山 二一五
法橋關月 二一五
法橋中和 二一六
奥村文鳴 二一六
二代目竹原春泉齋 二一七

北川菊麿 一九三
北尾政美 一九四
勝川春章 一九五
勝川春亭 一九六
辰　齋 二〇一
北　雲 二〇一
魚屋北溪 二〇二
二代目柳文朝 二〇三
古川三蝶 二〇三
鬼　玉 二〇四
歌川豐清 二〇五
歌川國政 二〇九
歌川國丸 二一二
歌川國芳 二一三
鳥居清峯 二一四
二代目石田玉山 二一五
蔀　關牛 二一六
丹羽松溪 二一六
大原東野 二一六
速見春曉齋 二一七

北尾重政 一九三
窪　俊滿 一九五
勝川春好 一九六
勝川春扇 一九七
戴　斗 二〇一
柳川重信 二〇二
岳亭春信 二〇三
蘭德齋春童 二〇三
金　長 二〇三
歌川豐春 二〇四
一立齋廣重 二〇六
二代目歌川豐國 二〇九
歌川國安 二一二
鳥居清信 二一四
羽川珍重 二一四
石田玉峰 二一五
中井藍江 二一六
佐久間草偃 二一六
竹原春朝齋 二一六
二代目速見春曉齋 二一七

流光齋　二一八　合川珉和　二一八　淺山蘆洲　二一八
一蜂齋馬園　二一八　松好齋半兵衛　二一八　青陽齋蘆國　二一八
喜多川北麿　二一八　兆齋月亭　二一八　谷本月麿　二一八
桂向亭長丸　二一八　東春嶺　二一八　福知白瑛　二一八
大石眞虎　二一八　探月齋　二一八　歌川豐秀　二一八
松川半山　二一九

附錄

大津繪佛像　二二〇

戲作者略傳目錄

山東京傳　二三五　式亭三馬　二三四　曲亭馬琴　二四五
十返舍一九　二五三　柳亭種彥　二五八　烏亭焉馬　二六二
岡清兵衛　二六二　風來山人　二六三　戀川春町　二六四
芝全交　二六五　原澤喜三二　二六五　中原萬象　二六五
唐來三和　二六六　市場通笑　二六六　四方山人　二六六
唐衣橘洲　二六七　朱樂菅江　二六七　平秩東作　二六七
六樹園　二六八　戀川好町　二六九　紀定丸　二七〇
蔦唐丸　二七〇　黑鳶式部　二七一　黑木黑山人　二七一
河野師橘　二七一　田螺金魚　二七一　楠楚滿人　二七一
窪田俊滿　二七一　振鷺亭　二七二　櫻川杜芳　二七三
樹下石上　二七三　前野鬼武　二七三　二代目菅喜三二　二七四

竹塚東子	二七四	內田新好	二七五	櫻川慈悲成	二七五
二代目萬象	二七六	七珍萬寶	二七六	伊庭可笑	二七六
戀川行町	二七七	紫色主	二七七	小枝繁	二七七
高井蘭山	二七七	自惚山人	二七八	橘香保留	二七八
祭和樽	二七八	黄厚丸	二七八	全亭正直	二七八
西來居未佛	二七八	鬪亭傳笑	二七九	東里山人	二七九
楳園靜廬	二七九	壽阿彌	二八〇	鶴屋南北	二八〇
瀬川如皐	二八二	白頭丸柳漁	二八二	葛葉山人	二八二
松島半二	二八三	寶田千町	二八三	向榮堂欣堂	二八三
花笠文京	二八三	林屋林泉	二八三		
式亭三馬門人					
樂亭馬笑	二八四	古今亭三馬	二八四	一生三亭	二八四
福亭三笑	二八四	益亭三友	二八四	二代目福亭三笑	二八四
一亭三子	二八四	德亭三孝	二八四	雪亭三冬	二八四
返亭三七	二八四	春亭三曉	二八四	二代目春亭三曉	二八四
一亭三樂	二八四	三鷲	二八四		
十返舍一九門人					
大原市女	二八五	東寧舍一河	二八五	東埼亭一瓜	二八五
五返舍半九	二八五	金鈴舍一寶	二八五	九返舍一八	二八五
半返舍一朱	二八五	愚舍一得	二八五	十字亭三九	二八五

曲亭馬琴門人

櫟亭琴魚	二八六	嶺松亭琴我	二八六	琴川	二八六
直亭驥德	二八六	琴梧規矩	二八六	節亭琴驢	二八六
鶯永春水	二八六	岡山鳥	二八七	瀧澤鯉丈	二八七
千代春道	二八七	晉米齋玉粒	二八八	東西菴南北	二八八
神屋蓬洲	二八八	栗杖亭鬼卵	二八八	陽春亭慶賀	二八九
江南亭唐立	二八九	忍岡常丸	二八九	二代目戀川春町	二八九
玉樓花紫	二八九	美圖垣笑顏	二九〇	一筆菴英泉	二九〇
三亭春馬	二九〇	五柳亭德升	二九〇	式亭小三馬	二九一
山東京山	二九一	岳亭丘山	二九二	松亭金水	二九二
田中雪麿	二九一	二代目烏亭焉馬	二九三	夷福亭宮守	二九三
乾坤坊良齋	二九三				

柳亭種彥門人

笠亭仙果	二九四

新增補浮世繪類考

山東京傳著

○菱川氏系譜

藤原姓菱川七右衛門 房州平群郡保田町住紺屋ヲ業トス。

├菱川吉右衛門道茂入道光竹 寛政二年二月十五日歿ス ○房州平群郡保田町住、家業縫箔其業精妙也。

├實子 菱川師宣

├二男 同 正之丞 始吉左衛門ト稱ス。父師宣ト同居、始畫師、後紺屋ヲ業トス。

├實子 菱川吉兵衛師房

├同 沖之丞師永 鹿子及ビ圖鑑ニ作之丞トアリ。一說酒造之丞。父ト同居彩色等妙ヲ得タリ。

├同佐次兵衛重嘉家業紺屋─同彌右衛門

門人

├菱川政信 字守節、ヨク師ノ畫風ニ似タリ。

├菱川友房 畫風ハ似テ筆劣レリ。

├古山太良兵衛師重 三合集覧ニ、菱川太郎兵衛トアリ。古山ハ本姓ナルベシ。

├古山新九郎師政 享保中人、稱文志、兩國米澤町江市長屋ニ住ス。北人ニ至テ菱川ノ畫風ヲ失フ。世事談ニ見ユ。市川海老藏ノ似顔書出ス。

師宣の血脈六代目に至りて絶す。今養子を以て家を續。房州保田町に在り。是七代目なり。女子他に嫁て生る血脈の者、同所他家には在と云。

○菱川師宣

菱川吉兵衛師宣剃髮して友竹と稱す。房州平群郡保田町の產、若年の時江戶に移り居す。始めは縫箔を以て業とし、上繪と云ものより畫を書きならひて後一家をなせり。英一蝶と時を同ふすといへども、十とせばかり前立て世に行る。按るに、師宣は土佐流の畫風を好み、浮世又兵衛の筆意を倣て一家をなせり。一蝶は狩野家の筆意を學び、師宣の畫風によりて時世の粧を畫て一家をなせり。共に近世の名畫なり。一蝶若かりし時師宣の畫風を慕ひし事、四季の畫跋、〔割註〕一蝶の部に出せり。」と云ものに、岩佐菱川が上にたゝん事を思ひてと自ら書けるを以て證とすべし。師宣自ら印本の板下と云物を畫て板刻の繪本甚多し。他國の人江戶繪と稱して、板刻の繪を翫ぶは此人に起れり。みなし栗に

山城の吉彌むすびも松にこそ　　其角
菱川やうの吾妻俤　　嵐雪

みなし栗は天和三年板なり。此頃さかりに行れたるを見るべし。居處を考るに、貞享四年板江戶鹿子に村松町二丁目元祿二年板江戶圖鑑及同五年板買物調方三合集覽に橘町とあり。一說堺町横町、又大傳馬町二丁目と云。是等轉宅の處なるべし。

房州保田村林海山別願院境內に在る所
周回七尺厚二寸五分　　寄進施主
洪鐘一口　口貳尺二寸五分　鐫字如ㇾ此　菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹
長サ三尺五寸　　元祿七甲戌年五月吉日

和國百女〔割註〕三冊元祿八年板。」大和の大寄　壹冊　　月次遊び〔割註〕一冊元祿四年板。」

戀のみなかみ　壹冊　　書本大和墨　三冊　　繪本勇士力艸　貞享二年板

香　貝　大　全　天和四年板　　倭名所繪盡　二冊　　訓蒙圖彙〔割註〕再板師宣畫、貞享原板ハ吉田半兵衞畫。

江戸雀　　○床禮儀　　艶書軌範　　旅葛籠　　色雙子　　近世大全

以上五部共師宣畫なりと云。然るや否やしらず。

其外天和、貞享の頃の板本多し。

貞享四年の板江戸鹿子に、

浮世繪師　　村松町二丁目菱川吉兵衞　　堺町横町同吉左衞門

元祿二年板江戸圖鑑綱目に

浮世畫師　　橘町菱川吉兵衞師宣　　同吉左衞門師房　　長谷川町古山太郎兵衞師重

淺草石川伊左衞門俊之　　通油町杉村次兵衞正高　　橘町菱川作之丞師永

元祿五年板買物調方三合集覽横切本一冊

江戸浮世繪師　　菱川吉兵衞　　同吉左衞門　　同太郎兵衞

元祿十年板國家萬葉記七ノ下二

菱川吉兵衞、同作之丞、同吉左衞門、村松町二丁目

按るに、井澤蟠龍長秀の俗說辨に國史を引て、大和畫師は倭畫師にて、みだりに稱すべからずと述たり。俗說辨に云、畫師みだりに倭畫師とかく者あり。畫師忍(ヲシ)勝姓を改て爲₂倭畫師₁とあるをみるべし。

○英氏系譜

英一蝶 ―― 法名機外道輪居士

―― 門人 一蜂 號春窓翁、寶曆十年四月廿八日卒、深川法禪寺中南龍院ニ葬ス。

男 一蝶　名信勝、號翠蔭、俗稱長八、世ニ長八一蝶ト云フ。元文元年閏十一月十一日歿ス。深川寺町陽岳寺ニ葬ス。

二男 一蜩　名信祐、號湖窓翁、又孤雲、又名百松、俗稱源内、後一舟ト改ム。

養子 一舟　始メ門人、後師家ヲ繼グ。名信種、號東窓翁、俗稱彌三郎、明和五年正月廿三日歿ス。二本榎承教寺中顯乘院ニ葬ス。

男 一川　名宗澤、號松庵。

嵩之

門人 嵩谷　高氏、本姓本國、名一雄子盈、號樂只齋、翠雲堂、屠龍翁。英一、文化元年八月廿三日卒ス。淺草西福寺ニ葬ス。七十五歳。

男 嵩溪　名信宜、可復、號玄々齋、烟龍舍、睡雲子、五十八歳ニテ卒ス。

二男 嵩嶽　早世、名良恭

男 嵩谷　名丈雄可親、號一桐齋、致雲堂、降菴、物々齋。

二男 一笑　名可圭信俊、或ハ養子ナリト云フ。後英一笑ト改ム。始嵩深。

男 嵩嵺

同二代 一蜂　始メ一蜓ト云フ。天明八年六月十二日卒。西本願寺中眞光院ニ葬ス。

同 嵩之　本姓佐脇、名道賢、字子岳、初名嵩梓、又英一水、號果々、觀中堂、東窓翁、一翠齋等號ス、俗稱勘藏、明和九年七月三日六十六歳ニテ卒ス。善願寺中稱名院ニ葬ス。一蝶晩年ノ門人也。

男 嵩雪　名貫多、稱倉治、號鄰止樓、中岳堂、文化元年十一月十二日卒ス。同寺ニ葬ル。翠雲堂。

女 英之　寛政三年六月三日卒ス。同寺ニ葬ス。早世。

一蟬

破笠　小川氏、名尙行、號卯觀子、夢中菴、笠翁、俳名宗宇、稱平助、延享四年六月三日卒ス。

雪岑　名盛房、號白鳳軒、旭翁、稱福王茂右衛門、御能役者ナリ。寶暦ノ頃ヨリ能ノ圖ヲ畫ル卷物掛物等數多アリ。天明五年三月十八日卒ス。深川心行寺ニ葬ス。

嵩松　狂名元ノ木阿彌

嵩鄉　名信實、號友松菴一桂ト改ム。本所法恩寺橋通リニ住ス。天保十四年十二月廿一日、八十餘歳ニテ卒ス。

- 二男現存　名信光、幼名民之助、後町奉行組同心ナリ。
- 一蜻　大村清吉郎ト改ム。
- 澤山高溪　宗信宜玄々齋
- 和田高岳　白盛機
- 滿　雲高
- 中根高旭

- 觀
- 嵩月　宗子行、簑虫菴、號景訥、久松町續武家地ニ住ス。名章雄、天保元年二月廿日卒ス。七十餘歲、深川瑞岳寺ニ葬ス。
- 後三代目　嵩林　一蜂ト改ム
- 後四代目　嵩琳　一蜂ト改ム
- 嵩樹　字尙康

此外嵩谷翁門人數多ありといへども、高名ならざるは多く洩しつ。右英氏系譜は、月岑子傳寫なる初代嵩谷翁の藏する處の系譜といふもの續類考に出たり。世に傳ふ所と大同小異なる故に、予、大村一蜻子の藏なる系譜を借得ててらし見るに、又不同なりといへども、聊よりどころ有が故に、姑く一蜻子の藏に予が案を加へてこゝに誌す。

〇英一蝶

姓藤原、多賀氏、名は信香、一に安雄、俗稱助之進、或は次右衞門、幼名猪三郎といふ。承應元年攝州大坂に生る。父を多賀伯菴と云。某侯の侍醫也。寛文六年十五歲の時江戶に下り、狩野安信、〔割註〕安信は狩野孝信の三男、名永眞、稱源四郎、號牧心齋、右京之進と稱す。入道して法眼に叙す。貞享二年九月四日卒、七十三才。」の門人となる。剃髮して朝潮と稱す。翠簑翁、牛丸、曉雲、舊草堂、一蜂閑人、隣樵菴、鄰濤菴、北窓翁、和央、和應等數號あり。性親に孝心ふかし。書を佐玄龍に學びて、後一家の風をかきて書名あり。俳諧を芭蕉に學び、其角、嵐雪と交り深し。元祿十一年十二月、〔割註〕八年とするは非なり。」吳服町一丁目新道に住し時故ありて謫せらる。時に歲四十七歲。一蝶に老母ありて、剃髮して妙壽といふ。一蝶、八丈島〔割註〕一說に三宅島と云。」に流せられて後、横谷宗珉が家にや

したはる。〔割註〕宗珉俗稱次兵衞、檜物町に住す。正德三巳年三月晦日歿す。」一說に、一蝶配流せられ老母を養ふ親族なし。官舍へ此事を願ひ、謫居より畫を賣る事を免ぜられてより、謫居の圖をこまかに畫て、ひさぐべき畫の中へ入て母の元へ送り越したりしが、宗珉の家に殘りしを後に、三谷某の藏になりしと云。一蝶謫居に在事十二年、寶永六年九月、〔割註〕四年と爲は非なり。」歸鄕して後、英〔割註〕一說に花房とす。母の姓也と云。」一蝶と稱し、北窓翁と號す。深川長堀町に住ぬ。其母一蝶歸鄕の後、正德四年三月晦日歿せり。深川靈岸寺の後ろ海邊新田宜雲寺といふ禪院あり。一蝶歸鄕して後、したしく此寺に住ける由、寺中の繪障子のたぐひすべて一蝶の筆なり。ゆゑに世人一蝶寺といふ。其繪近頃の回祿に亡しとぞ。享保九年甲辰正月十三日病て歿せり。享年七十三歲。二本榎承敎寺塔中〔日蓮宗〕顯乘院に葬す。

法名　英受院一蝶日意　　辭世

まぎらかす浮世の業の色どりもありてや月に薄墨の空

○英一蝶四季之繪跋

夫大和畫は、そのかみ土佐刑部大輔光信がすさみ、堂上のうや〳〵敷より、田家のふつゝかなるさま、岩木のたゞずまひ、やり水の名木、是にはじまり末々にながれ、予が如きのつたなきまで是をもとゝす。近頃越前の產岩佐某となんいふもの、歌舞白拍子の時勢粧ひを、おのづから寫しえて、世の人浮世又平とあだなす。久敷世に翫ぶ。亦房州の菱川師宣と云者、江府に出て梓におこし、こぞつて風流の目をよろこばしむ。此道予が學ぶ所にあらずといへども、若かりし時あだしあだ浪のよるべにまよひ、時雨朝がへりのまばゆきもいとはざるころほひ、岩佐菱川が上にたゝん事を思ひて、よしなきうきなのねざしのこりて、はづかしの森のしげきこと草ともなれり。さるが中に事にあたりて、謫居にさすらへしこと十とせあまり廿とせに近きを、ありがたき御惠のめでたきもとの都に歸りぬ。ある人むかしの筆の四時

のたわれ書をふたゝび予に見す。其頃は心たくましく、眼こゝろに髮筋を千筋にわくる事、さも事たらざりけらし。しかし今の世の有樣にくらぶれば、髮のつとゑりをこえず、ふり袖大路をすらず。たゞあまさがる田舍おゝなの姿繪とも思ふべからん。螢星うつりかわりて、この一卷を見る事、浦島が七世のむま子に逢へるのためしにひきて、かつはよろこびをそふるの心にて、これがために跋す。

英　一　蝶　書

湯原氏記に云、元祿七年四月二日、從ニ桂昌院樣ニ六角越前守御使被レ遣し金屛風一雙(吉野、立田　多賀朝湖筆本願寺也。同一雙(大和耕作)同人筆新門也。

菊川　英山
- 英　泉
  - 英　春　大木氏小石川ニ住ス。錦繪多シ。
  - 英　之　俗稱源三郎、麹町ニ住ス。讀本多シ。木挽町。
  - 泉　晁　俗稱吉藏、號貞齋、靈岸島ニ住　。草雙紙錦畫多シ。
  - 泉　橘　俗稱仙吉、號紫飲齋、向島ニ住ス。中本多シ。畫作アリ。筆耕ヲ業トス。
  - 泉　隣　井村氏、號山齋、櫻田ニ住ス。中本多シ。
  - 泉　里　俗稱彌六、號嶺齋、麹町　住ス。中本アリ。
  - 英　蝶　初春川五七門人也。京師ノ人、江戸ニ歿ス。錦繪草雙紙アリ。
  - 文　齋　磯野氏、名信春、肥前長崎ニ住ス。長崎土産一冊アリ。畫作。
  - 英　一　靜齋ト號ス。
  - 英　壽　俗稱伊三郎、號英齋、浪花ニ住ス。錦繪讀本多シ。
- 英　信
- 英　蝶
- 英　章
- 英　里
- 光一英草

- 堤等琳　俗稱孫二、號堤等琳ト云。堤等琳ハ堤流ノ元祖也。
  - 二代目等琳　俗稱吟二、本姓月岡。
    - 堤孫二　雪峯ト號ス。俗雄子定ト云フ。神田大工町ニ住ス。霞山ト號ス。萬町ニ住ス。畫風ヲ改メ一流ノ妙手也。
    - 等舟
    - 等川
      - 二代目孫二　雪丘ト號ス、俗ニ雀安ト云。
    - 守一
  - 三代目等琳
    - 秋琳　後勝川春扇ト改ム
    - 等明　住所不ㇾ詳
    - 等榮　茅場町ニ住ス
    - 榮山　月岡氏、淺草山谷ニ住ス。
    - 秋月　始等睛、今雪村。
    - 等揚　麹町ニ住ス
    - 幡羽　月岡氏、俗稱庄五郎、世ニ本庄ト云。本町ニ住ス。父天保四年春川島雪齋門人トナリ雪僊ト改ム。父世侯畫師トナル。後金吹町ニ住ス。嘉永中剃髪ス。

- 鳥山石燕
  - 子興
  - 石鳥
  - 月沙
  - 戀川春町
  - 喜多川歌麿
    - 雪麿　畫ヲ止メテ作者トナル
    - 美麿
    - 菊麿　俗稱東海林平右衛門、小石川水道橋ニ住ス。錦繪アリ。文化中歿ス。
    - 式麿
    - 秀麿　下谷稲荷前ニ住ス。文化頃錦繪アリ。
    - 二代目歌麿　馬喰町ニ住ス。二世戀川春町ト云人也。畫ヲ能ス。故歌麿ノ妻ニ入夫セシ也錦繪アレドモ拙キ方、文化ヨリ天保ノ頃ノ人、俗稱北川鐵五郎。
    - 行麿

北尾重政
- 北尾政演 京傳
- 北尾政美
  - 赤子 紹意ト號ス。越前侯ノ藩タリ。（或ハイフ）政美ノ男也。
  - 美丸 歌川美丸ト云フ。新乗物町川岸ニ住ス。文政ノ始メ三代目北尾重政ト改ム。其ワザイタク劣レリ。
- 式亭 柳郊
- 窪俊滿

宮川長春
- 宮川春水 姓始メ勝、宮川ト改ム。大和畫師ト云リ。芳町ニ住ス。享保ノ頃ノ人、長春門人。
- 勝川春水 俗稱藤四郎、始深川、後芳町ニ住ス。
  - 勝 新水 本銀町四丁目ニ住ス。寛保ノ人。
  - 勝川春章
    - 勝川春好
    - 勝川春朗 北齋、辰政、爲一叢
      - 女子 門人柳川重信雷斗ノ妻トナル。早世。男アリ。爲一實孫也。
      - 女子 御鏡御用ノ家ニ嫁ス。早世ナリ。
      - 女子 始南澤ニ嫁シテ離別ス。父ニ學ンデ畫ヲ能ス。榮女。
      - 二代目北齋
      - 二代目戴斗
      - 辰齋
      - 雷斗 柳川重信
        - 二世重信 重山
      - 雷洲 青山ニ住ス。讀本アリ。後銅板ノ紅毛畫ヲ善ス。
      - 北馬 有坂氏、俗稱五郎八、蹄齋、淺草三筋町ニ住ス。
    - 勝川春江

勝川春英

- 勝川春亭
- 勝川春玉
- 勝川春紅
- 勝川春陽
- 勝川春琳
- 勝川春扇
- 勝川春青
- 勝川春和
- 勝川春久
- 勝川春德　俗稱千太郎、武者畫アリ。十軒店ニ住ス。
- 勝川春凋　俗稽吹藏、左筆ヲ善ス。大政ト云。
- 勝川春雪
- 勝川春山

春章門人
勝川春常　捘山流百人一首肖像、頭書細畫、天明年間出板、浪花禿帚子作。
捘山龍地門人　熊木正翁書

- 北壽　昇亭ト號ス。兩國藥研堀ニ住ス。錦繪山水ノ遠景アリ。
- 北岱　淺草ニ住ス。摺物讀本多シ。盈齋ト號ス。
- 北鷲　抱亭ト號ス。摺物讀本多シ。
- 北嵩　島氏、本郷ニ住ス。闌齊、閑々樓ト號ス。讀本雙紙多シ。後唐蕃トナリ、東岸ト號ス。名重宜。
- 北雲
- 北泉
- 墨僊　月光亭斗圓樓ト號ス。名古屋産、畫本出ス。
- 北洲　大坂産、錦繪讀本アリ。
- 北溪―春信

歌川豐春

- 豐廣
  - 豐清
  - 女子
  - 實子 豐熊　俗稱熊吉、豐廣ノ實孫也。
  - 門人 廣昌　駿河沼津宿住、大平屋某、錦繪二三枚アリ。
  - 門人 廣重
  - 廣恒
  - 廣政
- 七右衛門　畫ヲカヽズ。本所御船藏前ニ住ス。
- 豐久　堺町ニ住ス。錦繪アリ。芝居狂言本ヲ畫ク。組上燈籠畫ニ妙ヲ得タリ。
- 豐丸
- 豐國
  - 直次郎　豐國實子也。畫ヲ不レ學。板木師ヲ業トス。
  - 豐國　號後素亭、本郷春木町ニ住ス。後歌川豐重ト改。
  - 國芳
    - 芳房　一寶齋ト號ス。萬延元申年六月十日歿ス。
    - 芳兼　一好齋ト號、後田蝶又梅月。
    - 芳秀　一旭齋ト號ス
    - 芳年　俗稱月岡米次郎、一魁齋ト號ス。
    - 芳滿　一散齋ト號ス
    - 芳廣　一張齋ト號ス
    - 芳鳥　一燕齋ト號ス
  - 國政
    - 二代目 國政
  - 國滿　俗稱熊藏、飯倉土器町檜物町芝口三丁目田所町等ニ住ス。錦繪草雙紙有リ
  - 國長
  - 國丸
  - 國次　俗稱幸藏、銀座四丁目住。錦繪草雙紙等有リ。
  - 國安
    - 二代目 國安

國貞
國直
二代 國直　本郷三丁目住
國信　畫作草雙紙多ク有リ。作名志滿山人。
國周
國虎　俗稱粂藏、草雙紙有リ。
國宗　國長門人、錦繪アリ。
國照　俗稱勘右衛門、錦繪アリ。
國房
國登久

國貞　初名國政一壽齋ト號ス。師ノ養子トナリ、龜戸ノ古巷ニ住。梅蝶樓ト號ス
貞繁　早世
貞秀　橋本氏、名玉蘭、五雲亭、又玉蘭齋ト號。俗稱兼次郎。
貞幸　五丁亭ト號ス。横川瓦師男。
貞房　五龜亭ト號ス。又橋蝶樓ト號ス。

芳宗　一松齋ト號ス
芳虎　一孟齋ト號ス。俗稱辰次郎、長谷川町ニ住。
芳丸　一圓齋ト號ス
芳艶　一英齋ト號ス。堀江町淺草橋場後本町二丁目。
芳藤　一鵬齋ト號ス。居春木町。
芳綱　一登齋ト號ス。居下槇町。
芳員　一壽齋ト號ス。音羽ニ居。
芳英　一春齋ト號ス
芳雪　一嶺齋ト號ス
芳爲　一集齋ト號ス
芳梅　一鶯齋ト號ス
芳豊　一龍齋ト號ス
芳基　一停齋ト號ス
芳榮　一猫齋ト號ス
芳貞　一素齋ト號ス

— 貞繁
— 貞景
— 國得 本所松倉町ニ住ス
— 國壽
— 國富
— 國孝 柳島ニ住ス
— 國朝 四ツ谷ニ住ス
— 國明 一風齋ト號ス。二代目トナル。初代未レ詳。
— 國輝 一雄齋ト號ス。草雙紙アリ。
— 國綱 號一蘭齋。四ツ谷ニ住ス。
— 國久
— 國清 本所石原
— 國周 號一鶯齋。荒川八十八。
— 國麿 兩國ニ住ス
— 國郷 尾張町ニ住ス
— 國盛 號一寶齋。本郷四丁目ニ住ス。

— 芳幾 號一蕙齋、又朝霞樓、後蕙齋、俗稱落合幾次郎、後諏訪町久米澤町、今瀧山町。
— 芳近 一蓮齋ト號ス
— 芳鷹 一峰齋ト號ス
— 芳盛 一光齋ト號ス。居下谷廣小路。後池ノ端茅町櫻坊ト云。
— 芳直 一成齋ト號ス
— 芳富 一藝齋ト號ス
— 芳晴 一物齋ト號ス。淺草茅町後淺草並木、芳春ト改。
— 芳勝 一勢齋ト號ス、始幕府ノ醬油用達ニテ初石渡庄助ト云。藪ノ下淸元千年太夫。
— 芳延 一桂齋
— 芳鶴 一璪齋
— 芳里 一葉齋
— 芳政 一天齋
— 芳照 一春齋

|國房　馬喰ニ住ス

|貞升　後國升ト改ム。浪花ノ人。

|貞虎　號五風亭、俗與之助、草雙紙錦繪多シ。

|貞重　號獨醉舍

元祿十年板好色大福帳　五冊

元祖鳥居清信　三馬、按庄兵衛、元祖清信、俗稱也。鳥居庄兵衛清信ト書ケル畫本多シ

|二代目　清倍　清信男、難波町ニ住ス。

|三代目　清滿　清信二男或ハ清倍ノ男トモ云。俗稱半三、三味線ヲ行業トス。

　|清經　三馬、按清經、清長共、清滿門人也。

|四代目　清長　三馬、按清長、俗稱新助ニ非ズ。市兵衛ト云ヘリ。畫不レ學。和泉町ニ住シテ繪箔屋ヲ行業トス。

　|清勝　高砂町ニ住ス

　|清次　同

　|清久　小松町ニ住ス

　|清定　花房町ニ住ス

　|清廣　堺町ニ住ス

|清滿實子

|五代目　清峯

|羽川珍重　傳末ニ出ス

|清重　小網町ニ住ス
|清忠　米澤町ニ住ス

|清時　和泉町ニ住ス
|清政
|清之
|清時

鳥居清信ハ江戸畫ノ祖ト云ベシ。初ハ菱川ノ如キ古風ナリシガ、中頃ヨリ畫風サマ〴〵ニ變化セシカ共、江戸歌舞妓ノ繪看板ハ鳥居風ニ畫ル也。清滿、清倍、清經、共ニ一枚繪草雙紙ヲ畫リ。二代目清滿ノ實子ハ、畫ヲ不レ學シテ縫箔ヲ業トシ、和泉町ニ住ス。仍レ之清長姑ク看板畫相續セリ。其縫箔屋ノ倅アリテ清長門人トナリ清峯ト名乘。是五代目清滿ト改メテ、三芝居看板番附ヲ畫ク。是三代目清滿ノ爲ニハ實孫也。

〔一〕岩佐又兵衛　土佐の又兵衛、浮世又兵衛とも云。姓藤原、荒木氏、名勝重、越前の産也。〔割註〕一說攝津に作る。據あれど姑く越前に從ふ。」
父荒木攝津守村重と云。織田信長に仕て軍功有り。公賞して攝津を與ふ。後、公命に背自殺す。又兵衛時に二歲、乳母懷て本願寺の子院に隱れ、母家の氏を假て岩佐と稱す。長人の後、織田信雄に仕ふ。畫を好て一家をなす。能當時の風俗を寫すを以て、世人呼で浮世又兵衛と云。世に又平と云は誤なり。畫所預り、家に略傳あり。藤貞幹好古日錄に見ゆ。按るに、是世にいはゆる浮世繪の始なるべし。又大津畫も此人の書出せるなりといふ。〔割註〕杏花園藏以上浮世繪類考。」
追考曰、按ふに、一蝶の四季の畫の跋に、越前の産と記したるを見れば、越前において成人せしと覺ゆ。名字は知る人もなかりしにや。たしかにしるしたるものを見ず。又兵衛父荒木攝津守、名は村重、家士重郷〔姓氏不レ知〕と云者あり。俗稱久藏、後に內膳と改む。一翁と號す。狩野松榮、〔割註〕松榮、直

信、元信の長子、兄祐雪宗信の養子。」門人にて畫をよくす。一說に、又兵衞、はじめ此人を師として畫を學ぶ。後に土佐光信〔割註〕秋錦云、光信は土佐光弘の男、大永五年五月廿日卒す。九十二歲。」の畫風に倣て一家を成せり。世に岩佐又兵衞は姓氏實名未詳といへり。見聞せし所、繪は土佐派の名手也。花鳥人物共に彩色筆意の絕妙奇といふべし。就中浮世人物に妙あり。〔割註〕土佐流にては、市中のさま或は花見なんど畫たるを、すべて浮世人物の繪卷と云。又兵衞のみにかぎらず、土佐流にて浮世人物をさして、雛人形雛人物、或は武者人形大和人形抔と唱へり。」土佐守門弟なりと云。故有て姑く勘氣を蒙り、流浪して畫を以て渡世とす。〔割註〕今云町繪師の如くなるべし。」從來名を好ず。業にほこらず。何くれとなく人の求に應じて畫くといへども、妙手なれば自ら世に增用られしなり。土佐流破門の弟子なればとて、今に至る迄、又兵衞の畫に土佐家より鑒定せず。極メを不レ出、添二手紙一のみ也。是を折紙とす。又兵衞の畫に名印ある物は究て少し。遊女の畫などには墨肉にて字體分明ならぬ印有も、多く世を送るたづきとせしのみなる生質、是にてたしか也。當世の虛名を貪り、己が未熟にて及びがたきには、代筆にても名を顯し、たゞ花押の立派を第一として、我物顏にほこる輩に反する事、おのづから名人の所爲備れる所の妙と云べし。〔割註〕月岑子編には、大津繪の考あれども、奇跡考と同じければ略す。」

○雛屋立甫

野々口氏、俗稱は紅屋庄右衞門、或は市兵衞、名親重、自松翁と號す。書畫を能す。又俳諧を貞德翁に學んで名あり。畫は土佐氏の門に入て專ら浮世繪を畫く。醫師中川喜雲作の草雙紙のさしゑ、多く立甫也。許六が歷代滑稽傳に、雛屋立甫は畫をよくす。京童と云名所記自畫なり云々。上り竹齋の畫も立甫なり。男を生白といふ。鏡山と號す。父と共に畫をよくす。寬文九年酉九月晦日歿す。行年七十一歲。

法名　日祐居士、或は日英、

辭世　月花の三句目を今しる世かな

〇石川流宣　伊左衛門俊之

其傳詳ならず。菱川同時の人なり。大和耕作繪抄、江戸圖鑑綱目、并に江戸圖等あり。按るに、菱川師宣に比て號を設しならん。

〇西川祐信

姓藤原、俗稱右京、初名祐助、號自得齋、一號文華堂、京師に住す。始狩野永納門に入、〔割註〕永納、名は山靜、稱縫殿助、字伯愛、狩野山雪の男、一陽齋、梅岳堂、西邑居翁、素胸軒と號す。本姓千賀氏、元祿十年に卒す。」て畫を學び、後、一家をなして大和畫師と稱す。世に西川流と云。後英一蝶が百人女臈の繪をもとゝして、百人美女とて、雲上高位の高きより賤のいやしき迄、各時世の風俗を寫し分たり。〔割註〕後に是を春畫にかきたりしかば罪せられしと云。」或書云、祐信は浮世繪春畫の達人と云れし。ある年、百人女臈品定といふ大内の隱し事を畫き、其後、好色雙ヶ岡と云へるを板刻す。種々玉簾の中の隱し事を畫、事公廳にもれて嚴敷御咎を受、板行禁刻せられしと云。

繪本百人美女		同倭比事	十冊	同貝歌仙
同都草紙	三冊	同士農工商	三冊	同好色玉簾
同好色百人美女		同千代見艸		同有磯海
同龜の尾山	三冊	同眞葛ヶ原	三冊	

其他上梓せる繪本數百部あり。枚擧すべからず。八文字屋本も祐信が初心の頃畫しと見ゆる物多し。筆意骨法狩野土佐の二流をはなれず。悉く畫法にかなひ。寶暦、明和、安永頃迄大に世に行わる。中興刻本大和繪の祖といふべし。肉筆の繪卷等世人專ら珍重す。

或書に西川祐尹とあるは祐信の男歟。此頃畫本の體裁は、紺紫の表紙に金泥書あり。或は行成紙もあ

り。大本、小本、横切本等也。

○追　考

京羽二重大全卷の三　諸師諸藝の部延享二年板

大和畫師柳馬場綾小路下ル町西川祐信

繪本答話鑑	三冊	同後編喩艸	三冊	同女貞木	三冊
同玉かつら	同	同筆津花	同	同清水池	同
同河名艸	同	同池の心	同	同十寸鏡	同
同勇武鑑	同	同勇者鑑	同	同徒然艸	同
同和泉川	同	同雙の岡	一冊	同寐覺種	三冊
同垣衣艸	同	同糸櫻	三冊	同都鳥	同
同淺香山	同	同東わらべ	同	同花紅葉	同
同禮祿壽	同	同千歳山	同	同雪月花	同
同池の蛙	同	同花の鏡	同	同海士幸	二冊
同小松原	二冊	同朝日山	同	同薄紅梅	同
同女俗玉鑑	同	共債作			

○西川祐尹

文華堂祐信の男にて、畫を父に學んで能す。歿年不ﾚ詳。板行の繪本數多ありといへども一二をあぐ。

繪本鏡百首	六冊	同玉椿	二冊	同花見鳥	二冊
同面美鏡	三冊	同氷面鏡	三冊		

○橘守國

姓橘、猪村氏、名有税、稱宗兵衞、號後素軒、浪花の産なり。狩野探山の門に入て業を受、〔割註〕探山は鶴澤氏、名守見、又良信、或は兼信、初め幽泉と號す。又探春齋とも云。探幽の門人、大坂に住す。」後一家の書法を以て世に雷名す。狩野流の骨法を失はず。刻板の畫に妙を得たり。精密寄巧此人より起る。寛文元年卒す。七十歳。刻する處數書畫と善し。文學も博識の秀才なり。故に世の繪師の爲に廣く畫法を傳へ、粉本にともしからざる爲にせんとて、精力を費し寫を巧み、傍に其意を誌して是を刻せしむ。畫本の著述古今に比類なし。名手世に知る所なり。狩野土佐を始、倭繪の名家多しといへども、其業を已に知るのみ。守國は悉く人の爲にせし故に、板刻畫の汚名を受たり。畫道にこゝろざし有とも、書籍を見ざる俗家の者の爲には、笠翁の畫傳をも悉しく唐本を平假名に記して其意を得せしむ。倭漢畫法の定義を極め、其業に達して畫本をあらわし、諸職の助となして、是が爲に世上に其業力を得るもの幾ばくあらん。皆翁の丹志によれり。尋常の浮世繪師に列する人にはあらず共、板刻の書に名を得たれば姑く爰に擧ぐ。

繪本通寶志	十冊	同　玉の壺	五冊	同　畫志	三冊
同　直指寶	同	同　詠物選	五冊	同　運筆麁畫	三冊
同　寫寶袋	同	同　本朝畫苑	六冊	同　扶桑畫譜	五冊
同　鶯宿梅	七冊	同　謠曲畫志十冊中村三近編		南都名所圖	一冊
同　野山景	五冊	同　萬歳武勇繪鑑	一冊	同　故事談	十冊
有馬勝景圖	一冊	同　畫典通考	同	唐土訓蒙圖彙	一冊

享保時代刻板の畫、唐土訓蒙圖彙に始れる成べし。夫より以前かゝる細密の板木を見る事なし。

○門人　國雄

俗稱酢屋平十郎、皎天齋と號す。此人、名を不レ好が故に世に知られず。生涯を困窮して終れり。畫く處

毛詩圖譜あり。刻本にして世に行れたりといへ共、其落欵して世に遺せる書もなければ、其名を知らず。惜べし。

○吉田半兵衛

長谷川長春同時の浮世繪成べし。姓氏未ㇾ詳。京師の人といふ。好色旅日記に、長谷川吉田とかきしを見れば、其頃流行の人と思わる。好色訓蒙圖彙貞享三年板吉田半兵衛とあり。其外書本數多し。其後江戸にて再板せしは師宣畫也。其後、板刻せしは祐信なり。

○月岡雪鼎

本姓は木田氏、名は昌信、號は信天翁、俗稱丹下、江州の産、高田敬甫の門人なり。〔割註〕敬甫、號竹陰齋、法眼に叙す。初め畫を狩野家に學び、後一家をなす。元江州日野藥店なり。寶曆中歿す。八十歳。後、大坂に住す。春畫の上手なり。天明六年十二月歿す。七十七歳。

繪本源氏物語　三冊　　同閨奢待　五冊　　同姫文庫　五冊
同諸禮訓　同　　同諸禮教訓文庫　同　　同深見草　二冊
同和歌園　同　　和歌園詞の花　同　　同太平樂　三冊
同名取川　同　　同武者鏡　二冊　　同武者園　同
同勇見山　同　　同源氏山　同　　同百將全傳　五冊
同操艸　同　　同富士牧狩　一冊　　同壽艸　三冊
同宇治渡　同　　同女武者勇粧鏡　三冊　　同高名二葉艸　三冊
浪花往古圖　　繪本東國名勝志　五冊　　汝月百人一首
古今百人一首　　歌仙掛　一冊

○下河邊拾水

姓宗俗稱とも未レ詳。天明頃の人、京師樊岳住。狩野家の畫風を學び、近世の上手なり。板刻の繪本多く、寺園祐信が刻本の筆意に似て異なり。

增補頭書訓蒙圖彙大成　十冊　繪本やしない草〔割註〕天明四年版手島堵庵編
伊呂波歌繪抄　三冊　教庭訓　一冊　書畫一筆　姫文臺都織　百人一首本
京の水二冊　秋里籬島編　繪本禰緒縮　二冊　繪本高名鑑　二冊
繪引師用集　秋里籬島編

○蒔繪師源三郎

醒世翁曰、元祿五年の刻本に此名あり。西鶴が作の讀本の指畫に、名をあらはさずといへども、多くは此人の畫なり。

人倫訓蒙圖彙　猫金畫斧　五冊　此人歟

○野々村治兵衛

姓俗とも未レ詳。刻本の繪本多し。

○長谷川長春

天和、貞享の頃、京師の浮世繪師なり。好色旅日記に、今の長谷川吉田が筆にもなるまいと書たるは此人か。同時に大坂長谷川典之丞と云あり。是は雪舟の末孫といふ。

○懷月堂

寶永、正德の頃の人、俗稱岡澤源七、號安慶、淺草諏訪町に居住す。其繪を見るに、懷月堂とのみあり。

○氏江橘姓

氏、俗稱とも未レ詳。寶曆、明和の頃、元縫箔師にて後、浮世畫師となる。五文字の點式、おゝく此人の畫なり。書本職人部類に、摺込の彩色を工夫して大に世に行る。

○川枝豊信

享保年中人、稱號とも未レ詳。京師に住す。朗詠狂歌舞の畫者なり。享保十六年板。

○阿り龍）う

下谷長者町御簱同心山崎文右衛門娘にて、享保中の名畫なり。芝神明前の境内へ出て繪を書り。其略傳は世事談に見ゆ。

○長谷川光信

梅峯軒氷春と號す。又松峯軒。

英勇畫譜（割註）尾張名古屋永樂屋板

○小松屋百龜

明和中の人、俗稱三右衛門、元飯田町に住、藥種屋なり。略暦の大小摺物多し。西川祐信の筆意を學びて春畫をかけり。鹿子餅落咄し本大に行わたる。

○西村重長

仙花堂と號す。享保の頃、通油町に住す。一枚繪畫本多く畫けり。此頃、一枚畫に西村孫三郎と書たる有。重長俗稱歟。

繪本江戸土產　初編三冊

○鈴木春信

西村重長門人にて、兩國米澤町に住す。明和の始より吾妻繪を畫き出して、今錦繪と稱するの祖とす。是は其頃初春の略暦大小の摺物流行して、五六編摺はじめて出來しより工風して、今の錦繪とはなれり。春信一生歌舞伎役者の畫をかゝずして云、我は大和畫師なり。何ぞ河原者の形を畫くに堪んやと、其志、かくの如く、明和六年の頃、湯島天神に泉州石津笑姿開帳有し時、二人の巫女みめよきを撰みて舞し

む、名をお浪、おはつと云。又谷中笠森稲荷の茶屋鍵屋のむすめおせん、淺草楊枝店柳屋仁平次娘お藤の姿を錦繪にかきて出せしに、世人大ひにもてはやせり。明和七寅年六月十五日歿す。繪本板刻のもの多し。

繪本春の雪　三　　同春の友　三　　同武の林　三
同花かつら　同　　同さゞれ石　同　　同手代の松　同
同浮世袋　同　　同春の錦　二　　同八千代草　同
同いろは歌　　同古錦襴　三　　吉原美人合（彩色摺、遊女句あり。）
同諸藝錦　同　　繪本江戸土產　二編（初編は西村重長筆也。）

式亭三馬按に、此人門人某橋本町に在て二代目春信となる。後年長崎に至り蘭畫を學びて、再び江戸に歸り大に行る。所謂司馬江漢是なり。江漢名は俊、字君岳、號春波樓、不言道人、皇朝にて銅板を製することゝ、此人よりはじむ。文政元年寅十月廿一日歿す。七十二歳。

○近藤淸春

俗稱助五郎、正德、享保の頃の人、江戸產也。金平本赤本多くあり。又吉原細見記幷芝居狂言本等、自ら書畫とも數多開板せり。類考に、元祖鳥居淸信の門弟といふは非なり。奧村政信、西村重長、近藤淸春の三人は各獨立也。此時代の浮世繪は、すべて鳥居畫風を慕ひし也。

月岑按に、享保の頃の板刻に近藏淸信といへるあり。可レ考。

○湖龍齋

俗稱礒田庄兵衛、小川町土屋家の浪人なり。住居米澤町又藥研堀といふ。浮世繪を好んで西村重長の門人となり、東都藥研堀の隱士と畫名を誌せり。錦繪を細長くつぎ、吉原遊女繪などを表具して、俗に柱かくしと云如くにしたる繪多し。此頃專ら流行せしものなるべし。後法橋となる。

混雜倭草畫　三冊　板本なれども頗□筆と見ゆ。

○石　川　豐　信

號秀葩、俗稱糠屋七兵衞、小傳馬町に住し、旅人宿を業とす。狂歌師六樹園飯盛の父なり。西村重長の門人となりて、寶暦の始紅繪多し。此人一生娼門酒樓に遊ばず。然るに能く男女の風俗を寫せり。一枚繪多く繪本もあり。天明五巳年五月廿五日歿す。淺草榧寺に葬す。

狂歌萬載集に(石川壯盛)　繪本末摘花　二冊

飯盛が父の死しけるときいしかはしらはをとぶらふといへる十二の文字を上下の句の上におきてよみてつかはしける。　四方赤良

いしぶみをたつる飛脚のゆきこどけ　しらぬ根のくに底のくにまで
おしづきし父のみひとり先だてゝ　はゝとそばから氣をやいたむる
しでの山こへて七日になりぬれば　うちはなみだの川づかへかな
はてしなき涙やのりをこへぬらん　をひたるとしに不足なければ
とよのぶとかきし紅繪の摺物も　ふでのあとさへかたみとぞなる
らいせには蓮のうてなをきつて置て　ふしんもいらずすぐに極らく

月岑按、同時代石川豐雅といへる浮世繪師あり。一枚ずりを見たり。豐信が男歟。

○奥　村　政　信

俗稱本屋源六、或は源八、號文角、觀妙。芳月堂。丹鳥齋といふ。通鹽町に住す。一本通油町とも云。自ら日本繪師とかけり。朱にて瓢簞の印を用る。漆繪にも多く、享保頃の人よく鐘馗を書きて、眼に金箔を置り。俗に浮繪と云て、名所或は富士牧狩の圖、曾我十番切に遠景を奥深く見ゆる圖を書板行にせ

しなり。其頃大ひに流行す。紅繪の始なり。淺草寺境内に出し、講釋師深井志道軒の容を寫し畫く事妙なりしと云。此頃錦繪に三枚つゞきもの多し。和歌三神三夕三幅對など名付し物なり。彩色は紅と藤黄のみなり。

繪本新吉原千本櫻傚畫式、〔割註〕政信の畫本也。狂畫にして四卷あり。外題知れがたき古板を買請て須原や茂兵衛文政末摺立かく外題を改し也。

〇奥村利信（一枚畫あり）

〇奥村政房

文志と號す。一枚繪草雙紙等多くあり。

〇富川房信

吟雪と號す。大傳馬町二丁目山本九左衞門と云繪雙紙問屋也。家衰て後に畫師となれり。房信の子を長兵衞といふ。板本を摺て業とす。此山本九左衞門は古き本屋にて、貞享板の江戸鹿子にあり。房信が代に斷續せり。

〇一筆齋文調

龜井町に住す。狂歌をよくして名を頭光といふ。男女風俗の流行を畫き、又役者畫は上手にて二代目八百藏の貌をよく似せたり。門人に岸文笑といふ有り。

〇寫樂

號東洲齋、俗稱齋藤十郎兵衞、八丁堀に住す。阿州侯の能役者也。歌舞伎役者の似顏を寫せしが、あまり眞を畫んとてあらぬさまを書なせしかば長く世に行れず、一兩年にして止む。五代目白猿、幸四郎、〔割註〕後京十郎と改む。」半四郎、菊之丞、仲藏、富十郎、廣治、助五郎、鬼治の類を半身に畫き回り、雲母を摺たるもの多し。俗に雲母繪と云。

○春潮

安永の末より寛政の頃の人、俗稱吉左衞門、鳥居淸長の筆意をよく覺たり。錦繪又草雙紙に多し。後浮世繪を廢して名を俊朝と改む。號を吉左堂と云。役者繪もあれば春章門人歟。

○珠雀齋

年暦姓氏號とも未レ詳。よく役者繪の似顏を畫く。

○歌舞伎堂艶鏡

寛政年中の人、役者似顏のみ畫たれども、拙ければ半年計りにして行れず。

○細田榮之

姓藤原。名富、治部卿と稱す。號鳥文齋、始濱町又本所割下水に住す。天明より寛政の間浮世繪の風俗を寫して、錦繪に傾城美人畫等多く、專ら世に行る。もと狩野榮川の弟子にてありしが、浮世繪を書きし。後、文龍齋に學び鳥居風の浮世繪をもしたひしかば、鳥居の鳥と文龍齋の字をとりて鳥文齋と號す。又葛飾北齋が風をまねて、遊女を多く書きたれど甚拙かりし。門人榮理、榮昌、榮笑、其外多し。後故在て姑く筆を止む。

○春川榮山

○春川五七

初名蓬州、江戸小石川の人なり。文化の末より京師に住す。榮山の門人成べきか。未レ詳。京小原八坂邊に住せるにや。江戸に在し頃は、役者の細き繪をかき板刻せしを見たり。一二種に不レ過。其後畫名不レ見。

○泉守一

泉氏、俗稱吉兵衞、號春香亭。江戸の產にして、本鄉一丁目に住す。世俗目吉と渾名す。始故等琳の門

人、後狩野探信門人となり、守の字を免許さると、〔割註〕探信は狩野探幽齋の長男、名は守政、圖書と稱す。享保三年十月四日歿す。守一は寛政、享和を盛にして歿す。その歿年へだゝる事九十年に近し。探信の門人と云はいぶかし。」町畫には可惜の名筆なり。武者繪をば善畫く。父は泉義信と云し狩野家の門人にて、畫工にて俗稱の目吉を以て畫名とす。本郷の一俠客たり。摺物畫、花鳥の團扇畫等を出せり。又諸社御普請日光久能山江戸兩山等御修復、彩色の御用を勤む。町畫職人の頭なり。親目吉より二代勤む。門弟に泉鐵道、號を壽川齋といふあり。其師の風をよく學びたり。近年人形細工人泉目吉といふ者あり。此人の門人にやいぶかし。

〔泉山松月〕

稱和泉屋作十郎と云、神田鍋町に住す。右目吉の門人にや、畫風は大に異なり。等琳の畫風に近し。

○堤　等　琳　三代目也

始秋月、後雪山と改む。號深川齋法橋に叙す。江戸の產、始め深川に住す。後常盤町又米澤町河岸とも云。寛政より天保年間の人、二代目等琳の門人なり。〔割註〕雪舟十三世の孫と稱す。」一派の畫風を立て、天明の頃より行れ、幟畫祭禮の行燈、又摺物團扇交張の畫刻板あり。門人夥敷有て、繪馬額幟提灯等の職人、總て此門に入て學ぶ者多し。諸堂社の彩色多く此人の請負にて出來所あり。文政中淺草寺境內にて、茶番細工といへる見せ物を工夫して出せし事有。

○菊　川　英　山

名俊信、號重九齋、俗稱萬五郎、市ヶ谷の產、麴町に住す。父榮二に業を學びたり。〔割註〕英二は狩野流の門人東舍と云人の門人なり。板刻の畫はかゝず。菊川一家の浮世繪師なり。造り花を業として近江屋といふ。」北溪は幼年よりの友なりしかば、其畫風を慕ひ、北齋流の畫をかけり。故歌麿歿してより後、歌麿が畫風に似せて、板刻の美人畫を出し行れたり。其頃豐國春扇ともに行れたり。始は役者も書

り。文化三四年の頃、堀江町の團扇問屋故有て委く豐國の新板畫を不レ出。一年英山の役者繪の團扇計り出せし事有。英山、豐國の兩人交り深く、豐國の役者畫の上表紙へ一陽齋の畫像を英山畫き、英山の畫に豐國の寄合書等あり。諸侯方へも二人づゝ席畫に出しとぞ。讀本は不レ畫。草雙紙四五部あり。文政の末より多く板下を不レ畫。

○溪　齋　英　泉

姓藤原、本姓池田氏、名義信、一に茂義、俗稱善次郎、後里介、江戸の產、父母存生の中は遠不レ出。〔割註〕父は池田義晴、環山不言菴門人にて書を能す。讀書を好み、俳諧茶事を好めり。〕幼年の時狩野白珪齋の門人となる。〔割註〕白珪齋は赤坂某侯といへり。狩野榮川法師の高弟なり。〕母は英泉六歳の時歿す。父并繼母に仕へて孝あり。其家まづしかりし。文化の始め、父母一年内に歿す。幼き妹三人を養ひ、青雲の志ありて仕官せしが、讒者の舌頭にかゝり、壯年にして流浪す。故に志を廢して浮世繪師となれり。又戲場狂言作者初代篠田金治（後並木五瓶）の門に入り、千代田才市の名を續て作者となりしが、再び畫工菊川英二が家に寓居す。土佐の門に入てより、近國を遍歷する事三四年にして京都に歸り、又宋明の書を好み、書を讀むの癖ありて通宵眠る事を忘る。又戲作を樂みとして草雙紙の作多く有。〔割註〕溪齋英泉と同名の人、下總にありしが、又上州にもありしと告來るものありしと、溪齋と云人、江戸にも在。畫風同じく板下をかゝず。當時流行に倣て美人繪多く畫り。又北齋翁の畫風をも取り一家をなす。〔割註〕其頃英山世に行れて、諸侯の召に應じ彩色畫多くありしが、肥州侯に命ぜられ、門人殘らずの畫を望たまふ。其列に入て英泉と畫名を記し出せしより是を名とす。英山門人といふ始也。〕是一筆菴無名翁、國春樓北亭といふ。一筆菴は戲作の名なり。居を替るの癖ありて、始め番町後根岸新田村根津池の端坂本一丁目、其外江戸數ケ所に轉宅して在所定まらず。吉原遊女の姿を寫すに、悉く其家々の風俗模、姿を畫くに役者の狂言振に似せず。今時世の形もあらたに畫きしは此人なり。近頃國貞も傾城畫は

英泉の寫眞に似せて書きしなり。又春畫も有り。〔割註〕團扇繪も多し。藍摺の山水は此人の工夫なり。京大坂の讀本をも江戸に在て畫けり。」もとより名を好まず。爪を畫き、羽子板幟の畫に彩り、需に從て辭する事なし。〔割註〕職分筆の達者二人分をなす。」板刻の畫本をかきかけて行所を知らず。板元迷惑して所在を尋しに、娼門に醉て死るが如し。漸々にして其跡を書て是を與ふ。花金杉の濱に碇屋六兵衛と云し魚問屋あり。〔割註〕後に巴屋仁兵衛といふ板元なり。」從來錦繪其外の板元を業とする事を好むが故に、泉を携て家に養ふ。泉衣類を借着して出て歸らず。主人漸々行所を知て尋しに、其衣類を酒に換て醉て本性なし。虎鰒を生れがら蝶々共に煮て是を喰ひ、猪を好て食し羽織を着し下駄をはき、近邊に出しと思へば夜船に乘じて上總木更津に至る。〔割註〕木更津より五里程入り周准郡より池田氏の舊家あれば成べし。」かゝる放蕩無頼の人といへども是を惡まず。居を宗十郎町に定めてより、食客を集て夜中門戸に錠を用ひず。家主後難を恐れ迷惑す。如レ此行狀なれども、親類他人に金錢を借らず。己れか業により價を得て捨るが如く遣ふのみ。後妻を迎へ子無きが故に一女子を養ふ。是より後人に歸りて、板刻の繪に精を抽て晝夜寐ずして畫り。天保の頃より筆を止て云、盛りあれば衰ふ。人に呀られんより呀るにしかじと、需るに不レ應して根岸時雨里に隱れ、根津花街等に娼家をせし事もあり。又根津門前なる木村長右衞門が判を盜んで押し事あらはれんとしたるが故亡命せしとぞ。壯年の行狀すべてかくの如し。嘉永中秋歿せり。

浮世畫譜 自初編至十編 尾張永樂屋　錦袋畫叢 大坂河内屋　武勇魁圖會 二冊永樂屋
容艶畫史 美人畫の則也　繪本初心畫譜 西村屋與八　畫本錦之嚢 河内屋
通俗排悶錄 十二冊 六樹園　松風村雨物語 十冊文東陳人　繪本應仁記 蘭山作
金錠筒草紙 五冊全 亭　嫩髮蛇物語 五冊全 亭　水滸太平記 岳亭作
好文士傳 爲永春水　總猿潛語 瀬川如皐作　開卷驚奇俠客傳 馬琴作

此外多くあり。枚擧に遑あらず。

○鳥 山 石 燕

名豐房、狩野周信の門人なれど、浮世繪に等しき畫なり。塵塚談に、寶暦の頃淺草觀音堂の中定香爐の臨なる柱に、歌舞伎女形中村喜代太郎の狂言似顏を長さ二尺四五寸幅八九寸の額に畫て奉納せし。諸人珍敷事に沙汰せし也。

繪本百鬼夜行　十五册　　繪本比絹　　水滸畫潛覽　三册

鳥山彥　彩色摺貳册〔割註〕或云此時うきぼかしの板行を始とせしと云。安永三年板也。彫工藤交東英摺工鶴齋南李とあり。」

○戀 川 春 町

名は格、字は壽平、壽山人と號す。松平丹後侯の留主居也。俗稱倉橋壽平と云。自畫作の滑稽青本あり。狂歌を能す。狂名酒上不埒といふ。小石川春日町に居れる故、戀川春町の名を戲れにおける也。寛政元年七月七日歿す。市ケ谷淨光寺に葬る。

辭世詩　　生涯苦樂四十六年　　即今脫布法然一歸天

○喜 多 川 歌 麿

號柴屋、俗稱勇助と云。江戶の產。居神田久右衛門馬喰町三丁目に住す。始狩野家の畫を學び、後石燕の門に入て一家をなす。男女の時世風俗を寫す事上手にして、近世錦繪の花美を極めたり。生涯役者繪をかゝずして、自らいふ、戲場繁昌なる故老若男女贔負の役者あり。是を畫いて名を弘るは拙き業なり。何ぞ俳優の餘光を假んや。浮世繪一派をもて世に名を興すべしと云し也。其意に違わず。其名海内に聞えたり。長崎渡來の淸朝の商船より歌麿が名を尋ねて多く錦繪を求たり。殊に春畫に妙を得たり。文化年間奧州岩城より來れる者あり。此人浮世繪を好むの一癖あり。元江戶の產なりしが、業を旅

中にのみす。南部出羽加賀能登に往來す。其頃一陽齋豐國の役者繪專ら行る。此人云、遠國他郷に行ては江戸繪の名人は歌麿とのみ云て、豐國の名を知る人稀にもなかりしと云ふ。市川八百藏一世一代おはん長右衛門の狂言をせし時、桂川の似顔評判して求めざる人なかりし。歌麿は美人畫にて長右衛門の道行の畫を出し、是が讃に、近頃の浮世繪かき蟻の如くに這出、むらがれる趣を悉く嘲哢して書たり。門人多く浮世繪のみにあらず。花鳥虫魚の寫眞等精功綿密の彩色摺繪本多し。歿後の前草雙紙問屋云合せ、歌麿必此度は病死すべしとて、各錦繪板下を頼み、夥しき書物なりしとぞ。其外に畫者なきが如く用ひられし人也。始通油町蔦屋重三郎と云繪雙紙問屋に寓居せしと云ふ。後年繪本太閤記の圖を出して御咎を受たり。其後尚また御咎の事ありて獄に下りしが、出て間もなく病て死す。畫く所の畫本は枚擧すべからずといへども一二を擧ぐ。

吉原年中行事　十返舍一九作彩色摺　二冊　繪本百千鳥　極彩色狂歌入

同　虫　撰　極彩色狂歌入　同駿河舞　三冊　江戸名所狂歌入

吉原年中行事は大ひに流行す。作者一九云、吉原の事を委しく書し文章故行れしと云ければ、歌麿は繪組ゆへ行れしと互に爭ひ大に取合し事有しとぞ。是を以て察するに大にほこりし人と見ゆ。

〇北川菊麿

寛政より文化、文政の人、後月麿と改む。稱六三郎、馬喰町に住す。文化中小傳馬町匠や新道に住し家守となる。板下草雙紙等あり。一流なり。後年浮世繪をかゝず。名を觀雪と改む。此年柳島妙見宮へ鯉の額を納む。

〇北尾重政

俗稱左助、號紅翠齋、又花藍、江戸の産なり。初め書林須原屋茂兵衛が家に勤めし奉公人也。須原屋の本店紀州にあり。其所の地名を北畠といふが故に、茂兵衛が姓も北畠とす。重政も又同姓を用るといふ。

居住大傳馬町二丁目後根岸大塚村に移るといふ。書畫ともに善す。就〻中板下に妙なり。武者繪花鳥に委し。壯年の頃は鳥居風の役者畫をかけり。近來江戸書林繪雙紙屋藏板、庭訓或は往來物百人一首、法帖の類、委く翁が筆也。板下の筆には其頃三都に右に出る者なかりし。文政二年二月卒す。八十一歲、花鳥の寫眞、武者畫本等數類筆す。錦繪讀本摺物多し。

繪本子育草　三冊　小本　　同　擧の魁　三冊　　同　江戸爵　江戸名所狂歌入
同　鏡　艸　三冊　　同　詞の花　二冊　　同　吾妻袂　三冊狂歌本年中行事
同四季交加　二冊　　近江縣物語　　安積沼　五冊　京傳作
泉親衡物語　四冊　二代目鬼外作　　忠臣水滸傳　十冊　京傳作

○北尾政演

名は醒、（初名は田藏、）字は伯慶、後字を酉星、姓灰田氏、又岩瀨とす。山東菴、甘谷菊亭醒齋、醒々老人等數號あり。京傳とは戯作の名なり。性書畫ともよくす。戯作に高名なる事は世の知る處なり。文化十三丙子年九月七日歿す。年五十六歲。本所回向院に葬す。法名知譽京傳信士。

○北尾政美

姓鍬形、俗稱三次郎、杉阜又蕙齋と號す。近世の工夫者也。狩野家の筆意を學び、又光琳、或は芳中が畫法を慕ひ、略畫式の工夫世に行れ、東都の繪圖を一眼に見る所の圖を工夫して一枚摺となし、又神田の社額堂にも江戸繪圖の額奉納せり。近年の繪手本は此人の筆多し。是より世に薄彩色摺の畫手本大いに流行す。松平越前侯より藩中に入て板行の繪を止め、落髮して號を紹眞と改む。文政七年三月廿一日歿す。

略　畫　式　　略　畫　苑　　艸花略畫式
蕙齋略畫　　諸職畫鑑　　蕙齋麁畫

繪本喚分勇者 二冊　　同大江山 二冊　　同曾我物語 二冊
同武隈松 三冊　　尊氏勳功記 五冊　　俳家奇人談 竹內玄々一編

○窪 俊 滿

號尙左堂、俗稱易兵衞と云。性狂歌をよくす。又戲作を好んで、作名を南陀伽紫蘭と號す。居住龜井町、始め畫を楫取魚彥に學ぶ。〔割註〕魚彥は下總香取の人也。俗稱稻生茂右衞門、茅生菴と號す。眞淵翁につきて國學を學ぶ。又畫を建孟後足に學びて鯉を畫しとぞ。天明二年三月歿す。年六十歲。」魚彥より春滿といへる畫名をあたへしが、勝川春章といへる浮世繪師の門人と人の云をいとひて、俊滿と改めしといへり。後浮世繪を重政に學びて、狂歌摺物繪寫眞の畫に妙なり。能く左筆にて畫り。

青樓油通汚　　玉菊燈籠の辨

○宮 川 長 春

寶永、正德頃の人、尾州宮川村の產にして、土佐家の門人といふ。江戶に住して一家をなす。長春一子兩國に住す。寶曆、明和の頃、日光御修復有レ之。狩野家の內畫の御用相勤候ものゝ受負を、長春が倅勤しが、賃銀は日光表にて遣べき旨約し渡さゞりければ、催促に及しより事起り爭論になり、長春か倅短慮にて狩野家のもの四人迄殺害せしかば、公の御沙汰となり御調の上、長春が倅は死罪、長春は流罪、狩野家にて御用勤し家は斷絕なりしとなり。宮川が末雪溪のものがたり。

○勝 川 春 章

始勝宮川と書す。俗稱祐助、號旭朗井、又西爾と號す。李林春亭と書るも有。書畫とも能くす。門人多くあり。明和の頃歌舞伎役者の似顏を畫き大いに世に行る。五人男の畫を始とす。〔割註〕秀鶴の似顏を能く書たり。此頃の役者繪は細く長き續繪のもの多し。キメ繪といひし也。畫名もなかりしが、其頃人形町林屋七右衞門といへるものゝ方に寓居して、林屋の請取判に壺の中に林といへる文字ありしをおして

とせり。人呼で壺屋といふ。又嵩谷にも學びて一蝶風の草筆を畫しと云。寛政四年十二月八日歿す。淺草西福寺に葬す。此時代より彩色摺大にひらけ　板木師摺師共精巧を極めしは、吾妻錦繪とて海内の名産とはなりぬ。

繪本百人一首　彩色摺箱入本鳳金尾板　同威武貴山　三冊　武者畫本

同　舞臺扇役者似顏彩色摺　同夏の富士（役者素顏の似顏畫近年國貞同名の畫本を畫けり）

○勝川春好

長谷川町に住す。浮世繪役者多し。壺の印を用ゆ。小壺と世に云しとぞ。四十五六歳の頃中風を患て業を廢す。後年麻布善福寺に遁世して在しが　焉馬翁の需に應じて、市川白猿の肖像を左筆にて畫たりしとぞ。

○勝川春英

號九德齋、新和泉町新道に住して後一家をなす。寛政、享和の頃役者似顏繪其外錦繪多く發市せり。自然一家の筆意をあらはし、狂畫をかきて世に九德風と云。彩色畫手本、武者畫手本、繪雙紙數種あり。春亭歌麿も及ばざる所ありて、初代豐國も此畫風を學びたり。又義太夫節淨るりをよく語り、三味線に妙あり。麹町なる山田某に逗留して屛風繪卷物を畫り。忠臣藏十一段續の屛風火事場火消の働きの繪卷物、其外人の畫かざるもの多くかけり。文政二年己卯七月廿六日歿す。五十八歳。淺草本願寺中善照寺に葬る。

繪本弓袋　芝居訓蒙圖彙　式亭三馬作

○勝川春亭

號松高齋、又勝波壺、和泉町に住す。武者畫草雙紙多く畫り。後に歌川風の役者畫しなり。壯年にして病の爲に業を廢して其居を知らず。惜むべし。

歌舞妓年代記　焉馬作　　　昔語質屋庫　五册　　馬琴作

始め雪山、堤等琳の門弟にて春琳と云しが、後春英に學び春扇と改む。俗稱清次郎、居始め麴町貝坂、後芝中門前等に住す。文化の末東西庵南北作の源五郎鮒といへる草雙紙を書て、〔割註〕神明前山田屋三四郎板。」行れ、此頃神明前の繪草紙屋悉く彼れを取立んと事を挑めらそひ、新板日々に發市す。後年二代目春好となり、板下を止めて芝神明町へ移住し、陶器の燒付畫をかきて板下をかゝず。此頃繪猪口の流行せし始にして、專ら是を業とせり。妻風流の者なり。草雙紙の作年々發市す。作名月次亭笑壽といへり。又門人に扇里と云者ありし。

○勝　川　春　扇

○葛　飾　爲　一

江戸本所の產にして、御用の鏡師の男なりといふ。幼名時太郎、後鐵次郎と改む。始め業を勝川春章の門に入て、名を勝川春朗と書す。故有て破門せられ、後古俵屋宗理の跡を續て二代目菱川宗理となり、畫風をかへて一派をなせり。〔割註〕叢春朗の頃は役者の錦繪を出せし也。堤等琳孫二の畫風を慕へり。宗理の頃狂歌摺物等多し。」亦門人宗二に宗理を讓り、〔割註〕三代目宗理とす。」名を家元に歸せり。于ㇾ時寛政十年一派の畫法を立て、北齋辰政雷斗と改む。〔割註〕一說北辰妙見を信ず、故に北齋と云。」北齋流と號し、明畫の筆法を以て浮世繪をなす。古今唐畫の筆意を以て、浮世繪を工夫せしは、此翁を以て祖とす。〔割註〕雷斗の名、翠重信に讓る。」爰において世上の畫家、其家風を奇として、世俗に至る迄大にもてはやせり。又戲作の草雙紙多く、寛政の頃草雙紙の書作を板刻す。作名を時太郎可候と云り。專ら畫狂人北齋と書す。〔割註〕畫狂人の號は門人北黃に讓る。板下書ず。」繡像讀本多く書きて世に賞せられ、繪入讀本此人よりひらけたり。〔割註〕此頃繪入讀本世に流行す、畫法草雙紙に似寄らぬを以て貴しとす。讀本とて別派とす。此時代北齋淺草に住。」京大坂より雷命を慕ひ門人多く來つて學ぶ者夥しかり


葛飾北齋肖像
月耕謹寫

し。尾州名古屋を始として京浪花に必覯する者なし。板刻の密畫を以て世に獨歩す。數百部の刻本枚擧すべからず。再名を門人に讓り、雷信錦袋舍戴斗と改めたり。前の北齋戴斗と書す。〔割註〕二代目北齋は本所の產なりしが、後吉原仲の町龜屋といふ茶屋になる。兩國回向院にて大畫布袋を書り。錦袋舍名弘の會ありし大畫は度々也。十六間四方、十八間四方等也。又名古屋にて出山釋迦を畫けり。」爲一と改名す。〔割註〕戴斗の名門人北泉にゆづれり。」門人に臨本を與ふるに遑あらずとて、是が爲に畫手本を板刻し數十部を世に行しむ。常に曲畫を善す。〔割註〕升玉子德利箱等すべて器材に墨を付て畫をなす。左筆も妙なり。下より上へ書上る逆畫をかけり。中にも瓜へ墨をすくひて畫は筆にて畫たるごとくすぐれて妙なり。畫く處を見ざれば其意を知るべからず、又俳諧を好み川柳風狂句能す。」自ら云、數年諸流の畫家に入、其骨法を得て一派の筆法を立、畫道の業において筆をこゝろみゑとくせざる事なしと云り。香具師の看板繪より芝居、操の看板油繪、蘭畫に至迄、往々新規の工夫を畫き、刻本の細密定規引の奇巧類すべきものなし、紅毛よりも需に應じて二三年間數百枚を送りしかば、蘭人も大いに珍重す。後是を禁ぜられたり。天保に至て錦繪多く出たり。又刻本の春畫數編あり。肉筆の彩色殊に見事なり。一號群馬亭といふ。〔割註〕雜居を轉ずるの一癖あり、本所横網町淺草寺前其他數十ケ所移住せり。一二月にして屆々移す事幾度といふを知らず。」生涯の面目は繪風公聽に達して、御成先に於て席畫上覽度々あり。稀代の畫仙妙手と云べし。

往年御成先上覽の節、大きなる紙に刷毛にて藍を長く引、鷄の兩足を畫けり。朱にて鷄の足へつけ、藍の上と所々押形付、竪の上龍田川の景色御座候と申上候よし、右寫山翁の話也。

板刻畫手本

北齋漫畫　自初編至十三編　戴斗畫譜　櫛笥世留雛形　中形ノ横本三　冊

地文雛形　北齋畫鏡　畫本獨稽古　初編より四編中本

北齋畫叢
畫本早引　二冊
三躰畫譜　一冊
爲一畫譜
寫眞畫譜　折本一冊
畫本魁　一冊
武藏鐙　一冊
北齋畫譜　三冊
富嶽百景　三冊
畫本女今川　一冊
同庭訓往來　三冊
淨瑠理絶句　一冊
隅田川兩岸一覽　二冊彩色狂歌入

讀本目錄

椿說弓張月　馬琴作
新累解脱物語　同
墨田川梅柳新書　同
南柯の夢　同
南柯後記　同
敵打裏見葛葉　同
標註園の雪　同
賴豪怪鼠傳　同
水滸畫傳　同
標紙藤綱摸稜案　同
皿々鄉談　同
忠孝潮來節　焉馬作
假名手本後日文章　同
玉落穗　小枝繁作
東嫩の錦　同
松王物語　同
橋供養　同
小栗外傳　同
新田功臣錄　同
怪談霜夜星　種彥作
阿波鳴門　同
勢田橋龍女本地　同殊に密書也
國字鵺物語　芍藥亭作
雙蝶々白糸雙紙　同
濡衣草紙　同
釱鉢妹脊山　振鷺亭作
於珪幸助戀夢盤（コイノウキハシ）　樂々庵桃英作
飛驒匠物語　六樹園作
北越奇談　柳亭序文茂世作
百合雅埜居鷹　萬亭叟馬作
山莊太夫　谷峨作
繪本三國志　漢楚軍談

此外中本草雙紙の類殊に多ければこゝにしるさず。

嘉永二酉年四月十三日歿す。九十歲。渡草八軒寺町誓教寺に葬る。

法名　南牕院奇譽北齋信士

辭世　人またで行氣さんしや夏の原

○辰　齋

名政之、號柳々居、神田小柳町二丁目に住して、家守役を勤む。北齋辰政と云し頃の門人なり。狂歌摺物并月次の詠草等多く此人の筆也。錦繪は畫がゝず。號滿納半二。

○戴　斗

始北泉と號、俗稱伴右衛門、麹町平川天神前に住す。小笠原家の浪人なり。後師の名を讓り受て二代戴斗となり、畫風師の筆法を能く學び得たり。眞僞やゝもすれば見まがふ計り也。世に犬北齋といふ。浪花の刻本多くあり。

武　者　鏡　　戴　斗　畫　譜　　小　紋　雛　形

○蹄　齋　北　馬

有坂氏、江戸の産にして、始神田に住し、後下谷三筋町へ移る。狂歌摺物を多く出し、讀本の密畫に妙を得たり。數十部を畫き世に行る。又左筆の曲畫をよくす。後落髪す。師の風と大に異なり、門人逸馬、遊馬等其外多し。

石　言　遺　響　馬琴作　　三國妖婦傳　蘭山作　　孝子嫩物語　同北鵞北壽合畫
柳　の　糸　小枝繁作　　常世物語　馬琴作　　田村物語　川上老人作
那　智　の　白　糸　蘭山作　　自來也物語　鬼武作　　千代褜媛七變化物語　振鷺亭作
尼　城　錦　葛飾小太編作　　催馬樂奇談　小枝繁作　　竹馬手綱　武者畫本馬琴狂歌入
俊徳麿謠曲演義　振鷺亭作　　星月夜顯晦錄　蘭山作

近年美人畫多く書たり。彩色もの又席上の略畫に妙なり。

○北　雲

東南西と號す。俗稱久五郎、大工を業とす。狂歌摺物を畫り。又錦繪はすくなく、わづか一二種あり。

北雲漢畫　一冊　尾陽永樂屋板

○柳川重信

本姓鈴木氏、父を志賀理齋（稱理介）といふ。江戸の產也。始め本所柳川町に住す。〔割註〕故に柳川を姓の如くにせり。〕後根岸大塚村へ移る。北齋の門に入て畫を學び、北齋の娘を娶て聟となり。雷斗の名を續て板刻の密畫を能せり。江戸の南嶺、浪花の玉山等を慕ひ、又國貞の風をも似せたり。草雙紙を多く畫く。〔割註〕柳亭種彥始ての作、重信始ての畫は京一番娘羽子板と云草雙紙也。文化四年板。〕浪花に至りて用られしか、僅にして歸鄕す。常に人形細工等の製作に奇功あり。天保三年十一月歿す。

組手摺昔人形　種彥作　　濡燕柄傘雨談　雪麿作

七國士傳　爲永春水、松亭金水作　　里見八犬傳　馬琴作英泉補筆

○重山

重信門人にして、後、師の聟となれり。馬琴作俠客傳二編五卷の二丁重信病おもく重山續て畫しもの也。初編は英泉畫なり。彩色摺にて藤袴（小枝繁作）といふ畫本あり。〔割註〕麴町角丸玉板。〕二世重信、根岸に住す。

里見八犬傳　馬琴作

○魚屋北溪

俗稱初五郎、號拱齋、又葵園、〔割註〕後氏の如くに用たり。〕始は狩野養川院の門人也。〔割註〕養川名は雅信、號玄々齋〕文化五年正月十二日歿す、五十六歲。〕後北齋の弟子となり、浮世繪師となる。四ツ谷鮫ケ橋に住して松平志州侯の用達の魚屋なり。仍て畫名の傍に記したり。後赤坂永井町代地等へ移る。摺物は勝れてよし。北齋の高弟にて能師の風を得たり。役者繪はかゝず。後魚を商はず、畫を以て業と

す。門人多し。彫刻の畫になければ名を出さず。

北　溪　漫　畫　一冊　名古屋永樂屋板

青山立法寺中碑　根府川石

翁諱辰行、善繪事、工于時世樣、遂武於菱川宮川諸名流、嗜學藏書數千卷、一生行矣、無愧忠信等敬四字、葵園老人北溪君之墓。

あつくなくさむくなくまたうゑもせずうきこときかぬ身こそやすかれ

籬　の　花　三冊　鬼武作　美少年錄二編より　馬琴作

吉原十二時計　六樹園作　江戸名所二冊

○岳　亭　春　信

八島氏、稱斧吉、定岡と號す。江戸青山の産なり。狂歌摺物草雙紙讀本等畫けり。狂歌をよくし、窓の村竹の門に入て堀川太郎春信と云り。〔割註〕南傳馬町天王祭りの時街の大あんどんを度々かきたり。」

○柳　文　朝

號南龍齋、住居通油町南新道、或は南油町共いふ。役者繪をかけり。又義太夫節淨瑠璃を好て朝太夫門弟となる。二代目大谷十町の似貌を能す。門人に文康と云有。稱安五郎、人呼で文康安と云。深川靈岸寺に碑あり。

○二代目文朝

○蘭徳齋春童

○田中益信

○古川三蝶

○金　長

○山本義信

俗稱平七郎、江戸の住、寶暦年中の人也。錦繪有り。

○鬼　玉

○歌川豐春

號一龍齋、俗稱庄三郎、〔割註〕但馬屋といふ。〕江戸の産也。居始芝三島町、又日本橋邊に住す。後落髮して赤坂田町に住す。〔割註〕附錄に西村重長門人と有非也と云也。〕流行の風俗を畫き一家をなせり。

月岑子按るに、田柳島春慶寺普賢堂の額に、豐春七十一の畫に豐信補畫とある、もしくは石川豐信の門人にや。尙尋ぬべしと有り。

土佐結城座の操看板を畫くに、彩色尤も委しく珍敷圖取を畫きて度々評判せられし。〔割註〕後は春徳が筆なり。春亭も一兩度畫し事あり。〔又春英も是に次て劣らず畫しものなり。〕寬政の頃、日光山御修復の節、彼地に職人頭を勤しとぞ。又浮繪錦繪に多くかき出せり。〔割註〕浮繪といふは、蘭畫の俗に油繪といふものに比して畫る遠景の山水を錦繪に横に畫きしなり。〕寶暦の頃の浮繪に勝れり。草雙紙の類は多くかゝず。弟子に高名の者多し。〔割註〕本朝油繪の祖といふべし。〕

押上春慶寺碑

文化十一戌春

行年八十歲

二代目歌川豐春

元祖歌川呂得

花は根に

名は櫻木に

普賢象

歌川妙哥

のりのうてなも
妙法の聲

歌川　　首
大野規行
歌川豊秀
歌川豊國
歌川豊廣

後年豊春と名のりし者あり。文政の始めなりし。

京師板行の讀本に歌川豊秀といふ者あり。豊國の門人なるか。未レ詳。

車僧轍物語　甲賀三郎巖物語　聚義雑法談等也。尤も拙なし。

○歌川豊廣

號一柳齋、稱藤次郎、江戸の産なり。芝片門前町に住す。のち一家の畫風をなし、草筆の墨繪を板行して張交畫とす。草雙紙敵討の續き物此人より始れり。〔割註〕初代南仙笑楚滿人作也。」生涯役者畫を畫かず。常に義太夫節を好んで三味線をひくを樂とす。尤妙手なり。豊廣筆繪本枚擧して盡るにあらず。依て讀本のみ記。

俊寛島物語　馬琴作　旬傳實々記　同　松浦佐用姫石魂錄　同
夢惣兵衛胡蝶物語　同　括頭巾縮緬紙衣　同　朝比奈巡島記　同
雲妙間雨夜月　同　糸櫻春蝶奇縁　同　松染情史秋七種　同
浮牡丹全傳　京傳作　繪本西遊記　二編初編は東野筆なり　復讐御伽物語
鷲の談　京山作　播州舞子濱　一九作着名摺

○歌川豊清

俗稱金藏、豊廣の實子也。錦繪草雙紙讀本一二部あり。上手にてありしが早世せり。惜むべし。父并に豊

國に學んで能す。

○一 立齋廣重

八代洲河岸定御火消屋敷同心也。俗稱安藤徳太郎、後十右衞門、又、徳兵衞と改む。同藩與力岡島林齋〔割註〕又素岡と稱す武右衞門。〕に狩野家の畫風を學び、又豐廣の門に入りて浮世繪を畫く。居住大鋸町弘化三年常盤町へ移り、又嘉永二酉年夏の頃、中橋狩野新道へ移住す。東海道五十三次、都名所、又安政三辰年より江戸名所百景一枚摺續繪、〔割註〕下谷魚榮板小田屋榮吉といふ。〕夥しく板行し、天保以來世に行れたり。後薙髪す。安政五午年九月六日歿す。六十六歳。淺草新寺町東岳寺に葬す。辭世

東路へ筆を殘して旅の空西のみくにの名どころを見む

○歌川豐國

號一陽齋、俗稱熊吉、豐春門人なり。後一蝶の風を慕ひ、又玉山九徳齋が畫風をも慕ひ一家をなす。〔割註〕豐國始ての畫、板元は神明前和泉屋市兵衞とて役者切繪也。〕豐廣と一時に行る。當世の風俗を寫す事妙を得たり。美人繪役者畫似顏此人より行る。中興の祖といふべし。始芝三島町に住し、後芳町堀江町上槇町川岸油座等に移住す。黑と紫計りにて錦繪を書初む。

一陽齋筆書手本彩色摺

畫手本年玉筆　役者合鏡　同　此手柏　焉馬作　時世姿　女繪

似顏早稽古　三階興　三馬作

同筆讀本

櫻姫全傳　京傳作　雙蝶記　同　稲妻表紙　同

本朝粹菩提　同　うとふ安方忠義傳　同　稚枝鳩　馬琴作

四天王剿盜異錄　同　三國一夜物語　同　阿古義物語　三馬作



一陽齋豊國肖像

敵討松山話　蔦馬作　　四季物語　振鷺亭作　　梅花氷裂　京傳作

豐國杉菩提の口繪に遊女を畫き、一枚の紙を上れば骸骨と成る圖を畫り。此圖杉田氏の解體新書を見て畫しは尤なれど、誤て小兒の骨を寫す。笑ふべし。

豐國筆塚碑名柳島妙見境内にあり。門弟より建之

一陽齋歌川豐國、本姓は倉橋、父を五郎兵衞と云。寶暦の頃芝神明宮の邊に住し、木偶彫刻の技業を以自ら一家をなせり。嘗て俳優の名人市川柏莚の肖像を作るに妙を得たり。明和の初こゝに豐國を生り。幼名を熊吉と稱す。性畫を嗜。故に歌川豐春に就て浮世繪を學しむ。依て歌川を氏とす。頗る出藍の才あり。長ずるに及で俳優者流の肖像を畫に妙を得て、生氣活動神在が如く、或又美人時世の嬌態梓本彩筆諸國流行し、華人群客も珍とし求む。茲を以て一陽齋の號、日の昇るが如く、豐國の名一時に獨歩し、畫風自ら一品を成し、朱門の貴公家も師として學ぶ。門人畫業の徒に施し、良才乏しからず。實に近世浮世繪師の冠たり。惜哉。一陽齋享年五十七歲にして歿せり。時に文政八酉年正月七日三田聖坂弘運禪寺に葬る。法名實彩麻賓と云。遺愛門人等一陽齋の義子、今の豐國と量て亡師の遺筆數百枝を埋て碑を營み、亡翁の友人等も爲に力を助け、櫻川慈悲成子をして余が蕪辭を需む。余もまた亡翁舊識たる故に固辭する事あたはず。其事を記て其乞に答ふ。

文政十一年戊子仲秋　　　狂歌堂四方眞顏撰雜世裡鑄
山東庵樵者京山書并篆額

豐國歿後出板なしたる追善の繪に辭世の句とて、

燒筆のまゝかおぼろの影法師

と記せるは、他人の句にして、辭世にあらざる事明らか也。

追善肖像畫國貞筆并に讃、この月七日師たる人と長きわかれとはなりぬ。然るに喪にこもりしあさ、

なみだとともに、

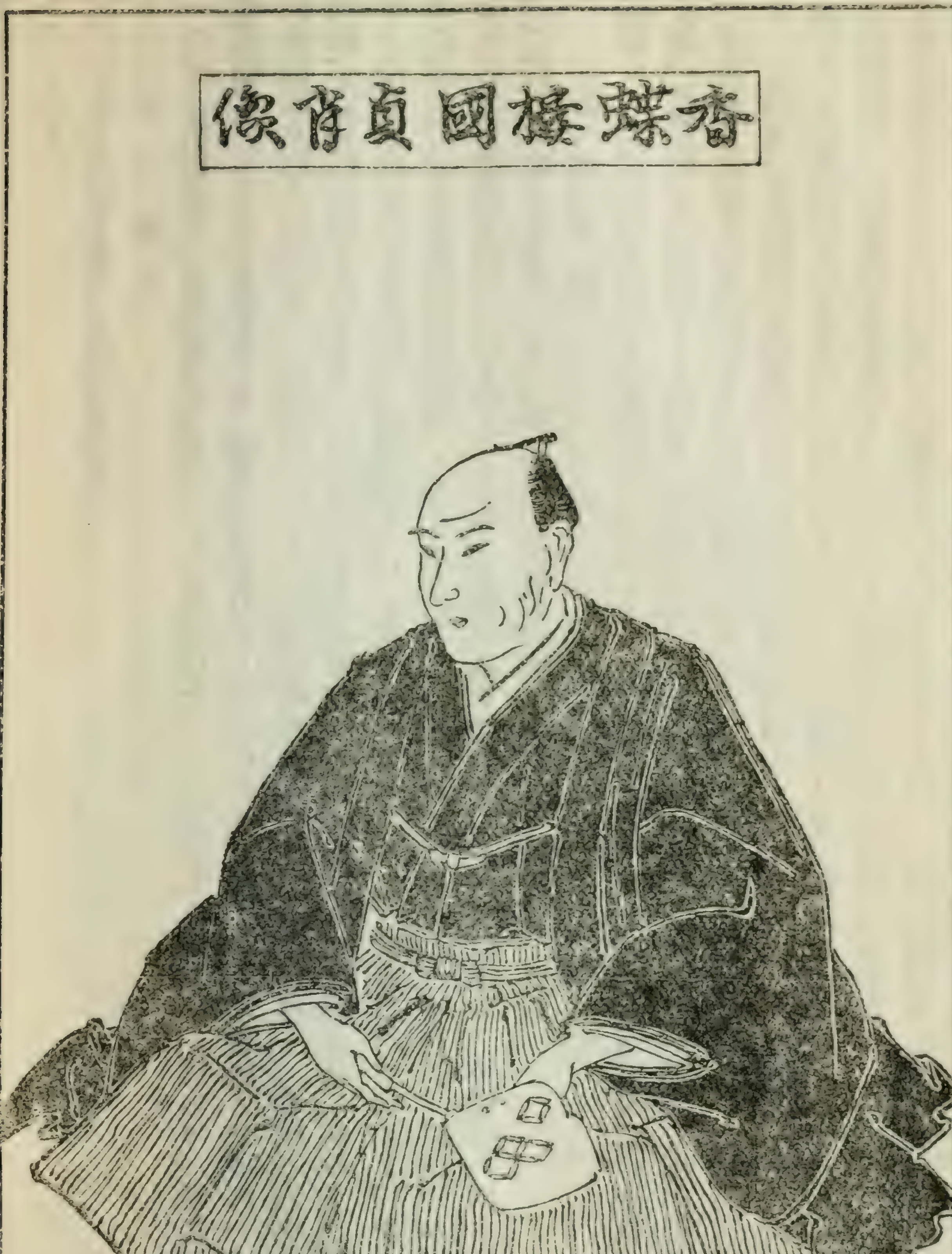
すゝらばや粥の七種の佛の座

〇歌川國政

號一壽齋、俗稱甚助、奥州會津の產也。始め紺屋職たり。生質芝居を好むの一癖あり。僅に遑あれば狂言を見物す。もとより畫をなし、俳優の面を似せて畫くに妙也。紺屋の主某豐國と交り深かりしかば、其故を物語り門人たらしむ。始芳町に住し、後堀江町又市ケ谷左内坂等に移る。豐國の高弟なり。中山富三郎、〔割註〕俗にくにやとみと云。似顏を畫るに、其人側に在る如く目前に見るが如く、其頃專ら似顏半身の團扇繪流行する故に、團扇問屋これを板下にかゝしむるに、世に行れて利潤を得たり。師豐國も是に不レ及。世人豐國は國政の門人ならんと云しとぞ。後錦繪も多く出せしが、似顏のみにて畫道に深く入らざる故描く、僅三四年にして止む。草雙紙繪本は畫がゝずして歿せり。後似顏の面を造りて賣れり。二代目國政と云畫名はるか後に見えたれ共、板下を見ず。何人か知らず。

〇歌川豐國

初名國貞、〔割註〕門人に讓り、翌にして二代とす。〕俗稱角田庄藏、武州葛飾郡西葛西領の產也。一雄齋、月渡樓、〔割註〕文化の頃より號す。〕北梅戶富望山人、桃樹園、富眺庵、又一陽齋、晚年香蝶樓、琴雷舍、本所五ツ目渡し場邊に住り。渡船の株式其家にある故、仍て五渡亭の號あり。〔割註〕蜀山人此號を送りしといふ。〕後龜井戶天滿宮門前に住し、又柳島へ移る。若年の頃より浮世繪を好み、師なくして役者繪を畫り。豐國門人となりて、始て臨本を與へ、淨書を見て、豐國も其鍛錬を驚きしと云り。幾程もなく文化の始め草雙紙板下を畫り。文化五年出板時鳥和宿咄衣武作是初筆なり。時に廿三歲、口繪薄墨入、是より年々發市す。錦繪は中村歌右衛門大坂より下りし頃、〔割註〕隅田川梅若の狂言中幕猿廻し堀川の段を勤、二番目狂言富岡戀山開出村玉屋、是歌右衛門御目見狂言也。〕數品を畫て發行す。〔割註〕一說



香蝶樓國貞肖像

國貞始ての板元西村屋與八也といふ。」團扇畫、〔割註〕歌右衛門猿廻し與次郎畫團扇を始て畫し也。」草雙紙大いに行れて多く畫出し、又役者似顔繪は師豐國にまさりて、俳優の故實を正し、當世美人繪は殊に工夫をこらし、花街娼妓の風俗を、深川、品川、四ツ谷、新宿、千住、根津、辨天、松井町、新地、常盤町、於旅、谷中、三田三角、其餘の賤妓に至る迄、風俗を分ち畫出せしかば、一時其名を轟し、三都片鄙迄賞しあへり。天保四年より英一桂の〔割註〕英一桂は柳しま住、九十六歳にして卒す。辭世に、百迄はなんでもないと思ひしに九十六ではあまり早死。」門に入て英一蹄と號す。〔割註〕一説に嵩谷の裔嵩綾の門人也とも云。」又香蝶樓と號す。〔割註〕一蝶が蝶に一蝶の賓名信香の香をとりて香蝶樓と號せり。」天保十五辰年師の名を繼て一陽齋豐國と號す。〔割註〕二世豐國と名書を記す。」按るに二世にはあらず三世なり。改名の頃何人の狂歌にや。

　歌川をうたがわしくもなのり得て二世の豐國僞〔二世の豐國

畫風は豐國の骨法を學び、又一蝶嵩谷が筆意をも慕ひしかど、似るべうもあらず。讀本を畫るものは尤少く、出來宜しからず。弘化二巳年薙髪して肖造と號す。翌年柳島へ移住なし、聟國貞に龜井戸の居を讓れり。元治元年子十二月十五日歿す。七十九歳、龜戸村光明寺に葬す。法名豐國院貞匠畫僊信士、肖像の錦繪に辭世の歌とてあり。

　一向に彌陀へまかせし氣の安さ只何事も南無阿彌陀佛

　命毛の切れてことしの別れかな

繪本役者夏の富士　役者素貌畫本彩色摺　俠　客　傳　馬琴作　阿古義物語　三馬豐國合畫

同　戲場顯微鏡　彩色摺　小櫻姫風月奇觀　京　山　玉石童子訓　馬　琴

三都俳優水滸傳　半紙本二冊　德升作　同中本五編合九卷初編一冊　鶴屋南北作　芝居細見　二德升作

天保三四五七年合本芝居細見　焉馬作　里見八犬傳　常盤津淨瑠璃差畫　焉馬作

〇歌川國長

俗稱梅十之助、號一雲齋、江戸の產也。居住芝口三丁目、後新橋金六町に住す。草雙紙二種あり。組上燈籠繪、或はこまかき細工物に組立る錦繪多く出せり。其工夫に妙を得たりと云べし。浮繪と名付たる名所遠景多く畫けり。門人國宗其餘多くあるべし。常に遊藝を樂として音曲をもなし、酒席の興を添る事をなす。櫻川善孝など、一時の友たり。文政中四十餘歲にて歿す。

〇歌川國丸

俗稱文治江戸の產也。〔割註〕或は武州川越ともいふ。」號一圓齋、五彩樓、醉蝶庵と云。俳諧を鶯笠庵に學んで龍尾と號す。國安と並び行る。書畫とも能し。役者繪草雙紙等多し。亦風流に遊び、諸家の交り深し。文政の末に歿す。年三十餘歲、文化七年三馬作一對男時花歌川口上三馬書入の前髮の肖像あり。文化八年京山作出世櫻譽之詠歌、〔割註〕初筆京山口上。」

〇歌川國安

號一鳳齋、俗稱安五郎、江戸の產也。居大門通り村松町、本所扇橋等に住す。幼年より豐國門人となり、師の傍に塾生す。文化の始錦繪を出せり。〔割註〕歌右衞門忠信道行の畫也。」其後故有て西川安信と改しが、亦改めて國安とす。草雙紙錦繪多し。天保年中歿す。三十餘歲。

〇歌川國直

號浮世庵、柳烟樓、稱鯛藏、信州の產なり。居麴町、後、田所町、其外所々に移れり。始明畫を學び〔割註〕北齋の畫風をも好めり。」しが、若年の頃豐國の門人となる。文化末より草雙紙を出せり。其後錦繪讀本多く出して國貞に比せり。〔割註〕式亭三馬推擧して國直を取立たり。故に三馬作の畫に多し。」一派の畫風を立んとして暫く癈せり。後、天保の始より草雙紙中本抔多く畫く。門人に竹庵龍子と云しもの有。粕壁宿の產也。文化年中草雙紙役者繪など出せし事あり。八王子にて歿せり。

景清外傳　小枝繁作　　雙玉傳　宮田南北作

〔歌川國芳

號一勇齋、又朝櫻樓、江戸の產也。本銀町二丁目に住し、京紺屋の男にして、幼年の頃より上繪をよくし、浮世繪を好むが故に豐國の門人となり、國直が家に塾生の如く居て、板刻繪を學びたる故に、國芳の畫風は總て取合の器財草木抔も、國直が筆意にのみよりて畫しが、後は紅毛畫の趣を基として畫と見ゆ。北齋の畫風を慕ふは、國直が畫風によりて學びし故なり。文化の頃紫さらしといへる本三冊（作者不詳）を畫くといへども、甚だ不出來にして評ありしかりしゆへ、錦繪の板下を賴む人もなく、世に知られざりしが、文政の始馬喰町錦集堂東屋大助といへる地本問屋にて、平知盛が亡靈を畫きし三枚つゞきの錦繪出板す。同じ年相州大山良辨が瀧の圖三枚續の錦繪出板、皆國芳に畫がゝせたりしに、皆評判よく、其後銀座に川口庄藏、又日本橋に川口長藏といへる繪草紙問屋ありて、役者繪似顏を國芳に畫がゝせ板刻すといへども、師豐國又は國貞あるが故に、人みな國芳を嫌ふ。文政の末水滸傳豪傑百八人の內智多星吳用、九紋龍史進、行者武松、黑旋風李逵、花和尙魯智深の五人を錦繪に畫きて出板す。〔割註〕板元兩國米澤町加賀屋吉右衞門。」大いに行れ引續百八人殘らず出板なしたり。〔割註〕或人云、國芳が水滸傳の一枚畫圖上に豪傑百八人の一個と記す。圖每にしかり。半を畫し頃、托塔天王鼂蓋を畫きても又かくの如く、終に其繪不ㇾ殘板刻終り百九人となれりと云。」夫より錦繪草雙紙年々發市す。狂畫は九德齋春英が畫風を學び一家の風をなす。畫く所故人の規則を放れ、新奇の工夫をなし、畫るものこと〴〵く珍らしければ、天保より次第に行れて、浮世畫師の一人と稱す。俗稱井草孫三郎、〔割註〕異に太郎左衞門。」居始め本銀町二丁目、後米澤町又新和泉町北側新道果俗玄冶店に移り、文久元酉年三月四日卒す。六十五歲、淺草新寺町日蓮宗大仙寺に葬す。

法名　深修院法山國芳信士

○鳥　居　清　信

俗稱庄兵衞、始め京師に住して後江戸に下る。鳥居家の元祖なり。難波町に住す。始は歌川流の如き似顔に巧みにして、別て市川團十郎の面を似せたり。此頃は盃杯に似顔面の行るゝ事、今の畫猪口の如し。後江戸四座の歌舞妓の看板を書きて名聲大に鳴れり。元祿享保の人也。

○鳥　居　清　長

關氏、俗稱市兵衞、一說に新助、〔割註〕父を白木屋市兵衞とて新場の煙草店寺本茊の家守をつとめ、本屋を業とす。」本材木町一丁目に住す。三代目鳥居清滿門人也。近世の名人にして、昔畫の風俗なりしが、中頃より畫風を書かへ一家をなせり。師清滿の實子畫を學ず、故に姑く芝居看板を相續せり。〔割註〕一說三代目清滿男なくして一女子あり。此女子に聟をとり上繪師にて松屋龜次といへり。五代目清峰は龜次の男也。」彩色摺畫本浮世美人錦繪等世に行る。夥數彫刻せり。武者繪殊に上手にして、元祿、寶永以來右に出る者なし。又婦人の衣類に藍さびかたびらへ下着の透通りたるさまなど彫刻、摺方の工風をなせしも、清長のわざなり。文化年中歿す。

繪本物見ヶ岡　三冊　江戸名所繪本也　　同武勇金剛力士

○鳥　居　清　峰

俗稱庄之助といふ。文化の始より凡八九年間、歌川豐國の畫風に倣、浮世美人繪草雙紙の類等多く板刻す。清長門人也。後天保に至て清滿と改む。住居住吉町新和泉町。

○羽　川　珍　重　〔割註〕別本三馬云、門人に羽川和元あり。附錄珍重は曲亭翁の伯父の由。」

本姓眞中氏、武藏國埼玉郡川口村の人也。俗稱太田辨五郎と云。〔割註〕太田は川口の舊名也。」名は沖信、三同と號す。弱冠より江戸に出て、畫を鳥居清信に學ぶ。心ざま老實にして言行を愼み、遊山翫水にも肩衣を脫ぐ事なし。享保の頃世に行れて芝居繪本吉原細見記の挿畫、赤本說經淨瑠理本等のさし畫多

くなきぬ。老衰して自ら三同宣觀居士と號す。寶曆四年七月廿二日葛飾郡川つるの里藤浪氏の家に病死す。享年七十餘歲、池の端東圓禪寺に葬りぬ。

辭世　たましひのちり際も今一葉哉

○石　田　玉　山

名は尙友、大坂に住す。天明より文化迄の人法橋に叙す。近世の板刻の畫書の開祖たり。〔割註〕關月の門人なりといふ。」一家の畫風をなす。著述の繪本尤多し。筆力秀才なる事、古今比類なし。京大坂の刻板書は悉く此人也。一時其名妙手と云べし。

繪本太閤記〔自二初編一七編にいたる各十二冊〕　唐土名所圖會〔蒹葭堂藏板岡田玉山とあり〕

玉　藻　談　五　冊　畫作共　住吉名勝圖會　五冊　國　姓　爺　合　戰

二十四輩順拜圖會後編〔前編は春泉齋の筆也後編は松島の圖最よし〕　楠　公　記

伊勢物語圖會　琉　球　軍　記　前編宮田南北作

○二　代　目　玉　山

岡田氏佳德といふ。法橋に叙す。文政の頃神田紺屋町に住せしが、或日家を出て其行衛を知らず。尙友續て上手也。惜むべし。

○石　田　玉　峯

先祖玉山の高弟也。淸正眞傳記の跋を證とす。

繪本盧字便紙　菅　原　實　記　二編

○法　橋　關　月

蔀氏、名は德基、字は子温、法橋に叙す。浪花の人也。始め月岡雪鼎の門人なり。玉山が筆意を學び、名所圖會を板刻せり。〔割註〕一說に玉山は關月の門人也と云、未レ詳、筆意玉山よりは遙にまされり。」

伊勢参宮名所圖會　全八冊　　山海名産圖會

○蔀　關　牛

關月の男なり。畫をよくし、又刻本の文を筆耕なせりと云。

○中　井　藍　江

名は直、字は伯養、浪花の人、關月の門人なり。

播州名所圖會（師の筆意に違ふ事なし）

○法　橋　中　和

西村氏、京都の人也。刻本多く畫けり。字士達、梅溪と號す。

紀州名所圖會　木曾海道名所圖會　繪本年代記　義經勳功圖會　楠正行戰功圖會　野高散人作

○丹　羽　松　溪　名元國

河内名所圖　　蜻蛉の卷　六冊

○佐　久　間　草　偃

名は顯、字は叔德、京師の人、畫を松村呉春に學び、法橋に叙す。文化十一年十月二日卒す。

○奥　村　文　鳴

名は萬𧩊、京師の人、畫を應擧に學ぶ。

草偃以下は浮世畫師にあらずといへども、何れも名所圖會の指畫ある故に爰に錄す。

○大　原　東　野

民聲といふ。五畿内産物圖會の編あり。〔割註〕寄合書の繪なり。」

唐土名所圖會　　繪本西遊記　初編十冊

○竹　原　春　朝　齋

名信繁、浪花の人なり。師詳ならず。一派の名人也。

都名所圖會　大和名所圖會　和泉名所圖會　攝津名所圖會 寄合書

○竹原春泉齋

春朝齋の男なり。父に繼て名所圖會を畫く。

二十四輩順拜圖會 前編　東海道名所圖會 寄名書畫　八百屋お七胡蝶の夢

○速見春曉齋

一に速水氏といふ。名恒章、通稱彦三郎、大坂の人、刻板の繪入讀本多く畫り。又文をよくして自作の讀本多し。玉山の畫風を學びたりといふ。文政六年七月十日歿す。

繪本忠臣藏	二十冊	同　雪鏡談	十二冊	同　金花談	十二冊
同　龜山話	十冊	同　孝感傳	十冊	同　顯勇錄	十冊
同　誠忠傳	十冊	同　合法辻	十冊	同　平家實記	十二冊
同　夜船譚	六冊	同　甲越軍記	二十冊	同　一休話	
同　彥山靈驗記	十冊	同　金毘羅神靈記	十冊	同　二島英勇記	十冊
繪本淺草靈驗記	十冊	同　箱根靈驗記	一冊	同　伊賀越孝勇傳	七冊
都風俗化粧傳	三冊	年中行事大成	六冊		

扁額軌範　二編（此書は春曉齋の作にして、畫は北川春成の筆なり）

春曉齋が筆の畫本忠臣藏の指畫、義士泉岳寺へ趣く所を蕙齋政美が畫る東海道名所圖會によつて畫り。この故に江戶を向ふになし、品川の方を手前にして、義士品川の方より高輪にいたる所の圖を畫り。此の如き誤り外にも有るべし。

○二代目春曉齋　大坂の人なり。

○流　光　齋　役者畫多し。
○合　川　珉　和
京師の人、讀本多し。源秀成、字士陳、雪山と號す。岸駒と云。
漫　畫　百　女　一　冊
○淺　山　蘆　洲
浪花の人、青陽齋、狂畫堂、蘭英齋等號せり。
○一　蜂　齋　馬　圓
○松好齋半兵衛
○青　陽　齋　蘆　國
○喜　多　川　北　麿
○兆　齋　月　亭
○谷　本　月　麿
○桂向亭長丸
○東　　春　嶺
○福　知　白　瑛
六々狂歌仙彩色摺
○大　石　眞　虎
百人一首一夕話　　嚴島名所圖會　　神　事　行　燈
○探　　月　齋
○歌　川　豐　秀

初代歌川豐春の門人也。

○松川半山

翠栄堂と號す。大坂に住す。

繪本琉球軍記　後篇十冊　宮田南北作　　左力寄譚　　手塚兎月作

○繪手本并讀本附錄

花鳥畫傳　二冊　葛飾戴斗　　繪本手引糸　六冊　高井蘭山作、淺山蘆洲畫
萬職圖考　五冊　同　畫　　一勇畫譜　一冊　國芳筆
繪手本水滸畫傳　一冊　北齋爲一翁筆　　忠臣銘々傳　一冊　同　筆
繪手本水滸畫傳　二冊　柳川重信　　三國英勇畫傳　一冊　同　筆
繪本奈古曾の關　鬼武作、北馬畫　　繪本口之碑　五冊　千鶴庵萬龜作、爲說齋雪間畫
同忠孝二見浦　十冊　南里亭柳川重信　　復讐初瀨物語　六冊　鬼卵作、北明畫
同忠孝美善錄　同　東離兼人春曉齋　　同　東々物語　六冊　金石樓作、一陽齋正信畫
月霄譚物語　前編四冊　六樹園作、辰齋　　月霄譚物語　後編四冊　三千丸作、重春畫
繪本英勇圖會　一冊　葛飾戴斗　　紙治小春椿生談　六冊　東漁作、春嶺畫
淺間嶽面影草紙　種彦作、北嵩畫　　美濃舊着八丈綺談　六冊　馬琴作、北嵩畫
仙齋奇緣明月清譚　五冊　兼人作、保之畫　　本朝惡狐傳　十冊　岳亭岳山作、英齋國景畫
常夏草紙　五冊　馬琴春亭　　繪本鬼娘傳　五冊　鬼卵作、黑山畫
現過通稱　五冊　柳園種春春曉齋　　同ゑくぼのちり　三冊　長谷川光信
繪本輪廻物語　五冊　洛東處士東林西北洛北隱士畠山保軒、文化二年板。
新形染色山　三冊　野々村氏畫　　雛形音羽瀧　三冊　野々村氏

同立田川同　同　同瀧の糸同　繪菱忠七
同母子艸同　繪菱忠七　同瀧の流同　同
伊達紋花詰同　同　同菊下水同　清水氏筆
同春日山同　彌四郎筆　當流紋帳百菊二冊　廣瀬氏
同袖鏡二冊　同　繪本三幅對同　中路定年
畫本圖貨三冊　中路定年　畫本必用同　同
光琳道しるべ　野々村氏
右京寺町通松原下ル町菊屋喜兵衛板也。

○大津繪佛像

元祿四年芭蕉翁、粟津の無名庵にありし時、正月四日に、
　大津繪の筆のはじめは何佛
かく口ずさめるにて思ふには、古は佛像を畫くを專らとせしをしるべし。此頃は大津繪の佛像を持佛に掛る者多くありし故に、おのづから佛繪のかた行れ、戲畫はかたわらになせしなるべし。
俳諧日本國　元祿十六年印本
　前　句　　暮てぽつ〳〵新割家　　土　山　林
　附　句　　追分の繪佛に後世を打任せ
　前句不知　大津繪に回向し行鉢たゝき　　一　　睢
本朝諸士百家記（寶永五年印本）卷の八に云、大坂長町七丁目團扇屋喜兵衛といふ者あり。此裏店に鼠關とかやいへる七十餘の老法師有。（中略、）間半ばかりの棚を釣て、大津繪の三尊を掛。一首の讃に、
　繪にかくも木にきざめるも彌陀は彌陀未來のことはかつてたのまぬ

又享保十一年竹田出雲が作せし伊勢平氏年々鑑と云淨るりに、大津繪の十三佛といふことも見へたれば、寶永の頃迄、かの佛畫を用ひ、享保の頃迄も世に散在せしものなるべけれども、今はたへて見る事なし。

一代男〔割註〕天和二年印本。」卷之三に、寺泊りの傀儡の字のさまをいへる條、「屛風の押繪を見れば、花かたげて吉野參りの人形、板木押の弘法大師、鼠の嫁入鎌倉團右衛門多門庄左衛門か連奴、これみな大津造分にて書しものぞかし。見るに都なつかしく思ふ云々。」

かゝれば天和の頃は、戯子繪をもかきしなるべし。

五ヶ濃津の草紙〔割註〕刻板の年號詳ならずといへども、案るに、天和、貞享の頃なるべし。」卷の四に、龍虎梅竹左字に書たる枕屛風、追分繪の奴が露の命を君にくれべいと、赤き丹に書たる所を見て云々」あり。これ等を思ふに、今に昔を失はざるもの大津繪也。〔割註〕佛繪のみ昔を失ふ。」ぬり笠きたる女の藤の花かたげたるも古き孫なり。

新增補浮世繪類考終

戲作者略傳はし書

是の小傳は、或人に借りえし戲作者撰集の中より鈔出せる也。其の撰集は誰集られしにや。撰風を觀るに、吾に等き幢者の所爲にやあらむ。將寫傳し人の書僻けむ。誤れる字、脫たる字などは更なり、詞不調にして、事の前後に成れど、素事實を主と爲書にし在ば、文なせる歌物語りふみの類ならずと、假字天爾遠波の違有なも、皆悉に令レ寫たるを、一日朋友某に見せしかば、越なく愛て、是いかで世に弘く欲爲と云ふに、許諾と答つ。然ば一度勘てよと請る。是に因て原書の儘にては、くらがりのはぢをあかるみへと歟云へる俗語の如くなれば、人笑なからむやうにと、眞實だちて如是は物しつるを、若撰者の見ましかば、然こそ歎しう思ふべけれ。然而撰集の撿名には似ず。好は寡く惡が多し。且他に令爲て、自作と矜て虛名を揚しも有る。彼是省べけれど、然ては名立るは成人傑と思へる習俗にて、耳を貴ぶ世の人は不レ諾。又撰者も猿所爲とや云ふべからむ。誰レ然先に式亭主人が所著臆說年代記にも見えたる和祥、龜遊、益信、〔割註〕中古まで自書作をする人。」丈阿、〔割註〕中古まで自筆自作の人。」其餘、撰集に載在も、傳記自的ならぬは删にとて略つ。且題號の撰集の名目は不相應とて、私に略傳と改たるになむ。安政三年十二月下旬、是が端書をと乞るは、吾弟子活東子と云ふ書農なり。渠が云言の隨意、彼れに代りて題せる者は、

江都日本橋邊外西湑道人

○燕石十種嗣出書目

一慶長以來紀年錄　一江戸眞砂子次編　一吉原書籍目錄
一地黃坊樽次傳記　一志道軒略傳　一平賀源內實記
一助六事實　一衢談錄　一武野俗談
一乘合舟　一竹本豐竹淨瑠理譜　一神代餘波
一劇場新話　一俗耳鼓吹　一新吉原略說 附玉菊考

○無物老人著述書目

一和訓集成 卷數不定　一群書輻轂 三十卷　一續辨疑書目錄 三卷
一宛言 一卷　一又をかし一名忙中間話 一卷　一瓦の響 一卷
一戲作者小傳 活東子校正　一戲作六家撰 同上　一後見草 上卷龜岡石見 中下卷鷃齋老人
一事蹟合考 柏崎具元　一南向茶話 酒井忠昌　一墨水消夏錄 蘭洲
一蜘之糸卷 山東京山　一浪華五俠記 編者不詳　一猿舞沿革考附茶番來由 川崎重恭
一三升屋二三治戲書留


山東京傳肖像

戲作者略傳

○山東京傳之傳

名は醒、字は酉星、醒々齋と號す。又山東庵、菊花亭等の號あり。通稱を京屋傳藏といふ。京橋銀座一丁目に住して、烟管煙包并に家製の讀書丸、其餘、製藥を鬻ぎて業とす。初め北尾政美に學びて、畫に葎齋政演と名のり。又狂歌をよみて身輕の折助と名のる。後、著述を專とせり。中興戲作者中の翹楚也。文化十三年丙子九月七日病て歿す。年五十六、兩國回向院に葬る。

法號　辨譽智海京傳

淺草寺中人丸の祠の傍に建たる碑の銘、ならびに本所回向院の墓誌を摹し得て、其姓氏の精を知り、且平常の戲編の巧なるが猶現れぬれば、左に擧ぐ。

明和六年といふとしの二月ばかり、齡九歲といふに師のかどにいりたちて、いろはもじ習ひそめし時、親のたまはりしふづくゑなむ、此つくゑにはありける。さればつくりざまもおろそかにて、みやびたるかたは露なけれど、はふらし捨ず。とし頃たのもしくて、かたはらをさらず愛つゝありへし。としは五十にちかく、何くれとつくれる册子は百部をこえたり。今はおのがこゝろたましひも、ほれぼれしうきなこともかすみゆくに、いつしかこれもたじろぎがちにゆがみなどして、もろおいに老しらへるさまなるは、あはれいかゞはせむ。

耳もそこねあしもくじけてもろともに世にふる机なれも老たり　　山東庵京傳

文化十四年丁巳春二月　　愚弟　京山巖瀨百樹并篆額

同碑背面

翁諱醒。字酉星。號醒齋。又號山東庵。稱傳藏、以其所居近京橋。一字京傳。故其爲京傳最著。磐瀬氏其先出自磐瀬朝臣人上。近世資詮者。仕太田道灌爲謀臣。道灌亡世隱於勢州一志。祖神篤。考信明。仕某侯。多病辭仕。隱於東都市。娶大森氏。生翁及百樹翁。少好稗史小說。數百著作□富。戲文。幼說謬悠無根。能令人悲。能令人喜。坊間書賈進於剞劂者利市三倍。於是兒童走卒莫不知京傳者。晩悔少作無益於世。改勵刻苦。搜索奇祕。著近世奇跡考及骨董集。二百年來奇談逸事。考據精確可以補小史矣。文化十三年丙子九月七日歿。歲五十六。葬國豐山回向院。弟百樹埋翁。幼時寫字案於淺草寺中柹本祠側。以遺財建碑。刻翁國字記。言以告後之。續其書。而不知其人爾。

江戸　南畝　覃撰

文化十四丁巳春二月　　京山磐瀬百樹再書

窪　世　祥　鐫

回向院中墓誌

亡兄諱醒。字酉星。一字京傳。號醒齋。號山東庵。磐瀬氏。其先出自磐瀬朝臣人上。近世資詮者。仕太田道灌爲謀臣。道灌亡世隱於勢州一志。祖父信篤。父信明。仕某侯。多病辭仕。隱於東都市。娶大森氏。生二男二女。亡兄爲其長。自幼好文。十歲繙寫孟子。今尙存家。自十九始稗史之作。上梓者百五十餘編。因玆其名聞海內。王公妾婦牛童馬走無不知矣。今玆文化十三年丙子九月七日病歿。歲五十六矣。予弱冠出仕篠山藩。病辭仕絆與亡兄同筆研有年。無常風來玉樹碎。痴心月照蒹葭瑩。嗚呼悲哉。

愚弟　京山磐瀬百樹謹撰并書

窪　世　祥　鐫

岩瀨百樹。字鐵梅。號京山。岩瀨朝臣人上之遠裔也。父信明。勢州一志之地士。來江戸市。娶大森氏生京傳翁百樹及二女。百樹自幼嗜文武。弱出笹山侍從。多病辭仕。以及鐵筆之技爲業。自戯有稗史之作。乞梓者隨至。編作日富。與兄齊時鳴。雖然少作之名爲大方所耻也。時五十三。已過上壽之半。故建壽藏自記名氏。聊省亡後之勞爾。

京山岩瀨百樹誕辰之辭後撰幷書

黑水石匠窪世祥鐫

于時文政五年壬午夏六月十有五日也

寛政二年庚戌秋八月

岩瀨氏之墓

岩瀨傳左衞門信明

男 傳 藏 有 濟 建

翁の戯作海内に行れて、遠境僻地の老若男女、その名をしらざるなし。斯れば其風を慕て戯作の業を學ばんとて、門人たらんことをいひ入る者、しば／＼有れども、許諾することなしと聞。是も自作の冊子絞染五郎剛勢談および萬福長者榮花譚。〔割註〕兩種共に文化五年刊行。」に斯の如くあり。「なにとかをこがましく候へども、京傳かたへ戯作の弟子入、かたく御斷申上候」と見えたり。翁が門に遊べるもの、近くは唯關亭傳笑のみと或人いへり。

○或說に、本姓拜田といふよしをいへり。又舊號を寶山といひしが、古き冊子の印章に、寶山の兩字を用ひたるあり。且綠野園藏本浮世繪師考といふ寫本を閲るに、寶山と號すとあり。前にもいへる如く、翁に近年は門人なし。舊くは門人ありしと見えて、京傳門人鼀毛と物に見え、又文化中には、門人拜田泥牛といふ名も見えたり。

○活東子云、鼀毛は三教指歸にも、所謂有名無實なり。泥牛又鷄告などもいかにかあらん。其人あるに

はあらじ。なほ尋ぬべし。

○古き冊子鸚鵡勸進御富興行曾我といへる山東鶏告シホカセといふ名を記し、京傳二十五の曉に序す。政のぶとあり。また山東唐洲といへる門人なり。

○翁が生誕歿年をもてかぞふるに、寶暦十一辛巳年、〔割註〕深川木場に生ると柳亭のはなしなり。」また自作の冊子作者胎内十月圖〔割註〕文化元甲子年三冊鶴喜板。」に、其年にて二十七年戲作なすよしいへば、安永七戊戌年に當り十八歳にて初作なり。京山子が撰べる墓誌には、十九より始て稗史の作ありといへり。されば安永八年刻成て發市に及べる時の事をいふにて、胎内十月の圖に自ら書るは、稿本の成たる時をいへるなり。

○翁が著述せる草冊子又讀本、共に文體一風にて、すら／＼として女童にも讀得やすく、尋常は聞もなれざる奇語、見も習はざる僻字をおほく用ひず。書刻の工風おもしろく、目前かはりたる事を專として、粉骨もまた格別なれば行はれしも宜なり。

○近ごろ何人の筆すさみにか。後言（シリウゴト）といへる冊子あり。評者の名を隱しかば其人は知れず。その中に、翁が撰べる骨董集の說を、ある人奪ておのれが說の如くしたるを、翁ある會席上にて其人に對ひて、「かの說は予が發明なるを、足下自說として唱らるゝことはなはだ遺憾なりといひしとき、或人まさ／＼しく大音に、我いかでか足下の說を奪はん。何ぞ證據ありやと、居丈高になりて說破したりしかば、京傳はなはだ逆上（トリノボセ）て論議するうちに、持病の喘息（ゼンソク）大いに發して痰血を吐し、駕輿（カゴ）にたすけられて家に歸りしが、これより病て起ことあたはず。つひに病床に憤（フン）死したりき。是或人が氣死せしめたること、人あまた知れることなり」〔割註〕以上後言の文也。」と述たるは、然るや否はしらず。予書賈文壽堂が話に聞おけるは、さる類に非ず。翁は病こと兩三日にして、何ごともなくて歿（ヲハリ）ぬ。遺跡は家弟京山子繼たりといひき。

〔世俗己を善とこゝろえたる者をさして自惚(ウヌボレ)といふ。自惚を又艶次郎といふ。この詞はかほよき男を思ひ誤るか。たゞし艶次郎などゝいふをもて、自をよしと心得がほなる弱氣(ニヤケ)男をいふか。此言の起りは、翁か著述せし江戸生空氣ノ蒲燒といふ冊子に、自惚なる若者の名を艶次郎と號(ナヅケ)たり。然に此草紙大に世に行れたれば、廓中までも此艶次郎といふ詞行はれて、今も猶人口に殘りし。今嫉妬を蔪介とよぶ詞はやるが如し。右の冊子は寛政九年の刊行なり。その翌年に三和が著したる冊子を又繰返ス艶物語といふを、翁〔政演〕畫きぬ。是前年に空氣の蒲燒流行たるに依ての作意ならん。さあれば自惚を艶次郎といふ事、翁より始る歟と思はる。又洒落本の中に自惚をさして鹽屋といふ。如何なる故かしらず。洒落本の作者に鹽屋艶二といふ名あるは、前にいふ自惚の名二つに據て名づけたる戯名歟。かゝるを穿鑿するは、をとなげなき業ながら、また〳〵をかしきふしも多かり。

〔文化五戊辰年發兌せし冊子絞染五郎剛勢談に、辻君をおほく畫きたる繪樣ありて、或は偏盲鼻缺(カタメハナカケ)、または鼻より頬へかけて膏藥をひたとうちたる樣なんどの、いと見苦しき姿に畫きなしたるを、實の夜發らこれを見て、いかに吾々なればとて、斯まで見苦き樣にはあらぬを、かやうに畫きひがめたるは、みなこれ作者のしれ業なり。京傳といふえせものを、もし途中にて見る事あらば、捕へてこのよしを恨んものと、かねて相譚あはせて置つるが、ある黄昏にうち連だちて、其場所に行んとするをりから、不圖翁に行逢ひたり。その中には翁を見知たる者ありて、彼れこそは京傳なれ。いでおし捕へて怨をいへと下知するほどに、伴ひ連たる辻君等が、翁を中に取圍て口々にたけり罵(ノヽシ)り、吾々をなど彼のごとく惡さまにかきなしたるなんど姦しく恨るに、翁は思ひがけぬ事なれば、駭こと大かたならず。そのうへ外視も甚あしく、またむさくけがらはしきこと限なければ、言をつくしていひなだむれども、かの輩は猶聞いれず。きたなきを厭ふを見て、故(コトサラ)に取付すがるもありて、ほと〳〵難儀に及べるが、これ乞丐に等うちなれば、翁は左(ト)に右(カク)にいひこしらへて、吾後日にこの諾言の驗をみせん。今は放ち返らしめよと忿狀

乞してわびければ、やうやくに怒をおさめて、後日の事をかたく約し、頓てみな〳〵散ゆきたれば、其場を漸く遁れかへり、後に人して彼黨に前日の謝物として、聊の金を與へて其事をすましけり。翁が名是より彌增に弘まりしと、或人の物がたれり。

○又一說に、かの辻君を多く畫きたる冊子は、寬政の初年の著述なりといふ。然ども予は其頃の冊子に、辻君を多く畫きたるものを見ず。後の說に從ふときは、草紙の表題あきらかならず。寬政の初といへば、强勢談よりは遙に前の事にて、年に甚たがひあり。何れを何れと定めがたく、又話の虛實をも辨へがたし。

○戲作者常に稿本を草するときは、物さわがしきは更なり。甚しき寒暑を惡み、來客の長座をいとふ事は皆然り。胸にうかみたる筋を書とめんとするときは、碁に打入たる人の如く、他念なくして食をも忘れ、又ようたしにたつことをすら惜むことあり。こは予も覺えあることにて、皆人斯の如くなるべし。翁平常種本綴れるをりは、食器をも傍近く調へおきて、時を定めず欲とおもへるをりは食し、また溺器をもその一間に置て、小遺をたしぬときけり。虛實のほどは知れざれども、吾身にくらべて左もありなんとをかし。

○文化十二年乙亥の春、予諸名家の書畫を乞て祕藏し、老後の樂にそなへんとて、書畫帖一卷を製したれば、一日翁の許を訪ひて、その染筆を乞しに、翁は常に天滿宮を信じぬれば、此日は湯島の御社に詣て家に在らずと、舖の手代いひければ、彼の一卷を手代に賴みきこえて、異日ふたゝび訪ひしに、其日も又障れることありて歟面會せざれど、彼の書畫帖に自詠のざれ歌をものして贈られたる。其ざれ歌は詩佛翁が畫ける竹の繪のかたはらにかくなむ。

　鬼がはら住かにすれどかたつぶり角を自慢に身をなたのみそ

○舖上にて自畫賛の扇短冊など鬻ぎぬれば、自詠の狂歌發句のたぐひは、多く世の人の知るところなれど

も、其一つ二つをこゝにあぐ。わきて妙なりとおぼゆるは釣鐘を畫きて、

家業夢中　始終滅亡　正直律義　格別氣樂

拂子如意を畫きたる賛

如何是通子再來の意夜前のかしはもち猪牙舟にねむる

雪解　川々の一度に笑ふ雪解にそこは斉々こゝは下駄々々

同　狂言は秋の半でムり升柴のトがきに月の◯（思入なり）

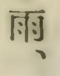
同　仲秋の月にめでゝは今川がをしへももどく酒宴遊興

餘は三馬が撰びし狂歌雋に載せたる故に略す。

○文化三丙寅年發行せし讀本昔語稻妻表紙（五冊）は、書賈文龜堂伊賀屋が藏板也。又同年印行の善知鳥安方忠義傳（六冊）は、書林仙鶴堂鶴屋が藏板にして、二書ともに世に行はれたる事、其頃知らざる者なし。然るにその翌々年文化五戊辰年春、浪花の芝居兩座において稻妻表紙の旨趣を狂言にしくみてせしが、大に流行たるよしなり。右につきて稻妻表紙の後編本朝醉菩提（六冊）また發行せり。同書簡端に在ところをこゝに模しいだせり。

○不破名古屋傳奇考

貞享二年の印本に、菱川師宣の筆の繪草紙二冊あり。名古屋山三郎繪盡と號す。詞書ありて往古山城國小幡の里に住む名古屋山三郎といふ者は、父三郎左衞門正春の仇、同國伏見の里に住む不破伴左衞門といふ者を討たる事、北野のほとりに住む梅津嘉門并に遊君高間の葛城等が事をしるせり。いとおぼろげにて實記ともおぼえず。又英一蝶の筆に名古屋山三郎仇討の繪卷物を世に傳ふといへども、詞書なければ殊に詳ならず。僕案ずるに、延寶、天和のころ、土佐椽が淨瑠璃節に作てかたりたるが、自然兒女の耳に殘りて、遠く世に傳へしと覺ゆ。山三郎が僕に鹿藏、猿次郎といふ者ありしといふは、貞享の印本舞曲扇

林といふ草紙に記せる說なり。又名古屋三郎左衛門趣所の娼家の奴僕に猿といふ者ありて、雍州府志に記せり。延寶八年江戸市村芝居に於遊女論といふ狂言に、原祖市川團十郎始て不破伴左衛門に扮作す。時に三十歳也。山三郎に扮するもの村山四郎次、葛城に扮する者伊藤小太夫也。其狂言大に行なはれて、其一年の内に同狂言を同戯子にて三度迄興行しけるとぞ。其刻伴左衛門に扮する衣裳に、始て雲に稲妻の形を摺ぬ。是をだまきと云俳書に載たる「稲妻のはじまり見たり不破の關、」といへる荷翠の句にもとづきて、團十郎自己の物ごのみなるよししかり。後伴左衛門に扮するには、かならず衣裳に雲に稲妻の形をつくる事になりぬ。團十郎前には  如レ斯の紋をつけたるが、伴左衛門の狂言の後、稲妻の一つを轉じて  如レ此に更めけるよし、然ば則三升の花號  は如レ斯稲妻の形雷紋なり。一說に草履打の事は、元祿の末年花井才三郎といふ戯子と、不破某が事より起れりといふ。名古屋山三郎に扮する衣裳には、昔より定りたる花形なし。僕稲妻表紙前編著述に刻稲妻の花紋、俳諧の句にもとづきぬれば、山三郎の衣裳も、俳諧の句にもとづきてこそ思よせて、「傘にねぐらかさふよ濡燕、」といへる晋子の句意をとりて、出像の花紋に春雨に燕の飛かふさまを畫かしむ。これにより適春浪花の芝居兩座ともに、山三郎の衣裳に濡燕を繡しつるよし、雲に稲妻、雨に燕よき一對にして、しかも濡といふ詞□生に似合しかるべし。稲妻表紙の傳聲につきて、浪華人濡燕といふ小曲をつくりてもつぱらうたふ。其文左に記せる如し。

いもせの、契りたがへぬつばくらは、人ののきばにせたいをまふけ、やゝをばうんで、西よ東とゑくみをもとめ、さもうれしげに其日をおくる。われらふたりはいつしかに、不破のせきやの關の戸に、せきとめられていなづまや、ありとは見えて夫ぞとも、あけていはれぬむねのうち、つゝむにあまるそでの雨、もんは三つ傘に、ねぐらかさふよぬれつばめ。

右たには人團好つくれり。咲藤のはなぶさながき桒、ふしはかせくだせり。

同
各位の主顧に告たてまつる。文化丙寅の冬本坊發兌せる醒々先生の稗史稻妻表紙前編六卷幸に行れ、今春、〔割註〕文化五辰の春。「浪華の戯場兩座において、那書の旨趣を傳奇に翻案して二艶段とし、大に看官の耳目をおどろかすに到りて、おのづから後編渇望の人多し。おもふに清朝康熙二十六年の春、百花坊の雜劇に演義三國誌を翻案して、「千里獨行偃月刀」をつくり、水滸傳を翻案して、「千字文西湖ノ柳」をつくりしより、那兩書の世に行るゝ一段をませりといふ。稻妻表紙における和漢同日の談といふべし。これによりて再又先生に乞ひ、後編一部を得て上木せり。四方賜顧の君子各地綠分的書舖に就て索て一覽を賜ふの後、好判語を所請寄也。則那兩重傳奇の標號打扮の圖を翻刻して左にあらはせり。

辰正月廿五日より道頓堀角の芝居二のかはり狂言　　座本　藤川辰藏

きのふは不破の關樣参る　けいせい輝艸紙（校合十册）
けふは名護屋の山樣参る

右狂言作者（圖あり略す）
奈川七五三助
近松徳三
市岡和七

辰正月廿九日より道頓堀中の芝居二のかはり新狂言　　座本　小川吉太郎

稻妻表紙は姿の彩色　けいせい品評林（再註九册）
十帖源氏は意の寫繪

右狂言作者（圖略之）
並木三四助
奈河篤助

○近年江戶堺町中村座にても、右稻妻表紙の趣を狂言に仕組てせり。また安方忠義傳は、近年天保七丙申年夏狂言に市村座にてせり。名題は「世に善知鳥相馬舊殿」といへり。二番目は世話にてお房綱五郎等を入れ、六月七日初日にて興行す。作者中村重助、室田壽助、三升屋四郎等也。この狂言見ざらんは殘念とて、七月廿九日見物するに、役割の瀧夜叉姬後如月尼(二役)、善知鳥安方(三役)、十太丸(四役)、藤浪(五役)、九郞兵衞(六役)、藤内(七役)、權兵衞(八役)、純友靈右市川九藏勤む。良門(一役)、賴信(二役)、二の瀨源吾(四役)綱五郞(五役)、大宅太郞右市川羽左衞門勤む。鷺沼六郞(一役)、かげちか(三役)、左近(四役)、佐五郞(今一役)、名を忘る。右市川團三郞勤む。小蝶前(一役)、錦木(三役)、お房(四役)、小糸、右坂東國三郞勤む。荒猪丸(二役)、老熊(三役)、佐七、右大谷友右衞門勤む。大當りにはあらねど、此狂言評判ありし也。斯のごとく彼物語の趣向を、今に至るまで狂言に仕組、看官の目を悅ばする事、翁が譽れといふべし。

○式　亭　三　馬

名泰輔、字久德、本町庵と號す。通稱を菊地太助といふ。遊戲堂。洒落齋。哆囉哩樓、四季山人、遊戲道人、戲作舍、滑稽堂等の數號あり。本町二丁目に住して、家製の藥を鬻ぎて業とす。古今戲作者中の英才子也。

○墨川亭云、三馬大人の父は、八丈島なる爲朝大明神の祠官菊地壹岐守が妾腹の男子也。剞劂氏にて菊地茂兵衞といへり。安永四乙未年淺草田原町三丁目に生れ、文政五壬午年閏正月六日歿す。年四十八、深川雲光院に葬る。法號　歡譽喜樂奏天信士

辭世　　善もせず惡もつくらず死ろ身は地藏も譽ず焰魔叱らず

○活東子云、予往年柳島なる妙見の境内に建たる碑面を見し事あり。其は他の辭世の歌を代作にて、

善もせず惡もつくらで終る身は佛もほめず焰魔しからず


本町庵三馬肖像

とありしやうなれど、うろおぼえ再尋ぬべし。
又云、此辭世は須藤田宮といへる醫師が歌にて、三馬に書かしめて彼の境内へ建し碑也。式亭が高名なるによりて、人皆さ思へると彼人自ら語られしと、友人燕栗園〈サヽグリ〉、〔割註〕兩林橋吉川町書圖山田佐助。〕の話也。
○中橋の書賈北林堂、一年予が庵を訪し事あり。物語りの序にいふ。三馬は幼きより僕が家に仕へ、長ずるに從ひ頗る奇才あり。十七八歳の頃始て戲作をなしぬ。後山下町の書賈萬屋太治右衛門〔號蘭香堂〕が家の壻となりしが、配偶の女病てみまかりし後、彼家を出て四日市に古本類を商ふ。小店をひらきしに、其頃より專ら戲作をなし、また石町新道に卜居せり。近く本町へ移り住り。西宮を名のるは春松軒西宮新六と懇意にてもらひたるとの話也。
○活東子云、予がきけるは本石町四丁目の書賈鶴月堂〔堀野屋仁兵衞〕が小僧也。と或人いへり。北林堂の話は虚誕なるべし。
○文政三壬辰年正月十六日、予肇て本町庵に面會し知己となる。前年、〔割註〕文政二己卯秋。〕淺草寺中において、諸人の競ひ視たる、籠細工の觀物よりおもひ得たる戲作あるを號て時の花といへり。梓に上んとの心ならねど、綴て小冊となし、是を大人に見せたり。大人一覽の後に云、御作まことに感ずるに餘りあり。吾門人三鳥が梓にしたる籠細工見物譚には勝りたる趣向といへども、惜かな文辭古びて當世の風ならずと笑しのち、種々の物語に及びしが、その日は彼小冊をしばし貸せといはるゝによりて大人にかしたり。其後かの許を訪たりしが、當時〈ソノコロ〉は世俗の流行詞にいつもお若イねといふこと專ら行れしなり。大人は素より狂歌をよくして、好屋翁をはじめとして、其餘諸大家に交り厚く、撰集の狂歌樵ありて、この道にも長じたれば、大人が笑種にもとて、予もかの流行詞をとりて、一首の腰折をものして見す。そのざれ歌に、

流行詞さとり違て達磨さんいつもおあかいめしものばかり

大人予にしめされしは、此狂歌は書畫の會席上にてものに賛など乞れし即興にするにはよしといへども、近體の狂歌には得ならずと笑れしが、後五七日を隔て面會のをり、大人云、已れいぬる日、さる席上にてかくぞ詠つると、聞かされたるざれ歌に、

すだ堤老木もときにおくれずていつもお若い花のかほばせ

予また青柳といへる題にて、

さえかへり山も霞の頭巾きてめばかりいだす岸の青柳

といふをかきつけていだしたるに、さえかへりの五文字おだやかならねば、うらゝかとしたまふべしといはれたるにつけておもへば、いかにもそれにて山の霞の頭巾といへるがごとく聞ふる様におもへり。この日大人が狂文にてものせられたる諸店報條といふもの、五ひら六ひら、まただうけ百人一首といふ小冊に序文を書れ一冊をおくられて、日外貸おける予が拙著を返されき。

○一年、彼書畫帖にかきてもらへる歌

爺は山の東方朔、婆は川の西王母、三千年のむかし〳〵遐齡延壽の一期さかえし僊家の桃は有たとさ。

その桃の根どひ葉どひのそれからは後もはなしの種ぞ殘れる

○活東子云、峯の青柳とは俳言也。柳は山に生るものならず。萬葉集卷四に青楊乃葛木山爾云々、又十一卷に春柳葛山に云々とあれど、そは發語也。此こと既く加茂翁も説れたるをや、かゝる事は誰もしりぬべけれど、まだしらぬ人もまれにはあるらむ。枯柳おどろかしおく。

○文政四辛巳の夏、本町庵を訪ひてはなしのついでに、已れ去年の夏寫山樓に遊びしとき、文晁翁の内室が物語に、この頃の流行唄に、てふ〳〵しづかにさしこめといふ囃子ありしを、本町庵三馬がしかじ

かのざれ歌に詠たりとて、或人の來て物語きとてはなされしかども、そのかたはしも覺侍らずと、大人にものがたりしかば、そは去年の春の事なり。その狂歌かきつけて進ぜんと傍に在ける薄美濃の紙に、とりあへずかきつけて送られたるざれ歌ども、

榮之翁の書畫會ありける時、隅田の櫻のかた畫たるに、

隅田堤老木も時におくれずていつもお若い花の顏ばせ　三　馬

狂歌堂眞顏翁傍におはしけるが、我も流行にはおくれじとて、文晁翁が蝶のかた畫たる扇に、

今はやる人のかきたる繪扇は蝶々靜に腰へさしこめ　眞　顏

猶おのれにも歌よめとありければことばの下に、

今はやる蝶々靜とよまれては急に趣向もこりや又なしかい　三　馬

時は文政の三とせ彌生のはじめつかたなりき。式亭書

○書畫の會席において、畫のかたに應じ、とりあへず贅のざれ歌をたゞちにあんじ書て人にあたふるものは三馬と故焉馬のみ。大かたは雙ぶものなかるべし。當意即妙奇といふべし。

○或人云、三馬はをかしきていの歌なるべけれど、焉馬は戲名のごとく誤り多かるべし。

また一時大人みづから物語ていへらく、己幼きころ伯母なるもの、その太守公の奥殿に仕へまゐらせければ、をり／＼伯母へ對面のため、奥殿へ至る。ことに好む所なれば、傍にありあふ冊子をとりて讀むを、その席へ來あはす仕女たち、この童は歳にも似氣なく書を讀ことの拙からず。今の程よりかく文才に長じたれば、後はいかなる者にならんずらんなどいはれしが、十三五歳の頃までに、數多の戲曲本をもこと／＼く覽竭し、十六七歳の頃戲作の志あり。十八歳にして獨立に始て、天道浮世之出星操「〔割註〕三冊、豐國畫、西宮板、寛政六寅年刊行。」といふ黃表紙を著し出板しぬ。此冊子を作るのはじめ、夜寐るにも衾の袖より手をいだして稿を成したり。草成てのち自ら戲號をなづけんと、さるべきと思へ

る兩三名を小き紙にかきつけ、その紙を小くおし捻て、手づから傍に投て、それを又拾ひとりて得たる所の捻紙を披き、かきつけありし戲號は則式亭三馬にて有しかば、是にて心を決し、遂にこの號を用ひたり。おしつゞきて年毎に一兩部づゝ著作せるうち、寛政十一己未年俠太平記向鉢卷、〔割註〕三冊、西宮板。」といへるを著したるに、人の嫌疑を得て、その怒にふれ、遂に公に訴られ、輕からぬ御咎を蒙り、書賈をはじめならびに父にもいたく劬勞を掛しかども、やがて賢き御惠をもて赦免を蒙りし後は、父のしば〳〵戲作の業を廢せよと諭せども、かつてその道を捨がたく、間ひとゝせを隔て、また著述をなしぬるが、かの事よりして愚名ます〳〵高く、近頃に至り雷太郎の一作大に行れしより、幸にして年々評判つよく、世人にもてはやさるゝ事になりきといはれつ。

○大人が撰たる讀本に、阿古義物語といへる五卷あり。稿成て故一陽齋豐國が許に稿本わたりしかども、一陽齋いかなる故ありてか纔纔半にして、其後をふつに畫れず。やうやく遲滯に及びしかば〔割註〕其故か半より末國貞の筆也。」式亭憤を發し、ひごろ刎頸の交り厚きを、かくまでに己を蔑如にする、その心根こそ惡けれとて、自ら一陽齋にいたり、まのあたりにこのことをもて罵り、その怠慢を責しかば、豐國ぬし言を盡し詫たれども、式亭が怒解ず。これより何となくたがひに隔心いできて、此方にては吾作意する冊子には、向後彼をして畫しめじといへば、彼方にても彼が作たる冊子には吾ふつに畫くまじなど罵りあひしが、書賈伊賀屋文龜堂があつかひにて雙方和解し、文化七庚申年文龜堂が上木せし一對男時花歌川といへる冊子は、三馬子が編述せるところにて、前編六卷を一陽齋畫きて、これを初日と稱へ、後編六卷を一柳齋豐廣子畫きて、これを後日と呼び、初日後日二日替りの狂言のごとく執なし、ところ〴〵兩子あひ畫にせられたる所もありて、一入興ふかく彫刻も細にいできて、是をもて式亭と一陽齋が和睦の媒となし、文龜堂義市に及びしかば、めさき殊に變りて美しく面白き冊子なりとて、看客の評判つよく行れたりきと、亡友一鳳齋國安子存生のうち物語りぬ。

○文政九戌年刻成たる梅精奇談魁雙紙といへる讀本五卷は、浪速の書肆文金堂河內屋太助、江戶の書賈仙鶴堂鶴屋喜右衞門とはかりて合梓にて發市に及べり。繡繪は國安ぬし畫けり。いぬる文政三年辰の秋、三馬子より草稿五卷を、予に託して淨書せしむ。おのれ拙筆をもてしたゝめんも本意ならねば固辭しつれども許さず。遂に其意に隨ひ毫をとりたれども、遲筆にしてやゝ翌春に及び、辛じて落成しぬ。大人予にいへるは、原この草紙さしゑは、豐國が男豐淸をして畫しめたれども、彼れ不幸にして世を早うし、その畫半にも至らずして、そのさし畫の繡繪三五町を出し見せらる。さてその後國直に畫かせんとて、稍久しく彼方へつかはし置たれ共、出來ざれば取戾たりとのはなしなりし。巳の春予が淨書畢てより、およそ閒ひとゝせを經て、戌の春國安子が筆にて出たり。又一時おのれ大人に語りていふ頃より、吾友なる光房といふが講釋にて、源氏物語末摘花の卷を聽つるが、これはいさゝか戲作の扶助にもなりなんやと問たれば、大人こたへて諸物語ものゝ隨一なれば、諸人おほく和文辭をつらぬるにたすけとせざるものなしといへども、戲作の素意はさるむつかしきものにあらず。貴君今より戲作をなして、心を慰んとのおもひあらば、源氏一部の講釋をもらさず聽くにも及ばず。源氏のことも水滸傳の事も、すこしづゝ聞はづりしとあらば、似つこらしきことをとりなして知たりぶりに書んこそ、戲作者の專らとする所なれ。餘り源氏に凝過て、かや〳〵と笑ひ、さや〳〵と繰ひきなどの類、なまこなしの源氏風は聞もうるさし。戲作者の腹といふものは、たゞ屋臺店の賣物にひとしく、手裏劍うちたる唐茄子も、蒟蒻の田樂も、曲はぜもなんでも四文ととり雜ておかんこそ本意なれとて、手を拍て笑はれたり。この言いま思ひあたりてをかし。

○また大人が冊子の稿を草する時、三日三夜にして凡六七卷、或は八九卷の物を脫成することしば〳〵あり。文化のはじめ合卷讀本倶に流行し頃は、三馬、豐國等は諸方の書肆に種本、寫本を乞需らるゝ。その約束の期に後れ譴らるゝに苦しみて、五日或は七日ばかりつゝ書肆の許に至り、一閒を借て草稿を成

し、または繪を畫きぬとなり。たとへば今日まで某甲が二階に在ば、翌日は其乙が離舍に行き、かなたこなた廻り／＼て、尙それにても手の屆かで、約束の期におくれたる書房にて責らるゝを苦みて、其行先を知らせず、後にやうやくにして、それが方に廻り行ほどなりしといへり。昔は今の如く作者の作料、染賃などゝなづけて潤筆を取ことなかりしが、ひとり京傳は原より潤筆をとれり。作者稿本を書肆に與へ、その冊子の幸にして行はれ、書肆の利を得たるものは、求めざれども先方より、その禮謝として絹壹疋縮緬壹反など贈りおこせしものとぞ。後は作料といふものを定めて、作者の方へとる事となり、戲作をもて營世とするもの出來たれば、高金を取るに至れり。猶當りものある時は、當り振舞とて、その書肆は作者畫工を伴ひ、或は戲場見物に至り、或は遊船に出ることゝなりぬ。是稗史の流行成して、板元の利を得ること百倍なる故なりと、三馬みづからの話なり。雪丸おもへらく、近頃はかつて當り振舞といふ事を聞ず。是全く稗史の行はるゝこと、中古よりは遙に衰へたる故なるべし。また冊子の發市は、吉日をえらみてするは常なり。此日、書坊は蕎麥を出して、作者畫工をはじめ刻摺製本の人々をもてなせり。

○大人に二代目芝全交になるべしと進る人ありけれども、業に拙して古人の名を汚さんも、いかゞとて止けるよしをきけり。著述の樂屋通（ガクヤ）、および馬笑が作の廓節用に「式亭三馬儀古人芝全交の遺言に付、此度より二代目の全交と可二相成一筈に候得共、いやしき妄作を以て古人の高名をけがすは恐れ有とぞんじ、いまだ改名は不レ仕差ひかへ罷在候。猶不二相變一全交俤と被二思召一御一笑奉レ希候」と記せり。

〔式亭常に詠ずる所の狂歌狂文、粗聽したるをいさゝか左に擧ぐ。

早春鶯　のどになら藪鶯の聲よかんめりよかんにめりてはらぬ一ふし

吉原花　わけのぼる花のよし野もよし原も山口よりぞさきはじめける

古今集序にいでますゝ聲色は歌にかけあふ蛙鶯

首夏　遅櫻ちり／＼ちりつまだ／＼といふまに夏はちよいときなさい

鶯　汝が春をまちえしよりも鶯よわがまちえたる初音うれしな

月　村雲よ邪摩がしたくばかけぬけて月の入べき山にふさがれ

山水　瓢もて飲たる胸のうちよりも耳にすゞしきやま水の聲

露　中の町うかるゝ客は大名氣げいしやもついのさき箱で來る

人とはゞ息をもいとへ白玉かなんぞといふときえたがるつゆ

深川雪　初といふ名ざしのありてあくるまでに跡つけかぬる雪の中うら

傾城にまことなしとはけいせいにうそいふ客やいひはじめけん

買込になる子は一の富が岡てばんの客にあたるのもあり

吉原秋夕　さびしさのいづこはあれどよし原にうしろを見する秋の夕暮

焚ものにそのたましひのかへるときいつきなんすはいはぬ傾城

ひとつ家のいにしへ五町まちの今のおもへば

日はくれて野にはといはで宿からばあさくさ寺のうしろなりけり

ゆふべの雪の馴染つもるを愛る傾城あれば

あしたの空の乙雪にうらやくそくの客もあらなん

吉原雪　よし原の雪にばかりは夜もすがらふられて嬉し居つゞけ日和

福祿壽助六に相扮繪の贊

三芝居に花さく頃七福神の月の宴たはふれ遊ぶ君

なら／＼しんぞ命も長いきの福祿さんその鉢卷はへ

おつぶりの長うたならで福祿壽よこ鉢卷にひねる江戸ぶし

福祿壽賛　福祿壽などゝお名をばまをさずとあたまでしれた長いきの人

朝　顔　種ありて數はさま〴〵かはり咲いく品玉かあさがほのはな

三味線にうかれ惠比須イヨありが鯛の濱燒やくしや聲色

草摺をひきちぎり見よしりもちをついたかげんのこしのつよさよ

いけかたはさても妙法蓮華經うつはに水のだゞぶ〴〵

色も香もさてありがたし普賢像小町櫻にまさる粧ひ

女繪の賛　ありがたいものはお眞向樣よりもよこむき樣の外面如菩薩

同　木々もみな目に立田山ひとしほにはをそめて猶いろまさりけり

同　世の中にたえて女のなかりせば男のこゝろのどけからまし

同　見たところ如才ないぎかかこひものそかそでないかそでなし羽織

同　家と子を守り袋ぞあらたなる氏神よりもうちのかみさま

奥女中　お宿下り親の病氣をいひたてゝ椎茸たぼをだしにつかへり

女子の歌がるたをとる畫に

おさへたをふりはらひけり歌がるたとりてやはらのやはらかな手に

彩色をのちともいはず繪のことは素人おちをもつぱらにせよ

富士筑波むさしもふさ繪と文字と兩方に見る兩國の會

猩々酒に醉たるを自身番のもの介抱する狂畫の賛

番人のあふむはよく大屋殿の口まねすれども下戸の猩々酒中の趣をしらず

生醉に所をきけば猩々はよくものいへどわからざりけり

菖　蒲　池水にふせる菖蒲の草枕なかねを風のひきおこすらん

洗濯におちたあかさか奴凧たらいのなかでふりだせ〱

呉竹のよつや鳶(トンビ)も鷹なりき四十八たか凧にはつたか

長いきの壽の字に猶も輪をかけて長いきをふく萬年の龜

名歌をそねみし黒主が心の鬼の角たらひに小町もさそふ水をや汲らん

いひかけしうそは雙紙の文字とゝもにあとかたもなくあらはれにけり

所作事の數は七色蕃椒みなそれ〲にかはる味ひ

唐猫の人なれたるはあやしうなつかしき物になんはへると、常に愛たまひしは六條の院の姫宮なり。白猫の飼つけたるは馬鹿らしい程可愛うざんすと、毎になづけたりしは三浦屋の薄雲なるべし。

白黒の白になづむは鼠とる思案の外か猫の妻戀

瀨川路考にがをの賛

としはまだわかの浦浪ならぬ最負友呼ぶ濱村千鳥

かあいとなくはきぬ〲のあけがらすにくいと呼ぶは待宵のらうか

鳶(トビ)かあいにくいは間夫と客まことゝうそのうら表有と思へば

なしないとおもへばある是則色則是空空則是色

奥山になく鹿よりもきく時ぞ秋はかなしき猿丸が聲

如何祖師西來意九年面壁はなんざんす。苦界十年お客を壁とにらみ破る身は、蘆の葉の夫ならぬうきふししげき川竹の流に立る眞實(サキ)は、色客への操にして、不立文字のきれぶみあれば、直指人心のゆびきりあり、以心傳心の格子頭、見性成佛の床の內、はまるは本來無分別、きれるは心外無別法、迷へば通も不通となり、悟れば不粹(スイ)も粹となる。柳巷花街翠帳紅閨、柳はみどり花はくれなゐの禪味にかよひくるわのならひ、たとひ禿はみどりとよぶとも、花もくれないの客の心の色々か。吁(アヽ)駒下駄の呵囉

々々喝。

　　達磨さん腰から下に乍麼生女をならす一物もなし

片岡山に脊をとゞめて、臥せる旅人客をあやなし中の町に駒下駄を進て、あはれ親なしの禿をいたはる畫麗の坐禪の床には、壁にむかうの人をよばひ、蘆のひと葉の猪牙船にうかれよりくる浮虛の客には、面壁九年十年の苦界の悟を開かしむるも、あけら觀法の閨の中、ふられた客はいかるかや、富の緒川の流れの憂身を什麼(ソモ)さん、察しておくんなんし。

　　さとれかし客と密夫との戀の海よしあしの葉にわたりくらべて

　　あろかいなお猿に贅なあろかいなとんだ趣向か有田歌右衛門

　　しかれども山出のことをわすれてかとかくはねたる髯の炭

浮虛の風は見通におとづれ、苦の雨は棧橋にみなぎる。まつよひの心いきを、潮來節にいはせ、きぬ〳〵の恨を八幡鐘にかこつ。にくい〳〵の廊下鳶に、宵泊のきいたふうあれば、かあい〳〵の明烏に、朝直しのちん〳〵あり。密夫もはじめはお客だよ。客また密夫となる事は、必お近いうちに有べし。

七代目三升が助六の初役をよめる

　　助六の入りはあまりし木戸口をまたくゞりまたくゞる見物

　　梅屋しき土産は竹の皮づゝみ香はつゝみまで迯る木下川

新梅やしき　枝うつり目うつりもして梅になく聲をきくうが庭の鶯

品　川　月　品川に九曜七曜しん宿の光りをうばふ月のかげみせ

　　鶯の南にうつるあとや追ふ聲高輪に初音屋の鶯

○曲　亭　馬　琴


曲亭馬琴肖像
月岑縮寫

名解、字瑣吉、瀧澤氏也。通稱淸右衞門といひて、元飯田町中坂下の家守役也。其を聟に讓り名をも與へて男宗伯(割註)松前侯醫師、明神下同朋町。」と同居す。文政七年の頃剃髮して篁民といふ。後、四ツ谷信濃坂の上に住居す。嘉永元戊申年十一月六日歿す。年八十二、法號著作堂隱譽蓑笠居士。

辭世　世の中のやくをのがれてものゝふのかへすはあめと土の人形

○馬琴寬政のはじめ、京傳の門人となり、京傳より大榮山人の號を送らる。是深川永代寺門前出生故、永代寺の山號をもて戲名とす。寬政三辛亥年芝神明前和泉屋市兵衞より出板の一冊物あり。外題は、(卄日餘四十兩)盡用而二分狂言、京傳門人大榮山人作とあり。

是戲作の最初也。寬政五癸丑年より馬琴と改む。此年發市せるを左にあぐ。○浮世衙屋御茶漬十二因緣(三冊)○荒山水天狗鼻祖(三冊)○花團子食家物語(同)寬政五癸丑年より嘉永元戊申年まで五十六年の著作數多故略す。黃表紙合卷物當り少し。書入讀本に手柄多し。

○翁が剃髮の年は、傾城水滸傳(初編八卷翁自作)卷の八花がら阿達が剃髮のところに書入して、

吳竹の世をすつるにはあらねども、髮の毛ふぎれたぶさほそりて、元結のとゞきかぬるを、油こちたく物するがいとぶせくも煩しさに、いぬる皐月のはじめつかた、かうべをなん剃まろめて、雪に入るこしおも、おのが白髮もそりすてしより、夏はすみよきと口ずさみてひとり笑へり。をこがましきわざながら、こゝの繪組にとりあはせて書入のうめくさとす。あなかしこ〱。

斷あれば文政七年に、この稿本をなしつるにて、其年剃髮の證とすべし。さて原は武辨の家なりしが、翁は多病の故に市人となれり。後年栗山先生(柴彥輔)を師として學び、學力の長ぜし事、他の稗官者流の及ぶ所に非ず。常には舊戲の小冊子を編むといへども、翁が素意こゝにあらず。かるがゆゑに先年著述するところの燕石雜志、および玄同放言のごときは有用の書にして、大方もこれを閱て其說ところ是とすべし。今年(天保戊戌)七十二歲にて精力衰へず老て益盛なり。稿を草するとき俗にいふぶつゝけ

書にして、綴りゆく文章水の流るゝがごとく、少も淀むことなく、文體一家をなす。殊に讀本の著述おほし。就中世に聞えたるものは、椿說弓張月、朝夷巡島記、里見八犬傳の類也。開卷驚奇俠客傳、近世說美少年錄の二書は近年の發行にて、いまだ物語の半に至らず。編を嗣で佳境にいたらば、評判ます〱高かるべし。また近頃合卷にて傾城水滸傳あり。大に世に行はる。八犬傳は今九輯にいたりて滿尾するに近しと聞ぬ。此編の行るゝ事、古今雙ぶ物あるべからず。さるゆへに近年浪華にて狂言になしつるよし聞えて、浪速の畫工が畫きたる大錦繪數枚、書賈文溪堂の藏するを見る。また江都にて狂言にせしは、天保七丙申の夏木挽町森田座にて、名題を「八犬傳評判樓閣」として興行す。狂言作者今井由輔、寶田壽助、三升屋四郎等也。予も一時墨春亭梅麿に誘引れて、この狂言を見物せしかば、其役割一ツ二ツを爰にいはん。犬塚信乃、(二役)網干左母二郎、(三役)犬村角太郎、(四役)犬山道節、(五役)犬田小文吾、(六役)土田の土太郎、(七役)鳴神上人、右市川海老藏。犬坂毛野、(二役)白雲、(三役)鐮助、(四役)藏人、(五役)山林房八、(六役)犬飼現八、市川九藏。濱路、(二役)雛衣、(三役)伏姬の靈の雲妙間、右尾上菊次郎。莊官蟇六、(二役)馬加大記、(三役)文五兵衛、右大谷友右衛門。在村、(二役)船虫(三役)黑雲、(四役)額藏、市川壽美藏。龜篠、(二役)成氏、(三役)飛番太、右市川升五郎。梶九郎、(二役)氷上宮六、右市川一友。犬江親兵衛、市川團十郎。さのみ當りにてはなかりしが、狂言は面白く、芳流閣の場尤よし。その中にて、予熟市川白猿がそれ〲の役に打扮すがたを視るに、惡棍どたの土太郎がこしらへ、馬琴が八犬傳のタチヱに在しにちとも違はず。絞染の襌迄故人柳川が畫きたるに一點たがはず。彼が衣裳に至る迄、精細に心を用ること斯の如しと、獨たんそくしたりき。其後には今年天保九戊戌年閏四月より市村座にて、名題「戊歳里見熟梅」として興行せしが、是も又はか〲しき評判はなかりし。然るに讀本を芝居の狂言に迄仕組てせらるゝは、京傳と馬琴子がこよなき面白といふべきのみ。

○天保七丙申年翁が齢古稀に及びぬ。諸人すゝめて年賀の書畫會筵をひらくべしと有しに、初は許諾さりしが、秋にいたりて終にそのすゝめにまかせて、八月十四日柳橋萬八樓上に諸人を集會せしむ。此日はなはだ盛會なり。予もかねて知己なるのみならず。常時は「濡玄烏栖傘雨談」前集發市にて、前後二編とも序文を翁の書れたる因深かりければ、他人をもすゝめ誘引して出席す。その以前書賈文溪堂翁が孫興邦を以て、予が家に訪來て、自詠の賀歌をものせし扇紈、あるは富久さなどを送らる。その賀歌を左にのす。

盡せじなよはひはさゞれいし龜のよろづよもぎが島をおふまで

名にしおはゞ出よ千とせの友にせんかくれみの龜かくれ笠松

賀筵の當日予初て東里山人に面會す。先醒（馬琴ヲ云）にとて扇子を出しけるに辭退ありしが、せちにすゝめければ書れて送りぬ。

馬琴叟が七十の賀筵をことぶきて

七十はおろか百でも二百でも御氣儘次第いきな爺様

○翁近きころは、老眼やうやく病衰し終に盲となりぬ。然れども著述をやめず。婦をして筆をとらしめ、おのれ口授して草稿を代寫せしむ。

八犬傳九輯五十三ノ下　　同外剩筆

（上略）愚而寬政二年の冬、創て戲墨の書雙紙二卷を編て、書肆甘泉堂が刊行せしより、今に至て、「割註」天保十二年丑秋八月。」五十二年、刊行の雜書物の本共に、二百九十餘筆に及べり。這他刊布せざる筆記雜纂、或は二三葉の小紙子多かるを、數へ盡すべうもあらず。（下略）。

同（上略）否とよ。洒家は昔より、戲墨に門人といふ者なし。三四年以前吾戲作なる書雙紙に、門人魁蕾子（又作ニ傀儡子）などいふ名號をおしたるもあれど、开は末生の人にて、一時の戲れのみ。實に其人あ

るにあらず。然も文化、文政の年間に生、狂才ある壯佼等が、吾弟子にならまくほりして、由緣に就き、紹介の人を求めて、漸次に訪來ぬる者八九名ありしかど、吾一人も是を許さず。(中略)、そが中に入門御辭退の儀はちから及ばず。いかで戯作に琴字を許し賜へといふ。琴字をもて名號に做す者は吾のみならず。昔も今も儒者に琴所、琴臺などあり。そは各位の隨意たるべしといふに、皆歡びて、或は琴雅、又琴梧、或は琴川、又琴魚など告る者五六名ありしかども、それも一兩稔の程にして、夙く胡越の如くなりけり。今思へば、三十餘年の昔なれば、其人猶生けるや死せりや。いまだ知ず。是等の中に、櫟亭琴魚は同じからず。是は吾知音の友伊勢人篠齋の弟にて、窓螢餘譚、青砥石文などいふ物の本の作者なりしに、惜むべし四十餘歳にて身故にき。(下略)。

○東岡舍羅文は馬琴子が兄なり。性俳諧の發句を嗜み吟る所多し。諱興旨、通稱臺右衞門といふ。寛政十戊午年八月十二日歿す。于レ時年四十、源光寺に葬る。法號深譽勇遠羅文といふ。墳墓の臺石に病中の吟を馬琴子が書たるを彫付たれども、歳月を經たれば石面滅て跡得安からねば、こゝに漏しつ。

○八犬傳終に全局を結び訖しとき、

あはれとは見る人思へ八重すだれかゝるやみ目にあみはたす書

ながらふがかひこそはなれ見えずなりし書巻川に猶わたる世は

筆捨の松のふる葉も言の葉も子等におしへてかゝするぞ憂き

○文政八乙酉年九月二日初て翁と知己となりぬ。そのゝち文政十一子年八月廿六日再び出會なかりしに、其時翁が初て著述せられたる冊子を問に、翁かたりて云、寛政二戌年深川にて何やらん開帳のありける時、京の壬生狂言來り大に行れたれば、其事よりおもひ起して、遣果而二部狂言といへる二冊物をあむ。豐國畫にて芝甘泉堂が翌亥年發板し、それよりうち續き新作せり。是まで自作の冊子一つも漏さず所藏せしが、飯田町に在し頃、一年の夏二階の物干にて、虫はらひのため冊子を風あてたるときほか

へ吹やりけん。文化三丙寅年出板せる武者修行木齋傳一部いづこへか失ひつ。さる間そのゝち骨董舗上なんどにて、この物あらば買とらん事を思へど、近曾は歩行自在を得ねば、杖を沙庭の外に曳ず。遺憾この事のみと語られけるに、予答ていふ、在下勤のいとまある日は市中を徘徊せり。故にもし彼木齋傳の骨董舗上に在こと有ば、償とりて進ぜんとこたへつゝ、常にその事を心にひめしに、およそ三とせを隔て、約せし時より五年目にして、天保三壬辰年月日は忘れたれど、量訪て懐にせし木齋傳を與へければ、翁悦ぶ事大かたならず。約せし言を違たまはず、この賜物は何にもまして忝なし。おん心の切なるより、全くおん手に入たる物ならん。長く祕藏し侍る也。是にて拙作の藏書闕ざる事を得たりとて欣喜色にあらはれぬ。

○翁が齢ことし天保六乙未年六十九歳なれば、いぬる明和四丁亥年の生れにて廿四歳のとき、初作の二部狂言の草稿成りて、廿五歳の時新板となりたるものなり。

○一日翁とむかしの雙紙の物語におよべるときかたりて曰、黄表紙の行れしものは、喜三二文武二道萬石通、また其後三和天下一面鏡梅鉢なり。此頃より雙紙の改むつかしくなりたる也。洒落本と稱ふる物にては、京傳が晝世界錦之裏なりと語られたり。予もみな此草紙どもを閲たりしが、當時の禁忌の事なきにしもあらず。右翁の物語につきて思出せる事あり。文壽堂（丸屋文衞門）いまだ書肆なりしころ、かの家の老母予に語ていふ。むかし京傳が作の天下一面鏡梅鉢、（割註）作は三和なれども、京傳といへるは老母がをぼへたがへなり。」大に行れて、板元耕書堂蔦重なりしが、其頃はいまだ新吉原揚尾町に住居して、かの草紙の賣たる事夥しく、問屋仲間はいふも更なり。諸方小賣店の者までも、吾も／＼と買とらんとて、日毎に門前に市をなし、草紙の製本間にあはず。摺本のまゝを車に積て挽いるゝを、途にてそのまゝ買とらんとて争ふものもある程にて、右の摺本へ表紙綴糸をそへてつかはすと、懇望のものは悦びてもち返り、先にて仕立賣物にせしなり。然るに憚るべき事あるによりて、終に絶板を命ぜられた

りと語りぬ。

○翁が著述の讀本、はじめにいふごとく、里見八犬傳なり。八犬傳と朝夷巡島記とを評判して、犬夷評判記と名號け、黑表紙をかけて横本三卷となし、自笑が役者評判記に擬へて、文政元寅年六月刊行しつ。批評は三枝園主人、答述は馬琴、考訂は櫟亭琴魚なり。難波と東都との書賈連名にて發市しぬ。かゝれば世の人の評にもあづかれるは翁が名譽といふべし。文政十二己丑年卯月すゑの七日、溪齋英泉予が家に訪來て物語のついでに曰く、在下いぬる日、曲亭が翁が許にいたりしとき、翁の申さるゝは、昨日何人にてか有けん。家製の奇應丸一包買ふものあり。一封を遺し、是を先生のおん目にかけて賜はれといひ捨て歸りたり。その一封を披閲らるゝに、この春出板せし近世說美少年錄卷の三緣巽亭の條下、および五の卷二賊相殺の趣向をいたく褒て、のちに傾城水滸傳をソシリたりとなん。その一封の書もの、溪齋もまのあたり見たりといふ。又是より前に深川に住居する書師何がしといふもの一封を投じたり。披き見れば右のごとく、水滸傳の著述をあしざまに謗難して、原唐山の事を日本の事に取直したる書ながら、蒙汗藥の事を書いれしはいかにぞや。日本には言ところの藥なりとあるよし、翁これを笑つていはく、しびれ藥は原本水滸傳の作者がこしらへ物にて、宋の代にもなきもの也。いはんや吾朝においてをや。然るをさる不穿鑿をもて人をそしるは笑ふに絶たりと、翁いはれしとて溪齋ものがたりき。

○十返舍一九

重田氏、名貞一、通稱與七といふ。駿河の產にして、居を橘町、又深川佐賀町に占め、竟に通油町〔割註〕書肆仙鶴堂が裏。〕に移住せり。

○墨川亭曰、一九幼き時市丸と呼ぶ。故に市を一に作り雅名とす。弱冠の頃東都に出。或侯、〔割註〕一說に小田切君江都尹にておはせし時、その館にて住簿たりしといふ。〕に仕へ、そのゝち大坂へ登り、彼地に住て志野流の香道に稱譽あり。十返舍の號は黃熟香の十返をとりて然よぶといへり。其頃のことに

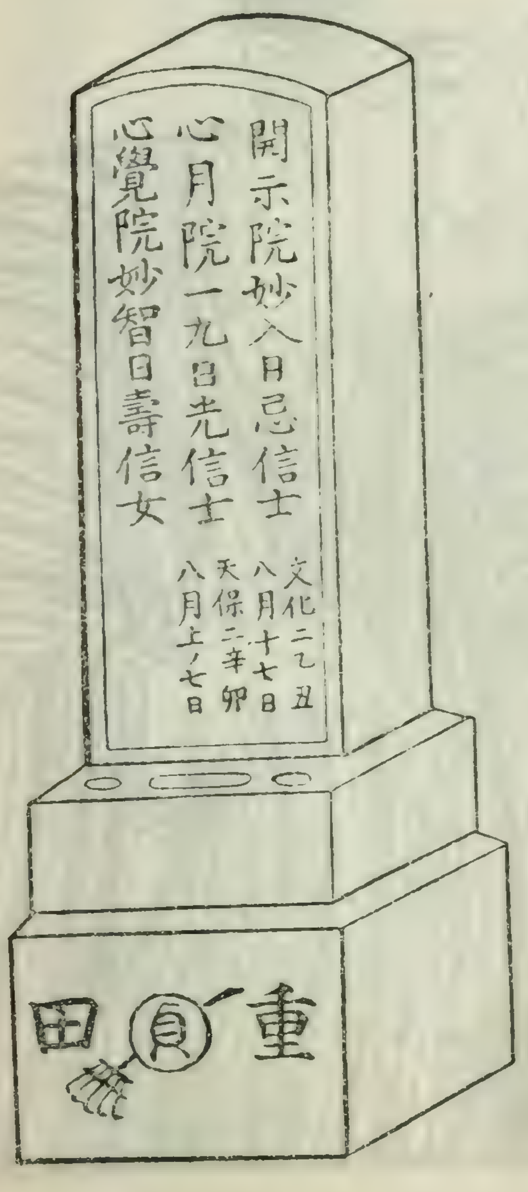

十返舎一九肖像

や。並木千柳、若竹笛躬と倶に木下蔭の繰戯曲を編述した　よし、後故有て自ら香道に遊ぶ事を禁ず。寛政六寅年復び東都に來て、始て稗史兩三部を著述して、耕雲堂が梓に上せて發市せり。

○丈朝云、木下蔭桶狭間合戰作者連名に若竹躬笛、近松餘七、並木千柳、此餘七とあるが一九なるべし。活東子云然り。

○天保二年辛卯八月病て歿す。淺草土富店善龍寺、〔割註〕俗にぬけ寺と云。〕地中の東陽院に葬る。〔割註〕墓所は惣亂塔、裏門方より二側目にて東三軒目。

辭世　此世をばどりやおいとまにせん香とともにつひには灰左様なら　十返舎一九



○文化十癸酉年、予稗史通と標題して、戯作者浮世畫師の小傳ならびに印譜自筆の摸（ウツシ）なんど書集て二卷となし、人に見すべき心もなく秘置しが、ある日吾師墨亭月麿に密に見せしを、先醒笑て曰、足下素人のうへにしては能こそ書集られたれ。誤り事多かれども、こはその筈なりとて、邊近く住たる長亭五葉をまねきて、拙著をもてさし示さるゝに、長亭感ずること甚しく、一覽の上、その身は小傳なる印譜の所へ所藏の印をこと〴〵く押などせり。其より彼方こなたと人手に

傳へ〳〵て、式亭をはじめ或は筆耕晋米なども一覧するに至りて、終に十返舍もかの拙著を披閲せりとぞ。然るに卷中なる大人が小傳に、或人の曰、一九子漂泊のうち、寺の門番にもなりたることありと書るを、實に然ること有て世に知らしむるに似たるを惡める歟。また實事ならざることを書乘せて露にするに似たるを惡る歟。心中に此事を怒りふくみ居たりとおぼえて、翌年甲戌の春師墨亭が書畫會筵を油町北新道若菜屋の樓上に開かれし節、十返舍は紺屋町なる一丸とかねて親しかりしかば、一丸が亡妻の一周忌の佛事に招れ、酩酊の歸路師が會席へ參りしが、豫て予とは師が許にて出會し、去年酉の春より知己なりければ、予を傍にまねきて曰、卒爾ながらさきつころ貴君が書なせるものを見たるに、僕の小傳に寺の門番にもなりたることありと見えたるが、その事はいかなる人より傳へ聞て書れしかと問ふ。予はさるかたより聞て、その人の名は聢かに知居たれども、斯問かけられては、後いかなる事をいひ出さるゝも知ざれば、たゞ世の浮說を聞たるまゝに書たりと答ふ。其時十返舍は少しく氣色を變て云やう、世の浮說を擧て世上へ弘むるは迷惑なり。僕は戲作をもて業とす。さることを弘められては生業の妨ともなりぬれば、貴君が上をも惡ざまに書なして俸祿にも拘はるべき程の事を書んと思へり。その心を得賜へといふ。予答て云ふ、いわるゝ所理にはあれども、拙著は已れ一個にて樂み、秘篋にのみ藏めて人に見せんとの業にも非ず。又梓に上て世に公にするにもあらぬ隨筆の書ものなり。もとより家々に秘する隨筆には、高貴縉紳家の忌諱の事をも書留おくは尋常の事なり。こゝをもて何憚る事なく書とめしなり。こたび密に師に見せたるより漏て、儞(ナンヂ)が看にもあづかりしなれば、自今猥に他人には見すまじければ宥し賜へかしと詫つれども、一九は醉を帶びたるこゑにて、高聲に以前の條をもて繰回々々云ひ罵るにぞ、傍の人も氣の毒げに集ひ合、兎角あつかひぬれど、猶云やまず。予も相手は醉酣のうへなり、何時迄も果しなければ、後日の論に及ぶに如じと思へば、當日の會主なる師に、此よしを微細に告しかば、おのれにまかせ儞は歸るべしといふによりて、予は歸りぬ。そのゝち師月麿、十返舍に對ひて、かねて信友な

るに、さる道理を云んとならば、平生の上にあらんを、吾會席にもて出て云ひ罵るはおとなしからず。吾にも遺恨を含よしの有てする事なるやなど腹立ていふを、日來むつまじき朋友の人々とにかくなだめて、その日の事は納りしとぞ。さるに十返舎と予との間、そのまゝになしおきがたく、幸三五日を隔て、予が同門式麿が書畫の會ありければ、此日たがひに出席して和睦をすることそよからめと、式麿がはからひにて、自ら予へ方へ訪來て、いぬる日の事は十返舎もまつたく醉中の事なれば、聊まをし過たる事もあれば、御心にさへられず、異日在下の催しの日に和睦して賜へかし。師をはじめとして餘の朋友も、とかくその事のみ願ふなりと懇々いひなだむるにぞ、予は素より事を好むにあらねば、ともかくもよきに計ひ賜へと答て、そのゝち式麿が會筵に出て、列席に於て十返舎を專として、其餘この事にかゝはりたる人々の集會で、和睦の盃をめぐらして終に波風は納りぬ。彼の稗史通二卷は墨亭に置たるを、師より奥の八戸侯の御隱居畔李君へ奉れり。これ復び右のごとき障れる事のあらんをおもひて也。

○文化十一甲戌年發市せる十返舎が著したる膝栗毛發端とよぶ一冊は、錦森堂、永壽堂、文金堂らが梓行するところ也。右の卷中口繪半丁にかく有り。

　近頃雪麿なるもの稗史通と題して、新古稗史の作名畫工の出所事跡を記したるを閲したるに、悉く齟齬して實に勞して功なき稗史不通の書といふべし。予が膝栗毛も八編にして終る。

とのみ雪麿が書たるは續編の出たる事をしらざるべし。既に當年續五編に至れば、其ことわりをしるしぬ。

また同年同じ人の撰たる續膝栗毛五編(一冊)下の卷、卷末に書賈が業のごとくとりなして、十返舎が小傳を作りたる文の尾に、

　或人稗史通と表題して、新古稗史の作名畫工の出所事蹟等を摸寫せしを閲したるに、一九生の事に至り甚だ謬誤あり。依て是を誌し畢。

西村永壽堂識とあり

おのれつら／＼按るに、續膝栗毛五編ならびに同發端ともに、發行の前年癸酉年草稿成して、適拙著の稗史通を十返舍の披閲せる頃にて憤念盛なるをりなれば、斯のごときこともかきたるならん。されば翌年前條のごとき風波おこりて、とかく有ての後はいと睦しく成たるもおかしく、予もなか／＼に是によりて粗人に名も知られたれば、右兩編に記したる事を削去すべき念もなくてやみつ。

○例の書畫帖に大人の染筆を乞たるに

陰陽のふたはしらといへども、陽には柱ありて陰には柱なし。川柳點の柳だるに、

　神子を見てふとしくたてる宮ばしら

といへる是れ陽のはしらなり。されどこゝには

　みやしろの大黑ばしらなりけらし大あなむちの神子の愛敬

常に口吟する所のざれ歌、かつは發句の一つ二つをのす。

戀　はづかしや君にふらるゝ錫杖のかたちよりして生れたるみは

近戀　板塀のうちみるばかり近けれど釘のおれなる文もやられず

吉例春興　賣ものにかざれる花の枝ぶりもつくり下手なる梅の赤本

柳の畫に　蓬萊の玉柳とて地にとゞく枝は梅をもはらひこそすれ

蘿蔔の畫に　唐にては人參といふもことはりや是大根のくすりなりけり

　天の原ふりさけ見れば目のうへにかゝる霞や遠山の眉

　ものひとへへだてゝきけば十七の鬼のひくとは見えぬ琴の音

　ことはざに酒はうれひの玉はゝきはくきでものむ跡引上戸

鉢たゝきの贊　是も身をたつるためとてすぎはひに茶せんをうりて空也寺の僧

大原女の贊　烏羽玉の髮の黑木に大原女のさしたる梅は花のかんざし

狐拳の畫の賛　生酔が三人よればさはがしくあたりかまはぬてつぱうのけん

遊女の賛　どなたへもたり〳〵のたちすがた

○柳亭種彦

姓源、名知久、愛雀軒と號し、足薪翁と號す。又修紫樓の號あるは、田舍源氏大に行はれたるによりて也。通稱高屋彦四郎といふ。麾下にに食祿二百俵を賜はる。原横手氏にして甲州の士也。淺草堀田原に第宅あり。初め文晁が門に入て漢畫を學び、後俳諧の古調を好み、また川柳が俳風を嗜みて秀吟多し。天保十三壬寅年七月十八日卒す。行年六十、赤坂一ツ木平河山淨土寺に葬る。

法號　芳寛院勇譽心禪居士

辭世　ちるものにさだまる秋の柳かな

源氏の人々のうせ賜ひしも大かた秋なりとありて

我も秋六十帖をなごりかな

○柳亭種彦と戯名せしは、幼きころ癇氣强く、とにかく腹たち怒りしかば、尊父の教訓して一句を作らる。

風は天窓はらはれて睡る柳哉

と、是より身を愼みしとぞ。又天明風の狂歌を嗜みて、狂名を柳の風成とし、後改て心の種俊とす。是大和歌は人の心を種としていへるをとりて然せしよし、其頃下谷邊に三彦と唱へらるゝ〔割註〕他二人未レ知。」者あり、種彦先生も其壹人にて、初め柳の風成といへるによりて柳亭と號す。俗名を彦四郎といへるをもて、種としの彦〳〵とよばるゝゆゑ、俊の字をはぶきて種彦と戯名を付られしと云ふ。又三ツ彦の印は、先生壯年の頃は戯場を好て、殊に故人の坂東秀佳〔割註〕二代目三津五郎、今三津五郎父也。」の藝をよく寫され、素人狂言又茶番狂言所作事抔にも、三津五郎其まゝに見るがごとくなる故、茶番連


柳亭種彥肖像

中にて三ツ彥〱といひけるをもて、如レ斯戯印を用ひし也。一時先生の嘲に戯作者も、俳優者も、傾城に齊し。譬へばけいせいは顏のみ美しとて、張も意氣地もなく、また髪の餝り衣裳の綺羅なければ客つかず。又戯子も男つきよく藝も未熟ならずとても、是も衣裳の綺羅と、諸人愛敬を専らとせざれば見物よろこばず。人にくみて最負の客なし。此理に似て戯作者も全體上手にて綴るといへども、拙き畫工にゑがゝれ、惡き彫工の手にかゝり、外題ともに惡しければ、榮なくして賣れず。當りをとる事かたかるべし。されど後に上手と人にいはるゝものは、未熟なる初より其器あらはるゝ也。爰に一ツの噺あり。昔し名人とよばれし俳優人元祖中村仲藏、〔割註〕秀鶴後中山小十郎。〕初は藝道もみじゆくにて、俗に云はい〱にて、顏を赤く隈どり、藏衣裳の素袍にて並び大名に出しが、粘強き麻素袍なれば、二日三日も着るにのりけおちて皺多く、見苦しきを樂屋に入て後、外の同位の役者は人手にのみかけて疊みもやらず、其まゝに衣裳棚へあげ置で、又明日其場に來たれば、前の素袍を着て出るゆゑに、いと見苦しかりしに、秀鶴一人りは衣裳を人手にかけず。自分其衣裳を水のしをして疊み、日毎にかくのごとく丁寧になしおきしかば、翌日着て舞臺へ出て、列座の戯子と立ならびし時に、一際勝れて立派に、いかにも上手らしく見え、看官の目にもたちければ、戯場中の役人も目をつけて、彼は一ト器量あるもの也。後の狂言には夫々の役相當ならんと、其役をさせて試んと、衆の中より抽て役割を附たるに、案に違はず其役をも相應に勤めたれば、次第々々によき役を勤め位も昇り、終に名人となり、いまにその譽れを殘せり。天下に名を轟かす者は、初より其器量衆にこえたり。戯作も此秀鶴が心懸ケにて、常に心を用ひ一句一章たりともおろそかに書まじきもの也。丁寧反復して、つゞまやかに筋の通るやうに書たけれ。書はりにも工風をこらすべきかと、予に物語られき。此事は墨川亭にも噺されしとぞ。又常に用る所の硯は柿の形したるなり。其蓋に自詠の狂歌を彫らせたり。其歌

名人になれ〱柿とおもへどもとにかくへたははなれざりけり


烏亭焉馬肖像

○烏亭焉馬

中村氏、名英祝、號を談洲樓といひ、號を桃栗山人、柿發齋といふ。狂歌に野見てうなごんすみかねの名あり。和泉屋和助と稱して、本所相生町に居住す。原大工の棟梁なり。戲作の古老にして、安永、天明、寛政年間まで一枚摺物、或は洒落本、又は淨るりの作あり。且久しく廢れたる落し咄しを再興し、又戲場に遊びて狂言の作を補助せり。草ざうしを著作せしは寛政五年が初也とぞ。文政五壬午年六月二日歿す。年八十、北本所表町牛寶山最勝寺(天台宗)に葬る。

法號　三樂院壽德焉馬

辭世　おもひきやかたみの花を今ぞしる□し□の敷島の道

著述　歌舞妓年代記。(割註)半紙本五編迄廿冊

(岡　清兵衛

和泉太夫の淨瑠理作者也。「黄昏日記」(割註)寶曆十年紀兎著。」に曰、岡清兵衛は金平本の作者也とあり。「故郷歸の江戸ばなし」(割註)貞享十四年印本六之卷上十丁目ニ曰。」上略、扨又和泉太夫が淨瑠理は、岡清兵衛と云もの作る。いつぞの程にか。金時が子を金平也と云廣め、渡邊のつなが子をたけつなと云はやらかしてより、むかしがたりに云つたへたるべんけい、時宗、あさいなゝど、彼金平が片手にもたらぬやうにきこえければ、くわいりよくらんじんをこのものどもは、金平をかたるをきゝてそばにてこぶしをにぎりき。はをかみてよろこぶ程に、金平といふことば三歳のわらべ迄もしりて、日本國へひろまりたり。彼金平作りの清兵衛は、生れつき才發にして物覺つよく、太平記、盛衰記、あづまかゞみなどをそらにおぼえ、儒釋歌道をも少づゝはこゝろ見ければ、古事來歷を引事得もの也とかや。此清兵衛が近頃病死したるときゝて、哀にもをしくもおもひければ、「金平を作り岡清病死して惜や思へば學もたけつな。」斯あれば貞享年中に死去せしと見えたり。此人の墓所いまだ不レ知。金平淨瑠理本予が文

金平糊、金平牛房などいへるは皆強しといふ意なるべし。

り。今に金平の名のみ殘りしは、晒木綿足袋底を用るをしかいひ、又金平煙草あり。今はなし。又金平

も享保より寶暦の頃迄は、赤本黑本にも出板し、金平ぶしといふ唱歌などありしが、天明の頃より絕た

節廢りし處へ、近松門左衛門が名作出て、其頃の人氣にかなひ、此が爲に古淨るりは皆廢れり。然れど

此岡清兵衛死去の後は、新作の上るりも無くて、有きたりの狂言而已興行せしならん。それ故追々金平

庫に卅部程あり。

○風來山人

名は國倫、字は士彝、鳩溪と號し、紙鳶堂、天竺老人と戲號す。通稱を平賀源内といふ。初め森羅萬象といひしが、後其號を門人森島中良(竹杖爲輕)に讓る。又院本に福內鬼外の名あり、讃岐の人にして物産の學を好み、江戸に來りて官醫田村元雄を師とし學びて、出藍の譽れ高し。且火浣布を製し、ヱレキテルを造り、風砲風船なども作る。精好よく人の知る所也。戲作はたゞ一時の戲れなりとぞ。安永八己亥十二月十八日歿すといふ。橋場の總泉寺に墓あり。友人杉田元伯建之。

法號　智見靈雄

著述　風來六部集　根なし草　同後編
　　　志道軒傳　菩提樹の辨　仙術金のなる木
　　　甦腹靑大通　飛花落葉　男色細見菊の園

此餘畧す。

院本著述　神靈矢口の渡　荒魂新田の神德　弓勢知勇の湊
　　　忠臣いろは實記　前太平古跡鑑　源氏大草紙
　　　嫩檜葉相生源氏　實生源氏金王櫻　長枕褥合戰

〇戀川春町

姓は源、名は格、通稱を倉橋壽平といふ。狂歌を好みて、其名を酒上の不埒、又壽山人と號す。戯作戀川春町と名のる。駿州小島侯の家臣にして、小石川春日町に邸あり。戀川といふは住居する地名による也。繪を鳥山石燕に學びて、自畫作の冊子多し。他の冊子をも畫けり、一說に、勝川春章に學ぶともいふ。安永四未年の著述「金銀先生榮花の夢」〔二冊〕と題號し、邯鄲の趣向大に行れ、同五申年「高慢齋行脚日記」、是又大當りにて、寶曆以來の草紙は爰に至りて賣れず。是より春町の名大に鳴る。寛政元酉年七月七日歿す。四ツ谷新宿裏通り淨光寺〔割註〕大宗寺横町。」に葬る。〔割註〕本堂前六地藏のならびに墓あり。」

法名　寂靜院廓譽湛水

墓の左傍に辭世の語あり、曰、

生涯苦樂四十六年、即今脫却浩然歸天。

著述、〔割註〕稗史當り物。」〇花鳥かくれん坊、〔割註〕文軒先生云、此書は自墮落先生の傳に擬して作れり。」

〇三升增鱗のはじめ　〇鼻峯高慢男　〇三幅對紫曾我

〇間違曲輪遊　〇芋太郎屁日記ばなし　〇詞戰あらしいの根

〔割註〕鯛の味噌づ四方の赤大木の切口たいの根ときたなどゝいふ口合を戯作せし草紙也。」

〇夷大黑若氣の誤　〇酒天寶易の占

此餘は略す。〔割註〕卷中に、其頃はやりし朝鮮のこうけいしフクリンタフなどありて、考になる事多し。」

又酒落本あり。〇無賴通說法、〔割註〕其頃の遊びのこんたんを面白く書あらはせり。」

〇男女風俗通、［割註］男女の衣類、小道具、髪の風、貴賤夫々に畫作せり。其頃の風俗を今見るが如し。」

〇芝　全　交

通稱山本藤十郎といふ。大藏流の狂言師也。西ノ久保神谷町に住居す。寛政五癸丑年病て歿す。戯作上手にして尤當りもの多し。其中にも能く人の知れるは、

〇御手料理御知而已大悲の千錄本（一冊五丁袋入）〇合羽大佛緣記（半紙本）此書より戯名大に發す。天明辛丑年より開作歟。

〇煙競蕎麥屋之新　〇南無大通佛開帳　〇通の一聲女暫

是等初作なるべし。

〇喜　三　二

秋田侯の士、通稱平澤平格といひ、明誠堂と號す。戯名喜三二、又龜山人といふ。狂歌に手柄の岡持の名あり。俳諧に月成、狂詩に韓長齡、また天壽といふ。晩年仕を辭して剃髮して後、苦なき人となりしと戯れて自ら平荷と名づく。喜三二の稱號は芍藥亭に讓らる。文化十癸酉五月二十日歿す。行年七十九。深川淨心寺に墓有。

著述　〇古朽木［割註］半紙本五冊春町畫。靜觀坊が下手談義の意を取りて、風來が根なし草の文體にならへり。」

〇萬　象

姓は中原、名は中良、字は虞臣、號桂林、初稱森島甫齋といふ。桂川甫周法眼の舍弟也。天明四年より稗史の作あり、平賀源内の門人にして、森羅萬象の號を讓らる。又二代目風來山人と號し、天竺老人とも號す。狂名を竹杖の爲輕といふ。蘭學の業餘已にまさるの戯作をなす。悉皆巧手にして師の風來と伯

仲せり。

著述　○田舍芝居（小本一冊　妙作也）　○太平樂卷物（同上）

○唐　來　三　和

加藤氏、伊豆亭と號す。本所松井町の妓院にて和泉屋源藏と稱す。或人云原武家なりしが、書肆蔦屋重三郎が弟分になりて彼家へ入夫せしといふ。歿年未ㇾ知。深川淨心寺に墓あり。

辭世　かりの世の地水火風をもどすなりこれで五輪のさしひきはなし

著述　○善惡邪正大勘定　○忠臣一心の藏　○通神孔釋三教色（小本一冊）　○和唐珍解（同上）

○通　　笑

市場氏、名寧一、字子彦、橘雫は俳號也。俗稱小平二といふ。通油町に住居し、一生無妻にして市中の仙たり。好で稗史を作らる。安永年中より寬政の初迄若干卷を著作す。其趣意教喩を以て專とす。故に世の人教訓の通笑といふ。文化九壬申年八月廿七日歿す。行年七十四。淺草說言寺に葬る。

法名　覺法全心

著述　文朝補　○御物好茶臼藝　○通駕籠奢斗掛　○女　天　狗　○一升酒底拔男　○芝居好めくら仙人め明仙人　○にくまれ口　○御代參牛時詣

○四　方　山　人

名覃、字子耜、南畝と號し、又蜀山と號す。杏花園、遠櫻山人等は別號也。通名太田七左衞門（初直次郎）といふ。牛込に居住し、後駿河臺に移る。初め狂名を四方赤人といひ、後赤良と改む。唐衣橘州と共に狂歌の旗上して海內を風靡す。文政六癸未年四月六日歿。年七十五。白山本然寺に葬る。

法名　杏花園心逸日休居士

辭世　時鳥なきつるかた身初松魚春と夏との入相のかね

著述　かさね〴〵めでたい春參な
　禅史の作猶あり。追て記すべし。
　○唐衣橘洲
名は恭從、字温之、後謙之と改む。醉竹庵と號す。通稱小島源之助といふ。小石川御箪笥町に住居す。田安家の小十人也。初め內山椿軒、〔割註〕名淳、時稱傳三。」に就て詩を賦し歌を詠ず。後、四方赤良と共に狂歌を中興して、其名一時に鳴る。享和二壬戌年七月十八日歿す。〔割註〕寛保三癸亥年十二月生る。」赤坂一ツ木淨土寺に葬る。
法號　心眼院開譽得聞居士
著述　若葉集。〔割註〕天明中狂歌集二冊、江戸にて狂歌集板本の始也。」
　○朱樂菅江
名景貫、初名景基、字道甫、淮南堂と號す。通稱山崎郷之助といひて、四ツ谷廿騎町に住める御先手與力也。初め漢學及和歌を內山淳時に學ぶ。後、赤良、橘洲に次で、狂歌をもて名聲籍甚たり。元文五申年十月廿四日に生れ、寛政十二申年十二月十二日に歿す。青山久保町青原禪寺に葬る。
法號　運光院泰安道久居士
辭世　執着の心や娑婆に殘るらむよしのゝ櫻さらしなの月
著述　〔大抵御覽。〔割註〕中洲に町家出來し時の洒落本也。小本壹冊。」
　○故混馬鹿集。〔割註〕狂歌集也。半紙二冊。」
　○平秩東作
名嘉穗、號東蒙山人、通稱稻毛屋金右衛門といふ。四ツ谷內藤新宿に住して煙草を鬻て業とす。狂歌の古老なり。寛政元年七月七日歿す。マンヂウ谷善慶寺に葬る。

著述　水のゆくへ（半紙本五冊）

〇六樹園

名雅望、字子相、五老と號し、又蛾術齋と號す。通稱石川五郎兵衛と云。狂名を宿屋飯盛となのる。小傳馬町三丁目の旅人宿糠屋七兵衛也。〔割註〕畫家石川豐信が男、故ありて四ツ谷内藤新宿へ移住し、後ち靈巖島東湊町中村屋梅太郎。〔割註〕清澄が男六樹園孫也。〕が家に寓居す。六樹園の號は往昔小傳馬町三丁目を六本木といへるによりてしか名付られたる也。文政十一年眞顏と共に京都より宗匠號免許あり。柳橋大のしにて其號を披露せり。文政十三庚寅年閏三月廿四日病て歿す。行年七十八。淺草黒船町池上山正覺寺（カヤ寺）地中哲相院へ葬る。男清澄（號塵外樓）墳墓の傍に碑を建つ。其文に曰。

君諱雅望。字子相。姓石川氏。號六樹園。又號五老齋。名蛾術。江戸人。君天資聰敏。才藻優麗。學莫所不窺。尤專思和歌格調俊邁。詞彩絢爛。一時專門名家。皆出於其下風。四方贄謁乞業者不可勝數。海内推之爲一世宗盟焉。其所著之書數十種。正梓希世。如源注餘滴。雅言集覽。所尤致思也。足以觀其洽聞博覽之學。筆鋒超倫之文矣。文政庚寅閏三月二十四日罹病而卒。享年七十八。葬於淺草正覺寺子院哲相。法諡曰。

六樹園院臺譽五老居士。京師縉紳之家。嘗覽君之著感嘆不措。授以宗匠之號。叙之法眼。歿之後　宣文始到于東都。識者憾焉。嗣子清澄謹乞余文勒石建之墓門。余與君相知者久矣。義不可辭也。系以銘。銘曰。

于嗟乎。死而朽者形骸。不可澌滅者名。一世執文騷之柄。千載享法眼之榮。淺艸山々靜地靜。以固其塋。

孝子石川清澄謹建

文政十三年寅三月二十四日　　吉田勇雄識并書

著述　〇飛驒匠物語（半紙本五冊北齋畫）　〇近江縣物語（半紙本五冊重政畫）
〇通俗排悶錄（十二冊英泉）　〇しみのすみか物語　〇都の手ぶり（大本一冊）
〇梅が枝物語（同上）　〇あづまなまり（半紙本一冊狂文集也）

〇戀川好町

紀氏、名眞顏、狂歌堂と號し、又四方歌垣と號す。通稱を北川嘉兵衞といふ。數寄屋河岸に住して家主なり。世々汁粉屋を營て業とせしが、「割註」今鯨汁を賣れる家あり。其跡なり。」竟に廢す。初戀川春町に就て稗史を作る。故に師の名に擬へて好町と號す。寛政年中鹿杖山人と署名して青本の作あり。後四方赤良に狂歌を學びて、其名を鹿津部眞顏といふ。後年俳諧歌を中興して大に行はる。因て俳諧歌場の號あり。又茶番をよくして好屋の翁といふ。景物を段がへしにつかふ事は、此翁より始るといへり。文政十一年子五月二條家より宗匠號を免許せられ、幷に折烏帽子葛袴を給はる。文政十二乙丑年六月六日病て歿す。年七十七。小石川三藐坂極樂水上光圓寺に葬る。

法號　俳諧歌場壽譽福阿眞顏
辭世　味く喰ひ暖かく着て何不足七十七南無阿彌陀佛
著述　〇元利安賣鋸商　〇長者のまゝくはふ
是は天明五乙丑年初刊行
〇延葉當字之湯書袋入　〇金太郎桃太郎むかし／＼噺問屋袋入

右は戀川好町作とあり。何れも妙作。
〇大仕掛三界曾我「割註」寛政五癸丑年秩父屋板、豐國畫、鹿杖山人としるして序文に眞顏の名あり。」

狂歌堂常に六樹園と其中むつましからず。ときに文化十四丁丑年中村座顏見世狂言大名題看板「花の雪

和合太平記」に、故坂東三津五郎、岩井杜若、是迄其中不和にて、文化八辛未年より當年七ヶ年の間一座の勤めなかりし處、雙方の連中より進めにより、終に熟談整ひ一座の勤となる。故に大名題に和合の二字を加へしと見えたり。〔割註〕是もむかしの海老藏と宗十郎の例を引しなるべし。」其節蜀山人其狂言見物のをりから、飯盛、眞顔常々其中睦からぬを風と思ひ出し、彼方へ使をはせしに、兩人は何心なく戯場に來れるに、山人申けるは、秀佳、杜若の中直より思ひ付、其方達も常々其中宜しからざれば、今日より以前の如く水魚の交りにいたすべしと、和睦の盃事ありしとぞ。其節互によめる狂歌、

是までのだんまりの幕引かへし氣も相肩のもとの棒組　眞顔

膝とひざよい中むらの下棧敷二けんつゞきのへだてだになし　飯盛

○紀定丸

初號野原の雲輔といひ、通稱を吉見儀助といふ。牛込豆腐やしきに住す。狂歌を詠じて其名高し。草雙紙の作は天明四年、同五年兩年のみ。二三部あり。

○活東子嘗聞表御右筆也。天保年間齡八十餘にて歿せりと。

辭世　狂歌師もけふかあすかとなりにけり紀の定丸もさだめなき世に

○蔦唐丸

喜多川氏（本姓丸山）名柯理、號を耕書堂といひ、通稱を蔦屋重三郎といふ。初め吉原大門口に住して吉原細見を鬻ぐ。後油町へ移りて書肆となれり。逸人畫史に云、寛政九年巳三月六日、行年四十八歳。山谷正法寺に葬る。碑文あり。石川五老が撰なり。

著述　○本樹に眞猿浮氣噺

○雪麿云、唐丸は頗る俠氣ありっ故に文才ある者の若氣にて放蕩なるをも荷擔し、又食客となして財の散ずるを厭はざれば、是がために身をたて名をなせし人々あり。蜀山老翁、うた麿、馬琴抔其中也。又已

が名顯れたる其人々によりてなりとぞ。寛政九年六月三日歿す。

○黒　鳶　式　部

山東京傳妹なり。狂歌を詠じ、戯作の草紙二三部あり。天命の末早世す。

著述　○人不知思染井　　○三國一大通本地

○黒　　木

北齋翁(爲一)云、京傳方に寓居せし黒川人といふものなり。學者にて京傳の片腕なるものゝよし、後東海道三島宿に住居し頓死すといふ。

著述　○女荘子小蝶夢〔割註〕天明三年京傳序文。」出板は此一部のみ歟。

○歸　　橋

蓬莱山人と號す。高崎侯の家臣なり。俗稱河野某、安永年中より洒落本の作に當り多し。草雙紙は天明年中に五六部もあるべし。其後主君より戯作を禁ぜらると云ふ。

○田　螺　金　魚

神田、町醫の子なり。

著述　○傾城虎之巻と云小冊大に行れたり。草雙紙の作見えず。　○一事千金(小本一冊)

○楚　満　人

南仙笑と號す。通稱楠彦太郎と云て、芝宇田川町の書肆なり。敵討の草紙を中興して其名を發す。文化四丁卯年三月九日歿す。西の窪心光院に葬る。

法號　只但受樂翁居士

著述、丈啣楠　　○新錢戯樂通寶

○窪　田　俊　満

尙左堂と號し、安兵衛と稱す。作名南陀伽紫蘭といふ。神田富松町に住居す。狂歌をよくし畫をもよくす。鳥一翁云、回向院前猫茶屋の事を戯作して、「通りけり猫のわざくれ」といへる草雙紙あるよし。

○振　鷺　亭

猪瀬氏、名貞居、通稱與兵衛と云ふ。本船町の家主也。初め濱町に住居す。畫は鳥居淸長に學ぶ、後年流浪して川崎在大師河原に僑居して手跡持南して業とせしが、沈醉の上堰に落て歿すと云。

著述　○自　惚　鑑（小本、天明九板）　○客衆一の華表（小本）　○意　妓　之　口（小本）
○翁　會　我（中本）　○見通し三世相（翁後編中本）
○伊呂波醉語傳　○門　雅　話（中本）
○千代嚢姬七變化物語（五冊北馬畫、當り讀本なり）　○春　夏　秋　冬（五冊、豐國畫）
○氷　改　妹　背　山（六冊北齋）　○俊　德　丸（五冊、北馬畫）
○復讐猫股屋敷（中冊、北馬畫、文化五）　○今西行東下り（二）
○成田道中金駒（二）　○千　社　詣　○巳　ノ　日　待（二）
（振鷺亭咄日記（小）　○玉　の　蝶（小）　○格　子　戯　語（小本）

○梅　暮　里　谷　我

拜亭と號す。久留里侯の藩士にて、〔割註〕本所埋堀邸住居、大目附役を勤と云。〕通稱反町與左衛門、〔割註〕初三郎助と云。

著述　○金　花　夕　映（五北嵩畫、文化）　○山　莊　太　夫（五、北齋）　○白　狐　通
○甲　子　夜　話　○傾　城　買　二　筋　道　○同二編廓之癖
○同三編宵之程　○契情買中夢之盜汗（享和）　○同妓情返夢解
○江戶氣質浪花櫻（英泉、文政五）　○契　情　買　言　鳥　○同二編廓之櫻

○貞操小笹の雪(北嵩、文化五)

○櫻川杜芳

岸田氏、俳諧をもよくして言葉綾知といふ。芝神明前に住す。

著述　大通記　こぢつけ千本櫻

○樹下石上

市中山人と號す。羽州山形の藩士にして梶原五郎兵衛と云ふ。作風は楚満人に似たり。後年目出度ことのみを著述す。子孫を梶原平左衛門といふ。

○鬼武

感和亭と號す。(初號曼亭)通稱前野曼助といひ、或藩士なりとぞ。算術に通じ、撃劍に達す。後仕へを辭して市井に隱れて戯作を以て業とす。畫は寫山翁に學ぶと自ら語る。初め淺草姥ケ池近邊に住居し後新寺町へ移る。墨川亭云、寛政中飯田町に居し歟。作名の傍に飯顆山とあり。

著述　○自來也物語(讀本十冊、北馬畫)大に行はる。文化四卯年大坂にて歌舞妓狂言に仕組て興行せしに古今大當り也。〔割註〕三代目市川團藏、自來也の役大出來。〕是一世の譽れといふべし。且義太夫の一節にも殘れり。

○天城錦 北馬畫)　○函嶺復讐談(二中北馬畫)

○舊觀帖〔割註〕文化二初編三、同三寅二編三、喜長畫、村田板、三編十返舍と合作。」

○異療寐剿種〔割註〕享和二酉年是草雙紙の初作にて十返舍一九畫なり。三冊。」

○愼道迷盡誌(同三亥、春亭畫、三冊)　○三國和漢蘭物語

○鳴呼唇氣樓(三山口板)　○敵打盤手躑躅(文化元子年、三冊)

○返咲八重之仇討(文化二丑、此作より感和亭と改。)　○悟迷惑心之鬼武(二冊、文化二)

○報仇奇説響數千里虎尾峠(六冊)　○四十八手後の卷京傳居士談(割註)馬鹿山人作、文化十四年か。十五年の新板なるべし。卷中に假宅の事あり、(文化十二亥五月三日新吉原燒失す。)此年山東京傳九月死去す。」

此卷中尾上伊太八ト山本京傳出て教訓なり。

其條に京傳わたくしもあちらへいつておほきに心ぼそかつたが、淺草の鬼武竹の塚東子といふものが、この頃あつちへきて又はなせやす。

鬼武東子去年古人となるとあれば、歿年は文化十四五年のうちなるべし。

○黑川亭所藏の戲作者、其外諸先生の書畫帖に牡丹のかたを自ら畫きて、其贊に、

福牡丹團十郎が株の紋あゝつがもない花の親玉

○二代目喜三二

姓菅原、名長根、芍藥亭と號す。初め潜亭といひ、三橋といひ、狂名を淺黄裏成といふ。後芍藥亭長根と署名す。本阿彌光悦七世の孫にして、下谷三枚橋邊に住居す。故に三橋の號あり。戲號喜三二の名は手柄岡持より讓らる。又道稱にも用ふ。世に二代目の三橋喜三二とよぶ。

○竹塚東子

武州足立郡竹塚の(千住のサキ)農夫といふ。文化十四丑十五寅、(割註)兩年の内の死去なるべし。」高慢狂訓至無我人鼻神、(割註)三冊、寛政三辛亥年初作也。然し其終りに京傳作とあり。自分の名は惣ものに竹塚翁(東子述)とあり。狂歌を持し人物京傳也。」

政よしの畫

畫姿にせしは高名をかりて多く賣ん板元の手管なるべし。

われなくば餘の木にあらぬ靑柳のいとすなほなるふりを見ならへ

とあり。是より享和元辛酉年迄著述を見ず。

○雲飛二代羽衣（二冊、享和元ツルキ板）　○はしかの戯文（同三癸亥）
○敵打名譽一文字（三、文化元甲子、豐廣畫）　○敵討岩手の梅枝（前三ツルキ後ノ三、文化二丑）
○父母敵現腹鼓（前三後三、文化二）　○他力之燒繼（前後、文化三寅）
○豐のいろは（國安畫、文化九）　○復讐浮木之編背（五、國長、文化五）
○滑稽美談尾笑草（三、美丸、文化八）

○內田新好（天明八）

墨川亭日魚堂と號す。印章に內田とあり。氏なるべし。我師墨亭云、一に白銀臺一丸といひけるよし、また新江と作名を下したるあり。別人か否を不レ知。先年小柳町に內魚堂といふ表札ある家を見し事あり。彼所に住居せしか。はた外人なるかといへり。

壽阿彌老云、內田屋新太郎と云ふ。表茅場町に住居し、帆布艫木帆綱の類を鬻ぐ大家なりしが、零落して後、小林筑後（御用達）の養子と成しが、離緣して本所石原町に住し、俳諧宗匠となりて魚道（又堂片書）と改む。其後鹿島屋へ引取られ病死すと云。（其年月未レ知。）

著述　○振袖心中

○櫻川慈悲成

芝樂亭と號す。通稱大助といふ。或書に錺屋大五郎とあり、芝宇田川町に住居す。岸田杜芳門人也。天明年間より戯作をはじむ。青木落語の小本多く餘り行はれず。又茶番狂言を好みて高名也。寛政年中世に行れし一枚摺といふ戯作に當りあり。其一二を爰にしるす。

○口合兄弟　○絫升增つなぎ　○嘘字盡し（此餘略）

（墨川亭云、初號親の慈悲成といふ。櫻川杜芳が門に出づ。戯作狂歌の道にあそぶ事久し。傍ら茶事をよ

くし、諸侯方より召るゝ事まゝあり。又書をよくす。故焉馬翁と倶に中興せし落語の祖なり。五代目白猿及七代目白猿と友たり。芝欒亭の號はそれらに據りたるなるべし。

或人云、初め鞘師なりしが、後落噺をして業とせしといへり。

著述〔持來餅者餅屋　〇天筆阿房樂

〇二代目萬象

森羅亭又南湖子と號す。初號二代目竹杖爲輕、また七珍萬寶と號す。通稱福島屋仁左衞門と云。櫻田善右衞門町菓子屋也。天保二辛卯年七月廿六日歿す。年七十。西本願寺中妙延寺に葬る。

法號　釋玄運信士

著述

〇活東子云、萬象孫あり、樋口氏名晃一露窓と號す。幼名德次郎といひ、後相續して仁左衞門といふ。稟性篤實溫厚也。讀書を嗜み、俳句を好む。俳號を錦雪庵三雅といふ。今(安政丁巳)現存にて、猶櫻田に居住して、菓子舖(割註)錦泉堂と號す。」なり。

〇七珍萬寶(萬象亭門人)

芝增上寺門前翁屋といふ。餅菓子鬻ぐ家主也。後三代目森羅萬象と改名せしが世に行れず。故に狂歌師となり。四方眞顏の弟子となれり。

著述〔海中箱入娘(天明八、三冊)　〇酒辯管卷太平記(上に同二冊)

〇愚一心通看板苦者樂元〆(上に同二冊)

〇可笑

伊庭氏猪與八と稱す。天明三癸卯年六月三日歿す。行年七十七。四ツ谷大木戸理性寺に葬る。

法號　玄如院要山

(雪麿云、大木戸より右側にて日蓮宗也。法號玄如院要山日昭とあり。寺僧云、今の伊庭氏は小石川鷹匠町に住居すといへり。)

○戀川行町

春町門人、天明七より李庭亭と號す。著述の書多からず。

落し咄 ○百福物語(小本、俗に云油揚本と云。) 春町喜三二行町掛合の作あり。〔割註〕席は春町同行町跋春町。口畫歌麿也。三人の像あり。」

○紫色主

俗稱不レ知。品川邊に住居して畫をよくせしといふ。當りは南門鼠と題號せる洒落本也。品川の穴を著述して絶版となる。後また南門鼠歸と題して出板せしものあり。前板より大におとれり。

著述 ○艶次郎生日記 ○見物左衛門

○小枝繁

絳山と號し、また歡醨陳人と號す。通稱露木七郎次といふ。擊劍に長じト筮にも委し。水府御主殿附にて、初め青山焰硝藏に住し、後、四ツ谷忍原横町〔割註〕傳馬町三丁目横町。」に移る。

著述 ○東嫩錦(五、北齋畫) ○柳之絲(五、北馬) ○玉落穗(十北齋、文化三)
○催馬樂奇談(六、北齋) ○小栗外傳(三編共十五北齋) ○古能花草紙(四北岱)
○景淸外傳(國直) ○橋供養(國道) ○玉廼露(五、英泉)

○高井蘭山

名伴寛、字思明、通稱文左衛門といふ。芝伊皿子御組やしき與力高井鐵之助父也。或人云、原御旗本某の用人なりとぞ。著述は教訓の書、また有益の物多し。又讀本のみを編述して草雙紙合卷の作なし。

著述 ○三國妖婦傳(十五、北馬畫、享和三より文化三) ○孝子嫩物語(五、北馬)

○那智の白糸（五、同上）　○星月夜顯晦錄（十、同上、文化六）
○應　仁　記（二十、大本、英泉畫）　○水　滸　傳（二編より北馬）

○自　惚　山　人

横山町一丁目池田屋久三郎と云ふ。煙管屋也。産業を廢して淺野右衞門と改む。後に北水と號し、天文暦學十口の內に指南すと云て、諸國遊行せし由、終をよくせざりしと北齋翁の話也。

○橘　香　保　留

蘭奢亭、又奇南樓と號す。家號三河屋といふ。飯田町堀留に住居して煙草を鬻て業とし、狂歌をよくす。戯作二三部也。

○祭　和　樽

鈍々亭と號す。通稱武藏屋新六といふ。神田小柳町に住居せし狂歌師也。
或人云、もと髮結なりと。
著述　○御手遊達摩心學（三冊、岩戸屋板）　○福神金大帳（二冊）　（是戯作の初也。（寛政十二庚申年）
此外中本の作もあり。

○黃　厚　丸

神田鍋町に住す。伊勢屋吉兵衞といふ紙問屋也。

○全　亭　正　直

麻布住、藥品を商ひて業とす。五側（六樹園）の狂歌師也。
著述　○金鈴橘雙紙（讀本五冊、英泉畫）　○賴髮蛇物語（五、英泉）
○狂歌今昔物語（二、文政十亥年）

○西　來　居　未　佛

尾州侯藩中にて毛受善喜といへる人也。初號瓢箪園一寸法師といふ。是又五側の狂歌師也。
著述 ○忠臣藏合鏡（焉馬校、文政十二己丑年）

○關 亭 傳 笑

築地御堂裏門前本多侯の藩士也。通稱關平四郎といふ。山東京傳が門人なり。
著述 ○孝行娘妹背仇討（六冊、豐廣畫、文化五、泉市板） ○復讐猿田ケ淵（六、春翁同上）
○新撰生姜市の始（豐廣） ○運輝長者萬燈（二、國長畫、文化九年）

○東 里 山 人

九陽亭と號し、又鼻山人と號す。麻布三軒家に住す。公の典事なり。通稱を細川浪次郎といふ。如し斯印章あり。俗に京傳鼻と云ふ。山東庵が門人なり。
著述 ○娼妓美談籬の花 ○契情肝粒志 此外數多あり略す。
○活東子云、吾師無物老人話に、浪次郎晩年漂泊して、芝の切通しにて傳授屋といひて、奇文妙術などを小さき紙にしるして賣れり。予も流離して曝書僧となり、倶に相隣りて活計せしが、後に江戸橋四日市の小店に移りてよく聲聞せざれば、其淵瀬をしらずと云々。

○靜 廬

名愼言、字有和、一號梅園といふ。通稱北三右衛門といひて家根葺也。初め網の破損針金といふ戲號を、元の木阿彌より讓られて狂歌をよみしが、後、其を廢して學に耽り博洽となる。世にいふ三三右衛門の一人也。嘉永元戊申年三月廿九日歿す。芝天德寺地中教受院に葬る。
法號 高岳院圓照信士
○活東子云、三三右衛門は津輕屋三右衛門、（號棭齋、住湯島、）市野屋三右衛門（號米庵、住辨慶橋）家根屋三右衛門也。

○壽　阿　彌

俗稱眞志屋五郎作といふ。神田新石町に居住せし御菓子屋なり。後業を他に讓りて剃髮して壽阿彌と改む。戲場狂言作者寶田壽來が名を請て二代目劇神仙と云。淨るり長唄の作多し。嘉永元年八月廿九日寂す。年八十。小石川傳通院地中昌林院に葬る。

法號　東陽院壽阿彌陀佛曇奝和尙

○活東子、管聲和尙年七十九になりける歳暮に、

あすは見む八十のちまたの門の松

又翌年歳旦に

けふぞ見る八十の街の門の松

と發句せしとぞ。儒學北山先生の門人なり。

每年御連歌の執筆を廿五年勤らる。或年の八月十五夜に病重く、既に終らんとせしに快くなりければ、

月こよひ枕團子をのがれけり

といふ句を、扇に書て孫にやりけるとぞ。

○鶴　屋　南　北

稗史の作名を姥尉助といひ、高砂町に住み、又本所龜井戶にすめり。元濱町紺屋の男にして、幼名を勝次郎といふ。後戲場狂言作者となれりと、北齋爲一翁の話也。南北の名は俳優者の譚鶴屋南北が名跡を繼て四代たり。此南北は舞臺へ出勤なし。狂言の作のみ業とせり。三戲場を勤る事五十餘年、文政十二己丑年十一月廿七日歿す。時に齡七十五歳。本所押上長養山春慶寺に葬る。

法號　一心院法念日遍

○或人曰、南北が葬式は、四ツ谷の磨丸太にて差しになひにて寺に至り、地内に葭簀のかけ茶屋を補理て、爰に門弟等赤き前垂をかけ團子を竹の皮に包み、それに「寂光門松後萬歳」と云本一冊づゝ葬送の人々へ出せしとぞ。〔割註〕中本にて紙員五丁。」此書は南北存生に著述せし由、又日頃遺言に己狂言を作り葬禮の場を出せし事度々也。然共皆さし荷ひ故、我死去致しなばその如くして寺へ遣すべしと云けるよし、又南北一周忌の節、「しばらくのつらね」に戯作せし物出板す。是は南北の孫太郎が著述と云ふ男あり。俳優者坂東鶴十郎〔孫鶴屋〕といひしが、舞臺を辭して深川仲町に居住して、直江屋重兵衛と云。〔割註〕子供屋を業とし、又狂言作者もせしが、天保二卯年みまかりぬと云。」本所押上春慶寺に建る所の墓碑の表。

一心院法念日遍　　鶴翁南北塚

鶴屋南北はじめの名は勝俵藏、故ありて鶴屋氏を犯しぬ。うまれつき滑稽をこのみて人を笑はすことをわざとす。終に歌舞妓の作者となりて、一世のあひだ大に名をあらはす。安永四年はじめて堺町へ出勤す。歌舞妓の作者の中にても、抜群の才ありて十種曲などのふりをうつして、人の心にかなはんことを要とす。されどふみよむことをきらひて文盲なりといひて、みづからほこる事なし。文政十二年己丑霜月廿七日年七十五歳にてみまかりぬ。三の戯場の作者たる事五十四年なり。死うせなんずるさき、子弟等をよびいひけらく、我に一大事因縁有、枕がみなるくしげのうちにいれてあり。なからんのちひらきてみよ。おもふすぢくわしうしるしてあり。しぞくの人々よみ見て是を守るべしといひて目を眠りぬ。さてしぞくら、うちよりて箱をひらきて見れば、うはがきに死出の門松後萬歳とかきてあり。よみてみれは萬歳の唱歌を葬送によせて、正本のやうにしるしてあり。みな／＼あきれて、これぞ前後の滑稽なるべしとて、みそかにわらひてさりぬ。其後むつき十三日押上なる春慶寺にてほうむりのことありけるとぞ、但南北といふ名は、おのれ一代なのりてなきあとにて、人にゆづりあたへずとなり。

右は六樹園が作文日筆をもて是を記し、雅世祥これを刻す。文政十三庚寅年閏三月建ㇾ之。直江屋重兵衞、勝田龜岳、鶴屋孫太郎と連名あり。

草雙紙の著述は男重兵衞、又は孫太郎が綴れるを、南北が名にて刊行せしといへり。

○墨川亭云、文化の初、高砂町の姥尉輔といへる戲名にて著したる松緑高砂話と云冊子あり。是南北が作なりと云。或は外人ともいへり。孫は勝田龜岳とよばれ、幼より畫をよくす。向島料理屋武藏屋權三が子なりと香蝶樓物語。

○瀨　川　如　皐

芝居狂言作者也。狂言堂と號す。又新濱村屋といふ。瀨川路考が親族なりとぞ。近頃戲場を辭せりと云。

著述（總猨潛語（英泉、十）○木曾義仲鼎臣錄（初編五、二編五、英子）○七小町（中本、英泉）

○白　頭　丸　柳　漁

狂言作者濱村助が事也と云。著述の冊子に柳漁庵と名をくだせしこともあり。又後の楚滿人門人驛亭駒人と名のり、或は戲子瀨川路考が名を假りて著述すとも聞り。

（葛　葉　山　人　正二（男を篠田順藏と云）

戲場の狂言作者にて、初め篠田金治といひ、後二代目並木五瓶と云。改名して程なく歿す。文政二己卯年七月七日也。下谷池之端。

法名　　並木舍葛葉居士

又梅柳山木母寺境内に辭世の發句の碑あり。

秋や今淸しと桐の一葉ちる　　　二代目並木五瓶　葛　葉　山　人

菩提所幷梅若地内二ケ所の碑は、狂歌堂眞顏、山東京山、歌川豐國、三大人世話人となられ、勸化帳へ

右狂文を筆して江戸中へ配り、無レ程成就せしといへり。

○松島半二

狂言作者なり。俳優者坂東秀佳、〔割註〕二代目三津五郎。」が名を假りて戯作す。

○寶田千町

狂言作者也。名恭里、通稱中川金兵衞と云。下谷長者町小倉侯の藩士といへり。

○向榮樓欣堂

神田白壁町にて質屋なりしが、竟に產業を破りて戯作者となる。欣堂閑人と號し、又本蝶山人と別號す。又狂言作者となりて寶田壽助といふ。天和七申年冬病て歿す。

○花笠文京

初め柴井町に住居し、書を鬻て活業とせり。中頃日本橋室町に住す。鶴屋南北が門に入て狂言作者となり、花笠魯介と云。又住吉町に居を移せり。一年俳優者尾上梅幸と倶に浪華に登り、暫く彼地に止りて、代作屋大作と名のり代作を業とせりと自らの話なり。其後江戸に歸りしが、聊障れる事ありて戯場を辭す。去年秋八月頃代作のことを世に弘めんとして、引札につゞり所々へ配れり。又書畫會を催し、代作舍大作の名を披露す。冊子の著述はみな梅幸が名を假りて出しぬ。儒生東條琴臺（文左衞門）が兄なり。再び狂言作者となりて豐島新藏と云。

○林屋林泉

本所林町に住居す。初め林屋正藏といふ。中頃二世鹿野武左衞門〔割註〕元祿年間の落咄の名人。」と改名す。怪談噺の元祖にして上手なり。頗る文雅あり。書も書けり。狂歌も詠ず。又上るり（義太夫）の一曲をよくす。天保六乙未年正月剃髮して林泉と改しが、又俗となりて舊名林屋正藏と改名す。天保十三寅年二月歿す。

著述　○先開而三升ノ世界（文政七申年、國貞畫）　○帶屋於蝶三世談（文政八酉、國貞畫）
○敵討鶉權兵衛（六、重政畫種彥校、文政十二巳年）
○怪談春雛鳥　初二、天保十一貞秀、三四、同十二國貞當り）

○式亭門人

樂亭馬笑　樂山人とも號す。淺草田町土手下に住居す。四代目竹本倉太夫といふ。

著述　○手管早引廓節用　三馬補正并序文あり。

古今亭三鳥　淺草東仲町に住。藥種屋中買也。俗稱三河屋吉兵衛と云ふ。後剃髮す。

一亭三生　居所不レ知。

此三人は、式亭舊き門人といへり。

福亭三笑　日本橋邊の人と云へり。詳ならず。

益亭三友　日本橋通一丁目藤丸膏藥を商ふ人の弟也。茅町に住居す。後總髮。

二代目福亭三笑　牛込に居住す。手跡の師たり。著述は仇文字ゟとの留書、文政四年出板。

一亭三子　藤丸膏藥を鬻て業とす。

德亭三孝　小石川に居て米を商へり。狂歌を嗜て、初號を一得齋桃種成と云。後業を換て新川邊に住居す。七代目三升が助六の初役を壽してよめる狂歌。

異國までひゞく上手に成田屋が出端はかとうの蛇の目傘

雪亭三冬　虎御門邊の人と云り。

返亭三七　畵語棲內匠といふ。狂歌師也。

春亭三曉

二代目春亭三曉　畫工國直が兄なり。

一亭三樂　姫路侯藩中にして、通稱石川郡作と云へり。
三　鶯　爲永春水也。
〇十返舍門人
大原市女　享和より文化年間迄と云々。
東寧舍一河　同年間と云々。
東壻亭一瓜
五返舍半九　芝邊に居住して菓子を商ひて業とす。初は和泉町四方家に仕へたり。今深川六間堀に居住す。男某は墨亭月麿が門人にして畫をよくす。
金鈴舍一寶　傳馬町に住居して鈴木屋と云建具屋也。狂歌をよくす。或狂歌集に銀鈴舍半寶と云名見たえり。門人の名と思はる。
九返舍一八　後三亭春馬と改む。小傳末にあり。
半返舍一朱
愚　舍一德　唐立也。別にあり。
十字亭三九　大傳馬町に居住せしが、今行方不レ知。一九に隨身して三九といひ、俗稱を糸井鳳助といふ。下野國の產也。一九歿後、其男に乞て二代目十返舍一九の戲名をゆづる。

牛島長命寺境内にある所の碑は、故一九の男、又此一九其他の門人等が建しものなるべし。
碑銘　なべての人のいかに君なりと思ことも、常となりてはめづらしからねど、あかぬものは月の夜と米の飯、さては色と酒なるべし。
内損か腎虚でわれはねがふなりそは百年も生延しうへ

碑陰　十返舍一九
應需憲齋書

○曲亭門人

櫟亭琴魚　勢州松坂の人なり。著述は京山子が編述せし小櫻姫風月奇觀につきて風月後記といふもの、又馬琴が著述の青砥藤綱模稜案の三輯を作る。天保二卯十一月廿一日歿す。享年四十四。松坂寂光山願證寺に葬る。
法名　櫟亭道香

嶺松亭琴我　贈京傳先生文○曲亭記○戯贈利倉屋伴泉文○贈上戸文、此四條板下に迄なりて刻ならず。

琴川　敵討甚三絹、（五、文政五辰年）

直亭驥德

琴梧規矩

節亭琴驢　岡島也。

○爲永春水

名貞高、狂訓亭と號し、鷦鴒正輔と稱す。原書賈にして青林堂越前屋長次郎といふ。初め式亭の門に入て三鷺と號し、後二世振鷺亭と號す。又故人楚滿人が女に乞ひて、二代目楚滿人となりしが、故ありて其名を返し、文政十一子年春水と改む。居處數多かはれり。初橘町、或は通油町に住し、又辨慶橋に居す。又牛島へ移り、下谷池の端に移る。因て蓮池庵の號あり。竟に神田多町に住り。中頃糶書となりしが、廢て舌耕となり、金龍山人〔割註〕淺草寺境内に住てしかいふといへり。〕と號す。著書次第に行はるゝによりて、又廢て專ら戯述をなしゝが、時好に合ひて大に流行せり。其書を人情本と唱ふ。天保十

三壬寅年公より絶板仰付られ、重き御咎を蒙りしが程なく歿せり。築地本願寺地中妙傳寺に葬る。

法名　龍音信士

著述あたりもの○梅ごよみ、此外人情本あまたあり。

○岡　山　鳥

名長盈、字は哲甫、號を竹之戸、又丹前舍といひ、通稱を鳥岡芳右衛門（舊名權六）といふ。神田四軒町近藤君に仕ふ。一たび浪人して駒込大番町に住し、大衞の卒となり、再又舊主に歸參す。初め曲亭翁の門に入り、節亭琴驢といへり。狂歌を嗜み、また書をよくして傭書するもの多し。古人式亭と交り深くして門弟のごとし。

著述　○驛路春鈴菜譚（二、文化四卯、豐廣字理）○廿三夜待（三、文化十一戌、國貞、貞繁、堺國）○善光寺詣（二、文化四、貞房、堺國）○水中魚綸丘釣話（二、貞房、堺國、文政四）○如月初午（三、英泉、堺國、文政七）○楊弓一面大當利○江戸名所花曆四冊、文政十年刊行、雪旦畫）

○瀧　澤　鯉　丈

下谷廣徳寺門前稻荷町に住し、櫛を鬻て業とす。新内節の三絃上手にして、其名を八藏といふ。居を轉じて淺草傳法院裏門前に住し、再駒形町河岸通りに移る。著述は滑稽本のみ也。女あり。一中節をよくして都一美世と云。

著述　○花曆八笑人（初篇二三追加、文政四巳、英泉合作）○大山道中栗毛駿馬（初二三）○滑稽和合人（六）（牛島土産）○伊勢道中三方廣人（六）○其外人間萬事嘘計（後篇、前三馬也）○串戯二日醉（後篇、前一九也）

○千　代　春　道

元岩倉町に住て後に馬喰町に移れり。板下書橋本徳瓶也。又浮世喜樂といふ戯名をもつて編たるものもあり。俗に云、義太夫節の稽古本の板下を書こと、十八歳の頃よりして能熟したりとぞ。文政八酉年病て歿す。

著述（復讎緣小車（文化五、濱幸春亭畫）

○晉米齋玉粒

姓藍庭、名林信、號を藍亭、又米齋とも云り。傭書を業とし、馬喰町四丁目に住し、後大傳馬町新道に移る。文政七申年十一月剃髪す。其節六樹園より狂歌を贈らる。同八酉年芝全交が親族より名を乞受て二世司馬全交と改名す。同十亥年五月二十日歿す。男あり。前豐國門人にて國景と云。

○東西庵南北（文化五、）

芝金杉町に住せり。原は吾妻橋手前竹町に居住せし剞劂（ハンギホリ）氏にて、朝倉藤八といへるよし、一書に朝倉力藏とあり。畫工春扇（後春好）物語と墨川亭の話なり。文政十丁亥年歿せりと云へり。

○神屋蓬洲

小石川に住せり。後花路に移住せし由、自ら畫き、みづから書し、又彫刻をもせしとぞ。

著述　○天緣奇遇（三冊）　○口八町（中本）　猶あるべし。

○鬼卵

栗杖亭と號す。東海道日坂の人也。著述の讀本數多あり。京師浪花の書肆にて發行せり。煙草を鬻て業とするが故に、表の障子に、

世の中の人と多葉粉のよしあしは煙となりて後にこそしれ

斯詠じたる狂歌を自筆にてかきつけ置けるに、或年白河侯（樂翁君）御通行の節、此狂歌を御覧ありて御褒美被レ下しと云々。此事根岸君（町奉行）が隨筆みゝ袋にくはしく記しあり。一時柳亭へ消息して門人た

らんことを乞しが、柳亭固く辭せしときけり。

〇陽 春 亭 慶 賀　今泉戸守

下谷池の端妙恩寺の裏門筋向一丸なり。

著述〔割註〕一子に二子の對面、みはたし四めこのとらはれ、五ツ夜六さしの旅衣、七ンのふ藥師の競驗、九のや十の男達。」　嚧 初 昔 今 川

〇江 南 亭 唐 立

通稱中田慶治といふ。原市河に住て幼より狂歌を好み、故十返舍に隨て愚舍一得といふ。濱町安藤侯の邸にあり。又は田沼侯の邸にも居たりといへり。近頃戯作を廢したれば著述を見ず。初作は文政七年刊行す。

著述　〇誂染紫色揚（四冊、國安畫、ツルキ板）

〇忍 岡 常 丸

下谷上野町に住居して常陸屋甚兵衛といふ。呉服屋也。故人一九が好の浴衣地を年毎に例として新形を染出せり。

著述　〇金成木後看與蘇和歌（文政七甲申印行、國直畫、榮文堂板）

〇二 世 戀川春町

下谷坂本町に居住と聞けり。文壽堂書房なりし頃の話に、貴家の剃髪して隱居し賜へりともいひ、又醫師なりともいふ。何れ歟是ならん。故春町が門人にて、戀川幸町といひけるよし、自らいへりとぞ。

〇玉 樓 花 紫

北廓玉屋山三郎が抱の妓也。紋所三ツ鬼にて其形斯の如し。是を冊子の表紙の模樣に用ゐたり。

著述　宿緣奇遇梓物語（文政中刊行、英泉畫、龍威堂板）

是はその客が戯に代作せしとある人いへり。されど遊女の著述といふが珍らしければ載せおく。

○美圖垣笑顏

笑亭と號す。通稱美濃屋甚三郎といふ。初め加賀町の質屋なり。後書肆となり涌泉堂と號す。原狂歌を嗜み、眞顏が弟子となりて涌泉亭眞淸といへり。晩年芝田町に移住して合卷を作る。

著述　自來也豪傑譚

○一筆庵英泉

名義信、英泉溪齋と號し、又無名翁と號す。通稱池田善次郎といふ。茅場町植木店に住居す。畫をよくす。又戯作をなして一筆庵の號あり。嘉永元戊申年七月廿三日歿す。年五十九。

○三亭春馬

淺草山谷町に住居す。初め新吉原京町一丁目妓樓大文字屋市兵衞〔割註〕養子にて後離緣。」といふ。今業を替て質店となる。狂名を加保茶浦成といひ、後元成といふ。淺草庵春村が弟子也。又故十返舍一九が門人にて九返舍一八といひけるよし、後八文字屋自笑となり。又二代目十返舍一九となる。

著述　○松竹梅壺前掛多氣裁(中本、天保十年刊行、當り、國貞畫、初二二三三三)

○五柳亭德升

本所法恩寺前町に住せしが、後本石町一丁目に移る。初は鎌倉河岸にて紙類を鬻て豐島屋甚藏といひしが、後衰へて貸本屋を活業とす。故に人呼て本德といふ。文政五年の頃、軍書讀典山が門人となり舌耕す。〔割註〕今本家客たり。」初めは俳優者市川三升の名をかりて著述せしかば、德升の名を知るもの少し。文政十一年春名弘の會を催せしが、近頃戯作を廢して四日市御魚役所の書役となり。嘉永六丑年七月廿五日歿す。年六十一。牛込宗柏寺に葬る。

法名　五柳院德升日輝

○式亭小三馬

本町二丁目に住居す。故三馬が男にして、家傳の製藥を商ひて業とす。俗稱虎之助といふ。文化九壬申年生れ、文政十二己巳年十八歳にて初て著述あり。巻末に式亭虎之助と記せしが、天保五甲子年より小三馬と改名し、父の姓を受繼て文才に長じたり。久しからずして二代の名を輝かす事と思はる。

著述　○喜怒哀樂堪忍袋(六、文政十二、國安畫、ツルキ板)　○娘曆振袖始(山口板)

○花紅葉吉野龍田(同年、豐國)　○本朝斑猫傳(四、同年、重政)

○仇競意氣地鮫鞘(六、同年、重政)

○山東京山

岩瀬氏、名百樹、字鐵梅、鐵筆堂と號し、又方半居士と號す。一號を覽山といふ。初め利一郎と稱し、後剃髮して京伯と改む。原篠山侯に仕へしが、辭して京橋太刀賣に住し、再亡兄京傳が舊宅に移りて家方の製藥を鬻ぎ、又印刻をなして產業とす。天保九戊戌年六月廿日齡七十に及びて剃髮し、年賀の書畫會を催せり。

剃髮辭

人は四十にといひし兼好も、六十八歳の豆を數へしは、いかにめでたしとはおもはざりけむ。やつがれことし七十の春にあひて、めこらはめでたしとて喜びぬれど、なにを一ツなしえたる事もなければ、つれ〴〵草に見えたるむく犬のおいたる也けり。此水無月の中の五日は、我がうまれたる日也。世に數まへらるゝ人にもあらば、詩の歌のと長生の賀盃をもめぐらすべきに、多病にしてつかへをじせしのちは、士商のひあはひの桃の木ならぬ瘦浪人なれば、いかでかこうかのはえをとるべき。されば古稀を壽ぐ盃をらく〳〵と名をよぶ茶碗にかへ、釜のにえ音を千とせの松風と祝ひ、の白を薄茶にのみつゝ、ひとりさどうの樂しみをとりたるをりしも、庭に咲たるけしの花、かほりし風にそりおとしたる坊主なりの淸

らなるがうらやましく、我も又百歳に三そぢたらぬまでにおいえたるを、世間の申わけにかしらを丸め、むつかしきはかまをたゝまば、心たいらかにして壽おのづから長袖の老をやしなはんと、此句の樂天を師として、そる事にぞさだめける。さておもふに、夏の行水にあたまからの涼しきあり、秋の月見に團子の影法師もをかしからんと、友人に語りければ、張三李四のでも坊主にもあらねば、剃髪と年賀とをこきまぜて、一世一代まうせんの書畫會をもよほし給へ。われ〳〵も力をそへんと、玉だすき心にかけし舊友の進めにまかせて、草庵はせまきゆゑ、人の家をかりたれば、その所今日限とは別にしるしつ。(此所語落たるべし)諸君の光駕を松にとりつくつく〳〵ぼうしをあはれみたまはれかし。

十德をけふ羽衣や松のせみ

天保九年水無月朔日採筆　　七十野叟　山東京山

○岳亭丘山

通稱を斧吉といへり。もと戯名を堀川太郎春信といひ、中頃岳亭定岡といふ。狂歌を窓の村竹に學び、畫を堤秋榮(住茅場町)に學ぶ。後北溪の門に入り、又北齋に隨從す。初め青山邊に居て、後大傳馬町に住し、今浪華に在り。

著述　(○狂歌奇人傳　○水滸太平記(英泉畫)　忠孝氷水川(三、自畫、文政八、伊藤版)

○松亭金水

名定保、通稱中村源八といふ。傭書也。初め神田大和町に住して手跡の師たり。中頃淺草寺中に在り。後小傳馬町三丁目北新道に居す。又本鄉附木店に移りて戯作を專とす。

著述　中本合卷等數多あり。

○雪麿

罌川亭と號す。高田侯藩中にて通稱田中善三郎といふ。罌亭月麿が門に入て畫を學び、後戯作者となれ

り。作風は柳亭に似たり。

〇二世　烏亭焉馬

通稱堂次郎と云。町與力山崎助左衛門が男也。深川古石場に住居す。其家を七國樓と號せるは、武相甲豆駿房總の七州を見渡すが故なり。狂歌を嗜みて伯樂舍に就て松壽樓永年といひ、後六樹園に學びて蓬萊山人といふ。又角觝を好みて吉田追風に行事の業をならへり。文政十一子年二代目焉馬となる。また弘化三丙午年三月近松門左衛門と名のりて中村座の淨るりの文作あり。

著述　〇當世相撲金剛傳（二、國貞畫）　〇相撲取組圖繪（一、同上）

〇關取名所圖繪（同上）　〇茶番一夜附（二、國貞、文政六）

〇懷中鏡山閉（六、國貞岩戸、文政十一）〇忠臣前之孝記（六、國貞西與、文政十一）

〇角力水滸傳（國安森治、文政十三）　〇苅萱桑門筑紫寫繪（六、國貞、文政十三、芝口）

〇戯場稿本當現廷（十六、國貞、文政十三、西與）〇活金剛傳（前後四冊）

〇妖狐天網島（六、國貞泉市、天保三）　〇俳優畸人傳（前後四冊、山口）

〇西頼忍夜櫻（八、國安國芳、天保四）　〇大和染對の振袖（八、國芳森治、天保五）

〇返咲難波裏梅（中、國貞、天保五）　〇芝居細見三葉草

〇東福亭宮守

東福山人と號し、又福亭錄馬と號す。今樂亭西馬と改む。西宮新六といへる本材木町一丁目の繪草紙問屋也。文政十二丑年の火災にかゝりて家衰ひて後、水谷町に移住し、家主となりて久兵衛と改名す。傍書をなし、又戯作をなす。俳優者瀨川路考、又岩井紫若が名を假り出せり。

〇乾坤坊良齋

通稱良助、神田松田町の貸本屋梅津勘平が男也。初め三笑亭可樂に隨て落咄をなして管良助といひ、後

軍書讀となりて今の名に改む。

著述　○黑雲太郎雨夜譚（初編二編）

○柳亭門人

笠亭仙果　姓大宅、名廣通、字子田、敬齋と號し、又狗々山人、招鉄翁等との戲號あり。通稱を彌太郎（幼名龜三郎）と云ふ。父は高橋彌左衞門。〔割註〕名敬義、字民則、號小有軒呂川嗜俳諧。」と云ひて、世々尾張國愛智郡熱田驛に住し、三代熱田大神宮神領の里正たり。幼き時所謂祠官磯部右近（名政春）を師とし、手習素讀をなし、長なりて離屋翁〔割註〕名朗、字叔明、通稱鈴木常介、尾張家儒臣明倫館教授役。」が弟子となり。和漢の學を研究し、又芳蘭主、〔割註〕名春村、通稱黑川次郎左衞門、堀長門守藩中、もと三世淺草庵。」に就て學び、狂歌をもよみ、四世淺草庵の號を譲らる。又和歌をよむ。高仁家（中納言）の門人也。薄祐にして家衰へ竟に産を亡ひ、江戸、〔割註〕寓居淺草新旅籠町。」に來りて著述をなして活計とす。自いふ戲作は本意にあらずと、雖未如之何也已矣。又いふ笠亭の號は、淸人李笠翁が情性を欽慕ひ、又師翁（種彥）が亭號の通音をとれり。又仙果と名告る緣は、予十歳ばかりの頃、熱田神宮寺の住侶金幢法師余を愛して、大なる桃一顆を贈らる。高三寸圍六寸餘にして寶珠の勢に似たり。崑崙山の種なりといふ。古人旱魃に雨を得大に喜びて亭號とせり。則其に倣ひて云爾といへり。

新增補浮世繪類考　終

笈埃隨筆

笈埃隨筆目錄

卷之一

鳥類の變 三〇三　神驗 三〇四
活世の辨 三〇七　旅 三〇九
山神の怪異 三一一　水虎 三一三
大般若經の功德 三一五　狐怪 三一六
景清墳 三一七　强勇 三一九
雁風呂 三二〇

卷之二

異木 三二三　蚺蛇 三二六
矢數 三二八　石匠 三三〇
灌頂瀧 三三一　親子情 三三二
地變 三三三　事實 三三四
洪水怪（京） 三三六　幽靈（但馬） 三三八
奇葉（京） 三四一　道成寺（紀州） 三四二

卷之三

世諺 三四五　壺碑（奥州） 三四六
金花山幷讀後奥地 三四九　奇病（三州） 三五三
地火（越後） 三五四　琵琶湖 三五六

不破關　四四四
神泉苑　四四五
宇治瀬田螢　四四六
井出蛙（再考）　四四七
詩僊堂　四四八
降　松　四四九
難波梅　四五〇
求麻川　四五一
呉服穴織社幷二星社禹王廟　四五二
名所名物　四五三
弘智法印　四五四
術　業　四五四
御茶屋松原　四五五
君が畑　四五六
龍神感　四五七
高　市　四五八
都の富士　四五九

巻之九

志賀山越　四六二
三寶鳥　四六二
塔影入屋（再考）　四六五
山崎離宮細男　四六六
水無瀬宮　四六七
金龍寺櫻　四六八
方丈室（東山銀閣寺に有）　四六九
瀧谷古碑　四七〇
竹切の法　四七一
杜鵑松　四七二
音無瀧　四七三
年取島（丹後に在）　四七四
園原山（はゝき木）　四七五
多田院（攝州大坂より北五里）　四七七
多武峯（將軍塚）　四七七
櫻池奇驗　四七八
古戰場　四七九
鳴　門　四八〇
那智山　四八二
竹生島　四八三

假山 四八四

卷之十

洛陽名物器畫 四八六 東山大文字 四八八
大堰川 四八九 高雄楓葉 四九一
宇治川 四九三 大倉谷 四九四
志賀山 四九五 兒島 四九六
安土總見寺 四九七 外山里 四九七
天拜山 四九八 宿驛 四九九
岩橋 五〇一 高野山 五〇一
羅城門 五〇三 天橋立 五〇四
御島 五〇五

卷之十一

長崎 五〇七 櫻鯛 五一〇
琴彈濱太鼓濱（丹後） 五一一 左海 五一二
船謳 五一三 三白川 五一四
歌枕 五一七 那須野 五一八
鬪三瓦 五一九 大門岬 五二〇
雷狩 五二一 大鹽 五二二
宗八島 五二三 立田越 五二四
祇王、佛、靜舊跡 五二六 眞野長者 五二七

嚴島　五一八
由良　五一九
遠江濱名　五二〇

卷之十二

蘭奢待　五三二
雜說八十ケ條　五三二
鐘岬　五四四
盆山　五四五
酒　五四六
無着尼　五四七
了然尼　五四八
待宵侍從　五四八
建仁寺　五四九
桂女（同飴）　五五〇
五十間庖丁　五五一
了俊道灌詠歌　五五二
元就詠草　五五四
越後舊地　五五四
法華八講　五五六
深草元政法師壁書　五五七
桃水和尚　五五八
賣茶翁　五五九
名物　五六〇
異名所　五六二
用意　五六三
辯案　五六五
麪吐　五六六

笈埃隨筆　巻之一

平安　百井塘雨編集

○鳥類の變

今世上に鶯を飼翫ぶ事を考るに、まづ彼鳥の巣作るや、樹上の下陰に、諸鳥の軟毛をもて、小く丸く畚の如く、內をうつろに作りなし、其中に雛を生ず。或は三ツ、或は四ツ、一番子、二番子あり。巣を出たるを流(コギ)れといふ。軈てその巣作る所を知て、卵をとゞめ、日數を積り計て、巣ともに取來り、餌をさして養ふ。日を經て巣を離れ、留り木に行通ふ時分に餌をはむ時、一羽づゝ籠にわけて置。むかしは小さき笛をもて其啼音を敎ゆ。然るに近世は、能習ひ得たる親鳥を、遙か向ふに高く臺に居へ、數十羽ある雛を爰彼方に置けば、親鳥の囀りを聞習ふ。その音に甲乙あり。乙を地といふ。又さけともいふ。甲を高音ともいふ。その高き音の跡にかならずヒイとなくことを引といふ。是を月日星の三光を囀るといふ。夫に長短あり。聲一ぱいに引を尺と云●尺より長きは希なり。其間にから／＼と長く飛て啼をから啼とも、飛鳴とも云。始て親鳥の音を聞しむるを付るといふ。故に附子附といふ。然れども其年の雛は鳴ず、來春に至り初て聲を上る時、また親鳥に付て聞しむるを押といふ。故に押親といふ。斯て次第に本音を鳴すに、いづれも引音を鳴といへども、元より鳴まじき聲を附添たるものなれば、春半に至れば、其引音失て常の音を鳴。或は種々の癖出て、あらぬ啼をなす。是その鳥の器用不器用によるか。數百の內甲乙なく、引音も長きは至て少く、斯々揃ひたるを祕藏とす。鳥すら斯のごとし、人倫に道義揃ふたるはいよ／＼稀なり。すべて親鳥立春前後より初音を出す。然るを霜月中旬より專ら啼かす術あり。飼笥(カイケ)に灯を仕かけ、春暖をしらしむれば、陽氣を感じ發聲す。是すなはち水仙など室に入て、時ならず

唳しむる同理なり。うぐひすは養に甚だ祕事あり。諸の小鳥も音を付たるもの多く清亮なり。親鳥も其性によりて雛を嫌ふあり。大凡雛の二年なるを片時といふ。三年頃より雛を鳴しむ。始て雛を鳴する時、親鳥雛の聲を聞けば、多分は鳴音荒く聲を能く詰るゆへ、かならず鳥に癖出るなり。初て聞しむるに種々のこゝろ得あり。また左も無く靜なるもあり、夫は希なり。されば造化の功業に遺なく、初めに天地開發より、今億萬歳、更に四時の巡行違ふ事なく、人は猶さら鳥獣草木まで、運動の氣を稟得て、竹は竹、木は木、草は草、凡て馬に角なく、牛に鬣無く、鯨は黑く、鷺は白し。猫、犬に類せず。鹿、牛の吼をなさず、蓼甘からず、山椒酸からず。これみな天地の理成。又鶯の巣に杜宇出、魚に寄居虫あり。虫に似我蜂あり、木に寄木あり、連理あり。これらは物類の變化、或は相感じたるものなり。沈文通が民蝦蟇を食する事を禁じて、また蝦蟇生ぜず。閩楠人の毛彌も今喰ふ事を好んで生じ、憎んで絶り。是理の變なり。教て訓、混じて造る。天工の妙用、陰陽の定理をうばふとやいはん。事を謀るには人に有哉。此ごろ鼠を翫ぶ事流布して、種々の奇鼠出す、白鼠は幸福の瑞なりとて是を崇みけるも、今は夥しく世に出て人更に翫ず。斑駁紛雜の鼠を出す。黑白の鼠をとつがしめて是を造る。理外の理なり。予九州にあるとき、彼蛇を見たる事を聞り。左右に頭ありて、目口おなじく備はれり。然るに人共右の首を杖にてうてば、怒氣即右の首にありて、左の首無心なり。左に走れば右の首無心なり。しかれば性は一なり。是に付ても先哲のいへる爰にあり。人の性元來一にして善成るといへども、長じてこゝに惡念生ずれば善氣は無に至る。是彼蛇左右に依るに同じきか。主一無適、唯一不二、一心三觀等各尊かるべし。

○神　驗

松島を見んと、彌生の半に鹽釜の浦に至り明神に詣す。聞しに勝りて宮社美麗なり。前には數百段の石階あり。右は鹽釜町連り、左は松島に行く陸道あり。沖にさま〲の島々ありて、誠に無双の壯觀なり。かくて便船を得て、松島に横渡りす。其間二里餘、奇島怪岩言語に盡しがたし。はせをの翁の奥の紀行

に、まつ島は笑ふがごとしとあるこそ、一句にして盡せり。百に餘る島々一つとしておなじからず。たゞ松のみ生茂りて、鹽釜のかたの島の表とせり。ことごとく行脚の記に載て、爰に贅せず。頓て船を出すに船人のいふ、乘合の人々酒價給はんや。島の名を敎んといふに、各諾してこれを與ふ。予は笛を取て帆柱の傍に居て、景色を見洩さじと、船人の指さし教ゆるに任せて、矢立取出して島々の名を記さんとす。前に年頃三十ばかりなる、さもいろがましきもの、供人と座して、我は顏に咄し罵り、我に向ていふ樣、六部の笛といふものかさ高にして、か樣の狹き船中には場とりて邪魔なり。梶の間に括りつけ置れなんやと、傍若無人に云罵る。むかし西行上人始て行脚の道中、横田川にて渡し守に擢にて打れ、頭に血を出されけれども、傍に退きおめおめと血を拭ひ給ふを、同行の西住怒て既に闘爭に及ばんとす。西行大に制して、捨世の者斯てあらん事常なるに、汝それを忍びかぬるは淺まし。むかしは昔今は頭陀の徒なり。是等を修行なりといふべし。猶如何なる辛きめに逢んに汝を具しては心穩かならず。志願の妨げなりと強て暇を遣し、其以來獨行せられしとある、感涙に堪ず。さるに予がごときもの、更に怒るべき理なしと、すこし笛を片寄んとするに、かのものまたいはく、この笛に紙捻もて括り付たるは何等のものにや、目障りなり取べしといふ。予云、これは下に置難し。今朝鹽釜明神にて請たる御供なり。いまだ乾かざれば、かたの如く紙に包みほし置けと答ふ。此もの忽ちに色を正し威儀して云樣、アナ恐れ多や、早く高く括りて人の手に觸ざらん樣にし玉へと、柱杖の先に括り帆柱に結添たり。かのもの俄かに叮嚀に成て、此方へ來り笛をも上樣におかれよなんど、始めに似ぬ會釋に、又辭退すべきにあらざれば、上の方へ押直し、ゆるゆると坐して、いかにかくばかり恐れ玉ふといへば、曰、抑此御供は毎日三升餘、六社明神へ奉りぬれば、日々夥しくあれども、更に人に與へず。後は海上に流して捨る。兩家のもの此日供を麁末にせしかば、たちまち盲人と成たり。其外奇瑞ある事、近郷のものゝ知る所なり。かまへて自餘の事とおもひ玉ふなといふに、いよいよ尊くおもへり。其後伊豆國岩浦權右衛門とい

ふ者の所に寄宿して、十一月より翌四月まで居たる內、この家の僕、わらは病して既に八十日あまり、種々の醫藥、寺社の符等を與へけれども、曾て其驗なく、主のいふ、回國の人は、諸國の靈山を禪定して、尋常の事ならず、このものゝ病苦を祈加持などし給はれと賴むに、それはおもひもよらず。諸山の靈場を順禮するまでにて、元より凡俗の我等、中々加持などいふ事さらに傳授せず、また外に左樣の六部もあらんに賴み玉へと答へ居たり。その後たび／＼申さるも氣の毒なれば、則爰に奧州鹽釜明神の御供あり。至つて靈驗あるよしなれば、我いまだ祕して人にもあたへず。元より受るものゝ信不信もあらんとおもふなれば出さず。あまり氣の毒なれば、これを進すべし。明日戴かせ玉へと言置て、翌未明に起出て、東に向ひつる海際に至り、潮をとり垢離をとりながら、何か祈念すべきやうも知らねば、般若心經百遍ばかり誦して、潮頭を汲かへり、彼御供四五粒をいたゞかせけり。去程にいつも惡寒する時來ぬれど、先發寒なし。扨はと思ふ中、其日も暮になん／＼とす。コハ不思議なるかなと、其ものもおもへば、此方にも奇特有哉とおもひ居るに、一日三日と立しに、わすれたるごとく平愈しければ、我ながら神驗の炳然き肝に銘じ、東に向ひて尊禮し奉りぬ。こゝにおゐて人舉て、予を生る佛のごとく沙汰しけるには、腋の下に汗出るばかりなり。抑この浦は後に土肥あり。賴朝公の伏木の杉あり。徑の地藏は村端にあり。佐々木高綱君の姓名を賜り、七度返し合戰せし處也。南に小坂を越て眞鶴ケ岬なり。左の方に眞田與市并郞黨の文藏が墳あり。いかなる人も碑下に涙を落さぬはなし。前は海、後は山、嶮く、一騎討の難所にして、今に其時のあり樣見るが如し。感慨誠に極りなし。偖予が宿せし所に、むかし北條小田原在城の時、氏康の朱印を所持せり。是往古賴朝公大場伊東に打負、此浦に忍び密に船を賴みて、向の地なる安房國洲崎の濱に渡り玉ふ。その時の恩賞として、永代此浦に船二艘諸役免許有しより、數代の領主の賜ふ所なるよし、其狀に鮫追船二艘永々諸役免許の文なり。今にいたり江府へ渡海するに、浦賀の番所へもよらず直に乘なり。此地元來百姓なく、石を伐出して江府に商ふを産業とす。故に岩浦と

いふにや。鷗の宿といふ有。賴朝公のしばし忍び玉ひし所也と、このほど冬なれば浪荒くして入がたし。產土神を兒大明神と號す。小童の神體則賴朝公なりとかや。この宮白木造にして、數百年を經ぬれども結構なり。されど潮風荒く所々鐵もの朽たれば、かねて望みあるよしにて、予が同行せし杉田峯月といふものに、社壇を彩色せん事を、村中一同に乞ふ事頻りなり。此ものは難波法眼春卜の門人にて畫をよくする故なり。さまざま辭するに許さゞれは、默止し難く施主と成て、是を繕ひ彩色しけり。既に百日餘りにして悉く修復せり。拜殿幣殿はその儘白木にて、本社三面に松竹梅、正面の扉昇降の龍を金地に畫き、御拜の柱は金襴卷、左右の板戶は花鳥なり。階の後二枚獸を畫く。繪馬は還城樂に關雲長を誠に壯麗に畫なせり。その美近鄕に並びなし。かしこくもなし得たりと、一人の同行も、予も俱に悅びに絕ず。いはんや村中各歡喜限りなし。やがて神樂を奉り、遷宮の儀式相整ひ、今より二十年に及べば、未壯麗なるべき事を、折々は行て見たくもおもひ回らしぬ。

○活世の辨

唐李涉九江に泊りける夜、海賊襲ひ來りて錢貨衣服を奪はんとす。一人の賊徒從者に問て、いかなる人ぞと、從者の曰、李博士なり。豪酋是を聞て、若實に李博士ならば、おびやかす事なかれ、我久しく雅名を聞及ぶ。願はくは一篇を題して給はんといふ。言下に一絕を賦して贈る。

風雲蕭々江上村　綠林豪客夜知聞
相逢不用相回避　世上（天下イ）如今半是君

といふに、賊大に感賞し、重々禮謝して事なく去りけると、唐詩話に載たり。また宗祇法師行脚の日、山賊に逢ひて衣服を剝取られ、剩へ祇の髮の美しきを見て、それをも剃取らんとす。祇大きに髮を惜しみ悲しみてかくよめる。

我ために箒の髮はゆるせかし塵の浮世をはき捨るまで

と吟じければ、岩木ならざる盗人ども、是に感心して剝取りし衣服も返しあたへ、厚くもてなして通しけるとなり。誠に猛きものゝふの心をもやはらぐると書玉ふも宜なり。爰に私の一事を擧て、これに類せるにも非ず。またその事跡にも當らざれども、筆の序に記す。予寶曆八寅の年回國の始に、尾張の國にて數年經歷せし同行に連立ぬ。このものゝ云、關東に行て下野國に入れば、何村と云所にかならず一宿をもすべからず。わするゝ事なかれと教ゆ。矢立取出し書付おきぬ。斯て月行年來て、關東北國の間に、既に三秋を經て後、日光山へ詣づる道にて、ある日宿をかり兼、道路に躊躇たゞずみ居たるが、一人教へて、あの山際の村は、行脚などよく泊る所なりといふに嬉しく、往還より三四町ばかり馬手のかたに至りて、或家に宿を乞ければ、主快くゆるし一夜とまりぬ。翌日は志ある日とて、僧一人供養し齋飯を進む。予も相伴して座に在り。何か旅行の物語の內に、彼僧我旅日記を取出し見て、さて〳〵殊勝の發句かなといふを、亭主の老人聞て、如何成る事かなと聞。予曰、いかめしく人に見せんも恥かし。去ながら溫に着、飽までに食、襟居せるものは更なり。遍參の頭陀なるものは、日のあたり農民の千辛萬苦を見て其勤勞をおもへば、麁食に向ひても、八珍の思ひをなす。彼李伸が詩に、鋤禾日當レ午、汗滴禾ニ下土一誰知盤中餐、粒々皆辛苦なりと有を、常に口號てわすれざるより、ふと想像せし事とて、

植しより日々の汗今稻の露

と述たりと咄しければ、二人とも感じて、誠に百姓の艱苦をよくもいひ叶へり。我々その道は知らずといへども尤なり。書て得させよと云ふにいなみがたく、短冊に認置ぬ。此の日朝より雨降りければ、今一夜逗留せよと、强て留られければ、謝して頓て宿日記に留んと、村井に亭主の名を聞に、村の名何とやらん。かねて聞たる樣に覺えれば、案じ見れど思ひ當らず。漸しばし有て、ふとおもひ出たるに、初發の年、尾州にて同行の示し教へたる村に似たりと、笈の中を捜し見れば、正しく夫なり。いかゞはせん。さもあれいかなるゆゑんは知らねども、かならず泊るまじきよし念比に示し置るも默止がたく、何

とも拵へて立べしと、頓て笈をかたげて、亭主に禮して曰、我無用に逗留せん事、いとまおしく思ふなり。一里にても先へ行ばこゝろよき方なれば、御志は忝けなけれども立出んといふに、亭主少し怒れる氣色にて、今まで滯留あらん志の、俄にうち變りたるには仔細あらん。語られよと責るに、是非なく樣子を語り、いかなる事とは知らずといふに、老人點頭して、定にさる事あり。昔は人こゝろ猛かりしや。又善根といふ事も思はざりけるにや。そのころ此所へ入來るもの、僧侶俗人にかぎらず、再び出す事なし。みな打殺して路銀を奪ひける事ありしと、我祖父の語りき。されば今山際を掘穿てば、古き髑髏の出る事多ければ空言ならじとおもひなす。今はからず氣遣ひ玉ふべからず。斯る御治世に左樣の事ゆめ〳〵あるべからず。こゝろゆたかに逗留あれと、白地なる物語に、强て立難く、死地に入て活といふは、加樣の事ならんと逗留に極めければ、萬叮嚀にとり賄はれ、却つて心魂入りけり。諺に恐しき事なし、只人のみといへり。されど舜日堯年の恩澤四海に溢れ、野に伏山に臥ながら、何に恐るゝ意なし。猶又佛法の敎へまめやかにして、かたましく貪るに倦ざるものをも、因果應報の道理をしめし導かれて、自らその理に至る。實に王法の補佐とも謂つべし。

〇旅

樹下石上を宿とせる身なれば、今宵はいづくを泊とかすべき。只心の欲する所に行きて、或年日向國鵜戸山に詣して、濱傳ひに姪の津などいふ所を過て、大戸の浦といふ所に來る。はや日も黄昏に及びければ、そこ爰を乞けるに、此日共家障る事のありとゆるさず。また强て求むべきにもあらず。我此地にさせる因緣もなかりける故ならんと、ある濱際の辻堂に宿りけり。西行上人の

世を捨てゝ身はなきものとおもへども雪のふる夜は寒くこそあれ

と詠れしも、かゝる折にや有らんなどおもひつゞけたり。時は霜月の末にて、濱風いと烈しく、岩打波の音も爰元により來る心地ぞする。手しゞまり足こゞえていと疲れて、たゞ夜の明るを待居たり。誰折

敷し峯の椎柴とかやいへる、古き歌をおもひよりて、翌日朝地藏尊の臺を白土して塗りおけるに寐ながら横に樂書す。

　　また泊る人もありなば憐しれ枕につらき磯の波風

かくてもよしとはおもはざれど、折にふれていひ出せるのみなり。後飫肥の城下又姪の津、泊津などへも度々行ければ、二年ばかり過て、此浦を通りて彼草津に至り見る。ありしに替らず、其墨色誰も消捨ず、其儘に有けるが、又感慨少なからず。予五年ばかり遍歴の內、斯ることもさはなりき。肥後の國川尻といふは彼白川の地なり。此に蓮臺寺といふに檜垣の女の塚ありと聞て至りぬ。小堂の內に一石を安ぜり。「水は汲む苦もなく石の雪佛」と無緣の手向し、大慈寺といふ伽藍に參りて納經す。僧のいふ、もはや黃昏に至れば、明朝施印すべし。外面なる堂に行てとまるべしと申さる。やがて行て見れば、此川の渡し場とみえて、柳陰に小船あり。少し土手の上手に家あり。すなはち莚をかりて敷ものとす。誠に小き堂にて、土間に石を積み小高くして、何か佛を安置す。其前に漸莚敷計りなり。戸は觀音格子とかやいふものにて、內外よく見えぬ。殊に霜月の頃なれば、其夜雪いたふ降て、格子の間より內へ吹込川風寒くして惣身暖りなく、身をかゞめぬの字に成りてまどろみ居る。夜更て狐ども多く出來て、格子の間より內を覗き、カン／＼となきけり。狐は夜寒になくものなるよし、霜狐といへる。おもふに、此に入て寐たくやとおもふらんと、戸を明れば恐れおもふや入り來らず。閉置けば替る／＼來り、只カン／＼と云てかしましければ、此夜も寐られず。朝とくより起、彼寺の門の明を待得て往て、納經簿を乞て立にけり。又これは冬の事にはあらざりし。九月十三夜に誠に清光なりし。相模國藤澤より入て江の島へ渡りて暮れければ、島の此方なる濱邊に船渡し小屋六助といふものあり。濱邊の松原の一軒家也。近きあたりに家もなければ、泊るべき所もなく、則ち此家に宿を乞て泊りぬ。夜に入て雲助といふもの、いづくよりか四五人來り集りて博奕をなす。元より手挾き小家なれば、枕元にはかしましく罵りて

更に眠られず。餘たゝび起て圍炉裏に向ひ、たばこを飲てあれば、打負たるものは、かたへに打轉て、我をじろ〳〵見て、同國は何國の人かなど問に、氣味惡しく寐られぬ儘に、外へ出て見れば、月は半天に掛り、向ふに繪の島黑くみえ、左は鎌倉に續き、七里が濱なり。右は松原遙につゞきて、砂濱は霜を敷がごとく輝きたり。うか〳〵と歩み行けば、そこ爰より狐多く出て、洲濱の蟹など取るにや。あちこちと徘徊し、われに付隨ひ來る。東に行ば東に來り、西に行ば西に來る。予も宿に歸りてもねられず、ことに怪しき體したるもの共の、打かたらひあらそふ事既に事出來ぬとおもふほどなれば、それもうとましく、終夜濱に遊び、狐と倶に夜を明しける。まことに月日を踰る旅中なれば、さま〴〵の事もありけり。

○山神の怪異

江州大津の町に祐庵といふ醫師、同國膽吹山の麓に賴まれ療治に往けるに、逗留の中、彼山藥草ありと聞ければ、所の人を案内させ、あちこちと見廻りて、異草二三種と盆山の石一つ取歸りて、石は床に置、草は庭に植させけるに、其夜石を打事夥し。家内大きに騷ぎ、何事なるやとおそれけれども、祐庵元より强氣なる人なれば、狐狸の所爲なるべしとて騷がず。夫より毎夜打ける故、毎朝手ごろ成る石拾四五程ヅヽ溜りて置所もなかりしかば、空地を掘て埋みけり。後には又砂を打て戸障子の透より內に入りて、朝々の掃除に家內も困り、祈禱すべし守札を張んといへば、祐庵更に同心せず。自然と止むべしと捨置ぬ。折ふし彼膽吹山の村人來りければ、此樣子をまづ物語りしに、村人いふ。是は彼山より取來り給ふ石を、山神の惜み給ふならん。兎角元の所に返し給へ。我持歸り山に納むべしとて、彼藥草幷盆石とりて歸りける。其夜より砂石を打事も止みて、また何の怪敷事もなかりけり。此に不思議なることは、其後祐庵、表の溝を普請しけるに、風とおもひ出し、積石の不足に彼埋置たる石を用ゆべしとて堀せけるに、ひとつもなかりけるこそ、祐庵も驚きたり。誠に希有なる事也。是に付ておもふに、靈山などに詣

でぬる時、其心得あり。陸奥金華山、或は富士山に禪定して下山の時、麓の砂ふるひといふ所にて、かならず新しき草鞋に替て、古きを脱捨置事也。殊に富士山の砂は、踏おろしたるほど、其夜山に上ると申傳ふ。實に數百年の間、夏の中日々夜々同者の踏落す所の砂夥しといへども、曾て其麓に砂のたまりたる所なし。只脱捨し草鞋は山をつかねたるが如し。昔源廷尉義經公、右大將家の勘氣を蒙り、京をひらき吉野に忍び隱れ居給ふとき、武藏坊辨慶用の事ありて出行しに、時極寒なれば降雪谷を埋み、其道路もさだかならざるに、狐一疋先へ歩みゆく。辨慶少しも心にかけず道を尋行に、雪の中なれば白晝のごとく、日の暮たるとも知れがたし。兎角するに道たしかならねば、辨慶思ふに、扨は彼の畜生めが進行にや。斯て大道人を迷はせんとす。にくき仕業也。目にもの見せんと、かたへなる大岩のありしを輕々と引起し、微塵になれと後より彼狐に投けるに、狐には中らずして、向ふなる大岩に打當り二つに成て、狐はカウ〳〵と鳴て逃去りぬ。辨慶悔しとおもへどもせんかたなく、その儘にして漸くたどり着ぬ。頓て臥たりしに、晝の草臥にやありけん、大にうめきければ、大の法師のおそはれたるや。家内もひゞくばかりにうめく音に、みな〳〵騒ぎ起しければ、大汗をかきてあり。扨又寐入らんとすれば、はじめのごとくいかなる事やと、おの〳〵不寐す。主の坊出て其樣を問ふていふ。いかに貴僧の如き勇武の人、いかでか狐狸の妨ぐべき。おもふに貴所は聖寶僧正の大法修行の地なりといふに、扨は清淨の靈場を打崩しつる咎めなるべしとて、夜の中彼所に行至り、破れたる石を覗き石の下を見れば、蟹の打ひしがれたるなどあり。實にも殺生の大禁を犯せしなりと、年頃の行法をもて祈念し歸りぬ。斯てより何の故障もなかりけるとなり。誠に權者の行場など、假初にも無禮すべからず。是等は辨慶なればこそ、早くも心付て懺悔しけるこそいとも尊けれ。

因云、石を打事家などにては何ぞの祟りなり。途中にて打事あり。これは土民の云、天狗道筋に行還りたる時なり。先何々の山にて山神の森とて、大木二三株四五株も茂りて覆ひたるごとくなる所

は、その道なりと知ると云へり。佐伯玄仙といふ人、豐後杵築の産なり。今京に住めり。この人の云、國に在りし時、雉子打んがため夜込みに行たりしが、友二三人銘々鳥銃携へて行けり。とある山道へかゝる所に、左右より石を投たり。既に中りつべく覺て大に驚きたる、中に能く心得たるものあり。押靜め先下に座せよと云て、言を交えず默して居るに、夥き大石頭上に飛違ふ程なり。そのひゞきおびたゞし。暫くして止みければ立上つて行ける。心得たる友の云樣、是を天狗礫といふ。嘗て中るものにあらず。若あたりたらんものは必ず病む也。また此事に逢へばかならず獵なし。今宵歸るには道遠ければ是非なく來るといふ。果して其朝ひとつも打得ずして歸りぬとなり。

○水　虎

右の佐伯の曰、田舍人は心猛く加樣の事をものともせず、豐前の國中津の府と云ふ城醫の家に、書生たりし時、其家の次男或時川岸を通りけるに、水虎の水上に出て遊び居たり。思ふに此ものを得んは獺肝などの及べきかはとて、頓て手ごろなる石をひとつ提げ、何氣なく後の出る所をばねらひ濟して打落しけるに、何かはもつてたまるべき。キヤツトと叫び沈みけり。扨は中りぬる事と見廻すに、水中動搖して水逆卷怖しかりしかば逃て歸りぬ。夫より彼のものに取付て物狂はしくなり、家根にかけり木にのぼりて、種々と狂ひて手に合ず、細引もて括り置けれども、すぐに切てければ、鐵の輪を首に入れて、鐵鎖をもて牛部屋の柱にしばり付たり。既に一月餘に成しかば、鐵輪にて首筋も裂破たりしが、さらに退べき氣色なし。彼是五十日計なり。或時近き寺に大般若有て、其札を家毎に受たり。此家にも受來たり、先彼ものに戴かせければ、身震ひして即時に除たり。誠に不思議の奇特、尊き事いふ計りなし。始て此經廣大の功德を目前に見たりしと語りける。予もまたまのあたり知たりしは、日向下北方村の常右衞門といふ人、十二三才の頃、川に遊びて河童に引込れしと、連の子供走り來て親に告たり。おりふし神武の宮の社人何の河內と云人、其座に聞て、頓て其川に走り行、裸に成て脇差を口にくはへて、彼空洞に飛入り水

底に暫く有て、其子を引出し來り、水を吐かせ藥を與へ、やう／＼にして常に返り、今に存命也。然るに翌日其空洞の所忽ち淺瀨と成りにけり。所々の川には必ず空洞の所あり。深さを知らぬほどなり。そこには必ず鯉鮒も夥しく集れども、捕事を恐る。また卒爾に石などを打込事を禁ずるなり。彼邊の川渡らんとするものは、河童の來りたる、往たるを能く知るなり。又曰、此ものは誠に神變なるものなり。生たるに逢へば必病む。知らずといへども身の毛立なり。たとへ石鐵砲などに不意に打當る事有れど、其死骸を見たるものなし。常に其類を同して行來り、又は一所に住ものと見ゆ。死せざる事もあるまじきに、つゐに人の手に渡らざると覺えたりと語る。かく恐ろしきものなれど、又それを壓(オス)ものあり。猿を見れば自ら動く事能はず。猿もまたそのものありと見れば必ず捕んとす。故に猿引川を渡るときは、是非に猿の顏を包といへり。日薩の間にては水神と號して誠に恐る。田畑の實入たる時刈取るに、初に一かまばかり除置、是を水神に奉るといふ。彼邊は水へん計にあらず、夜は田畑にも出るなり。土人ヒヤウズヱとも云。是は菅神の御詠歌なるよし、此歌を吟じてあれば、その障りなしといふ。

　兵揃に川立せしを忘れなよ川立男われも菅はら

肥前諫早兵揃村に鎭座ある天滿宮の社家に申傳へたり。扨此社を守る人に澁江久太夫といふ人あり。都て水の符を出す故に、もし川童の取付たるなれば、此人に賴みて退るなり。こゝに一奇事有。然れども我慥にその時其所にあらず。後年聞傳へたるなれば、聊か附會の疑心なきにもあらず。彼飛驒山の天狗桶の輪にはぢかれし類ひにも近ければ、云ずしてやまん事勝らんとおもへども、又よき理の一條あり。見ん人是を以て其餘の虛說とする事なかれ。只この一事氣機の發動は鬼神も識得せず、一念の心頭に芽すは、我も不レ知の理をとりて、無念無想の當體を悟入すべし。同州宮崎花が島の人語りしは、先年佐土原の家中何某、常々殺生を好みて、鳥獸を打步きて山野を家とせり。或日例の鳥銃を携て、水鳥を心がけ、山間の池に行。坂を上りて池を見れば、鳥多く見ゆ。得たりと心によろこび、矢頃よき所に下居て、

既にねらひをかけるに、かの水神水上に出て、餘念なく人ありとも知らず戯れ遊び居たり。扨は折あしき事哉と、にが〱敷おもひ、頓て鐵砲をもち待居たり。きせるをくはへながら、筒先を當て此矢先ならんには、たとひ惡鬼邪神、もしは龍虎の猛きとても、何かははづすべきと獨り念じて居たりしが、いや〱よしなき事也と取直すに、如何はしけん。計らずもふつと引がねに障るや否や、どうと響きてねらひはづれず。かのものゝ胴腹へ中りしと見えて、はつと火煙立のぼる。こは叶はじと打捨て飛がごとくに立歸りけり。歸宅の後もさして異變も無りしかば、心に祕して人にも語らず。又彼地へも年を越しても行ざりけり。かくて何の障りもなく、或時友達打よりて酒呑み遊びて、たがひに何かの物語りに、此人思はず此事を語り出し、世にはおそろしき事も有ものかな。夫より二三年一向彼所へ至らず。さらに打べき心もなかりけるに、不運なる水神かな。自然と引がねにさはり、放れ出たるには我も驚きたりと語るや否、ウンとのつけに反返り、又起直りて云樣、扨々今日唯今はいかなるものゝ所爲なる事を知らざりしに、此者の仕業と聞て、其仇を報ずるなりと罵りかゝり、終に病と成りて死したりと云。誠に此事は論ぜずして口外にせざれば人も知らず、況んや鬼においてをや。かの豆を握つて鬼に問に、問ふ人其數を知れば、鬼も知り、無心に掴んで人其數を知らざれば、鬼もまた其數を知らずといふも、同日の談なり。

○大般若經の功德

備後國三好より二里山奥に一村あり。わづか三十軒計、そこゝに家居せり。則廣島の領分也。城下迄は二十里ばかりにて、年貢米納方不自由なれば、山谷に藏を建、米納を勝手に致させけるに、大なる蛇出來て藏に入り、其米を食ふ事夥敷、その米を食ふ音邊りに聞ゆるほどなり。二三日の中に十石計の俵數盡たり。百姓是を見聞て大に怒り憎み、大勢集り彼の蛇を狩出しとらへ、頓て火をもて燒殺しけり。然るに其日より村に怪敷病はやりぬ。其病は男女老若に限らず。鎌をもて我足の指より段々切捨て、左

右の手の指まで、悉く一本〳〵に切る。ふしぎなるはさらに血の出ざるなり。手足二十本の指をきり捨れば則死す。中には齒を以て次第に食切盡すもあり。かくて日を經て、さらに村中半分に至り、既に一村に人種絕んとす。此時先にいへる三好に愚極和尙の結制の聞なれば、其村のもの來りて、この事を歎き願ひにければ、和尙不便に覺して往玉ふべしと也。從者の僧の曰く、夫程の惡蛇の災ひ、なか〳〵容易に得脫し難からん。若奇特なからんは一宗の恥辱、和尙の瑕瑾、偏に佛法の退轉なり。往かざるにはしかじといふ。和尙聞て尤なり。去ながら又これは大い成る災として、一人の事にあらず。實に國家の大災なり。救はずんばあるべからず。またなどか法力の加護なからんやと、押てその地に行玉ひ、頓て施餓鬼をなし、大般若を轉讀し玉ひしに、實にも佛日地に落ず、忽ち怪靈退き止んで、殘る民家平安なりしと、金福寺松宗其衆僧の中に交て、現に見えたりしと語りぬ。

○狐怪

播州明石領下宿といふ所に結制すべしと衆議一決し、京都玉舟和尙を懇請するに定り、頓て使僧を上さんとす。其寺の住持使僧に賴みて、京都に出て歸路に、伏見稻荷前にて、土偶の赤白の狐を二ケ買て來り給へ。此寺の山甚だ廣く下知の屆がたく、時として何ものか來て諸木を取り、修復に心當たるをも、いつしか皆になりぬ。稻荷を勸請し、その守護とせんなど戯れて咄すに、使僧京に上り、玉舟和尙に賴みければ、許諾ありて下り玉ふになり、使僧返事を得て下る。伏見にてふと此事おもひ出しければ、則二ケの狐を調へ下り、寺に返事をさゝげ、又かの土狐を出しければ、住持笑つて、扨は忘れずも能く調へ來り給ふとて、頓て臺所の韋陀天の側に居置れぬ。かくて程無く、京より玉舟も下り着有つて、一度の執行あり。然るに寺の小僧狐付て罵りわめくを聞ば、さては遠方の所へ我を呼下しながら、今に住所も〆さず、又食物も與へず。いかなる事ぞや。われ小僧に恨みはなけれども、この事を言んために託せり。はやく住べき所の地を〆玉へと云に、おの〳〵何事にやと不審しけるに、住持はつと心付、誠に其

事ありけり。此間の繁用に忘却せり。誤れり〳〵と、頓て小き祠を買求め山際に勸請す。又小僧の云、さて辱し。迚もの儀に、この小僧を退ざる內、玉舟和尙の三歸戒を請たし。宜しく推擧し給はるべし。左あらば永く佛果の緣と成るなり。偏に願ひ給はるべしと乞ふにまかせ、具さに和尙に申入れて、頓て三歸戒を授與し給ふ。夫より永く山の守護となれるより、木を伐、草を刈、下草を盜む者なく、年を追て山肥たりとなり。又長府の城下に某寺といふあり。其寺山際なれば土藏も山寄に建たり。或年土藏の二階に狐子を產り。此寺に惠淨と云出家あり。少し愚成る生れなりしに、或時土藏に入り、二階の狐の子を見ておもふやう、狐はよく人に幸をあたゆるもの也と聞。我心を付て惠み置ばやと、夫より折にふれ小豆飯を焚てあたへ、又油揚を食せなどし、寺の事なれば折々齋非時の調菜あれば、かならず持行て心を添てはごくみける事、既に二月許にもはや成ぬ。成長せしかば親狐に連て山へ歸りぬ。されども何の福も來らず。惠淨或夜獨り言に寐言のごとくいふやう、さても〳〵憎きやつかな。已れ六十日計の間、隨分心を付て種々の好る食物を我さへ食せずして與へけるに、一言の禮謝をもせず。增て何の幸ひをも得さしめず。恩を知らざる仕方かなといひけるが、翌日朝殊に見事成る長芋拾五本、惠淨樣へ御上被ㇾ下候へと、飯焚の者へ申捨て歸りけり。惠淨は先夜云しとも覺えざれば、それとも覺えず。是はよきものを得たりとて、頓て調味し、我も食し人にも振舞けり。かくして又何の事もその後無くして七月十日頃に成にけり。八百屋より書出しあり、長芋十五本の代を取に來りければ、惠淨大に驚き吟味しければ、召仕の男に妖て狐の取に行たりとなり。惠淨腹立けれども詮かたなし。聞人、絕倒せずといふ事なし。是世上の人多く稲荷と號し、狐を祈り幸を得んと思ふ人十に八九あり。其類ひの徒に聞さん事をおもふて記せり。

○景清墳

大友宗麟豐後に跋扈し、隣國を押領して、日向に來り神社を沒收す。其中に八幡宮といへば、武人の尊

むべき神なりとて、其まゝにさし置ぬ。これに依つて、神人すべて八幡宮也と云て其難を避たり。ゆへに今に邑作村の火々出見尊の神社を高屋八幡宮といふ。池內村の神武天皇の宮を奈良八幡宮とし、その外下北方村に若宮八幡宮あり。又景清八幡宮あり。又生目村に生目八幡宮あり。これも景清なりと云傳ふ。景清みづから目を繰出し盲目と成し時、その眼を祭ると、又上北方村に妙法寺といふ眞言寺の境內に古墳あり。文字もなし。景清が塚なりといふ。其傍に景清が女の人丸姫の碑石もあり。父景清を慕ひ來りて、こゝに終れりとなり。土人の說に、先年諸國巡檢使此塚は景清なる事を聞て、かく

　影清くてらす生日の鏡池末の世迄も曇らざりけり

則石面に手向らる。傍に老人有て感稱し、恐ながら中の五字を加筆仕りたしとて、水鏡とあらためけり。のちに考へみれば景清が法名なりし。

　水鑑景清居士　　建保二年甲戌八月十五日

と云々。予上總國布施村といふ所に至りけるに、一寺の門前に大なる五輪あり。怪みて問ければ、景清が墳なるよしいへり。此邊上總介忠常が古城もあり。昔の國守の館なりしが、景清も上總七兵衛といへば爰に有しと見ゆ。後世土人の建けるにや。又云、此墳寺の門前にて出入の妨にも成り、又寺內ならば近く朝暮の勤行をも聞べし。內へ引んとて大勢かゝり取退んとせしに、何地より出來りけん。大なる蛇有りて石を纏ひ、更に人を寄せず。おそろしき體なれば、おの〳〵逃退てける。其後曾て人寄付ずとなん語りき。日向國佐土原領何村といふ所の途中に、常々雨降て地の濕たる時、かならず早く乾く所あり。年來怪み思ひ居たるに、ある時馬の稻負ひたるが踏込ける。頓て引立下を掘て見れば、方一丈計石を積みて窖のごとくせり。中に石の臺一ケありて髑髏を置たり。傍に少き壺幾つもあり。又側にも髑髏有り。其中段にあるもの、自餘の人の頭に似ず甚だ大なり。上下の齒誠に大なる事、中々尋常の人ならじといへり。領主聞て、左樣の古墳あばき置べからずとて埋られしと語る。予それを聞思ふ樣、むかしよ

り大なる人もありといへども、先史冊に見えたるを按ずれば、田原の又太郎忠綱ならんか。誠に此人宇治川の高名もさせる功無きを憤り、かつは源家の繁榮を見て、平氏に屬せしを恥て跡を隱せり。もし此邊に退去せしか。その人に勝れし事三ツ、聲十里にひゞき、力六十人力、その齒一寸と云。

○强勇

其後杵築家中何某といふ人あり。常に殺生を好み、山野を家とし鳥獸を躮ひ歩きけるに、或夜いつものごとく獸徑をさして山に入る。

此獸徑といふは、獸も魚鳥のごとく通ふ道あり。山に馴れたる人は能く是を知りて、徑たる所を見留て朝立を擊事也。是を獸徑といふ。鳥を鳥路と云ふ、魚を魚道といふ。庭訓に狸の澤渡りとあるにおなじ。伏猪の床といふ事、歌にも詠み來る。かならず有事也。江州園城寺の人云けるは、木の枝を挑め、木の葉、柴の葉を數丸めて洞のごとくす。人工の及ばざる程なりとなり。

夜を明す處に、何かむかふに怪く光るもの有ければ、闇夜なれば定かならず。こは獸にてはあらじ。何なるや試みんと込めたる玉なれば、少しも疑義せず切て放すに、元來手垂の功者なれば、やわかはづるべき、そのもの矢庭に走り來る。其體目に餘る計りの異形のもの、兩眼稻妻の如くなり。今は叶はじとまた手早に玉二ケを込るや否、つゞけ打にどうと打たれど、其のもの少しもたぢろかず。その鐵砲をかい摑んで引とらんとす。何某元より大力の聞えある人なれば、日頃の力に十倍して、やらじと此方へ引戻す。互にあなたこなたと引合ふうち、難なく何某引勝ければ、彼のもの何地へか行けん見えずなりぬ。則宿へ歸り見れば、筒を强く摑みたると見えて、本より末まで樋の如く左右に太く深サ指計なる筋、爪跡と覺えて彫穿てり。剛强の人ならずば中々たまるまじ。其後とても何の障りもなかりし。いかなる妖物とも知れず、若狒々などいふものならんか。したゝかなる力なり。鍛えにきたひし鐵筒を摑み切たるは、恐ろしといふも愚かなりと語りぬ。此鳥銃今に其家に有り。露沾と銘有るよし聞り。夫れ獸を見

踵及びたるに、熊ほど强力なるものはなし。薩州にて獵人の山の岨をねらひ往けるに、濱邊に大熊壹疋子を連れて蟹を取らせける。傍なる大石を引起し、手してさし上げて、その下に子を入て蟹を取らせる也。子は餘念なく食居ける。親熊は四方を見廻す所を、忍び寄て思ふ儘に月の輪をねらひすまして打放す。何かはもつてたまるべき。彼の石を打落し倒れて、一箭に留りければ、村に歸りて人を集め、親熊は取得たり。子熊を取らんと十人計して石を引起さんとするに、更に動きもやらず。追々人を増て三十人計りにて、やう／＼引起し見れば、子熊はひしげて紙のごとし。是をもつて計りみるに、左程の大石を輕々敷引立て、大切に育てぬる子を下に入れ置事を容易しと思ふに有らざれば、危き事はなすべからず。然れば先四五十人の力あるべきかといへり。又春になれば二ケ村三ケ村集りて狩をなす。鳥銃を打もの數十人、聢よき所の少し高きに並び居る。前に草原の廣みを置て目障り無き樣にす。勢子數百人山に分入て追立、此廣みへ出さんとす。山の後より廻り、手々に割竹棒にて聲をかけて追ふに、茂りたる下にかゞみ居て、一同に並びて追下すに、其人に摺れても中々動かず。若棒に當り彼の竹に打るゝ時は馳出、彼廣みに途を失ひためらふ所を、爰方より打事なればはづるゝ事希なり。

○雁風呂

世俗に、雁は秋來り春歸る。其所常盤島といふ。蝦夷の地也と、按ずるに、無量の雁此一島に限りて往にあらず。南部津輕口より來るは左も有なん。中國、九州等に來るものは朝鮮の地に在なるべし。勿論常盤島といふ地名は、古來よりの所說ある事なり。中華にても北方に住て南に來る也。夏小正曰、雁以ニ北方一爲レ居云々。又月令廣義にも、候雁北、〔割註〕漢書鳴。雁知レ時之鳥、熱歸ニ塞北一、寒氣來ニ江南一、沙漠地ハ乃其居也といへり。云傳ふ。奥南部の地に雁の渡り來る海上甚だ遠し。故に各小き木の枝をくわへわたる。中路にして此木を海に落し、夫に乘てしばらく羽を休め、又くわへて立、南部の地に到る時、こと／＼く捨去。然して春歸る時も又、此木をくわへて歸る。所々にて擊とられ羂に懸りて、多く

の人の手に落る。故にいつにても此木跡に殘りあるを、捕へられし雁の爲に、此木をもて風呂を焚く。諸人に入浴せしむ。其追善也。これを號して雁風呂と云々。

淮南子曰、雁從レ風飛、以愛ニ氣力一、啣レ芦而飛以避ニ繒繳一矣といひ、芦の葉をふくむ雁がね音を鳴て心なき子は親の類ひ、ともよめり。雁は口に芦を含んで音を立ぬよふにとするなり。若し音を立れば繒繳に逢事もありとなり。繒繳はいくるみとて鳥をとる具なり。

予南部の人に聞しに、事蹟何所といふにや知らず。しかれども強てなしとも仕難し。予九州日向にある時、或もの鶴を撃たりしを買て、おの／＼美とせしに、何か口のうちにものを含たり。押開きて取出し見れば、いかにも太き人參の生にてありけり。爰に於てみな／＼歎息し、誠に廣き海上を渡り來る、必ず勞れ弱るべきを、あらかじめ察してくわへ來るなるべし。其靈藥たる事を知りける事の怖しとて感じあへり。又雁風呂の事は信州にもありと未レ考。風呂を焚て人を浴せしむるは功德ありとて、田舍に多くする事なり。其事古し。東鑑建久三年の記に曰、三月二十日壬辰、於ニ山内百ケ日溫室一、往來之諸人并土民等可レ浴也。と札を路次に立らる。これ法皇御追福也。俊兼奉行之。今日御分也。平民部丞盛藤次等沙汰之。以ニ百人一被ニ結番一、雜色十人在レ此云々。予も所々にて右の施浴に逢し事あり。其風呂といふも、窪風呂、石風呂、売風呂、箱風呂、水風呂等あり。四國には竈を突て、その上に大なる壺を置き水を入れ、下より直に壺を焚て入るなり。又濱邊々々には風呂を焚て沸時、貝を吹、竹を吹て知らす。懸り居る船より是を聞て、陸に小船にて渡りて入る也。江戶の川中に舟の錢湯あり。上方にて德風呂といふ。又五右衞門風呂の名ある殊におかし。又俗に雁歸れば、燕同所に居て來春をなすといふは非なり。雁は渡る鳥也。燕は蟄する也。月令通故曰。玄鳥至。玄鳥燕也。紫胸輕小者越燕也。胸斑聲大者胡燕也。秋分歸去。乃入レ蟄。得ニ春分後中氣一。乃出レ蟄至云々。日本も又同じ。但馬國城崎にて聞し。冬に至りて

は蕪多く海邊の穴に蟄す。尤入海などの南に向ひたる岩窟に入て、石にひしと取付たり。動もやらず、目を閉て無情の如し。春に至れば追々翔り出づ。九州には鶴多し。尤捕る事制禁也。丹頂は少し。多くは灰毛黒色也。日向にては鍋鶴といふ。予初彼地に在し時、白鳥をも度々見たり。年を追て希なり。故に不審して問ければ、土人の曰、其事也。此邊はむかしより田を苅取て跡を捨置ば二番稻生ふ。是を干土田と云。此田へ水を溜置ば、春に至り古株より苗自然に生ふ。此稻は春毎に種蒔せしより米も能、穀數も倍して出來る也。然れども人世智に走りてその事をせず。冬に至れば鋤返して麥を蒔て粮に充つ。故に鶴の下る事少し。殊更制禁あれども打捕る事多き故なり。誠に左もとおもひ合せぬ。實に鶴雁などの智なる感ずるに餘り有。殺生禁斷の地と、尋常の領分と纔に溝或は畦を界ふに、其禁斷の領境までは集り、一羽も其畦を越る事なし。先にいふ鶴をもとめ得たる時、常に庖丁を能せる者に賴みければ辭退していふ、鶴を解に禮式あるよしにてそれを知らず。尋常の鳥の如くに解ときは、必ず祟り有り。解事すら斯の如し。況や擊捕に於てをやといふ。實もとおもひたり。鶴經曰、二年落㆓子毛㆒易㆓黒點㆒。三年頭赤。七年飛薄雲漢。又七年學舞。復七年應㆑節晝夜十二鳴。六十年落㆓大毛㆒革色生。色雪白泥水不㆑能㆑汚。百六十年雌雄相見。精不㆑轉孕。千六百年飲而不㆑食云々。

松も大夫の官に叙せられしは、人よく知て美談とす。柏の大夫に任ぜられしをば、人多く知らず。

五雜組曰、嵩山嵩陽觀有ニ古柏一株一。五人聯レ手抱レ之。閣始合。漢武帝封ニ之大將軍一、唐武后封ニ之於五大夫一。世但知ニ秦皇之封一レ松。不レ知レ封レ柏也。

樹の幸不幸とやいはん。然れども元是非情なれば幸にも誇らず。不幸を歎かず。予諸州を經たるに、名木佳花ありて、いまだ人の不レ知も有り。思ふに柏樹に等しきが、ゆきて見たるを記す。其不レ往して不レ見ものは、又不幸とやいはん。

○異木

日州高岡の庄馬濱といふに、香積寺とて禪寺有り。境内に梅有り。月知梅と名づけ、八重の白花なり。高丈に過ず。不レ撓不レ造して笠のごとく、周圍十間に餘れり。花の盛には濃香芳郁として五六町の外に薫る。百花一面に上に群り咲て、更に枝も見えず。圓き岳などに雪を積たる如く也。薩州先代の太守、此月知梅の熟字いかゞ也とて、知月梅と呼で詩作有しが、忽焉として此梅枯んとす。爰に於て古名を改ずして、今に其名を呼りといふ。此梅樹の爲に一寺を置る。故に香積寺と號す。先年火災有て其樹半燒焦れたれども、今又元の如く榮ふ。此樹年々はびこり出る。此内より枝の下りて地に付ては根になる。別の木として束を設たるに似たり。其故百本に及ぶ。是を以て火災に逢りとても、先々に根有て枯べき樣なし。或人座論の梅といふものなりしといへども、餘國にて見たこ事なし。又云傳ふ、難波の梅といふ物、八重の白梅にして香氣世に類ひなしといふ人あり。されど此梅も見ざる所なれば云難し。但しおもふに、是一本を云に非ず。しかれば今一本を以て夫を指といふは非なり。皇居の邊りに有しを、王仁の鳳歌に詠しなり。例せば篁の左遷の時に、「人には告よ蜑の釣舟」と

詠ぜられしも、その場其所をさせり。又磯馴松などいふも同義也。因にいふ、今攝州須磨寺に有る武藏坊が書たる制札に云、此花江南の所無也、於二一枝折盜之輩一は、任二天永紅葉之例一伐二一枝一者可レ剪二一指一者也。壽永二年二月と有り。是を若木之櫻の制札也とて、人にも見せ世にも云傳ふは非なり。是は梅の制札なり。下學集云、江南の所無梅の一名也。但日本の俗不レ呼歟。荊州記曰。陸凱與二范曄一相善。自二江南一寄二梅花一枝一。詣二長安一與レ曄、並贈レ詩曰。折レ梅逢二驛使一。寄與隴頭人。江南無レ所レ有。聊贈一枝春云々、蓋取二此第三句意一而云二江南無所一歟とあり。

越後の國白川庄木島村に梅樹有り。親鸞上人手自植給ふといへり。此木傘蓋の如く立覆ひたり。紅白の千重也。夏に至り實を結ぶ八顆あり。其秋周りに七子、眞中に一子あり。故に八房の梅といふ。月を經て熟すれば、周りの七子はぜりて落るなり。中なる一つのみ殘れり。百姓の庭にもち傳へり。今に堂を安ぜり。

○泉州堺妙國寺の蘇鐵は世の人知る所にして、北の庄金光寺といふ時宗の寺に藤有り。相傳ふ。後小松院其美花なる事を叡聞に達して、移して內裏に植しめ給ふに、其樹枯んとして、或夜帝の御夢に、老人出來て愁奏して一首の歌を奉る。

思ひきや堺の浦の藤浪の都の松にかゝるべしとは

帝感じ思し召され、本の地に還し給ふよし、今に數株あり。

○奥州藤川宿より左の山間に入こと一里計りにして膝打松あり。高さ五六尺、匍匐して笠のごとく、義經の腰懸松といふ。傍に辨慶が硯石とて凹なる大石有。堺安立町難波屋何某が庭なる松に類して、周り數十步。

○豐後國に浦頭成といふ所の往來に一大松あり。此前を馬上にて通れば、かならず落馬す。依て如何なる人も步行す。ゆへに下馬松といふ。中昔大友宗麟の家士吉弘嘉兵衛といふ人、此所にて討死す。是大友十貳騎と稱する壹人なり。此靈有て後人碑を松下に建たり。今は大きにはびこり數畝を覆ふ事也。

○相州金澤三島社には蛇木有り。名付て柏の枯木あり。長サ貳丈計り、或は太く或は細くして、自ら龍の形せり。角あり、足あり、頭尾全く備はれり。能く見認れば怖敷程なり。

○四國通略の內、伊豫國の生木の地藏とてあり。大に繁茂せる楠あり。半に地藏尊を彫刻せり。下より見る所二丈計り、岸にさし覆ひたり。空海大師の作といふ。面貌より衣躰全滿せり。想像誠に常人の製作とは見えず、至て殊勝の尊像なり。

○奧州原の町といふより出羽へ越るを野澤越といふ。難所なり。此山奧の纔かなる村に泊りて、朝起出て表に砂利留に横たへあるを見れば、石にあらず、又木にあらず。よく〳〵心を付れば傍に着たる杭なり。半は石、半は木なり。〔割註〕墨客揮犀ニ云、壺山ニ柏木一株有リ。長サ數百尺、其半化シテ石ト成。半は堅木也、蔡君謨見て怪み、運びて我第に置と云々。」或は片、或は折なまじいなる炭の如し。宿の者に問へば、此木は箇樣に捨置內、いつとなく石となるなりといへり。予が見し所は、大坂天滿川崎に東照宮の小社有り。境內に數株の楠有り。中に石と化して有る多し。思ふに楠樟二種あるか。數百年年を經て其儘なるあり。又年數百年にも滿たずして、かくのごとく石と變るありと、すべて大樹松楠に過ず。餘木と變りて壽永く、故に多く有にもあらず。

○相州箱根の湖底に、神代杉とて大木の埋れ有り。土人取來りて、小箱など細工して往來の人に鬻ぐ。水底なれば自由に得る事難く、少しづゝ水入して伐取るなり。文理鮮明にして至て堅く、數百年地底に有れば色薄黑なり。また但馬國湯の島、田の中の土中にも有り。同じく杉の木也。然れども其艶と堅き事は、箱根の杉に及ばず。年數を積故か。水底にあらざる故か知らず。

○世に杉の好樹とするは、薩摩にはしかず。此木は屋久島より出す。今の大なるものは五圍七圍あり。何れも鶉目の文理玉を卷がごとし。是山中石間に生、相薄て長ずる故也。木目は一年にして一つを增也。それ木の強弱は、其地の勢ひによる也。肥後隈本より阿蘇に至る七里、左右みな杉の並木也。又城

の傍にあり。里計の岡あり。これに杉の大樹萬に及ぶ。山深くして自然には有べし。是等は皆植て其需を待もの也。誠に拾年の謀に木を植、百年の謀に德を植るといふは、宜なるかな。

○薩州の府に有し時、正月五日といふに櫻のいかにも數百有を人の賭れり。又出羽の羽黑にて、六月の炎暑の中に、桃櫻の花盛を見たり。寒暖の懸隔する星極の度數大に惑ふべし。これ日本の坤軸、艮土の涯際たればなり。

○丹後國由良の庄に厨子王丸の勸進芝とて、行路の者其邊の木枝を折來て此に手向とす。其前に古松あり。山椒太夫が首挽松といふ。厨子王丸本記に渡して、太夫父子を爰に鋸引して積年の讐を報へりと、嗚呼此木の不幸なるや、惡名を千載の後に傳へ、今道路の人の彈指に合ふ事、

何までも世に惜まれて幾春か、

と獨り松下に歎息せり。

○美濃國垂井青墓の間に、長範が物見の松といふ有。熊坂長範常に此樹上に有て、往來する旅客の動靜を考へて、手下の者を指揮せりと。今も若此樹の邊にて何によらず失へば、ふたゝび出ずと俗說す。

○蚺蛇

日州飫肥領折生迫〔割註〕迫とは谷間を云。餘國にて溪と云。鎌倉にて谷（ヤツ）と云。〕仙左衞門と云者、或年村の者二三人、晝より山へ柴薪をとらんとて行ける。そこ爰に別れ伐からげ、たがひに聲を懸合て山を下る。仙左衞門も獨りもと來りし道に下るに、一抱へ計りの大木道に横たはりあり。來る時はなかりし樣におもひてふみ越て通るに、何とやら足障り木の樣におもはざりしかば、立歸り見れば大蝮蛇の臥たる也。これに肝を消し、思はず荷ひたる木柴を投て走る下る。餘り周章たるにや。彼蛇の上へ投たり。何かは以て怺ふべき。木艸ざわ〳〵と音して一丈計り立上る。仙左衞門こは什はじと、命限りに走り下るに、跡より追來る事頻り也。今は一口に飮るべき處に、佛神の加護や有けん。山の尾崎を廻りて一つ

の大岩有りて差出たるが、常に此にていこふ所なり。頓て此奥に馳せ入、身を縮め息を詰て蹲りたり。間もなく彼もの見廻し、既に追來り此岩の上へずつと頭を差出して、四方を見廻し〳〵、時々紅の舌をひら〳〵と出したる様、更に生たる心地せず。只心中に神佛を願ひけり。其吐息自ら鼻に入て熱く臭くて堪難し。上にはしらず、下よりは見上てすくみ居る中に、木草音し引たりと覺ゆ。扨は十死に一生を得たりと心ゆるまり、何となく氣絶しけり。先の二人は宿へ歸り夕飯したゝめけれども、仙左衛門歸らざりしかば、いかゞせしやと打連尋行見れば岩下に絶入居たり。こは何事にやと、やがて水を與へて漸く人ごゝろ付ければ、介抱して連歸りぬ。かくて半年計り熱病を悩みける後、本復して予が宮崎の寓居にも來りて、此事を咄して恐れけり。惣じて日薩隅の間大蛇多く、年々噂無き事なし。或秋予宮崎より飫肥に至る。其間拾里餘殊に山深し。されどおり〳〵通る路なれば、連二人にて行。四里計り來り、山をかい廻り、向の道中に、尋常より少し大なる猫壹ツあり。人家も遠き所にいかゞして來つらんと見れば、又向ふに長五六尺計の蛇長く鎌首を揚げ、双方敵する様也。こは珍らしと跡より來る二人を制して見てあれば、彼蛇ねらひすまして飛付や否くる〳〵と巻、アハヤとおもふに、猫ツト抜て爪をもて掻て引くわへ振、蛇は巻んとして解、ときては巻、猫は飛上り飛廻りす。蛇は尾をもつてひたと打ち、たがひに爭ひ果なければ、礫を取て投ければ猫は是におどろき、人かげを見て木陰へ逃ぬ。さるに彼蛇飛かゝり、一握り程ある彼礫を引くわへ立上りたるに、おの〳〵おどろき、先に進んで行く者なし。蛇は半延上り大に怒れる様に見えぬ。かくては時刻うつる也と、側へなる山に這登り、はるかにそこを目に懸て通りぬ。跡を見れば初のごとし。頓て足早に行過けり。夫より三里計り過て、もはや城下近く成る所に、百姓二三人立て咄すを聞けば、今朝爰を通りかゝるに、蛇の山より谷へ馳下るを見て驚きひかへたり。見給へ斯のごとしといふに見れば、山より土砂もすり落て、木の枝葉もしごきたる様、まことに大木を落しかけたる如し。道幅貳間餘もあらんに、頭は下の谷に臨み、尾は未だ山の上にありしといへば、其長さ凡五

六間も有べし。かくて城下に逗留の中、專ら此咄有り。今年はいかなる事にや。所々にて見たるもの多く、山へも稼ぎに行難しとて、評定有て鳥銃の士二十人計り、毎日其出る所に遣はさる。未だ見當らずと、後に能く聞けば、ある日に小き谷川のむかひに出たるを見て、おの〳〵筒先を向けるに、誰か一矢射るものなし、互に見合せ居たりしと、然れども見當らずと云なり。最はや十月にもなれば、自ら蟄する故なりとかたる。予問、何故に向ひて打たざるや。曰、このもの一の矢を射たる者に祟りある事也。よつて一應は見遁しぬ。退引ならぬ時は、打事は容易しと語りぬ。一日姪の津といふ地梅が濱とて景地あり。いざと誘はれ行、道の船渡にて見れば、鰷をとる梁の打碎けたるあり。いまだ落鮎の最中に早く收めたりといへば、舟人いや〳〵、先日の大水に通りものして潰れたりと、予聞て通り者とは何にやと問へば、大蛇の事也。此山奥に夥敷住ことにや。毎年洪水には一ツ二ツ流れ來る。今年も二ツ出たり。さしも强勢なる恐ろしき物ながら、大水のまくり立て落來るには、兩岸へも上り得ず、頓て海へ入るなり。時々首をさし出すを見れば、牛の頭のごとしといへり。

○矢　數

本朝古代定額の寺有りて、其餘は猥に額を上る事なし。中世以來いづれの寺社にも、すべて額を掛る事とはなりぬ。中にも筑前箱崎八幡宮の額他に異也。敵國降伏の四字也。攝州四天王寺にて四句の字なり。其餘は神號、或は山號、寺號也。江州安土總見寺には下浸々の字あり。是等や定例の外なり。長崎諸寺は門計りならず、諸堂舍にこと〴〵く額有て、柱毎に唐僧數代の聯をかけたり。即時には見難し。山城宇治黄檗山共に比せり。宮社に額多きは京吉田の社殿也。勅額多し。こゝに額の事に付て小說あり。江府深川三拾三間堂は、京の蓮花王院に比して遠矢の稽古場なり。然るに寬保の年間回祿して再建あり。額も燒にければ、能書の聞えある三井孫兵衞親和に賴みて書せしに、則古來よりの通に施無畏の三字を書てあたへけり。其後いづくの律僧にや二三人參詣して額を見て稱美し、誠に能書なり。書位と云筆勢

といひ殘る所なし。惜むらくは、此人不學の徒也と互ひに笑ひ語り歸る。折ふし是を聞居たる者、親和に告。孫兵衛聞て眉を皺め、合點行ず、何とてかくいひしぞ。子細あらんと、芝に至り南郭先生に談ず。南郭も暫默して、其由緣を考得ずして云樣、貴殿能々内陣の佛を見たるや。孫兵衛曰しらず。然らば一應本尊を吟味あれかしと有に、則往て見れば藥師如來なり。手を打て扨は誤りたり。去ながら今更改ん事、猶以て誤りを後世に殘さん。いかゞせんと案じけるが、一の計を考へ出し、頓に密に彼本尊を取替て觀世音とし、左あらぬ體に打過けり。後に聞人、親和が度量の程を美談せり。抑京都三十三間堂は貳間一間として、都ては六十六間なり。今天下の遠矢場と成て、年に四五月の間には、かならず諸國の侯士通し矢有り。其行粧殊に美々敷勇々しく壯觀也。もつとも堂上の椽側なれば、芝矢とは殊なる躰法有にや。只强弓なる計りにあらず、屋根あれば高きは梁に當り、勿論低きは一向に及ばず。射放して中の程二十間計は羽桁を摺て行なり。其矢數の濫觴を考るに、

矢數帳に曰、三十三間堂射初めし起りは、東山今熊野觀音堂の別當何某坊とやらん弓を好みて、八坂の青塚の射込を以てくり通るさに三十三間堂に休みて、初てくり矢にて射初しより事起れり。大場景重傳書に云、三十三間堂にて椽端へしざりて堂射通し初めたるは、吉田印西といふ人射通し初めたる也。伴喜右衛門一安は、從二吉田雪荷入道一得二射術一。後改二道雪一。始居二丹後田邊一仕二細川玄旨一。天正年中以二根矢一通二蓮花王院一。此根矢數の始也。又云、慶長十一年正月十九日、石堂竹林弟子淺岡平兵衛と云者、始て矢五十一筋を射通して名譽を得たり。又云、蓮花王院の堂屋檐漸舊て大破に及び、京兆尹板倉防州奉二鈞命一改葺、而承應元年營功亟にしてなる。此時射術に長じたる者、國君郡牧の家士洛に參會し射初を望む輩百人餘り、京尹未二許容一。爰に片岡平右衛門家盛、京尹の亭に候して曰、我父祖の志を繼、此業を事とする事年有り。希くは射初の免許を蒙らんと乞ことと頻り也。京尹曰、誠に渠が父祖の射藝の功普く人の知る所なりと許容あり。家盛謹んで是を承り、承應元年癸巳（壬辰カ）臘月七日、

霽成して家族門弟を引率して堂上に上り、白羽矢二筋發す。其行粧嚴然として貴賤群集しけり。是より已後堂に望者不レ可レ勝計。因に曰、都廻りの遠矢射場は、祇園の南は坂道京間にて百八十間、同所は椽貳百五間、是は天下の矢所也。同淸水貳百四十貳間なり。此靑塚と云を初射たるは、天正九年の頃、京の人又四郎といふ者、扨又祇園の矢師の子某兩人射初て、天下の遠矢場となる。元和の終まで國々より射に上り、矢先一寸一尺を爭ひたりと也。

○石　匠

夫寺社の造建、民家の屋作は更なり。諸國の墓石に用ゆる石を出すの地、攝州御影山、山州白川、豆州岩蒲の三所也。出すの地は僅にして、廣大の日用又足らずとせず。ある時予豆州に在て石を出すに折節は行て遊び見しに、旣に貳百年に近く、日々數十家に掘出す所、いまだ一里に及ばずといふ。然れ共石次第に長大に成と云事はなし。往古より石あるが故也。其石工の稼を見るに、至て人力を費せり。始石の筋を見て下へ掘行有。上へ掘あり。まづ段々と矢を以て割取て、窟の如く上を殘して掘行、然して上の殘りて洞のごとく屋根の樣なるを切に、數人共石の端に立並び、矢を込て打、其矢を次第に通りて、めり〳〵と音あるや否や、上なる人一同に向ふの山の方へ飛。予其危きを見てあり、地に付たる方より打落さばよからんといふに、石工曰、夫にては中々かくのごときの大石の自由に打きるべき事にあらず。たとひ打落すとも石曲打出來て用に費あり。勿論始より石の筋を能見わけて裁ことなりと、彼山中にて柚の木を伐も是に同じ。上下の總州には石なく皆赤埴也。故に家作等に至て不自由也。然るに一宮玉崎明神の濱邊に自然と三四つ礎にすべき程の石を打よせ有けり。是を神に申下して共川に備ふ。神驗の炳然たる物也。實にも天人をなして自然に食有といふ則此理なり。但馬國豐岡湯の島の間に三里の川有り。其中途に小山有り。其山に奇石を出す。其性堅く色靑みを帶て、其大きさ高さ丸みも常の挽臼の如く、此石は自然とその形して、三十五十積重りて一筋〳〵柱を立たる如くなり。石の間土砂を取退て、

右の柱の様なるをふとき槌をもて横ざまに打てば、そのかさなりたる石一つ脱離れば、夫より上はおのれと崩れ落る也。かくのごとく一筋〳〵取て、其掘たる洞の中に所々殘置は、堂舍の柱の樣にして、天井は石臼形に張たるごとく、いと珍ら敷躰なり。石と石と切詰たる様なれば、拔落る事は稀なり。上の山はよの常の樹木生たり。土人竹繰石とも、瀧繰石とも云へり。〔割註〕萬葉集にもたぐりと出て、古き名のよし也。」此石三都に近き地ならば、大に其功有らん。惜い哉。天離れるなれば、僅に一國の用を足すのみ也。されば人の世にある藝能才德有て、その座に終るあり。また帝都江武に出て普く世に知られ、大にその德功を施し行ふ人も有り。古へより絕倫智德の僧多くは田舍の產なり。

○灌頂瀧

阿波國月次山慈眼寺といふに瀧有り。弘法大師灌頂有し地なるよし、よつて灌頂瀧といふ。至極の山奥にて瀧の大さ七八丈もやあらん。ひとつの谷を隔て小堂あり。爰より見る朝日雲間に昇り水面を照せば、たちまち水霧のごとくにして落る水止るがごとし。瀧の水筋虹の樣に見えて、水中朦朧として不動の尊躰あらはれ、其丈八九尺計り、日光中天に昇るにしたがひ、尊躰次第に瀧のもとへ下りて、既にして消ぬれば、常の瀧の如し。其間朝五つ頃より四つ頃迄也。故に不動の瀧ともいふ。是等彼諸山に有所の來迎といふに同じ。また伊豆國岩浦といふ處に龍門寺といふ寺に、殊に小き山滴の瀧有り。用心水とする程也。ある日此寺の座敷に遊び居て見れば、其水の色五彩にして誠に虹に似たり。寺僧に問へば、常の事也といふは、口に水を含み日に向て吐出せば斯の如し。然れば奇とするに足らず。但し其理は如ㇾ斯といへ共、又外に有る事なし。故に山谷の陰氣深く水氣をつゝむ所ならではなし。尤日に向ふ所に分別ありと見えたり。我諸州にして瀧を見し事多しといへ共、廣大なるは那智に過たるはなし。打見たる所は聞し程にはあらずと思ひしに、雨の後にていまだ山に懸れる雲の殘りたる瀧の七八分目に靉靆して雲の上に二つ分計有けるにぞ、その高き事を知れり。誠に本朝無双の瀧也。また珍らしき瀧は日光山中た

る裏見の瀧なり。瀧の中に入て落る水を裏より見る美しき事は、攝州布引にしくはなし。その樣細かに見れば實に布引たるが如く、恐ろしくすさまじく是も日光山華嚴の瀧也。豐後沈降り瀧は夥しく大なれども段々に落る。日光霧降瀧は山間霧の如く、攝州箕面伊州赤目瀧何れも同境也。

○親子情

大和へ通ふ人の噺しけるは、或年秋の末三輪の渡りを廻りけるに、往還人もなく、うら寂しく獨行するに、とある家の軒に猿の子供四つ遊び居たり。親猿は木の實や取に行けん見えず。然るに又一つの猿出來り。かの子猿共をせびらかし慰む。是は外の猿の子と見えて、四つの子猿ども難儀なる躰にて、きゝと啼て迯んとす。其所へ子猿の親とおぼしきが走り來り、子猿をせびらかしつる猿をとらへて仕かへしする樣子にて、かの子猿を强く押へ居ける。折からあなたより、拔群の大猿齒をかみ怒りかけつけて來るに、初の子猿ども肝を消して恐れたる躰にて、親猿の前後左右に取付て悲みける有樣なり。かの大猿夫を追廻しけるに、かの親猿叶はじとや思ひけん、左右の手に二つ、脊と腹とに二つ取付たる子猿をかゝへ迯れども大猿迯さじと追歩く拍子に、親猿道を隔て向の側の屋根へひらりと飛たるさま、寔に鳥のごとく、其道幅を考へ見れば、凡五六間にも過たると覺えぬと語りぬ。かゝる輕捷餘のものゝ及ぶべき事にあらず。殊に其子を愛するの情、鳥獸俱に等しといへども、猿の愛尤も勝れたり。齊東野語に云、鄞江屬邑武平と云所、素好猿を出す。大なるは別離し、小なるは其母抱き居て暫くも放さず。依て先毒矢をもつて其母猿を射る。母猿箭に中り最早活くべからざる事を知て、自ら乳汁を遍く其樹木にそゝぎて、子猿に飮しめて後地に落て死す。則其母の死を痛く鞭(マヽ)すれば、子猿悲しみ鳴て枝より下り、手を束ねて捕につく。夫より毎夜必ず母猿の皮に寐る、しかせざれば育たず。かくて手馴てその藝術を教ゆる也。噫是狀は獸にして心情は人也。これを取ものゝ不仁至て甚し。故に先子官に在て日毎に捕弋の禁の嚴重也と云へり。予日州宮崎中村町といふにありける十月の頃、或人の家を出て廿歩計り行所に、コロ〳〵と鳴音

して、忽ち大地震ひ動きけり。中々一足も引がたし。仰ぎ見れば左右の家と家と手返し打合すごとく、ひら〳〵として其はやき事見留難き程にて、瓦葺なるは皆飛び散たり。家々より晝の事なれば、おのおの駈出て途中に伏しける。予も立てあれど、家とおなじくゆらめき足踏留がたき程なり。町幅七八間も有べき所の左右の家の屋根と屋根と合するがことし。しかれば七八尺計のところは、一向明たる樣にも見えず。其烈敷迅き事は目くるめきて倒れぬべき樣也。然るに或裏住せる者の女房、馳來りて我家へ歸らんとするに、わづかの路次口なれば、さらに入るべき樣もなかりしに、少しもためらはず飛鳥のごとく走り入て、アハヤと見る內、寐たる子の八歲計りなるを小脇に引かゝえ飛出たるには驚くのみかは、誠に子をおもふの切なる、さらに生死を知らずと感じおもふ。男たる者さへ地上に踞み、一足も立がたきに、子を忘れぬの一念岩をも通しつべし。此時の地震、日向と豐後の邊大に破損せり。また雷などは或は強く或は輕く、其體究り難し。地震は發端の動搖は至てきびしく次第に緩きもの也。爰に其初を心得て避れば難なし。その後五日七日晝夜となく震ふものなれど、初發のごときはなきもの也。

○地變

安永八年己亥九月中旬、薩州鹿兒島邊の地時として鳴動す。いかなる事やと諸人怪みをなす所に、廿九日鹿府の前海中にある櫻島の東南、白濱といふ所より火煙出て、天地も裂るが如く震動し、大石大木を飛し、暴風山を崩し侍りき。村々これが爲に燒失し、又海を隔たる濱々も、數里が間砂石降積、天地晦冥し、三日の間日光を見ず。やうやくにして鎭りたれども、唯地底の鳴響く音は月を越ても止まざりき。この大變に人馬も夥しく損死せり。また吹出したる硫黃海水に落固り輕石と成て、小山のごとく積て人その上を往來せり。しかれども浮たるものゆへ次第に沖へ漂ひ出たり。又櫻島の南は滄海なるに海底より煙拔しと見えて、海原に忽然と小島三つ涌出たり。誠に奇なる地變也。抑此櫻島は鹿府の前なる海に在て、その涉り僅に一里計周回七里、高さ一里にて嶮岨ならず。山景壯麗にして、府より近く見れば盆

石の石の如し。草木繁茂し村數二十四ヶ所あり。專爐顯黑砂礫を襲す。更に考るに、此島中世涌出せる島なり。續日本紀、天平寶字八年十二月、是月、西方有レ聲。似レ雷非レ雷。時當ニ大隅薩摩兩國之境一。煙雲晦冥。奔雷去來。七日之後乃天晴。於ニ鹿兒島信爾村之海一。砂石自聚。化成ニ三島一。炎氣露見。有レ如ニ冶鑄之爲一ニ形勢一。相連望似ニ四阿之屋一。爲レ島被レ埋者。民家六十二區。口八十餘人云々。此に年曆を出現せり。考ふるに、一千一十六年に泯沒せり。誠に山岳の大なるも、形象あるもの、必ず始終ある事常理なり。

日本紀、天武天皇十三年十月壬辰、逮ニ于人定一。大地震、土佐國田苑五十萬頃。沒爲レ海。古老曰。若レ是地動未ニ曾有一也。是夕有ニ鳴聲一。如レ鼓聞ニ于東方一。有レ人曰、伊豆島西北二面、自然增ニ益三百餘丈一。更爲ニ一島一。則如ニ鼓音一者。神造ニ是島一響也。

日本後紀、天長九年伊豆國言上。三島神伊古奈比咩神二前預ニ名神一。塞ニ深谷一權ニ高巖一平之地二十町許、作ニ神宮二院馳三處一。

搜神記曰、歷陽之都一夕淪入ニ池中一。而爲ニ水澤一。今歷湖是也。

一統志曰、仙湧山在ニ新會縣一。而此地名ニ羅坑一。本無レ山。一夜風雷震怒湧出。

鹿府より西濱十五餘里にして櫻島に類せる山有り。これ開聞岳と云ふ。枚聞神社有り。此邊を頴娃郡と云ふ。則ち薩摩富士なり。故に近衛公、

さつまがた頴娃郡のうつぼ島これや筑紫の富士といふなり

高さ壹里餘り、三里餘海へさし出たる山也。この空穗島と有は、土人のいはく、是地神代四代火々出見尊海底遊行の地此に湧出すと、この名有と、今天の井などいふ遺跡あり。

〇事　實

日薩隅の三州は西城といへども、天孫降臨の後、此地に神去給ひ、同じく火々出見葺不合尊の御事蹟、

神武天皇の皇居あり。太古開國の間といへ共、證跡今に顯然たり。惜い哉。我國の坤軸にして神書に晳志有ものも、容易に至り難ければ、傳聞のみ史册に記して、事相豫めなれば龜鼈の術なきにもあらず。予が神代古跡考に辯論して爰に贅せず。日本の土地蜻蛉の形に彷彿たれば秋津洲と號し、五畿七道其虫の名を云はず。とんぼうと呼び、やんまといふ。然るに彼國にてァケスといふ。則ち古訓なり。又炬火を一本とらず、必ず壹本を添、或は蓑を着て人の家に出入せず等は、みな神代の遺風なり。又常に酒を飲、茶を喫る。其初を神に備ふる意儀をなす。これをホカイといふ。古語なり。延喜式祝詞にまゝ見ゆ。就㆑中出雲國造專ら此事に預る、みな祝辭なり。日本紀神功皇后紀に、武內宿禰をして琴を彈しめ給ふに、宿禰さかほかひの歌あり。壽の字、壽詞、壽辭など書て、ヨゴトとも、コトホギコトとも訓ず。ヨゴトは美言也。コトホギコトはことぶき言也。今なべて壽の字をことぶきと訓ずるは是なり。國史に言吹など書り。みな祝言をいふ也。神に是をノットといふに同じ。今案ずるに、即位大嘗會に御祝として式三番の能有。はじめに脇出て祝の詞を誦す。これを開口といふ。則ち是もまたコトホギコトなり。能の事は悠紀、主基の國俗、土地の歌舞を奏せし遺風なり。禮記內則云、子生男子設㆓弧於門左㆒と云。又三日卜㆑士負㆑之。吉者宿齋。朝㆓服寢門外㆒詩負㆑之。射人以㆓桑弧蓬矢六㆒射㆓天地四方㆒云々。今の世諸公至尊の家はしらず、庶民にこれをなす處なし。たゞ彼國今に然り。賤民といへども是をなす。其三日にして高年の人產所に來て、弓矢を取、威儀して問て曰、生れしは何子ぞと、側に答て、男の子なりと、即矢を放つ事三射也。かくて大に親族鄉黨を燕會し、有德の人に乞て產子の名を呼也と云。其人辭讓す。再三にして許諾し、紙を二つ折にして頭字を呼ぶ。即其子の髮少しを鋏みて、其名書を臺に居て出す。その人土器を取て嬰兒にさす。夫より獻酬して滿座に及ぶ。尤此席に社人來て祓をなす。是を髮垂と云ふ。是又禮記に見えたり。然して此兒生涯の間、其人を尊崇する事師父のごとし。畿內に六日垂といふ是也。實におもふ、女子のとつぐや、古代髮を上るといふに合り。萬葉集に、

橋のてれる長屋に我はねしうなひはなりは髮ゆはんかに、

見安云、うなひはなりは男もちたる女なり。髮揚とは女の始て男をするを云なり。

閩俗婚禮の式は、婚先新婦の家に往て舅姑を拜し、續て新婦來る。是陽先立て陰從ふの義にして、即諾冊の二尊浮橋の遺風あり。又中華にて婿新婦の車を押の式も有。斯く新婦入來り、種々の禮物を舅姑親族に呈す。中に茶二包あり。獻盃濟て婦自ら此茶二包を一つにして煎じ、婿舅に奉るは合両の遺意に似たり。茶にも又甚倚る事あり。明陳晦天中記曰、凡種茶必下㆑子移植則不㆓復出㆒。故聘婦必以㆑茶爲㆓禮儀㆒。固有㆑所㆑取云々。新婦一たび嫁して再び聘ぜざる意なり。正月に鄕射あり。その儀拾五人宛左右二隊とす。其的徑壹尺、其外に藁を以て輪をます。故に上手下手とたく中らずといふ事なし。終日射て射上の數を以て上下をわかつ。籌刺とて串をもて算ふる法有り。論語に、所㆑謂射不㆑主㆑皮。爲㆓力不㆒㆑同㆑科。古之道也。とある鄕射禮なり。朱子曰。古者以觀㆑德。但主㆓於中㆒而不㆑主㆓於貫㆒。蓋以㆘人之力有㆓强弱㆒不㆖㆑同㆑等也云々。是を號て軍陣的と云。史記を按るに。武王克㆑商散㆑軍郊射。而貫革之射息。正謂㆑此也。是等最故あるかな。

○洪水怪

安永七年七月二日、京都に未曾有の洪水あり。山々水溢れ谷崩れ、洛中堀川小川はいふに及ばず。又西陣大宮通の上なる水門吹出し、町々の地下にも水湧出、橋倒れ家流れ、溺死する者多し。上世は鴨川洪水の防禦使有しと聞ゆれど、かくの如く市中の人家漂流はなかりき。然るに七月朔日晝頃、一乘寺村天王社の拜殿に、百姓六七人晝の休息に暑を避んとて行見れば、見馴れざる女の年頃二十四五歲計、容儀も賤しからず。されど衣服は木綿の單を着し、手拭をもて髮を包みたり。若き者共たはむれに何方の人と問へば、此邊の者也とこたへて拜殿の繪馬を見廻り、獨り言にいふ樣、病苦平愈の處願に繪馬奉るは有べき事ならんに、諸願成就の爲と書たるは、拙き人欲のいたり也。愚なるかなといひつゝ、笑ひ〳〵出

行にぞ、若者ども又問て云、若き女中只獨り、連にても待るにや。又何處へ行人かなとなぶりて、おの〳〵口々に問ふ。女答て連とてはなし。是より上の村へ行なりと答へて、出さまに頭の手拭をとり振返りたるを見れば、さもあてやかなる艶顏に似ず、頭の髮すべて眞白にして束ねたり。其美しき顏いよいよ物凄し。おの〳〵これはと驚きける中に、村はづれへ走り、餘り怪しきに行先見屆んと、二三人跡より走り行き見れども、かひくれ行方見えず、みな〳〵不審ながら野働きに行ぬ。然るに此女、上の村の庄屋喜內といふ人の家に行、切戶口より座敷へ通り床の間に座し居たり。勝手にはかくともしらず。折ふし喜內は留守にて女計有しが、不圖座敷へ行て是を見つけ、狂女の樣子成るもの有と、家內立騷ぎ一同に行見るに、彼女少しも騷がぬ體なれば、いかなる者ぞと問に、只此邊の者なり。亭主は留守なりやといふ。成ほど用有て京に出られたり。去にても案內もなく見馴ぬ者の人の座敷へ上り、亭主に何用有やとなじり問ふに、答ずして、さらば留守ならば歸るべし。用は一言申置ん。今日中此處を立退れよ。左あらざらんに於ては大難あるべし。我も此邊に住がたければ外へ立退なりとて、頓て立て猶も上の方へ走り行けり。家內のもの怪しむあり。又氣違女なりと嘲るもありけり。夜に及ぶころ喜內も歸り、此事を聞ながら心決せず、たゞ不審におもひ居けるに、暮過より雨頻りにして止ず。次第に大雨車軸を流すがごとく、山より地より水涌出て家々をたゞよはす。先づ喜內の家一番にうち崩れぬ。其外隣村家々數多破壞す。扨はと後日思ひ合せたる計にて詮なし。いかなる者とおもふに知れざりけり。一說には、年來住ける大蛇の、此變を察して住居を替たるなるべしと云けり。誠に此年の水はいかなる事にや。町々の地下より夥しく涌出たり。予も所々にて見たり。實にや狐死するに丘に枕すとは、其本を忘れざるなり。此怪女も久しく當邊に住ければ、其急難を避けしめて、倶に立退すべきにや。恩に報ずと云べし。此後叡峰の東方横川の方に辨財天を祭れる社有り。其社前自然に水吹出て、その跡淵と成て底も知れずといへり。穿附會ながら牽合ともいふべし。

○幽靈

夫男女の愛執に依て妄心散ぜず、死して怨恨を報ずるあり。或は驕慢强惡の一念凝滯して、人に託し物に着て業因を現ずるなど、世に多く見聞する處なり。實に幽冥鬼神の說、生死の道を二つにすれば、中々測り知るべからず。然れども、幽魂既に體をはなれ、只氣の閉結せしものなれば、有德の敎化に打破せられて、また豪傑の英雄に碎かれて、自ら失滅す。中に剛勇の氣は結ぶ事また堅ければ、解る事もまた容易ならず。然るに世に忠臣孝子の困厄に死し、窮難に罹り、非業の死に逢といへども、靈魂の人に觸祟する事少きはいかにといふに、君子は人を咎めず。其自然に任せて終に生前の時も正く、死後とても同じく正道に歸する故也。その小人は或はおのれが惡を忘れて人を恨み、又は身亡びて人祟ふを嫉むなどの邪氣あるなれば、世の幽冥の陰氣合して人を惱まし煩はしむ。是世の中は凶多く、吉少なきがごとし。爰に去る元文年中若狹國常神村宗德寺といふに、佃靈和尙とて智識有り。本は丹後國の產にして、隣國を往來有て人よく知れり。九月廿三日陰雨蕭に滴り、寂寞として無人場のごとく、此日も黃昏に及ばんとす。和尙終日積鬱に、凡案に書を廣げながら打まどろみけるに、適客一人來て庫裡に入、和尙現に思へらく、僕などの舊知の者なるやと細心に見廻しけるに、暫くしてかの人前に進んで拜をなす。いかなるものかと夢心に見れども一向知らざるが如し。時にかの者告て曰、和尙は見知り給ふまじ。我は但馬國小島村八兵衛と申もの也。昔豐岡の府にて屢師に謁せり。今我主人鍋屋五郎右衛門は、船の船頭として賣買の爲に海に浮んで他國へ行、はからずも難風に逢て船覆り、身も俱に死して魚腹に葬らる。然りといへども、宿報の致す處なれば、何も愁ふべけんや。只心を傷ましむる事は、主人五郎右衛門錢財を費し失ふ事多きをいかんかせん。やう〳〵櫃の内に貯ふ所の銀三貫目未だ恙なし。願くは尊師の手を借て、五郞右衛門に歸納し候はゞ、我願ひ足れりなんといひ終て見えず。和尙扨も不思議なるかな。夢を見つるよと忙然として座せり。斯て翌日は早朝より檀家の齋に趣ける中、路に川有り。頓て渡し船に乘

りて江上に浮ぶに、何か箱の如きもの水中に出沒し、船端近く寄る。船人漕寄せ引揚見れば、海舶に所持する櫃也。則所の役人に達し開かんとす。和尚先留て云、昨日我加樣〳〵の事を夢見たり、若其事に符合せば我計らひに任さるべし。若相違せば村方の掟に任せ取計らはるべしと云に、村人許諾し、やがて櫃を開き見れば、往來切手有り。和尚の曰、誠に小島村長源寺主の手跡なり。又亡靈の申せしごとく、三貫目の銀子封の儘あり。また衣類有り。和尚のいへるは、昨夕八郎兵衛が着したる木綿袷にて、紋染色まで、先に聞く所に露違ふ事なし。爰に於て人々奇異のおもひをなし。萬事心に任せ、よきに計らひ給へと和尚に與へければ、即使をもつて小島村に告しかば、舍兄九郎兵衛走り來り、或は感じ或は歎き、櫃物悉く請取歸る。銀子は早速鍋屋へ納て、倶に跡念頃に弔へり。此事跡は我友鑿風といふ人目のあたり見て語りぬ。予先年日向國宮崎といふ處に留錫せし度、村々より參宮の人あり。赤江川といふ湊より船出しけり。かくて例年の事なれば、上下の日數も同事なるに、如何しけん期を過ても歸國なし。其内大風の事有て、所々の海上難船の沙汰聞へて、右の參宮の家々いと心ならず案じ居たり。大坂を出船したりし船、我等は兵庫に用事有て、其時の風は內海の間成しかば、早く湊へ入て避たり。夫より是までの海路所々の船數多破船せり。その同者船はいかゞ成しや見當らずといふ。餘の船々を問合はするに、我船は荷船にて足輕く、はや〳〵も湊へ懸りてさへ、左右の垣楯も打折り、表は捨てやうやう助かりし。思ふに六十餘人の乘合、中々船は乘捨ずとも助命の者は少なからん。但し壹人にても生殘る者あらば、早速其所の領主より告來るべきに、今日迄その沙汰なきはふしぎ也。考るに伊豫路土佐の間に至る頃なれば、若し南海へ漂流しけんなどいふに、其同者の親子兄弟の者は大聲立て泣きぬ。しかれども先便の舟なきも、たのみなればと云すかしあへり。其夜ある村の參宮せしものゝ家に、夜更て戶をたゝきければ、誰なるやとおどろき出て戶を明ければ、參宮せし息子のいとしほ〳〵として、物をもいはず立居たり。コハ下向せしかと詞を懸んとするに、彷彿として見えず。怪しや晝夜此事のみ案じおもふ

故に、かゝる事もあるやらんと、戸を閉て臥床に入りぬ。翌日人にも語りて歎きける。其夜も又更て來りたれども、内へ這入らず失ぬ。また外村にも參宮の間、毎夜燈明を上げ置たる神棚の、何の障りも無くて崩れ落たり。家内も扨はと思ひ合せながら、餘の事に取なし紛れ居たるなど、そこにも爰にも斯こそ噂してみな亡命せしに究り、内々佛事をもなす家も有けり。或日村人ひとり二人予に尋來て問ふ樣、その許には內々承る事あり。今度加樣〳〵の仕合にて、村々六十人餘の家々の者、只愁傷に打しめりて作事も手に付難し。所々修驗巫祝にて吉凶生死を考へもらひ、又は祈禱宿願立てざる所もなし。然れども百に百吉事なし。爰に或人告て、其許に一應考へ給はん事を教へたり。何卒明らかに告給はらん樣、頻りに乞ひ望む。予出來その由緣をしらずといへども、あながちに責む。予云、我等曾て左樣の藝術有るに非ず。少し易の事を聞し事あれど、久しく筮せし事なければ、八卦八爻の象も見がたく、繫辭も忘れぬといへど、例の田舍人つかうとに腹あしく罵れば、今は是非に及びがたく、頓て筮をして山雷の六爻を得たり。つく〴〵思ふに、山雷は頤也、頤は養なり、雷は動く物也。死物なんぞ動く食を得ん。又反爻は復也。復は陽の歸來なり、一陽衆陰をすへたるは吉也。しかれば少しも凶見えず、定めて程無く無難の告有べしといふに、其人大に力を得てうち勇みて歸りぬ。三日計過て無事の便先づ聞へ、その後廿日計して歸國す。樣子を聞に、其月其日難風に逢て、帆綱も切楫も痛みしかば、せんすべなく運に任せて風にひかれ行しに、不思議に土佐の出崎にうち寄られ、助け船に引寄せられ、萬死に一生を得て、乘合一人も損ぜず、船は所々の痛みを修復して、かくの如く日數を經たり。便りすべき事もまゝならずして、おもひながら此節と成りぬと語りければ、是等家毎に死したりとおもひ究めしより、其氣に乘じ物の託して怪をなせしものにや。

○奇　藥

京東六條寺內に、〔割註〕表具師左內（一本仲尾壹岐）。」といふ者語りけるは、近き頃隣家の小童犬にかま

れけるに、大熱發し苦痛に堪兼、身なやみしかば、頓て内外の醫師を招き、服薬膏薬をもて療養しけれども、更に治せず。全體腫出て熱毒甚しく、中々急には治すべき様も見えず。家内大きに心遣ひしける所に、或人來懸り、何事をかくは騷ぎ給ふにやと問。加様〳〵といへば、其人の云、夫は難儀なるべし。世に一妙薬有とて、やがて八百屋へ人を走らせて、蒜を買よせて是を煎じ、先一二椀を飲ませて、扨其疵口へ此煎湯を沃ぎ懸けゝるに、次第に苦痛も容易く、熱も去り腫も薄くなり、疵口より血出、其日の中に本復せり。誠に妙薬なりと人々も大に悦びぬ。其後或家に鼠に嚙れ、右のごとく大熱し悩むもの有。是も早速外科に見せられければ、例の膏薬を疵口に貼しけるに、其腕大に腫て苦痛に堪へぬよし聞て頓て走り行、彼の見置たる様に蒜を取よせ煎じ出し、一椀を飲しめ、其跡を杓をもて疵口へ沃ぎかけしかば、忽ち内より閉たる疵口を吹破り、血毒迸り飛て、見る内に腫も引、熱もさめて何の事なく平愈せり。

嘉栗云、予若年の頃、父の寐間へ鼠の入たるを捕んとて手に及ばず、我何事か有べきとて追廻し、右手にてほうと摑みたるに、中指をしかと食つきたり。さほどの事にもあらざりしと思ひ、鼠を打殺したるに、其跡夥しく血出て痛み忍びがたし。其席にある者、早く樒の葉を取寄せ、擂盆に水少し入、すりて其汁を疵口をよけて塗りしに、忽ち痛み忘るゝ計りなりし。

右の蒜、獸類にも限らず、蛇虫の毒を治すべしと語る。予聞て誠に此葷菜は惣じての時氣疫疾を去るよしにて、俗間六月土用に入る日、蒜一二片に赤豆一二粒を水にて飲事あるも、暑氣濕熱を避るの法なり。或は門戸に懸て疫邪を除くとするも同じ。和名抄蒜は比流と訓ぜり。或曰、比留の訓はひらつくの謂にして、辛味を賞するなり。又にんにくといふは、皮薄く中子正白色仁にして、即肉なれば仁肉と云かと云り。但し大小二種あり。其形象を以名付く。功能等しく、或はひとしからずと云へども、大凢相類せり。又毒を化すること。

孫炎爾雅正義曰、帝登二蒿山一遭二蕕子毒一将レ死。得レ蒜嚼食乃解。遂收植レ之。能殺二腥羶蟲魚之毒一。本草主治方云、蒜除二邪痺氣毒氣一主二溪毒一。下レ氣治二蠱毒一。傅二蛇蟲沙虱瘡一。又肘後方、蝮蛇蝎螫レ人、小蒜擣レ汁服以レ滓傅之云々。

日本紀景行天皇條下

日本武尊進二入信濃一。是國也山高谷幽。翠嶺万重。人倚レ杖而難レ升。巖嶮磴紆。長峯數千。馬頓レ轡而不レ進。然日本武尊披レ烟凌レ霧。遙徑二大山一。既逮二于峯一。而飢之。食二於山中一。山神令レ苦レ王、以化二白鹿一立二於王前一。王異レ之。以二一箇蒜一。彈二白鹿一則中レ眼而殺之。爰王忽失レ道、不レ知レ所レ出。時白狗自來、有二導レ王之狀一。隨レ狗而行之。得レ出二美濃一。吉備武彦自レ越出而遇之。先レ是。度二信濃坂一者。多得二神氣一以瘼臥。但從レ殺二白鹿一之後。踰二是山一者。嚼レ蒜塗二人及牛馬一。自不レ中二神氣一也云々。

日本紀通證云、後撰集にいふ歸る山は鹿蒜也。

　我をのみおもひ敦賀の越ならば歸る山にも惑はざらなん

敦賀の郡加倍留は鹿蒜、神名式加比留神社鹿蒜田口神社と云々。

　○道成寺鐘

予一とせ熊野三山の順禮し小松原といふに來り、かの道成寺に詣で、とある茶亭に憩ふ。諸國の道者集り晝の儲などしてたがひに咄し合中に、一人予に向て、此道成寺の鐘の事、謠曲にも出てあまねく世に知れる事也。緣起の趣にて書史に見えたるはなきやと、予答へて、元亨釋書に出せり。始末世に傳ふる所の如し。鞍馬寺の僧正安珍と有。今樓門の石階の數をもて謠舞の人亂拍子を踏の足取、是に象るともいふ。〔割註〕石階今六十二段。」夫に付て奇怪成る事あり。京寺町通り妙滿寺といふ日蓮宗の寺に、此鐘傳へて今にあり。天正十六年五月壹人來て云樣、當寺を見るに釣鐘なし。幸ひに一鐘あり。寄附すべきやと、寺僧甚よろこび許諾す。彼人云、その鐘紀州新宮の近村にあり。もとは小松村道成寺にありし也。

兵亂の時國中の寺社過半廢滅せられ、此寺も同じく顏破し、鐘も所々に持行て、後今の地におけり。然るに此鐘、その所持の家に凶事あらん時はかならず鳴動す。ゆへに小兒婦人の族恐れて忌嫌ふ。我是が爲に京に出て、無鐘寺に寄せんと思ひたりと云。頓て彼國より引來り鐘樓に掛たり。しかれども瑾ありて鳴響遠く至らず。衆僧議して云、新鐘を鑄て此古鐘を加へ入れなば甚善かるべしと、踏鞴を構へ既に鑄潰さんとするとき、俄に大雨頻りに降來りて、鐘より煙吹出る事巨火の如し。人皆怪しみ驚きて、其事を止めて、新に一鐘を鑄調へて樓上に懸。其鐘はその儘に今に祖師堂に存在す。傳へいふ、初龍頭の下試只計に疊ありしが、漸愈て既に平均におよぶと語りしかば、一座の者或は感慨し、或は奇異として、必ず順路京に出て見んなど罵りけるに、茶亭の老人大にふづくみていふ樣、此人の詞決して信ずべからず。既に鐘は湯と成て山伏を取殺とあるにいかんぞ、其鐘の世に有るべきいはれなし。左樣の事をいふ人に相手に成べからずと腹立けるゆへ、予今更氣の毒に思ひながら翁を宥めて、されば謠曲などにも左は云へとも、全くこれは文花といふものにて、湯となれりと書て結文せるものならんと申ければ、いよ〳〵怒る樣にて返答もせず、爐にむかひ、かよふの人には茶をも與ふべからずと氣色立けるに、今更何といふべき事なく、忙れてそう〳〵立去りぬ。誠に遠境の人の偏屈なるを、或は感じ、或はおどろきけり。因に云、この鐘の銘左の如し。

聞鐘聲　智惠長　菩提生　煩惱輕　離二地獄一　出二火坑一　願成佛　度二衆生一　天長地久　御願圓滿。

聖明齊二日月一。叡算等二乾坤一。八方歌二有道之君四海樂一。無爲之化

紀伊州日高郡矢田庄

文武天皇勅願道成寺冶鑄鐘

勸進比丘瑞光別當法眼定秀

檀那源万壽丸并吉田源頼秀

合力諸檀男女大工山田道賴小工大夫守長
正平十四己亥三月十一日

是洛の三鐘と稱する中なり。

笈埃隨筆卷之三

○世謡

何事も古き世のみぞ慕はしき

と云歌も、昔忍ばじ、と詠事、實にさもとおもはる。かくいひし頃をさへ、今の世より見れば、又慕はしく忍ばしき事こそ多かんめれ。但し草木鳥獸器物なんどは、大に古へに勝れるあり。人物もおさ〳〵劣るべきかは。猶諸藝の作業甚しく委しきに至れり。只實雅を用る事すくなく、風流と花美と洒落に流れたること歎かし。譬へば練物といふもの丶花やかなる、俄といふもの丶たはけたる、祭禮には必ず有るべきものとなし、昔放免の付物といへる名さへ風雅也。又七月には何によりたる事とは知らで、都鄙ともに踊をなす。佛家に始りし事にて、中華に墳墓を拜掃する遺例なめり。夫さへ今は祇園會御靈祭の神事に、小女を美麗に飾り、様々風流の踊の手を敎へ、町方を連歩行きて踊る事になりぬ。其踊の音頭をなす發聲には、必ず松坂越たヤツサといふ。都鄙ともに同じ。伊勢踊、伊勢音頭とて、彼國の風流踊あなれば、勢州松坂の事なりと思ふ。左にはあらざるか。慶長中に太閤秀吉公大佛殿御造立の時、今ある處の外側の大石は、宇治山科音羽邊より挽登せ給ふ。餘多の人歩ども日岡峠、八坂町へ引上、既に松坂を越へ、蹴上も近く勇み行に、頭取麾を振り下知して、松坂越たヤツサと音頭とれば、車挽ども一同に聲を揃へて、又松坂越たヤツサと唱へしを、その頃の流行唄に、京童の唄ひけるより云傳へしなり。又其名匠を藤五郎といひたるよしは、今能狂言の中に、石挽といふ小唄の文あり。

石工藤五郎殿は、石を挽キヤルの、石に注連張り衣着せて引キヤルの、私の殿御は先から二番目に大紋袴に太刀を佩たるが殿御じや、テモ引た引ぶりサツテモ引た引ぶり。

松坂とは粟田口より日の岡峠の坂路をいふよし、古記にも見えたり。鴨長明が道の記に、

歸りこんほどを契らんわするなよ我まつ坂の松ならばまつ」と詠し所なり。

節分の夜乞丐の者、暮方より厄拂ひ厄落しとて、町々を走り廻れば、家毎に其夜の打豆を、己の年の數程算へ、錢一穴を紙に捻てあたふれば、その人の壽命長延繁榮とことぶきて、結句にいかなる惡魔外道も、此厄拂が脊負て唐土日本の國境ちくらが沖へ、さらりとこつかかうと云。此鷄の眞似する事も、舊き年も終り、立春の旦を告る意にして、其年内の惡事も年も倶に盡て、新に目出度春を迎ふると祝言するなり。但此ちくらが沖といふ事、卑賤のもの言誤りたるなり。神代卷に、諸神歸二罪過於素盞嗚尊一而科之以二千座置戸一。遂促徵焉。至レ使レ拔レ髮以贖二其罪一。亦曰、拔二其手足之爪一贖レ之。已而竟逐降焉。○一書、即科二素盞嗚尊千座置戸之解除一。中略。亦不レ可レ居二於葦原中國一。宜急適二於底根之國一。乃共逐降去。云々。

一條禪閣云、千座置戸者祓物之名。使三罪人出二其物一。積二置于千處一。而贖レ罪。故曰二千座置戸一。後世解除有二四座置、八座置之名一。〔割註〕戸者處略語。」中臣祓、千座置座ト云々。

座とは今いふ臺なり。物を置の義、故に藏鞍の訓を同ふす。此ちくら置戸を誤りて、千座が沖と唱へ來りし事にて、古代の祓除の遺風なり。また男子厄年と云て、其節分の夜身に帶しものを道路に棄去も、同じ祓除の意なり。

○壺碑

往古奥羽北越も蝦夷にして、王化に服し難く、天命に逆ふて猛威を震ひしかば、常に夷を征するの將軍を居置き、或は武をもつて押へ、或は利をもつてなづけ給ふ。其道の奥はるかにして土民の外行旅なし。故にその行程東西をだにわきまへん事容易ならざれば、石面に彫て府門に建らる。是を世に壺の碑と云へり。此時孝謙天皇の頃なり。奥の道筋の國々皆をいとなみて、非常を制し客を安からしむ。多賀

城を惣領とす。其後田村丸の軍功に一統歸化す。中頃服化してより、自然と城壘も壞破し、そこ〳〵に建置れたる碑も、いつしか跡形なく成りぬ。よつて右武衛の頃、建久には四百餘年なれども、

　陸奥のいはで忍ぶはゑぞ知らぬ書盡してよ壺の碑

と賴朝公も詠給ふ。〔割註〕右大將賴朝公へ、慈鎭和尙「おもふ事いなみちのくのゑぞしらぬつぼの碑書盡さねば」と詠れし返しに此歌あり。嘉栗云、「戀の歌ならずや、かの意いかゞ。」此碑は鎭守府に建られし所にて多賀城といふ。しかるに元祿年間洪水の變有て、山崩れ川落て、忽然としてその碑流れたり。そのはじめより千餘年なり。石にあらずんば碎粉朽朽すべし。今小堂に安じて文字鮮明なり。行人千歳のかたみを見るに足る。近頃或人云、此石碑今一つあり。其處を立石寺といふ。今予奥州經歷の頃、羽州最上領に山の寺と云に至る。慈覺大師の開基にして、一山自然の石を疊たり。岩に嚴重なり。門を入て數町只一磐石を登るが如し。誠に無双の岩なり。佛像神體の奇石、前後左右に彫たるに似たり。目の及ぶ處壯嚴峙ちて造化の天工又類ひなし。故に立石寺と稱するなり。ばせを翁の句に、

　閑さや岩にしみ込む蟬の聲

とあるは此所なり。山院寂寥として更に人有る氣色なし。予其に此邊の舊跡奇事を尋るに、壺碑の事知るものなし。寺の境内に入、篤と尋ねさがしければ、宿の主の曰、村口に地藏尊の小堂あり。宿の者敎へて、其格子の內に小き繪馬あるべし。能見るに源義經の筆なりと、頓て立歸りて覗き見れば、いかにも小き板に一筆に野馬を書て、下の方に源義經の三字幽に見ゆ。板面は雨露に打れて數百年になればにや。唯その墨痕高くなれり。能く心を留て見ざればわかり難き程なり。此近年板行せる居行子といへる小說に云、世に壺の碑といふ事多賀城の碑と云なり。芳州の壺碑と書れしも、定めて多賀の碑文の事なるべし。水戶長子王の物語を聞に、壺の碑は多賀とは遙に地隔りて、今は石半は地中に埋みて文字も見えず。殊に土民甚だ敬ひ祭りて、中々人を近付けずとなん書り。夫木集に、滿輔朝臣、

石碑やつかろのをちにありときくえぞ世中をおもひはなれぬ

又山家集に、西行、

陸奥の奥床しくぞおもほゆる壺のいしぶみ外の濱風

是等多賀の碑を詠る事とおもはれずと云々。此不審さる事なり。今仙臺にある碑は、京畿より白川越て、奥に入る順路の國府に建おかれたるなり。故に石面碑文の上に西の字あり。しかればこれに對せる東西の碑あるべき事必せり。夫木集につかろといふは津輕なり。山家集に外の濱と詠るも、津輕の地なれば、何れ津輕領にあるべし。彼國の人に問尋れどたしかならず。居行子の說も浮たる事にはあらず。かたく\究ん事を欲しけるに、天明二寅年に、嵯峨落柿舍の井上重厚と云人、奥州南部の盛岡に留錫のいとき、盛岡の素郷と云人と同じく舊蹟を探り見し中に、盛岡府より六七十里の山下に壺村といふ有て、其山も壺山といふ。其地に大石有り。土民尊崇して地に埋み上に祠を建たり。勿論石面に文字も彫せし由なり。しかれども此邊至極の片鄙なれば、文字を寫し留、或は讀置し傳へもなしと云り、誠に左も有べし。居行子に文字も見えずとあるは是也。爰にて壺の碑の名目も顯然たり。判官義經公高館沒落のとき、討死の體にもてなし、蝦夷島に渡り給ふといふ事もあれば、その時高館を出。高館は南部に隣りて、左の山路に入り、直に津輕へ落行渡島有しは、上代の小道有しならん。近來專らいふ源廷尉高館沒落の時蝦夷に渡り、武威を以て國民をなびけ、且韃靼へ入り、その裔孫數百年の後大明の衰運を更治し、今の大清と云は則義經公の子孫なりと、此事我國にあづからぬ事ながら、中華においては希代の珍事なり。蝦夷渡りの事實は、鎌倉實記に委しく論ぜり。但し金史別本といふを引しは、異本なれば證とはし難し。議論はよく判せり。また蝦夷に申傳ふる所かたく\信じがたし。猶思ふに、廷尉心中に大望有をもつて若冠より奥に走り、秀衡によつて數年を經、元來の勇將なれば、自餘の人と同じく無益に年月を費すべからず。松前蝦夷へもたび\/渡海し、かの地のおもむきは兼て識得せられしなるべし。高

館沒落に詮かたなく渡られしといふにあらじ。一の谷四國の軍に淵者を川ひられしなどの智謀を察すべし。今に至て奥筋の土民の讃美する事も自然なるべし。白石先生の軍器考に、蝦夷人の寶とする鍬先といふ物有り。病る時枕頭に置て災を攘ふと云。其形象我朝の冑の鍬形の制なるものなりと云。則是廷尉の鍬形を神物のごとく崇敬す。蝦夷中に多く有物にあらず。希有に所持せる者は祕して深く隱す。又寶物として親子兄弟にも隱したるもの、家內に置かば知るものあらんと、山中に埋み隱す。其物はみな本邦の古き器物にして、多くは兵具、或は太刀、目貫、鍔柄などの物、又東方にクルと云所に、義經公を祭る社もあり。又西方の六條の間といふ地に、辨慶ヶ崎といふ名もあり。夷言に、義經の事をウキクルミといへり。是は淨瑠璃なるものゝ中に見えたり。此文句を飜譯せば實事わかるべしと云々。

○金花山

先に云本朝五奇異に、陸奥金花山を洩せるこそ不審なり。抑此山は、我國金寶最初涌出の靈島なり。〔割註〕皇の御代榮へんとあづまなる陸奥山に金花咲、と讀し金花山は仙臺領なり。〕石の卷の湊渡波といふ所より陸地を離れ、向ひの島に渡りゆく、磯浦を傳へ山に上り、大なる峠を上下して行程拾里餘にして、山島といふ所に至れば、船渡し小屋一軒有り。金花山の向ふに見えたり。〔割註〕嘉栗云、爰の文にては金花山へは兩度船路を、越すやうに聞ゆれども左にはあらず。〕茸より渡すは波高くして、渡海甚だ難儀なりとて早朝に船を出すに、船頭水子共三人なり。乘合のもの五人、其海路纔に三十町計りなれども、大迫門にして浪のうねり高く、船人いふ、今日らは殊に長閑なり。おの／＼よろこび給へと打擢と云物にて漕渡る。山より見し時は水面平等のごとくなれ共、磯際にて打くる浪に小石のころ／＼と鳴動する。かくて中流に至るころ、大浪山を築ゆらめき來れば、船人一同に矢聲を發して浪に乘つゝ漕ぐ。其時は只船竪ざまになりて、大浪の頂上にあり。たとへば高き屛風の上などに乘置て手を放てるおもひ、その危きいはん方なし。左右を覗き見れば底もなきかと覺えぬ。また浪過れば、跡には眞逆さまにな

りて、千尋の浪の底に突埋らるゝのおもひ、今に身の毛よだちて覺ゆる程なり。纔に三十町計の海なれば、向ふ浪高く立のぼれば、さしもの金華山も覆ひ藏すなり。舟人の云、此浪を御殿隱しと呼ならはせり。幸とけふは多く立ずと悅べり。扨は此浪の五度六度ならば、わたる心はなかるべしと彌驚きぬ。兎角して島に着ければ、急て登山す。辨財天女鎭坐まし〱、僧坊十宇有り。絕頂に至る事四十八町とかや。島の周回與州道三里なり。〔割註〕日本道六里なり。〕峯には權現の社有り。箱崎とて左の峯に天女出現の靈窟有り。一山悉く砂金にして、道路の砂礫、山間の岩石に金砂吹出て、誠に黃金の涌出る所のごとく、旭夕陽に映じて海水金波をたゞよはせり。金島金臺の富士山に似たり。峯を少しく向へ下れば水晶石といふ有り。高き地より出る事數丈、廻りも又數十丈なり、六角の白石佇立して、石上は切たる樣に平かなるに、一松律(ママ)平へなり。その松や浪風に吹撓み、幹支屈曲人の手して造るとも及ぶべからず。仙客時來多し。此上に會すべき體有り。沖は渺々と眼の限りなく、唯見る物は南部松前にや通ふらん走帆、そこ爰に有のみなり。かくて寺におくり茶を飮て心をやすめ見るに、松柏蔚乎とし無人境のごとく、自ら氣從心明らかなり。やがて船に來りてあれば、舟人いふ、山を履みたる草鞋を脫棄べし。土砂の鞋に付て出ん事を、權現の惜ませ給ふといふに、各解去て舟に取棄てぬ。〔割註〕鳴砂山在㆓砂州城南㆒名沙角山嵩山號危稜婆蹬轎。天氣淸朗時。沙鳴聞㆓於城內㆒。其砂或隨㆓人足㆒而墜下。經名復遠山上。本朝不士山同。〕かくて一里餘方なる村に泊る。主の云、此處野菜とてもなく、濱邊に行て海藻を取り來よといふ。則おの〱磯に下り潮にひたりて、手してかなぐり取て見ればひじきなり。又若布苔など夥しく、頓て桶に入、灰を交ぜ湯をかけ、蓋をして暫く置取出して和物として食ふ。實にや土あれば民あり、民あれば食あり。邊境の容易なるかくの如し。然るに其場により、至つて美食なる地もあれば一槪には論じがたし。或僧語りけるは、年頃宿願の事にて、豐後國海邊文珠に一七日參籠し斷食の行をせり。此文珠堂は屹然として國人參籠す。杵築より濱邊七里道路至て艱難なり。寺に入て此事を願ふに、寺僧い

ふ、毎々其願望の人あれど、古來より制禁なりとて許さずして、一口に壹合づゝを與へけり。則夫にてむ口の願をみちて下山す。麓まで二里計りなり。わづかの道なれども、晝夜籠り居たる勞にや。半途にして空腹いふ計りなし。今は足も曳がたき程なれば、いかゞはせんと案じ見れども、人家もなし。是非なくしづかに坂道を下る、とある山陰に怪げなる家一軒有り。嬉しくてかくと案内して入る、老さらぼひたりし夫婦有り。頓てしか〴〵の事を語り食を求む。老父答へて、此處は至つて山隘なれば、米とては一粒もなし。又貯へ置ける雜穀もなしと云。然れども夫婦の給ものいかでなからん。何にてもたまへ。更に麁食を厭はずといふ。祖父のいふ、あれほどに申さるゝに今朝の喰餘りはなきやと、祖のいはく、少しは有べし。さりながら中々そのもとの得給たまふまじと、汁をも添て進むべしとて、鍋より椀に盛りて出すを見れば、小豆にて團子を煮たる樣なり。忝しと麁飯を取り、汁にも及ばず。先一口二口食せしに、實にも祖父の言けるごとく、一向咽に通らず。是はとおもひて汁をかけて食ふに、いよ〳〵咽に詰り食得がたし。既に今飢渇身にせまり、食はざれば生難くする場にて、食得ざるは命根も盡しやとあきれながら觀念し、小豆やうのものをやう〳〵給てまち〳〵食ふ體を、祖父の見て、さればこそ食し難かるべし、くるしからず殘し置るべしと強て留む。其時僧云、我七日不ㇾ食ほどに空腹いふ計りなし。又出家なれば麁食迚も何ぞ辭せんやと乞て食んとする程成るに、いかにしても給がたし。ゆるされよとて其儘さし置て、如何なれば人の食ものゝ食ざる事や有る。先いかなる物にやと問に、されば此邊は見らるゝ通りに不毛の地なり。山際を燒畠とし、小豆樣の物を作り、芋なんど作れば猪鹿に取らるゝ故、木草の芽を取り、葛蕨杯を食ふなり。それも盡ては根を掘取るなり。今參らせたるは、燒鐵といふ一種の粽を臼にてはたき、それをよく煉てねり團子とす。汁は海潮を汲置て、その儘に煮たるなりと聞て、實にも咽を通らざりしも無理ならず。世にもかゝる地に生れ、かゝる食にも老に至るあり。不思議かなと禮謝して、頓て下山しけり。無類の疲瘠の地も有るにこそと語る。

嘉栗曰、同姓なるもの、去巳年春奥州津輕まで遊歴す。卯辰の飢饉にて、死亡の跡の體言語にのべがたし。南部のほとりにや。同行するものゝ、空腹なりしに、一向求むべき家なし。かくして谷に一軒の藥屋を見かけ、立寄て食を乞に固辭してあたへず。色々と云てやう／＼團子やうのものを一つ呉れたり。足もひかれざるほど空腹なれば、忝しと押いたゞき口に含みつゝ道を行に、一向喉に通るべき物にあらず。いかにしても食れざれば、道のかたへの松のまたに上て行く。跡より所の者壹人來り、何とぞ與よといふ。いや一口食たればといなめば、いやとよ去年の飢饉の體、左樣の事にあらずとおもへば勿體なしと、ひたすらいふに望みに任せぬ。其ものはさのみ袖乞などする體のものならねど、戴きて食々行たるよしなり。因に云、津輕邊は去年けしからぬさまなりけるよし、この程も死絶たる我は其儘にて今に死人家にあるなり。軒破れ柱倒れたる家數十軒有。道路のされかうべは數へがたし。踏分て通ふ程なりと、又此邊に牛馬犬迄もくらひ盡しける。また此邊の掟とて、牛馬斃れば其耳を切て支配所へ訴へしるしとする。野にて所々牛馬の耳器に盛りて常は多く有けると、辰の年は夫をも望みて食ひしなり。津輕森の濱に舟一艘ありける。宿の主にいかにやと問ふに、内に死人ありといふ。いかに取置ざるといへば、其死人を取れば、また跡へ來て死するものあれば、今は是非なくその儘に置くなりと答ふ。此邊にては倒れたる人の肉を、乞食の女來てそぎて、器又袂に入れしを現に見たりといへり。まことに左なるべし。

誠に世に忍ぶの一字を守るとある中に、空腹なるばかりは堪忍び難し。是身を保つの命根なればなり。曾て世に經るもの、貴賤となく食祿のためにせざるもの、鳥獸魚虫までもなし。故に陶潛の五斗米のために小吏に屈すと歎息し、退ひては珍を連ぬとも、食ふ所は口に適ふに過ずと云。されば魚は餌の爲に捕はれ、人は祿の爲に搦まると、宜なるかな。食祿をさらば何かあらん。因に云、世の云傳ふる高野に登るに、かならずすこしの食を袖にすべし。坂路にて餓鬼の付と云て、俄に脾胃だるき事有て、足も立

がたきほどなり。その時貯へし飯を少し食すれば、忽ち愈るなりと誠にしかり。比叡山雲母坂女人堂の前後に、餓鬼辻と云習はして、時として此事有り。頓て寺院一人を遣し、握り飯を持來りて與ふれば則止む。山にてはよく心得常の如くす。いか樣なる故有り。右兩山の事は、土地の人能く知るといへども、都てかゝる靈山等にのぼるもの、かならず食を持行べき事あり。人の爲にもなり、又我心慥成ものなり。惣じて日歸りの旅とても、少しの食は持ものなり。船頭など船には殊にこゝろ得忘るべからず。

○奇病

西三河國播頭郡巨海村天祥山長壽寺と申は、右大將賴朝公の息女足利義氏公の室となり給ふ。義氏三河に封ぜられ西尾に居住し給ふ。これ則吉良氏の祖先也。此の室殁後菩提寺として堂塔を建、寺領も寄附有しかば、巍々たる伽藍なりしが、吉良氏衰微して、寺もいつしか破壞におよび、漸く一宇の小庵となり、尼の住ばかりにて、本尊の地藏菩薩に香花を供するまで也。然るに明和年間より安永の頃まで、此寺に貳十年來斷食の比丘尼ありとて、人多く崇みて拜謁せんと行く者夥し。予思ふに、末世下根の凡夫、木食の人だに世に稀なるに、數十年斷食は叶ひがたし。彼備前の妖僧に米糞上人の事も可笑し。若又狐狸の妖怪にやあらん。見るも旅中の呼物ならんと、海道より濱の方四里計り行て一つの小堂有り。本尊の地藏尊に參詣し、頓て庫裏に入て茶を乞へば、かの比丘尼出て、自ら汲て與ふ。つら／＼容子を考へ見れば常の人なり。只其顏色青ざめて艷なし。弱々と見えしに引替、支體肉肥て年頃三十になん／＼とす。言語少し訥る樣にて答へ旋とならず。「何飲て育つ比丘尼ぞ蟋蟀」と樂書して、其村に一宿し委敷聞に、曾て虛事にはあらず。十四五歲より兎角少食にて、十六歲の時村内へ嫁しけれども、病身の樣にて不緣し。夫より尼になりて此庵に住り。其頃迄は月に半ば不食なりし。後には月に二三度ならでは食ふ事もなし。今は一向に食ふ事なく、只渴しては湯を飲計りなりと、思ふにこれ異病なり。應聲虫人面瘡などいふ奇疾有れば、かゝる事なしとも云がたし。左あれば何の尊きといはん。しかれども母の體

中にあるや、既に食を欲するより、産れて死に至るまで、一日も缺くべからず、種々の樂欲は斷べし、食はたちがたし。然るに世に生れて食を欲せず尼と成るも宜なり。されば不食病の尼を何ぞ菩薩の化現などゝして信仰せん。笑ふに堪たり。宋高僧傳に云、永安上人は一生厠に行ずといふも食せざる謂に近し。徒然草に、因幡國何の入道とかやいふものゝ娘形美しとて、人餘多言渡りけれども、此娘たゞ栗をのみ食て、更に米穀の類を食せざりければ、かゝる異樣のもの、人に見ゆべきにあらずとて、親ゆるさざりけりと云々。前にいふ米糞上人の事は、むかし壹人の優婆塞の穀を斷て食はずと、備前國より奏聞す。帝奇特に思し召れ、召上せて神泉苑に置しむ。洛中洛外の男女貴賤參拜すること門前市をなし、數日の後は諸國より我も／＼と群集し。ことに祈願成就せずといふ事なしと、高驗天下に傳ふ。殊更に老婆女子の類ひ大に信仰をなす事櫛の齒を挽がごとし。斯て數月の後、或人云、此上人夜更て水を以て米穀數升を飲と沙汰せし。扨こそとて、人有て密に厠を伺ひ見るに、米糞積事堆し。大に物笑ひと成て、今は一向參詣のものもなくなりければ、上人かいくれ行方なくなりぬ。しかれども婦女の類は猶米糞上人と稱しける。彌おかし。

○文德實錄六、備前國貢二一伊蒲塞一。斷レ穀不レ食。有レ勅。安二置神泉苑一。男女雲會。傑觀者架レ肩。市里爲レ之空。數日之間。遍二於天下一。呼爲二聖人一。各乞二私願一。伊蒲塞仍有二許諾一。婦人之類。莫レ不二眩惑奔咽一。後月餘日。或云。伊蒲塞夜人定後。以レ水飲二送數升米一。天曉如レ厠。有レ人窺レ之。米糞如レ積。由レ是聲價應レ時減折。兒婦人猶謂二之米糞聖人一。

○地　火

世に聞傳るばかりにて、眼前に見ざる事は、實事とし難きものなり。先に云、諏訪湖に水を渡る狐あると同じ。また越後國に地火といふあり。自然に燃るを、筧を以て隣家へも壁を貫きたり。合壁の家皆燈を點ぜずして夜業をなすと云事世に傳へ、叉小說の書册にも筆せり。曾てなき事なり。是は中華に此事

あるを附會して、左あらんと記したるは、著述者の精しからざるなり。

瑯琊代醉曰、火井在ニ雲臺山東五里一。火自レ井出。周圍有ニ鹽竈數十一。環レ之各以ニ大竹一剳ニ其中一。引レ火至ニ竈鍋一。竂而竹不レ燃。不レ用時以レ蓋蓋レ之。用時去レ蓋。投レ火少許即騰、騰炎上。至レ今近井數十家擅ニ其利一云々。是なり。但越後の地火も如レ斯して隣家へ取らばとらるべき物歟。

いかにも貧にてとらるべきなり。竹をつぎてなゝめにしなどして見するなり。既にからめきのかたは、ふとき筆の軸やうのもの芦斯の如きものにて纔たし、いく列にも取見する也。但からめきの方は、如法寺村より火氣弱し。」

去ながら中華に云所ほどに、夥しく燃出る事にはあらず。其地は蒲原郡如法寺村の百姓孫右衞門といふものゝ家なり。〔割註〕嘉栗云、予がいたりし時は、庄右衞門と云て、此手前に如法寺といふ日蓮宗の寺あり。」今見るに小說書に入方村と云。また夫を入才村などゝ記せしは非なり。〔割註〕如法寺村孫右衞門が家に、爐の側に一寸ばかりの穴あり。夫に竹筒をさしたり、常に少し煙り出、夜に入ればその筒先へ向ひ火をてらせば、忽ち下より陰火もへ出るなり。用なければ吹消すなり。カラメキ村丈七家よりあるも、爐中に筒をさして用る事おなじ。」此起りは享保年間家普請すとて、庭の隅にて鍛冶をして、釘鐵物をうたせけるに、ふと鞴の火に呼出されてより今に絶ずと、同國同郡からめき村丈七が家に有は、近年より出しとぞ。又此邊に油の井あり。中華にいふ所と同じ。

西陽雜爼曰、石漆高奴縣石脂水。水膩浮ニ水上一如レ漆。搖以膏レ車及ニ燃燒一極明云々。瑯琊代醉曰、火井在ニ蜀之臨功一。今嘉定撞爲有レ之。其泉皆油熱レ之則燃、人取爲ニ燈燭一云々。

嘉栗云、臭水の油は村上邊にもあるよしなれど、予見たりしは尼が澤へんに貳ケ所有。元來山岸の所に水涌出る處也。フツ／＼と涌出る水の泡につれて、少しづゝ黒きものうかみあがる。是を笹にても木の枝何にても浸せば殘らずつくなり。扨枝を上れば水はたりて油ばかりつくを、しごきとり

煮かへして鬻ぐなり。運上も餘程上るよしなり。土器様の物にもやせば一面に火出る也。かんてらなどいふものにはて吉、いかにも臭く、國中にても上等の家にては燃さず。この尼が澤の一二町も手前より早硫黄の香鼻をうつばかりなり。

越後にある臭井也。葦萱生茂りたる中をほりて、六尺計りの桶に汲置ば、水は沈み油は浮たるを取、樽に詰て商ふなり。その臭き事鼻を覆はざればあたりへ近付がたし。灯火に用ひて臭し。たゞし皆寢靜る時は自然に消るといふ。この地を臭水村といふ也。又西越後高田府より二里計りに船津村といふあり。此邊には土を燃して薪に代る所有り。此地元來薪の拂底なる也。依て掘たる土を薪とす。色薄白く木葉枝など朽たるが、自然と地に交りたるねばりもなく、又荒々敷もなし。常の土にて輕く灰をかためたる樣なり。五寸四方ほどに切て日にかはかし、庭に積置、木に交て燒火とす。但し夫ばかりにて燃るものにはあらず。火勢もなく其灰は至て潔白なり。江州老曾森、飛驒の高山などに出るスクモの類也。但しスクモは色黑し。これもはなはだ輕く、土中に數百年經たる木草の根株の如きなり。日本紀、天智天皇七年秋七月越後獻二燃土水一云々。是なり。又筑前國博多の山より石炭を出す。其色黑く光澤ありて、又火勢强く、薪を用ひずして何にても煮也。少し臭く油もあり。故にまた竈に入て一旦燒て用ひれば臭みなし。常の堅炭の如し。土民掘出し、或は燒て博多福岡の府下に賣出す事夥し。又山陽道周防國舟木村といふ所にもあり。これは色赤くて博多のごとき石炭也。漢地理志、豫章郡出レ石可レ燃爲レ薪といふこれなり。又緬甸在二石油一自二石縫一流出、臭惡而色黑。可レ搽二惡瘡一云々。皆是其類なり。

○琵琶湖

抑淡海の形全く琵琶に似たり。竹生島は覆手と云べく、勢田は横をりて海老尾といふ。南の方勢田より北方海津まで貳十里餘、東西堅田より北は廣く、其幅七八里に通り、南は次第に狹し。堅田より木の葉

濱東西僅十八町といふ中に、島三つ有。澳島、多景島、竹生島なり。澳のはさゞ波よする沖つ島と歌に詠り。漁家のみ有り。多景島に一宇の寺あり。日蓮宗の僧守る。竹生島こそ本朝五奇靈の一にして、周圍六十町、高さ僅に十丈餘、南に向ふ島根の岩石こと〳〵く水晶なり。金輪より涌出せしと云。椎の木多く、坊舍六院有て觀世音立せ給ふ。辨才天女を祭り、此尊天を妙音天女と申奉る。故に海を琵琶湖と號すといふ。

○竈門山

筑前國御笠郡竈門山は、一國の中央に聳えて、神秀の名山にて國鎭なり。山上より眺望すれば、數百里の外を究む。九州は眼下にあり。西北に壹岐、對馬の二島見え、體天淸朗のころは、知らぬ新羅の山もほのかに見ゆ。春は櫻、秋は紅葉を第一の壯觀とす。拾遺集の連歌に、「春はもえ秋はこがるゝ竈山、」と書付たる。「霞も霧もけむりとぞ見る。」と元輔の付給ふ處也。祭神玉依姫、〔割註〕神武帝御母神。」相殿神功皇后、八幡大神なり。東岸に淸泉あり。四尺四方計りいかなる旱魃霖雨にも增減なし。人其水に影を寫せば、老顏も少壯のごとく、故に盆影の井といふ。天津神降誕の時、その水を產湯とし給ふ。其上に鼎足の如くの大岩三つ有り。高さは丈餘、互に相距事又一丈計、人其間を往來す。是を竈門石といふ。傍に其湯を沸し給ふ釜蓋とて、高五間餘の大石有り。八幡大神も此泉を產湯に用ひ給ふ。御社は山嶺の大磐石の上にありて、戌亥に向ひます。登山の坂路鐵索を攀上る所六七間有り。山中に靈窟七ケ所西方に獅子が瀧有り。

○西行塚

此上人諸國を經歷ありて舊跡國々に多し。或は大峰の奥に閉居し、那智の瀧に籠り、陸奥の果を盡して、

　みちのくのおくゆかしくぞおもほゆる壺の碑外の濱風

西は四國に久の松の跡あり。九州二島にもわたられしなり。

月花の時なればこそ天の原おろふる雪に袖はぬれつゝ

〔割註〕今勝本といふは壹岐の國なり。ヲロフルは少しふるなり。西州の方言なり。〔河州葛城の西北の麓、弘川村に弘川寺有り。役行者の開基にして、弘法大師の中興の寺なり。此地は上人終焉の地なり。長秋和歌集に云、圓位聖に歌どもの判を請侍る事有しに、其年文治に河州弘川といふ山寺にて煩ふ事ありと聞て、急ぎ遣したるに、かぎりなく悦びいひつかはして、後二月十六日になん隱れ侍りける。彼上人先の年櫻の歌多く讀る中に、

同じくば花のもとにて春死ん其如月の望月の頃

と讀て、遂に此日終りを遂ける。實に有がたく覺えたりと云々。かく計有て、さだかにもあらぬを、近頃似雲法師といひしすき聖、上人の德を慕ひ、其終焉の所さだかに知らん事を、石山寺の觀音に籠りて祈り奉り、したしく示現を蒙り、終に此處を尋て、墳墓の草を刈、影堂を造り、側に櫻數株を植て、上人の志をつぎ、自らもこの地に行ひすまし、山に春雨亭を造りて山居しける事は、自ら書る生波草にくわし。上人の歌に、

佛には櫻の花を奉れ我後の世を人弔らはゞ

○配所月

顯基中納言の言に罪なくして配所の月を見んと有しは、風雅の實情也。予友橘南溪云、司位有る貴族も、世の誹り人の嫉少からず。家富る人は其寶失はじと、彼を恐れこれをあやぶむ。富貴は世人の皆欲する處なれども、生涯の樂みを論ぜば、身のよせも重からずして、寶も持ず衣食はいづれの境に至るとも、飢ず凍へざる程ありなん。須磨の秋、吉野の春、あるは友人を遠くも尋ね訪ひ、又風景ある地に遊ばんは嬉しかりなんと、我のみいふにあらず、近き安永の初、薩州の士長谷川藤兵衞といふ人、琉球奉

行としてかの島に三年勤役す。其人の物語に、哀れ成し事は、もとは帝都のある寺の院家にて玄圭といひし流人あり。三十年前に公家より國の守に命ぜられて、此島に送り來りぬ。玄圭文の道にも廣く、詩歌をもよくし、糸竹香茶の事までかしこかりしに、此島に來りし後は、漁父樵夫の外誰とかたらふものなく。たゞ夜毎の月の色に都の空をおもひ、涙袖に乾かず、此島に在番の武士五人渡り來るを語り合のみ。廣き島に詞さへ通ふは、只此五人計りなれば、其風情おもひやるべし。中に長谷川氏は文雅の才有りて、都の方にも住し人にて、殊に兄弟のごとく、晝夜談ひ悅ぶ。玄圭等をいたく好みて、月花の折からは、誰聞く人もなきに獨調べ興じけり。又庭前に築山を作り、自ら木を刻みて堂塔寺社の形狀を模し、此は都東山なり。此堂は清水寺なり。爰は祇園の社なり。此方の山は叡山也。愛宕なり。この川は桂川、是は鴨川なり、中央は內裏にて、南面なるは紫宸殿などゝ巨細に寫し造り、更に見も聞も知らぬ蜑乙女に語り聞せ、都にあるの心にてうさをはらしぬるとぞ。その心の內推はかられていと悲し。又常にいふ、世の中のたのしみといふは、富にあらず貴に非ず、何國にてもあれ。心の向ふ所に遊び、山水の風景に放心せん外は願ふ事なきもの也と、されば世の中に縛せられて、生涯を妻子の爲にくるしむは、都に住てかへつて洋中の孤島にあるに替らじ。海道記に曰、山に汗かく樵夫は、北風を荷ひて夕に歸り、野に足なへし商客は、白霧を拂ひて曉に出、面々の嗜まち〳〵也といへども、各此苦は是世渡なるなり。

　人毎にわたる心は替らねど世過る道はひとつなりけり

○富士山

抑富士峯の秀麗たる、本朝に古今賞するのみにあらず。異國の史籍にも又詳なり。謝肇淛云、莫レ高ニ於峩眉一。莫レ秀ニ於天都一。莫レ險ニ於太華一。莫レ大ニ於終南一。莫レ奇ニ於金山一。莫レ巧ニ於武夷一。其它雁行而已と、富士みな是を兼たり。實に三國第一山といはんにはづべからず。其神秀なる面向不背にして、兒女とい

へども、その名を知り。見ずして其形をしるは此山のみ。西南駿州大宮口を表として、東北は相州洲走り口、北西は甲州吉田口、此三ヶ所より登山す。甲駿豆相の四州に跨り、吉田口一の鳥居より頂上まで、直に登る事三百五十七間といふ。峯は八葉の花かたに倣らへ芙蓉峯と云。祭神木花開耶姫命、則淺間大權現と稱す。麓の三所おの〳〵、〔割註〕新宮あり、神職僧坊多し。」社頭嚴重なり。役行者初て登山有しより、表口を大日とし、裏口を藥師とす。今登山の者は、淨衣の上に牛王寶印を押て禪定の證とす。惣じて山形、關八州に望み見るに異なる所なく、只北面は山足長く、東北に八湖あり、おの〳〵めぐり百餘町、あたりに村里有て、湖中に船を出し漁りす。又山中の一奇なり、表口は道險しく砂走りなし。吉田砂走は上下道を異にす。先中宮といふに至る。廣野三里なり。駒留といふ。これまでは馬も往來す。これより上は木山二里有り。それより壹合貳合として、合毎に石室を設けて、風雨の防ぎ飲食の助とす。高サ六尺餘方丈計、中央に地爐を掘て木を焚なり。氷を外面に置て、其滴りを湯にして飲しむ。五合以上にては一天瑠璃のごとく、星の光手に取計に見ゆ。正午時より上り八合の上に至らざれば、あくる曉天に來迎といふを得がたし。その八合九合目は嶮岨いふ計りなし。岩角にすがり行に、いかなる剛力の者も、呼吸喘ぎ胸押すがごとく、一息に三尺とは進みがたし。絶頂を望むに頭上に覆ふごとし。故に爰を胸突といふ。一足を過てば山下に轉んで再び顧る事なからんかし。扨來迎といふ事をある小史に、唐書の峩眉山に佛現の事を證として、此山中の事跡も同じとするは擔板漢なり。彼國にいふ所は、その見る人の影は、日暈の中に移るなり。故にその人點頭ば、その佛も點頭と云。いぶかし。日に向ふ人影の後に移らずして、日暈の中に移るべき理なし。笑ふに絶たり。世に來迎といふも、佛出現するは論に及ばず。其事實は附錄に詳なれば爰に載せず。只其一を述て少き義を解す。先夜明なんとする前、東方の中空に一筋の白雲帶を引たるごとくあらはる。須臾にして地下より薄暈をもつて畫たる輪のごとき物のさし昇る中に、人影の如きもの朧げに見ゆ。次第にのぼる。見る内に忽然と消失る也。否又

地下より紅の日輪傘計なるがさし昇る事速なり。この時かの白雲青朱紅紫の彩雲と變じて舂き動く。既に地上一端計りも離るゝと見れば、光明赫々として再び目を向けがたし。斯て四方を眺望するに、世界の山岳唯一面の平地のごとく見下して、曾て山有とはしれず。西北の方に尖なる山一つ雲間にあり。山人に問ば、信州駒ケ岳なるよし云り。絶頂の八峯嵯峨と峙ち、中は堅氷綴て餘物を見ず。やがて八葉を廻りて下山す。草鞋三足を重ねて履、その身を眞直に立ながら砂礫と倶に滑り下るに、一息の間斷なく、僅に一時ならで、本の中宮に歸り來る。爰にて草鞋を脫捨て、新に履かへて御師のもとに歸りぬ。因に云、此山をふじと和訓にせる事諸說多く、或は盡とも、不盡といひ、四時雪不盡とも云。又世に不二といふなど、みな文字によりてしかるべからざるか。文字は訓あるに塡たるなれば本說としがたし。富士富慈などもあり。只仙覺律師のいふ、ふじの名は、煙しげしといふ義なりと有こそ據とすべし。又世の人此山を夢見る時は吉瑞なりとて、一ふじ二鷹三茄子とて同く吉兆とす。或人云、此三事夢の判にはあらず。皆駿州の名產の次第をいふ事也。富士はさら也。二鷹は不二より出る。鷹は唐種にて良なり。こまがへりといふ。三茄子は、此國第一にはやく出す所の名產なればなりといへり。

○不知火

筑紫の不知火は、肥前肥後の海にあり。國名とするも宜なるかな。其怪しきことまのあたり見る所をいはん。每年七月の晦日にあり。肥後八代邊宇土邊の浦には更なり。海邊に臨める處は、貴賤老少をいはず、是を見んとて晝より來り遊ぶ。かくて夜半の頃、海上寂寥として誠に闇夜の氣色更にもの凄く、今や出んとうち守り居るに、忽然として一火を現じ、又三火となる。あはやと見るうちに、火の數多くなりて、果は海面遠く燃連る事數里に及ぶ。旣にして夜將に明なんとする程より、いつしか次第に消失ぬ。浦人のいふ、其火のもとを見んとて、小舟を乘出して、彼連れる火の中へ舟をさし入れば、忽然として前後三度計は火退く。頓て先の火の間へ漕行ば、又跡よりは次第に燃て、行先は次第に退くなれ

ば、いかにしても其火近く見る事なしといへり。誠に上古より不知火の名あれば、後世誰か論ぜん。又此夜にかぎりてあるも一奇事なり。

○白石島

隱岐を去る事乾方一里ばかりに、白石のみの一小島有。海上より纔に七八尺計の平坦なり。汀に一潦有。浪高ければ潮打入。然るに此水淸泉也。また二丁計り上りて一井有り。これも眞水也。雌雄池といふ。かたはらに小祠あり。龍神を祭る。此島人常に行人なし。適年旱りするとき、神酒供物等を持渡り、太皷を打立雨乞に、四方の浦より大小數千の鼯出て峯に集る。頓て酒を飮しめ供物を與へて歸る。必ず途中にして雨降といふ。

隱岐豐田浦に小野篁の古跡有り。篁有井權頭が女に因て一子を儲ぬ。歸路の後都にむかひ取られしと、今その跡には小松に幣を結添て立置り。夫をヲハケといふ。其由緒も文字も知る人なし。

○大原社

丹後に大原大明神有り。三月廿三日參る人多し。これを舂さしと號し、社前の小石を請て歸り、蠶飼棚に置ときは　蠶に鼠付事なしと、故に御猫と稱す。九月廿三日に又參詣し、この御猫を社内に納む。これを秋ざしと名付。故ある古社なり。常にも詣づるを大原ざしといふ。

○多度社

勢州桑名の東に多度山權現とて有り。其攝社に一目龍の社あり。極てちいさき社の、扉もなく翠簾のみかけたり。この神時として出るときは、風雨雷電頻り也。土人は多度權現出給ふらんとて、門に出或は窓より見れば、一帶の黑雲屋上を掠計り走る。然るに此邊にて此神出行あれば、風波穩かにして海上も融和なりと悅ぶに、他國にては忌嫌ふ。田畑大きに荒物有て搔亂せし如く也。世の人一目連といふは非也。一目の龍なるよし、此神毎月十八日には桙取の淸泉寺といふに入る事あり。〔割註〕法泉寺、本願

寺、宗社より半里ばかり。」一帯の黒雲に乗て彼寺に入なり。堂内一面に雲集りて、終日ありてかくて夕方に社へ歸り入るといふ。

○さら〳〵越

富士、湯殿、立山等の高山へ登るには、山の口開くと云事有り。年の寒暖により遲速あり。されど大かた六月なり。又山仕舞は七月末の日の定ありて、其内山内に居るもの一同に下山し、山の口を閉て參詣を停止するなり。越中立山は本道富士の府より絶頂へ拾八里有り。然るに信州の人禪定せんに、富士へ出ては多く日數をへて數十里なり。故に年毎に其山口閉て後、立山の後の捷道より登山す。險阻なれば信濃の仁科口より絶頂迄僅に九里とぞ。其麓に至れば一村有り。此所に廻り壹里餘りの湖有り。村人皆漁を業とす。此に一宿し、翌日參詣し宿に歸ると也。これをさら〳〵越といふ。太閤記にいふ、佐々内藏介成政、〔割註〕越中富山の城主なり。」天正十二年霜月下旬深雪をもいとはず、さら〳〵越して險阻無双の山路を行迷ひぬ。これは何地をさして思召立給ふぞやと從ひし士ども問。（中略）、かく思ひ立てより急んほどよろしきはなきぞとて、雪に泥まぬ若殿原を百人ばかり召連、大山の峯際に攀上り、南を見れば山下に里有と覺敷て、柴折くべる薪絶々なり。いざ煙をあてに下りて見んと、橇といふものに乘て落しければ、眞忠の志を天も感じ給ふにや。おもひの外に安々と麓の里に着けり。民の竈に入て見んと、事のうれしきに案内もせで入しかば、老たる樵夫膽を消し、是は變化の物ぞかし。今此雪の中に人間業にてはあらずと不審しあへり。小姓の長途部兵庫といひし者、いやとよ越中より信州深志巴へ志す人にてあるぞ。宿を借參らせ、道の案内をもせよ。汝等心易くあらんほど引出物給ふべしと云しかば、夫よりいかにも念頃に饗應しけり。越中外山の城を十一月廿三日に出、十二月朔日に午の刻上の諏訪に着したり。因に云、先年羽州（マヽ）月山の麓志津といふ庄内領へ越けるは五月十一日なりし、その間小坂、常に馬足立ず大難所なり。田麥俣といふ所にて、六里、〔割註〕世に六十里越と云。」多くの峯を越ゆるにさ

らに人家なし。志津と田麥俣の地、纔に間を隔山へ懸りて一向に雪深く、四方を眺望すれどもみな白妙にして、何れの山とも分らずといふ。案内者も大におどろきぬ。殊に此日去年以來初ての通行なるよしにて、何を目當とせんものなし。これにはハカニと名付く藁の足袋の如きものにて爪先を包みぬ。あるひは谷に滑り落すとも、氷堅ければ底には墜ざれども、鏡面にひとしければ踏留る事なりがたし。九死一生にして暮前田麥俣に着てより、足伸て屈まず三日逗留す。其宿に着し時、必ず草鞋解べからずと制して、湯を取てそれに暫く足をひたして解去けり。左なき時は草鞋の紐にて倶に其皮剝るゝなりと云。又或人の語る、奥の津輕と南部の境には、高山とて尾崎の海中へ着出たる大山有り。谷深く嶺險くもとより道もなし。山は篠竹さこたんなど生茂りて足を入るべき地もなし。然るに冬天雪降積る事數丈、樹木篠なども雪の下に成り一面の銀山に似たり。津輕より南部の府まで本道百里なり。極寒の時頂上を目當に登りて絕頂に至れば、眞一文字に西を志してすべり下れば、南部の府へ出る事纔に廿里となん聞えり。予が越し六拾里ごへの本道に廻れば七八拾里有よし人のかたりぬ。

笈埃隨筆卷之四

○蝦　夷

胡砂ふかば曇もやせん陸奥の蝦夷にはみせそ秋の夜の月　（吳竹集に）

世に傳ふ、蝦夷人は日本人と交易するに、若その價相應せず、夫を責はたらるゝ時は、耻て面を合せかね、胡砂を吹、忽ち我姿を隱して遁るゝ故に、此和歌その意をふくむと、誠に奇事なり。

案るに、近頃彼地より渡りし笳を見しに、木の皮いかにも厚きを、くる〳〵と卷て綴りたるにて、箕と覺しきところふき竹あり。只空然たるのみ。水に滿し吹ば、只竹を打拔て吹音のごとし。これを胡障といふ。形は笛の如し。是彼地の籟也。今右の說幷和歌のごとき奇事詳ならず。

抑蝦夷もとより文字なし。萬の事實をしるし傳ふる事なし。今に每年覺え置べき事は、繩を結び木に刻む。何年過ても忘るゝ事なし。松前商船抔も、勘定の時は彼結繩と刻木を取出し、去年の事を具に辨ずるに、一事として違ふ事なし。我國に通ずる事、人皇十二代景行天皇の御宇を始とす。それより數百年の間、或は叛き、或は從ひ、反服極りなかりしに、人皇五十代、桓武帝の御宇より、田村丸東征の後は敢て叛かず。また奥羽越後等の蝦夷も、僉々歸伏して、今僅に津輕と南部に此遺種有り。頭少し剃て髮刺す半額といふ是也。自ら松前の夷人と出會を望まず、系圖を立て別種とす。本邦の一蝦夷なり。蝦夷の唐土に見えしは、唐書通典等を始とする也。是も我國より連行しなり。其地山岳重疊として大河多し。北は韃靼に隣り、東は大海、南は津輕、西は海中島々多し。南北に長く凡四百八十里なり。西東は狹く三百六十里といへり。その人長六尺ばかり、髮を被り、髭長く、眼丸く大にして光あり。眉毛一に連り、顏色皆靑白く、女は嫁したる印には鼻の下に入墨して、衣服は大體アツシといふ物を着す。是木

の皮を裂て織し物也。常に肉食して米穀を食はず。故に多く短命也。詞もまた通ぜず。近頃は大體詞も聞ゆる事あり。劍を背に負ひ、弓を挾み、或は長き矛樣のものにて山海を漁獵す。松前より船の通ふ地までは松前の支配なり。其奥キイタツフ。ソウヤと云ところまで出來り、交易をなすを奥蝦夷といふ。是まで凡海陸三百里計り、內六十里ほど松前の支配、ソウヤより北は地高麗に續きたり。西に熊石、東に龜田、この二ケ所關有。此にて往來を改む。故無くして關外蝦夷地へ行事を禁ず。松前城下は後に山を負て前は海也。東西家續き建つらねて一里計りあり。城は壘にて二の櫓有り。大手の兩側は家士の町也。城下三ケ所に高札あり。

一從二諸國一松前渡海之輩對二夷人一商賣堅禁止之事。

一無二子細一而松前人之渡海賣買候者有之候はゞ急度可レ致二注進一事。

付蝦夷人之儀雖レ往二來何所一可レ爲二其心次第一之事。

一對二蝦夷人一非分之儀不レ可二申懸一候事。

右之條々可二相守一之。若於二違犯之族一者任二當家代々之先例一速可レ處二嚴科一者也。

寛文四年

松前渡りは、津輕外が濱三馬屋より東風に任せ、海上は僅に十二里餘なれども、タツヒの沖に潮カラミ迚、三の潮筋ありて、洪水の激するが如くなれば、風緩き時は中々乘切難し。强き順風ならざれば潮に引流され、南部の沖へ行也。また夏は潮ヲコリ迚、巳の刻におこり未の刻計に止也。此時は海底より潮涌上り、四方の大浪もみ合て、水面三段ばかり高くなる。その時はいかなる順風たりとも、船いつかうに動く事能はず。然れども怪我はなし。浪靜るまで捨置なり。惣じて松前海岸かた濱にて、潮荒く岩石峙ちて、案內不レ知舵は多くあやまちする也。また時として霧深く立時乘込めば、一向天日の光りも見えず暗夜のごとくなり。此時は方角を失ひ破船するなり。松前城下の商人は殘らず他國者也。江州八

幡、薩摩、大隅、また加賀、能登、越中、出羽などより、百姓といふは津輕南部の者どもなり。其百姓田作せず。たゞ鯡を取るを業とす。誠に天下第一の大漁なり。春分十日過、此海にのみ自然と寄來るもふしぎなり。其時は武家も町家も松前の沖に男女老若出てとる。鯡十五に一ツを運上とす。凡廿日程の間、二三度も寄來るを取れば、翌年の此頃まで渡世暮方豐か也。干上て俵となし、小船にて餌指へ、〔割註〕繁昌第一也。海上八十八里。」廻せば、他國船集りて、鯡數の子の相場を立てゝ買取也。此事四月中に事濟也。五月になれば昆布取舟を出す。東海箱館の外海より蝦夷地へかけて六拾里計りの間也。尤海中の石に生ず。〔割註〕宇賀といふも五十里の內に有り。昆布の名とす。」船より長き柄の付たる鎌にて刈て其根を切て、船は早速漕退くなり。早く遁ざれば、根の切れたる昆布くる／＼と海水を卷たてうかみ上る。故に船を覆す也。其長さ數十丈有り。扨引上、屋根にも砂濱にも干す。また屋根を葺たるも有り。上古より田を作らざれば米なし。津輕、秋田、酒田より廻る。領主は酒田の廻米四千五百俵充、每年御買受代金上納也。米は作らずしてかへつて米澤山なり。米八升を一俵とす。酒、糀、鹽、たばこ、染木綿、古手鍋、釜、庖丁、糸、針、きせるなど持渡る。上方通路は越前敦賀の船、順風に六日七日に着なり。北湿の地なるに、水の淸潔なる最賞すべし。西北は平地にて、東南に山深く、甚だ急に切立たるが如し。絕頂は金銀の氣、亦は硫黃の氣にて燒崩れたり。一國都て金、銀、銅、鐵多し。山川は云に及ばず。原野とても砂金多し。松前より三部乙部といふ所までは御巡檢地なり。東方龜田といふまで二十七里、又箱館といふ湊あり。繁昌の地なり。龜田土地宜しく、四方三里餘、平地を畑とし百姓もあり。此より三十里、東蝦夷地に臼が岳といふ山あり。絕頂燒て臼の如し。麓に善光寺の彌陀とて有り。夷人殊に尊敬す。奇瑞も有り。此所松前より往來を禁制なれば、回國の僧など忍びて參詣す。麓は入江にて景色無双也。この奧五六十里計りに尻別山と云ふあり。本朝の富士の山に似たり。夷中の高山なり。松前領の高山は仙見岳也。城下より八里。元蝦夷は、古へ肅愼靺鞨兀良哈の種類也。韃靼は奧蝦夷

より近し、黒潮の來る處を一日乘過れば即韃靼の地也といふ。この黒潮といふものは東の大洋にあり。若し風緩き時は、この潮に引とられ、再び歸り來る事ならず。江戸廻船多く行衞知れざる事年々に有しは是也。〔割註〕天池の水東流することは常理也。この地はしからず。東方に國あるゆへ潮北に流れ、蝦夷地へ落る事、松前の異事也。」蝦夷には千島とて、津輕外が濱より海中へ島々多く、絶景詞に盡し難し。一島一奇一岩一怪、見る毎に神を含み靈を備ふ。惜い哉。邊鄙の勝景世に埋る事を、箱館島四山の岬、江とも島、エレモ島、蠟虎島等、又常盤島は夷地より五十里、毎年本朝へ鳫の渡り來る島なり。巖埼ちて渡海なりがたし。冬は氷橋かゝり、氷浮橋と號す。四月中旬までは餘寒強く、雨毎に霰交りの雪なり。四月の末より梅櫻咲かゝり、椿、藤、山吹は五月一同に咲。土用中大暑なく、七月中旬暑氣を覺ふ。然れども朝夕は冷なり。

〇飛驒里（元本脫落あり、仍て除レ之）

〇高千穗嶽

襲高千穗岳は神孫降臨我日本開闢の根元也。この地は八方に山有り。（諸縣郡也。）幽谷深遠の故襲といふ。日向國の北地にて、西は肥後、北は豐後に隣りて、東南は大洋にて、西濱薩州に通ずる事三十餘里也。麓に十八村有り。絶頂に至る事三里、峰二ツ聳えたれば二上嶽と稱せり。奇巖靈窟多く皆神跡なり。就中十社神といふ事、南五町計り坂路に、竪八九尺横五六尺なる繁田有り。毎年自然に稻生出て穗をなす。則天孫降臨稻穗を打蒔て雲霧を祓ひ給ふ遺種なるゆへ千穗峰といふ。これを土人不蒔稻とも、實祿田ともいふ。この外天の眞井等の奇々妙々たる事筆に盡しがたし。

〇鴨川

昔は鴨川の水、夏秋大雨の節は洛中へ溢れしに、板倉內膳正殿所司代の御時、堤を堅固に築かれしより、今に洛中水の害なし。此侯の功なり。洛中を二ツに分け、二條通りより上を上京といひ、下を下京

といふ。中京といふ事曾て無き事にて俗稱なり。また室町四條之辻より四方へ分て、洛中の地を四座雜色の支配とす。これを方內といふ。又大佛殿の外塀の石垣築地數萬の大石有るものは、たゞ壯觀の事のみにあらず。洪水汎溢の防ぎの用なり。

〇御沓石

天智帝天へ上らせ給ひし時、落させ給ふ御沓石になりしとて、今に山科の御陵の南に侍る。長五尺計にして廣さ一尺四五寸もや侍らん。また金岡に紀州藤代の上坂景色を筆に及びがたしとて捨たりし硯の石となりて今に有り。それも長五尺ばかり廣三尺餘りもや侍らん。かゝるものその世を經て年を重ねぬれば、大に成るものにや解せず。丹後國經が御崎と中所に、文珠大聖龍宮に至り、說給ひし經の其儘石になりて今にあるなり。

〇千本松

日岡毘沙門堂に、源の牛若丸手自植給ふ松數百年に及んで枝葉榮え、末にては千本に分れたり。世に千本松といふ。今は枯れたり。

〇犬追物

犬追物の場は、下鴨河合社東北にあり。東西四十二間、南北四十間。傳云、文安四年東山將軍義政公此所にて犬追物御覽、寛正六年八月にも、亦爰にて御興行。後陽成院永祿三年三月三日、同御興行。江府にては正保四年十一月三日、山王境內にて島津薩摩守光久奉二台命一興行。御假屋を設け、諸大名衆參向なり。

〇蹲踞辻

禁中艮角の築地を、俗に蹲踞(ツクバイ)の辻といふよし、夜更て此辻を通れば、茫然として途方に迷ひ蹲踞し居也。怪敷事なり。また築地の軒下に、烏帽子著たる猿の幣を持たるを彫刻せり。是石山三位師季卿の細

工のよし。〔割註〕或舊記に見ゆ。」

〇膽沼郡八幡宮幷西光寺

田村丸奥州の夷賊を平治し給ふより。東夷始て一統に順服したり。其功無類也とて、膽沼郡に八幡宮を勸請し、其時の弓箭を納め給ふ。是世に云ふ觀音の佛力なり。又賊首の住し達谷(タツヤ)窟に九間四面の堂を建、鞍馬山多門天を安置勸請し西光寺といふ。今に三十三體の大像あり。昔は東西二十里、南北三十里の水田寄附ありしとなり。〔割註〕是國道六丁一里といふ。」

〇安濃松原

田村の謠曲にいふ安濃の松原（勢州）、明應年間に大地震に破却せり。もとは津の町と海との間に松原有しとなり。此邊日本三津たる筑前博多、薩州坊の津、伊勢の洞の津なりし。松原の邊入江にして船のかゝりよき湊なりし。

〇實　盛

齋藤別當實盛は、越前國北郡丸岡の產なりし。謠曲にうたふごとく、武藏長井に在住しければ長井と號せり。討死は加州江沼郡篠原なり。今首洗池有り。大池なり。其上を手塚山といふ。此地は砂原也。元祖一遍上人より十四代他阿上人、〔割註〕代々皆他阿上人と號す。」巡國に、此所にて實盛が亡靈出て上人に逢奉り、修羅の苦患遁れ難き事を語り、跡弔ひ給へとて去りぬ。仍て上人此地にて七日逗留ましまし、別時の大念佛修行し給ふ。其因縁により代々の遊行上人回國には、必ず爰にて七日の別時念佛あり。則ち砂原に假屋を立、今の世まで例となり。江沼郡の領主より其經營ある事なり。

〇養老瀧

養老瀧、美濃垂井より二里南なり。桑名へ通るみちの西の山麓にあり。瀧の邊の山に、其時の翁の社あり。養老寺には觀世音安置せり。

○神南山

神南山は、立田川の西川下に在。其下の村を則ち神南といふ。三室の峰は此山の側なるをいふ。或說に、立野の西に山の崩れたる所といふは非なり。古今賓枝抄にいふ、神南の森とは、立田明神より南なるゆへ神南比森といふとあり。

○木曾棧

木曾棧は、上ケ松宿より福島へ越る間なり。掛橋といふ里あり。木曾川を懸し橋にはあらず。山の岨道絕たる所に懸たり。右の方は木曾川の際なり。橫二間、長十間、今は板橋にして欄干あり。

○田子浦

田子の浦は、昔の街道なりしが、親不レ知とて高山岩石屛風のごとく、礒邊は波高くして暫も止事なし。其波の引間に走り通る、一騎打にて、行人跡を顧る暇なし。寶曆元年秋、朝鮮人來朝に、この通路をとめ、薩捶山を開きて往來す。故に今田子の浦を知る人なし。

○屋　島

やしまは、讃州の艮方にあたり、坤に出張て半月の如く、長さ一里、橫二十町、島の形屋棟に似たり。此地と新高松の間に相引といふ所あり。滿潮に海となり、常は干潟なる所、凡一里ばかり屋島の坤に當れり。

○地　氣

佛法東漸とは、釋氏の賢ことといひ出たる樣なれど、一世界の物として、東にすゝまざる理なし。都て陽に屬せるもの、日月星天より春夏秋冬の流行、人物鳥獸草木等まで、左に旋る是南面にして順道とす。みな天に附庸す。また地は陰に屬し、右に廻るものこれ逆なり。故に天は左旋し、地は右旋す。鳥獸虫魚は陽に進み、陰に却くは氣に仍てなり。しかるに人、日月星の運動は常に見て怪しとせず、却て地の

右に廻る事を知らず。夫陽は動く是天也。陰は靜也。然るに地の動くはいかに、靜なりとは動くに對していふ靜也とありと云をもつて、動く事あるを知るべし。若地動かずんば死物なり。天にはさまりて墮ちざるは、死物にあらざる故なり。難經など二もこれを說さとして、一氣を以て挈といふ。予諸州を遍歷し、自然と古哲の不レ誣事を感ぜし事多し。或年房州那古寺に詣す。坂東三十三所の觀音在せり。前は房總の海上なり。西は伊豆岬目近く、東海の眺望限なし。しばらく舞臺に靠り遊覽しけるに、傍に所の老人參り合せて互に物語りける中、老人云、我幼きころは、常に此觀音の舞臺に毎日遊びし。其時は此舞臺の下まで浪打寄て、釣する舟などの直下に見えて面白き事なりしに、いつの程にか斯のごとく陸に成りて、濱傳ひと成り、樹木も生出て大に氣色變れり。見給へ。海へは十町計り隔たりぬといふ。又一人いふ樣、されば世界は南へよると云傳ふ。誠にさもあるにや。近頃自然と氷のはる事も、川にも昔のごとくならず。また春秋など網を鋪はりて小鳥を捕るものゝいふ。三十年前とは鳥の集り來る所は、二三丁も南に來る也といふと語りぬ。其後備州兒島に在し頃、かの佐々木三郞盛綱が馬にて海を渡せる古跡を尋るに、軍書には十四五町沖也と記せるに、さは無くて今は地續きに家居立並び、浦の男の塚も、彼浮洲の岩も、〔割註〕此浮洲の岩、今は下醍醐三寶院の庭にあり。秀吉公取寄給ひしとなり。〕田畑の中に有て、海邊までは四五町も隔たりぬ、彼是をもつて考ふるに、地の轉ずるや虛談ともすべからず。邵康節先生客と洛陽の天津橋上に遊ぶに、折から杜宇數聲啼渡る。邵公是を聞て樂しまず慘然たり。客怪て其故を問ふ。公答て、洛陽舊よりこの鳥なし。今始て至る。主どる所有る歟。客又曰、何をか主るや。邵公曰、二年ならずして上南士を用ひ相とせん。かくて多く南人を引て專ら政務を變ずべし、天下更りてこれより事多からん。客曰、杜鵑何ぞこれを知る。邵公曰、天下將に治るや、地氣北よりして南す。天下將に亂れんとするや、地氣南より北にす。北方此鳥なし。今江南の氣至れり。禽鳥飛類は、氣の先を得るものなり。南方の疾病瘴瘧の類、北人皆これを苦まんと歎息し給ふ。その言のごとく熙寧の始果して

然り。故に嘗て詩有り。流鶯啼處其猶在、杜宇來時青已非。又曰、幾家大第横斜照、一片殘春啼子規。實にその旨深い哉と云々。これをもつて我國の地氣の自然と南せる、ひとへに堯年舜日なる、太平の氣化なるべし。されば一年の氣候も同じく、鳥獸の動靜、蟲魚の升降、草木の榮枯を規矩として定るもの也。則ち陰と陽との往來による。人知らずして鳥虫草木先識る也。因に云ん。予伊豆の海邊に遊歴せし時、入海より曲りたる所に納屋とて漁者あり。元來此邊より房總の濱に多く住居す。泉州の人納屋主にて、或は百人、或は二三百人なり。數艘の魚船を持、沖に出て引網あり。地界の網有り。秋冬春に至れば、多く鰯を取つて干し、江府に出して賣販くなり。其中に鰡を取る納屋あり。一二三月頃東海の鰡の魚、北より南へ行。夫を網せんとて、伊豆より相模へかけて凡十里餘、濱の出崎々々三十町、五十町を隔てゝ小家を立、斥候を置なり。かくて其氣候に感じて、一同に群をなし、礒を傳ひ連綿と押來る。第一の魚見小屋より魚の上り出るを、頓て第二の小屋に通ずれば、次第に告て其用意をなす。其相圖に晝は麾を以てし、夜は篝火をもつてす。其間數日なり。その魚に先登あり。これをその規矩とす。扨伊豆の國なる本納屋には、八艘十艘の漁船に網を並べ敷て相圖を待、其本納屋の東の方に、殊に廣くなる出崎有て、其出崎の前なる海は、一面に疊を敷詰たる如き石數町ありて、頗る淺く見ゆる。其石面を通り出崎を落る所に、大網を幾重も張置に、その淺きより深きに落る所なれば、幾百萬の魚たりとも、ひとつも洩る事なし。況や押懸りたる魚陣引歸す事なし。故に一度に類を盡し取獲たり。頓て生簀數萬ありて、みな海中に筌を付て貯へ養ひて買人來りて追々出し商ふ。誠に世に目覺しき壯觀なり。これを魚道といふ。されば鳥の大空を翔り、魚の大海を游ぐ心の儘なるべきに、却て定れる道ある事をや。但し鳥を鳥路と云、獸を獸徑といはんか。新井君美の魚道といふ事を、我師なりし人に問けるに、昔蝦夷の地なる山の、自ら焚て其土灰海を埋みし事有しに、此國に魚の寄來る事、前時のごとくあらず、久敷その埋たる土灰浪に打立られてなくなりけるにや。後にはもとのごとく寄來れり。これ其道塞がりしによつ

てなりと、その後年に、此事を佐渡國の人に尋ねしに、されば魚のみにあらず。榮螺のやうの貝類のものまでも、遠き海をも渡り來るなり。其わたり來るときは、水面一尺計りの下は、宛も廣き庭に石を一めんに敷たる樣になりてわたり來るもの也とかたりき。

○善光寺

我國三如來と稱し奉るは、第一信州善光寺阿彌陀如來、第二京北嵯峨の釋迦如來、第三洛中因幡堂藥師如來也。其由來世に知る所にして、またゝぐひなき靈場にてましませり。中にも善光寺如來之事蹟、傳記にいふ所不審あり。いま杜撰なる私說をあげて、千載の罪人たらん事恐る。見ん人妄語なりとてそしらんもまた可也とすべきものか。抑此御佛の緣起を尋るに、天竺月蓋長者、釋迦如來の示現により、阿彌陀如來の尊像を鑄奉り、歸依渴仰し持念佛たりしに、數百年を經て百濟の國にわたらせ給ふ。長者も佛像により、聖明王とて百濟國王と再生し彼佛を安置していよ／＼尊信し奉る。然るに佛法東漸の利益にて、又日本へ渡らせ給ふを、一旦守屋大連の爲に佛殿も破却せられ、尊體も難波堀江の水底に捨られ給ふ。然るに三世の奇緣ありて、聖明王もまた日本に三生して、信濃國本田次郎善光といひしが上京して、此堀江の邊を通りしに、佛の靈感によりて遂に具し奉り、信州に下り己が家に安置したるは、誠に三國相承の佛緣ある善光也。かくて年月を經る間に、竊前一子を設けて名を善助といふ。しかるに宿因にやありけん。善助病死せり。夫婦愁歎に絕ず、佛を恨み奉りしかば、如來自ら冥途に入り閻王に對面し、善助が命を乞て蘇生せしめ給ひけり。後に其家を寺とす。今の善光寺是なりと云々。予熟思ふに、日本書紀には、欽明天皇十三年十月、百濟國聖明王釋迦佛の金銅像幷經論若干卷を献ず。〔割註〕帝拜せんやと宣ふを諫奏せしかば、稻目に與へ給ふ。」蘇我大臣、稻目宿禰、是を禮拜せんと云、物部尾輿、中臣鎌子の二人諫奏して是を拒みければ、稻目宿禰に與へ給ふ。則ち向原の家を寺に作りて安置せり。其後鎌子、尾輿の兩臣また諫め奉り、遂に其寺を燒拂ひ、佛像を難波堀江に捨たりと云々。其後敏達天皇十三

年秋九月の記に、百濟國の鹿深臣が持る所の彌勒石像一軀と、佐伯の連が持る所の佛像一軀とを、馬子宿禰乞得て、石川の宅に佛殿を構へて崇め尊みける。同十四年守屋大連と中臣勝海上奏して、國家疫疾流行すること、偏に此故なりとて、自ら寺に至りて火を放ち、佛殿ともに佛像をも焚く。殘る所の佛像ども、これもまた難波堀江に棄と云々。是我國史に記する所也。然るに今善光寺本尊と申は、一光三尊の彌陀如來にておはしますはいかん。百濟よりは金銅の釋迦の尊像と有り。後には佐伯の連が所持せる佛也といはゞ、我朝佛法最初の佛とは云難し。且百濟より渡せる事、さだかならず難波堀江に棄たる事も兩度なれば、其中に有けるか不ㇾ知と云はゞ、夫にては三國傳來とせること符合せず。いづれか是とせんや。讀ん人委しく是を考訂すべし。又再生といふ事、我國の人我國に再び生れ來るさへ、適々なる事和漢多しとせず。然るに天竺より三韓に生れ、又我日本に三生する事不審也。もしは佛の利益によるといはゞ、邦畿の內名有家、或は大臣諸卿に生れ來て佛法守護すべきに、北國の邊土に生れ出しはいかなる因緣ぞや。いまだ國號等もなく、木曾路もいまだ開けず、至て瘠地なる信濃國は甚だ怪むべし。殊更欽明、用明帝の御宇にして、本朝卅代の時なれば、地下の人民させる名もなし。勿論苗氏などいふ事さら〳〵なし。然るに本多次郞善光といふ名乘あるべき事のいはれなきか。

嘉栗云、予年來此事をあやしみおもへり。然るに古今夷曲集といへる浪花生白雲行風が編る集の狂歌の詞書に、洛の大佛殿へ信濃の善光寺の如來を居へらるゝ折に、本田善光といふ人付登りけるよしの事有り。是則ち太閤時代の事なれば、はるかに後の事たる事明らか也。この古今夷曲集は、寛文五年の板行にて、八宮良純法親王の仰ごと有て、內々奏覽に入し程の事なれば、うきたる事にてはなし。國史を考ふるに、皆馬子、直駒、眞鳥、蝶虫なんど異なる名乘にて、元來今のごとき太郞次郞と呼事見えず。また本田苗氏を按るに、藤原淡海公二十四代の孫助秀と云人、事に罪せられ、豐後國本田鄕に謫せらる。是に依て自分本田を以て氏とすとあり。名乘といふ事、中世以來の義なり。又妻の稱（ヤヨヒ）の前とい

ふ事、いよ〳〵妄說也。やよひは春三月の和名、尤後世その名目見えたり。何のまへ、かの御前と女の稱號有る事、尤中世以上さたなし。さすれば此三人の事、何によつて云、何の故に書記せるや解し難し。能々史冊を校へて見しに、思ひ合せたる事あり。日本紀、天智帝三年の條下に、春三月以㆓百濟王善光等㆒居㆓于難波㆒とあり。もしは好事のもの、此善光をヨシミツと訓に轉じて、我國の人とするより、いつしか本田次郎と當世の名をそへ、一子ヨシスケと程よき事を設け、春三月と史に見へたるを、やよひの前と附會し、難波に居らしむとある事を取合せたるものなるべし。猶天武紀、持統紀に、所々に此善光王の事ありて、或は禪廣とも書せり。皆同人なり。殊には百濟國より入朝せし事ども彼是牽合せしと見ゆ。姓氏錄にも、右京諸蕃、百濟義慈王禪廣王號㆓百濟王㆒云々。猶善光寺なる善光、善祐等の像を見るに、中華の衣冠と云。さらに本田次郎善光と云地下の人には見えざるをもつて、いよ〳〵證とすべし。

嘉栗云、近き年淨瑠璃作者近松半二にあひて此事を問ふに、いかにも我前々より聞し事有り。善光寺御堂供養といふ淨瑠璃作の時、よし光の妻ならびに子の名いかに付べきやと、その頃心易き僧の說法者有て相談せしに、折柄三月の頃なれば、妻はやよひの前、子はよし助にてもあらんかなどと、只當座の戯れ事の様に云し事の由、後には信州にても此名を像など儲けしとて大に笑ひしよし、但し井上播磨、宇治嘉太夫などの事なりと、近松門左衞門作にはあらずと也。

因に云、予六十六ヶ國の內至らざる國僅に五六ヶ國に過ず。尤も神社佛閣こと〴〵く參詣せしに、此善光寺程尊く有難く覺えし事なし。故に一夜念佛堂に通夜し參らせ、昧爽より勤行始り、日の出とともに戶張をひらく。叉日沒の時は稱名念佛して御戶張を閉。其殊勝に尊き事いふばかりなし。佛壇の壯嚴美麗にして、燈燭のきらめき、堂內の老若、只本尊出現の様に覺ゆる計りなり。元より殿宇の結構類ひなし。南北二十五間、東西十四五間、八棟造とかや申なり。但し本堂四方正面なれば、四方に寺號有と申傳

ふ。

東面　定額山善光寺　　南面　南命山無量壽寺
西面　不捨山淨土寺　　北面　北嶺山雲上寺

かくのごとく申傳ふれども、今又其儀を知る人なし。

○奇婦

夫天の晴たるは常なり。曇は變也。變は久しく有べからず。常理を離るゝが故なり。人に正あり。邪あり。人は萬物の靈なれば、潔きは神となり。穢たるは鬼となる。是人の變なり。是五常にあらず。故に世に久しくあらず。人といへど、神と化しては人に福し、鬼と變じては人に災ひす。こゝにおゐて更に人情有事なし。しかれども邪は正に敵せず。一旦鬼怪に怖れ、或は追れ押へられて、正氣を奪はれ、惱み苦しむといへども、加持せられ佛神にいのられて、いつしか消散す。これその人の虚に乘じて苦しむる也。元來人の鬼となり怪となりて人情なきものは、怒にふれ怨に死したるより、人の福を憎む也。故に凶事または變死多き時は、かならず疫疾流行するなり。されば貞實の人を犯す事能はず。是定理ならざる故也。近き安永の年間に、京一乘寺村の百姓二人連立て柴を刈んとて、叡山の北の尾横川に近き山中にて、思ふ程柴を刈てもはや歸らんとて立上り、谷越に向ふを見れば、恐ろしき異形の者岩上に立居たり。其樣女と見えて、長き髮をふり亂したる間より、兩眼ひら〳〵と光りて、左の手には龜を摑み、右の手には長く纒へる蛇をもち、頭よりむら〳〵と生たるを食居る體、身の毛もよだちて肝を消し、互に目と目を見合せ物をも云はず、柴も拐も打捨一さんに逃げ下り、我屋に走り入るよりアツト叫びて氣絕したり。コハ何事やと家内驚き騷ぎて、水を吹かけ呼返しける。性根付や否、其事を語りて、大熱發し、又惡寒强くなりて煩悶しけり。頓て夜着蒲團打重ねて、あたり近き金福寺の住僧松宗といへるは、其業にあらざる人と云へども、醫療勝れてくはしければ、先使を走らせて請じぬ。松宗能々見て、猶此

事を聞て思惟すらく、鬼怪におびやかされし邪氣通例ならじと、早速に敗毒散を調合し、又庭に大盥をとりよせ、冷水をなみ〳〵と湛へ、彼齒の根も合ず震ひ居る病人を裸になし、大勢立かゝり、彼盥の水中へ押入しかば、絕入ばかりがた〳〵震ふを座に直し、戸障子も明放し涼氣を受さしめ、則ち煎藥を立かけて服さしめけり。斯する內に、又一人の家よりも同じく急を告來る。松宗また其家に行き見聞するに、是も同じ體なり。されど時刻もおくれけれぱ、是は水に浴しがたくやありけん。只藥を飮しめて邪氣を退けり。一月計りに初の一人は全く平癒し、後の一人は五十日計り有てこれも平癒せり。此事皆人の沙汰して、女人結界の山なれば、鬼女とても住べからず。古今未曾有の奇事なり。もし山操山姥などいふものにやと風說ありしが、後々の說には、志賀寺の〔割註〕江州山中越の邊なり。」一門番體の女房なるが、いかなる事にや。ふと山に入て五三日過ては、家に歸る事あまた度なりしが、後は一向家にも歸らで行方なし。適ゝ此山奧にて見かけたる者もありしに、前の姿にも似ず。衣服破れちぎれて、恐ろしき形なりしと咄す。扨はこの者ならんかと云けり。實にもかゝる怪き事なんど、兎に角女にこそあるべけれ、內心如夜叉と佛も說けり。されば唐御史大夫裴炎元より佛法信心の人なりしに、夫に引かへ妻は至て悍妬の性にして、假初の事をもいたく恨責ければ、裴炎妻を恐るゝ事甚しく、面を上げて見る事容易からず。常々人に語りけるは、それ男子たるもの妻をおそるべき事三ッ有り。先其妻なる者、年若く美形にしては、誠に生る菩薩の如し。いつくんぞ人として生菩薩を恐れざらんや。中年にして男女の子數多出來て膝の前に集るは鬼子母のごとし。誰人か鬼子母を畏れざらん。五十以上に及んでは白粉薄く施し、或は黑く、或は靑く粧ひ飾れるを見れば、誠に鳩槃茶（クハンダ）のごとし。いかなるものにても鳩槃茶を恐れざることあらんと云し。實にもさもと思ひぬ。都て女の性として人を譏る事を常とし、思ひ詰たる事は、人の諫め世の譏をも顧ず。ゆへに婦人と小人とは養ひ難く、近付れば不遜、遠ざくれば恨むと、金言なる哉。わかき時は能堪忍ぶ色情有る故なり。四十以上に成ては色情薄く、人に愧らふ氣色もなく、

夫を蔑如にし、見るもうるさく侍る。予相州大山不動尊に參詣せる頃、〔割註〕相州大山は石尊大權現と號し、雨降山ともいふ。絕頂は常に參詣を許さず。六月廿八日に登山す。願望あるものはかならず重寶の刀を奉納す。故に數百年の納劍無量なり。今は參詣のもの木太刀を納るなり。」人の教に任せ二重の瀧といふに至りぬ。此地大杉欝々として茂り合ひ、殊に物寂しくすさまじき山間にて、行者の垢離する所なれば、晝さへ恐ろしき場所也。男夫すら斯の如し。いはんや女の往べき事思ひもよらざるに。その大木の杉に釘を打たるあり。そこ爰心を付て見れば數本見付ぬ。身の毛もよだちて覺えぬ。昔も貴船明神に祈りて、生ながら鬼女と成しと書置しも、なしといふべからず。其外嫉妬の怨靈筆に記し云傳ふる事、貴賤の差別もなく、古今數多し。然るに牝鶏晨するの勢ひ、叉いかんともしがたし。是が爲に佞人一朝に誇り、人を損じ家を亂すこと世上に多し。

〇鸚鵡石

勢州宮川の上五里ばかりに奇石有り。五十歩計りを隔てゝ人謳歌すれば、おなじく石中にも謡ふ。音節曲譜、恰も連たるがごとし。中々響とはおもはれず。みな云、皷三絃笙篳篥等の響あるもの、ことごとく移らずといふ事なし。故に鸚鵡石と號す。或人語りけるは、桑名より尾州宮へ渡る時、風惡敷して伊勢路のとある島に船を寄せ、各陸に上りそこ爰を遊び步きけるに、船人此邊の事能知りていふ樣、此山陰にあふむ石あり。宮川なると甲乙はいづれかはかりがたき程也。みせばやと半里計り具して行ぬ。則ち鳴物は所持もなければ、たゞ謳淨瑠理抔にて止ぬ。聞しに勝りて能く移れりと語る。

嘉栗云、知恩院古門前細川侯の屋敷の邊より西に向ひて呼べば、暫らく有て答ふ。初めの響は喰違の壁にあたりて、こなたの云果さぬ内に答へ、其響繩手の西側の家に當りて答ゆる也。それゆへしばらく間あれどもはつきりと聞ゆ。鸚鵡が辻ともいはんか。また南都東大寺の衍塚も、門一重越て本堂にひゞく故、かくのごとくおなじ。

又其座に江州八幡の人ありて云けるは、長命寺に八幡より行く途中に山陰を通れば、人聲の能く響く所あり。作事に通ふ道なれば、牛馬の叱る時、同じく谺するを怪みて見ければ、果して其所有り。夫より人々聞傳へ〳〵來て、後には田畑を踏荒し、作事の障りに成しかば、農夫是を憎み、畑に垣結て人を入れずといふ。但し聞所によりて響に好惡あればなり。中華にもこの石あるべけれど、たしかに聞得ざるにや。小說の書にも見侍らず。輿地志、一統志等に、琵琶の響ある事載せたれども、かくのごとき鳥獸人虫迄、音聲の移る事は所見なし。我朝の所々にもあるべければども、知らざるも多からんか。又志摩伊雜宮へ內宮より行く途中に此石有り。予回國の砌り、同行二人ともに爰に來る。途中より少々上れば、右の方に屛風を立たる樣に巖連り、山の尾崎まで峙ち、上には草木生茂れり。其左りの方三十步計りに一小石を立たり。其所にて音聲をなせば、向ふの石面に響を、左右の眞中少し過て茶店あり。爰にて聞くなり。其時いづれを伺れとも聞わけがたき程なり。則ちこの茶亭にて三絃など貸なり。都て谺といふものは、この方に呼ぶより應ずるは少しおくる。しかるに此石はさにあらず、人唄へば石も唄ふ事、二人ありて連たるがごとく、本人よりは能き樣に聞ゆるなり。怪しといふもおろかなり。頓て同行に音曲をなすもの有しかば、種々曲節を盡して遊び樂む所へ、礒部の御師と見えて、賓客を連來りて是もおなじくうち囃し唄ひ語る。かくて其御師曰、おの〳〵聞給へ。此山上は稚日女尊神衣を織給ふ地にて、絹かけ松はあれにこそ。まことに我神道の大事の神跡也。故にかゝる奇石もあんなれ。また爰にふしぎあり。都て兩宮は唯一の神道にして僧尼を禁じ、衣體佛具を忌む事は世に知る所也。倭姬命の天照大神の神託に應じ、佛法の具を屛けよといふ事、倭姬世紀にも見え、又內外宮に七言の忌詞有て佛を中子、經を染紙などいふもこれなり。しかれば爰に廻國の人々有り。俗體といへども緇徒に准じて、携る所の錫杖鉦鼓は門內を許さず。是私の事にあらず。神慮に叶はざる故也。其證據は、此石いかなるものも移らずといふ事なれども、鉦鼓鈴の如き佛器は、決して響を出さず。おの〳〵もし不審ならば、試に打て見給へといふ。

即ち腰に挟みたる鉦皷をいかにと撃ならすに、此方には音あれども石にはさらに響かず。コハふしぎなりとて、うてども〳〵曾て向ふに音なし。我も人も扨はとあきれて一言を出すものなし。御師莞爾として、いかに見給ふやと、すこし我などにむかひて詰る體也き。各口を噤んで顔を見合せたり。予熟思惟して、ふと其理を解得て、則ち進んで御師に向ひ、去にても不可思議の事を見るもの哉。さりながら鉦皷の響應ぜざるをもつて、佛器を神の忌給ふとは云べからず。其故は抑〻金銀銅鐵は是土の骨也。もと無情の物にして草木と同じからず。人は有情なれば、其心性に汚穢不淨有て、身に觸れ目に受くる所あれば、六根清淨の祓をなす。但僧は人の死をあづかる職なれば、神の忌給ふ事もあらん。なんぞ無情の器物に咎あるべき。それ只神は陽にして發生を司る。佛は陰にして枯死を司る。一日の朝夕、一年の春秋のごとし。春を悦び秋を憎み、朝を快とし、夕を好まざるは人の常也。況んや生を貴み死を忌む。是世の理なり。しかれども榮枯生死は對し向ふ物にして、世としてなき事能はず。伊弉冊尊黄泉平坂にて生と死との道を行給ふを考ふべし。死有ゆへに生有り。枯るゝあれば榮る有り。晝夜のごとし。然れば生を樂しみ死を嫌ふは、神に限らず人も同じ。又倭姫命に佛法を退けよとの大神の神勅には、殊に深き謂あるべし。故いかんとなれば、倭姫命は人皇十一代垂仁天皇の皇女にてましﾞます。此時いまだ我日本にて佛法の名も知るものなし。卅一代欽明天皇の御宇にこそ、初めて佛といふ事を知りぬ。能々思惟すべし。また佛器を忌嫌ひ給ふ事は、今おの〳〵を始め稱名念佛し、あるひは七字の題目を唱んに、彼石響に應ず。佛器さへ忌給ふならば、佛名を唱ふとも移るべからず。去るに其事なきはいかん。是を思ふに、夫れ金は八卦に配する時は乾兌の二卦なり。此二卦に必ず響有といふものは、金の象なればなり。木火土金水の五行、金の外音響有ものなし。人に配すれば肺の臟なり。故に爰に音聲を出す。脾臟は土なり。土氣の升進んで肺に當て音聲を出す。さるによつて土氣升進む時は、釜などに觸れば、其釜鳴響く事有り。是を世に奇怪とす。さにあらず。甚しき時は動搖する事有り、其時釜を取て外の地におけば鳴ら

ず。是土氣の突上ると洩ざる所との差別なり。此鸚鵡石中にはかならず金氣伏藏するならん。よつて諸の音あるもの是に觸れて響をなす。理の常なり。其所々にあるをもつて知るべしといふ。御師又云、其音響の移し出す理はくわしく聞。但鉦皷のひゞきなきはいまだ曉せず。其義いかに。予曰、この不審まことにもつともなり。石中に貯ふ所の金氣は大なり。此方の鉦皷はわづかに五寸か一尺なり。一旦其響彼石中に請得といへども、こゑの外に泄れ聞へざるは、小器の音響大に充滿る中へ、相奪ひて外に出さず。是同氣相感ぜしむる所なり。其證を見べきとならば、佛器にあらざる神前の鈴、或は調度に製せし金器を打ならしたりとて、決して音響出べからず。若し神前の鈴、其餘の調度たる金器の響ありて、鉦皷のみ音なしとあらば、予此座を避ず、脊負奉る所の本尊、經論鉦皷錫杖までも燒捨て、入て社家の奴僕となり、永く口に稱名を唱へず、生涯を社氏に仕へん。夫々といへども、人家遠ければ器物もなく、扨止みぬ。爰におゐて御師をはじめ傍の人々實にもと諾して其事をいはず。予又云、同氣相感ずる事は、古今とても變る事なし。其書名は忘れたり。漢未央宮の鐘、おのづから鳴。武帝東方朔に其故を問給ふ。朔云、銅は土の子也、子母相感じて鳴。其銅を出せる山の崩るゝならんと、後に蜀國の太守奏しけるは、何の事なくして山の崩れし事五拾里なりと云是なり。また釜のなるも、備中の國吉備津の宮にあるは同事にあらず神驗なり。猶その條下に委し。

笈埃隨筆卷之五

○打飼帒

旅に行人の食行李などを入て持、木綿の二幅を縫合たるものを、俗にうちかひと云名のめづらしくおもふ。もしは捻たる樣に拵へしものなり。打違の略語にやと思ひぬるは杜撰なり。西園寺殿鷹百首の中に、

はふとりもつかれに立る犬飼の打かひ帒輕く見えつゝ

とあり。註に云、はふ鳥とは喰鳥の事也。また狩聲におそれて草によりはふことのあるをもいふ也。つかれとは追落されて草臥たる鳥なり。能く隱るゝを犬よりて尋れば、犬飼犬を譽てしげ〳〵打飼をかう程に、打飼帒かろくみゆるなり。打飼とは犬の食物の事、打飼帒とはその打飼を入るゝ袋なり。又定家卿鷹三百六十首の中にも、

もの數をしつるしるしに犬やりの打飼帒うちかひもなし

とある註に云、犬の鳥をかみ立れば、飯に粉糠をまぜて一ツづゝ飼也。是をうちかひといふ。その打飼のなくなりたる時は、もの數やしつると知るとなり。拔穗をもつて編てあり。是を犬飼の打飼袋といふなり。これらのことより名付たるべし。また此打といふ言葉、世に多く用ゆる事にて、碁を打、双六を打、或は打拂などはものにあたる心なり。和歌にも袖うちふる、打出る、打すさむ、又打霞、打見る等あり。みなものに對せる言ば多し。昔より詞の發端に置は、難なく聞ふ。しかるにこの詞我國のみにもあらず。漢にも多く遣ふ事、ある禪錄に見ゆ。彼國にても論有るにや。歐陽修歸田錄云、今世俗言語之訛、而擧レ世君子小人皆同ニ其謬ー者打字爾。打丁雅反。其義本謂ニ考擊ー。故人相毆。以レ物相擊皆謂ニ之

打一。而工造二金銀器一亦謂二之打一可也。蓋有二槌檛作レ擊之義一也。至三於造二舟車一者。曰二打レ船、打レ車。網レ魚曰レ打レ魚。汲レ水曰レ打レ水。役夫餉レ飯曰レ打レ飯。兵士給二衣糧一曰レ打レ糧。從者執レ傘曰レ打レ傘。〔割註〕嘉栗云、たいこ持に花をうつといふも、給二衣糧一に同じかるべし。」以レ糊粘レ紙曰打レ黏。以二丈尺一量レ地曰レ打レ量。擧レ手試二眼之昏明一曰レ打レ試。至二於名儒碩學一語皆如レ此。觸レ事皆謂二之打一。而徧檢二字書一無二此字一。〔割註〕丁雅反者。」其義主二考擊一之自音謫、〔割註〕疑當レ作レ滴。」耿以二字學一言レ之。打字從レ手從レ丁。丁又擊レ物之聲。故音謫。耿爲レ是。不レ知因レ何轉爲二丁雅一也一。といへり。又鷹には餌帒といふ也。鷹千首に、

　　餌帒にかれかはきたる古をき餌さして用なき身とぞ捨えぬ

と有。餌袋に入るをさすと云也。されば餌袋を人のかたへ遣すにも、をき餌を入ざるはいまふ事なり。昔源正頼卿北山の邊に女をおもひけり。されば餌袋を人のかたへ遣すにも、をき餌を入ざるはいまふ事なり。

昔源正頼卿北山の邊に女をおもひけり。野邊出る時彼女の下へ行とて餌袋をつかはしければ、女鷹の儲をしけり。ある時餌袋を遣して行ずして、餌袋計り取に遣しければ女いかゞ思ひけん。

　　軒端うつましろの鷹の餌袋をきゑもさゝで歸しつるかな

と詠じてかへしければ、其鷹やがて死けり。夫より猶ふかく鷹には忌事也。上五文字より妻といふ心をうつみたり。

○川鹿

世の中の事は一概に論じがたし。見ざる事とても疑ふまじきなり。聲あるべきものに聲なく、聲あるまじきものに聲ある也。輟耕錄云、大德年中に、仁宗帝潛に吉太后と倶に輦を懷孟が家に止め給ふに、群鼃喧しく、大后近侍に命じて旨を傳へ諭さしめて曰、吾母子憒々たる鼃聲の耳を惱さしむる事忍びがたし。自今それ鳴事なかれと制し給ふより、今に至るまで聲をなさずと、又宗季といふ人、郡南の池の傍に居るの主春夏の穴とす。喧鼃群り飮食を安んぜず。時に天師張廣京より回るに、是を告て止ん事を乞

ふ。廣即ち符篆を新瓦上に朱書して池に投ぜしめ、且誡めて再び鳴事なかれと、それより後は此所の蛙は聲なしと、また武陵王或時池亭に飲燕す。掘聲耳に聒すし。王云、遊宴の絲竹を擾る實に惛むべしと、僧法朗傍に在て是を承り、即咒法を修す。掘忽ち止む。暫くして燕終らんとす。王云、復鳴ん事を欲すと、法朗即云、君王の歡び既に闌なり。汝喧く鳴けと、蛙ども詞に應じて一齊に聲を發して喧聒元のごとし。我國にも蛙鳴ざる所多し。中にも出羽國最上犬伏永泉寺玄翁和尙の住居の地なり。庭中池有り。蛙多く春夏の間喧しく鳴立て、觀念工夫の妨げなりしかば、その鳴を止め給ふとて今に聲なし。また上野國新田太光院にも、源譽呑龍蛙の口を封ぜられしとて鳴ざる也。是等道德のいちじるき、和漢同日の義なり。爰に云傳ふ、山城國井出の里の蛙を取て、尋常の蛙の中に放ち置ば、蛙ども口を閉て鳴ずとなり。是は井出の蛙の聲勝れて淸亮なるをもつてなり。京の三條白川の橋の邊に一種の蛙の鳴聲有り。昔いづれの青蓮院の宮にや。御池に此井出の蛙を放させ給ひしといふこと其餘波といふ。予若狹より丹後へ越し時、宮津にてある寺に止宿しけるに、庭なる泉水に蛙有て鳴。その聲尋常の蛙のごとく喧しからず。至つて淸亮なり。〔割註〕或人曰、蛙聲は十二調子の外なりと不レ知。」予いぶかしく住僧に問しに、さる事あり。昔細川幽齋公丹後在城の時、城州井出の蛙を取寄せて池に放ちおかせ給ふ。その種今に殘りたる故なりと語りぬ。實に左もとおもひて、世に申傳へしもうきたる事にもあらずと感じ、いよ〳〵心をよせて聞けり。又爰に一種の物有り。其聲麗々と淸く澄て、初夏より中秋の頃まで、水底にありて鳴。是を河鹿といふ。勢州鈴鹿川は殊に多し。聲律鈴を振がごとく鳴ばとて、川の名も是より名付たりと聞り。諸州にも有べけれど、田舍の事なれば、唯常にして聞過ぬべし。京都には八瀨川、鞍馬川などの山谷の流にあり。好事の人は行て聞くなり。然るに此魚水上に出ずして、石の下にかくれて鳴故、容易に取得がたし。もつとも形小く、甚迅速の物にて、水底にあればまた見る事少し。然るに何の十歲とかやいふ人、能々是を飼馴して、常に小籠に水を以てこれを養ひ、鳴すべきとおもふ時は、自

分其鳴聲を眞似て聞すれば、即ち是より同じく鳴なり。後は江府に至り、諸侯方に招かれて、夫を聞かさしめて燕與を添しとなり。

嘉粟云、予が同姓なるもの、先年川鹿を養ふ。夫はいかにも蛙の形にて、色黒く足脛細きものなり。是は冬箱に入て封じ、暖なる所の棚に上げて置、春になりて取出す也。又石持ごりの大きなるを俗に牛盜人といふ。これも能鳴くもの也。東川にも西川にもあり。必ず夜に入れば鳴也。されば此食經本草等の説も破り難し。一名二物と心得べき歟。

殊に此飼置る川鹿は、數年所持す。初冬になれば諸虫魚と同じく蟄するにや。いつしか干魚の如し。其時は濕りたる砂中に置て閉藏す。翌年中春の頃より水を浸して養へば、自然に生魚となりて次第に肥育し、川底に有に同じ。初夏に至れば發聲する事、毎年斯の如しと、いかさま奇術といふべきほどなり。世にもてはやし、また一興ある事なり。或年八瀬の人の河鹿を聞に來よかしと語る序に、其河鹿は取得がたきものかと問へば、殊に速なるものなれば、能く心得たるものならでは中々捕へがたし。所望ならば捕へて參らすべきと云。予夫は重疊の事なり。強て賴むよしいひければ、程經て持せ來りぬ。小き桶に水湛へ入て、上には細き網を張たり。おの／＼悅び座敷に直し、池にや放たん。桶にや養はんなど云て、先其形を見べしとて、網を開き石を取除しかば、水底より飛出る。ソレ／＼と騷ぐ間に追々飛出で、或は天井、或は壁などに引付、又庭へ飛出るもありて、こと／″＼く逃て、いづちへか行けん。一つもとらへ得ず。おの／＼只アレ／＼といふばかりにあきれ居けるが、後には大笑に成て止ぬ。予退て案ずるに、この河鹿といふものは、世に云傳ふ井出の蛙なるべし。その音聲丹後にて聞し井出の種類といひしと同聲なり。但し和歌には作例なし。是は蛙を詠たればそれなるべし。然るに寺島氏本草綱目を引てゴリとし、又圖にもゴリを以す。誤れりといふべし。其說に曰、和名抄、載二崔氏食經一曰、鮰〔割註〕和名加良加古。似レ鮐（イシズシ）而頰着レ鉤者也。今加州淺野川多有レ之。其聲如二吾里一云々ト云。夏秋人群集。握

レ餌拊レ水呼ニ吾里一。則魚入ニ掌中一。又奥州鳥海山麓川多有ニ此魚一。皆一目也。傳云。鎌倉景政洗レ眼川也。故一目也ト、其外所々谷川に多くあり。加越の人賞レ之作ニ鮓魚一云々。是ゴリとカジカを一物とす。聲といひ形と云甚異なり。又本草綱目、黄顙魚。無鱗魚也。身尾俱似ニ小鮎一。腹下黄背上青黄。腮下有ニ二横骨一。兩鬚有レ胃。群游作レ聲如ニ軋々一。陸機云。性宜難レ死魚也。頬骨正黄之有レ力能飛躍者也云々。」是も聲と能飛といふものは同じくして、群游すといふものは異なり。しかれば又是をカジカと慥に臆見し難し。予が河鹿をもて井出の蛙とするも又詳ならず。又和歌に河鹿といふを詠來らざるを證とするのみ。好事の人これを考訂せよ。されば魚には聲有物稀なれば多く疑はし。予日州にありしころ、夏の暮がた暑を避んとて田面を遊歩しけるに、溝川に鳴もの有。至て遠く聞に加卒々々と云がごとし。怪しと思ひ人に問ければ、クウツなりと、クウツとは石龜の方言なり。その龜と聞ていよ／＼不審なり。岡崎五升庵にてその事を語りけるに、庵主は早くも聞て、誠に龜は鳴ものなり。慥に見もし聞もしたり。新六帖の中に、その聲有る歌ありしと語られぬ。即ち尋見れば、

河越のをちの田中の夕やみに何そと聞けば龜のなくなり

とあり。

○徐　福

ちかき辰の年、紀州熊野郡那智浦天滿といふ所の圓心寺といふより、僧の土産に國産の紙を岡崎五升庵主人へ送らる。其紙奉書杉原の類にもあらず。また國栖、美濃、岩國などにも似ず。様變りて見馴れざる紙なれば、いぶかりて問れけるに、その僧云、されば此紙賣買にする程にはなくて、僅に隣郷に用るばかりなり。上古秦の徐福日本へ渡り來りて熊野に在住し、紙をも教へ漉せて用ひけるとなり。今に至り此邊一二ケ村民習ひ傳へて漉申候。則ち名をも徐福紙と申。思ふに唐紙の類製にや。破るにかならず横に裂候なりと語りぬ。この徐福の事跡讀にさも有けん。新宮の濱邊に、その墳とて田の中に殘り、又神

にも祝ひたるにや。小社も飛鳥の宮の傍にあり。〔割註〕即ち徐福祠と有て祭れる日月も非ず。」按ずるに、東海諸國記に曰、孝靈天皇七十二年壬子春、秦始皇遣ニ徐福一入レ海求レ仙。福遂至ニ紀州一居焉と、是實を得たるか。前代史には說々紛敷なり。孝靈の御宇は上古なれば、此國に限らず斯る邊土官領もなければ、中華の人も來て居住するや思ふ儘なるべし。崇神天皇の御宇四道將軍調役の事も略出て見ゆれど、成務天皇の御時にこそ、國郡の事も沙汰有し也。且熊野の神は神武天皇東征の御時現じ給ひつれど、御鎭座は、本宮は崇神天皇十六年に建、新宮は景行天皇五十八年に創立ありしかば、徐福は兩社御鎭座より百餘年以前と見えぬ。徐福が事、我國いまだ文字なき時代といひ、又國號さへもなき頃なれば、國史實記にも載ざる事明らか也。〔割註〕正統記には中傳へを記し給ひぬらん。」又秦帝を欺き來りし故、彼地の史にも種々の異說多し。〔割註〕筑前國天香久山の麓に、童男童女の舊跡といふあれども、篤信不レ信。又筑後上妻郡河崎の里にも云傳へ、丹後海邊にもありといへども、皆附會の說なり。」因に記す。

史記始皇本統に曰、

方士徐市等入レ海求ニ神藥一、數歲不レ得費多。恐レ譴乃詐曰、蓬萊藥可レ得。然常爲ニ大鮫一所レ苦故不レ得レ至。願請ニ善射一與俱、見則以ニ連弩一射レ之。始皇夢與ニ海神一戰如ニ人狀一。問ニ占夢博士一曰、不レ可レ見、以ニ大魚蛟龍一爲レ候、今上禱祠備、謹而有ニ此惡神一。當ニ除去一。而善神可レ致。乃令下入レ海者齎ニ捕ニ巨魚一具上。而自以ニ連弩一候ニ大魚出一射レ之。自ニ琅邪一北至ニ榮成山一弗レ見。至ニ之罘一見ニ巨魚一。射殺ニ一魚一。遂並レ海西方至ニ平原津一而病。

又淮南王安傳云、昔秦絕ニ先王之道一(中略)又使ニ徐福入レ海求ニ神物一。還爲ニ僞辭一云、臣見ニ海中一大神言曰。汝西皇之使邪。臣答曰。然。汝何求。曰、願請ニ延レ年益レ壽藥一。神云。汝秦王之禮薄。得レ觀而不レ得レ取。即從臣東南方至ニ蓬萊山一見ニ芝我宮闕一。有ニ使者一銅色而龍形。光上照レ天。於レ是臣再拜問云。宜ニ何資以獻ニ海神一。云以ニ令名男子若振女與百工之事一即得レ之矣。秦皇帝大悅、遣ニ振男女三千人一資ニ

之五穀種々百工一而行。徐福得二平原廣澤一止。王不レ來。

又後漢書夷列傳曰、秦始皇遣二方士徐福一將二童男女數千人一入レ海、令レ求二蓬萊神仙一不レ得、徐福畏レ誅不二敢還一。遂止二此州一。世々相承有二數萬家人民一。時至二會稽一市二會稽一。東治縣人有下入レ海行遭レ風流移至二澶州一者上。所在絕遠不レ可二往來一。

又沉瑩臨海水土志云、夷州在二臨海東南一。去レ都二千里。土地無二霜雪一。草木不レ死。四面是山谿。土地饒飫生二五穀一。又多二魚肉一。又義楚六帖、國城州市四十三。曰二日本國一亦名二倭國一。東海中秦時徐福將二五百童男五百童女一止二此國一也。今人物一如二長安都城一。東北千餘里有レ山名二富士一。亦名二蓬萊山一。其山峻三面是海、一朶上聳、頂有二火煙一。日中有二諸寶一流下、夜却上、常聞二音樂一。徐福止レ此謂二蓬萊一。至レ今子孫皆曰二秦氏一。彼國古今無二侵奪者一也。

又太平御覽卷七百卅二、四夷部、三紵岐人外國記曰、周詳滄海落二紵岐一。上紵有二三千餘家一。曰二是徐福童男之後一。風俗似二吳人一云々。

又歐陽文忠公集日本刀歌、

昆夷道遠不二復通一。世傳切玉誰能窮。寶刀近出日本國。越賈得二之滄海東一。魚皮裝貼香木鞘、黃白閒雜鍮與レ銅。〔割註〕眞鍮似レ金。眞銅似レ銀。」百金傳入好事手。佩服可三以攘二妖凶一。傳聞其國居二大島一。土壤沃饒風俗好。其先徐福詐二秦氏一。採レ藥淹留丱童老。百工五種與レ之居。至レ今器玩皆精巧。前朝貢獻屢往來。士人往々工二詞藻一。徐福行時書未レ焚。逸書百篇今猶存。令嚴不レ許レ傳二中國一。舉レ世無二人識二古文一。先王大典藏二夷貊一。蒼波浩蕩無二通津一。令二人感激坐流レ涕。鏽澁短刀何足レ云。

又宋景濂蘿山集第四賦二日東一曲第四。紅雲起處是蓬瀛。十二樓臺白玉京、不レ知秦世童男女、還有二兒孫一跨レ鶴行。

又劉氏鴻書地理部、日本國在二大海島中一。方千里。則倭國也。其國乃秦始皇時徐福所下將二童男女一始

創上之國。時福所レ帶之人。百工技藝醫巫卜筮皆全。福因避二秦虐一已思二遁去一。不レ意遂爲レ國焉。而中國諸書遂留二於此一存。其人多尙作レ詩寫レ字、自レ唐方入二中國一爲レ商、〔割註〕又云日本之學始二徐福一。」又聯耶代醉卷九云、歐陽公日本刀歌云云、由レ是觀レ之。則尙書全文日本國尙有レ之也。聖天子德威遠播二梯航日出之邦一、聖賢遺書、必有下睹二玉帛一而來者上。其千古大快事也。

又皇明世法錄云、秦遣二徐福一將二童男女數千人一、入レ海求二蓬萊仙一。不レ得、懼レ誅止二夷檀二洲一稱二秦國一號レ倭。故中國總呼レ之曰二徐倭一。非二日本正號一。又東海諸國記云、孝靈天皇七十二年、秦始皇遣二徐福一入レ海求レ仙。遂至二紀伊州一居焉、崇神天皇十七年、是時熊野權現神始而現。徐福死而爲二神國人一至レ今祭レ之。又吳志卷二曰、孫權黃龍二年春正月。遣二將軍衞溫諸葛直一將二甲士萬人一浮レ海求二夷洲及亶洲一。在二海中一。長老傳云。秦始皇尙遣二方士徐福一將二童男童女數千人一入レ海。求二蓬萊神山及神仙藥一。止二此洲一不レ還。世相承有二數萬家一。其土人民時有下至二會稽一貨上レ布。會稽東縣人海行。亦有下遭レ風流移至二亶洲一者上。所在絕遠。卒不レ可レ得レ至。但得二夷洲數千人一還。又我邦沙門絕海入レ明。太祖皇帝已見。指二日本圖一。顧問二海邦遺跡一。勅賦二熊野一。海詩曰。熊野峰前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。只今海上波濤穩。萬里好風須二早歸一。御製賜レ和曰。熊野峯高血食祠。松根琥珀也。應レ肥昔時徐福求二仙藥一。直到二如今一竟不レ歸。

かくのごとく諸史同じからず、なれども渡り來りしは相違なし。熊野に又今蓬萊山といふ山あり。そも〳〵我邦に蓬萊と指所三所有り。一に曰富士山、一曰熊野、一曰尾張熱田と、是南禪寺の德岩惟肖の云所なり。

熊野浦邊には、ハダス村といふあり。秦住村と書るよし、かた〳〵徐氏の說誣べからず。

○國　界

蜀の成都宜都二郡の界に、五六の峰參差と交峙る中に二の奇石あり。兩人並立たる像のごとく袂をかゝ

げ相對す。實に事あるに似たり。古人曰く、二郡の督守堺を爭ふ也と。予我邦毎國の堺を見るに、かならず大木大石、もしくは山川などに、自然と地堺を分てり。中に九州日向と豐後の間に大山を隔て道絕たれば、勿論人家もなし。其日向縣より今延岡といふ府なり。上古その地を領する人を縣主と號。縣州など中華にはその分ちあり。我邦には今差別なし。鎌倉將軍の頃まで鄕といふ名も、庄といふ事も、今日藤の間に名のみ殘れり。又縣をあがたと訓ずるは、神代卷一書に天孫降臨に日向の國吾田長屋笠狹御崎にいたりますとあり。吾田の訓を川ひたり。艜を以て十里の大河を上下す。〔割註〕紀州熊野本宮より新宮に下る九里八町。駿州不二川、羽州最上川、また四國土佐府高知より伊豫宇和島に至る。または肥後球摩より八代州に下るは、ことに速川とて水路十六里なり。」かくて小船をかりて下る。二人の鹿子、壹人は艫先に棹を取て立て、舟早く岩に乘上んとするとき、竿にて少し突けば、舟左に廻り右に轉じて流水に應ず。アハヤと思ふばかり危し。其山谷の致景、奇巖怪石詞に盡しがたし。惜ひかな。造化の工も斯る邊土には其功空しく、景色を翫ぶの詩士歌人も經回せざれば、世にその名をも知られず。誠に土地の不幸といふべし。谷々より薪を伐て流し弃たるが夥しく落下る。これをヤタラと云よし、思ふに畿內の野語に數限りなき事を、ヤタラにといへるも、かやうの事より云習せるにや。〔割註〕嘉栗云、樂にはたら拍子といふ事あるよし、何にてか見たり。知る人正し給へ。」やう〳〵にして矢頭村といふに船着、此所僅の谷合なれば、田作する地もなく、怪げなる小家三四軒のみ。皆山稼の杣人なり。是より先數里に家なければ、すなはち一宿し、翌日力者一人を雇ひ、僕從に荷を持しめ案內とす。只一人茨篠原の茂りたるを、押分て細道を上りゆく事凡百町餘り、すでに峠に近きところ一の小祠あり。梓明神と號す。梓峠の地名によるか。此に豐後杉とて大木あり。地は日向なり。案內者いふ、先年此にある上古の杉枯れしかば、杣人板に挽て下さんとするに、樹の中皆數千の鏃のみにて空洞なりしかば、益なくしてとゞめぬと、その枯株今にあり。太さ十圍にあまれり。非類の大木なり。これ大友兵亂の戰場なりしといへど

も、また社の傍に五圍六圍の杉數本あり。人跡たへて甚だものすごき所なり。さて峠の北なる豐後の地におなじく大樹あり。これを日向杉といふなり。峠に憩ひて四方を眺望するに、南は日向の地蜒々と這ふがごとき平野薩州に連り、坤に近く高千穗、奇觸が岳双立し、姥が岳もならびて見ゆ。肥後阿蘇山は西方に孤立し、猛煙天にかすむ。東は蒼海渺々として、世に日向灘といふ。三十六里我邦第二の大洋なり。北は小山幾里共なく、藩籬に似たり。その中に彥山溫泉岳、四極山のみ高く拔出たり。まことに寐丘疲瘠の地たり。幾許の平地かあるべき。更に足を入べきともさらに覺へず。胸つぶるゝばかりなり。かくていろ／＼と問て見るに、案内を連て谷へ下り、雉兎も走らず、芻蕘の行かふ跡もなければ、行者いと覺束なし。案内のもの云、是より百町計りに少しく人家有り。此道往來なければ、時として不慮の難多く、公役の使令滯る故、先年豐後竹田中川侯より徒士五六人移しおかれてより、行旅の難も少くなれり。昔は生首が谷と申習はしける程の事なりきと語るに、いよ／＼身の毛立て覺ゆ。都て海邊は船路なれば、陸地は大樣斯のごとし。兎角して一つの谷川に至る。腥き風鼻を穿ちて、澗水も亦血に染たり。コハいかなる珍事か出來ぬと、足も地に付ず胸とゞろき、川をさつと打渡り見れば、只今射たりと見えし。大鹿二つ首計り捨置たり。扨はと心付て二三丁行て三四軒の人家有り。軒まばらに戶壁も皆板にて、武器のみきらびやかに立ならべ、外面には熊狼猿兎の首手足など釣提げたり。內に入り火を乞て、日も午に近ければ、俱に圍爐裏に胡座して行李飯に晝儲し、暫く休息す。案内の者は爰までの約束なればとて、傭價を物して返す。是より壹人の僕を力に、しらぬ道をたどり／＼、苫萱笠の上迄盡へる中を、習ひたる方角をさして急ぎ、漸く晡時に一の村に出、日いまだ高けれども、昨日今日の勞を休め宿を求めてこゝろ落付、枕を取てつら／＼思ふに、太平の恩澤により、かゝる深山幽谷にも道の道ある迹のかたじけなさを感じ奉る。頓て夕餉して、亭主の云、是は麁末ながら土地の粮なれば、一椀聞し召さるべしやと會釋す。それは何か珍らしき設けなめりと蓋をとれば、干溫飩に茄子樣のものを薄く味噌

汁に煮たる也。予日向にて適に給覺へぬれば、何よりの御饗應なりと數椀に及びければ、亭主甚だ悦び云ふ樣、是は此國の一調味なり。いやしき品なれど頗る據あり。むかし此邊大友宗麟領せられし時、俄に菊地肥後守來會あり。取あへずせし事なれば、蛤の腸を汁に調して出さんとす。しかるに菊地おもひの外多人數にて來られしかば、其用意たらず。いかゞはせんといふに、壹人敎へて如㆑斯造らしめて事を足したり。いづれともわけがたし。それより名をほうてう汁と呼も、蚌腸と申事のよしを誤りて、庖丁汁と覺しと語る事、今も見る樣に珍らし。その製至て無造作なり。小麥粉を鹽少し和して、水にて練り、暫くして布など覆ひて寐さしむれば粘るなり。其內に醬汁を薄く煮て、茄子瓜の野菜をも入置。扨かの粘りたる粉を手の中に少しづゝ丸め持て引延せば、長くのびるなり。夫を能程づゝに引切り、直に汁の鍋へ入、手馴しものは甚だ平かに延し、引さき引裂、能ほどになる平溫飩樣にするなり。此もの早く入て煮たるも、今切て入たるも、風味さらにかはりなし。その性溫柔にして毒なく、老人小兒とても障りなき故、その膳の上に小猪口に醬油少し入て出す。若し汁の淡味なるには、是を加へて加減するなり。實に製の容易なるや、魚肉の厚味に勝れて其養ひ宜なるかな。

○石敢當

薩州鹿兒島の町々、行當り街の如きなる所には、かならず三四尺計りなる一石碑を立、石敢當の三字を鐫たり。いかなる事と問へども人多く知らず。後に輟耕錄を見しに曰、今人家正門適當㆓巷陌橋道衝㆒立㆓一小石㆒。將軍或植㆓小石碑㆒。鐫㆓其上㆒曰、石敢當以厭㆓禳之㆒。按西漢急就章云、石敢當。顏師古註曰、衞有㆓石碏石買石惡㆒。鄭有㆓石別㆒。皆爲㆓石氏㆒。周有㆓石速㆒。齊有㆓石氏㆒。紛如。其後以㆑命放㆓敢當㆒。所㆑向無㆑敵也。據㆓所說㆒則世之用㆑此亦欲㆔以爲㆓保障㆒之意云々。薩州の外他邦に見る事なし。徐氏筆精にいふ所もこれに同じ。或曰、京高辻天滿宮。〔割註〕此社今二條より北へ町を行留りて、此石の有る地なり。」社前に、先年ありしといふ。今はなし。又爰にて可㆑笑事あり。日薩隅には竹數種あり。孟宗竹は寒中に

筍あるを以て名づく。太さ二尺餘に至る。壹尺七八寸は常也。然れども竹薄く節の交理一筋なり。故に畿内の人葭竹といふて、葦の類とするは非なり。また四方竹は四角にして、太さ僅五六寸に過ず。交州在方竹節として可なりと、博物志に云是なり。又一種キンチクといふあり。他國にては見ず。太さ五六寸、筋の間長く、中の巣細し。性水を好んで叢生す。尤柔なり。國人この竹を四枚に裂て皮なる方をとり綯て綱とし船毎に貯ふ。能く水に堪て強し。故に諸國の湊に日薩の船かゝりあれば　他國船は夫を除て船懸りすといふ。夜竹綱と此方の苧綱と海中にてするときは、これか爲に苧綱の切るか故也とかや。扨皮をばはぎとりし跡の實竹を、四五寸に折て雪隱に入れ置き便用とす。名付てチウギと云、嗚呼なる名目のおかしくおもひけるに、道宣律師の教誡律儀曰、上厠之法六、曰夜暗黑當レ用ニ厠籌於厠孔中ー。向ニ前後ニ則令レ知レ潤狭長短正及不正ニ云々。同第八用ニ厠籌ニ了當レ刺ニ厠孔中ー。不レ須レ安ニ堋内及板上ニ云々。又輟耕錄にも、今寺觀削レ木爲レ籌置ニ溷圊中ー。名曰ニ厠籌ー。北史文宣王嗜レ酒淫泆肆行、狂暴雖下以ニ揚憤ー爲上相、使進ニ厠籌ー。然則愔所レ進者豈即此與云々。然るに明和年間諸國の巡察使ありて、九州へも至り給ひぬ。兼てより道路橋渉など修造し、山坂など致景の地、或は晝御休所等に建れば、かならず、古來より巡檢道とて、往古の道路あり。新道出來ぬれど徑路によらず。又其國々の名所舊跡古實の類、檢使に答ふるの書有。識者は乘物に付添鄕導をなす事なり。扨又休所々々に便所を立添ふ。その厠の中に小き棚をかまへて、其上に檜のいかにも綺麗なるを篦のごとく殺て、手元を杉原紙にて卷包たるもの二三本あり。巡檢怪み覺して問ひ給ふ。近侍も何なる故を知らねば、所のものに問へば、チウギと申答ふ。何の爲に設しかと問ふに赤面しけりと、人の語るもおかしかりき。〔割註〕嘉栗云、予先年越後へ行けるに、十日町といふ所に逗留しける中、所の富家へ呼れし。馳走の結構、田舍には珍らしき饗應なり。ふと小用に立て見るに、便所と覺しけれど田子もなし。只新敷俵一つのみなり。いかにせんとあちこちする中に、取持になる人來る。問へば、其俵にせよといふ。こは心得ずといへば、大きに笑ひて是は所

にていつも俵に灰を入て小便せさするなり。跡をばこやしにつかふなり。今日は珍客ゆへ俵を新に申付るよし答へし。」むかしは中華とおなじく木を用ひ、今は竹を用ゆれど、古名を廢せず籌木と云なるべし。律義に出る所を見れば、便用に遣ふものにてはなきよし也。

○動搖石

四國遍路八十八ヶ所の內卅八番の靈場をば蹉跎寺と號す。土佐の地續ながら、海上へ十里ばかり出たる出崎にして、日本南界なり。磯を傳ひ嶺を攀行。難儀にて無双の靈地なり。一山檜のみにして、浪風に吹撓めて匍匐のごとし。開山忠義上人補陀落山へ渡海し給ふ。諸人離別おしみなげき足摺しけりとて蹉跎寺と號しける。七つの不思議有中に動搖石(ユルギイシ)とて有。高さ四尺餘り大さ六尺も有ん大石にて孤立し、上に丸く小き石あり。手をもつて此大石を押事しばらくすれば、上の小石ゆるぎて轉び廻るなり。下の大石は更に動くべき體もなし。〔割註〕七不思議は○天灯籠灯、天に灯出れば必ず海上へも出る。○不增不減の水○潮石丑時龍馬來ると○山陰の笹馬の食たるあり○金砦○晝時雨○動搖石なり。」一統志云。一指石在二桐廬縣西北一。長一丈、高五尺、綴二巖谷間一以レ手抵レ之、則動搖、人力多則不レ動と云々。元楊維禎詩句一指力可レ動、萬夫莫二能移一とあるより一指石と名づくと、誠に不思議といふべし。又爰に怪しくも解しがたき事有。寺僧出て海岸に望み御龜樣々々々と呼ぶに連て、大小の集龜多く浮み出、その聲に應じて岸下に集る。其岸高さ數十丈なれば、瀬聲の鬧くばかりに浪の音岩に打かけてもの凄きところへ來る。はるかに目を留めて見れば、大きなるは菅笠程、小きは圓盆やうなり。その間遙なれば頭のごとし。近きは乘程もやあるらん。これ補陀落山への使者なりと云々。但し呼に應じて出る何の爲たる事を知らず。勿論餌拾ふ爲にもあらず。いとゞ奇しき事なり。ゆるぎ石の事におもひ合たる事有。因にいふ、楠河內判官正成、南部の寺社を巡禮し東大寺に來る。鐘樓の側に休み、幕の內に郎等共に破篭を遣ひ居けるに、又參詣の田舍道者五六人來りて、鐘樓に集り何か聲高く物語る內に、壹人いふ樣、此鐘の大

なる事我國第一なり。されば重き事幾萬斤か有らん。たとひ四十人五十人して動かすとも、中々動く事あるまじ。されば深く工夫するに、箸程のものを以て、只壹人して動かさんといふて通りけり。正成此言を聞咎めて暫く默然たりしが、恩地左近に向ひいふ様、今の奴原が言し事を聞しや。何者なれば斯嗚呼の事を罵りつるや。定めて浮たる事にはあらじとおもふ。我今此にては物にまぎれて工夫仕難し。今宵歸りて思慮し、鐘を容易に動す事やある。分別せんと語る。扨其夜能々思惟し課せ、翌日又東大寺へ行て、從者の中に至極實義丁寧なるもの壹人呼出して、鐘樓堂に入、高さ三尺計の箱をとり寄せ、彼者にふまへさせ、鐘の角の其人の乳の通りに當るほどにしつらひ、いかにも小き木を持せ鐘のはづれに押當させて、靜にその木を兩手にて、しか〴〵と退屈なく、いつまでもおなじ調子に鐘のはづれへ當る事を大事に守りて、むらのなき様に心得、ものをきざむごとくしみ〴〵と速からず遲からず、氣を靜に勤べしと申付けり。此者畏りて專一に志し、始終同じ拍子に三時計りしづ〳〵と心長に當居たり。正成側にやすみて、四方山の物語り居たる所に、ふと龍頭の方きり〳〵と鳴出、忽然として少しづゝ動くかとおもふ内に、後には次第にゆるゝ體なり。押ものいよ〳〵心を納めて、やはり同じ様に押當居るに、段々と動出し、後々は輕々とゆるぎけるとなり。誠に人の才不才恐ろしきものか。その智には及ぶべしとはむべなるかな。正成ならずしてかゝる事をなすべからず。名將のものを棄ざる事深切なり。

○傭僕

五箇家系圖云、平惟盛淸經と倶に謀て、おの〳〵入水と披露し、惟盛は紀州熊野の奥に引籠り、淸經は豐前國柳が浦より小船に取乘り、元暦元年五月廿八日豐後國に落行、緒方左馬助實國を頼まれしに、實國かひ〴〵敷うけ合て、淸經をはごくみ置て婿とせり。其後淸經が一子を生ず。祖父の家名を繼て、緒方市郎淸國と稱す。淸國が子盛實といふ者、子二人有、嫡子紀四郎成幸といふ。二男を民部實明といふ。このもの共子細ありて建久元年三月十三日肥後國八代郡五家山白鳥岳に來り住すと、按ずるに、こ

の二人後世に別れて五家と成て魁首たり。故に五家山といふか。此地日薩隅に隣りて、至極の山中なり。また米良山といふに續ひて猶奥なり。此米良は、肥後の大守附屬の地にて、交代御旗本組なり。一代に一度江戶に參禮なり。さればこの邊至極幽陰の地にして田地なく、年々山間の樹木を伐捨、其跡を燒拂ひ、粟稗芋などを作る。山廣ければこそ、此端山の岨を切開きて、毎年所を替るばかりなり。これ所謂古書に火田(ヤイタ)なり。〔割註〕嘉栗云、畑の字、則火田也、ハヒフヘホの相通なり。故に火扁なり。日州佐土原の人云けるは、この燒畑をなすに、其所へ先芽を出すものは茶の木なり。しかれば茶の木上代より我國に有しならん。その煎服する事はしらざるゆへ捨置しと覺ゆと、海人藻芥に曰、茶は上古より我國にあり。ひき茶。節會には內裏において被レ行し事、公事儀式に見えたり。然るに葉上僧正入宋の時、かさねて茶の種を渡され、栂尾上人翫レ之と、然ればこの說もすてがたし。」その女郎(メラ)五箇の內山に子供多くもちたるは、他所より商ひに來るものへ賴みて、日州佐土原宮崎邊へ不通に與ふるなり。則ちその俸祿として、其親たる者へ鹽と米五升を贈るなり。かくて其者一代主人に身を任せ、男女ともに仕ふる事なり。又日州は平野田畑多ければ、この米良等に限らず、他國他所よりも男女の子供を買ふなる故に、富有の農民などは奴婢餘多持り。その中にて相應に夫婦とすれば出生の子供有り。これを庭の子と云て、我子同前に撫育す。〔割註〕嘉栗云、甲州在方山家臺が原なども如レ斯。下女子の出來るをも構はず戶明はなしなり。もし下男女等相通じて子出來れば養ひて僕とす。これを家の子といふ。」かくの如くして庭の子主人の心に叶ひたるは直に召仕ふ。叶はざるはいつにても所望の人有れば賣遣すなり。或は娘など嫁入さすには、かならず壹人の婢をそへて遣すなり。その初めに身を賣る男女は、みな親兄のため、或は貧くしていとなみなきものなど、身を販ぎて他の家に入るなり。是等世にいふ譜代相傳の主從といふ。家の子郞等などいふべき事なり。今上方邊などにて人を賣買する事有。かたき御制禁にて、又世人も恐ろしき事におもへり。是は無賴の者ありて、人の子を勾引出すをもて停止たり。彼邊にての賣買

は、かへつて上方の門々辻町に棄子せるには遙に勝り同日の論にあらず。ゆへにその者一生主人に身をゆだねて、譬不法の事にて主の手に死すとも、更に恨とせず、眞忠といふべし。日本紀持統天皇五年三月壬申朔癸巳、詔曰、若有下百姓弟爲レ兄見レ賣者上從レ良。若子爲ニ父母見レ賣者從レ賤、若准ニ貸倍ニ沒レ賤者從レ良。其子雖レ配ニ奴婢ニ。所レ生亦皆從レ良云々。中華の史にも、良賤奴僕の事出て、大凡類せる事なり。さるに上方邊、年季といふもの十年を限りて暇を出す。實體に勤たる者は、その職をゆるし與ふ。多く職業の家にありて、其餘は皆一年半年とす。仕るものもその給銀をこぎり、勤のうちに早先半季の約束をし、三月四日九月十日を出替の日と定め、その家より直にかしこの家に移り行、旦に出で夕べに顧みず。爰に於て忠と云、主從と云因みあらんや。唯傭人の思ひなり。主人もまたそれに准ひて、更に憐愍の意もなし。これ時世の變にて、繁花の地は物事自由なるの過たるより、自ら貴賤親族となく薄情のみなり。誠に陶潛が是も人の子也といひしは有難し。曜仙曰、買ニ奴僕ニ必粗蠢。而有ニ誠實ニ者と、宜哉、又東坡曰、上等の馬に乘、下等の人を遣ふと云しも、亦格言なる哉。

○變　態

飛驒國高山府下滄州といふ人より、一奇物を送れり。其さま笹の細きに葉もよのつねなり。其本なる葉のところ二寸餘の物生り、末細くして魚の尾の形にして、兩目と覺しき所ありて鱗も備はり、丸くして鱗の様に笹の葉有て、全體細工物の如し。谷川の笹に自然と出來て、三四月のころ忽然と枝を放れ、水中に落入れば魚と化す。號て笹の魚と云。尤も味ひ美なりと云々。これいまだ諸書にも出ざる一變物なり。かゝる事は往々深山幽谷海邊などに有べき事なるべしといへども、人常に見ざる所なればいはず。適一人見て、その實と告るといへども信ずべからず。但し我見ざる事とて誣べからず。陰陽の氣變はかり知り難し。人天を覆ふ知ありとも、理は盡すべからず。夭化あり、氣化あり、心化體化あり。佛者胎卵濕化の四生を說事理有哉。予幼少の時、宗祇諸國物語とかやいふものを見しに、子供心にも珍らしと

おもひし故に、今に記臆せり。何國の事にや。春の頃蛇多く出來りて、海中に走り入て蛸となれりといふ事ありき。甚だ怪しき事におもへり。近頃越前に通ふ商人の語るを聞しに、春三月のころ彼國に有しに、所の人々誘ひて蛇の蛸になるを見に行べしとて、破籠樣の物を携へ、長閑なる日に濱邊に遊ぶ。暫くしてとある山の尾崎より蛇出來りて、眞一文字に濱を下り、海中に游ぎゆらめき、十間許りも出るや、尾を上て打事數遍しぬれば、尾先裂て足長く別かれ出。コハふしぎ成事哉と目をはなさず見留居るうち、いまだ半身は蛇の儘にゆられけるが、また水に打返り〳〵するかと見れば、忽ち全體蛸と化して沖の方へ行、夫より追々出てはみな斯のごとし。その化してしばらくは、つかれ苦みぬるや惱める樣なり。是等世にいふ手長蛸に毒ありとするの本かと聞て、扨は浮たる事にもあらざりしと覺ふ。又同じ北海に一奇物あり。蛸舟と號し、大なるもの七八寸、色淡白にして貝薄く、秋海棠の葉に似たる文理麗し。その中に小き蛸有りて、兩手を貝殼の外に出し、兩足を梶竿のごとく、頭を立て帆の如くし游ぎ廻るゆへ、その名あり。その蛸毒有とて人食せず。その殼を取て花瓶とす。按ずるに延喜式主計式に、貝蛸鮨といふものあり。是歟。蛸舟は、俗名本名貝蛸、又一名弟姫貝といふ。日本書紀敏達天皇の條下に、貝蛸皇女あれば、其名久敷事なるべしと、勢州谷川氏もいへり。又近江の湖水に、アメノ魚、太刀魚とて魚あり。小さくして鮀のごとし。

○海嘯

人生れてより我家を出ず。業をなし職を勤て、公私の忙きに一生を過すに、變ることなくて、日々同じ事に年を終るは、是大抵の生涯なり。かゝる人やおもひがけず、此ごろ旅立ける際こそ、目覺る心地ぞせらると書しも宜なり。馬に跨り輿に駕して、おもふ儘の調度取持せ、萬我家にある樣したるも、簡に盛物を椎の葉にと歎息すらめ。さるてけふも旅、翌日も又同じ旅にして、さらに死生の間に心を用ひず。いづれの土か待らんと、我身にしめて年を超へ月を渡り、苦きを食ひ辛きを甞、樹下石上を宿と頼む。

古人の死床に臥癩椀に食といひしこそ、涙落るばかりなり。かくて夫をたのしみとする所あるや、實に有なり。適風景の地に出で眼を悦ばしめ、精神を遊ばしむるに至ては、斯る絶勝の妙景、所謂遊山の地にして、宇宙の間に幾許かあらん。この年月思ひ立得ざるは殘念なれ。今こそ千辛萬苦も物かは。生前の活計これにしかんや。また未だ見ず聞ざるの奇事、或は佛神の靈驗、古昔の名蹟、日としてなき事あたはず。見ぬ人の爲に語るとも、水中の鹽味ならんかし。されど事實を好む人、其文章の卑俗なるを笑はずして、その虛談ならざるを翫ばゝ、述者の本意ならん。予石見國銀嶺五井村といふより江津といふに出る濱傳ひに、小山の上を行事數里、前に大川有。向ひの地なる門村といふに渡らんとすれど、渡しの舟なし。人多く集りて騷ぎ罵る。何事にやと問へば、老人曰、吾七十餘に及べども、斯るふしぎなる恐ろしき事見もせず。又昔より聞傳へし事もなし。アレ〳〵とて沖を指さす。いかなる事かと見てあれば、遙の沖より大山のごとく逆浪一同に押來り、かの潮州の湧濤、始皇の築し萬里の長城も、今爰に見る心地す。スハ此ところもたちまち打碎て、浪の底とやならんと驚き見るに、此地は山の尾崎なれば、濱邊よりは殊に高く、彼浪も山下迄は押來りし計りなれば、おもひしより胸落付ぬ。然れども浪は川口へ高々と押入ぬれば、渡舟を始めとしてありと有舟どもは、水上へ逆押にして五六町ばかり漕上ぬ。また川に浮ぶ材木類も、同じく一時に逆上る。斯して又其さしたる浪、引て返る時は、海上遙に一二三十町もや、忽ち平地と成しかば、海底種々の奇石大石顯はれ見え、或は汐に引殘されたる魚の大小となくひら〳〵と踏うちはためき、蚫、榮螺やうのものも夥しく見ゆ。飛入れば、手しても取得べき事は容易かれども、おの〳〵恐れまどひ居れば、誰有て壹人も磯邊に下るものなし、さて人々の物がたるを聞けば、此浪晝前より起て、すでに三度なり。若朝鮮の地に地震など有て、津浪なんどいふものにやと語る。兒女の類ひは、今やいかなる事や出來らんと泣まどひ、何國へか逃去らんとさわぎあふ。予も渡るべき舟なくて渡り逃れん事も成がたく、詮方なければ、この所の家に宿りて夕飯したゝめて休息しながら、心な

らざる間に、はや日も暮て沖のかた鳴ひゞき浪音高く聞ゆ。殊に九月中旬の月明らか成しかば、又堤に出て見れば、蓋のごとく高浪押來る。川口の兩傍なる蛇籠、川岸の杭に物當りぬる音、夜は猶物凄く聞ゆ。斯る目覺しき事なれば、快くも睡らず考へ見れば、夜明まで三度なりき。斯てほの〴〵に宿の女を呼び起し朝飯焚せて、亭主に頼みて舟をとゝのへて、頓てむかひの地へわたり着より、足をはやめて走り避たり。後の事は知らず。それより海濱を出る毎に、浦人に語り問へども、何故といふ事も知らず。また見る事もなしといふ。このごろはからずも草木子にて見出たり。曰、至正の初年楊子江一夕たちまち水渇て平地となる。江中の泥土に舟の桿、或は船板など埋れ、錢貨器物多く顯れ出たり。是累年破損せる船に積貯へたる所の殘れるもの也。則ち海邊のものども追々入來り是を拾ひ奪ふ。潮さし至ればすなはち陸へ逃上り、潮退けばまた行てとり、走上る事及ばずして溺れ死するものもまた多し。かくのごとく日を重ねて江もまた元のごとく流る。識者の曰、これを江嘯といふなりとぞ。同史に、永嘉郡に大風あつて海船數艘、平陸高波の上に押上る事二三十里、死者千人に及ぶ。世人是を海嘯といふと云々。如ゝ斯見えたれば、予が北海にて見たるもこの類なるもの歟とおもふのみ。

笈埃隨筆 巻之六

○諏訪湖

抑信州諏訪に上下の社有り。其間に湖水を湛ふ。其道路湖邊を廻りて三里なり。世に七不思議とてある中に、毎日社壇の雨といふ事ありしかば、やがて巳の刻計りに參詣して、靜に宮社を廻りつゝ時を移し待けり。此日六月中旬の事なるに、數日雨も無く草焦れて燒が如く、更に一點の雲さへ見えず、炎熱絕がたし。いかにやと怪みおもひ立廻る中、萱葺の二尺餘りもあらん御殿の正面へ、じた／＼と水十滴計したゝり落。コハあらたなる靈驗なりけりと、有難くも神驗肝に銘じぬ。世にこれを湖水の水源也といひ傳へたり。また御祭禮には必ず七十五の獸の頭を贄とす。兎狸猪鹿を用ふ。近鄉より持集るに、いつの年にても七拾五に增減なしとかや。中に一頭耳の裂たる鹿一頭必ずあり。是も又不思議也。又古き歌に、

諏訪の湖霞が崎に來て見れば富士の上漕あまの釣舟

と詠しと、彼地に在しける澄月法師に聞ければ、誠にその事よ。湖水の差出たる諏訪家代々の居城有る所を霞が崎といふ。その大手に橋あり。その橋の下に富士峰の形嚴然と水に移る也。每年極寒になれば、この湖水一面に氷りて、その厚さ計難し。誠に鐵石の如し。故に上下の諏訪、常は三里あるに、此氷の上を眞直に行時は僅一里計なり。然れども神使の狐有て、先渡るを考へ、夫よりは重き荷を付たる馬も人も渡るに難なし。其狐渡らざる間は氷破れ易し。春に至り既に氷解る頃には、其狐又渡り戻る也。その後は人も渡らず、いつしか解る也と云傳へ、書にも記せり。是事實を正さずして傳書の誤也。其狐の渡る事は、韻府に記したる中華の事を取傳へ、左も有べしと自得したるは不レ詳か。漢書文帝紀

註師古云、狐之爲レ獸其性多レ疑、毎レ渡ニ氷河一。且聽且渡。故云ニ疑者一而稱ニ狐疑一と云々。述征記に亦曰河氷合須ニ狐聽一而行。是等を推考へて傳へ云なり。諏訪の氷を渡るといふ中々類ふべき事にはあらず。又川などの流れにもあらず。周匝三里なる湖水の極寒に及ばんとするに、水底よりもり〳〵と鳴響、夜となく晝となく次第に氷る音初て聞ものは、大におどろき奇怪なりとす。かくて一面に氷る事、厚さ三尺餘、五尺に及ぶ。不時に風雨雷電する事、一晝夜或は二日に及ぶ。是を御渡りと稱して、人大に恐れ門戸を閉て出ず。風雨靜まりて後見るに、かの尺餘の氷の眞中に一文字に裂破る。その幅三尺計り、向ひ路より爰方に貫けり。その山中より出る所毎年同じく。その出たる所の道路の樹木は打ひしぎたる樣に倒れ、砂石みだれ、大なる材木など曳出したる跡のごとし。爰をもつて狐の所爲にあらざる事を知るべし。偏に大蛇の出るなるべし。四五尺に及ぶ厚さの氷を、直に裂破り通る程の事也。その後村民旅人抔の前にいふごとく駄荷の馬にても快く通行す。又常に漁者ありて魚を網するものも、此奇事の後は、氷上二十間三十間を隔て、胴突を以て所々に穴を鐫て大綱を通し、彼一文字に裂たる所へ魚を追出して捕へ賣買す。其味ひ甘美にして類ひなしといふ。されば堀川百首に、顯仲の歌にも、神の渡る諏訪の氷など詠るを考ふべし。其うたは、

諏訪の湖や氷の上の通ひ路は神のわたりて解るなりけり

と但し春に至り又後戻るなどとはなき事にて、三月の頃自ら解るなれば、人も心得て通りを止るなり。

因に云、能登大夫資基といふ人、俊賴朝臣の許に參り語りけるは、信濃國と申は、極めて風早き所なり。これによりて諏訪明神の社に、風祝部(カザホフリ)といふものを置て、かれを奥深く籠置、百日の間尊重し祝ひ祭るに、其年風靜にて、農業のため目出たし。若は自然少しの透間ありて、日の光りを見せつれば、風治らずして荒しといふ事なり。これを歌に讀んとおもふ事を語りけるに、俊賴の答に、珍らしき事也。さりながら無下に俗に近し。かやうの事を更におもひよるべからず。不便々々とい

はれければ、その旨を存する所に、後に俊頼、

信濃なる木曾路の櫻咲にけり風の祝部に透間あらすな

と詠れければ、腹黒き事なりと、五品大に後悔しけり。

○馭術

薩州鹿兒島の府城の大手前に、方百間計に埒を結立たり。諸國になき事なり。いかなる故やらんと問へば、犬追物の稽古場のよしを答ふ。東鑑に毎々此事見えたり。猶牛追ものなども有よしなり。犬追物の事、射御の大事とする所なれば、委き子細知りがたし。粗聞傳へたるあらましは、其馬場凡四丁四方程に取圍み、中央には馬を立る榜止あり。又大なる綱を以て、四五間四方の圍を結。これを大綱といふ。又内に一間四方程の圍あり。これを小綱と云。その内にいろ／＼の蒔(ママ)妙をなす。先埒の一方に口あるを犬塚口といふ。一方を物陰口といふ。犬塚口より犬を一度々々に放ち入て、騎士追廻してこれを射る。檢見一人の矢の中不レ中を改む。亦呼次の人あり。檢見より呼次の人聞受て執筆所に傳ふなり。射手の裝束は烏帽子に行縢し、小手をさす。弓矢を手挾み、短刀をさすとなり。それ犬追物の權輿の事、其家に傳ふるは、神功皇后三韓征伐より事起るが故に、本朝の祈禱として、代々の帝王も將軍にも御上覽なりしに、後醍醐帝の御時、暫く天下に停止有しは、罪なき犬を射殺さんこと憐愍有し故なり。然るに小笠原信濃守貞宗申さるゝは、弓の家として此事實を絶さん事をなげき、頻りに奏聞を遂げ願ひければ、御許容ありけり。かくのごとく元來は、小笠原家傳來たりしが、正保年間將軍家光公御上覽の時、島津家より相勤しより島津家に傳來す。鎌倉將軍のころ、御庭に於て犬追物有し時、島津三郎兵衛檢見の役なりし由緒なり。東鑑に曰、承久四年壬午二月六日、於二南庭一有二犬追物一。若君御入興。犬二十疋射手四騎也。相搆可レ決二勝負一之由被二仰出一之間。各爭二箭員一之處。面々五疋射レ之。始拾疋之内。毎二一疋一。今度之犬者某可レ射之由。次第付レ主。被二仰出一。其人箭必中レ之。後拾疋之時者。射手次第。此犬者

令レ領之由自稱。依レ仰也。又無二相違一。等巡射手中レ之。旁爲二希代之珍事一之由人々美談。駿河前司義村加二檢見一。島津三郎兵衛尉忠義申二次之一。云々。犬追物祕書序云、馬上作物雖レ有二其數一。當時所レ用者流鏑馬、笠掛、犬追物也。流鏑馬笠掛面々雖レ有二其益一、猶於二犬追物一者射馭之簡要、馳逐之妙術也。然間鎌倉右大将家之時權輿之、入道將軍御代嘉禎年中、泰時幷經明被二仰定一。有二興行之沙汰一。就レ夫所々批判被レ定レ法云々。されば日薩の間、殊更馬藝をなす中にも、毎春三月の頃、薩州に牧馬をとる事有。佐土原領など又あり。是駒追と號して、先牧口の正面に棧敷を掛、國主の座を設け、役を受る人列座して執筆左右に候す。前には騎馬十人、歩卒數百人をして四方を狩立追廻し、數百疋の駒を棧敷前の廣みへ追寄來り、指揮に應じて乘伏るなり。野飼の馬の荒にあれて鬣をふり立、人を蹴立て寄せ付ず、飛廻り狂ひはね、縱横に駈廻る群馬の中へ我馬を乘放ち、逸なる馬を目がけ、馬より馬の背を越渡り、おもふ馬に打跨り動かしもやらず。頓て乘來る歩卒は、則ち用意の轡をはましめ、かたへに引立る。追々斯のごとく實に勇々しき壯觀也。其以前胴勢入替り著到の式ある時、種々の備へ、隊伍の禮法、或は開き、或は閉、陣列の行粧有り。治世に軍學の習練、殊に目ざましき事なり。

奥仙臺相馬領にも此事ありて人の語る。その隊伍始終の規矩同樣の義也。

惣じて日薩の兩州は、專ら騎射を翫ぶ。村々の神事にも、必ず流鏑馬、又權馬と號して、〔割註〕權馬の名目東鑑に出たり。」所願ある者は必ずこれを奉る。鞍皆具して幣を切かけ、櫳の者一疋に貳人三人、白衣に襷を懸て神樂の太鼓を相圖に一同に追立、拜殿を廻る事三度也。數百の馬、數百人の口取は、いやが上に折重り、人には馬、馬には人、我先にと暫時押入る。その間神樂を頻りに勇む。太鼓にまかせて鬼々の聲遠く聞ゆ。斯て此事濟て流鏑馬始る。〔割註〕此權馬といふは、古代所願に依て、社に馬を牽と云て、神献するの遺風なり。今上方邊に繪馬と號して奉納する事は略せるなり。」其流鏑馬の式は、諸社皆ありといへども、中にも神武天皇宮社殊に夥し。例年九月廿七日なり。幷廿三日に足揃へをなす。村

々より奉納する馬の遅速を見て番々を定む。大凡例年百五拾疋計なり。扨馬の上中下を差定して、五疋づゝを壹組とする。その宮居は、宮崎郡下北方村に有。方七八町ばかり平地にして、古松森々として無双の境内也。社壇は中央に東向に立給ふ。馬場は神前の南北に開きて、幅十五六間計、長さ二百間に餘れり。北より南へ向て乘、左右に三間餘の高き土俵を突かけて棧敷をかまへ、見物人爰にあり。早朝より始て暮に及ぶ。おの／＼三遍宛なり。北の馬の出し口に大綱を曳て、五疋の馬の足を留めて進退なき樣にす。乘人は狩裝束のごとく、襷をかけて其樣りゝしく出立たり。馬主の寄人一疋に五人程口綱をとりつゝ、片唾を飲て相圖を待、相互にきしむ。馬は勢ひこんではや出ん／＼と、口取を引立はやり出。やがて一同に聲をかけて綱を切て放てば、駈行五疋の足音は數町の外に響き、口取見物曳々と聲をかくれば、樹木もともに鳴響く。馬は元より此日の爲に飼に飼たる事なれば、ふとく逞しく、いにしへの聞ゆる駿足にも、おさ／＼劣るまじき也。乘人も負じとうち挑みて、互に祕術を盡して乘より、馬の勵む事は人に十倍す。先出し口にて、少しのおくれ有て勝まじきとおもふや、四五間ばかり駈てさらに進まず。あるひは中途に駈出しおくれたるや、横さまに見物の中へ切込て行ず。是その力の及ばざるを恥てなり。又牛角の力ある馬の相連て駈行に、僅に鞭計りおくれたると見れば、その馬先の馬に追すがひ入て、ひたともたれて横におしかゝれば、先の馬、強く押れて少し左による計りなるを、つと駈拔けなんとおそろしき智なり。又五馬の負ず劣らず轡を並べて駈るには、一瞬の障もなく速にして、韋駄天孟賁が駿足も及ぶべからじ。髻に長き紙を切て、笠抔にかけたる、只一文字のごとく立ほど也。是をもつて昔をおもふに、宇治川にて佐々木梶原先陣に、摺墨といふ馬、生月に乘負てより、草をも食ず斃す。梶原此に似たる馬を替て、摺墨也と云しも、實にさもあらんか。扨馬を立かへ／＼乘といへども、乘人は纔か八人計りにて、二百間の馬場を三遍づゝにて百五十疋、旦より昏に至るに少しもひるまず乘る事、まことに馬上の達人とやいはん。見るにおどろく事なり。かゝる働又稀なるべし。出し口の綱、五馬の

進むに自由ならざれば、今は土手を堅く築きて、一番貳番をさだめて、一馬五間づゝ隔て出しけり。まことに目ざましき有さまといふもさらなり。

○藥 草

予日州諸縣郡本莊八日町といふ所に、知己の者有て遊び居ける中、希有の事ありし。町端に淨土宗の寺有り。住僧小僧下男と三人なり。或日豐後のものなるよしにて男三人來り、住僧にいふ樣は、明日は此ものゝ親の年回に當り候間、御回向申請度候。私共儀は去年より薩州なる炭山に働き居申候。宜敷賴み上候とて、鳥目三百銅を包み、酒一樽、豆腐一筥持來りぬ。

日薩の間深山多く、良材を出す。或は炭燒松煙造り、硫黃、明礬、樟腦、藭等を製し、椎皮、楊梅皮を剝など、なべて山稼といふ。先にいふごとし。豐後は小山多く地面不平にして田地も少きゆへ、日薩の山々に入て稼をなす。或は五年、又は拾年にも及ぶゆへ、多く妻子を帶て來る。

住僧、奇特におもひ、頓て佛前に施主を伴ひ、讀經念佛する內に、ともなへる二人の者、臺所に出て小僧下男とともに、豆腐を煮、酒を煖め居る間に、回向も濟ぬれば、住僧に一禮申て酒を進め、施主どもは下戶にて只豆腐を食して、酒は少しばかり飲居たり。元より住持は上戶なりしかば、强られて常よりも快く飲過たり。小僧も酌にありければ、間（アイ）の助のと飲せ、三人の施主こゝろ一ぱいに饗しぬ。頓て盃事も終りにければ、臺所にて殘る樽の酒を下男へ、平强（シイ）に飲盡させけり。その內住持は用の事有て、小僧を町へ使に出しける。然るに小僧は使せる家に至りて、何かあられぬ事を云て、常の體ならねば、其家のもの大に怪しみ、小僧どのには狐や付ぬらんかと、色々近所の人も來りて事を糺せども、前後一向四度けなく、酒臭き體なれば、扨は酒にや醉ぬらんとて、頓て引連れて寺へ來て見れば、住持は袈裟かけ衣着ながら座敷を轉廻り、何か獨言を罵り居る。コハいかにと臺所を見れば、下男も大手を廣げ逃さじそらじなどゝ、舌も廻らずわめき轉びめぐるさま、何の事ともしらず騷がし。彼是する中に、小僧も倒

れて伏ければ、住持も下男もひた〳〵と打倒れて大鼾して寐たり。町の者ども追々馳來り、醫者なるものも來て見れど、何の病症ともわからず。只酒臭き事いふ計りなし。兎角する中、日も闌に及びけるに、早く小僧ばかり眠り覺て、人心地付ければ、先づ今日の樣子を問ふに、しか〳〵のよしを語る。扨はとおの〳〵飲明したる樽を打破り見れば、さして怪むべき事もなく、朝鮮蕣と云ふ花も葉も交りある計り也。はや暮に及びければ娑かしこ戶を閉る頃に、納戶の內簞笥半櫃など取散して、住持の衣服共外少々の銀錢迄もなかりしかば、扨は盜賊の業よと知れたり。翌日に至り住持も下男も醉覺て、常のごとくなりけれど、半月計は何となふ煩にけり。小僧は少し飲しかば、何の障りもなかりし。去にても此草の事不審なりしに、誰いふともなく、此草を煎じて飲む時は、一旦は毒のやうなれども、打身、筋違などには却て功あり。決して毒といふにはあらず。酒に和して飲ば醉て血脈動じて、暫くものを忘却するのみと云ひし。田舍の事なれば、人氣剛强にして、おの〳〵寄合、此花を取寄、酒に浸して煎じて、誰にか飲しめんといへども、我こそ試んといふものなし。其座に信州木曾の福島より櫛木を挽て賣步行もの二人居たり。壹人いふ樣、我先日落馬せしが、其痛ありて難儀なり。跡にてよろしき事あらば飲んといふ。連の者は留めけれども、此者元來上戶なりしかば、幸ひなりとて引受々々呑ほしけり。頓て布團折かぶり臥ぬ。おの〳〵いかにと見合せ居る內に、彼者むく〳〵と起出て、何かあやもなき事を罵り出して立騷げども足立ず。ひよろ〳〵としながら、傍にある荷拐をもつて敲き廻りにければ、これはと各さゝへ居るに、猶やまず襖障子など打破りしかば、連の商人も立かゝり押伏、細引をもて柱にくる〳〵と卷付ぬ。いよ〳〵叫び罵りけるが、時過て打草臥、縛れながら寐入り、翌日は醉も醒たりしかば、常の如くにて、落馬の痛も快しなど云て大笑ひになりぬ。心有る者はいらざる毒の試みなりと、苦々しく云けれど、後には何の障りもなく薩摩の方へ行ぬ。それより所々にて、此酒を飲して財物を奪ひし沙汰有しが、忽ち所々に聞へて卒爾に酒も飲ざりけり。後は丸藥などに入て飲せけれども、さして惱む事もなか

りし。これ中華の小說等水滸傳に書載し、しびれ藥といふものならん。彼地にて多く道路の酒店、又は驛舍などにて、旅人に飲せ財寶を奪ひ取しことまゝ出たり。其類にやあらん。然るに其法を識得たるは最怪し。彼國にても強勇の者と云へども、是を飲ば手足痿痺て無用の人となる。されど其醉覺れば、元のごとくになる由なり。是をまんだら花といふ事は、本草に見えたり。

本草綱目ニ云。曼陀羅華。釋名風茄子。又山茄子ト云。李時珍曰。法華經中曰。佛說爾時天雨㆓曼陀羅花㆒。又道家北斗有㆓陀羅星㆒。使者手執㆓此花㆒。故後人因以名㆓曼陀羅星㆒。北土人家栽㆑之者。春生夏長、獨莖直上。高四五尺。生不㆓旁引㆒。綠莖碧葉如㆓茄葉㆒。八月開㆓白花㆒。凡六瓣狀如㆓牽牛花㆒云々。

故朝鮮朝顏ト號。

○感應

日向國宮崎郡中村町といふ所に、增右衞門とて百餘歲の老人有。其性質貞實にして、ものに怒らず溫柔なりし。常に予が旅宿へ來り物語りしけるに、近年の事はおぼろげなれども、若年の事は却て記憶したりとて、或日何か咄しける中に云、四五十年以前迄、此宮崎郡一圓に公領にして、年々稅穀を直に江戶に積けるゆへ、我も度々彼地へ乘船せり。此赤江川の湊口より寅卯の方へ針を立て出帆すれば、土佐、阿波より紀州伊勢海を左に、遠くして遠州灘もはるかに地より遠く乘過、凡十日餘りには江戶に着せしなり。然るに或年いつものごとくに湊を出し所に、風惡敷して、土佐の國淸水が蹉跎の沖と思ふ所に來り、是非なくとある小島の陰に船掛りす。彼是日數を經し事なれば、水の用意も少なく覺へければ、此島に水もやあらんと尋ね行に、枯枝下草など拾ひ集め薪とせんと、おの〳〵島を廻り見るに、人の住所もなく只小き社有り。此頃祭にてもや有けん。太皷二から拜殿にあり。おの〳〵たば粉呑居て休らひける中に、一人曰、此程の船懸りに退屈せり。幸ひの太皷有り、神樂舞して遊ばんには、神も赦し給はんと打笑て、てん手に竹を切て笛とし、藥鑵の蓋を以て銅拍子とし、或は紙袋をもて烏帽子を拵へ、浴衣

手拭などにて狩衣袴とし、幣切かけて、彼太鼓を打立囃して、訛たる聲を一調子張上げて、神樂唄うたひ出せば、おの／＼同じ音に、誰見るべき人も無れば、かはり／＼舞奏で、世になき樂みに笑壺に入し會合也。斯て次第に我を忘れて、興に乗じてどよめき笑ふ聲騒しく、陸地にも聞へけん。所の役人と覺しき侍交り小船に棹さし來り、大に呵ていふやう、此島は崇しき神在て、常に漁人の船さへもよせず、いわんや一草一木をも取來れば大に咎め有。月次の神祭の外、人の渡り來る事なし。然るに加様の騒ぎ罵る事無禮不法也。何國何方の船なるやと甚怒りければ、皆々肝を潰し、左様の事とは存じ不レ申、水を取にあがりて、太鼓の有しよりふと興じ候也。眞平御免下さるべしと、初の擧動には似ずして頭をかゝへ、我先にと逃て舟に取乗り、顏見合て恐れ入り、船を遠ざけて沖懸りす。しかるに風いまだ直らねば、其夜もこゝに明しけり。未ほの／＼に昨日の船をはじめ四五艘漕來る。コハいかなる科をか課せつらんと、聲をも立ずすくみ居けるに、双方よりよや／＼と呼起せば、一人アツと答へて立出見れば、先の役人其外所の者共大勢船をつなぎ寄て、昨日の氣色とは事變りて慇懃に會釋し、さて／＼昨日は卒爾なる儀を申て、各を驚かしまいらせしなり。近頃御詫申。それにつけて猶又御苦勞ながら御頼み申たき事は、昨夜此方どもに島の神の御示現を蒙り奉りし樣は、けふはげにおもひもよらず、珍らかなる歌舞を見聞して、面白く慰みけるに、汝等來り妨げて興を覺し、又彼等を驚かしめたる條奇怪也。早々彼船に至り、彼等をして安堵させしめよとの御怒りに逢ひぬ。左あれば此後神の御咎めもはかりがたし、何卒御許し有り、且は神慮をもすゞしめ給はんために、今一度曲て神樂し給はるべしと、低頭平伏してひたすらに頼むにぞ、今更恥かしく、段々かたく辭すれども、なか／＼免さず。是非なくいざなはれ、又彼島の拜殿に參りて、斯るおかしき俳優の神慮に叶ひけんは、いかなる事やとおもひながら、神樂舞をはじめ、數番謡ひて囃しければ、所の者老若男女子供をいざなひ渡り來りて、謹んで見物したり。兎角の中に事終りければ、酒肴を設け晝の餉など取賄ひて丁寧に食さしめ、其上米鹽味噌薪などの

ものまで運び送れり。頓て船に來りて、各醉ふくれ快く寐たりける。暫くする中そよ〳〵と艫の方より風吹出ければ、スハヤと帆を引き碇を卷て馳けり。紀の海伊勢の海とも見る間もなく、順風に乘じて七十五里の大洋を障りもなく江戸佃島に着ぬ。一ト日和なりしかば、土佐にて上げたる帆の、江戸迄其儘に有けり。まことに可笑も有がたき事なりき。

因にいふ、本文に云神樂の事、自餘の人の知るべき事ならじとおもふに、日向は神代發端の國なりければにや。先大小の百姓、己が四壁の中に小祠を安置し、先祖を祭りて氏神と云。月々社人を乞て祓す。中にも二月每家神樂祭りと號して醪を造り、また醴を神供とす。小豆の御供をもて粢を備ふ。社人來りて祓する中、烏來て御供をはみ行て祭禮終れりとし、頓て親族鄕友を饗せり。烏もし御供をはまざる時は、幾度も火を改め炊きかへて備る也。さて神樂は常例にあらず。五年七年の間、諸社人集りて是を勤め、猶願主などあるときは、所々にあり。其體只餘の竹數拾本立並べ、白木綿數十疋を此竹に種々にまとへ張り注連のごとくす。また白紙をもてさま〴〵の彫物して、數百枚貼て、社壇の正面に備け、色々なる幣を立て、大凡伊勢其外大社の大々神樂の樣なり。さて笏拍子を取て、列座の社人神樂を奏す。舞人或は素面、或は面をかけたり。都て神代卷なり。二日もしは三日にして終る。其舞の間に三度問答有り。社人一人出て其舞人に問事なり。但し古來より格書ありて問も答るも書に見えたり。然れども神學に心ざしありし先立なれば、其餘の不審を問ふ事もあり。始終に獻酬の式有り。三三九度の禮有て、神妙なる事どもなりと語りき。

〇三尊窟

伊豆の國は、駿相二國にはさまり、東海道の箱根より南海へ二十五里出たる國岬なり。故にいづるの理を以て國號とす。伊勢海より此國の下田といふ湊迄七十五里、日本第一の大洋とす。其下田より西の濱に手石浦と云有り。こゝに奇異の岩窟あり。端山の海は差出て、辰巳に向ふ出崎にあり。潮引されば、

岩屋の口狹くして船を入れがたし。故に夫を考へて行事なり。予は十一月朔日に行しに、折から風吹浪あらく入りがたければ、空數十五日まで逗留しけり。其故は、常の小潮にては入がたし。朔望の大潮の引つめたる時を待しに、幸ひ此日天氣融和にして、沖渚ともに春の心地す。頓て晝前より船を出す。旅客三人、予が同行三人、船頭二人也。かくて漁舟に棹さして海上廿町計にして、漸く岩屋の口に舟を臨むに、陸にて見し時は、平地の樣なりと思ひしに、此にては浪高くうねりて、窟中蕩々たりき。されども風少しもなければ心穩かなり。船人岩屋の上にある松の木に綱を纏ひ、船の艫の方より逆しまに船を乘込なり。これは窟の內狹ければ、舳先より乘出すに勝手よき心得也。まづ六七間も入と覺しき所に、窟の口の明りにて能見ゆる。夫より又馬手の方横ざまに船を入れたれば、日光もとゞかずして闇夜のごとし。入口狹ければ浪殊に高く、岩に當りて浪の玉とんで身を浸すが如くぬれぬ。既に舟二たけもや入りぬらんと覺しきに、向の岩高くして舟行ず。舟をゆりあげゆり下したりして、水の煙りに面を洗ひ、恐ろしさいはん方なし。船中おの／＼稱名念佛高く唱ふる計なり。然るに忽然として、向ふの岩壁きらきらと光ると見えしに、則闇穴あきらかなる事白晝のごとし。浪の玉ちる色まで皆金色と變ず。船中一同に驚きたるや、アツト叫ぶに、又眞の闇と成て見るものなければ又忙然たり。順臾にして又光明赫々として前の如し。此時心を靜めて見るに、向ふなる屏風を立たる如き石面に、三尊の彌陀現じ給ふ。上は後光の形にして、足下は雲に乘り給ふ像なり。御佛の長壹尺五六寸、前に並びて觀音を拜見し奉るに、其丈壹尺一二寸、又少し前に離れて勢至菩薩と覺しきは七八寸に過ず。世に云來迎引接の尊體顯然と拜まれさせ給ふ。誠にめでたき有難き奇現に、感涙肝に銘じ、其不可思議なる事は筆端舌頭に述がたし。

かくて船頭綱を手操て舟を出す。予今一度拜せん事を思ひしかば、舟の中に後向て立たり。舟をゆり上げたる時は、上の窟に手屆けり。依て拜見しけるに、初に見しに違はざりける。程なく舟、岩屋の口へ乘出しければ、天日はや午に近し、扨乘合の者に問ふに、拜みたる體は同じけれども、或は四五尺と見、或

は貳尺三尺計といふ。思ふに目さすもしらぬ闇穴、たちまち金色の光明に肝を消し、心神彷彿たりし故なるべし。猶恐怖に堪ざりし者は光輝なるのみ覺へて、慥に佛を拜せざるもありけり。さて其隱れつ顯はれつするは、佛の在す岩へ浪打覆へば、佛隱れて闇夜となる。此時船は低きなり。其打懸たる浪引けば、舟は高く成て佛も顯れ給ふが故に、目八分に拜むなり。斯て船は本の家に歸りて、客等は其岩屋の上より地續に家に戻り、能々斯尊き佛體あるいはれを聞くに、昔は此岩窟の中恐しとて入る者なし。七八十年以前蜑なるもの不圖入たりしに、蚫榮螺など夥し。夫より是を取らんとて、追々白水郎入來りて佛體を見出したれば、更に自然の天造なるべし。三月大潮干の頃は、佛を高く拜み、浪うち覆ふ事もなければ、穴中明らか也。佛の在す岩の根、水中に長く出たれば、舟にては佛のゐる岩までは行屆かず、三月には其岩根に上りて探り見れど、手に佛體もさわらず、又夫とおぼしき形もなし。跡へすざり見れば、鮮かに佛體を見ると語る。予つら／＼案ずるに、これ俗にいふ金の蔓といふものか。夫がかく佛體に自然と湧出せるこそいみじく有がたし。かゝる靈佛出現するゆへにや。昔は人心剛惡にて、佛法をも尊きことゝ知り、佛神を尊敬して慈悲善根といふ事を辨へり。自然と此邊の土人、毎年元日の年禮に入來るもの、先唱へてイナサ參ふ。答へて寄て御座れ。古釘で祝ひませふといふ。これ年始の祝言なりと、是を譯するにイナサとは、此海上の惡風なり。此風吹ときは浦人共松明を持、或は脊に戸板を負、火を燃して濱を往來す。沖に有船難風を凌がんと、此火を目當に湊やある船やあると馳來れば、海底の岩屏に碎かれ破船す。翌朝浦々より舟を出し、かの荷物道具を奪ひ取掠む。かゝる風俗もいつしか太平の潤化に惠まれ、今は昔がたりと成ぬと、所の者の咄しに驚きけり。誠に浦人の云しに違はず、家々の天井板敷壁の類迄も、みな船板道具もて拵へたる事なり。然るに今の世は左樣に無慚なる擧動を成す事聞も及ばざるは、御治世の恩德遍き御事なり。

○疫鬼

洛北一乘寺村金福禪寺の住僧松宗の語られけるは、先年備後國三好鳳源寺にて愚極和尙を招き請ぜり。愚極は梵網經開板の智識なり。則結夏あり。松宗壯年の頃にて此會坐に連り、衆僧と倶に禪堂に入て結跏趺坐し居たり。衆僧も晝夜の勤行につかれ、膝突にふら〳〵と眠りぬ。然るに松宗ふと頭をもたげ見れば、垂たる帷幕を押上げて、堂內を見廻し〳〵するもの有り。無禮なる奴かなと見留れば、八十計りの老人顏色青ざめ、至極痩衰へ、白髮ふり亂し、白髭たれたるは、世にいふ貧乏神ともいふべき淺ましき樣にて、そゞろに物凄く覺ゆる程なり。此者そろ〳〵と結界を越て堂內に入らんとする氣色なれば、松宗物をもいはず、つか〳〵走り行て押出すに、彼者は是非入らんとするを、力にまかせて押出せば、拍子につれて礑と轉びたる音して、其後は見えずなりぬ。靜に座に歸り、また元の如く胡座せり。怪しく思ひながら人にも語らざりけるに、其夜村の者來りて咄す樣、近在近鄕に疫病流行し、村毎に過半病死す。忝も此寺に大法會あるゆへにや。この村に壹人も病者なしと語る。爰に於て松宗、扨も今日加樣加樣の事ありし、村里に見ぬ怪しき者來れり。是や彼疫神てふものかはといふ。一座さにこそあらんと、いよ〳〵修行怠慢なかりしかば、衆僧三百餘人より下部に至るまで、村を限り病者無りしとなり。又日州飫肥の府報恩寺滄海和尙(今在京)に弟子たる豐藏主といふあり。今より以前諸國遍參し、白隱和尙に隨從し、祖師西來の法味に飽き、臨濟正宗の傳旨に醉て、直指の鹽梅を調和す。常に酒を嗜み、氣機虎を打の勇あり。弱きを助け剛を押の俠志なれば、下愚を惠みて權柄に屈せず、貴族を螺羸のごとく見ければ、自ら人の訪ふ事稀なりしかば、門を設たれども常に閉ぬ。此僧下野國那須香嚴寺といふに結制あり。數百の緇徒群參せる中に、奥州三春城下高乾院の弟子曉首座といへると、殊に知己なりしかば、或時同伴し上方へ登らんと、既に遠州濱松にさしかゝる。並木の向ふより數多弟子を召連たる老和尙の、其長六尺有餘なるが、赤き衣を着し、左に赤木の錫杖を突、右に拂子を携へ、威風凜々と步み來る。其容貌常ならずいと尊く覺へければ、傍に兩僧退きて拜揖す。大和尙も答禮し、つか〳〵と面前に來り言

て曰く、生死到來の時如何と、豐首座言下に答へて、我這裏生死なしと、時に彼老和尚顏色忽ち夜叉のごとく、朱を澆ぎたる眼をいらゝげ、一の箱をさし示て、これでも生死なきかといふ。豐首座、箱の中を見れば只今切たる生首一つ有り。其臭氣鼻を穿て堪難く、面を向兼たれ共、猶強く大聲して、それでもなし〳〵と拳をあげて、彼箱を打てうち碎くばかり勢ひ込で、只それでもなしといふのみ。忽然と一陣の夢にして、松原もなく老僧と見しも跡もなく消て、七月廿四日下野國香嚴寺の庫裏なりし。藏主茫然とあきれて左右を見れば、數千の僧徒取廻し居たりしかば、衆僧へ其故を問はれければ、只夫でもなし〳〵と罵りて、板の間を荒くたゝき狂ひける樣子なりし。いかにと問ふに、正しく夢中の事とはおもはざりしが、斯々と始終を語りけり。衆僧も怪み驚き、則答を甘心しぬ。夢覺て後といへども、生首の臭氣は鼻に絶ず、飯に付ばいよ〳〵甚しく、三日の程は止ざりけり。爰に不思議なりしは、其夜より夢中に同行せる饑首座、大熱煩悶し百日計り惱み、十一月にしてやう〳〵本復せり。是らみな疫鬼なり。諸書に云ところ、我國、中華共に同說なり。彼篤蘇乙の三字の靈符に恐れて、疫邪の鬼神川を涉り得ざりしも同じきか。又洞家の祖師道元禪師中華に傳法の頃、山中にして癘鬼に逢ひ給ひし時一偈あり。

無位眞人現二面門一　智惠愚痴通二般若一
靈光分明輝二大千一　神鬼何處著二手脚一

と示し給ふ。妙驗さらに疑ふべからず。今諸國此四句を門戶に貼り、或は右に云三字の靈符を書して、疫癘を避るとするも故有るかな。

笈埃隨筆 卷之七

○渡り鷹

鷹はいにしへ公卿の弄びなりしが、中古より武家に渡りぬ。故に大宮人は、右に居へけりと歌にも詠り。武家は刀劍抜べき爲に左に居るなり。此鳥の事、種々傳も多く、名目數多なる事は、定家卿の鷹三百首、西園寺殿の百首にありて、蒐獵の中に至て大造なるもの也。仁德天皇の御宇、依網屯倉阿弭古異鳥を捕ふ。百濟の酒の君云、此鳥よく人に馴、また諸鳥を擊取と、即養ひ、帝と倶に野に出て鳥を捕らしむ。今の泉州日根郡鳥取鄉鷹飼村也。昔は鷹をくちといへり。俊賴の歌に、

雉子啼すた野に君がくち居ておはしますらんいざ行て見ん

阿弭古今吾孫子村といふなり。中頃正賴卿と申人、不思議の鷹匠たる事、物語の中に出たり。此鳥猛健にして、〔割註〕後の世にたかといふは猛なり。諸鳥を擊てたけきのいはれなり。我より抜群に大鳥をも捕得るといへども、烏を甚だ嫌ふなり。烏も鷹を見れば、追々集り來て啄き廻す程に、歌にも、

鷹の居る森に烏をよせじとや弓よといひて遠見呼らん

とよめり。〔割註〕又伊賀風土記に云、伊賀郡不二見嵩多く群鷹を出す。酒君を葬て鷹見神といふ由緣あるかな。」予日州に有し時は、八月下旬鷹渡り來り、樹にある烏を見付、來て啄き合けるに、後喰合て地に落けり。頓て見物の人拾ひ來て調味せんとて、予をも招きぬ。思ふに鷹を食する事、その能毒たる事いまだ見當らざれば、如何あらんと思ひけるが、よく〳〵案じ見るに、此鳥食して能なければこそ、本草等にも一事も言ず食すまじき事なり。しかし渡り來て、いまだ何物をも食はず、遠き海路を凌ぎ來りしなれば、何ぞ毒といふ程の事有まじと、その家に往て數椀を食ふ。味ひ雉子に類して香ばしかりき。

扨その鷹みな中華の地より渡るものにもあらず。適々には海岸に巣作る也。其巣を作るや、海岸の屏風を立たるごとき岸壁の中間に掛置。蛇などの捕らん事を恐れて也。海岸邊の人よく〱見置、其雛の育つべき頃を考へて取來るなり。しからざれば親鷹瞋て人を損ず。さて雛を取たる跡の巣へ、持る鼻紙やうの物を殘し置ば、親鳥も人の取たるを知りて騒がず、また來る年も同じ處に巣作るなり。もし人の取たるしるしなければ、蛇のたぐひに取られしと思ふにや。再びその所に巣作らず。又渡り鷹は、その道筋に網をはりてとるなり。これも其跡の小屋を燒捨る也。然らざれば故障ありと云傳ふ。さて此雛にても、渡り來りし鷹を網にて取しにても、夜居とて、毎夜々々曉方迄手に居ありきて、更に眠りせず。却て晝は休ませ、暮れば居へありきて、事の半月一ト月に至れば、荒鷹なれども草臥て、自然と人に馴るゝなり。夫より次第に鳥を捕る事を習練さする事なり。都て鷹は已が羽を愛し、常に顧る鳥なれば、木草茂りたる中や、又水中などには入ざる也。故に水鳥を取がたし。依てまづ水鳥を捕らせん時は、鴨雁など水中に有ときは、列卒(セコ)をして驚かし追立れば、皆はつと立上る所を鷹を合するなり。しかれどもよく此事に馴たる鳥は、一旦は飛上れども、水邊を離れず、鷹の來る所をさつ〱と水に飛入て、水を蹴て飛走れば、鷹は水の羽にかゝる事を嫌ひ、避て剪行くなり。誠に鳥といへども、其智賢く、大國討手の兵あれば、小國も防禦の備へをなす。宜なり。予或年九月、豐前國小倉の府より赤間關に渡る船路三里也。七八人の乘合有て、四方山の物語りする中、とある島より小鳥夥敷群をなして、豐前の地を志して渡らんとする體にて、中途よりはつと引返し、元の島に集る。是は渡り鳥なるに何故渡らずして戻りけるにやと問ふに、向ふに驚く事の有ならんといふに、舟人いふ、されば鳥も賢きものなり。是は傍の島に鷹のありやなしやとうかゞひ見ん爲に、一旦は渡る體を見せて引返せる也。其鷹を恐るゝ事斯の如し。既に鷹のなきと心得て、再び靜かに渡り行べし。今に見給へ。目覺しき事あらんと語る中に、程なく一島の小鳥ども、雲霞のごとく悠々然と渡り來る。コハ夥しき事よと目たゝきもせず守り居るに、其

間海上凡三十町計と見ゆるに、小鳥ども海上半もや渡らんとする所に、おもひがけず、此方なる島陰より、隼二三羽矢を射るごとく翔來るや否、會釋もなく群りたる小鳥の中に石を投げたるごとく飛込みければ、此勢ひに數千の群鳥、四方へはつと散亂するに、或は蹴られしと見え海へ落るもあり。又渡り得ずして方々の島々へ移るもあり。やう〳〵渡り得るもの半に過ず。鷹は一羽をかい掴んで、靜かに向ふの濱松へ羽をのし引行。誠に類ひなき壯觀なりきといふ。折とはいひながら、かゝる珍らしき事、この日爰に來得ずんば見る事なし。おほふに兩軍伍を亂して責戰ふ中へ、一人當千の勇者、無二無三に切入、縱横に駈散せば、萬卒といへども立足もなく、右往左往に迯れば、今は敵無しやと、扇を遣ひて悠々と我陣に入たりなんど、はな〴〵しき軍書に記したるも、斯や有んといさまし。舟人云鳥さかしきといへども、鷹も亦その欺く事を知りて、はじめには出ず、ふたゝび心ゆるして、實に渡るを考へ居て、かくのごとく人の及ばざる智ありと語りぬ。九州の間所々に形狀も名もしらぬ、我朝にて一向に見馴ざる木多く、土人の云、是等は渡り鳥の其木の實を食て渡り來る。自然と生出て大樹と成しと云へり。實も木の實生じがたきは、一旦鵯（ヒヨドリ）にはましめて其糞中にあるを蒔ば、能生ずるといひしも宜なり。鷹の渡るは、必ず小鳥の後なり。其故は先へ餌とすべき小鳥を渡し置て、跡より來るも又かしこし。都て八九月の間に、北風烈しく吹事あり。これを鳥渡しとも鷹渡しともいふ。この風に乘じて來るとなん。

○大沼山浮島

奥州より出羽へ越て、彼實方朝臣の尋ね詫給ひしといふ、アコヤの松をみるに、今は千歳山といふ地に在て、出羽の山形の府より坤の方と思しくて、凡二里計を隔てたり。常盤の陰、千歳の後も、昔の景色を見せて、誠に目出度木にてなんありける。此日寶暦中五月朔日也。この城下の婦女、近所隣家へ往通ふに、布の藍模様あるものを必ず疊みてもちけり。怪しくおもひて、その故を問ふに、むかしは皆是を

被りて往來しけるが、いつの頃よりか、洒落に成て、只手に持疊みて提るばかりなり。是則被（カツギ）なり。されど下女なるものは持事なしと、人の家童子なるものゝみといふ。〔割註〕奥州の國詞に、童をワラシと云。爰にいへる事、又字よく叶へり。すべていにしへの詞は田舎にのこれり。實に昔繪に、女の物詣する體に、必ず市女笠に單の白衣の樣したるを着して、吾妻からげしたるなりなどおもひ合せぬ。かくて三日の朝こゝを立て、大沼山に至る。此大沼山といふは、羽州山形より七八里が程、奥深く入る山にして、其路嶮しく坂のみにて、所々崩れ落て甚だ危し。山深く人跡稀に、適木伐ものに逢て、たどり〳〵七里計と覺へ、その道路一字の人家もなかりし。漸に山王大行院に至る。是本山の驗者にて、俳諧の好人評德を鷹聰といへば、四五日押留せられて、旅情を忘れてたのしみぬ。そも〳〵此山上に扶桑第一の靈驗地あり。かゝる邊土遠境なれば、諸國の人多くは參詣せず。故に其奇瑞をしらず。緣起に曰、人皇四十代、天武天皇白鳳年中、役行者開基、倉稻魂神勸請の山なり。社後にみたらしの大沼有り。沼の形大の字に類せるを以て名とす。池中に樣々の小島有り。時として遊旋す。或は風に隨ひ、或は風に逆ふて動き廻る。見るものは感稱し、見ざる者は疑ふ。その神妙不可思議なる事、見るもの奇異のおもひをなさずといふ事なし。其島六十六島有り。すなはち我邦成就の相形にて、行基菩薩もおなじく祈願有しなり。池邊に老松二株有り、そのかみ中將實方朝臣此地に遊び、あこやの松を尋て、此島の浮遊ぶふしぎを見て和歌二首を詠ぜられし、一首は忘れたり。

　よつの海浪しづかなるしるしにやおのれと浮て廻る島かな

と詠給ふ所を、島見松とて一木あり。其時水神感應して沼水を卷騰たりとて、一株を浪上松とてあると物語らる。頓て島を見ん事を乞て、予一人彼大沼の土手に行て見渡せば、沼の深さいか程ともしらざれども、周匝六七町もやあらん、水面藍よりも靑く、水際には蘆葦抔生茂り、さも物凄き氣色也。又鷹聰の云へるは、沼の向の馬手の池上に、何か黑く樹の株の如く浮たるものあり。是を浮木と云傳へて、天

下泰平の祖なり。昔より沈んで見えざるときは、天下の變ある事を示すとなり。又沼の中へ突出たる處有り。此所を蘆原島と號して、此一所のみ動き浮ず。其餘六十餘の島皆國々の名ありて、其國の形を備ふと云へども、今定かならず。中に大なるを奥州島と云こそまがふべくもあらずといへり。かくて初めて行たるとき、池上には只七八尺計と三四尺計と見えし小島二ツ有りし。時五月上旬なれど、此邊大寒の土地なれば、藤、山吹、躑躅など咲亂れて、景色ある頃なりければ、目を慰めて、今や島の動き至るかと見詰てある中、浪騰の松ことに麗はしく面白かりしかば、輿に乗じて一句を吟ず。

松の名も折から高し藤の浪

などひとりごちて、「猶其時も、「かゝる景色か松の藤なみ」と再び案じ、既に日も西山に傾きけれども、夫ぞとおもふ事もなくて、鷹聰子の許に歸るに、御島も拜み給ふやと人々問ふに、予何も見ずして止けりと。鷹聰曰、日によりて浮出ざる事もまゝ有といふにぞ、いよ／＼疑しく、聞し事は空事にや。又世に云傳ふるほどの事にもあらじ。かうやうの事は、多く虚說あるなめり。しかれども見ずしては止むべからずと、翌日は朝の認めするより、晝飯の設を懷にして、終日居らんと覺悟して、彼島見松の陰に箕踞して待に、池の面を見れば、昨日ありし二ツの島見えず。コハ怪しや。さるこゝも動けばこそ見留置し島の無きをと、少は實もとおもふ計なり。扨其日は殊に天氣晴やかに、水面の氣色もなく、快く堤に匍匐、松の下陰涼みに睡る心地なるに、不圖此方の水際動く樣に覺へければ、能々心を付見るに、實に動くなり。扨はと目を留め詠居るに、先池の片への地、おのづから離れて、次第に池の中央に出るに、一島靜に池中へ浮み行さま怪きに、また向ふの際を離れて、此方へ浮來る。斯てこそ爰より出來るは、物有て負廻るごとし。既にして七島いづれもつゝじ花咲、芦萱茂れり。爰に於て疑心忽ち解けて、(マヽ)手の舞足の踏事を覺えず。中にも奥州島とかや云ふめる大島は、二三丈もあらん松生茂り、藤の花亂蔓と咲かゝる、松下には躑躅の花の色を交て游ぎ出る體、且恐れ且よろこび、いよ／＼脇目もふらず守り

居るに、其島向ふの涯へ着にもあらず、中途に居り。又は四方へ遊び廻る。其欲する所に隨ふ。奇異なる中に奇異なる事は、跡より出來る島、先にある島に游ぎ當る。尋常ならば倶に押行べきに、左は無くして先にある島自ら除て行べき島を通す也。誠に心ある物に似たり。且夜となく晝となく、何れの岸も斯く放れ歩行く故に、沼の形狀變りて一樣ならず。又水中を行く物は、必ずその跡に通りたる筋あるもの也。然るに曾て其事のなきも奇妙なり。心彷彿として感に絕ず。依て又一句を口ずさむ。

　出る島へ引分て吹つゝじかな

と漸く形狀を述て宿地に歸り、其樣を語りければ、鷹窓子も大に悅び申されけるは、此島の樣、芭蕉翁に見せざる事無念なり。漸く伊勢の涼菟、加賀の千代女の二人の句あれども、みな想像して迯り減したる句也。予は眼前の秀吟也。只にやみなんやと、頓て短冊したる板に書して、稻荷の社に奉納せられぬ。此地至て邊土なれば、風雅の人も至て見る事なきこそ無念なれと吳々も語られき。今ははや逗留せんも無益なれば暇を乞て立出ぬ。折から江戸の同者四五人湯殿山禪定の序に此に來り、此夜一宿して今朝立なり。宿主是を誘ひ、彼沼に行て暫く浮島を見んと待にさらに出ず。然れども予が昨日見たりし七島もなく、僅に二島のみ浮めぐりしかば、我はます／＼これを信ずといへども、彼同者は退屈して、此に隙取ては道の積り甚惡し。もはや行べしと云に、實もと各出立せんとするに、宿院の人長き棹を持來り、おの／＼現在見給はざれば生前の疑ひ止まじ。いで證據を見せんと、棹を取延て水涯を突出せば、則ち出離る。然るに棹を納れば、又もとの所に歸り着く。そこ爰みな同じ自然と出べき氣機あらざれば如レ斯也といへり。同者も實と思ふ體にて立別れぬ。世に神佛の奇驗は、其人の信不信による事なれど、此島計は、たとひ五日七日を滯留してなりとも、見ずんば有べからずとぞ思ふ。

　〇以呂葉

當代は既に文章盛にして、盛唐隆宋の上にも出べし。然るに邊土遠境の下賤の男女、今に文字を知る者

少し。故に其性偏固なり。されば蒼頡文字を制して鬼神泣といふは、文字の融通せる性善のものは、いよ〳〵徳行を添ふ。妖佞のものはます〳〵僞る事甚し。末の世善者は少く、邪人は多し。是を以て悲しむといふべし。予九州にありて聞に、男女思ひを通ずるや、小き石を袖に入れ、或は懐に投入て戀しといふ意を示し、戀情を意あるをば、菠薐草を紙に包みて示し、今宵密に來れといふ事は、忍草の葉を以て、誓約するに松葉を袖袂に縫置など笑ふに堪たり。去ながら男女の愛情は天然也。至誠なり。諸冉の二尊浮橋の上にして、白地に唱歌し給ふを思ひはかるべし。錦木を立し狹布の里は今南部領也。其府を離れし山隘の村民文字を知らぬ故に年々の暦日、農の爲に村長より暦を繪にして作事を知らしむ。月朔の十二支は、子は鼠、亥は猪を圖し、八專入梅二至三伏の其たとへたるは宛も謎の如し。其中一二をいはん。八十八夜は重箱に矢の立たるなり。種蒔は畚を畫き、田刈吉は鎌也。節分は鬼の泣圖なり。絶倒限り無し。且佛事祈禱には必ず般若心經を讀誦す「ママ」是又盲暦に類して一段おかしく、頤を解くに至るもの也。されども事爰に足る。その知るに至ては一なり。抑我國文字の事、往昔天武天皇十一年、境部連石積に命じ新字を造らしむと史書に見えたれど傳來せず。僅に榊等の字十餘字殘れりといふ。然ればいろはをもつて國字の權輿とす。是五十二代嵯峨天皇弘仁中空海師の著述なり。

夏雪云、簾中抄に、以呂波四十七文字は本歌の詞なり。自以遠迄十二字、護命僧正作レ之。自レ和末迄三十五字弘法大師作レ之。蓋本梵字十二摩多、三十五體、文而總四十七字、其讀如レ歌矣云々。

さるに儒學をなす人の、小兒入學の初に、僧の製せるいろはを習はんはいと拙し。殊にいろはといふものは四句の文にて、諸行無常等の文意ありとて、五音五十字を習はしむ。これ吉備の眞備公の作なればといふは一笑に絶たり。その五音といふもの本天竺の義なることを知らざるにや。野山名靈集に曰、凡三國の中音聲正しきは天竺にしかず。中華は文物の國といへども、聲音の學は西天に及ばずと、瑯瑘代醉にもいへるにや。其西天聲音の學源は、所謂悉曇の五十字音也。對州が儒士芳州が曰、悉曇の學は西

域に始りて漢土に傳はる。唐土より見れば、天竺といふは遙に西の邊土なるに、斯く甚深の聲音の學を始て遍く天下に滿らしむ。誠に不思議也。愚なる人は、此國にて初めたる樣に覺えたるも有り。いふに足らず。されどもこの五音五十字は、天地の開自然の道理より出て、人の敎へたるものにはあらず。只天竺より起りたるといふ事は、大日經、華嚴經等を見て知るべしといへり。然ればいろはを忌て五十字を習はしむるは擔板漢なるべし。それいろはは何故弘法大師の作れるといふ事、近き世までも沙汰なし。頓阿法師の高野日記を見しに、大師此山を伐り開かせ給ひて、堂建させ給ふ時に、木の道の匠に文字を知らねばしるし合すべきことはりなしとて、いろはの四十八字を敎へさせ給ひしより、末の世の人助けともなりぬと云々。又無相上人の和字大觀抄にも、此事を引用ひられたり。予九州に有し時、宿の小兒に初めて手習させんと手本を書て得させよといふ。則かのいろはを書てあたふ。その親のいふ樣、上方は手習の初には、かくいろはより學び候哉。去にても、此邊ははるかの片田舍なれば、時世の風俗の傳へがたきゆへにや。恥かしき事也と云。しからば何なる事を此邊にては書初るやと問へば、「難波津に咲やこの花の」和歌と、「淺香山影さへ見ゆる」といふ和歌二首を習はしむと聞て、實も源語の中、近くは芦苅の謠曲の中にも出たり。故ある事哉と感じ、頓て二首を書て與へけり。後に見れば若紫の巻に、未だ難波津をだにはか〲しう續け侍らずとあり。又古今集假名序にも、此二首は歌の父母の樣にてぞ手習ふ人の初にもしけるといふ。猶又榮雅抄には、むかしは手習の初にいろはを習ふといふ事なし。此二首を書て習ひけるにやと云々。

夏雪云、台記に、久安六年正月十一日、今日今麻呂參ニ御前一依レ勅書ニ以呂波一とあり。既にこの頃も童にいろはを書せしこと見えたり。

上古釋門の人は、文才精華ならざるはなし。故に都鄙共に物習ふ事は寺院による也。よつて今都に子供に手跡を敎る家を寺子屋といひ習はせり。田舍は夫さへなくて、今も寺院に往て手習ふ也。然るに上方

にて小兒の師家に行を寺入と云、鄙にては親兄の命に逆ひ、又は所にて不法の事などあるを、自分悔て詫んとおもふには、先寺院に入て賴む。寺僧取曖て其家に歸居せしむ。これを寺入と云。罪あれども一旦寺に入たる者は、押て刑する事をせず。則ち古へより六代御前の文覺の弟子となりて助命有し流例にや。

嘉栗云、六代御前より以前にはなきか知らず。公儀の掟にも寺入被二仰付一と云事有よし。然るに上方の寺入と呼は不祥なり。又寺子の師家より戻るを寺上り八ツ上りなどいふも不遇なり。行をば寺へ上ると云、還るを寺を下ると云ふべし。田舍は皆かくいふ也。中古迄は民間に文學すたる事稀にして、文書博士等の外、出家は貴賤をいはず文書を學びぬ。今や治世の化に誇て、俗民も經史を先讀ます。ありがたき時世なり。中には多く名聞外見の爲に、少しき文字を知り、博聞轉倒衍文の語句を綴り、或は杜撰の書を著述し、古人の名目を借用ひて、或は他の草稿を竊んで、我著とする輩もあなれば、鬼神の泣けんこと宜なるべし。

○阿育塔

拾芥抄に曰、日本五奇異は、竹生島、東大寺、金剛峯寺、金峯山、江州蒲生郡石塔云々。中にも此石塔の事は、諸經要集第三に云、阿育王耶舍比丘に問て云、我八萬四千の夫人を殺せし罪を贖ひ得べきや否、耶舍道人云、おの〳〵是が爲に一塔を修造し、塔下に佛舍利を安置せば、まさに其罪障をまぬかるべしと、依て臨終の日惣て八萬四千の塔呂を造り、並に八萬四千の塔婆を建と云々。大明一統志曰二阿育王山在二寧波府城東一。舊名鄮山。晋大康中并州人劉訶得二阿育王塔一因名焉。又在二阿育王寺一所レ造眞舍利塔。又有二宸奎閣一。貯二宋神御書一。蘇軾作レ記云々。法苑珠林云、倭國は大海中に有。會稽の海を距て一萬餘里、隋大業の始、彼國の官人會丞、爰に來りて學問す。內外博くしれり。唐貞觀五年に、本國の道俗七人と倭國に歸る。未だ去らざる時、京內の大德、每に彼國の佛法の事を談ず。依て彼人阿育王の

事を問。經の諸說に依て答ふ。佛涅槃に入て、一百年後に阿育王、世に出て佛の八石の舍利を取て、諸の鬼神をして一億の家に一佛塔をなし、八萬四千の塔を造り、閻浮洲に偏ねし。「彼國、〔割註〕日本をいふ。」佛法晩く至るゆへ、未だ不レ知。況や阿育王の塔有や否。會丞答て、吾國文字に說す。又承り傳へたる證據なし。然れども今も其靈跡驗すときんば歸するところあり。國人土地を開發するに、往々に古き塔露盤を掘得る事あり。佛の諸儀相しば〳〵神光をはなち種々の奇瑞あり。この嘉應を詳かにするに、先よりある事をしるなりと云々。續日本紀に曰、和銅六年大倭國宇陀群波坂鄉人銅鐸を長岡野に得たり。高三尺四寸、口の徑壹尺、其製常に異なり。音聲律呂に協ふと云々。又日本紀略云、弘仁十二年播磨國に得たるも。三代實錄に云、貞觀二年三河國渥美郡に得たる寶鐸も寸法同じ。但扶桑略記、天智天皇七年に、近江國滋賀に得たると云ふは、高さ五尺餘有と、いづれもみな阿育王の塔の寶鐸なりと云傳ふ。爰にいふ江州蒲生郡にあるところは高さ六尺餘り、廻り三尺餘有て、五輪にもあらず、只丸き長石に、上に笠石有。文字もなし。昔は巍々たる精舍なりけん。數萬の小石碑あり。或は砂留の石溝石垣敷石等に用ひけれど、猶餘りて所々に堆く積捨たり。一小寺有り。石塔寺と云。これ則ち阿育王八萬四千の塔の一つにして、每年七月大蜂群集して、此塔を行道すと申傳へたり。誠に古代のもの也。心あらん人は行て見るべし。江州水口驛より五里計り北方なり。但志ありて得行がたき人は、京東山鹿が谷萬無寺の門外に少し小高き所に右の模寫あり。新古の差別有のみなり。

国に云、筑前國宗像郡田島村に瀛津姫、嚴島姫、田心姫の三神在す。是神代卷に傳ふる所なり。宮社は嚴然として、社內に一經石碑有。竪四尺八寸、橫二尺五寸、厚サ九寸、靑紫の石にして、表に無量壽佛の尊像を彫刻し、裏に阿彌陀經幷に一切業障根本得淨土陀羅尼有り。今本朝に用る所の彌陀經に二十一字の脫文有り。前後を略す。左の如し。

一心不亂。〔割註〕是より除文。」專持名號以稱名。故諸罪消滅。即是多善根福德因緣。〔割註〕是まで二

十一字。」其人臨命等也。
是治承の頃、小松内府重盛公あつく彌陀の誓願を尊信し、宋朝に此經の眞蹟を乞給ふ故、建久九年當地に來着すといへども、平氏滅亡の後なれば、誰あつて請るものなし。當社の大宮司求乞て爰に納置れし也。京東山百萬遍の境内に是を寫し彫て建置る。筆者は安井の觀清寺御門跡也。經説に志あらん人は、必行て拜すべし。今堂前にあり。

○溫　泉

世に溫泉の説多くて未だ理を盡さず。俗には硫黄の氣伏して溫泉をなすといふは惣論なり。それ地下に溫泉あるがゆへに、薫蒸して硫黄有とはいふべし。地下に水脉有。火脉有其二脉一所に會して、近く融通するあれば、必ず水泉溫沸す。されば水脉と云ものに引れて、山上に出る湖有り。我邦にても奥の鹽の井、甲州の鹽の山など是なり。又火脉の渤興せる富士、淺間(信濃)、阿蘇(肥後)、溫泉山(肥前)、宇曾利山(南部)、霧島山(日向)等なり。平地は室八島(下野)、越後地火(蒲原郡)、或は海中にも硫黄島(薩州)、八丈島(伊豆)あり。必火脉有れば溫泉と成る。櫻島(薩州)、又松前の邊なる島にも有。故に海中といへども眞水有、是陰中の陽、陽中の陰也。みな同理也。されば六十餘州の内溫泉無き國は少し。就中伊豆は小國にて、駿相にはさまり海にさし出たる地なるに、溫泉有る事二十餘ケ所、殊更加茂郡葛見庄熱海は溫泉あるの地名也。天平勝寶の年間に出沸すと云。爰に諸國の溫泉と大に異なる子細は、毎日晝夜卯巳未酉亥丑の時に涌て、其餘の子寅辰午申戌の刻には只烟のみ立也。此偶數の刻に涌て、奇數の刻に不レ涌といふ事(　)至て不審なり。中華にも似たる事有といへども、又其理を云ず。須行記曰、碧玉泉有二曹溪一。有レ泉甚清。一日三潮。以二辰午酉三時一。水必漲滿。三時餘半涸云々。熱海は潮の大熱湯也。其涌出の所には四方に石垣をなし、常に人の入る事を禁ず。其涌とき眞中に疊み上たる盤石の底より鳴動し、猛煙天をかすめ、熱湯迸り出、其凄き事いふ計なし。是を四方へ筧をもつて取て湯船に湛へ

置なり。浴家二十七軒、三軒の本陣あり。又一月の中二度長沸する事有て、終日涌出。然る時は翌日不㆓涌出㆒也。又濱邊に瀧湯とて、夥しく山より流れ落、下に大なる湯船三ツに湛ふ。神社有、走湯權現と申。鎌倉時代に伊豆箱根兩所權現と云一神なり。左大臣實朝公、

走り湯の神とは宜もいひけらし早き驗のあれば也けり

と詠給ふ也。都て溫泉の地、潮なるは無れど、硫黃なるは鐵器早く銹腐る故に、寺院の鳧鐘（ツリガネ）先腐壞す。其甚しきは上州草津也。浴湯の人至れば、先に刀劍を宿に預け、箱の內に入能緘して、還るの日出し與ふ。しかせざれば逗留中に銹て用立ざる程也。予九州の歸路に、豐後府內に至る。九月五日也。此日此所の市、〔割註〕濱の市といふ。」滿會の日にて近鄕の人夥しく群集す。芝居角力見せ物等、或は料理茶屋なんど一面に軒を並べて建つらぬ。中に樗蒲一の賭には目を驚かせり。數十間の小屋を建、木戶口に看板あり。何國何の何某と大板に書て懸たり。市の間千金の勝負有とぞ。正面に舞臺の樣にしつらへ、傍に數人の組下ありて、其金銀錢を交易するに切手を出す。其切手にて諸店の物を求るに辭せず。もろもろの見物事も、此切手にて容易也。誠に目ざましく花やかなる氣色也。三河國池鯉鮒の市是に繼べし。都て西國にて大市と稱するは、宮島市、防州砥石市と、此濱の市也といへり。翌日小舟を借て別府へ行けり。笠縫島は磯近くして、棚無し小舟漕行は古歌の姿を得たり。弓手は四極山海岸立覆ふ。浦々の風景又珍らし。程無く磯に着て、小き坂路を上り下り、とある濱に下らんとする山の尾より見おろせば、磯濱に人の首七ツ八ツ並び見へたり。コハ怪しき事也と、峰を廻り〳〵て漸く近く見るに、いよ〳〵首なり。僧の首もあり、女の首もありて、物いひ笑ふ樣に見へ、あまりにいぶかしければ、道を走り行、頓て其洲崎に至り見れば、おの〳〵濱の砂を掘穿て支體を埋みたる也。此所に溫泉あれども、潮と交りて地上に出ず。故に身を埋て浸すに、その溫暖甚快し。されど潮さしぬれば海となるゆへ、汐を考へてかくの如くす。至て加減よき程也。頓て出る時は、側に池のごときの湯あり。これにて砂土を洗ひ、衣

服を着し宿に歸る也。別府町にも家毎に舟に湯を湛へ置り。誠に興さむる業ながら珍らしく可レ笑。

○地　獄

越中立山の奥宇曾利山、信州淺間岳、豆州箱根、肥前阿蘇山、奥州外ヶ濱等には天道有、地獄あれども、禪定の行者ならずしては、目のあたり見る事なし。故に所説にも虚妄多し。又見て語るとも人怪しみて信ぜず。又書に傳ふる所もなし。但し今昔物語に云、越中國立山といふ處に、昔より地獄ありと云傳へたり。其地の樣は、原のはるかに廣き野山也。その谷に百千の出湯有り。深き穴の內より涌出す。巖を以て穴を覆るに湯委く沸て、大なる巖石搖動し、熱氣滿々て人近付見るに極て恐ろし。又その原の奥に大なる火の柱あり。常に燃燒る。又その處に大なる峯あり。帝釋嶽と名付たり。是諸天冥官集會し給ふ所也といふ。その地獄の原の谷に大なる瀧有り。高さ十餘丈、白布を張るに似たり。勝妙が瀧と名付く。然るに昔より傳へて、日本國の人罪を得つれば、此立山の地獄に墮といへり。又地獄谷に地藏堂あり。八大地獄各十六の別所ともに一百三十六地獄、血の池と云は、水色赤くして血のごとく所々に猛火燃起る。北方に劒山あり。岩石峙て鋒刄のごとしと云。此等の外只口述のみなれば有無の論區々なり。猶くわしくいはんも、常に人の至らざる地なれば、必ず疑ひ怪しむなれば記さず。適西州に一大地獄有り。此地は行者ならざる者も容易に至る所なれば、形勢を筆して其見ぬ人に便りとす。予肥前國に遊歷せし頃、肥前國溫泉山は島原の領地也。海中に差出て三方は海也。後に妙見山普賢山とて雙立り。地續きより至れば、その兩山の間の嶮を上下し行、半途に島原侯の番所あり。切手を取て行。春夏は浴湯の人もまゝありて賑か也。此地主彥火火出見尊を祭り奉り。往古は僧坊甍を並べて巍々たる大伽藍なりしを、切支丹耶蘇宗門に歸依して一旦破却せられ、今纔に一乘院と云一寺のみ殘りぬ。寺內に大石佛數體あり。堂塔の柱石のみ曠々として哀れ寂しき有樣也。寺邊に少し平地なる所一村有て、浴室の人家有。予十月半に至りしかば、人跡稀に雪風烈しく殊に寂寞たり。一山皆赤土にて、瓔珞つゝじと云樹木

滿山せり。溫泉の湯氣にや。歸り花多く咲出たり。其平地に溫泉あり。人家の軒溝にも、道路の石間にも熱湯迸り出、湯氣立昇り、山間を覆ふ計り靄々たり。晝は湯煙と見へしも、夜は皆火のごとく燃上り、所々に石鳴響て只物凄き體也。流れ出る溫泉は、惡臭く鼻を突●土石皆赤く錆て、更に自餘の氣色なし。翌日地獄廻りすべしとて案內者を連て行しに、先三途川と名付る細き流あり。その川向に奪衣婆あり、又側に牛頭馬頭石有り。何れも地上を出る事四五尺なり。近寄見れば左も無き尋常の岩なれ共、少し隔て見れば、姥石は川端に臨んで少し俯伏たる樣、實にも地獄の繪圖に見るが如し。髮打かぶりすさまじき形と見ゆ。牛鬼の角ある、馬鬼蹲りたるさま罪人を待氣しきに彷彿たり。六道の辻には地獄石ありて、傍に小石多く積たり。宰の河原とやいふ。胎內潜り岩、針の穴通しなどいふあり。淨破梨の鏡石は鮮に人影をうつし、業の秤石は罪の輕重をしるべし。劒の峯は鉾双を植たる如く也。扨藍屋の地獄は池水藍よりも青く、酒屋の地獄は美酒の色あり。血の池は朱の鏡の如し。中にも修羅道の怖敷樣はいふ計りなし。猛煙立覆ひて、燒湯岩間より飛出るに、下より百々と鳴響きて、岩と岩と寄り擊て相戰ふは、誠に敵するに似たり。其外種々の地獄世に云傳ふ所のごとし。紅蓮焦熱、無間叫喚等、經に說所皆備ふ。爰に一所珍らしき可レ笑地獄あり。名目もまた滑稽なり。號て隱し餅の地獄といふ。立寄り見れば、水なくて泥計りなる池の方十四五間計也。暫くイみ見る內、底よりぶつ〳〵と湯涌出て泡となる。其丸さに大小有り。或は盆の如く、又茶碗の程に、其數をしらず。池一面に並べ置たるに似たり。かく有てはた〳〵と人音すれば、一時に消失ぬ。又聲をなさず息を詰て見れば、頓て初のごとく泡涌出る也。幾度も同じ物音なければいつまでも消ずしてある也。是には恐怖の心も打忘れ、聰を解て時を移しぬ。此奧の一の谷大なる原のごとく、人力をもつて平地とせるなり。予怪しみ問ふに、案內者の云、此所は八萬地獄といふ所にて、殊に大地獄なりしに、近き頃人有て斯く平地となし、打潰して明礬を作るなりと聞て、驚きながらコハ悅ばしき事かな。かくのごとく地獄を破壞する事、偏に佛法の繁昌して善者

多く、墮獄の者多く、今は地獄も無用なりやと笑ふ。この一件を以て、立山、南部宇曾利山、豐後湯岳等皆同事なるを知るべし。

因云。異端辨正曰。佛之國在二極西之境一。其所レ居謂二之天堂一。其犯レ法者令レ掘レ地爲レ居。謂二之地獄一。如レ牢也。又其法有二剉燒舂磨之刑一。閻羅則後世之刑官。金剛則後世之術士也。所謂夜叉羅刹鬼國等、皆西方之土名也云々。

云傳ふ、八大地獄一百三十六地獄の數も據を尋れば、蠡海集曰、釋氏十八地獄之說膾二炙人口一矣。其義未レ詳。然に釋氏有二六根六入三毒之分緣一。六根眼耳鼻舌身意。因六入色聲香味觸法。皆有二三毒貪嗔痴之惡業一。故二六共成二十八之數一也と云々。故有かな。正法念經曰。閻羅獄卒非二實有情一。以二衆生惡業刀一故見レ之と、此說前に合せ見るべし。又百三十六と云數量を考るに、右に云八大地獄とは、等活墨繩衆合叫喚大叫喚焦熱大焦熱無間也。此一獄々々に十六の別所ありとなり。夫人の惡業は、念經に說所のごとく、その始至て纔かなる妄障より、かく恐ろしき罪業となる。其本貪瞋痴の三より六塵の樂欲となる。則爰に三六十八の地獄を生ず。猶六入の惡業障にすれば、百八の煩惱となる。是日々所作の罪なり。又百三十六の地獄もこゝに出るなり。十六地獄に八大地獄を加へ增て一百三十六と成。是みな據を見れば、一念の機氣に出、恐るべし〳〵。

○發　端（一本皇居祥瑞に作る）

抑京畿の山川すべて地景の勝れたる、靈妙なる事は更にも云はじと麗しく。往昔朝鮮國王の使浪花より淀川を泝る事數里にして、遙に東北をながめて、皇居の方位を指さしけるにぞ、傍に候せし人能其知れる故を問へば、雲氣を見て察せりと答へしとぞ。嗚呼異朝の人すら如レ此よく識るに、我國の人かへつて知らず。夫帝座の上には、必ず天然の瑞雲常に在り。喩へば白毛の拂子をふり立たる如く、又ゆつきたる孛を亂せる如くうすき白雲有り。近く地續ける伏見鳥羽あたりとても、さる雲はあれ共、いかにも厚

し。況やこの雲氣は餘國にあらずと云。又歌に、

都より雲の八重たつおく山の横川の水はすみよかるらん

是叡山は京に並べる山なれども、雲の厚きをいふとぞ云。近頃山雲の氣を見る人有りて云、餘國の山岳には德の有無あり。都の諸山は皆有德にして、無德の小山只二ツ有のみといへり。何れか知らず。誠に妄言ならじ。さるは國々より都へ登らん人は心を用ゆべきものにや。先其都たる事を察し知り、次に風土の清麗たるをも考へ合すべし。只神社佛閣の結構壯觀をのみ云ふべからず。康節先生擊壤錄に云、居ㇾ洛有二五喜一。一喜ㇾ多二善人一。二喜ㇾ多二好事一。三喜ㇾ多二美物一。四喜ㇾ多二佳景一。五喜ㇾ多二大體一とぞ。又貝原氏篤信、我邦京洛の美事をいふ事十數あり。一禁闕在。二水土美。三風景和。四山川佳。五風俗好。六多二美觀一。七多二美物一。八多二文籍一。九多二良工一。十多二文學者一。此事、誠に然り。殊更今又文華の世として、人故實を尊ぶより、事を正し雅を賞とす。專ら太平の潤化なるべし。靜齋記事に、貞恕曰、夫子曰、古の愚や直し、今の愚や治るのみと、昔人は僞りかざる事なく、實體のまゝに擧動せり。予元祿の末十二歲の頃、室町三條南に櫻木勘十郞とて、古器古書畫などの目利者也。世上に島の勘十郞と異名せり。是は衣服より足袋下帶に至る迄も、いろ〳〵の島を着用し、扇子脇差柄鍔草履も島にあらずといふ事なし。又朝夕の魚物野菜も、平皿へ島の模樣に盛らせり。是全く異を好むにあらず。天性好なれば也。予も折々遊びに行たりしに、先家居も表二階連子格子は、さま〳〵の唐木にて組、庇の大垂木などは、細き紫竹寒竹にて、是も島にくみ立て、店先さかひ格子有。是に太き竪貫木を青貝の唐草模樣にしたり。扨中庭に泉水有り。金魚銀魚を數多養ふ。是より居間の二階へ階子をかけ、此階子唐やう作り、ぎぼうし高欄付なり。北面は隣家の壁也。それを白壁にぬり、一面に墨繪山水を畫く。天井は紙にてはり、同じく古畫を以て交張けり。もつとも古風ていの物數寄なりし。今世上大家に釘隱しとて、いろいろ金物を彫て釘の頭を隱す。佛光寺通り烏丸西に釘隱シ町と云あり。又洛下に三富家あり。角倉十四屋

倉、醍醐倉といふ。此内十四屋倉此町也。其家結構なる事美麗を盡して、長押の鐵釘の見ゆるを嫌ひ、鳥獸草木の形を造りて、其上に蒙らしむ。名付て釘隱しと云。此元祿の頃迄は、民家是をすべて用ゆる家希なりしかば、世人來りて見るもの多し。人々をのづから町の名とす。

○封疆

邦畿といふ事、我國史に見へしは、孝德天皇二年春正月詔に曰、凡畿内、東は名墾横川(伊賀より)、南は紀伊兄山より、西は赤石櫛淵(播磨より)、北は近江狹々浪合坂山より中を京畿とす。洛中外土堤は、豐臣秀吉公伏見城より參内のをり〳〵、京町の民煙物凄じく、嘉吉應仁以來の兵亂に、市の廢せる體を憐み、前田德善院に命じ、四方の洛外中の堺に藪堤を築しむ。貧民の扶助にとて小き籠に一ぱいの土砂を持運ぶを、十錢づゝの價に買取て築かせ給ふ。唐の錢塘に類して趣意は異なり。されば土手といふ事は、皇居の御構へならでは、土手とは云はざる也。元祿の頃は、堀川本國寺に小きを築んとて、書上に土手と有しを、足溜りと書直されけり。又諸國には土居とも人溜りとも壠ともいふ也。

○山姥

越後より信州善光寺へ參詣するに、上道下道あげろ越とて、三筋の大難所ありて、多くの谷峯を越ゆる也。或は葛を以て橋となせる川など有て、なか〳〵容易に至り難き道なれば、本道を十度參らんよりは、此道を步行にて、一度參詣するを功德勝れたりとす。則あけろと云。糸魚川より五里上の村中に一つの林あり。昔山姥の住家なりとて、古松は兩枝相さゝへ鳥居の形に似たり。此邊にて山姥の謠を吟ずる事を堅く禁止すといふ。〔割註〕案ずるに、上道下道あけろの三道とは不審。上道則上路ならんか。尋ぬべし。此謠曲も善光寺へ參る道すがら山姥に逢しといへりとぞ。」

○十津川

和州吉野郡は伊勢紀伊の二州に挾まり、その郡の廣き事、大和の國三分二に過たり。其間大峯釋迦嵩の

山々、重疊と並びそばだち、谷深く岑そびへて、山懐に十津川有。數十の川の津なればとて其名をなせり。堀川百首に、國信卿の歌とて、

吉野山十津の川上ゆきふかみけぶりや民の家居なるらん

建武の頃芋が瀬庄司を政所とし、玉置、小原、松川、中津川、河瀬川、湯原、野等を八庄司といふ。

みよしのゝ山のあなたの十津川の泉のはらもあはれうき世や

此地上古より貢免許の地にして、たま〳〵本山當山の法務の入峯有時、郷導を勤むとなり。されば建武のころおひ、大塔宮護良親王の八庄司を賴み、暫く隱れ給ふも、本山の法務にて渡らせ給ふ故也。誠に世外の境界也。將軍家御上洛まし〳〵ける時は、土產の獸皮を獻上し、二條の御城を警固すとなり。世に是を千本鎗といへり。

○鵜　飼

美濃國長樂川にて鵜飼をなせり。餘國にも所々鵜飼はあれども、舟壹艘にたま〳〵二三羽に過ず。幻阿法師美濃路記(藤夢)、長樂川の水上より十二艘の鵜舟、川面狹しとさし下す。一艘の船ごとに、舳先に篝火をたきたり。その影、瑢にうつり水に輝く。鵜匠人立て、頭は布にて包み、腰には蓑をまとひ、左の手に十二筋の鵜繩をもち、右の手にて鵜の鳥のあなたかなたへ行に隨ひ、其繩を亂さで持扱ふやう、或は水底に入るには、その繩を長くし、又魚を取てうかめば、其繩を短くし、頓て舟に引上て、嘴に啞へし魚を吐せて、又鵜を水に放つ。其隙には篝の籠を打ふるひ、火屑は水の上に散て、花火といふものゝ水に迴るが如し。其火影によりて、十二羽の鵜どもの、我おとらじとむらさわぐさま又いさまし。舟の後へに棹さすもの二人づゝありて、聲を立て呼ぶ事は、魚をおどろかす也。かくて見る間もあらぬに、舟は矢を射るごとく、遙に川下へ下る。老人云、鵜飼と申事の、我國の昔より鵜飼部といふ姓ありと、或唐土の書にも、此業に我國の工みなる事を記したれば、故ある事なあり。又古き和歌ども數知ら

ずといふ。殊に今都の西川東川に鵜飼ありて、日毎の供御に備へ奉りしとあなるに、いつの頃よりか、其事すたれて、今の世には此川のあたりならでは、かゝる事をなせる事を聞ず。

○都の花

庭訓往來にいはく、醍醐雲林院の花、嵯峨吉野山櫻と云々。此文勢名だゝる所の花を擧して思へるは非也。或說に、雲林院廢して後、本尊什物等醍醐に移さるゆへに此文有り。又嵯峨の嵐山へ吉野の櫻を移し植させ給ふ事有。依てかくいへり。南北相對せる賞にはあらず。嵯峨の吉野と、野の字をそへて讀ならひ也といふ。續古今集に嵐山に吉野の櫻をうつし植させ給ひて花の咲しかば、

春毎におもひやられしみよし野の花はけふこそ宿に咲けり

因に云、西行櫻の謠曲に、花の名所をいへる中に、近衞殿の糸櫻とあり。今上立賣南新町西に櫻御所有。その御別業なり。一書に、信尋公を糸櫻殿と稱せしかば、此殿下を中にやと、毘沙門堂の花は、應仁記に、此堂は光明峯寺攝政の御建立にて、百櫻を植られしと、又明月記貞永二年二月廿一日毘沙門堂の花半開と云々。今も上京塔の壇に毘沙門堂の名殘とて、毘沙門町、櫻木町の名有。花頂山は今の知恩院也。應仁記に云、花頂山は唐土の天台山を移して、嶺にも尾にも、雲の端咲埋れ、夕日影蔓に花の照そふと云々。花山は澁谷越の東にあり。遍照僧正の住し所にて、花山の僧正と云へり。其塚も殘れり。世々の和歌數ふべからず。

咲と聞て上りやすくぞおもひやる手向の法の花の山寺

一條堀川に太閤やしきといふは、近衞殿の里亭なり。ある春御庭の櫻盛なりしに、行脚の僧築地のこなたにしばらく立休らひ、花を詠めて懷より紙取出し、和歌一首を書て枝にむすび付けり。

此花のもとにもまたや生れなんいとひ果たる浮世なれども

太閤感じおぼしめし尋させられしに、いかなる人とや知れず。この事院中へ聞へて、法皇の仰におもひ

入たる歌也。たゞしこの花のといへる五文字、梅の花などにこそ、咲花のとかへもせよかしと勅有しと也。

〇淀水車

山城淀の城の外西北の方大川の中に水車二つ有。その車の大さ差渡し八間有。廻り二十四五間なるべし。釣瓶一ツに水一斗六升入るよし、此川水を城の方へ汲入るゝ爲なり。二ツとも泉水の用にて、城用の益にもあらず。年々修補の費若干なりといへ共、昔より聞へたる名物なれば、今にそのまゝにかけおかるゝといふ。夫木集に、

ながめやる淀の河瀬の水車とことはにのみ君はかけゝる

此邊の鯉魚名産にして、江湖の鮒魚に對せり。

因に云、此に車下の鯉とて、この河の名産とす。庖丁家に賞美する處なり。一年城主は諸侯を招請有て、山海の珍味數を盡し饗應有るに、鯉の作り身出けるに、何某の守殿。〔割註〕柳澤出羽守殿なりといへり。〔これは聞ゆる車下の鯉にや。其國の名産常ならず、遠路の御もてなしよと、殊に賞翫有ければ、相客の諸侯問て、そのしるしの侍るやといふに、さればとよ、尋常の鯉は、煎酒に浸し候得ば其汁濁り候。淀の鯉はかく幾たび浸し候ても、汁清めりと申されしとぞ。

〇七里の渡

伊勢物語に、伊勢や尾張のあはひの海面を行に、波のいと白く立を見て、

いとゞしく過行かたの戀しきにうらやましくもかへる浪かな

此歌後撰集に入れり。是今いふ七里の渡なり。伊勢の桑名より尾張の宮に渡る。往古は間遠の渡りといふ。

有明の月に間遠のわたりしてさとにいそがぬ夜半の舟人

爰にいふ間遠の渡りといふ事、天武天皇紀元年六月丙戌。是日天皇宿ニ于桑名郡家一。即停以不レ進。（中略）。丁亥。高市皇子遣ニ使於桑名郡家一以奏言。遠居御所行レ政不レ便。宜レ御ニ近所一。即日。天皇留ニ皇后一而入ニ不破一と云々。よつて天皇、此渡して皇后を思ひ慕ひ給ひしより名づくるとぞ。

○急　流（再考）

江州琵琶湖の下流は、瀬田より次第に細く、両山相迫りて關津より下は筏も下らず。又宇治より上二十町よりして柴舟も上らず。此間五十町計りの急流、川幅十間に過ず。その迅き事矢のごとし。見るに目くるめき立留りがたし。宇治平等院より行く岨道傳ひあれど、道崩れ石墮て本道の如くにあらず。雨後に行ん人は心を付べし。岸危ければ也。されば一見の志あらん人は、石山より川に付て下り見るべし。其急流の奇跡怪石を見て、又關津より瀬田に戻るべし。猿丸太夫の舊跡有て、宇治僧喜撰の常に訪ひし處なり。その居跡鉅岩突出で、高さ二三十丈計り、青嵐繞り圍ひて、前は碧流瀧の如し。是所謂海老尾と云地也。夫より鹿飛に行。（曾束村）その巖塊奇として天工無類なり。此所わづかに五丈ばかり、水岩に當りて飛泉糸を亂すが如し。又大岩鐫がごとく凹にして、急流落入て沸がごとし。白浪渦卷。是を米炊といふ。後は櫻谷の宮、獨木橋を渡り、大石村に行、古怪の奇石敷に似たり。巧工の妙趣人力の及ぶ所にあらず。大石村の名妄言ならず。〔割註〕このところ義士内藏介良雄が舊跡なり。」關津田上川荒神山景色殊に絶倫也。黑津、八島、供御の瀬に出で瀬田に還る。〔割註〕上古氷魚を網代して取て禁裏へ獻ぜしゆへ、供御の名有り。木曾合戰に蒲冠者大手の大將として、此所をわたられしとなり。」

嘉栗云、先年旱魃の時、宇治川水涸て怪岩奇石の常に見ざる所の物顯れたり。そのあらまし。

龜石　梅島淵　淀見淵
行燈岩　鍋居淵　米炊
重岩　會石　紅葉淵

不　動　岩　　　　千　束　岩　　　　泉水　出岩

あせ岩等也。

右に云不動岩より岩を傳ひ川中に下る。先に岩穴あらはる。二三間もあらん。向ふにて二つに分る。屈て入ほどなり。此岩常に水底にある也。次第に川中の細道を上り行て、曾束村の渡りして炭山に出て、歸りし道は斯のごとく行事は成難し。至て渇水なるゆへなり。

笈埃隨筆 巻之八

〇隱岐

隱岐は北海中の一國にして、島前、島後、東西にわかれ、其間三里の渡り口、潮勢迅速にして大河の逆巻がごとし。燒火權現は島前に鎭座也。高峯に石の鳥居有。九折を登りて絶頂に至るに、高サ八十尋の巨巖有。半腹に窟ありて、斜に頭上に徹す。神垂跡の所とて、岩屋に宮居を棧造りにす。尤壯麗也。此宮と坊との二ケ所、山鵲二番有り。來宮あれば啼告ること、古今おなじ。後鳥羽上皇此地に遷座の時、御船波風あらく途に迷ふ。

我こそは新島もりよ隱岐の海のあらき浪風こゝろして吹け

と詠じ給ふ。忽ち雲間に火ありて浪に映ず。則その光にて御船を寄けり。

灘ならば藻鹽やくやとおもふべしなにを燒藻のけぶり成るらん

忽ち海岸に翁ありていふは、船中の勅吟に藻を燒くと知しめすは、などなにをやくと訝り給はん、火となし給はゞ可ならんかし。帝の曰、朕いまだ齒牙を出さずば、いかに知や。そも何人ぞ。翁云、船を守るもの也と化し去りぬ。よつて燒火山雲上寺と號せり。此地より乾方二日二夜にして松島有。又一日走れば磯竹島に至る。神代卷にいはゆる五十猛命の知し召ところといふは是也。竹魚海鹿鮑多し。高麗を見ること、雲州より隱岐を見るがごとしと、輶軒小錄にいふ。磯竹島周匝十里ばかり、巨竹鮑多し。又一種奇異の猫住り。當國の海士郡勝田山勝田寺に、上皇の陵御社も有。

かぎりあれば萱が軒端の月もみつしらぬは人の行末の空

此御製、初には命あればと遊ばされしを、家隆卿傳へ聞て、遠島せさせ給ひぬれば、御詠吟も昔に似ず

と申されしを、また帝聞し召て、かくのごとく改吟遊ばされしといふ。

因に云、此國の一宮の社人に隱岐の國造といひし人、任官の事によつて在京しければ、予も親しく度々出會しけるに、その社の古器に、驛路の鈴といふもの有て携へ來て見せしむ。その音聲の淸朗なる事、大形の金石の音響に比ぶべきものなし。驛路鈴聲夜過レ山の句おもひやられし。又因州の大屋氏、川村氏の土豪百年前より公儀の符契を給はり、每年に彼島に渡り、物產を取りて業とせり。然るにある年渡りし時、朝鮮人數多渡り居て入事能はず。是より永く往來は絕たり。隋書に、朝鮮日本の中海にして紬羅島に至るとあるは、こゝをさすに似たり。〔割註〕節分の夜厄拂のいふこと、前篇に見へたり。」今上方邊の商買職業も知らず、空手無賴の者を、ちくら者といふことこれによる歟。隱岐を去ること乾方一里ばかりに一小島あり。白石のみ。海水より上僅七八尺ばかりの平坦也。汀に一井ほどの湶水有。浪高ければ潮うち入る也。然るに此水淸泉也。又二町計り上に一井有り。これも眞水なり。雌雄の池といふ。小祠あり龍神を祭る。人常に行事なし。適年旱りする時、神酒供物等を持渡りて零す。太皷をうち立て雨を乞ふに、四方より數千の龜出來り岸に集る。頓て神酒を龜に飮しめ、供物を海に入れて歸るに、中途にして必ず雨降るといふ。〔割註〕小野篁豐田村に住りと云事は、前篇に出せり。」

〇飛鳥川

此川今の世にさす所は、和州逝來岡寺より橘寺に行にある川なり。この川を讀める歌は、世の移り變る事のたちまちにして、物のはかなき事にたとへたり。然るに今その川淵瀨定まらずなどいふべき川ならずして、瀨の小流なれば所以ある事歟。

世の中は何かつねなき飛鳥川きのふの淵はけふの瀨となる

按ずるに、國史履仲紀、天皇大坂山に幸有。隼人曾婆訶里を召出し大臣となし、明日又賞し、入て宴樂

を給ふときに、忽ち席下より隱し置給ふ御劍を取出され、隼人が頭をきらせ給ふ。その地を近ツあすかといふ。又詔に、けふは爰に留り祓をなし、明日參り出て、神宮を拜すべしと、故に其地を遠ツあすかといふとあり。かゝる事あとより轉變の事に傚へ詠るなるべし。また飛鳥の字をあすかと讀事、荀子に本づき、此二字を塡たるなりといふ。若飛鳥然傾倒反覆無ㇾ日にて、明日歟といふ語也。萬葉集飛鳥の明日香とあり、見るべし。

○奇石

伊勢多氣里は、大和より伊勢へ越る所也。伊勢國司とて、建武の頃名だゝる北畠の居城有。北の山麓に眞善院とて小寺に墳墓もあり。土人は今に國司といふ。宣長紀行云、名張は阿保より三里、〔割註〕名張川、横川、簗瀨川。」かたへの山にも川にも、いと珍らか成る巖ども多かり。山の岨より川中まで連り出たる岩がねの、いと大きなる上を傳ひ行所、右の山より足下に蹴おとしなどして、えもいはず面白き所也。又いと高く見上る岩涯のひたひに、物より離れて、道の上へ壹丈ばかり差出たる岩有。その下ゆくほどは、頭の上にも落かゝりぬべくていと危し。少し行過てつく〴〵と顧れば、いと怪き見物になん有ける。さるはこのわたりの人、獅子舞岩とぞいひける。少し行過て〴〵とする處、路に石地藏有。伊賀と伊勢大和の堺なり。大野寺といふ寺のほとりに、又怪しき岩あり。道より二三町左に見へたり。行て見るに、實殊更に作りて立たらん樣なる巖の上に、彌勒菩薩の御像彫つけたり。御長五丈餘り、巖の上の方は猶餘りて高く立り。後は山にて谷川の岸を隔て見るなり。

○小芳野

鷲尾山は浪花の金城玉造口より三里東の山際なり。則ち生駒山にして、其山の西の方也。麓より十八町、道よく谷川にそふて景有地なり。その十八町の間、左右の道もせに花數百株、谷に尾に咲亂れ、日に映じ、目に光明く、上り得て一堂に觀世音を本尊とす。眺望すれば、西は明石の門より、淡路經島の

沖に往かふ千船百船手に取ごとく、南は河内、和泉の廣野渺々と紀の路に連り、北は箕田、多田、勝の尾の山々連綿として、眼下は浪花の數萬家碁石のごとく、數百の橋は算木に似たり。川口の出入舟、又掌の上に有。一瞬に六ヶ國を見るの壯觀也。近き年蒿溪伴氏、幻阿法師と倶に遊んで、此にこの花を見て、唐土の山の廬山によく似たるを小廬山といふ。されば小よし野と賞しなんといへり。

○養父明神

但馬國妙見山は、麓の觀音寺村より坂路百町計り、僧坊十八宇、六月十八日を縁日として、隣國よりも參詣夥し。山は四方より道路有り。山内古木の杉數千株、いづれも周圍一圍より七八圍に至る。竹林のごとく、誠にたぐひ無き茂山なり。坊の來客には、庭前の茗荷をもて饗膳とす。殊の外多く生ず。この山の後の麓に養父明神在す。狼を使令とし、宮前に大石をもて、狼の雌雄彫造し、鐵鎖をもつて繫で左右に有り。諸社の高麗犬の如し。隣國の村々にて、猪鹿のために田畑を荒さるゝ事あれば、この明神へ參り立願して、狼をかり用ひんといへば、社人彼の繫たる鎖を解て其願にまかす。然して歸れば、猪鹿の荒るゝ事なし。かくして後又御供神酒を奉りて禮參す。誠に珍敷事也。

因に云、近き年京烏丸二條邊のもの、叡山へ登りて歸路に、狗の子一疋出來り、此人に付て歩む程に、連の者コイ／＼と呼せ、破籠飯など與へければ、悦ぶさまにて麓まで著來れり。今さら追ども去らざれば、是非なく我家まで連來りて飼置けり。此小狗外へも出ず庭にあり。折ふしは外へ出るに、近所の犬吼立けれども、さして恐るゝ體もなく、四五日を過て門を通る人の見ていふ樣、爰の亭主は物好み成る人也と噂して行程に、呼戻してその故を問ふに、そのものいふに、爰に飼置れしは狼の子也と云にぞ。主大きにおどろき恐れて、頓て人を賴み、もとの山へ捨させけるとぞ。

靜齋記事に云、數年狼の皮を蒲團にして、年數も入、よく揉め、毛も獵虎より和か也。しかるに生たる狼の聲せし時は、毛すく／＼と立て針の如く成しと、又盜賊の入りし時は、同じく毛すく／＼と立て身

を刺て目覺るとぞ。

○八百比丘尼

萬葉集に、坂上大孃贈二家持一云々、人者雖云、若狹道乃後瀨乃山乃、後毛將會君。枕草紙に、山は三笠山、後瀨山、小倉山、是特其名を得て云々。此山の麓に八百比丘尼の洞有。空印寺といふ寺に又社有り。八百比丘尼の尊像は、常に戶帳をひらく。花の帽子を着し、手に玉と蓮花やうの物を持たる座像なり。又社家に重寶有り。比丘尼所持の鏡、正宗作の鉾太刀、駒角、天狗爪あり。比丘尼の父は秦道滿といひし人のよし、緣起に見へたり。初は千代姬と云し。今は八百姬明神と崇む也。越後柏崎町の十字街に大石佛有り。半は土に埋る。大同二年八百比丘尼建之と彫刻して今に文字鮮明なり。隱岐のすさびに云、岩井津といふ所に、七抱の大杉あり。古へ若狹國より人魚を食したるといふ尼來りて、植て八百歲を經て、又來りて見んといふて去と云々。故に八百比丘尼の杉といふ。この事古老の語りしは、此國今濱の洲崎村に、いづくともなく漁者にひとしき人來り住り。人をして招きあるじ儲す。食を調る所を見ければ、人の頭したる魚をさく。怪みて一座の友に囁き合ふさまして歸る。一人その魚の物したるを袖にして歸り、棚の端に置て忘れけり。其事常のつとならんと取て食しけり。二三日經て、夫問に、しかじかの事いふに、驚き怪みけり。妻いふ、初め食する時味ひ甘露のごとくなりしが、食終りて身體とろけ死して夢のごとし。久しくして覺て氣骨健かに、目は遠きに委しく、耳に密に聞、胸中明鏡のごとしと云。顏色殊に麗し。其後世散じて、夫を始め類族皆悉く生死を免かれずして、七世の孫も又老たり。かの妻ひとり海仙となり。心の欲する處に隨ひ、山水に遊行し、若狹の小濱に至りしとぞ。

○比良嶽

江州比良岳は七高山の一なり。往古は二月二十二日叡山の衆僧登山して八講あり。今は此日一僧來りて讀經有るに必湖上風荒く、浦々よりも出船せずして、水面に塵をだにも置じとの事なりと俗に云傳ふ。

因に云、先年巡禮の乘合船、竹生島わたりに暴風に覆りてより以來、皆恐れて多く島に渡らず。前札廻水面に流し、遙拜して過る也。夫巡禮同者といふものは、あらかじめ日積りを以て道を急ぎ、日和のあしきをも厭はず乘船して、斯る難に逢るは愚の至りなり。竹生島は本朝無双の靈地なれば、心あらん人は、東北へまわりても必參詣すべし。海上一里に過ざる也。嘉栗子紀行に、比良岳へ登る。山岳はみな紅葉してゐもいはれず。上り行て頂上へは所の人とても行ずといへり。押て登り見しに道もなき篠原を十五六町も行ば、峯は殊に風烈しく、湖水は元より山城國中淀、男山見へわたり、北面は越前、若狹、丹波の山々、東は伊吹、三上、或は彥根、觀音寺山、野洲、横田川、大津、粟津、勢田まで幽に見へ、眼の及ぶ限り絕景極りなし。頂上より少し下れば、小チョンボの池有。いつの頃にかありけん。舟路村百姓の女房の名なりき。此女夜々忍び出て此池に通ふ。初は夫も知らざりしに、度かさなりて人もいひ怪しみけり。或夜夫あとを付けてしたひ行見るに、岳に上りて池に入り、暫く有て、又池より出權現宮に詣て歸る。其途に待受て捕へければ、女いふ、恥かしながら、池の主に見入られてより、かゝる淺間しさよと、夫も詮方なく暇を遣しければ、其後は行衞知れずなりぬ。

里人は池の主と成しと云傳ふ。通ひ路とて外に道有り。雨乞する時は、かならず此道より上りて此池に乞となり。此比良山の尾崎湖水へ差出たる所に、白鬚明神の社有り。鳥居は街道に立り。故に此池を根鹵とも、又打鹵ともいふ。此神湖水の七度變じ桑田となりしを見給ふ。謠曲にも有地なり。又高島郡に桑原濱といふ有り。本朝樂譜に見ゆ。方丈集に藤原爲經朝臣、

皇の御代はつきせじ桑原の濱田は三度海となるとも

列仙傳に曰く、東海三變見レ爲ニ桑田一と云々。

○海　市

〔史記評林〕登州志、春夏時。遙見下水面有ニ城郭市肆一人馬往來若ニ交易一狀上。士人謂ニ之海市一云々。大論云、

日初出時。見二城門樓櫓宮殿行人出入一。日轉高博滅名。但可二眼見一。無レ有レ實。名二揵闥婆城一。〔割註〕花嚴經義曰、「西域樂人高乾達婆。彼樂人多幻作二城郭一。須臾如レ故。因則謂二龍蜃所一レ現云々。我國には北海に多し。中にも越中魚津浦を最上とす。三四月の間、天氣のどやかになり、少しも風なきとき、海面に現ず。其形相右に引二書のごとし。或は二時三時、又は半日一日も見ゆ。風少しにても吹時は忽ち消る也。尤雨に近きと思ふ日和には必ず立也。海濱の人は能其立べき日を知て出て見る。土人は狐の森といふ。又伊勢の白子若松のあたりの浦邊にも有。安藝の宮島にては蓬萊といふは山の形なれば也。世に盡く所多く蛤とす。是輔行に、乾城、俗曰二蜃氣一。蜃大蛤也。といふより謬る也。蜃形螭のごとく耳鬣角あり。その噓氣樓臺と成と、雜言書に見へたり。蘇軾曾て海神に祈り、歲晩に見て詩有り。

東方雲海空復空　群仙出沒空明中
蕩二搖浮世一生二萬象一　豈有三貝闕藏二珠宮一
心知所レ見皆幻影　敢以二耳目一煩二神功一
歲寒水冷天地閉　爲レ我起レ蟄鞭二魚龍一
重樓翠阜出二霜曉一　異事驚倒百歲翁

○不破關

美濃國にして、此關の跡、今は關が原といふ驛なり。後京極の御歌より以來、荒たる樣を作例とす。しかるに足利の公方普光院殿富士御覽の時、兼てより御饗しの爲にと、關屋の荒たるを作り改めてしつらひしほどに、古歌の風情氣色もなく、いと不興にやおぼし召けん。

　葺かへて月こそもらね板庇とく住あらせ不破の關守

と詠じ給ふ。此御歌の出來させ給ひて、御心よげなりしと云々。此歌を世人譏りいふには、彼富士御覽記に見えずと、誠に左なりし。然るによしその記に見へずとて、なしとも極めがたし。此和歌の體、自餘

の人よみ得べき歌共覺へず。なを後覽を閭んのみ。關鍛冶兼吉が家書に、普光院殿富士御覽のとき御腰物調進せしよしあり。時といひ所といひ、かゝる御好みさへあるものなるを、その記にみえざるぞ訝し。堯孝法印富士御覽道の記にいふ。不破の關過し侍りしに、もるとしもなき關の戶ぼそ荒のみ深くして、なか〳〵見所有。

戶ざしをも幾世わすれてかくばかり苔のみとづる不破の關宿

〇神泉苑

此地もと乾臨閣とて、方八町の園にして、代々の帝王御遊の地なり。弘法大師此に請雨經の法を行はれし事有。その地の形、今僅に殘れり。世に傳ふ、小野小町が、理りや日のもとならばの歌にて、雨を乞しかば、龍神感應し雨を降す事三日といへり。今按ずるに、一首の體小町の歌のやうとも思ひ難し。古今の序に書る風情はあらぬにや。かの家の集にも見へず。元來小町の名あまた有り。もしや別人なるにや。家の集に、醍醐の御時、日照のしつれば、雨乞の歌よむべき宣旨有けるに、

手早ふる神も見まさば立さはぎ天の戶川の樋ぐち明たまへ

とあり。

因に云、雨を祈る事、國々に異同あり。或は踊をなすあり。又は龍穴を穢すあり。又は神佛と乞もあり。播州雨乞躍の唱歌は盤桂和尙の作なり。左の如し。

嬉しめでたや老せぬ君に、めぐりあふたに我ひとり、生れ來りしいにしへとへば、外にもおもはぬわがこゝろ、云々。

美濃の郡上西に穴馬村といふ山に穴あり。深さ三里、中に馬石有り。年旱する時、この窟に入て馬石を大に穢ときは、必ず雨降るなり。然るに其穢せし者三年を出ずして死すると也。此故に村に年の長ぜる者を撰ぶなり。又野州足利には、常に田植歌にも、詩小雅の雨二我公田一遂及二我私一といふを、小野篁民

に教へて唄はせりとて、今に唄ふと聞けり。唐土にも雨乞に、小蛇二ツを壺に入て、數多の小童をして、おの／＼杖を持せて外を廻り唄ひて、壺を敲くこと見へたり。能因法師の天の川の歌は、世に知る所なり。近世にては芭蕉翁の門人晋子、江戸三圍稲荷にて、

雨乞や田を見めぐりの神ならば

の發句に、降雨せしは東關の人しれる處也。まな正德二年夏、讃州觀音寺に坂本天神の社にして、雨請の俳諧興行有しに、花が發句に、

神風の雨こそ匂へ夏の草

次第に付句ありて、匂ひの花を吟ずる時、雨降出して二日二夜計りの潤ひ也。又吉川惟足が雨乞の和歌に、

夕立の雨のたまもの得てしがな民の草葉の潤ふばかりに

と詠ぜしに、同日午の時より大に雨降り出して、三日三夜、止ざりしかば、又民の苦みし程に、

から衣ひも重りぬ神風やはや吹とけよあまの八重雲

と詠ぜしかば雨晴てけり。琉球國平補親雲上の雨乞のうたに、

かくて今民の草葉のかれゆくをあはれと見ずや天つらの神

又右大臣實朝公、雨乞を止め給ひける歌、

ときによりて過れば民のなげき也あめやめ給へ八大龍王

〇宇治瀨田螢

勢田は大湖の落口にして既に大河也。橋に五間の間とて、橋柱なき所有り。此所の水は、いかなる霖雨、五月の頃にても濁らず。淸冷を賞す。又螢といふもの、國々に多く生ず。然るに宇治勢田を以て賞する事、其見る所に景あれば也。此邊の螢見といふは、暮ぬ前より舟を出し、名にしおふ螢谷より石山寺

を下り、黒津の里に行て、大白山とて湖中に差出たる小さき山有り。其山の汀に舟をよせて遊ぶに、既に日暮ぬとするころほひ、湖邊の草の葉末より、一同に飛立て散亂するは、誠にたぐひなき壯觀なり。すべて此虫腐草よりなるといふ事、七十二候に出て人も知る處也。今は六月の初梅雨の後に出て、其光り薄く、其虫至て弱く、かの地の螢は夏至後三日を盛とす。又は今年は螢多し。此年は螢少しと知る事、川邊の木にも草にも、春の末より白泡のごとく綿の如きもの有。是螢の巣也。其多少を見て、兼て知れりと里人はいふなり。因にいふ、或人の說に、江戸より京へ登る人、木曾路にて螢數十籠を買、駕の上に釣置、夜々の樂とせんとせしが、暑月の事なれば螢は半死せり。青草を入替、水を灑ぎなどして鵜沼宿に着たり。然るに宿のまへに流水有り。終夜籠を軒に釣置たり。明朝見れば、螢みな籠を破りて去ぬ。是螢水聲を募ひを增といふと、右は宇治勢田の螢、流水に付て下る也。故に瀨田よりはやうやう遲しとぞ。

○井出蛙(再考)

山城井出の里は、世に知る山吹と蛙の名所也。尋常の蛙喧しく鳴中へ、此井出の蛙を一つ放てば、即一二聲啼ば、今まで鳴し蛙の聲、ひしと止て聲を揚ず。只眼をきらめかし蠢くのみなり。京都三條白川橋の邊に一種の蛙鳴あり。皆何れの靑蓮院の宮にや。御池に此井出の蛙を放させ給ひし、其餘波といふ。予丹後の宮津にて、或寺に宿せしに、庭の池に鳴聲蛙に似て喧しからず、其音聲淸亮たり。住僧に問へば、むかし細川幽齋君此國を領し給ひて、山州井出より蛙餘多取寄て放ち置れしとなり。今百餘年に及んで、其種の蛙の殘りたる也と聞て、いよ〳〵心を留て靜に聞に、實にも色音至つてやさしかりき。おしいかな。和歌に未だかゝる賞吟を見ず。古より蛙の聲の聒きを憎みてこれを封じて閉ざる所多し。羽州最上永泉寺に玄翁和尙、蛙口を止てより今に鳴ず。又上州新田大光院深譽呑龍、是を封じて更に鳴ず。江戸傳通院三ケ月上人といふは、勸學の障りなりと、蛙の聲を封じてより、山内蛙多しといへども鳴

ず。是を無聲蛙とて、一ツの名譽とす。又志摩國麻生浦に鳴ぬ蛙有。傳へいふ、後鳥羽院隱岐國に遷幸まし〳〵て、御製に、

蛙鳴く勝田の池の夕だゝみきかましものはまつかぜの音

此御歌より今に蛙も鳴ず。又風松が枝をならさず奇といふべし。又元祿の頃、播磨明石の城主松平若狹守は歌人にて有けり。或日泉水の蛙鳴立てかまびすしくて學問の障りとなりしかば、

しばしこそ爰に來鳴めもとつ野にやがてかへるの名にしたがふな

とよまれし和歌によりに、群蛙聲を止めて永く鳴ず。相山隱士吉川惟足も蛙の聲を厭ひて、

一たびはまづいづちへも出て行け又はかへるの名にしあふとも

此歌によりて二三日鳴かざりしが、程經て又以前の如くなき立ければ、又一首を詠ず。

歸れとは言葉の花の色と見よ出て行なばまたこざらめや

此歌よりかの國閑居ありし地に、今以て蛙鳴く事もなし。唐土にも斯蛙の啼を止む事、輟耕錄にも、又天師張廣が封ぜしなど見へたり。又武陵王遊宴の妨とて、僧法朗に口を止しむ。燕終て舞ん事を勅す。朗曰く、君王歡樂、既に闌なり。汝宜しく鳴けと、詞に應じて又聲を發すと云々。

○詩僊堂

京一乘寺村の南に石川丈山隱士の碑有。是羅山が自ら寫し立る所なり。村に祠田を寄附し置て、今に丈山祭とてなす事なり。其閑居は少し北にありて詩僊堂と稱せり。堂の中間に畫像をかく。本朝の歌仙に准じて、漢より唐宋の詩人三十六名を、狩野探幽に畫しめて、其詩は丈山自身に書たり。林道春とこの詩の事を定むること、羅山文集に詳かなり。此人三州の產にて嘉右衛門重之といふ。先祖より御當家に從仕し奉りて、むらなき兵也。元和の夏の御陣に、關東より走上るに、淸見が關より瘧疾に惱みてければ、伴ふ人々此驛に殘し置きけり。瘧の間日なるとき、此事を聞て無念に思ひ、自分馬に跨りて、病に

も屈せず跡より馳上りけり。かくて軍配には、そこ〳〵にて戰ふべき命令なるに、心も剛にはやり、人並にては手柄見へずと、只一騎玉造口より馳入り、佐々十左衞門にわたり合、終に首を討取りけるに、十左衞門が郎等共主人の敵と一同に打てかゝるを事ともせず過半討取、大手にのりぬけ、夫々の首共數十級を陣中へ奉る。病中といひ一騎にて武功の程、神君御感ましますといへども、軍令を侵したる越度に依て御勘氣を蒙り、安藝の國に蟄居し、後に京に上り、武を捨て文を樂しみ、惺窩先生を師とし、羅山子を友とし、風月に心を澄し詩歌を翫ぶ。時の帝後水尾院勅有て召れけるに、斯く隱栖して後は二度加茂川を越じと誓ひ侍ればとて、かたく辭し奉りて、

わたらじなせみの小川の淺くとも老の浪たつかげもはづかし

帝叡感のあまり、老の浪たつといふ句を、老の浪そふと勅點を賜りぬ。隷をよく書し、その頃の詩人なりと、又丈山一世の詩集有、覆醬集といふ。

○降　松

同村に降り松とてあり。和歌の名所ならねど、世に名有る所なり。昔無官大夫敦盛一ノ谷討死の後一子有けるを、平氏の餘類を嚴しく搜し求むるによりて、母なる人忍びがたく、此松の下にすてしを吉水法然上人叡山より京へ出給ふとて、ひそかに拾ひ得て養育し弟子と成し給ひしとなり。〔割註〕一說に大納言資方公娘とも。〕

因に云、今の熊谷敦盛組討の圖を畫しを見るに、敦盛を童形とせる事の非なるを察知すべし。されば世に子を捨るといふ事、かくのごとし。唐土に茶の祖とせる陸羽は、もと捨子也。いづれ親子の生離別深き所爲なるべし。靈元法皇捨子の聲を聞し召て、御製に、

あはれなり夜半にすて子の泣やむは母にそひ寐の夢や見るらむ

享保年間攝州芥川邊櫻塚に捨子ありけり。未だ二歲にも滿ざるほどに見へたるが、左の手に栗に鶉の片

目貫を紙に包みて結びたり。其紙に拙からざる女筆にて、

父戀しと啼はうづらのかた目貫あはれなる子をひきあげてたべ

寶暦のころ、或夜今出川通近衞殿下の塀の外面に捨子ありしかば、哀なる姫君の御方へ聞へ、不便におぼし召、拾はせて育させられし。その北側の屋敷は冷泉爲村卿なり。御當人の歌に、

すてし親のさぞ捨てかねてすてつらん拾られし子のあぢきなきごゑ

○難波梅

元は浪速と書きて、一國の惣名なり。津とは萬船の輻湊をいふなり。今敷津、難波津、高津として三津といふはいぶかし。高津は仁徳帝の皇居にて、其地西海に臨て高きの謂なり。敷津には百敷玉敷などいふて皇居の謂なり。今神社に敷地といふ。封疆なり。三津は御津なり。これ父美爾の言葉なり。御吉野といふに同じ。然ればこれを敷津といふ。是を難波津と限りてはいふべからず。また難波の梅といふも一木とすべからず。岸の姫松、磯馴松などいふが如し。百濟王、仁梅によそへて、仁徳帝を諷諫し奉りし和歌より名譽たり。去るに弘安禮節に云、難波の別當源判官殿へ花の制札申請るに、辨慶仰付らる。其札に江南梅花折ニ一枝一者可レ處ニ嚴科一者也、と認めければ、義經御覽じ、花を折もの心なくては折らじ。あまりに强き文言也とて、江南梅花折ニ一枝一可レ切ニ一指一者也。と直されしと云々。此制札、今は須磨寺にありて、若木の櫻の制札とす。心得ず也。此花江南所レ無也。於ニ一枝折盜之輩一者任ニ天永紅葉之例一、伐ニ一枝一者可レ剪ニ一指一也。壽永二年二月。下學集云、江南所無梅ノ名也。但日本俗所レ呼歟。南宋范曄詩云折レ梅逢ニ驛使一乞與隴頭人。江南無レ所レ有。聊贈ニ一枝春一。蓋取ニ此第三句之意一而云、江南所無歟云々。難波の別當とは天王寺の僧務にや。此札を乞し趣とて、一木にはあらざらんかし。仁徳帝皇居の所說々あれど、今の高津なるべし。因に薩摩守忠度の歌に、

行くれてこの下かげをやどゝせば花や今宵のあるじならまし

此歌に異說あり。文明の頃、上野國平井といふ所に、或寺の僧、古木の櫻の盛なるを見入つゝ、この歌を吟ぜられしに、忽然と年の頃五十計にて、さもゆゝしげなる人太刀脇挾みたるが、何方よりともなくイみて、只今吟じ給ふ歌、世上一統に申も、和尙の宣ふごとく、行くれてといふての字澄てよみ侍る。それがしが申けるは、この字濁りて讀候。淸濁いかゞ候はんと存ずるなりとて失せぬ。和尙奇異の思ひをなし、さては忠度の精靈ならんとて、其所に墓を築かれしといふ。

因に云、忠度の謠曲に、短冊を付られたりとうたふ。この事平家物語、盛衰記、盛長私記、長門本等にも、短冊とは見へず。又是によりて短冊の出來し說多し。江家次第などに出たれば、久しき事ならん。又此歌の懷帋といひ、卷物といふ事一說ならず。但烏丸三條二文字や何某といふ富家に、此自筆を持傳へて、題は旅宿花とありて、勿論短冊にあらず。料紙やうの紙なり。凡七百年計り傳來せし家寶なるべし。

〇求麻川

世に本朝の急流は、大井川、富士川、熊野川といふ。然るに肥後の國求麻川は、本朝第一の急流なるべし。其源遠く、那須、五箇庄椎葉山より出て、凡四十餘里流れ下る大河なり。求麻郡の眞中を通り、人吉の城下を過て、八代の海に入る。されば求麻にて伐出す材木を、此川に流し下せば、八代にて引取つもり也。八代は他領なれば、材木こゝに運上の料ありとなん。求麻より八代迄其間川丈八十六里あり。夫を僅二時に船下る。其水勢の早きを思ふべし。船はいと小さく細く造りて、首尾に楫を付たり。是大岩に眞逆さまに流れかゝりし時、後ばかりの楫にては、廻る事おそく危き故なり。常に先の楫を第一に動かし、岩角を避て自由に舟をあやどる。又中程に梶を持立たり。是は舟を前後左右に動かさん爲なり。船頭三人眼たゝきもせで舟を守る。浪高く逆卷處にては、舟の左右に高く板を立て、浪の打入らざるやうにす。十六里の間に凡四五ケ所艱難の所ありて逆浪高き事如レ山、目くるめき魂飛ぶ。求麻の領

主など通行有るには、其難所前後の間五町も十町も舟を離れ、山路を經て、此險難を除きて又乘り行く舟有とぞ。されば兩山けはしく立並び、片は頭上に覆ふがごとく、左右の陸岸峨々として屏風をたゝむが如く、松柏森々たる中に入かとすれば、つゝじ、山吹、山櫻の咲亂れたる岸に出で、千景萬色眸をめぐらす暇なし。かの巫峽の急流と鬪へしも、是には過じとおもはる。川舟にて下る人に、妻子友人の別れを惜み、川端に立て離別の戀情はてしなければ、舟の纜をとくや否や、陸より舟の中へ手して水をかければ、舟の人々菅笠を隔て水を防ぐ。其際に忽ち舟は數町を下り、涙をそゝぐひまなしと橘南谿もかたりぬ。

因にいふ。この求麻川の半途に、神の瀬の岩門といふ有り。川の北邊にて、山路半里計り谷深く入て岩戸に至る。獅子の口を開きたる樣にて、高さ廣さ十四五間もや有らん南面せり。口より奥に至る事三十間計、其間石鐘乳の柱のごとくに下りたる數を知らず。長さは何丈にや。太さは二三尺餘にもまはるならん。氷柱のごとく下れり。そのすきま〳〵に、鳥有て飛翔る。其形背黑く、腹白く、尾短くして燕に似て一足なり。この鳥、此窟のみに生じて更に洞外に出ず。此窟中の神使とす。數百羽群り翔り、又飛事いかにも迅速にして、篤とは見定難し。若この鳥を取る時は、村に種々の祟出來、その上大風洪水等の變有りて民の歎きとなる故、人恐れて取らず。異國にも一足の鳥有る事を聞ず。窟中三拾間計にて行止る。是迄は口廣きゆへ、前後明かに見ゆ。是を右へ曲りて方三四間の穴あり。暗き事如レ夜。能く心を靜め眼を閉て、扨開き見れば、向へ拾間計り、先より岸下りにして、深さ知れ難し。又上の方もいかほど高く洞なるも知りがたし。傍の岩角に縋りよく見るに、遙の底に如レ鏡時々きらめく物あり。是水なるよし、足震ひ目くるめきて、中々久しくは見屆けがたし。是神仙の靈水にて、汲得て飮ときは萬病を治し、長生不老なりと、又一足鳥も時に依りて蟄伏する事ありと村民の語りき。

○吳服穴織社幷二星社禹王廟

應仁帝の御宇、百濟國より工織の二女を奉る。我國初て織縫の業を知る。其女を吳服穴織といふ。今攝州豐島郡池田村西南田間に一社(吳服宮)、又北の山上に一社(穴織宮)に祭る。例年九月十七日、十八日神事あり。

因に云。此二神婦女の專ら崇祭すべきに其事なし。京師に十二月八日を針供養とて、婦女酒食菓餅等をもつて家人に饗す。是何の由來を知らず。勢州香良洲の濱に星合村有て、牽牛、織女の二星を祭ると、また河州牧方村邊に、天の川と云あり。此川上にも二星を祭る宮有り。古今榮雅抄にいふ、筑前國大島宮とて、北は彥星を祝ひ、南は織女を崇む。二社の間に川有り。天の川と號く。女を得んと思へば、彥星の宮に籠り、七月朔日より七日の夜半に至り、河中に棚を昇て盥をならべ、盥の上中下に男女の名を書て祭をなす。盥三ツに水を入れしに、その盥に移りたるに從ひ、その男女を定るなり。この祭せんとて天の川に立ぬ日はなしといへり。古今集に、

　秋風の吹にし日より久かたの天の川原に立ぬ日はなし

往古は京の鴨川洪水度々したりければ、防鴨河使などいふ役ありし、中頃安部晴明、夏の禹王の像を彫祭りて、漸く水難なくて穩か成し故、法城寺といふを建立す。是水去て土成の義なり。其寺今は心光寺とて河東に有り。其禹王の像は、今の四條の眼病の地藏の像なりといふ。社は鴨川に臨みて有ければ、その跡をさして宮川町とはいふ也。

〇名所名物

夫名所なれば自然に名物なり。名物有て所の名を付す。

　堅田鮒包やきなる中の玉章

淀鯉、堅田鮒一双の名物なりと云傳ふ。六角の家臣(佐々木)錦織源五郎といふもの、はじめて網しとれり。故に名付と、又鮒は夏に入て味ひ美なり。故に夏頃鮒ともいふと、されば魚その水を同くすといへ

ども、其地によりて味ひ好惡有り、また季節にもよる。たとへば春雷節に先達て迅き時は鮒魚少し。鮒は雷を怖れて水底に沈むと、江湖の漁者の語りき。〔割註〕方章私云、源五郞鮒の名目の事、前々太平記やらんにて見し事有と覺へし。」又鹽梅加減にもよる。これ庖丁司の修練の善惡なり。

○弘智法印

眞法印の即身即佛の事、世に知る所なり。今四月八日隣鄕の婆々嚊共一統に、その寺に集り、銘々麻苧を持來り、早朝より紡績き織立て一日に縫仕廻。此法印に着せ奉り。舊年の衣と替、是更衣也。此法印もとは下總國山桑村の產にて、當國大浦蓮花寺に住す。眞言宗なり。貞治二年癸卯年十月二日石上に寂す。形軀今に朽ず。辭世に、

岩坂のぬしはたれぞと人間はゞ墨繪にかきし松風の音

因に云。辭世の事、古今みな有るが中に、浪速城內友田金平といふ人の持し鍔の心に、

いつの日のいつのころぞとおもひしに今年のけふの今にとゞまる

あるときは花の數にはたらねどもちるにはもれぬ友田金平

一服一錢一期中　寂期一念雲脚輕。　宇治通圓

ゆく先もまた行さきも出くるほの糸切れぬればもとの木のきれ

一盃一笑又何時　再會不知隨緣生

何となく餘波ぞおしきこの世をばけふかあすかとわかれゆく身は　風竹亭嘯翁

あすありと身にはたのまぬかりの世にたゞけふとのみおもひくらしつ　泉濱老門孫左衞門

幾世經しうさもつらさもけふあすとおもへばやすくしのばれにけり　無能上人

○術業

列氏鴻書に李白書を象宜山中に讀倦て不レ成して棄て去、途に老嫗の鐵杵を磨て針とするを見て驚き返

り、進んで書を放さず。終に其學なれり。其石を武氏岩といふと、我朝鎌倉の針摺橋、筑前天拜山の麓針磨岩、江州磨針峠、みな同說なり。されば何の業とても、修行踈にては成就し難し。多く中途にして廢す、惜ひかな。

因にいふ、武者修行といふ事、戰國の餘風盡ざる頃は左も有なん。今世かつてあるべき事ならねど、治に居て武を忘れざるは士の道歟。天明三年橘南谿云、此秋九州にて人の語るに、身の長六尺ばかり頬髭あれ、骨たくましく、木太刀を背負て、二人連の武士、劍術修行に諸國を巡り、鎗(マヽ)柔刀より眞劍にても、時に臨で仕合に、何方にても一度も不覺をなさじと聞。コレおこがましき修行人なり、逢見たくおもひしに、筑前福岡の龜井道哉云、此二士暫く我家に休息しけるに、まことに術もすぐれしと思はれ、人品至て忠貞質直なり。一月計り晝夜物語りて知る。更に事を好める樣にはあらずと、然るに予不ㇾ計、肥後の學校にて出會せしかば、予先問ふに、兩士の修行の事、所々にて承れり。眞劍の立會ある事こそ心得ねといふに、二士打笑ひ、世人は啌をいひ傳ふるものかな。眞劍はもとより木太刀も、師の堅き戒めなり。未練の者は當座の勝負を惜み、一言のおくれをとらじとするゆへ心和せず。稽古進まず、遺恨も出來る也。予なんと智識の儒學者に多く因によりて、武術者に出會ば、殊に初めより隔心なく和親しぬれば、藝も益を得るを專らとすといへり。二士肥後の求麻の產にて、宮野原忠太夫、大寺右太夫とて、師匠は同所加賀桂吉とかや。流儀はタイシヤ流とて、假名に書よし語りしなり。

○御茶屋松原

天正五年夏、豐臣秀吉公筑前國箱崎に六月七日より凡廿日餘り滯在の中、日々茶の湯有けり。細川玄旨法印も丹後より北海を船にて廻り著して陪從なり。數寄屋は篷葺假屋なり。數寄者には千利休、施藥院、天王寺屋宗及、小寺休夢等なり。中にも六月十八日箱崎松原海道の南なる松ケ枝に鏁をかけて、雲

龍の小釜を釣て利休茶を奉る。今その邊を御茶屋松原といふ。此日おの〳〵歌つかふまつるべきよし仰事有。秀吉公の御歌に、

暑き日に此このもとに立よればなみの音する松かぜぞふく〳〵

此日の短冊七枚、今に當社に有り。

因にいふ、茶はもと僧家に出て、大躰參禪に擬す。故に師長なる者を宗匠と云はずして和尙といふ。貴賤親疎を論ぜず。小室に屈足して睦敷閑談を專らとして意機を養ふに有。今の如く高料の器物を取扱ひ、若干の費あるにはあらずと也。是元の意味をしらざる故歟。古人數寄の庭、物好を利休に問へるに、古詩一句を以て答ふ。

靑苔日厚自無レ塵

と、又小堀遠州侯に問ふに、發句にて答へられし。

朧月夜海少し見る木の間かな

又宗旦に意味を問ふに、和歌にて答ふ。

心留て見ればこそあれ秋の山ちがやにまじる花のいろ〳〵

其物好は心々あれど、おもむきは一也。利休は幽玄にして綺麗なり。遠州は閑靜ふかくものさびたり。宗旦は佗體あまりて心細かなりとぞ。

○君が畑

江州日野より藍田政所などいふ山間の村を經て七八里に、君が畑といふ山里有。昔惟高親王此所に隱栖まし〳〵、即此に薨じ給ふとて御廟有り。一段堆く、御車の形、轅のやう、其儘に築きたり。又神靈を鎭守とす。宮社美麗にして邊鄙には目を驚せり。就レ中此山の人々は、何國へ至りても、山林の立木おのが心の儘に伐取る免許の親王の御令旨を所持す。往古は三百家計り有り。飯器の挽物を業とせしが、

〔割註〕日野椀折敷也。〕今は山中の樹木は皆伐盡しぬれば、右免許の旨に任せ、諸國の山中に入て、木を伐て挽物とし世をわたりて、多くは此山里に歸らず。今僅に三十軒のみ。今も此里より木曾山に入り挽物をなすなり。この外御眞翰のもの多かりしもみな散失すと、しかるに三十家、年番に他國より歸り來り、宮の社務を勤む。毎朝神供を奉るに、白衣白張を着し、侍烏帽子に髮を藁にて結たり。此神役一年の間、誰にても名を小掠(コカスミ)信濃と號す。又三年に一度づゝ神事能有り。村人是を勤む。役者不レ足ば他境よりも雇ひ來る。この地かゝる深山幽谷にして、その亂舞を傳へ來るも珍らし。今は炭を燒て稼とし、又茶を製して他所に出す。茶銘に政所といふあり。君が畑に造る茶なれば斯は名付し。其外愚溪、越溪などいふ茶あり。皆此あたりより出す也。本道は多賀へ九里有て、牛馬も往來す。又爰に一段の瀑布あり。高さ五六丈。水幅廣し。其川甚だ深く、淵となりて底を知らず。此に所願のものは、人を雇て瀧飛を成しむ。岩上の瀧の落口より眞逆さまに瀧壺に飛入る。川下五六町計に浮み出るに、更に水を見る事なしと、今その水末は愛知川の流れなりとぞ。

○龍神感

日州飫肥領内井津に、兒島とて一小島有り。往古より辨財天在す。中頃より虚空藏を安置す。元は地續て出崎なりしが、或年の大風雨に陸の道路切れて離島と成。此邊專ら漁者のみにして、蜑は蚫を潜取に、この地切てより奔波岸を打て荒く其業を失ひ患ふ。一日、府の報恩寺〔禪宗〕に入來り、和尙へおの〳〵此事を歎きて、佛法の威德功力にて、元のごとく地續に成べき事を申乞ふに、住持滄海笑ひながら、汝等が難儀思ひやりぬ。されども此方などの僧力にては中々思ひ絕たり。去ながら其方達が心ゆかしにもとて何をか書て與へらる。漁者は何の事とも知らず、此一書を石に括り付海に投じぬ。然るに其夜風雨震動夥し。翌日朝出て見れば、不思議や。切たる海路地となり、陸に續きければ、漁家舉て歡びにたへず。今にその賜を受て賑ふ。其偈に曰。

鎮二迷津波濤一偈
道隔二迷津一人不レ安　潮連二兒島一起二波濤一
南無滿願虚空藏　學海從レ茲一夜乾

因に云。甲州鹽の山中に長さ十丈計り、亘り三丈計の大石横たはり、山田の懸りの水利を妨げ、百姓常に患ふといへども詮方なし。然るに皆いふ。此に在す寺の本尊阿彌陀佛は、聖徳太子の御作なり。〔割註〕一說萩寺といふ大悲閣也。本尊は其萩の木を以て作ると、信玄の旗甲等有。」おの〳〵祈り奉らんとて、二夜三日別時念佛始めて村中立替りて修行す。既に滿ずる夜、雷鳴り雨風烈しく、忽ち一雷落下りて地響夥しく堂を震ふ。翌朝各見てあれば、此大石の眞中に四五尺計打切て大石左右に退きける。然して其切れたる間より水走り出、大に益有ける。夫より此山を烈石山と號す。また紀州湯淺より高野山へ出る道難所にして、山谷を經て纔に九里也。此間にも甲州のごとき烈石有。その說もまた右に同じ。其岩も凡似たり。

○高　市

抑市の名はいと古し。神代卷に、天高市に諸神集會し給ふとあり。今の和州高市是なり。然ればもの集る所をさすにぞ。國々には月次の市日、或は八日市町、三日市町等の名有。又神事佛事をも市と名づくにや。安藝の宮島市、豐後の濱市など云なり。上古は日をいはずして支干をもつてす。和州辰の市を古歌によめり。

耳無の辰の市とはさわげどもいざまた人をうるよしもなし

是辰の日を市日とする也。辰市近邊に賣間の淸水有。

辰の市賣まの淸水凉くてけふはいかなることろこそすれ

新井氏いふ、買は代なり。賣るは得る也。其交易賣買の理式ありて、むかしは其職目を東西市正とて京

都に置れし。因にいふ、猩々の謠曲にも、市毎に出て酒を賣といへり。誠に古今共に市は專ら飲食の物を商ふ事なり。日本紀私記にいはく、高麗人餌香の市に酒を醸して賣る。時の人競ふて高價に買ふて飲、更に直をおしまずと有。餌香の名しるべし。今河内國に古市と號す是なり。又高價といふ事、すでに欽明天皇紀に出たり。新井氏いはく、

秋布穀已成而後通₌商賣之道₋。故稱爲₌秋物₋。云々、爲賴家集に、

市姫の神のいがきのいかなれば商ひものに千代を積らん

菅根集に市といふ題に正徹のよめる、

世を見ればこゝろ直きもしらなみもたち交る市ぞ都なりける　徹

(一)都の富士

比叡山は江州の表として、京より見る所は後面なり。去れど洛中より見るけしき、駿河山に彷彿たれば富士の名あり。其眺望いづくはあれど、堀川の西一條戻橋の南鍛冶對馬椽といふものゝ門より見る所、千門萬戸の上に高く聳へ、家々の庭の松の梢に雪の高根の名殘なく見へ渡れるは、田子の浦半の眺めよとあやまたる。藤原稙通卿の嵯峨野の記に曰、

雪の積りて日枝の山旭かげ殊に聳へて見へけるに、

廿餘りをとざし計ひしも嘸と覺へて

ふり積る雪のころなをさぞなとてみやこのふじの雪のあけぼの

管見記に云、永享五年十一月廿日叡山之雪誠可ᆫ謂₌都富士₋者也云々。內侍十首の內に、

時知らぬ高根も今やかすむらんみやこのふじは雪ものこらず

予雪の降毎に嵯峨宇治淀の渡に遊び見し中にも、叡山の雪ぞ一奇觀なり。夕陽に映じたるは、白浪を以て築けるごとく、絕頂より麓迄、目に障るものなし。

添案云、叡山を都の富士といふ事、強て形の似たりといふにはあらず。都の内の高山なれば、都の富士といふとある人の說也。

因に云、叡山の相輪塔は、當山と日光山にあるのみ。外になし。世人鬼門の方を除るもの也といふは非也。谷響集にいはく、傳教大師の銘作、相輪撐、搭也。相輪者是乃俗間所レ謂九輪也。在二叡岳一者不レ造二浮圖一。單建二相輪柱一爲二塔婆一。故稱二相輪撐一。呼爲二相輪塔一。無二復違一矣。言二相輪一者。僧祇律中塔上盤蓋云二輪相一。經中多云二相輪一。名義集解謂、以仰望而瞻相也。相視也。相輪亦名二金刹一。亦稱二金幢一云々。今案るに、相輪撐を設けられし所謂は、横川、西塔、東塔を三塔とせらる。故にその山岳の中央に九輪のみを安置し、一山の地軸をもて多塔とし給ふならん。然れば一山みな一塔のごときか。たゞし深き方はしらず。此に要坂といふ。東塔より江州坂本へ下る坂の間にある坂なり。標名もなければ心を付て見るべし。雨舍りある所也。

　からさきの松は扇のかなめにてこぎ行ふねは墨繪なるらん

是傳教大師の歌といひ傳ふ。誠に此歌のごとく、左右の山相迫りて末廣く、扇面の様に湖上を見る也。又その要とすべき所に、忽然と一株の松有り。水面を往かふ船は墨繪に似て、又類なき風景必ず見るべきなり。

因に云、辛崎の松は、日吉神道密記に據に、來る事久し。人皇廿九代欽明天皇の御宇鎭座女別當社。又松の精神を崇む。琴御舘祭也云々。尊朝法親王唐崎松の記に、いつぞやの大風にたふれてかた計も殘らず侍れば、行幸の神威もこと絕ぬるやうに、世にもいひあへりしに、然るに中世此松兵火にかゝりて枯にければ、大津の城主新庄駿河守舍弟（松庵維齋）の二人と、此松の枯しを悔みて惜み語りければ、舍弟等いで植ばやとて、日々風情なる松をと尋ねられしに、辛ふじて山中に見へたり。頓て掘求めて植られけり。扨爾りには埒を結て、いかさまにも實にしければ、往來の人も目を駐めぬ。時に天正

十九卯年秋の末、人々幣取かはし祓してけり。夫が中によめる、

　自ら千歳も經べし辛崎の松にひかるゝみそぎなりせば

佐々木日記には、天正十七年佐々木義鄕卿へ植續と云り。其後淡海志にいはく、此松いかにしけん枯にければ、道澄院賀隆公和歌を詠じて松にかけられしかば再び榮へり。

　花の咲ためしも有に此松のふたゝび春をみどりとも哉

笈埃隨筆 卷之九

○志賀山越

風雅古雅を好める人は、必ず一度は越すべきものか。袖中抄に云、志賀の山越は、北白川の瀧の片原より登りて、如意の峰を越て出る道をいふとなり。今白川の瀧より山中村に出て、村の東の端に石橋有。それより東西へ行て志賀へ出る也。又此石橋より北志賀へ越て東坂本へ出る道を今道越といへり。

雪ならばいく度袖を拂はまし花のふゞきの志賀の山ごえ

此歌よみ人しらず。世に感賞する歌なれば、作者不ㇾ知を恨として、近き誰某殿の御歌など聞ゆれど慥かならず。嵯峨物語にいふ、花の雪の御歌に散かゝりければ、志賀の山越ならねど、これも花のふゞきははらひもあへず、立歸りて打ゑみたるけはひいふばかりなく、ものにもにぬといへる言葉のつゞけも、この歌をもていへると見へたれば古歌なるべし。經賴卿記に、後一條院の御時、紅葉逍遙の爲に志賀の山越すなど見へたれば、昔は花紅葉の頃は、必此に遊びにけりと見ゆ。異本醒睡抄には、ある山寺の兒二人、四時の景物の內には花に勝れたるはなしといふ。壹人は雪に越へぬるはなしと爭ふ。逍遙院實隆聞て、

花ならば咲ぬ木ずゑもありなましなにゝたとえん雪のあけぼの
雪ならば幾度袖をはらはまし花のふゞきの志賀の山越

とこそありければ、自今以後は勝劣を爭はず、和合の床にて勸學あれかしと仰らけると也。

○三寶鳥

醍醐寺鐘銘曰、山城宇治醍醐山有ㇾ佛法僧ㇾと、されば此鳥の事、性靈集、於ㇾ高野山後ㇾ夜聞ㇾ佛法僧ㇾ。

大師の詩あり。

寒林獨座草堂曉　三寶之聲聞二一鳥一

一鳥有レ聲人有レ心　性心雲水俱了々

と云々。これを初として、下野二荒山、藤敦光院、讃州雲邊寺（堂前立碑）、此餘日州霧島山、和州大峯山、同室生山、藝州加部庄福王寺、山州叡山、上州赤木山など、皆人聞得て傳ふといへども、此鳥夜のみ鳴て晝出ず。故に其形象を云傳ふるは、鴨より小く、脊は黄色、羽先黑く、嘴赤く、足前後に二なりといふ。

嘉栗云、先年東武より木曾路を登る時、夜深に立て、櫻澤といふ所の手前にて、夜ほの〴〵なりしに、此鳥の聲を聞たり。形を見んと心を付れば、大樹の間に二羽有り。いかにも鴨ほどのものなりし。色はほのくらきころほひといひ、木末の事なれば、とく〳〵と見定めがたかりし。

續門葉集に、上醍醐にて佛法僧を聞て、　念劒上人

うらやましいかに囀る鳥なれば御法の外の聲なかるらん

赤染集に、くらまにて佛法僧と啼鳥きゝて、

三ながらおもてる鳥の聲きけば我身ひとつの罪ぞかなしき

通念集にいふ、佛法僧の鳥の事は、靈窟閑林の間にて、曉方一度の間鳴く。雄佛法と鳴ば、雌僧と聲を合するなりと。予按ずるに、通念集にいへる如く、所々靈岳に在といへども、人至らざれば知らず。又たま〳〵聞ても、夫と知らざれば餘所におもふべし。況んや夜陰の曉に多く鳴なればなり。近くは山城松尾にありて、古歌にも詠合たり。

新六帖光俊朝臣

松の尾の峯しづかなる曉に仰ぎてきけば佛法僧なく

また

　　松の尾の山の奥にも人やすむ佛法僧となくにつけても

板倉防州侯京兆尹たりし時、この古歌を感得して、盗賊を捕へ給ふといふ事あり。事長ければ略す。又日本紀略、延喜六年右大臣光修二法華八講一。佛法僧鳥來て鳴と云々。同十八年右大臣忠平於二五條家一限二五日一十座講二説法花經一。佛法僧來二鳴樹上一と、夫木集に、

　　我國は御法の道の廣ければ鳥もとなふる佛法僧かな

又近頃安永の冬、紀州若山の寺社役成田九八郎息團次郎といふ人、鐵砲を手練し、好んで遊獵す。府より三里計ある落合といふ所へ行けるに、美麗にあやしき鳥一羽梢にあり。此邊にて見馴ざる鳥也と思ひて、やがてねらひをかけ打けるに、手に應じて地に墮たる。家に歸り人に見すれど知る人なし。四五日して高野山の僧來り見て、是は我山にある所の三寶鳥也。その聲さへ普通には聞べからず、我も數年山に有ながら常に聞ず。たま〳〵夜陰に聞けること有し。然るに今斯のごとく玉にうたれて地に墮たるは、佛法澆末の世の樣かやと云へり。折節京なる繪師在て、其形色羽色嘴爪まで寸分違へず、彩色に模寫し人に見せけり。又天明三年の春、京都上鴨社人藤木兵庫と云人、神山の麓にて怪しき鳥の高き枝にあるを見て、心あやしみ、冬の中より餌飼とて小鳥を取用意ありしに、この鳥夫に付けるにや、春に成ても、この邊に有しかば、兎角して捕へ養はんと籠に入置けれど餌を食はず。一日工夫して、翌日彼鳥の糞をあばき考へ見れば、生物を食する體也。やがて種々の虫を飼けるに、蛙をよく食しければ、則是を飼て養ひおきけり。其沙汰かくれなかりしかば、誰も彼も行て見るに、吉田啓齋是佛法僧ならんと、紀州にて撃しは弱鳥と見へ、爰に捕へしは老鳥ならんと思ふばかり、嘴の色薄かりしのみなりと、躬恒集に、延喜八年八月十三日、左大臣家に八講有。佛法僧と云鳥來て鳴ければ、よみて奉る長歌あり。略す。反歌に、

其人も君は告しもせしものをいかでか鳥のかねこしりけん

殿の御返事、左衞門尉仲忠御使にて、

　法をおもふ心しふかく入ぬればさとくもとりの見へず有りけん

靈元法皇四月十一日修學寺御幸、此度は當山へ佛法僧といふ鳥來り鳴よし聞し召れたきとて、おはします山の御茶亭にて、夜八ツ時まで御滯座。御製、

　聲をきゝすがたをいつの世にか見ん佛法僧のありし木末に

蝶夢云、去年の夏、美濃へ鵜飼を見に侍りしとき、愛知川の山に巢を食ひたりしと、此鳥の羽一片あり。麓の獵人鐵砲にて打たりしといふと語りにき。

　○塔影入屋(再考)

信州諏訪上下の社に七不思議とてある中に、上諏訪普賢堂に板の節穴多し。是に紙をあてゝ見るに、下諏訪の三重の塔の影、現然とその形移るに逆さま也。その間湖水を廻りて三里、直徑壹里なるべし。輟耕錄云、平江虎丘閣版上有㆓一竅㆒。當㆓日色淸朗時㆒。以㆓掌大白紙㆒承㆓其影㆒。則一寺之形勝悉於㆑此見㆑之。但項反居㆑下耳。此固有㆓象可㆒㆑寓。非㆓幻出者㆒云々といふも。諏訪に見るに少しも異ならず。又同書に、松江城中有㆓四塔㆒。西曰㆓普照㆒。又西曰㆓延恩㆒。西南曰㆓超果㆒。東南曰㆓興聖㆒。夏監運家乃在㆓四塔之東㆒。而小室內却有㆓一塔影長五寸許㆒。倒懸㆓于西壁之上㆒。不㆑知㆓從㆑何而來㆒。然不㆓常有㆒。或時見㆑之焉。又不㆑可㆑曉と云々。

爰に洛西九條村の農夫家何某といふもの、屋內に塔の影現ず。其家東寺の東南にあれば、其塔の影なる事明らけし。以前より有事ならんに、今年天明五年の春より專ら沙汰有て、夏の頃は我も往き、渠も行て、日々來客絕ず。その見るや先屋中を戶さして夜の如くし、庭に障子を斜に立るに、是に塔の移ること甚だ鮮なり。日色淸明の時は、もとより風鈴构欄まで四重の間細に見ゆ。輟耕錄にいふ所は、或は時

として無しといふに、此には朝にても晝にても夕にても、又は雨天にても、移る事更に違はず。但し曇雨の時は少し朧なるまで也。かくして初は亭主も心よく見せけれども、毎日朝より暮までの見物人に、後には困りて容易には見せざりけり。前文にもいふごとく、唐土にもありといへども、是程慥に見る事なし。日影に映ずるものならば、日光東西に臨む時は、その有無、又は斜形にもあるべきに、いつの時にても變ることなき事一奇事とすべし。越後には八ツ坊主七ツ御瀧とて、山形の影變態するなどあり。是日光の周りに隨ふて移す所また變ずると也。

○山城離宮細男

山城西南離宮八幡宮は、豐前宇佐より王城守護として、初て影迎ましませし地にて、後に今の男山に遷坐在し故に、山崎を離宮と號す。京畿に至らん人、必ず爰に參詣すべし。昔は社前より橋有て淀川に渡せり。此邊の津にして往來繁く有しかども、今は橋本の名のみ殘れり。故に男山御神事に山崎頭といふ有て、此地より祭事せし事も見へぬ。此八幡宮の左右の檻の戶の上に、半身の木偶人二ツ有り。必ず心を付て見るべし。甚だ奇げにて、又曾て諸國の宮社にある事なし。此由緒宇佐八幡緣起に曰、神功皇后三韓を征し給はんとて、旣に筑前の國香椎に在しけるに、住吉大明神は老翁の形を現じ、御軍導きましまさんとて告給ひつゝ、異國に渡海ましまさんには、先干珠滿珠の二顆を龍宮に借りて征伐し給はんには、安らかに三韓歸伏し奉るべしと也。皇后いはく、いかにして是を借り得べきや。翁云、此國磯鹿島に安曇磯良といふもの有。かれを召出し、龍宮に行しむべし。此童は常に細男の舞を愛せり。是男良とも名付たり。それをなさしめば、招かずしてみづから來らん。皇后云、誰か是を舞べし。翁の云、供奉の人に音樂を奏せしめて、翁立て舞奏づ。時に忽然として、磯良舞人の姿をなし、淨衣を着し、たび脛巾し、皷を頭にかけ、袖を顏に覆ひて隱し、龜に乘て海上に出來りて倶に連舞ふ。皇后則ち御妹豐姫〔割註〕今肥前一宮淀姫明神是なり。川上の宮とも申。山城淀に祭れる所同じ。」をして磯童に仕はせて龍

宮に往しめ、かの二顆を借り得給ひ、遂に三韓を降伏し給ふ。〔割註〕事は日本紀に詳かなり。〕斯て歸朝の後、兩顆は肥前國志賀明神是也。〔割註〕志賀又鹿島とも淸音。〕三代實錄云、每年春秋香椎宮の祭日に、志賀泉良男十人、同女十人來る。風俗の樂を奏し奉るとあるは、則ち此舞の遺風なり。その山崎の木偶人は、この細男の遺風なりと、今南都春日の若宮の御祭りに供奉せる中に細男とあるも又同じ。今諸社に三韓征伐の船の繪馬に、玉を捧げ持たる老臣これなり。山崎の御使神事記に云、細男といふ有二兩人形一。是則武內高良の兩神也。

○水無瀨宮

山崎より西南八町に水無瀨離宮の跡あり。今も後鳥羽院の神靈を崇め奉る殿あり。其神靈に仕へ奉れるを、則ち水無瀨殿といふ。宅地あり。御門常に鎖して、每月廿二日の外開く事なし。此院隱岐にて崩後ましまして、其後はかの島にあり。この帝天性和歌の道に秀でさせ給ひ。

見わたせば山本かすむ水無瀨川ゆふべは秋と何おもひけむ

など御製有けるもかくなりけれど、今さらにおもひ出奉る。御砌の庭に杮の木と栗の木とを植置せられて、常々御會有し。今の世連歌に花の本と稱し、狂歌に栗の本と稱號する由緖爰に起るなり。此地を帝常に愛し給ひ行宮となし給ひしとなり。此中門右の方の柱の上に銅の網したる手の形あり。因にいふ、文祿のころ、石川五右衞門とて世に聞へし盜賊ありけるが、手下の者どもを具し、此御舘に押入らんとするに、神靈のおはすればにや。忍び課せざりしかば無念におもひ、勇氣を猛く押入らんとするに、忽ち身體縮んで、此中門の內へ入る事能はず。流石の强賊なれども、天位の尊さに驚き、後代のしるしにとて、自ら手の形を墨にぬり、此御門の柱に殘しおきぬ。恐れても恐るべき事を、其跡今に右の方の御門柱の上に顯然たり。宸に日月地に墜給はざるの威驗、仰ぎても猶有がたし。因にいふ、或說に、治承年中、熊坂長範といふ盜賊の張本、諸國を横行し、或時小賊共を召具し、紀州高野山に登り、僧坊を掠

め取らんとす。然るに大師の廟前に詣で、忽然と感激の心を生じ、則奪ひ取るところの財物を返し、自ら齒を打欠て懺悔の歌を詠じ、自ら是を書して殘しおけりと、

高野山峯のあらしのはげしくもこのはをのこせのちのかた身に

嘉栗云、このはをのこせ後の世までもと覺えたり。其上予が聞しは熊坂にてはあらず。近きころ大坂に有ける强盜の張本なりしものゝ歌と、また惠心僧都の御妹安養尼の室に盜人の來りしが、その德に感じ掠め奪ひし衣服を返し奉るよし、或は蒙求に梁上の君子などいひし事もあり。人として羞惡辭讓の心なからんや。殊に況や萬神守護ある皇祖の天德におゐてをや。

○金龍寺櫻

攝州東生郡古曾部にあり。此寺もと千觀（內供奉）律師開基にして、則同人の歌。

邂逅に見るだにさびし世の常の深山をおもひこそやれ

されば後の邂逅山とて名所なり。又此に世に聞ゆる入相櫻とて名木數株有り。今は古木なれば大樹にして花殊に麗し。新古今集に、

山里にまかりて詠侍りけるとて　能因法師

山里の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねに花ぞちりける

此歌より俗に入相櫻、入相の鐘などいひけらし。東野州いふ、入相の鐘に花の散にしにはあらず。入相の鳴頃に花の散けるといふ心也。また增抄云、山寺の春の夕暮はいかなるものぞと來て見れば、別の事はなし。只入相の鐘に花の散る計りなると也。此歌は古曾部の上の金龍寺にて詠けるとなり。金龍寺の撞鐘の撞木の跡に櫻木を植て、しゆもくの當る樣にして、入相の鐘をつくに、花の散るこゝろにしておきたるは、誠に異樣の事なりと云々。今花の散る頃は、そこ爰に散る花を風の吹まはして、庭の眞砂子地にいくむらとなく花の浪立けしき、又なき景色也。元來能因此所の人なれば、古曾部の入道と云け

り。則この村の藪陰に碑有。〔割註〕林學士の書たる也。」別所村は草庵の跡なり。後拾遺集に、同法師の歌に、

我やどの木末の夏になるときはいこまの山も見えずなりゆく

其地によくも叶へり。又花の井とて舊井有。寺の麓に麻茅原と云所あり。いづくにもあれ。萱薄有。原野を麻茅原といふなるに、此にその名ある事は、能因ある時、此邊を通りけるに、若き女の屍ありしを見て、

淺茅原まとふ黒髮きのふまで誰がたまくらの上におきけん

と詠たりしかば、屍動きて、莞爾と笑ひしとなり。則この處に埋みて印を立となり。是は俗說なるべし。後拾遺集に、同法師の陸奥へまかり下りけるに、しのぶ郡といふところにはやう見し人を尋ねければ、其人なくなりにけりと聞て。

淺茅原あれたる宿はむかし見し人をしのぶのわたりなりけり

是らをあやまりつたへしか。

○方丈室（東山銀閣寺にあり）

京東山銀閣寺にあり。此處茶室四疊半の濫觴なり。足利義政公退隱し給ふ地なり。故に東山殿と號す。公常に攝家花族武衞の長臣等を招きて茶事專らなりし故、今の世古器などを時代ものと賞して翫ぶは、此頃の名物也。寺內に二重閣あり。公鹿苑院の金閣に准じて造作あり。銀箔を鏤め給はんとし給ふ內に薨じ給ふ故、箔下地の黑漆のみなれど、今に銀閣とはいふなり。元來四疊半は、天竺維摩居士の室四方一丈なりしを摸する故、方丈と云。茶事も禪法によりしものなれば、もつぱら靜なるを貴ぶ。依て尊貴といへども、小室に屈伏して和を重んずる也。文祿元年、太閤秀吉公朝鮮征伐の時、肥前の名古屋往來に、十月晦日のあした、博多の富商神屋宗湛が家に請じ奉り茶を進む。饗應有り。御相伴は織田有樂壹

人、御かよひには小寺休夢なり。〔割註〕黒田孝隆の叔父。」御茶の時、休夢一人候す。次の間大名前近習數十人侍りし。この家今にそのときのまゝ也。表口わづか十三間半あり。天下の主を屈請し奉りし家なれども、いと狭小なり。今の世國主郡主等を請待すとも甚狭し。其頃未古儀質朴の風俗有りし事をしとふ心ならん。人は此家の形勢を見て、かん賞せんと貝原氏云へり。

○澁谷古碑

京清水の瀧の元より歌の中山を越て、山科へ出る道を澁谷越といふ。先にて大佛の後道より來る濘（すべ）石越と一ツとなる。其道の左に、〔割註〕嘉栗云、路の左にあらず。」右手也。古き石塔多し。中に年號月日願主も戒名もなくして、洛陽牡丹新吐蘂の七字をほり付たり。予度々立よりて見るに、下にも傍にも年號又戒名願主等もなし。文字の體幽にあれど淺くほりし故消て見へわかず。承應の數に推はかられど、隨には云難し。往來の人も立留り見れども、今の爲に建たるといふ事も知れず。皆人不審せるのみにて、只尋常の石塔なれば、强ちに事を正すにもいたらず。或時予ある禪僧にこの事を問ひしに、答て是何の子細あるに非ず。只亡人の爲に設けたる也。その語は古尊宿緣集に、

東山五祖演禪師〔嗣法白雲〕頌不子萬法不侶

一口汲盡西江水　洛陽牡丹新吐蘂

塵イ

簸揚蘆勿處尋擡　頭以撞着自家底

佛照眞禪師語錄、妙心寺六世住尾陽瑞寺語應仁元年亥三月二十六日入寺。拈衣大庾嶺頭堤不起緣甚歸上座手裏頂戴。曰洛陽牡丹新吐蘂。

ある人曰、この古碑は有邦門院の下火の喝にて、萬壽寺の立る所歟と柿本寺といふ。

昔は僧は勿論俗も朴直にして、雅を好み異をなすにはあらずして、自ら如レ此今の人、態と雅を工み事を好んで、世の耳目を驚かさんとするには雲泥なるべし。因に云、河州より大和へ越る峠に十三越といふあり。

俗說に、武烈天皇惡逆にまします故、侍臣等謀りて、火の雨降る事ありと、石槨を造りすかして入御奉り、侍臣女嬬十三人此内に入れ、則埋めて弑し奉る。その爲に、十三の塔を立たるなりと、誠に可ㇾ笑。武烈天皇の御時、いまだ我朝佛法なし。況や石塔をや。貝原篤信曰く、世に十三の塔を築く事、古への風俗に、佛法を信じ冥福を希ふ。父母の死したる後、三七日より七々百ヶ日、一周忌、三年、七年、十三年まで十三度を十三佛に准へて碑を建、塚の中には僧に佛經の文など書せて納めしなりと云々、又當時佛道を尊信する人、存生の內より法名を付、己が碑石をいまだ死ざる印に、文字に朱をさして、是を逆修と云。然るに其逆修といふ文字だに知らず。朱を文字に入たるを以て、逆朱と覺へたる後世者もあり。誠に拙ひかな。

○竹切の法

六月廿日鞍馬山にあり。往昔鑑眞和尙毒蛇を退治し給ふ遺風なりとぞ。先本堂を近江方といひ、觀音堂を丹波方として村人兩堂に集り、青竹の尺廻りなるを双方に立置き、若き衆徒二人立別れて、相圖の聲と俱に、彼竹を三段に切て、基より一の曲坂まで飛がごとくはせ行て、早き方を勝とし、其國其年豐年とす。後その竹武家は乞得て、大小の目釘とし、町家は除疫の守とす。さて夜に入て里人を壹人、本堂に連來り、大衆集り此ものを祈り加持す。堂の內外悉く燈火を消て眞黒にす。廿日の頃なれば、外面とても暗し。然るに衆僧降羅尼を誦し、蜜咒を唱へ、責かけて祈るに、夜の更るに隨ひて、物怖ろしくなるに、次第に行力加はりぬとおぼへ、彼者惱み苦しむ體にて、板敷をしと／＼上り／＼、或は高く、或は低く踏足音す。又修法の僧徒の中より、時々大音を出して罵るがごとく、誦經あら／＼敷なりもて行けば、祈り伏せられしとおぼへて、どうと倒るゝを期として、頓て燈火を點じて、このものを引かゝへ、後堂に行に、大なる水舟を設けて、其中へ投入、僧は襷をかけて冷水を汲入、骸を浮く計に溢せかけ、又引かゝへて、後の山なる池の邊に捨おき歸る也。此役をつとむる者、村に二軒有て隔年に出る。但し當役を

勤るものは、必ず短命なりといへり。

○杜鵑松

杜宇暮春より聲を發す。騒人初めて聞事を賞翫す。唐土にては初音を聞事を忌。是和漢に持扱ふ事の相違なり。吾國このごろは、東西の山村に徘徊し、樹下に耳を側てり。元來京洛中に聞事なきを以てなり。されど普廣院義教公、四條道場の內慶松庵の庭なる古松に、年々來り鳴事をきこしめして、毎度駕を枉給ふ故に、杜鵑松と呼ぶなり。その後も好事の人、此松の下に遊びけるに、ある年霹靂の爲に碎枯て、今は植繼なり。然して洛中にその鳥を聞ざる事を恨みけり。近年二條堀川邊、また今出川邊に適ゝ聞し噂あり。予此夏未だ初更過て、寺町淸和院御門外に數聲を聞たり。前にいふ佛法僧鳥などの出たるを見れば、また今洛中に杜鵑有こと珍らしからねど、人專らに此事をいひのゝしれば、爰に記して知らしむ。

嘉栗云、予が家油小路二條の下にありて、堀川の方へもつゞきけり。南隣は吉野や何某とて、蠟をさらす場にて、其南は土井侯の屋敷にて竹藪なり。大木の松有てこれに來る。弱年の頃、一二聲聞たり。其後松も伐たれば後は聞ず。今は藪さへも切拂ひて畑と成りし。予が幼年の頃は、大木餘程有し也。そのもとにひとつの石有て鵺石といふ。鵺の腰かけたりといひ傳へたり。松をも鵺の松などいひし也。油小路押小路下る昆布屋の裏の塀の向ふに見ゆるなり。今はこの石もいかゞなりけん知らざる也。

因に云、天明卯の夏、天台の座主なる宮の叡山にいらせ給ふ供奉に、鵜川筑後守山中にて怪き鳥の聲を聞く。よく〳〵思ひ合すれば、日光の山中に啼所の慈悲心鳥の聲なり。彼山にては明らかに慈悲と鳴て、心と後聲長く引ける。この邊りのは、心といふ聲のわかちよく聞かざれば知れがたし。所は無動寺南谷の間なりし。京なる人は知らずやとの言葉により、貴嶺扇の主瓦全、頓て登山し、慥に聞たる邊

に、人々にも物して和歌を勸進せり。〔割註〕日光山の記に、慈悲心鳥と見へたり。〕

慈悲心と啼聲きけば鳥にだにしかぬわが身のはづかしき哉　　伴　蒿蹊

御佛のこゝろを聲になく鳥のすがたは人に見へずも有りなん　　小澤蘆庵

日の光高き御山にすむ鳥は慈悲心とこそなくべかりけれ　　鴨縣主祐爲

○音無瀧

此瀧は洛北大原庄來迎院村に有り。道より四五町なり。寺の前を通り細き山人の路を行先に左右貳筋あり。多くは此にて迷ふなり。必ず左に行べし。暫くにして瀧の本に至る。都て何國の瀧も、山深く入りぬれば、殊に物凄く、其音高く響き、落る水逆り飛ぶ故に、近く寄がたし。然るに此瀧は、岩面を摺落る水少しなだれたれば、更に其響はなし。高さ三丈餘、幅も壹丈餘と見へぬ。甚だ綺麗のみにて物凄き事はなし。京より三里に過ざれば、老人婦人とても艱みなし。當國に是ほどの美しき瀧有んとは思はざる也。往來もまた見物參詣あれば、春の日には八瀬、大原兩鄕を見つくし、京に歸る也。

都人聞かぬはなきに音無しのたきとはたれかいひはじめけん

新拾遺集能因法師の歌なり。都て諸書に此邊を小野と云へり。呂津川はこの瀧の下流二派となり、南を呂とし、北を律とす。小き流れ也。來迎院を魚山と號る事、唐土天台山の支山に大原魚山と稱する地あり。陳思王此山に在て、瀧水自ら呂律を調し、水音に曲譜を合るを沈思し、初て梵唄聲明を創造す。慈覺大師入唐傳來し、山門に傳へ給ふ。良忍上人是を中興し、當寺を開基の後、今に嗣で大原聲明の本山たり。故に地名も大原といへり。

嘉栗云、眞如堂に、引聲彌陀經といふ事有り。是當山と伯耆國大山とのみ傳はりて外になしと、元來八瀨、大原は守護不入の地なり。兩鄕東西南北に山を圍んで、京へ出る道僅に開けたり。每日女は薪を頂き馬を率て、京に炭柴を商ふ。大藏流小鼓一挺にて唄ふ是なり。小原薪大原女など通じていふ也。

秋の日に都をいそぐ賤の女のかへるほどなき大はらの里

拾遺愚草は定家卿の歌なり。

○年取島（丹後に在り）

丹後田邊の府は、慶長年中細川兵部大輔藤孝の居城也、〔割註〕後號幽齋、法印玄旨」其頃中院中納言通勝卿、〔割註〕後號也足軒。」故有て此地に遷されまし〳〵、田邊近き小島に住せ給ひけり。領主幽齋和歌の因み深く交り給ひ、折にふれて訪ひたまひ、御物語まめやかなり。ある年の十二月晦日、歳暮の賀として、海濱の寒氣も御いとゐなく、雪の舟さゝせて尋入給ひ、いとしめやかなる御物語に夜のいたく更ぬるを忘れ給ひて、歸城有べしと御暇申させ給ふに、いつしか夜は明渡りて、元日の海の氣色めでたかりき。主客大に打笑ひて立別れ給ひしとなり。夫より此島を今に年取島と號けり。誠に未曾有の雅事なり。又慶長庚子の秋、石田三成近國の勢を差向て田邊の城を取圍みけり。此とき細川の從者は、多く越中守忠興に具せめれて關東にありければ、城中殊に無勢なりしかど、幽齋つねに守り正しければ、二男玄蕃允興元、郎從には沼田上總介なんど、諸卒心を一致にして、幽齋の下知に任せ、手痛く防ぎ戰ひ日數を經たり。然るに通勝卿は、この二とせ餘りのあいだに御ゆるしを蒙り、都へ還り上らせ給ひしかば、今は也足軒ときこへけるに、此事を傳へ聞給ひ、急ぎ此騷劇の中をも厭わず。田邊に下りたまひ御訪ひの事まめやかなり。殊に幽齋より歌道傳授の事殘りぬれば、斯る烈敷折節、身に甲冑を帶し、手に采幣を握り、軍の驅引の中に指南せられしは、誠にゆゝしくも又有がたけれ。傳授の書物取出し口授有し所へ、敵より手しげく鐵砲を打入しかば、一の玉兩公の前に落來りし。也足軒おどろき給ふ氣色なく問訊あるに、幽齋とりあへず、

爰をさして打鐵砲の玉きはるいのちにむかふ道ぞこのみち

と詠じ給ふ事こそいみじかりけれ。かく其道に長じ給ひしかば、この戰ひ大内に聞しめして、忝くも驚

きおぼし召て、西三條實條、烏丸光廣兩卿を勅使として、田邊の圍を解べき旨仰事有しかば、敵も恐れ畏りて、京都所司代前田德善院の弟主膳を差下し、圍を引拂ひけるは、世に有がたき文武の名譽なり。田邊城中に今も歌道相傳の所とて、古今の松ぞ有とかや。三光院內府公より幽齋歌道奥儀傳來の故なるが、ひとへに住吉玉津島の神々擁護とこそは覺へけれ。

○園原山(はゝき木)

新古今集に、坂上是則の歌とて、

その原やふせやに生ふるはゝき木のありとは見へてあはぬ君かな

基俊判云、件の木は、美濃、信濃兩國の境、園原ふせやと云所にある木なり。遠く見れば帚を立るやうにて、立より近く見れば、それに似たる木もなし。然れば有とは見ゆれど逢ぬものにたとへ侍ると云々。予友橘春暉此記有といふ。木曾街道の中、信濃國妻籠と云驛より飯田城下に出る山道にあり。一日路なり。はゝき木有とかねて聞しかば、罷り越しぬ。凡信濃は山谷の地なれば、わかれて此道はわきて往かふ人もなし。山道いと細く嶺聳へ谷深く、樹木森々と日影幽に、人里も稀なり。案內なくして行べからず。その間にアララギ村といふにアララギ多し。また廣瀨といふ村を過て、二里計山岨を行に、案內の者の云、はゝき木見ゆといふにぞ、目をとゞめ見れば、右の方なる山の七八合目に有。谷あれば樹木茂り覆ひて見へねど、水音高く聞ゆ。扨その木ある山は高さ七八町もや有べき。もとより此邊、麓より峯まで唯樹木生茂りて登り得べき事とは見へず。前は大なる谷を隔てたれば、遙に見ゆる計なり。そのはゝき木といふもの、世にいふ杉の形にして、枝葉透間なく簇り、大なる樅の木に似たり。其樅の木は此山にて拔群の大木なり。諸木半ば立延たれば、程遠けれど慥に樅と見定むべし。はゝき木は其樅よりもまたしげり。且大にして杉のごとくに見ゆ。案內者曰く、此はゝき木は、此山の神木なり。行人に慥に見ゆれど、その山に登り、或はかの木のもとに行ときは、只樅の木計有て、はゝき木はなし。又二三町

も離れなば、明らかに見ゆる也。されどその譯知らぬ旅人は、誠なりとは信じ給はずと語る。予もまのあたり見しかども、斯の如き大木隠るべしとはいかにも信じ難ければど、古歌に思ひ合せて、さる事あるべしと行過けり。

嘉栗云、飯田は則甲州街道筋なり。大タキリ小タキリなんど、いかにも難所なり。予甲州より京へ登る路の傍の右手に、清内路越の道有り。此路に園原はゝき木有と、所の者いふ。同所かしらず。澄月老人云、先年飯田より上るに、好士有て必ずはゝき木見るべしと人を添けり。さて坂の上なる所にてかくのごとくせよと教ゆるまゝに、左右の足を踏留めて見てあれば、向ひの山廣く眼下に見渡すに、樹木茂り覆ひてむらなき中に、箒を立たる様に諸木にぬきん出て、大木こそ彼箒木なりけらし。餘に並ぶべき木もなきほど也。去るに足踏留し足下一歩を違ひぬれば、忽ち見えず。あはやふしぎなりと、色々足踏直し見れども、再びなかりし。後年又そこを過るとて、くわしく見んと思ひしに、その坂登るとて忘れて見ず。其後も又通りし時も、坂下迄はその事のみ思ひ居たりしも、頓に心に浮ばずして通り過ぬ。これはいかなる事とも知らず。其事の残り多くて、飯田なる好事の人に此事を言遺して、その樹や有所など見定めてよと頼み遣はせしかば、一二三日を重ねて尋ねしかど、更に見當らずといひこしけるも又、あやしと語られぬ。

扨、件の木の有所より猶山深く風越峯などを打詠め、四五里をへて、暮頃飯田に着しぬ。中津川落合驛の邊の山をも園原山と所の者は云けり。今案るに、文武天皇(四十二代)大寶二年、始めて美濃國岐蘇山道を開くと、爰に云はゝき木のある街道こそ、往古の木曾通りなり。然るに其道に大タキリ小タキリなんどの險岨の地ありて、往來自由ならざるを以て、今の道は開かれにけり。そのゝち元明天皇の御宇、美濃、信濃兩國の間は、險岨にして通路成難し。始めて棧橋を造らるゝこと、國史に見へたり。されば舟橋にもあれ。棧橋にもあれ。かゝる絶地に橋造りては、必ず其所を守る人を置る。その守人の住る家をさし

て、布施屋とはいふなり。かゝれば信濃の國にも限らねど、此所は古名をうしなはずして、かく呼び來りし也。

一 多田院（攝州大坂より北五里）

攝州大坂より北五里にある當院は、攝津守源滿仲朝臣の居城を、則ち處の名とせる廟なり。一條院の御宇、長徳三年八十六歳にて卒去あり。遺言して曰、吾逝後全身を埋葬し、永く皇基を守護し、源家を擁護せんに、猶その懲し後世に顯るべしとなり。宏なる哉。今に至つて靈瑞時として現在す。國家事の吉凶ある時は、必ず御廟鳴動して數里に聞へ、人これを感知す。百四代後土御門帝文明四年、贈從二位を賜る。眞影有り。甲冑を着し、馬に駕せらる。廿四歳の肖像なり。前殿に安置す。又賴光、賴義、義家三代の祠を設けて、萬代の守護神とす。寔に其奇驗千歳の下に朽ずして、鳴動おそれて惶むべし。ゆへに御廟窟の疊石に所々開き響き見へたり。大坂の者はよく聞おぼえて、御廟の鳴動を知るなり。

鹿苑院義滿公集に、されば多田の鳴動を以て、四海の安危を考むによりて、私の尊崇甚しきのみならず。遂に公家の聞へいちじるしき故に、あらたに二位の位階を贈りて、更に千載の美談とせりと云々。多田院什物に白旗二流有。其文に曰、

見レ忠報レ恩　因レ功報レ祿　因レ義爲レ罰

予不有無　仁心來者　有二己覺一而已

貞純親王花押

同三行に、

敵者如二開花一。予者如二强嵐一。山嵐入二一陣一。眼前散一朝花敵

貞純親王花押

一 多武峯（將軍塚）

和州多武峰は、藤原氏の襄祖大織冠鎌足公の靈廟なり。始は攝州の北阿威山にありしを、定惠和尚歸

朝の後、今の和州多武峰に鎮座し給ふ。その靈像國家に凶事あれば、忽焉として尊像破裂し給ふ事、古書に見へたり。今の世とても其事同じ。幾重の扉あれば更に知るべからずといへども、忽然と南都にて破裂し給ふの巷説あり。夫を傳へ聞、別當の僧御戸を開き拜み奉るに、果して然り。則此事天聽に達しぬれば、奉幣使を下されて神慮を和め給ひ、衆徒又祈禱をなすに、自然と尊像元の如くになり給ふ。誠に末代といへども、此靈廟と、前にいふ多田の御廟とは、畿内の人定に見聞する所なり。然れば遠近の人必ず參詣を疎にすべからず。猶くはしき事は、恐多ければ記し難し。又將軍塚は、京都東山花頂山の嶺に有り。桓武天皇平安城の地鎭にとて、七尺の土人形に鐵の甲冑を着せ、將軍の位を授けて、此都を百世に傳へて無事に守るべしと勅し埋めさせ給ふ事、古書に出て、其塚の鳴動せし事歴史に委し。されば今も國家に障りある時は、さとし有て塚の鳴事。傍に住る人はしたしく聞といふ。

○櫻池奇驗

遠江國見付の驛より東南三里に櫻が池有。昔肥後阿闍梨皇圓とて、叡岳第一の碩學にして、則法然上人の師也。扶桑略記の作者にして、上なき人なるが。みづから二佛の中間に生を得し事を無念に思ひ、生身を化して彌勒の出世を待んと誓ひて、世に長壽たるは蛇身に如じと觀念し、既に願行成就して、臨終に此池水を掬して寂す。其時則かの池水夥敷動搖して、則此淵底に化蛇すと。〔割註〕此事法然上人の御傳にくわし。」今に皇圓墓ありて存す。池の周囘十餘町有て、池水藍よりも青く、常に滿て深さを知らず。自然に物凄くして池邊を行かふもの常に恐れて聲を發せず。此池の良なるところに蓮あり。花の咲頃、土民適に折來る事あり。その莖の長さ壹丈に餘りて、夫より下泥ある所迄何尺あるや知らずといふ。毎年春秋の彼岸中日には、志願あるもの近郷より來り、御供を獻じて祈るなり。其樣差渡し尺計りなる曲ものに御供飯を盛て、それに紙にて切たる幣五本をさしたり。其式の始まる已前に、池の良の隅なる社前に、〔割註〕櫻宮といふ、祭神不詳。小社なり。」社人來りて祓をなす。側に村人太皷を打て立たる

様尋常の祭なり。かくて時刻なりとて、所願の者兼て頼み置たる村の水練のもの、かの御供を取持て裸形となり、乾の方より池に入る。彼器を片手に搔抱き、片手は水を切て立游ぎし、池の眞中成と覺しき所にて、左右の手して、かの御供の器をずつと水中へ押入ると、そのまゝあはたゞしく向へ游ぎ渡る事、矢を射るがごとし。然るにかの御供飯を盛たる輕き器ともに水底に沈んで、再び浮事なし。さて次第々々に納る事如レ斯なり。年によりて多少有。或は十計より十五六、二十にも至る。數多ければ後は恐れて眞中にも至らずして、其中途にして納るも有れど、皆向地に游ぎ渡るに、其器物一つも浮上らず。又幣も曾て拔出ず。誠に物あつて水中に納め取るが如し。物凄く身の毛立計りなり。後五日十日、或は一月二月、又は一年半年を經て、器物のみ浮上るを取り歸りて、土民など朝夕の飯器などになせり。初めより其曲櫃に、年號月日願主の名も書付置ぬれば、これは誰納めしなり。夫は何某が納めし器なりとて、游ぎ行しもの次第に分ち取て、是を納るの賃とす。別に水練の謝禮はせざる事なり。若は稀に一旦水中へ押入たる器の、直に浮み上る事あれば、取上て後の山へ捨る。願主快しとせざれば、後の彼岸のこの日に、また供物を備へて池に納む。その日直に納替る事は成がたしとなり。昔より不思議なる事にて、いかなる故といふ事、先哲も知らざる所也。

○古戰場

今の世を以て昔を思ふに、建武以前の軍と云もの、いかゞ有けんかし。楠正成公の千早の古城、金剛山より十八町下りて森屋村より上るに、左右に小山有りて、中に道路有り。書にいふ所城山、高さ東にて百五十六間、西百二十五間、南百三十間、北は五十四間、城長さ百六十五間、乾より巽へ聳へ、根廻りは九百四十間といふ。籠城の人一族勝りて九百餘人と有り。寄手何十萬の多勢なれば、一擧に落べきにさはなくして、却て每度敗北せし事、太平記に見ゆ。いかなればかゝる多勢の、たゞ此大手ばかりに寄せしにや。大手は切所なれば、軍勢を進め難き事は見へたり。左右の山は險岨にあらず。後なる金剛

山、中途よりいかやうにも責べきを、安閑として月日を送りし事も不審なり。又是よりも源平の頃は、三百年も猶以前といひ、平氏は縉紳家の貴族なれば、駈ひきも圖にあたらぬ事多かるべし。殊に一の谷の籠城不利なる事、今見るも然なり。一の谷長さ四町餘、横廿間計、高さ十二間にて、只砂石なだれ落て、常に水などなし。二の谷長さ三丁餘、横十八間計り、高さ九間、此一二の谷の間四十間有り。三谷間凡二町あり。鉢伏峰三の谷の上をいふ。鐵拐が峰は一の谷の脇の高き山なり。鵯越とは此山の腰を通り、播州三木へ越ゆる道なり。内裏屋敷の跡は、一谷の上に臺地あり、廿四五間四方に過ず。その上を坂落し、岩石落しなどいふ也。此三ツの谷口より波際迄五十間計あり。是海道なり。敦盛の石碑も、この谷の西路傍にあり。大手は生田の森なれども、谷の皇居は更に要害にあらず。是なども猶不審也。千早城此一の谷とも甚だ手狹くして、久しく保ちがたき事は、今見ても知るべし。かく二所は世に知る所なれば、後に見ん人の爲に不審をいふ事詳に記さず。考ふべし。

嘉栗云、奥州松島の島々も、昔は浪高く上りし形見へ、沖の石といふも野中にあり。また北國安宅の關を尋ねしに、海濱に一村有て、所の人のいへるは、古への關の有し所は、今一里も海中なりと、實盛の墓も、今あるは後に築て、誠の所は遙の海中なりしと云へり。かく年を經ぬれば、山川の形替るものなれば、一の谷千早とても、往古の地理はいかゞありしや。今を以て古へを看るはなしがたかるべし。

○鳴門

阿波國と淡路國と向ひたる海の間僅に三十餘町なり。潮汐の奔涌鳴動、我國第一の迅潮なり。滿る時は南方の大洋より込入て、北方播磨海に入。出崎に國主の潮見の亭有り。海邊小島大岩多く石を疊む。浦邊に七八軒の漁村有り。潮時にあらざれば、尋常の海面にして漁舟そこゝに漁りす。かくて潮滿べき時來れば、段々に浪騷ぎ水沸出て、渺々たる南海の潮、一同にはせ入、俄に水渦卷沸返りて、見るが中に

南方五六尺渦高くなり、海底鳴動して雷のごとく、兩岸是が爲に打碎る計り恐ろしき氣色、梢木も動搖するかとすさまじ。只貮十町計りの間に、又方大岩つき出て狹く、石門のごときあり。爰にして潮勢奔騰して、南の方六七尺高く成りて、眞逆さまに北へ落下る事瀧に似たり。底より沸潮、さし入潮と戰ひて、岩石碎り計りに轟けり。誠に聞しに勝りておそろしく、すさまじき潮勢たとふべきものなし。潮頭上に湛へぬれば、鳴音もいつしか靜まり、海上もよのつねのけしきなり。又引汐の時は、中國の海に湛へし潮、また北より南海へ落る事、さし潮のごとしといへ共、その海底鳴事は少し。指入潮頭の猛威は無れども、引落す事の迅速なるは又變らず烈し。其潮の時乘かゝりたる船は、いかにしても引れゆく。北へ落る潮なれば、北風に帆を十分に保ちながら、潮に引戾され、手にすへたるごとく行。此時南より吹風なれば、一向に矢のごとくにして梶もきかず、却て船覆るなり。故に帆に風をもたせて跡すざりに潮に行なり。たとへいかなる船なりとも、少しも潮先に爭ふ事は成がたし。これより阿淡の間數里を經て小鳴戶といふを過て、中國に潮行なり。又周防國大島の瀨戶といふは、向ふに大島とて長さ三五里の島と對して、是もその間廿間計りも有べし。阿州に續きたる急潮なり。されど石門の如きはなし。東より潮さして西に落るに、潮盈んとするや、海底より沸騰する潮の勢盛んにて、海水相戰ひて巴の字をなす。その氣色阿波より廣くして、この所計り猛潮なり。

　嘉栗云、阿波よりせまき樣にも、予は覺へたり。いかゞ。又鼻栗の瀨戶も急潮なり。

然るに折ふし東より千石計りの船十分に帆風を持て、浪を裂て馳來る。船頭舳先に立て目たゝきもせず、波の上を見詰たり。かこおの〳〵立並んで帆繩を取り、梶取同じく梶柄をにぎり、互ひに一言も交へず、爰を大事とおもふ氣色、やがて彼巴の字の潮の眞中へはせ入りしやいなや、此大船に帆をかけたるを手にして、臼を挽が如くくる〳〵と三返計り引廻し、ヅイとはせ行事、誠に飛がごとく、須臾に數十町を遠ざかる程に、張詰めたる帆を其まゝに引廻す事、至て迅速なる、間に髮も入れず。少しもゆ

るみあれば、忽ち帆は裏打ものなるに、更に其透有事なし。誠に目覺しき壯觀なり。此外虫明迫門、今治迫門などもあれど、此貳ヶ所にならべて云がたし。中に音頭の迫門といふは是等に異なり。南方に出崎近く、わづかに大船二艘計並び通る程なり。東西の海次第に迫りたれば、常に海水動かず。淸盛公の白眼潮といふべき故に、船は指と引との潮の時ならざれば越がたし。常の時に來れば碇も入ず捨置ても船は更に動かざるなり。

〇那智山

巡禮觀音三拾三ヶ所の事、昔は一番を京の六角堂也し事、古書に見へたり。今は那智山を初番とす。すべて畿内の邊國十一ヶ國なり。然るを西國といふ事不審。取分帝都の人のいふべき言葉にもあらず。思ふに中世以來、關八州に又觀音靈場三十三ヶ所を創立して、坂東順禮といふ。されば關東關西と事を分ん爲に、西國といひふらしけめ。畿内の人のいひ初しにはあらじ。中にも那智山は、本朝無双の靈場にして、代々の天子御崇敬少なからず。大臣公卿女孀に至るまで、歩みを運び給ふ。就レ中後白河帝は、三十三度の滿山御供養の塔あり。又かたはらに和泉式部の塔も見ゆ。これ古き物語に、式部參詣の日障る事ありて、奉幣叶はざる事をなげきて、

　はれやらぬ身にうき雲のたなびきて月のさわりとなるぞかなしき

と詠じて悲み打ふしにければ、權現の託宣に。

　もとよりも塵にまじはる神なれば月のさわりも何かくるしき

と神詠ありて、目出度順禮しけるとあり。又瀧の側に塔婆木あり。太上天皇恒仁。〔割註〕弘安二年二月晦日。」初度と書たるなり。御諱は、龜山院に在せり。年號は後宇多院御在位なれば、御讓位の後行幸ましまし〳〵けん。三山皆社頭に禁殺生穢惡の石碑を立て、那智今は僧坊たりといへども、妻帶なり。那智の拜殿には、女巫並び居て、旅客の長途無難の祓をなす。那智の瀧の事、ひとの國は知らず。本朝第一な

り。麓五十町に下馬の橋あり。即瀧の末川なり。既に水音も聞ふ。華表より大杉の並木ある坂を上りて三門に至る。頓て先水音を留て瀧に行、瀧より數十間を隔て、岸の上に瀧見の家を構ふ。見上れば萬仭の峰より落下るは、たゞ白雲にして更に水とは見へず。山響き谷應へて人語を消す。水勢遠く逆り、面を向へ難し。仰ぐに愈高くすさまじきはいふばかりなし。然るに又その美麗なる事言葉に盡しがたく、古歌に三重の瀧と詠る事不審なるに、山家集に、那智にこもりけるに、此瀧の上に一二の瀧おはしますとて、住持に具して二の瀧の本へ參りぬ。如意輪の瀧と申と聞て拜み見れば、少し傾きたるやうに流れ下り、いと高く覺へぬるとあり。乍レ去斯る水上は天の河にや通じけん。その源は測りがたく知りがたし。その前に籠堂あり。役小角をはじめ先德の祖師瀧籠りして大行を修し給ひけんも、誠なるかな。因に云、阿波國の灌頂が瀧の事、前編に有。同國の棚野村の奧岩脇村に落星寺とてあり。〔割註〕俗星谷といふ。」昔此地に墜たりとて、星の殖三間四方計りの洞あり。星墮て石となりし事、其理古書にくわしければ記さず。此處の星石も、黑き丸石にてあり。是も我國にてその理はよく識りたれど、また外にある事なきなり。

〇竹生島

當島は本朝五奇異の東一なり。則琵琶湖の北邊にあり。山は巽に向ふ。此島岩石水晶多し。金輪際より涌出せしよしにて、往古より地震はなし。島の匝り六十町、山の高さ僅に十丈餘にして、四方高下無く、松杉茂り合て、社僧十坊あり。日吉百首に隆祐の歌とて、

目に立てたれか見ざらん竹生しまなみにうつらふ朱の玉がき

毎年三月三日心經會在り。是を島繫といふ。側に小島ありて手の屆く程なり。元來地底は本島と續きたる也。中世より湖水二三丈餘水增りしかば、今は彼一島切たるごとし。故に神事有て注連をもて繫ぐ也。近き年畿內旱魃し湖水減じて一丈餘、その時此小島の續きたるを見たり。石橋をかけて欄干もそれと

見る計、水面の下五六尺ほど也。此時海中にありといひ傳へし鳥居の冠木出しとなり。此島琵琶の覆手に應ぜり。因にいふ、堅田浮御堂は海畔へ建出して萱葺の小堂に、惠心の作の古佛千體ありし。今は角柱建て美麗の事と也。古佛はみな失て新千體佛を安置せり。

○假　山

王龜が詩に云、山川好處造化惜。不レ許二世人平地看一。されば貴人公子は、他國に遊ぶ事なりがたき故に、風景勝地を圖繪に見るのみ。依て文雅の公侯は、自ら亭宅の庭に所々の好景を摸寫して、その樂をなす。これを築山といふ。和漢ともに同じ。京都室町柳營の頃、殊に專らにして、又細川、畠山などの第宅皆是を造れり。今諸寺の庭に舊跡多し。洛に遊ばん人は必ず乞て見て洩す事なかれ。是又帝都の一奇觀たり。故に其豫めを左に記す。今の世庭を作るに、嵯峨流、四條流とてあり。紫野の大德寺の南四間は、昔大原梶井御門主の別院にて、湖水八景の假山有しに、應仁の期に燒失せり。水石の跡今僅に見ゆ。後の西山西芳寺の庭は、夢窓國師の製作にて、松尾明神は人夫の翁と變じ力を合せて作り給ふ處なり。山を用ひて頗る廣し。致景絶妙にして奇石多し。銘木多し。

嵯峨天龍寺方丈の後園、同國師の造る所、泉水の側に古樹有りて、雅景天然の如し。

同臨川寺の法堂後山も同作なり。

洛地龍安寺疊山は、細川勝元初めに造らる。今の築山は、東山殿同朋相阿彌の作なり。虎子渡とて大岩一ツに小岩三四ツありて、掃庭の眞砂地にして、樹木の景をからず。まことに絶妙の作意なり。

東山双林寺假山、文阿彌が庭も樹木多く川ひず綺麗也。小谷といふものゝ作なり。〔割註〕嘉栗云、大通寺の庭は、作り木計にて、方圓大小種々あり。〔勸修寺の假山は堂前にあり。弘法大師の作と云傳ふ。

一乘寺村曼殊院の築山は則御門主の作なり。同村別宮は、後水尾院の御別宮也。方二町餘の池有り。石橋あり。殊更楓樹多く。冬景世に殊なり。

紫野大德寺塔頭の庭尤美景なり。就レ中大川院の庭、相阿彌作にして、觀音石、虎頭石など、奇石世に知る所なり。これ元來、室町家の臣水淵氏第宅にてありしを、此に移せしとなり。この外大地本山宮方の御庭所々に古跡遺景絶倫多しといへども、容易には拜見なりがたし。江州三井寺の塔頭に名高き築山あり。猶委しくは行て見るべし。

笈埃隨筆卷之十

（一）洛陽名物器畫

洛陽の寺院六七月の間虫干有。皆名物を出す。是恐らくは天下の奇品といふべし。好事の人は東西に奔走して見ん事を求む。今爰に其一二を記して、他郷の人に告んとすること左の如し。

高尾山　六月三日より九日に至る。毎日物を替て干す。弘法大師所持の器並自筆之灌頂記一冊、同自畫山水の屏風、奇珍なり。又一切經の簾帙細密美麗、世に稀なるもの也。

栂尾山　六月廿一日より廿七日に至る。妙惠上人畫像、惠日坊成應の筆にして自讃有。鳥羽僧正畫粉本三卷、琢磨法眼十二天の畫、妙惠上人の入唐渡天行程并日數記自筆一幅あり。思ふに此記あるを見れば、妙惠上人入唐渡天の深志ありし事顯然也。春日龍神の謡曲に、明神の惜み留め給ふといへるも偶言ならじ。

妙蓮寺　後柏原院宸筆の法花經有。精絶也。

十念寺　佛鬼軍圖一卷有。奇品なり。

金蓮寺　一遍上人の書畫若干なり。

太秦廣隆寺　秦川勝の像有。異體なるもの也。

黒谷百萬遍智恩寺　淨花院等靈寶數多、就レ中圓光大師自筆の一枚起證文、此時拜見を許せり。黒谷に貝多羅葉有り。長さ五尺計。

本能寺　加藤清正朝鮮攻の時、帆柱に建たる日蓮上人の曼陀羅あり。清正感應の添書一幅。

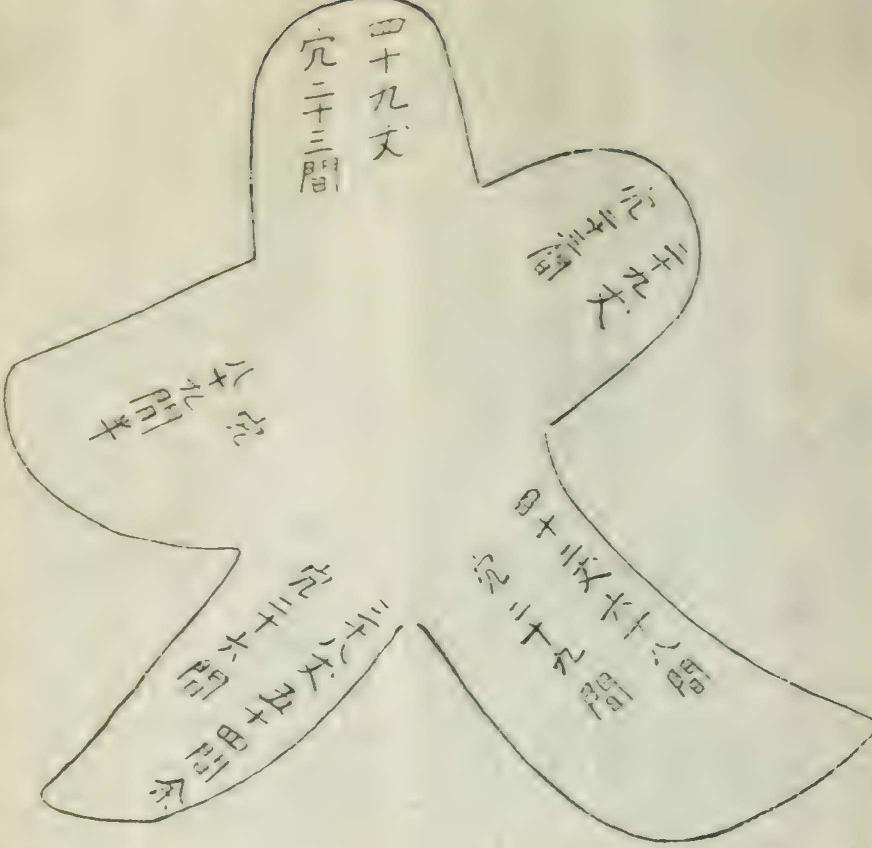
要法寺　八幡太郎義家の甲冑筥あり。眞の古物也。

本國寺　山谷眞蹟、古法眼元信の畫數幅あり。
妙滿寺　紀州(日高郡)道成寺の鏡あり。由來世に云へるが如し。
知恩院　圓光大師色紙形畫像、白川法皇御讃あり。四十八卷、緣起、土佐畫詞書、官家堂上御運筆、此函は古代のものにて、函の底に足利尊氏公寄進朱印あり。宋の徽宗皇帝御畫白鷹の圖、其外和漢の名畫數多あり。
守寺大雲院　後陽成院勅額有。織田信長公手づから貞安和尙へ賜ふ所の陳團、又玉澗山水の畫絕品なり。殘雪の盆石幷若狹盆一枚。
東山靈雲院　古法眼宿鳥の畫、人口に稱する所也。
妙心寺方丈塔頭　殊更書畫數多幷俵藤太秀鄕が蜈蚣を射し矢の根あり。
東　寺　弘法大師より傳敎大師に贈らるゝ書簡三篇。八幡宮の額、大師御眞蹟、其外所持の法器書畫若干。
南禪寺　古法眼淸瀧の圖、探幽飲水虎の畫、古法眼永德等の金地扇面の屛風壹双。
相國寺　閣上懺法に用らる松風小狐の鐃鉢、六月十七日に法事あり。元是江州佐々木家の寄附也。誠に其鳴ひゞき心肝に銘す。絕世の奇品也。
山崎寶寺　追儺鬼面二ツ、世にいふ打出の小槌等あり。
東山高臺寺　秀吉公の像開張幷什物數多、殊に山上の千利休の傘の亭、また奇觀なり。
天龍寺　宋徽宗皇帝の御畫、丹抱の達磨像は無類の名物也。夢想國師所持の法器、同墨蹟等あり。
伏見東福寺　長八間に幅四間の涅槃像、兆典司の筆なり。本朝無類也。其外、聖一國師の法物、和漢の書畫。
三條誓願寺　源平合戰の繪屛風あり。凱歌の屛風と號す。

嘉栗云、凱歌の屏風神泉苑にありて、保元平治の戰の圖かと覺ゆ。
龍安寺　法堂の天井抜龍。〔割註〕狩野永德筆也。世に傳ふる所、前の池に水を飲て後失たりとぞ。」
本法寺　雪舟畫十六羅漢、又古法眼が釋迦の像、其外牧溪子照寺の書畫、日蓮上人眞蹟數幅あり。
本隆寺　日蓮上人三判の題日、眞筆の曼陀羅法花八軸有。凡筆にあらずして、其裝飾美麗也。螺鈿の軸在珍奇也。日朗像は日蓮の弟子にして、此兩僧の曼陀羅有り。
大德寺　後醍醐帝宸翰の朗詠集、大燈國師の手書傳燈錄、牧溪三幅對、土佐將監が江州堅田の圖、古法眼が韃靼人遊獵の圖、宋の徽宗皇帝眞筆鶺鴒の繪、雪舟龍虎、六僧畫影古德賛語、其外諸塔頭圖畫夥し。能阿彌、相阿彌、曾我蛇足、小栗宗旦、土佐代々、古法眼探幽等の畫井井戸茶碗丸壺等の名品の茶器、筆記し難し。又一休和尚の所持の器物書畫有。
此餘寺院悉く、その宗祖の眞蹟は云ふに及ばず。又表具切の類世に賞する所の千鳥鴛鴦、南禪寺、本能寺など、みな其寺號を稱す。又印金竹屋町蜀紅、蝦夷にしき、小緞子等こま〴〵記せず。等持院、二尊院、七日間の虫干せり。智積院、金閣、銀閣寺又同じ。
建仁寺　二十八祖の畫像、南堂手書賛、其外祖師千光眞跡、牧溪の畫、能阿彌三幅對、又世に名高し。
南禪寺中　龍湫妙澤の不動畫、絕勝名品也。楠正儀の書翰、其外古書畫數幅あり。
都て長安洛陽の諸寺院、六七月の間各々累代の重器寶を虫拂ひす。但し宮門跡方みだりに拜見を許し玉はざるもあり。此餘は猶追て考へ記すべし。

〇大文字

東山送り火の大文字は百間四方有て、火數七十五なり。大の字頭の所に三把其次二把、中の辻に三把、惣薪の數八十把也。焚所七十五ケ所、生松にては薪の重さ一束四貫目、毎年七月十六日黃昏東山如意山上に此大文字に火を點ず。文字の筆法左の如し。



傳に云、弘法大師の筆作なりとも、又室町家繁昌の時、相國寺橫川景三の書くところなりともいふ。是館中よりの壯觀の爲なるが故に、一條通を當面とすといへり。凡麓の民夫、七月六日より薪を此山上に伐乾して、惣て數百束を設け置。其日申の刻よりこれをかつぎ登りて、其穴毎に積込、日の入るを待て、先上より初めて、一同に火を點じ走り下る。然して薪燃立て、忽ち大文字をなす。〔割註〕雨天なれば翌日にあり。」さて是を最一として、船岡山に船の形、松ケ崎に妙法、西山の鳥居一文字、北山に左文字いの字等を點火す。人々河原に出で、或は橋上にイみ、すべて高きに登りて仰ぎ見る。誠に二時洛陽の壯觀世に類なし。大津の人云。此夜湖邊の送り火誠に夥し。西近江、東近江遙かに目の及ぶ所十里餘、左右の火光は湖面に映して、浪を焼に似たり。故に洛と同じく、おの／＼酒食を携へ、高きに遊観すといふ。實に左もあるべし。肥後の國不知火を、肥前海邊の山々浦々にて酒食をもふけ、婦女を伴ひ、鼓三味線等にて見物すると同義なり

○大堰川

山城國嵯峨の松原またならびなし。嵐山常盤木茂り合て又高からず。大堰川の長流へ帯を曳るごとく、

渡月橋は打はへて虚空藏の堂半に立あらはれ、後は天龍蘭若臨川に對し、向ふの洲崎に四五株の櫻有。また蒼然たる松山の間々にも櫻あり。この方の岸にて櫻數株、一時に開きて多からず。又少からず。遠からず又近からず。見るに程有事、爰に知んぬ。折節下す筏有て一興(マヽ)を添ふ。雪月花の三亭綺麗にしつらひ搆へ、來客の遊宴殊に賑し。舟を借りて溯る事數町、又鮎を汲人は岩上に立て、またゝきもせず、網を搆へて水面をうかゞふも亦めづらし。川有り。橋有。山有。野有。花有。筏有。月によし。雪によし。納涼によし。四時の壯觀盡く極む。しかも市中は近ふして萬物足れり。何をかいわん。芝生に幕打廻し、歌舞の妓女は謠曲を盡す。依レ之予春に秋に度々彼所に遊歷し、傍に躊りて考へ思ふに、仙境の景色もかくぞあらんと思ふ。戸無瀨川は大井川の別名なり。川上に石高く瀨多くして、舟の通ひ難かりし程に、十七瀨川といふなりしとかや。但し瀧は何に依ての名なりや。貫之の斯る行幸はありしむかしと讀たれば、古き名所なるべし。然るに此河へ舟を通ずる事、昔は筏のみやうやくにして下りけるに、慶長十九年甲辰に、角倉了意といふ人、作州和計河にて艓舟を見ておもへらく、百川皆船を通ずべしと、嵯峨に歸り、大井川を泝り、丹州保津川に至りて是を見るに、元來水利にさとく、性として工役をこのみければ、終に台命を乞奉りて、慶長廿一年丙午の春より業をはじめて、先づ水中にある程の岩は、上に高く浮樓をかまへて鐵棒長三尺、周三尺、柄を二丈計付て、數十人繩を持て挽上げ、直に水中に投下す。鐵棒尖鋭なるに突碎かれて、大石みな散亂す。水上に出るは烈火をもて燒くだきて廣くし、淺きは石を疊みて川幅を狹くして、水を深くし、高低有て水の落る所あるは、鑿て下流と同ふし、秋八月に至りて功成りぬ。此に於て丹州世喜村より初て通ず。五穀、鹽、石材等、心に任せて積下るに、民其利を得る事今に絕ず。又其子玄三書を好み、儒學は惺窩先生を師としければ、互に招請て河上に遡る。先生則ち奇石激湍その名を改め、白浪花を散ずるがごときを浪花隈と號す。(舊名大瀨)渦卷て水先石を漲る所を觀瀾盤陀と號し、兩石相向ひて、其間二十丈計、猿子を抱きて石より石に飛越る所を叫猿峽と云。(舊名

猿飛)、石壁萬卷之書を積たるごとき所を群書岩といふ。(舊名出合)、又此所に石門鎸が如くなる廣さ、僅に五丈計にて、其高き事百餘丈なる所を石門關とも又禹門ともいふ。急流にて舟の飛が如き所有。是を鳥船灘と名づく。(舊名鵜の瀬)、此瀬丹州水尾に近し。相傳へいふ。清和帝常に御幸有て、遊魚を觀給ふ所也とぞ。岸に一大岩有。高き事五十丈計り、その岩下水勢平囘にして、激湛へて水の石を乘たるごとし。是を蒙山と號す。所ㇾ謂易に山下泉出るを蒙といふをとれり。遊覽の地爰に止る。また鉅石あり、方三丈計、その面削るがごとく岸に聳へたり。鏡石と號す。此川下に浮田社有。世に傳ふ。丹波上古は湖なり。その水赤し。故に丹波といふ。大山咋神此を穿て水を決る故、水涸盡て土地と成る。依て社を建て鋤を神體とす。即今の松尾大明神是也と云々。

○楓　葉

夫櫻有所は、また楓もあれど、山城國伏見の東福寺は楓樹のみ有て、曾て櫻なし。是徹書記の櫻多ければ、遊人來て觀樂の地となるべき事を厭ひて、花木は花伐られけり。(割註)嘉栗云、今は寺中に一二樹有し樣に覺たり。可ニ再考一。」眞に和歌の好き人にてありしに、かゝる事また法の爲にはいと貴し。然るに今初冬、通天橋下の紅葉、殊に勝れて古木數株也。其頃は朝より暮に至るまで、雅客文人酒肴を携へ、爰にたのしむ故に、自然と茶店を設けて飲宴を助く。谷の左右燕席を敷て賑ひぬ。そもそも紅葉は、すべて照葉をいふめれど、今はなべて楓樹とす。春の花に色を爭ふもの外になし。就ㇾ中高尾栂尾を專一とす。京より北三里道尤よし。麓の村口に至る。左右に分れ路有。先右に行べし。半道計にして谷川に橋あり。渡りて栂尾寺に入る。此橋上より谷に添の詠も奇異なり。楓樹眼下に數株あり。佛殿妙惠上人の廟など拜して、三尊院の庭を乞見るべし。今渡り來りし橋を斜に見下す谷川の景色、楓葉の美しきは、實に世に類ひなからまし。扨もとの橋を渡りて、山に谷に添ふて又一橋有り。是槇尾山なり。門內殊に壯麗にして、本堂巍然たり。參詣の歸路又橋を戻り渡り、山徑あるに添ふ谷に付て下る事十町計り

にして、高尾の門外に來る。同く橋有。橋の前茶店多く、楓樹の下に立つらね酒肴を商へば遊人多くこゝに屯す。この橋より酒肉女人を禁ず。かくて門内數百歩に樓門有。夫より所々參詣所ありて、文學堂もこゝに有り。右の小高き地に撞鐘あり。これ所謂三絶鐘なり。銘文は橘廣相卿、菅原是善卿、書は藤原敏行也。向ふの方少し低く行所に地藏院とてあり。此庭より遙に所々の岩山等も見へ、山茂り谷深くして、殆仙境の思ひあり。谷の向ふに楓樹數株有り。錦を敷がごとく、水潺々として伐木丁々たり。此山の楓樹ことに折る事を禁ず。村に出れば家土産に望乞べし。既にしてもとの橋邊の床几に憩へば、風景に恍惚として歸る事の期を忘る。一日にして三尾を盡すなり。此頃の夜雨また面白し。古人多く雨を感賞せり。

むかしおもふ草の庵のよるの雨になみだなそへそやまほとゝぎす

と長嘯子も詠ぜり。唐土にも陸放翁が夜雨の詩、錦繍段に載たり。閑栖を助るもの雨にしくはなし。しかはあれど花紅葉の壯美に愛て、今はいふものなし。殊に時雨のふりみふらずみ、また奇なり。定家卿も、

いつはりのなき世なりけり神無月たがまことより湫雨そめけん

と稱ありし歌より、時雨亭とて名高し。されどその舊跡所々に有てさだかならず。應仁記に、千本通歡喜寺に、（今般若院の境内也）定家葛の墓有りといひ、長嘯子叡山詣の詞には、柳原の邊、今の相國寺の中に時雨亭も有しとぞ。長嘯子のころほひ毎年八月廿日には、好たる人々、秋の半も過ぬべしといふ句を、一文字づゝ初に置て歌よみ訪ひしも、此ころ成べしと云々。これ塔中普光院に石塔有り。〔割註〕今妙覺寺三昧の中に、式子内親王の墓有りて、かたのごとく定家葛まとへり。」又衣笠山、松原村、嵯峨二尊院後山、また常寂寺厭離庵ともいふ。今按るに、時雨は高きに見ざれば詮なきもの也。定家卿の歌は、時雨知レ時といふ題詠なれば、その地といふは後人の鑿說なるべし。拾遺愚草に、私の家にてと有

を見れば、相國寺中なる事明らか也。又湫雨を見んは高きにあり。先年の冬の頃、梅畑の山邊に茸狩しけるに、折節いたく時雨しければ、凌ぐべき雨宿りなき山の尾崎なれば、打屈み居けるに、後山よりもて來る時雨の、煙のごとく靄のごとく、一しきりづゝさも細やかなる風に吹まはされて、くる／＼として洛中の方へさつとふりゆく。幾度といふことなく、みなおなじ氣色也。誠にかゝる奇々妙々成る事、又見し事なし。北山時雨の樣恐らく外にはあるまじとぞおもふ。

○宇治川

平等院の上より名とす。此川むかしは同院の前より甚だ廣く西へ流れ、中に槇の島など有しも、今は地續きなり。此島專ら網代などをかけて漁せしを、興正菩薩其罪業を憐み、是を濟度し、布を晒す事を教へて業とせしめ、その殺生の具を取集めて、宇治川島に埋めて其上に石の塔を建給ふ。俗に浮島塔と云へり。近きころ寶曆年中の洪水に、宇治橋も落、此塔も崩れたり。其中二重目に一筥あり。四方金物を打て、中に紺紙金泥の小經あり。數百年を經たれば、紙朽たれど開かるゝなり。無量壽經一卷、法華經九卷、今橋寺にあり。凡十三品程あり。經は銅の筒に入、開卷の所すこし朽たり。また黃金の小佛抔出たり。今皆橋寺に有。誠に古代の物也。因にいふ。橋寺に宇治橋の碑有。是は中古橋詰に石垣につみ込しを、近來涸水の節見出して、橋寺に引上、三分一ほど朽たりしを、古書より見出し、龍草廬補ひ、通圓茶屋に額にして、古書は文粹に詳載にあり。扨平等院の樓門を北向に建られたり。故實、大江匡房卿若冠の時の博識たりしと諸書に見えたり。されば賴政の謠曲に、源平の兵、南北の岸に打臨みてと謠ふは是なり。今の川は巽より乾に流れたれば、東西の方に近し。是太閤秀吉公の時、今の巨椋堤を築かせ、川筋を北へおとし、豐後橋を掛られしなり。その以前は南都へ行人、京より木幡を越えて、六地藏より宇治橋を渡りしなり。今は伏見豐後橋を越、かの堤を通る故、左右皆大沼也。故に木幡の關も名のみ殘り、驛舍も古歌にいふ所のみ。宇治橋の三室戸の觀音より巽一里に一村有。槇川といふ。此上に喜撰が

嶽あり。頂上に二間四面計樹木なし。遠近眺望の景地なり。即喜撰が栖し大岩洞あり。按ずるに、猿丸を尋訪しなりといふ事をおもふに、皆我國の地仙といふべき輩なり。岩窟山頂雲に聳へ、尋常の人の須臾も居べき所にあらず。宜なる哉、古人も兩子の事跡、始終詳にいはざるにこそ。

○大倉谷

播州赤石の近所に大倉谷といふあり。往古後漢の献帝遠孫十五代阿多倍王我國に歸化し、此地に住み地主となる。姓を大藏と賜ふ。其頃の天子明石の月御覽として行幸有しに、大藏氏參候し、行幸を慰め奉るにぞ、いかなるものと問はせ給ふ。しか〳〵と勅答し奉るに、又宣く、月を賞すなる明石の近きに、大くらといふ氏相應せざるものか。秋月と稱すべしと勅有しより以來、秋月を氏とす。後筑前の國に來り住す。其地を秋月と號す。〔割註〕原田氏又同姓なり。〕天正の頃は勢ひ盛にして、筑前後豐前の內十一郡の領主たり。秋月種實といふ。然るに太閤秀吉筑紫軍の時、嶋津家に屬せられしかど、始終叶ひがたく、楢柴といふ茶入を捧げて降參し、日向國に移りし也。因にいふ。江州石山寺に倉の坊と云ありし。中頃二條良基公秋のころ詣で給ひて、月見の御遊觀有りけるに、此坊の名月にくらの坊とは、孔子の勝母の地名を忌れしなど御文章ありて、

月は山風は時雨に鳰の海

の御句にて、千句興行ありて石山千句といふ。今も其寺はあれど、山僧古へを好まで、名をかへて何某院といふとぞ。されば前にいふ楢柴の茶入といふは、もとは肥前松浦民部大輔所持たり。或年松浦氏財用の不足の事有て、秋月種實の古器を好まるゝ事を聞知て、使者を以て代金百兩を賜はらん事を告、種實悅び得心の事を思ひ、金を請るに三十枚は有合しかど、殘り七十枚なし。亂世の時なれば、上方の通達も自由ならず。よつて領分の筑前後豐前の富家に申遣はし、又近國他領にて求めんとあれど、調はざりしかば、是非なく人をして京都にさしのぼせける。その間かの茶入は、松浦の士三人、秋月の士五六

人、甘木町安長寺内の地藏堂に籠置て、晝夜きびしく守り居るに、程經て上方より七十枚の黃金を求め來り、都合百枚をもて松浦の士に相渡し、楢柴の茶入を請取けり。此時兩家の士立會にて地藏堂の庭にて、彼百枚の金を鑄崩して渡しぬ。これは其頃迄は、九洲邊にては金の眞僞を見知る者なかりし故燒て改めけるとなり。誠に其頃より古器を翫べる事斯の如し。かやうの事ども、今の世にはなき朴實なり。

○志貴山

此山大和河內の兩國に跨れり。則ち大和を表として、立田芳野の間より登る事三十町計り、聖德太子開基の毘沙門天を安置し奉る。補正成は此尊の告子なりとて、幼名を多門丸と云へり。額も正成筆にして、本朝には珍らしき寺號にて。朝護山孫子寺とあり。山上甚壯麗にして、一旦松永彈正此に籠城し滅亡の時、諸堂も燒失せしを、太閤秀吉公再建結構なり。〔割註〕城に多門といふあるは、松永爰に初めて造るゆへ、その名ありとぞ。」此沒落の時、松永常に祕藏せし平蜘といふ釜を打碎き、炎中に投入て自害したり。是跡に殘し置けば、後人の重寶とせん事の無念なりといへり。是とやせんや、非とやせん論じがたし。されど生あつて祕藏すべし。死後の妄就愚ならんか。爰に雅俗に二旦(マヽ)有べし。細川玄旨法印の家に、千鳥の香炉は、天下に名有重寶也。或年の秋八月十五夜、蒲生飛驒寺氏鄉名にあふ良夜を無下に明さんはとて、千利休を相具し玄旨の亭に入來せり。法印大に歡びに堪ず。饗應有て物語りしめやかなり。折しも月隈なく冴渡り、いとゞ興を盡せり。氏鄉は咄の序に、兼て主の調度に千鳥の香炉とて名に聞り、祕藏の事なるべけれど、よき折節なれば見まほしきよしを申されけるに、幽齋答へて、今宵は便なし。また折こそ有ぬべしと出されざりしを、氏鄉强て所望有しかば、箱の內より香炉を取出し、灰を除きて氏鄉の前にさし置れぬるは不興に見へたり。氏鄉手に取て見、甚だ賞翫有しかば、さしていらへもしかゞ\なかりし。氏鄉歸りていぶかしく思はれければ、或時此事を紹巴に語りて、幽齋は極めて人愛和順にして、仁厚なる人なるに、其夜の會釋こそ心得がたけれと有しに、紹巴打かたぶきて、幽齋公は誠

の歌人と覺へ候。扨々かくも優にはおはしますぞや。これ順徳院の御製を思ひ出し給ふと見へたり。

清見がた雲もなぎたる浪のもへに月のくまなるむら千鳥かな

といふ秀歌あれば、今宵は便なしとの給ひ侍るにやと感賞しければ、氏郷大に悔ひ恥て、わぬしに問ずば、彼老人のいたく深き事を知らで過ぬべし。誠に和歌は我國の風にして、人の敎も有上に、かゝる用捨さへ時によりては知るべき事にこそとて、夫より玄旨法印に親近し、風雅歌道を學ばれしとなん。先にいふ、松永が城跡に焼米石出る也。伯州名和の古城、筑後草野の城跡發心岳、肥後菊地郡不動倉の跡、筑前須川村、同四王寺跡長者跡などにもあり。酉陽雜俎に云々。焦米石は乾陀國尸比王の倉庫、火の爲に焼て、その時の粳米なり。瘧を患ふものに與れば、忽ち瘧落ると云々。此等にても是を試るに實に驗あり。

○兒島

備前國兒島は郡の名なり。東西凡十里、南北二里、昔は海中の離れたる地なれば兒島といふ。今は陸に相續きて、古城の跡は下津井といふ濱邊なり。藤戸の海上の事、盛衰記、長門本平家物語には四五町計と有り。平家物語に二十五町といふは非也。長門本に月頭には東が瀨となり、これを大根川と申。月の末には西が瀨となれば、是を藤戸の渡と申と云々。今は浦の男も墳も、浮洲の岩も地續に成ぬ。〔割註〕今は浮洲の岩なし。秀吉公伏見の城へ取寄せ置れしに、後は醍醐三寶院の庭にうつされ今にあり。」されば、かく地變じ海も埋もれて、其時のやう更にわけ難し。盛綱の馬鞭村長の方に傳へ持てり。蚌蛤の月の夜と闇の夜とは虚實有道理歟。又爰に海苔を取るに、朔日より十五日迄は和らかに、十六日より晦日までは堅しと、此浦人の云し。太平記に有る兒島三郎高德は、此所の產なり。先祖は高麗の人なりしに、唐の爲に亡され、爰に來り住せり。故に兒島を氏とす。其氏族三家有しかば、三宅氏とも稱せり。寛文の頃迄は、彥島といふ所に高德の廟ありて、左右に旗を持たる士と楯を持たる士と二人あり。中央に高德の

像、甲冑したる有しと、いつの頃よりか荒廢して其像も今はなしとなり。

○安土總見寺

江州安土山は織田信長公の古城跡也。今寺と成て捴見寺といふ。公の諡號也。今はその子孫なる俗姓より相續す。寺領貳百石にて禪宗也。大手の橋の門に、湖海漫々下捴見寺と書し額あり、これ則ち建部源内筆也。方丈に座すれば、琵琶湖を眼下に見て眺望限りなく、遙に比良、比叡を仰ぎ、俯しては孤村簇々として、水面の漁舟は落葉に似たり。誠に額面の文字中れる哉。我國の城内に五重三重の樓あるもの天守といふ。則信長公、この安土城に樓を建られしを權輿とす。是全く要害の爲にあらず。信長切支丹の法を信ずる事深く、其宗の佛を祭れる爲に建られたり。故に天守といふ。天守とは其宗の本尊の名なり。今は其字を避憚りて殿守と書す。義尤宜なり。信長常に此城にありて、京都を守護し給ふ故、そのころは大に市町と有て繁昌の地なりし。今は田家のみ有て、山上はこの一寺のみ。ある年の春三月京に入洛中を通られしに、童部ども遊び居たるに、花見戻りの人々、おの／＼花の枝を手折もてり。童部ども跡より付添慕ふて、高聲に花一本たもれ啼子にやらん、花をたもらばよき花たもれと、おの／＼罵り行。是今にも兒童の諺なり。信長此事を聞給ひて、大に感賞し、誠に都下の優しき小兒とても、かくのごときかとて、安土に歸り給ひて後、城下の兒童どもに此詞を云習はしめ、家士をして花を持たせ取らしめ、市中を往來せしめて、其言をいふ小兒どもに與へて、日々其通りせしかば、いつしか風俗とはなりぬと、

○外山里

名所舊跡も山崩れ地變じて、或は川筋改りぬれば、岡となりて辨へがたき事有り。又古名の新に文字の異なりたるまた多し。津國も國號にはあらず職名也。大江岸は、今大坂の八軒屋の邊なりと、實にも今城郭の邊、石町などいふ地は、岸といふべき地勢殘れり。この濱際に神功皇后の御座石有り。〔割註〕今

座摩宮の御旅所あり。」靈石なり。此邊まで海船の上りしと思へば、それより五里、淀川上の今枚方といふ地、神武天皇日向國より東征のとき、御船にて上り給ふと見へて、史に白肩津とある是也。
右に云大江岸は、八軒屋より南につゝぎ、今の下る町天王寺迄の岸と覺ふ。爰にいふ御旅所も、むかしは座摩の本社ならん。

渡邊や大江のきしに宿かして雲井に見ゆる生駒山かな

是東方を眺望の歌なり。生駒山は鷲尾山の上なる高峰也。又大和より見てよめる詠歌に、西行法師、

秋篠や外山のさとの時雨るらんいこまの岳に雲のかゝれる

河内を常に往來する人、秋篠を通る每に、外山の里はいづくにやと問ふに知るものなし。廿餘年問て止す。或年老農夫逢て、又其所を問ふ。老人の云。秋篠や外山の里の時雨らんといふ歌によりて、問ひ給ふらめとて、田隴の上に連登りて指さして敎へていふ。その里今中山といふ。近代中山某といふ人、代官として來り給ふ事有しより、改て中山と呼びなせり。その事この邊の村長某といふ人、和歌を好みてよめり。我にその意を語りて、外山の名是より亡ぶべし。若後年問人あらば、必ず語るべしといひし。我十五六歳より今六十餘歳に至るまで、問ふ人を待たるに、今年初めて其人を得たる嬉しさよとよろこびにけりと、京師の醫某語りにき。

○天拜山

筑前福岡の府より西南に高き山あり。俗に天拜山といふて、菅神この地に左遷し給ひ、讒奏せられし事を恨み憤り給ひ、天に告文を捧げ、三日三夜此峰に足を跱て祈り給ふに、天も感應ありてや、讒者悉く雷の爲に震死せりと、故に此山を號て天拜山といふと、按るに此山藻鹽草に天山といふ名所なり。

雨山のあたりの雲はうちつけにくもりてのみぞ見へわたりける

本名天判山といふを斯く附會せる也。〔判註〕嘉栗云、天判山といふ本據何にありや。書出し置たし。」又菅

神の此祈の事は、元來讃岐國に在せし時、旱魃甚しく、一國の流水枯涸て、民庶大に歎き悲しむ。菅公是を患ひ給ひ、告文を書して雨を乞給ふ事三日三夜。天感應有て瑞雨降る事三日、民其恩徳に潤へり。この事を牽合せしと見へたり。此山武藏村の上にありて、〔割註〕嘉栗云、この武藏村讃州何郡といふ事書出し置たし。文のつゞき筑前と紛はしきかと云々。」頂上には天滿天神を崇めて社内に大石を安す。又麓に龍王瀧あり、傍に高き石あり。菅神瀑布に遊び給ふ時、衣を掛おかせられしとて衣掛石といふ。川中に石碑有り。詩を彫て立。左の如し。

天判峰頭仰二彼蒼一　願心成滿放二威光一
御衣薫レ石變成レ塔　五百年來流水香

正平廿年二月廿五日　願主大僧都信聰謹題

是南朝正平の年號も、今を以て見れば三百餘年に及べり。石の不朽たる世と倶にす。因にいふ。脊振山は筑前一國中の高山なり。上宮迄二十三町、四方の國々諸山連綿として眼下に見ゆ。豐前彦山、竈門山、夜須郡の古所山、皆高けれども此山に及ばず。故に秋の日の晴天には、對馬、朝鮮の地もよく見ゆる也。神功皇后三韓征伐に初めて社を建給ふ。〔割註〕宴曲抄の玉林苑に出づ。」山中所々靈跡多し。書寫の性空上人も日向霧島山より此山に移住し給ふ也。貝原氏常にいへる事あり。西國往々に靈山勝地なれども、偏僻の處なれば、その奇勝景氣も知るものなしと恨み歎かれたり。

○宿驛

昔京より諸國へ任國の守、又は調貢の官使往來の宿驛、その地に名だゝる豪家を撰みて旅館とす。今迚も驛路にあらざる地はかくのごとし。その亭館を主長といふ。令義解に曰く、凡驛各置二長一人一取下驛戸内家口富幹レ事者上爲レ之云々。これなり。又多く長の名に婦人を呼事、もと旅客の勞を慰んと讌興を設る事なれば、婦人出て饗せり。其旅客皆貴孫公子なれば、歌舞をも手馴、和歌をも詠得て、才有て艶な

る女子を撰みけり。然るに保元平治以來、世中事繁く、武家の往來のみあり。假初にも數百人の同勢を召連られしかば、婢女を多く抱へ置て、其用を辨ふる事になりぬ。今の本陣、脇本陣などいふは是なり。元來惣追捕使賴朝卿鎌倉に御座有し後は猶更也。東海道、東山道、專らの事ゆへ、宿驛も名に高き、その中に靑墓の長、池田の長など、源平の間に聞ふ。西國筋に於て曾てその義なし。是武門の棟梁關西に在すをもつてなり。中にも遠江池田宿の長者遊屋が娘に、侍從といひしを、内大臣宗盛公御寵愛有て、都に召置れしに、故鄕の老母、遊屋を慕ひ度々御暇を申上しかども給はらざりし。然るに春の頃歌を奉る。

いかにせんみやこの春もおしけれど馴し吾妻のはなやちるらむ

と詠しに、宗盛公憐に思して暇給はりぬと、今は謠曲に侍從を湯屋とせるは、母子を誤りしなり。また湯屋も熊野（ユウヤ）といひしを、音にして遊女湯屋抔と誤り來れり。考へ見るべし。此ほどに湯屋抔いふ詞有べからず。況や女の名にいかゞ。

嘉栗云、舊事記に伊弉諾尊黃泉平坂に至り給ふといふは、出雲國伊賦夜坂なりと、又伊賦夜坂に、意布屋權現坐す。中は菊理姬、左右は速玉男、事解男也。紀國熊野權現に同じと、伊賦夜伊布也。熊野ともに通ずと、神代卷藻鹽艸の註にあれば、遊屋の詞古へあるまじきともいはれず。

其後三位中將重衡卿、鎌倉下向に、此宿に泊り給ふ。侍從重衡を見奉り、日頃はつてにだに寄給はぬ人の、けふかゝる所に入らせ給ふもふしぎ也とて、

旅のそらはにふの小屋のいぶせきにふるさといかに戀しかるらん

と詠みて奉りしかば、中將返しに、

故鄕も戀しくもなし旅のそらみやこもつねの住家ならねば

中將梶原を召され、只今の歌の主はいかなるものぞと問給へば、梶原申は、君いまだしろしめし候はず

や。八島の大臣の寵愛有し侍從と申女にて候と、事の様を委しく語りぬと、今天龍川の東の藪の中に石塔あり。又池田の渡りとも、池田の宿ともいふ。平氏重盛公歿後、入道淸盛公我意驕慢の事ども多く、剰へ逝去有しかば、源氏に心をよする人多く、殊に關東筋賴朝公に志を密々に運ぶ輩傾き語りけるを、母の遊屋聞て、老病を申立て無理に暇を乞しかども許し給はざりしに、和歌に愛て永く暇給はりしなりとぞ。

○岩　橋

和州篠峰にあり。この山は攝河泉の地より見れば、東の方連山の中に、殊に二峰傑出す。南方を葛城といふ。又金剛山ともいふ。その北方の山なり。舊記に、役小角兩山の間に石橋を渡さんと、山神に示しけるに、あへて速にならず。小角怒つて山神一言主神を呵す。神云、我形甚醜し。故に晝出難く、夜を待て橋を懸るゆへ遲く成と。小角いよ〳〵怒つて、神を縛繫て山谷に禁しむと云々。此心を、

岩橋の夜の契りはたへぬべしあくるわびしき葛城の神

と詠ぜり。この岩橋顯然とあり。平石村より登る。此石の濶サ五尺計り、又地より出たる所凡七八尺、右の方少し缺たり。並河氏いふ、上若㆓架版㆒者四兩。端稍隆(ヤヽタカシ)似㆓欄臺㆒。形勢將㆑及㆓南方㆒。實天工也と云へり。河州古市宿より川を渡り、山の麓に行也。其道端に近年石碑を建て弘川寺を敎ふる也。此寺西行法師終焉の地なり。和歌連俳の志あらん者は必ず參詣すべし。石橋を見て山上より南へ下れば又近し。元弘川寺に役行者の開基なり。山内も廣し。今より三十餘年前、慈雲といふ法師、その墓の側に草堂を安じ、閑居して西行上人の志を繼て、櫻數株を植ぬ。自らも此庵に行ひ澄して、則此に入寂せり。西行上人諸州に斗藪し、或は深山幽谷に靜座有しかば、舊跡も所々に多けれど、臨終の地なれば、一度は參詣を遂べし。彼上人の事、世に知れる事跡は略しぬ。

○高野山

紀州高野山の靈場なる事は世に皆知れる所也。大師の御廟昔は寶塔たりしが、寶形の堂として南向なり。惣じて一山の中に七所の御廟あり。祕する所なれば略す。但し今の御廟は、延喜年中觀賢僧正開かれし地なり。禪定洞といふと野山名靈集に記せり。御廟の右には六角の收骨堂あり。これ諸國より親族の死骨を收る堂なり。此骨を納る事、無住禪師の沙石集、又虎關の元亨釋書に、惟蓮法師母の骨を首にかけて、熱田宮の門外に臥して、明神の示現を蒙りし事などありて、往古より納めし事なりき。また不斷に萬灯を供養する事、和漢に聞ず。大師の御願文に、於二金剛峯寺一聊設二萬灯一萬華之會供二兩部大曼陀羅聖衆一と云々。御入定の後、中頃萬灯會頽廢せんとせし時、祈願上人大願を發して再興せられしかば、高野明神、形を現じ和歌を示し給ふ。

我あらばよも消はてじ高野やまたかきみのりの法のともし火

夫より後今に怠轉なし。新葉集に如願法師、

高野やま曉遠くまつの戸にひかりをのこす法のともし火

などを詠ぜり。誠に中華にも又と有がたき靈山なれば、清淨いふ計りなし。諸人の糞穢はこと〴〵く谷川に流れて少しも止まらず。別して女人魚肉を禁ずる事嚴なり。然れども界外に女人堂とて一の休庵を建置、夫より内門戸を設けざれども、婦人は恐れて入得ず。此天明四年三月廿一日は大師の九百五十回に當らせ給ひて、一山の大法會なれば、諸國より參詣の貴賤引もきらず。山内群集して踵をつぐが如し。殊更晴天なりしに、午時の頃俄に空かき曇り風さわぎ雨篠をつく。こはいかにと、山僧を始め參詣の騷ぎ大方ならず。いづれ斯る變異は、非常の戒めならんと、山内の群集を改めしに、怪しき二人の僧あり。鼠色の服に同じき衣を着し、頭巾笠を冠りたり。怪み改め見れば、年頃五十有餘とおぼしき比丘尼にて有ける。頓て女人堂へ連出し、山法のごとく笠頭巾のかぶりものを取放し、杭を打てそれを繋ぎ置て、終日參詣往來の人に見せたりし。此尼泉州の者なりしと云へり。ふしぎや其事發見せしより、又

元の如く天色清明になりにけり。誠に恐るべし。又尊むべき事也。既に五十歳にも及びぬれば、愛執不淨の身にもあらねど、大師嚴重の戒の奇妙なり。洛北高雄山も女人禁制なれども、毎年三月廿一日は參詣を赦し、江州三井寺も七月十六日のみは女人を入門せしむ。

○羅城門

夫羅城門は平安城の南門也。古代西國より京師に來る。播磨路より神崎を經て、山崎通りにして此門に入る。洛中の惣樞なれば、至つて大樓也。其舊跡は千本通九條の南四塚町東側武家の裏に、礎の石中六尺餘も下に埋れたり。瓦は往々掘出して、人々硯となして持るあり。此門至て高大なりしかば、異形のもの栖家とせし事、都良香の新柳の後句を、此樓上より次韵せし事、或は茨木といふ鬼童の住しなど、古きものにも書置り。〔割註〕往古樓上に多聞天を安置せしが、今東寺にあるは是也と〔〕此門は平安城計りに有しにあらず。いまだ此京無き南都の京師たるときも既に有けり。天平十九年六月、此門にて雩有し事見へたり。拾遺集神樂歌に、

　銀の目貫の太刀を懸佩て奈良の都を出るは誰子ぞ

と詠ぜし也。其舊跡今の山府の東北なる田間にあり。適耕作のものその礎を見る也。弘法大師に鴻臚館を賜り東寺と成しとき、此門をも南門に用ひしより、今に羅城門といふ也。因にいふ、攝州の北に茨木といふ村有り。其民家に一男子を出産す。胎を出るや否甫廻り、髪も齒も生て、その様三歳程に見ゆ。母は是を見てより驚て即死す。父もおどろき恐れけれども、流石恩愛にひかされてなさん事を知らず。見る人皆恐れて種々に申ふらしければ、父不便ながら山へ連行、谷陰に捨置て歸りぬ。其後何の沙汰もなかりしかば、狼にや喰れけん。熊にや取られけん。哀なりとのみ思ひ暮して年月過ぬ。既に三十餘年の後、この者萬事限りに煩ひにけり。然るに或夕怪しき形の者入來りいふ様は、我はそのかみ出生するや、すなはち谷に捨て給ふ所の童也。不思議に成長し、元より術業有て、人間に交らず。されども父此

度の病氣は又も快氣有べからざる事を、我よく是を知る故に、爰に來りて生得の恩を報ずるなり。心よく終り給へと、いと念頃に介抱なしけるに、その言葉の如く、彼父相果にけり。かの童則ち親族に暇乞して歸らんとす。各名殘を惜みて、　の團子抔して饗しけり。扨彼ものいふやう、我は東寺羅城門に常に住する也とて、門へ出ると見えしが行方なくなりにけり。此古事により、今に茨木村に七月十二日家每に黍の團子を食なり。世に茨木童子といふは是なりとぞ。

○天橋立

本朝に十二の絶景あり。田子の浦(駿河)、松島(奥州)、箱崎(筑前)、橋立(丹後)、若浦(紀伊)、鳰湖(近江)、嚴島(安藝)、蚶潟(出羽)、朝熊(伊勢)、松江(出雲)、明石(播磨)、金澤(武藏)と、斯の如し。其中に富士を云はざるは、田子浦より見ゆるに依て也。橋立は神書に曰く、陰陽の二神、天の浮橋に立て誓言し給ふと、其事相を爰に現す。天の橋立といふ島の長さは二千二百九十丈、廣さ九十貳丈、靈(クシ)の濱と號すと也。北海伊根浦より入海にして、周匝百町計り、眞中に橋立の松原、乾より一文字に突出て、向ふの地に及んとして切たり。此間僅二町計り舟にて渡る。向ふは宮津より地續にて文殊堂有り。改に切戸と云。橋立の松おの〳〵汐風に吹撓て高くは延ず。俯伏低て屈曲、自然の古樹なり。筑前の十里松、駿河三保松原、世に聞へたれど、この松林に入ては、福數町なれば左右の海見へずして、只尋常の松原の思ひ也。此橋立は廣き所も一町に過ず。狹き所僅に七八間にて、左右ともに海を見るは、誠に奇景絶勝なり。冬天氣荒浪烈しく、潮高く汐入ば、忽ち打切るべきやうなれども、其砂地を浪さへ少しも越たる事なし。故に浮島といへるも妄言ならず。昔鯨の入りたるとて追まはしけるに、いつしか向ふへ拔出たり。いよ〳〵浮島なりと、人も慥に知りぬ。此橋立より奥にて取りし鯑を金太郎とて、至て美味なり。先橋立を見ん志あらば、丹波より行て福知山の府より河守といふに、元伊勢とて座す。夫より普甲嶺に上りて、初めて橋立を眺望すべし。坂を下れば宮津府也。扨歸路に必ず由良越して京へ歸るべ

し。種々見所多し。因にいふ、浮島といふ所予が見聞せしは、日向折生迫の海に、回り廿町程の小島有り。青島共、齒朶浮島ともいふ。火火出見尊、豐玉姫、鹽土老翁を崇む。四時草木緑青にして、世にまれなる靈草を生ず。浪荒て高きときは、此島ともに高く、浪靜かなるときは常の如し。三月三日の外參詣を禁ず。漁人も常に舟を寄る事なし。此島の渚四五町の間に、神石常に浮びて所を定めず。交合波激と名付るなり。陰陽の二神の義ありと、日向神生記に見へたり。また備前岡山の前一里計りに、高島といふ圍五町計、神武帝暫く止りましませりと、故に一祠あり。此神門の潮來去に隨ひて浮沈すといふ。また一松あり。萬枝垂て其梢往々地中に入、土をかき退けて見れども、其梢末を見難しといふ。誠に靈松なり。予日向青島に兩度、三月三日に參詣せり。檳榔子の大なる數株、宮社の四方に有し。其外種々異草ありて、花うつくしかりしか共、島の法令默止し難く、取事止て歸りぬ。

○御　島

丹後田邊の府より三里にして、沖中に一島あり。まはり人家もなく只社のみ一宇あり、いかなる事にや。古來數斛の白米あり。又竈鍋釜も備れり。故に難風に逢し廻船、漂流の難船など、此地に漕寄せて助命する事多し。また漁船の風に吹放たれ、俄の異變ある時は、必ず此島に入て、五日七日とても日和を待て歸るあり。山に樹木も茂り、淸水も有て物足り。然して後その逗留の內、費せし米を持渡り、社頭に捧げ置くなり。故に其米減ぜずして、却て多くなる也。誠にふしぎの靈島也。故に人尊びて御島と呼ぶ也。因にいふ、北海の西邊には、朝鮮國の漁舟年每に五七艘ほどは必ず漂流し來る。多く長州侯の領浦也。其度每に衣服糧食を賜り、長崎より歸國なさしむる。皆漁舟なれば、或は二口三口五口に過ず。然るに去年天明四年五月、商船壹艘漂着せり。是は例の漁舟にはあらで、廿四人乘込し大商船なり。頓て役人立會、國法の御取扱等いと念比なり。然るに船中に一人孫吉男といふもの、前年朝鮮使に隨從し日本に來りし時、海陸江府往來は、諸大名方馳走役として人馬饗應等尤御叮嚀なる事を知りて、いつに

ても日本へ來れば、斯の如くする事とや思ひけん。長門逗留の中より長門へ送り遣はさる間、驕り恣にして、或は役人を罵り、或は往來の店棚なる器物を奪ひ取り、又は組下の者に申付て酒肴を貪り、人夫を打擲し、横行一ならず。剩へ同船のもの氣の毒に思ひ諫めければ、却て打伏せて傷る故に、道中大にもてあまし、やうやくにして長崎に送り歸帆させて、其亂行の次第一々、對馬守より朝鮮東萊府へ申遣しければ、夫々に糺明の上、犯頭の孫古男は梟首、その餘は次第に應じて遠島笞杖、または償錢等ありて、委く嚴刑の趣きを返事あり。附錄に載て此に略す。其趣かゝる瑣細の事より、際國の好を失ふ事を重んずといへり。夫事不レ審レ始。終生大釁交隣之道以レ無レ弊爲レ要。則跡類兇暴者。法宜ニ豫防一など見へたり。かの地より返書にも、弊邦民人之漂入ニ貴國一多般作如乎。〔割註〕擾亂ノ意ワルサナリ。〕聞不レ勝ニ駭痛一萬々分ニ其首從一各施當レ律多少。辭意載南宮覆帖。とて、罪科糺明の狀をそへて、其刑罰の樣を具に書記せり。又云、梟ニ示館門之外一稟ニ於嚴邊門一懲ニ亂民一其意是如乎、以レ此一々曉ニ喩於彼人等處一明日罪人行刑時。留ニ館頭一領ニ率諸人一一齊來見。甲辰九月初四日戌時下知狀とも見へたり。

笈埃隨筆　巻之十一

〇長　崎

此地元來深浦、また瓊浦と云。鎌倉右大將の御時、此浦を長崎小太郎に給ひしより以來、古名を改めて長崎とす。地勢南北に山連り、西北に繞りて海を懷にす。高鉾島門扉のごとく、湊內南北一里、深サ廿尋に至る。鄉內縱橫一里、後山に添て家居す。民口五萬とかや。西南野母山椛島に至る間十里の地限りなり。明曆元年松浦肥前守大佛狼機（イシビヤ）七座を築り。所謂太田尾、陰の尾、女神崎、白崎、高鉾、長刀岩是也。小瀨戶山（西一里）野母山（南七里）また東一里烽火山の三ケ所に狼烟の臺あり。おの／＼遠見番貳拾餘人、水主の內に屬せり。元祿十三年淸館を初めて建らるゝまでは、異國の商船、皆町々に宿しけるに、ものみだりがはしければ、一箇の淸館に置るゝ也。正德五年大岡越前守信牌を制して、商船三十艘、凡元祿六千貫目を限と定めらるゝ。又出島の館は寬永十三年に初めて建られ、紅毛人を移しおかる。又他國の船を入ず。同十八年平戶より紅毛船を爰に移されけり。夫より每年紅毛人江府へ拜賀を勤む。定例は正月十五日長崎を出立し、三月朔日江武御城へ拜禮、九月廿日出帆なり。出立、入津、出帆、此三度は黑田鍋島の兩侯を初めて、島原、唐津の兩領主は隔年の出張也。平戶、大村、五島の三領主は每年なり。其嚴重なる事、誠に武を帶、威儀整壯にして揚々たり。就レ中九月の出帆殊に美麗也。まづ長崎の地堺に一館あり。其日當役の〔割註〕鍋島公、黑田公。〕御紋の幕を打續ひて海路を守禦し給ふ。國守出張なれば、一家中武器を錺り、おの／＼草鞋を〆履て、其備へいと美々し。其餘の諸侯も又然也。礒には肥後の大守の早船の用意數艘舟戶を守り、スハと云はゞ馳出んと、加子は一整に片唾を呑居たり。程有て出島の館より歸國のカピタン。〔割註〕紅毛の首長。〕を在留のカピタン、小船に送りて出るに、本船よ

りおもひも寄らず石火矢を放つ、響き山谷に鳴わたると、一時に小旗、吹ぬき旗など、いろ〳〵赤く青く染たるが、はらりと顯はれ、風にひらめく。まづ珍らし。斯て船に乘り移り、暇乞の酒宴暫くありて、見送りしカピタン出島の館へ漕出す。又二番の石火矢を放ちて、本船より崑崙奴ども、手を打ち聲を擧て叫ぶは、陸に向ひて暇乞をなすなり。續ひて三番の石火矢を開て、出張の諸侯直に歸國ある。夫より碇上の炮、出船の炮なんど、其式の祝に放つなり。然るを世に紅毛船重くして容易に動かしがたければ、石火矢の勢ひにて船を出すといふものあり。笑ふべし。其船の大造に嚴密に自由なるはまた類ひなし。斯のごとくならでは、萬里の波濤を凌ぎがたかるべし。館門に制札有り。

一　傾城の外一切女不レ可レ入事

一　高野聖之外出家山伏不レ可レ入事

清館は大音寺(淨土宗)の下にあれば、寺内の高きより見れば、華人の體悉く見ゆ。見臺に書物讀あり、酒宴をなし、唄ひ舞ふあり。角力をとる。腕だめしする者あり。種々の樣子も、又珍らし。館中に聖の小堂ありて、關羽を祟り。すべて此館も、出島も、赤き青き小旗どもを立並べ、浦には華船數艘を繫て、みる所異にして、暫く唐土に遊ぶ心地す。又船々の艫に送相風吹、又は賓得など額をかけ、菩薩棚(關帝)にも額あり。文に波濤浪靜乘査去。紫貝黃金滿載歸など書り。

嘉栗云、唐船着岸すれば、直に四五人小舟に乘て、菩薩納とて、板の上に像をのせて、崇福寺等の寺へ逗留の中預け置なり。大波堤につけば、一人銅羅を持て打、一人は菩薩棚を持、一人傘をさしかけて、先へ燈籠を持行、此燈籠丸き籠のやうのもの也。油引にて天后聖母の四字を書たり。菩薩の左右の像は、一ツは立て鉾を持、左の手をかざし、今一人は同じく鉾をもちて耳を押へたるやうなり。是を順風寺千里眼と云。辻々橋々等にて銅羅を打立る也。長崎の小童多く仕步行ば桶のやうのものより、船の指かね抔を一ツ二ツづゝやりて行なり。

又市町に出る時は、通辭役人必ず相隨ふ。唐寺三ケ寺あり。興福寺、（開基隱元）、崇福寺（即非）、福濟寺（木菴）、此內より宇治の黃檗に轉住す。みな來化の唐僧なり。その外聖福寺、晧臺寺あり。春德寺は聖堂なり。向井氏祭主として、唐より渡る所の書籍を改む。福濟寺の關帝の堂前に、鳳凰、猿猴、蜂巢等の彫ものあり。是封侯の音響にして、華人の祝する所なりと、

　嘉栗云、此福濟寺の座敷より見渡す所の景色言語に絕したりとぞ。

崇福寺は堂門石階まで華物を持渡り、華人の手して造建せしかば、實に我國の事ならず。市中の橋ありて、石を以て切組て、橋下を丸く明て水を通ず。唐土のやうなり。惣町八十町每年正月二日より八日まで、奉行所に於て切支丹の踏銅版有。是を繪ぶみといふ。踏銅版と云は、銅の板に切支丹佛、又磔打首などの刑獄の圖を鑄付たるもの也。長壽に限らず、豐後日向等にもあり。是男女老若當歲の子までも踏する事也。鎭守諏訪大明神なり。每年九月十一日祭禮能有。〔割註〕諏訪といふ能を初番とす。」又神事灯籠、練物狂言あり。九月七日奉行所に持來る。紅毛人も唐人も見物す。棧敷あり。祭禮能も又然り。其練物等々年々十三町より出る。八十町餘を八ケ年に順廻す。寬永年間鎭臺牛込忠左衞門華夷交易の法を定められしより。今に至て然り。又京、江府、大坂、堺、長崎等に糸割府とて、豪族數十家に每年白糸二百三十三丸、黃糸二百六十七丸を元價を以て下し置る也。惣代として年限りに年寄のもの、長崎に相詰居る也。此地七月魂祭は、都て墓原は皆四方の山腹に有り。盆中おの／＼墓一所に挑灯二ツ三ツ、富る者は十も二十も燈せり。元來數萬の墓に數倍の挑灯なれば、夜は四方の山々みな灯火連る。十五日十六日は家每に墓參りとて、酒肴を携へ、先祖へ馳走なりとて、墓前にて終夜酒宴をなす。魚肉はもとより絃歌し舞唄ふ。在津の唐人は五十人六十人打連、唐寺に詣で佛を祭り酒宴して遊ぶ也。是を菩薩祭りといふなり。

　嘉栗云、阿蘭陀の寺は、向ふ岸の稻佐といふ所に悟眞寺とてあり。予長崎にある中、紅毛人一人死た

り。其葬式を見しに、臥棺と見へて、長き箱を黒繻子にて包みたる也。長崎の者と崑崙奴うち交りて昇く。付添紅毛はみな黒き衣裳なり。つねは白衣にて、凶事の時黒きを着す。日本の式とは表裏なり。

○櫻　鯛(味潟)

詞花集に、春をおしむ心をよめる。大江匡房卿、

　春來れば味潟の海の一かたに浮てふ魚の名こそおしけれ

とこれ櫻鯛也。歌の詞に、櫻とも花ともなけれども、魚の名おしけれといふにて櫻と知れたり。この事安藝國豊田郡味潟の海に今も其事あり。初夏の頃、此海に鯛魚の集り來て浮び傾し事、誠に醉るがごとし。國守より番船有て、夫を網して捕をいへり。海上に蔽ひ重り、其數幾千といふ事を知らず。然れども國制にてみだりに捕る事をゆるされず。その始を考るに、神功皇后三韓御征伐のため、長門豊浦津に至り給ふ。海路此味潟の浦に船かゝりし給ひ、御酒宴の御時、御盃のさけをしたみ給ふに、御船のめぐりに鯛多く浮み出て、酒に醉るごとく傾き浮くと、日本紀に見へて、夫より年々斯のごとくとなり。日本紀仲哀天皇二年六月。皇后(神功皇后)到二渟多門一。食二於船上一。時海鯽魚多聚二船傍一。皇后以レ酒灑二海鯽魚一。海鯽魚即醉而浮。而時海人多獲二其魚一而歡曰。聖王所賞之魚焉。至二于六月一常傾浮如レ醉。其是之縁也云々。此御紀には六月と見へたれど、惜春の意に、藻鹽草に、春に用ひたりや。

　六月や君がなさけに遊びめでうくてふ魚は今もありけり

とこれも鯛の名をかくし、古事をそのまゝに詠たり。今に國人は浮鯛といふ。春の末より六月のころまで鯛魚多く取る。俗に魚島といふ也。夫木集に、

　行春の堺のうらのさくら鯛あかぬわかれにけふやひくらん

と是も同じ。但泉堺の浦に鯛も多く、又知沼鯛と云魚多く取れり。西州にて黒鯛といふ。泉州知沼海に

出る所なれば、知沼鯛といふなるべし。すべて魚に國々の名産有れど、鯛を賞する事は、是實錄に出て、既に神代火々出見尊の御時、鯛の事あれば、〔割註〕赤白の魚を云にや。」高貴、神供にも奉りし事も宜なり。これ餘魚の及ぶ所にあらず。予親しく御厨子所預高橋家へ、備中の李山といふ人の送りしを食ふ。少しの肉といへども、其味ひ今に忘れがたし。

○琴彈濱、太鼓濱(丹後)

丹後伊根浦より外海へ通じて西へ出れば、穴文珠とて數重の巖覆ひたる岩穴有。元より海に臨みたれば、春夏の頃、小舟に乘入て尊像を拜すに、自然の文珠菩薩の石像顯然と在すなり。其邊にまた浦島太郎の釣せし腰懸石も有りて、小社に祭り置り。其地を西へ出れば白濱有。石を取て投れば太鼓の音をなす。又沙濱を踏立行に、琴の音を出す。その濱邊殊に奇麗にして、砂の中に貝の小なる色々交りて、花を散せるがごとし。爰を五色の濱といふも宜なり。謝在杭が曰、安定の西瀧道の谷中に、箏を彈ずる音あり。彈箏谷と云。又金陵の靈谷寺の東谷に、爰を踏時は空々然たり。手を以て拍てば、應じて琵琶の如し。依て琵琶谷と云。靈州に鳴沙あり。此地人馬の行通ふ沙に聲ありと、鳴沙川は砂州城南に有り。此砂干糖の如し。天氣清朗の時、自ら砂鳴る、音城内に聞ふ。その砂人足に隨て落て、一夜にまた〳〵山にのぼるといふは、本朝富士山の砂走の砂に同じ。因に云、禁裏石藥師御門(艮也)の内、京極宮と淸閑寺殿の築地の間に、雨降ける日、伶人近壽蝶夢僧と同道して通りけるに、足駄の音の地にひゞくを聞留て、近壽云、あやしやこの地は雙調のひゞきある也と云ける。家の人にして優しく覺てけり。彼敎待和尙の、下駄の音に苦集滅道の音ありと宣ひし、實にさる事も有なん。〔割註〕クツメシハ京東山六波羅。」多田左衛門宮川日記にいふ、山宿を出離るゝ途中に響く所有り。思ふに大石棺など埋し所にや、空々然たり。山州高野村毛人の石棺ありし所も又形の如く響ありしといふ。

○左　海

此津南北二庄あり。北庄は攝州、南庄は泉州にて、山名氏淸、大內義隆、此津に城を搆へしより繁花の地となる。その後三好修理大夫長慶、三好存保に命じて、河泉二ケ國の政道を司らしむ。其時初て廳館と稱す。此例にて于レ今泉堺の奉行所を政所と云。此地もとは今の長崎の如く、異國の商船入津し、大永、慶長の頃迄は、我國よりも異國に渡海しけるに、天文の末より制禁たり。その渡海の船も、京都堺の豪富の人公免を請し也。中にも角倉氏其首長たり。今京淸水寺觀音堂の上に、其時の海上安全の祝儀の繪馬二枚有て、何れも呂宋交趾の人と我國の人と、船中酒宴の圖なり。故に李時珍本草綱目を編集の頃、我日本にも來り、草木鳥獸を試し也。その藥草を摘取入の筐は、角倉に重器として今に在と聞し。また彼國の信券に、安南王府內監みし、示日本國義商角倉體之長助次右衞門等於ニ上阜ニ到ニ安南國ニ買賣之、仍留ニ我國ニ已從年餘、無レ作ニ非道之事ニ。累是良民買賣已完□許回本國之來年再將□載方貨卦家之茲示。

德隆六年六月初九日

先年異國往來之信券を見し事あり。

二寸九分　一寸八分

朱御印

自日本到
文趾國舟也
慶長拾八癸丑年正月十一日

斯のごとくなるゆへに、堺なる納屋助左衞門といふ者、天正の初夏に呂宋へ渡り、文祿三年七月歸朝し、堺代官石田主（杢イ）計頭政澄館に言上し、秀吉公へ活麝香（ジャコウ）猫二疋、蠟燭傘十挺をば献上し奉り。〔割註〕我國此時より初て蠟燭傘有なり。諸說有といへども、是權輿なり。〕又持來りし眞壺五十を御上覽に入れしかば、千宗易（利休）壺の好惡を分させ、おの／＼代付の札を以て、所望の諸侯町人へも下され　みづからも取給ふ。暫の間に助左衞門若干の利德を得たり。すべて天文、慶長のころをひ、

名譽の人多く此地に隱栖す。依て又自然と數寄者も出たり。先鼠樓里新左衞門宗椿（牡丹花門人）、隆達（早歌名人）、道陳（紹鷗門人）、松山新助、（割註）三好臣皷尺八早歌名譽。」小西如水、同攝津守、牡丹花（肖柏）、武田紹鷗、千利休、一休禪師、一路居士（ノ貫）等也。今堺南庄市村庄屋善左衞門方に一路居士の所持せし手捕鍋あり。又同所に畚掛松もあり。一路居士、一休和尙問答の句、左の如し。

萬里有レ道奈何一路　一休

萬事皆休如何一休　一路

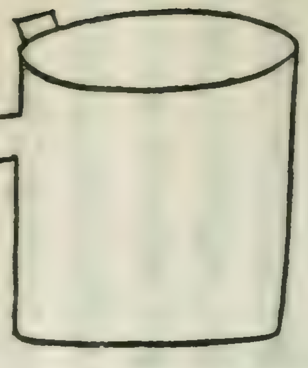
一路狂歌有。

手取鍋、己は口か指出たぞ雜炊焚と人に語るな

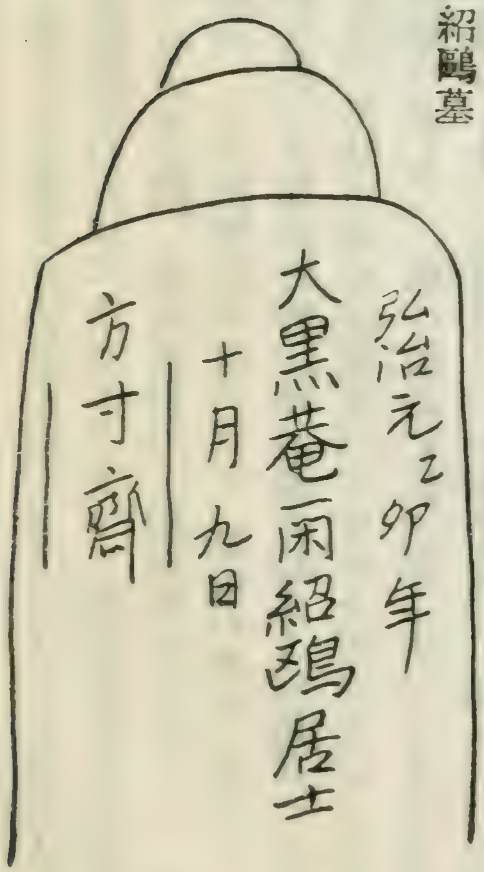
細川幽齋、此鍋をうつし鑄させて賞翫し給ふとき。

手取鍋己は口かさし出たぞ是を覽じやと人にかたるな

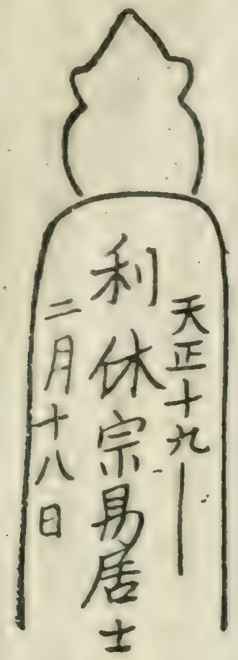
手取鍋圖



同寺に紹鷗墓



南宗寺利休墓　利休息女於龜建之



物の有無時を同じふせず、事變り業移る。往古の催馬樂は堂上にのみ殘りて、地下に知るものなし。今馬士の唄ふ小室ぶしと成行しこそ、雲泥の變り也。然るに舟歌といふものは、昔も今もかわらずして殊に風流なり。載て貫之の土佐日記にあり。都て海邊の諸侯の舟にて皆唄ふ。其中に紀州雜賀は此名を得し所なり。羅山子云、舟子ともみな健兒、手の所レ推、足の所レ踏、最負俯仰殆と擢歌相合といへり。和歌によめる棹の歌是なり。因にいふ、舟のへさきを飾事、土肥經平の春湊浪話に、廢帝の御時、能登といふ舟有り。載て風土記、國史にも見へたり。此能登船高麗より歸朝の時、風波暴に烈しく、既にくつがへるべきに、この船霊に乘りて目出たく歸る事を得たり。其時恩賜に錦冠を以てせんと朝廷に請ふ。是に依て舟に從五位下を授けられけり。其冠の制、錦の表絹(アシキヌ)の裏して、紫の組糸を以て纓とす。と日本紀に見へたり。今も船の舳を包み飾るに、もといふものを垂るゝは、此錦冠に紫の組糸を以て纓とせし遺風也。〔割註〕船唄唱歌は土佐日記を以て牽合すべし。」また船の名、上古には枯野、早鳥なんど號け呼けるも、中世より丸の字を加へぬ。是舟を愛して人になぞらふ也。昔物を愛して多く丸の字を加へし事あり。馬に節丸、犬に翁丸、鷹に綠丸、狆に花丸など號けたり。但し城の名所に本丸、二丸などいふは此類にはあらず。すべて城を築くの法、其形の方なるを惡みて丸きを好む故なり。故に其名有りと云々。又庭訓往來に、諸國の荷物宿を問丸といふは、其船々の着し荷を入る故也。

嘉栗云、問丸は舟の事のみにはあらず。すべて荷物を一丸、二丸といふ。長崎などにて唐船着之時、荷物をあらたむるを丸荷改といふ。その次を何々と品を改むるを精荷役と云也。

○三白川

京と肥後と陸奥三ヶ所にあり。中に奥の白川は、下野より入に、左右の山相對して國を境ふ。こゝに上古關あり。唐土交趾に比して、世の人鬼門關といへり。野奥二國の境也。川はなし。後拾遺集に能因法師のよめり。

都をばかすみとともに出しかど秋かぜぞふく白川の關

と詠しを本歌として、世々の作例に、みな月日を越して遠き風情をよめり。中院通躬卿の歌に。

春秋を過來てけふぞめづらしく雪わけこゆる白川のせき

因に大略を左に記す。誠にかの法師の顏を日にさらして後、此歌を披露ありけるも故ある也。

千載集に、賴政、

都をばまた青葉にて見しかどももみぢ散しく白川のせき

又續古今集に、寂蓮法師のよめり。

逢坂をこえだにはてぬ秋風にすへこそおもへしら川の關

又新拾遺集に、隆博のよめり。

歸るさは年さへくれぬ東路やかすみにこゆる白川のせき

白川の關を越し時、能因法師この關に名を留し事をおもひ出して、宗祇法師のよめり。

行末の名をばたのまずこゝろをや世々にとゞめんしら川の關

又淀の城主、永井家の臣佐川田昌俊のよめり。

都出し花の袍に露をきて月をやどせる白川の關

武藏野の限り露の行末分盡し、下野國黑髪山の麓、宇都宮まで下りしに、那須野殿原鉾楯合戰最中にてえ通られず。遺恨すくなからず。と前書して宗長のよめり。

音にのみ聞てぞ歸る秋かぜの吹だにおくれ白川のせき

便りあらばいかで都へ告やらんけふしら川の關はこへぬと

と讀しは、かの岑參が馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安と賦せし同日の論也。誠に遙なる旅情おもひやるべし。愚秘抄に云、橘爲仲奥州の任にて下向のとき、白川の關に至り、裝束も改め、僕從までも

きらびやかにして通りけるを、下部どもいとふしんしあへりけるに、爲仲が云、いかにぞさしも名高き白川を見苦敷體にて通るべきかと答へはべりし。誠に優しき風俗の人なりしと云々。又多く京の白川にて讀るも、遙に心を用ふ。大番果て下り侍りけるに、花の梢見捨てがたく覺へければ、〔割註〕嘉栗いふ、此言葉書の大番と有事いかゞ書かたあるべきか。」平光幹よめり。

白川の梢にとまるこゝろかな都をいづる花のあけぼの

又隱士岡本宗好、京の白川にこもり居て詠る。

のがれ來て住ば都のしら川も浮世に遠き秋風ぞふく

〔割註〕これは爲章の聞誤り也。この歌、廣澤長孝にて、住吉千首に出て、門人長雅の望川の庵を訪ての歌なり。」

又民部卿長家のよめり。

東路の人にとはゞやしら川のせきにもかくや花のちるらん

以上、山奧の白川をよめり。又肥後の白川は關にあらず。川尻といふ所也、檜垣の姥の墓あり。蓮臺寺といふ寺、かの女の住し所と云也。彼家の集に。

年經れば我黑髮もしら川のみづはくむまで老にけるかな

近き天明三年辰の春、肥後國岩戸の觀音の窟の入口の上の山へ、ある人五百羅漢の石像を安置す。然るに窟の上絕地にして、階梯にも及びがたければ、石工を畚に入れ道具をもたせ、上の山より釣さげて、其所に至らしめ、居るべき便よき樣に石を穿けるに、一ケ所和らかに空然たるあり。傍より掘てければ、一の石筐を掘出せり。中に又石筐有り。其蓋に檜垣女自作と彫たり。內に老女の像あり。私に計らひがたく、熊本の官府に訴へければ、學校時習館に下さる。その事跡を記錄し、像を石に摸寫し世に傳へぬ。かの老女此觀音を信じて詣ける事は、家の集にも見へたれば、さる事やあらん。又風土記には、小野好

古、純友追討使に下りし時に逢たるなれば、遠く國を隔たる肥後にもあらず。筑前の白川なりと貝原篤信は記されし。京白川は東山に有て、後撰集已來瀧をよみ、花紅葉を讀て、古き名所なり。昔はその流れ三條の北を西へ鴨川へ落しとぞ。其川より北をさして北白川と云へりけるが、最勝寺の櫻の鞠かゝりしを、後に朽けるころの歌に、「など白川の花の下陰」と雅經の新古今集の歌によまれしによれば、今の岡崎のあたりまでも、白川とはいひたるならん。

○歌枕

盛衰記、平家物語に、實方に歌枕見て參れと云々。昔より名所勝景を探る事を歌枕といへり。近くは元祿年中難波契沖阿闍梨の勝地吐懷編にいふ。和歌之有二名所一。猶二寢之有一レ枕。因レ枕夢熟ス。因二名所一而佳句成。歌枕之稱蓋如レ是。と云々。同書にあらざる名所二十一箇を擧て、

細谷川	千代古道	小野篠原
忘水	河島	高砂嶺
七瀬淀	卯花山	野中清水
山井	八重山	八十湊
兒島	狹布	蘆浦
有礒	青葉山	蘆若浦
着馴山	清川原	清渚

といふあり。それは萬葉集に荒礒と書て、いづくの海にもいふ。但し古今集已後有礒海の濱の眞砂と讀めるは名所に似たり。又狹布の事、日本後紀を引ていはく、弘仁元年二月太政官符にいはく、應下陸奧國浮浪人准二土人一輸中狹布上。又云、土人調庸全輸二狹布一。至二浪人一特進二廣布一。織作之勞、難易不レ同とあり。是によれば、けふのさぬのとは、只文選のよみにて名所にあらず。土人といふは陸奧に渡る言葉な

れば、何處をわきてか、けふといはん。細布さぬのと同じ幅の狭きをいふ也。糸の細きにはあらず。

錦木は立なりにこそ朽にけれけふのほそぬの胸あはずして

今の世にも奥州に狭布郡有て、これ布を織る。その寸尺六尋これ尋といふ。尺五尺五寸、片二尺七寸五分、矢引三尺二寸五分と、奥州南部盛岡住人小野といふ人の說なり(素郷)。和歌の讀合の事、たとへば若浦に田鶴、難波に芦など、古歌の詠置るを作例として、外の物を用ひざるといふ事、中世連歌より專ら用捨せし成べし。櫻井中務丞基佐といふ武士は、攝州の住人にて連歌の達人也。時に山名宗全亭にて連歌興行せしに、川の前句に蓮を附たり。宗祇曰く、池には如何、但し證歌あらばいかにも然るべしといひしに、基佐聞て笑ひながら、

極樂の前にながるゝ阿彌陀川蓮ならでは異草もなし

と答ふ。宗祇法師聞もあへず、萬葉已後世々の撰集にはなし。恐らく御當座の詠にして、あざむき給ふものならんと云々。世に歌人は居ながら名所を知るといふ事、かゝる事よりいひぬらん。思ふに西行上人は、六家の最一の人なり。俗にて有し時の和歌一首も聞へず。俳翁はせをも、俗の間の句見へず。みな行脚回國して名譽有。故に名勝の山水の麗しき佳境に臨めば、良心の感を起し、鄙吝を洗ひそゝぐ助けとなる。是又我德をすゝめ智を弘むる便成べし。勝地に遊びて見聞せし事は、只一時の耳目を悅しむるのみならず、幾年經ぬるも、その見聞せしありさま、老後迄おもひ出されて樂し。

○那須野

武士の矢並つくろふ小手の上にあられたばしるなすのしの原

是右大臣實朝公の歌なり。此歌を沈吟するに、おのづからその野の氣色、冬草霜枯て曠々たる原に、人烟遠く、列卒の聲のみものすごく、狐兎走りて、篠原に霰玉ちるけしき、行ずして其砌のありさま今見るごとく言外にあらはる。誠に武將の詠歌、異人のよみ得がたき所か。又櫻雲記に、宗良親王中務卿に補

し征夷大將軍の宣旨ありて、勅使は由良入道信阿彌也。親王遠國に住て都の手振をも忘れ、弓矢の業の事にて、征夷大將軍の宣旨を蒙り給ふ時、

おもひきや手にふれざりし梓弓をきふしわかず馴れんものとは

かくて閏四月親王武藏の國に赴きけり。小手指原に至り諸軍を下知し、兵をいさめてよみ給ふ。

きみがため世のため何かおしむらんすてゝ甲斐ある命なりせば

延元四年秋の頃、舟にて遠江へ志し、天龍洋とかやにて吹風なべてならず。二三日沖に漂ひ侍りしに、友なる船とも皆爰かしこに沈み侍りしに、辛ふじて白輪の濱といふ所へ、波に打あげられて、我にもあらず舟指寄侍りし。夜もすがら浪にしほれて、いとたへがたかりし。

いかで干すものとも知らず苫やかた片しく袖のよるのしらなみ

○闕三瓦

攝州四天王寺は、世に知る通り佛法最初の大伽藍也。則聖德太子御草創より、鎌倉忍性菩薩中興再建ありて、今に諸堂塔巍然たり。然るに東門の柱下わづか二尺計りを切繼たり。か程七堂迄立らるゝに、かくのごときの事有べき樣なし。と見る程の人不審せり。誠に故有るかな。內裏の東門、〔割註〕日の御門といふ。」にも、又左の柱下二尺計り繼木あり。右二ケ所とも今の世に修理ある時も、必ずこの柱下計は入木して繼るゝ事也。按ずるに、史記龜笑傳褚先生曰。天尙不レ全、故世爲レ屋、不レ成ニ三瓦一而陳レ之云々。東園客談曰、予家有レ堂名ニ樂全一。虞奎章爲レ予記レ之。朝之大夫士咸爲ニ詩歌一。翰林陳衆中能有レ守下不レ成ニ三瓦一之戒上。樂全長傳レ保ニ天狗之句一云、則是也、吾邦大厦神殿。みな檜皮葺にして瓦を用ひず。故に門柱を繼て物全く備らざるを示す。易に云、天道虧レ盈而益レ謙、實難レ有教訓なるべし。歌に、

たれも見よみつればやがてかく月の十六夜のそらや人の世の中

萬葉の宮殿猶斯のごとし。況や國郡の主より民家にいたるまで、其分限をして假にも過るを禁ずべし。

山も登り盡せば下る。海潮も一ぱいに滿れば、必ず引く皆同じ。因にいふ、親王方、攝家高官、又は諸寺本山に常に木戸を搆へ閉して不レ開門あり。勅使門といふ。勅使ある時にのみ用る也。然るに東山殿の頃、洛中穩かならざりしかば、狼藉を鎮むべしと、不時に細川左馬頭の許へ勅使有りけり。勝元是を承はり、門外に走り出て、勅使の御輿供に新しき藁を敷ものにし、其上に居へ奉り、其身は砂上に平伏して、綸命を承りぬと。是陪臣に勅使を下し給ふ例なければ、元來此門なし。故にかくは計らひしなり。誠に時に取つての才覺といひ、かけまくも辱き御事也。家の美目といふべし。因に云、今京都寺領ある寺社には、所司代交代の時の門前の制札あらためて書出さるゝあり。何守何朝臣在判とあり。然るに花押の制札五ヶ所あり。西山三鈷寺、東山高臺寺、山上不動山(深草)、藏王堂(久世村)、妙蓮寺(上京)に限る也。いかなる由緒にや、古來より斯のごとくなり。

〇大門岬

筑前芥屋村は、海中に指出たる出岬にて、北海に向ふ岩山地より續きたり。この出岬の岩山、悉く八九寸より一尺七八寸ばかりなる方なる石の柱なり。良工の手を盡し削りて、數百萬を束ね、高く海中に立たるが如し。其岩山海より三四十間ほど高く聳へたる事、屏風の如く、石壁のごとし。その山は却て前に指覆ふ。下に大門とて岩窟あり。その內海甚だ深し。水色黑く、見る人殊に恐る。窟中横の廣さ五六間也。中に舟を乘入て見るに、上は角柱を束ねて橋板をなせる天井のごとし。其柱石の垂る事等しからず。長短あり。舟の入る事四十間ほど、半柱より少し東へまがれり。奥の水なき所を舟より上り行ば白砂なり。五十間計り行たるに、奥は甚だくらく凄し。蝙蝠面を打計りおびたゞし。里人の奥深く行けるに、窟中俄に鳴動し、海波起り立ておそろしく、其奥を極めがたしと走り出けり。又此東の水中に石立り。水の上四五間計り、これもまた四五寸の角柱を横に重ね積たるが如し。爰に洞穴有て、土人海鯔穴といふ。冬月北風烈しく、高浪此窟の中をうつときは、その響き數里に聞へておびたゞし。貝原氏い

ふ。此岩壁の怪敷窟中の異なる、世間の佳景山水の類にあらず。誠に天下の奇觀也。人の國には知らず、我日本の地にはいまだ此に類する處を聞ず。恨むらくは西土の僻地に在て、殊には大海原の邊なれば、夏の日風波穏かならざれば舟いたらず。故にむかしより傳へ語らず。古人廣く我國の事跡を尋ね記せし文等にも見へず侍らで、歌枕にも載洩らしつること、誠に可レ恨と云へり。よつて好事の騒人のために載せて書置ものならし。

○雷狩

唐土に雷州府といふ地、毎年夏の頃雷鳴事夥しく、其聲人家の簷の間に近く撃て、日々止む事なし。故に雷を以て地名として、郡にも名付るほど也。秋に至れば自然と靜まりぬ。物有て地中に伏也。其時人々是を狩取て食ふ。その形彘（イノコ）のごとしと云へり。此事我日本にも有とて、近年小説にも此事を記せり。或は房州二村山といひ、阿波國西南由岐喜來（キキ）といふ所とも。按ずるに、安房と云は阿波を誤りしなるべし。房州は小き國にて、左様に雷獸など住べき山なし。阿州の西南は土佐に隣りて、至つて嶮岨の地にて、山々殊に深し。かゝる事あるまじきにもあらず。琉球戸部良熙が大島筆記に、福州は雷甚だしく鳴處也。夏は雨さへ降れば鳴、鳴ば又必落る也。惣じて本唐にては雷を靈魂柏とて、俗語にて殊に恐るゝ事也。夫故假にも誓言には立ぬ也。或説三河雀といふ本に、雷狩をすれば鼬のごときもの多く取るなりといふ。下野の國人いふ、毎年雷狩とて山中に入り、見る所ありて地を掘ば、底より烟のごときもの出るといへり。能思ふに、雷の事都て暖國に多し。雷獸も唐土の極南の地なり。又唐土の小説に、雷震して龍を撃事多く載たり。我國にても龍の熱して上天する事、必ず南海に年々あり。必ず由緒あるべし。近頃にもいふ、土佐國浦津の村毎に、太鼓を數多貯へ置事は、夏に至れば時として龍陸へ登る。其時家を巻て民屋を崩す也。既にそのけしき有る時は、家毎に出て大音に鯨波をなし、太鼓を打立て騒ぎ罵れば、外の方へそれて、その害をまぬかるゝ事あり。誠にさも有るべし。予も九州に在て龍巻と云ものを見た

り。或は鎌など家の上に立、おの〳〵聲を等しくして叫ぶ也。伊藤長胤云、雷狩といふ事、その理なきにあらず。冬天太陽地下に伏し、春夏の間より發生す。其勢ひ敵し難し、雷となり、震となる。地下に伏する時、大に太鼓を打立、大音を揚て數十人地をふみ騷がし、自ら陽氣屈伏せるを誘ふて少しくゆるむ所也。故にその時に至つても、一同に突出なくして、微氣旣に洩し也と、實に確論なり。加賀國白山に雷の鳥といふあり。鳴聲雷に似たり。雄は雉子のごとく、雌は鷄のごとし。歌に、

白山の松の木陰にかくろひてやすらひすめる雷の鳥かな

と是、後鳥羽院御製なり。享保九年後水尾院法皇加州侯へ仰遣はされしかば、加州より獻上あり。御繪所山本數馬に寫させられ、世にその圖を傳ふ。雷鳴の時此繪をかけおけば必災ひなしといふ。抑雷鳴地震は、地下の陽氣地上の陰氣に抑れしを、陰氣春夏に至りゆるまり弱るを、下より突上るときこの事あり。北國は冬より、春夏も初の頃などは、いまだ雪も消ず、陰氣盛んにして陽氣勝がたし。故に草木の芽、あるひは花咲事も、五六月に漸々也。陽地の蒸升におよびがたし。大桶に水を少し入れて、蓋をかたくし、呑口より息を吹込、小の水補一盃に盈るごとし。

○大　鹽

それ鹽といふもの、世上一日も缺べからざるものなりと、甲州、飛驒、信濃などの山奥、又は日向の米良、五箇、那須などいふ所は、鹽を紙につゝみて、地炉（イロリ）の自在竹にかけ置て、日に見て鹽なりと知れば、口におのづから鹽氣を催して事足る。是を鹽見といふなり。山崎闇齋會津風土記に、大鹽といふ所は、昔弘法大師爰に一宿有しを、老嫗心ばかりに供養し參らせんと思へども、鹽といふものなしとなげきしに、大師憐みて、その爲に護摩を修し給ひしかば、忽然として鹽湯涌出て、今の代まで絕ず。その老嫗の住し遺跡、又後園に護摩壇岩もありて、石面に大師の手跡鮮に殘れり。是を以て隣鄉近村皆鹽に飽ける。西行上人爰へ來りて、

　蜑もなく浦ならずして陸奥の山賤のくむ大しほのさと

　浦遠きこの山もとにいつよりかたへず今まで鹽やみちのく

此處會津より五里にして、出羽の米澤へ越る山の麓なり。潮泉二ケ所、大木を繰拔、底なき桶のごとくなり。此桶數百年鹽染込て自然の岩に似たり。則此所にて鹽を焼なり。國によりて鹽井あれども、かくの如く出る事なし。適に岩間に涌出るあり。また堅鹽あり、日向高岡といふ所の後ろ山高き峰の側に小き洞有り。遥に見上れば白石のごとし、登り見れば土塊にて、嘗て見れば鹽と知るほどなり。海邊にても鹽なき國もあり。越の國邊都て北海鹽濱なし。故に春三月沖に帆のかげ見ゆれば、鹽の價忽ち安くなる。夫迄は至つて貴し。

嘉栗云、越の邊他國へ賣出す程にはあらねど、少しの鹽濱はある也。予越後へ兩度までまかりたれば見覺へたり。道の記を失ひぬれば所は忘れたり。小田の濱なんどにも、少しの鹽濱あり。

延享四年卯正月、似雲法師攝州須磨の浦に、絶たりし鹽釜をいとなましめて焼初しとき、

　たえて見ぬもしほの烟り立かへりむかしにかすむ須磨の浦なみ

年久しからずして、此鹽釜も浪風荒て廢れければ、再興せし鹽釜もまた烟絶侍りしに、

　身にぞしむまたこりずまに焼鹽のけぶりも絶しあとのまつ風

○室八島

下野國惣社村にあり。壬生府より一里餘、大明神の社地に八ツの島有り。大なるは周數十歩、小なるは二丈餘也。島といへど水なし。此古事いひ傳ふる歌あり。むかし繼母ありて繼子を嫉憎みて、殺すべきよしなりしを、家の長なるもの、密に隠し僞りて殺して火葬せしといひて、鰶(ツナシ)を多くつみ置て焼ければ、この魚の焦る臭さ、人を焼たるやうなれば、繼母はさもとおもひて止ぬ。故にこの魚の名をこのしろといひ傳ふと。

　下野のむろのやしまに立けぶりたがこのしろにつなせ焼らん

今も室の八島の祭禮には、あたらしき棺。〔割註〕死人を入るこしなり。〕を拵へ、祭禮の終に野外へ持出、火をかけ焼捨る。是にて祭の式終るといふ。但し維山子いふ、昔羽林實方東國を經歷し、この地に來りて、水面の靄氣氤氳として烟のごときを題詠して、好色の媒とせしより、諷人墨客是に傚ふといひしは、小大君家集實方の君人にやらんとて。

　いかでかはおもひ有ともしらすべき室のやしまのけぶりならでは

此歌を書て爲任の君にかくといはんはいかに〳〵といふに、いたくなど打笑ひてけるに、爲任の君我けそうする女にやりてければ、是を女も聞て、いみじう笑ふほどに、前をわたりければ、女此頃は室の八島を盗まれてといひければ、えこそいはねとおもひながらにといらへけり。按ずるに、祭神木花咲耶姫の尊也。無戸室(ウツムロ)に入焼れて神去給ふ故に室といふ。八島は則ち大八洲豊秋津洲の義をとれり。あれませし御神彦火々出見尊なれば也。富士山、信州淺間山も、此御神を祭る。また此邊に藥師寺あり。弓削道鏡を配流せし地なり。上古は大伽藍也し。日本に壇を築き受戒有し三ケ寺の其一院也。大和東大寺は、中州畿内とし、筑前觀音寺は西州の人に便し。此寺は東土に便せしなり。延暦寺戒壇の興るに及んで、筑前、下野ともに廢せりとぞ。

○立田越

昔龍田越と云しは、今の立野越なり。〔割註〕立田明神は立野にあり。今法隆寺に近きをいふは御旅所なりと知るべし。〕河内國高安郡より越れば龜瀬越といふ是也。奈良の都の頃、專らの往還なりし。然るに此ところ山賊を讀る事は、履中天皇紀に曰、龍田山踰之。時有ニ數十人執レ兵追來者一。若賊人乎。因隱ニ山中一而待之と云々。かゝる事より作例せしにや、萬葉集に、

　わたのそこおきつしら浪立田山いつかこえなんいもがあたりみん

とまづこの集に見へてより、伊勢物語に、
風ふけばおきつしら浪立田やま夜半にや君がひとりこゆらん
又拾遺集に、
盗人の立田の山に入にけりおなじかざしの名をやけがさん
因にいふ、盗賊をしらなみといふ事は、漢史にも見ゆ。また緑林と云、山立といふ言葉は、我國の古記にも出たり。清原元輔盗人にあへりける又の日、人のもとより衣を送り侍りければ、
あさからずおもひ染てし衣川かゝる世にこそ袖もぬれける
又長明が海道記に、
はやすぎよ人のこゝろも横田山みどりの林かげにかくれて
武州江戸の隱者の僧、盗人に臥道具調度まで掠められて、
よる〳〵はこれをかつぎて事たれどふすまひとへをおきつしら浪
また嵯峨の涌蓮法師、賊人に逢ひてよめる、
きて見ればやぶれ衣に蒹ぶすま足る事しれと殘しおきけん
似雲法師人にあづけおきし蚊帳を、盗賊に取れけるに、頃しも師走の半の月隈なく冴ければ、
春の夜のやみならねども須磨の浦やよるしら浪にかやはかくるゝ
浪花の有賀長收と云人、京より歸るさの夜舟の中にて、用意に持もの、門人の餞別せしもの迄掠られしかば、
しら波のかゝるべしとは枕にもしらでぞ明る淀の川ふね
寶暦のころ、嵯峨に住ける涌蓮法師の庵へ盗人入しに、
盗まれしとおもふこゝろもはづかしきすてゝすむ身のもとをわすれて

と讀しを、二尊院の住持是を聞て讀て遣はしける。

山水のすむほどもなき柴の戸にかゝるもよしや夜半のしらなみ

とありしかば、また返歌しけり。

山水のまたすみやらぬこゝろぞと立しら浪やおどろかすらむ

不木といふ僧より訪ひに、單の薄物を送り越して、

しら波のかゝるにつけて苦しみのうみわたる世ぞ憐とや見む

住からにひとへはなくて夏ごろも袖ふるほどの暫しなる世も

とよみて遣はしけるに、返し、

捨果てぬ身をこそなげゝ白浪のあはれとまではおよばざりけん

夏ごろもうらなき人のこゝろざし身にきるよりもうれしかりける

嘉栗云、木端師の門に遊びし河州禁野の淨蓮寺栗毬といひ、また茶々丸、またひやうたん坊、はうろく庵ともいふ僧、夜更て渚といふ所にて、盗賊にあひ、衣類をはぎとられしかば、

白浪のよする渚にめぐり來てはくをとられしわれは木佛

と即座に詠じければ、賊も歌にめでゝ衣類を返しける。

○祇王佛靜舊跡

佛御前出生の地は加賀の國といへれど、今越前地に佛原といふ所也と、則寺あり。佛原山月窓寺といふ。

宗祇回國記に、佛が原といふ所を通るとて、

我たのむ佛の原をわけ來てぞ行ふ道の甲斐もありけれ

又其頃祇王祇女といふものは、江州益須郡中北の產なり。その村灌漑の水利の少きによりて、清盛公に寵せられし時、求乞て堰を掘、水懸りの便りをなす。今に其堰ありて益須郡三里ほどの間、水自由にし

て、餘りは湖水に落る也。寺有り。祇王を追善す。婦女の身にては、後世の利澤を殘す事を、民今に其賜を請、西施が浣紗石に勝れり。洛北嵯峨に祇王寺とて、祇王祇女、佛御前幷母刀自等が木像有り。庭に淸盛公の塔も有り。又義經公の妾靜御前は、異本義經記に、元曆元年六月初て義經に仕へて寵を得たり。母は礒の前司といふ。是阿波の國礒といふ所のもの故、礒の前司といふ。今礒崎といふ所也。又靜御前は淡路國志津賀といふ所にて出生しければ名とす。今は所のもの謬つて志津木といふと也。又和田宗爪丹後巡遊日錄に、丹後に礒と云所は、礒の前司、靜もこの所の產也。今に塔有り。近頃聞、淡路國洲崎にて、計らずも古塚を掘出しける。其人狂ひ口走りて、我は判官義經の妾靜也。元の如く納めざれば、其祟りをせんといふ。人々驚き詑てけるに、一人いふ、聞及ぶ靜御前ならば、舞の名人とかや、一さし舞て其證を見せ給へと望むに、やがてかのむくつけき老民、威儀を正し頻迦の聲を發して諷ひ舞しかば、おの／＼感賞して、猶又和歌を詠じ給へと望みければ、

　問人もなくて靜が塚なるをまれに事問ふ峯のまつ風

因にいふ、讃州金毘羅山の麓に禪院有。享保年間洪鐘を置べき地を求むるに、境內に相應の地無し。然るに昔より淸少納言の塚といひ傳へしあり。此地に鐘樓を立んにはよき場所也と評議して、昔より申傳へ計りにて、慥成事も知れねば、彌爰にこそ立べきに極りぬ。その夜住僧の夢に、其容貌端麗なる官女の、枕上に立て和歌を詠ぜり。

　幼けなき跡のしるしを誰にかは弔れしなれど有てしもがな

又伊勢物語集注に云、河原左大臣融公、六條に奧州千賀の鹽竈を移し、日々難波より潮を汲せて運びしなり。是によりて攝州尼が崎より十五町西の方に、東新田といふ村の道端に大臣の社有り。大坂北野大融寺も大臣の建立なり。謠曲に大臣の事出たり。

○眞野長者

豐後府内中津領に、眞野長者の趾とて、方七八町の平野あり。昔より二鶴有て毎年雛を育つと、元より芦萱生茂れど鎌を入る事を禁制なり。又海濱に姫島とて周廻三里計に、漁家千軒といふ賑しき島有り。此所則玉世姫の住給ひしとて、楊枝木の黒もじの大木有り。側に鐵漿水とて臭き水流れ出る也。昔用明天皇此姫を戀慕ひ給ひ、或夜に來りて、山路といふ草刈童に身を窶し在せりと云傳ふ。此事は曾てなき事は、諸の小說に評せり。今國人に聞に、もしくは天智帝の御事ならめといふなれど、又なしといふべからず。山路といふ名の事三郎(サンロ)なり。唐の玄宗帝笛を好み給ふ事を牽合せしと、徂徠先生は云へり。一說には、紀齊名が暮春遊覧序に、山路日暮、滿レ耳者樵歌牧笛聲、と有を取て附會せるかともいへり。但し天智帝に據あらん事は、帝太子の御時より、四國九州に在せし事六年、殊に薩州開聞山に老仙あり。一人妙相の女子を育けり。瑞照媛と號す。心操淸朗にして端嚴美麗也。天智帝の妃として大宮姫と號す。然るに天皇御歸洛の後、又一の寳劔を帶、白馬に駕し、山階鄕に行幸より還御なく、深く深林に入り、只御沓計を殘され、西天に飛去給ふと。實は近臣を召具し、薩州頴娃郡開聞岳に下幸在せり。是去正月大內にて雪打の遊びといふ事を企て、官女ども大宮嬪に耻辱を與んと計らひしに、嬪是を避んと思しめし、ひそかに薩州へ歸り給ふ。白鳳元年二月とかや、安東櫻井なんど供奉し。勢州安濃津より船に召され、六月朔日山川湊牟瀨と云所に御着岸ありけり。依て則開聞嶽の麓に行宮をしつらひ、兩君を安座し在し也。後三十九年にして壽算七十九歳にて、此地に崩御在ます。時に慶雲三年丙午春三月八日。則山陵を築き崇祭也。また豐前中津領に、天智帝の秋の田の舊跡鏡が池などあるによれば、又長者の事なしとも云がたし。

○嚴島

此島は我國三景の中にして無双の神島也。推古天皇三十二年癸丑二月十二日顯れます。初め三女舟に召れて出現あり。洗米を進すべき仰せありて、共數五十三奉れり。佐伯鞍職供奉し七島を廻り給ふに、こ

の恩賀島に住べけれと、和岐の浦、笠濱を御覽じ、御殿造り有。

大宮のよるべはいづく左八右は九中は十六　　根元記

嚴島とは市杵島姫命を祭る名也。宮島とは此神の宮地なる故なり。內舍人佐伯鞍職は播磨の人、この國に流れし時也。御社の後は山にして、前は海、左は野、右は松原にて、南北三十三間東西二十五間、回廊有百八十間也。六月朔日より七月七日迄市立、六月十六日御祭り也。其間の賑しき晝夜の分ちなく、諸國の參詣島に充滿せり。又拜殿に繪馬の類おびたゞしく目を驚かせり。回廊の天井に、昔尊圓親王御幼稚の御時の御樂書有り。此島神島と成てより、今に一人の生れしものなし。又一人の死たる者もなし。誠に奇異の靈島也。初姫神出現の例に任せ、所願の人島廻りをなす。諺に島は七浦七夷と云ふ。御供船を出す。社人有て祓をなす。次に願主の船を出す。忽然として彌山岳より頭白き烏飛下り、彼御供船に來り、御供を啄へたつ。是にて願成就とするとなり。七浦每に祭る神あり。山の尾さきに千疊敷の堂有り。其かみ毛利元就此島再建の時、千僧を供養ありし所也といふ。海中に鳥居あり。いか成事にや、翠簾の內に鏡を懸られしと、西行上人も云り。六月御祭りの刻限遲速有ても、其時に應じて潮みち來る事奇妙なりき。

〇由良

曾根の好忠が歌に、由良の戸を渡る船人と詠けるを、丹後の由良と思ふは非なり。此は紀伊國三名郡由良が崎也。好忠丹後椽成し故におもへり。又萬葉集に、白崎風莫濱など名所を續けたる中に、風莫濱其所今定かならず。但し今瀨戸庄瀨戸村の邊に網不レ知と云所あり。海濱にてさし出し地に、小山のつゞきたるをやいふらん。風莫網不レ知と云ひ、相叶へる詞なり。この網不レ知山に、藤九郎盛長の社ありて靈驗いちじるし。中にも諸國の廻船、殊に尊崇すゆゑんは、何國にてもあれ、もし碇の岩などにかゝりて上らざる時、此神に願望すれば、忽ちに上る事なり。故に舟人は甚だ信仰す。かやうの義にて、網

不レ知といふにや。又廻船難風に逢て、闇夜に方角不レ知時は、隠岐焼火山權現に火を申せば、舟の便りよき方に火の見ゆる也。其方へ行ば、自ら湊にて難を免かる。ゆへに毎暮には必ず舟毎に火を焚て、常に其神に奉る也。

○遠江濱名

近江は都に近き江と云ひ、遠江は都に遠き江と有を以て國號とす。然るに貝原篤信が大和草に見ゆ。後土御門院明應八年六月十日、(或は九日)、大地震夥しく洪水して、其江湖水涸て陸と成、湖口切て入海と成。今切の渡是なり。荒井宿の町はづれに濱名の橋の跡あり。一説には、百三代後柏原院永正七年の洪水とも云、三代實錄に曰、元慶八年九月朔日。遠江國濱名橋長五十六丈。廣一丈三尺。高一丈六尺。貞觀四年修造。歷二廿四年一。既以破壞。勅給二彼國正稅稻一萬二千六百三十束一改作焉。海道は本坂越と云、今も有也。

汐みてるときに行かふ旅人や濱名のはしと名付そめけん

此洪水の時、大なる螺貝數多出たりと云傳ふ。いか成事にや、洪水に必此貝出る事あり。其出んとするに洪水をなすにやはかりがたし。其勢ひ山を崩し、谷を裂く、龍の昇天するが如くなれば、人見ても捕得る事なし。殊に流れ出るとき、大に吼うめく事にて、數十の貝一同に鳴響きて、天地も震ひ動くなり。東關紀行に、仁治三年八月橋本と云所に着ぬれば、聞渡りし甲斐ありて、いと心凄し、南には湖の海あり。漁舟浪に浮び、北には水海ありて、人家岸に連れり。其間洲崎遠くさし出て、松嚴しく生つゞきたり。嵐頻に咽ぶ松の響、浪の音聞わき難しと云々。海道記、十六夜日記も大旨同じ事也。此地の人考へに、昔は舞澤、今の舞坂の邊より濱名の橋本までに續きたる松原あり。水海湖海を隔て、中に一筋の大道ありし。

誰うへて海と川とをへだつけんなみをわけたる松のむら立

因に云、慶長十九年五月、筑前國鷹野村より法螺貝三ッ出たり。其時大風雨洪水して、山の麓横二間、長二町計り、忽ち地崩れ深き淵となる。今に其跡あり。三の貝流れ轉びて海に入。其大さ一圍に餘れり。里人多く是を見、おの〳〵立懸りて、いろ〳〵として、やう〳〵一ッを取とめたり。數人棒材木を持出て障へ、或はうちなどしけるに、其吼うめく事恐しかりしと、今其貝、竈門山の福仙坊といふに寄附してあり。また中國にて近き年にもこの事ありけれど、貝數も多く出しかば、おびたゞしき事いふばかりなく、人々おそれまどひて、なか〳〵取とめざりしと、見たるものゝ語りし。

笈埃隨筆 卷之十二

○蘭奢待

和州七大寺の最上なる東大寺蘭奢待の事、說々多き中にも、まさしく閑窓隨筆に云、東大寺の寳倉開封の事ありて罷りぬ。御倉の內御寶數を知らず。中にも蘭奢待、紅沈香などいふ香木二もとあり。唐櫃の蓋を明れば、其匂ひ一室に普く、よの常ならぬこそ勿論なれ。長さは五尺ばかりに太さ一抱ほどにもやと覺へぬ。其蘭奢待に二寸餘切取りたる跡存す。是織田信長公の望せ給ひ、公より給ひぬる跡にて侍ると申。十六股の鹿の角長さ三尺程もや侍らん。河內國平岡より春日山に、大明神鹿に乘て渡らせ給ひけるときの角なりと、世に天下第一と稱する名香太子、〔割註〕一名法然寺、同寺に有り、大小の二株今に存す。」蘭奢待、〔割註〕一名東大寺。」蘭奢待の字の中に、東大寺の三字をかくすと云說有り。蘭は東にあらず東なりといふ。然れども明世說に蘭をもて東門とすると見へたれば、强に妄說ともしがたし。谷響集に、朱子語類に云、胡僧に蘭奢といへば僧悅ぶ。蘭奢は褒る言葉なりとあり。抑此香木は、聖武帝の時西蕃より獻ず。東大寺の寳庫に納めて、永く國珍とし給ふ。其名誠に故あるかな。また家々にての新銘あり。柴舟、白菊、子規などいふ類ひなり。

○雜說八十ケ條

〔一〕職原抄二卷は國家の至寶なり。准三后親房著述なり。櫻雲記云、興國二年二月下旬、源親房常陸小田城に居して、職原抄二卷を編て吉野へ獻じ奉る。百官諸位職掌をも指がごとく、末代に至り帝都の龜鑑と言つべし。親房博識才覺あり、時に東國に在て文書の一卷も不レ隨して、暫く是をあらはすは、只凡人の所爲にあらずと云々。

〔二〕北條氏眞小田原にて沒落のとき、牧溪の畫五幅と黃金十枚を京都へのぼせ、大德寺、妙心寺へ寄附し。後世の事を賴んと言越されけり。其畫は今大德寺の什寶たり。また妙心寺は其頃三門炎上してなかりしかば、其料にとて黃金を納められけり。

〔三〕攝州高槻領鵜殿村の芦は、至て太くして堅し。古來より篳篥の簧に用ふ。樂人尤も貴び用ゆ、故に容易に得がたし。その沼續きて隣村の蘆は尋常にして用ゆるに足らずとなり。此村の庄屋某の棟に、昔より小き箱を括り置し、いか成ものとも知らず。開き見たる事なかりしに、近き年屋根がへせし時、おもひ出て開き見ければ、壽永年中源義經公平氏追討の頃に、此家にて秣を借られし證文なり。武藏坊辨慶が手跡也と、其頃人々語り傳へし也。

〔四〕周防山口に椎野七郎といふ者有しが、采女の謠の山ほとゝぎす誘ひがほなるにと云唱歌を、年來自然と小鼓に打覺へて妙なりし。其鼓を今も山子規と名付て、長州大守の御祕藏也と云へり。

〔五〕江州彥根領大堀村に小堀彌左衞門といふ百姓あり。其家はいにしへ、右大將賴朝公關東下向の時一宿なされし家なり。其座敷其時のまゝにてありしに、六十年以前燒失しけり。今も其時の人足帳は燒ずして、其家に所持のよしなり。

〔六〕筑前博多の富家には、奧宿所にて家の床前を低くし、奧を一段高くす。相傳ふ天智帝太子にて九州に在し、博多行啓ありし時の例也といふ。是御車の轅のつかへしゆへ、前を低くうしろを高くすといへり。

〔七〕近年江武の人、平賀源內、〔割註〕戲名を福內鬼外といふ。〔〕工夫して僞火浣布を織なせり。其法石絮を紙條に捻て、布のごとく機にて織、四邊は銅を編付たり。織上て是を火に投ずれば、こよりの紙皆燒て、石絮ばかり殘るなり。ゆへにこの名あり。但し此火浣布は夏霖雨の中濕氣を含む。故に燒て灰と成る事あり。冬は墨をぬりて烈火の中に入るゝに、忽ち皎潔となる。奇功を極めたるもの也。又阿蘭

陀のヱレキテルを工夫して、人の身より火を取る抔を致出せり。此外色々の事を鍛錬せし人なりき。
〔八〕攝州四天王寺に樂の面數種あり。秦川勝の傳來の面なり。又二月廿二日常樂會のとき練供養とて有り。其佛菩薩の面も凡作にあらず。誠に千歳の古物也。又山崎の寶寺に十二月除夜に用る追儺の面も、行基菩薩の頃より有所の古面にして奇工なるもの也。
〔九〕筑前博多觀音寺の追儺の鬼面の裏書には、觀世音寺日吉御神寶龍王四內（今三あり）。應永十年癸未三月廿七日觀世音寺兼修理勾當一番長圓とあり。
〔十〕琉球國湖平親雲上人の雜記に、本唐福州淸流より川上を上る事數十町、至て瀨早き難所也。船度々破損する所にして、皷山道霈和尙南無阿佛といふ石碑を建らる。
〔十一〕駿州丸子宿誓願寺の住僧、或夜の夢に梵僧七人來り、茶を乞ふによりて與へたりと夢見けり。翌日庭の筧を普請したるに、皿七枚を掘出したり。六角の南京燒にして化成年の作なり。彼寺院に傳へて什物とす。
〔十二〕泉州堺正法寺中蓮花院の檀中なるもの、天竺に往て留り住せりとて、彼地より天竺曼陀羅を寄附せり。
〔十三〕山州西原華開院、始め京極通り上にありし。此寺伊勢三郎義盛の檀越なり。依て義盛の甲冑幷蝶の紋の幕あり。
〔十四〕同く金閣の西南衣笠山の麓、眞如寺上梁の銘簡一双あり。高武藏守師直檀越にして、夢想國師の爲に創立す。國師銘文自ら記す。また佛光國師の像、州阤東陵が作碑銘有り。
〔十五〕洛東新黑谷に西雲院あり。俗に萬日寺と號す。開基僧心譽宗巖は豐臣公朝鮮征伐に擒と成て來る。天性男根なし。高臺寺政所の亭に仕へ、後に僧と成。故に中華又朝鮮投化の人、日本に死する者。此寺に葬す。

〔十六〕同泉涌寺中に觀音堂有り。開祖俊芿歸朝す。此像を持來る。是唐玄宗皇帝楊貴妃の死別をかなしみ、貴妃當身の觀音を造らしめ、堂を建安置す是なり。則皇帝の額も併て此寺に有り。補陀落山圓通寳閣と云々。

〔十七〕二條京極要法寺の方丈に、八幡太郎義家の甲冑の筥有て、蓋の上に義家の二字あり。實に古代の物なり。見て知るべし。

〔十八〕興正菩薩叡尊南都西大寺に住す。諸人疾苦を救はん爲に、本朝へ歸化人、張三官が家法たりし豐心丹を製藥す。南都苗村氏の家に巨鼓有。銅の裡に西大寺の字を刻み、傍に此藥法を彫たり。是は藥法の傳來を失はん事を恐れて斯のごとし。今此筒泉州堺西本願寺の懸所に什物たり。

〔十九〕尾州熱田の社に源賴光公の所持ありし、蜘切丸と號せる名劍あり。長さ一尺七寸五分也。又七兵衞景淸所持のあさ丸といひし太刀もあり。寸法一尺八寸あり。是大宮司に緣ありて、爰に殘しとゞめ置れしまゝなり。

〔二十〕豆州箱根權現に、曾我五郎時宗が十番切の太刀あり。無銘にて赤銅作り、所々に切込あり。又自筆の書翰あり。其書面は夜前之隣火忽消。貴寺安穩之悅千萬。委曲可レ申ニ面謁一候。恐惶謹言。壽福寺方丈とあり。此時宗は北條時宗也といふ。時宗は北條の烏帽子親として、五郎時致と名乘れり。

〔廿一〕相模國教恩寺に、中將重衡卿と千壽前と酒宴せし時の盃有り。大さ今の世の平皿のごとし。內外黑塗にして中に梅花の蒔繪あり。予東武にありし時、高野蘭亭といひしは盲人にて詩人なり。いかどしてかこの盃を乞得て所持したり。因に云、此盲人髑髏盃を拵んとて、よのつねの人はおもしろからずとて、鎌倉にある大館次郎が塚をあばきけるに、忽ち晴天かき曇り、雷鳴雨夥しかりけるを、辛ふじて取て歸り、盃とし樂みけるに、其翌年其月其日に死したり。平人の塚すら猥にあばく事はあるべからず。ましてや勇士の靈何ぞ其儘に置べき。北もの元來盲人にて、詩作などする氣質ゆへ、慢心

甚しき故にや。かゝる災ひにも逢へり。可二恐愼一。因に云、史記に趙襄子智伯が首を飲器とすといひ、元呉元甫句に、髑髏盛レ酒飲二淸風一と云々。我朝にては織田信長公、淺井父子、淺倉義景を打亡し、其生首を盃にせしと云。此三人我等に大きに苦勞をかけしも、今はおもふまゝなりとて、柴田勝家をはじめ、一座の大名に酒を賜ふ時、明智光秀のみ一人下戸なりしや。辭して飲ざるを、强て一盃を飮しめたりと云々。近頃大坂天滿與力町中田氏何某は諸藝に達し、大上戸也。祕藏の大盃あり。是も髑髏を金箔にて塗、八合入とし、酒長じぬれば必ず是をもて人に强けり。自分は豪氣にて飮もせめ。いかなる高陽の酒徒も厭ふべき事ならんかし。

〔廿二〕平家物語、盛衰記等の宇治川の合戰に、田原又太郎忠綱、金覆輪の鞍置て來たりけると云々。此鞍を足利光源院殿より、細川幽齋に拜領有り。今に細川家に相傳ふ。蒔繪は栢の立木に龜四ツとまり居る也。但黃覆輪なり。

〔廿三〕長明海道記に、昔稻荷大夫と云もの、濱松の下に天人來下して舞かなでけるが、頓て人の見るやと飛去りぬ。そのあとに一面の形を落せり。拾ひ取て濱松寺に納めけり。それより此寺に舞樂を奏し、每年二月十二日常樂會を修行す。則彼大夫が子孫今に舞人たり。

〔廿四〕常州水戶八幡宮に、新羅三郎義光の軍配團扇有り。網代にして中に黑き卍字あり。誠に古代の製と見へて、奇珍なるものなり。此より已下は奇品名物を記す。

〔廿五〕玳瑁は南方蠻國の海中にあり。其甲を紅毛人持渡りて、婦女の髮飾とす。其價至て貴し。然るに此龜肥前島原邊より薩州、又は大隅垂水の海中に有り。纔に亘り一尺餘にして甲薄く、櫛笄には作り難し。依て手箱の飾とす。珊瑚珠も肥後熊本の海中に出。是も甚だ小さくして玉には造りがたし。

〔廿六〕唐紙は近年薩州にて作れり。其紙のきめ細かにうるはしき、唐土より來るものに遙に勝れり。いまだ他國へ賣出すほどには出ずして、國用のみなり。〔割註〕其製法は孟宗竹の笋を白水に漬出し、腐

りたるを用ひて製す。」

〔廿七〕麻地酒は肥後の名産醪なり。はじめ元酒を造り地に埋み、その上に麻子を蒔て、秋に至て其麻長茂して、刈株の後に掘出す。酒の味最可なるゆへに名づく。

〔廿八〕筑前後に鵲あり。形鴉に似て大なり。尾長く色眞黑なり。羽下に少し白きもあり。筑後烏などいふ也。播磨風土記に云。佐用郡船引山に鵲有。俗に云韓國烏と、春見へ夏見へず。今西州常にありと、荒井氏いふ、朝鮮語加之(カシ)かさと相通なり。但し鵲の訓と烏鷺の義なり。

〔廿九〕肥の前後なる海邊に、脛高く觜長く、少し鼠色に白點の文ある鳥あるなり。土人はシャクといふ。隈本村井檜壽云、是唐土南方にある鷓鴣なり。その味美にして、鵲と書也と、貝原氏云、寛永年間の頃來る高麗鳥といへりと、

〔三十〕都鳥は貝原氏云、勢語にのせたるにや。香椎潟にあり。觜足赤く白黑斑にて、大さも鴫に類すと、日向の國青島に、昔より雌雄あり。島の神使とす。此島靈島なればにや。若溺死の物ありて、島近く流れ寄るなどの不淨あれば、此鳥其地の庄屋の家に來り喧く啼。

〔卅一〕予備前の沖なる鵜の瀬といふ所に汐待せしに、大巖二ツ有所なり。それに燕の様なる鳥おびたゞしく群りたり。舟人に問ば、かりがねといふ。人に遠けれどさのみ恐れず。手にとらへたり。脊黑く觜とがりたり。京には見なられぬものにて、かの役所に付るかりがね也。かりがねといへば鴈の事と計りおもふは非なり。

〔卅二〕熊野三山に頭白き烏あり。神使とす。安藝の宮島にも一番あるよし、熊野は僧基法師の紀行に和歌あり。

山鵲かしらもしろくなりにけり我かへるべきときや來ぬらん

〔卅三〕伊豆海上に毎年春夏の交ひに、鵜に似て大きなる鳥來る。土人鳥の來るを候として種を下す。號

て沖小偺と云。此鳥極東南の大洋にありて群を成と、無人島に住むゆへ、人を恐れずといへり。
〔卅四〕薩隅の犬は、都て足短く腹を地に摺て歩む計りなり。又ヤギといふ獸あり。羊に似て色黑く毛長し。肥前長崎には取分多し。大隅には此ヤギの牧有て多くそだつ。その故は知らず。嘉栗云、ヤギ野牛と書り、羊に似て臭し。
〔卅五〕藝州廣島の府には、家猪多くして犬のごとし。同宮島には鹿と猿の二類多し。南都春日に同じく市中にも住り。
〔卅六〕薩州鹿兒島に一種の鼠あり。水走床下などに棲り。形は鼹に似て其糞甚だ臭し。少し麝香の匂ひに似たれば麝香鼠といふ。食を貪り、器物を損ふ事、常の鼠に十倍せり。もし膳椀飯櫃などに一度入る時は、其臭氣とゞまりて幾度も洗ひ清めても去らず。もし座近く出る時は、其匂ひ鼻を穿て堪へがたし。鳴聲大にして雀のごとし。傳信錄にも載たり。元來琉球渡海の舟より移り來りしもの也。長崎にも唐船より渡り來りて町家にあれど、薩州ほどになし。紅毛人此鼠を練合せて麝香を製す奇法有となん。
〔卅七〕貒は筑前山中にありて穴居す。土人穴をふすべて捕也。味野猪に似たりと、東武江戸麻布に貒穴といふ地有り。松平右近將監屋敷に拜領有し頃迄は、此邊所々に棲しといふ。豆州土肥眞鶴の野山に多くありて、土人捕へ煮て食す。
〔卅八〕トチ餅といふは筑前博多に在。其精法上品なり。はいの木の葉を燒て灰となし、米を染て製する故其色黃也。飢年に食ふ。トチ餅といふは、蓋栃の實なり。同名にして異物なる事明らけし。また同所に松餅と云あり。松皮にて製す。
〔卅九〕蘇鐵餅は薩州に出。是は實ばかりを用ひて製するにはあらず。すべて一木を突碎き、幾度も水ひして澁みを去て製す。

甚だ飢を助くるなり。

〔四十〕孟宗竹は薩州邊に甚多し。唐孟宗といふ。常の竹より葉殊に細かに光澤よく麗し、節低く葭に似たり。廻り二尺餘に及ぶ有り。此竹は寒中に生ずる故に此名あり。正月より二月初旬迄調味して賞翫す。別して薩州邊は和らかにして味ひ甚勝れり。故に鰹節酒鹽を用ひずして好味なる事、全國に過たり。土地の好惡によるにや。

〔四十一〕四方竹は、此竹も子を冬の中に出す。味又美なり。博物志に、方竹笻として可也といふは是也。但し回り七八寸より過たるを見ず。全銘竹も回りの太きを、是迄見たる事なし。

〔四十二〕蘇鐵は薩州鹿府より西佐陀といふ所に、廣大の蘇鐵あり。廻り五尺に、高さ一丈六七尺にして、皆蘇鐵計也。奥へ入る事を恐る。山神の惜めるとも又大虵ありともいふなり。都て日薩隅の間には蘇鐵夥しく、上方になき數種あり。

〔四十三〕天の梅は、日向山中に寄生也。葉は無果花（イチヂク）の如く赤く、實は庭梅といふものに似たり。家近く植れば枯るゝなり。

〔四十四〕天明二年初めて、琉球の屬島より黄紅蝶と云草花を薩州へ渡せり。その花鳳蝶の如く、はじめは黄にして後は紅に變ず。誠に奇品也。

〔四十五〕肥後と天草島の間に小島あり。人の住べき程もなし。此海を通ふ船三味線を引事を禁ず。若知ずして引ば、必ず浪風大に起り、船危きにいたる。

〔四十六〕日州折生迫海中青島に檳榔子多し。高さ五六尺計り、和訓アヂマサと云蓋味勝なり。上代には我國も閩廣の如く、今の茶を嗜て食るにや。花暦百詠にいふ檳榔、賓與郎、皆貴客之稱、土人遇客必薦故名付く。

〔四十七〕天明のはじめ、洛に黄百合を出す。未だ名を不ㇾ賞、先天明黄といふ。中世秩百合あり。奇花

也。然れども兎角消安し。
〔四十八〕奥州南部のカタクリは公儀へ獻上なり。津輕の中別して寒國に生ず。故に熱暑を避る。其功能人知りて、今は賣物に有り。是萬葉集に堅香子花と讀るもの也。カタコユリの略をカタクリといふ。
〔四十九〕江州叡山に一種の百合あり。植木屋は鐵炮草とよぶ。餘國には珍らしき草花也。
〔五十〕紀州三熊野の濱木綿は、九州の南海、又伊豆尾張の南海邊にもあり。京にて珍重し種を蒔、又根を植ても花實ともに付がたし。
〔五十一〕中世今出川家の西京別莊に數品の菊有り。故に菊亭と叡聞に達し、御車を爰に抂給ひぬ。實季卿感悦の餘り、こと〴〵く掘て禁園に奉らる。よつて此より以來當家菊を植ず。
〔五十二〕茶の湯に用る炭斗のふくべは、江州武佐より出せり。また京田中村に植る也。茶人豫じめ蔓に生出る形象を好に隨ひて十月に取納む。
〔五十三〕常州太田太神宮社内に八幡宮有り。幡布櫻と云名木あり。花の蘂の中に一筋ながくさぎ草のごとく出たり。又東武江戸白山權現の社内に、旗櫻といふ名木有。八幡太郎義家名花めでゝ、白旗をたてゝ結そへられしとぞ。老木となりて今に存せり。
〔五十四〕丹後木津庄松本庄右衛門といふ人、鯉魚を放生の爲に飼たり。年々に殖て今三千口に滿たり。其家に彼鯉の爲に餌を養はざれば、外魚を食ふといひ、別に流水に飼時は鯉となり。淀みたる水に飼へば外魚も鯽となる。天明年間同國の其珀といふ者かたりぬ。
〔五十五〕閑窓隨筆に、誓願寺の未開紅は、飛鳥井殿の紅梅をつぎたるなりけり。
〔五十六〕日野殿白玉椿の大輪なるあり。後西院叡覽まし〳〵て、白糸と勅號を下し賜ひぬ。
〔五十七〕皆川氏隨筆、瞻八樹紀州に多し。熊野大門の内に大樹ありと、是ホルトガルなり。四時紅葉す。樫の葉に似たり。

〔五十八〕同書に、蠅虎を寶永元祿の間には、印籠におさめ持て、酒宴の席にて出して蠅と相撲を翫ぶ。士人より傳へて妓街專らなり。賣もの有て、宜捷は一虫一金に充れり。誠に又あやし。
〔五十九〕九州にタカ菜といふ有り。葉も幹も甚だ大なり。高さ三尺より五尺に及ぶ。葉の形、冬の頃關東に用ゆる漬菜の如くにして、色青黑し。嘉栗云、予が方に少しの圃あり。是を作るもの、一とせ對馬菜と云ものを蒔て生へ出たり。いかにも廣大なるもの也。但し煮て食ふに味苦み有りて上品ならず。もし是等にや。
〔六十〕飛驒蜂加鄕といふ所に、自然生の蕪あり。人倫の至らざる所なれば、猿などの取來りしを見て、人知りて取れり。大さ盤のごとし。又薩州には天道大根とて、自然生多く細く小さし。
〔六十一〕鞍馬の人云、鹿の初めて聲を發せる日より七十五日に當りて、彼山の初雪の降を識る也。每年試て未ㇾ違と、
〔六十二〕文鳥は五彩の翎毛備りて見事なる小鳥なり。籠にて卵を育つ。
〔六十三〕蜜柑に李婦人といふ有り。味ひ甚だ美にして種なし。故に此名を呼り。筑後柳川にあり。たま〳〵予是を得て繼木として貯ふ。嘉栗云、予娣娚なる人、室町押小路下る町に有しが、其庭に種なしの蜜柑の大木有し。家を他へ讓る折から移し植たれば枯たるといふ。いと惜かりし。寶曆の末の頃也けり。
〔六十四〕下關より西の榮螺角あり。寸餘と、東は角なしと云。
〔六十五〕嘉栗云、大坂御城代中屋敷に、蜜柑の大株有り。太閤と權現宮と御兩所、手づから植させ給ふと云傳ふ。
〔六十六〕白鷺鶿江府吹上の大苑にあり。尾州公の苑中にも此種ありと、
〔六十七〕長州萩府白牛山龍藏寺に純白牛一頭有り。飼事數百年、何のゆへは知らずと、もし此牛斃る時

は、必ず國中に一白牛を生ず。牛主則牽て此寺に獻ず。

〔六十八〕但馬豐岡小田井明神の社の砂を貯へ持つ者は、蛇蝮のうれひなしとぞ。

〔六十九〕世に傳ふ、田樂法師の事、伊勢氏校書にいはく、榮花物語に見へたる、田種の田樂一變して、古事談、朝野群載、續世繼、今昔物語に見へたるやうに、常の日の翫びとなり、また二變して増鏡、太平記に見へたるごとく、法師の家業となり、後に三變して、世人翫ばざるにより、本座新座倶に衰微して、只春日、日光等の神祭の日に、少しくその藝を施すのみなり。常は農商を業とす。

〔七十〕豐臣公、いまだ播州姬路在城の時、京三條新町伊藤道光の家を宿舍とす。近隣に廣野了頓と云人は、足利家の從臣なりし。裔孫なるも零落して、此に侘住せり。性茶を嗜むよしを聞給ひ、不時に御入來ありしに、了頓はいそぎ迎へ奉るに、釜湯沸騰たり。斯る清貧にして風雅なるを愛給ひぬ。頓て禮服に立出茶を獻じけり。公感じおぼし召て家領を給ふ。今以て了頓辻子と號す。

〔七十一〕同町南中島情延（家號茶屋）といふ家に、天正十四年の春、東照神君入洛まし〳〵、此家に寓し給ふ。秀吉公大に悅び給ひて、聚樂城より駕をはせて、爰に來り謁給ふ。其事既に二百年になん〳〵として、火災にかゝらず、其家其儘にして德威を感ぜしに、天明八申年正月晦日、禁裏炎上を始、未曾有の大火に燒失せり。

〔七十二〕上立賣室町西宗長（家號針や）といふ者、茶の數寄人なり。豐臣公一時來臨あり。宗春則菓子を供し茶を獻ず。公甚その雅調を賞し祿を給ふ。子孫今に傳領す。每年九月炭斗の瓢を二箇東武へ獻ず。

〔七十三〕六條堀川佐女牛通り西に醒が井あり。水至て清冷なり。茶人專ら用ゆ。茶人珠光は、もと南都稱名寺の僧なりと云。還俗して爰に住り。慈照院義政公時々來臨有し。井石垣は織田有樂齋の改築なり。建仁寺古㵎長老紀石彫今に有り。嘉栗云、醒が井通にありて、井筒には佐女牛の井とあり。古來不審の事なり。佐女牛通りにはあらず。

〔七十四〕大隅國一宮八幡宮の社司四家あり。桑幡、澤崎、相司、留守と云。此桑幡氏今七十餘代相續の家なり。往昔俊寛、康頼、成經の三人、薩州硫黄が島へ配流有し頃、留守氏なる社司位階昇進の爲上京しけるに、康頼の北方密に尋ね來て云、夫康頼配流の島は大隅より程近きよし、何卒よき御計ひにて、今一度對面させ給はんやと、世に哀に頼みしかば、留守氏感涙して、成程我方まで下り給はゞ、よきに渡し参らせんと打具して下りしかども、早速に事ならず。既に一年に及ぶ。然るに小松殿の憐みに依て、康頼、成經二人は歸洛の仰事下り、大隅國加治木迄歸り上り、この八幡宮へ参詣有しことかくれなく、則留守氏に二卿を招請し、此北方を再會せしめし也。まことに不思議の對面なり。

〔七十五〕二根集さいばらは調物を運ぶもの唄ひしなり。伊勢ぶりなどいふ馬を催すといふ字なり。日出度世の事を書置しを、公任卿ふしを付て唄ひ初めらる。これ唐土の毛詩の眞似なりと云々。和漢朗詠集も同卿の作にて、これも唄ひもの也。

〔七十六〕天明三年卯の夏、奥州仙臺の家士山内小藤太、大佛三十三間堂にて矢數有りし、其賀として隱岐大藏大輔よみて遣しける。

武士のその名は代々にみちのくの足立の眞ゆみ射るにまかせて

此隱岐と申は、二條殿に仕へて、元亨の頃化鳥を射たりし隱岐次郎左衛門廣有が子孫なり。弓矢は家の道にして、代々此殿に仕へたりき。

〔七十七〕享保年間、松平大膳亮殿家士小池仁左衛門といふ人、膂力衆に越てけり。或時小田原甲冑師明珍が家に至り、冑を誂へけるに、明珍古き冑數枚庫より取出して、その樣を問ふに、小池云、是等針細くして用に備へ難しと、明珍云く、是等こそ鍛ひよくして筋鐵殊に堅しと、小池笑て、手に取り前に置、激して指を以て鐵條を打ければ、皆鐵條反かへつて針抜たり。依て教へて釘を太からしむ。其後いづれの冑釘もふとく拵ふる事、今に然り。誠に無双の强力なりし。

〔七十八〕近年藥物に用る蛇骨といふもの多く出たり。十ケ年計以前播磨、備前の沖の海底にあり。ふしぎに大なる頭骨を得たり。久敷海底にありしかば、何なる事たしかならず。然れどもその大さ角のごとき龍の骨節ならで、かゝるものなし。其はじめ飾磨の向ひ江島といふにて、漁人が網にて大骨を得たり。大さ臼のごとし。則ち門外に捨置しに、群犬相噬て盡せりとなり。

〔七十九〕高橋前の若州語られしは、河州伊駒山の內に一村有。昔より守護不入の地にて、其長たる者一家支配す。一小社有り、何の神たるも知らず。社傳もなし。或年彼社破損に付て、內を開き見るに、何か一角の大なる有けり。又宮造て初のごとく納めしとぞ。國史に伊駒山に麟角を得し事見へたれば、若さもやといひし。

〔八十〕鴨川石は、唐土にても沙汰せる名產なり。硯とし盆石とす。千鳥石といふて至て青黑なり。今はひろひ盡してなし。此石をもて初て茶碗を燒し、則ち黑の樂燒なり。今其石なければおのづから其器も、昔のごとくならずとなり。此樂燒のはじめは、樂しみといふことにはあらず。太閤秀吉公聚樂の館にて、千宗易に燒しめ給ふに事起りぬ。今樂の吉左衞門其法製を傳來す。肥前伊萬里唐津燒は、白石を用ひて製す。故に火に掛るときは裂る也。淸水燒は土計りなれば、火に焙りて難なし。

○鐘　岬

筑前に鐘の岬といふ所に、古來より海底に鐘あり。此故に其邊を響の洋といふなり。然るに前大守此鐘を引揚ぐべしと、數艘の船をもて漁人をして、かの鐘の龍頭に大綱を付させ引上らる。漸水際近くなるとき、此鐘忽然と鳴響て、さしもの大綱ふつゝと切れたり。扨は物有て惜むにやといひけれ共、又後日船を增し人を倍して、船には多く石を積み、轆轤を仕立、海陸一同し、此度はいかにもして引上べし。もしならずんば、大石を火に燒、海底に沈めて鐘を燒潰すべしなど仰たりければ、皆々此を詮ど繰上げけるに、怪しや大風起りて、大雨車軸を流し、浪高くうち上て、數艘の船過半は埋沒す。大守いよ〳〵

怒らせ給ひ、たとひ海を干すとも引上べしなど宣ふ所に、不思議や何國よりとも知らず、翁の面浪に漂ひ岸によりけり。家臣頓て是を大守に捧げて、是龍神の惡れる成るべし。實にも鐘を惜むといふ事妄言ならず。まげて此面をその代として召置れ候へと、御諫言申ければ、諸人の煩ひをも顧み給ひ、終に其事止ぬ。則翁の面は神社に納め給ふとなん。長州侯の寶器にも面あり。是もいつの頃にや。翁の面を龍神の奉りしといふ。周防山口神事能に、必ず此面にて頭取ありて、萩の城より役人携へ來り、頭取濟や直に持歸る也。此面出る時は、雨かならず降る事也。因に云、越前敦賀にも、海中に鐘有り。此をも鐘の御崎といふ。所の人云、漁人は常に見る事也。此鐘も引上んとせし事有しかども、恐敷事ありて止ぬと、右二鐘同日の談なり。又いふ、常に龍のごときもの有て、是を守るといへり。實にさもあるべし。又近江湖水にて鐘を水底に墮せし事あり。即日に引上たり。東近江武島の顯當寺、三十年以前回祿の時の事也。其綱を持て深さを計りしに、七十五尋有しとなり。

○盆山

近來盆山の雅會はやりて、諸國異域の名石、自ら集る。中にも江州山田村に、木本氏湖牛といふは、世に希成る奇石を持る人也。たま〳〵其石を見んとて行く人有れど、見盡しがたし。三四日も逗留せざれば、こと〴〵くならず。故に好事の人も後には大に倦事なり。信州寐覺の翁是に繼べし。嘉栗云、近年の盆石といふは、古への盆石とは大に異なり。又盆石は打といふにてはなく蒔なり。昔のは甚だ細密なるものにて、小き槌にて砂を打ならすに傳あり。昔のは甚だ古雅なり。予が方に片桐石州公の盆石の自畫贊あり。山の形を書て、所々に嶺岳市尾瀧の五字あり。傳有る事となり云々。抑盆山の事、鹿苑院殿の頃より茶事盛にして、其庭砌の立石、泉水の甃、山に起りて、相阿彌、能阿彌抔繪を能する人、是をなして座下の壯觀とす。砂石を以て山海の風景を寫し、席中の慰とす。其元金閣寺池中の九山八海石を模範とす。烏丸光廣卿有馬御入湯のころ、阿彌陀堂に詣で給ひて、

引提て床の上にぞついすゆる大千世界九山八海と讀給ふ。是盆石を題し給ふ也。御自筆の短册、今に彼寺にあり。安永年間より備後の白砂を極細末とし、夫々に染なして、盆畫と稱して、百花百鳥人物禽獸虫魚を打事はじまりぬ。又盆景と號して、中央に奇石を置、壹より六までの白砂を夫々にあしらひ、或は地砂を以て、打波、引波、逆立波、引汐、さし汐、よどむ水、流るゝ水など打分、夫さへ板を以てするあり、羽にてするあり、匕にてするあり、傳とし、祕事とし、流儀區々なりしは、廿年以來の事にして、甚後世の事なり。盆山の起る事は、其始甚だ久し。因に云、今歲天明五年、大坂京に異國の器物、書畫衣服等を見せしむ。種々の奇玩なり。中に硝子に水を入て、少しその物細き竹を曲げたる形なり。人手に握りて暫くすれば、水自然と上へ逆のぼる。然るに其人陰氣さかんなる仁は、少しく上り、陽氣さかんなる人握れば、水動き上る事も又盛ん也。是先年蠻國より一の玉塊を得たり。梅の實の大さなり。手中に暫く置けば、自然に動き出ぬ。則同種なるべし。誠に奇異なり。陽氣石の類にて、人肌の陽氣に感じて、かくのごとくとなり。然るに其藥法あるよしにて、右の硝子の水も、我國にて製せし也。又紅毛よりエレキテレキといふもの渡りて、京都にて見せけるも、いつしか工みなる人、その製を考へて出來たり。同年はじめて持渡りし紅毛人に見せければ、大きにおどろき早速交易して持歸りぬ。却てかの地より渡りしよりも容易にして、其術よろしかりき。

○酒

夫酒は中世まで南都を最上とす。今諸國に名產多くて、南都第一なりし事は知る人なし。京一條新町に一酒家あり。重衡と號す。是三位中將は、淸盛の下知に依て、南都を攻て興福寺等を燒討にす。今此酒家の名に人呼事は、則奈良酒に勝れしといふ義也。因にいふ、酒を造るものをとうじと呼事、或は杜康が事より起りしとて杜氏と云。又桶司など書て、其說不レ詳。白石先生曰く、上古禁裏に造酒の官庫有

り。其造る酒甕三ツ有し。夫を大刀自小刀自と號せし故に、今酒造る者をとうじと名付る也とあるこそ事實成べし。又酒を商ふ家に、必ず杉の葉を得て印とす。是又酒を三輪と云古語より起りし事なり。享保年間、和州塙村の酒家に、夏のころ雷夥しく鳴て墮たりしと覺へしかば、各裏へ出て見るに、土藏のひゞく音あり。戶前を開き見るに、一の火塊大さ毬のごとくなるが轉びまはり、黑烟みち〳〵たり。おの〳〵駭き騷ぎけれども詮方なく、須臾にして柱へ上り去りぬ。其痕狗の嚙たるごとくなり。金屛風一双有しに、金箔みな變じて、或は黑み亂れ、朦朧として雲のごとし。中に一點の朱圈出來て、その色赤き事日の丸に類する所五ケ所あり。人皆雷畫の屛風といふ。

○無着尼

足利氏の世五山の禪刹に准じて、尼寺の五山を建らる。其第一を景愛寺と云。世に知る千代能尼を開基とす。上杉二階堂等の列侯檀越たり。此婦人は金澤越後守顯時の女にして、足利讃岐守貞氏、（尊氏父なり）の後室なり。貞氏沒落出家の志あり。密に美濃國に上り、松見寺の老尼に付て婢女となり、薪を取り水を汲て、更に勞苦を返り見ず。暇あれば禪床に座して、不臥不眠、形躰碎け神心疲るれども敢て厭はず。或尼、是を憐み、坐禪の事をおしへ示す。爰に於て彌〻道に進む。八月十五日淸明にして雲なし。千代女谷に下り、桶に水を汲、頭にいたゞき步むに、忽然として桶の底ぬけて全身水に浸せり。此時大悟徹底して歌あり。

兎に角にエみし桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず

一說に千代能がいたゞく桶のとも聞ゆ。斯て鎌倉に歸り、建長寺佛光國師に付て、髮を剃尼と成。如大禪尼無着尼と號す。京に來り聖一國師に參禪し、都下に遊ぶに、一日五條橋上にて妙超侍者、（割註）大德寺開山大灯國師也。」に逢へり。超問て、阿師は無着尼に非ずや。如大尼左右の手をして、我前を引開きて云く、此は是諸佛出身の門と、超、口を噤んで走り去りぬと、衣笠山下眞如寺（割註）十刹の內な

り。」に、佛國聖一如大禪尼の像有り。後に松木島景愛寺に住む。〔割註〕尼寺五山第一也。」京洛北本隆寺に千代能が井とて、桶の底拔し地とす。甚疑はし。恐らくは誤ならん。又一説に、千代姫は陸奥平泰盛が女とあり。

○了然尼

東武江戸鐵炮洲に了然尼といふ尼僧侍り。京師葛山氏の女にして、東福門院に召仕はれて名を宿り木と號す。女院かくれ給ひて後、家に歸り住。爰に人ありて媒する故、父母諾して娘に婚をすゝむ。女の曰、子供二三人持なば、夫暇を吳てんやと約して、松田某といへる醫師へ嫁しけり。果して二十四五歲頃迄に男女三人の子を持り。則夫に暇を願ひ、目前に髮を下して尼と成り、五山の僧に付て禪學を勤めけり。關東へ下り、鐵牛和尙に法を問んとするに、容顏美麗なりしかば、寺門の出入を止めらる。依て木庵禪師の弟子伯翁道泰和尙が駒込の庵室に尋ねて法を受ん事を乞。是も艶色のうるはしきを厭てゆるさゞりしかば、力なく立出て町家へ休らひ、銅器を火中に入れ、赤く燒たるを追取て、我額より顏へおしあてしかば、何かは以てたまるべき。皮肉焦爛れて目もあてられざるに、則筆執て、

昔遊宮裡燒二蘭麝一　今入二禪林一燎二面皮一
四序流行亦如レ此　不レ知誰是箇中移

生る世に捨てたく身やうからまし終の薪とおもはざりせば

後に鐵炮洲に草庵を結び、隱れ家の茂睡、〔割註〕御家士にて梨本とも、求ぬ橋共名に呼びしは、よめる歌によりて號たる也。」及び遺佚などに和歌を以て交り、晩年には牛込高田落合泰雲寺の寺主と成、泰雲了然元總大和尙と稱す。長壽にして正德元年辛卯九月十八日寂す。

○待宵侍從

壽永の頃、德大寺實定卿、八月十五夜舊都の月を賞せんが爲に、攝州福原の新都より、此京近衞河原御所

に入らせ給ひぬ。待宵小侍從此宮にありて、和歌を以て實定公に供奉せし物加波藏人に答へしこと、平家物語に見へたり。後前后〔割註〕實定卿の御妹。」薨じ給ひて寺となる。通源寺と號す。小侍從尼と成り、智泉尼と號し、則開祖なり。〔割註〕後尼寺の五山の中。」其後皇姫比丘尼と成給ひ、こゝに住給ふ。後世に通源寺はたへて、一塔頭曇花院殘れるを、近世東洞院三條に引移し、女宮代々住職し給ふ也。いつにても侍女一人有髮なるを召置れ、今に待宵小侍從と云ふなり。又德大寺家の諸大夫に、今以て物加波藏人有。この藏人の妻室は、代々琴の緒をよる由緒にて、他に讓らず。此婦人のみ勅許也と云傳ふ。東山院一乘寺村の詩仙堂に、陳眉公の琴あるを召寄叡覽有しに、古絃纔に三筋のみなりしを、件の妻室によらせて琴にかけられ、御返し有けり。誠に古實の家なり。又昔の待宵小侍從は、八幡山の社司西行が女なりと、

〇建仁寺

當寺は鎌倉賴家公の建立にて、千光國師榮西の開基なり。國師入宋し歸朝のとき、まづ筑前博多に聖福寺を建立す。日本禪宗の權輿也。又栂尾妙惠上人と同船し、唐茶の種を初めて當國脊振山に植られ、夫より栂の尾に傳へ、又宇治に移せしなり。夫より以前も茶はあれども、唐種を植る初なり。予日向の國にありし時、國人云、米良山など燒畑をすれば、先茶の木初て生ず。然れば元來茶は有べしと云へり。この國師俗姓備前國吉備津宮の社家大藤內の弟なり。〔割註〕大藤內事は末に出づ。」當寺の鐘は、源融大臣、六條河原院に掲られし鐘なり。又陀羅尼といふ鐘あり。是もダラリといふを誤りいふなり。每日夜半より鐘を撞出すに、鐘を一ツ撞ては般若心經を一反唱へ、また撞てば一反唱ふ也。かくのごとく撞ては誦し〳〵して、丑刻迄九十撞、終りて又夜明方に十八撞也。以上百八の數終る。夜半より夜明まで撞の心にて、ダラリ鐘と號す。又大坂北天滿寒山寺といふ禪刹に一鐘あり。名たゝる鐘にはあらざれど、其鳴音清亮として遠く響く。唐土の胡蘇城外の鐘聲世に稱せり。今この寺も寒山寺といふは、誠に符節を

合すが如し。此故に浪花の人、其時刻をいはず。寒山寺の鳴は夜の明るなりなどいふ也。誠に近く聞てよくひゞく名鐘、聲騒しからず、遠く聞に、其音淸和にしてよく響くは名鐘といふべし。因に云、惣じて五山、毎日早天方丈より祖師前へ供膳有。先づ拂曉に銅盤に湯を入、手巾をそへて奉る。其後白粥を備ふ。五明に至り齋飯調菜をよく煮、念を入て鹽梅し、輪番僧供し奉る。四季に衣服を奉る也。されば今俗間に早朝起て手水し口嗽をウガイといふは卯粥なり。事は佛氏に出。瑯琊代醉に云、周朴は唐末の詩人なり。宿二於閩鄕僧寺一。諸僧晨粥卯食、朴亦攜二巾盂一厠二諸僧中一。畢レ飯而退。と云々。實に禮儀祭奠の厚き、入寂以來一日の懈怠なし。嗚呼信篤なる哉。因に云、四天王寺六時堂の鐘、盤渉調なるよし、二八時正の日是を聞て、樂人一年舞樂の調子を定むと兼好云へり。又京法金剛院の鐘同調なるよし、今妙心寺に掲たり。前にいふ備前吉備津宮の社司大藤内といひしは、千光國師の兄なり。筑前聖福寺に墓あり。是曾我兄弟仇討に討れしなり。其時は工藤祐經一薦也しかば、吉備津宮再建の願ひに、此亭に居合せて不慮の死をせし也。今大藤内左衞門といふ代々の神職也。此家法に甚だ死者を忌、もし途中にて刑人、或は葬送に逢へば、則道をかへて逢ず見ず。又家内としてシの字をいはず。もし誤りていふものあれば、則ち起て避るなり。往古より此家斯のごとし。又すべて備前一國神職に宗門といふはなし。勿論旦那寺とてもなく、國中の神社僧の司る事もなき也。

○桂　女（同飴）

毎年正月西京桂の里士人某妻、飴を圓き箱に入頭に頂き、禁裏院中及び高貴の家に獻じ、又諸司代にも奉る也。是名物の桂飴なり。その村八幡宮よりの古實ありて、家に寶とするもの有り。何なる事を知らず。是を首に戴きて出る。名を孫夜叉といふ。白布をもつて頭をつゝむ。其樣能狂言の女の姿なり。是昔我國女の風俗なり。童謠に桂帽子などいふはこの事也。神功皇后の守札を出す。今は只百姓の女房なり。嘉栗云、桂姫といふは、是とは別にて、關東に御由緒ありて、將軍宣下には下りて御目見するな

り。昔産婆様のもの也。十二月十三日八幡安居頭に、必ず桂女飴を八幡宮に獻ず。所謂上古應神天皇の頃の供御の人なるべし。或高貴の記錄に曰く、寶治二年七月二日、度々有レ召、參ニ殿下岡屋敷一。是上下桂供御人。有ニ飼場相論一。下桂は殿下の御殿なり。予上桂女可ニ裁許一之處。又下桂被レ帶ニ御教書一。忽及ニ鬪亂一。依ニ其事一上桂女等群ニ參院御所一すと云々。

○五十間庖丁

京都に五十間某とて、代々の庖丁の家あり。元來豐臣秀賴公に仕へし者なり。大坂城亂のとき、故有て京極宮に入て、今に庖丁司たり。料理をする人、多く此門下に客たり。其百日の鯉を裁事、山蔭中納言殿に始まり、今に庖丁の名譽とす。正月五十間氏に庖丁始と云事有り。門人會して諸の魚鳥を料理す。誠に花美なる見物也。予が見し時は、東山長樂寺の佐阿彌か亭にてありし。先其日の番組有て奉書紙に書て出すに、料理人の國所姓名、又料理の題名有。第一の祝儀として熨斗包鯉と有り。其人は麻半上下を着し、眞那板長五尺計、幅二尺計り、眞那箸庖丁を置、膝行して眞那板より庖丁箸を取て、種々の式有て、先眞那箸をもて奉書紙を行の熨斗包に折形し、扨鯉の大なるを截立て、かの帋に包み、水引をもて結ぶ。始終庖丁眞那箸にて、更に手を持てせず。斯て次第に出て料理す。都合十五番なり。中に鰭通し鯛と銘せしものは、二尺に餘りたる大鯛を竪にして、其口より鰭尾に至る迄三枚におろす。又幣帛鯉といふは、鯉を橫竪に毛切にして、眞那箸に貫きたるは則幣の形とす。左右の刺身離るゝごとくにて連れり。其餘は宗氏、五十間氏、倶利伽羅鯛といふを勤らる。魚多く鯛鯉又鰈ありし。其手練無造作なるや。目覺る見もの也。その庖丁眞那箸と同じ。長さ二尺計也。かねて思ふ、庖丁は目釘にて固めしものやと、曾て左にあらず。時として拔る事あり。是を以て見れば、皆手の內の練磨にて、誠に業に熟せしものなめり。人いふ、西國の諸侯船にて上坂の時、料理人の者眞那箸にて、大切の皿を挾み、海にて洗ひしといふも、又妄言ならじ。或人の說に、料理の始は、魚名公の男、四條中納言政具卿より庖丁起れ

り。爰を以て四條流などいへり。別て傳授とするは五魚三鳥也。五魚とは、鯉、鯛、鰈、眞那鰹、鱸也。三鳥とは、鶴、雁、雉子にして、各作法有て、又料理の調味少なからず。因に云、婚儀にあわびをいむ事あれど、熨斗と稱する物皆鮑也。尤海老熨斗、蝶々熨斗あれども、其餘の長熨斗皆鮑也。故に古歌によめり。

何事も二ごゝろなき鮑貝かた思ひとはたれかいふらん

因に云、大臣以上に参らする膳をば四方と稱す。足に四穴あり。三位以上にすへる膳を三方と稱す。足に三穴あり。三位以下にすゆるを木具とし、四位以下の膳をウスバンと稱す。三方に似て足の向に一穴ある也。女中は掛盤を用ゆ。寸法等おの〳〵法有て、元來白木を用ゆるを本とす。曾丹集の中に、

へつくりの垣根の雪を餘所人は鴨の上毛とおもふらんやぞ

へつくりに見せまじものを難波江の芦間をわけてあそぶ鶴の子

此二首の歌にへつくりといふ事知れがたし。是難歌のよし人々いへり。年頃予も見聞毎に心を付し中に、或人語りしは、關東にて去國の守の方に招かれし時、挨拶に此節よきへツクリもなくて、不加減にて侍らんと申されしは、何の事とも解しがたかりし。さてはもし庖丁人の事をやいふやらんと、先豫め推量に定ぬ。然れどもいまだ慥かなる事にもし難し。猶出所あらんと、村井古岩といふは、世の好人にて、古書を多く貯へし事充棟。依て或日料理古實の書數多見しに、その詞も見へず。時に古岩云、へツクリとは贅作なるべし。御贅ともいへれば、料理なす人として遠からざる也と、實斯る事を推當おもへば、歌の心も明らかなり。何事も好事の人に問見まくのみ。

○了俊道灌詠歌

今川了俊(于レ時侍所)九州に在て、南朝に志ある菊地等を追伐せんと欲す。然れども家僕所々の戰ひに減少して、纔に殘兵三百騎(中略)。了俊敵の擒とならん事を悔ゆ。蓋し本國の遠江を通らん事をうれひ、

救の兵を乞次でに、和歌を詠じて細川賴之へおくる。

何となくこゝろにかけておもふかな濱名のはしの秋のゆふぐれ

賴之、是を聞て志しを感じ、遠江を通らん事、いさゝか違背有まじと答ふ。則大内義弘をして了俊を扶しむ。櫻雲記。了俊申されしは、頓阿が歌の達者なる事を二度見侍りし。爲季卿座せられし會に、一首人の讀ぬ題有り。既に短册重ねらるゝ時見出したれば、爲季卿は頓阿にとて投かけられしに、頓阿ちつとも案ぜず。短册を重ねらるゝ間に、頓て書り。其題は梅散客來といふ題にて候なり。人の讀まぬも道理也き。さては如何なる歌をか讀つらんとおもひて、披講聞侍しに。

とはるゝもいとゞおもひの外なれや立枝の梅はちり過にけり

花月百首。太田入道道灌詠草　飛鳥井榮雅卿點

あらざらん後の闇路を照さなんなれし都の秋の夜の月

古郷に通ふ心づかひ哀なり。殊更此夏の行軍は大切やらんと存候趣、尤も感にあまりて聞へ候なり。陶々齋が紫一本にいふ、江府御城は太田道灌、〔割註〕後花園院長祿二年。」初て築き、靜勝軒と名付て矢倉に上り、四方を見て、

我庵は松原遠く海ちかく不二の高根を軒端にぞ見る

と詠じ、か程の名城は我朝にあるべからずと自贊せしに、かぶりたる頭巾フワと脫て前の松にかゝれり。夫よりして此木を頭巾松といふ。此櫓有し地、今は三重の御櫓あり。富士見矢倉と號す。道灌は文武二道を兼、世に聞へたる歌多し。家集に慕景集有て、三好日向守勝元朝臣短慮不成功と云。」昌黎が作りし言葉など、せうそこの端に書付て、其こゝろばへを問はれしかば、

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路のむら雨

此和歌大に人に益あり。こゝろあらん人は、常々味ひ甘んずべし。道灌辭世の和歌、室町日記に載た

り。

　きのふまでまゝもうさうを入置しへんなし袋いま破りけり

白石先生へんなし袋の事、いかにも酒飯嚢などと申ごとく、軀殼のごとく相聞へ申候。當時も俗語にはへんもなき事など申、無用無益の事のごとくに候。緣塗烏帽子と申を、へんぬりと申よし、又旅袋、コンサシ袋など、いづれも至極古きを見候に、緣縫にて口を括り候。今のカヾリと云も、其製に寄候か。上刺袋などは、殊に飾などしほらしく候。是によりて見れば、緣なしふくろにて用に立ぬの義にもあるべく候や。(下略)かゝる時にこそ命のおしからめといふ歌、辭世にあらざる事、先哲も沙汰あれば爰にいはず。

　○元就詠草

大江元就詠草に、元龜第三曆仲呂吉辰、懸車老翁特進實隆と、然れば天が下に其勇士成る譽を稱して、風雅の場に遊ぶこゝろざしの深きゆへを、いまだ知る人なかりき。

　　散花を詠ずしもや里人のたゞ春毎に小田かへすらん

　發句

　　身は一ツかけて野山や花の春

　　凉居ておもへは花の木かげ哉

奥書に、此一卷は鎭西主毛利元就芳作也。抑我帝六十餘國の中、三ケ一を平げらるゝ戰場にして、夜々つらねおかるゝとなん。(中略)三好修理大夫長慶撰集の催し有しかども、時至らずや、徒になりぬ。(中略)文を捨て武を專らとする人を諫んの便となさんと、元龜二年二月始これを記しおはんぬ。(紹巴)

　○越後舊地

越後國米山藥師の海邊は、すべて砂濱にて、北風に吹よせて、所々小山のごとし。元より北海には潮の

満干なければ干潟なく、海際極めて深ければ、行人皆此砂の上を踏通る。所の人は板にはな緒を通して履ゆへ、砂に足入らず。草鞋草履などにて通れば、極暑などには一向堪がたく、多くは霍亂す。我國に是程の砂濱の長途はなきなり。出羽の酒田の砂濱是に繼べし。

嘉栗云、駕籠にも板をはきてかく也。杖する時は、かたしをぬぎて、其板の上に杖する也。又予はじめて至りし時、六月なりければ、所の人草鞋に青葉を敷、上へも巻立てはかし呉たり。斯せざれば霍亂するなり。この邊を越の長濱と歌にも讀し所也。

其中に椙崎、柹崎とてあり。柏崎殿とかや云し跡も、この町の辻中に、〔割註〕彌陀の三尊、地藏尊有。香積寺といふ禪宗也。」石佛あり。腰より下は土に埋れり。若狹國八百比丘尼建し由、自然石にて深さを知らずと、堯惠北國紀行、柏崎といふ所迄夕べ越けるに、村雨打そゝぎければ、

梢もる露はおけども柏ざき下葉に遠き秋のむら雨

此國親鸞上人配流の地なれば、其舊跡甚だ多し。長岡の國分寺も、今は淨土眞宗の寺なり。日本六十六ケ國の國分寺も、十に八九は廢して、纔の小堂なり。然るに此長岡は大殿巍々として、丈六の五智如來儼然として上古の形狀を失はずこそあれ。柹崎といふ所にて、上人宿を乞給ふに、主こゝろなく借參らせざりしに、女房痛はしくおもひ、亭主にいろ〳〵と說て御宿をなしければ、上人狂歌に、

柹崎にしぶくも宿をかしけるはあるじのこゝろじゆくしたるかな

此上人の諷詞多く聞傳へず。伊賀阿賀觀音にて、

哀れにも二世をかけてぞ里人のあか佛とやねがひおくらん

因に云、京寺町通りの上に六條殿と申堂上あり。この殿に親鸞上人御妹の尼公へ、御配流の時かたみにとて送り給ふ鏡の御影有。是は昔越後に或百姓の方に數百年ありしが、尊きものなれば、在家には置がたしとて、持主京都の御本寺にやおさめんものと持上り、案内不知の事なれば、只六條樣は何方にやと尋

ね廻り問ひければ、則ち御家こそ六條樣と申ぞとおしへられ、願ひて此殿にさし上げて歸りしと、其品今にありとぞ。

○法華八講

物換り星移りて、何事も故實を失ひ、風流になん成ける中に、三月今宮安良居祭、九月太秦の牛祭の二ツは、今に古雅にて、さらに風流を失はざりき。但し佛寺の儀式は、却つて昔にかはらず。古實を失はざる事多かりき。天明卯年十月叡山に大會と云事のあり。五升庵の主さる結緣にとて詣られ語られしは、其日は五卷日といふ日なり。法華經の五卷目に當れる日なればかくいふ。勅使題者の式など有て後、大講堂の庭を大衆二行に並び、花籠をもち、梵唄などいふにやあらん。得もいへぬ事唱へもて、堂を圍繞する事二度、其中に花籠を荷へるあり。閼伽桶を荷ふあり。薪を荷ふもありて、俱に行道す。見も馴ぬ殊勝の行道なり。後に山の法師五智院といふにとへば、其折に唱ふるは、伽陀梵唄散花の類ならず。日本歌なり。

法華經を我得しことは薪伐菜つみ水汲仕へてぞ得し

といふ和歌に、墨譜を付たるなり。

嘉栗云、洛空也堂の和讃といふも、かくのごときものなり。和歌にはあらず。無常の事を、一句二句ほどづゝのもの也。文句數十あり。

今按るに、此和歌、光明皇后の詠歌也。この勅會天台家に修行する法華八講也。禁廷などにて行はるゝ時は、興福寺、東大寺、延曆寺、園城寺の四大寺の碩德を召るゝ也。その薪の行道には、天子も自ら御行道ましく〳〵、薪菜籠水桶等は、「六位藏人勤レ之。今上南殿の櫻を御手づから折らせ給ひて、資枝卿(日野)の頭にかざし給ひ、歌つかふまつれと勅ありければ、

大君の御手よりかざす花の色のしらかみまでも仕へまつらん

源公忠集に、朱雀院の御門主におはしましける時、膝の上におはしまして、おん手づから紅梅をかざしにさゝせ給ひ、頭もたげざらんに歌詠と仰せられければ、

百しきの梅の花笠さすときは天が下こそうしろやすけれ

是等の例おもひ出られて、めでたくこそ。また拾遺にも、内裏の御遊び侍りけるとき、参議伊衡、

かざしては白髮にまがふ梅の花いまはいづれを脫んとすらん

延喜二十年、御池の氷いたるを叡覽まし〳〵て、西三條、烏丸の兩家へ送らるべしと官人に仰す。

世にあつき惠みならずばいかでかは御池の氷やどなかるらん　烏丸

斯ながら見るにぞしるき九重の御池のこほりあつき惠みを　西三條

天明三年二月御寶算御十一　御製

庭上梅花在　花色如白雪
春風吹甚香　香氣偏可悅

右奉和

聖製　梅花玉韻應製　隨宜樂院宮

梅花入震章　字々鬪白雪
餘香隨惠風　散使普天悅

○深草元政法師壁書

不幸にして世をそむける墨の衣にはあらで、髮ゆふがむづかしさに、頭を剃、柴の軒、竹の柱、身に輕ふ。此に留をく心から世の人を見るに、只身をおもふ業のみに足を空にし、吉野山の花の憐も知らず、深草の鶉の聲をきゝては、燒てくてやりたひと計りおもひ、後は何になることぞや。斯靜ならぬ身は、只人間のみにあらず、山を出る雲は雨を催さん爲に閙しく、山の鹿は妻乞世話に聲のかぎり鳴。これを

思ふに、此身ほど樂にひまなるはなし。惠心の作の佛一體持たれど、後世願ふ爲にはあらず。持傳へたる道具なれば、御宿中計り也。膝を入るゝの二枚敷、土鍋ひとつに埒明き、正月とも思はず、雜煮くはぬ我には、聞かれまいとも云はぬ、鶯の初音心よく聞、夜着蒲團ももたぬ家には見られまいともいはぬ、依怙贔負のなき窓の月をながめ、嵐吹夜のさよしぐれ、降ふが降るまひが、我身ひとりの苦にもならず。春の色のこぼれ種の夕顔、曲ろふが筋かほふが、あんな物じやと思ひ、睡る筈の目なれば、寐たければ聾もかきこもり、歩行筈の足なれば、手の奴、足の乘物、心の欲する所にあるけども、盗せぬ身なれば、人も咎めず、極樂へ往てたのしみたいとおもふ欲心なければ、地獄へ墮る恐れもなし。死るまで生ふとおもへば、年のよるをもへちまとも思はず。年をかぞへた事なければ、いくつになるやら知らず。覺へた事なければ忘れた事もなし。

あら樂や人が人ともおもはねば人を人ともおもはざりけり

松たてずしめかざりせず餅つかずかゝる家にも春は來にけり

又辭世に

深草の元政坊は死るなり我身ながらも哀れなりけり

○桃水和尙

桃水和尙は、諱を雲關と號し、九州筑後の人也。肥前島原の禪林寺に住せられしに、遂に跡を匿し、洛北鷹が峯に移れり。鷹が峯にて酢や通念とも、又道全共呼びけり。その間大津坂本邊にて乞食せられけり。或年肥前禪林寺の弟子たりし琛州といふ僧、江府より歸國の時、乘ものゝ内よりふと見て、大に驚き、旅宿に着て、頓て行向ひて、年頃の積欝をも述べ、又其やうの賤きを歎きけるに、呵々と笑ひ、用ある體にして跡をくらまし給ふ。その跡は筵の破れたる馬士の小屋に、追分繪の阿彌陀の像を張おきたるに、消炭をもて認め置れけり。

臨けれどやどをかすぞや阿彌陀どの後生たのむとおぼしめすなよ

○賣茶翁

翁はいづくの人たるを知らず。晩年洛の相國寺に有て、專ら參禪を事とし、毎日一ツの茶棚を荷ひて市中に賣、百錢に至れば則歸る。其檜板あり。書に曰、

更添紅葉半文錢　三條橋畔賣茶老
方向通天烹ニ渭水一　過客莫レ去價猶貴

茶錢は黄金百鎰より半文錢まで呉れ次第、たゞ飲も勝手、たゞよりはまけ申さず。

嘉栗云、昔東武に女の付るさねかつらを賣りし翁有けり。時の人賣桂翁と呼り、至隱の人なりしよし、賣茶翁にもまさりし人のよし、儒士蒔井大室先生かたられしと云々。

達磨さへおあしで渡る難波江のながれをくめる老の我身は

盧仝正流兼ニ達磨宗一扶桑賣茶高遊外偶作三首

其一　非レ僧非レ俗又非レ儒　黑面白鬚窮禿奴
誰謂金域周茶弄　乾坤都我一茶壺

其二　丱歳辭レ親謝ニ世榮一　頹齡去レ姓遁ニ僣名一
此身堪レ笑同ニ蝙蝠一　依レ舊賣茶一先生

其三　祖堂無レ功座石稀　風狂蒙髮脫ニ緇衣一
人間出世放ニ過去一　唯是賣茶足レ拯レ饑

和ニ賣茶翁偈作韻一　三首

不レ欲ニ出爲ニ君子儒一　寧爲ニ座首講師奴一
賣茶活計無ニ人會一　日月乾坤藏ニ一壺一

方外久志辱與レ榮　人間何營利兼レ名
一鐘苦茗難レ下レ口　誰道都無レ心ニ度生一
總爲ニ緇門知己稀一　隨レ緣玩レ世脫ニ畦衣一
箇中茶價從ニ人擲一　轉飯聊忘肚裏饑

○名物

京一條淨福寺通に研屋長右衛門といふもの、所知、上京木槿原の家に、殊の外貧き一老婆有り。家主かの老婆のたのむ子だになきを憐み、常々錢など貸與へて、深く惠めり。或日件の老婆一の錦の袋を持來りていふ。我年ごろ恩を請て報ずべき物なし。是はこれ先祖より傳へて大切の物也と聞たる計にて、何なるものとも知らず。我今老て死期も近からんに、讓るべき者もなし。恩を謝せざるも淺ましければ參らすといふ。家主聞て是は思ひもよらぬ事なり。其方に物を貸たればとて、始めより取べき心にあらず。かやうのもの我家に入らぬ也。持歸るべしといへど、老婆聞入れず、投出して歸りけり。其後年經て婆も死たり。弔ふ人もなければ、形計りに葬り、七日々々も志ほどに追善し、不圖其事を思ひ出て取出し見れば、一の劍なり。殊の外錆たり。則地主の藪田へ研に遣しければ、一日見るより賞美し、是はまぎれもなき天國の劍なりとて、殊の外あきれたり。家主も大に驚き、即藪田を賴みて、江戶へ遣したれば、本阿彌より白銀二十五枚をさし越ぬ。後は獻上になり。御庫に納まれりと。其劍長一尺二寸餘、鎺元厚サ四分半計、劍肌地目有て、一面亂のくすけ燒なり。中心八寸計りなり、予相州岩沛といふ所にて、此劍を見たり。それは長二尺餘有て、殊に錆腐も出ず。銘も天の字はたしかにて、國の字は不慥なり。此天國といふは、文武天皇大寶年間の者にて、和州宇陀也。一代鍛冶にて鍛冶の元祖也。又天座といふも同じ頃也し。因に云、日本の劍、萬國に勝れたる事は、異邦にも沙汰せる也。中世殊に名鍛冶多し。後鳥羽院刀劍を好ませ給ひて、御製作の物有り。八劍と號す。菊の御紋、或は枝菊も有りし。年中十二

ヶ月を隱を以て、鍛冶順番に、禁裡にて打せり。是を番鍛冶といふ。粟田口備前備中等の國々より召登せらる。銘もその月の異名を用ひらる。其略は王春(正月)奉行大宮中納言俊當(福原)則宗、余は是に准ず。又雲上御作のときに、相槌も又高貴也。故に時の堂上にても御自作ありけり。其銘不一二、九條時信公(御銘片破月)二位増都(品)、大宮中納言信兼等の御作あり。帝隱岐に遷座在せし時も、常に打せ給ふ。御銘助秀と遊ばされし。十七葉の大菊有しと也。鹿苑院義滿公ゝ宇都宮三河入道參候の時仰せらるゝは、人に太刀を與ふるに、諸侍ともに重代にもすべき事か。然るに物切れざらんを遣はさん事、然るべからずおもふ間、可ㇾ然ものを記し申べきよし仰出さる。則ち御前に記し差上る。備前、備中の間を専ら書記して、以上六十人有し。此頃國々名作多かりし。義滿公後道義と號し、則金閣寺に隱栖在りし時に南朝既に衰運にして、足利氏天下に跋扈し、いつしか驕奢雲上を推す。應永戊子三月八日、後小松帝の行幸を催されて、此地に三日駐輿し給ふ。御遊數々あり。和歌御會の日、相公愛子義尙、關白の座上着座なり。かくて僭上の餘り天子を放ちて自立の國王となる。近臣細川、畠山等をして攝官に替らしめんとす。この事、主上密かに聞し召、大に駭き思し召、道義に太上天皇の尊號を給ひぬ。夫我國は神裔一祖にして、外人臣たる氏族、一日も天位に在る事なし。異國甚賞翫する所也。然るに太上天皇の寳位を賜はる事、上古弓削道鏡の外無し。皇祖西州より東に即位ましく〱てより、此とき迄既に一百餘代、星霜二千年に向とす。其千歳の間、隆世衰代有べき事か。就中應永より文明、永正の頃、天下蜂窠の如く、君臣宮廷に安座し難く、誠に本朝萬世の困厄といふべし。去ば大永六年宗長紀行に云、關山を越、粟田口に來れども、人ひとりにも逢ず。さしも此峠は、笠を傾け肩を摺る馬輿もさりあへざりし道ぞかし。京を見渡し侍れば、上下の家、昔の十が一もなし。只民屋耕作の業の體、大内は五月の麥の中、淺間敷とも、申にも餘り有べし。武者小路のふる知人の所にして、漸く長途の乘物の身を、

老のこしけふぞ延つる時わかぬはなのみやこの風にあたりて

と云々。此年の越年は藪の酬恩庵の寮下に、爐邊六七人集り、田樂の鹽味噌の序に、はいかい度々にて、
愚句は高野聖の先の姫こせ追付んといふ心付增り侍らんや。
追つかんとや聞ぐらん。高野聖の跡のやりもち(宗鑑)。
○異名所
朱子曰。中國有三大河。長江、黃河、鴨綠江云々。此中鴨綠江は朝鮮と中華の間にある大河也。和訓にアリナレといふ。アフリョクの轉訓なり。ナレとは三韓に川を云俗語也。我國にて異朝の名所を讀し事、此川と琉球とのみ和訓有り。泉式部家集に、
あかざりし君をわすれんものなれやありなれがはのいしはつくとも
又琉球國をうるまの島といふ。公任卿の歌に、返事せざりし女に送る、
覺束なうるまのしまの人なれや我言の葉を知らずがほなる
往古我國の人異國にわたりて讀る歌多かるべけれども、世に知れるは、仲丸の三笠山の歌の外、建仁寺榮西の讀し歌、吳竹集に載たり。
諸越のこずゑもさびし日の本の柞のもみぢ散やしぬらん
古鄕に母あり。孝心言外の實情感淚餘り有。又明玉集に、もろこしにわたりける時、野原を過けるに、松むしの鳴を聞て、
きゝ知らぬことのみしげき唐國の野邊にかはらぬ松むしのこゑ
此餘見及ばず。近世寬永以來の治平に、やまと、諸越道等しく、我國漢文の譽あり。韓土にも和歌の賞有り。誠に國異なれども、時を同じふするの德化也。
延享元年甲子の夏、朝鮮人來聘の前年、通詞の一官人元德淵字は仲擧、對州に來て萬の聞合して歸國の時、家老某に惜別の和歌あり。

あすはまた誰なからんも知らぬ身の友あるけふの日こそおしけれ

此書、今姫路城主の家士にあり。又同年の慶賀に、琉球國よりも聘使あり。此舟肥前松浦に風待して久しくしてよめる和歌あり。

同じく伏見にてよめる。

追手ふく風のたよりを松浦がた幾夜寐ざめの數つもるらん

同じく富士山を眺望してよめる。

いつも斯かなしきものか草まくらひとりふしみの夜半の月影

同じく吾妻にて、

人とはゞいかゞかたらんことの葉のおよばぬふじの雪の明ぼの

浮島が原にて、

旅ごろもはる〴〵來ても古さとにかはらぬものは月の影かや

ふじの根の雪ふきおろす風みへて一むらくもるうき島がはら

琉球程順則本唐留學し、壬申年江府へ使者のとき、富士の詩文あり。

眞是群山祖　扶桑第一尊

滿嶺生白髮　鎭國護兒孫

同じく平補親雲上和歌、

もしもそのくるしき波にたゞよはゞこがねのみねに南無阿彌陀佛

○用　意

達人の心を用る事別也。玉葉集の第一の歌と云る、

おり〳〵はおもふ心も見ゆるらむうたてや人のしらずがほなる

哀しる人こそかたき世なりけりひとり雨きく秋の夜すがら

此歌を聞て、今川了俊は爲秀の門人になられけり。(正徹物語)淸岩集話に云、定家常に申さる。歌を案ぜん時は、白氏文集の故鄉有レ母秋風涙。旅館無レ人暮雨魂の詩を吟ぜよ。此詩を吟ずれば、心けだかく成て歌の詠るゝなり。〔割註〕三光院昆玉集、兼好は平生のすさみに、白氏文集を好みて見られしなり。蘭省の花明といふ詩を、ふところ紙に書て、紙破れぬれば、又異紙に書て朝夕のすさみにせしなり。〕又蘭省花明錦帳下。廬山雨夜草菴中の詩をも吟ぜよと侍り。旅館に只ひとり居たるに、ほろ／＼と雨の打ふりたるは、誠に心細きもの也と云々。爲秀のあわれしる歌よく叶へり。大黑庵紹鷗始の名は新五郎といふ。因幡守從五位下にて、武田信玄の一類也。信玄世に名高き人なれば、武田を憚り氏をかへて、

種蒔し同じ武田の末なれどあれてぞ今は野と成にけり

と詠て武野と改む。西三條逍遙院殿に付て和歌の道を問ふ。その頃北向道珍といふ人同調の友としてよし。或時紹鷗のがり音信て、昔今の物語る中に、

見わたせば花ももみぢもなかりけりうらの苫やの秋の夕ぐれ

と口吟せられけるを、紹鷗ふかく感じ、頓て數寄屋の勝手のさうしに書置れし。後に紹鷗の茶湯もとび離れたる趣を貴みぬれば、參禪の學なくては如何也と語らるゝにより、然ればとて大德寺大林和尙に尋ね問て、專らに祖師の西來意を工夫せられけり。

又千利休は、初名を與四郎といふ。十七歲の頃より道珍に隨て茶湯を學ぶ。或時道珍、紹鷗に、此邊に千與四郎といふもの、未弱冠なるが、一服調侍る、手前も見にくからず、萬の取り合などふつゝかならずと語らる。紹鷗然らば會にまじへて見候はんと有。道珍則召連たり。折節四月始めにて風呂の茶終りけり。與四郎前後初めて宗匠の會に交る事、。またなき世の面目とおもひ、宗易と號して十德を着し出席せりと、又宗易も茶の道とする事は、

はなをのみ待らん人に山里の雪間の草の春を見せばや

此歌を以てすといへり。又或年二月半に雨ふる日、宗易圓遊紹鷗のがり尋らる。書院に火をとらざる香爐有り。みな此道執心の好人なれば、火をとりて見せ給ふべきよし申されければ、紹鷗則火を取て黛といふ香を炷て、扨某そのかみ在京せし時、五月雨のころほひ、三條殿に尋しかば、三條殿小姓に火を取らせ給ひて、

打しめりあやめぞかほるほとゝぎすなくや五月の雨の夕ぐれ

と口吟し給へりと語らる。されば茶の湯は能阿彌、相阿彌〔割註〕慈照院殿御近習也。」を鼻祖として、堺南宗寺開山空海といふより、道珍へ傳へたり。則ち此寺に紹鷗、利休の墓あり。

○癖案

陳后山の句を得る事あれば、急に我家へ歸り、一榻に伏て被をかぶり、是を案ず。詩の爲に苦しむなり。故に陸徽山が遊山翫水の時、詩を賦せん事をおもへば、却て眞樂に障り興を妨ぐと、豪少游は客に對して詩を案じ、李白は酒宴遊興の座にて賦す。吾蘇州は點座炷香して賦す。定家卿は衣冠束帶して沈思し、西行は山中にて詠ず。これ皆癖なり。達人工案を疎かにせざる也。一字一句をも重く思ふ也。西三條實敎卿大内の御當座に、埋火の題を得て、初五文字を付わづらひ、後引籠をばしたりと、澄月のかたられし。

更行はもみぢにまがふ色きへて霜の花さく閨の埋火

橘直幹陸奥の國に下る時、石山寺に詣で、湖水を眺望して詩一聯を得たり。滄波道遠雲千里、と未だ下の句を得ず。案じ煩ひ、夜に日に苦しみおもひけれども、更に對句を得ず。既に相州足柄山に至りけるに、具せられて下りし女の和歌を詠たり。

道遠く雲井はるけき深山路にまたともきかぬ鳥の聲かな

と打吟じけるを父に語りしかば、直幹やがて其歌の詞を聞儘に、下の句を作れり。白霧山深鳥一聲と云々。崔猊山は才奇に志高ふして、他の詩を屑とせず。或時海雲臺に上り、萬戸張瑄が松樹に題せる詩を見て、此木何の科ありて、斯る悪詩に逢ふと云て、則其詩を削りさり、糞土を塗付たり。張瑄是を聞て大に怒り、從者を連來り、猊山を逐ふ。猊山畏れて漸に逃歸る。其從者を捕來りぬ。斯のごとく才智に誇て人を譏る故に、其詩多く述懐あり。

我衣二縕袍一人輕裘　人居二華屋一我圭竇
天工賦與本不レ齊　我不レ嫌レ人人我詬

山谷詩集序に云、曹植、劉公幹、沈約、射靈運が詩は、心工に縉縠の染たるごとし。貴介公子は重んずれども、庶民は用ひがたし。陶淵明、韋蘇州が詩は、寂寥として叢蘭幽桂の如し。山林の隱者は愛すれども、月卿雲客の爲には用ひられず。

○迺吐

今川了俊和歌不審云、節會の夜、爲世卿衣かづきの女をけさうせられけるに、此女房あらけなくつきたをし申て、あの年やうしてと申ければ、おきなをりて、

はかなくもひとの心のあら磯もおもひかけたる老の波かな

韓斯平壤に使す。然るに小蠻と云遊君有り。國色無双なり。韓斯是に心をかけ、州の令夫を聞て、小蠻を遣して枕席をすゝむ。小蠻外に因る男有り。其上韓斯が年老て醜きを嫌ひ逃去るに、韓斯則慨然として詩を賦せり。

平壤佳兒勝二小蠻一　年纔二八玉容顔
縱然未レ遂二鴛鴦夢一　却勝高唐夢裡看

徹書記いふ、爲重公は以の外媚目あしくおはしけり。内裡にて或女房の手をとりて、今宵はと戯れ給ひ

ければ、女房答て、おぬしの顏にてやと云ければ、

さればこそよるとは契れかつらぎの神もわが身もおなじ思ひに

姚牧庵學士年八十のころ、夏浴するそばに、侍女一人ありけり。公因て私す。女の云、公年老たまひて、妾なを孕む事あらんか。後に我家人に疑はるべし。其驗を給へといひける。則ち圍肚に書す。

八十年來過二此春一　此春過後更無レ春
縱然不レ得二扶持力一　也貽墳前拜掃人

と書せり。然るに公薨じて後に、果して女子を産り。則其時此詩を出して人の疑を解りとぞ。上來予が見聞せし事を、責ては同志の人へも吹聽したく、聊の拙き癖案などを書まじへ、また孫どもへも遣し置ばやと、机にかゝり年頃の旅日記を繰出して八冊にしたゝめ、草稿し置ものなり。後に見ん人狐疑を解て閣し玉はゞ、多年の旅泊の甲斐もありぬべし。

笈埃隨筆 終

玲瓏隨筆

至理無言至言無說故摩竭掩室毘耶閉口雖然恁麼亦是靈龜曳尾澤庵老人寐語若干言乎說乎家醜乎亦是靈龜曳尾嘉永甲寅平安之人某甲追其龜尾從頭上木空華閑衲被其人役不合題卷首總不得免黑蟻巡磨之錯家醜再揚之笑咄且置是事

前龍寶八十三翁大綱書

澤庵和尚玲瓏隨筆 卷之一

澤庵和尚著

一佛ト成ハ、イカヤウノ事ヲ云ゾ。佛ハ覺也。サトリニ至ルヲ、ホトケニナルト云也。サレバサトリヲ開クホドノ、智惠モナキ衆生ノ、念佛稱名スレバ、サトリ顔ノ人、コレヲ笑フ。更ニイワレナシ。サトリヲヒラクホドノ、チヱナキ衆生、念佛ヲモ行セズバ、愈日々ニ、惡ハ長ズベシ。其惡事ヲ重ヌルホド、アク業、感ゼバ、イツサトリヲ開ク世アルベキゾヤ。ネンブツ稱名ハ、サトリノ樹ノタネナルベシ。種ヲ蒔ズシテ、菓ハナルベカラズ。

一業トハ、萬ノ人ノナスワザ也。其ワザニ善惡アリ。善ヲバ善業ト云、アクヲバ惡業ト云。ソノモト身口意ノ三業ヨリ、ヨロヅノワザモ出ルナリ。身三口四意三ノ名也。殺生、偷盜、邪淫、コレハ身ニナス三ノ業ナリ。妄語、綺語、惡口、兩舌、〔割註〕シタヲ、モテニ物ヲ云フコトナリ。〕是ハ、口ニナスワザナリ。貪欲、嗔恚、愚痴、コレハ意ノナスワザナリ。上ノ身口意ノ三業、身ニナスヲバ身業、口ニナスヲバ口業、意ニナスヲバ意業ト云ナリ。身口ノ二ツモ、意ヲ離レテワザヲナサヌナレバ、ツマル處ハ意業ナリ。故ニ、貪嗔痴ノ三毒トテ、意業ヲ一切ノ惡業ノ本トス、貪欲ヨリ起ツテ、屋燒人殺ヲシ、人ノ物ヲ取テ、我私ニセントスルヨリ、千般萬端ノ惡事モイヅルナリ、嗔恚ノ怒ヨリ發テ、親子ノ間ニテモ、不禮不義ヲナシ。兄弟朋友ノ間ニテモ、爭ヲナシ、切ツ切ラレツ、討チ討レナンドス

ルヨリ、サマ〲ノコト出也。又愚痴ハ暗鈍ナルユヘニ、理ヲシラズ。萬事ニツキテ、ヒガゴトヲ以テ、理トナス也。人ハ理ヲモチテハ、ヒガゴトニ隨ガハズ、シタガハンヲ、隨ガヘントスレバ、喧嘩ニヲヨブ。此等ハ、世間ニアリテ、人我相爭フウヘノ義ナリ、此外愚痴ノ罪、カゾフベカラズ。此世ハ夢ナリ。久シカルベカラズ。財寶ヲホクアツメ、持テ悅トイエドモ、枕ノ夢ニ、金ヲ得テ、實ノ金ト思ヒ、悅ブコト限リナケレドモ、覺ル時、金ニアラザルガ如シ。夢ノ中ニ、コレハ夢ナリト知ラヌモノ也、覺テ後コソユメトハ知レ。然レバ、此世モユメナレド、夢ノ中ナレバ、夢トモシラズ。財寶ヲ多クモチテハ、實ノ財寶ナリト思ヒ、屋宅ヲ結構ニシテハ、是蜃樓化城ナルコトヲシラズ、實ノ結構也ト悅ビ、人ト爭フモ夢ナレバ、サメテ相手ナシ。然ルヲ、實ノ人ト、我レ也ト思ヒ、勝トキハ、則チ悅ブ、勝コトヲ悅ブ故ニ、專ラ人我勝負ヲ務ム、願クハ勝ツコトヲ悅ズ、負ルコトブ怒ラヌ心ニナリテ、夢ノ勝負ヲ勤メズシテ、勝モ負ケモセヌ人タランハ如何ゾヤ。專ラ勝負ラ勤メテ、勝ツ負ケツスル人トナランヤ。又勝負ノ修羅ヲ止メテ、勝チモセズ、負モセズ、心平穩ナル人トナランカ。勝負ノ修羅ヲ勤ル人負ルトキハ、則チ嗔恚ノ焔ヲモヤシ、身ヲ焦シ、胸ヲ ク。コレ身ノ損ニ非ヤ。又勝トキハ則悅ブ。此悅モ、何程我身ヲ潤色スルコトアリヤ。只笑フ聲、空ニ聞ユルノミナリ。人ヨキ衣著スレバ、負ジト我モ是ヲツトメ求ム。人ヨキ家ヲ營ナメバ、負ジト我モコレヲツトメ營ナム。只我ニ相應ノ心モタンニハシカジ。人ト智ヲカヾヤカセバ、我モ負ケジト爭フ。莊生モ云シゴトク、智也者爭之器也ト、人高キニ處バ、我爭テ卑キニ處ント勤ム。水ハ卑キニ下ル。爭コトナシトテ、老子モ道德ニ假如タリ、此世ノコトヲ書カバ盡ジ。言フトモ窮リナケン。都テ愚痴ノナス處ナリ、貪嗔ノ二ツ、痴ヨリ起レバ、ツマリ所愚痴ノ一ツ也。人間ノアルト、アラユル

惡事ハ、皆愚痴ヨリスルコトト思フベシ。此愚痴ハ生レツキテ、改メラレヌ物ナリト、儒者ハ思ヘリ。佛法デハ貪嗔痴ノ三毒ハ、修行シテ取除ケル者ナリ。愚ハ黄連ノ苦ク、甘草ノ甘キガ如クニテ、天然ナレバ、取除ケラレヌ物ナリト思フハヲロカナリ。愚ガ取除ケラレヌ物ナラバ、人間ノ一切ノ所作ハ、一ツモ仕課ラレヌコト、一切ノ所作ニツキテ、皆其所作ノ上ノ、智ト愚ト有ベシ。弓作ガ弓ヲ作ニ、カウスレバ弓ヨシ。カウスレバ弓カヱリテ、惡シト云コトヲ、心得セザレバ、弓ヲ作ル智ガ暗クシテ、現レザル也。シカルニ、弓ヲ能ク修行シタレバ、此智發ス。コノ智發明スレバ、愚已デニ剝去ル。愚スデニ剝、智アラハル。修行セズシテ、物ノ上手ト云コトナシ。矢造モヲナジ。太刀、長刀作ル者モ同ジ。百工ノ所作、ナニカコレニカハルベキ。マシテ又三教ノ道ヲヤ。然レバ愚ハ剝ル物ナリ。コレヲ剝シテ、智者ニナラマシキコトナラズヤ。一能ヲヨク修行スレバ、一能ノ智者ナリ。其能ノ上ニハ愚ナシ。是愚ヲ剝シテ、智ヲ現ハシタル人ナリ。カクノゴトク一切ノ上ニ、一切ノ愚アレドモ、修行スレバ、一切ノ愚、皆剝テ、一切ノ智アラハル。道ハ一切ニワタル物ナレ。道ヲアキラムレバ、一切ノ上ニ智明ラカナリ。或人云ク、サハ承レドモ、道者ト云ハン人ニ、馬乘ラセタラバ、ナルマジキト云ヘリ。應サモ候。萬ノコトニ事理ノ二ツアリ。事ハ其ワザナリ。ワザヲスル人ハ、ワザヲバスレドモ、ソノ道理ヲ知ラズ。理ヲ知ル人ハ、其ワザヲバ作サヾレドモ、ソノ道理ヲ知ル。馬ノ上ニ能保ツ人モ、馬ヲ我儘ニスルコトハ、イマダナラヌコトアリ。是ハ馬ノ心ト、人ノコヽロト、感ゼザレバ也。馬ト人ト、心々相感ズレバ、カケフトモ留ントモ、右ヘモ左リヘモ人ノ儘ニ成ナリ。鞍ニヨク保ツ人、此道理ヲ得タラバ、何カ有ン。コノ道理ヲ知ルコトハ理也。鞍上ニヨク保ツコトハ事也。工ハ刀子ノ柄デ、萬ノコトヲスレドモ、刀子ヲウツコトハ、冶工ノ事ナリ。刀子ノ切ルヽ、切ザ

ル、金ノ堅ク柔ナルゾ。木竹ニ合アワヌノ道理ヲバ、工ノ知ルトコロ也。刀子ヲ作ルコトハ冶工ノ事ナリ。金ノ堅キハ竹ヲ削ルニ不可也。金ノ柔ナル可也。木ヲ削ルニハ是ニ反セリ。カヤウノ事ハ、刀子ヲツカフ人ノ知ル事ナリ。是ハ理也。冶工ノナスハ事ナリ。事ヲスル者、コノ理ヲ知レバ、事理相應ズベシ。

鈍根與利根之辨

一儒道ニ云ヘルハ、氣ノ純粹清明ナルヲ稟タルハ、利根、智惠アリ。雜駁汚濁ナル氣ヲ受タルハ、鈍根愚痴ナリト云ヘリ。一往キコヘタリ。濁レル水ニ、月ノウツリ難キ如ク、人ノ氣濁リタル故ニ、見ルコト聞クコト、心ニ移リガタキナリ。故ニ物ヲ得ルコトヲソシ。又澄タル水ニ、物ノ影、早ク移ルゴトク、心ヘ見ルコト、キクコトガ能クウツルユヘニ、物ノ道理ヲ心得ルコト早シ。是ヲ利根ト云。此理明ケシ。タトヘバ、ヲナジ爐火ニテ溫ムレドモ、淸酒ハトク溫マリ、濁酒ハ遲クアタヽマルガ如シ。ニゴリタルニハ火氣ヲソク入、淸酒ニハ火氣トク移ルガゴトシ。利根ハ澄酒ノ如シ鈍根ハ濁酒ノゴトシ。　一不審。

○澄ル氣ヲ受ケ利根也。濁レル氣ヲ受タルユヘハ鈍根也。スメル氣ウケタラン人ハ、百様ノ事ミナ利根ナルベキニ、只一能一藝ニハ、年十歳ニシテ、五十六十ノ人モヲヨバズ。ソノ外ノ所作ハ常ノ人ノ鈍サニカハラザルハ、一能一藝バカリニ、天ヨリ澄メル氣ヲ賦アタヘタルカ。因碩ト云者ハ、九歳ニシテ、三ツノ碁ヲ打タレドモ、碁ノ外ノ智惠ハ世上ノ並ナリ。又濁レル氣ヲ受テヤ。萬事ニ愚ナル者モ、一能スグレタル處アリ。其スグレタル所作ハ、同年ニシテナライ、稽古シテモ及バザル能作アレバ、生レ來テヨリノ、修行ヲナシケレドモ、違フ處アルハ、其一能ニカギリテ、氣ヲ別ニ一分受タル

ニテハ有ベカラズ。此辨別イカンゾヤ。傍ラニ人アリ云ヘルハ、ケ樣ノコトモ、只自然ノ理ナリト云。又一不審。

○鈍利ハ已ニ氣ノ淸濁ナリト云フニ、ツキテ立タル不審ナリ。然ルヲ自然ノ理ナリト云ヘバ、氣ノ淸濁ト云處ヲバ破リ玉フカ。儒ニテ儒ノコトヲヤブリタモフハ、我刀ヲ把テ、我身ヲ破ルガ如キ者ナリ。一不審。

一化育流行シテ、萬物生成スルコトハ、目前ナリ。花咲キ緣立チ葉落根ハ歸シテ、マタ春ニカヘルゴトク、萬物皆カクノゴトシ。人モマタ物ナリ。鳥獸蟲螻ニイタルマデ化育ニアヘリ。然レバ天地ノ間ダノ萬物ハ、天是ヲ造リ出セルトイヘリ。シカレドモ植ザル栗ヲ、如何シテカ、天生ズルコト能ハズ。ウヘザル柿ヲ天生ズルコトアタハズ。梅桃萬ノ菓、不レ植シテ生ズルコトナシ。一切ノ種物、ウヘズシテ生ズルコトナシ。サレバ栗ヲバ唯栗ヲノヅカラ造リイダシ、柿ヲバ柿ヲノヅカラ造リ出スハ、天ニハアラズ。天者タヾ化育ヲホドコスバカリナリ。是ヲタトヘテ云ハヾ、天地ハ一盤ノ茶磨ノ如シ。下ニアル磨盤ハ地ニ喩フ。回ル磨ハ天ニ喩フ、即チ回リ動クヲ陽ニタトヘ、磨盤ノ常ニ靜ナルヲ、陰ニタトヘテ、コレ陰陽ソナハレリト云。始メテ手ヲ懸テ回ラシ、始メタル所ヨリ、回リテ又モトノ所ヘ回リカヘルハ、春夏秋冬ト回リテ、又モトノ春ニ回リカヘルニタトフ。回ルハ變也。マタ本ノトコロヘカヱルハ通ナリ。即變通コレナリ。ソノ間ダニ茶ヲ入ルヽトキハ、則チ抹茶ヲルヽ。藥ヲ入ルレバ、則藥粉トナリテヲルヽ。百ノ品ヲ入レテ挽ントマヽヨ。百ノシナ各々ニシテ磨盤ヘヲツル。萬物生々此タトヘナリ。然レバ磨メグルトキハ、茶ニテモ、藥ニテモ、其已レヲノレ色ヲアラハセドモ。磨ソノ品々ヲ造リ出スニハアラズ。磨ハ只回ルバカリニテ、ヲルヽ所ノ物ハ、茶ハチヤ、藥ハクス

リ、己レヲノレト、持テ出テ、其品々ヲアラハスナリ。天地ノ化育モ、タヾカクノゴトシ。天地ノ化育ト云ハ、春ハ暖ニ、夏ハ暑ク、秋ハ涼ク、冬ハ寒ク。又春ニ歸リ、夏ト變ジテ、茶磨ノ回ル如クナル。此化育バカリヲ施セバ、萬物ハ己レヲノレ持テイヅル物ナリ。縱ヒ又茶磨終日回ルトモ、茶ニテモ藥ニテモ、此方カラ入レザレバ、其色ヲアラハスコト有ルベカラズ。天地ハ回レドモ、種ヲ下サヾレバ生ゼズ。名モナキ野ノ草モ、己レ〳〵ガ種アリテ、地ニ落レバ、天地ノ化育ニテ、生成スルナリ。天ハ一々ヲ造リ出スニハ非ズ。然レバ一草一木モ、其始ナキノ始ヨリ、栗ト成始ル時ニ、栗ト成ル道理アリテ、栗トナルニヨリ、又終リナキノ終ニ至ルマデ、栗ヲ種テ柿ト成ルコトナシ。梅ヲウヘテ桃トナルコトナシ。己レヲノレガ業ヲ引テ、梅ハムメトナリ、桃ハモヽトナル有情非情トモニ、カクノゴトシ。萬物一々己レガ業ヲ引テ、生成スル故ニ、引業ト云。萬物相並ンデ滿業トス。引業トハ一物々々ノ上ヲ云。滿業トハ萬物ヲコメテ云ヘリ。儒道ニハ萬物一氣ノ變也。天造リ出セリ。自然ナリト云。決定天造リ出ト云ハヾ、種ヘザル梅、今目前ニ生ズベキ乎。種ザル桃、今モクゼンニ生ズベキ乎。シゼント云ハヾ、梅ヲ種テ桃トモナルベキ乎。タヾ歴然、梅ハ梅ノ引業ニテ梅ニ成リ、桃ハモヽノ引業ニテ桃トナル。天ハタヾ化育ヲ施ス計リ也。梅桃ハムメモヽガ、自カラ造リイダスナリ。天ニハアラズ。コノ外ノ道理アラバ其答ヘヲ聞ン。我門ノ小子答レ之。

一易曰。廣大ハ天地ニ配シ、變通ハ四時ニ配シ、陰陽ノ義ハ日月ニ配シ、易簡ノ善ハ、至德ニ配スト云ヘリ。廣大トハ易ヲ褒美シテ云ヘルナリ。易トハ即チ天道ノコト也。易道ノ廣大ナルコトハ、即チ天地ニ配ストナリ。配ストハ配偶ノ義ナリ。引合セテタクラベテ云義ナリ。易ノ廣大ナルコト、即チ天地ニ配スレバ也。天地ハ實ニ廣大也。變通ハ四時ニ配ス。易ノ變通ヲバ、即チ四時ヲ以テ配シテ云ナ

リ。四時ハ變ジテ行者ナリ。春ノ暖カナルハ、夏ノ熱ト變ジ、夏ノ熱ハ、秋ノ涼ト變ジ、秋ノ涼シサハ、冬ノ寒ト變ジ。又取テ返シテ、春ト成テ暖ナルヲ通ト云フ。去年ノ春ノ暖ナルニ通ズルト云義、コレ易ノ變通ナリ。ユヘニ變通四時ニ配スト云ヘリ。變通トハ即チ四季ノ變通ナリ。陰陽ハ即チ日月ナリ。日出デ月升ル即チ晝夜也。春ト云名モ、始メハナシ。氣升リテ暖カナルヲ春ト名ヅケタリ。本是夏ノ名モナシ。氣空ニ浮ンデ熱スルヲ夏ト名ヅケタリ。秋本秋ノ名ナシ。氣降リテ天漸ク涼シキ時ヲ、秋ト名ヅケタリ。氣下モニ沈ンデ、天甚ダ寒キ時ヲ、冬ト名ヅケタリ。四時ノ變ジ行クヲ、變ト云ヒ、變ジテ又モトノ春ニ歸ルヲ通ト云フ。故ニ變通四時ニ配スト云ヘリ。天道ハカクノゴトク、ヤス〱トシタルヲ易簡ノ善ト云。然レバヤス〱トシテ、萬物皆此化育ニ依リ生成シテモ、カクヤス〱トシテ、シカモ化育ヲ受ルトコロ、廣大ナル故ニ、簡ヲバ、ヲ、ヒナリト訓ゼリ、人間ノ所作モ、名人ト云ハル、人ノスル所作ハ、チカラヲ入レズ、ヤス〱トシテ成ルモノナリ。天道コレ也。故ニ易簡ノ善ハ、至徳ニ配スト云ヘリ。至徳トハ、聖人ノシトクナリ。聖君ヤス〱トシテ、寶殿ニ座シテ居タマイテ、天下ノ四民百工ヤスク世ニ住ンデ、己レ〱ガ所業ハ、己レヲノレト勤テ國安穩也。聖君ノ徳ヲ至徳ト云。天道易簡ノ善ヲ、聖人ノシトクニ配偶トナリ。配ト云フハ、此ヲバソレト、二ツヲナラベ合セテ見スル義ナリ。聖君國ヲ司リテ、田作ルカ、蠶スルカ、カクセヨ、トセヨトハ、云ハズトモ、田作ル者ハ、己レト田作リ、蠶スルモノハ己レト蠶シ、四民百工、己レヲノレトナス業ナリ。聖人ハ、只天道ノ易簡ニシテ　萬物己レヲノレト生成スルゴトクニ、只天ニ法トル。國ノ亂レザルヤウニシテ、居タマヒサヘスレバ、民ハ己レヲノレト、所作ヲシテ身ヤスキナリ。コマ〱敷法ナドヲ、上カラ云フ物ニハアラズ、ヒモジキコトハ、ヲノレヲノレガ身ニ覺ユルコトナレ

バ、食ヲ求ムル業ヲ、己レヲノレトセズシテ叶ハザルナリ。寒キコトモ、己レヲノレト身ニ覺ルコトナレバ、己レト勤メテ著ルナリ。天道ノ化育ヲヤス〱ト施シテ、萬物己レヲノレ、生成スル如ナレバ、民苦シマズ天道ノ化育ト云ハ、ヤス〱トシタルコトナリ。故ニ易簡ト云只氣ノ升ルト浮ブトバカリナリ、氣升ルハ春ニシテ暖ナリ。氣浮ベバ夏ニシテ熱ス、氣降レバ秋ニシテ凉シ。氣沈メバ冬ニシテ寒シ。サムケレバ又變通シテ春トナル。此外天地ノ化育ト云コトナシ。コノ化育サヘ紊レザレバ、萬物各々己レヲノレト相續シテ盡ザルナリ。茶磨ヲサヘ回ラセバ、茶ハ茶ガ自カラ茶トアラハル、也。磨ニハ非ズ。磨ニハアラズト云ハ、茶ヲ磨ヘコチカラ入ザル者下サヾルナリ。天萬物ヲ生ズト云ヘドモ、種ヲオロサヾレバ、生ゼザルナリ。是天ハ化育而已ニシテ、物ヲ造ルコトハナシ。人生ノ人ヲ養フガ如シ。養ハ化育ナリ。人主ガ人ヲ作ルニテハナシ。人ヲバ生ズベキ人アリテ、各々ニ生ミ出ダセリ。天道萬物ヲ化育ス。人主萬民ヲ化育スルモ同ジ道理也。

一或人曰ク、天地ノコトハ、物ヲコシラヘテ、成スコトニアラズ。只自然ナリ。シゼンナルニ依ツテ、ヤスシト云。我此ニヲイテ說テ曰、何ゴトモ前ニコシラヘズシテ、ヒヨツト出生スルナラバ、是ヲ自然トモ云ベシ。前ニコシラヘテ、時至テ出現スルコトハ、ミナ因緣ナリ。シゼンニアラズ。儒道ニハ自然ト云、佛法ニハ因緣因果ト云。今汝ガ云天地ノコトハ、コシラヘズシテ自然ナリト云、我今言トコロ、天地萬物皆コシラヘテ出タル物ナリ。此ヲ以テ、シゼンニ非ズ。因緣ナリト云。天地ノコトハコシラヘズ、自然ナリト云ハ然ラズ。立春正月ノ節至リテ、春ノ色アラハル、トイヘドモ、十一月ノ中、冬至ヨリハヤ、一陽來復シテコシラヘテ立テ、正月ノ節ニ至リテソノ色ヲ顯ハス者也。前置ナクシテ、正月ノ節ニ、俄ニ其色アラハル、ニアラズ。冬至ヨリコシラヘテ、立春ニイタルヲ因ト云、立

春以後春ノ色顯ハル、ヲ果ト云。コレニヨツテ佛法ニハ因ナクシテ果有ルコトナシ。物ハ種ヲ殖ズシテハ、天モ生ズルコトナシ。種ヲオロスヲ因ト云ヒ、生ジテ實ノルヲ果ト云フ。因果ノ果ハ、菓ノ義ナリ。人盜ヲス。天ニ盜ノ性アラズ。人自ラ盜ヲス。何ゴトモ天也ト云バ盜ノ性アリテ天コレヲ人ニ賦與スル乎。ソフニハ非ズ習ヒ性トナルハ、最初ノ一念ガ盜ノ因ナリ。

一 五常ハ綱目ノゴトシ。一目ヲヒキアグルトキハ、則チ衆目コレニ從フ。一仁ヲアグルトキハ、則チ四常眷屬ト成リテ、コレニアイシタガフ。一義ヲアグルモマタ同ジ。一禮、一智、一信ヲアグルモ、亦皆ソノ擧崇モノ首領ト成ルトキハ、スナハチ四ノ者相從ツテ、以テ眷屬トナル。何ゾ啻五常ノミナラン乎。百行皆然ルナリ。凡ソ事ハ一是レ萬事ナリ。コレヲ萬端ト謂フ。一ノ本アルユヘナリ。仁モマタ端ナリ。義モ亦端ナリ、百行萬行ミナ端也。蓋シ異端ト云フハ、一端ヲ擧テ、モチユルトキハ、則チ其外ヲ指シテ異端ト謂ベキ也。仁ヲ行ヘバ、則チ外四ツ是異端ナリ。義ヲ行フトキハ、則チ義ヲオコノフ者ノタメニ、仁モマタ異端ナリ。夫仁ハヒロク愛スル也。有義無義トモニ、ヒロクアイスルノウチニ在ルトキハ、則チ義ヲ行フモノ、タメニ害アリ。仁ヲ以テ義ヲウボフユヘナリ。害アルトキハ、則チ義ノタメニ是異端ナリ。タトヘバ琴ヲ造ル者、琴ヲ造ルノ工ヲ專ニセズシテ、笛ヲツクラント爲ルノ、工ヲ交スルガ如キハ、則チ琴ヲツクルモノ、害ナリ。故ニ曰、異ヲ爲ル是害而已。只ソノ一事ヲ專ラニスベキノ教ナリ。此教ヘト云ハ、始メ修行底ノ人、特ニコレニ因テ、中ヲ超ヘ上ニ及ブ。則チ異端ヲマジユルモマタ、其事ノ助ケトナル事異ナリトイヘドモ、工トコロノ智ハ萬事ニ渉ル。ソノ工ム所ノ智ヲ用ユルトキハ、則チコレヲ用ユルニ、笛モマタ可也。コレヲモチユルニ、琴モマタ可ナリ。異端亦豈我ガ作トコロノ助ケトナラザラン乎。

一仁ノ字ヲコレヲ本ト謂モ可ナリ。コレヲ末ト謂モ可也。仁ノ字コレヲ本ト謂フトキハ、則チ仁義禮智四端ノ仁ニアラズ。是性理ノ別稱ナリ。體ナリ。仁義禮智ノ時ハ用ナリ。已ニ四端ト言ヒ、本ト言ハズ。惻隱ノ心ハ仁ノ端也。或ハ曰仁者ヒロクアイスルノ理也。コレミナ仁ヲ以テ、體トシ本トス。四端ノ仁ノ字ニハアラズ。仁義ハ末ナリ。本ニアラザルナリ。モシコレヲ本ト謂トキハ、則チ人ソノ愛イマダ生ゼズ。成敗イマダ分タザル時、コレヲ仁ト謂ン乎。コレヲ仁ト謂ン乎。已ニ博ク愛スルノ心、顯ル、ヲ以テ、仁者ト謂ヒ、已ニ成敗分明ノ心、顯ル、ヲ以テ、義者ト謂フ。顯ワレザルノ時、何ヲ以テ、仁トイヒ、義トイワン乎。水ヲ酌ンデ、コレヲ酒ト謂ベカラズ、コレヲ酢ト謂フベカラズ。已ニ化シテ、酒ト成リ、酢ト成リ、而シテノチニ、コレヲ酒ト謂、コレヲ酢ト謂フナリ。酒酢ハ末ニシテ、水コレガ本ナリ。仁義ハ末ニシテ、性コレガ本タリ。喜怒等ノ七情モ又コレニ同ジ。

一人ノヲソロシト思フハ、鬼ナレド、目ニ見ヘヌト云ヘバ、名ノミナリ。實ニオソロシト云ハ、只人ナリ。手足健ニシテ、面ニ七竅開キ、ハシタナク辯舌アル人ハ、無ヲ有ト云ヒナシ、天ヲ地トモ曲ゲ、鷺ヲ鴉トモ云ヒナシ、人ヲ失ヒ、死罪流罪ニ云ヒナスモ、人ノ口也。芥川ノ邊リニテ、鬼ハヤ一トロニクヒテンケリトハ云ヘド、今夜ゾ實ニ鬼ニ喰レシト云フ。人ノハヂヲバ見ズ。人コソオソロシケレ。人ハ只爐中ニ一度入レタル炭ヲ、又本ノ炭計ニ入ル。人ハ、行末ニ眼シイ、人ノ嫌フ病ヲ受ルト云傳ヘタルコソ實トナレ。炭ノウラニ火ノ付タルヲモ知ラズシテ、螢火須彌ヲ燒クトハ、アリガタキコトニ云ヘド、螢火程ノ火燃ツキテ、墻壁ニツキヌレバ、一城ヲミナガラ燒キ亡ボシヌル、其中ノ人ノ嘆悲ガ皆ハサム火筋ノ先ニアランコトヲ知ラザルモノハ、實ニオソレテモ餘リアルコトナリ。鬼ハオソロシカラズ。人ノ仕業ホドノヲソロシキコトハナシ愼メヤ。

一物各其ハジメ幽微ニシテ、見ル、所ワズカナルモノ也。寡ノ長ズルトコロ、世ヲ驚スニ、ヲヨブモノナリ。人ハ只ハジメヲ見テ、長ズル所ヲ見ザルユヘニ怖レズ、炯々タル火、纔ナリトイヘドモ、コレヲスクハザレバ、一城ヲ燒亡ス。涓々タル水、纔ナリトイヘドモ、寡ノ足トコロ大船ヲ泛ブ。人生レテシヅカナルヲ性トイフ。性ニヲイテ不善ナシトイヘドモ、此人長ジ壯ンナルニ及ビ、人ヲ殺シ、盗ミヲナシ、一家ヲ喪シ敗リ、一城ヲ燒亡ボス。世ノ人本ヲ知リテ、末ヲ知ラズ。鬼神ノ事ニヲイテ論多シ。ソノ本ヲ問トキハ、則チ纔ニ氣ヲ指ス。禮記祭義ニ云フ、宰我ガ曰ク、吾鬼神ノ名ヲ聞ク。其所謂ヲ知ラズ。孔子ノ玉ハク、神ト云フハ氣ノ盛ンナル也。魄ト云フハ鬼ノ盛ンナルナリト、爾云一氣ワズカニ上リテ毫芒ノゴトシ。其盛ンナルニヲヨンデ、神ノ名アリ。氣ト云フハ魂ナリ。鬼ハ魄也。夫子曰、衆生カナラズ死ス。死スレバカナラズ土ニ歸ス。是コレヲ鬼ト謂フ。骨肉下陰ニ斃レテ、野土ト爲リ、ソノ氣上ニ發揚シテ、昭明焄蒿悽愴トナルト云々、衆生死シテ野土ニ歸ス。コレヲ鬼ト謂フ。鬼ノ盛ンナル、上ニ發揚シテコレヲ魄ト謂フ。魂魄合シテコレヲ神ト謂フ。マタ夫子曰、百物ノ精神著ル、ナリト爾云。百物ノ精上リ結リテ神ト成ル。大廟ノ神、五岳、四瀆ノ神、社稷ヲノ〳〵聖人コレヲマツリテ、儼カニスルナリ。

一人ニ上中下アリ。上ノ人ト云ハ、物ゴトニ心ヲツケテ、其道理ヲ一々觀ジテ、ソノコトヲ明ラムル人ヲ、上ノ人ト云。中下ノ人ハ何ヲ見ルモ、心ヲ付ズ。ウワノソラニシテ過ス。ユヘニ物毎ノ道理ニ暗ク、道具ヲ見ニ、上々ノ物ホド、彫モ、塗モ、ドコマデモコヽロヲツケテ、仕タル道具ハ、上ノ道具也。草ノ物ト云フハ、細カナラザル物ゾ。

一自性ヲ了ラザル人ハ、物ニ就テ奇特ヲ見ル、眼イマダ盡ズ。眞理ニイタルモノハ、奇特ナキヲ以テ、奇

特トス。凡人ノ奇特ト思フ處アラバ、其人ハ至人ニアラズ至人ハ奇特ナシ。奇特ナキヲ以テ奇特トス。奇特ナキノ奇特、凡人ノ得ザル所ナリ。

一人ニナニゴトヲモ問レテ、其答ヲスルニ、初メテ思惟シテ問ヒ方ノ義ニ相合フヤウニ云フベキト、ヲモフハアシヽ。ミナ煩惱情識ナリ。只我コヽロニ打向ヒテ、思フヤウニ手間ヲイレズニ、答ヘタレバ合フモノナリ。モシ合ワズトモ是非ニヲヨバズ。情識ナク思フダケヲ云ヒタルハヨキナリ。合セントスレバ、皆却テ相合ハザルナリ。思フダケヲ、テマヲ入ズニ答テ、イヤサテハ違ヌト云フトキハ、如何樣ニモ情解スベシ。

一薰物ニ貝甲ヲ入ルコト、彼臭キヲカリテ、芳キヲ衣小袖ニトメルナリ。貝甲更ニ芳シキモノニアラズ。臭キヲ以テ能トス。佛菩薩化身再來シテ世ヲ救フニモ、衆生ノ煩惱ヲカラザレバ、化身再來ハナラヌナリ。佛祖ノコヽロハ著處ナキ也。衆生ノ煩惱ノ念ヨリモノニ著ク。故ニソノ念ヲカリテ、母ノ胎ニ著テ出現スルナリ。香ハ輕クシテ、物ニ殘リ難シ。貝甲ノ臭キハ重クシテ、ヨク物ニツクヲ以テ、借テソノ香ニ和シテ、薰ヲ衣ニ留ル也。

一古書ニ曰ク　記誦ノ學ハ人ノ師トスルニタラズト云々。今ノ世名ヲ發スル者ハ、見タルコトヲ能ク覺ユル生レ質キヲ以テ、ソノ誦スル事、良馬ノ行クガゴトク、以テ人ノ耳ヲ驚カス。ソレ難問ヲスルニヲヨンデハ、少シモ聖理ヲ知ルコトナシ。寔ニ記誦ノ學タル者乎。ヨク聖理ヲ窮メルコトハ、記誦ノ才ニアラズ。理ハモト言ニアラズ。言ヲ閉テ心以テ會ス。コヽロモツテ會シテ後ニ、言以テ顯ハス。コヽロ以テ會セズシテ、言妄リニ發ス。豈人ノ師タランヤ。

一生死即涅槃、煩惱即菩提、迷悟不二ト、ヲシユルコトハ、本來空寂ニシテ生死ナシ。煩惱ノ實性スナ

ワチ正覺ナリ。迷ト思フハ、スナワチ悟ナリ。一切ノ作業ハ、幻夢ノゴトクニシテ、本來ナイモノゾト見レバ、一切ニ相ヲ見ズ。一切ニ相ヲ見ザレバ、執着ヲ離ル、執着ヲ斷ンガタメニ、破相ヲシメスナリ。相ヲ破リテ後執ヲ斷ジ了リ、還リ來リテ世間ヲ見ルトキハ、則チ破相スベキモナク、斷執スベキモナシ。然ルヲ今ノ禪者、十分相ニ着シ、執ヲ持シ、向上ノ人ノ行履上ノ言說ヲ取テ、以テ我有トス。天地懸隔セリ。眼ヲ閉テ色ヲ說ガゴトシ。

一有義ノ善惡ハ、ゼンアクトモニ善ナリ。無義ノ善惡ハゼンアクトモニ惡ナリ。人ヲ敗ルハ惡ニ似タリトイヘドモ、義ヲ以テ人ヲヤブリ、惡ヲ懲シ、義ヲ以テ人ヲ成ストキハ、善ヲ勸ルナリ、惡ヲコラシ人ヲシテ善ニ進マシム。勸善ハ人ヲシテ善ヲ益シム。惡人ト成リ、善人ヲ敗ル。成ル所、敗ルトコロ、總テ是惡徒無義也。

一無欲ハ人ノ貴ブ所ナリ。有欲ハ人ノ賤シムトコロナリ。シカリトイヘドモ、有義ノ欲者、無欲ニマサレリ、無義ノ無欲ハ、有欲ニ劣レリ。有功ト無功トナリ。有欲ニシテ、施スコトヲ知ル者ハ、義アリ。功アリ。人トシテ、犬馬ノゴトク、金銀ヲ見ル者ハ、義ナク、功ナシ。金銀ハ寶ナリ。豈貴ビザラン乎。豈欲セザラン乎。然レドモ、布用イザルトキハ、則チ瓦ノゴトキ而已。

一アソコナル物取リテ來ヨト云フニ、言フ人ノ顏ヲ見ルハ利根ノモノナリ、言フ人ノ顏ハ見ズシテ、アソコ、コヽヘ行ケドモ、終ニ云ノノイフトコロニ、行キムカハズ、鈍利カクノゴトク違フナリ。猿樂ノ能仕ルニ、鼓打一ツ聲ヲウテドモウテドモ、太夫イデズ。カヽル時、鼓打マチカネテ、樂屋ヲ頻リニ見ルコト、尤モ見ニクシ。樂屋ヲ不レ見シテ芝居ヲ見レバ、人ノ顏ノ色ニテ、出ルカイデヌカハ、能ク知ルヽト云フ。

一道ノ至極ハミナ靜ナリ。中庸ニ合フ。中ニ過ルモノ氣ノ馳ルナリト、性理大全ニ見ヘタリ。氣ノハシルハミナ、勿忙ノ故ナリ。至人ハ皆靜ナリ。一ヨリ二三ヲ超ヘ四ニハシルハ、コレ中ヲ過テミナ大過ナリ。

一鏡ヲ水ニ入ル丶トキハ曇リテ見ヘズ。湯ニ入ル丶トキハ明カナリトハ、何ノ謂ゾヤ。火ノ源ヲ益シテ以テ、陰翳ヲ消ス。水ノ主ヲ益テ以テ、陽光ヲ制。

一今人古人風俗ヲナジカラズ。古ヘヲ是トシ、今ヲ非トスルモノハ古人ナリ。古ヲ非トシ今ヲ是トスルモノハ、今人也。古人今人ノアイダニヲイテ、好トスル所アルベシ。聖道ニ違フ事ハ、今人好トスルトコロトイヘドモ、我ハシタガイガタシ。道理ニソムクホドノコトニモアラズ。當世ノ風體、座鋪ノタチフルマイ、茶ヲ點ジ、酒ヲクミ、衣裳ノ著ナシナドノコトハ、學ビナシ、見習イテ、今時ノ人ノ目ニ宜キヤウニスベキコトナリ。古ハカクナカリシヲ、今ハカクノゴトクスル、一向ニ惡シトテ、情強ク云ハ偏枯ナリ。古人ハ死シテ遠シ、來テコレヲ見ズ。今人ハ生キテ近ク在テコレヲ見ル。ヨシトモ見ヨ。アシ丶トモ見ヨ。好惡ハ今人ノ目ニアレバ、今人ノ目ニ宜キヤウニスベキコトナリ。イカニ今人ノ目ニヨシトモ、道理ニ負キ聖道ニ違フコトハ、言難シ。行ヒガタシ、室侍者ガ云ク、師ノ言ニ不審アリ。古人ハ死シテ遠シ。來テコレヲ見ズト云ヘドモ、今人ノ風俗ヲ嫌フハ即チ古人ナリ。然レバ今時ニ古人アリ、今人古人目ヲナラベテコレヲ見ル。古人ノ風情ヲ學バ丶、今人ノ目ニ宜シカルベカラズ。コレヲ嫌フベシ。今人ノ風情ヲ學バ丶、古人ノ目ニヨロシカルベカラズシテ、コレヲ嫌フベシ。是ヲセンコト如何ゾヤ。我答テ云サレバコソ一ヲ聞テ二ヲキカズ。古人今人ノアイダニ、道有ルベシト云ハズヤ。古ヘトテ偏ニ宜シキニアラジ、今トテヒトヘニアシカラジ。宜キニ從フ

ベシ。理ヲ負クベカラズ。道ニ違フベカラズ、道理ニソムカザル事當時ノ風情トテ惡カラズ。古キヲ溫テ新キヲ知ルノ心ニモ近カランカモ。

一、當世ト云コトハ、今ニカギラズ三十年前ハ、今ノムカシナリ。今ノムカシハ三十年前ノ當世ナリ。今當世ヲ嫌フ人ハ、今ノムカシノ風ヲ好ム人ナリ。若シ當世ヲヒトヘニ嫌ハヾ、三十年前ノ當世ヲモキラウベシ。三十年前ニモムカシアルベシ、其ムカシニモ、又當世アルベシ。然ラバ當世ヲ捨テ、ヒトヘニムカシヲコノム人、イツヲムカシト定ムベキゾヤ。好ムベキ道、嫌フベキ道ハ、ムカシ今ニ依ルベカラズ。凡三十年ニハ、風俗スコシハ違フ物トヲボユルナリ。

一、或人曰ク我人ノタメニ、拔苦スルコトハ、自然ニアルベシ。與樂スルコトハ我手柄ニ及ビガタシトイヘリ。予曰ク拔苦コソ即チ與樂ヨ。苦ノナキガ樂ナルヲ、イカヾシテサハ仰ラルヽゾ。其人曰ク、拔苦ノ外ニ一重人ヲシテ樂マシムルコトアラン歟。予曰ク、ソレハ佚遊佚樂トテ聖賢ノキロウコトナリ。只苦ノナキガ樂ト云ヘバ、笑テ興ジキ。又佛法ニ樂ト云レシハ別ナリ。タトヒ苦ナクトモ、樂ガアラバ、ソレモ苦ナリ。樂アツテ苦ナキコトアタハズ、苦樂トモニナキコソ、眞實ノ樂ナルベケレ。寂滅爲樂ト佛モ說ケリ。

一、當世ノ人ヲ見ルニ、南北ニ奔走シ、東西ニヲヽライシテ、富家ノ門ヲカゾヘ、ヒトヘニ飯錢ヲ求メルガタメナリ。一二五ノ家人ヲヤシノウテ、我等輿ニタスケラレ渠ヲ使フト思ヘリ。渠ヲ使フニ似タリトイヘドモ、唯カレニツカハルヽナリ。五人ノ家人ヲ養フ者、五人ノ苦ヲ受ケ、十人ヲヤシナフモノハ十人ノ苦ヲ受ケ、五人ヲヤシナフ時ハ、十人ノ粮ヲ得ザレバ、ヤシナハレズ。コレヲ求ンガ爲ニ、南北ニ奔走スル、渠ニ使ハルヽニ似タリ。幻闍梨傍ラニアリテ云、師ノ言然リ。サレドモソノ家ヲバ

タシ、其名ムナシカランハ、クチヲシト思フユヘニ、名家ニ使ハルト思ヘリ。予曰、士ハ君ニツカヘテ忠アレバ、祿是ニアリ。農ハ耕ヲ勤ム。ツトムルトキハ、スナハチ粮アリ。工商ヲノヲノソノ職ニ、ソノ祿アリ。ヲノレヲノレガ家ニ、各粮アレドモ、ソノ職ヲツトメズシテ、ソノ粮ヲクラハズ。人ノ能ク勤メテ、富ル家ヲ數ヘテヘツライ、他人ノ粮ヲ受ケ食フ。コレヲ名家ニツカハル丶ト云ハンヤ。偏ヘニ名ヲ耻カシメ、家ヲクタスナリ。頭陀ノ人信施ヲクラフハ別ニ道アリ。コレモマタムナシク信施ヲクラフテ道ナクンバ愧也。

一風ハ陽ナリ巽ニゾクシ、其類マタ五ニシテ陽ナリ。シカレドモコレニ當ルトキハ、則チ寒冷ナリ。夏コレラ招キテ涼意ヲウル。コレ何ノ義ゾ。風ヲイタムトキハ、則チ必ズ寒ヲ憎ミサカンニ熱ス寒ヲ憎ムコレ義ニ當ル歟。壯ニ熱スルコレ義ニアタルカ。マタ風ニ暖風アリ。寒風アリ。コレモマタ風ニ暖寒ノ二性アル歟。答テ曰、風ハ動生ヲ身トスルモノナリ。故ニ陽ナリ。火ノ勢イナリ。東南ノスミヨリ起ル。問テ云フ、スデニ八風アリ。甚シトシテハ東南ニ限ル乎。風ノ性ヨク往々スルモノマタキタル。南カゼノ後ハ、カナラズ北ヨリ回リテ以テ、雨フル。東西モマタ以テヲナジ。然レドモ亦陰陽アラザルトコロナシ。又ソレ丶ノ處ニ、ソレノ風アリ。スナハチ八風アリテ、往來ストイヘドモ、先ソノ本ヲ指トキハ、則チ位イ巽ナルガ故ニ、東南ノスミトイフナリ。又問、風ニ當ルトキハスナハチ冷ナリ。陽ノイキヲイハナハダシトシテ、スデニ冷カナルヤ。答テ云、風身ニアタルトキハ則チ表ノ氣、裏ニ藏ルユヘニ表虚ニシテ、冷意ヲウル。氣ヲ裏ニ藏ル漸ク薫蒸シテ、ハツネツス。コレヲ治ルニ、冷氣ヲシテ、外ニ發散セシムルトキハ、則チ愈ユ。氣本復スルユヘナリ。風ニ暖寒ノ二ハナケレドモキタルトコロノ方ニ依ルガユヘニ、暖寒アリ。南北東西モマタ同ジ。

一盲人アリ、物ヲニナフテ津ニ入ル。津北ニ在リ。北ニ向ヒテ行ク。南ヨリ多ク人馬競ヒキタル。盲人耳ヲソバダテヽキヽテコレヲ辨マフ。行クニヲイテソノ難ナシ。然ルトキハスナハチ耳ヲ以テ目ノ用ヲ足ス。予コヽニヲイテコレヲ思フ。盲人ハ耳ヲモツテ目ト爲、聾人ハ目ヲ以テ耳トスルナリ。モシ六根ノ名ヒトリシテ、ソノ事ヲ辨ゼバ、盲人ハナントシテ向フモノヲ辨ゼン乎。盲人トイヘドモ言ヲ以テスルトキハ、則チ色ヲベンジ、聾人トイヘドモ筆ヲ以テスルトキハ、則チ聲ヲベンズ。何ニヨツテ此ノゴトクナルヤ。心主アル故ナリ。六根アリトイヘドモ、心ナケレバ、ナンゾカクノゴトクナラン乎。故ニ心ヲウシナフモノハ、狂亂ス。目アキラカニシテ見ザルガゴトシ。耳聰シテ聞ザルガゴトキナリ。一心ハ是レ身ノ一主君ナリ。六根ハコレ六臣ナリ。臣ハ君ニ奉ズルニ外事ヲ以テス。君ハ臣ニ敕スルニ內證ヲ以テス。君ヲ失フトキハ則チ臣々タラズ。ユヘニ六根アリトイヘドモ、死人ハ物ヲワキマヘザルナリ。

一桶ヲニナフモノ、兩人南ニムカイ行ク。兩人シバ〳〵ソノ先ヲ辭ス。一人ノ曰ク、吾桶ハナハダカロシ。子先ヅ行クベシ。コヽニ於テ此ノ語ヲキヽテ、スデニ進ム。兩人ノコヽロ、點首ナリトイヘドモ、仁アリ、義アリ、禮アリ、輕キヲニナフモノ、マヅ進ムトキハ、スナハチ歩速ニシテ、ソノ從フモノ苦ム。重ヲニナフモノ、マヅ進ムトキハ則チソノ量ニ應ジテ、遲速我ニアリ。ユヘニ輕キヲニナフ者、重ヲニナフモノ、勞ヲ知ル。仁コヽニ在リ。兩人屢辭ス。禮コヽニ在リ。終ニ重キヲニナフモノ先ニ進ム。義コヽニアリ。土民スラ猶カクノゴトシ。況ヤ上ノ人ニヲイテヲ乎。

一或人樂ヲ問フ。答テ云フ。上品ノ樂ハラクナキナリ。苦モナク樂モナキヲ上トス。是レ寂滅爲樂ナリ。其ツギハ中ヲ答フ。一切ノ事中ヲ以テ樂トス。イカントナレバ寢ルホドラクハナシ。然レドモ朝ヨ

リ暮ニイタルマデ、起ルナトイハヾ、スナハチ苦ナリ。又寢テバカリ居ルヲ苦ト思フトキ、起ルハ樂ナリ。シカルヲマタ終夜起テ居ヨト云ハヾ、マタ起ルヲ以テ苦トス。起臥トモニ中ヲ得ルヲ樂トス。過ルトキハスナハチ共ニ苦ナリ。甘草ハアマクシテ人ミナ食フ。甘草タリトモ日夜食セヨト云ハヾ、ソノニガキコト黃連ノ如シ。久シク居ルトキハ、スナハチ立ヲ以テ樂トス。立コトヒサシキトキハ、則チ又苦ナリ。ソノ中ヲ得テ以テ樂トス。飢テハ食ヲ願ヒ、食ヲモツテラクトス。飽クトキハ則チ食ヲ以テ苦トス。中ヲ得ルトキハ則チ是レ眞ノ樂ナリ。物ヲ見テ目ヲヨロコバシメ、久シク見ルトキハスナハチ苦ナリ、中ヲ得ルトキハスナハチ樂ナリ。萬事共ニカクノゴトシ。然ルトキハ則チ中コレ樂ナリ。ソノ次ノ樂ハ足ルコトヲ知ルナリ。タルヲシルモノハ、寡ヲ以テ多シトシ、足ルヲ知ラザルモノハ、多キヲ以テ寡シトス。足ルコトヲ知ラズシテ、願ヒアルモノハ、一生苦ルシミ、足ルコトヲ知リテモトメナキモノハ、貧ヲ以テタノシム。人ミナ貧ヲクルシム。然ルニ貧ヲサヘ樂トキハ、スナハチナンノ苦シミカアラン。則チ是ヲ樂トスルユヘニ、樂ト爲ル。故ニ足ルコトヲ知ルハ、極樂ノ國ナリト云ヘリ。ソノ次ギハ小人ノ樂也。言フニ足ラザル而已。

一名所舊跡ヲ見ルコトヲ好ム人ハ、目ヲ樂マシメテ、脚ヲ苦シマシム。願レ食人ハ、舌ヲ樂マシメ、心ヲクルシマシム。コレヲ求ムルニコヽロヲ勞セザレバ、食足ラズ。衣ハカロキヲ求メ、居ハ易キヲモトム。人ハ身ヲタノシマシメバ、君ヲ苦シム。コヽロヲクルシメズシテ、輕キヲ衣、ヤスキニ居ルコトハ難シ。身ヲタノシマシメルモノハ、耻ニ近ク、コヽロヲタノシマシメルモノハ、耻ニ遠シ。

一君子ハ樂シミヲモトメズ、樂シミ窮ル時ハ苦カナラズ來ル。況ヤマタ耻アルヲ乎。先ヅタノシミヲモトメテ、樂シミノ前ニヲイテ、苦ヲ積ザルトキハ、則チ樂シミキタラズ、樂シミキタルトキハ、苦

シミ樂中ニ伏シ來タリテ、ソノ樂シミノキハマルトキ、其苦スナハチ顯ハル。樂モトムルニ、ソノ樂ノ前ニヲイテ、苦ヲツムノ義イカン。縱ヘバ人料理ヲナシテ食スルガゴトシ。朝タヨリコレヲ營ナンデ、暮ニ至テコレヲ食シ、或ハ前日ヨリ營ミ前々日ヨリ營ンデ、ソノ食半時ニ過ズ。營ム人ハ苦ルシム。食スル人ハ樂シム。コレ樂シミノ前ニ、苦ヲ積ニアラザル乎。

一高麗諸超ノ珍器異具、願ヒモトメテコレヲ愛スル人ハ、尤人ノツネナリ。ワレコヽニ望ナシ。ワレ人間ニ心ナク、貴介公子トマジハリ、花ノモト月ノマヘニ、會席ヲモフケ、茶香之遊ビニヨツテ、日ヲ過サントヲモフコヽロナシ。一間ノ茅屋ニ衾被ヲ綴リ、一領ノ綿衣ヲ身ニ纏ヒ、僧形ヲ、ヤブラザルノシルシヲ表シテ、生ヲ送リ死ヲ待ノ外、アラマジキト思ヘバナリ。サナガラ又物ノヨシアシ、ラヌホドノ、コヽロニモアラネバ、一タンハ、眼ヲウルヲスコトアレドモ、繼テモトメ願フ心ナシ。我一得ノタノシミナリ。ネガヒモトムル人ハ苦ナリ。今大人ノタメニ引出サレテ、人ゲンニ在リ。予ガタノシミニアラザルナリ。

一兎ニ角ニナニゴトモ、遮ハリ覆ハレヌモノニ決定セバ、人ハ私曲ノ耻ハアルマジキモノナリ。唯藏セバカクサルヽモノトヲモフ故ニ、顯ハレテ耻ヂヲ受ク。ヨクカクサレヌ物ナレバコソ、盜人ハスデニアラハルレバ、身ヲ亡ボスニキワマリヌ。何ホドノ才覺ヲイダシテ力メ藏サントスレドモ、古今盜人ノアラハレザルハナシ。況ンヤマタソノ餘事ヲヤ。身ヲホロボシ、命ヲウシナフコトハ、盜ミホドニハ、人思フベカラズ。然ラバ盜ミノ外ノコトマタナンゾ、人コレヲ知ラザラン乎。故ニ雲カヽル峯ニ獨リ居ルトモ、君子ハ行跡ヲ亂スコトアルベカラズ。實ニ君子ハヒトリヲツヽシムナリ。我心ヲ謂フ。ワガ行ナヒ亂ルヽトキハ、則チ人イマダシラズトイヘドモ、我コヽロマヅコレヲ知ル。況ンヤ人

ノ知ルヲヤ。心ノ形ニ顯ハルヽ、紅ナヒヨリモ甚シ。

一名聞ハ諸道ニ好マザル所ナリ。シカリトイヘドモ、實ニアタルトキハ則チ可ナリ。名ハ外ヨリ揚ルトコロナリ。實ハワレニ在リ。名ハワレ求メズトイヘドモ、實ワレニアルトキハ、則チ人コレヲ揚ル。實ニ當リテアガルトキハ、スナハチ可ナリ。虛名ハ拙ナシ。

一書ヲヨク讀ム人ノ道義ナキハ、只下戸ノ酒ト云字ヲカキ、文字ヲ讀モスルガゴトシ。酒トイフ字ハ書ケドモ、酒德ニフレザルナリ。書ハ目ニ觸ルコトモナケレドモ、道義ノソナヘアル人ハ、上戸ナレドモ酒ト云フ字知ラザルガゴトシ。酒ノ字知ラネドモ酒德ニフレルナリ。

一酒掃スル人用捨ナキユヘニ、箒ヲ以テ茗荷草ノ五分一寸ヅヽ萌シタルヲ、悉ク損ノフ。コレヲ悲シク思ヒ、枯タル竹ノ枝ヲ折リ來テ、コレヲ立テ垣トシ扶ク。カタハラニ童子在リ。今コレヲ悲シムトモ長ジタラントキハ、コレヲ切リカナラズ食用スベシ。悲ニタラズト云フ。予曰、仁心ノ草木ニヲヨブコト云フコトヲ知ラズヤト、コレヲ敎ヘケリ。草木時ヲ得テ斷ルトキハ、スナハチ義ニアタルナリ。漸ク土ヲ出テ寸計リニシテ、シカモ徒ラニコレヲソコナフトキハ、則チ愛ナシ。マタ義ナシ。ソノ後、禮記ヲ讀ムニ曾子曰、樹木時ヲ以テコレヲ伐リ、禽獸トキヲ以テコレヲ殺ス。夫子曰一樹ヲ斷チ、一獸ヲ殺ス。ソノ時ヲ以テセザレバ、孝ニアラザルナリ。時ニ彼ノ童子ヲ呼ンデ說テ再ビコレヲ敎ユ。童子曰一樹ヲ斷チ、獸ヲ殺ス。ナニヽヨツテカ、孝不孝アリヤ。曰樹ヲ斷チ獸ヲコロスミナ時ヲ以テス。モシソノトキヲウシナフトキハ、則チ義ニソムク。汝見ザル乎。曾子曰、身ハ父母ノ遺體ナリ、行ヒハ火母ノ遺行ナリ。敢テ敬セザラン乎ト云ヘリ。汝ガ身汝行ミナ父母ノ遺體ナリ。遺行ナレバ、汝ガ一切ノ言行義ニ負クトキハ、スナハチ父母ヲ耻カシムル、コレ不孝ニアラズヤ。汝ガ耻

ハ父母ノ恥ナレバ、孝子コレヲ思ハザランヤ。一サイ義ニアタラザルノ事、ミナ不孝ナリ。只養ヲ以テ孝トスルトキハ、スナハチ犬馬モヤシナフコトアリ。

一或人孝ヲ予ニ問フ。答テ曰孝ホカニナシ。別ニ以テ孝ヲ答ヘガタシ。進退禮アリ。禮ニソムクトキハ則チ孝ニアラズ。起臥トキアリ。時ヲウシナフトキハ、則チ孝ニアラズ。飲食量アリ。量ヲ超ユレバ、スナハチ孝ニアラザル也。視聽言動一ニシテ孝ニアラザルナシ。百事ハ百事ト、モニ、萬事ハ萬事ト、モニ、ミナ道ニアタルトキハ、則チ孝ナリ。道ニソムクトキハ、則チ不孝ナリ。一切ノヲコナヒ、ミナ父母ノ遺行ナリ。汝ニ依テ父母ヲ恥カシム。古ヘノ皇ハ、孝ヲ以テ天下ヲ治ム。豈當然ナラザラン乎。一切道ニ合ナフ。ミナコレ孝ナリ。一切道ニ合ハザル、皆不孝ナリ。一事モ孝ホカナキナリ。朝寢スルモ不孝ナリ。晝寢スルモ不孝ナリ。サノミ夜話シ久シキモ不孝ナリ。高談高笑スルモ不孝ナリ。大酒大食モ不孝ナリ。夜行ノ流連モ不孝ナリ。武士ノミレン、モツトモ不孝、出家ノラン行、モツトモ不孝、ケンクハ口論ミナ不孝、病者ノ禁ゼザル是不孝、病ヒナキモノ、强麁モマタ不孝、罪ナキヲコロス不孝ナリ。功ナクシテアグルモマタ不孝ナリ。賦ヲアツフスルコレ不孝、博奕好色モツトモ不孝、主ニ不忠モマタ不孝、兄弟不和コレ不孝、進退義ニソムクミナ不孝、人ハタヾ養フヲ以テ孝トヲモフナリ。〔割註〕孔子ノ玉ハク、今ノ孝ハコレヨク養フヲ謂フ、犬馬ニイタルマデ、ヨク養フコトアリ。敬セズンバ、ナニヲ以テカ、ワカタン乎ト云々。〕

一蟹ハ甲ニ似セテ穴ヲホリ、人ハ心ニ似セテ家ヲ營ナム。サレバ家ニ大小アレバ、コ、ロニ大小アリ。蓋シ心ハ私ニアラズ。天ノコ、ロナリ。假リニ身ニヤドセリ、天心ニ大小アルベカラズ。大小ハ人ノ著スルトコロニアリ。好惡邪正ハ、氣シツノ性ナリ。性ヲ賤ムモノハ死シテ天ニノボリ、氣ヲ賤

ムモノハ死シテ地ニクダリテ、カナラズ地ノ禍ニ罹ル。佛法ニ流轉ヲ恐ル。如來一代ノ教法、祖師歴代ノ用心コレヲ本トセリ。

神罰冥罰アリト云フ。凡下ハヲシヘノゴトクコレヲ信ズ。中人ハ智惠イマダ至ラズコレヲ信ゼズ。ミナ罰ハナキモノデヤト思ヘリ。至人ハヨク知レリ。故ニ人ニヲシフレドモ人コレヲ信ゼズ。下ト上トハ罰ヲ信ズルコトヒトシケレドモ、道理ヲ知リテ信ズルト、知ラズシテ、信ズルトノカハリ也。智イマダイタラズシテ信ゼザランヨリハ、知ラズシテ信ズル凡下ハマサリ、至人ニ相似タリ、中人ハ人ノ誹リヲ受ク。罰ハナヲ惡ノゴトシ。言フコヽロハ前ニ愼マズシテ、ノチ惡身ニノボル。コレヲ罰ト謂フ、神ノ罰、佛ケノ罰、君ノ罰、親ノ罰、兄弟ノ罰、知音ノ罰、民ノ罰、衆生ノ罰、一々義ニソムクトキハ、則チアタラズト云フコトナシ。皆人錯レリ。蓋シ人ノ思フトコロ罰ハ、天上ニ冥府冥官アリ。人惡ヲナストキハ、則チ冥官コレヲ見テ罰ヲ充ルト、初思ヒノチマタ分別シテ、中智發シテ何ンノ冥官カアラン。人惡事身ニノボリキタルモマタ自然ト謂フ。誰レアツテ罰ヲ加フト云フコト、コレハ初ニ思フモ錯マリナリ。後ニ飜シテ思フモアヤマリナリ。唯モノヽ積ム所ナリ。惡ヲツメバ惡キタリ、善ヲツメバ善キタル。人ノ身ノ善惡禍福自然ニゲンジ、俄センナリト思ヘリ。積ヲ以テキタルコト人コレヲ知ラザルナリ。タトヘバ家富メル人二人アリ。各一子アリ。家富ムユヘニ一子ヲ以テ慈悲尋常ニセズ。莊飾ヲアクマデニシ、飲食ヲアカシメ、百事足ラザルコトナシ。コノ一子勞ヲナサズシテ衣、苦ヲ知ラズシテ食シ、百事思フコトナシ。或ルトキ親死シ、家衰ヘ財ツキ孤トナリ、後親アルトキノ心ヲワスレズ、勞ヲナサズシテ衣ント欲シ、苦ヲ知ラズシテ食ハント欲ス。百事ヲモフコトナクシデ、足ランコトヲ要ス。摠テアタハズ、人コレヲ救フコトナク、自カラ給スルニチカラ無シ。ユヘ

ニ乞フテ食シ、乞テ衣ル。ハジメハ人ニウラヤマレ、後ニハ却テ人ノタメニ耻カシメラル。又一人ノ富家ノ一子ハ、ソノ父母ノ慈愛尋常ナラズ。裝飾飲食百事タラズト云フコト無シ。ソノ一子ノ心向フトコロ則ナリ。父母ワレニ於イテ慈愛スルコト深シ。ワレ孝行ナクンバアルベカラズ。父母勞ヲナシテ財ヲ得、ソノ財ヲ以テ父母ワレヲ裝飾ス。ワレ父母ノ勞ヲ思ハズンバ、天ワレヲ罸セン。父母勞シテ以テ我ヲ養ナフ。ワレコレヲ飽食ス。コヽロヲ用ユルコトテクンバ、天我ヲ罸セン。一日コレヲ食フノ功ヲ作サズンハ、我クラハズト云フテ、チカラヲ親ニ竭ス。アルトキ親死ス。ソノ子ヨク家ヲ治メ、財ヲ保チ、身ヲ直クシテ、親ヲシテハズカシメズ、此二子ノアイダニヲイテ、罸ヲ蒙ルト、罸ヲコヲムラザルトアリ。終日コヽロヲモチキ、艱難ヲフルモノハ、カンナンニ逢フ時カンナンニ堪ユ、故ニ身ヲ保ツ、終日用心ナク父母ノ慈愛ニ管セズ。冥慮ヲ知ラズ。艱難ヲ經ザルモノハ、無事ニヲイテ遣フコトナク、艱難ニ逢フトキ、カンナンニタヘザルナリ。只我ヲ罸スルモノハ我ナリ。天ニ非ズ。即チコレヲ名ヅケテ天ト曰フ。天トハ理ノ當然ヲ謂フ。理ノアタルトコロミナコレヲ天ト謂フ。ソレ人、義ニソムケバ身ニ惡ヲ生ズ。コレヲ罸ト謂フ。ソノ義親ニソムクトキハ、則チ親ノ罸ト曰ヒ、ソノ義、君ニソムクトキハ則チ君ノ罸ト曰ヒ。兄弟ニ於ケルトキハ、則チ兄弟ノ罸ト曰ヒ、知音ニ於ケルトキハ、スナハチ知音ノ罸ト曰フ。賦ヲ厚クシ民ヲ苦シメ、其身佚遊佚樂ノタメニシテ、ノチ惡ソノ身ニ上ル、ソノ義ヲ民ニソムク。コレヲ民罸ト謂フ。勞ヲナサズシテ、金銀ヲ泥沙ノゴトクスルトキハ、則チソノ義金銀ニソムク、コレヲ金銀ノ罸ト謂フ。ソノ罸異ナリトイヘドモ、天理ハ一ナリ、人ノ罸スルトコロハ遁ル、所アリ。理ノ罸スル所ハ、ノガル、所無シ、天理怖レザルベケン乎。天理トハミナ數ナリ。數盡ルトキハ則チ亡ブ。人三十年用心ナク、樂事ヲスルトキハ、スナハチアラカ

ジメ樂ノ數ヲ盡ス。故ニ三十年ヲ終リテ、樂ナクシテ苦シミ多シ。ハジメ三十年心ヲモチイテ、艱苦ヲ歷ルトキハ、則チ樂ノ數殘リテ、三十年ヲヲワルニ安シ。初メ三十年ノ苦ハマサニ堪ユベシ。終リ三十年ノ苦ハ、堪ヘガタシ。前ニ苦ヲ以テシ、ノチニ樂ヲ以テスルハ、モツトモ可ナリ。前ニ樂ヲ以テシ、後ニ苦ヲ以テスルハ不可ナリ。萬事ミナ數也。

一恥ヲ以テ恥トセザレバ、身ニ苦ナシ。恥ヲ知ルモノハ身ヲ苦シム。富家ノ門ニ倚ツテ、乞テ以テ食シ、人ニヨツテ乞テ以テ衣、足以テ飢寒ニ充ツ。只恥ヲ知ルニ因テ、四民ノ業ニヨツテ身ヲ苦シメテ、以テ口ヲ給セントスルモノナリ。豈ニ衣食ノミナランヤ。萬般ノ事、恥ヲ知ルヲ以テ身ヲ苦ルシム。身ヲ苦シムルヲ以テ人ナリ。恥ヲ忍ワズシテ、身ヲ安ンズルコトヲ謀ルモノハ人ニアラズ。夫人トシテ身安キトキハ、則テ恥アルコトヲ知ラズ。君子ハ身ヲクルシメテ以テ、父母ヲ恥カシメズ。兄弟朋友ヲシテモ恥カシメザリナリ。君子ハ身ヲ苦ルシメテ以テ、恥ヲ避ク。コレヲ身ヲ安ンズルトス。小人ハ恥ヲ蒙ムルトイヘドモ、衣食足リ、起臥ワレニ在ルヲ、コレヲ身ヲ安ンズルトス。只コレ身心ヲ安ンズルト、形チヲヤスンズルトノ二ツナリ。其形ハ一世ニ朽チ、孽バヘヲノコスナシ。其心ハ萬世ニツタヘ規模ヲ取ル。故ニ明教ニ曰、伯夷叔齊ハイニシヘノ餓夫ナリ。今斯人ヲ以テコレニ比シテ人ミナ喜ブ。桀紂幽厲ハイニシヘノ人主ナリ。今ソレヲ以テコレニ比シテ、人ミナ怒ルナリ。コレ形チニ就カズ、只コヽロニ就クモノナリ。

一嬾ト懶ノ字同ジ。夫レ人少キ時ハ、萬ヅニモノウクシテ、所作ニ荒ムモノナリ。イタク責ムベカラズ。草木ナドモ嬾キ緑リハ、タヨ〳〵トシテ、サハラバ折ベキ程ニ見ユ。人ノ形チモ、ツヨカラズ十五ノ兒女ノ弱々トシテ、所作ニ忍ブベキトモ見エズ。コレ嬾キトキノ體ナリ。懶ト云字ノ意ナリ。シ

カリトテ又ナルヲマヽニセバ、其人老ヒテ悔ヒアルベシ。漸々ニシテ諫ムル心ヲ得テ、以テ自ラ進ムヤウニ敎ユベキナリ。

一　人ハ薪盡キテ火滅ユルガゴトシ。佛ノ說タマフ程ニ、ホシヒモ目ノ業、目ナクナレバホシヒ共ニ滅シテナクナリ、床シヒモユカシヒト知ラスル、目スデニ滅スレバ、ユカシヒ心モトモニ、滅スルホドニ、輪回ト云フコトモナイト心得ルハ惡シキゾ。薪ガ盡レバ火モ共ニ滅スルハ勿論ナリ。ソノ薪ソノ火ハ消ルニ相定マレリ。然ルヲソノ薪盡ル時、ソノ火ヲ別ノ薪ニ投ズレバ、ソノ火又新ラシクナリテ燃ルコトハナキモノニ候ヤ。薪ハ盡クレバ、火ハ滅スルモノニ定マレルヲ、已レ計リテ、薪ニ移シテ、ソノ火タユル期ナシ。人モ當然ナリ。當然ニシテ滅スレバ、殘ルト云コトハナキヲ、已レ計リテ、念ヲ物ニウツシテ、念々斷ユルゴナシ。コレヲ辨マヘズシテ、唯滅シテ跡ナシト思フハアヤマリナリ。人每ニ火ハ滅シテナクナルト思フハ誤ナリ。ソノ火ハ滅シ、ソノ薪ハ盡レドモ、火ノ性ハ滅セザルナリ。只ソノ薪、ソノ火、一分々々ノ火トアラワレタル、火ノ形ハ滅スレドモ、性ハ滅セズシテ、天ニ歸シテ、天ヨリ物ヲ生ズレバ、生ズルモノニ、一々火德ソナハリテ、ワガマヽニ火ヲ取出ストキハ、火ノ滅スルコトハナイゾ。六十餘州ノ內、一火モナク、火ト云フモノヲ悉ク滅シテ、末代火ト云コトハ無キモノナラバ、火滅スルニキハマルベシ。一天下ノ火ヲ、悉ク滅シタリトモ、即刻火ヲタキツクベシ。然ラバ火ハ滅スル物ニアラズ。火ノ滅スルト云フハ、實ニ滅亡スルト云フ義歟。曰、火ハ實ニ滅セズ。問、滅セズンバナンゾ火滅ストハ云ヘルゾ。曰、火ノ英氣滅ス。コレヲ火滅スト云フ。火ノ性萬古滅セズ。薪火ヲ成シ、火焰ヲ生ズ。此ノ火焰ハ、火性ヨリ生ズ。火焰滅ストイヘドモ、火性滅セズ。故ニ石ニモ火アリ。木ニモ火アリ。萬物ミナ火性アラザルコトナシ。天下ノ火一時ニ滅ストイヘ

ドモ、火性ハ滅セザルユヘニ、石ヲ打テ火ヲイダシ、木ヲ鑽バ火ヲ生ズ、コレソノ證據ナリ。

一、龜毛侍者曰薪ツクル時、火ヲ別ノ薪ニウツシテ、火滅スルコトナシ。マタ心ハ萬世ニ傳フト。然ラバ先尼外道ガ言ノ如ク、喩バ人ノ轉宅スル如キヤ如何。答曰ク、火ヲ薪ニ移スト云ハ、薪ニ黑白二品アリ。イヅレモ身口意ノ淨ト不淨ニヨリテ、不淨ハ黑業ナレバ黑薪ヲ成就シ、淨ハ白善業ナレバ白薪成ル。業ガ即チ薪ナレバ薪ガ即チ火ナルユヘニ、業風ニ吹レテ、羅刹鬼國ヘモウツリ、兜率天上ヘモ昇リ、寂光ノ淨土ヘモ移ルナリ。マタ心トハ凡夫ノ思フ、慮知念覺妄想分別ノ心ヲ云ニアラズ。火宅僧ノ謂ル、際モナキ法身、際モナキ解脱ノ異稱ニシテ、日月ノ光リニ超過セシ光輪ナレバ、萬世ハオロカ、劫盡世泯スレドモ、盲冥ヲ照シテ有ニアラズ。不可思議ノ眞實明ナルモノカ。

一、龜毛子問、孟軻人ノ性ト、犬牛ノ性ト異也ト謂フ。然レバ二性アルヤ、答、二性ナシ。然バ物ハソノ偏ヲ得、人ハソノ至ヲ得ルカ。答、否ナリ。然ラバ人ト物ト同カ。答フ不變ノ體ハ同ク、隨緣ノ用ハ異ナリ。故ニ佛ノ言ク法身六道ニ流轉スト是ナリ。

一、濕氣ハ暫時モヲソルベシ。乾栗ヲモツテ掌中ニ握ルトキハ、則チ忽ゼントシテカタキヲウシナフテコレヲ咬ムニ、ハナハダヤワラカナリ。ハジメヨリ口ニイルヽトキハ、則チ口中潤ホヒ多シトイヘドモ、栗ヤワラカナラズ。掌中潤ヒナシトイヘドモ、生發ノ氣アルヲ以テナリ。口中ハ粘唾アリトイヘドモ、生發ノ氣ナキユヘナリ。モノヲ以テ蒸ト湯ニ漬ルトノ異ナリ。ムスモノハ早ク氣通シテ、ヤワラカナリ。ツケルモノハ直チニ湯ニ合フトイヘドモ、ヤワラカナルコト遲シ。生發ノ氣アタラザル故ナリ。

一人ミナ我飢ヲ知リテ、人ノ飢ヲ知ラズ。ユヘニ人ヲ憐ムノ心ナシ。我飢ヲ知リテハ、ナンゾ人ヲ憐マ

ザラン。放逸ノ人ハタヾワレヲ知リテ、人ヲ知ラズ。

一大ナル蜘ノ檐ニカヽリタルヲ地ニ落セバ。足ヲ收メ石ノゴトク成リテ死ヲ遁レンコトヲ計ル。彼レガ小智ニテ人ヲ計ラントス。少シナリトモ走リノガルレバ、ソノ程モ命存スベシ。彼レガ謀リゴトハ、人ヨク知レリ。彼レハ思フベシ。人ハ知ラジト、無智ノ人、有智ノ人ヲ計ルコトモ、蜘ノ謀略ニヲナジ。

一マタ毛蟲ノ大ナルモノ地上ニ行ク。コレヲ犯ストキハ、則チ憤然トシテ窿穹レリ。カクノゴトクナレドモ。人コレヲコトヽモヲモハズ、小人ノ大人ニムカツテ、此ノゴトキノ風情ヲナスコト、毛蟲ニコトナラズ。

一香ヲキクニ、最初ニチヤツト鼻ヘ入レタル時、コレハ何レノ香ジヤヨトキヽタルガ、大方ハアタルモノナリ。ソコヲマドフテ又キヒテ見、イロ〳〵ニスレバアタラヌモノナリ。ソレヲイカントナレバ、最初ニチヤツト聞クハ、才覺分別ナシ。コレ我本心感ズルユヱニ正直ナリ。ノチマタ取リテカギ、再三キクトキ、コレ血氣分別ナリ。血氣ニマドハサレ、ムザトシタル物ニナルナリ。最初ニキヽテソレガアタラズバ、アタラヌト思フベキナリ。酒茶ヲ試ミルモヲナジコトナリ。最初一ト口ノムトキナラデハ、知ラレヌモノナリ。再三アヂワユレバ一向ニ知ラレヌモノナリ。詩句ヲ吟味スルモマタヲナジ、ヨクモナキ句ナレドモ、ヒタト何ベンモ吟スレバ、口ニナレテ能キヤウニ覺ユルモノナリ。最初一返、二ヘンヨムトキ、好シ惡シ知ラルヽモノナリ。又ヨク吟味スベキト思ハヾ、唸ジステヽ置キ、一兩日モノチニ、讀ミ見レバ、マタ新シクナリテ、初メ再三讀テ好シト思フ句ノ、アシキトコロガ知ルヽモノナリ。ソノトキモ別ニフシモナク覺ヘバ、初メヨキト思フトコロガ、タガワヌト知ルベ

シ。文章ヲ書出ストキハ、ヨク聞ヘタト思フモノナリ。ハル〴〵ノチニ取リイダシテ讀テ見レバ、スマヌトコロガアルモノナリ。是ヲ以テ詩ヲ知ルコト、重陰ニ至リ始メテ功ヲ見ルト云ヘルコト、コノ重陰ハ返ヲカサヌルニテモアルベシ。大方ハ吟ジ棄テ置キ、アイダヲヘダテ、カサネテ吟ズルノ意ナルベシ。

一麤面ナル人ヲ、初メテ見タルトキハ、サテ見苦シキノ人物ヤト思ヘドモ。ナレテ毎日見レバ、後ハ見ヨキモノナリ、コレ血氣アヤマラレテカクノゴトク、最初ノ一念ハ本心ニ感ズルユヘニ、ソノモノ好シ惡シヲアリノ儘ニ知ルナリ。サレバ人ノ好惡ハヨク見ユルモノナリ。我ガ好惡ヲバ知ラヌモノナリ。我所作ハワガ身ニナレテ知ラレヌモノナリ。マタ惡シキト知リ、狂メ惡ヲスルハ道ノ外ナリ。

一多欲ノ人ハ却ツテ無欲ナリ。多欲ノ人多ク財ヲ得ント思フテ、中ヲ越ヘテ多ナルユヘニ、アツメタル財ヲ、一時ニ官ニ奪ハレ、剰サヘ其身ヲホロボス。則チ財ヲウバワル、ノミナラズ、一ツアル命ヲソヘテウシナフ。則チ多欲ノ人ハムヨクノ人ナリ。小欲ノヒトハ、ソノ分ニ隨ツテ得ルトコロノ財ヲ、ヨクタモツテ、其身ヲ全フシテ、天命ヲ終フ。コレ多ク財ヲ得ルナリト思ヘリ。否ナルヤ。或人曰、然ラバ多ク財ヲアツムルヲ富ト云フコトハ、總ジテアルマジキコト歟。天下ノモノ皆貧人タルベキカト云フ。ワレ云フ、ソノ中ヲ得ルトキハ、則チ富モマタ得タリ。ソノ儀モマタ得タリ。貧ナルトキハスナハチ、貧モマタ得タリ。天下何ゾ貧人タランヤ。故ニ曰、不義ニシテ富、カツ貴キハ我ニヲイテ浮雲ノゴトシトイヘリ。義ニアタルトキハ、則チナンゾコレニ惡アラン。

一何ゴトモセント思フコトヲ、ズントヲモヒ切リテスルハ本心ナリ。カウセウカセマジキカト、二途ニワタルハ血氣ナリ。二途ニワタリテ分別キワマラザルコトヲスレバ、カナラズアシヽ。是血氣ニ惑ハ

サルヽナリ。コノコトヲセントト思ハヾ、一道ニシタガヨシ。二途ニワタル程ナラバスベカラズ。初メ一氣ハミナ本心ナリ。フタツニワタルハ血氣ナリ。本心ナラバミナヨシ。血氣ハアシヽ。

一ナニゴトモ、ヲヅルナ〳〵、ヲヅレバシソコナフゾ。ヲヅル平生ノコト、場ヘイデ、ハヲヅルヲヅルナ〳〵、溝ヲバ、ヅント飛べ、危シト思ヘバハマルゾ。

一財寶モ骨ヲ折ツテ、手間ヲ入レタルハ、遲クツクルナリ。骨ヲ折ラズ手間ヲイレズシテ得タル財ハ、早クツクルゾ。色ヲ塗リアグルニヒサシクシテ、返ヲ重ネタルハ遲ク、疾ク塗リテ、ヘンヲカサネザルモノハ、ハヤクハグルゾ。

一或時生榧ノ、水ヲ含ミタルヲ、ソト燒テカミワラントスルト、コト〳〵シク、ヲビユルホドハネル。コレ陰永ウチニアリ。火コレヲ攻ムルナリ。雷空ニナルノコヽロナリ。陽火水雲ニツヽマル。陽火内ヨリハシリ破リテ、ソノ聲空ニヒヾキワタルナリ。鳴ルトコロハ一所ナレドモ、ヒヾキノ四方ヘトホル音、グワラ〳〵ト鳴ル也。

一我ヲ人、ヲカシト見ルベシ。餘儀ナキコトナリ。然レドモソノトキニ相應ノ知識ト思シメスベシ、煎豆ヲ食フニ、大粒ヨリ食ラヘバ、ハテマデ大粒ヲ喰フト云ヘリ。百粒アルトキノ大粒ナル豆ト五十粒アルトキノ、ソノ内ノ大粒トハ、カハルベケレドモ、ソノウチニテ、大粒ナルヲ吉シトス。シカレバ古ヘノ知識ハサゾ有ラン。コノトキニアタリテハ、此ノトキノ内ノ知識ヲタツトムベキコト歟。此ノトキニヲイテ、イニシヱノ知識ヲ思ヘドモ、遇フコトナラズ。百粒ナリシトキノ大粒ナル豆ヲ望ミテハ、五十粒ノトキハソノ望ミカナハズ。サレドモ惡知識ノ邪見ニ引タラバ、一盲衆盲ヲ引ナルベシ。

一的傳ノ僧ハ、コロリト餓ヱ死ネト、先師ハ教ヘタマヒシモノヲ、的傳ト云フコトハ、早ク衣ヲ改メタヲ云フニアラズ。師家ノ我家ノ的傳ナド、云ハヾ、是非ニヲヨバズ。コロモヲ早クアラタメタホドニ、我ハ的傳デヤナト思フコトハ然ラズ。總ベテ的傳トハ、ソノ一家々々ノ區別デミナ的傳ナリ。紫野ニハ虛堂南浦ト的傳スル。東福ニハ無準聖一ト的傳シ。マタ南浦ノ下ニテモ、南浦宗峯ト的傳シ。マタ濃州遠山ニハ、南浦峯翁ト的傳ス。シカレバ紫野派ノモノ、南浦宗峯コレヲ的傳トシ、遠山派ノモノハ、南浦峯翁コレヲ的傳トスルテナリ。天下一人的傳ト云フコトハ、人ガユルサヾルナリ。的傳傍出ナド云フコトハ、子細アルコトナリ。ムザト心得テ、衣ヲサキニ改メタレバ的傳ト云フ。笑フベキナリ。

一異相ト云フハ、祖宗行狀等ニモ好キ方ニ云ヘリ。ナミ／＼ニカハリタル相形アルヲ云ヘリ。相異トナレバカナラズ、ソノ行ヒモマタ異ナリ。人ニカハリ抽ンデタル處アルヲ、異相トハ云ヘリ。異產ト云フモ同ジ、人ト異ニウマレタルヲ云フ。異人ナド云フモ、世上並ミノ人ニテハナシ。サレバ昔ノ聖賢ノ相ヲ畫圖ニノコシタルモ、一角アル相見ヱタリ。イカニモ面貌圓滿シテ、カハル處モナキヤウナルガアレドモ、ソレモイヅクゾニ、人ニ異ナルトコロアルモノゾ。異相ト云フヲ今ノ世ニムザト心得ルゾ、異相人ナド、テアザケルハ笑シキコトゾ。今ノ世ニ人ノ嘲ル異相ノ人ト云フモ、如何サマヨク心ヲ留メバ、好キトコロモアルベシ。正直ニシテ曲ラズ、然ルヲ私曲ヲ以テアイ待スルユヘニ、ソノ人ニ向テ放言シ、猶コヽロニ合ズバ、跡ヲ見セズソコヲサル。然ルヲ人異相人ト云フ、コレモ異相人ニ理ツヨシ。但シ一轍ニアイ定マリタルトコロヲ、短カキ處ト云フベキ歟。シカルヲ一轍人ナド、ハ云フベシ。一轍ハ聖道ニモ好マザルナリ。

一大隱ハ市ニ隱レ、小インハ山ニカクル。此ノ語ヲロニ覺エテ、山隱閑處ノ人ヲ誹謗ス。マコトニ笑フベシ。出家ハ樹下石上ニアルガ本ナレバ、市中ユカシク思フトモ、山林ニ居ルハ本儀ナリ。山林ニ居テモ、市中忘レザルヨリハ、市中ニ居テ市中ニワスレタルハマシヨトテ、市中ニ居ルハ道ニアラズ。況ンヤマタ山ハ閑ナルモノニ定マレリ。市中ハ閙ガハシキニサダマレリ。市中ニ居テモ隱逸ノ心アル人、山林ニ居テモ同ジク、隱イツノコヽロアル人ニシテハ、山林ニイルハ上ナリ。インイツニシテ隱地ニアルハ相應ナリ。シカルヲ市中ヲ好ミ、一日モ山居閑居ニタエザル人ノクセトシテ、閑居ノ人ヲ云ヒケシテ、我非ヲ掩ハントシテ、大隱ノ市、小隱ノ山ノ語ヲ持チ來リテ、眞隱ノ人ヲ誹謗ス。マコトニ道理ヲ知ル人ハ早ク聞ベシ。大隱イチニカクレ、小インヤマニカクルノ語ハ、コレヲ說クト滋味アリ。一往ニコヽロヱガタシ。只コヽロハ市ヲ忘レズシテ、身ニバカリ山ヲ求ル人ノ爲ニ云ヘル語ナリ。身モ心モ市ヲ忘レタランニハ、山ニシクベカラズ。身心トモニ閑ナルハ山ナリ。市ハ縱ヒコヽロハ閑ナリトモ、聞トコロカマビスシク、見ルトコロ閙ガハシケレバ、身コレニアリテ詮無キナリ。智者ハ水ヲ愛シ、仁者ハ山ヲ愛スト云フモ、忙シト閑カトノ二ツナラズヤ。

一法ノ外ナリトモ、能ク手ニ熟シタル好手ノスルハ、物ヲソコナハズシテ、ソノ事ナルモノナレドモ、法ニ違フテスマジキコトナリ。ナゼニトナラバ、好手ノスルマネヲシテ、童子アルイハ、無フンベツナルモノ、其手未熟ニシテ、スルハカナラズ事ヲソコナフ程ニ、スマジキヲバ、シテ見セヌガヨシ、アリヤウノ仕樣ナキニアラズ。法ノ外ハミナ略ナリ。據ナリ。略ハ事ノ草ナリ。據ハ道ノ草ナリ。假令ヘバ、小刀ヲ以テ、疊ノ上ニヲイテ紙ヲ斷ル、好手ハスコシモタヽミヲ破ラズ。アルイハ障子ニアテ、切レドモ、好手ハ障子ヲヤブラザルナリ。鄙人ノ斲堊ノコトハ好手ノ業ナリ。

一器ハ廉ヲ持ザルモノナリ。殊ニ重キ物ヲ盛リタル、ウツワノカドヲトレバ、廉カナラズハナレテ興ヲサマスモノナリ。タトヒ無事ナルモ見テ危フシ。賢人アヤウキヲ嫌フナリ。

一緣ノアル器ヲモツニハ、大母指ヲ我手ノ方ヘツヨク引ケバ、フチヲ引キ缺ク。コヽロアリテアヤウシ、ウツワノ内ノ方ヘ、大母指ヲ推シカクルヤウニ、チカラヲ入テ持ツガヨシ。得意ノ人ハコレ體ノコトハ、ヨク辨マユルトイヱドモ、童子若輩無骨ノモノ、タメニハ、ヨキ敎ヘナリ。

一アル夜三四子爐話打ス。一人ノ云ク、古老ノ人ハ道ヲ以テハナハダ秘ス。大道ソレ然ルヤ。一ノ小事トイヘドモ、大道ヲ傳フルガゴトシ、笑フベシ。或ル老人ノ云フ、便桶ニムカツテ、小用ヲ便ズルニ旨アリ。密カニコレヲ傳フベシ。汝蓋シ小便ノトキ直チニソノ桶ノ中心ニ便スベカラズ。ソノ桶ノ中心ニ便スレバ、則チ便ノ聲アリテ、人ノ耳ヲ汚ス、便ノ臭ヒアリテ人ノ鼻ヲケガス。便ヲ桶ノ膚ニ投ズレバ、則チ聲無ク臭ヒナシト云フ。笑フベキヤ。予ガ云ク、古人ノ心フカキコト知ルベシ。此ノ一小事トイヱドモ、カクノゴトシ。況ンヤマタ大道ニヲイテヲヤ。コレヲ一小事トイフテ、容易ナルトキハ、則チ大道コレニ隨ツテ以テ容易ナリ。道容易ナレバ人ニ信ナシ。信ナキトキハ、則チ道立ズ、コノ一小事トイヱドモ、授ルトキハ則チ人コレヲ信ジテ以テコレヲ受ク。大道トイヱドモ、世ノ話シノ如キハ、スナワチ人信ゼズシテ、コレヲ受ケズ。コレヲ笑フ。人ハコレヲ傳ヱズトイヘドモ、此一小事定メテ誤マルベカラザルナリ。世ノ人多クハ狼藉ナリ。此一小事ト雖モ習フトキハ、則チ得ルコトアルベシト、云フ言イマダ了ラザルニ人アリ。戶ヲヒラキ出テ便桶ニ向テ小用ヲ便ズ。ソノ聲瀑ノ如シ。予曰ク、老者ノ言ノ如ク習フテ是好カ。マタ老者ヲ笑フテ、カクノゴトク狼藉ナルカ。コレヨキゾト、道ヒ了リテ笑フ。

一橋ヲバワタレ。端ヲワタルナト云フハ、面白キ綺語ナリ。ナニゴトノフシナキコトヲモ、フシアリサウニ云ヒナセバ、ソノ言葉ヲ興ジテ、ヨクロナル、ニヨリテ、ハシトダニ云ヘバ、コノ言葉ヲ思イダシ、云ヒイダシヽテ利アリ。上ノハシハ橋ナリ、下ノハシハ端ナリ。橋ヲ渡ルニ、橋ノ中正ヲワタレト云ヱルコトナリ。橋ト端トハ、唱ヘカハリヌレド、コヽニテマギラカシテ、同ジトナヘニ云テヨシ。鳥ハ食ヘドリハ食イソト、俗語ニイヱルモ同ジ。鳥ノ脊骨ノ下ニ付キテ血アリ、コレヲドリト名ヅケルトナリ、如何ナル子細ゾヤ。鳥トハ云フナラン。コノ血毒ニテ人ニタヽルト云ヘリ。コレトクソト人ニヲシヱテモ、人胸ニ留メズ。鳥ハ食ヱドリナクヒソト、綺語ニ云ヘバ、コノ詞バヲ興ジテ、人コノコトヲ思ヒイダシテ利アリ。覺ヘガタキコトヲ歌括ニスレバ、ヨクヲボユルガゴトシ。

一小事ヲ大事ニセザレバ、カナラズ大事ニ大事ヲシイダスゾ。小事ナレドモ仕損ジテ能キニハアラネドモ、小事ナルユヘニヨシ。ソレヨトテヤミヌ。大事ニイタリ仕損ジテハ實ノ大事ナリ。

一夜途ヲ行ニ、善人サキニ行テ殺害ニ逢フ。惡人後ニ行テ遁ル。何ゴトゾ。善人ワザハイニ逢イ、惡人サイワイヲ得ル。天ノ加護ト云フコトハ、コヽニハアラザルカ。予曰、コレ天道ナリ。善人トテ引上ゲ、惡人トテ推下ダサバ、天道ニアラズ。天道ハ惡人ヲモ不レ捨。善人ハ猶ステズ。善ヲ取リ惡ヲスツルハ天道ニアラズ。コレ人間ナリ。然ラバ善ヲ作シテ善ナラズ。惡ヲナシテ惡ナラズ。唯自然ナリ。恐ラクハ天下ト云モアルベカラズト云フ。予曰汝ガ言ノゴトクナラバ、汝今日惡ヲナシテ見ヨ。惡積リテ汝ガ身カナラズ亡ブベシ。又予ガ言ニ隨ツテ善ヲナシテ見ヨ。善ツンデカナラズ身立ツベシ。彼夜途ニ先キヲ行モノ善人ナルヲ、天コレヲシテ先ダヽシメテ、禍難ヲ與フルニアラズ。ソノ人オノヅカラ行キテ禍難ニ遇フ。天ノ作ストコロニアラズ。ソノ人現今ニ惡人ニアラズトイヱドモ、過

去ノ業残ルコトアリ。コヽニヲヒテ、不意ニ人ニサキダチテ難ニ遇フ。マタ一人ノ悪人後レテ、ナンヲ遁ルヽモマタ過去ノ業。コヽロ感ズルコトアリテ、一旦難ヲノガルヽナリ。コレマタ一生ノ悪ニアラズ、一生ノ善ニアラジ。近キトキハ、則チ一生ノ裏ニ報ヲ見、遠キトキハ、則チ復生ノトキ報ヲ見ル。ソノサキニ行クコト、不意ナリト云ヘドモ、前業アリ。前業ノ感ハ不意ニアラズ。唯不意ナリトイヘリ。

一人ヲ崇ムルニ様ト云フ。御所様、殿様、長老様ナド云フ。此ノ様ト云フコト更ラニ心得ズト云フ人アリ。様ト云フハ様子ト云フ義ナリ、ソノ人ソノ人ノ容、コツガラ、様體ナドト云フ義ナリ。然ラバ人ヲ崇ムルノ義アタリ難シ。様ト云フテアガムルノ義ハ、假令ヘバ貴人ハ、貴人ノ様ナルガヨシ。貴人ノ賤シキヤウナルハアシヽ。御所ハ御所ノ様ナルニ依テ、タツトキナリ。殿ハトノヽ様ナルヲ以テ貴シ、長老ハ長老ノヤフナルニ依テ、貴キホドニ、長老様ナド云ヘバタツトキ義ナリ。ソノ身ノ様々ヲ、タガヘヌ處ヲ以テ崇ムル心ナリ。長老ハ長老ノ様ニ御座候ヨ、殿ハ殿ノ様ニ御座候ヨト云フガゴトシ。又長老ノ様ニハナイゾ、殿ハ殿ノヤフニハナイゾト云ハヾ、貴キニチハナシ。殿ガトノ、ヤフニアラバ貴イゾ。歌ノ様詩ノ様ナド云フモ同ジ、歌ニウタノサマナクバ、歌ノヨキニハアラジ。詩ニ詩ノサマナクバ、詩ノヨロシキニアラジ。

一人ミナ聖賢ノ語ヲ咬味ハヽズシテ、直チニ呑却ス。故ニ心聖賢ノ道ヲ執ルコト無シ。假令ヘバ胡椒ヲコノムガゴトシ。コレヲ咬味フトキハ則チ、ソノ味ヲ得ルガユヘニコレヲコノム。モシ一丸ヲ以テタヾチニ呑却スルトキハ、則チソノ辛キ味ヲ知ラズ。ソノ辛味ヲ知ラザルモノ、甚トシテ胡椒ヲコノムノ意アラン乎。聖賢ノ道モ、マタヨク咬ミ味フトキハ、スナワチ聖賢ノ道ノ善ヲ知ル故ニコノム。一切ノ食

味ハ、ズシテ呑却スルトキハ、則チ好ムノ意ナカルベシ。一切ノ道モマタカクノゴトキナリ。柿ハウマキモノナレドモ、咬ミ味ハイテコソ、マタ食イタイト思フコヽロハアランガ、丸呑ミニシテハ、又クイタイト云フ心ハアルマイゾ。聖賢ノ語モ同ジ。聖賢ノ道ヲシタハザルモ道理ナリ。マタ咬ズシテ呑ンデモ、腹中ニテ消シ、命ヲ養フモノハアルベシ。知ラズシテ食テモ、イノチヲヤシノフモノモアルベシ。聖賢ノ語ヲヨクアジワヒテ知ルハ上ナリ。知ラズシテ丸呑ミニスルモ、呑マザルニマサル道理ハアリ。聖賢ノ道ヲ咬ミアジハハズシテ、口ニ云フモ、終ニ道ニ入ルノ端トナル理アリ。工夫フカキ人ニアラズバ、辨ヘガタシ。佛氏ヨクコレヲ知ル。假令バ初生ノ赤子ノ、乳ノ味ヲ食ガゴトシコレハ母ノ乳味フトモ辨マヘズ、此乳味ハナニモノカ、乳味トナリテ、誰レカ我口ヘハ入ルヽゾト知ラズトモ、呑メバ命ヲヤシナフテ、長トナルガ如シ。長ジテ後ハ、ソノ乳味ヒヲヨクコレヲ辨ヘルトキアリテ、聖賢ノ書ヲ讀ムニ、假令バ一世ニ、聖人ノ道ニ入ラズトイヘドモ、コレヲ捨テザルトキハスナワチカナラズ聖道ニ、歸スルコト有ベシ。

一今ノ世ハ、禪者モ、教者モ、古人ノ言ヲツタヘテ、人ニシメスコトハ、即チ違ハザレドモ、偏ニ意味違フユヘニ、言者ハ古人ノ言ニシテ、道スナワチ懸隔セリ。恰カモ貝ノ脊ヲ以テ、コレニ合スルガゴトシ。左リ貝右貝、違ハズトイヘドモ、貝ノ口合ズ、貝ノクチ合ハザルトキハ、モノヲ容ルヽコトアタハズ。諸家ノ師言ト、意味ト、合ハザルトキハ、身道ニ容ルヽコトアタハズ。

澤庵和尚玲瓏隨筆 卷之二

一松杉ノ實ヲ今日ウヘテ、軒端ニ見ント思フハ、五年七年末遠クシテ待チドフキナリ。ソノアイダノ養育實ニ稚子ヲソダツルガゴトシ。然レバ今軒端ニ見ル木ヲ移シ植テ、五年七年ヲ今日ニ引ヨセテ見ルコトハ、大切ナルコトナリ。是ヲ考ヘバイマ軒端ニ見ル木ヲ植ンニハ、イカ程精ヲ盡シテモ、アキタラヌコトナルヲ、アラクモ扱ヒ根ノ土ヲ落シ、枝ヲ折本ヲ動カシナドシテ、頓テ枯ヌレバ、嗚呼枯ヌルヨト云テ、引捨テヌルハ物ノカンガヘナキ心ナリ。我人カクノ如シ。今ウユル松杉ノ實ハ、五七年ノ思ヒヲ積ズハ、軒端ニ見ルコトハナラヌナリ。五七年ノ思ヒヲ積トダニ思ハヾ、一本ノ樹ニ一日ノ勞ヲ盡スホドナラバ大方ツクベキ歟。然ラバ一本ヲ植ンニハ、一日ノ勞ヲ以テツクベキ計ゴトコソ有マホシケレ。

一問フ天道ハ萬古變ナク、造化ノ生ズル所曾テ以テ易ラズ。イニシヘノ松ハ今モ松ナリ。竹ハイマモ竹ナリ。萬物都テカクノゴトシ。聖人何トシテカ復生レザル。答ヘテ云、ソレ聖人氣ノ清明ヲ稟ルコト、純粹ニシテ生知安行ナリ。人ノ氣ヲ稟ルソノ氣清明純粹ナルコトモ、偏ニ古シヘニ在リテ、今ナカルベカラズ。聖人只生レザルコト何ゾヤ。或人曰、古シヘモマタ希ナリ。予曰、イニシヘニハ希レナレドモアリヌベシ。今希レニモマタ無キコトハイカヾゾヤ。天道ハコレ古ト變ズベカラズ、此ノ儀イカン。終ニ答ルコトヲ得ズ。曰、縦ヒ二程、〔割註〕程明道、程頤川。〕出來ルトモ儒家ニヲイテコレヲ明スベカラズ。ソレ道ハ別ナリ。佛氏ニオキテ解シ易シ。予曰、人ノタメニコレヲ說モ、若シ自得

無ケレバ則チ人コレヲ信ゼズ。

一人ミナ己レヲノレノ得タルトコロ一ツアルモノナリ。ソノウル所ヲトリテコレヲモチユルトキハ、則チ人ヲ捨ズ。萬ヅノ物ヲクハシク見ルニ、小分ニシテ大力アルモノアリ。蛭蚊ノ血ヲ吸コト、ソノモノ小ニシテ力最モヲ、イナリ。大力量ノ人身ニ口ヲアテ、如何ニ吸フトモ、血出テガタカルベシ。然ラバ人力量アリトイヱドモ、血ヲ吸フコトハ蛭ノチカラヲカル。物ゴト其德ヲ以テ用ユルトキハ、則チスクラズ。物々一德ナクンバアルベカラズ。辛キ苦キトテ人ノ嫌フ所ナレドモ、蓼ハ辛キヲ以テ能トシ、黃連ハ苦キヲ以テ能トス。ソノ能ヲ用ユルトキハ則チ物弃ラズ。砒礵ハ人ヲ傷ルトイヱドモ人ヲ傷ルヲ以テ能トス。緩藥ノ破リガタキ病アルトキハ、砒礵ノ力ヲソナヘテ以テ傷ルトキハ、則チ病ヒ去ル。サレバ毒ヲ以テ人ヲ活ス事ハ良醫ノ好手ナリ。明主ハ能ク人ヲ知ル。蓋シ人ヲ知ルモノハソノ能ヲ取リテ用ユ。暗主トイヱドモ、明臣ヲ用ルトキハ、則チ主ノ明ナリ。眉斧國ヲ劈破ルトイヱドモ、呉ハヤブラレ。越ニハ補アリ。越始メ斧ニ觸レラル、トイヘドモ、終ニ柯ヲ把ル。呉ヲ破ルモノハ范蠡ガ明ナリ。一斧人ヲ破ルトイヘドモ、我柯ヲ把ルトキハ、則チ人ヲ破ル。人ニ柯ヲ把ラレルトキハ、スナワチ人ニヤブラル。破ルコトハ斧ニアレドモ、破ルトヤブラル、トハ、人ノ謀リゴトニアリ。

一我常ニ思フ、ワレヲ乞食ナリト慥ニ見給フヤウニ身ヲ持タシトスレドモ。トカク人間ガ殘リテ、人ニマギル、事コソウラメシケレ。我本ト乞食ノ跡ヲツグモノナリ。我本師釋迦ハ摩伽陀國ノ王タリシガ、下リテ乞食トナリ。我祖師達磨ハ香至國ノ王子ナレドモ、下リテ乞食トナレリ。袈裟ハ衆生濟度ノ方便ニ、タフトク見ユルモニクカラズ。少シ見タスクル方モアリ。元クサリ色ノ、布ニテ製スルヲ

本トセリ。錦襴ノ衣ハ能仁、〔割註〕私云釋迦ノコト。〕終ニ披シタマハズ。慈尊ニ遺シタマフ、飲光是ヲ抱テ、雞足〔山名〕ノ洞ニ入ヌ。沙門ノ内衣ウツクシクカザリ、前後ヲ見テ出立タル願ノ風情ウラメシ。ヒトヱニ美婦ノ色ヲ衒フニコトナラズ。

一イタツテ硬キモノハ尤ヒユルナリ。氷ハ堅キユヘニ尤モ寒ルナリ。雪コレニ次グ水マタコレニツグ、石硬フシテ尤モ寒ル。金コレニ次グ。木モ至テ堅キハ身ニ添ヘテ尤モ寒ル。柔カナルホドアタヽカナリ。サレバコソ温和ト云ヘリ。絹モ生ニシテ堅キハ肌ニヒユ、練リ和ラグレバ暖カナリ。綿ハ至テ柔カニシテ尤モ温カナリ。絹コレニ次グ。人モ容儀堅確ナルハ、秋ノゴトクニシテ冷ジ。容儀柔カナルハ春ノ如クニシテ温和ナリ。寒温ノ二ツヲナラベ、誰カ温ニツカザラン。人ニシテ人ニ嫌ハレンハウルサシ。人ニシタハレンハ悦バシカラズヤ。慕フモ嫌フモ權威ヲ以テ押サバ、異儀アルベカラズ。權威ノ衰ムトキ、ソノ常ノ心ヲ以テ、人コレヲ見ル。人豈盛ンナル時ト、終リノ衰ヘルトキトヲ思ハザランヤ。

一衣裳ノ表裏ハ公私ナリ。表ヨリ裏勝ツトキハ公ヲ裏ニシテ、私ヲ表トスルガゴトシ。表ヲ十分ニシテ裏ハ六七分ナルガ順ナルベシ。人ノ一生ミナコノ心ナランカ。寢ルトキノ衣ハ華美ニシテ、出仕ニ古ク垢ツケル衣着タラバ禮ニアラジ。表ヨリ裏ノ華美ナルハコレニヲナジ。公ヲ第一ニシテ私ヲ二三ニカマフベシ。貴ク見ヱテ心ノ賤下ナルハ、表ヨリ裏ノ華美ナル衣モ着タル人ナリ。如何ントナレバ財寶多ク持タルト、人ニ見ヱンノ心アリ。實ニ富貴ナル人ハ富貴ト見ヱズ。實ニ才智アル人ハ才智アルト見ヱズ。才智ヲ人ニ見センノ心ハ才智乏シキナリ。故ニ食ニ飽クモノハ食ヲ忘レ、才ニ飽クモノハ才ヲ忘ル。孔子老子ニ見ヱテ禮ヲ問フ、老子ノ曰吾聞良賈ハ深藏ナリ。君子ノ盛德虚シキガ如ク、容

貌足ラサルガゴトシト云ヘリ。良賈ハ財寶アレドモ深ク藏シテ貧屋ノ如キナリ。君子ノ容貌德内ニカクレテ足ラザルガ如クナル貌アリト云ヘリ。或人曰孔子老子ニ禮ヲ問ナリ。道ヲバトワズ。予曰、禮コレ道ニアラズヤ。道ニ逢フノ禮、孔子豈コレヲ行ナワン乎。

一只學ンデ知リタルト、自得トハ雪ト墨ノカハリアリ。故ニ君子深ク入ルニ道ヲ以テス。ソノ自得ヲ得スト欲スルナリト云ヘリ。アル武士ノ家人下部二三人聚リテ云ハク、イザワドノ原ヒモジヒニ一睡セントテミナ寢ニケリ。佛弟子ノ爲メニ法度ヲ定メラレタルヲ律ト云フ。律ニ云ヘリ。食後晝時分ニ一睡セヨトナリ。僧ハ一粥一飯ナリ。一睡スルハ胸滿テヒモジサヲ忘レサセンガタメナリ。我ト身ニ覺エテ知タルコトハ、佛モ祖師モ心相合フモノナリ。此ノ下部ドモ、寢テ胸ノフクレヒモジサ忘ル、コトヲヨク自得セリ。水ノツメタイト云コトヲ習フテ、知ルト云コトハナキモノゾ。口ヘ入ル、ト自得スルゾ。湯ノ溫イナド云ハ如何ヤウナルモノゾト、習フモノハナイゾ。口ニ入ルト即チ自得スルゾ。飢ルト飽クト云フコト習フテ知ルモノハナイゾ。飢來レバ即チ自得スルゾ、飽來レバ自ラ知ルゾ諸道ヲ知ルコト水ノ冷暖、食ノ飢飽ノ如クニ自得スベシ。

一我終ニ寂シキコトヲ知ラズ。問來ル人ノ歸レバアラ閑カナリ。面白ヤト思ヒ、日暮レバ今ハ早問フ人モアラジ。我身ニ成タリ。アラ閑カヤト思フ、雨モ月モ閑カナレバ、我雨我月ヨト思ハル、ナリ。然リトテコノ閑ヲ樂ンデカク閑居スルニハアラズ。少心ニヨルトコロアリテ、カク閑居セリ。若シ閑ヲ樂ンデ山居ヲ好マバ、世ノ人ノ富貴ヲ好ムニヲナジ。蓼ノ辛ミヲ食ム蟲アリ。甘草ノアマキヲコノム蟲アリ。辛キト甘キトハソノ身ニアリ。樂ム所ハヲナジ。富貴鬧熱ト、閑居寂莫トハカワレトモ、樂ム所ハヲナジ。然レバ道ヲ捨テ樂ミヲ取ルハ、佚樂ノ人ニヲナジカルベシ。富貴ヲ好ンデ人ニ諂ラ

ヒ、佛法ヲ賣テ渡世ノ營ミヲシ、佛祖ノ道ヲ泥土ニ墜サンヨリハト思ヒテ、樹下石上ノ栖居セン人ハ樂ミヲ求メ山ニ入ルニハアラジ。

一今ノ世ニ順ガワントスレバ、道ニソムク。道ニ背クマジトスレバ、世ニ順ガハズ。只跡ヲ藏サンニハシカザルナリ。

一奉公ノ人ノ心ガケニモ品アリ。人退ケバシリゾキ、人進メバス丶ム。此レ等ノ人立身スベカラズ。人退クニモシリゾカズ。人進マバ我イヨ〳〵ス丶ム。此ノ人立身スベシ。人ス丶メバ共ニ進ミ、人退ケバトモニシリゾク。功少ナシ。人ス丶マバ我イヨ〳〵心ヲ捨テズ。人ノ退ゾクトキヲ待チ進ム、功多シ。斷ル處ヲ心ニカクル人能キ奉公ノ志ナリ。蹴鞠ノ人ツメヲ詮ニ心ガクルト見ヘタリ。

一美言惡言ト云フコトモナキモノナリ。又思ヘバ美言惡言ト云フコトモアルモノナリト云ヘバ、人如何ト問フ。予曰、時ニ遇フ人ノ言フコトハ、惡言ナレドモコレヲ美トシ、トキニアワザル人ノ言フコトヲバ、美言ヲモ惡トス。然ラバ則チ美言惡言ハナイ。人ニ就クト見エタリ。時ニ遇フトアワザルトハ、富貴ト貧賤トナリ。サレバ人トナリテ物云フトキヲ待ベシ。トキイタリテ云ヘバ、人コレヲ用ヒ、時至ラズシテ云フコトハ、人コレヲ用ヒズ。トキ至ラズシテ言フトキハ、則チ孔孟ノ語ト齊クトモ、人コレヲ用ヒズ。人非人ノ言、アルヒハ五七歳ノ了童ノ言、貧窮孤獨ノ言ナリトモ、美言アラバ聞テ以テ、身ニ就ケテソノ得アリ。貴介公子ノ言ナリトモ、麤語惡言ヲバ心ニ捨テ身ヲ省ミルトキハ、則チ身ニ得アリ。三人行トキハ則チミナ我師ナリ。匹夫匹婦ノ言ヲモ捨テザレバ好キ語、カナラズ我ニ在ルモノナリ。

一烏鳶ノ卵殼ハズシテノチ鳳凰集ル。誹謗ノ罪誅セズシテノチ、良言進ムト云フコト、マコトナルカ

ナ、鳶烏ノ卵ヲソダテヽ、何ニセフゾ、ナレドモ君子ハ物ヲ捨テズ毀タヌガヨイ。惡キヲ弃ザレバ善ガ至ルモノゾ。鳶烏ノ卵サヘステザレバ鳳凰ガアツマルナリ。人ソレ我ヲ誹ル。其ソシリヲ罪スベカラズ。誹謗ノツミヲ誅セザレバ、良言ヲ聽ゾ。モノヽ云ヒソコナイヲトガムレバ、人言ヲ愼シンデ言ザルモノナリ。君子ハ雜人ニムザトシタルコト言ハセテ、ウツケタル顏シテ聞モヨイ。雜人ナレドモ自得ノ心ヨリ出ル、理言ハアルモノナリ。麤言ハ聞テキカズ、美言ハ聞テコレヲ記ストキハ、則チ損無クシテ得アルナリ。

一君子ハ人ヲソシルコト、我臣下トシテ主君ヲカゲニテ、誹罵スルヲバ聞クトモ、キカズ顏シテ、コレヲ誅スベカラズ。誅スレハ損アリ。誅セザレバトクアリ。コレヲ誅スレバ只惡キヤツメ、我ヲ誹謗スルヨト思フ欝憤ヲ達シテ、快ヨシト思フバカリナリ。ソノ謗ル人ヲ失ナヘバ、人一人ノ損ナリ。人言ヲツヽシンデ言ザレバ、則チ良言進マズ。人ヲ誅シテ憤リヲ達ス、ソノ憤リ亡ブ。コレヲ忍ビテイキドフリヲ弃ツレバ、同ジクコレゾノ憤リ亡ブ。コレヲ誅スルト、コレヲ忍ブトハ別ナレドモ、憤リノ亡ブルコトハコレニ同ジ。然レバ人ヲ失シテ良言スヽマザルノ損ト、人ヲウシナハズシテ良言スヽムノ得ハ、誅ト忍ブトニ在リ。君子コレヲ忍べ。

一沙門ノ言行正シキトキハ、則チ權威トテモ恐レ無シ。私ヲ以テ沙門ニ傷ツクルトキハ、則チ我ニ恥無シ。ソノハヂハ權ニ在リ、ソノ罪モ權ニアリ。死スルハ人ノ常ナリ。恐ルヽニ足ラズ。橫難ムカシヨリナキニ非ズ。

一心ニ城郭ヲ構フベシ、心ノ城郭ハ人破リガタシ。石ヲツミ池ヲ掘リ水ヲ貯ハヘ、專ラコレヲ以テ敵ヲ防ガント欲ス。敵モマタ謀ゴトナキニアラズ。石ヲ崩シ地ヲ割キ水ヲ落ストキハ、則チ城郭ハ平野ト

ナル也。恩惠ヲ施シ、國土ヲ撫育スルトキハ、則チ誰アリテカ吾ニ敵ヲナサン。是心ノ城郭ナリ。

一敵ヲバ怖ルベカラズ、身方ヲ怖ルベシ。ハジメヨリ敵ナシ、身方ヲ敵ト爲ル、テキニ恩惠ヲホドコセバ身方ナリ。身カタ恨ヲ含メバ即チテキナリ。恩スクナク、ウラミ多キトキハ、則チ何ンノトコロニカ身方アラン。天下ミナテキナリ。

一性ハ滅スルモノ乎。滅セザルモノ乎。答テ曰、滅セザルモノヂヤ。曰滅セザルモノナラバ、ナゼニ性善トハ云タゾ。譬ヘバ人參ハ人ヲ生ス最モ善ナリ。用ユルコト大ニ過ルトキハ、則チ病ヲ生ズ。コレモチユル人ノ惡キナリ。人參ノアシキニアラズ。砒礵ハ人ヲ殺スモノナリ。然レドモ用ユベキトキニ中テ、モチユレバ則チ病ヒヲ愈ス。コレソノ性ニ隨テ用ユルトキハ、則チ人ヲ生スナリ。物皆ナ性アリ。性ハ善ナリ。孟子曰性ハ善也ト云モコレナリ。善ハ生滅ノ物ヂヤ。ナゼニナレバ善ハ惡ニ對スルモノナリ。善滅シテ惡トナリ、惡メツシテ善トナル。語滅スレバ默シ、默メツスレバ語ナリ。明滅スレバ暗ナリ、暗メツスレバ明ナリ。塞滅スレバ空ナリ。空滅スレバ塞ナリ。何レモ互ニ生滅ス。人ハ元ト性善ニシテ、善ヲ作スニ、今日ヨリ變ジテ惡ヲナストキハ、則チ善メツシテ惡ナリ。人元ト惡ヲ作ス。今日ヨリ變ジテ善ヲ作ストキハ、則チ惡變ジテ善トナル。日暮レバ明滅シテ暗ト成ル。夜明ケヌレバ暗メツシテ明トナル。然ルトキハ則チ善ハ、生滅ノ物ナリ。性ハ生滅無シ。セイメツナキ故ニ性ヲバ善ト云フベカラズ。孟子性善ノ善ハ、コレ善惡双對ノ善ニアラズ。コレヲ無對ノ善ト謂フ。善惡出ル所ヲ云ナリ。善惡ノ體ナリ。性ハ善ナク惡ナキモノナリ。善ナク惡ナク强テ崇尊シテ、コレヲ善ト云フ。モシ人ヲ愛スコレヲ善ト謂ヒ、コレヲ性ト謂ハヾ、性ハコレ人ヲ愛セズ。若シ愛セバ必ズ憎コトアラン。ソレ愛アツテ憎コト無キコトアタワズ。性ニハ愛憎ナシ。愛憎ハコレ外ノ機ナリ、內

ニアラズ。假令ヘバ水ノ如ク、花ニ洒グトキハ榮エ、マタ惡クソヽグトキハ、則チ根ヲ穿チ花枯ル。然ルトキハ則チコレヲ枯スモ水ナリ。コレヲサカヘサスモ亦水ナリ。然リトイヘドモ榮ト枯トハ水ヲソヽグ人ノ手ニ在リ。水ニアラズ、水ハコレ性ナリ。榮枯ノ善惡ハ洒グ人ノ手ナリ。何ゾ手ヲ以テ水ノタメ性ヲ善ナリト云フヤ。人ノ手ニ善惡アレドモ水ニハ善モナク惡モナシ。可モナク不可モナキ處ヲ强テ名ケテ善ト云フ。此善ハ本然ノ善ニシテ、無對ノ善ナリ。善惡ノ機ニ落チザルモノナリ。善トスルコトナク不善トスルコトナシ。不善ヲ離レタル物ナリ。只恐ラクハ諸人コレヲ說テ、コレヲ知ラザランコトヲ也。

一儒云ク虛ニシテ靈、空ニシテ妙、コレ心ヲ說クノ論ナリ。問フ虛ニシテ靈、空ニシテ妙トハコレ何ノコトゾ。答フ即チ心ナリ。問フ、心トハ名ナリ。名ヲ呼ンデ實ト爲スベカラズ。虛ニシテ靈、空ニシテ妙、ソノ實此身ニヲイテ何ノ處ヲ指シテ云フ。ソレ人ノ心、間斷無シ、心々聲色ニ轉ズルモノナリ。聲色ニ轉ゼバ聲色ハ心ナリ。本心ハコレナンゾ、各々ソノ名ヲ云ヒ、ソノ德ヲ說テソノ實ヲ知ラズ。只胡舛生姜ノ味ヒ、ソノ能毒ヨク書ヲ以テ知ルトイヘドモ、終ニ胡舛生姜目ニ見ヌガゴトシ。本草幾品ミナ本草ノ書ヲ讀ミテ、コレヲ知ルトイヘドモ、イマダコヽニ渡ラヌ藥ヲバ人イマダコレヲ見ズ。縱ヒコノ地ニ在リテ朝夕目ニ觸ル草ノ實、木ノ葉ト云フトモ、コレヨト證明セズンバ、心ヲ說クコトヲ知ラズ。人ミナカクノゴトク、心性ヲトク。心性知レタヤウニ人ハ思フナリ。サデハナイゾ。

一性コレヲトクニ空ヲ以テス。空ハコレ性ニアラズ。性ハコレ空ナリ。空ハ性ニアラズ。空ハ性ヲトクノ言ナリ。言ハコレ性ニアラズ、六祖ノ云フ、口ニ終日空ヲ談ジテ、性ヲ見ザレバ、食ヲ談ジテ飽ザ

ルガゴトシ。

一ソレ書ハ古ヘノ善人、君子ノ言行タリ。古人ヲシテ存セシメテ、世ニ今見ルコト能ハズ。故ニ書ニ寫シテ、古人ノ言行ヲ見セシメテ以テ、今人ヲシテ、古人ノ如クナラシメント欲スルナリ。今ノ學者ヲ見ルトキハ、則チ總テ然ラズ。世ニ學者多シ。スベテ古人ノ言行ヲマナバズ。只文字ヲ記誦シテ、以テ渡世ノ營ミトスル而已。儒者ハ儒書ヲ市ル。孔子ハ羞ヲ包ム。佛者ハ佛書ヲ市リ瞿曇ハ耻ヲ忍ブ。今道士ハ種ヲ敗ル。老子坐ヲ免レタリ。神道ハ神書ヲカザリ、歌道ハ歌書ヲ市ル。道世俗ニ落テヒトヘニ工商ノ業ノ如シ。孔子豫カジメ言リ。古ノ學者ハ已ガタメニシ、今ノ學者ハ人ノタメニス。實ニコレ道ハカクノゴトクナラズ。蓋シ身ヲ直クシ、心ヲ淸クシ、仁ニ從リ、義ニ遊ビ、人心ヲ克テ道ノ心ニ復セントスルナリ。此ノ如キトキハ、則チ父母ヲ耻カシメズ。身安クシテ祿亦備リ。名モマタ高シ、孔子又曰君子ハ道ヲ謀リテ食ヲ謀ラズ、耕スヤ餒ソノ中ニ在リ。學ブトキハ祿ソノ中ニ在リ。古語ニ云記誦ノ學ハ、人ノ師タルニ足ラズ、今ノ學者キタナシ。食ヲ謀ラズトモ只身ヲ直シ心ヲ淸フシテ、道ニ叶ハヾ食モ自然ニ備ハルベシ。道ヲ賣テ食ント思フ故ニ耻アリ。却テ餒アリ、其物ニ居テソノ物ヲ食ム。更ニ耻ニアラズ。法ニ居テ法財ヲ食シ、學ニ居テ祿ヲ食ス。何ノ耻アラン。食ヲハカリテ食フモノ耻アリ。ハカラズシテ食フモノ耻無シ。蓼ニ栖ム虫ハ蓼ヲ食ム。蔓ニスム虫ハ蔓ヲ食ム。ソノ物ニ生ズレバソノ物ヲ食ム。食ント期シテハ生ゼズ。人モカクノゴトシ。此儒ニ居テハ儒ニアル財ヲ食シ、釋ニ居テハ釋ニアル財ヲ食ス。更ニ耻ナシ。食ノタメニ謀ルハキタナシ。傍ニ人アリ利口ニ云、學ブ也祿ソノ中ニ在リト、孔子ノ仰ラレタホドニ、學問シテ祿ヲ食ント云ヘリ。サレバコノヲコトノ如キ人アリテ、此ノ章ヲ錯ベキトテ、孔子已ニスヱノ句ニ、君子道ヲ憂ヘテ貧ヲ憂

ヘズト云ヒトメラレタリ。況ヤマタ道ヲ謀リテ食ヲハカラズト云ヒ出セリ。ヲコト何ゾ食ヲハカリテ以テ、孔子ヲ錯マルゾト云ヘバ。サレバコソ我君子ナラネバト云フテ笑ヒキ。

一薪ハ下賤ノ手ニ拾フモノナリ、道ハ君子ノ學ニ有ルモノナリ。シカレバ貴賤各別ニシテソノモノモマタ別ナリ。薪ハイヤシウシテ道ハタツトシ。然レドモソノ賣ニ至リテ我ハ薪ヲ賣ン。イカンゾナレバ賣モノハコレ薪ナリ。道ニアラザルナリ。故ニ我ハソノ賣物ヲウル。ソノウラザルモノヲ賣ラズ。ソノ賣モノヲウルハ淨シ。ソノ賣ザル物ヲウルハ穢ル。更ニ君子買トキハ、則チ道トイヱドモ我賣ン。只君子ハ買ズシテ買トキハ、則チ我賣ズシテ賣ン。孔子モマタノ玉ハク、沽ンヤ沽ンヤ。

一短才トハヨク言ヘリ、一章二章三篇四篇ツンデ卷トス。重テ部トス是人ノ才也。佛ハ五千卷ニ說ケドモ理盡ズ。棟ニ充牛ニ汗サスレドモ理ツクルトキナシ。理明ナレバ言伸。理クラケレバ言屈ス。今ノ世誰カ一篇ノ書ヲ著ス。古文イマ學ビズ。古風長篇ノ詩下リテ八句ニテ、詩下リテ絕句、絕句往々ニ題シガタク、日本樣ノ聯句トテ五言一句ヲ製ス。才ノ短キニアラズヤ。本邦ニモ古ハ述作多シ。女ノ才ニダモ伊勢物語、式部ガ双紙、サマ〴〵和言ナリトイヘドモ、貫之ガ古今ノ序ハ、マヅ山谷ガ序ニソノ格、ヲナジト云ヘリ。和漢トモニ達人ノ才覺ハコレヲナジ。今ノ世ニハ百紙ニ足ラザル物ガタリ。一帖モ書キ出スベキ才ハ多クアルベカラズ。代々ノ集ノ假名序ナド見ルニモ、今ノ世ニハカヽルベキトモ覺ヘズ。カリソメノ歌ノ詞書ナドモ、ノビラカニ幽艶ナルコトハ希ナリ。萬ノ理胸ニナケレバ、言ニ出ヌモノト見ヘタリ。双紙ノ筆トルコトナク、長歌短歌ノ云述タルコト、カキ出スコトナシ。ミナ文短カニナリテ、歌道者ト云ヘバ、三十一字ニキワマリ、アマツサヘ一首ノ歌ヲ分テ、二人シテコレヲ作リ、連ネテコレヲ翫ブ。マコトニ才短カクナレリ。今連歌ニ長ゼル人ハ、ウタハ讀ズ。コレ

長キ物ハ、ミジカキ用ヲタスクレドモ、短キモノハ、ナガキ用ヲナサヌシルシナリ。實ニ尺ハ寸ノ用ニナレドモ、寸ハ尺ノ用ヲナサズ。歌ノ六義モト詩ヨリ起レリ。詩ハ志ノユク所、各ソノコヽロザシテ述テ、物ニ感ジテ心ノウゴクナリ。サレバ三十一字ヲ連テ、人ノヨムノミ歌ニアラズ。花ニ啼ク鶯、水ニ住ム蛙ノ聲モ、ミナウタナリトハ、志シヲノベコヽロノ動クトコロヲ云ヘルニヤ。末ノ代ニハ法ニ溺レ、法式ニ縛ラレ、ミナコヽロザシヲウシナヒ、料略シテ以テ、道トスルモノナリ。吁。

〔割註〕吁ハ疑ヒアヤシムノコトバ、又歎ナリ。」

一木規ヲ作テ鬻グモノハ心曲レリ。木酌ヲ作テ賣モノハ又心直キナリ。草鞋織テ自ラ給スルモノニモ、心ノ淨ラカナルモノアリ。賤シムベカラズ。詩歌管絃ノ座ニツラナル客モ、心穢レタルアリ。

一予京ニヲモムキ淀ノ堤ノコナタニ乘物スヘ人力休息ス。ソコノ小家豆腐ヲ業トス。彼ガ人ト語ルヲ乘モノヽ内ニテ聞ク。彼ガ言ニ云ク、ナニゴトモ先世ノ因果ト候フモノヲ、身ノ悲キ時ハ人ノトガノヤウニミナ申ス。我コソ知ラネ。ミナ我ガナシヲクコトガ身ニ來ルデ候フモノヲト云フヲキヽテ、乘物ノ内ニテ獨リ感ジヌ。今ノ世ニタヾシキ沙門タルモノ因果ヲシラズ。古ニハイングハ撥無ノ僧トテシカリヌルコトナリ。因果ヲ撥無シ、眞風地ニ墮ント大燈國師モ仰ラレシ。古ヘハ貴僧高僧多クマシ〳〵テ、處々ニテ衆生ニ因果ノ理ヲ敎ヘケルニヤ。耳ニフレテ末世マデ、賤ノ男シヅノ女ニイタルマデ、イングハトハ如何ナルユヘト云フコトハ、正シク知ラザレドモ、敎ノゴトク信ジテカク云フハ古ノ高僧ノ力ナリ。今敎化スベキ僧トシテ因果ヲ知ラズ。如何ゾ人ニ敎ユベケンヤ。因果ト云フハ因ハ過去ニアリ、果ハ現在ニアリ。今此現在ニ善惡ノ果アリ。或ハ五雲天上ニ生ジ、眼ニハ花鳥風月。耳ニハ糸竹音雅ヲ聞キ、鼻ニハ衆香ヲキヽ。舌ニ衆味ヲ調シテ、身ニ綾羅錦綉ヲマトヒ、意萬事ニツキテ思

フ儘ニシテ、下界ノ土ヲフマズ。翅ナクシテ鳥道ヲ行キ、六根ノ樂ヲ受ケ、アルイハ又、大臣官人高家ノ氏族ニ生レ、權威恣ナリ。ソノ外貴人公子富家ニ生レ、處ヲ得テイミジキ振舞ヲス。又貧窮孤獨ニシテ、朝夕ヲ營ミガタク。飢ニ臨テ則チ人ノモノヲ押シ取リ、ソノ罪ニヨツテ禁獄セラレ、我ト我身ヲ傷リ、アラヌ惡事ヲナス。ソノ罪無量ナリ。カヽル善惡ハミナ過去ノ因ニヨリ、今現在ニソノ果ヲ得ルナリ。因ナクシテ果ヲ見ルト云フコトナシ。今日ノ上ニテモ因ナフシテ、果アルト云フコトハナシ。果アルハミナ先ノ因ニヨルナリ。風寒ニアタリ、喜怒ニヨリ、寒熱往來、頭痛背痛ノヤマヒ氣虛耗散ノ病アルハ、風寒喜怒ヲ病因ト云フ。頭痛背痛等コレヲ病果ト云フ。病因無クシテ病ト云フコトアルベカラズ。一切今日ノ態、萬タンミナ因ニヨリ、果ヲアラハスコトナリ。春種ヲ蒔ハ因ナリ秋ノ實ノルハ果ナリ。菓ナリ。今日ノ我人ノ善惡ハミナ、過去ノ因ニヨルコトナリ。若シ信ゼズバ佛經祖錄ヲ見ヨ。

一駄馬ニノリテ道ユク人、油斷シテ落ナバ、重クバ當座ニモ死スベシ。足ヲ折リ手ヲヽリテ不具ニモナルベシ。或ハ五年三年後マデ腦ムコト世ニ多シ。慮カリナキトキハ則チ憂ヒアリトハカヽルコトナリ。朝ニ宿ヲ出テ午時ニ下リマタ乘リ、夕ニ宿ニ着ヲルヽナレバ半日ヅヽノ氣ヅカヒナリ。半日ノアイダヲ氣ヅカヒナク樂マントテ、當座ニ死シ若シ不具ニモナリ、五年三年ノ苦ミヲセンハ却テソンナリ。コレヲ思ハヾ乘リテヨリヲルヽ迄ハ、馬ノ外ニ心ヲヤルベカラズ。敬ノ一字ニモアタルベシ。主一無適ヲ思フベシ。

一毒物ヲ食シ病ヲ引出スモ口惜シ。味ヒニ耽リ病ヒキイダス人數多アリ。愚痴ノ甚シキニアラザレバ狂ナリ。ソレ飲食ハ色身ノ枯レ衰ヲウルホシ、養育ヒ世ニ長生テ、己レ〳〵道ニスヽミ、立身行道シテ

素望ヲ遂ンタメノ藥ナレバ、過不及ナクホドヨク飲食シテコソ藥ナレ。過レバ毒トナリテツイニ色身ヲ害ス。コレラノコト、ヨク心得アル醫手ニモ、飲食ヨリ病因ヲ生ジ、ツヒニ夭死シテ不忠不孝ノ人トナルアリ。人々ヨク嗜ベキコトナリ。

一士ハ忠心ヲツクシテ、恩祿ヲ得テ家富ルハヨシ。空シク義ナフシテ、富ルハ耻ナリ。

一財寶ニ富ル人ハ不仁ノ人ナリ。蓋シ仁ハ博ク愛スルノ理ナリ。コノ理ノ字ハ義理道理ニアラズ。本ヲ云仁ハ本ナリ。博愛ハ端ナリ。已ニ博愛ト云フトキハ愛ニ外ナシ。粟アルトキハ、則チ近クハ鄰里鄕黨ニ與フ。ヒロク世ヲ見ルニ救フベキ貧兒ヲヽシ。財餘スベカラズ。若シアマリアリト謂ハヾ、施コサヾルナリ。ホドコサズシテ家富ムヲバ、コレヲ仁ト謂ハズ。陽虎イハク富ヲ爲セバ仁ナラズ、仁ヲスレバ富ズト云ヘリ。

一天下ヲ知ルホドノ大ナル富ハナシ。然レドモ天下ヲ知ル富ハ、天下ノ富ヲ以テ富トス。已レ財寶ヲツンデ富トセズ、已レ自ラ財寶ヲツンデ富ハ、小人ノ富ナリ。小人ノ富ハ不義ナリ。浮ベル雲ノゴトシ無欲ハ人ノ褒ル所ナリ。有欲ハ人ノ惡ムトコロナリ。然レドモ道アラバ可ナリ。道ナクンバ無欲モ奇特ナラズ。七寶トテ佛モ譽玉フナリ。犬馬ハ七寶ヲ踏デ石瓦ノ如クス。然リトテ有欲ニ似タレドモ、佛ヲ卑シトセズ、無ヨクニ似タレドモ犬馬ヲ尊シトセズ。有ヨク無ヨクトモニ義ヲ存ズベシ。ムヨクニシテ義アルトキハ、則チ彌好シ。寶ヲタカラト知リ、施スベキニアタツテ、コレヲホドコシ、捨ベキニアタツテコレヲステ、コレヲ取ニ當テ取故ニ君子ハ財ヲ愛ス。コレヲ取ニ道アリト云々。我ニ人物ヲ給ルニ我フカクコレヲ傷ム。タマハルモノハ多クコレ名聞ノ財ナリ。我ニ相應ノ德アリ。德ニヨルトキハ則チ可ナリ。名聞ノ財ハ德ヲ損フ。我ニ相應ノ德アリトハ、我沙門トシテ聊カ先師ノ道ヲ

傳ヱ。一則ノ因緣ヲ擧テ、利生ノ道ヲ立ツ。我門ニ入ン人、心地ノアキラカナラザルコトヲ歎キ。一則ノ因緣ヲ參得シ、過現未ヲ明ラメ、生ル、所ヲ知リ、此度ビ無爲ニ入ンコトヲ喜ビ、現世ノ快樂ヲ思ハズシテ、偏ニ寂靜ヲ樂シム。コレ一則參得ノ得ナリ。此恩ヲ知ル者ハ佛ヲタツトビ、祖師ヲ重ンズ。此宗ニコヽロザシ深キハ、我ニ財ヲ呈セズトモ、佛祖ノ報恩ヲ知ル人ナリ。コレ我ヨロコブ所ナリ。財ハ我ヱキナシ、又コヽロザシ誠ナラバ、一把ノ野菜ナリトモ、我タメニ誠ヲ呈スト思ハヾ、我金玉ヨリモ重クセン。コヽロザシマコトナラザルトキハ、則チ金玉トイヱドモ一毛ノゴトシ。金玉我ニヲイテ用ナシ。食ハ朝ニ一粥、暮ニ一粥ニテ足コトヲ知ル。衣ハ紙ノ被マ綿衣ナリ。住處ハソノ居一疊ニ過ズ。衣食住ノ三ツニ煩ヒ無ケレバ、金銀サラニ用ナシ。金銀自然ニアラズ。堂塔營ムベク貧窮惠ムベシ。强テモトメヱテコレヲ爲ルニ足ラズ。

一道ハ說ク人ハアレドモ、コレヲ知ル人ハ鮮ナシ。コレヲ知ル人ハコレアリ。コレヲ行フ人ハスクナシ。說コトヲ得ズトモ、コレヲ知ルハ說ニ勝レリ。コレヲ知ルコトヲ得ザレドモ、自ラコレヲ行フハコレヲ知ルニ勝レリ。說ハコレヲ知ランガタメ、知ルハコレヲ行フガタメナレバ、コレヲ說テ知ラザランハ、說ザルガ如シ。コレヲ知リテ行ハザルハ、知ラザルガゴトシ。或人ノ曰、說ハ人ノタメニ好シ。コレヲ知ルト、コレヲ行フトハ、己レガタメナリ。予ガ曰コレヲ說人、コレヲ說テ知ラザレバ、コレヲ聞人、聞テ知ラズ。コレヲ知ル人、コレヲ知リテ行ハザレバ、人モ亦コレヲ知リテ、行ハズ。說モ、聞モ、二ツトモニ利ナシ。或人又曰縱ヒ說テ知ラズ、知リテ行ハザルモ、說ズ知ラザルニハ勝ラン乎。此ノ言人ヲ弃テズ、尤モ可ナリ。又此ニ一儀アリ。コレヲ說テ知ラズ。コレヲ知リテ行ハザルハ、コレヲ說ト、コレヲ知ルトノ咎、及ビ行ハザルノ咎アリ。說ズ知ズ行ハザル人

ハ、知ラザルニ依テ說ズ、說カザルニ依テ知ラズ、知ラザルニ依テ行ハズ、是タヾ咎無シ。一切ノ事知ラズシテ爲ザル者ハ、只其人ノタメニ、ソノ事ヲ知ラザルノ咎アレドモ、コレヲナサヾル咎無シ。マタ曰、コレヲ說テ、コレヲ知ラズ、コレヲ知リテ行ハザル心底ノ人ノ說ヲ聞テ、ヨク道ヲ得テコレヲ知リ、コレヲ知リテ、コレヲ行フ者、コレアルトキハ、則チソノ身、人ヲ得ルコト無シトイヱドモ、補ケアラン者乎。氷ハ水ヨリ出テ水ヨリモ寒ク。靑ハ藍ヨリ出テ藍ヨリモ靑シト云ヘリ。コレヲ說テ知ラズトイヘドモ、カナラズコレヲ聞テ、コレヲ知ルモノアラン乎。

一南都ノ宗二ハ儒者ナリ。林和靖ガ後ナリト云々。宗二ガイハク貧ニハ成ガタキモノナリ。貧ニナル人ハ奇特ナリト云。此詞バマタ奇ドクナリ、サレバ古人有道ノ人ハ貧シキ聞ヘ多シ。范蠡ガ五湖ニ入リ富ルハ、キズナリト書シコトアリ。欲アル人ハ多ク、無ヨクノ人ハスクナシ。貧ニナルコトハ無欲ヨリ出ル程ニ、貧ニナルハ奇特ナリ。又色ヲ好ミ佚遊ヲ事トシテ、親ノ讓リシ財ヲ守ラズ、貧ニナルモノアリ。カク有ンヨリハ奢ラズシテ富ムハヨシトモ云ンカ。

一世ノ華美ニナルホド、人ノ心ノ比興サゾ彌マサリヌル。外ノ飾淸ケレバ内汚ル。外淨ク内穢ルトハ、カヽルコトニヤ。内淨ク外ケガルトイヘルハ、内心淸淨ノ人ハサマデ、ホカヲカザラント思フ心ハナシ。今ノ世ニハソノ分際ヨリ、萬人花飾ノヲゴリニ財タラズ、財タラザルユヘニ、富ル士ノ門ヲ窺フナンゾ家ノ豐儉ニシタガイ、心ヲキヨクセザルゾヤ。

一老人ニ杖ヲユルサルヽコトハ、三國トモニアルト見ヘタリ。禮記内則十二ニ云、五十ハ家ニ杖ツキ、六十ハ鄕ニ杖ツキ、七十ハ國ニ杖ツキ、八十ハ朝ニ杖ツク、九十ニハ天子コレニ問フコトアラント欲スルトキハ、則チソノ室ニ就キ、珍ヲ以テ從フト云々。人五十カラハヤ衰老スルホドニ、杖ヲユル

サル、九十ニナレバ天子ノ問セラレタキコトガアレバ、ソノ老者ノ家ニ行キテ問ヒタマフトナリ。日本ニテモ賀ノトキ杖ヲ賜フトカ。

一禪家ニ主丈ヲ取ルコレ杖ナリ。靈山路嶮シ。佛ユルシテ老者ニツカスルナリ。律ニ云フ佛、蓄杖ヲ聽ト云々。又云フ主丈ヲユルスニ二ツノ因緣アリ。一ニハ老瘦チカラ無キガ爲メ、二ツニハ病苦嬰身ノタメト云々。杖ツケトマヽニハ佛ノユルシ賜ルコト、又天子ノユルシタマハルコト、マタ賀ノコト、マタ劉向ト云フモノニ藜ノ杖ヲ異人ガヤリタゾ。コレヨリ夜ハ燈ノ光リ出テ、此ノ燈ニテ書ヲヨミタル故事モアルナリ。杖ニ燈ビ、又燈ニ杖モツクベキ乎。故ニ鳩ナド付ベキ歟。鳩ノ杖ト云フコトアリ。老人ハ咽セバクナリテ、食ツマルナリ、鳩ハ咽ノ穴ヒロキモノナレバ、杖ノ頭ニ鳩ヲ作リテツケルナリ。藤ナドモ杖ニスルナリ。主丈ヲ烏藤ト云フ、烏ハクロキト云フ心ナリ。主丈ハ黑キモノナリ。連歌ノ付合ヲ思ヒ出テナリ。

一靈鷲山ト云フハ、此ノ山ノ形チ鷲ノ頭ニ似タルユヘニ、鷲ノ峰トモ、又鷲ノ山トモ云ヘリ。鷲ノ臺トモアリ。佛ノ居タマフトコロナリ。鶴林樹下ニテ、佛ハ入滅アリタルナリ。鶴林ト云フハ所ノ名ナリ。

いにしへの鶴の林の春はあれど世にかめ山の秋ぞかなしき

ト、龜山院崩御ノトキ讀タル歌ナリ。適作者ヲ忘ル。佛サヘ鶴林ノ入滅ハアルモノヲトハ思ヘドモ、龜山ノ秋ハ悲シキナリ。カヨウニ歌ニモ對シタウタガアルナリ。是ヤ此ノ行モ歸ルモ別レテハト云フニ、知ルモ知ラヌモ逢坂ノ關ト、對シタ歌ナリ。連歌ニモ聯句付ト云フコトアリト聞ユ。桃園ノ桃ノ花コソ盛ナレト云句ニ、梅津ノムメモ今ヤ咲ラント付タルナリ。

一庭ノ櫻ニ雀二ツトマル。上ナル雀シヤクシヤクト啼ヌレバ、下ナル雀チヽト云テ飛退キヌ、ソノ跡ヘ上ナルスヾメヲリ居テ、蜘ヲ取リテ食フ。上ヨリシヤクシヤクト鳴タルトテ、下ナルスヾメノイタミニモ成ベキト覺ヘザレドモ、彼レソノ旨ヲ得テ退キヌ。心ヲ付テミレバカレ風情ニモ、道アルコトヲ知レリ。智者ノ教化ニ隨フモノハ、智者ト心ノ通ズルユヘナリ。ソノ機ニアタラザルモノヲ、强テセムルトモ心ニ通ゼズ。道ハ彼レ同心アリガタキモノト見ユル。佛法ノ教化モソノ機ニシタゴフコト詮ナルベシ。雀ハスヾメノ心ヲ會スルガユヘニ、彼レソノ心ニ隨フ。犬ハイヌノ心ヲ會スルユヘニ、彼レソノ心ニ隨フ。ソノ道ニ入ザル者ヲ、我心ニアワセテセムルハ拙ナシ。

一我身人ニウラヤマレント思ハヾ、先ヅ佛神ヲウヤマフベシ。佛神ハ人ノ上ニアルモノナリ。我上ヲウヤマヘバ、下マタ我ヲウヤマウ。我上ヲケイセズンバ、何トシテ下我ヲケイセンヤ。君ト臣ト皆人タレドモ、上ニ在ルヲ以テ敬フトキハ、則チ下ニアルモノ又我ヲウヤマフ。我上ヲ敬セズシテ、誰カ我ヲ敬セン乎。

一天命ハ一盞ノ燈油ノゴトシ。誰モ見テタレモコレヲ知ラズ。人ノ身ハ器ナリ。油ヲ受ル盞ノゴトシ。アブラ盡レバ火滅ス。アブラハ天命ノゴトシ。天命ツクルトキハ人死ス。

一念ノ物ヲ止メルコト古來此ノ如シ、南都ニコノ頃人アリ。罪ニ逢テ籠舍セシコト巳ニ三年ニ及ブ。漸クシテ罪ヲノガレヌ。ソノ妻獄門ヘ行テ今日罪ノガレヌ。後ニ獄ノ門ヒラカルベシ。滿足セヨト云。夫此言ヲ聞テ吁ト云テ即死ス。女殘念ニ思ヒ泣ドモカヘラズ、是非一度罪免レントヲモフ念此ノ男ヲ三年トヾメケルナリ。罪マヌカレヌト聞テ念、ヨハクナリテソノ儘死ス。生死ノ大事コヽニ在リ。灰袋ノ小兒ヲ留メル事、今ニコレヲ見ル。

一 小惡ヲナシテモ天理ヲ恐ルベシ、ソノ一小惡身ヲホロボスコトアルマジト思フハ誤リナリ。勿論ソノ一小惡ハ即日忽チニ身ヲ亡スコトハナケレドモ、ソノ心萬事ニ渉ルユヘ、小ヲ積デ大トナル。時至ルトキハ則チカナラズ身ヲホロボス。筑波山ノ峰ノ雫落添テ、ミナノ川ノ名ニ立チ、吉野ノ峰ノ木々ノ雫ヲチソイテ、竹田ノ川淀ニハ舟トヾムルタメシモアリ。雲ヨリ落チル瀧波モ、岩ニツタヒノボリテ水上ヲ見レバ、纔ノ谷川ナリ。谷川ヲ上リテ又ソノ水上ヲ尋ヌレバ、爰ノ岩ノ根、カシコノ苔ノ露、アツマリテ谷川トナリ、谷川自ラ嶮崕ヨリヲチテ瀧トナル。コヽヲ以テ人恐ルベシ。一小惡ト云フトモヲソレズシテ、コレヲ作トキハ、則チ積トコロ、カナラズ身ヲ亡スコト、必然タルベシ。

一 熟出家ノ僞リ多ク眞スクナキヲ視ルニ、ソノ本三ツナリ。一ニ衣、二ツニ食、三ツニ住ナリ。衣ハ輕キヲ著温カニシテ外人ノ目ヲ照サンコトヲ思ヒ、食ハ味ヒヲ厚フシテ美食足リテ飽ンコトヲ思ヒ、住所ハ廣ク安カランコトヲ求ム。スベテ此ノ三ツニ依テ僞リ多クシテ、世ニ諂フハ何ゴトゾヤ。衣ハ寒ヲ禦グヲ以テ理トス。食ハ飽充ルヲ以テ理トス。住ハ一身ヲ容ルヲ以テ理トス。コロモカロクサワヤカナルヲ求メ、食ハ旨ク厚キヲモトメ、住所ハヒロクヤスカランコトヲ求ムルガユヘニ、ミナソノ言行トモニ僞リ多クシテ、實スクナシ。食ハ命ヲ繼ヲ以テ理トシ、衣ハ寒ヲフセグヲ以テ理トシ、住所ハ一身ヲイルヽヲ以テ理トス。ナンゾカロキヲモトメ、厚キヲモトメ、安キヲ求メン乎。

一 人ノ口ニヨロシキモノハ、我口ニモヨロシ。人ノクチニヨロシカラザルモノハ、我クチニモヨロシカラズ。獨リ美食厚味ヲ惡ミ、疎食淡味ヲコノムニアラズ。唯コレ我心ヲ恣ニスルト、ホシヒマヽニセザルトナリ。沙門ハ卯(トキ)粥、辰(トキ)飯、此ノ外ニ食フヲバ、佛コレヲ畜生食ト罵リ給ヘリ。マシテ美食厚味ヲコノムコトハ放逸ナリ。放逸ナルトキハ愧アリ。愧ヲ知ラザルトキハ、則チ人ニアラ

ズ。禽獸ノゴトキ乎。ソレ出家ハ、士農工商ノホカニ居テサダマレル粮ナシ。朝城中ニ入テ托鉢シテ食フ。專ラ佛法ヲ修行ス。何ノ餘リアツテカ美食ヲアツメテ、活計ヲ事トセンヤ。

一沙門トシテ人ニ諂ヒ、財ヲ貪リテ食ヲ美ニシ、衣ヲカロクスルハ愧ナリ。愧ヲ換テ以テ身ヲ樂マシムルモノハ拙シ。已レガ身ヲ辱シムルハ自ラ作、ヲノヅカラ受ルナレド、佛ヲ愧シメ、祖ヲ辱カシメ、法ヲハヅカシムルハ、佛祖ノ恩ヲ知ラザルモノナリ。恩ヲ知ラザルモノハ、猶禽獸ノゴトシ。

一心聾ト云フコトアリ。心聾トハ心ノ耳ツブレト云フ文字ナリ。鈍ナルモノハ耳ノ遠ヒヤウナリ。人ノ云フコトヲチヤクトハ聞得ズ。サラバ耳ガ遠キカト思ヘバ、耳ハ遠カラズ。心ガ鈍キ故ニ、耳ニ入ナガラ、心ニ合點スル處遲キニヨリテ、耳ノ遠キヤウニアルモノナリ。マサシク耳ニハ入レドモ、心ニ得ザルナリ。心聾トコレヲ云フナリ。

○五味

一清酒ノ甘味ナルモ、又酸味ナルモ、コレヲ飲トキハ、則チ久シク醉フト覺ユ。辛ク甚シキハ火急ニ醉フト云ヘドモ、早クサメテヨシ。サレバヨキモノハ輕シ。次ナルモノハシダルク、モタレタル心何ニモアリ。宜モ甘キハ緩ニシテトヾコホル。酸ハ澁飲ス。何レトモ脾胃ニ留滯シテ散ゼズ。久シク醉ノ儀アキラカナリ。辛ハ散ズ。酷ダ醉トイヘドモ散ジテ、トヾコホラズ。故ニキビシク醉ヒ速カニ醒テ跡無キガゴトシ。コヽヲ以テ人ヲ見ルモ亦カクノゴトシ。酸キ甘キ人ハヤワ〳〵トシテ意趣アリ。則チ終ニコレヲ果サズ。辛キ人ハ、當ルコトキビシク、楯モタマラヌヤウニアレドモ、言フベキコトヲバ、ハキト云フテ、根無キ草ノゴトシ。ソノ跡ナシ。但衆味ヲステズ取ルニ宜シキトコロアルベシ。

一壺ノ酒ヲ釀シテ五味相生ズルノ理ヲ知ル。マヅ酒ヲ釀スルソノハジメソノ色黃ナリ。ソノ味ハヒ甘

シ。コレ土ナリ。次ニソノ色清クシテ白シ、ソノ味ヒ辛シ。コレ金ナリ。土金ヲ生ズルノ理ナリ。次ニソノ色黒シ。ソノ味ヒ鹹ユシ。コレ水ナリ。金水ヲ生ズルノ理ナリ。コノ次酒ノ性漸ク降リソノ色靑ク、ソノ味酸シ。コレ木ナリ。水木ヲ生ズルノ理ナリ。次ニ酒ノ性彌降沈シテ、損シテソノ色赤ク、ソノ味ヒ苦シ。コレ火ナリ。木火ヲ生ズルノ道理ナリ。然レバ酒ノ德ハ土金ニ盛ニシテ、水中分ニシテ、木火ニ衰フ。サレバ專ラ辛キハ偏ヘニシテ和無ク、專ラ甘キモ緩帶ニシテ强キトコロ無クタヾ能辛ク、ヨク甘フシテ酒ナリ。人モ五味ヲ兼タル人稀ナリ。辛カラザルトキハ、則チ甘ク、アマカラザルトキハ、則チ偏ヘニ辛シ。

一罌粟ノ花ノ千葉ニシテ赤キハ、ソノ實必ズシモ少クシテ薄シ。コレソノ精ヲ花ニ過スユヘナリ。花一重ニシテ白キハ實カナラズシモ豐大ナリ。德ノ俄ニ輝クモノ頓テ盡クル。人ハ德ヲ惜ムベシ。コレヲ放ニスベカラズ。假令ヘバ大豆ヲ十粒算フルニ、一粒ヲ以テカゾフルトキハ則チ久シ。二ツヲ以テカゾヱ、三ツヲ以テカゾフルトキハ、則チヤガテ算ヱ了ル。又一壺ノ水モ、小杓ヲ以テ酌トキハ則チ久シ。大杓ヲ以テクムトキハ、則チ頓テ盡クル。草木ノ枝左小ナルトキハ、則チ右大ナリ。右長キトキハ則チ左短シ。カテラズ短小ノ理顯然タリ。牛鹿ニ角アリ、ユヘニ上ノ齒無シ。

一紙ヲ徒ラニ費ス童男アリ。コレヲ戒テ曰ク往古紙ナシ。片竹ヲ編テ以テ書ヲ爲ス。故ニ書ヲ編ト云ヘリ。後漢和帝ノトキ、蔡倫字ハ敬仲、始メテ樹膚及敝布ヲモチヒテコレヲ爲ル。今ノツクル所ノモノハ楮皮ナリ。先ソノ楮ヲ植ヱ培養シテ、時至リテコレヲ剪リ皮ヲ剝ギ、水ニ漬シ麤皮ヲ去リ、擣爛シ水ニ洒シ、粘滑ノモノヲ熟和シテ、ノチソノ紙ヲ製スル、簾ノ長短ノ量ニ應ジテ紙トナシテ已後、一紙々々悉ク板ノ面ニ張リ、コレヲ乾カシ、乾キテノチ剝取テ、五十枚ヲ以テ帖々トシコレヲ切リ、

一帖ヲ重ネテ一束トシ、以テ功ヲ終ル。一紙輕シトイヱドモ、此ノ勞ヲ思フトキハ則チ重シ。輕ンズベカラズ。人ノ勞ヲ知ルトキハ則チ人ノタメニアラズ。我身ヲ補ルニアリ。

一垂示シテ云フ法性ノ義モ用ヒズ。時節因緣モマタ觀ゼズ、坐禪學道ハ平常ノ心ヲウシノフ。長連床上ニ久座シテ窮屈ヲ作ス畢竟イカン會得シ去ル。代テ云フイロハニホヘト。虛無。

一衣食住居ニ結構ヲツクス世ナラバ、世間ツカルベシ。イカニトナレバ、金銀足テ結構スル人ハ百人ニ五人アルベカラズ。百人ニ五人ハアルベシト思ヘドモ、千人ニ五十人、萬人ニ五百人ナリ。然レバ萬人アツテソノ中ニ五百人金銀足ル人、コレアルベカラズ。百人ニ一人アルトキハ、則チ萬人ニ百人アルナリ。福人ノ結構ヲ盡スハサモアルベシ。ソレ猶オゴリトテ、大和唐モキロフタルコトナリ。萬人ノ中百人ハ餘リアリテスルケツコウナリ。九千九百人ハ福人ニナラウテ、及バザル事ヲスルユヘニ、世間ノ心疲ル。ソノ金銀足タル百人ノ方ヲ押ヱテ、奢リヲ止サセタラバ、自ラ萬人トモニ奢リガ止ンデ、世ハ安カルベシ。世間ノツカレ、人ノ惡心ニナリ、屋燒人殺シヲスルモ、ソノ本ヲ尋ヌレバ侈リニ、コトタラザルヨリ起ルモノナリ。

一夫レ天下ヲ領スル者、珍奇異物ヲ我有トナシ、高爵ニ進ムモノハ非ナリ。チンキイブツハ散ジテ天下ノモノニ與フベシ。高爵ハ辭シテ進ムベカラズ、ソノ故如何ントナレバ、天下ヲ領スル者。天下ハミナ我倉庫ノウチナリ。矧ンヤマタチン器イ物トイヱドモ、求メガタキニアラズ。求メヤスキヲ以テ寶ラトセバ、理當然ダルニアラズ。モシソノ所用ニアタルトキハ、則チ天下ミナ我倉庫ノ中ナリ。豈コレヲ用ヒガタカランヤ。又天下ヲ領スルトキハ、則チ權威ヲ以テ官爵スルハ、進ミガタキニアラズ。ス、ミヤスキヲ以テ、進ムモノハ奇特ニアラズ。布衣ニシテ天下ヲ安ンズ。コレ難ヒ哉。

一諸道ニ始中終ノ三アリ。始終ノ二ツノ中ヲ得テ、諸道ノ終リトス。終ハ終リニアラズ、始ト終トハ偏ナリ。マタ始ト終ト相似タリトイヱドモ、似テ似ザルトコロアリ。二歳三歳ノ者ハ、心ハ八九十ノ人ト、アイ似タリトイヱドモ、中年ノ才覺ヲ盡シテ、立歸リテ少年ノ心ニヒトシ。相似テ似ザルトコロアリ。少壯ノ中ヲ得テ老年穩便ナリ。

〇富人非二達者一　塵坑之譬辨

一諸家ノ學、始メハミナ名利渡世ノタメトヲモヒテ、志スモノナリ。ヨク道ヲ明ラムレバ、イヅレモ名利渡世ニアラズ。ソノユヘニ諸家ノ達者、ミナ財寶ニ富ルハナシ。諸家ニヲイテ何レナリトモ、ソノ家ノ達者トイハレテ富アラバ、道ハ達セヌト知ルベシ。陽虎ガ曰ク仁者ハ富ズ。富ヲスレバ仁ナラズ。道ヲ學ンデ立身スベキトヲモウベシ。富人トナルベシト思フベカラズ。立身ハ我心ノ私曲ヲウシナウテ、公直トナシ、汚穢ヲノゾキテ、清淨ニナシヌレバ、名ヲ求メント思フ心ハナケレドモ、名世間ニキコヘ、立身スベシトヲモハネドモ、身ヲノヅカラ立ツ。コレ學者ノチカラナリ。富ヲ願フ人ハ、我本來ノコヽロハ公直ナルヲ、曲テ私ヲナシ、我本來ノ心ハモト清淨ナルヲ、不淨トナシタルユヘニ、有錢ノ家トハナルベシ。塵坑ヲ掘ニ、ハジメハナニモナク淨地ナレドモ、ノチハイツトナク塵土平地ヨリモ高クナリテ、ソノ近邊ノ草ヲ肥ス。コレ世ケンノ不淨ヲ愛スルユヘナリ。酒掃シタル地ハ塵埃ヲ絕シテ、人ノ心マデヲ淨クス。但シコレ世ノ人ハ絕塵ヲ地ヲキラヒ、塵坑ヲコノムト覺ヱタリ。然ルニ當世地ニ水ヲ洒ギ、塵ヲ掃フコトヲコノムト云ヘドモ、身ノ洒掃ハシラザルナリ。

一意不淨ナル人モ、ソノ生得ノ我本心ハ、清淨潔白ニシテ、聖賢ニコトナルナシ。タヾ我ト心ヲ覆ヒカクシテ、不淨不潔ノ人トナルナリ。塵坑ノゴトク始メホリタルトキハ、洒掃ノ地ト異ナルコトナシ。

塵坑ヲ愛シヌレバ塵アナナリ。人ミナ世上ノチリヲアイスルコト、塵坑ノゴトキ乎。

一曲ト直ト、淨ト汚トハ、善惡スデニワカリテアリ。コレヲアヤマル人ハアラジ。庭座敷ノ美麗ヲコノマヌ人ハナシ。我心ノ私曲アル人モ、物ノ曲レルヲ好ム人ハナシ。木ヲ植レバユガミヲ直シ、庭ニ塵アレバ掃フト見ヘタリ。己レガ身ノ不淨曲事ヲバ、私ニシテ置モノヽ、不淨曲事ヲバ堪ヱズト見ヘタリ。

一心コヽニ在ザレバ、視レドモ見ヘズ。聽ドモキコヘズ。コレ至レル人ノ心ニアラズ。學者ノコヽロナリ。深ク思ヘバ、心コヽニ在テ視聽スルトキハ、則チ一ツノモノニ在テ衆ラ欠ク。心コヽニアラズシテ、視聽スルトキハ、則チ一ツニ在ズシテ衆ヲ欠ズ。〔割註〕蓋シ焉ハ偏ナリ。」

一人ノ云フヲ聞ニ、ソンヂヤウ其長老、法印樣ハ、殊勝ニサムロフ。御佛デサムロフト云フ。如何ヤウノ所ヲ見付テカク云フト思ヘバ、コレハ甘キモノデサムロウトテ、黃連ヲアタユルニ、昔シノ甘草ハカクナリシカ。今ノ甘草ハカウコソアルラント思ヒ、マタ水ヲ酌テアタユレドモ、酒ト云ヘバサケトヲモフ類ノ人ヲ殊勝ナリト云ヘリ。眞實ノ殊勝ト云ハカクノゴトキニアラズ、コレハヒトヘニ殊勝ニ似テ、殊勝ニアラズ。ヨク一切ノ理ヲ窮メ知ラザルトコロナク、上ハ天ヨリ、下地ニ至ルマデ、王侯貴人ノ事、士農工商、下賤ノ業マデ知ラズト云フコト無キハ聖人ナリ。佛祖ナリ。舜何人ゾ歷山ノ耕父ナリ。佛ナン人ゾ舍衛ノ乞士ナリ。蓋シ聞テキカズ。見テミズ。知リテ知ラズ。ソノ節ニアタリテ、ソノ知ルベキヲ知リ、ソノ聞クベキヲキヽ、ソノ見ルベキヲミルナリ。ソノ見ルベカラザルヲ見ズ。ソノ聞クベカラザルヲキカズ。ソノ知ルベカラザルヲ知ラズト云フトキハ、則チ愚カナルガ如シ。ソノ見ルベキニアタツテ見、ソノ聞クベキニアタツテキヽ、ソノ知ルベキニアタツテ知ルトキハ、

則チ一切ノコトニヲイテ、知ラズト云フコト無シ。コレヲ殊勝ト謂フ。殊勝ハ字ノ如キ乎。

一コレヲ用ヒテモ理ニ當ラズ。コレヲ捨テモマタ理ニアタラズ。コレ今時ノ人ナリ。用ユルトキハ則チソノ惡ヲ知ラズ。捨ルトキハ則チソノ美ヲ知ラズ。己レニ順ガウトキハ、則チ惡人トイヘドモコレヲ用ヒ。己レニ違フトキハ、則チ善人トイヱドモ、コレヲ捨ル。

一物各々天理アリ。ソノ天理ニ率ガウトキハ、則チモノ我心ノゴトク從ガウ、ソノ理ニ逆フトキハ、則チモノ我ニシタガワズ。況ンヤ有情ニヲイテヲ乎。車ハヨコニヲスベカラズ、モシ横ニヲストキハ行ズ。コレ車ノ理ニサカロウユヘナリ。車ハ造化ノ形ニアラズ、人ノ造作ナリ。人コレヲ造ルトイヱドモ、スデニ形成ルトキハ、則チ天理アリ、天理ニシタガウトキハ、則チ無心ニシテ從ガウモノナリ。

一狗猫ノタグヒ、陽國ニ生ル丶モノハ、陽氣勝ベシ。然ルニ陰國ニ來テ、ハナハダ寒ニタヘズ。陽氣勝テ寒ニタエザルハ義ニアラズ。只知ルソノ習ヒアルモノナリ。溫カナルニ慣フモノハ、寒ニタヱズ。寒ニナラウモノハ、熱ニタユル。コ丶ヲ以テ知ル。人モ辛勞艱難ヲ經タルモノハ、艱難ニ堪フ。一生人カンナンニ遇マジキニアラズ。人ハタヾ身ヲ以テ、至樂ニ置クベカラザルナリ。

一萬事ハミナ純善ナリ。惡ナク、萬ブツミナ純ゼンニシテ、惡無キナリ。中ナルトキハ、則チミナ善ナリ。中ヲ過ルトキハ、則チ善モアクトナル、假令バ甘キハ善ナリ。苦キハ惡ナリ。甘キヲ用ユルコト中ナルトキハ、則チゼンナリ。中ヲスグルトキハ、則チ甘キモ、マタ苦キニ同ジキナリ。苦モマタコレ五味ノ一ツナリ。用ヒズンバアルベカラズ。中ヲ執ルトキハ、則チ苦キモマタ中正ヲ得テ、甘キニ同ジ。

一世俗佛法ヲバ、寂ニシテ滅絶ストヲモヘリ。道ハモト生滅ナシ。然ルヲ衆生ショフメツノ相トナリテ悟ルトキハ、則チ生滅ノ二ツトモニメツシテ、寂滅ノ體現前ス。コレヲタノシンデ、寂滅爲樂ト云フ。滅絶ノ義ニアラズ。道ノタイ寂ニシテ、モノ、滅死ノ體ノゴトク、寂靜ニイタリテ、猶滅如ト謂フガゴトシト謂フ。衆生ノマナコ、生メツヲハナル、トキハ、則チジヤクメツ現ゼンス。生メツハ末ナリ。ジヤクメツハ本ナリ。凡夫ハスヱヲ見テ、モトヲ見ズ。此ノ本カンジテ、スヱニキタル。千變萬化スルトモ、ソノモトハ湛然ト、ツネニ寂トシテ、ヘンセザルナリ。コレヲ指テ以テ、寂メツトス。迷フトキハ則チ生メツヲ見、サトルトキハ、則チ生メツ滅ス。サトリテ生メツノ二ツトモニ、滅シヲハツテ寂メツ現前ス。コレヲサトリテ樂ミトスルト云フ義ナリ。諸行ハ無常ナリ。コレ生メツノ法ナリ。生メツ滅シヲハツテ、寂メツヲ以テラクトスト云々。

澤庵和尚玲瓏隨筆　卷之三

一僧トシテ佛法ヲ裏ニシ、世間ヲ表トシ、多欲ニシテ世ニ諂ヒテ、渡世ト爲ルモノハ、一代藏經目ヲ閉テ暗誦スルトモ、亦僧ニアラズ。縱ヒ佛經祖語ヲ誦セズトイヱドモ、道ニ契フトキハ、則チ是眞ノ出家兒ナリ。

一一等ソノ身凡相ナラズ。志シ高クシテ、人ヲ直下ニ見テ、然モ、マタイマダ曾テ筆ヲ執テ書コトアタワズ。イマダ曾テ書ヲトリ誦スルコトナラズ。百ノ事不能ノ人アリ。一等マタソノ身凡賓ニシテ、外相貴トカラズシテ、然モ亦心ヲ文筆ニカケ、ソノ爲ル所スベテ拙ナカラザルモノアリ。上ニ謂フトコロノ一等ノ者、平生此ノ人ヲ謾ル。双ビ立ツトキハ則チ這ノ人ノ作ス所ヲ、一事ナスコトヲ得ズ。シカルトキハ則チ、ソノ笑フコト又ナンゾ乎。徒ニ志タカキノミ。更ニ實ナシ。

一眼ニ在テ心ニ無キノ工夫スベシ。書ヲ見ルニ意ヲ得ルコト無キナリ。

一明キタレバ暗メツシ、暗來レバ明メツス。寒キタレバ空滅シ。空キタレバ寒メツス。語キタレバ默メツシ、默來レバ語滅スト云フコト、ヨク辨ヘ知ルベキナリ。

一昔シ豐相國〔割註〕太閤秀吉ナリ。」ノ世ニ、大盜アリ名ヲ石川ト云フ。アル人ノ曰ク、石川能ク智仁勇アリ。彼レヲシテヨク一轉セシメバ善人タルベシト、ソノ所以如何。賊ヲ以テ世ヲ久シク經ルトイヱドモ顯ハレズ。コレ智ナリ。ソノ徒ヨク從ツテ、自ラ顯ハレザルトキハ、則チ仁愛アルナリ。諸將陣ヲハルトキハ、則チ謀リテ以テ陣ヲ張ル。諸將普請ヲ役スルトキハ、則チ謀リ以テコレヲ營ナミ。

盗ムトコロニ随フ、コレ勇アルナリ。ソノ姓名ノ顯ワル、コトヲ恐レザルナリ。予ガ曰クコレ實ニ利ロノ説ナリ。實義ナシ。古ニ曰ク賊ハコレ小人ニシテソノ智君子ニ過ルト云々。賊ト爲ルノ智ハ君子ニ過超セリ。若シ君子ノコトヲ謀ルトキハ、則チ智君子ノ智ニアラズ。假令バ犬ヨク吼テ人ヲシテ我封疆ノウチニ入ラシメズ。此ノ智人ノ守ルニ勝レリ。人ヨク終夜イネテ我ガ倉庫ノモノヲシテ奪ワシメル。ソノ守リ人トシテ犬ニ劣レリ。然リトイヱドモ、犬ハソノ一智ニシテ人ノ智ナシ。犬ハ人ニマサルベカラズ。狐ヨク人ヲ誑カストイヘドモ、ソノ一智ニシテ餘ノ智ナシ。人彼ノ好キ餌ヲ以テ謀ルトキハ、則チスデニ縊ラレテ死ス。故ニ知ル賊ハタヾ賊ノ智テリ。彼レヲシテ君子ノ位ニ居ラシムルトモ、君子ノコトヲ謀ルベカラズ。仁ト云ヒ、勇ト云ヒミナ賊ノ智謀ナリ。君子ノコトニアラズ、賊ノ位ニ在ルトキハ則チ謀リゴトアリ。ソノ位ヲ離レテ君子ノ位ニ在ラバ、タヾ純闇ニシテ明ラカナルコトナシ。コレヲ轉ズトトヱドモ君子タルベカラザルナリ。

一 君子ノ智、小人ノ智ベツナリ。賊タルモノ能コレヲ謀ル。智アルニ似ルトイヱドモ、眞ニ賊ノ智ナリ、君子ノ事ヲナストキハ、則チ偏ニ小人ナリ。假令バ猫ヨク鼠ヲ捕ルノ智ノ如シ。鼠ノ夜ル行キテヨク食ヲ偷ムノ智ノゴトシ。コレミナ氣質ノ智ニシテ、君子ノ智ニアラザルナリ。君子ノ智ハ天理自性ナリ。楞伽經ニ云、タトヘバ牛ニ馬ノ性ナク、馬ニ牛ノ性ナキガ如シト云々。コレ牛ヲ以テ馬ノ用ヲスルコトアタワズ。馬ヲ以テ牛ノ用ヲスルコトアタワジ。是氣質ノ智各々ナルユヘナリ。然レバマタ馬ヤ牛ヤ天理ノ性ナキニアラズ。賊ハコレ小人ナリ。賊ノ智アリテヨタ人ヲ謀ルトモ、彼レヲシテ君子ノ事ヲ謀ラシムルトキハ則チ克ハズ。コレ牛馬ノ各ノ性ノ如キナリ。

一 異道ヲ雜ヘ學ブハ我道ノ妨ゲナリ。一道ヲ能クマナブベキ禪僧ナラバ、先ヅ禪部ヲ一筋ニヨク工夫シ

教ユルモノナラバ教門ヲヨク習フベシ。ヨク我道ヲキワメテノチ、又偏ヘニ我道ヲマモリ外ヲ見ザルトキハ、則チソノ見偏枯ニシテ通明ノ理無ク、マタ始メヨリ異道ヲ雜ニルトキハ則チ害アリ。又始メ儒、アルヒハ老、ヨクコレヲ學ビテノチ、捨テ以テ釋ニ入リ、アルヒハ醫ニ入ル。コレマタ道ノ廣マルユヘンナリ。

一人前ニテ痒キトコロヲ、バリ〳〵トカクコトハ不法ノコトナリ。甚ダ慮外ナリ。形ヲ忘レテスルコトナリ。痒キヨト了簡ナキ時ハ、身ヲツメリテモ居ルベシ。大慧禪師ノ云フ、覺ヘズカユキ所ヲ抓アラワスト云フ語ガアルゾ。コレ身ヲ忘レテスルコトナリ。正氣ニアラザルナリ。

一問フ天地ニ氣質ノ分アリ耶。答テ云フ有リ。亦問フナニヲ以テ質トス。答フ質ハ地ナリ。氣ハ天ナリ。地ハ萬物ナリ。形アルモノナリ。天ハ形ナシ。カタチ無キモノハ氣ナリ。天地合シテ令ヲコナワル。コレ氣質ナリ。キシツ雜ラズ、質ヨリ氣ヲ生ジ、氣ヨリ質ヲショフズ。人ニヲヒテコレヲ推トキハ、則チ全體コレ氣シツ、ソノ時ニ在テ體氣ヲ生ジ、氣體ヲ活ス。互ニアイ持シテ、以テ立ツナリ。氣疲ルトキハ、則チ體重シ。健カナルトキハ、則チ氣活ス。形ハ人ノ全體ヲ總テ云フナリ。質トハ全體ノ内ニテ目鼻口等ヲ云フナリ。形質トツヾケテ云フトキハ、右ノゴトク心得ベシ。マタ形トナリトモ、質トナリトモ、一字取ハナシテ云フトキハ、形ト云フテ質ニモナルベシ。質ト云フテ形ニモナルベキナリ。一概ニ物ヲコヽロ得ベカラズ。マタ氣質ヲ氣形ト云フタモヲナジ義ナリ。マタソノ人ノ氣質ナリナドト云フコト、スコシ心持別ナリ。人々ノ氣ニ具足シタル質ガアル。コレヲソノ人ノ氣質デ候フト云フ。平生面相ニ怒リアル人アリ。マタ莞爾々々ト笑フ顔アリテ、挨拶ヨキ人アリ。此レ等ハソノ人々ノ氣ニ具シタルカタチナリ。コレヲ氣質ト云フ。氣ノ質ト云フ心ナリ。短慮ニイカルモ、心寛

長ニシテ溫和ナルモ、ミナ人々ノ氣質ナリ。

一氣ハ獨リ動キガタシ。物體ニヨツテウゴク。假令バ人ノ踍動スルニ地ヲ踏ザレバ、踍動コト能ハザルガゴトシ。足モノヲフマザレバ勢ヒイデズ。モノヲ恃マザレバ動クコトアタハザルガ如シ。故ニ獨陽生ゼズ、獨陽成ズトイウナリ。

一アル人予ニ問フテ曰ク、詩ハ何ノ爲ニシテ作レルヤ。予コレニ應ヘテ曰ク、人生レテシヅカナルハ天ノ性ナリ。モノニ感ジテ動クハ、性ノ欲ナリト云々。詩ノ作ルコト此ニ在リ。

一人ミナ朝恩ヲ輕ンズベカラズ。爵祿ノソノ身ニヲヨブモノハ、聊カ朝恩ヲ知ルニ似タリ。ソノ及バザルモノニイタリテハ、曾テ以テ朝恩アルコトヲ知ラズ。コレ人愚カナルヲ以テノユヘニ、恩アルコトヲ知ラズ。普天ノ下朝恩ヲ得ザルモノナシ。只イサヽカ淺深アル乎。爵祿ノソノ身ニ及ブモノ、外、モシ朝恩ナシト謂フトキハ、則チ我爲ニコレヲ說ベシ。帝畿ノ內ハ上一人在マスユヘニ、今ノ世道ナシトイヘドモ、イサヽカ道アリ。ユヘニ民非法ノ坐ニ逢ハズ。令吏若シ非法ヲ行ウトキハ、則チコレヲ訴ヘ以テソノ坐ヲ遁ル。畿外ノ國遠境ノ民ハ、朝ノ光リ遠シ。ユヘニソノ非法ノツミヲ訴ルニ路ナク、恣ニ令吏ニ曲ラレテ、禁獄セラレ、アルヒハ水火ノ攻ニ逢ヒ、終ニソノ身ヲ喪ボス。カナシムベキナリ。コレ畿內ノ民ハ豈爵祿ヲウケルノ外、朝恩ナシト謂ハン乎。蓋シ畿內ニ生ズルトコロノ民ハ、實ニ天祿ナリ。畿外遠境ノ民ハ實ニカナシムベキナリ。ユヘニ聖王專ラ道ヲ以テス。コレスナハチ天下ノ民ヲ憐ムナリ。

一學者ハ人ノ非ヲ談ズベカラズ。コレ只人我ナリ。師家コレ人ノ非ヲ談ズルニ咎ナシ。ソノユヘ如何トナレバ、人ノ非ヲダンジテ、一衆ヲシテ是ナラシムルユヘナリ。蓋シ師家ハ人ノ非ヲダンジ、復是ヲ

ダンジテ、衆ヲシテ身ノ非ヲ拔シム。人ノ是ヲダンジ衆ヲシテ身ノ是ヲ增シム。小人ハ一コフニ人ノ非ヲダンジ、人ノ是ヲダンセズ。ユヘニ人ノ恨ミアリテ、我ガ得ルコトナシ。此コヲ以テ今謂フ學者ハ、人ノ非ヲダンズベカラザルナリ。賢者ハ人ノ非ヲダンジ、人ノ是ヲダンズ。若シ是非ヲダンセズンバ、ナニヲ以テ人ニ敎ヱン乎。賢者ハ人ノ非ヲダンジテ非トセラル、。人マタコレヲ聞テコレヲ怒ル。賢者人ノ是ヲダンジテソノ是トセラル、人マタ、コレヲ聞テコレヲ喜ブ。非トセラル、人ノイカリ彌非ナリ。是トセラル、人ノヨロコビ彌是ナリ。抑人ノ我非ヲダンズルヲキクトキハ、則チ自ラ我非ヲ拔ベキナリ。人ノ我是ヲダンズルヲ聞クトキハ、則チ自ラ我是ヲ長ズベキナリ。世間ニ一等ノ人、嘗テ以テ人ノ是非ヲ說ザルモノアリ。此レヲ以テ賢トス。實ノ賢ニアラザルナリ。不仁ノモノナリ。此人ハタトヒ非ニ長ジ、惡ヲ增トモ、亦傷マズ。タヾ人ノ非ヲダンジ、人ノ惡ヲ說テ、人ノ憎ミ怨ミヲ受ルコトヲイタムナリ。已レヲイタミテ、他ヲ傷マザルモノハ不仁者ナリ。仁者ハ人ノ非ヲ說テ、是ナラシメント欲シテ已レヲ忘ル。不仁者ハコレニ反ス。

一如來大師五千卷ノ大藏ハ、五十年心ヲ盡セシ言ナリ。戒律行義ヲコタルナ。我滅後ニヲヒテカクセヨ。カクセヨト、金棺ニチカヅクマデ遺敎シタマイシモ、ミナ今ノ世ニ變ジ、沙門ノ行義俗方ニ劣リテ、邪見無慚ナリ。欲ハ海ヨリフカク、人我山ヨリ高シ。ツネニ靈山ニ在リト說キタマヒケレドモ、寂寞ノ扉ヲ閉テ出デイマシヌタマワズ。時ヲトロヱ、機クダリテ、今ノ世ニ佛書タモフトモ、祖師イデタモフトモ、正道ニハ復リガタシ。後世トキアルベキヲヤ。慈尊ノ世トヲシ。今ノ時ヲ如何ンセン。我輩ガラマコトニ名ヲ竊ム器ナリ。一事儀ニアタルコトナシ。偏ニ渡世ノ心マデアリテ、道ノコヽロ嘗テ起ラズ。空シク佛法ノ名ノ字ヲカルノミニシテ、實ナキナリ。

一蚤ノ飛ニモ心ヲツクベシ。大道ノ端ナリ。大道ヲアキラムルニ便トナレリ。牛馬ハソノ性ヲ、ヒナリ。蚤ハソノ性小ナリ。シカレドモ蚤ノ小ト牛馬ノ大ト、ミナ大道ノ端ナリ。大小ノ道ヲミルコトナカレ。大小ノ差ナシ。假令バ黄金ヲ以テ蚤ヲ鑄ル如ク、マタ牛馬獅子等コレヲイルガゴトシ。蚤ト牛馬獅子トミナ黄金ナリ。造化ノウヱニ大小長短アリ。各々荷ノ葉ノ圓キ、松ノ葉ノ細キ、ナニヲカステナニヲカ取ン。モノ各一大極アルナリ。

一萬タンニツキテ、事ト理トノ二ツニ心ヅキアルコトナリ。事ヲ知リテ理ヲ知ラザレバアシキナリ。モノニ糊ノ氣アルトキハ虫コレヲハム、虫スイニ餘所ヨリ來テハムニアラズ、糊ヨリ虫ガ生ズル程ニ、スイテハムト云フ義ニアラズ。ソノ生ズル理ハ糊ニ濕氣アリテ、ソノ物ノ生ヲ損ズルニヨリテ、濕ヨリ虫ヲ生ズルユヘナリ。此ノ如ク心得ルヲ理ト云フナリ。板ナドヲ紙ニテハルニ、濕氣ノ糊ヲツケテ、紙ヲ以テソノウヘヲハリ、閉テ置ケバ、濕氣ヲ紙ニテ閉ルユヱニ、紙ト板トノアイダヨリ、虫ガ生ズルナリ。ミナ濕ヨリ虫ガ生ズルト心得タルガヨシ。書籍ニ不審紙ヲツケルニ、久シクナレバソノ紙ノトコロヨリ、虫ガ生ジテ食ムナリ。唾氣ニテ濕テコレヲツケルニヨツテナリ。萬ノモノヲ外ニ置テ、風濕ニアツレバ虫ガハムナリ。塗モノマタハ函ノ蓋、密ナルモノニ入テ置バ食マザルナリ、筆モツトモカクノゴトシ。筆カケニ懸テヲクコトモツトモ非ナリ。此ノ理ヲ心得レバ、糊ニカギラズ、總別濕氣ヲ書籍ナドニ忌ムト知レバ、ヒロキ心得ナリ。コレ理ヲ知ル一德ナリ。

一物ミナ權實アリ。タヾ實ヲ知リテ知ラザル顏ニテ權ヲ用ヒテヨシ。權ハ方便ナリ。實ハシンジツナリ。タトヘバ山椒ヲ疊ノウヘニ置テ、ノチ取リテ食ヘバ、噎バズト云フハ權ナリ。コレ實ハタヽミノウヘニヲキテムセバズニハアラズ。山椒ハムセルモノト、思ヒイダサセヨフト云フ義ナリ。此ノ理ヲ

アラワセバ、謀リゴトガヤブレテ人ガ信ゼヌホドニ、疊ニヲクガ祕法ヂヤト云フタハ能キナリ。楊枝ヲ手ヨリ手ニワタセバ中ガワルク成ル。扇子ニナリトモノセテワタスト云フハ權ナリ。口中ニ用ユル道具ヂヤ程ニ、他人ノ手ニケガサセジト云フ義、コレ實ナリ。

一席ニ座シタルヨリ、竹倚曲彔等ニコシカケタルハ樂シト云ハヾ、コシカケタルヨリ座シタルハタノシカランコトナリ。如何ニシテ斯クアルゾトナレバ、座スルハ常ナリ。腰カクルハ時ノ興ナレバ、マレナルコトヲ以テ興ズル心ナリ。コヽロハ珍ラシキコトニ興ズルナリ。

一醫師ノ語ニ云フ、藥ノ禁好ノモノニ海ノ藻ヲ禁物ニ書ハ、神馬藻ノコトナリ。一切ノ海藻ヲ云フニアラズ。ナノリソト云フハ、神馬草ノコトナリ神ノ馬ニハ、人ハ勿乘ソト云フ和名ナリ。然ルニ本草ニ海藻ハクスリニ禁ズルト云フ事ヲ見ズ。

一藥ニ油ヲ忌ハ、腸ニアブラガシメバ、藥ガキカヌト云フ義ナリ。禁忌ニアラズ。クスリノ性ヲ弱マスノ義ナリ。氣ノツヨキクスリハ、箸ニアブラヲツケテイルナリ。性ヲヨワマス心ナリ。況ヤアブラノアルクスリコレ多キヲ乎。

一此ノコロ勸進柄杓ノ柄ノナガキヲ見テ候フ。或長老ノ武藏ノ國ヨリ長門マデ、高家ノ身マカリタル弔トテ、同宿ヲ使ハズ。彼ノ高家ノ人サゾヲモヒケン。誠ニソノ志ニテ、海陸萬里ノ難ヲシノギテハヨモ來ラジ。サテモ武藏カラ長門マデハ長キ柄杓ノ柄カナト、云ンコト案ノウチナリ。此ノ志ノ十ノ一ヲ、修行ニ費ヤセカシト思フハイカニ。我言理アラザラン乎。コノ長老ノナガトマデ僧ノ足ヲクルシメ、我本寺開山ニ一香ヲ燒ズ。キケバ此僧スデニ、印證ヲモ得ツベキナド、キコユルホドニ、今ニヲイテ香拜ヲ遂ザルハ、イカンゾヤ。

一香モ味モアサクカロキヲ褒美ス。然レバ人モ萬事ニツキ淺クカロキガヨシ。鹽タレタルハ惡シ。人ニ懇ロナルハヨケレドモ、出家法師ノ身ニテハ、コレモアサクカロキコソマサレリ。懇ロスグレバ却テヘツラウニ似タリ。佛法ノ慈悲ハ別ナリ。一言モ發心ノタネタルベシ。愛憐ノ慈悲ハ、達多五逆ニマサレリト云ヘリ。

一萬事飽足則ハ止、未㆓飽足㆒則求コヽロ止ズ。少年ニシテ年ヲツマンコトヲ望ミ、老テ年ヲゲンゼンコトヲ思フハ目前ナリ。タヾ世人ノアカザルハ財ナリ。

一道ハ萬事ヲカヌル、此ノ辨ハナハダ深シ。容易ニベンジ難シ。

一人ハ古郷ヲハナレテ夷ガ千島ニモ住ムモノナリ。タヾ左遷ト云ヘバ、行ク人ハ跡ニ名殘ヲヽク思ヒ、留ルモノハ行ヲヲモウテ、互ヒノ袖ヲヌラスヲ思ヘバ　左遷流シ人トキクヨリ歎息ヲ起スナリ。マタ知行所領ニツキテユクト云ヘバ、目出タシナドトテ、取ハヤスベシ。人ノ悲歎ハ見聞ノカワリナリ。本心ハウゴカズ、見聞ニヨルモノナリ。古郷ヲ遠クハナレ、千里ノホカヱ行ニモヨラズ。タヾ悲歎ハ我ニアリ。ホカニ善アクナシトヲモフベシ、

一萬事ニツキ好惡ハ、トクサダマレリ。人ゴトニコレヲ知ラザルニアラズ。ヨシトアシキトヲ双ベテ、誰カ好キヲ知ラザラン。好キコトヲ知ラズシテ、善道ニヲモムカザルニハアラズ。惡キコトヲ知ラズシテ、惡道ヲスルニハアラズ。善事ハスルニ難ク、アシキコトハスルニ易シ。カタキヲ忍ビズシテ、ソノヤスキヲスルナルベシ。物ニ能クシノブ人、惡事ヲバヨモセジ。堪ズシテ惡キコトヲモナスト覺ユ。堪忍ノ二字ツネニ思フベシ。百戰百勝モ一忍ニシカズ。勝ハ人ノ欲スルトコロナリ。況ンヤ百戰〔割註〕一本勝ヱツクル。」ヲヤ。然レドモ一忍ニシカズト云ヘリ。大燈モ吾山ニ入ンモノ、一ニ堪忍、

二ニ志シ、三ニ智恵トアリシ。

一因アリトイヘドモ緣ナキトキハ、則ナ果ヲ得ザルナリ。タトヘバ、因トハ舟ナリ。緣トハ風ナリ。果トハ到ル處ナリ。初メ一ツノ菓アリ。コレ因ナリ。此ノ菓ヲウユル手ハコレ緣ナリ。菓アリトイヘドモ、コレヲウユル手ナケレバ生ゼズ。生ゼザレバ次ノ菓ナラズ。ウユル手ノ緣ニ逢テ、菓ノナルヲ果ト云フナリ。人過去ノ業因アリテ、ソノ果ヲ感ズベシ。サレドモ緣ニ逢ザレバ、智恵發セズ。空シク一生ヲバ果シテ、未來ノ緣ヲ待ツモノナリ。六祖能大師ハ、嶺南ノ樵者ナリ。薪ヲ市ニヒサグニ、婆子ノ金剛經ヲ誦シテ、マサニ住スルトコロナクシテ、ソノ心ヲ生ズベシト、云フヲ聞テ心ヲ得、ツイニ黃梅山ニ到テ得果ヲナス。六代ノ祖師コレ夙因アリトモ、婆子ノ緣ニアハズンバ、永ク嶺南ノ樵者トナツテ、身ヲ終ルベシ。マタ日々緣ニ逢トモ、夙因ナクンバ、感果ノ理イカデカコレアラン。然レバ彼ノ市ニ金剛經ヲ讀テ、幾千萬人ガ聞ベシ。サレドモ大果ヲ得ルモノハ、六祖一人ナリ。インエン和合セザレバ、一切ノコト成就セザル道理ナリ。

一利根ノ人ハ妙旨スクナシ。鈍根ニ妙旨アリ。利コンノ人ハ疾クハシリユキスグルヲ、鈍根ノ人ハ漸々ニソノ理ヲ盡ス。利根ノ人ハヨク前言ヲ記ス。コレヲ說トイヘドモ妙解スクナシ。鈍根ノ人ハ多言ニワタラズシテ、一句一言ノ上ニヲヒテ、久シクコレヲトヾメテ、思惟スルユヘニ、利根ノ人ヨリモ却テ妙解ヲウルモノナリ。山ニ入リ菓ヲ拾ヒ、茸ヲ採ル。茸ヲヽキヲ心ニカケテ、ハシル人ハ却テコレヲ得ズ。ハシリスギタル跡ヲ認テ、却テヲヽキヲ得ルモノナリ。多キヲ思フモノハヲヽカラズ、ヲヽキヲステザルモノハ、多キニイタル。事萬ジニワタルニヨツテナリ。

一田夫野人ニ孝行、人ニ超タルアリ。四書五經ヲヨミテモ不孝ノ人アリ。孝行ノ田夫野人、ナニヽヨツ

テ孝行ナルゾ。知ル人ナニ、ヨツテ不孝ナルゾ。二ツトモニ出ルコト天然ト云ハヾ、聖經詮ナキナリ。不學ニシテ天然ノ孝行ノ人アリ。學ビテ不孝ノ人アリ。人ヨクコレヲ辨ズ。佛法信アルベキナリ。

一漚ハ浮ブモノナリ、ユヘニ天ニソクス。輕キヲ以テ堅實ノ體ナケレバナリ。村家ニ麤茶ヲ煮テコレヲ喫。漚ヨクウカブ。醫書ニイハク、淸クカロク昇ルモノハ茶ノルイナリト云々。濁酒ヲ溫ムル鍋ヲ以テ、茶ヲニルトキハ、則チアワキヱ、以下溫ニ清酒一鍋上煮則漚不レ消ト云々。況ンヤ又漚ヲ乎、淸輕ノ輕ナリ。知ンヌコレ濁ルモノハ下リ、淸キモノハ上ル。天理私ナシ。村夫ノ語ヲ聞テ、道ヲアキラムルコト多シ。

一物ト人トミナヲナジ。剛キ金ニ礪柔クシテ可ナリ。ヤワラカナル金ニ、礪カタフシテ可ナリ。ソレ人剛ト剛トノモノハ、互ヒニ破ル。剛柔ニシテ尤モヨシ。剛ナルトキハ、則チ柔コレニ隨フ。柔ナルトキハ、則チ剛コレヲタスク。乾ハ堅ク坤ハ柔ナルノ道ナリ。況ンヤ柔ヨク强ヲ制スルモノヲヤ。强者ハ力ヲ以テコレヲ制セント欲ス。タガイニチカラアルトキハ、則チ制セラレズ。柔相隨ツテ以テツイニ制スルニ、セイセラレズト云フコトナシ。齒ツキテ唇猶存スルガゴトシ。

一人ハ少年ニ學ビ、壯年ニハヤク立身スベキコトナリ。四民ノ所業モナニモ急グベシ。タトヒ成得テモ老ヌレバ、末短カシ。日暮テ道ヲイソグナルベシ。北地陰寒ノ國ニハ、春ノ花ヲソシ。陰寒ニサヘ、ヱラレテ然リ。シカラバ秋ノ花ハ末ノ陰寒ヲ考ヘテ、疾クヒラクベケレドモ、節序アレバ、コレモ前年ノ寒氣春ニ持コシテ、ソノイタミニヤ。秋ノ花モヲソクサキ出ルユヘニ、又來ル秋スヱノ寒氣ニアタリテ、サカリモホドナキナリ。人ノ中年スギテ立身シテスヱノ短キガ如シ。

一烏有先生問曰、宋儒云、佛氏マサニ老莊ノ文ヲ以テ、ソノ教ヲカザルト、是ナリヤ如何。答云、此レ朱氏ノ妄心ナリ。カノ老莊ハ太極ノ先ヲ以テ無トナス、太極ノ後ヲ以テ有トナス。無ヲ以テ是トナシ有ヲ以テ非トナス。有無ノ見イマダ消ゼズ。是非ノ情イマダ泯セズ。スナハチコレ輪廻ノ根ニシテ虛妄ノ本ナリ。況ヤ無ヲヨロコビ、有ヲイトヒ、無ヲトリ有ヲスツルヲヤ。虛無ノ獄ニ囚ハレテ、自然ノ縛ニ纒テ、有漏ノ因ヲ成シテ、有爲ノ果ヲマネク。コレヲ以テ、能仁氏ノ道ニ擬スルコト、ナホ河伯ノ海若ヲ望ムガゴトクナリ。能仁氏老莊ノ文以テソノ教ヲ文ルト、ソレ佛ヲ誣ルニアラズヤ。アニ老莊ノ文ヲ用テコレヲ文ランヤ。漢ヨリコノカタ、諸經迭ニ至ル。文ハ譯ニ由ルトイヘドモ、義ハ實ニ梵ヨリイデタリ。アニ譯家ミヅカラ老莊ノ文義ヲ用テ、コレヲ文ランヤ。譯經院ノ內群英コト〲ク集ル、譯語ノ者アリ。筆授ノ者アリ。證義ノ者アリ。アニ一人私ニ、老莊ノ文ヲ取テコレヲ文ランヤ。一經ノ梵本、アルヒハ數々譯ス。前師ノ略ハ、後師ノ梵本ニ據テ詳ニスルコトヲ得、前師ノ誤ハ、後師ノ梵本ニ據テコレヲ正スコトヲ得ルコトアリ。アニ妄ニ老莊ガ文ヲ取テ用テ、コレヲ文ルコトヲユルサンヤ。タヾ梵ヲ譯シテ華トナス。カナラズ此ノ方ノ言句ヲ用ユルノミ。此方ノ道ヲ談ズルノ書ハ、老莊ヲ最トス。ユヘニ多クソノ語ヲ取ル。意義ハナハダ殊ナリ。察セズンバアルベカラズ。老莊ガ無爲ト言ヒ、我佛モマタ無爲ト言ヒ、或ハ老莊ガ道德ト言ヒ、我ガ佛モマタ道德ヲ言。ナンゾ日ヲ同フシテ、ソノ意味ヲ論ズベケンヤ。

一人ノ哭ノ笑トノ聲ヲキケバ、都モ鄙モカハラズ。奧羽ノアイダニ謫セラレテ、所ノ人ノ云フコト、洛トチガヒヌレバ、キヽワケガタシ。人ノ云フ詞ハ、先ノ人ヲ學ンデ云ヘリ。學ブハミナ血氣ナリ。洛ハ洛ノ血氣ヲ學ビ、夷ハヱビスノ血氣ヲ學ブ。故ニ夷洛ノ詞カハレリ、哭ト笑トハミナ本心ヨ

リ出ルユヘニ、夷洛ミナヲナジ。血氣ト本心トノカハリ此ノ如シ。奉行憲法ノ人達、彼ノ笑ト哭トノ出ル本心ヲ以テ、公事ヲ聞カバ、毛頭ワタクシノ見アルベカラズ。血氣ニヨラバ危シ。人心ハ危フシ、道心ハ微ナリトハ、誠ナリ。

一寒キ朝ハ天地凍レリ。漸ク朝陽ノボリテ、外暖氣ヲ得ルトキ、家ノ內殊ノホカ寒ズ、コレ陽氣寒ヲセムルユヱニ、寒氣ウチニセマツテ此ノゴトシ。硯ニ向テ居ルトキ、朝ニ水凍ラズシテアリシガ、太陽昇リテ外明々タルトキ、忽然トシテスヾリニ氷生ズ。コヽヲ以テマコトヲ得タリ。外陽ニシテ寒ウチニセマリ、外寒ニシテ內熱キタルコトヲ知ル。

一好語ハ依ズンバアルベカラズ。ソノ言所ノ人三歲ノ孩兒トイヘドモ、言所諫ムルトコロ好語ナルトキハ、則チ受テ以テ聖賢ノ語ニヲナジウス。コレソノ得ルコト身ニ在リ。多クハ高位高官ノ人ノ言トキハ、則チ欽ンデ以テコレヲ聞キ、貧賤ノ人言トキハ、則チ金言トイヘドモ、以テコレヲカロンズ。剩ヱイサメル人ニ向ヒテ顏色ヲ損ズ。コノ損ズルモ亦我ニアリ。

一爐櫃ヲ地ニツケヌレバ灰シメルナリ。上ニアリトイヱドモ、火ノ性ハノボルモノナレバ、ウヘニアリテ下ヲ燥スコトハスクナシ。況ンヤマタ燥ノ濕ヒヲ取ルコト、コレヲ知ルベシ。濕ノ燥ニツクコトマタコレヲ知ルベシ。ウヱニ火アレバ、大火ニ小濕勝テ、灰ヲ濕スベキコトアルベカラズト云ヘドモ、コレヲウルヲス。燥ハヨハシトイヱドモ、燥ノ濕ヲ呼ユヘニ、火熱ノ灰負ケテ、終ニ濕フナリ。美生ノ心ニアワセテ思フベキコトナリ。マタ善人ノ惡人ニ引レテ、ツイニ惡人トナルコトモ然リ。惡人ノ善人ヲマネクコト、燥濕ヨリモハナハダシ。瓢ノ血ヲ吸フコト、道理掩フベカラズ。瓢ニ水ヲ入レテソノ水ヲ捨テ、跡ヱ松ヲケヅリテ火ヲツケ、瓢ノ內ヘ入テ、血ヲ取ルベキトコロニ、少シ口ヲアケ、

彼ノ瓢ノクチヲ推ツクレバ、血ヲヒサゴノ内へ吸ヒ入ル、ナリ。ヒサゴノウチへ入タル火、瓢ノウチノ水ヲ吸テ、底へ引ク次デニ血ヲ吸ヒ出スナリ。火ノ濕ヒヲ吸フ熱ノツヨキコト知ルベキ乎。

一物ノ危フキコトヲ知ラザルハ、惜ム心ナキユヘナリ。取リ落サバヤブレナン。モノヲ累ネ重ネテ持、氣ヅカヒ無ク行ハ、器ヲ惜ム心ナキユヘナリ。トリヲトサバ破ナン。此ノウツワアタラシキコトヤト思フ心ナキ人此ノゴトクス。コノ金玉ヲアダニヲキテ人ニ取ラル、モ、金銀ヲヲシム心淺キユヘナリ。虎狼ノ群ニ走リ入テ、急ニ水ニ飛ツカリ、或ハ敵ノ所ニ思フコトナクハシリ入ルハ、身ヲ惜ム心ナキユヘナリ。

一善ノ惡ヲ消スコト、アシキ臭氣ニ香ヲ燒ガコトシ。智人出テ愚者ノ影ナキガゴトク、月イデ、星ノカゲナキガゴトシ。

一渇スルガユヘニ水ヲ思フ。飢ルガユヘ食ヲ思フ。渇セサレバ水ヲ忘レ、飢ザレハ食ヲワスル。鴉ガ鳴タルガ惡ガ身ニ來ルベキカ。狐ガナキタルガ何ゴトカ惡ガキタルベキカナトテ。氣ニカケヌルハ惡事ヲワスレザルユヘナリ。惡モ自然、善モシゼン、惡モ遂べカラズ。善モトクベカラザルナリ。善アクハ双ビ對スルモノニテ、車ノ兩輪ノ如シ。惡ナクンバ、善モアルベカラズ。惡アレバ、善モアリ。只管ニ善ヲ思フトテ、ゼンノミ成べカラズ。只管ニ惡ヲ嫌フトテ、惡ナカルベキニアラズ。善惡々々ト廻ルナレバ、善ハ善ニ任セ、惡ハ惡ニマカセテ、善惡一任シテ、一ヲモ胸ニ置ザレバ、鴉ノ鳴モ、狐ノ鳴モ、カレガ三昧ニシテ、一切氣ニカヽルコトナシ。況ヤマタ、善惡ハ二ツナラズシテ、法ニヲイテ分ツコトナシ。マタ衆生界ヲカリニ建立シテ、迷妄ノ人ヲ救フニハ、善アリ、惡アリ、此ノゼンアクハ、ソノ迷妄ノ人自ラ作リ出シテ、又自ラ嫌ヒコノムナリ。惡ヲ嫌ハヾ、ナドヲノヅカラ惡ヲス

ル。善ヲ好マバナドゼンヲ勤メザル。ヲノヅカラ作リタル惡ノ身ニ報ヒキタルトキ、コノ惡ヲ歎キテアラヌ狐、カラスノ鳴ヲモ、思ヒアテヽ、氣ニカケヌルコソ、大ヒナルアヤマリナレ。マタ人善ヲツミテ、ソノ善身ニ報ヒキテ、榮エヌルヲ見テハ、コレヲ羨ム。自ラナサヾル善、如何ニシテ身ニ報フベキゾヤ。アル人ノイハク善ヲ作人、此ノ世ニテ貧困ニシテ、百事心ニカナワズ。又窮シテ心根アシクシテ、人ノ惡ヲナス人ト呼ルヽモノ、ソノ身サカヱ、心ニ萬事マカセヌルコトヲ見レバ、善ノ報ヒ惡ノムクヒト云フモナキニ似タリト云ヘリ。曰ク古人スデニ此ノ不審アリ。コレハ貧人ノ舊債トテ先ヅ償フガゴトシト云ヘリ。去年去々年ニ借タル債モノヲ、マヅ償フテ、當分今年ノ借モノヲバ末ヘノブルナリ。此ノ生ニテ不思議ニ善心ニ歸シ、善ヲナストイヘドモ、先ノ世ノ惡アリ。ソノアク猶身ニ就テ、此生ノ善イマダ熟セザルガゴトシ。現世ノ善ハ未來ニカナラズ熟シテ、イマノゼン、ミライノ身ニムクヒキタルベシ。經ニ前世ノ罪業ニヨツテ應ニ惡道ニヲツベキニ、今ノ世ノ人ニ輕ンジ賤シマルヽ、ガタメノユヘニ、前世ノ罪業スナワチ消滅スト說ケリ。罪ギヨウ今ノ世ニ消滅シテ、未來ニハ善道ニヲモムクベシトナリ。マタ此ノ世ニ惡ヲ作ス人モ、ソノ身ニ惡キタラザル、コレマタ少シキ過去ノ善因感ジテ、センクハ身ニキタルナリ。當ブンノ惡ハイマダ熟セズ。コノ惡未來ノ生ニ、カナラズ身ニノボルベシ。彼ノ舊債ノ譬ヘノ如シ。

一司馬溫公ノ家訓ニ曰ク、黃金ヲ積テ子孫ニ遺サント欲ス。子孫守ラズ。書ヲツミテ子孫ニノコサント欲ス。子孫讀ズ、陰德ヲ冥々ノ裏ニツミテ、子孫長久ノ計リゴトヲ爲スニシカズト云ヘリ。今我身ニ積トコロノ善、子孫ノ長久トナルベキコト、如何カ心得ベキゾヤ。子ドモ末々ノタメトテ、善ヲスル人今モアレバ、人コレヲ笑フ。コレマタ如何ゾヤ。

一相撲ヲトル人ノ、勝ンカタント思フガユヘニ、我ヨリチカラ劣リタル人ヲバ、モシ存ブン骨身ノヤブル、程、チカラニマカセテ勝テ、ヨロコブトイヱドモ、亦我ニ勝レルチカラアル人ニハ、負テ身骨ヲヤブラレテ苦シムナリ。世ケンノ人ノ心モ、人ヲ毀ン、人アシカレト思フ人ハ、カナラズ我身アシヽ。我レヨリ弱キ人ヲバ、ヲサヘ滅スレドモ、マタ我ニ勝ル人アリテ、我ヲヲサユルコト歴然ナリ。只人モヨカレ。我モヨカレト思フベキナリ。

一人トシテ、人ノタメヨカレト思フコト、誠ニカタイカナ。凡ソ生トシイクル者、アラソハズト云フコトナシ。空ヲカケル翅、地ヲワシル獣、螻、蟻、蚊、虻ニイタルマデ、アラソハズト云フコトナシ。然レバ人トシテ争ソハザルコト難シ。心底ニハアラソフトイヘドモ、外アラソハザル顔スルハ禮ナリ。コレヲ人ト云フ。此ノ禮ヲ存セズシテ、人ニ向フトキハ、則チ早クトモニアラソフ。コレ人ニシテ禽獣ニ近シ。

一人ノ人ヲ思フ、心ヲツケテ見レバ、實ニ人ヲ思フニハアラズ。人ヲ思フコトノマコトヲ云ハヾ、親ノ子ヲ思フナルベシ。然ルニ子ヲ愛スル人ヲ見ルニ、毒物ヲ食シテ、忽チ病ヒヲ起ストイヘドモ、彼レニ食セタシト思フ、我心ノ欲ニ忍ビズシテ言ズ、病ヒヲ起スベシ。コレヲ與テクハシムルトキハ、則チ子ヲ思フ心ニ、我欲勝テ毒ヲアタヘテ病シムルナリ。我子随意ニクライ、遊山翫水シテ身ヲ費ヤシテ、死ニ及ベドモ、コレヲ責ルコトアタハズ。然レバ、彼ヲ實ニ愛スルニアラズ。子ノコノム所ニシタガヘバ、子コレヲヨロコブ。コレヲ喜バシメテ、己レガ楽ミトス。コレ子ノタメニアラズ。己レ愛ニヲボルヽナリ。佛祖ノ衆生ヲ思フハ、親ノ子ヲ思フ如シト云ヘドモ、愛ニヲボレテ、子ニ毒食ヲアタヘテ病ヲ起シ、愛ニ溺レテ、子ヲ放逸ナラシメテ、身ヲ喪ニ至ルニ非ズ。佛祖ハ魚肉ハ人ノコノ

ム所ナレドモ、コレヲ制シ邪婬ハ人ノコノム所ナレドモ、コレヲ戒シメ。飲酒ハ人ノ甘ンズル所ナレドモ、コレラ制ス。五戒ヲ禁ジ、十善ヲスヽム。コレ寔ノ大慈大悲ト云フ。

一或人ノ云フ、君子タル人モ、人ヲ悪ムコトアリヤ。我答テ云フコレアリ、不義ノ人ハ義者ノ讐ナリ。無道ノ人ハ有道ノアダナリト云ヘドモ、我タメニニクムコトナシ。我ト人トノアイダニシテ、アダヲ報ユルコトハナシ。不義不仁ノ人ハ、道ノアダナリ。君子ハコレヲ悪ム。人我ニ讐ヲナストイヘドモ、私ノアダヲバ捨テヽ、ムクユルコトナシ。故ニ曰ク伯夷叔齊ハ舊悪ヲ思ハズト云々。

一李太白ガ云フ、ソレ天地ハ萬物ノ逆旅、光陰ハ百代ノ過客ナリ。浮世夢ノ如シ。歡ヲナス幾時ゾ。古人燭ヲ秉テ、夜遊良ユヱンアルナリ。萬物ト云フニ有情非情コモレリ。人ヲモ物ト云ヘリ。故ニ人物ト云フ。天地ノアイダ、萬物ノユキカフ旅ノ宿リナリ。ツイニトヾマルコトナシ。光陰ノ過ルコト、マタ旅客ノスギテヤマザルガ如シ。四時ノスギユクコト、百代モ違フコトナシ。コノ身ハ夢ノゴトシト、有ト見テ跡ナシ。マタ見ルガウチトテモ幾トキゾヤ。ユヘニ古人夜ヲ以テ日ニ繼ギ、燭ヲ秉テ夜遊スルコト、所以ナキニアラズトナリ。コヽニヲイテ人アヤマルベシ。遊ブニ節アリ。セツニ當ランハ遊ブモニクカラズ。節ニアタラズシテ、アソブハ狂人ナリ。セツヲスグルコトナカレ。セツト云ヘルハ、竹ノ節ノゴトク、ヨロヅノコトニ、大方サダマリタル程アルモノナリ。然レバ遊ブトテモ程アルベシ。ソノ程々ニ過ナバ、ヨキニアラジ。公家武家社家出家、ソレ〲相應ノアソビアルベシ。ソノ身ニ不相應ノアソビ、コレヲ節ニアタラズト云フベシ。出家ナドハ遊ブト云フコト、アルベキニアラズ。然アレド世クダリテ、人ノ心劣リヌレバ、大カタノ相應シタル遊ビハ、人ノ免スコトアルベシ。夜會ノ忍ビニハ、詩歌ナドモユルシアラン。三十句二十句ヲツラネナドスルモ、偶風雅ノ人々交

ワルトキノ、興態サモアルベシ。コレヲヨキ作トシテ、佛事ヲ忘レナバ、出家兒ニアラジ。又月花ニ興ジ、十四五許ノ兒若衆ナドイザナイ、花ノモト月ノマヘニ、破籠小筒ナドタヅサヘ、小硯短冊箱ナド見ヘタルモヤサシ。道心アラン出家ハコレヲモヨシトセズ。出家トシテ、道心ナシト云フコトアランヤ。道心アルウヘノ、私ノ車馬ナリ。斯ルコトヲサヘヤマシトス。此外藞苴タル風情ヲヤ。公家武家ニヨラズ、アル族ハ云フ、浮生夢ノゴトシ。燭ヲ秉テ夜遊スト云フコト尤ナリ。ナニゴトモ夢ゾ。只アソベトテ、限リナク心ヲ動シ、色ニフケリ、侈ヲキワムルコトハ、古人ノ言ヲ引キ用ユトイヱドモ、古人ノ心意トハ、雲泥チガイヌルコトナリ。

一某ノ人、身ノタメニ宜シカラザルコトヲ止メタマヘト諫ムレバ、我ハ、ヤ六十ニナリタリ。此ノ年マデ此ノゴトクシテ過キタレリ、今少クバ兎モ角モナラン。マヽナリト云。吁善道ナラバ、朝ニ聞テ夕ニ死ストモ可ナリトコソ思フベケレ。六十ノ上五年ニテモ十年ニテモ、生ンカギリ、今日ヨリ身ヲ善ニ改ンコト、ヨロコバシカラズヤ。

一人ノ眞實ハ、ナニヽテ知リヌベキ。涙ノ外アルベカラズ。思ワズコボレ出ンモノニアラズ。涙ヲコボサン心僞リアルベカラズ。ソノ事ヲフカク思フ、心動キテ、足手ノ爪ノ先マデコタヘテ、情ニテセメ出セル水ナリ。五體ヲ縄ニテマキシメテ出サントストモ、スメル水一滴出ベカラズ。情力ノツヨキコト不思議ナリ。人ノ身ノ中ニ涙ノアリ處トコロアリテ、泣トキニ、ゾコヨリ出ルモノニアラズ。情ヲ以テシボリ出スナリ。愛水ナリ。經ニハ愛水ノウチニコメタリ。然レドモナニゴトニ付テモ涙シテソノコトヲ感ジ思フトイヘドモ、志シ遂ズシテ、ソノ涙僞リニ似タルコトアリ。人ノ心朝夕ニ變ズルモノナレバ、カハル心モアルベシ。マタ思フト云ヘドモ、叶ハズシテ、思フコト僞リニナルヨ

シモアリ。後ノコトハ兎モアルベシ。涙ヲ流ス端的ニイツワリアルベカラズ。

一ソノ體ノ動クト云フハ、內ニ心ウゴキテ、ノチ體ハウゴクナリ。然レバ體ノ動カヌトテ、ウゴカザルニハアラズ。草木ハウゴカヌモノナリ。風キタレバウゴクト云フ。然ラズ。春ハ萬物ウゴクナリ。動キテ花綠リヲ生ズルナリ。體ニアラワレテ、動カザレバウゴカズト云フハ、道理ヲ知ラザルナリ。人モソノ所ヘユカント思フ心、已ニウチニ動テ、ノチウゴキテソノ所ヘ行ナリ。然ルヲ身ウゴキテユクヲ見テハ、動ト云フナリ。中ニウゴクトコロヲバ、人ミナ見ズシテ、ウゴクトハ心得ザルナリ。思ヒ內ニアレバ、色外ニアラハル、ト云モ、體ハ動カズト云ヘドモ、色ニアラハル、ハ、內動クユヘナリ。草木ハ座定マリテ、進退ナキユヘニ、ウゴカザルヤウナレドモ、內ニ動テ花綠ヲ生ズルコト、草木ノウゴキナリ。

一梅花ヲ咬バ梅仁ノ味ニ同ジ。杏花ヲカメバ杏仁ノアジニヲナジ。諸華諸仁ミナヲナジ。仁ハ木ノ根本ナリ。枝葉モマタソノ根本ヨリ出ヅ。然ラバ枝葉ヲ咬トモ、ソノ仁ノアジタルベシトイヱドモ、花ハソノ木ヨリモ精粹ナルモノナリ。枝葉ヲカムトキハ、則チソノ仁ノ味アルコトヲ覺ヘズ。コレ枝葉モ根本ハヲナジト云ヘドモ、麤ニシテ眞味スクナキユヘニ覺ヘザルナリ。花ハ木ノ精神ナルユヘニ、根本ナリ。味ヒコ、ニ聚リテ、雜駁ナキユヘナリ。假令バ人ノ本性ハ仁ノ如シ。コレ人ノ根本ナリ。根本ヨリ起リテ言行ニアラハレ、僞リナク至一ナルハ、仁ト花トノ味ヒ一ナルガゴトシ。人ノ情意マコトハ、草木ノ枝葉莖ノゴトシ。枝葉莖ミナ始メハ、仁ヨリ出デ生ズト云ヘドモ、眞少クシテ、ソノ仁ノ味ヲ覺ヘズ。人ノ情意誠モ、根本ノ性ヲ離レズトイヘドモ、血氣ニ化セラレテ、ソノ眞ヲ失フ。故ニイツワリニシテ眞ナシ。草木ノ枝葉ヲ咬テ、仁ノ味ヒナキガ如シ。草木ニ枝葉バカリニテ、花ナ

クンバ、誰カコレヲ愛セン。人トシテ眞ナキガ如ク、人トシテマコトナクンバ、誰カコレヲ愛セン。草木ノ枝葉ニモ、花仁ノ味ハスコシハアレドモ、麤ニ覆ハレテ、精味顯ワレザルナリ。惡人モ眞ハ根本ノ性ニ備ハリテアレドモ、情識ニ覆ハレテ、ソノ光リアラハレザルナリ。善人ハ情識消シテ本性ニ隨フユヘ、眞多クシテイツハリスクナシ。

一火雲トハ、只雲ノ赤キヲ云フナリ。雲ニハ黑ク白キナラデハナシ。紅日ウツラフトキハ、雲アカク見ユルナリ。紅葉ニ露ヲ見ルガゴトシ。雲ノアカキニハアラズ。雲ニクロキハナシ。厚キトキ雲黑ク見ユルナリ。烟リノウスキトキハ、白ケレドモ、コキ時ハクロク見ユルガゴトシ。山ヨリ生ジテ上ルトキハ、雲ミナ白シ。マタ雷雨催シテ、風クモヲ峰ヘ吹アツムルトキハ則チクロシ。雲厚キユヘナリ。青ハ天ノ色ナリ。然レドモ天ニ青キイロナシ。遠ク高キユヘニ、アヲク見ユルナリ。水淵フカキトキハ、則チアヲキガ如シ。虚緑ト云フハ天ノ青キニ似タル色ヲ、段子ニ染ナシテ云ヘリ。

一薫風南ヨリ來リ、殿閣微涼ヲ生ズトテ、夏ハ南ノ風涼キナリ。薫風トハ南風ナリ。或人不審シテ云ク、南方ハ火ナリ。薫トハフスベルト讀リ。殊ニ夏ニシテ、ナニトテ夏ノ季、南風ハスヾシキゾヤ。曰ク南方ハ火ナリ。火ハ熱モツトモ甚シ。ネツ風ヲ生ズトテ必ズ火ヨリ風生ズルナリ。南方君火ノ威烈扇ヒテ、北方ニ溢レキクリテ涼シキナリ。ソノ火ノ甚シキトコロハ、スヾシカラザレドモ、火ヨリ生ズル風ノニク處スヾシキナリ。古歌ニ、

此ホドノ南ノ風ニウキミルノヨル〱スヾシ芦ノ屋ノ里

一南ムキノ座敷ハ、夏スヾシク、冬アタヽカナリ。夏ハ南風涼シ。冬ハ時寒ズルニ、南ノ陽氣ニヨリテ暖カナリ。北ムキノ座敷ハ、夏アツク冬サムシ。夏アツキハ南フサガリテ、風キタラザルユヘナリ。

冬サムキハ尤北ニムキタレバ、北方ノ陰寒ニムカヒ、南陽ニ背クユヘナリ。

一船ニモ荷ヲ重クツメバ覆スベシ。車モマタ然リ。馬モ重ク荷ヲ負セヌレバ、脚ヲ折ルナリ。人モ身ニ應セザル荷ヲ持テバ、身ノ舟ヲクツガヘスベシ。身ヲバカロクモツベキナリ。

一五條ノ橋ノウヱニテ、乞食手ヲ出シテ云ク、因果ノ道理ニセメラレテ、カヽルウキ身ニ、一文クダサレヨ。コレハ因果ノカナシキモノニテ候ト云。大聖國師諸人ニ語ラセシム。師代リテ云ク、ヲソイスイ。

一生々ノアイダハ、我等モカヽル身トヤ成ツラン。生ヲ隔テ、即忘ノ小根ナレバイザシラズ顔ナリ。酒ノ酔ノ昨日狂ヒ、亂走シテ、人ニウタレ縛レシモ、酒毒ノタメニ神ヲクダキ、魂ヒヲ散ゼラレテ、昨日ヲ記ヘズ。只今日トノミ思フガ如シ。生死ノミギリハ、鑊湯爐炭ノセメニ、舊有ノ身ノクルシミヲ忘失スルコト、彼ノ酒ノ酔ノ如シ。

一世ニ虚トスベキ理ナシ。ミナ實ナリ。モシ虚ヲノブルノ文アルモ、虚ヲ以テ休トキハ、則チ虚即チ實ナリ。假令バ泡影ヲ説トキハ、即チ虚ヲトクナリ。虚ハ即チキヨニシテ、説底ハ實ナリ。若シ實説ヲ以テ、虚トスルトキハ、則チコレ虚ナリ。虚ヲ以テ虚ヲ説ケバ、コレ實ニアラズ乎。

一小事ノ費ヱヲ、ナニトモ思ワザル人ハ、大事ヲナシガタシ。小ヲ積デ大ヲナスモノナレバ、小ヲ捨テ大ヲ成スコトナルベカラズ。大ノ本ヲワスレナバ、末ヒロクナルベカラズ。草木モ一寸ニハヱ出ルヲ、オシタテヽコソ、大ニモナルベキモノナレ。君子ハ本ヲツトム。本立テ道成ルト云フコト、孔子ノ語ナリ。萬ヅニ本アルベシ。本ヲワスレヌ心ヨキナリ。一粒ノ米一錢ノ錢ヲ惜シト思フ人ハ、大ナルコトヲナスモノナリ。

一身貴ク成リテ、本ノ賤キヲワスルベカラズ。家富テ貧キトキヲワスルベカラズ。賤キハ貴キノ始メ、貧キハ富ノハジメナリ。主ノ恵ミニテ身タツトク成リテ、イヤシキヲ忘ル、ユヘ、主ノ恩ヲアダモノニナシテ、道チガイヌルホドニ、果シテ身ヲウシナフ。主ノメグミニテ家富テ、マヅシキヲワスル、ユヘニ、主ノ恩ヲアダモノニナシテ、道違ヒヌルホドニ、果シテ身ヲウシナヒ、マタ家ヲ亡フ。

一論語ニ己レニ克テ禮ニ復ルト云フハ、己レヲ克トハ、我身ヲ責ルコトナリ。レイニカヱルト云フハ、禮ハ道ナリ。己レガ身ヲ恣マヽニシテ、随意随行ナレバ、道ハミナ外ニナルナリ。然ルニヨリ、ヲノレガ身ヲセメテ、随意ニセザレバ道ニ叶フホドニ、外ヘナル道ガ、ミチニ歸ルト云フナリ。禮ハ道ニカナフヤウニシタル禮ナレバ、禮即チ道ナリ。道即禮ナリ。道ト禮ト二ツアルベカラズ。器ヲ鑄ルニ陶ヲ以テスルガ如シ。カタト、鑄タル器ト、カハルトコロナシ。小人ハ我身ヲ樂クシテ道ヲ亂スナリ。君子ハ我身ヲセメテ道ヲ道トスルナリ。ソノ條目イクバクゾヤ。分量ニ過テ大食スルモアシヽ。ソノ人々ノ分量アルベシ。殊ニ出家ナド放逸ニ物ヲ喰フコト曲事ナリ。遺教經ニ食ヲ受テ藥ヲ服スルガ如クスベシト、食ハ飢ヲ救ンガタメナリ。味ヲタノシムコトナカレトアルゾ、天ハ高シトイヱドモ、ソリカヘリテアリカズ。地ハ厚シトイヱドモ荒クフミナラサズ。夜ハ寢ネ晝ハ起ル。コレ人ノ常ナリ。然ルニ朝寢ヒル寢ホシヒマヽニスルコト、己レヲセメザル一條目ナリ。己レヲ責ズバ道ハナキモノト知ルベシ。一切ノコトニ就テ我身ニタノシミト思フコトハ、ミナ道ニ叶ハザルワザヲスルモ、人ニ安キコトヲ與ヘ、我ハ難キコトヲスル、食物モヨキトコロヲバ人ニスヽメ、アシキ處ヲ我食スル、コレミナ己レヲセメテ禮ニ復ルノ義ナリ。今時ノ人ハマヅ仕ヨキコトヲ我シテ、ヨカラザルモノヲ人ニ與ヘ。食事モマヅヨキヲ我食シタガヨキト云フ程ニ、道ニカナフコトハ一ツモナキナリ。適一

人モ道ヲコノム人アレバ、笑ヒ猜ミ倒サントスル。コレ世人ノ意ナリ。

一法華經八卷ヲ蓑トナシ、阿彌陀經ヲ腰ミノニシテ著タリトモ、ソノ經ノウチ一句半偈ノ意旨ニカナフヤウニ、心ヲバ持マジケレバ、雨ハ降トモ蓑ハ着ザリケリ。地獄直走リト、一休モイワレシトナリ。

一ソレ地獄ノ說相多シ、地ノソコ由旬ヲ重テ在リト見ヱタリ。然レドモ此等ノシサイハ、得道ノ人此レヲ知ルベシ。由旬ヲカサヌルト云フハソノ遠キコトヲ云ヘルナリ。遠キトハ天堂ト地獄トノアイダナリ。誠ハ地獄ハアタルトコロ有ベカラズ。一念相ヨリ見出シタル地ゴクナレバ、大山ノ麓、海岸ノ邊、アルヒハ荒野、アルヒハ深澤、一サイ所ヲ定メズ。刹那ノアイダニ、獄相アラワレテ、焦熱大焦熱、紅蓮大紅蓮、牛頭馬頭ノ、羅刹ノ呵責ニ逢ト思ヒテ、叫喚大叫喚、マタ刹那ノアイダニ、朝日ニ霜ノ消ルガゴトクニシテナクナル。無シト思ヘバマタ現ス。カヽルコト一念ノアイダニト思ヘドモ、各〳〵一念ニ劫ヲ經ル如クナルハ、ソノ人ノ念アルニ依テナリ。衆生コノ苦ルシミヲ受クルヲ、佛コレヲ憐ミテ、ヒロク方便ヲ以テ、コレヲ度セントス。昔シ一僧アリ。荒野ノウチニテ俄ニ地獄ノ相ヲ見ル。驚キテコレヲ問ヱバ、獄卒ノ云フ、コレハコレ玄砂ノ地獄ナリト云フ。玄砂トハ玄砂ノ備禪師ノコトナリ。玄砂ハ修行ニ出ントテ、親ノ障リニナルコトヲ思ヒ、親ヲ舟ニノセ海ニ沈メ歸テ、修行ニイデラレシ人ナリ。

一江口ノ女、普賢菩薩トナリテ、白雲ニ乘テ天ニ上ルト云フ。普賢女ト云フハ普賢ノ反相ナリ。婬欲熾盛ノモノ、苦ルシミヲ助ケントテ、女ニ化身シテ人ノ望ミヲ叶ヘラレタゾ。コレヲ以テ江口ノ謠ニ作レル歟。稽古略ト云フ書ニテ見タト覺ユ。カサネテ引見ルベシ。善導大師ノコトモ、此ノ書ニアリ。

一物ヲ辨フハミナ氣ニ依ル。ヨクモノヲ味フハ目ヲ閉グトキハ、則チコレヲワキマフ。尤目ヲ開クトキハ則チ精氣サンズルユヘニ覺エズ。物ヲアジワヒ知ルコトハ目ヲフサギテ、分別セネバ知ラレヌゾ。盲目ノ物ヨクヲボユルモ目ヲトヂテ氣力散セザルユヘナリ。古語ニ目ヲ閉テ蝸牛ヲ食フ酸、澁、苦ト云フモ、目ヲトヂ能ク蝸牛ヲアジワヒミレバ、酸ク澁キ味ガアルゾトナリ。委シク物ヲ味フハ目ヲトヂテ心靜カニ味ハネバ知ラレヌゾ。一場トハ當分ノコトゾ。其場ト云フ心ゾ。第一場ナドト云ゾ。此句著語ニツカフゾ。

一木ノ枝垣キ壁ノアル方ヘサヽザルハ、草木コレヲ知ルヤウナレドモ、知ルニハアラズ。草木南ニアレバ北ニアル壁ニアタル氣ガ、ツカヘテヨラレザルニヨリ、南ヘ傾キテ北ヱ枝ヲサヽザルナリ。又南ニ垣壁家ナドアレバソレニアタル氣ニ追返サレテ、枝ヲサヽズシテ北ヘカタヨルナリ。垣壁ト樹トノアイダハ、空キトコロナレドモ、氣ソノアヒダニフサガリテアルナリ。氣ハ人ノ目ニ見ヱヌモノナレバ、何モナキ樣ナリ。魚ノ水中ニアルガ如シ。魚ノ一體頭上腹ノ下左右ミナ水ナレドモ、魚ノ目ニハ水ハ見ヘヌナリ。魚水ヲ見ズ。人空ヲミズト云ヘリ。又タトヱバ小兒竹鐵炮ト名ケテ、竹ノ筒ニ紙ヲカミシダキテ玉トナシテ、コレヲ入レテ又アトヨリ、一ツ重ネテ紙ノシダキヲ入テツキヤルトキ、サキヘ入タル紙ノ玉ヘ、後ノ玉ユキトヾカヌサキニ、ハツシト鳴テサキニユクナリ。コレサキノ玉ト後ノ玉トノアイダハ、空ナレドモ、ソノアイダニ氣ガ充テアルユヘニ、此ノ如ク萬ノ義理ヲ工夫スルニ、初メ淺ク思ヒタルコト正義ニアラズ。猶ヨク工夫シテ二重ニ正義ヲ見立ルガヨク合フモノナリ。ミナ思フハ草木ハ心ナシトイヱドモ、垣壁ノアル方ヘハ枝ヲサヽヌ程ニ、草木モ心ナキニアラズト云ヘリ。此ノ義ハ尤サウニアレドモ、枝ヲサヽヌガ心アルニハナシ。氣ニセカレテサヽレザルナリ、初

メノ義ヲ取テ尤ナリト思ヘドモ、今一重思惟シテ見レバ、草木モ知ラズシテ氣ニセカレテ枝ヲサ、ザルナリ。萬ノコトヲナスニ何ゴトカナサレザルコトアランヤトテ、無理ニナサントスレドモ、成ザルコトアリ。必ズナラザル道理アルベシ。此ノ道理ヲ見ル人ハ止テスマジキナリ。ソノ道理ヲ見ザル人、ナニゴトニモ無理ヲスルナリ。垣壁ノ間ニ氣塞ガツテ、草木ノ枝ノサ、ザルガゴトシ。草木モ知ラズシテ枝サ、レザルナリ。人ノ作ス業モナニユヘニナサレヌトモ、知ラズシテナサレヌコト事々アルベシ。理ヲ知ル人ハ、此ノ事ヲ止ムベシ。理ヲ知ラズシテ、無理ニナサントスルハ草木ニ劣レル歟。

一世諦ノ方ニ始末ナクシテ、財寶ヲ猥リニツイヤスモノ、ソノ行末カナラズ盗ヲス。然ラザレバ虛言ヲ云ヒ、人ヲ誑カシテ、人ノ財寶ヲトランコトヲ思フ。コレ穿窬ノ盗人ニハアラズ。サレドモヲナジクコレ盗人ナリ。世諦ニ始末ヨキモノハ、我財寶ヲマモリテ失ナハザレバ、自ラ用ニ事ヲカ、ズ、自用ニコトヲ欠ズシテ、盗セント思フモノハマレナリ。自用ニ事ヲカクガタメニ危フキコトヲ忘レ、命ノ果ンコトヲ顧ミズシテ盗ヲス。然レバ人ハ人ノ財ヲ貪ラズ、ヨクシマツヲシテ自用ノ欠ザルヤウニスベキコトナリ。人ヲ貪ラズシテ我持ツ財寶ヲ守ルモノハ、人ノタメニ害セラル、コト多シ。

一老釋ノ二門ヲ宋儒コレヲ異端ト云フ。然ラザル歟。夫子ノ異端ト云ヘルハ、正シク老釋ノ二門ニアラジ。孔子ノトキ佛法イマダ起ラズ。儒ノサハリト成ルコトアラジ。孔子スデニ道ヲ老子ニ問フ、老子ヲモ異タントハ、孔子ノタマフニアラジ。家語ニ曰ク、孔子南宮敬叔ニ謂フテ曰ク、吾聞老聃イニシエニ博クイマヲ知リ、禮樂ノミナモトニ通ジ、道德ノヲモムキヲ明ムルトキハ、則チ吾師ナリ。今將ニユカントスト云々。カクノ如キノ語ヲ得テ、老子ヲ異端ト云ハンヤ。只コノ言人ノ異タント云フコ

トヲ知ラズ乎。孔子ノ道釋ヲ異タント云フニアラジ。三皇モスデニ道ナリ。我儒宋ニ問フ。古今ニアキラカニシテ、禮樂ノ原ニツフジ。道德ヲアキラムルノ外ニ孔子ノ道アリヤ。林氏ガ四書正義ニ、三教正宗ト號ス、異タンノ事見ヘタリ。異端トハ道釋ノ二門ヲ言ニアラズ。三教各イタンアリ。儒ニシテ仁義ノホカニ、道ヲ求ムルモノハ儒ノ異タンナリ。道ニシテ性ヲ錬リ神ヲ頤フホカニ、ミチヲモトムルモノハ道ノ異タンナリ。釋ニシテ心ヲアキラカニシテ、性ヲサトルノ外、道ヲモトムルモノハ、佛法ノ異端ナリト云ヘリ。

一 百兩ノ黄金ハヲシマズ、一飯ヲバ輕ンゼズトハ、如何ト問フ。人ヲ救ヒ人ノタメニス黄金ナンゾ惜カラン。一飯カロシトイヘドモ、命ヲツグコト一飯ニ在リ。豈カロンズベケン乎。古ヘ帝王ノ時ニ士食ヒノコシノ一飯ヲ溝ニ捨ツ。王スナハチ士ヲ杖殺セラル。王ノ兄弟在テ云フ、一飯ヲ以テ人ニ代ルト云々。人ハ大ナリ。一飯ハカロシ。然リトイヘドモ後人ノイマシメトス。マコトニ大ヒナル哉。一人ヲコロシ萬人ヲ助クルノ理ナリ。百姓マコトニ艱ナンヲツクシテ穀ヲ得ル。コレヲカロンゼバ、何ヲ重シトセンヤ民ハ國ノ命ナリ。君子ハ腹心ノゴトクスルゾ。

一 楚王狩スルトキ、山跡ニ一人フシテヲキアガラザルモノアリ。王コレヲ問ハセラル、此ノモノ答テ云フ飢人ナリ。王コレニ一飯ヲ與フ。飢人スナワチ起キ去リヌ。ソノ後隣國ト戰ヒニヲヨビ、敵軍ヨリ戈ヲサカサマニシテ戰フモノアリ。何モノゾト問ハセラルレバ。楚山ノ飢人ナリト云フテ、戰ヒ死シタゾ。誠ニ命ハ義ニヨツテ輕シト云ヘリ。此ノモノタヽカヒ死シタルガ親切ナリ。吾主ニハ忠アツテ人ニハ義アリ。此ノモノ楚王ノ軍ヘカケ入テ與力シタラバ曲事ナリ。楚王一人ヲ得タリトモ勝利ヲ得ベカラズ。吾ガ主ノタメニ兩心ナク、恩ヲ知リテ戈ヲサカサマニス。涙コヽニ在ルナリ。人ノ命ハ黄

金ナリ。カロカラザル黄金ノ命ヲカロンジテ、重カラザル一飯ノタメニ死ス。マコトニコレ義ヲ知ルモノ。

一垣ヲヤブリ、藏ノ尻ヲ切バカリガ、盗ニハアラズ。道理ニ叶ワザル物ヲ衣、道理ニカナワザルモノヲ食フモノ、ミナ盗ナリ。出家トシテ道心ナクシテヨキモノヲ著、ヨキモノヲ食フ。コレ盗人ノ長吏ナリ。臣トシテ君ニ忠節ヲ存セズシテ肩ニ衣、口ニ食フ物ハ、ミナ主君ノモノナリ。コレマタ盗人ニ似タリ。數年ヤシナハレテ一度君ノ用ニ立ベキ身ヲ、行ヒノ義ナク、無養生シテ終ニイチドノ用ニモタヽズ、身ヲ果サバ、數年ノタマワル所ノ所領、ミナ盗賊ニヲナジカルベキナリ。主親ヲ持タラン人ハ我身ヲ我身トヲモワズ、主親ノ身ト思フベシ。主親ノ身ト思ハヾ、何ゾ我マヽニシテ身ヲ毀ナヒ、一度ノ用ニタヽズシテ、大事ノ身ヲ捨ベケンヤ。數年ノ恩賞ヲ一度報ゼント思ハヾ、食タキモノモ多ククロフベカラズ。飲タキモノモ過スベカラズ。有タキマヽニ身ヲ持ベカラズ。身全タカラズバ如何カシテ、望ミハ達スベキ。ソノヽゾミナクシテ、徒ニ恩賞ヲウケテソノ祿ヲ食フハ、盗人ニ異ナルベカラズ。人タルモノコレヲ耻ザランヤ。

一因果歴然ヲ知リテ、因果ヲ亡ボスモノハ教宗ナリ。因果レキゼンヲ見テ、因果ニアラズ。元因無ケレバ、亡ボスベキ果ナシト見ル。コレ宗乘ナリ。怪モノヲ見テ、怪ト爲ザレバ、ソノ怪ヲノヅカラ消ユ。因果ヲ見テ因果トセザレバ、因果ヲノヅカラ亡ブ。問フコレ斷滅ニアラズ乎。コレ斷滅ニアラズ。佛ノ言ヲ見ズヤ。顚倒夢想究竟涅槃。〔割註〕私シニ云フ、因果ヲ見テ因果トセズト云フ語ヲ見テ凡ソ人因果ヲ破ルトキハ、則チ因果ニ落ベキコト歴ゼンナリ。因果ノ境界ニ暗カラズシテ至リモセズ。猥リニ因無果シト思ハヾ、地獄ニ入ランコト矢ノ如キ乎。」

一達磨初テ禪ヲ作リ出セルニアラズ。若シ達磨作リイダセルト云ハヾ邪法ナルベシ。所謂ル禪ハ佛ノ傳ユルトコロノ法ナリ。佛ニ無量ノ諸佛マシマセドモ、釋迦如來西天ニ出世シ給ヒテヨリ、慈尊下生マデノアイダニ、佛ト推イダシテモフスハ、釋迦如來ノコトナリ。餘ノホトケ達ヲバ、ミナソノ名ヲ呼テ、阿彌陀佛、藥師佛、多寶佛ナドトモフスナリ。無名ニホトケトモフスハ、釋迦ト心得ベキナリ。達磨ノ立ルトコロノ禪ハ如來藏ノ裏ノ禪ナリ。蓋シ禪ニ多種アリ。外道禪、凡夫禪、大乘禪、最上乘禪ナリ、圭峯宗密禪師之錄之中ニ、コレヲ擧グト寶藏錄ニ載タリ。ソノ語ニ云フ異計ヲ帶ビ、上ヲ忻ヒ、下ヲ厭テ修スルモノハ、コレ外道禪ナリト云々。上ヲネガウト云フハ、菩提ヲモトムルヲ云フベシ。下ヲイトフト云フハ、煩腦ヲキラウヲ云フベシ。異計ヲヽブルトハ、佛ノ諸行ノ外ニ、別行ヲハカルナリ。コヽヲ以テ禪トスルハ外道ナリ。一種一行ニトフキナリ。凡夫禪トハ曰ク、正ニ因果ヲ信ジ、マタ忻厭ヲ以テ修スルモノハ、コレ凡夫禪ナリト云々。正ニ因果ヲシンズトハ、上ヲネガヒ下ヲイトフノ義ナリ。煩腦ハ即チ法界ノ因果ナリ。煩腦ヲ信ズル故ニコレヲ厭フナリ。頓ニ自心ヲサトルトキハ、則チ法界ノ因果ヲ世々回リナガラ、因果ニアラズ。因果ナキニアラズ、因果アリナガラ、因果ニアラザルコトヲ知ラザルユヘニ、マサニ因果ヲ信ジテ、忻厭ヲ以テ修ス。コレ凡夫ナリ。ニワカニ自心ヲサトレバ、因果ハ因果ニアラズ。ユヘニ曰ク、因トシテ修スベキナク、果トシテ感ズベキナシト、コヽニヲヒテ古今千錯萬錯、採テ因果ナシト謂フ。今日諸人灰頭土面、コレ因果ニアラズシテナンゾ。百丈スデニ誤リテ、五百生野狐ノ窟ニイル。今ノ參學ノ徒、ミナコレヲ誤リ畢ル。

一哭モ笑モ、マタ人面ノ變ナリ。常ヲウシナフモノナリ。悲歡ハ他方ヨリキタリテ、內ニ感ジ外ニアラワルヽモノナリ。悲歡他方ヨリキタルトハ、我子ガ他國ニ在リテ死セリト告ゲキタルトキハ、悲ミ

他方ヨリ來テ耳ニイリ、內ニ感ジ人面コレガタメニ哭ス。我子他方ニアリテ幸ヒヲ得ルト、告ゲキタルトキハ、則チ歡ビ他方ヨリ來テミヽニ入リ、ウチニ感ジ人面コレガタメニ笑ヒヲ含ム。我ニモト悲歡ナシ。他方ヨリ來ルユヘニ、悲ミ喜歡ビツクルトキハ、則チ笑ヒ去リ、哭キサリテ、面常ニカヘルナリ。人ミナ變ヲ見テツネヲ知ラズ、ツネヲ知ルモノハ、ヨク變ニ隨フ。モシ悲歡モト我ニ在ラバ、悲歡ツネニシテ絶ベカラズ。時ナラズシテ來リ、マタトキナラズシテサルトキハ、則チ喜怒愛惡ミナ常ナキナリ。我心ハ常ナリ。假令バ鏡ノゴトク明ナルトキハ、則チツネナリ。トキニヲヒテ影像ノ現ワルヽハ、コレツネ無キナリ。

一萬ノ所作ニ、上手ト云フハ力ヲ用ヒザルナリ。道理ヲ得テ作コトニハ、力入ラザルモノナリ。人ノ骨切ルコト、力ニテ切ラバ、如何ナル刀モチカラニ任セバ切レナン。小力ノモノハ人ニ切ラレテノミ果ナン。力ニモヨラザレバコソ、大力ノ人モ、小力ノモノニ隨ヘラレテ果ヌレ。刀ヲ用ヒズシテ天下ヲ取モ道アリ、木竹玉石ヲ磨クニ、力ヲ入レテ推ツクレバ、嘗テミガヽレズ、手ヲ輕フシテウケテイツトナク磨ケバ、高キトコロヒキクナリ、低キ所タイラカニナレリ。推付テキシレバ只光彩ノミ出デ來テ、高キトコロハ舊キニ依テタカク、低キトコロハ舊キニヨリテヒキクシテ、平等ナラズ。木賊ト木竹ノアイダユルガセナレバ粉トナリテ、木竹ノ高キ所落ルナリ。推ツクレバ木賊ト木竹ノアイダ緊密ニシテ、粉イヅベキヤウナシ。ウケテミガケバ兩物ノアイダニ、粉イヅルナリ。力ヲ用ヒズシテ事ヲ調ルナリ。平胃散ト云フ藥ハ、枳殼ヲ以テ胃ノ高キヲトリ。白朮ヲ以テ胃ノ卑キヲタスクルニ依リテ、胃タイラカニ成ルトナリ。木賊ノ強キハ枳殼ニタグラヘ、人ノ手ノ柔和ナルハ白朮ニタグラベナバ、其モノタイラカニナルベシ。木賊ノツヨキニマタ力ヲツヨクセバ、高キ所ハソノマヽタカク、卑

キトコロハソノマヽ低クシテ、平等ヲナンゾ得ンヤ。

一硯ニ墨ヲ研モヲナジ義ナリ。緊シク打ツクレバ墨却テイデス、墨ト石トノアイダユルガセナレバ、墨粉トナリテ色濃ヤカニナルナリ。サテニヤ諺ニ墨ヲバ餓鬼ニスラセヨト云フ。殊ニツヨクスレバ墨アラクシテ、筆紙ニ泥ス。

一馬ニヨク駕ス人、手綱ニ力ヲ用ヒズ。鞍上ニ理ヲ得テ、腰ヲ以テ馬ヲ自由ニヤル。收ムレバ馬トヾマラズ。放セバ馬却テトヾマル。馬ト我ト心ナクシテ合フコト、此ノ道ノ眼トカ。

一庖丁ガ牛ヲ解ク。ソノ刀九年ニ一度トキシトカ。コレソノチカラヲ以テセズシテ、カタナヲ費ヤサヾルユヘナリ。

一輪扁ガ輪ヲ斲ルハ、ユルヤカナラズ、キビシカラズ。コレヲ手ニ得テ、コレヲ心ニ應ズ。口ニモ言コトアタワズ。數アリテ、コレヲ存スト云ヘリ。カク云フハ莊子天道ノ篇ニ云ヘリ。桓公ノ堂上ニ書ヲヨメリ。輪扁ト云フ者ハ、車ノ輪作ル人ナリ。彼ノ槌ヲステ鑿ヲステヽ、堂ニ上リテ桓公ニ問テ曰ク公ノ讀トコロノモノハ何ゾ。公曰ク聖人ノ言ナリト、扁ガ云フ聖人在リヤ。公ノ曰クスデニ死セリ。扁ガ云フ然ラバ君ノヨムトコロノモノハ、古人ノ糟粕ノミト、桓公ノ曰ク我書ヲ讀ム、輪人ナンゾ是非スルゾ。但ソノ理アラバ可ナリ、モシサナクバ殺スベシト、扁ガ云フ我スルユヘンヲ以テ、君子ノ道ヲハカリ見ルニ、輪ヲケヅルコト、ユルキトキハクツロヒテ固カラズ。キビシキトキハシブツテ入ラズ。サレバ徐カラズ疾シカラズ。只コレヲ手ニ得テ、心ニ應ズ、ソノ理ハ口ニモイワレズ、ソノ分數ト、我心トノソノ間ニアリテ、我子ニモ教ユルコトナラズ、子モ受ベキヤウナキ道ナリ。故ニ七十ニナリテ老ヌレドモ、我曰コレヲツクル。古人モ此道ハ傳ユベカラズシテ死ス。然ルトキハ則チ君ノ

ヨムトコロノ書ハ、古人ノ糟粕ノミナリト云ヘリ。今ノ書ニ殘ルトコロハ古人ノ言ナリ。古人ノ言ハ酒ノ糟ノ如シ。酒ノ糟ノ干シタルヲ甞メテ、酒ノアジワヒハ知リガタキナリ。書ヲヨク讀モノハ多シト云ヘドモ、理ヲ得ルモノハスクナシ。故ニ今ノ世ニ聖人ノ書ヲ講ジアキラメテ聖人ニ遠ル。

澤庵和尙玲瓏隨筆 巻之四

一偏ニ人ヲ謗リ、ヒトヘニ人ヲ褒。ミナ理ニアタラズ。佛法ハ福智ノ二嚴ナリ。智ヲ以テ福ヲステ、福ヲ以テ智ヲスツ。ミナ相當ラズ。池寺ノ白翁ガモトニ京師ヨリキタル僧アリ。スナワチ欲フカキ坊主ハ居ラレサウカト問フ。誰ゾト云ヘバ徹翁ノコトナリ。此ノ言ヲキヽテ無欲ヲ以テ殊勝トス。徹翁ヲ謗ルベカラズ。又ヒトヱニ徹翁ヲ讃テ白翁ヲソシルベカラズ、タヾ白翁ヲ以テ徹翁ヲウスクシ、徹翁ヲ以テ白翁ヲアツクスルトキハ、則チソノ二ツノ中間ニ、不薄不厚ノ道アルベシ。白翁ヲ以テハ、針ノ頭ニテ鐵ヲ削ルノ費ヱヲ示シ、徹翁ヲ以テハ泥多クシテ佛大ヒナルノ理ヲ示シテ、尤可ナラン乎。南陽ハ車ヲ帝城ニトヾロカシ、懶融ハ芋ヲ衡山ニ煨ス。懶融ハ智ヲ純ラニシ、南陽ハ福ヲ傾ケ、偏ニ智ヲ立ント欲ルトキハ、則チ智ニ用ナク。ヒトヘニ福ヲ修セント欲スルトキハ、則チ用體ヲ失ス。モシ體用ノ二ツニヲヒテ、何ヲカ尤モ重シトセン。體ヲスツルトキハ、則チ用アルコトナシ、體アルトキハ、則チ終ニ用ナキコト能ハズ。然レバ則チ體ヲ以テモツトモ重シトスルナリ。智ハ體ナリ。福ハ用ナリ。マタコヽニヲヒテ曰ク、池寺今日法水涸ル。靈山コンニチヒトリイマダ散ゼズ。此ノ旨如何ン。曰ク池寺ノ法水コンニチ早ク涸ル。靈山ノイマダサンゼザルモ、亦終ニ盡ニ歸スベシ。此ニヲヒテ若シ體ヲ失セバ、再ビナンゾ起ラン。達磨大師ノ曰ク、我法三千年ノ後イマダ一絲毫モ移シ私ズト云フ。コレソノ體ニ依テ言フナリ。達磨寺幾度カ廢壞ニヲヨブ。ソノ體ヲ立ルユヘニマタ起リテ今ニ存ス。アルヒハ廢壞シテ廢壞セザルノ眼ハ、又一道ナリ。混雜スベカラザルナリ。

一善天ヲ言フモノハ、必人ヲ質ス。ヨク人ヲ言フモノハ、カナラズ天ニモトヅク。〔割註〕仙傳遜思邈。」天ト人ト一ナルガユヘニ、天ヲ以テ人ヲタヾセバ、違フコトナシ。ヨク人ヲ言フモノハ天ニモトヅク。コレ又天ト人ト一ナルガユヘナリ。人天ニ隨フトキハ、則チ人立ツ。天ニ逆フトキハ、則チ人亡ブ。

一如法作ナルベシ。殊勝作ルベカラズ、如法トハ佛祖ノ威儀ナリ。衣ヲ著ケ袈裟ヲコフムリ。ソノ容ヲ造ル。コレ度生ノ化義ニシテ、形ニ在ルモノナリ。殊勝ハ心ヨリ生ズ。モシ殊勝ツクルベクンバ血氣ノ煩惱ナリ。人家ノ男女ヲ誑ラカスニ似タリ。殊勝ハモトメズシテ自カラ至ルトモ云ヘリ。解行證ノ三德圓備ノ人ハ、サモアラバアレ。自然ニシテ行跡道ニカナウモノハ、人コレヲ見テ殊勝トイフ。自カラ造ルニアラザルナリ。

一若シ欲ヲハナレンコトヲ要セバ、人ノ物ヲ受ルニ多カルベカラズ。多クウクルトキハ、則チ欲イヨ〳〵フカシ、譬ヘバ絹ヲソメルガ如シ。ソメルニ隨ツテソノ色イヨ〳〵フカシ。凡ソ財寶藏庫ニ滿ルニ隨イテ、欲イヨ〳〵フカシ。一藏ミツルトキハ、則チ又一藏ヲ造ル。藏ノ足コトナキニ至ル。財スクナキ人ハ深ク惜ムノ心ナキナリ。

一法師ノ弟子ヲ取コト、髫年ヲ喝食ト稱シ、アルヒハ小僧沙彌ト作ル。養育シテ以テ大僧ト爲ス、而シテノチ遍參行脚シテサダマレル師ナシ。自ラ工夫坐禪シテ得ルコトアリ。則チ見解ヲ呈ス。ソノテイスル所ノ見事道ニ契フトキハ、則チ某ノ師一言ノ印ヲ以テス。即チ拜シテ以テ師トス。ユヘニ定マレル師ナシ。業ヲウクルノ師ヲ以テ法ノ師トセズ。ソノ遍歷ノアイダニ、幾許多クノ艱苦ヲ經テ、野ニ暮シ山ニ明シ、露食風飡シ、都テ道ノ爲ニスルモノナリ。此ノ如キ人豈道心ナカラン乎。近來マデ

髫年ノ沙彌ニシテ、愛育セラレ、左右ヲ離レズ、絹綿厚クシ、飲食ヲ豐カニシテ、艱苦ヲ知ラズ。偏ヘニ髮ヲ削ルノ俗兒ナリ。ソノ師彼ヲ愛育スルコト、恰カモ老婆ノ孫ヲ養フガゴトシ。ソノヽチ此ノモノ修行ト稱シ、了畢ニ一枚ノ印可ノ狀ヲ書テコレヲ授ケ、終ニ門ヲ出ズ。マノアタリ堂頭和尚ト成ル。カクノゴトキトキハ、則チ毫末ノ道心ナキモ亦宜ナリ。法道衰ヱシヨリ、皆カクノゴトシ。我山ノ先哲ミナ他方ヨリ入來ル。法ヲ我山ニモトメ、開山ヨリハジメ、徹翁、言外、華叟、美叟、春浦、實傳、古岳、大林、笑嶺、春屋、古溪、他流ノ諸老宿ニヲヒテモ、マタ皆カクノゴトシ。只先規ニ復シテ修行カンナンヲ經ル底ノ人ヲ、ヱランデコレニ印ス。則チ道復スベキナリ。

一秋ノ夜ノ寢覺ニ、ツクヾヽト思ヒ出ルコトノミ多カル中ニ、鬼ノ字ヲ、ヲニト訓シタルコトヲ思ヒアタリテ、面白ク覺ヘヌ。鬼ハ歸ナリト、字訓ヲ下シタレバ、カヘルガ、ヲニナリ。萬ノ訓點皆ヲニカヘル、鬼ハ歸ナリト云フハ、本ヘ歸ルト云フ心ニ用ユ。又コチヘ生レテ歸ルト云義ナリ。鬼ハ屈ナリト、字注ヲ下シタレバ、死シテ行バ、魂不レ行シテ、屈シテコチヘ歸ル義ナリ。屈セズシテ行ハ、伸テ神ナリ。神ハ伸ナリト字訓アリ。屈シテ伸ザルユヘニ鬼ナリ。

一老後ニ萬事ヲ忘却スルハ、モノ常ナリ。然リトイヱドモ、壯年ノムカシノ久シキコトハ忘レズ。蓋シソノ遠キヲ記シテ近キヲワスル、ハイカン。曰ク根性正シキトキニハ、心ニ受ルモノ忘レズ、老後精ウスク神サンジテ、心主タヾシカラズ。故ニ前ヲワスレ後ヲウシナフ。恰モ硬木ニ文字ヲ彫テ、ソノ文字ヒサシク泯ザルガ如ク、又柘木ニ文字ヲ彫トキハ、則チ今彫イマ泯ルガゴトシ。古尊宿ノ云フ老人前後ヲ忘却ス。魂既ニ後生ノトコロニ趣クユヘナリト云々。モツトモ理屈ナリ、コヽニ無キトキハ則チ彼ニアルベシ。

一老人夜ネムラズシテ、晝却テネムル。コレ何ノ道理ゾ乎。曰ク、老人ハ氣行ラズ。故ニ氣行ノ度、晝ヲ以テ夜トシ、夜ヲ以テ晝トス。此ノユヘニ夜睡ラズシテ晝ネムルナリ。老人ハ胡麻ヲ以テ良薬トス。恰モ車ニ膏サスガゴトシ。麻油ヲ喫シテ、ヨク氣道ヲ滑ニシテ、以テ氣ヲ巡サシム。老人ハナントシテカ、氣行進マザル乎。曰ク老人ノ皮膚ヲ摩テ、マタ壯人ノ皮膚ヲナデ、知ベキナリ。内ノ筋肉モマタ外ノ皮膚ト相應ズ。腹中ニ槎牙〔割註〕腹中ニサワリアルコトヲ槎牙トイフ。」ヲ生ズルガ如シ。氣行スヽマザルモマタ宜ナリ。車ノ石碍テ碌々タルガ如キナリ。

一老人身ヲ忘レテ、鞍馬ノ花ヲ見ルベク東山ヘユクベシト云フ。徒弟ハコレヲ留トイヱドモ點頭セズ、頻リニコレヲ促ス。ソノ徒弟イカントモスルコト無ク、强テコレニ應ズ。異滅ノ相キタリ、前ヲワスレ後ヲ失ス。此ノ時ノ形ヨシナシ。人ニ見ラレテ自ラコレヲ顧ズ。轉タ小兒ノゴトシ。ソノ故イカン曰ク、老倒當諦ミナ忘レテ壯年ノトキノ思ヒアリ。壯年ノトキ鞍馬ノ花ヲ見、東山西嶺ノ春色ヲ見テ、顏ヲ怡バシメ、ソノ思ヒ不圖方寸ノアイダヨリ出テ、身ヲ忘レ覺ズシテコレヲ催ス。實ニ老ヲワスルヽコト然リ。徒弟コレヲ留ルトキハ、則チ老人ノ云フ、花ヲ見テ機ヲ愛ス。愧ルトコロナシ。我ヲトヾムルハ不思議ナリ。世人ミナ花ヲ見テ機ヲアイス。ソレ我ヲ奈何スルゾ。吁ミナ人常ニ壯年ナラズ。終ニ老ト成ル、壯年ニヲヒテ深クコレヲ思フベシ。又ミナコレヲ思フトイヘドモ、ソノ思ヒト共ニコノ老ノ致ルトコロヲ失ス、コレヲ奈何セン汗顏々々。凡老人ハ今ノ事ヲワスルヽトイヱドモ、ヨク古ノコトヲ記ス。然ルトキハ則チ壯年ノ時ヨリ、老後ノ愧ヲ思フトキハ、則チ老ニ至リ此ノ愧遮ルベキ乎。至人ハ老ニヲヨンデ、猶ミダレザルガゴトキナリ。

一歲六十ニヲヨブモノ、熱病ニヨツテ譫言妄語シテ、諷歌ヲ唱フ。此ノ歌コノモノ十四五歲ノトキ世俗

歌フトコロノウタナリ。今ヲワスレヨク古ヘヲ記スコト必セリ。イマノ我ヲ忘ル、ユヘニ譫語ス。ヨクイニシヘヲ記ス。ユヘニ古風ヲ唱フルモノナリ。今ノ世俗唱フルトコロノ諷歌、コレヲ唱ヘズシテ、古ノ諷歌ヲ唱フ。コレマタ病ニ依テ以テ、心ミダル、ニアラズ。只老ノ今ヲワスル、所ハ、古ヲ記スルノ故ナリ。

一老後爪髮長ジヤスシ。コ、ヲ以テ知ル。陽氣ヨク物ヲ生ズ。陽ニアラズシテ物ヲ生ズルコトアタハズ。人年ヲイ陰カケ陽モツパラナリ、ユヘニ爪髮長ジヤスシ。

一天地ノアイダニ生ズルモノ、有情非情ソノ數カギリナシ。限リナキノ數ヲ以テ、一々カギリナキノ理ヲ盡サント欲ルトキハ、則チ道理ヲキワメ知リガタシ。只一ヲ以テヨクキワメ知ルトキハ、則チソノ理當然トシテ、百千ノモノ皆明ラムベキナリ。然ルヲ群書ニヒロク渉リ、多ク古人ノ詞ヲ知ルヲ以テ博學多聞ノ名ヲモトムル故ニ、上ヲ凌グ心日々增長シテ、脚下ノ理ヲ見ズ。一ヲ忘レ以テ百千ヲ凌グ。寔ニ疾走ルモノ遠キヲシノギ、脚下ヲ見ズシテ蹶蹉ガ如キナリ。

一萬人多シトイヱドモ、一身ヲ以テキワメ知ルトキハ、則チ世界ノ人、ミナ我ト同ジキナリ。

一身心ヲ知ラズシテ、佛心ヲ知ント欲シ、神慮ヲ知ラント欲シ、上ヲ知ラント欲シ、下ヲ知ラント欲ス。ミナ知ルコトヲ得ガタキナリ。孔子ノ玉ハク、イマダ生ヲ知ラズ、焉ゾ死ヲ知ラント云ヘル、ミナ人我ヲ知ラズシテ、鬼神ヲ知ラント欲ス。孔子若シ在サバ、當ニ身ヲ知ラズシテ、イヅクンゾ鬼神ヲ知ランヤト言フベシ。

一衆木多シトイヘドモ、一木ヲ取リキワメ知ルトキハ、則チソノ理萬木ミナ同ジキナリ。

一栗アルヒハ柿、此ノ木イヅクヨリ生ズ。天地開闢ノトキハジメテ、天地中和ノ氣感ジテ、種ナクシテ

天理ニヨリ生ズルカ。ソノ先モマタ菓ノ實アリテ生ズルカ。此ノ道理アキラカナルトキハ、則チ萬木千草造化生々ノ理、ミナ知ルベキナリ。

一ソレ人七兆零七萬零ノサキ、父母ナクシテ天地中和ノ氣感ジテ、人天理ニ依リテ以テ生ズル歟。ソノ先モマタ父母アリテ子ヲ生ミ、ソノ子次第ニウミテ以テ今ノ我ニ至ル歟。ヨク此ノ道理ヲ明ラムルトキハ、則チ一切ノ衆生ハジメナキノ論、漸クミナ知ルベケンヤ。草木ハ偏ニ氣ナリ。故ニ非情ナリ。人ハ心ヲ中有ニ稟ルユヘニ有情ナリ。モシ中有ニ因ラズンバ、ソノ人々トシテ人タラズ。只豆腐麥麩タルベキ乎。鳥ハ卵ヲ破リ、則チ水鳥ハヨク游ギ、雞ハ自ラニハトリノ風情アリ。水鳥ノヨク游グ。家雞ノ風情ヒトヘニ心ニ屬シテ、形ニゾクセズ。形ハ內ニ成ル。心ハ外ヨリ入ル。人ノ形ノ如キハ、父母內ニ造リ、子ノ心ハ外ヨリ入ル。一切ノ有情一トシテ違フコトナシ。コレニ依テ畜類トイヘドモ、好心惡心ノ異ナルアリ。形ハ父母ニ似テ心ハ父母ニ似ズ。以テコレヲ知ルベシ。七兆零七萬零遠トイヘドモ、昨今ノ如シ。百年千年モマタ然リ。萬年億年モマタ然リ、經歷スルトキハ、則チソノ數豈コレヲ盡サヾラン乎。天地ノ一周ハ、大周小周皆ヲナジ。天ハ子ニ始ムリ亥ニ終ル。一晝夜ト七兆七萬ト豈別ナランヤ。

一人ハ馬ヲ生ゼズ。馬ハ人ヲ生ゼズ。互ニシテ相生ゼズ。凡定マレル理アリ。コレ一類相續ノ德繩ナリ。人馬ヲ生ミ、マタ馬人ヲ生ムトキハ、非常ニシテ物ノ變ナリ。コレヲ見レバ常アルニアラズ。コレ一念ノ變相ナリ。人臥テ槐安國ニ入リテ蟻ト婚姻ヲナス。

一人ハ無念ノ時ヲ知リ、念起ルノ後ヲ知ラズ。古人ノ曰ク、一念ノ起ルコレ病ヒ、繼ザレバコレ藥ト云々。道理ヲ明ラムルトキハ、則チ繼モマタ病ナシ。ツカザレバ猶病ナキナリ。

一世人ハミナ毒ヲ食シテ病ヲ起ス。醫人ハヲナジク毒ヲ食シテ病ヲ起サズ。ヨク本ヲ知ルユヘナリ。

一世人毒ヲ斷ツトキハ則チ病ヲ起サズ。醫人毒ヲ食シテ病ヲ起サズ、醫士ノ毒ヲ食スルハ理ニアタル、世人ノ毒ヲ食スルハ理ヲ知ラザルガユヘナリ。砒霜人ヲ殺ストイヘドモ、理ニ當リテ用ルトキハ、則チ病人ヲ治ス。瘡ヲ切ルヲ言フナリ。中ヲ得ザルトキハ、則チ醍醐モマタ毒ト成ル、中ヲ得レハ、毒モ毒ナラズ。

一仁義禮智信ハ、人ノツネニシテ缺ベカラザルモノナリ。君臣父子夫婦ハ人ノ三ノ綱ナリ。離ルベカラザルモノナリ。

一心ハ三世心、マタ佛心、菩薩心、聲聞心、縁覺心、六凡心、ソノ體一法界ナリ。タトヘバ氷雪霜ノ如シ。解ルトキハ、則チコレ水ノ影ナリ。氷雪ノトキ氷雪ノ相ト見ル。解ルトキハ水ノ相ト見ル。コレ二種ノ眼ナリ。氷雪ノトキ即チ水ヲ離レズ。人々ミナ思ヘリ。人死シテ虛空トナル。雪ヤ氷ト隔ツランヂヤナドト易々ト心得ルハオカシキコトナリ。

一物ノ音ハタヾ一ツナリ。糸ニヨレバ糸ノ音ヲ異ニシ、竹ニヨレバ竹ノ音ヲ異ニス。一ツノ音ヲ止ムレバ、コレヲ糸ノ音トモ云ヒガタク、コレヲ竹ノ音トモイヒガタシ。ソノ一ツノ音ハ、如何ナル音ゾ。イカンカ聞得ン。モノヲ離レタル音ハコレヨト聞べキ、此ノ一ツノ音ヲ聞得ル人ヲ、音ヲ知ルト云フベシ。糸ノ音ヲ誰カ聞ザラン。竹ノ音ヲ誰カキカザラン。三歳ノ孩兒モ聞コトヲ得タリ。物ノ外ノ音ヲ聞ン人、又萬ノ音ヲ知ルベシ。

一何ゴトモ古人ノ仕ハジメタルコトヲ、今ハ移シテスルサヘカタシ。イマダナラヌニ仕出シタルハ淺カ

ラザルコトナリ。ソノ仕出シタル心ニ叶フコトハ、萬ニ工夫フカキ人ナラデハ、古ノ人ノ心ニ通ズマジキヲヤ。何ゴトヲスルトモ、ソノコトヲ仕出シタル人ノ心ニ通ゼバ、一ツ業萬ノ業ニ渡ルベシ。サレバ世ノ話ニモ一道ノ達者萬事ニワタルト申ナリ。

一次第々々ニ、人ノ詞モ調ヘモテユケバ好惡ヲ知リ、斯ク言フタルハ惡シ。兎云フタルハマサレリト、調ベルホドニ次第ニ言葉ニ花咲ニケリ。庭ノ梢ノ花ノツボミ開クモ同ジ。此ノ花ニタガフコト有ルベカラズ。人生レ出テ三ツ四ツニ成テ云フコトヲ聞モ、神代ノ歌ノゴトシ。次第ニ成人スルホド能クカヒツクロヒテ聞ユルハ、末ノ世ノ歌ノゴトシ。何ニツキテモ始中終ヲナシ、コトナルベシ。

一人ノ心ノ比興サゾ顯レケル方ノ道具ヲ見ルニ、買ヒカロクシテ、ソノ器アサ〳〵トシテ異國唐物ノヤウニ相似テメヅラシク、置テハマタ取上々々シテ、ヤサシキ物アリ。コレヲ能ク持ナシテ家ニ入レ、ソノ用ユルトキアラクサワラズ。收ムルトキヨク拭ヒタシムナラバ、百年モ持ツベシ。然ルヲ石瓦ノ如クニ用ルマヽ、頓テ破損シテソノ跡カタモナシ。又此器買ヒ重クバ、八重十重ニツヽミテ、容易ニ人ニモ見セジトセン。然レバ物ノ惡キニモヨラズ。我目ニ入イラザルニモヨラズ、アタヒノ輕重ニヨリテ、祕藏スト覺ヘタリ。縱ヒアタヒハ輕クトモ、ソノ物ノアイラシキ宜シキハ、買ヒニ構ワズ愛スベキヲ、人ノ心ノ比興サゾ口惜キコトナリ。

一目近キコトヲシラズトテ、人ヲ耻カシムベキニアラズ。希シキコト一句知リタリトテ、人ヲ高ク見ルベキニモアラズ。朝夕左右ニアル書ノ内ノ、一語半句モ心ヲ留メズシテ、何ニガアルゾトタドルコトハ、智者ノウヘニモアルベシ。小僧喝食ニ、コレハソレ〳〵ノ書ニアリト云ハレテ、一笑ヲ發スルコト儘多シ。マタ寡聞淺知ノ人モ、メヅラシキ書ヲ取テコレヲ見テ、ソノ内ノ一句半句ヲ心ニトヾムル

コトハアルベシ。コレヲ知リタリトテ、博學多聞ノ人トハ云ガタシ。記誦ノ學トテ、物ヲヨクヨミ覺ヘテ、コレハナニノ語、コレハナニノ語ト、ソラニコレヲ云フ人アレドモ、ソノ理ニハ通ジガタシ。然レバ人ニモノ、道理ヲ問レテ、忘然トシテ左右ヲ見ル。ソノ理ハソノ人ノ記誦ノ中ニアリトイヘドモ、ソノ記誦ノ語スベテ空シキガ如シ。廬山ニ在ルモ、ソハ廬山ノ面白キヲ知ラズ。西湖ニ在リテ西湖ノ美景ヲ知ラズ。皆コレ外ヨリ見テソノ面目ヲ知リ、ソノ美景ヲ愛ス。假令バ湖ノ上ニ扁舟ヲ浮ベテ、朝日ヲ迎エ、夕陽ヲ送リ、ソノ舟ソノ人、自カラコレ佳景ナルコトヲ知ラズ。遠クコレヲ見テ湖水ノ一景トス。記誦ノ外ニ妙理ヲ知ル。尤モ大切ナリ。ユヘニ、古人ノイハク、記誦ノ學ハ人ノ師トスルニタラザルナリ。

一法華ニモ譬喩品ガアルゾ。人ヲ教化スルニハタトヘガ專ラノモノナリ。ヨク譬ヘヲ取ルハ理路通達ノ人ナリ。如何ナル愚痴ノモノモ、タトヘヲ以テ教ユレバ、得心スルモノナリ。ユヘニ佛ノ經教ヲ見ルニ、多クハ譬喩ナリ。タトヘバ譬ヲ以テ人ヲ教ユルハ、草木ノ花ニテモアレ、鳥獸ノスガタニテモアレ、詞ニテハソレト心得ガタキモノナリ。コレヲ繪ニ寫シテ見スレバ、ソノ儘合點スルガ如シ。コレニツキテモ、耳目ノヲヨブトコロハ知リヤスキモノナリ。耳目ノ及バサル所ニ、變化神通アルコトハ知リガタシ。コレヲ知ルハ理路活達ノ人ナリ。人生ズレバ形ヲ見テアリト思ヒ、人死スレバ死シテナキト思フ。此ノ生死ハ耳目ノヲヨブ處、有無ノ二ツナリ。三歳ノ孩兒モ見テコレヲ知ル。生前死後ニ際ナクナルコトヲ知ラズ。コレヲ知ラズシテ、只耳目ノヲヨブ所バカリヲ知リテ、我ハ道理ヲ知リタリト思フハ、三歳ノ孩兒ニ同ジ。

一士農工商ノ四民ノウチ、農夫モツトモ心清シ。ソノ人柄ヲ以テ云ヘバ、士モツトモ清クシテ、工コレ

ニ次、商コレニツグベシ。如何ニシテ農夫ノ心、尤清キトハ云フベキゾナレバ。只アリノマヽノ質ニテ身ヲカザルコトナク。上古ノ質朴ニヒトシケレバ、世ニ諂フコトナク、井ヲ掘テ飲モ田ヲ耕テ食フモ、然モソノ飯精シカラズ。多クハ官ニ貢ギシテ、ソノ麁ヲ食ヘドモ、足コトヲ知ルモノハ農夫ナリ。士ハ士ノ本意ヲウシナヒ、工商ハ工商ノ本意ヲ失フ。ソノ身ヲタカブリ、衣食住ヲ結構ニスルガユヘニ、ソノ分ニ財タラズ。財タラザルユヘニ、世ニ諂ヒ偽リ構テ、心底ノ穢レタルコト、土民ニヲトレリ。士也工ヤ商ヤ、土民ノ意ニ愧ザラン乎。予タヾコレヲ思フ。外清キモノハ内ケガル。上古ハ内清クシテ外ヲ見ズ。錦ニ不淨ヲ包ムハ、今ノ世ノ人ナリト云ヘバ、世人ノ云、イカニ心清シトテモ、土民ノ質ニテハ人タルベカラズト云フ。予曰ク伏犧神農ハ、木ノ葉ヲ綴リ、木ノ皮ヲ冠リヌレド、一天四海ノ王タリ。豈コレヲ人ニアラズト謂ン乎。又久ク家ヲ保チテ、累世ニヲヨブモノモ農夫ナリ。今ノ世ヲ見ルニ士ノ家モ久シク保クズ。工商富リトイヘドモ三代ニ傳ヘ難ク、農夫ハ質素ヲ事トシ、華飾ナラザルユヘニ、賦歛厚フシテ、歳飢ルトイヘドモ、官ノ糟粕ヲクラヒ、ソノ歳ヲ過ストキハ、則チマタ來歳ノ粮ハ鋤犂ニアリ。世々ニ傳ヘテ此ノゴトシ。ユヘニ家ヲ累ヌルモノハ農夫ナリ。

一人ミナ寓言ト云フコトヲ慥カニ心得ズ。道理ノモノニ寓シ、アルヒハ人ニ寓ケテ云フナリ。道理ナキトキハ、則チ寓言コレナンノ得ル所ゾ。道理ヲ述ンガタメ物ニ寓ケテ、コレヲ言フナリ。寓スル所ノ理ヲ取ルトキハ、則チ寓言ミナ實ナリ。孔子今マタ生レテ言フトモ、道理ナキトキハ則チ取ルトコロナシ。

一出家ヲ苾芻ト云フハ、苾芻草ト云フ草ガアルゾ。苾芻ハヤワラカナル草ニテ、アナタヘモコナタヘモ

ガヤルヤウニ靡ク草ナリ。出家ハモノニカマハヌガ本ナルユヘニ、苾芻ニタトヘタゾ。教者ニハ苾芻トヨムゾ。禪家ニハ苾芻トヨムゾ。

【二】百味圓ト云ヒ、マタ混沌圓ト云フハ、銖兩ハ藥味ノ厚薄ニヨリ、藥氣ノ緩急ニヨリ、藥性ノ强弱ニヨリテ、少シ多寡ノ分別アルベシ。論ニイハク衆方ヲ以テコレヲ治ルニ、衆病之理ルハ當然ナリ。一方ヲ以テ衆病ヲ治ルハナンノ謂ゾ乎。曰クコレ天ニ本ヅクナリ。百味ヲ和シテ一藥トナシ、以テ一藥ノ功ヲ取ル。コレ天ニ本ヅクノ謂ナリ。ソレ天ハ一氣ニシテヨク品物ヲ生成ス。蓋シ一氣トハ地ノ萬物ノ薰ズルトコロ、衆合シテ一氣ノ衆薰トハ地ノ萬物ナリ。地ノ萬物ハ凡一切ノ形アルモノハ皆地ナリ。勝テ道ベカラズ、某ノ物草木モマタ氣ヲ發シ、魚龍モマタ氣ヲ吐キ、禽獸甲介モマタ氣ヲ吐ク。山川水澤、一切ノ氣薰ズルトコロ、合シテ一氣ナリ。コノ一氣マタ萬物ヲ生長スルモノナリ。形ハ地ナリ。陰ナリ。氣ハ天ナリ。陽ナリ。陰ハ陽ヨリ出テ、陽ハ陰ヨリイデズ。二ツニシテ一ツナリ。氣ハ形ヨリ出テ、形ハ氣ニ因テ化ス。然ルトキハ、則チ此ノ氣ハ一氣ニシテ衆薰ズ。衆薰ジテ一氣ナリ。今百味圓ノ方ヲ製シ、天ニ本ヅクト謂フモノハコレナリ。百味ノウチ草木アリ。丹石アリ。羽毛甲介アリ。寒アリ。熱アリ。緩アリ。急アリ。昇アリ。降アリ。一方ノ內萬物アリ。萬物ノ氣薰ジテ一藥ノ功ナリ、一方ニシテ百物、百物ニシテ一方、一方ニシテ百方、百方ニシテ一方ナリ、一氣品物ヲ生ジ、一方百病ヲ治ス。豈理ノ當然ナラズ乎。此ノ藥氣欝スルトキハ、則チ應ニコレヲ發スベシ。血滯フルトキハ、則チマサニコレヲ散ズベシ。痰塞ルトキハ、則チマサニコレヲ通ズベシ。下ニ在ルモノハ、マサニコレヲ昂スベシ。上ニアルモノハ、マサニコレヲ降スベシ。氣ソノ處ニアツマルユヘニ必ズウチ結ス。此ノ藥氣ヲ以テヨロシク引テ順フベシ。夫ヲモンミレバ病ハ偏ヨリ來リ、正

ニ從フテ去ル。七情ハ內傷ノヤマヒ、憂思悲恐等皆結スルナリ。氣一處ニアツマリテ、偏ニヨリテ疾生ズ。正ニ從フトキハ則チ痊ユ。喜怒驚等ハ散ナリ。サンズルトキハ則チ氣少ナシ。スクナキトキハ則チ巡ラズ。巡ラザルトキハ、則チ又氣ノ偏ナリ。氣多少ノ分限ニヨラズ。巡リテ以テ復生ス。四氣外感ノ疾モ亦カクノゴトシ。風寒暑濕熱ミナコレ天ナリ。蓋シ天コレ行コト偏ナラズ。モシ偏ニ行リ夏冷カナルトキハ、則チ萬物焦枯セズ。冬暖カナルトキハ、則チ萬物凍損セズ。春溫夏熱秋凉冬寒ナラビニ、寒熱溫凉以テ行リ、一歲品物遂スルナリ。天ハ偏ナシトイヘドモ、又自カラ偏ヲウクルナリ。人ツネニ家舍ニ在ルモノハ、寒暑トモニコレニ中ルコト、淺シトイヘドモ、ソノ感ズルコトコレ深シ。ツネニ家舍ニ離レテ行動スルモノハ、ソノコレニアタルコトフカシトイヘドモ、コレニ感ズルコト淺シ。ソノ人ノ相應ニ過ルトキハミナ偏ナリ。能ク溫カニ能ク熱クヨク凉シク寒キトキハ、則チ疾ナシ。偏溫偏寒偏凉偏熱ニシテ病ヲ生ズ。コノヤマヒ能クコノクスリ能ク熱シ、ヨク寒シ、ヨク凉シク、ヨク溫カニ、ヨク昇リ、ヨク降リ、ヨク散ジ、ヨク聚リ、ヨク緩ク、ヨク急ギ、ヨク否ニ、ヨク泰、兼テ一方ニアリ。或人ノ曰ク、此ノ方寒溫凉熱ヲカヌルモノナリ。モシ寒病ニ與ヘテ、以テ熱セシメント欲スルトキハ、則チ寒藥アリ。コレヲ遮ギルベシ。若シ熱病ニアタヘ、以テ凉ナラシメント欲スルトキハ、則チ熱藥アリ。コレヲ遮ギルベシ。補セント欲スルトキハ、則チ瀉劑アリ。以テコレヲ遮ギルベシ。瀉セント欲スルトキハ、則チ補劑アリ。以テコレヲ遮ギルベシ。コレヲ爲ルコト如何。答テ曰ク此ノ間ノゴトキハ、只單方ヲ用ルガ如シ。或ハ五味七味ノ方ノゴトキハ、マタ病ニ宜シク、衆病ニヨロシカラズ。夫混沌丸ノゴトキハ、一方ニ衆病ヲ兼、猶一氣萬物ヲ化生スルガゴトク、義ヲ天道ニ讓ルノミ。

一東來ノ呂氏曰ク、所謂無事ト云フハ、事ヲスツルニ非ザルナリ。但コレヲ視ルコト、夙ニ起キ晏ク寢飢テ食シ、渴シテ飲ス。終日コレヲ爲コト、イマダ嘗テ爲ザルガゴトキナリ。〔割註〕眞西山心經ニ出ヅ。」

一當念無念前後際斷ト云フコト、工夫スベシ。

一親ノ讐ヲバ伐ズシテ叶ハザルモノナリ。親ノ讐ト同ジク天ヲ戴ズト云ヘリ。天理スデニ此ノゴトシト大學衍義ニ記セリ。木剋土ト木土ニカテバ、又土ノ子ノ金、我親ノ讐ウタントテ、金剋木ト金木ニカツ。然レバマタ木ノ子ノ火、親ノ讐伐ントテ、火剋金ト火金ニカツ。然レバ又金ノ子ノ水、ヲヤノアダ伐ントテ水剋火ト水火ニカツ。然レバマタ火ノ子ノ土、ヲヤノ讐ウタントテ、土剋水ト土水ニカツ。五行此ノ理備ハレリ。人倫コレヲ思ハザランヤ。

一唐玄宗ノ時法ヲ置リ、人トシテ人ヲ殺ストキハ、則チソノ子マタソノ人ヲコロス。ソノ人ノ子マタコレヲ殺ス。ソノ子又ソノ人ヲ殺ストキハ、則チ百世モ人ヲ殺シテ事タヱズ。只親ノ讐ウツモノニハ官ヨリコレヲコロスベシ、親ノ讐ウツベカラズト云々。後マタ此ノ法ヲ評シテ云フ、親ノ讐殺スベカラザルトキハ、則チ人ノ人ヲ殺スコト日々夜々長ズベシ。人ヒトヲ殺ストキハ、則チ子アリテカナラズソノ人ヲ殺ス。然ラバ人ノ人ヲ殺スコト止ベシ。人ヲ殺ストキハ、則チカナラズ我身ヲウシナフ。人トシテ身ヲ惜マズト云フコトナシ。身ヲ惜ムトキハ則チ人ヲコロスコト止ベシ。玄宗ノ法立ズ親ノアダ今ニヲヒテコレヲ伐ツ。〔割註〕禮記曲禮ニ曰ク、父ノ讐共ニ與ニ天ヲ戴カズ。」

一ソレ宅ニ戸アリ。障子アリ。四壁アリ。コレヲ去ルトキハ、則チ啻ニ柱礎ソンジテ、遮障ナシ。遮障ナキトキハ、則チ天地ト一枚ナリ。身宅ノ戸障子四壁コレヲサルトキハ、則チ我性ト天地ヲ通ズ。コ

レヲ神明ト謂フナリ。人トシテ直チニ、神明ニ至ルモノ、コレヲ聖人ト謂フ。悦バシカラズヤ。心ハ神明ノ舍ナリ。外宅ノ戸障子擁塞スルトキ、則チ神明一時ニ暗クシテ、神明ナラズ。一切ノ理ミナ塞ガリテ通ゼズ。萬事所爲ミナ道ニアラズコレヲ凡夫ト謂ナリ。曰ク何ヲカ戸障子ト謂フ。曰ク身宅ニ六門アリ。各戸障子ヲ備フ。六門トハ眼耳鼻舌心意ナリ。六門トハ即チ六根ナリ。何ヲ以テコレヲ戸障子ト謂フ。曰ク門アルニ依リテ戸障子ノ名ヲタツ。實ハ門即チ障子、障子スナハチ門ナリ。眼ニ見テ憎愛親疎、耳ニ聞テ好惡取捨アリ。六處ミナカクノ如シ。神處憎愛親疎ナク、好惡取捨ナシ。憎愛好惡ナキ處ニヲイテ、親疎取捨ヲ生ズルトキハ、則チ神明ニ蔽ハレテ、一時ニクラシ。神明ト天下隔障スルトキハ、則チ憎愛好惡ヲ以テ戸障子トス。コノ戸障子六門ニ在リ。此ノ戸障子ヲ去ルトキハ、則チ神明獨リ顯ハル。天地一枚ニシテ、コノ身ヲ破ラズシテ、天地ニ參ハリ、此ノ身ソンジテ、コノ身ニ非ズ。四大分離セズシテ、四大ニアラズ。則チコレヲ天眞獨朗ト謂フ。

一或人水ノ源ヲ問フ、答テ曰ク山ナリ。マタ問フ山水モ亦源アルベシ。山水ノ源ハマタ何ゾ乎。答テ曰ク海ナリ。海水五行ノ火ニ蒸サレテ、上テ雨露霜雪ト成リ、山ニ屬シ谷ニ下リ、河ニ屬テ下入シ、再ビ本ニ歸スルモノナリ。問フ、水ハ卑ニツクヲ甚トシテ天ニ昇ルトハイカン。答テ曰ク、氣ハ常ニ升降ス。氣ニツキテノボリ氣ニツキテ降ル。況ンヤ又火蒸テ升ルヲ乎。人ノ身ニ逆上ナシ、痰氣激シテ上ルノ謂ナリ。

一譽レヲモトムルハイヤナリ、求メズシテ譽レアルコソアラマホシキコトナリ。然レドモ求メズシテ譽レアルコトヲ得ザルヨリハ、求メテモ譽レアルハ好シ。萬事ソノ始メニ求メズシテ、至ルコトハ鮮ナシ。求メモトメテノチ、モトメズシテ至ルヲ、人求メズシテ至ルト云ヘリ。何レノ道モハジメハ求ム

ルナリ。功積リテノチ求メズシテ至ルモノナリ。人ノ人ヲ譽ルモノハ道アルヲ以テコレヲ譽ム。然レバ譽レヲモトムルコトハ、道アランコトヲ求ルノ謂ナリ。道アランコトヲ求ムルハ嫌フベカラズ。但名ノ爲ニシテ實ナキハ不可ナリ。學位無學位ト云フコトアリ。絶學シテ無學ニ至ル。無學ハ向上ナリ。コレヲ學ブノ功積リテ無學ニイタル。功ヲ積テ無功ニイタル。功ヲ求ムルコトヲ積テ、モトムルコト無キニ至ルモノナリ。

一酒後ニ紅柿ヲ多ク食スレバ、甚ダ醉テ正儀ヲ失フト、傍ナル人曰ク、柿ハ醉ヲ醒ストコソ云ヘ。柿ニテ醉トハ心得ズト云ヘリ。曰ク諸藥トモニコレヲ用ユルニ時アリ。時ヲ得ザルトキハ、則チ藥却テ毒ト成ル。ソノトキヲ得ルトキハ、則チ毒モマタ却テクスリトナル。寒ハ熱ニ勝トイヘドモ、時ヲ得ザルトキハ、則チ却テ熱ヲ助ケテ人ヲシテ熱殺セシム。蓋シ酒ヲ飲コト數盃ニシテ、酒胃ニ在リテイマダ順ナラザルトキ、柿ヲ食スルコト數顆ナルトキハ、則チソノ酒ヲ覆留シテ、酒氣順ナラズ。胃中ニ留マリテ悶絶ス。酒後紅柿ヲ食ヘバ心痛スルモ亦コレニタトフルナリ。酒漸ク半醒ニイタリテ咽口乾キテ湯ヲ思フトキ、熟柿ヲ喫スルトキハ、則チ端的ニ醒。肺渇ヲ治ス。人間ノ萬般トモニ時ヲ得ザルトキハ、則チ作スコト莫レ。時ヲ得ズンバ言フコト莫レ。時ヲ得ズンバ敵ヲ責ルコトナカレ、城ヲ落スコトナカレ。人ヲ諫ムルコトナカレ。人ヲ成スコトナカレ。人ヲ敗ルコトナカレ。

一邵堯夫ガ曰ク、物ミナ數アリト云々。數ヲ知ル者ハ數ヲ惜ム。數ヲヲシムモノハ久シク保ツ。數ヲヲシマザル者ハ早ク喪ブ。ハヤクホロブルモノハ、逆ニシテ苦ミアリ。久シクタモツモノハ、順ニシテ苦ミ無シ。生モマタ數ナリ。數ニアラザルトキハ、則チ生ゼズ。死モマタ數ナリ。數ニアラザルトキハ、則チ死セズ。太古ノ人ハ能ク數ヲ惜ム。ユヘニ百歳ヲ超ユ。況ンヤマタ重百彭祖ノ徒ヲ乎。行

ヒ忽忙ナルトキハ、則チ數期ニサキダツテ盡キ、行ヒ安靜ナルトキハ、則チ數期ヲ以テツクル。期ヲ以テ數ヲ盡ス人ハ、死スルニ苦ミ無ク、期ニサキダチ數ヲ盡スモノハ、死スルニクルシミヲ重ヌ。縱ヘバ瓜蔕ノゴトシ。ヨク熟シテ後コレヲトルトキハ、則チ蔕自カラ落。イマダ熟セズシテ早クコレヲ取ルトキハ、則チ揑ルトモ亦墜ズ。終ニ蔕ヲ損ズルモノ、コレ數ヲ盡サヾレバナリ。

一人ノ一日ヲ送ルハ、人ノ命數ヲ減ズル寸々ナリ。一日ヲ送ルトキハ、則チ一寸ヲ減ズ。二日ヲ送ルトキハ、則チ二寸ヲ減ズ。屠ルトコロニ赴ク、羊ノ歩々死地ニ近クガ如ク、人ノ命緒ノ寸ヲ盡スコト太ダ速カナリ。寸ヲ以テ算フルトキハ、則チ十度ニシテ尺ヲ盡ス。尺ヲ以テ算フルトキハ、則チ十度ニシテ丈ヲツクス。此ノ如クナルトキハ、則チ命緒急ニツキ、死地ニ至ルコトハナハダ速カナリ。蓋シ寸ヲ以テ算フルモノハ、少欲少食少酒ナリ。尺ヲ以テ算フルモノハ、過欲過食過酒ナリ。是ヤミナ物ニ數アリ。數ヲヲシムベキナリ。人ノ德モマタ數ナリ。德ニハカニ輝ヤク人ハ、カナラズソノ末短シ。德ヲ惜ミテ廣大ナラザル人ハ、カナラズ其德永ク傳フ。廣大ナラント欲スルトキハ則チ後昆カナラズ微少ナリ。先師ツネニイヘリ德ヲ兒孫ニ遺ス。衣ヲ溫カニセズ。食ヲ厚フセザルナリ。今日ノ我儕ナヲ小德アルモノコレ先師ノ餘ナリ。文王三年ノ命ヲ以テ武王ニ讓ルモマタコレ乎。

一人ハ氣ヲ以テ武勇モシタモノナリ。意旨ノ强キト云モ氣ナリ。氣ノ衰ヘタル時、タワマザルハ道アル人ナリ。多分ノ人ハ、氣盛ンナルユヘ物ヲヤブリ、浮世ヲモ何モ思ハザルナリ。死近クナル時ハ、平生トミナカワルナリ。　曉萬嬾ナル心アルハ、心ヲ付ル處ナリ。曉ハ物靜ニシテ心細クナルモノナリ。

一今ノ人ヲ見ルニ、伶俐ニシテ却テ伶俐ニアラズ。氣志ニ勝テ蹶クモノナリ。蹶クモノ趨ルモノハ氣

コレナリ。氣ユク所ニ向ツテ急ニシテ左右ヲ見ズ。ユヘニ一策書ヲ見ルトイヘドモ、眼一所ニ在リテ、一策ノ書ニ渉ラズ。一策ノ書中ノ一條目ヲアゲテ、早ク趨リ人ニ向ヒテコレヲ説話ス。ソノ説正義ニアラズ。シヅカニ彼ノ一策ノ書ヲ見ルトキハ、則チ策中ノ正義明白ナリ。一條目ニ着テ早ク義ヲ立テ廣ク策中ヲ見ズシテ、唯一條目ニ就テ義ヲ取ント欲ス。ユヘニ已ガ見ヲ出スト云々。コレ正義ヲソムク。今ノ人一件ヲ見ルトキハ、則チ一件ニ急ニシ、二件ヲ見ルトキハ、則チ二件ヲ急ニスルナリ。志ヲ持所ナシ。志シヲ持トキハ、則チ氣ワシラズ。心靜カニシテ、前後左右心ノ渉ラザルトコロナシ。今ノ人何トシテ然ル乎。思フニコレモマタ時ナリ。古ヘハ大智ノ人多シ。故ニ小智ノモノハ一小事ヲ知リ、人ニ向ヒテコレヲ言フコト能ワズ。コレヲ言フコトアタワザルトキハ、則チ笑具ト成ル。今大智ノ人出ズ。ユヘニ一事ヲ知ルトキハ、則チ早ク一事ヲ說ク。コレヲ聞テ無智ノ人コレヲ信ジテ知識トス。ソノ人後生トイヘドモ智見ヲ高クシ、先輩ニ恐ルヽコトナシ。日ノ光リ今季世トイヘドモ、猶叢林ヲ歷テ多ク人ニ交ワリテ、切磋ヲ受ルモノハシカラザルナリ。

一惠能師ト神秀ト同時ノ祖ニシテ、神秀ハ山ノ第一座ナリ。然リトイヘドモ見解能師ニ勝ラズ。タトヒ見解マサラズトイヘドモ、何ゾ懸隔ナラン。然リトイヘドモ、マタ此ノ如シ、ソノ談衣鉢ニ在リ。神秀身ハ菩提樹ノゴトクノ句アリ。則チ能師菩提モト樹ニアラザルノ句アリ、神秀ノ曰ク臥輪伎倆アリ。能帝マタ曰ク、惠能伎倆ナシ。今世ノ初學、コレヲ聞テコレヲ誦ズレバ箇々點頭ス。今世ノ初學ハヤク知ル。シカモ古ヘノ神秀此ノ問ニ於テ、什麼トナシテ意ヲ得ズ。マタ今世ノ初學二師ノ見解ヲ判斷シテロ吧吧ナリ。古ヘノ神秀什麼トシテカ、今初學ニ料理セラレン。神秀今ノ初學ニ及バザルトキハ、五祖ナンノ第一座トナシ去。今ノ初學神秀ヲ以テ、泥ノ如ク看、塊ノゴトク視テ、直ヒ一錢ナラ

ズトス。今ノ初學ト神秀ト高低マタ如何ン。神秀能祖ニマサラズトイヘドモ、五祖ノ法ヲ嗣ギ一方ノ宗主トス。初學ノ人神秀スラ尚コレヲ欺ク。況ンヤ今世知識ト稱スル人ニヲヒテヲヤ。禮モマタナサズ。紫野養叟和尚、殿裏ニテ佛ニ向ヒテ曰ク、巍々タル萬德尊、秋水家々ノ月、彼レ此ノ出家兒、禮モマタ缺クベカラズト云々。若シ此ノ意ヲ以テ世上ニアテヽ、禮豈ミダレンヤ。今ノ初學ノ人兩祖ノ間ヲ見ル。ソノ眼二偈ニ在ルノミ。五祖衆心ニヨリテ、神秀ナガク一方ノ宗主ト爲ザルナリ。

一今ノ初學ノ人錄ヲ讀ミ傳ヲ見テ、即チ一見ニソノ祖ヲ見盡ス。甚ダ奇怪ナリ。下ヲ見ルダニ猶カタシ。況ヤ上ヲ見ルヲ乎。塵乳予墻ハ數似ト道フコトヲ見ズ。古ノ祖墻ハ吾儕ウカヾヒガタシ。皆人一追祖傳ヲヨムトキハ、則チ早クソノ祖師ヲ知リテ、說話スルコト水晶ヲ隔テヽ物ヲ見ルガ如シ。ソノ說話一々若シ的當セバ、今ノ說者、イニシヘノ祖ト同器同水ナリ。實ニカクノ如キトキハ、則チ遠ク古ヘヲ慕ンヨリハ、直チニ今ノ人ヲ信ゼンニハ如ザルナリ。

一前業ニヨリ心快潤ニシテ、財ヲ惜ムノ心ナキ人アリ、外ニ播スコト多キトキハ、則チ內ニ費ヘスクナカラズ。內乏シキ時ハ、求メズト云コトナシ。モトムルコトヲ得ザルトキハ、則チ貪ラズト云フコトナシ。コレヲ貪リテ用脚猶イマダ足ズ。ナヲイマグ足ザルトキハ、則チカナラズ耻ヲ顯ワス。コレヲ念フベシ。コレヲ念フベシ。コレヲ念ワザルトキハ、則チ啻己ガ一生不自由ヲ得ルノミニアラズ。未來ノ世ニヲヒテカナラズ、己ガ如キモノヲ引出シテ、己ガ今生ノ不自由ヲ得ルガ如クス。彼ノ別人ヲシテ不自由ナラシム。コレ己ガ罪ニアラズ乎。佛コレヲ思ヒ玉フユヘニ、今日ノ人ヲ敎化シテ、未來ノ人ヲシテ安ンゼシム。故ニ曰ク佛法ハコレ三世ノ治トハコレナリ。

一財我家ニ入ルトキハ、則チコレヲ盡ス。以テ外ニ播コシ、明日ノ不自由ヲ營セズ。此ノ如キ人ハヨク

自亡ヲ用ヒ得テ、有ルトキハ則チアルニ任セ、無キトキハ則チソノ無キヲ苦シマズ。食ツネニ藜莧ノアツモノアツテ、厚味ヲ思ハズ。衣ハ一衲百結ビモマタ苦シトセス。播シテ外ヲ思ヒ、貯ヘテ內ニ取ラズ。此ノ如キ人ハ上ノ章ノ心ニ異ナリ。カクノゴトキ人ハ、萬人ノ中ニ於テ一人アルベカラス。若シ萬人ニ一人アルトキハ、則チ十萬人ニヲヒテ十人アリ。百萬人ニヲヒテ百人ナリ。當ニ今六十餘州ニヲヒテ豈件ノ人、百人ヲ得ン乎。

一今ノ世ニ生レタルモノヲ、何ゴトニツキテモ、教テ善道ニヤラントスルニ、少シモ善ニ移ラズ。百日教化シテモ、只本ノ物ニテアルヲ思ヘバ、佛法ハ早ヤ世ニナキヨト思ハレテ淺猿シ。教化ト云フコト立ズンバ佛ハ何ゴトニカ世ニ出テ、說法利生アルベキゾヤ。佛在世ニハ教ヘモ立テ、惡人モ善ニ移ラン。今ノ世ソレニ引カヘタルハ、末法ノ驗シナリ。法スデニ無ンバ世ハミナ外法ナリ。外法ニハ自然ト立ツ。萬事自然ニシテ、鷺ハ晒サヾルニ白ク、鴉ハ染ザルニ黑ク、ミナ自然ノ樣ト云ヘリ。人ノ教化シテ、惡人變ジテ善トナラザレバ、彼ノ鷺鴉ノゴトシ。然ルニヨリテ思フ、法滅シテ外法トナレバミナ自然ニ歸スルカト疑フ。然ルニ又教化ト云フ。佛ノ教ヘニカギラズ。孔子ノ道教化專ラナリ。惡人ヲ教ヘテ善人トナサシメバ、自然トハ云ハレズ。己レガ修因ニ依リテ、惡人モ善人トナルナレバ、人ノ仕業ニヨリテ、ミナ移リヤスケレバ、自然ノ道トモ云ハレズ。教ヘト云フコト立ザレバ、聖人ノ法消テ跡ナシ。聖人ノ法ナケレバ自然ナリ。如何トナレバ、惡人ハ惡人ノマヽ、偶アル善人モ教ヘナキ世ナラバ、タヾ自然ノ善人ナリ。然レバ佛法アルトキハ、自然ノ道消失ス。世ノ孔聖ノ道モ教化立ツトキハ、則チ自然トハ云ハレズ。聖道スタレタルトキ、世ハミナ自然ノ姿ナリ。然ルヲ心得ザル人佛法ハ因緣ナリト云ヒ、二教ハ自然ト云フ。イナ我ハ三教トモニ聖教タヱタルトキ、自然ニ歸ス。三

敎トモニ敎ヘタツトキハ則チ自然ニアラズ。孔子ハ生知安行天ノ縱セル採聖ナリト云ヘドモ、コレハ外ヨリ嘆美シテ云ヘル言ナリ。孔子自ラ云ヘルハ、十有五ニシテ學ニ志シ、三十ニシテ立ツ、四十ニシテ惑ワズ。五十ニシテ天命ヲ知ル。六十ニシテ耳順フ。七十ニシテ、心ノ欲スル所ニ從ヘドモ矩ヲコヘズトナリ。然レバ孔子モ修因ニシテナレル聖人ナリ。自然ノ聖人ニハアラズ。如何ニシテ物ゴトヲ自然トハ云ヘルゾヤ。鷺ノ白キモ、鷺ト云フモノヽ、ソノ始ノハジメヲ求メシラバ、彼ガ心ニ、白カランユヘアリテ白キニヤ有ラン。鴉ノ黑キモ其始メノ始メヲ求メシラバ、彼ガ心ニ、黑カランユヘアリテ黑キニヤ有ラン。無始ノ無明ト云フコトヲ知ラズ。人ハカヽル委シキコトハ、知ルマジキナリ。鷺鴉モ無始無明ヨリ、成リ始マリ來レルナリ。

一法ハソレ嗣ベカラス。法ハソレ斷ズベカラス。斷ズベキハ法ニ非ズ。達磨大師ノ曰ク、我法三千年ノ後、イマダ曾テ一絲毫モ移易セズト、コレ此ノ意ナリ。法ハ其人ヲ得ルトキハ、則チ顯ハレ、人ヲ得ザルトキハ、則チ隱ル。カクルヽトキハ日ノ如ク、顯ワルヽモマタ日ノゴトシ。大師ノ二祖ヲ得ルトキハ、則チ嗣ニ似タリ。若シ二祖ヲ得ザルトキハ、則チ斷ズルニ似テ、嗣ト言フベカラズ。又斷ズト言フベカラズ。只言フコトイマダ曾テ、一絲毫モ移易セザルナリ。

一法ハ無始ヨリ無終ナリ。斷續無ク、只佛出タマフトキハ、則チ法顯ル。迦葉佛ノ後チ、釋迦出タマフトキ法顯ル。五百年ヲ以テ正法トス。佛世ヲ去ルコト久シキナリ。正法今如何ンゾ行ハレンヤ。或人問テ曰ク、六時ノ行道コレ佛法ノ行ニアラズヤ。曰クコレ事法ナリ。理致ニアラズ。又問フ事理碍ナキトキハ、則チ事法スナワチ理致ニアラズ乎。曰クコレ上等ナリ。中下ノ言ニ非ズ。マタ問フ念佛念法コレ佛法ノ行ヒニアラズ乎。曰クコレ結緣ノ一得ノミ。眞ノ行ヒト謂ワズ。又問フ論義法問コレ佛

法ニアラズ乎。曰クコレ言說ノミ。又問フ參禪學道コレ佛法ニアラズ乎。曰ク參禪學道ハ、古人ノ一問一答ソノ語ノ通ゼザル所、コレヲ知ント欲ス。マタコレ眞ノ禪ニアラズ。又問フ、祖師ノ語錄ヲ以テ、コレヲ讀コト縱橫自在ニ、コレヲ沙汰ス。コレ達禪ノ人ニ非ズ乎。曰クコレ辯舌利口ノ人ナリ、善星比丘、ヨク三乘十二分敎ヲ讀トイヘドモ、地獄ニ入ルコトヲ免カレズ。心法ヲ知ラザルタメナリ。コレニ依リテ言フ、佛世ヲサルコト久シキナリ。正法如何ンゾ行ナワレン乎。假令法ハ一口ノ洪鐘ノゴトシ。人ヲ得テ扣キ擊トキハ則チ鳴ル。人ヲ得ズシテハ聲ナシ。巡リテ扣クトキハ則チ聲ナキ所ナシ。法モマタ然リ。人ヲ得ルトキハ則チ法顯ル。人ヲ得ザルトキハ、則チ法ナキニ似タリ。塵々刹々頭々物々トシテ、法ニ具ハラズト云フコトナシ。觸背トモニミナ法ナリ。鐘ヲ巡リ扣クトキハ、則チ所トシテミナ鳴ザルナキガ如キナリ。

一正像末ノコトハ、人ニアリテ時ニハアラザル歟。佛在世トイヘドモ、放逸無慚ノ者モアリ。飲酒マタハ非時乞食ノ者アリ。時ニ佛コレヲ制シ、コレヲ止シムルヲ、戒トイヒ律トイフ。況ヤマタ法華會上イタリテ、五千ノ退席アリ衆中ノ糟糠ナリ。退ヌルモマタヨシトノ佛言アリ、コレ像末ノ人ナリ。佛滅後五々百年ノ間ハ言スニヲヨバズ。今時トイヘドモ、能信ノ人ハ、或從經卷、或從知識シテ、純一無雜ニ勇猛精進シテ、辦道工夫シ、無上ノ妙道ヲ修證スルアリ。是正法ノ人ニ非ズヤ。今時ハ敎ノミアリテ行證ナシト、退心シ自ラ糟粕トナルコト勿レ。至禱々々。

一佛祖通載ニ曰ク、周孔ノイマダコレヲ言ハザル、物蠢々トシテ窮リナシ。詩書コレヲ載セザル事、茫々トシテ何ゾ限ラン。信ナルカナ。書ハ言ヲ盡サズ、言ハ意ヲツクサズ。何ゾ六經ノ局敎ニ拘ハリテ、三乘ノ通旨ニソムクコトヲ得ン哉ト云々。

一百尺竿頭歩ヲ進ムト、此ノコト人ノ分明ニ説ナシ。山谷ガ詩ニ曰ク、百尺ノ竿頭歩行ヲ放マヽニス。更ニ脚跟ニ向ツテ一節ヲ參ゼヨ。百尺竿頭歩ヲ進ムト言フ心ハ、百尺ノ竿頭ハ上ニ向フ至極ノ處ナリ。百尺竿頭ニ到ラント欲セバ、第一節ヲ參ゼヨ。モシ一句ニ參セバ、百尺竿頭モマタ自由ヲ得ベキナリ。百尺竿頭ハ靑霄ニ獨歩スルナリ。靑霄ニ獨歩セント欲セバ、一句ヲ參ズベキナリ。脚跟下ノ一節ト云フハ、百尺ノ竿頭ニモ、第一節ノアルモノゾ。第一節ヲ心得タラバ、節々百尺ニイタリテモ、マタ異ナル節アルコトナキナリ。又招賢大師ノ偈ニ曰ク、百尺竿頭不動ノ人、然モ得入ストイヘドモイマダ眞トナサズ。百尺竿頭須ク歩ヲ進ムベシ。十方世界コレ全身ト云々。

一學ヲスル人ハカナラズ惡惠ヲ生ズ。ソノユヘ如何ントナレバ、人ヲ超ント欲シテ、才アル人ヲ壓ス。シカモ又不才ノモノヲ笑フ。我ニ順フテ一字トイヘドモコレヲ問フトキハ、則チ欣ビ、我ニ逆フテ千人ニ問ヘバ、コレヲソネムコト敵ノ如クス。眼ヲ高クシテ人ヲ直下ニ見ル、此等ハソノ惡惠ノ一二ナリ。無學ノ人ハ諍ソフ所ナシ。コレ學力無キユヘ、我本然ノ心ヲ存スルナリ。學ヲスル人ハ曲節多ク、學ナキ人ハ直心ナリ。學ヲスル人ハ人ヲ疑ヒ、學ナキ人ハ人ヲ信ズ、信ハソレ萬行ノ始終ナリ。只學ヲナシテ惡惠ヲ求ンヨリハ、寧ロ無學ニシテ自己ヲ存セヨ。彼ノ學ヲスル人ハ自己ヲウシナヒ、惡惠ヲ生ズルナリ。

一往昔ハ學ビテ道ヲ明ラメ、身ヲ直クシ心ヲ淸クス。今ハ學ビテ惡智ヲ長ズ。コレ時ナリ。聖人モマタ時ニ勝コトアタワズ、ユヘニ孔子モ時ニ遇ザルナリ。

一順テ禮スルトハ、頂肩手腰臍足ミナ禮アリ。佛入滅ノトキ迦葉賓閣崛山ニ在リ。正定ニ入ルトキ大地震動ス。コレ佛入滅ナルコトヲ知リテ疾行ク。七日ノミツルノトキニ至ル。ソノトキ悲哀シテ、頂肩

手腰臍禮ヲナス。如來ノ足見ヘズ。ソノトキ願心ヲ發シ禮センコトヲ請フ。時ニ佛千輻輪ノ相ヲ現ジテ、棺ヨリ双趺ヲ出シテコレヲ示ス。此事ヲ參ズル人道理ヲ知ラズ。只ホトケノ双足ヲ以テ這个ノモノトスル而已。千輻輪ノ相一足ミナ理アルナリ。

一頭面擗足禮トハ、禮拜ノトキ佛ノ頭面ヲ見タテマツリ、見ヲロシテ、佛ノ足ヲ手ニ承ルゴトク、頭面ヨリ足ニ至リテ擗シテ禮スルゾ。

一扈從、〔割註〕韻會ニ曰ク、從ハ尾ナリ。ノチニ從ヲ從ト曰フト云々。人ノ從者ヲ謂フテ、扈從ト曰フナリ。」マタ跋從ハ猶强梁ノゴトシト云々。跋ト云フハ如何ニモツヨクスグヤカニ、人ヲモ何トモ思ハズ。凶横自恣ニシテ人ヲ凌グノ皃ト云々。

一幽歩跡ナク、妙動タヅネガタシ。〔正宗記下〕

一我ニ弟子空侍者ト云フモノアリ。父母ナク兄弟ナシ。氏族ヲ究メ知ラズ、生縁モ言ヒガタシ。初メ來ルト云フコトモナケレバ、歸リ去ント思フコトモナシ。我渠ヲ呵罵スレドモ慍レル色モナシ。疾病ノ患ナケレバ、醫藥ノ術ヲ頼マズ。幸ヒニ我弟子ニハ一分ノ相應ナリト思ヘリ。渠レ時々我ニ問フ。我答フ。マタ我心ニ浮ブコト渠ガタメニ說キ、渠ト酬對ス。管筆ノコト城子コレヲ留ム。

澤庵和尚玲瓏隨筆 終

十八大通

十八大畫

自序

春雨のつれ〴〵に、寶暦の昔噺し傳へたる、御藏前札差の金遣ひ、皇都にては大盡と呼。東都、安永、天明の比、十八大通といふ者あり。通り者いふは、當代の名にして、おそらく此草紙は、土地柄の馬鹿々々敷異風を、有の儘にあらはしたる書にて、啌いつはりなし。年の前後は其家に相續したる家名をしるして、天保の今に至る迄、奢もの多あるが故。馬鹿物語と題す而已。

弘化三丙午春彌生　堀江町に類燒し諏訪町假宅に籠りて、

珉里三世六十三翁　珉齋閑人誌

○正德の昔より、寬延、寶暦、明和、天明、享和、文化、文政、天保迄、其年數時代人物は、家柄によつて代々をしるす。

○醫者、宗匠、太鼓持の遊人、男女藝者の類は別にしるす。

○武家方御高名は、憚る事あればしるさず。

野暮なれば無事に暮して目出度けれとをりものこそ金につゞまる

十八大通目次

御藏前助六之事　六八九
濡衣の脇差　六八九
米搗曉翁へ慮外せし事　六九一
銀元結の髪　六九一
風雅人金翠　六九一
酒宴集會　六九一
十八大通文魚　六九二
文魚丸の内の小便　六九二
髪結文蝶　六九三
大山參納太刀　六九三
茶番師　六九四
むだ十といふ事　六九四
西行庵竹の杖　六九五
平十郎小判　六九五
札差惣寄合　六九六
沽券狀　六九六
全吏妙見詣　六九七
同芝居見物　六九七
靜の口舌　六九八
附言　六九八

十八大通　一名御藏前馬鹿物語

著者不詳

○御藏前助六之事

葛飾の馬文耕が著したる草紙には、大黒の紋を付たるは、札差伊勢屋宗四郎を今助六と書たるは誤にして、大黒を眞向に、色さしの加賀紋に染させ、替紋に付しは大口屋治兵衛曉翁といふ人の事なり。吉原通ひの小袖の紋に、大黒の色さしは助六の出立にして、二代目柏莚助六の時、ぎよやう牡丹を色さしにして付しを學びて付し事と思ふ。曉翁吉原へ來る時は、黑小袖小口の紋付を着流し、鮫鞘の一腰、一ツ印籠、下駄はきて大門を這入と、仲の町兩側の茶屋の女房出て、曉翁が大黑の紋を見れば、そりやこそ福神樣の御出とわや〱いふ故、いつしか此姿を今助六といふ。二代目の柏莚も曉翁とはむつまじきひゐきの中ゆへ、二代目七十を越して、男文字曾我物語といふ名題にて、三度目の助六を一世一代として勤たる時、中村座にて下棧敷片側殘らず買切にて曉翁が見物、東棧敷は小田原町鯉屋藤左衛門が連中也。其比は神田新場のひゐき連中、各々初日より見物有て賑はしく、二度目の介六より河東節上るりにて勤る。此時代江戸中河東連中流行する也。

○濡衣の脇差

曉翁伊達を好み、吉原通ひに助六姿に出立て一腰を差、毎夜廓へ這入。〔割註〕此一腰を濡衣と云。」さればその後曉翁廓通ひせし時、頃は卯月の雨上り、蛇の目傘かたげて土手節をうたひながら、土手の上り口道哲庵のあたりより、ゆらり〱とさしかゝれば、此土手に道心坊主鉦をならして居るを見て、つく

〴〵思ふて立かゝり、コレ修行者、見れば雨にそぼぬれて、さぞ／＼難儀で有ふと問ば、道心坊がいふには、イヱ／＼何にも難儀な事はござりませぬが、私は早く死たふござり升といふゆへ。しかしそのよふに死たくば早く死がよかろふ。今わの望があるなら聞てやろふが、何ぞわれが喰たいものが有ふ。好なもの喰せてやろふから望めといふ。左様なら申升ふが、私はいたつて饅頭が好物でござり升から、思入たべまして死たふござり升といふ故、其饅頭早速喰せてやろふ。待て居やれと、曉翁は別れて仲の町松屋の見世へ行、女房に此事を言付て、若ィ者に蒸籠一荷持せて道心坊に喰せんと、土手へ立歸り、今われが望の饅頭持參した。思ふまゝ喰よと差つくれば、道心坊は悦んで、誠に久しぶりにて私が好物の品難有御座り升と、二三十も喰ければ、曉翁がいふには、今汝饅頭を思ふまゝ喰へば死たいといふ。とてもこの世に長く生ても、好の饅頭思ふ儘には喰事叶はず。死たければ我が命おれが貰ふた。それは難レ有御座り升。此世に生ながらへて益なき私、サァ命を取て下さりませと首さし延れば、曉翁は一腰をすらりと拔て、くわん念せよと振上る、刀の下に手を合すれば、水もたまらず衣の上よりけさ掛に切殺せし故、此一腰の名作を後に濡衣と名付しといふ。

附言、濡衣の一腰は、安永の頃曉翁の家より、伊せや宗三郎珉里へ譲る。故に右一腰宗三郎家に持傳へる。年々虫干に出しと覺ゆ。備前物銘若年ゆえ心に覺へず。長サ二尺三寸程、三代目宗三郎代にいたり、部屋住の譯しらずして金に差支へて、土藏二階刀だんすの内にある、白鞘脇差四五十本有る。その内六腰出して質置になさんと、其儘風呂敷に包みて、花川戸町丸上といふ質屋へ持せて、わづか金六兩の質に入、濡衣此白鞘の内にある事をしらず。いつしか月も重りて流れと成、一兩年立て思ひ出しても詮方なく、質屋は元より中買も置主もむちやくちやにして仕舞たは殘念とやいわん。情なき事也。今此一腰世上に買取、持主其傳來をしらず。又助六の差料ならば、八代目團十郎に讓りなば家のたからならんが、おしむべき事なり。

○米搗曉翁へ慮外せし事

曉翁は町内の洗湯へ、ゆかたかゝへて下駄をはき行ける時、我家より五六軒先の路次ぐちに、大道搗の米を搗て居たりしを、臼の前通りける時、小袖にぬかかゝりしを見て立腹の體。米搗は挨拶もなく、やはり米を搗て居るゆへ、曉翁立かゝりて、慮外千萬おのれ曉翁をしらずや。我袖へぬかの懸りしを挨拶もなく、其儘に居るこそ不屆至極と、米搗の首すぢとらへて臼の中へ押込、杵を持て打殺さんと振上るを、町内の者四五人來て詫言せしゆえ、詮方なく洗湯へ行けり。此曉翁は至て大力にて、此時代まては元祿の比の異風殘り、分て其中に藏前者は、何れも男達の風俗殘りたるは土地がらならん。

○銀元結の髮

利倉屋庄左衛門は、銀のはりがね元結にて藏前本田に髮を結ひ、鮫鞘の一腰差て兩手を振て、下谷廣德寺前へ通りかゝる折節、髮結床に若い者四五人集り遊び居て、庄左衛門が髮の元結ひ、又は手を振て歩行を見てあざ笑ひけるを、庄左衛門振かへり見て、につくきやつら、何を笑ふといふて髮結床へ這入、上ヶ板を取てみぢんに床を打こわせば、髮結の親方ひたすら詫すれど更に聞いれず、腹さん〴〵に打こわして内に上り、懷中より金子二十兩出して、此金にて普請せよと親方に差出す。髮結あきれて、右の金をいたゞきひら過に詫て、其座で濟して立歸りけり。都而其比の藏前者といふは、手を振て步行を風儀とするは、いかにしても馬鹿々々敷ものとしるべし。

○風雅人金翠

金翠を大口屋八兵衛といふ。鳩八の紋を付る。初代の大半五郎、髭の意久の役を中村座にて勤し時、鳩八の縫羽織衣裝拵て遣る。おのれは其比意久大盡の心にて、大半五郎のとふり持物迄學びて吉原通ひする。金翠は元より綺麗好にて、日頃雪隱へ行時は、用達して跡にて、鹽を大皿に盛上たるを、手につかみて是にて洗ふ。日々鹽の入用二升づゝ遣ふといふ。不斷内に居る時は、白無垢重ね、丸ぐけ帶に座蒲

園に坐して、大僧正の如し。後に入道する。いたつて奢者也。俳諧を好み、今に淺草寺地内粟島の祉のかたわら、幷に隅田川梅若境内にも、發句の碑を殘し置れたり。

○酒宴集會

珉里といふは、宗三郎元祖にて、根岸に隱居して大酒を好み、其名を根岸の酒呑童子とよぶ。江戸中の酒呑聞傳へて、隱居へ尋來りて酒會を催す。始ての客來に案內を乞ふと、玄關にけんぞくの鬼ども一人出て、まづ〳〵こなたへと案內す。いざなわれて座敷に通る。まづ一ッと盃こつぷを出して酒におよぶ。けんぞくは堀熊童子などいふ。〔割註〕仲の町大野や熊次郎先祖也。」自菴坊〔割註〕これは醫師也。」其外大酒の手下共、毎日々々詰かけて、此者どもの相手に、酒修行の客は能き程に呑つぶされ、能き時分に童子對面せんと、珉里隱居は二人の妾にいざなわれて、のさ〳〵出來りて、能こそ珍客、是より酒宴催さんと大酒盛になる。夜明比にはさすがの酒修行も酔つぶされ、たわいなくおそれをなして歸りける。江戸一人の酒家といわれし大丈夫の酒呑み、根岸の隱居と人に呼るゝ。

○十八大通文魚

十八大通の其一人、文魚といふ人は、享和の年末迄有し。足代方御用達大和屋太郎次といふ。江戸中の大通といわるゝ人は、皆々此文魚に隨て、親分兄弟分などゝ賴みて、女郎買の稽古所ともいわるゝ、河東連中は言に及ばず、どこの息子かしこの誰も、河東節を語らねば此文魚の氣請わるく、夫故専ら流行する。各々文魚より文の一字を貰うて子分となり、大通の内に入る。尤此人十八大通の頭にして、名前は立川焉馬作の白石噺七ッ目に書て、大盡舞に顯わす十八大通の跡、今に家殘りたる小田原町鯉藤、吉原大黑屋庄六など二三軒あり。文魚は老年に及び、神田川に住居して此所にて死す。寺は淺草田甫酉ノ町鷲大明神地内に、文魚大通居士といふ石塔あり。

○文魚丸の内の小便

文魚は昔に變りて落ぶれたれど、黒羽織に一本差で、丸の內御屋敷へ行といふを、百路坊といへる俳諧師居合せて、私も途中迄御供いたしませふといふ。文魚丸の內は當なしの事なれど、百路坊が前への飾りみへぼう者の昔人故、詮方なくかの百路坊と連立て、呉服橋より丸の內へ入、そこらこゝらと大手前へかゝり行ければ、百路坊不思議に思ひ、跡より行程に、土手鍋島のどぶへ小便をして、又々元の道へかへり、呉服橋へ出ければ、百路坊きもをつぶして、モシ〳〵文魚さんおまへ丸の內の御屋敷へ行とおつしやり升たが、どこへ御出被レ成升といへば、文魚今は錢なしなれ共、人の前をかざりて、折々御屋敷へ出る顏して、用がなくともわざ〳〵丸の內迄小便をたれに來たといふ。かならず人に沙汰するなといふこそおかし。

○髪結文蝶

文魚より文の一字を貰ふて文蝶といふ髪結あり。此男の結たる髪でなければ、文魚本田と言れぬ由、元結根に卷付ての本田なり。其比吉原通ひの客人、皆一歩づゝ出して文蝶に髪を結せたものなり。此文蝶の本田でなければ、文魚の氣にいらぬといふ。文蝶は後に文魚に別て、堺町にて大黒屋文蝶といふ。芝居の裏茶屋を出し、おのれは棧敷番となる。今の大黒屋文七が先祖と知るべし。故に文蝶の名殘る。

○大山參納太刀

下野屋十右衞門を祇園といふ。大山參の納太刀を三間半程に拵へ、所の若い者四五十人に揃のゆかた、みな〳〵に着せ、掛念佛にて大通り芝口より高輪へ差かゝり。自分は好のゆかた、鮫鞘の一腰差てふとん重ねたる駕に乘り、左右の戸ひらかせて先達して、ほどなく品川の宿入口にさしかゝる比、跡より召捕の御役人方來りて、祇園を駕から引ずりおろし、高手小手に繩を掛、同勢引返されて、早速入牢に及ぶ。餘り大行成事身分不相應之旨御咎を蒙り、しばらくが間牢內に居るこそ珍らしけれ。

附言、其後祇園は御咎ゆりて出牢せしが、一二ヶ月相立て祇園入牢の內、殊の外世話になりたる福井町の博奕打、ゆすりなどしたものにてつん吉と云者、同じく跡より出牢して、早速下野屋の見世へ尋ね來りて、旦那に御目にかゝりたいと言ゆへ、手代此事を奧へ通じ、祇園はツン吉が尋來た事、胸にぎつくり當て、つん吉が來たなら苦しうない、奧へ通せといふゆへ、かのつん吉を旦那の前へ伴ひ行ぐ、扨祇園ほつん吉に向ひ、扨々先比は貴樣のいかひ世話故、牢內も樂をして助りたり。其恩わすれやらずとて、何か女房にさゝやけば心得て、金だんすより包金取出して、つん吉が前に置、いかゞなれども禮物の金子取て异れよと渡せば、つん吉悔りして、此心には來れども、思ひの外の大まいの金百兩とは、下主の身にては始て手に取り、押いたゞきて悅び勇み、ぶる〳〵ふるへながら懷へ入れはいれたれど立事ならず、跡ずさりして歸りける。祇園がこゝろの內こそすさまじけれ。

〇茶番師

近江屋佐平次隱居に景舍といふ人有。至て茶番の名人にて、ある時の茶番に、題はしらねど、道成寺の口上有て、しめし籠を釣鐘にして、此內より景物の十能、味噌こし、さゝら、さいばしなどを出して、扨こそ世帶はあらわれたりといふ。茶番名代のものにして、この隱居老年に及て、病の床に付て、殊の外むづかしく、今臨終と一家親類はいふに及ばず、娘、子供、孫をならべて、泪ながら介抱せし時、はやいよ〳〵臨終際に重き枕を上て、たつた一言、しにぬるをわかといふておわりぬ。扨々しやれた隱居といふ。

〇むだ十といふ事

むだ十といふは、下野屋十兵衛が事をいふ。此人いたつて芝居好にて、內の造作を芝居がゝりに拵へ、月の中には兩三度も芝居を催し、致所は棧敷とかわり、床下拂ふて土間となる工夫至て面白し。亭主十兵衛は中村仲藏秀鶴の門弟にて、踊の名人にて振がよし。同じ役者仲間には、利倉屋庄左衛門など役者

氣どりの男にて、日頃狂言のみに心を移し、此兩人は素人芝居に金を入れ込め、其上都てむだ遣ひのみせし人故、むだ十といふ。

○西行庵竹の杖

伊勢屋喜太郎隱居を百龜といふ。此隱居年々箱根へ湯治に行く。ある年の湯治歸りに、久々大磯の鴫立澤へ寄らんとて、彼西行庵に馴染の庵主も居ればと尋ね行くに、杖をつき駕をつらせ、同勢七八人連にて庵の內に上り、四方山の噺して、又々來るべしと暇乞して立歸る。此時百龜隱居の竹の杖忘れて、駕に乘り立かへる。供の內にも隱居の杖を忘れたるにこゝろ付ず、其儘庵を出で行く跡にて、庵主あとりを見れば、百龜が忘れた杖を取り上げ、是は今の隱居殿が忘れた杖ならんと、能々見れば到て面白き竹ゆへ、ふと思ひ付て、この杖こそ西行が突たる杖といふとも、紛ひものとは思ふまい。いかにしても此庵に納ある杖は如何、元より西行が杖でなしと、百龜の杖と入替紫絹の服紗につゝみ、其儘納るこそおかし。扨隱居は四五年過て、湯治歸りに久々鴫立澤え立寄ぬ故、今年は庵主も尋たしと、例の庵に來て見れば、いつか已前の庵主と替りて、先の庵主は死跡にて、新米坊主の庵主始て近付と成り。此庵にては江戶の同者には、皆西行の杖おがませて、一人前十二文づゝ取事故、彼百龜が杖を出して、是こそ西行東下りに、此地に立寄り、鴫立澤の一首を詠ぜし時、忘れたまひし杖也とおがませたれば、隱居此杖を見て悔りし、扨こそ此杖は、先年我爰に忘れ行し杖ともいわれず、心の內にのみ思ひて、おのれが杖を十二文づゝ出して、同勢におがませ、錢を取られしも大たわけの噺也。今世に鴫立澤西行の杖は、札差伊勢屋喜太郎の隱居百龜と云者が忘れ置たる竹の杖なり。かゝる事此近邊には多くあり、能々糺し心得給ふべし。

○平十郎小判

笠倉屋平十郎は、札差の大身代にて、所持金の小判に平の字の極印打て取引せし故、世上にて此小判は

平十郎小判といわれし程の大金持也。あるじの平十郎は、いたつておごりものにて、都て家内は勿論、日比、琴、胡弓、くわげん、らつぱなどを好み、妾を抱へて楽み深く、橋場町に別荘有て平十郎屋敷といふ。庭の敷石樹々の植込、中々御大名衆も及ばぬ事、美を盡せし住居故、後の寛政の年に至りて御咎蒙りて、此下屋敷取拂となつて、地所は上り地と成り、庭石拂物に出て、御大名方などへ引取に相成。地面持主は靈岸島奈良屋源七抱地面也。夫程の平十郎にても、源七の地面買取度く思へども、中々に源七も平十郎に貸付置が能き故所持せしが、時節到來して御上え地所召上られ、今金座掛り銭屋の吹場となり、小高き土手の上に御門建て御役所有。右の平十郎が舊地也。

○札差惣寄合

御町奉行様の御名前は憚りてしるさず。札差仲間九十六軒と御定め、年に一度づゝ惣寄合とて、浅草駒形町駿河屋善藏方にて參會す。尤この駿河屋は、至て大き成る參會茶屋にて、今は絕てなし。會合の其日の出立には、黑仕立鮫鞘の長脇差にて、古參新参上下のへだて有。仲間惣頭分といわれし坂倉屋長三郎、大口屋源七と聞及ぶ。先駿河屋座敷正面の床の間に立花を建て、一面に毛氈敷詰め、三寶に長のし、三ッ組の盃、上の蒔繪に首尾の松、中は御藏蜆、下なる大盃は米俵積重たる蒔繪也。一升五合入といふ。至て美をつくしたる事なり。先惣頭分長三郎より始て、各順盃に廻す。此日新規加入の者、又は賓子、養子、家督弘め引合は、頭分へ賴みて仲間出勤に及ぶ。土地子は格別にて、天明の末迄惣寄合有しと聞く。寛政御改正此かたは相止みけり。御藏前者といわれし。斯こそ有度きもの也。偏に大平の御恵みと難レ有こゝにしるす。

○沽券状

元祖金翠、安永の比にや。藏前にて博奕流行して、金翠ある晩に四百兩餘もまけて腹立の上、また〳〵翌日寄集り催の時、今晩こそ昨夜の腹いせに、金子のかわり箱崎地面の沽券状を持てはり出し、各にあ

わふかせてやらんと、古金千二百兩、角屋敷の沽券狀をくやしいまぎれに丁とはりいだせば、どう取の人々餘りの大金故異見せしかども、いつかな金翠聞入なく、各詮方なくよし〳〵それなら勝負と、つぼを明れば半と出て、ぐわらり此千二百兩をとられ、一夜に箱崎の角屋敷失ひしは此噺也。後に八兵衞支配人、金子五百兩持て、右の沽券狀掛合のうへ取かへせしといふ。

○全吏妙見詣

二代目宗四郎は、四郎左衞門別家にして全吏といふ。至て金遣ひにて、月の十五日には柳島妙見へ參詣する。ある年の春、妾におみなといふ婦人有て、たいこ持五六人を連て、柳島船宿小倉屋より船に乘て、竪川筋より程なく船は妙見の川岸に着く。おの〳〵上りて妙見へ參詣し、それより吾妻の森え土手づたいに向ふへかゝり、むだ口大しやれかた〳〵行く折から、其日の大盡全吏が思ひ付に、おれがおみなの口を吸ながら先へ行から、跡より付て來て口を吸ふのを見付た者には、一兩づゝやろふといふゆへ、是は能き御趣向、左樣ならあなたがおみな樣のくちを吸ふのを見付け升たら一兩下さり升か難レ有と、全吏を先にたてゝ行く程に、こゝぞ能き所と全吏は、おみなが襟元引寄てちよいとくちを吸へば、跡の人々伺ひ來る故見付て、ソレ旦那見付升たといへば、南無三ソレ一兩と紙入より出してなげて遣る。又一二間行て例の通りくちを吸ふ。ソレ旦那ソレ一兩と、吾妻の森まで行く道わづか三四町の土手の間に、おのれが妾のくちを拾二兩が吸ふたといふ事。おそらく此よふなたわけた金遣ひは、今の世の中にはあるまじ。

○同芝居見物

堺町顏見世の芝居見物に、全吏は立出て西の下棧敷七軒物花々敷なり。此年顏見せ金子金づかへにて、半日程見物を待せ、今幕が明か〳〵と待草臥て居る故、あまりの事と全吏立腹して、今日はおれが見物に來て、此樣に金づかへにて幕が明き兼ね、此儘歸るも殘念と茶屋へ行き亭主に向ひ、いか程金子あら

ば狂言が出來る。金づかへなら金を出して一幕でも見物せねばならぬ。いくらあればよいといへば、亭主おふかた百兩もござり升たら宜しう御座り升といふ故。それならおれが百兩出して見物しようと、早速手紙認て金子百兩内え取に遣り、顏見世の幕を明させて見物せしと、自から全吏のはなしに聞けり。

〇靜の口舌

札差にて松前の船を持ち、年々しやけの魚商ふ事、大内屋市兵衞にとゞまる程の家にて、此あるじをじゆんしといふ。中昔比此市兵衞靜玉屋のしづか(本ノマヽ)を買て全盛を盡す。しづかはじゆんしと口舌の別れに、仲の町尾張屋の見世にて酒を呑て居たる所へ、じゆんし來りて靜をとらへ、うぬ猫又女郎め、爰に居たかと靜を引き付け、さんざんにてうちやくすれば、髮はほぐれ櫛笄くだけてそこにちらばる。靜はおのれがくしこうがひをかきよせかきよせ我前に隠せば、じゆんし猶々いかりて靜をとらへ、うぬしみたれ女郎め、櫛笄がそれほどほしいか。業さらしめといへば、しづかいふには、それだつてばづで有升ものをといふ。

〇附言

昔安永、天明の人物抜書は物語り聞しが、中むかしの寬政享和には書しるす程の事なし。亦々文化、文政の御時節には風俗かわれど、いにしへ元祿の男達の風儀殘りて土地がら面白し。今の世は藏前も商人同前にて、其上風俗替り、洒落も思ひ付も馬鹿者も一人もなし。されども二三十年跡迄は、おかしく馬鹿々々敷者も見へたり。爰にまじめな井筒屋八郎左衞門、京登りして上方女郎に馴染、此藝子を七百兩程にて身請し、江戸へ引取り茅町へ油見世を出せり。此女をおあいといふ。いつか、かさで鼻がひしやげておわりぬ。高いものとしるべし。松坂屋松齋は至て酒家にて、遊人おもしろき人物なり。一中節を好みて、此人より世上に流行する。澤村田之助をひゐきして兄弟となる。男色に金を入れしは珍らし。二代目金峯が若松屋の緑木身請け、大口市兵衞が大文字屋の一本に名高く、二代目一本名にしおふ扇屋の

花扇と二人身受せしは、森田屋市郎兵衞、まじめなかたい伊勢屋四郎左衞門は、人のかゝい者に成りたる兵庫屋の月岡を、十四五年立てもと買馴染の女郎故、思ひ殘りてしうしんふかく、はげの月岡を引取てめかけにせしも、古今稀れ成る事なり。當代伊勢屋嘉兵衞は鷹匠一件にて御咎蒙り、家財けつしよ上りものとなる。伊兵衞弟忠兵衞兄弟は博奕の入牢株式取上に成り、弘化二年に御免ある。近江屋佐平次虎丸は白玉を請出す、此白玉番頭と色事して居るといふ噂を聞て、佐平次番頭を切害して欠落す。後に向島に隱れ忍ぶ。松屋佐吉親子悴傳之助とも能を好みて、本所番場町別莊に能舞臺をしつらへて能を舞ふ。後に御沙汰有て同じく株取上られ御咎蒙る。是みな近代の事にして、外の土地にあらざる事、古今珍敷人々故後のはなしに書殘す。故に馬鹿物語と題して爰にしるすものは、同じく已前は其仲間にて、

六十三翁　二三壽老人誌

弘化三丙午の秋八月

十八大通　終


品物
近代世事談
原始



本朝世事談綺序

山谷非世之人。教誨遊學之者。强國致功之士。江海間暇之夫。熊經鳥申之翁。其所好也。非其所好也。孰知天下其所好哉。其端其塗樊然。其事其談。亦樊然焉。今也。有近代世事談。其事其談也。亦樊然而世代之徵也。其所好者何人者也乎。人士夫翁者。無所不好。無所何乎。樊然世代之徵。事談之原始者也云。

享保癸丑冬至日

浪花　松永據德書

凡例

一凡和漢品物の本源を記所の書、數あり。みな三皇五帝天神地祇の原上を記せり。今斯書は天正、慶長以來を幹とし、暫く遠きは永享、文明の頃を條とし、猶上古の品も聊加レ之、あるひは始元の事にあらずといへども、その事物の因に雜レ之。

一近代起所の品物、なんぞこれに限るべけんや。且机上に臨て、浮ぶ所の事物、たゞ牛の一毛に比すのみ。

一凡引用る書百有餘軸、その條毎に顯レ之、或は里諺雜談亞レ之。

一門部の前後、歴代の遠近、或は品物の差別、蒙童の眼をよろこばしめんがかめ、事は若きを前にし、老たるを殿にす。其部類にあらずといへども、相近きを以、一に統レ之。

一凡本邦近世の品物、其原水を求るのみにして、異邦の原始は不レ尋。

一凡其國、其所におゐてあらたに起る所の品物際限なし。追考追加ふべし。

東都神田　　崔下庵沾涼識

本朝世事談綺目録

巻之一

○衣服門

天鵝絨　七一一
金襴（唐織）　七一一
木綿　七一一
御所染　七一二
甚三紅　七一二
千彌染　七一二
暹羅染　七一二
べんがら島　七一三
もうる織　七一三
さんとめ島　七一三
伊豫染　七一三
大久保小紋　七一三
朧染　七一三
憲法染　七一三
小太夫鹿子　七一四
太夫鹿子　七一四
友泉染　七一四
正平染　七一四
菖蒲革　七一四
紙衣（一閑）　七一五
一端定尺　七一五
袖袂　七一五
袖縁　七一六
道服（羽織）　七一六
上下　七一六
白衣　七一六
縹帽子　七一七
綿帽子　七一七
澤之丞帽子　七一七
女前帯　七一七
吉彌結　七一七
踏皮　七一八
鼻紙袋　七一八
眞田打　七一八
夜着　七一八
蒲團　布子　七一九
綿貫　引解　七一九

○飲食門

茶　七一九
茶の湯　七二〇
有樂流　七二〇
金森流　七二〇
石州流　七二〇
遠州流　七二〇
利休流　七二〇
紹鴎（袋棚）　七二二
金無絹　七二二
鹽瀬饅頭　七二二
干菓子　七二二
丸屋求肥　七二三

大佛餅	七一三	幾世餅	七一四	花饅頭	七一四	米饅頭	七一四
鈌餅	七一四	餅屋	七一四	飛團飩	七一四	蕎麥切	七一五
慳貪	七一五	香物	七一五	澤菴漬	七一六	一休納豆	七一六
豆腐紅葉	七一六	祇園豆腐	七一六	豆腐田樂	七一六	地黃煎	七一二
水飴	七一七	燒鹽	七一七	蒲鉾	七一七	樺燒	七一七
淺草川白魚	七一七	源五郎鮒	七一九	鹽引	七一九	道正解毒	七一九
西大寺〔豐心丹〕	七二〇	定齋藥	七二〇	桑山小粒丸	七二〇	外郎	七二一

卷之二

○生植門

西瓜	七二二	南瓜	七二二	蜀黍	七二二	玉蜀黍	七二二
番椒	七二三	藊豆	七二三	甘藷	七二三	榲桲	七二三
臘梅	七二四	賴桐	七二四	秋海棠	七二五	千日紅	七二五
東浦寨牽牛花	七二五	朝鮮牽牛花	七二六	鐵線花	七二六	佛桑花	七二六
耆婆草	七二六	美人蕉	七二七	緒手卷	七二七	松菜	七二八
落花生	七二八	胡鬼子	七二八	箱根草	七二八	伊波奈之	七三九
蔦蘭草	七二九	萬年草	七四〇	時計草	七四〇	鹹草	七四一

○器用門

琴	七四一	三線	七四二	尺八	七四二	篳篥簧	七四三

印籠　七四三
瀬戸物　七四四
樂燒　七四五
葦屋釜　七四六
隱元藥罐　七四七
大筒　七四八
合羽　七四九
傘　七五〇
紙捻　七五一
楊枝　七五二
烟管　七五三
雪踏　七五四
大八車　七五四
加留多　七五六

膝　七四三
藤四郎燒　七四四
萩燒　七四五
阿彌陀堂形　七四六
鞍鐙　七四七
鎗　七四八
桐油　七四九
蠟燭　七五〇
摎元結　七五一
水引　七五二
出齒庖丁　七五三
千石篩　七五四
猪牙舟　七五五

風呂敷　七四四
渡茶盌　七四五
乾山燒　七四五
奈良風呂　七四六
馬轡　七四七
管鎗　七四八
萬年葛籠〔紅紙〕　七四九
仰願寺蠟燭　七五〇
伽羅油　七五一
南方鑷　七五二
御方庖丁　七五四
乘物　七五五
江戸辻駕　七五五

管簾　七四四
井戸茶盌　七四五
釜　鑵子　七四六
埴田炮烙　七四六
鐵炮　七四七
割符　七四九
挾筥　七四九
鳩杖　七五一
白粉　七五一
常香盤　七五三
箏　七五四
竹輿　七五五
唐弓　七五六

卷之三

○態藝門

香道　七五七
蹴鞠　七五七
加茂沓　七五九
神田沓　七五九
諷　七六〇
能太夫 ワキ師　七六〇
式三番　七六一
申樂　七六一

勧進能　七六二
小皷　七六六
正宗刀　七六八
横谷雕〔大學柄〕　七六九
楊弓　七七一
儀太夫節　七七二
外記節　七七三
河東節　七七三
男舞　七七四
勘彌芝居　七七五
おやま　七七六

狂言　七六三
巨皷　七六七
宗近刀　七六八
碁　七七〇
浄瑠璃　七七一
浄雲節　七七二
土佐節　七七三
隆達節　七七四
歌舞妓　七七四
獨藝　七七五
出づかひ　七七六

吼噦　七六六
太鼓　七六七
家雛　七六八
象戯　七七〇
加太夫節　七七一
語齋節　七七三
永閑節　七七三
道念節　七七四
勘三郎芝居　七七五
人形遣　七七五
浄瑠璃作者　七七六

笛　七六六
家研　七六七
奈良雕　七六九
雙六　七七一
井上節　七七二
肥前節　七七三
半太夫節　七七三
古今節　七七四
竹之丞芝居　七七五
野郎閒　七七五

巻之四

○歳時門

門松　七七七
走百病　七七八
紙鳶　七七九
七夕　七八二
燈籠　七八三

萬歳　七七七
出替　七七八
住吉遊女田植　七八一
盆　七八二
八朔　七八三

鳥追　七七七
雛　七七九
五月甲　七八一
六盆　七八二
十夜　七八四

稲積　七七八
蓬餅　七七九
入梅井　七八一
東山大文字　七八三
八木亥猪餅　七八四

大師粥	七八五	陰の節	七八五	節季候	七八五	七十二候	七八五
閏月	七八五	時鐘	七八六	彼岸	七八六		
○文房門							
詩賦	七八六	聯句〔漢和〕	七八七	和歌	七八七	連歌	七八八
俳諧	七八九	前句	七八九	冠附	七八九	色紙	七八九
短尺	七八九	板行	七九三	文字	七九三	大和假名	七九三
平假名	七九五	眞名	七九五	韻語訓語	七九五	三筆	七九六
三蹟	七九六	聖賢蹟	七九六	世尊寺流	七九六	上代流	七九六
定家流	七九六	尊圓流	七九六	近衞流	七九六	光悦流	七九六
瀧本流	七九六	堺流	七九六	志津摩流	七九六	畫圖	七九七
金岡	七九七	兆殿司	七九七	土佐流	七九七	周文	七九九
鐵舟	七九九	啓書記	七九九	雪舟流〔渡唐像〕	七九九	宗丹流	七九九
家の畫〔狩野〕	七九九	古法眼	八〇〇	永眞	八〇一	探幽	八〇一
主馬	八〇二	永叔	八〇二	鳥羽繪	八〇二	秋月	八〇二
能阿彌	八〇二	藝阿彌	八〇二	相阿彌	八〇二	雪村	八〇二
曾我流	八〇三	長谷川流	八〇三	松花堂	八〇三	大津繪	八〇三
浮世繪	八〇三	一蝶流	八〇三	光琳繪	八〇三	おりう繪	八〇三
紅繪	八〇三						

卷之五

〇人事門

先生	八〇五	藪醫	八〇五	人參功能	八〇五	苗字	八〇五
佛工	八〇六	蒔繪	八〇六	普請	八〇六	大工左官	八〇六
瓦工	八〇七	大原女脚袢事	八〇七	道中馬駕替事	八〇九	泡齋念佛	八〇九
鹿島躍	八〇九	傾城	八一〇	上頭	八一〇	里歸	八一〇
勝山結(島田)	八一一	辰松風	八一一	月代	八一一	髮結床	八一三
太平記讀	八一三	柔和	八一三	觀世縷	八一三	團十郎艾	八一三

〇雜事門

鹿島立	八一三	辻占	八一三	假山	八一四	一里塚	八一四
田圃	八一四	東川高瀬	八一六	木曾路	八一六	澪杭	八一六
長崎港	八一六	仙臺米	八一六	大名行列	八一六	水車	八一七
問屋	八一七	這入口	八一七	雜役馬(同牛)	八一七	輿轎	八一七
僧都	八一八	小兒	八一八	摸々具和	八一八	元興寺	八一八
鄙婁	八一九	提迷藏	八一九	四十二の厄(初老)	八一九	子生月數	八二〇
一石云事	八二〇	茶湯	八二〇	笈摺	八二〇	百萬遍	八二〇
線香	八二一	人字訓	八二一				

本朝世事談綺　巻之一

菊岡沾凉述

衣服

○天鵝絨

正保、慶安のころ、京師にて織はじむ。そのむかしは、是を織事をしらず。一とせ渡しける中に、針鐵の残りたるを見て、織事を得たり。鐵線を横に通し、織込充て後、剃刀やうのものにて上糸を切り、織入れたる鐵線をとる也。しかる時は切たる糸、鳥の毛のごとくになり、その光澤、天鵝の翼に似たるゆへに名とす。

○金襴唐織

本朝に織はじむる金襴は、京西陣野本氏なり、唐織は西陣俵屋が織所はじめ也。

○木綿

類聚國史に云、桓武帝延暦年中に、崑崙人三河國へわたり、此者實なるものをもてり。綿種と云。これをうへさしむと也。しかるに中世此種絶たり。

敷島のやまとにはあらぬから人のうへてし綿のたねはたえにき　衣笠内府

文祿年中に、又種をつたへ、その製を倣ひ、道具を調へ、今至寶となる事、いまだ百五十年をすぎず。

そのむかしは卑賤の者、蠶綿をきる事あたはず。麻布に蘆蒲の穗綿を入てきたると也。史炤釋文云、木綿江南多有レ之。

○御所染

寛永のころ、女院の御所にて好ませられ、おほくの絹を染させられ、宮女、官女、下つかたまでに賜る。此染京田舍にはやりて御所染と云。

○甚三紅

承應のころ、京長者町桔梗屋甚三郎といふもの、茜を以て紅梅にひとしき色を染出す。又中紅と云。世俗云、此甚三郎は、貧乏神を祭りて富貴となれり。其神像は藁にて作り、紙を以て冠衣服とし、旦暮これを祈りしと云り。

案に、是則ち福神也。金銀の箔にて作るを、藁にてこしらへ、錦繍をゝいかざる所を紙にす。謙りて驕らぬいましめ也。世に福神と稱す。大黑これ也。頭にかぶる所の物は、上に示すものありて、我まゝにせざるの心、色黑きは美をかざらず。成低きは高ぶらぬ形、持所の袋は、財寶を藏す。槌は業の具、しばらくも手をはなつ事なかれ。職人、農人の手は、則ち打出の小槌也。ふむ所の米穀は、命を全うするの元なり。これを以て心に祈らば、かならず福來りぬべし。此大黑に付ては、神釋いろ〳〵の說あり。これはかのびんぼう神といふに因て、たらむれをいふのみ。

○千彌染

寶永のころ、中村千彌といふ芝居者はじめて此染をきたり。むらさき色にして、大絞りにそめたる也。

○暹羅染

暹羅は國の名也。日本より凡三千四百里と云。此國よりわたりたる染物を模して、日本にて染る。又華布と云。中華より渡るを唐華布と云也。唐さらさは洗へども文采落ず。和染は落る也。又和染を唐へわたすに洗ふに文采落ず。よつて珍とすと云。唐染、唐にてはおつる也。其所の水による物なり。

べんがら島　榜葛剌國の名　日本より凡三千三百里

もうる織　莫臥爾國の名　凡三千八百里

さんとめ島　聖多默國の名　凡三千八百里

○伊豫染

備前の大守御好にてはじめて染る。御近習此染を着す。

○大久保小紋

大久保家の御召にて、御好みありて染させられしゆへ名付く。

○朧染

寛文のころ、上京新乘坊の辻子紺屋新右衞門と云もの、はじめて染る。此者箕面の富突に詣づ。群集の中にて、一の富の札を拾ひ得たり。歡喜身にあまり、宅にかへる折から、初春の月色、古人千金にもかへじと云けんもかゝる時をやと、行ゝふと此染を工夫し染出す。世間甚だ賞して、大きに利を得て富貴す。辨天の加護による物か。箕面寺は、攝州豐島郡にあり。開山役小角彫刻の像、一尺三寸の辨才天なり。毎年正月七日富修行す。是一の富也。二月三日に二の富修行あり。

○憲法染

明暦、萬治のころ、京西洞院四條吉岡憲房といふものはじめて染る。吉岡染とも云。此人、劍術を得たり。吉岡の一流をきはめ、門弟あまたあり。房の字、法にあらため、實名を以て法名とす。

○小太夫鹿子

貞享、元祿のはじめ、伊藤小太夫といふかぶきもの、江戸にて此かのこぞめを着たり。江戸中に此そめがのこはやる。又京、大坂にはやりて、江戸がのこと云。

○太夫鹿子

貞享のころ、京西洞院四條藤屋善左衞門と云もの始て染る。ゆひがのこのごとくに、紺屋形を以て染るものなり。今以てかたひらなど、麁相なるは此かのこなり。又結鹿子は古來よりの物也。說文に纈、繫レ繒染爲レ文。

○友泉染

友泉は繪師なり。かれが書く所を模して染たるなり。尤も墨繪にて書きたるも有。友泉は祇園町に住。

○正平染

肥後國八代古閑橋の邊にて染る天平革といふあり。甲冑の威などに用ゆる染革なり。此版の中に、不動の像八幡の二字、あるひは梵字等あり。天平十二年八月と記せり。右神佛の形あるゆへ、土人鬻事をおそる。征西將軍懷良親王八代高田におはせし時、別板を彫しめ、商賈を御免許ありしより、御免革といへり。此版、南朝の正平六年六月一日とあるゆへに正平革とも云。これ正平染のはじめなり。

○菖蒲革

城州八幡山の麓大谷にて染る也。神功皇后三韓を征し給ふ時、鎧の威に準じて革を以て染る。これを高

麗勝武と名付く。後義家東征の時、岩清水に祈る。高麗勝武を大谷より奉る。又秀吉公朝鮮征伐の時、岩清水に詣、戰利を祈る。すなはち高麗勝武を獻ずと云。又菖蒲と書くは、仲夏の節にこれを染るゆへに菖蒲と云。勝武と通音。

○紙衣

元は律僧これを著す也。女の手をふれずしてなすものなれば也。寒氣を防ぐの服とす。南都二月堂參籠の僧徒、おの〳〵これを着す。澁を用ひず潔白也。白紙子といふ。

○一閑紙子

大坂一閑といふものこれを製す。至てつよく、手綱にするに切れず。又米を煮、豆を煎、炮烙の代りをすと云り。

○一端定尺

寛文五年に、絹布一端の長さ二丈六尺に定めさせらる。當世の衣服、此定尺にてはみぢかし。

○袖袂

袖袂同やうの物にて心かはる。



袂　かくの如し。延寶、天和のころまでは、ふり袖長一尺五寸を大ふり袖とし、小歌にもだんだふれ〳〵六尺袖をとうたひし也。今世二尺をみぢかしとす。八尺袖也。これにては定尺ます〳〵たらぬはづ也。又そぎ袖とて、袂のふくらみなし。今又角袖など、その時々にかはりて、そのさまおかし。羽織、ちかきまではすぐれてみぢかし。今又長

し。上方の女の帶せまく、男の帶ひろし。變じてはやる事又おかし。天和のころは、つゞら笠、元祿のころぬり笠、都鄙共にはやれり。江戸にて寛文、延寶のころは、すべての女、あみ笠をきたり。古き江戸繪にまゝ見へたり。當世女のあみがさ着たらば、氣違などいふべし。その時にそれ、此時にこれ、おもしろし。

○袖 緣〔袖口〕

細川三齋のはじめられし也。始末のためにあらず。その頃は專ら紅裏を用ゆ也。袖口へ紅色見ゆるをいみて、別の色の覆輪をとられたる也。自然の風情となりて、今專ら用ゆ。

○道服 襦〔又羽織〕

道服、襦相同じ。道服は大臣至極の褻にこれを着し、烏帽子を被る。因て烏帽子道服と云。民俗衣服のうへに短衣を着す。是を道服と云。官家の道服といふ者あるにより、庶人の禮服とす。又襦は馬上の具也。漢の襦は袖細し。俗に小手袖と云類ひに同じ。和の襦は袖なし。今陣襦と云ふ類ひなり。今庶人の羽織と稱するもの又相似たり。衣の上に是を着すに鳥の羽翅のごとし。よつて羽織の文字あり。又法體の着す直綴編綴も、官家の道服より出たるもの也。

○上 下

鹿苑相國義滿公の時、內野合戰、正月元日に起る事あり。殿中賀會輩、素襖の袖と裳をとりて事に從ふ。吉例と成る。細川賴之の所レ爲也。又說、信長公の時、松永彈正これをはじむと云り。

○白 衣

世俗禮服を着さゞるを云也。禮服を製する事、袞龍より以下、卿大夫士に至るまで、五色采章を以て、

高下の位をわかつ。白衣の初位は白布なり。禮服を脱ぎ去る時は、みな白衣なり。

○縹帽子

天台大師、隋煬帝の前にて說法ありし。寒風を凌しめんと、御衣の袖をときて給はりしを、そのまゝに被りたりし也。本朝は桓武帝の御衣の袖を、傳敎大師に給はりし事あり。是花のぼうしの始め也。

○綿帽子

官女の老たる人、寒風を凌んため、額に綿を被る。額わた、被わたとも云。又烏帽子のごとくかぶるゆへに名とす。藤原雅世の富士の紀行に、〔割註〕雅世は永享のころの人なり。」

雲やそれ雪をいたゞくふじの根もともに老せぬ綿ぼうしかな

○澤之丞帽子

元祿の始に、荻野澤之丞と云かぶきの者、此ぼうしを被そめたり。左右に鉛のおもりを付たるぼうし也。よつておもりぼうし共云。

○女前帶

明曆、萬治のころより起る。京祇園淸水邊の茶屋女、參詣のあまたある時は、帶のとけたるをむすびて、うしろへまはすいとまなく、前にてむすびたるまゝにて、茶酒の給仕をしたり。一人より二人へうつりて、いつとなく、島原の傾城、あるひは茶屋遊女、前にてむすぶ。京の町女、又田舍にわたりて、世間一統に此風をまなぶ。大きなる略儀なり。今以て御所方あるひは武家の奧方にて、老若ともに前帶にする事、曾てなし。

○吉彌結

延寶のころ、上村吉彌と云かぶきの者、むすびそめたり。今以て女子專ら此風をよしとす。その以前は男のごとく、四角にむすぶを、かるたむすびといひし也。

○踏皮

むかしは、足袋を皮にて作る。女は晴にむらさき革を用ひて、紫足袋とて、下々の女は得はかざりしなり。この紫たびは、寛文、延寶のころまではやりし也。〔割註〕皮を以て作るゆへ踏皮といふ也。」倭名抄云、今野人以鹿皮爲半靴。

○鼻紙袋

近世の製なり。寛永のころよりか。むかしは疊紙を以て、丸散の藥、あるひは耳爬石筆やうの物を納む。今のはながみ袋は、疊紙の遺風也。今云鼻紙も、むかしは懷紙といひし也。連歌の懷紙も、今云はな紙をとぢて書たりし也。よつて懷紙の名あり。

○眞田打

天正のころ、眞田阿波守（左衞門の父）浪人の砌、大小の柄を木綿の打糸にて卷たり。或人、これをわらふ。阿波守云、たとへ上に錦を着たりとも、心頑愚は用に立まじ。此魂を見べしと也。兩腰ともに相州正宗にぞありけれ。世人その木綿の紐を呼て、眞田打と云。

○夜着

慶長、元和のころより專らにすと云。むかしは小寢卷とて、常の衣服のすこし大なるを下に卷て、そのうへに蒲團をかけて、上つがたもこれをめしたり。連歌四季よせ冬の部に、ふとんはありて夜着なし。俳諧御傘のころは、もはやありつれども、古法をまもりて貞德老人も、夜着を冬季にせざる也。

○蒲團　布子

或人云、ふとんは蒲にて作りたる圓座也。今云ふとんにあらず。今のふとんは衾といふもの也と云り。左にあらず。やはり蒲團也。木綿わたらざる以前は、庶人の冬の衣服には、布に蒲蘆の穗わたを入てきたり。よつて布子の名あり。蒲團また同じ。蒲の穗を團て入る。よつて蒲團の名あり。古へも貴人は蠶綿を以てつくれり。これ其衾なるべし。古きふすまなどよみしは是也。

○綿貫　引解

むかしは、今のごとく四季折々の衣服なく、綿をぬきて袷とし、またときはなして解分衣といへり。今云引とき也。

夏來れば賤が麻布ときわけるかたいなかこそ心やすけれ

飲食

○茶

日本紀云、弘仁六年に、五十二代嵯峨帝、江州滋賀へ御幸ありし時、崇福寺の大僧都永忠みづから茶を煎じて奉るとあり。此時代は唐茶にて、日本に茶を植ざるなり。八十三代土御門院の御宇、建仁寺の開祖千光國師榮西、宋に入り茶の種を得て歸朝す。明惠上人此種を栂尾に植る。よつて栂尾を茶山と稱す。その植たる所を深瀬と云て今に存す。その作る所の茶をまた宋へ渡す。宋人の詩に幸得ニ梅山信一。替ニ日本茶一と作りて、ほうびの詩を越したり。〔割註〕梅山は栂山の事也。梅と栂、字義同じ。〕其後宇治にうつす。又仁和寺、醍醐、葉室、大和の室生、伊賀の服部、伊勢の河上、駿河の清光、武藏河越など栂尾、宇治にならびて上品とあり。是みなせんじ茶なり。凡日本に茶を種そめて、今享保に至る事五百

有餘年也。東鑑に、葉上の僧正茶一盞を實朝公へ献じ、茶の德を記せる書をさゝげし事あり。

○茶の湯

茶禮の式は、東山義政公にはじまる。南都稱名寺の珠光飲禮の事を說話す。御側の能阿彌、相阿彌、近臣志野三郎左衛門尉宗信、此道にふかし。此禮は貴賤の隔なく、武士も刀を帯せず、膝をまじへて信を語り、ゆるやかなるは誠の和なり。武野紹鷗、その子方寸齋宗瓦利休、その子道安、有樂三齋、織部遠州、宗和宗旦、瀨田掃部、宗拙宗佐、いづれも和尚なり。

茶禮は、禪家隱遁の體を模し、質素閑靜を學びたるもの也。よつて宗匠たる人を、和尚といふなり。

有樂流　織田源五郎信益は信長公の弟なり。薙髮の後東山に住し、有樂と云。此流織田定晳に傳はる。定晳は信長公の孫信定の子也。今以て茶の家とす。定晳の弟子は、江都粟谷爐休なり。現在

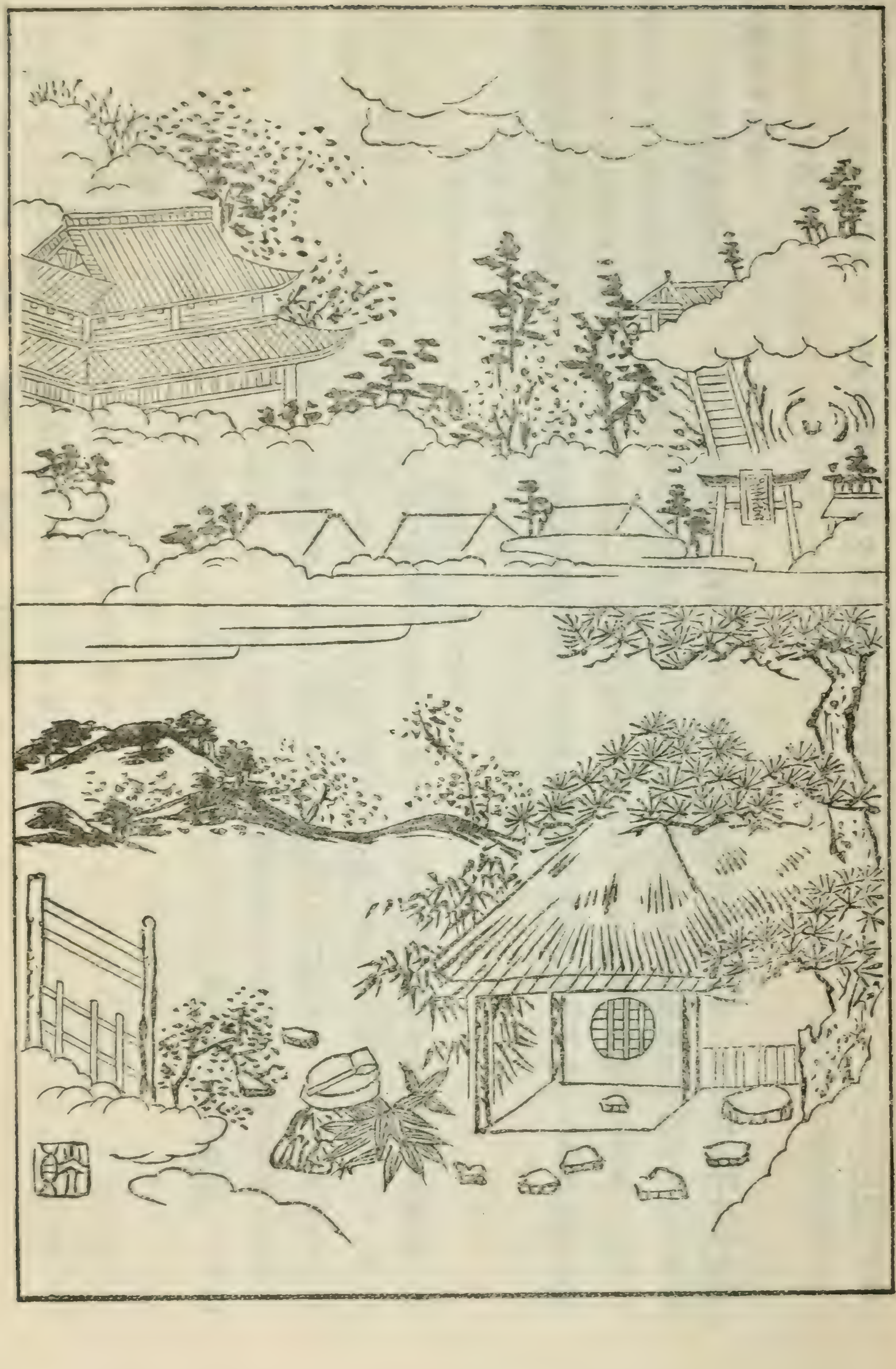
金森流　出雲守、後に宗和と稱す。

石州流　片桐石見守、後に宗關と云。宗和の弟子也。

遠州流　小堀政一、薙髮して宗甫と稱す。寛永の頃の御師範なり。宗甫は古田織部正重勝の弟子也。

利休流　今千家といふ。千利休は泉州堺の人也。父は千阿彌と云。名ある士の流なり。本姓をかくして千の一字を名字とす。中興茶道の祖なり。

千利休　始與四郎ト云　抛筌齋　宗易
紫野大徳寺ノ山門ノ上ニ像アリ
─道安　眠翁
─紹安
─宗旦　元叔
今日菴　咄齋伯元
─宗拙　閑翁
─宗佐　堪笑軒



利休云、茶の四焉　能和ニ　能敬ニ　能清　能寂

袋棚　茶人紹鴎始て作る。〔割註〕武野大黒菴紹鴎一閑と云。」

我名をば大黒庵といふなれば袋棚には秘事をこめける。

○金絲烟

慶長十年に、はじめて南蠻より種をつたへて、長崎櫻馬場にこれをうゆる。後山州花山に刻賣。是を花山たばこといふ。又吉野つゞいて丹波にうゆる。初は竹筒に入て烟を吹く。是に請取渡しの禮あり。今はすたれり。中華には烟酒と云。火氣薫蒸して表裡に徹す。酒を呑がごとし。よつて名付り。たばこに其功四ツあり。一には飢時是を以て飽しき、二には飽食に是を以て饑しき、三には醒時是を以て醉しめ、酒後にこれを以てすれば痰をくだし、殘れる醉をとかしむ。四に鬱氣を散ず。後水尾院御製

もしほやくあまならねども煙草なみよる人のしほとこそなれ

○鹽瀬饅頭

京建仁寺第二世龍山禪師宋に入る。中華の人林和靖の末裔林淨因といふ者、龍山の弟子と成る。元の順宗至正元年に、龍山本朝へ歸る。林淨因從ひて本朝に來り、奈良に住し、氏を鹽瀬とあらため、饅頭を製す。これを奈良饅頭と云。鹽瀬淨因の子あまたあり。一人龍山の弟子と成り出家す。建仁寺の中兩足院の開祖無等以倫是なり。以倫の弟鹽瀬某、京におゐて製レ之。烏丸の鹽瀬の祖也。又林氏と呼は林和靖の裔なれば也。

○干菓子

菓子は今云水菓子の事也。よつて菓子の字を用。往古は今砂糖を以て製する菓子なし。桃柿柑類等を用

ひたり。傳云、干菓子は、本草に出たる所の白雪糕にもとづき製レ之。中古、あるへい糖、こんぺい糖の類を渡す。これに倣て數品の干菓子を製すと也。堂上の御菓子は、一條の虎屋、近江二口屋能登製レ之。御用の御菓子は、銀町大久保主水製レ之。

○丸屋求肥

寛永の頃、上使出雲の大守、京都にて求肥飴を召れ、江戸へ御歸府あつて、此菓子を尋させられしに、そのころ、いまだ江戸に求肥を製する者なし。それゆへ京都におゐて、求肥飴を丹練したるものをめさるに、中島浄雲といふ者、江戸へ來て製し上る。よつて其頃は扶持方四季施等を拜領す。今神田鍛冶町丸屋播磨其裔なり。是江戸にて求肥を造るはじめ也。よつて求肥屋と云。

○大佛餅

根元は京誓願寺前にてこれを製す。今以て堂上方へも召さる。至て其風味格別也。又方廣寺大佛殿の前にあり。これ又好味なり。江戸淺草にて製するは、これを倣て大佛餅の名目を以てす。近世數品の餅あり。いが餅、さつさ餅、あん餅、くり餅の類ひ多く、提重杉折に盛りて美を盡せり。又ぼた餅は、むかしははなはだ賞翫せし物なれども、今はいやしき餅にして、杉折提重には詰がたく、晴なる客へは出しがたし。牡丹のかたちに似たるにより、牡丹餅と名付。又萩の花かい餅ともいふ。堂上方には、今とても御賞翫あるよし也。最明寺殿、足利義氏の許へ鶴岡社參の序に、立よらせ給ひしに、一獻にうちあはび、二獻に海老、三獻にかい餅にてやみぬと、つれ〴〵草に見えたり。今も片田舍にて、歷々のふるまひをぼた餅にて饗應は、むかしの遺風なり。かならず古實は田舍に殘れり。繁花の地にはうしなへる事のみ多し。

○幾世餅

根元は兩國橋西詰にあり。前は鐵砲町に住して、すこしき餅を商ふ。此者の妹にかもんと云あり。この女の夫は蕨驛の某にて大百姓なり。渠と示し、元祿十七年にはじめて鄽をかまふ。其餅甚だ味美にして榮ふ。今所々にこの名あるは、これに准もの也。何ゆへに幾世餅と名付たりや。

○花饅頭

本所回向院の前伊勢屋と云見世にして、山城屋三右衛門といふもの、享保十年の秋のころよりうりそめける。

○米饅頭

根元は、淺草金龍山聖天宮の麓鶴屋也。慶安のころ、此家の女におよねと云あり。すぐれて才智也。此女はじめてこれを製すゆへ、およねまんぢうといへり。

根本はふもとの鶴屋うみつらん米まんぢうは玉子なりけり

是遺佚がよみし狂歌也。遺佚は延寶の頃の歌よみ也。今に此所の米まんぢうを名產とす。

○缺餅

正月の餅を鏡と云は、其狀の似たるを以て稱す。鏡餅を割て祝ふを鏡開きと云。具足に備へたる鏡餅は、斬殺の詞をいみて刄を入ず。引缺ゆへに是を缺餅といふ。今は片餅を、すべてかき餅と云。

○餅屋

江戸にて餅屋といひて、賣餅の根元は、芝三田町鶴屋といふものぞはじめなりけれ。

○飛團餅

正徳元年の夏、甲州八日市場の不動尊回向院に開帳ありし時、兩國橋の東詰松屋三左衛門といふ墁匠はじめてこれを製す。はじめは景勝團子と云。尊貴の人の名ははゞかるべき事と、所の長ども制しけるにより、そのゝち越後團子と稱す。壯士うすつくといへども、つぶれざるを、北越長尾家の鉾先に比して名付しとかや。但し越後の名物にてはなきよし也。ちかき頃、京、大坂にはやり、淨瑠璃にも作りこみてもてはやせり。誠に岷江の源は盃をうかめつれども、楚に入は漸く舟を以てするがごとし。わづかの庇の下にうりそめしもの、かばかりひろまれるも大平繁花のしるし也。

○蕎麥切

中古二百年以前の書、もろ〳〵の食物を詳に記せるにも、そば切の事見えず。こゝを以て見れば、近世起る事也。もろこし河漏津と云船着の湊の名物、茶店に多これを造る。よつて河漏と云。是日本のそば切の事也。江府のそば切の盛美には、諸國ともに及がたし。

○慳貪

江府瀬戸物町信濃屋といふもの、始てこれをたくむ。そのゝち所々にはやりて、さかい町市川屋、堀江町若菜屋、本町布袋屋、大鋸町桐屋など、名をあらそふ中に、鈴木町丹波屋與作といふものぞ名高かりし也。これをけんどんと號るは、獨味をして人にあたへざるの心、又給仕もいらず、あいさつするにあらねば、そのさま慳貪なる心、又無造作にして儉約にかなひたりとて、儉飩と書と云。此說よろし。

○香物

相傳ふ香物は漬干より出たるもの也。薫物の中へ麁木をうすく片三四分の大さにして漬浸し、その香氣をうつしてこれを燒。漬干といふ也。これにもとづき、瓜、茄子、大根等の野菜を、糟粕に藏し、その

好味をうつして、茶菓子に用ひたる也。合せ香に漬たるより起るによつて、香物といへり。專ら茶の湯に用ゆとあれば、慈照院殿の時代より起る事か。今口取に用る菓子に比するものか。

○澤菴漬

東海寺の開祖澤菴和尚の漬はじめられしと也。

○一休納豆

大德寺眞珠菴の納豆、一休和尚の製法也。唐には納豆の事を豆豉と云り。

○豆腐紅葉

堺鑑に云、紅葉を付るは、人の多く買樣にと祝して、紅葉を付たり。買樣と、紅葉と、音便相近きゆへ也と云。愚なる祝事のとりやう也。

○祇園豆腐

京祇園樓門の前、東西の兩茶店を、二軒茶屋と云。京水茶屋始也。此茶屋むかしの製は、とうふうすく切り、串につらぬき、少し燒、味噌の稀汁を以てこれを煮、麩粉をそのうへに點ず。今の製は異なりといへども美也。是を倣ひて江戶、大坂所々に此名あり。

○豆腐田樂

田樂法師が曲の形に似たるゆへ名とせり。田樂法師は七尺ばかりの細き棒に、下より三四寸上に、ちいさき貫を通し、此小貫を足がゝりにして、兩足をのせ兩手にして棒のうへを握り、棒の先にて飛ぶ曲あり。此姿ひとへに棒に身をつらぬけるがごとく、とうふをくしにつらぬきたるかたちにひとし。此田樂法師は、南都春日の御祭に、今以此曲あり。

〇地黄煎

古へ堂上より醫家に命じて地黄煎を製せしむ。其法穀芽の末粉に、地黄の汁を合せ、これを煉て用ゆ。腸胃を潤し、氣血を益すの良糕なり。今は地黄の汁を用ひずといへども、此名を以てす。京稲荷前にて、專ら製レ之。江戸にては下り飴と稱す。

〇水飴

南都春日の社家、正月糕を煉り、堂上方又は地下へ送る。これを滑糕と云。江戸に云水飴なり。

〇燒鹽

天文年中、洛上鴨畠枝村藤太郎と云もの、泉州湊村に住居し、紀州雜賀鹽を土壺に入て燒かへし、諸州へ出す。壺鹽屋藤太郎と號す。承應三年甲午、女院御所より、おほけなくも天下一の號を、時の奉行石河氏に命じて賜はる。又延寶七年鷹司殿下より折紙狀を給ふ。呼名は伊織と號す。猿丸太夫の末裔といひ傳ふ。

〇蒲鉾

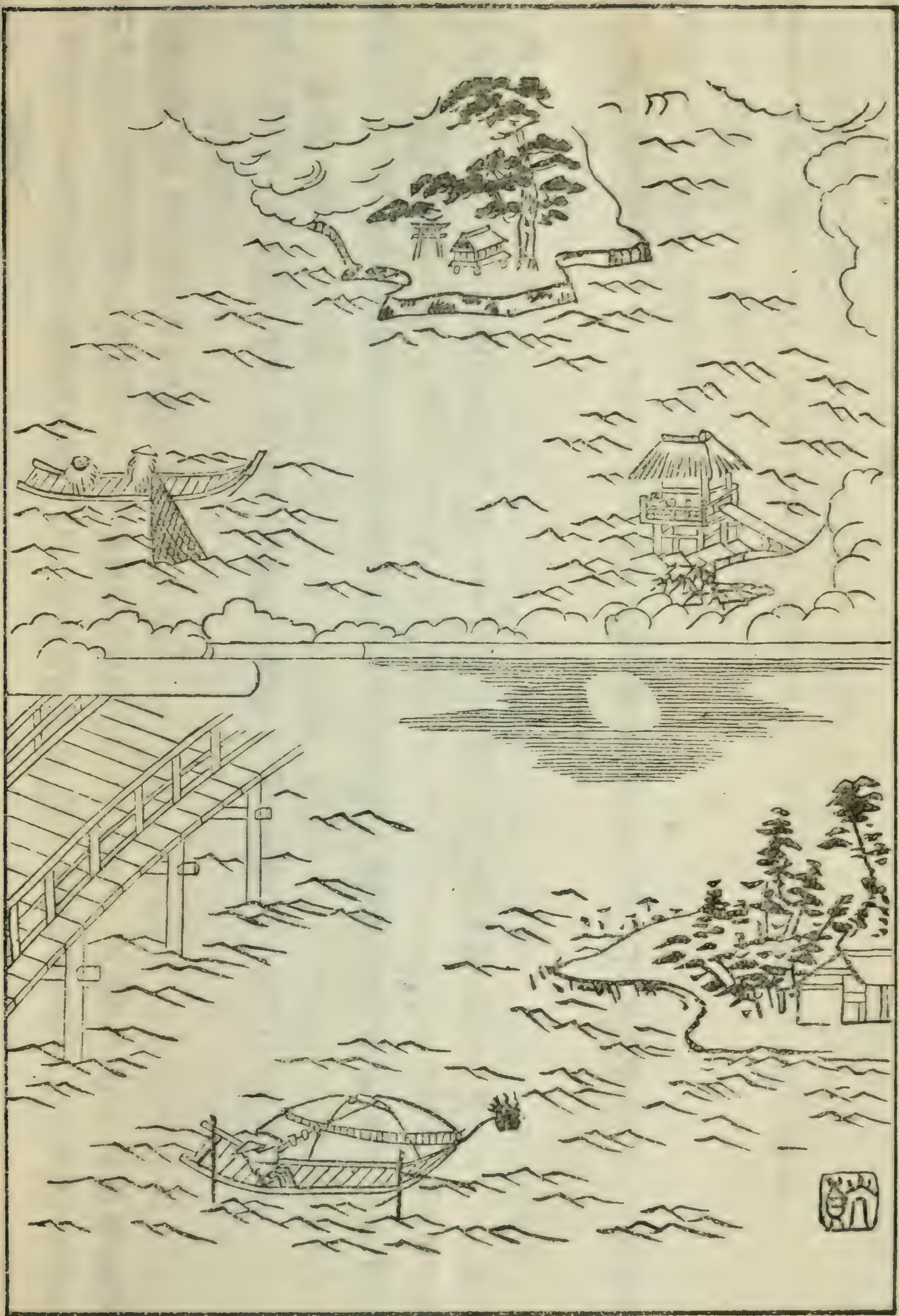
魚肉を磨て細き竹に塗りこれをやく。そのかたち蒲の穗に似たるゆへに名付。今竹輪と云也。近世は小板に貼すといへども、むかしの名を呼ぶなり。

〇樺燒

鰻をやく加減、紅黑の色なるころをよしとす。其色その形、ともに樺皮に似たるを以て名とす。

〇淺草川白魚

寛永の末、白魚の胤をまかせられし也。



○源五郎鮒

近江の產なり。此鮒湖北尾上島津といふ所にて取り、その所の長を源五郎といふ也。よつて此名あり。又源五郎といふ漁人多く漁れば、我糧の價ほど殘し、餘り又放せり。此事草紙物にあり。又云、元來夏頃鮒なり。初鮒は正月の末よりとり、三月のすへさかんにして、四月夏に入ころ、此鮒多く取る也。常の鮒とは狀異なり。いつのころにか源五郎と、人の名によびあやまりけり。

○鹽引

むかしは楚割といふ也。越後を上品とす。鮭は西國になし。關東に魴なし。北國に鰹なし。その土地による物か。生植猶多し。奥州には今以て茶なしといふ。

東鑑云、文治六年十月十三日、遠江國菊川の宿におゐて、佐々木三郎盛綱小刀を相副、鮭の楚割を折敷に居、子息小童を以て、御宿に送進。時に申て云、只今これを削食せしめ候所、氣味すこぶる懇切なり、はやくきこしめさるべきか云々。殊に御自愛し給ひ、折敷に御筆を染らる。

まちえたる人の心もすばやりのわりなく見ゆる心ざしかな　　頼朝

此時代はかろき事にこそありけれ。

○道正解毒

片山隆盈と云人、剃髮して道正と號。越前永平寺の開祖道元和尚の弟子なり。道元入宋の時從ひて宋に行。道元中華の宿德を參し、所々經歷の間、山中にてにわかに病發り息たへんとす。時に一人の老翁來りていふ。我國にして近隣の名衲なり。いかにして此をうしなはんやと、一丸の藥をあたふ。病立所に癒。此時老翁道正にむかひていふ。爾師に從ふのこゝろざしふかし。今用ゆる所の一丸の藥方を授け

ん。本朝に歸り子孫に傳へて、もろ人の疾苦をすくふべし。我は是日本稲荷の神なりと、いひ終つてその行所をしらず。則ち今の解毒丸是なり。道元和尚はじめは深草佛德山興聖寺に住す。稲荷のやしろに遠からざれば、我國の近隣と神託ありしなり。道正歸朝の後第宅に稲荷を勸請し、今に存せり。此邊をいにしへは松木島といふ。松樹しげりて、その陰ふかきにより木下といふ。世俗木下道正と稱す。元祖道正より今に至つて二十九代、その家相つゞく。誠に奇なるかな。稲荷の神の冥助によるものなり。興聖寺は、近世宇治郡宇治橋の上に再興あり。

○西大寺

豐心丹は、南都西大寺の院中より出るゆえに、世俗西大寺といふ。〔割註〕院中月々順番に勤む。」佛祖統記云、西大寺豐心丹は、律師道宣もろこしの永徽元年に、毘沙門天より補心丹の方を受きたりて、今和劑となす。その傳方律院によせあるといふ。又說、畠山何某紀伊、河內兩國を領せし時、もろこしの祕方をこひしに、豐心丹の方をわたす。是畠山家の祕方となれり。そのゝち西大寺の大將戰場のはたらきあり。其功勳に豐心丹の方を黃紙にうつし、三百石をそへて西大寺へつかはしけると也。

○定齋藥

大明國の沈惟敬といふもの、朝鮮を歷て本朝にきたり、靈藥の方を秀吉公へ獻ず。玆に大坂藥種屋定齋と云もの、天性俳優を好む。秀吉公猿樂を催ふさるゝの時、かならず定齋をめして俳優をなさしむ。因て御意に應じ、かの惟敬が名方を授けられ、家產とすべしと也。その名を呼て定齋藥といふ。此くすり、諸病を治す事明也。今京東洞院靑木屋は定齋の裔なり。

○桑山小粒丸

桑山法印相傳ふる小兒萬病の良藥なり。

○外郎

應安のはじめ、大元の老臣禮部員外郎陳宗敬といふもの、筑前國博多の津にきたる。大元の至正年中、大明のために亡ぶ。宗敬二君につかへずとて、遂に本朝にきたる。將軍義滿公その名を聞きたまひ、まねかるゝといへども來らず。此人文材博達にして占相に通じ、又靈方を傳ふ。後に崇福寺無方和尙の室に入て衣鉢をうけ、明照と號。齡七十有餘にして卒す。その末裔京都にきたり、西洞院に住し、透頂香を製す。蓋透頂香といふは、公卿殿上人冠の甲に入て、髮の臭氣を去也。因て此名あり。又相州小田原の透頂香は此餘流也。鎌倉圓覺寺の大覺禪師來朝ありて、鎌倉に住する時、此藥を小田原の土人に傳ふと云。小田原の外郎これ也。唐僧大覺禪師は、圓覺寺の開祖也。諱は道隆と云。

本朝世事談綺　巻之二

生植

○西瓜

寛永年中、琉球より薩摩へわたる。慶安の頃漸長崎にあり。僧義堂の空花集に、和西瓜詩あり。

西瓜今見生東海　剖破（新脱カ）含玉露濃

義堂は寛永のころの人なり。承應年中、藤堂家の呉服所菱屋某、長崎にて此種を求め、勢州津に至て太守にさゝぐ。則ち其者の第宅に種さしむ。はなはだ出來たり。此種粗近國にありといへども、いまだ狭し。人又あやしみて食せず。寛文、延寶の間、長崎より大坂へつたへ、京、江戸に廣まりて今さかんなり。

○南瓜

元和年中に渡る。京都には延寶、天和の頃より種をうゆる也。又南京南瓜あり。おなじころにわたるか。

○蜀黍

中世中華よりわたる。黍の類也。關東にてはもろこしきびといふ。珍物はじめて渡るに、その名をしらず。よつて唐の字を加へて呼ぶ也。唐胡麻、唐芥子、唐柹などの類也。

○玉蜀黍

天正のはじめ、蠻船持來る。關東にては、唐もろこしといふ。

○番椒

秀吉朝鮮征の時、はじめて取來ると云。又慶長十年、たばことおなじく蠻國よりわたるともあり。南蠻胡椒と云。中華には番椒と云。番は南蠻の事也。中華には大明の末にはじめて見ると云。因て本綱に未レ載レ之。

○藊豆

隱元禪師大明より持來ると云。本綱に、二月下レ種、蔓生延ニ纏于籬垣一とあり。しかれども春夏秋、いつ種をおろしても生る也。能もよろし。

○甘藷

元祿の末、琉球より薩摩へわたる。煖土によろし。寒土に植れば生ず。本綱ニ云、南方の海人多壽なるは、五穀を食せず、甘藷を食するゆへなりとあり。此蔓を切り植るに、根生て活す。土人朝夕飯に充つ。あるひは蒸て干粉にして餻とす。民食を助け飢を救ふ。其利大なり。肥前、薩摩に多く植る。東武へ來るは頃年なり。

○榲桲

寛永のころ蠻國より渡る。此實林檎のごとし



南蠻人砂糖を以てこれを煮、加世伊太とよぶ。よく痰嗽を治す。

○臘梅　又南京梅と云

正保年中、中華より渡る。十二月ちいさき黄の花さく。

○赬桐　ひきりと云

延寶年中、薩摩國屋玖島より來。甚だ寒を畏ル。冬は其根を藁に包み、春に至りて地に移す。



臘梅

匂ひらんのごとし。葉しげく兩方相對す。高さ四五尺を過ず。枝葉に荊のごとく針あり。冬に至て葉落つ。



赬桐　一名唐桐

葉の大さ五六寸にして皺有り。花紅色、臭樹の花に似たり。夏秋かけて咲く。

○秋海棠

寛永年中、中華より長崎へ渡る。草本花詩譜、秋海棠嬌冶柔軟。其同ニ美人倦レ粧。此品喜レ陰。一見レ日。色則瘁。九月收ニ枝上黒子一。

下略



秋海棠　一名斷腸花

第一の葉左に見れば、第二の葉右に見、かはる〲左右に見る。花六七月開く。日にあへば色變ず。



千日紅

花葉にあつて花形楊梅に似たり。冬に至て凋まず。好花なり。

○千日紅

天和年中、中華より長崎へわたる。夏花開。深紫の色、葉は淡紫なり。寒を畏るゆへ、はやく霜雪を防ぐ也。

○東蒲塞牽牛花

寛永年中、東蒲塞より長崎へ渡る。葉は豌豆に似て、七八月紅の花開く。根は其年枯る。實を取つて植ゆ。

○朝鮮牽牛花

貞享年中に渡る。八月に白き花開く。朝顔に似たり。



葉は茄のごとし。
一名曼陀羅花と云。
つる草にてはなし。

○鐵線花

寛文年中、中華よりわたる。紫白の二種あり。四月花開く。又紫白相まじるもあり。蔓草也。



鐵線
葉は菊に似てこまかなる葉まじる。
四月蔓を地に埋むに根生ず。來春分て植る。

○佛桑花

寛文年中に琉球よりわたる。中絶して又享保のはじめころに來る。花四月よりひらき、十月にいたる。紅、黄、白の色あり。

○耆婆草

天正年中、蠻國よりわたる。秋に至て花あらずして實生す。箒子の莖穂に似たり。よく瘡疥を治す。打

傷惡腫にもよろし。又惡虫に螫たるに、葉をもみて付る。褥の下に置ば、蚤虱を避く。書筴の中に納れば、蠹生ぜずと也。能瘡疥を治し惡虫を避く。よつて耆婆草と呼ぶ。俗にるうだといふは、蠻國の語なり。

○美人蕉　一名紅蕉

天和年中、琉球よりわたる。薩摩、日向に多し。近年畿内、關東へ來る。花紅、春開く。秋にいたつて猶芳し。濕地を忌。陽地にうゆべし。

○緒手卷

三月に花開。白に黄を帶と紫色と二種あり。花の形䕺に似たり。葉は胡蘿蔔の葉に似たり。高さ二尺ばかりにして、葉しげし。畿内にあり。未關東には見ず。



耆婆草

春苗を生ず。嫁菜に似たり。臭き匂ひあり。秋に至ては箒木に似たり花なし。



本草云、花色正紅如二榴花一。日折二一兩葉一。下略

○松菜

延寶のころ、大明の僧將來して希なりしが、頃年所々に見ゆ。三月、五月の間、漏て酢に和し、あるひは羹の中に入てこれを食す。甚だ味淡甘して美なり。本綱に、有ニ邪蒿ー者。云三四月生レ苗。下略、是松菜の事也。



松菜

高五七寸、つるなくして地を這ふ。葉、女松に似たり。又杉菜のごとし。

○落花生

元祿のすへにわたる。典籍便覽に云、藤の蔓、莖葉扁豆に似て、花開地に落、一花地に就て一莢を結ぶ。大さ桃のごとし。深秋取、味甘美也。人甚だ賞す。

○胡鬼子

日光山にあり。又〔割註〕比叡筑波にありと云ふ。」木の高八九尺を過ず。夏花開。子小豆ほどにして、上に葉つきて、はごのこに似たり。



於₂日光₁鹽に浸₂器₁に入て賣ㇾ之。吸物などに用ゆ。後水尾院御製

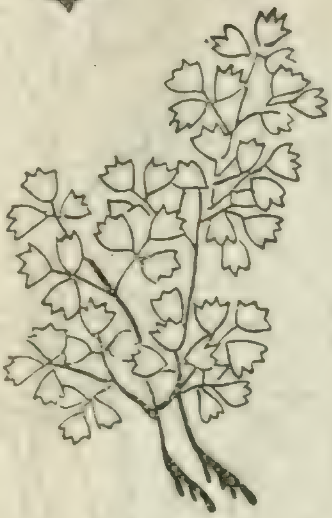
つくばねのそれにはあらでこのこのよひの月はそらにすめ〳〵

○箱根草

相州箱根山にあり。草の苗六七寸にして細き莖、葉は銀杏に似てちいさくうすし。根糸のごとし。產後に血をとゝなふと云。一年紅人毛これを見て、良草ある事を稱し、請て採ㇾ之、甚だ珍とせり。

○伊波奈之

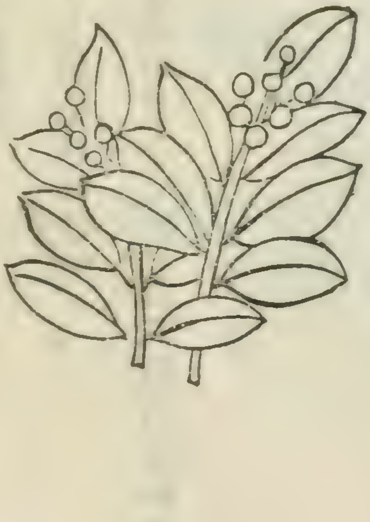
江州三井寺の山中にあり。二月に花開く。虎耳草花に似たり。白くちいさき花なり。三月に子を結ぶ。大さ大豆のごとし。葉の間につゝまれ、外の色青く、中紫黒色也。皮を去て食す。味酸甘し。



箱根草



葉ノカタチ



○蔦蘭草　又張良草

日光黑髮山の頂にある大草也。高一丈餘。花の莖生のぼりて、二丈ほどあり。莖葉ともに、蕗に似て莖五六寸周り、葉六七尺四方、花石蕗のごとし。至つて黃色なり。古根程大く若根は少し。



蔦閒草

夏より秋かけて花開く。實は菊のごとくにして、あらはれず。



萬年草

岩に生ずる苔の類なり、形松の葉のこまかなるもの也。

○萬年草

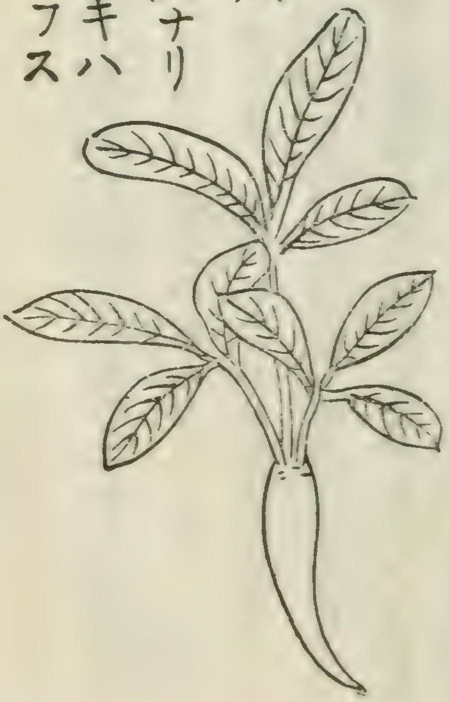
高野山大師の御廟にあり。一とせに一度、日あつてこれを採と云。此枯たる草を水に浮めて、他國の人の安否を見るに、存命なるは、草水中に活て生たるがごとし、亡したるは枯葉そのまゝ也。

○時計草

享保の始にわたる。花五月のはじめより秋かけて咲。紅紺白紫の色あつて、葩三重にかさなり、蘂多く糸を染たるが如し。一日の中、色品々にかはり、花形おもしろき花也。



時計草　長崎にてぼろんかつらと云葉もみぢに似たり。蔓のごとくにしてかつらにあらず。草にして又草にもあらず。さし木にして根を生ず。



○鹹草　今日種をおろせば明日に生ず八丈島にあり。日本の蕪大根のごとくに作り、常に食す。是を食すれば、疱瘡をのがる。匂芹のごとし。葉は前胡に似たり。三葉に分る。所謂八丈島は、世に云女護島なりと云。本綱附錄に云、扶桑の東に女國あり鹹草を産とあり。又八丈島は伊豆の國に屬す。此事北條五代記に委し。

器用

○琴

舊事記に、天詔琴、大已貴命持給ひしとあり。和琴は河海抄に出たり。又弓六張をならべて引鳴したるより起ると無名抄にいふ。是は天鈿女命、天香弓にて並べ、絃を鳴し玉ふ故事也。今玩ぶ十三絃は

箏と云也。宇多帝の時、筑紫彥山にて色子と云命婦、此曲を唐人につたへられし事あり。これ故筑紫琴とも云。或說十三絃は、二十五絃をわりて半略したる也。十二の調子をあはせり。初の一絃、名のみばかりで彈く事なし。因て半琴と云。寬文の頃、筑後國善道寺の僧法水といふもの、箏を學んで妙術を得たり。後に東武にくだり、上永撿挍城談につたふ。〔割註〕上永、後ニ八橋ト改。」八橋撿挍是を得て、始て三線にうつし合す。今以て筑紫樂と靜す。此八橋は、貞享のころ、京にて卒す。于時七十餘、黑谷に墳あり。

○三線

永祿年中、琉球より渡る。その時は蛇皮を以て張る。或人泉州堺の盲人中小路と云ものにとらせたり。其後虎澤と云盲人、本手破手といふ術を引始。慶長の頃、澤角と云盲人、琵琶の名人なりしが、三線を手練し、小歌にのする。そのころ淨瑠璃節出來たり。これに載て彈るは、澤角がはじめなり。其後に大坂加賀都、城秀の兩人術を得たり。江都にくだりて加賀都は柳川撿挍と成、城秀は八橋撿挍となれり。當時八橋流、柳川流と稱するは、此兩撿挍が術なり。是を三線と號は、三の線あるゆへなり。三の字さみと云は、閉口の音にてはねがなをみといふ也。目論はもくろみ、燈心はとうしみ、御帶はおみ帶などの類ひ也。しかるをいつのころ、何者の書そめしにや。味の字を加へて、世間一統に三味線と書。又はねがなのんを、近來むを用ゆ。元來んは、に文字なり。片假名のンは、ニ文字の跡をはねて、ンとし、此ンを又んと、かなに書たるもの也。當時此かなづかひの粗のこれるは、紫苑、苦膽、蘭、錢など也。難波はむかしの假名書をよびて、今以てなにはといふ也。此類多し。

○尺八

つくしのみやに始るといへども、猶その昔もありし事也。筑紫宮は後醍醐帝の皇子中務卿懷良親王なり。吉野拾遺に云、つくしのみやの御としもゆかせ給ざる御時、尺八をめし、天せい妙を得させ給ふ。吉野の御幸にふかせ給ふに、見なれぬうろくず、水よりおどりあがりぬ。上もめづらかに興ぜさせ給ふ。管絃記云、馬融狀ニ長笛一空洞無レ底刻ニ其上一。五穴一穴出ニ其背一。法、大概節を一ツこめて、一尺八分に切るゆへに名とす。節より下七寸、上三寸八分也。しかし竹の太細によりて、調子ちがふゆへに、定ありて定まらず。音色は笙、筒音は黃鐘調也。左の手は上、右は下、指づかひ三十二品あり。篳篥に同じ。歌口のしめやう笛におなじ。宗佐を以て始祖とす。宗佐より高瀨備前守、是より實相坊、これより教院、是より安田城長、是より大森宗勳、是等中興の祖とす。羅山文集云、頃年有ニ大森宗空者一。善吹ニ尺八一。是齋、宜竹、指田、一音など、みな名人なり。宗勳作、宜竹作、指田作、各々珍とす。

○篳篥簧

攝陽群談に云、攝州島上郡鵜殿村芦を以て宜とす。樂人これを設て簧に作るに、音をよくする事神妙也。他所の蘆はよろしからず。

○印籠

印籠は、元來印判印肉を入る具也。今藥を入。藥をたしむ物を藥籠と云。印籠の一重なるもの也。蓋を中にて合せ、風のいらぬやうにしたる也。今箱に藥籠蓋といふは、この藥籠より起る事也。今は藥籠印籠とりかへて用ゆ。

○

巾着は、むかしの燧袋の遺風なり。火打袋は、古事記云、日本武尊東征の時、相模國に至り給ふ時、

國造、尊をそむき、野に火をかけて燒ける時、其姨、倭比賣命より賜ふ囊に火打あり。此火打を以て、向火を着てやき退け給ふとなり。世に火打袋を刀に付るは、これよりはじまる。太平記に云、靑砥左衞門夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋に入て持たる錢を、十文とりはづして滑川へおとしけると也。又上古の火打袋は、大名といへども布あるひはなめし皮にて、緒〱はむくろじを付たり。今の巾着は、七寶をかざれり。殷紂王象牙を以て著を作らしむを、箕子と云賢人、以ての外の驕といひし也。紂王は唐土の天子也。象牙にて箸を作りたりとて、さのみ驕といふほどの事ならず。當世平人の印籠巾着に比しては評するに及ばず。

閑凊と云もの、かんせい縫をはじむ。時代しらず。

〇風呂敷

元は風呂の揚所に敷て、ゆたかにひとしきもの也。今物を包ふろ敷は、此名をかりたる物也。

〇管簾

古來よりありといへども、賣物とする始は、正德のころ、築地小笠原家の道具持沖忠右衞門と云者作レ之。兩國橋東岸山本善兵衞見世にてはじめて賣る。

〇瀬戸物

和漢三才圖會に云、尾州瀬戸に陶家盛に作る故、磁器を呼で瀬戸を以て惣名となす。

〇藤四郎燒

順德院の朝に、加藤四郎右衞門と云陶人あり。始めて小き坩を作。是茶入と成。此者業未熟さず。口を下にすへて燒たるゆへ、口兀て美ならず。是を口兀手と云也。而後建曆年中、永平寺の僧道元

和尚にしたがひ宋に行き、陶家の祕事を習ふ。歸朝の後作る所の物、最貴重す。世に其名を略して藤四郎と云。後剃髪して春慶と號す。

○渡茶盌

三島手は建暦のころわたる。高麗の上品とす。竪に細き繪文、三島暦に相似たり。因て名付。是茶盌のわたる始也。熊川は朝鮮咸鏡道の地の名也。大概高臺の裏に藥染す。彈反の形也。渡唐屋金海、御本手、判司繪高麗棘肌、刷毛目、雲鶴等、此外數品あり。

○井戸茶盌

上品の器也。朝鮮征伐の時、井戸左馬助持來り、〔割註〕とら屋の茶碗二つ。」秀吉公へ献ず。何某所持なれば、井戸と名付られたり。井戸脇是に亞り。大概は細なる裂文あり。一決ならず。

○樂燒

文祿の頃、朝四郎といふ者これを燒。此茶碗に二品黑赤あり。高臺に樂の文字を植也。秀吉公聚樂の城にありし時、千利休朝鮮の陶造を招き、利休狀を製して、茶碗をやかしむ。朝鮮の朝の字をとりて、朝四郎と號く。又聚樂の土を以てこれを作る。よつて樂燒といふ也。黑樂燒の藥は、加茂川石にあらざれば出來ず。是此家の祕密にして、此石、他にしる事なし。京師にその裔ありて、今以てこれをやく。

○萩燒

毛利輝元高麗の陶造を招き、これを燒しむ。その者を高麗左衞門と云。毛利家は長門國萩の城主なり。其地におゐてこれを製。よつて萩燒と稱す。今燒所の陶工は左衞門が末流也。

○乾山燒〔割註〕渡りに建山といふあり。これは異也。」

尾形深省、嵯峨鳴瀧邊の土を以て燒はじむ。鳴瀧山は王城の乾にあたれり。よつて乾山を名とす。〔割註〕深省は尾形光琳の弟にして現在也。又詩文和歌を善す。」

○釜　鑵子

三才圖會に云、上古は鐵釜なし。瓦を以て作り用レ之とあり。茶器に用る所の鑵子は千利休冶工與次郎と云者に狀をおしへ、尻丸、尻張、蒲團、大雲龍、小雲龍、富士形、車軸等の數品を鑄さしむ。又菊あるひは桐の紋あり。これを太閤釜と云て稱美す。

○葦屋釜

筑前芦屋の里にてこれを鑄る。松竹梅杉の畫文あり。多く僧雪舟の圖あり。舟は備中の人也。筑前に遠からざれば、冶工舟を請じて畫かしめ、釜の模範とす。

○阿彌陀堂形

秀吉公有馬溫湯に浴し給ふ時、千利休從ひ行たり。阿彌陀堂の前に茶亭を搆ふ。太閤これへ來臨あり。則ち利休、茶を點じて献ぜり。その時用ひたる釜の狀摸して、新舊を論ぜず、阿彌陀堂と云。

○奈良風呂

南都宗善といふ者の作る所也。黑赤の二品あり。土風爐也。又知牟加羅と云あり。琉球より渡る。是また珍とす。

○埴田炮烙

河內國埴田にてこれを製す。むかし行基菩薩埴田の陶器（衍カ）におゐて、はじめて磁器を作らしむと也。今茶器に用ゆる炮烙は、筑後の柳川よりいづる。ともにはんだほうろくといふ。

○隱元藥罐

相傳ふ、隱元禪師形をこのみて作らしめ、常に爐におかれけると也。或說に、湯氣藥罐といふ是なり。罐子の蓋をさりて、下の茶の湯氣を以て、上の素湯の沸事を工夫した、是を湯氣藥罐と名付と也。元藥罐は藥を煎ずる器なり。近世藥鍋出來て藥罐は外にす。

○鞍鐙

明德、應永の頃、大坪左京亮は馬術に妙あり。生國相州鎌倉の人也。薙髮して道禪と云。時に鹿島神宮を祈、夢中に鞍鐙の曲尺を得たり。道禪の作所の鐙鞍を神作と稱す。且遠方に行といへども、其鞍裂ず。その馬痛まず。將軍義滿公、道禪が精妙をはなはだ賞し給へり。馬術は大坪流と稱して、專ら此流を良とす。近世神作の神を省て作の鞍、作の鐙と云。

伊勢流　伊勢守貞繼と云人、乘馬の法、鞍鐙の妙工を大坪道禪より傳へ、一流を起し、是又妙術たり。貞繼は平貞盛十三代の裔也。將軍義滿公に仕へて近習也。その子貞信より、代々妙工今に裔あり。

○馬幟

大永のころ、北條氏康の臣大道寺が持せしと、甲陽軍鑑に出たり。又信長公の時、木下藤吉はからひとして、侍大將の面々さし物を少大くして、小馬幟とす。これ近世のはじめなりと云。

○鐵炮

弘治元年、南蠻人氏宇志俱智といふ者琉球國へわたり、鳥嘴銃を造る事を敎ゆ。琉球より薩州多禰島にわたる。同年三年京師に入て、義輝公へ獻じ、その術を傳ふ。而後佐々木義秀に命じて、江州國友村に居住させらる。義秀則ち彼者に百貫の地をあたふ。古への百貫は、凡今の百石の領地なり。日本の工

人彼が製に倣ふ。泉州堺芝辻清右衛門入道妙西と云もの巧手たり。羅山文集に云、井上氏正繼此術に長じ、巧を運て奇を呈す。製様機あり。尋常の及ぶ所にあらず。又朝鮮へは日本よりわたしけると也。朝鮮の柳相國が懲毖錄に云、日本天正十八年庚寅三月、對馬太守より、孔雀と鳥銃を送る。吾國鳥銃あるは、此時より始ると記したり。

○大筒

其暫後、外國より大筒を渡す。鑄筒玉目一貫目計の筒也。此筒のごとき大銃を製すべき者ありやと、諸國の鍛冶をめしあつめさせけれども、御請申ものなかりしに、堺の妙西が子理右衛門入道道逸、かしこまつて領掌す。凡本口一尺三寸、末口一尺一寸、長一丈、玉目一貫五百目の筒を、不日に張て奉れり。これ日本大銃のはじめなり。〔堺鏡ニ見ユ〕

○鎗

軍用に專ら用ゆる所の槍は、楠木正成が作る所と云。太平記住吉合戰に、楠正行が兵士天野了願法師と云ふ法師武者、柄の長さ一丈ばかりに見えたる鑓、馬の平首に引そへたりとあり。此時節は珍らしぞうに書たり。專らに用る事は室町家の時分より起ると云。古今銘盡に云、近江國天九郎俊長と云者、鑓を作るの上手と有。延文のころの人也。大むかしも鎗ありしかども、今のやうに小どりまはしなるものにあらず。大騷に拵たるものと見えたり。三代實錄に元慶五年條下に、槍一百八十竿。鎗槍或は鯰尾の槍とあり。

○管鎗

慶長のころ、江州佐和山の主大谷刑部始て作る所也。刑部は病ふ事ありて、手の中心にまかせず。よつ

て管鎗を工夫すと也。事始に云、手ぼう左馬之助始て作ると有。

按、手ぼうといふ苗子、未だしらず。さだめて異名なるべし。手ぼうといふによりて見れば、刑部が手のうち自由ならざるといふにひとし。刑部を始は左馬之助といへるか。まさしく同じ人なるべし。

○割　符

竹の長六寸にして、二つに割て是を合。竹付と云聲にしたがふ。よつて符と云。漢武帝竹使符を作らしめ郡國守にあたふ。半合て右は京師にとゞめ、左りは郡守にあたふると也。これ割符のはじめ也。

○合　羽　桐油

合羽は中古のもの也。上古は簑を用ゆ。軍用には猶簑也。今簑箱といふあり。簑を納る具也。合羽の元は丸合羽を作る。人の着す其體鳥の兩翼を合せたるに似たり。因て合羽と名付。

○桐　油

桐に油桐といふあり。はじめは此實の油にて製したるなり。今は荏の油を用ゆといへども、桐油の名あり。本草に云、岡桐に類して小く、長ずる事遲し。其子を收りて油とす。荏の油に似たり。又云、此油を以て物を塗に、五色を製す。白色は常の漆のあたはざる也。此油はなはだよろしき也。因て桐油漆と云。又松脂を加へて、船などをぬるに、水を漏さず。名付て知也傘塗と云。

○萬年葛籠幷紅紙

元祿のはじめ、神田鍋町つゞら屋甚兵衛といふもの、はじめてこれを作る。此者元人形屋なり。張子細工よりもとづきて、經木を中へ入張立たる也。又紅紙も此者の始る也。其裔今に榮ゆ。

○挾　箱

信長公の時より始る。そのむかし挾竹とて竹をわりて衣類を挾これを用ゆ。挾竹のかはりなれば挾箱と號。又對挾箱にして行列に立るは、秀吉公の時、布施久内はじめてこれをなす。

○傘

天正のころ、堺の商人納屋助右衛門と云者、小琉球にわたり呂宋に至り、文祿三年に本朝へ歸る。于時藥壺五十箇、傘、蠟燭各々千挺、活麝香の獸二疋等を秀吉公へ献ず。數千金を賜ふ。是傘の渡始也。此形を以て日本にて作レ之。或書平宗盛は傘工の子と書り。是不審。

○蠟燭

文祿年中までは日本に蠟燭なし。助左衛門が献ずる所のらうそくに倣てこれを製す。蠟を採もの凡五種あり。漆樹、荏桐、榛、ダマノ木、烏臼木、また女貞木よりも取ると本草にあり。雍州府志に云、黄白の蜜、壺の底に凝滯ものを取て蠟とす。

唐らうそくは、眞に葭を用る。よつて折として立消のあるもの也。本朝の人これを考へ、燈心を卷て眞とす。はなはだ上品なり。むかしは軍用にする所の松明を、常なる夜も用ひたり。年中行事を書たるむかしの繪に、大晦日のけしきの所に、掛取の帳を持たる人に、松明を持せり。今是をおもふに、不目由にも又不用心の事にこそ。有難世とはなりぬ。

○仰願寺蠟燭　世俗誤てかうかんじと云

江戸山谷崕の仰願寺の開祖仰願上人の起す所也。別時念佛を修せらるゝの時、內佛のちいさきに、らうそくの大きなるはわづらはしく、又小きは事しげし。よつて細く、すぐれて長き蠟燭作らしむ。今に至て持佛堂のらうそく專ら用レ之。

○鳩　杖

鳩は咽ざる鳥なり。老人は痰せまり氣よはくして咽ぶもの也。故に咒咀とす。續漢禮儀志に曰、仲秋の月八九十の老人に杖を賜ふ。杖の端に鳩を作りて着たるにより、鳩の杖と云ふ也。又云、唖に咽たる時、手の中に鳩といふ字を指にて書、嘗れば則ち治すと云。

○紙　捻　又髮捻と書

中華に云所の髻なり。紙をひねりて、髮の元を結により元結といふ。近世までは、自分々々に紙を縷て、おのれが髮を結ひたる也。又若衆、女の長く用ゐは、平元結とて紙を一寸ばかりにたちて、巻そへし也。日本紀云、天武天皇詔曰。自今以後。男女悉結レ髮。

○摎元結

寛文のころより起る。紙捻をながく縷て、水にひたし、車にて縷をかけて、水を摎ゆへに、しごき元結也。また文七元結といふあり。是は紙の名也。至て白く艶ある紙なれば、此紙にて製するを上品とす。

○伽羅油

正保、慶安のころ、京室町髭の久吉賣はじむ。其後三條の市宇賀、縄手の五十嵐これを製す。江戸にては芝の大好庵、春虫喜右衛門などはじめなり。其以前は胡摩の油に白檀、丁子等を浸して、匂ひ油と稱す。おくれ髮を付るは、蠟及草を以てす。又髮付とて唐蠟を煉て付る人適にあり。その頃は唐蠟にかぎる事とせしに、頃年、漆の實の蠟を晒て、これを用ゆる也。

○白　粉

持統天皇六年に始て鉛粉を作とあり。しかれども精ならざりし也。慶長、元和のころ、泉州堺錢屋宗安

と云もの、大明の人に習ひ、はじめて造る。又小西白粉は、堺の薬種屋小西清兵衛、〔割註〕小西攝津守父也。大明に入て習得たる所の法也。小西和泉大目此裔といへり。近世本朝の白粉甚だ勝れたり。よつて異國人是を買去る。

○楊枝

或人の云、楊枝は近世の製なりといふ。その起る所いかん。答て云、近代の物にあらず。菅家御集に、

わすれても竹のやうじをつかひしかねがひし事の叶はざりしは

此御詠を以て見れば、上古よりの物なり。又天竺にては佛在世よりありし也。楊枝淨水と云事、經文に多し。又齒木を嚙と經にあり。これ楊枝の事なり。唐には此事中絶しけるにや。永平寺の開祖道元禪師入宋し、楊枝をつかひしに、天童山の如淨禪師、甚だ感じられたりとぞ。これよりして今以て中華にやうじをつかふ事、道元を以て始とすといへり。本朝の矩摸ならずや。

○水引

京師城殿、始てこれを製す。紙捻を水に浸して、巾を以て引絞ゆへに名とすと云。又相傳ふ、水引は元來連歌の懷紙を綴る具也。連歌は風情を元とすなれば、紙捻を紅靑黃に彩て用ゆ。是をぬりそろへたる所、細川に秋の木の葉のちり敷て、紅黃の木の葉みだれて、水に引るゝ粧ひに似たればとて、水引と號。そのはじめは手前にて製しけるを、城殿これを作りて、はじめて賣物とせり。

○南方鐇

尾州名護屋の產也。南方の名は、近衞殿のつけさせられしと云。孔明が出師の表に、深く不毛に入り、今南方已定、甲兵足りの心也と云。淸少納言枕の草子にあり。かたきものゝ部に、しうそしらぬずさと、

よくぬける毛貫とかけり。

○常香盤

近世製レ之。京、大坂にこれを作る者多しといへども、武江吉政太兵衛が造ル所を上品とす。關西の諸州關八州の寺院、多くは吉政が造るを貯ふ。此もの始は銀町にあり。後回向院前に住す。祖父より相續て三代、此器を作るを産とす。三代目の太兵衛去ル庚戌夏卒す。その子二人あれども、いづれも業をあらためて蔦屋、丸屋など名乘て茶屋となれり。今此器を作る者多しといへども、皆拙工なるのみ。

○烟管

たばこの渡りたる時節は、紙を巻てたばこをのみたり。そのゝち葭あるひは細き竹をそぎて、それにたばこ盛りてのみけると也。羅山文集云、佗波古ハ草名。採レ之乾暴剜ニ其葉一而貼ニ于紙一捲レ之。吹レ火吸ニ其烟一。下略 踊先に鍮を用ゆるは頃年の事なり。元和元年六月二十八日、天下一統に多波古御停止ありける。そのころ白木屋といふ者、柳原の封疆を通るに、つかれたる乞食の、菰の下にしのびて、たばこを呑を見る。渠がおもふは、かくきびしき御停止に、糧につきたる者だに、これを捨得ざる事、かほどに世の人好むなれば、近ほどにゆるやかならん事を考へ、江戸、京、大坂の捨れるきせる、其外たばこの器の當時用たゝざるを買求め庫に納む。はたして程なく此禁の弛けり。時に右の器物を賣て、大きに利を得て富有と成りて今に榮ふ。

○出齒庖丁

庖丁は所々にありといへども、泉州堺を良とす。名譽の庖丁鍛冶あり。一流を鍛ふ。世こぞつてこれを用ゆ。かの男の向齒出たるにより、出齒が庖丁と呼けるより、終にその器の名となる。

○御方庖丁

同所より出るたばこ庖丁也。此鍛冶己が妻に相槌を擣せ、宜これを鍛ふ。夫婦ともに鍛練して世に名を得たり。時の人名付て御方庖丁といふ。關西の民俗、妻を稱して御方といふ也。

○箒

掃帚と云草より起る。此草、莖のしなやかなるものなり。乾し葉をさりて、塵を除るに用ひそめたり。よつて塵芥を除るものを、すべて箒と云也。本草云、子落則老。莖似レ藜。可レ爲レ帚。椶櫚帚、竹帚、藁帚、羽帚など數品あり。又玉帚あり。玉は賛たることば也。無名抄に物をほむる詞と見て、くるしかるべきにやとあり。袖中抄に萬葉を引て、正月三日、侍從竪子王臣等、內裏の東屋垣下にはべらしめて、即ち玉帚を賜ひ、宴に肆ならしむ。諸卿歌を作り詩を賦とあり。

玉はゝきかりこかまゝろむろの木となつめかもととかきわかんため

鎌　大木香棗

又玉帚は蓍と云草也。此を松に加へて、初子の日蠶する室をはく、祝ひの具なれば、玉はゝきと云。〔割註〕めとは、みそはぎにたる草なり。〕

○雪踏

千利休初てこれを作らしむ。雪中の露次入に濕の通るをいみて、草履に又ぞうりをかさね、これを裏付ぞうりといふ。猶濕の通らぬ事をはかりて、裏に牛皮を以て作る、雪のうへを踏といふ理によつて、雪踏と名付たり。今常にこれを用ゆ。

○千石簁

貞享のころ、東武大門通釘屋喜兵衛といふもの工夫し、はじめてこれを造る。

○乘物

相傳ふ、東山殿の時より始る。乘物は輿の路也。元來俗に御所車といふものゝ車を除き、屋形ばかりを用のて輿と成れり。四聲高苑云、輿車無レ輪也。輿の下の二つの轅を除き、上に一つの轅を用ひて駕と名付、高貴の人の歩行に輿よりはかろきによつて、專らこれを用ひられし也。駕の字は車駕とつゞきて車の屋形の字也。古史考曰、黄帝作レ車。少昊時加レ牛。禹時奚仲云人加レ馬。此馬を加ふにより駕と云。

○竹駕

竹駕は箯輿より出たるもの也。今能役者の乘あんだといふは箯輿の事也。竹駕もあをだと讀也。箯輿元軍用の具也。手負などを乘るもの也。八島にて嗣信を箯輿にのせたると也。軍用のあをだは、今の竹駕あんだとは異也。竹を以て籠にあみ、竹を曲て蔓とし、丸竹を以てこれを擔ふと也。大きさも又格別也。三才圖會云、箯輿即籃輿。而賤民常用レ之竹籠。

○大八車

寛文年中、江戸にてこれを造る。人八人の代をするといふを以て、代八と名付。今大八と書。その頃御殿中にて、人をして馬のごとくならしむと、戲の御沙汰ありし也。

○猪牙船

明暦のころ、兩國橋筵屋利兵衛、見付の玉屋勘五兵衛といふものこれを作る。押送りの長吉といふもの、船を薬研のかたちに作り、魚荷を積て押に至てはやし。これを考へて作るもの也。長吉船といふべかりけるを、ちよき舟といへり。近年猪牙の二字を用ゆ。猪牙に狀似たるゆへか。

○江戸辻駕

元祿の末に御免許、高百挺也。其砌は老人、女、病人にかぎりて、若き者はのせず、武士はかまひなし。是までは江戸に辻駕なし。

○唐　弓

明曆年中、中華の人木弓を以て、木綿を打事を長崎の人に傳へて、はじめてこれを作。長さ五尺ばかり。鯨の筋を以て弦とす。小き槌を以てこれを彈に、一日の間棉十五斤二十斤を打也。そのむかしは小き竹の弓をして、半斤ほどの綿を、一日の所作とす。

○賀留多

阿蘭陀人これを翫ぶ。寛永のころ、長崎港の人民倣て戯とせり。凡四品十二枚に四種の紋あり。一種は伊須と云、南蠻には劍を伊須波多と云り。よつて此紋、劍の狀を畫く。又波宇と云、青色を波宇といふ。此紋青き色を以て彩り。又古津不と云ふ、酒盃をば古津不といふ也。酒盃の形を表す。又於宇留と云これは玉を稱して於宇留といふ也。則ち玉の狀あり。第十は法師の形を畫。是僧形を表す。第十一は騎馬の人を畫く。士を表す。第十二は踞床の人を畫くは、庶人を表するもの也。又加宇、宇牟須牟などいふあり。すべて南蠻國の詞なり。

本朝世事談綺　巻之三

態藝

○香道

東山慈照院殿、始て香道の法を立らる。抑々名香二十種を左右にわかち、優劣をあらそふ。是を名香合と云。其外十炷香。競馬、花月、源氏、呉越等を始、凡六十三品の法あり。所謂祕傳の香は、連理香、蹴鞠香、星合香、〔割註〕此三品アリ。内一品。〕

十種名香　東大寺　法隆寺　逍遥　三芳野　枯木　法華經　紅塵　八橋　中川　盧橘等也。

此外追加六種の名香、又五十種の名香あり。又七十種の名香、百八十六種の名香をはじめ、數品の香あり。名香本朝へ渡るは、虎關異制庭訓に云、天平年中百濟國より、始て名香を貢獻すとあり。又朱雀院朝閑院大臣の黒方、公任卿の承和百歩香、これ皆、合香にして、一木を用る事なし。應永のころ、京極入道道譽、一木を好て軍旅國務のいとまをたのしめり。文龜のころ香道に深き人は、相阿彌、宗信（志野三郎右衛門尉）行二（二階堂）長秀（松田丹後守）兼直（肥山左京）元種（内藤大藏）祐憲（志野彌三郎）盛郷（波々伯部兵庫之助）肖柏（夢庵）

是等の人香道者なり。又法に相阿彌流、志野流の二派あり。

○蹴鞠

用明天皇の朝にはじまる。（搕嚢抄）。皇極天皇の朝、中大兄中臣鎌子など、法興寺の槻の木の下にて、鞠を打と云事、日本紀に見えたり。七十七代後白河院、みづから庭におりたち給ふ時に、大納言成通卿

下なるは辰松が出つかひの圖なり



妙術ありて、ありおふの二神、常につかへ給ひしと也。そのゝち難波頼輔朝臣、飛鳥井雅經卿兩流をはじめられたり。今に至て鞠の御家と稱。八十二代後鳥羽院、此道に長じ玉ひ、鞠の明神を崇む。後嵯峨院後深草院龜山院、つゞゐてはなはだ翫び玉ひしより世に流布し、公家、武家の道を得たる人多し。そのころよりして、地下にくだりて于レ今專翫ぶ。

外郎派　洛陽西洞院陣外郎(一位)沓林、鞠に手練して種々の曲を蹴たり。その子右親衛政光、父の傳へを得る。そのころの地下人、專これを倣ふ。外郎派の始これなり。當時御家の流儀を學ぶ輩は、轉業なりとて此流を用ひざる也。頃年地下にて上手といひしは、京菱屋市右衛門、はりま屋長右衛門(後に友具)、籠屋清兵衛(鞠師)、竹の屋藤次(同)、大坂の甚左衛門(後に甚入)、江戸綿屋五郎右衛門、服部休甫、三木可眞、栗本光壽等也。其外是にかぎるべからず。國々諸所に上手多かるべけれども、聞覺へたるを記すのみ。

○賀茂沓

今用鞠沓なり。洛北賀茂より始るゆへに此名あり。鴨の觜に似たるゆへに云とは非也。上古は沓なし。裸足或は韈を用ひたり。革沓出來て後、御家にもよろしきにして用ひ給ふにより、下々專これを用也。賀茂の社家松下兵部は、鞠の譽ありて世に鳴りし人也。此兵部のはじめたる事にや。

○神田沓

栗本光壽は、鞠の窒といふ沓味を丹練したり。又沓の形も異なるか。光壽は神田に居す。よつて此名あり。此人近世の妙足なり。總じて此道を學ぶ人は、皆御家の門弟なれば、師とも弟子ともいはず、相談と云也。當世江戸にて翫ぶの輩、三木可眞をはじめ、人皆此老人の相談に至らぬはなし。今光壽の蹴方

を專とす。〔割註〕享保十七子冬年齡八十歳。」

○謳

東山慈照院殿に始まる。謳と云は、詩經の大序に曰、風風也。敎也。風以動レ之。敎以化レ之上は字のごとし。下は諷風の切、即謳の字也。風のおよぶがごとく、自然に德化ひろまると心を付て、謳喩の兩義なり。又謠の字を用、歌謠とつゞきて歌うたふ也。此作は多く佛者也。江口山姥は、一休の作といひつたへ、そとば小町は、高野山寶性院宥快の作などいへり。山本春帳の所持、謳の作者付の書に云、謳は四座の太夫作りて、當座々々に能にしたる也。よき人の作もある也。

觀世太夫世阿彌作五十一番、〔割註〕名目アリ。略レ之。」又六十一番あり。
觀世小次郎作三十二番、同彌次郎作二十五番、
今春善竹作十八番、今春善鳳作五番、宮增作〔ワキ師〕十番、三條西殿御作四番、その外誰かれ作、又作者不レ知もあり。都合三百五十二番、おの／＼名目をあらはす。奧書に、

右能本作者之事、依ニ安東與慨御所望ニ調ニ進之ニ觀世彌次郎長俊連々直談之時、物語中趣所ニ注置ニ如レ斯。此上猶可レ被ニ聞合ニ者也。

于時大永四年甲申孟夏上澣　　吉田藏人兼將判

謠の作の事、奈良土產にいふごとく、尤てにはのあしき所、いひかけの理にそむけたる事もあれども、先は常人の作れるものにあらず。佛經のとりやうなどは、僧もよほどよき人の所爲なり。按に、その頃の活僧歌人連歌師など慰に作り、能太夫にあたへ、節をつけさせ、則その太夫の作分にしたるなるべし。春日龍神は右名目の書に、世阿彌の作とあり。此謳に我は時風秀行ぞとてかき消やうにうせにけ

りと謳ふ。我はと一人して、二人を名乘も理にあらず。又時風とはいはず、時風なり。此兩人は春日第一神殿武甕槌尊の補佐の臣也。諱を聲にて呼あり。賴朝義經也。しかし賴朝義經とはいはず。これを湯桶よみとて、文盲第一の事とする也。これを作るほどにて、此わきまへなき事はあるべからず。正しく他の作にて世阿彌節を付たる也。かくうたへば、時風は秀行の苗字のやうになりたり。

○能

東山殿の時、謳と同くはじまる。觀世觀阿彌始てこれをなせり。此觀世は秦川勝の末流にして俳優なれば、渠に命じて此技をなさしむ。能は神樂をやはらげたるものなれば、すゝじめのため、神事の執行ひ、これを神事能と云。神事を奉により、大社に屬す。太神宮には和屋、勝田、主同の三座、伊勢にあり。日吉には、山階、下坂、比叡の三座近江にあり。賀茂住吉には本座(丹波)、新座(河内)、法成寺(攝津)、是三座、春日には、外山(寶生)、結崎(觀世)、坂戸(金剛)、圓滿井(今春)、此春日の四座は就中名譽を得たり。よつて東山殿へもたび／＼めされしと也。今春は秦氏安二十九世也。山州竹田に住居す。因て武田とも云。寶生は伊賀國服部の產也。故に服部と稱す。

喜多は、攝陽群談に云、喜多長能、字は七太夫、泉州堺の產、父は醫師願慶と云。家に武勇のほまれあり。當津甑太夫に習ひて踏舞の妙を得たり。長能は喜多の始祖也。堺櫻町に長能の舊屋あり。

式三番　翁は天照太神、千歲は八幡大神(鈴太夫)、三番叟は春日明神と稱す。謳ものは多羅尼の神道の言葉を雜へたる也。是作者の作所と云。

謳師　進藤爲王、春藤高安、寶生(新之丞)等の家あり。

中樂　翰林葫蘆集云、秦川勝にはじまる。推古帝の朝厩戸皇子天神地祇を祭祀し、安國の政をしく。よ

つて六十六番の曲を作り、川勝に命じ、紫宸殿の前にて、大倭の技をなさしむ。太子此神樂の神の字をわけて、申樂と名付。說文に申も又神也といへり。大歲神申の方にある時は、猿を以てこれに配す。よつて猿樂と云。神樂をやはらげ、おもしろう戯をなすを、俳優といふ也。宇治拾遺に云、內侍所御神樂の夜職事家綱をめして、今宵めづらしからん申樂つかうまつれとあり。源氏乙女の卷にもさるがうがましくとあり。

○勸進能

後花園院寬正五年甲申四月、京糺河原におゐて勸進能興行あり。勸進の聖は、鞍馬青松院善盛法印、于レ時九十八歲なり。猿樂は觀世太夫音阿彌、于レ時三十六歲、その子又三郎ともにこれをつとむ。是勸進能のはじめ也。東山慈照院殿御上覽あり。

初日　御一獻　還御、管領細川勝元假亭にて饗レ之。

二日　御一獻　還御、畠山尾張守政長宅饗レ之。

三日　御一獻　還御、斯波治部少輔義廉宅饗レ之。

細川、畠山、斯波各一萬疋、猿樂に授く。相伴衆衣服脫被レ下レ之と云々。諸大名より御肩衣下さるゝ事あり。かやうの例か。

初日(四月五日)

相生	みるまの長者	八島	かくれがさ
三井寺	さるひき	邯鄲	見ち
源氏供養	くわいちう	丹後物狂	八幡のまへ

鵜飼

二日

鵜羽　ひけかいたて　敦盛　うさま
山姥　大か小か　春近　鬼のまめ
松風　いものし　自然居士　ししやく
戀のおもに

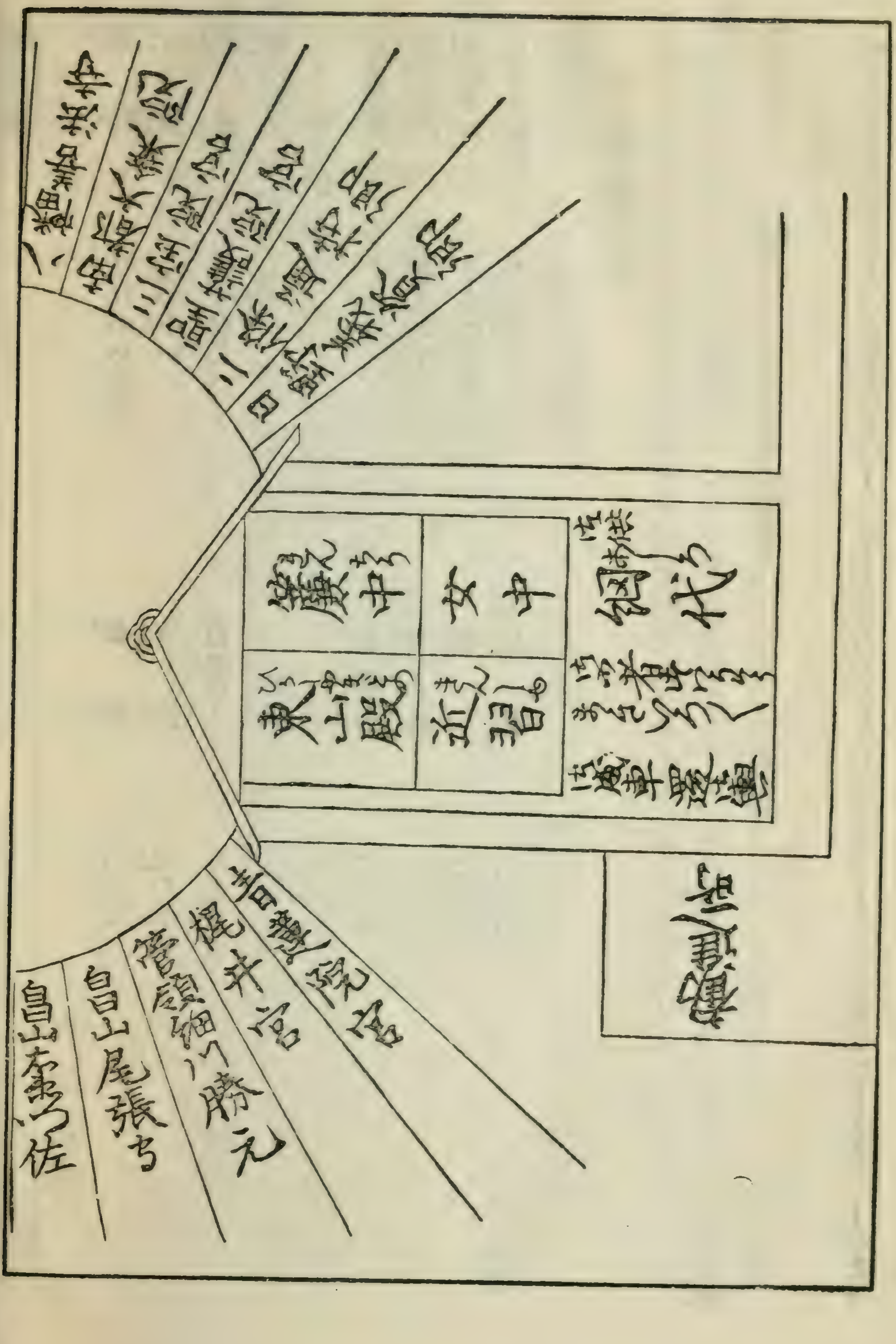
三日

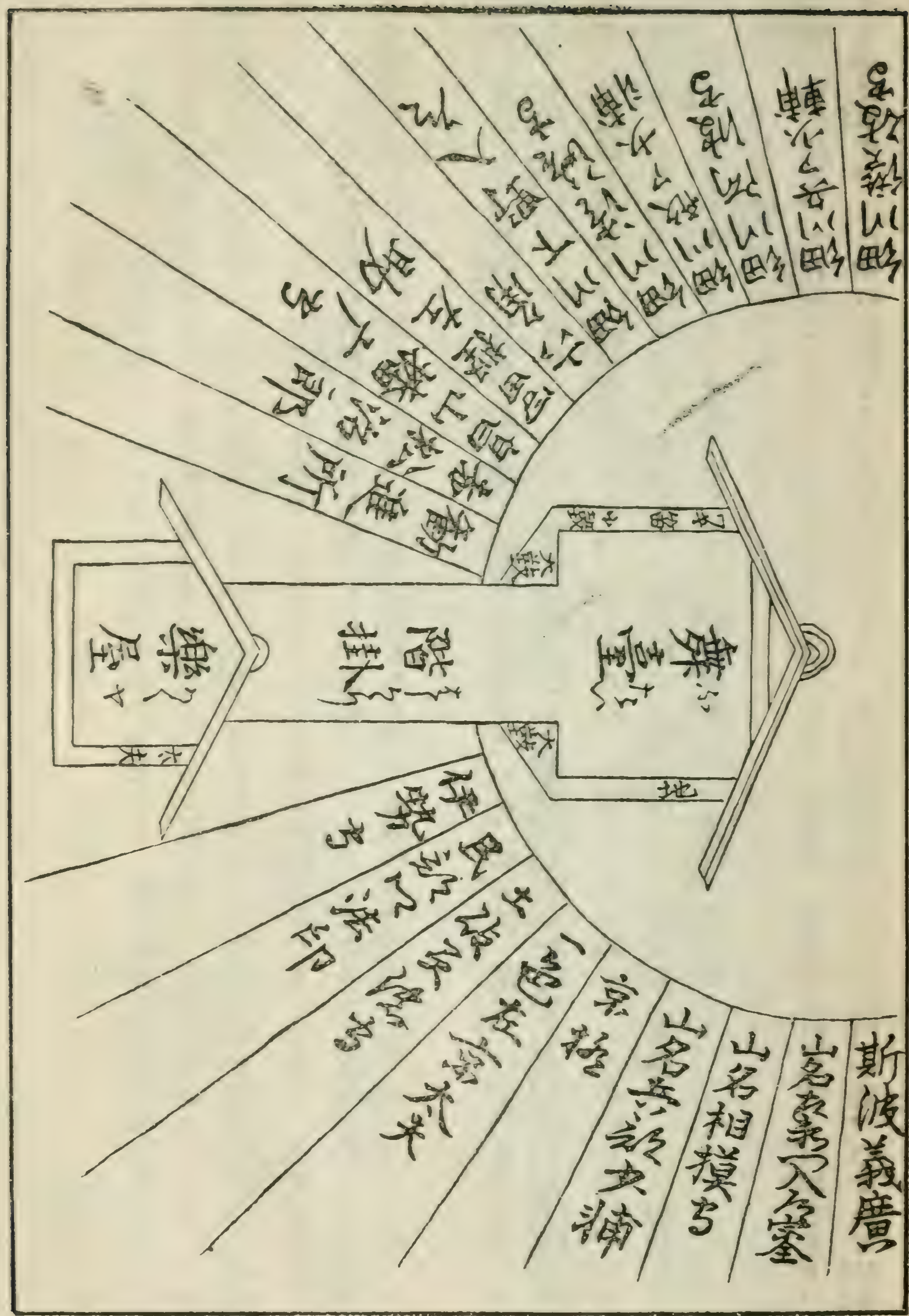
白楽天　三本柱　誓願寺　こよみ
箱王曾我　あさいな　二人静　はやかき
四位少将　ぐらつゝみ　礎　なきむこ
しきみ天狗　入間川　杜若　わかめ
放下僧　名とりの老女
御乞能　養老の瀧

二日目、山姥の能のなかばに大地震あり。慈照院殿、博士をめして御たづねありしに、博士の申上るは、時節の巡りにて、さらに猿楽のゆへにあらずと考ふるによつて、次の能ありて、つゝがなく、三日の能成就ありけり。桟敷は、宮方諸大名の割あり。一世能の桟敷割などかやうの例か。

○狂言

能と同じうはじまる。高官高家は下へ遠く卑賤の事しろしめさず。よつて俳優にことよせ、下のあり





斯波義廣
山名相模守
舞臺
階掛り
樂屋

さまをしらしめんがため、あらぬ事を作り、ことば狂はしく狂人の言葉のごとくなれば、かく名付たり。鷺派、大藏派の二派あり。

吼噦　堺鑑に云、大藏某狂言におゐて名を揚、家を起せり。永德年中、泉州堺南の庄に、少林寺と云あり。塔頭耕雲菴の住僧を伯藏主といへり。鎮守の稲荷の神を信じ、毎日に法施を奉れり。ある時、やしろの邊にて、三足の狐を得たり。抱き歸て養育す。此狐、すこぶる靈ありて、藏主に從ひよくつかへ、賊を追、難を防ぎ、未前の凶を告る。此狐の子孫、今に寺内に住すといへり。大藏此事を狂言に作り、吼噦と稱し、又釣狐ともいふ。彼狐これを感じ、老翁と化して大藏氏が狂言をつら〳〵視て、其能を稱美し、猾野狐の所作はたらきの骨髓を、悉く口傳せしめ、忽然として去る。これより大藏益妙を得て、此狂言を以て家の大事とす。道に達しぬれば、かゝる奇特もありけるといへり。

○笛

能笛に四流あり。所謂一噌流、森田流、〔割註〕庄兵衞流といふ。〕春日流、潮流、〔割註〕尾州家ニアリ。〕等也。中村一噌といふ妙術あり。これ一噌流の始祖なり。森田氏元は大森氏なり。毛利元就の臣宍戸伯耆守、笛に妙を得たり。醫師何某につたふ。天正のころ、大森庄兵衞七藏より、かの醫に習ひ、妙を得て世に鳴。これ森田の始祖なり。又此家を小笛と稱す。寛永のころ、森田宗筌九歲にして御能をつとむ。小笛にはよく吹たりと、上意ありしより、家の規摸とし、世俗小笛と稱す。

○小鼓

幸派、新五郎派、大倉派などあり。幸は元山州宇治に住す。永祿頃、幸四郎次郎忠能と云妙手あり。天正七卯に卒す。これ幸の始祖なり。其子宇治幸太夫、五郎治郎正能、幸小左衞門一宗、つゞいて妙手た

り。

○巨鼓

大藏派、威徳派、三郎右衛門流、市郎兵衛流など品々あり。羅山文集ニ云、大藏正重子正幸におよび、巨鼓の藝を以て世に鳴。これによつて紫の調を正重に賜ふ。誠にこれ其家の榮、何を以てこれに過んや。（下略）

○太鼓

左吉流、惣右衛門流、梅若高安、寶生長命など流々あり。觀世宗伯、〔割註〕與左衛門ト云。〕是似我流の祖也。子與五郎におよび、太鼓の妙術世に鳴。

金春道壽（彌七ト云）、金春權頭門人也。子又右衛門共に、名を得たる妙手なり。

圓滿井氏信 ─ 金春禪竹 ─ 氏元 ─ 宗印 ─ 元安 ─ 禪鳳 ─ 喜照 ─ 宗隨 ─ 喜勝 ─ 及連 ─ 安照（八郎） ─ 禪曲

─ 氏勝 ─ 精本 ─ 重勝 ─ 宗竹 ─ 盛勝

─ 喜家 ─ 道壽（彌七） ─ 重家 ─ 宗可（又右衛門） ─ 重次 ─ 左吉

太鼓金春權頭弟子

太鼓宗伯ニ習ヒ改テ似我流トナル

慶長十九年八月鈞命ニヨツテ觀世座トナル

○家研

本阿彌家を稱す。雍州府志ニ云、尊氏公の時、鎌倉に妙本阿彌と云あり。專に刀劍新舊眞贋を相し、幷に磨礪を業とす。尊氏公入洛の時、從ひ來り京師に住す。元は松田氏なり。妙本嫡一人本阿彌と稱し、又

一家の内も、嫡子ならされば、松田を名乘也。又光の字を諱に加ふる事は、普廣院義教公の時、本阿彌清信と云あり。此人功あつて、剃髪の後本光とめさる。これより一家光の字を通字とす。（雍州府志）

○正宗刀

正宗といふ鍛冶八人あり。相州鎌倉に一人、（五郎入道ト云。）京に三人、達磨と云。三代なり。武藏二人、（父子）備後に一人、大和一人なり。又近世高位に此名あり。打物に術を得給ふ。此銘には、爲遊興一打レ之とあり。鍛冶にてはなし。又おなじ唱への政宗三人あり。

○宗近刀

宗近三人あり。京一人（小鍛冶）、伊賀に一人、九州に一人。

○家彫

後藤四郎兵衛祐乘は、普廣院義教公の臣なり。一旦義教公の怒にふれて獄舍に入れり。ころは六月炎天のしのぎがたきを、籠守これをあわれみ桃をあたふ。祐乘大きによろこぶ。而して後、その核のおもてに、山王二十一社、ならびに猿六十六疋を彫たり。その細密、人間のなすわざにあらず。義教公これを聞給ひ御覽あり。まことに奇なる者なりとて、その罪を免し、則祐乘に命じて、刄劍の飾の具を造らしむ。はなはだ神妙にして、禽獸草花人形等、生がごとし。遂に雕鐫の家を起す。その彫所の桃核、今常陸國にあつて、日吉の神體となせり。その子宗乘より、代々つゞきて、彫工の妙手たり。祐乘は狩野古法眼の居所に相近く、交厚し。ほらんずるとき、まづ古法眼をして、其様を畫かしめ、これを模して雕レ之。本朝古今の名巧なり。

祐乘 後藤四郎兵衛 雕工ノ祖
義教公ニ仕ユ 生國美濃 實名ヲ以テ法名トス 永正九年五月七日卒、齢七十八

- 宗乘 四郎兵衛 七十歳卒
  - 乘眞 四郎兵衛吉久 永祿五年二月六日卒五十八歳
- 尊乘 孫絕
- 光乘 四郎兵衛光家 元和六年九千二
  - 德乘 四郎兵衛 寬永八卒、八十四 天正九ニ秀吉公賜ニ食邑ー
    - 榮乘 四郎兵衛正光 元和三年四月卒四十三 今後藤家此裔ナリ
  - 長乘 七郎兵衛
    - 顯乘 理兵衛 正綱 寬文三年正月卒七十八
- 元乘 孫絕

○奈良雕

宗貞にはじまる。元は奈良氏のわかれ、塗師の家也。天姓彫工に妙を得たり。

奈良利宗 小左衛門入道宗貞

- 利治 四郎兵衛入道宗有
- 利永 七郎左衛門 弟子 辰政 忠左衛門 弟子 現安親 彌五八入道東雨
  - 宗利 小左衛門 現 利光 七郎左衛門

○横谷雕 大學柄

横谷宗興にはじまる。宗興京師の者、末の後藤の弟子也。寬文のころ東武にくだる。雕工に達し一流を起す。その頃藤堂家の臣、小柄を宗興に雕せ所持す。或時大守御覽あつて、御召の小柄を仰付らる。御好にたがはず、これを雕。はなはだ御意に入て、五百本の小柄を仰付られ、壹本の價黃金一枚を賜ふ。

五百本成就の後また五百本仰付られ、彼是御音物、あるひは御近習の諸士へ賜り、柄屛風など云もの出来たり。世に大學柄と稱すは是なり。所謂此柄世に千本有。これより宗與彌名人の名を得たり。其子治兵衛入道宗珉父に越たる名人、英一蝶が繪を模して、奇妙を雕て、頃年世上に鳴。享保十八年夏卒す。其子宗與又善す。（現在）

○碁

本朝は吉備大臣にはじまる。博物志云、堯造二圍碁一以、教二子丹朱一。吉備公は唐にある事二十年にして、天平七年に歸朝あり。唐にては玄宗帝時、日本聖武帝に當ル。續日本紀に云、大伴宿禰子虫と、中臣宮處連東人政事の隙に圍碁事あつて、憤罵して、子虫刀を以て東人を殺す。持統帝の朝に碁雙六を禁ぜられしなり。中世後土御門院の朝に、意雲老人妙術たり。そのゝち後陽成院の朝に、寂光寺本因坊日海法印、天下の巧手とす。代々本因坊と稱す。頃年の本因坊道策は、古今の妙術たり。碁聖といふべきか。碁經に云、王積新夢に青龍碁經九部を吐てこれを授く。

○象戯

天正の頃、京都宗桂その子宗古におよび妙手たり。信長公の前にて、宗桂象戯を修す。信長公御覽あつて曰、これ陣法を象るもの也。武人宜これを習び知るべきの藝なりとぞ。これより舊名をあらため宗桂と云。桂馬の號あるを算に似たり。

寓二兵於局藝之中一。謂天下雖レ安不レ忘レ戰之戯也。爾來有二將士歩卒車馬弩砲之象一。有二藏機隱知一。二龍出レ海雙馬飲レ泉之勢一。とあれば、信長公のことば附合せり。慶長の頃、宗桂、宗古召出され、寛永の頃、御前にゐてたび〳〵是を修す。宗桂象戯圖式を作る。其子宗古述レ之。象戯は周武帝これを作。其臣

王褒是を得、宋の司馬溫公象戯の圖法を作り、孟嘗君此道を得たりといへども、本朝の妙手には及ざるといへり。

○雙六

梁武帝天監年中日本へわたす。本朝二十六代武烈帝に當る。（萬葉）一二の目のみにもあらず四三六五さへありけりすごろくのさい。つれ〴〵草に云、双六の上手といひし人に、その行をとひ侍りしかば、かたんと打べからず。まけじとうつべき也。いづれの手かとくまけぬべきと案じて、其手をつかはずして一めなりとも遲くまくべき手につくべし。（下略）

○楊弓

玄宗楊貴妃にはじまる。よつて楊弓と云說あり。古來は楊にて弓を造りたるゆへの名也とぞ。今は蘇方を以て削る。本朝には上古堂上の宮女官女の翫びとし、七夕には第一にすと也。弓長二尺八寸は天の二十八宿を表し、裏弭九分は九曜、本弭二分は七夕の二星を表すと也。矢長九寸は九曜、〔割註〕本尺ト云今二分長。」的不落等にも法あり。

詰改一表、矢員二百本也。中所五十本以上は朱書、百本以上は泥書、百五十本以上金貝、百八十以上大金貝と云。近年みやこ一中此道を得たり。一表二百本のこらず的中したりと云。此もの楊弓の書を編す。元祿の頃芝に五郎、未碩と云兩人の者、そのころの上手にて、百八十四五の矢員、江戶中詰改場の看板に記し、無双の上手といへり。頃年は百八十四五は常の事にして、百九十四五あるひは七八におよぶ。しばらくのほどに、世人かくは上手になれり。

芝撮　かの五郎、未碩がなす所也。矢をつまむに、食指を曲て撮むに、芝撮は食指を伸てつまむ也。

矢のぬけ心よしと事倣ふ。又賭に一錢を紅白の紙に包し也。是を字と云。近年は素字とて裸錢を用ゆ。美麗の業も世くだりていやしくなれり。

○淨瑠璃

信長公の侍女小野お通は秀才の女也。後に秀吉公の簾中につかふ。参州矢作淨瑠璃女が事を作。藥師の瑠璃光の緣十二神を象り十二段とし、淨瑠璃物語といふ。平家物語は、信濃前司行長が作にて、生佛といふ琵琶法師節を付たり。是は岩船撿挍節をつくべしと也。即岩船ふしを付て、淨瑠璃といへり。其後瀧野、澤角の兩撿挍、三線に合せて曲節をかたる。又六字南無右衛門と云女太夫、四條河原に芝居を立る。慶長のころ、人形に合せて度々叡覽におよびしより、淨瑠璃太夫の受領をいたゞく事になれり。京、大坂、江戸に淨瑠璃太夫多くなりて、伊勢島山本角太夫、岡本文彌、江戸油屋茂兵衛、四郎與吉、鳥屋次郎吉、大さつま、小さつま、おのがさま〴〵色々の流儀あり。

京加太夫節　紀州和歌山宇治といふ所の者也。伊勢島宮内に習ひ、宇治加太夫と云。此道名譽のもの也。受領をいたゞき、加賀掾宇治好澄といへり。謳もよく名人の部に入たり。

大坂井上節　井上市郎兵衛といふもの也。道に達し、京、大坂にて鳴たるもの也。受領して井上播磨少掾藤原要榮と名乘り、後に京にて死す。

大坂儀太夫節　天王寺邊の民にて、始は天王寺五郎兵衛といふもの、京加太夫がワキをかたれり。天性此道に妙を得て、近世の名人と云り。後に大坂にて竹本儀太夫とあらため芝居す。受領して竹本筑後掾藤原博教といへり。今以て此節を翫ぶ也。

江戸淨雲節　正保のころ、薩摩太夫治郎右衛門と云。江戸淨瑠璃の祖なり。法體して淨雲と云。子を又

さつま太夫治郎右衛門と云。浄雲弟子丹後太夫、長門太夫、丹波太夫、源太夫の四人あり。これそのころの四天王の太夫と云。今の浄るり太夫、浄雲が血脈ならざるはなし。其むかしは端浄るり計にて、段浄るりは浄雲に始む。

江戸語斎節　近江太夫といふ。丹後が弟子なり。

江戸肥前節　長門太夫が弟子なり。

江戸外記節　下りさつまと云。二代目さつま治郎右衛門が弟子なり。

江戸土佐節　虎之助と云。二代目さつまが弟子なり。

江戸永閑節　源太夫が弟子なり。

江戸半太夫節　幼名は半之丞といふ。修験者何院とかやの子也。はじめは肥前太夫が門に入、後一流をかたり出せり。又塚原市左衛門と云もの、半太夫座の上るりを作る。半太夫剃髪して坂本梁雲と云。東武近世の名人、今以て此流儀すたらず。

江戸河東節　小田原町にして、肴を鬻てよしあるものなり。半太夫が弟子と成り一流をかたる。

- 薩摩浄雲（次郎右衛門入道）　▲子となきは皆弟子なり
  - 子 薩摩太夫（次郎右衛門）
    - 大薩摩（次郎右衛門）
    - 外記太夫（下りさつま）
      - 式部太夫
    - 土佐太夫（虎之助）
      - 子 土佐太夫
      - 手品市左衛門
  - 丹後太夫
    - 近江太夫（語斎）
  - 長門太夫
    - 肥前太夫
      - 半太夫（半之助）後ニ梁雲ト云
        - 河東

- 丹波太夫 — 和泉太夫
  - 大源太夫　治兵衛後ニ喜元
- 源太夫　虎屋 — 永閑太夫　虎屋
  - 小源太夫　竹之助
  - 子 永閑太夫　金右衛門

○隆達節

隆達は日蓮宗の僧也。泉州堺顯本寺の院内に住せしが、ゆへあつて還俗し、大坂藥種屋高三氏の家に入て、終に商人となれり。常に音曲を好み、小唄の一流をうたひ出す。その唱歌やさしく、人の心をやはらげ、教訓にもなりたるよし、世に隆達節と稱す。

○道念節

京に道念山三郎と云ふ與樗の音頭あり。貞享の頃、盆の躍口説といふをうたひ出したり。此節、躍の拍子によく合たる間なれば、今以てこれをよしとす。

○古今節

元祿のころ、古今新左衛門と云ふ芝居者うたひ始し也。

○男舞　白拍子の事

後鳥羽院の御宇、通憲入道は諸藝堪能の人也。舞樂をやはらげ、磯の前司といふ女に舞をおしへ、白水干立ゑぼしに、太刀を帶て舞しゆへに、男舞といふ。磯の前司は、生國讃岐大内郡小磯と云所の者。〔割註靜が傳記ニアリ。〕女靜御前と云も、此所の生れ也。而後、娘靜につとふ。後に太刀を帶す。これを白拍子と云。それより代々の白拍子につたふと也。今舞子躍子などいふは、これに比す。

○歌舞妓

羅山子曰、慶長十九年にはじまる。元は僧衣を着し、鉦をたゝき佛號にふしをつけて、念佛躍といひし

也。慶長十九に、佐渡島お國といふ女、あまたの舞女をあつめ、四條河原に芝居を立る。此お國は出雲大社の巫女也。名古屋山三郎と云ものと密通し、京へのぼる。かぶきの歌に、比田の横田の若苗とうたふ。これ出雲の里の名也。巫なれば神樂を變じて舞うたふ。妓女のなす所なれば歌舞妓といへり。そのころみだりがはしき事多かりければ、寛永年中に、女歌舞妓を禁制ありて、若衆歌舞妓になりぬ。是また同やうなれば、とかくに歌舞妓を御停止ありし也。そのゝちさま／＼願を立、若衆の向飾を取り、長年のごとくにして、芝居を立べしと御免許あり。額髮を僅剃て、紫のぼうしを被りて、長年のかたちを隱す。これを野郎といふ。野郎とは元薩摩の國言葉也。

中村勘三郎芝居　寛永元年、中橋におゐて、始て芝居を立る。猿若勘三郎と云。慶安年中に堺町へうつる也。二代目明石勘三郎と云。當勘三郎まで六代なり。

市村竹之丞芝居　寛永十年、ふきや町におゐて、始て芝居を立る。元祖は村山又三郎と云。承應の頃、市村宇左衞門座元とす。其子市村竹之丞より代々竹之丞と云。當竹之丞までは八代なり。兩芝居の來歴、江戸砂子にくわし。よつて略レ之。

森田勘彌芝居　萬治三年に、太郎兵衞と云者取立し也。

○獨藝

神田多町藥屋次郎兵衞と云者上手也。寛文、延寶のころ也。

○人形遣

芝居の人形は、はじめは西の宮傀儡師を招きて舞はせし也。江戸小平太といふもの名人也。羅山文集に云、鼓吹蠻琴あつて、木偶の動に應じて曲節あり。且是を操これを引。板を踏で呼者と、木偶の相得たる事、殆生がごとし。今日の爲所の者、江戸第一の偃師小平太と號す。近世の傀儡子、これ巧手たりと云々。

野郎間　江戸和泉太夫が芝居に、野郎松勘兵衞といふもの、頭ひらたく色青黒き、いやしげなる人形をつかふ。これをのろま人形と云。野郎松の略語也。又謙齋左兵衞は、かしこき人形をつかひ、相共に賢

愚の體を狂言せし也。それより鈍をいやしめてのろまといひ、癡漢に比したり。此後そろまむきまなどいふもの出來たり。

おやま　小山次郎三郎といふもの、女の人形をよくつかふ。遊女傾城の類を、おやまといふにより、是をおやま人形と云。

出づかひ　辰松八郎兵衛これをはじむ。惣體人形をつかふものは、黒き帳の影にて黒き頭巾など被りて、己がかたちを見せざるは常也。かくする事は、人形の動に從ひ、をのれが身をもそのさまにうつすものゆへ、見ぐるしきを耻てなり。辰松は人形に手練し、上下を着し、手摺をはなれて、無量の手づまをつかふに、全身少もみだるゝ事なし。古今人形の妙手といへり。辰松幸助これに亞。各現在。大坂藤井小三郎、近本九八、中村彦三郎、皆出づかひをなす。

○淨瑠璃作者

此作者と極めて產とするもの、むかしはなし。俳諧師あるひは遊人など慰に作れり。暦といふ上るりは、西鶴翁作といへり。近世作者と極めて產となせるは、近松門左衛門にはじまる。此人博學碩才にして、百餘番の淨瑠璃、悉言妙不思議を綴る。元は月卿の家につかへ、本姓杉森氏にして、ものゝふの流なり。元祿のはじめのころは、京、みやこ萬太夫が芝居狂言の作者たり。其後大坂に至り、竹本筑後が座の作者とす。世俗作者の仙と稱せり。平安堂巣林子と號ス。享保九のとし、七十有餘にして卒す。みづから行狀の記を書て、その末に、もし辭世はと問人あらば。

それ辭世去程扨も其後に残るさくらが花し匂はゞ

其外作者は錦文流、紀海音、西澤一風、竹田出雲など、みな近松が流なり。江戸には北條宮内、岡清兵衛、塚原市左衛門など云あり。頃日は聞ず。

本朝世事談綺　巻之四

歳時

○門松

世諺問答、〔割註〕一條禪閤御說。」松は千とせを契り、竹は萬代を契る物なれば、年の始いわゐ事にたて侍るべし云々。

夫木　はつ春の花の都に松うへて民の戸とめる千世ぞしらるゝ　光明峯寺入道

○萬歳

六十六代一條院の朝長德のころ、大江定基參河守に任じてければ、その國の民ども、毎としのはじめに來り、千歳樂萬歳樂と舞かなでけり。定基は佛乘に寄し(歸カ)て、横川の源信僧都に法を受て、一向釋氏の學びにふかゝりければ、佛教傳來の因緣を述て、刈谷の鄕の庄司吉郞太夫といふものにあたへて、年の旦に舞せけり。是萬歳のはじめ、今以て三河の國より來る。

○鳥追

蹈歌の遺風なり。相傳ふ。延文のころ、參河國に長者あり。數千町の田圃を持。土民にして土民にならず。武士にあつて武士ならず。常に貴人高位にまじはり、三槐九棘に因あつて、富で貴き人也。代々時宗をとうとみ、遊行上人を仰ぐ。一とせ正月、遊行上人此第宅に舍せり。村の土人、歳首禮を長者の家になす。その中にさゝらをすりてうたふもの數人あり。いかなる者ぞと上人の尋られしに、鳥追と云

者也とぞ。蓋鳥追は長者の田園の鳥を追ふばかりの勤にて妻子を養ふ者ども、長者の諺を歌にうたひ、年のはじめにことぶきを伸るなり。唄の發端に、せぢよやまんちよの鳥追と云は、千代も萬代も殿の田の鳥を追べし也。お長者のみうちへおとずるはたれあろ、右大臣に左大臣、關白殿が鳥追、御内證へおとづるゝ人は、高位高官、扨は鳥を追ふわれ〳〵かとなり。にしだもよせんでよ、ひがしだもよせんでよは、東西に八千町の田を持てる事を云り。

○稻　積

世俗、正月に寐る事をいねつむと云。寐を稻にとりなし、積はたのしきを積かさぬるにしていへり。古今大歌所の御歌の中に、

新らしき年の初めにかくしこそ千とせをかねてたのしきをつめ

袖中抄、敎長卿の說に、新甞會又諸社の祭にも、庭薪とて、衞門、衞士どもが、薪をもてまいりてつむ事あり。これを祝ひによせてたのしきをつめと、とりなしたると也。

○走百病　藪入

むかしは正月十六日にかぎる事也。後七月十六日をして、終に春秋二度とす。常に隙なき仕のものも、此日は父母の家に來り、寺院に詣て先祖を拜す也。又孤獨の者は、あへて依べき舍なし。たゞ藪林の中にあそびて、樂とする事也。

五雜俎云。齊魯人。多以正月十六日遊寺觀。謂之走百病。

○出　替

古來は二月二日なり。近年三月五日とす。

雲嶠類要に云、秦人一子を生めり。隣家より乞によつてこれをあたふ。大きに富貴と成り、本家の貧をして其子を惡む。二月二日を以て取歸りて後、本家富て隣家貧とあり。これをして二月二日に出替を定む。

○雛

敏達天皇二年にはじまる。雛は元鳥の子の惣名也。鳥の子は愛らしきものゆへ名とせり。小女これを翫ぶは、女は世帶の諺を元とすの敎なり。近世大裡雛とて公卿の形に作るあり。むかしは紙雛也。

源氏　十にあまりぬる人はひいなあそびはいみぬる物を

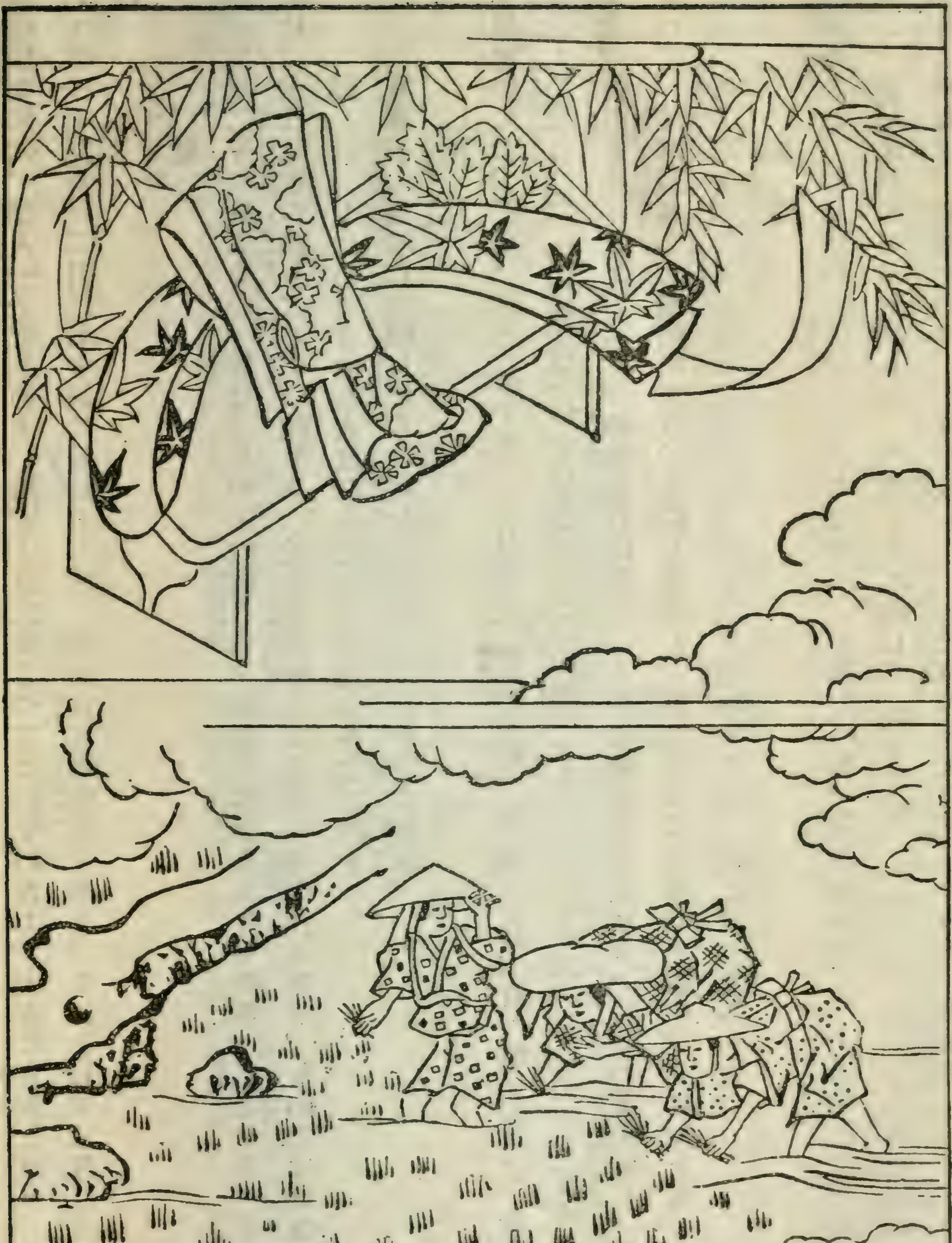
枕草子　過にし方戀しきもの枯たる葵ひいなあそびの調度

○蓬餅

文德實錄に云、有レ草。俗名ニ母子草一。二月始生。莖葉白脆。毎レ屬ニ三月三日一。婦女採レ之。蒸擣以爲レ糕。傳爲ニ歳事一。又云、攝州豊島郡母子村永澤寺の開祖通幻よりはじまると云。此通幻は、因幡の國礒邊の人也。俗名を永澤家光と云り。母懷胎の時死て、土中に產れたる人なり。成長の後出家し、母の菩提をとひて、諸國遍參して攝州に至り、寺院を營建し、其氏を以て永澤寺と號す。その所を母子村といふ。此所の母子草を以て糕に作り、三月三日、是を以て歳事する事、是にはじまると也。

○紙鳶

續博物志云、幼兒は内に陽熱さかんなるゆへ、春陽の時節、その氣いよ〳〵大過すれば、紙鳶を作高く飛し、童兒に見せて口を開しめ、内熱を上に洩して、病を生ぜしめざらんためなり。事物紀原に云、韓信が作る所なり。紙鳶を作り、これを放して、未央宮の遠近を量るとあり。蠡海集に云、春の風は下より



升、夏の風は空中に横行す。紙鳶に即てこれを見るに、春は能起、夏は起事あたはず。

○住吉遊女田植

堺乳守の遊女、住吉の御田をうゆる事は、いづれの帝の御時なるか。宮女に惡瘡の愁ありて、終に宮中を出て吟ひ、乳守に來り、遊女の家にやしなはる。此病を住吉の神にいのる。ある曉神託して、諸人に面をさらし、賤しき業をなすべしと也。よつて御田植女にまじりて、こと年これをつとむる。惡瘡こと〴〵く愈て、顏色元のごとし。此例を以て、乳守の遊女、植女となるのはじめ也。又遊女局などの暖簾に、紫の耳を付る事、乳守の外に出ず。これみな故縁によるといふ。

○五月甲

光仁帝天應元年、蒙古の賊本朝に來る。早良親王をしてこれを討しめ給ふ。親王藤杜のやしろに祈て出陣あり。時に五月五日、たちまちに神風ふきて、賊船立所に敗走し、戰ずして勝事を得給ふ。よつて五月五日に兵器を餝る。

○入梅の井

攝州矢田郡丹生山田庄原野村栗花落理左衞門第宅に井あり。渡り三尺、深さ一尺、常に水なし。梅雨に入てかならず涌出す。その水口の數を以て、入梅の日を定む。終に姓と成りて、栗花落理左衞門といふ。五月栗の花の落る頃は、入梅の時節なるが故に、栗花落と書り。彼家傳に云、始祖山田左衞門尉眞勝、幼名を花光丸と號。人皇四十七代廢帝天皇の御宇に奉仕す。于レ時横萩右大臣豐成の娘白瀧姫を戀ふ。白瀧姫一首をおくる。

雲だにもかゝらぬ峯のしら瀧をさのみなこひそ山田男よ

とよみてつれなかりければ、猶おもひまされり。これに返事申さば得さすべしとあれば、眞勝、

　水無月の稻葉の末のこがるゝに山田に落よしら瀧の水

とかきておくりければ、豐成卿かれが心を感じ、終に帝に奏して、白瀧姫を眞勝が家に送る。叡慮淺からず、天國の御劍を賜ふ。此家の珍とす。而後しら瀧姫世を去る。此時仲夏にあたる。遺骸を第宅の東の境に葬るべしと也。その藏す所を、叢祠となし、辨才天と祀祭。その地について、此水涌出し、今に至て仲夏をしらしむ。白瀧姫は當麻寺の中將姫の妹なりとぞ。

○七夕

公事根源ニ云、孝謙帝天平勝寶七年に、乞巧奠はじまる。此事、諸書にくはしければ玆に略す。

○盆

公事根源ニ云、天平五年七月、始て盂蘭盆を大膳の職にそなふとあり。盂蘭盆と云は梵語なり。倒懸救器と翻譯す。倒懸とは、餓器の苦みをおもふに、倒に懸たるがごとし。救器は苦を救ふ器なり。釋氏要覽ニ云、盂蘭盆此釋子申レ孝報レ恩。救レ苦之要。以ニ目連救母ニ爲レ始。梵語盂蘭。此救倒懸也。盆即此方器也矣。

聖靈をまつる事、むかしは十二月晦日にも祭れり。つれ〴〵草、こと年の名殘も心ぼそけれ。なき人の來る夜とて、玉まつるわざは此ころ都にはなきを、あづまのかたには、なほすることにてありしとぞ。

　下略

　なき人の來る夜ときけど君もなし我住里や玉なしの里　　和泉式部

六盆の事　報恩經に云、

二月十五日　寅時來　次日　午時歸
五月十五日　卯時來　次日　巳時歸
七月十四日　卯時來　次日　午時歸
八月十五日　辰時來　次日　申時歸
九月十六日　未時來　次日　申時歸
十二月晦日　午時來　正月朔日卯時歸

○東山大文字

弘法大師始てこれを作る。淨土寺村、慈照寺村の上の山に有、毎年七月十六日、兩村の土人四百餘人松明を燈す。聖靈の送り火と云ふ。七月六日山に入て、松木を二三尺に切て日に乾す。十六日の晩、これを携へ山上に至る。大の字の跡あり。弘法大師の畫する所なり。所々に少き穴を穿、小石を以て徴とす。凡大の一字、橫の一畫、其長四十間に及ぶ。炬火十箇餘也。左竪の一畫八十間餘、其間炬火二十箇、右の一畫六十八間、その間炬火二十九箇餘なり。所謂携る所の薪を、徴の石の上に積、同時に火を點す。其光り赫奕たり。其六日に伐所の薪、誤て他事に用ゆる時は、其家かならず祟あり。深くこれを愼。

○燈籠

後堀川院寬喜二年七月、はじめて燭を燈。十四日の夜より晦日に至る。上元下元には燈燭なしとあり。

〔割註〕七月十五日は中元なり。」

○八朔

後深草院建長のころより此事あり。はじめは田の見とて、米を折敷かはらけなどへ入て、人のもとへつかはしける。羅山文集云、昔無此儀。四百年來。特爲佳節。又鴨長明四季物語に云、朔日のあしたは、たのむの御いわゐとて、むかしはさしてものし給はざりしを、小松のみかどのたゞ人にてましませしころ奉りそめて、御代につかせ給ひても、昭宣公ながくものせさせたてまつられし也。下略、或人の云、此四季物語と云書は、うたがふらくは僞書ならん。筆力もおとり、事實もたしかならぬ事多しと也。

○十夜　十月六日より十六日に至

白河の女院、宮中にてはじめて勤行させしめ給ふ。そのころ後花園帝永享二年、伊勢守平朝臣貞經父子、此法會を中興あり。又後明應四年、武州品川願行寺の開山觀譽祐崇上人、勅に應じて京師に入、十夜の法會を淨土宗にて執行する事をゆるされ、鎌倉光明寺に歸り、はじめておこなふ。淨土の諸寺にて修行すの始也。

○八木玄猪餅

攝津國八木村〔割註〕大坂より七里北。」門太夫と云土人、數代住す。每年家の餅を御調物とす。淸淨の火を以て製之。餅に赤小豆を入て搗。巾四寸長六寸五分、深二寸の筥に入、上に五角の栗五ツを貼す。初の亥り日百筥門太夫よりさゝぐ。中の亥の日は、大丸村の里中より獻ず。末の亥は切畑村の里中獻ず。亥兩日の年は切畑村を除く。山科の土人來りて京師へはこび、亥の刻禁裡へ入る。その箱をわかち給ひて、江都に至。此例凡千年におよぶと云。八九十年以前兩年懈怠ありしかば、不祥ありけるゆへに、亦舊例にかへると云。

○大師粥　十一月廿四日
俗家赤小豆粥を煮、是を大師粥と云。民俗いづれの大師ともわきまへざる人おほし。此日は天台智者大師の忌日也。

○陰の節
世俗冬至よりいぬのふしだけ、日の脚のびると云。是は常香盤の長き方を陽といひ短きを陰とす。その短き所、一節伸るといふ義なり。又疊の藺の日の一節共云、犬の事にあらず。

○節季候
筑前國觀音寺に、おにやらふ事あり。赤ゑぼうしに赤襌を着す。此遺風也。言たゞ節季に成たると也。

○七十二候
日に十二時あり、五日に六十時なり。これ甲子の一周り也。五行畢て氣候易ゆへ、五日を一候と云。一年三百六十日、五日をして七十二候となる也。三候を一氣と云。これ十五日二時五刻餘也。此氣六つの六氣を時といふ。九十一日餘なり、時四つ、春夏秋冬也。四時と云、是年なり。

○閏月
天の運動、三百六十五度四分度の一なり。是則ち日の三百六十日なり。一年三百六十日と立て、過六日を氣盈と云。また一年の內、小の月六つ、三百六十日の內、六日の不足を朔虛と云。此過不足の氣盈朔虛を合せて十二日なり。是を三ケ年積ば、三十六日の餘日あるゆへ、三年に一閏を立る也。又一月三十日にして、六日の過あり。これを積て、五年に再閏あり。十九年に七閏を立て餘分なし。是を一章と云。

又閏にあたる月は節ばかりありて中なし。前月の廿九日晦日に中あり。閏月の四五日に節あり。來月の一日二日に中あり。それに至る月を閏とす。

○時の鐘

鐘の數を九つ八つ七つと、跡へかぞふる事は、陽中の陰、陰中の陽といふより起る也。日中午刻より、はやその夜の陰の兆あり。これ陽中の陰なり。午の刻よりその日の夜の明るまで、九時ありとしらせ、一刻減れば八時也。七時なりとしらしむるなり。又夜半子の刻より、明けの日の陽の兆あり。是陰中の陽なり。子の刻より明けの日の暮るまで九時あり。一刻減ずれば八時七時としらしむる。畢竟光陰の過ゆくを、觀ぜしむる謂也。

又説
子九　丑八　寅七　卯六　辰五　巳四　爲レ陽
午九　未八　申七　酉六　戌五　亥四　爲レ陰

陽は猿の頭を撞。陰は虎の頭を撞。たとへば子の時は申の時までを算へて九つ也。丑の時よりは八つなり。又午の時は寅の時までを算へて九つ也。未よりは八つ也。此説據なし。又説、易の數に准じ、九を陽とし、六を陰とし、子の時を一陽の始として、九を撞といふ説もあり。

○彼岸

二月の中を春分と云、八月の中を秋分と云て、晝夜の長短、大かた相ひとしき時節にして、此時日輪天の中道を廻り、天地溫和の時節なれば、寺院の靜なるに徘徊して、一日の閑をたのしむもむべなり。

文房

○詩賦

天武天皇第三のみこ大津皇子にはじまる。往古此道に達せしは、前中書王、菅神、源順、公任卿、僧虎關禪師、擧てかぞへがたし。中興又多しといへども、なかんづく深草僧元政、儒惺窩、儒宗道春、石川丈山、黑川道祐、那波默庵、松永昌三、林春齋、宇都宮由的、木下順庵、伊藤仁齋、猶ちかきは鳥山佐太夫、荻生徂徠、其外現在の詩人多し。禿筆には盡しがたし。

聯句　いつの頃始るといふをしらず。百聯句の内に、謠に引ことは多し。なれば昔よりありと見えたり。漢句は是より出たる也。

○和　歌

和歌は神代のむかしより、本朝の風俗也。喜哉遇可美少男。喜哉遇可美少女。これを起りにとるなり。又三十一字にさだまりけるは、すさのをの尊、出雲の國に宮つくりしたまふ時、よみ給ふ歌、

八雲たつ出雲八重がきつまごめに八重垣つくるそのやへがきを

此歌よりはじまる事、歴代の書に多く見えたり。

按、此歌、神代の歌にはあまりに幽玄也。日本武尊甲斐の坂折のみやにてよみ給ふ歌は、

珥比磨利蒐玖波瑪須擬底異玖用加禰蒐流

是あなにへやの神詠のすがた也。はるかの人皇になりての歌さへも、かくの風也。八雲の御歌は、萬葉集の頃のすがた也。これらはいぶかしき事にこそあれ。さだめて深き口傳あるべし。

代々の歌人は、もろ〳〵の書に、普くしるされたれば、今更こゝに及ばず。弘安のころ、和歌の四天王と稱せられしは、頓阿、慶雲、靜辨、兼好なり。なかんづく頓阿達者によまれしと也。冷泉爲秀卿、會席にのこりたる短冊あり。此題頓阿にとてわたされし。爲秀卿たんざくをかさね給ふうちに、當意即妙を

よみし也。

梅散客來　　頓阿法師

とはるゝもいとゞおもひの外なれや立枝の梅はちり過にけり

近世譽れあるは、普光園殿、一條禪閤兼良公、逍遙院殿、三光院殿、九條玖山侯、近衞龍山侯、烏丸光廣卿。天子には、後水尾帝、後西院帝、靈元帝特にすぐれさせ給ふと也。古今集の傳授は、中古東常緣を以て祖とす。宗祇法師、逍遙實隆公、稱名院公條公、三光院實澄公、二位玄旨法印、八條家、中院家、烏丸家相つゞく。

堺傳授と云は、宗祇より牡丹花に傳ふ。南都饅頭屋につたふ。よつて奈良傳授と云。

○連歌

日本武尊のにゐばりつくばの御詠を起りに取る也。上古連歌の神に日本武尊を崇む。故あつて應安の頃より天滿宮を崇る也。連歌宗匠の始は、應安の頃、普光園良基公の免許を受て、侍公宗匠にはじまる。二代目僧心敬より專順、能阿、行助、宗祇、宗砌、兼栽、專碩、宗長、牡丹花、宗牧、宗養、みな新在家代々の宗匠なり。其外蜷川親當、杉原加賀守、酒井長嘯、これ又達人なり。周桂、紹巴につゞきて、今の御連歌師に至る。

予俳諧綾錦編集の砌、或連歌師の云、連歌宗匠の始は、侍公にあらず、宗砌なり。我この道なれば、年ごろふかく詮議に及ぶ。聊相違あらずと云。しかれども古來より侍公とあればうたがはしく、系圖の所に、侍公宗砌、おなじ人か。猶尋ぬべしと疑ひをしるしおけり。頃日歷代の書を見るに、宗砌は宗祇時分の人にて、文明のころなり。侍公は應安のころなれば、凡百年も前の人也。あやにしきに記

す所のうたがひを、今こゝに解すのみ。

○俳　諧

始り萬事連歌と同じ。はいかいも連歌師の業也。その中に俳諧を好めるは、伊勢の長官守武、宗祇同代の人也。山崎宗鑑は、宗養時分の人にて、ともに連歌師也。俳諧宗匠のはじめは、慶長年中、九條玖山公、近衛龍山公より御免許を受て、松永貞徳にはじまる。貞徳連歌の法式を規矩にして、俳諧の式法を立る。それより連歌俳諧二物になりて、貞徳門人野々口立圃、松江重頼、安原貞室、山本西武、北村季吟、鶏冠井令徳、高瀬梅盛、椋梨一雪、荻野安靜、馬淵宗畔、末吉道節、端氏定重、宮川正由、これ皆宗匠也。江戸は齋藤徳元、石田未得、高島玄札等宗匠のはじめなり。此末々の宗匠達人、綾錦に詳なり。よつて畧ㇾ之。

前句附　延寶のころにはじまる。褒美前句附、江戸にては元祿八九年にさかんにして、景物ある事起る。

冠附　元祿の末寶永のはじめ専らはやる。

○色　紙

孝謙天皇にはじまると、雑々拾遺に見。

○短　尺

鹿苑相國義満公、不破の關屋御覽の時、不破の屋根板に歌かきて、京へおくり給ひしよりはじまるといへり。しかれども猶そのむかしよりある事にや。枕草紙に、

みまくさをもやすばかりの春の日によどのさへなどのこらざるらん

とかきてこれをとらせ給へとて、なげやりければ、なにの御たんざくにか侍らん。ものいくらばかりかといへば、まづよめかしと、また宇治左大臣頼長公の日記に、鳥羽の法皇より、官女のかたへたんざくを書下さるゝと記し給ふ。又藤原為世卿にはじまるといへり。又不破の屋根板の事は、天武天皇の時、此板に歌かきたるともあり。

按、上古もありつれども、名のみにして、専ら義満公の時よりひろまるゆへ、これをはじめといふなるべし。

色紙短尺の寸法は、三光院殿よりはじまる。

御説

大ハ竪六寸四分
小ハ竪六寸
大小共ニ横五寸六分

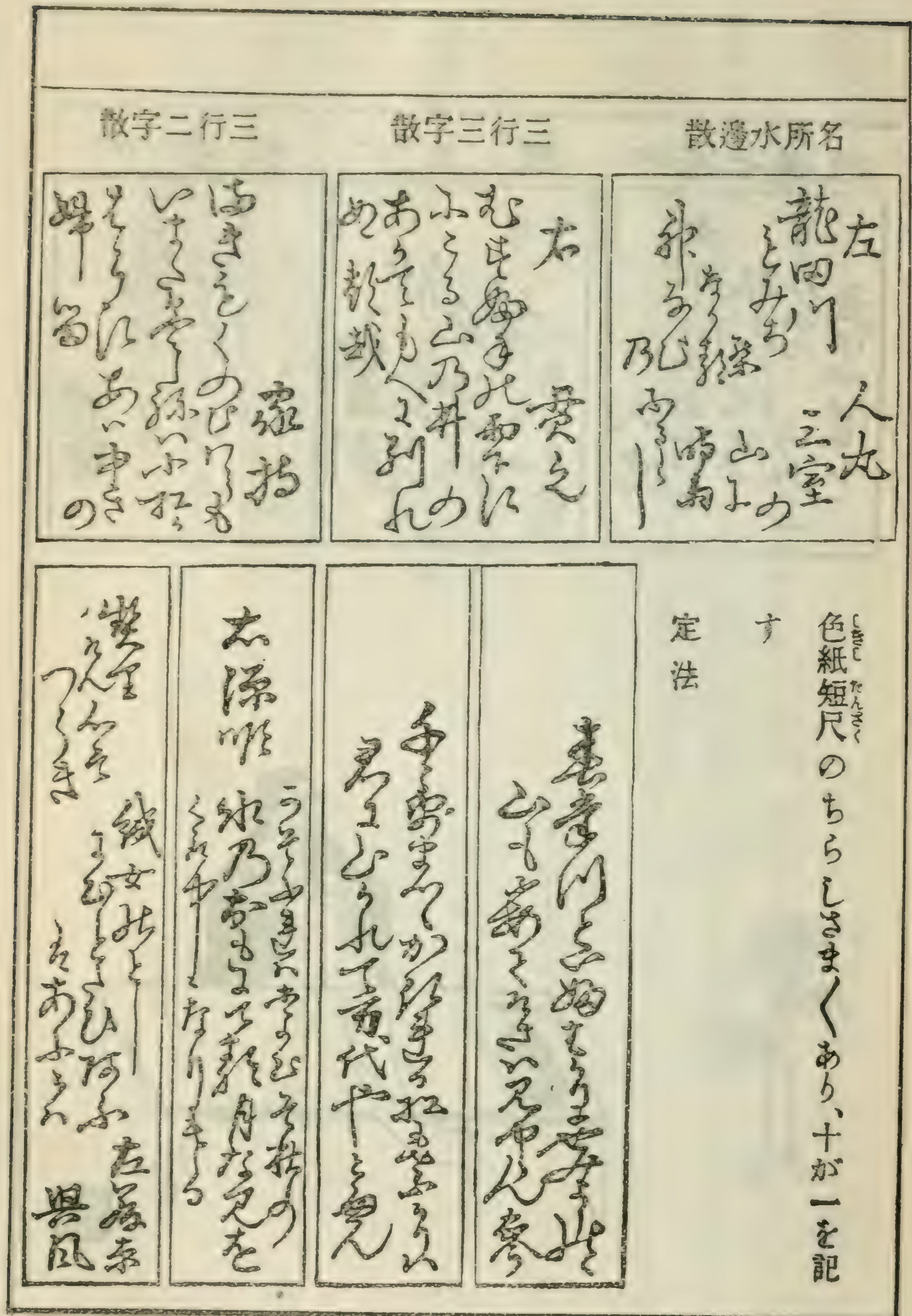
御説

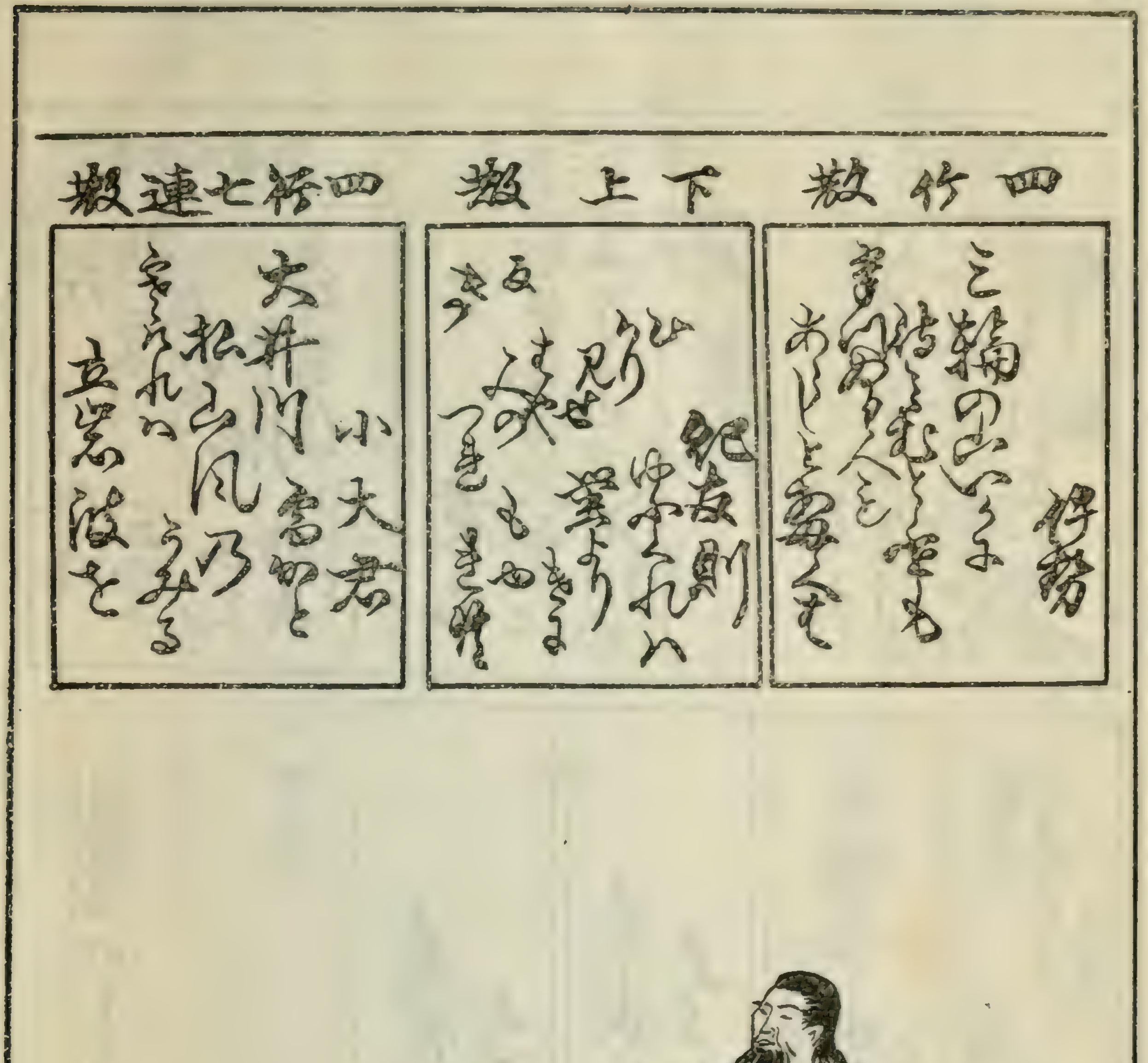
巾二寸
長一尺一寸八分
宸筆の法

御製を平人の書く時は〔割註〕巾一寸九分八分にも、長一尺一寸六分。」

平人の短尺〔割註〕巾一寸八分、長一尺一寸五分六分にも又二分一分にも。」

色紙短尺のちらしさまくあり、十が一を記す




四竹敷
下上敷
四桁七連敷
伊勢
紀友則
小大君

○板行

元久の頃、選擇集を板行せし事あり。またそのむかしもある事とぞ。彼是の書籍も板行も、戰國の兵火に失ひし事多しといへり。天正の頃の板行物見えず。慶長、寛永などを古しとす。上古の事もさはがしき世には、わすれたる事多し。つれ〴〵に、鎌倉の海の鰹は、頃日もてなす物とあり。兼好の時分よりもてはやすやうなれども、萬葉集の短歌に、水の江の浦島が子が鰹つり鯛つりかねてとあれば、そのころは鯛とひとしき物か。

○文字

神代に文字なし。木を刻、繩をむすびて、約をなすといへり。〔割註〕日本紀纂疏。」又古語拾遺の序に云
上古之世。未レ有二文字一。貴賤老少。口々相傳。

○大和假名　かたかなの事也

吉備大臣神言音韻を通術感得し、天平勝寶年中、大和の都におゐて、五音の文字の點畫を省取て、片假名五十字を作る。これ本朝かなのはじめなり。
又入木家假名の御傳といふは、へメレの三字なり。因て其正字しれがたし。
五音縱橫相通圖

清濁	開	開合	合	開合	開	音	五行
清	阿 ア	伊 イ	宇 ウ	江 エ	乎 ヲ	喉音	土
濁	加 カ	幾 キ	久 ク	氣 ケ	己 コ	牙音	木
濁	差 サ	之 シ	須 ス	世 セ	曾 ソ	歯音	金
濁	多 タ	千 チ	川 ツ	天 テ	止 ト	舌音	火
清	奈 ナ	仁 ニ	奴 ヌ	子 子	乃 ノ	舌音	火
清濁	半 ハ	比 ヒ	不 フ	𠆢 ヘ	保 ホ	唇音	水
清	末 マ	三 ミ	牟 ム	女 メ	毛 モ	唇音	水
清	也 ヤ	伊 イ	遊 ユ	江 エ	與 ヨ	喉音	土
清	良 ラ	利 リ	流 ル	礼 レ	呂 ロ	舌音	火
清	和 ワ	井 井	宇 ウ	恵 ヱ	於 オ	喉音	土

アワヤ喉　サタラナ舌ニ　カ牙　サ歯ヲ　ハマ唇の軽重

○平假名　いろはがな

弘法大師の作所也。平がなは、平易の義を以て號玉ふ。神言の四十七言をして、大和假名をやはらげ、末代に至て平易、世の至寶たり。萬葉集のころまでは、さのみひろまらざりし也。古今集のころより専らこれを用ひたる也。簾中抄云、いろは、元興寺の護命前を作り、東寺の空海後を作るとあり。或書に云、此說非也。空海一作なり。大日の化身と稱せらるゝ人の、是式の事を談じて、作るべきにあらずといへり。いろは、和語の本源を以て、草字のごとく省、經文の要句に合て、その理を述べられし也。

色葉雖艶、散去留遠、我世誰曾將常在、有爲乃奥山、今日越天、淺夢不見、醉毛不爲。

眞名　漢字をいふなり。源氏梅がえの卷に、まんなのすゝみたるほどに、かんなはしどけなき文字ぞまじるめれ。

韻語訓語　唐土は韻語なれば、文字多からざれば、通用し難し。本朝は訓語なれば、文字多からずとも通用せり。いろは四十七字にて事足り。紅毛も訓語なり。文字二十四あり。二字とり合て一字とし、都合四十八字にて通用す。琉球も訓語なり。文字五十字ばかり有。韻語と云は文字によらざれば、その心解がたし。故に詩文も、句韻のみを聞ては、其意義とけず。文字を見て、其意義をしる也。また訓語と云は、その意義詞のうへにありて、文字にこゝろなし。文字は假に用ひたるもの也。文字を見ずとも詞をきゝぬれば、語意心に通達す。日本の和語是なり。訓語は韻語より精しく、感通しやすし。たとへば、おもふといへば己が事也。おもはんといへば、未來にて待心也。おもひしといへば過去にて跡の事也。おもへといへば、下知に成て人のうへの事也。かくのごとく同字同語にて、さまぐ\にわかつ事、和語の妙なり。

三筆　嵯峨帝　弘法大師　但馬守橘逸勢

三蹟　小野道風　參議佐理　大納言行成

聖賢蹟　弘法大師　小野道風　菅家

世尊寺流　行成卿の流儀なり。當家は代々能書也。

行成―行經―伊房―定實―定信―伊行―伊經―行能―經朝―是持明院殿御家

上代流　紀貫之、是を中興の祖とす。

定家流　京極黄門定家卿の筆蹟なり。

尊圓流　青蓮院尊圓親王、〔割註〕伏見院の皇子也。〕當院開祖、僧正慈道以來代々筆法に精し。なかんづく尊圓親王特に傑出とす。御家りうともいふ。

尊應親王、尊鎭親王、尊朝親王、尊純親王、おの〳〵青蓮院、代々皆其一流あり。

近衞流　近衞關白信基公、〔割註〕一名信輔、又信尹。〕號二三藐院大山一。其頃京都三筆と稱は、大山公、光悅、昭乘なり。

光悅流　本阿彌光悅筆蹟也。光悅洛北鷹が峯の地を開く。此地は板倉伊賀守勝重の宅地なり。鈞命を蒙り馬驛を置しむ。光悅町と云。丹波海道なり。爰に大虚菴を建る。光悅死後此所に葬。これより光悅寺といふ。日蓮宗なり。

瀧本流　八幡瀧本坊、松花堂、式部卿昭乘の筆蹟なり。又畫圖を善す。

堺流　夢菴牡丹花肖柏筆蹟也。泉州堺に住す。

志津摩流　京佐々木志津摩筆蹟也。寛文、延寶の頃の人、加茂の社家藤木甲斐の門人也。甲斐は無雙の

能筆なり。

此外通村流、二楽流、鳥養流、宗祇流、宗鑑流、傳内流、大橋流、本目流、玉置流、僧悦山、僧心悦、洛の荒木是水、紅屋雲竹、君井休哲、誓願寺の僧専意、長崎の道榮、松坂井出正水。東都一品公辨宮、遠山北湖、深見高恒、加州家山本相承、佐々木玄龍、石川柏山、現は岡林竹、細井廣澤、赤井得水、僧東湖、佐々木文山、其外御書記家、能筆多く書つくしがたし。

○畫圖

姓氏錄云、二十二代、雄略帝の時、男龍と云人畫を善。

日本紀云、三十二代、崇峻帝元年に、百濟國より畫工白如といふもの來る。

巨勢金岡は、中納言巨勢野足の子、本朝の名畫なり。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五帝につかへ、大納言に至る。紫宸殿賢聖の障子、金岡始て畫。

僧明兆、吉山と號。東福寺大道和尙の法弟子也。兆殿司といふ。淡路の人なり。東福寺の涅槃像を圖。横二丈六尺、竪三丈九尺也。圖の下に、應永十五年六月日、明兆圖筆とあり。

土佐流　土佐光信は藤原氏也。此家累代土佐を以て官に任ず。故に俗に土佐を呼で氏とす。

藤原經隆 土佐守從五位下 御繪所之元祖 ― 行光 越前守 延文六年爲ニ繪所一 ― 光重 越前守 明德元年爲ニ繪所一 ― 廣周 土佐守兼彈正忠 永享十一年爲ニ繪所一

― 光信 右近將監 任刑部大輔 四品 爲ニ繪所一 倭畫ニオイテハ此人ヲ以テ妙トス、亦連歌ノ達人

― 光茂 右近將監 任ニ刑部大輔一 兼土佐守正五位下 和州當麻寺中將姫ノ緣起ヲ畫ス 風情有レ餘、其規矩ヲ世々ニス。



土佐光益、土佐經光、土佐刑部、皆裔なり。
僧周文　春育と號す。相國寺の僧なり。如拙の弟子にして名畫なり。雪舟、宗丹もこれより傳ふ。
僧鐵舟和尚、妙澤和尚兩僧ともに、夢窓國師の法嗣なり。繪に妙を得たり。
啓書記　祥啓と云。鎌倉建長寺の僧也。下野の人と云。
雪舟流　僧雪舟、諱は等揚、備溪齋、米元山主といふ。備中赤濱の產。小田氏の人なり。中年相國寺にあり。畫は如拙、周文の兩師に學ぶ。寛正年中に大明に渡り、四明天童に登り第一座とす。大明の君臣ともに、其美を稱せり。〔割註〕洛ノ八十村路通ノ云。」渡唐天神の靈像は、雪舟より始ると也。雪舟入明の時、明帝雪のつもれる舟を夢む。いづくの舟と問給ふに、日本の舟なりと答ふ。而後雪舟明朝に至し、その名帝の夢に比して大きに感ず。又明の畫師仙仲化〔割註〕此字不レ詳。」といふ者、雪舟に問て云、日本に菅丞相といふ人ありや。舟答て日本の聖なり。いかなれば此名を問。化答て吾先年夢中に、一枝の梅を持る翁に逢ふ。其名をとふに日本の菅丞相なりと有。人體尋常にあらず。敬して夢中にこれを畫と云々。其像を雪舟摸し、その舟が畫を明朝にとゞめ、仙仲化がかく所の像を、雪舟本朝へ持來れり是渡唐の神像のはじめなり。菅神唐へ渡給ふ事はあらざれども、夢中にまみへ給ふにより、渡唐の名ありと云。かの仙中化が書所の像、路通所持、予拜レ之。
宗丹流　小栗宗丹は、周文の弟子也。俗名しれず。中年に相國寺に入て僧と成、宗丹上座と稱す。また晩年におよんで大德寺に居す。于レ時自牧と號す。
小栗宗栗は宗丹の子也。後相國寺に入て爲レ僧。
家の畫　狩野大炊助正信は、相州小田原の人也。剃髮して祐勢と改む。東山慈照院殿の近侍也。畫は周

文の弟子にして、此道の妙手たり。東山殿金殿を作り、宗丹に命じてこれを書しむ。書おはらずして宗丹死。雪舟未歸朝せざれば、その跡を書續人なし。其後雪舟大明より歸る時、泉州堺の津に宿す。其家に花鳥の屛風あり。雪舟これを見て、美なるかな吾友小栗宗丹に似たり。誰人の畫たると問ふ。主の曰是は將軍家の臣、狩野大炊助と云人の畫所也。雪舟京に歸りて曰、金殿の畫、宗丹に命ずるに功終らずして死。其跡續ぐの功者なきの旨、幸に狩野氏の子、近臣の中にありと云。公の曰、有事をいまだしらず。則ち命じて書つがしむ。其筆法宗丹をあざむく。一子元信を得るに至て、遂天下畫工の長として、法眼の位に叙す。

元信は正信の長子也。無雙の妙術にして、遂に一家を起して法眼に至る。子直信又法眼たるによつて、古法眼と稱して、狩野の宗とする所これ也。この元信の畫する所、神妙にして和漢古今の妙手たり。その書所の山水花鳥、大明に達す。鄭澤これを見て日本五百年來、此品のある事をいまだ聞ずと云り。

大織冠十二代二階堂遠江守爲惠裔

藤原正信　大炊助　剃髮シテ祐勢又友湍ニ作ル
法眼
義政公近習ノ侍

元信　稚名八四郎二郎　始大炊助　任越前守　祝髮永仙
法眼　稱ス古法眼ト　古今ノ名畵ナリ
義政公近習ノ士也　後上京ニ住ス其所ヲ今狩野ノ辻ト云
中興狩野家ノ祖トス
永祿二己未十月卒ス年八十三

吉信　雅樂助　印ニ輞隱ノ字アリ

祐雪　先レ父卒

季頼　治部少輔　先レ父卒ス ―― 眞笑　治部少輔

直信　民部　號松榮　法眼　三男ナレドモ總領トス　天正年中卒齢八十

永徳　源四郎　法眼　秀吉公ノ時聚樂大坂二城ノ大殿金壁ニ畫ク　元信存生ノ内ニ教シム又タグヒナク神品ト云ベキカ　天正六庚寅九月先レ父卒ス　年四十八

光信　右京進　洛相國寺法堂天井蟠龍畫　慶長七ニ卒年四十二

孝信　法眼　右近將監　洛東南禪寺法堂天井蟠龍　洛東泉涌寺ノ賢聖ヲ畫

宗秀

宗也

休伯

當時狩野家續レ之

永眞　法眼に至。右京牧心齋安信と云。孝信の子也。淺草寺の天井の蟠龍を畫す。

探幽　法印に至。釆女守信と云。孝信の子也。

羅山文集に云、寛永七庚午、御即位の事あり。雨使に從ひ禁庭に入、其儀式を窺ひ、畫工狩野守信に、これを圖せしむとあり。近世の妙手也、洞雲、探信、探雪等の父なり。東叡山中堂の天井の天人、探信、

探雪畫レ之。うしろ堂の十六羅漢は永叔、探信、探雪の三筆なり。
主馬　自適齋尙信と云。孝信の子。探幽の弟、是また名畫なり。養朴の父也。養朴は法印に至、右近又靑白齋、古川常信と云。法眼如川周信、隨川岑信の父なり。今古信、郡信の祖父。
永叔　法眼主信と云。右京時信の子、永眞の孫也。東叡山中堂の蟠龍を畫。
狩野家は松榮直信より枝葉榮へ、諸家にわかれたり。春雪信之、大學氏信、休山淸信、休碩友信等の家其外名畫多しといへども、繁多なれば、こゝに書もらしぬ。追而加ふべし。
いかい鳥羽繪　僧正覺猷の書はじめられし也。覺猷は西宮左大臣高明公の孫なり。天台の座主、又三井寺の長吏とし、後、醍醐に住し、其後鳥羽に居。故に鳥羽の僧正といふ。近年世に翫ぶは京正田全暇、妙にこれをうつす。〔割註〕近世は此人はじむ。」とば繪は夕日の人かげを見て書きはじむと也。
僧秋月　諱は等觀と云。薩摩の大守の仕官也。僧となり、書は雪舟を師とす。雪舟に從ひ大明に渡りし也。
能阿彌　東山殿の童朋也。諸藝に達し、茶道、香道の名譽の人也。眞能と云。周文の弟子なり。
藝阿彌　眞能の子也。眞藝と云。繪其外諸道に達。
相阿彌　眞能の子也。眞相と云。繪其外諸道に達。
僧雪村　諱は周繼、又鶴船翁と云。佐竹の一族にして、常州部垂の村田の人也。雪舟の筆法をしたひて師弟の約をなす。或は云、雪舟西邊にあり、雪村東極に居。未面を合せず。只畫跡を見て師弟と成。

曾我流　蛇足は越前の人、武臣也。周文を師とす。一休和尚は師檀の緣あり。よつて大德寺眞珠菴の方丈に畫す。眞珠庵は一休開基の所なれば也。代々畫を善す。曾我の紹叔は此裔也。

曾我蛇足――宗丈――紹仙
　｜
　宗譽――紹祥――今紹叔此裔ナリ

長谷川流　長谷川等伯は、能州の人也。始は久六と云。雪舟五代と云。

松花堂流　八幡瀧本坊昭乘の畫なり。

大津繪　又平と云人書はじめし也。土佐光信の弟子といへり。大谷、池の側邊にて畫く。追分繪とも云。

浮世繪　江戸菱川吉兵衞と云人書はじむ。其後古山新九郎、此流を學ぶ。現在は懷月堂、奥村正信等なり。是を京都にては江戸繪と云。

一蝶流　英一蝶は、一流を書て頃年の達人也。始は調古と云。狩野永眞の弟子也。

光琳繪　京尾形光琳は吳服所也。一流を書出し、衣類器物等に、近年此雨を書。〔割註〕此流はしやうじにうつるかげを見て、書きいだせしものなり。」

おりう繪　女畫龍は、六七歲のころより天性うき世繪に耽て習はずして得たり。手跡また亞レ之。能筆也。始は東叡山の麓にあり。今增上寺門前に住す。現在也。頃年女畫工の名手なり。

紅繪　淺草御門同朋町和泉屋權四郎と云者、版行のうき世繪役者繪を、紅彩色にして、享保のはじめごろよりこれを賣。幼童の翫びとして、京師、大坂諸國にわたる。これ又江戸一ツの産と成て江戸繪と云。

本朝世事談綺 卷之五

人事

〇先生

禮記曲禮註に云、先生は德齒あつて、人の師たるを稱していふ。師は猶父兄のごとし。故に先に生ゝといふ義なり。師を以て父兄とし、物習ふ人を子弟とす。よつてこれを弟子といふ也。

〇藪醫

世俗未熟の醫をさして藪醫といふ。本源野巫醫にて、藥功にまた咒ひ加持等を加へて、病を療する醫なり。鹿末の醫にかぎるべからず。

〇人參功能

人參の功は、古より普く世にしるといへども、寬文、延寶のころ、數原通玄といふ良醫、朝鮮人參の功能を考覺、大病の治がたきを救ひ、衆人の命を助る事限しられず。其妙術世に鳴、而後典藥頭に至。是より大功ある事を彌知る。その頃は室町伊勢屋孫八方にてこれを求む。そのゝち堺屋七郎兵衛するが町におゐて人參座立。それより今の座山形屋なり。

〇苗字

延文、應安の頃、室町殿時代より起る。鎌倉時代までは、それ〴〵の住居の所、或は領地の所をさして、秩父、和田、三浦等の在所を云て、姓を專とす。太平記の頃より、あらぬ國に住ながら、仁木、細川などいひて、名字といふ物になれり。

○佛工

本朝佛師の祖は、康高といふ人なり。光孝帝の裔にて凡僧たり。後、東山清水寺の別當となる。是佛師の始也。佛師綱位は定朝にはじまる。

光孝天皇―是忠親王―英我王
―康行　日向守―康高　清水寺別當―康助　京佛師ノ祖
　　　　　　　　　　　　　　　　└定朝　南都佛師ノ祖　叙ニ法橋一是佛工綱位ノ始

定朝第六世を運慶と云。その子湛慶父子ともに、日本佛師の妙手なり。京大佛師左京は康助の裔也。所々の佛師は皆康助、定朝の餘流なり。又大宮流、鎌倉佛師あり。此兩流は別なるよし。

○蒔繪

梨地蒔繪は、高倉院の時代、偶あれども、その起所をしらず。上古の梨地は、土金といふものにて、金の位あしゝ。專ら東山殿の頃よりの蒔繪すぐれたりとす。此時分の器物を時代物と稱す。幸阿彌、栗本兩家、奈良、鈴木、菱田、榎本、圓阿彌等を家とす。

○普請

家を造るを普請といふは、沙門の語なり。普、諸人を招請し、其他力を得て、事をなすの儀なり。敕修清規に云、普請之法。蓋上上均レ力也。分ニ附堂司行者一。報レ衆掛ニ普請牌一。乃用ニ小片紙一。書ニ貼牌上一。

○大工　左官

飛騨の内匠といふを、世俗一人と覺えたるあり。飛騨國の大工は、のこらず飛騨の内匠なり。古は此國に大工多くありしと也。

墁匠は大工と同じく、宮室の造營に受領して、何の大目などゝいひしを、巧墁の名と心得て、いつのほどか、左官といひならはせり。魯齋全書に、墁匠、東京夢華錄、巧墁者とあり。

○瓦工

瓦は崇峻帝の時に始、事久し。江戸にては寺島氏、中氏彦六はじめてこれをやく。（愚編）江戸砂子に此事委記す。又瓦に巴の紋を作は水の緣也。巴は水の巻狀にて渦なり。蜀は水邊の所、その江上水波風にしたがひて、波の紋◎のごとし。古文字の巴に似たり。よつて蜀江を巴蜀と云り。瓦の唐草も水草也。正親町殿御說、巴は水をかたどりたるゆへに、古よりつけ來れり。釘かくしの六角なるも、水をかたどる。天井、鴫居、鴨居、蛙股など、みな水の緣をとる。堂塔に蟠龍雲水を畫もおなじ理也。すべて火難を避るの祝事也。

○大原女脚袢を前に合事

平相國の女建禮門院、世をいとひて、大原にかくれ給ふ。したがふ局内侍、所がらの黒木を賣て、たづきとし給ふといひつたへたり。官女なれば、脚袢をはく事をしらず。むかふにて合せられたるよしにて、今以て黒木賣女、むかふ臑にて合せる事、此遺風也。

奇跡は草生の寂光院と云。僅なる茅葺なり。本尊地藏菩薩、右のかたに門院の御影、すこしひきのけて、阿波内侍の像あり。女院の御廟は、うしろの牛町のほどに、苔むしたる石塔あり。

職人盡歌合（左炭やき、右大原女）



一たきにさもえやすき小原木のあかしもはてず入かたの月

○道中馬駕篭事

相傳ふ、慶長の頃、京大津の間、山科邊に茶店あり、奴茶屋といふ。此者元來織田家の下部なりしが、此所に住して世をわたる。そのころは、此あたり廣野にして、此茶店のみなり。さすがは武士につかへし遺風あり。弓鑓などの兵具をかざり、夜中に往來の旅人を人里までおくりなどせしなり。よつて京、大津の馬士、駕舁ども、渠が軒に休む。此奴中酌をして、双方道の遠近をはかり、荷物の輕重にしたがひ、鳥目を取渡しさせて、馬、竹輿の世話をする事年あり。馬士、駕舁の勝手よろしく、悦をなせり。これよりしだひ海道にわたり、今此事さかんなり。その奴茶屋、今にあつて兵具をかざる。

○泡齋念佛

葛西の土人、鉦太鼓に笛をまじえて、躍念佛にて江戸の大路に徊す。是を葛西念佛と云。泡齋と呼事は、寛永のころ、泡齋といふ狂人の法師ありて、町小路を奔る。わらんべあつまり、氣違よ泡齋よとはやせり。今以て云事ありて、氣違の名目となれり。此泡齋はやされて、躍るかたち異形にして、人の笑をかさねしむ。かの葛西念佛が躍る所一様ならず。左へ飛あり、右へはねるあり。頭をうなたるれば、又一人は尻をふりて、をのがむき〳〵心々にして、さだまれる拍子もなく、たゞ物に狂ふがごとし。泡齋坊が躍るにひとしく、よつて泡齋念佛とよぶ。誠に氣違念佛躍ともいふべきなり。

○鹿島躍

寛永の頃、諸國に疫病あり。常陸國鹿島の神輿を出して、所々にこれを渡し、疫難を祈らしめ、その患を除く。よつて是を憧て躍らしむ。世俗鹿島躍といひて諸國流布す。是はじめ也。

○傾城

遊女をさして傾城といふは、寛文のころよりいひはじむといへり。遊女は江口、神崎等の船着にありて、船にのりて毎船に來るゆへに、ながれの女、浮女などゝいふ也。或人の云、平家西海にて亡し時、官女、宮女おほく下の關、門司、赤間の湊にさまよひ、世わたる業をしらざれば、人の遊びものになりて、遂に遊女となれり。よつて此湊々には、今に遊女特に多し。又大磯の虎、黃瀨川の龜鶴、池田の湯谷などは、今の出女の類也。傾城は遊女にかぎらず。すべての女を云り。瞻卬篇、哲夫成レ城。哲婦傾レ城。婦有二長舌一。惟厲階。是は女の發才なるをいましめたり。又漢の李延年が、武帝の前にして起て舞ける歌に云。北方に佳人あり。絕世にして獨立。一たび顧ば、人の城を傾け、再び顧は、人の國を傾く。(下略)かやうの語をとりて、亘杓なる者が、ふと名付ていひならはせしもの也。

○上頭

娼女はじめて寢を人にすゝむるを水上と云。俗にいふ商人の荷物を船よりおろし、はじめて店頭へ出すを水上といふに准じ、妓女の色を衒そむるを、かく云といへり。委巷叢談曰、女子旣に笄におよんで、上頭といふ。禮に許嫁して笄すとあり。日本にて女子の緣邊とゝのひて後、髮を釵にむすび、齒をそむるの事なり。それかれとりあはせていへるものか。

○里歸

婚姻の三日に至て、新婦父母の家に歸る。此禮唐にもあり。五雜俎に云、漢以來の禮は、二月に男女會し、婚姻をさだめ、五月五日に、親の家にかえりて父母に逢ふ。是を歸寧といふ。大明の禮は、三日の後、女壻同道にて父母の所へ行を回鸞と云。此禮を以、日本にもなす事ならん。いつの世にはじまると

いふをしらず。

○勝山結

女の髪に此結やうあり。元祿の頃、吉原巴屋の勝山といふ女、ゆひはじめなり。又島田といふ風は、東海道島田の宿の女、此風を常にゆひける。それゆへに此名ありといへり。詳ならず。

○辰松風

男女の髪のゆひやう、時世々々にてさま〴〵にかはる物なり。又國々にもその國風あり。頃日辰松風とて、元結をこと〴〵しく長く卷、月代のうへのかたへたかくあげ、曲の方をもつたてたる風あり。辰松は人形つかひなれば、あをのくに曲の方、襟の中へ入て亂せるゆへ、髪を高くゆふ也。此風頃日世間にはやりて、うつぶきて業をなす者も、もつたて曲を好めり。うつぶけば常の髪も高く見ゆるなるに、ましてそらざまにゆひたる髪、見るだにもうたてかりける。頃年卑賤の輩、専これをこのむ。

○月代

月代を剃事は、鎌倉北條執權の頃に始る。〔割註〕相傳フ泰時ノ頃。」その昔は本朝の尊卑皆惣髪にして、鐵漿を付たり。山海經曰、東海有黒齒國。其俗婦人齒悉黒染。是日本の事也。貴賤一統にして、公家と地下との差別たゝざれば、男の齒を染る事を禁ぜらる。しかるときんば、氣發ずして齒の痛となるによりて、月代を剃事となれり。又說、鎌倉時代は、髪を拔し也。信長公の時に、剃刀はじまると云。

按に、髪をぬくと云は、額の事なるべし。剃刀は眉剃とて、神功皇后に始るとあり。眉剃は貴人の眉を剃具にてちいさし。それを信長公の時に大きにして、今の剃刀なるべし。

堂上方の元服と云は、眉を剃給ふ也。本朝上代の姿は、今堂上方にとゞまるのみ。

○髪結床

江戸にての始は、大高札場六ヶ所の側の床なり。御入國の砌、町並もまばらなりしかば、御高札の番所にねがひて、御免をかうぶる。所謂六ヶ所は、日本橋、常盤橋、筋違橋、淺草橋、麹町、芝牛町等なり。

○太平記讀

江戸にては、見付の清左衞門と云者始也。年來淺草御門傍に出て、太平記を講ず。此ものは理盡抄と云太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松清龍軒といふ者、堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乘て軍談を講ず。京都にては原永惕といふ者世に鳴。理盡抄といふ書は、寛永のころ北國に法花法印日勝といふ僧、名和伯耆守長年が遠孫よりつたへたりとて作せり。其後大全綱目など出來たり。參考太平記を就中よしとす。

○柔和

近世大明の陳元贇といふもの本朝に來り、江戸麻布國正寺に寓。その頃磯貝次郎左衞門、三浦與次右衞門、福野七郎右衞門と云三人の者、浪人してかの寺にあり。元贇かたりて曰、大明に人を捕ふ術あり。そのなす所はしらざれども、そのありさまは覺たりと云。三人の士、その言葉に隨ひ、是を工夫しておの〳〵術を得たり。是本朝の始也。

○觀世紙縷

文明のころ、觀世阿彌式三番の翁の烏帽子の懸緒に、紙縷をあはせて用ひはじむといへり。今、餘の座の太夫は、翁のゑぼうしの緒は組紐をもちゆといへども、觀世座には古實を失ず紙縷を用ゆと也。かの

家にては、是を合紙縷といふなりとぞ。

○團十郎艾

元祿のはじめ、神田鍛冶町箱根屋庄兵衞といふ者、箱根の湯泉酒と稱して、切艾を製す。看板あるひは艾の印に、三ツ角の紋を付る。これ市川團十郎といふ芝居役者の紋也。此切艾の製よろしとして、江戸中に流布す。是を傚所々に切艾の製あり。庄兵衞が印を摸して、おの〳〵三角の紋を付て、三升屋兵庫、市川屋何某など〻名を付て、これを賣也。團十郎がはじめたるにはあらず。

雜事

○鹿島立

旅立前の日、河須波明神を祭る。此神鹿島に鎭座あるゆへなり。榊をたて神酒、備餅を以て旅の安全を祈る。

（萬葉）庭中のあすはの神に小柴さしあればいはゝんかへりくまでに

此神へ御饌をさゝげていのるに、旅に居る者飢につかれずと也。世俗影膳といふて居るも、此遺風なり。

あすはの神は竈の神也。俗に家神といふ。凡一天の器物に、五行の備はれるもの竈より外なし。人間の身命を全うするの神なり。木火土金水、ひとつとして欠たる時はならず。誠に家の神といふべきなり。

○辻占

泉州堺より事起るなり。彼地に市の町、湯屋の町と云所の大小路の辻を、占の辻といふ。此所は攝泉の境目、南北の分地なり。古へ安倍晴明此所を過りて、後世のためにと、占の書を埋めたりといひ傳へ、

此辻に出て吉凶を占に違ふ事なし。是辻占の起原にして、普く諸國に此事をなす。

○假山

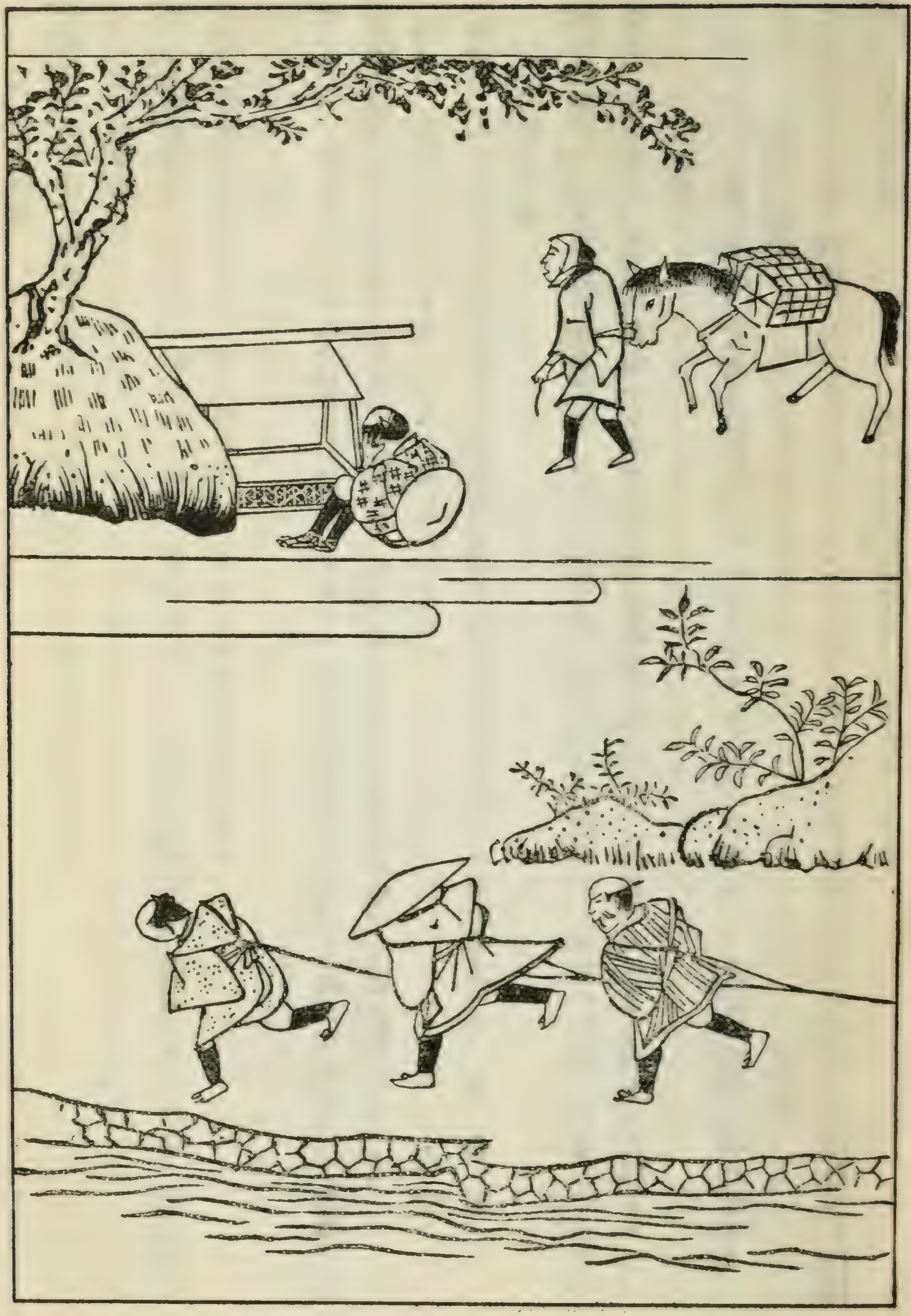
日本紀推古帝の御宇、百濟國の化人路子工といふものはじむと也。本朝築山を作るに、嵯峨流、四條流の二派あり。天龍寺の開祖夢窓國師、水石を喜で天性その妙あり。是嵯峨流也。天龍寺、臨泉寺、西芳寺の假山、みな國師の作也。大德寺の大川院、東山雙林寺の假山は、東山殿の童朋眞相阿彌これを作る。近世の名人なり。龍安寺の疊石は、細川勝元の作ると云。

○一里塚

正親町院天正年中、一里の行程を定め玉ふ。地の三十六禽を差して、三十六町を一里とす。諸國に一里塚をつかしむ。しるしに松、杉をうゆべきやと信長公へうかゞふに、餘の木をうゆべしと也。かしこまつて榎を植たり。よの木ゑのきの聞たがへなりと云傳ふ。上古の一里は法定らず。一町にもあれ、五町にもあれ、里より里まで一里といふ。一里の儀也。されども大概六町也。一歩六尺、一反六間、一町六十間、一里六百間として、此坪數六々を伸て、今の三十六町也。奥州には、所によりて今も六町一里の所ありといへり。鎌倉の七里が濱は四十二町あり。これ六町一里の割也。つれ〴〵草に云、元良親王元日の奏賀、大極殿より鳥羽の作り道にきこゆ。凡十里餘とあり。是今の一里也。

○田圃

孝德帝の二年に、初て戸籍計帳班田收授の法を作る。田長三十歩、廣さ十二歩、これを反とす。此一歩は六尺なり。中古の法は六尺五寸を以て一歩とす。今云京間なり。天正年中に改りて、復六尺の古法になれり。



〇東川高瀬

賀茂川艜通ふ事は、慶長十六年に、角倉了以始る。羅山記に見えたり。

〇木曾路

和漢三才圖會に云、元明帝の和銅年中に、木曾路を開く。始は岐蘇道と書。美濃の國の内也。今信濃に屬。行基菩薩諸國を巡行し、風土記を作。日本の圖も此僧にはじまる。

〇澪杭

澪標の事也。澪は水のふかみ、標はしるしの木なり。延喜式巻第五十云、凡難波津頭海中立澪標。若有舊標朽折。捜求拔去云。難波に立所始也。類聚國史に云、難波江に始て澪標を建ると云々。

（後撰）難波がた何にもあらぬみを盡しふかき心のしるしばかりぞ　大江玉淵女

（拾遺）わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあはんとぞおもふ　元良親王

〇長崎港

異國の商船、上古は筑前の博多に着。二百年以來は、周防或は豐後の府、薩摩の防津、肥前の平戸につきたり。元龜年中、肥前の長崎一ケ所に極る也。始は深江の湊といひし也。大坂より海上凡百四十八里。

〇仙臺米

奥州米、江戸入津の始は、寛永九年なり。これより年々おこたらず來ると、諸家深秘錄にみえたり。

〇大名行列

相傳、信長公の時、明智日向守はからひとして、知行に應じて人數を定め行列を極む。そのむかしは國人旅立などの時は、行列ありて、常に同勢打まじりて行きたりしと也。

○水車

天長六年、大納言良峯安世、水車を作らしめ、農業の資とし給ふ。本朝のはじめなり。安世卿は、桓武帝の皇子淳和帝の御弟也。始て良峯の姓を賜ふなり。書をよくし音樂を解す。廣才達藝の人也。龜山院仙洞にならせ給ひ、嵯峨の龜山の麓に山庄を立て入せ給ふ。御池へ大井川の水を引せらるゝに、大井の土民に、水車をつくられしかども、めぐらざりけり。其後宇治の里人をめして作らせしむ、よくめぐりたりと也。水鏡に云、此院おもしろう作り給ひ、吉野のさくらあまたうへさせ給ふと也。

（續後拾遺）萬代と龜のお山の松かげをうつしてすめる宿の池水

○問屋

元來會屋と書也。日本紀ニ神會の會より起る事也。今あやまつて問の字を用ゆ。

○這入口

居宅の戸口を這入口と云は、神代の穴居より起て、神代の遺言なりと云り。古へ穴に住ふ時は、入り口を這ふて入たるとなり。今諸國山野の陰に、穴ある所多く有。横ざまに奥廣く、あるひは石を疊て虚空なるあり。土人の云、むかし火の雨の降りし時、此穴にかくれたりなど云。是神代穴居の跡と云り。

○雜役馬

牝馬をさして雜役と云は、牝馬には駿足なし。晴の用にたゝず。たゞ雜事の役ばかりにつかふゆへ也。古事談雜役の牛とあり。牝牛は、乘車に用ひず。雜事役をするゆへなりとあり。世人雜役といへば、馬にかぎりて牛にいはず。

○輿　樗

後鳥羽院文治三年、建仁寺の榮西和尚宋へわたり、建久二年に歸る。禪法を弘め、建仁二年に洛の建仁寺をたつる。大材を上るに、榮西、人夫に下知して、我が名を呼で引あぐべしと也。ゑいさい〳〵と唱ことは、これより始る。榮西は賜號千光國師と云。建仁寺の開祖なり。

○僧都

備中國湯川寺の玄賓僧都は、民家奴に晦し、田に行て鳥を驚する事を務として、民の苦しみを助く。よつて鳥をおどす農具の名とす。

○小兒

世俗始に喰ふ事を小兒といへり。江次第ニ云、正月御藥を供ず。藥子は童女の未嫁せざる者、年齡符合するを求てこれを用ゆ。一獻に御酒をあたゝめ、御藥を酒に入るを屠蘇と名付。藥の女官、御酒をわけて藥子に嘗さしむ。本方小兒より起るゆへなり。次に御酒盞に盛りて、これを藥の頭に付す。又陪膳につたへて、上へ供すと也。よつてはじめに喰ふを小兒と云は、これよりはじまる。

○摸々具和(鼯むさゝび)

毛美無佐々美といふ獸、一名晩鳥、又野衾といふ。大さ毛色鼬鼠にひとしく、肉翅にして爪あり。これを張ば翼となり、収れば足のごとく、蝙蝠に似たり。面長く髭あり。尾七八寸ばかり、よく果實を喰ふ。手を以てこれを握る。鼠のごとし。晝は深山にかくれて夜出る。夜行の人の炬松を竊てこれを消、その烟火をふく。よつて妖怪なりと、人これをおそる。本草にいふ所の鼺鼠也。土人これを呼で、もゝんぐわと號。小兒を怖のことは、これよりはじまる。

○元興寺

大和幽考ニ云、南都元興寺の鐘樓に鬼あり、夜毎に鐘撞者をとる。爰に道場法師と云有。本國は尾州海部郡の人にして、十歳のころ、はなはだ力つよく他に越たり。元興寺の僧を師として仕ふ。此童子ある夜、鐘樓に行て、鬼と力をあらそふ。曉におよんで、鬼退去らんとす。童子、鬼の髪を握る。髪剃おちて皮宍あり。此童子は、後に道場法師といひし也。今小兒を賺恐の詞となれり。

○鄙　婁

寛文十二年の春、大坂道頓堀に、異形の人を見す。其貌醜き事たとふべきものなし。頭するどく尖、眼まん丸にあかく、頤猿のごとし。莊子にいふところの支離疏が類にぞありける。京師東武におよび、芝居をたてゝ諸人に見せける。これよりかしこからぬ者を、罵はづかしむるのことばとなれり。

○捉迷藏

小兒のたはむれに、目を巾にてかくし、逃る者とらふる也。日本にに、七八十年來の天子の御遊びにありしと也。致虚雜俎曰、唐の玄宗と楊貴妃、恒に皎月の下におゐて、錦の帕を以て目をつゝみ、其間方むばかりにして、互に相捉ふるをたはむれとす。玄宗を捉ふる事は安けれども、楊貴妃その體かろくはやきゆへに、上恆にこれをうしなふ事多し。滿宮の人掌を打て大にわろふ。是を提(捉カ)迷藏と云ふ。日本のめかくし也。

○四十二の厄

本說にかつてなき事也。四二といふ文字のひゞきによつていむ事といへり。又男子は四十一歳氣おとろふるゆへとも云。▲男子は少陰の數を以てかたちをなす。ゆへに八歳より血氣さだまり、十六歳にて精通し、かくのごとく八年づゝにて血氣變じ、五八四十にて血氣滿て、四十一歳より血氣おとろふるゆへに、

四十を初老といふなり。これよりしだいに血氣變じ、八八六十四にて血氣おとろへ精つくる。▲女子は少陽の數にて、かたちをなすゆへに、七歳にして血氣さだまり、十四歳にて經水にいたり、五七三十五にて血氣滿、それより漸々におとろへ、七七四十九にて血氣つき、經水絕て懷胎なし。

○子生月數

人八十月にして生、馬八十二月、狗三月、豕四月、猿五月、鹿六月、虎七月、虫七月。(孔子家語)

○一石と云事

後醍醐帝延元年中に、斛器を作らしむ。斛は十斗なり。石をさゝげてこれをためすによりて、一石といふ事はじまれり。

○茶湯

世俗佛に茶を供ずるを茶湯といひて、一物に覺ゆ。元來二物にして、茶は茶、湯は蜜湯の事にて別也。蜜湯と云は、米粉、砂糖、寒薑等の物を、湯に浮めて飲す。是を湯と云。禪家にもつぱら用ㇾ之。

○笈摺

元御襁なり。往古は父母の菩提のために、喪服の内に、觀音、大日を禮せるゆへ、喪服を着たりしが、後に喪の禮ほろびて、今順禮する人の服となれり。御ゆづりと云は、襁の字を讓の字によみちがへておゆづりと云り。又笈摺とかきて、一統に用ㇾ之。

○百萬遍

後醍醐帝の元弘元年七月に、疫病はやる。洛陽知恩寺第八世空圓善阿上人に勅して、厄難を救べきの行法を勤さしむ。于ㇾ時善阿餘法を修せず。彌陀の尊號百萬遍稱念す。時に應じて災癘たちまちに除き、

人民安樂を得たり。その時天子より弘法大師の玉筆、利劍の名號を賜ふ。今に至て百萬遍の靈寶とす。其後後花園院の文安六年、同宇寛正二年、同四年、土御門院文明元年、天下疫疾流行の時、勅ありて百萬遍を修す。皆異感掌をさすがごとし。今以て疫病はやる時專修レ之。

○線香

寛文の七、五島一官と云者、福州より傳へ、子の一官長崎にて始て製す。子一官は後清川久右衛門と號、國姓爺に倡れ、福建道に至、後又長崎へかへる。〔割註〕元祿年中ニ卒ス。」最勝王經ニ曰、請ニ說法者一昇レ座之時。便爲ニ我等一燒ニ衆名香一供ニ養是經一。世尊時香烟於ニ一念頃一上ニ昇虚空一。即至ニ我等諸天宮殿一矣。燒香は清淨のわざにて、人間の臭氣を除くゆへに、諸天來下して、三寶の加護にあづかる。かならず燒香すべし。(大論ニ見)

○人字訓

人と云は一ツの下略、ひとつと云事也。人は萬物第一にして、日とゞまるの義、日の精靈たる也。故に人の神魂、みな火氣に屬す。日の字は圓形の中に一の字也。㊀〔割註〕古文如レ此。」人は天地の靈一とし、日輪の徳をそなへたり。人に一を副て大とし、大に一を添て天とす。人と天地と、二物にあらず。天地同一體なり。因て天地人と云也。

これにおもひよる事あり。去し亥の夏、或武士のやしきより、謂ニ天高一謂ニ地廣一。といふ兩題を以て、天地の發句を得たり。いかにや汝、人の題にて句を得させよとなり。久米田賀朝子執ニ次之一。

謂ニ天高一跼。

天高しさうござつても百合の花　千翁

謂ニ地廣ニ蹐。

廣き地にあやまる足や田草取　貞佐

天時不レ如ニ地理ニ。

地理不レ如ニ人和ニ。

人の和はすぐなり竹の若盛り　沾涼

これ天地の來歷と云にはあらねど、俳諧師の癖なれば、天地の因によつて、紙墨を費す。

本朝世事談綺 終

後序

夫衡は權より始め、車は輿よりはじむ。漸にして權錘をとゝのへ、近代の量目を元緒にもとづき、その輿にしたがひ、中世の輪輻蓋軫を得。一切の事物、億萬の中のふたつひとつを拾、豪童の翫びとす。近き世の事を談て綺を共まゝに題號とす而已。

東都神田誹林　崔下沾涼書

享保十八甲寅正月梓行
天保　七　丙申九月求版

書　　林

江戸小傳馬町三丁目
丁子屋平兵衛

大阪心齋橋筋博勞町
河内屋茂兵衛

文政六年癸未正月求版

浪華岡田群玉堂

心齋橋通博勞町南入
河内屋茂兵衛

昭和參年十月廿五日印刷
昭和參年十一月一日發行

日本隨筆大成第二期第六回

編纂者　日本隨筆大成編輯部
代表者　早川純三郎

發行兼印刷者　東京市本郷區森川町一番地　櫻井庄吉

發行所　東京市本郷區森川町一番地　日本隨筆大成刊行會
振替貯金東京二六七〇〇番
電話小石川三、〇二二番

發賣所
東京市日本橋區數寄屋町　六合館
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社川瀬書店
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社柳原書店
東京市京橋區鈴木町　日用書房
東京市牛込區早稲田鶴巻町　國際美術社

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



